

鑄の希望的生存理論

時雨オオカミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『原作前』――夢のまた夢・幸運を祈ります――
痛くて怖い死を迎えて次に目が覚めたらどこかの病院だった。

今度こそ寿命まで生き残ってやる！　そう決意してまもなく呼ばれた名は「狛枝凪」で、あるとき変な夢を見だしたことで自分自身が「さびつき」であることも知ってしまった。思わぬところで二重死亡フラグが立ったことに動揺したが、彼女は新たに覚悟を決める。

「自分だけでも絶対に生き残ってやる！」
それが希望厨ならぬ、生存厨の始まりだった。

『第1章』――作り物のお遊戯――
私さえ生き残れるなら、誰が死のうと知ったこつちやない。

『第2章』――私が幸せであるために――
それは、自己満足で始まり、自己満足で終わる長い1日。

『第3章』――病みつきになる暗闇――
モノクマにとっておもしろいと思えるような “見世物” を用意してあげる。

だからさ、ちよつと私と取り引きしない？
『第4章』――胡蝶は誰が為にあるのか――
もなすちとちのにみら　ちみいもらみい
「ちみちかちてら　とにみまにかいもちかな」

※ お使いのPCは正常です。読めた方がお得かもしれない。

『第5章』 — 屑入れの中の天獄 —

「永遠に幸せな夢をオマエに与えてあげよう」

「キミは、本当にそれで幸せなのかな？」

私が本当に渴望した未来は…… どれだ？

『第6章』 — キミと極楽鳥花の約束を —

終わりのそのまた先まで……

原作前はゆめにつき派生主体。

原作入ってからはダンガンロンパ系主体です。

【次回更新予定日 終わり】

※完結いたしました！

P i x i vでも同じ名前で投稿いたしました。

・スーパーダンガンロンパ2と、ゆめにつき派生（主に、f l o w）
のクロスオーバーです

・ 狛枝&さびびつきの二重成り代わり

・ ダンロン “ のみ ” 死者生存前提

アナログな上、粗末な絵ですが扉絵が完成致しました。

T w i t t e r 用 タイトルロゴ2

目次

| Parade |

No. 0	『生前』	1
No. 1	『生後』	5
No. 2	『病棟』 友達	10
No. 2	『病棟』 狂気	16
No. 2	『病棟』 診療録	19
No. 3	『夢』	23
No. 4	『自由』 聖誕祭	28
No. 4	『自由』 複体	33
No. 4	『自由』 現展覽	40
No. 4	『自由』 喫茶店	44
No. 4	『自由』 談話	49
No. 4	『自由』 錯乱	53
No. 4	『番外小話』 名前	58
No. 4	『自由』 翠緑	60
No. 4	『自由』 錯誤	68
No. 4	『自由』 空月	78
No. 5	『怪物』 植物	94
No. 5	『怪物』 厭忌	105
No. 5	『怪物』 療養	115
No. 5	『怪物』 傷	123
No. 6	『番外小話』 起床	127
No. 6	『日没』 目	131
No. 6	『番外小話』 写真	141

N o. 13	『樂園』	―	商店	―	348
N o. 13	『樂園』	―	宿	―	327
N o. 13	『樂園』	―	牧場	―	320
N o. 13	『樂園』	―	砂浜	―	308
N o. 13	『樂園』	―	兔	―	283
N o. 12	『開幕』	―		―	278
Entrance to school					
N o. 11	『探偵』	―	誘拐	―	262
N o. 11	『探偵』	―	危機	―	257
N o. ??	『年越』	―	貴女	―	251
N o. 10	『笑顔』	―	刺青	―	245
N o. ??	『生誕祭』	―	再	―	238
N o. 10	『笑顔』	―	占拠	―	219
N o. 10	『笑顔』	―	旅行	―	215
N o. 9	『小学校』	―	現状	―	205
N o. 8	『逃亡後』	―	別離	―	200
Good Luck					
N o. 7	『逃亡』	―	MONSTER	―	185
N o. 7	『逃亡』	―	落陽	―	176
N o.	『番外小話』	―	収穫祭	―	173
N o. 6	『日没』	―	白黒	―	167
N o. 6	『日没』	―	恐怖	―	161
N o. 6	『日没』	―	秘密	―	153
N o. 6	『日没』	―	茶会	―	145

No. 13 『樂園』 | 中央島 |

No. 13 『樂園』 | 曇天 |

| Artificial Play |

No. 14 『失樂園』 | 二色 |

No. ?? 『絶対絶望』[×] | 収集癖 |

No. 14 『失樂園』 | 夜散步 |

No. 14 『失樂園』 | 先導者 |

No. 14 『失樂園』 | 謎 |

No. 14 『失樂園』 | 親和〈小泉〉 |

No. 14 『失樂園』 | 親和2〈日向〉 |

No. ?? 『番外小話』 | 誕生日 |

No. 14 『失樂園』 | 漫才1 |

No. 14 『失樂園』 | 漫才2 |

No. 14 『失樂園』 | 不穩 |

No. 14 『失樂園』 | 立食 |

No. 15 『奈落』 | 停電 |

No. 15 『奈落』 | 捜査 |

The list debate 『証拠品一覧』

No. 16 『学級○○』 | 衝撃 |

No. 16 『学級○○』 | 勝負 |

No. 16 『学級○○』 | 決着 |

No. 16 『学級○○』 | 解決 |

| Self Satisfaction |

No. 17 『開放』 | 災難 |

No. 17 『開放』 | 狼狽 |

No. 17 『開放』 | 図書館 | 699

No. 18 『一刻』 | 信用 | 711

No. 18 『一刻』 | 親和3 〈花村〉 | 722

No. 18 『一刻』 | 親和4 〈辺古山〉 | 731

No. ?? 『空月』 | 夢遊病は絶望を愛してる | 740

No. 19 『薄明』 | 黄昏症候群 | 748

No. 20 『拮抗』 | 決断 | 758

| Addicted or Darkness? |

No. 21 『入院』 | 見舞 | 770

No. 21 『入院』 | 吐露 | 786

クリスマス 「九頭龍 辺古山 日向」 | 798

クリスマス 「西園寺 小泉 罪木 濤田」 | 806

クリスマス 「終里 七海 式大 十神」 | 817

クリスマス 「ソニア 田中 左右田」 | 823

クリスマス 「花村 モノクマ ウサミ」 | 831

No. 21 『入院』 | 案内 | 841

No. 22 『波乱』 | 花火 | 851

No. 22 『波乱』 | 密会 | 865

虚ろな嘘を重ね重ねて噛み、色合わせ | 876

No. 22 『波乱』 | 混乱 | 882

No. 22 『波乱』 | 絶望病 | 892

No. 22 『波乱』 | 暗病 | 903

No. 23 『狂言』 | 計画 | 921

| Who is the murderer? | 932

歌え、虚ろなる渴望を | 932

No. 24 『欺瞞』―焦燥―

ウコロシア

胡蝶は誰が為にあるのか

BOX55

渴望 searching

誇張は誰が為にあるのか

私とキミの学級裁判

No. 25 『学級裁判』―黎明編

No. 25 『学級裁判』―太陽編

No. 25 『学級裁判』―乱世編

No. 25 『学級裁判』―宇宙編

No. 25 『学級裁判』―HOPE VS DESPAIR―

1066

『The exaggeration is for whom』

No. 459 『遊園地』

あなたを信じて待つ

「アイ」の証明 ―うそつき―

このせかいは

いつかの信頼関係

―Heaven in the trash box―

『屑入れの中の天獄』

No. 5385 『天獄』―溺

No. 5385 『天獄』―夜

鏡写しのドツペルゲンガー

1173116211521145

113411181112110410901079

105910501036102210131007 993 979 970 960 946

未来の前の日

|bird of paradise flower|

窓辺のアンチューサ

キミと極楽鳥花の約束を

・flow

|Bad Ending|

Bad end①【赤錆】

Bad end②【ひとりぼっち】

Bad end③【失意】

Bad end④【夜明け】

Bad end⑤【罪業】

Bad end⑥【楽園】

|EXTRA|

【番外編】育成計画軸ハロウィン

【育成軸】クリスマス2017【出題編】

【育成軸】クリスマス2017【解答編】

【本編軸】初日の出2018

【育成軸】バレンタイン2018

【育成軸】ホワイトデー2018

【育成軸】狛枝凪の不運な誕生日

【本編軸】塔和七夕祭り

【本編軸】未来機関をおちよくる話

【育成軸】中秋の名月2018

【育成軸?】体育の日

【育成軸】雨と探偵×2

146414521439141613981388138013681359134513241306

129612841273125912461235

121712031193

1184

【育成軸】ここに、全ての清算を①
【育成軸】ここに、全ての清算を②

Parade No. 0 『生前』

私の人生はとても幸福だったように思う。

それこそ平々凡々とした生活だったが非行に走るような出来事もなく、月並みな容姿で、多くはないが友達がいて、大きな病気もしなかったし怪我也あまりしなかった。

悪いことなんて、たまに嘘を吐いたり、嫌いなご飯を残したり、遅刻をしたり、普通に生活をしていれば必ず起こるような些細なことだけ。そんなことだけ、だったはずなのに……

私は今までとは比べ物にならないほどの罪を犯しました。

学生時代を謳歌して、もうあと少しでそんな時代も終わりを告げる。

そんな大事な時期に。

甲高い音が響く。

人の悲鳴が上がる。

息もできぬほどの衝撃が体を襲う。

車にぶち当たって赤い線を引きながら転がった私には辛うじて意識はあったものの、体はびくりとも動かず、目を辛うじて動かせるだけ。

正直、もう助からないんだろうなと思っていた。

真っ赤な夕陽。

毒々しい程の鮮やかな赤。

雲ひとつない空に染み込む赤、赤、赤。

真っ赤に照らされた黒いタイトルの隙間に血液がだばだばと流れ落ちていく。

そして、私は未だ鳴り止まぬ悲鳴と目線を追って頭上を仰ぎ見てしまったのだ。

きっとこの一連の動作は一瞬の出来事だったのだろう。
だって、そうとしか考えられないんだ。

人の悲鳴も、電話を取り出す姿も、こちらを指差す人も、私を見て

啞然としている少女の動作も……

黒くて分厚そうな、鉄板が落ちてくる姿も

……全てスロウで見えたのだから。

この瞬間に一体どれだけの不幸と不運が折り重なったのか、そんなことは分からない。

痛みと恐怖で雁字搦めになってまとまらない脳で唯一纏まった答えが出たのは、その場にいた人達に一生消えない傷を私がつけてしまうという事実と、親より先に死んでしまう事実。そのたった二つだけだった。

迫り来る終わりに、恐怖のあまりスツと体中が冷えていくような感覚がして、できるものなら気絶してしまいたかった。

体の防衛機能により中途半端に和らいだ痛みの所為で気絶することもできず、目を閉じることもできやしない。

何かの怪談話で本当の恐怖を体験すると髪が白くなるというのがあったが、こういうことを指していたのだと急激に冷えた体で考える。

私の死体は髪が真っ白になっているのだろうか、それともそんな色も気にならないくらい赤い絵の具を壁に思い切り叩きつけたような、ぐちゃぐちゃな花を咲かすのだろうか。

些細な時間で周囲の喧騒が消えた。耳が聞こえなくなったのだ。

ああ、こんなことならもっと感謝の言葉を言えばよかった。

こんなことになってしまうならもう少し言いつけを守っていればよかった。

ここ暫く、母には抱きついていないし、父に甘えていない。兄の進学祝いも言っていない。

いつてらっしゃいと思送ってくれた母の姿がぐるぐると脳内を巡る。そうだ、このままじゃおかえりなさいも言えない。久しぶりに

会ったというのにもうお別れか？

深い後悔が私を襲う。

ああこんなことになるんだったら！

そんな未練が沢山あって、涙が溢れる。

だが、そんなに願っていても先に後悔することなどできはしないのだ。

中途半端な痛みが嫌に現実味を帯びていて、肌に這うぬるりとした感触が気持ち悪い。

死んだあとは幽霊になるのだろうか。それとも、それで終わりなのか。そんなことも予想がつかず、段々思考が鈍り、とうとう周囲の様子が分かりにくくなった。もうすぐ目も見えなくなるだろう。

「……」

ああ、謝罪の言葉も、感謝の言葉も言えないなんて。なんて残酷なのだろうか。

悲鳴、絶叫。

痛みと、恐怖。

死ぬ瞬間の未知の感覚に出会ってしまうのだ。

そう、死ぬ。

…… 死ぬ？

このまま、なにもできないままに。

苦痛を受け、その生を閉じるしかできないのか？

先程考えていた未練がまたも胸中に顔を出す。

このまま、死ぬしかないのか？

目が閉じれない。指先すら動かせない。

そりゃあそうだ、今は走馬灯を見ているだけで実際は物凄く短い時間を体験しているだけなのだから。

でも、そう自覚した途端に醜い感情が芽生えてしまった。もう諦めるしかないというのに、なんて馬鹿なんだろう。

それでも私は死にたくない。

なんにもできぬまま死にたくない。

感謝も告げずに死にたくない。

たただただ死にたくない。

私は死にたくないんだ！

嫌だ、痛いのがなんか嫌いだ。

やりたいことだって沢山ある。

嫌だ嫌だ嫌だ！

なんで私がこんな目に遭わなければいけないんだ！

なんで周りのヤツらは見てるだけなんだ！

嫌だ嫌だ嫌だ！

「し、に……く……な、い」

時間が遅れた世界で味わったのは恐怖と絶望。

想うは、理不尽な苦しみと憎しみ。

脳内を占めるは悟りにも似た諦観の想い。

そして、最期に残ったものは生きることへの執着心。

私が最期に見た光景は、目前に迫る真っ黒な鉄板^死だった。

No. 1 『生後』

目の前が暗転して、次に目が覚めたとき、私は沢山の人に囲まれていた。

知らない天井だ。

一度は言ってみたかった台詞を口に出したはずだがなぜか音にならない声。いや、声にならないただの音しか発することができず、じわじわと歪んでいく視界。そしてトドメに、知らない人達に囲まれている事実嫌悪感を抱き、泣きだしてしまった。

小さな感情の起伏で喜怒哀楽が簡単に表に出てしまっている事に困惑し、更に泣き声を大きくする。今、私の困惑は哀に分類されているらしい。まるで意味が分からない。

そうして、暴れていると自然と視覚に入る自分の手足。それに、自分を容易く持ち上げる大人の手を見て、私は初めて転生し赤ん坊になったことを知った。

その場所は温かかった。しかし、それと同時に申し訳なかった。可愛い赤ん坊の中身が可愛げもない成長しきってしまった私であることに。

それはお世話されることが恥ずかしいだとか、新しい母親に呼ばれて一歳頃ひどく流暢に返事をしてしまったとか、そういうのも含めて全てに對してだ。不気味だと思っただろう。最後の最期で親不孝しかできなかつた私を受けるべき報いだと、そう覚悟していた。

だが、返事をしたそのときのことだった。医者らしき人の表情が喜色に染まりその覚悟も全て台無しになってしまった。

気味悪がられないことに少しだけ希望を持ってしまった。

私は、ここにいていいのだろうかと期待してしまった。

でも、その想いは全て医者のお業によって打ち砕かれたのだ。

まだ幼い子供が相手だというのに行われる過酷な検査。痛い注射に、同じ服装をした集団が私の様子をただひたすら観察している様子。何が書き込まれているのか分からない得体のしれない診断書や

レポート。

期待をしていた分、ただひたすら私は打ちひしがれた。

医者の見開いた目がとても怖かったし、気持ち悪かった。生を認められたはずなのに、喜ばしいことのはずなのに、全くと言っていいほど嬉しくなかった。ただただ気持ち悪かった。

普通でない成長速度、精神の成熟度。本当だったら爪弾きされて然るべきものだろう。だけれど、私はそうされなかった。毎日検査され、毎日あの医者が気持ち悪い笑みで私を見に来た。

そして、それと同時に成長していくにつれ、新しい母さんには日に日に会えなくなっていく。会うのは大抵、私のお世話をするメイドさん。同じ人にしか会ったことがないので分からないが、きつと他にもいるのだろう。なら、この人は昔で言う乳母のようなものなのか。初めはちゃんと母さんから食事をもらっていたが、離乳食に変わってからは本当に会えなくなってしまった。

今、母さんはどうしているだろう。とても疲れた顔をした人だった。何かに諦めているような、絶望しているような人だった。なのに、私にはいつも優しく「凧ちゃん」と言って微笑む人だった。すでに懐かしく思う。

「お嬢様」

メイドさんの名前は知らなかった。

でも、優しい声で私を撫でる手が好きだ。母親も勿論好きだが、彼女のこと大好きだ。たとえそれが仕事の関係だとしても。愛おしそうに、でもどこか哀憐の見え隠れする表情で私の頭を撫でる柔らかな手。彼女の様子には私は心の何処かで、もう母さんには会えないのだと悟ってしまった。

それでも、彼女の表情が憐憫でなく、哀憐であったこと、他人事の哀れみでなく、心から想う哀れみであること。それだけが私にとっての唯一の救いだった。

私が普通の子供でいう物心着くくらいの年齢に達したとき、初めて病院と自身の姓を知った。

なぜ自身の姓と病院が比べられるのか？ そんなの、あの気持ち悪

い医者。あれがこの病院の院長で私の父親だとかご本人様から盛大なカミングアウトをかましてくださりやがったからである。三歳児にして既に反抗期（父限定）に突入しているみたいだ。この調子でどんどん嫌っていききたいところである。そもそも、新しい母さんに会えないのはあれの所為なのだから。ただ、あのメイドさんを配属してくれたことにだけは感謝している。今では一番仲の良い人だ。

とまあ脱線していたから話を戻すが、私の名前である。

『こまえた なぎ 狛枝凪』

それが私の名前の全てである。

なんの冗談だろうか？ 一文字足りないようだがものすごく見覚えのある名前だ。それが間違っていないのならとんだ死亡フラグだ。彼の立場に生まれたことが既に絶望なんだけれども。いつそ気持ちよく心がポツキリと折れてしまいそうなんだが。

私の知っている狛枝凪斗はダンガンロンパというクロード系推理ゲームの二作目に登場するキャラクターだ。設備だけが整った無人島に各分野で超一流であると判断された高校生たちが連れて行かれ、殺し合いを強要されるという物語。

その中でも、彼は「超高校級の幸運」として殺し合いに巻き込まれていくこととなる。それだけならばまだ良かったのだ。自身の死をただ回避して、他はスルーすればいいだけなのだから。

だが、問題なのは狛枝凪斗の立ち位置だ。

彼はプレイヤーを翻弄するトリックスターの存在で、自分が死ぬことを何も厭わず不安定な人物を揺さぶり殺人者にしてしまう人物。そして、計画を成功させるために自分自身の死すらトリックに組み込むような狂気。

真に恐ろしいのは、こんなことをしていても彼には悪気など欠片もないということだろうか。

他全員を犠牲にしても島から脱出したい殺人者の希望と、殺人者の犯行を暴き、処刑しないと全員が死ぬことになる他のキャラクターたちの生存したいという希望。それらがぶつかり合い、大きな不幸の後に訪れる絶対的な希望を渴望する狂信者。それが彼だ。

ここまでは、ただ私がそういう行動を起こさなければ全て丸く収まるところなのだが、彼の才能がそうはさせてくれない。

彼の持つ「超高校級の幸運」という才能は、不運の後に同じだけの幸運が必ず起こるといふある意味当たり前で、とても恐ろしいものなのだ。

例えば、必ず当たりくじを引くが、当たったものが嫌な役目であったりすること。アイスかなんかが当たってもお腹を壊したとかがよく起こりそうだ。

例えば、飛行機ハイジャックに遭った上、犯人と両親が目の前で小型の隕石に押しつぶされる事故が起きる。しかし、その後に莫大な遺産が手に入る。

例えば、誘拐事件に巻き込まれてごみ袋に詰められ、その中から億単位の宝くじを拾う。

こんな波乱万丈な人生を誰が好んで歩もうと思うものか。そんな人がいるなら立場を代わってほしいくらいである。

しかし彼の経歴は、私とは少し違う。彼が飛行機事故に遭うのは小学生の頃なのだ。私は現在その年齢に達しているが、小学校には通っていない。それに、あの父親が旅行に行くわけがない。

ひとまず、今は名前が似ているだけであることを祈ろう。

実際のところ、私はテレビを見させてもらっていないので「超高校級」の集まる希望ヶ峰学園があるかどうかなど調べようがないのである。それに、まだ幼いのでパソコンも当然持つことができない。

今のお友達はメイドさんが持つてきた可愛らしい桃色猫の顔型クツシヨンと、絵本達だけだ。そのうち本とかゲームとかは用意してもらおうつもりだ。日がな一日ベッドの上でうつらうつらとしていたり、わけのわからない検査やら、薬投与やらが行われたり、メイドさんと戯れあったり。今のところ睡眠時間が長いからこそあまり暇ではないが、そのうち暇になるだろうから。

その間は名前を覚えてくれない彼女のことをなんと呼ぶか考えることに費やそう。あと、いつかは彼女に「お嬢様」でなく、私の名前を呼んでほしいことを伝えよう。今の私の生活は彼女が中心に回っ

ているのだ。決して、決して気持ち悪い父の検査とやらが中心だとは思っていない。

「お嬢様、検査のお時間でございます。お帰りになった際のお夕飯は如何なさいますか？」

「おいしいものがない」

「かしこまりました。では、行ってらっしゃいませ、お嬢様」
「いつてきます」

ここで私が「貴女が好きなものを食べたい」と言っても、彼女はきつと気味悪がらないと思う。だけれど、こんなことを言っても彼女は自分の好きなものじゃなくて、子供が好きそうなものを並べるのだと思う。私の勝手な予測だが、彼女はそういう人だ。

ならせめて、帰って来た時に話をしながら食事したいと思った。そうすればなんでも美味しく感じるだろうから。いつか彼女とプライベートで話せるようになりたいものだ。

これは依存だろうか。母親に会えなくなってしまうてからは、気兼ねなく話すことが出来る人はメイドさんだけになってしまったのだ。父親や別の看護師達は特別扱いするだけで、その賢さや成熟度を褒めるだけで私自身を見ていないわけではない。

年齢にしては早い英才教育にもうんざりしているし、簡単な国語や算数も間違えようと思ってても簡単すぎて手抜きをしても間違えられないのだからきつと依存なのだろう。私を気遣い、お世話をして、私を一番見ているからこそ、彼女は特別だ。なにより、更なる深みへと誘う父親からの防護壁に自ら進んでなってくれている。それは私にとつてとても嬉しいことだった。

だからこそ、今は彼女の懐で存分に甘えたいと思う。前世での後悔は山ほどあったが、伝える手段が見つからないため、こうして何かに依存するしかなかったのかもしれない。自分の罪悪感のために依存し、利用するような形になってしまっていることにも気が付いたが、もうどうすることもできなかった。

No. 2 『病棟』 — 友達 —

前世のお父さん、お母さん。先日晴れて六歳児になりました。伯枝風です。

病棟内を自由に歩き回れるようになりました。それでも病院の外には出ることができません。既にピカピカの一年生となる年を迎えたというのに、私は小学校に通うことができないのだそうです。

その代わり、メイ子さん。あ、名前を覚えてくれないメイドさんのことだけれども——そのメイ子さんに勉強を教えてもらったり、病棟に沢山いる子供達と遊ぶことができます。

クソ親父の存在以外は割と幸せです。届かないだろうけれど、せめてお祈りをさせてください。前世の家族が、私がいなくてもどうか幸せでいられますように。

「風様、またお手紙を書いているのですか？」

「うん。見ちゃダメだよ。溜めておくんだから」

「かしこまりました。では風様お勉強の時間ですので一旦こちらへ」
「はあ、」

こうして一日の勉強が始まる。と、言っても大学生だった私にとっては簡単な勉強ばかりだが、医者のお娘だからか英語とドイツ語、それに簡単な応急処置方法なんてものもあるので油断できない。

精神は大人だが、脳が子供のおかげかそんなに物覚えがいい方ではなかったはずなのに今はかなり物覚えが良くて、柔らかく子供脳に頼りきりである。

だが、知識は沢山記憶できるが応用系等となると一気に粗が目立つし、苦手意識もままある。これは多分、元々そんなに頭が良くなかったせいで私自身が私自身に備わるスペックを使いこなせていないということなのかもしれない。伯枝風斗ってめちゃくちゃ頭の回転良いはずだし。それと同じ存在かもしれないというのに頭の回転が遅いのは私が私である所以か。記憶容量だけ良くっても読み込みが遅くちゃ使い物にはならないよね。あれ、もしかして私の人格がハイスペックの邪魔してる？

静かに勉強している中で、聞えるのは私の質問の声と、メイ子さんの話す声くらいだ。彼女との勉強はお互いに包帯を巻きあつてみたり、実際にその器具をみせてくれたりと子供の興味を惹くものが多い、退屈しない。彼女だつて年齢的には大人というわけではないのに、この分かりやすい授業方法は一体どこから来ているのか。興味は尽きない。

今思えば、この授業方式になつたのは私が余計な一言を言ったことが発端だったか。

「メイはつまらなくないの？ その、勉強とか」

教えることあまりないでしょ？ なんて、生意気なことを一度訊いたことがあるのだが、メイ子さんがすごく愛おしそうな表情で、「風様は教えがいがあつて私としても楽しんでおりますわ」というものだからこつちが照れてしまったくらいだ。体を動かしながらの勉強になつたのは、確かこの質問をしてしまった後のことだつたと記憶している。あんなことは言っていたが、実は傷ついてしまっていたのか。

当人はにこにこして話をはぐらかすので真相は掴めない。

勉強で机に向かっていると彼女の後ろ姿がよく見える。背中に垂れ下がった黒髪のおさげも似合っているし、クールそうな感じなのにとつても優しいし、病院内での癒し系だ。部屋に戻れば大体彼女に会えるから、毎日の嫌な検査も耐えられる。

最近あの検査がなんだか人体実験じみてると気づいてしまったが、幸いにもマイボデイがあまりにも丈夫なおかげで未だ危険な目にあつたことはない。さすが狛枝風斗（仮）だ。痛いのはいまだに慣れないけれども……やはり人格が彼のハイスペックを邪魔してるのだろうか。せめて普通の人間に生まれなおしてればこんな悩まなかつただろうに。まったくもう。

「さ、今日のお勉強はこれまでです。風様、これからどこに行かれますか？」

「ん、じゃあとう子ちゃんのところに行く」

「かしこまりました。検査のお時間には戻つて来てくださいね。」

「いつてきまあす」

「いつてらっしやいませ」

目指すは隣の病棟！ いつも使うあの子と同じヘルメット防
護
服を持って歩く。いつそ病的なまでの白さに目を細めて階段を上がつたり下がったり。隣の病棟に行く廊下は下の階にあつて、橙子ちゃんの病室は私と同じ階なのだから当たり前か。すれ違いざまにいつもクソ親父と一緒にいる看護師さんに子供らしく挨拶する。チラとこちらを見た彼女と目があつたが、返事はこれまたいつものようになかつた。

ああ楽しみだなあ。彼女と初めて会つたのはいつだつたっけ？ はじめて病室から外に出て迷子になつたのが始まりだつたっけ。



ここどこだろう？ 同じ病院内のはずなのに、別の場所みたい。五歳の誕生日を迎えるまでは自室から出たことがなかつたのだから知らない場所があつても仕方ないけれど。

薄暗くて、誰もいない。もしかして隔離病棟？ なら早くいつもの場所に戻らないと。病院らしくない海を基調としたような薄い青で彩られた廊下を見渡す。…… そういえば青は気を落ち着かせる色なんだつたか。なら、ますますここにはいけない。手に負えない患者を収容する場所なのかもしれない。早く、早く去らなければ

「だれかいるの？」

その声に振り返ると目に入る暖かい色。私と同じくらいの子供が奇妙なヘルメットを被つて病室から覗いていた。声からして女の子。少しの既視感と、興味を感じた私は彼女と話がしたくなった。

「だめだよ、ちかづいたら。わたしはこれをしてるけどどうつつちやうかもしれない」

近づこうとした私にそのヘルメットを指差して彼女は言った。だから私は、「ならとびらごしにおはなししようよ」と言って彼女に近づく。あわあわと病室に戻った彼女を確認して、扉の隙間から少しだけ見えた暖かいオレンジの病室にいる彼女に話しかけた。

「わたし、なぎ。あなたは?」

「わたし?　とうこ。」

「そっか、とうこちゃんだね。えっと、とうこちゃん、わたしともだちになってください!」

「え!」

「あ、いきなりごめんね……　いやかな?」

「ううん、うれしい。よろしくね、なぎちゃん」

その後扉越しにずっとお喋りしていたせいかな時間がかなり経っていて、迷子になっていた私を探しに来ていたメイ子さんが発見してくれた。しかしその後、心配をかけてしまったからか、病室に戻る際にこつてりと絞られてしまった。

でも、メイ子さんにやけが見え隠れする顔で「ともだちができたんだよ!」　と報告したらその場で優しく私を抱きしめて

「おめでとうございます」　って言ってくれた。

それに嬉しくて「また会いにきたい」と言ったら「必ず許可をとって参りますので、一度病室に戻りましょう」と言われて、とうこちゃんと一旦お別れした。普通は大人のこういう言葉は実現することなどないのだが、私はメイ子さんを信じていたし、メイ子さんも私と同じように喜んでくれたのでまた会えると確信していた。

そしてそれ以来、無事クソ親父から許可をもぎ取ってきたメイ子さんに送り迎えされて何度かあの子に会いに行けるようになった。今ではもう一人で行けるのでメイ子さんは別の職務に就く。橙子とうこちゃんは私にとつての初めての友達だ。



「でね、その子がすつごい意地悪なんだよね」

「そっか、でもそれは凧ちゃんが院長の娘だからだよね？」

「そうだね。でも検査されてるのは私も一緒なのに」

「そっちの病棟も大変なんだねえ」

彼女の病室は暖かな薄オレンジ色で満たされているし、彼女自身もオレンジ色が好きなのだそう。名前にも入っているから、余計好きだと三回目くらいの訪問で話してくれた。私自身も彼女が好きなオレンジ色は好きだと思う。

「そういえば、凧ちゃんは何色が好き？」

「あれ、言わなかったっけ？ うーん、黒かなあ。格好いいじゃない。逆に白はあんまり好きじゃないかも」

「そうなの？ 私は白、好きだなあ。凧ちゃんの色だもん。ん、どうしたの？ 凧ちゃん」

「いや、うん、今から白も好きになれそう。私も、オレンジ好きだよ。なにこの可愛い子。天使か。」

思わず抱きしめてしまった。おかげで軽くヘルメット同士がカツンとあたる。でもそれはあんまり気にならない。病院みたいな色で、私の髪や体みたいなさだからちよつと苦手意識持ってたけど、これで白も好きな色になったかもしれない。自分の色が好きになれそう。よし、洋服を買うときは白と黒で揃えてみよう。小物は勿論オレンジで。

ダボダボの病院服で小首を傾げる凧ちゃんが可愛すぎて二度目の昇天を迎えそう。今度誕生日に白いプレゼントをあげよう。そうしよう。メイ子さんは何色が好きだろう。今度訊いてみよう。

「あれ、凧ちゃん編み物できるの？」

ふと目を向けると編みかけのオレンジが目に入る。少し編み目が粗いが六歳が編んだと思えば上々の出来だ。今の私にはあそこまできちんと出来る気がしない。完成はまだ遠いようだが暖かそう。冬に向けて編んでいるのかもしれない。よし、私も今度メイ子さんに頼んでやってみよう。上手くいったらメイ子さんと凧ちゃんにあ

げるんだ。

「うん、教えてもらったの」

メット越したが、朗らかに笑う彼女の笑顔で癒された。今日も一日、なんだか頑張れそうな気がする。この子と面会できるようにしてくれたメイ子さんに感謝しなければ。そういえばクリスマスプレゼントはどうしようか。橙子ちゃんに、メイ子さんに、母さんに、前世の両親に、隣の病室にいる意地悪な子に、最近面会禁止になったあの子。沢山必要だなあ。クソ親父？ あげるつもりなんて最初からないけどなにか？

No. 2 『病棟』―狂気―

「思うに、この病院から出られないなら足なんて要らないよね。ねえそう思わない？」

場所はとある病室。暇つぶしができるものなんて一切ない、余計なものを取り除かれた白い一人部屋だ。あるものなんて小さな机と椅子。それに子供では手の届かない位置にある花瓶ぐらいだ。窓は開けられないようになっていりし、割れないように丈夫なものが取り付けられているらしい。

少なくとも同じような構造の部屋に住む私に言わせてもらえれば、この部屋はひどく殺風景だと言えるだろう。私物が一切ないのでからそう思うのも仕方ないと思う。

そんな片づけられた部屋に入ると、ベッドに座る少女と目が合い彼女は唐突に話し出した。

最近まで面会謝絶になっていた子にようやく会えるということ、隣の病室にいた子とやってきたらこの有様である。確かに彼女は年上の十歳児なのだが、それにしたってこんなことを言う子供なんて普通はいないんじゃないか。勿論、転生者の私は除くのだが。

まあ、そういう人はどこかしら狂ってるもので、彼女は長い黒髪をゆらゆらと垂らしながらゆっくりと身体を揺すっている。死んだ目で揺れているその様子が、少し不気味だと思っても仕方ないだろう。心の中でなら彼女には聞こえないのだし。

「私はそうは思わないよ。違う病棟に友達もいるし、あなたにも会いに来れなくなっちゃう。キミ、面会できなくなってると思ったらどうしようらかしちやったの？」

以前から情緒不安定だった彼女に困惑の表情で尋ねる。

「いやいやあんたは見ればわかるでしょ？ 馬鹿風。前からそうだったけどどうとう行くとこまでいっちゃったのね、頭が」

おいこらそれはどっちのことを言ってるんだ。私か？ 私のことか？ 隣の病室の子は馬鹿にしたように鼻で笑う。相変わらず目は包帯で見えないが、きつと見えてたら私を指差して爆笑していたら

う。

「ところでキミ、どうやって起き上がったの？ 手？」

「え、こいつベッドから起きてるの？ なんて義足つけてないのよ」「単純明快。きつき検査があったから帰ってきてここに置かれた。そのときの格好そのままだよ」

そう、彼女にはあるべき場所に足がない。前々から精神的に情緒不安定だったが、この間ついにそれが限界を超えてしまったらしいのだ。そのために緊急手術をして、今日やっと面会が許された。

それにさっきの口振りの考えると、彼女は自分で足を斬ったということなのだろうか。しかし、病室に刃物なんて普通持ち込まれないだろうし、私達は皆、見舞いに来る人などいないのだから足を切断に追い込むまで傷つけられる物なんてないと思うのだが。

「うふふふ、私の世界はここだけだもの。足がなくなっただってあんたたちが来てくれるし、別にいいの。おかげで何本も鉛筆は使い物にならなくなっちゃったけど」

その言葉で疑問は全て片付いた。でも、そのせいで吐き気がこみ上げそうになって少し俯く。

この部屋にある物なんて、小さな机に子供では手の届かない所にある花瓶。それと、日記帳と沢山の鉛筆だけ。

初めから答えは解っていたんだ。色んな鉛筆を蒐集するのが好きだった年上の彼女の部屋に、あんなにあっただ代えの鉛筆が殆どなくなっていたのだから。全部、このためだったのだろうか。隣に佇んでいる目の見えない彼女に分かるうはずもないが、私は確かに恐怖を感じた。

情緒不安定どころではない。それはもう狂気だ。単なる自傷よりももっと狂気じみたものがある。なにより、自分の足を再生不能になるまで鉛筆で傷つき続けるのに必要な忍耐力と、痛みを引き止められないほどの狂気を有している時点で彼女はどこかおかしい。冷静で、賢いにもかかわらずそんなことを仕出かしてしまうほど彼女は精神的に追い詰められていたのか。それともやはり、賢い者ほど道を外れてしまいやすいのだろうか。

もしもそうなのなら、元々ここにいるはずだった狛枝凪斗はやはり、精神に異常をきたし、狂ってしまったのか。勿論あのダンガンロンパという作品は好きだ。好きだが、それはフィクションだからこそだ。現実には自分がその場所にいるかもしれない。未来に死が待っているかもしれない。それを考えただけで体が震え、気分が悪くなる。自分の死期を知っているなど、いいものではない。人は知らないからこそ希望を持てるし、未来を渴望できるのだ。それを、私は既に知ってしまった。もはや、自分だけでも生き残ることに希望を見出すしかない。

それとも、そんな未来が訪れる前にこの足を切り落としてしまおうか？

そこまで考えて私は我に返り、頭を左右に振って今までの思考を記憶の彼方に放り込む。

足のない彼女が、自分の未来の姿の一つであることに気が付いてしまったからだ。こんな危険な思考は忘れるか、仕舞い込むに限る。人生の第一目標を唯の「生存する」から、「五体満足で生存すること」に変更した瞬間である。

「凪、考え込んでどうしたの？」

足のない彼女が言う。私は生返事気味に「なんでもないよ」とだけ答えて目を逸らした。

——愛おしそうに残った太ももを撫でて静かに笑う彼女の目は冥く、覗いたら最後、今度こそ引きずり込まれてしまいそうだった。

No. 2 『病棟』―診療録―

義足のお姉さんや、目隠しお姉さんがどうしても名前を覚えてくれないのでカルテを探してみることにした。やってはいけないことだとは理解していたが、名前が呼べないのはとても不便なものだ。いい加減、姉さんで統一するのも限界がある。

今だ明かりが灯る隣の部屋の前を通り、静まり返った廊下を歩きながら暢気に呟く。

「意外と静かなものなんだなあ」

現在時刻、夜中の二時。この時間でも飲み物が欲しい患者さんなんかは自動販売機を利用……。できるのだろうか。私は今まで消灯時間になったら大人しく寝てしまっていたため、試したことがない。なのでこうして夜中に病室を抜け出すのは初めてだ。廊下は季節関係なく少しひんやりとしている。

静かな廊下で私には大き目のスリッパがぺたぺたと音をたてている。音を消して歩こうとしても上手くできないものだ。ぺったんぺったん。ぺったんぺったん。

「誰もいませんかー？」

受付に辿り着き、中を確認する。本来は夜勤の看護師さんがいるはずなのだが、誰もいない。今日の担当はきつとあの、無口な看護師さんだ。あの人は糞親父のことが大好きだからきつと一緒にいるだろう。院長室の明かりは確認できなかつたけれど、用心しておくにこしたことはないだろう。

「そういえばあの人の名前も知らないな」

糞親父が私を鼻屑するものだから、あの看護師さんもなんだかこちらを敵視しているようだが、特に干渉してくることもないし、あの人は意外と大人だ。私と言えることじゃないかもしれないけれども。

病室順に並んでいらいしいカルテを一枚引き抜き、自室に戻る。

自室に戻るときの廊下でも相変わらずぺったんぺったんと音を鳴らして歩いた。カルテは片手に持って、自動販売機でついでに買った炭酸飲料をもう片手に持ってだ。炭酸を夜に飲むと歯がぎとぎとに

なる？ 子供の歯だからきつと大丈夫でしょう。そう信じておきたい。飲みたいものは飲みたいのだから仕方ない。

「ただいまー」

カルテが濡れないように飲み物の缶を一度下に置いて、扉を開ける。今、メイ子さんはいないのでおかえりと言う人はいないけれど、気持ちの問題だろう。そして私は缶をベッドの傍にある机に置き、カルテを読み始めたのだった。

カルテ

被験者NO・12 りん子 十歳

Rust 感染後五年が経過。

日記には自由をワードするものと、閉塞をワードするものが多数見受けられる。

NO・14とNO・16との接触時は経過良好。我々と接触する際は鉛筆を振りかざし、自傷行為に走る傾向がある。

自ら蒐集していた鉛筆で再起不能になるまで足を傷つけていたのを職員が発見。時間があまりにも経っていたのでやむなく切除。骨が見える程までに自傷していた彼女に怯え同職員が退職。

鉄食器に異常に怯える傾向がある。鉄類が全て錆に覆われた状態に目に映る模様。幻覚が見え始めているので限界が近いと思われる。

近頃、引き離れた母胎への関心が異様に強く、しきりに名を呼んでいる。

肌は白くなってきているが、髪は未だ白くなる様子がない。身体的進行はあまり進んでいないようだ。

名がないと不便なので片輪のりん子と呼称することにした。

「……」

なんだこれは…… なんだこれは、なんだこれは、なんだこれは、なんだこれは！

ただ私はあの子の名前が知りたかったただけなのに、どうして、どうしてこんなものを手に入れなければならなかったんだ！ 薄々気がついていたことだが、やっぱりこの病院は狂っている！

カルテをぐしゃぐしゃに握り締めたい衝動をどうにか耐えて、ベッドから降りる。元通りにこの書類を戻しに行かなくては。怒りで乱れる息を整え、またそつと病室を抜け出した。

「っは、っは……」

流れて行く景色がどこか歪んで見えて私は大きく息を吐く。涙で歪む景色。白い廊下が何故だか牢屋のように見えて、誰かが私を覗いているような感覚を受けながら廊下を進む。看護師はまだ受付に戻っていない。途中父の部屋から明かりが漏れていたが、そこは気にしないことにした。

そして隣の病室の前を通って自室に帰る。隣の病室はまだ明るかった。あの、目隠し姉さんは今夜手術があると言っていた。悲鳴が、聞こえた気がしてストレッチャーの音が通り過ぎてからまた病室を抜け出した。

夜の病院は光がなくても少し明るい。白色だからだ。嫌いだけれど、好きな色。私は嫌いな病院の中を歩き回って、歩き回って、悲鳴が聞こえてくる方へと足を向けた。

見つかってしまわぬように、慎重に歩を進めて病院の奥へ。

一つ一つ、見て回った病室には私にそっくりな赤ん坊や子供が沢山寝ていた。そして進んで、進んで、いつしか悲鳴のあがる手術室を通り過ぎて奥へと進んでいった。

そこには非日常が広がっていた。

漫画とかで実験体がよくホルマリン漬けにされているような大きなビンに入った子供達。それは全て私に似ていた。髪は白く、肌も白くて長髪だったりくせつ毛だったり、まるで私がそこにいるかのよう錯覚できてしまうほど、私に似た子供もいた。

ここにいるのはなんだ。小さく震える肩を無理矢理押さえて、カチカチとなる歯を必死に堪えた。音を出したらバレてしまうかもしれない。そうしたら私もああなってしまうのかもしれない。それは嫌

だ。

なるべく静かになるよう、スリッパを脱いで素足になり、脱いだスリッパは手に持った。そして、恐怖と吐き気を抑え付けてビンとビンの間を歩いていく。

溶け出した私、変な色をした私、奇形の私、カビみたいのが生えた私、顔に赤錆がついた私、まるで自分を守るかのように膝を抱えた私、角の生えた私。沢山の私を見て、狂ってしまいそうな精神を叱咤して、それでも前に進んだのは、そこに望んだものがある気がしたからだ。

半分目を瞑りながら一番奥にあった扉を開く。

そこにあつたのは、病的な白に支配された病室。薄暗くて灰色に近いが、どこか懐かしい場所。やつれた顔で眠っていたのは、かつて優しく笑ってくれた、あの諦めた目をしていた人だ。

「あ………さん？」

母さん。その言葉はカラカラに乾いた喉では音にならなかった。

幼い頃に別れてそれっきりの母。そしてあの時よりもさらにやつれた顔。膨らんだお腹。今まで通って来た道にいた、私に似た赤ん坊や子供達に、ビンの中で生まれたらしい子供達。どこか、顔立ちが似ているりん子姉さんと、目隠し姉さん。りん子姉さんは、目隠し姉さんと私の顔立ちが似ていると、言っていた気がする。

AⅡB、BⅡC、AⅡC

そして、私に似た子供達。私達三人は全員幼い頃に母親から引き離されている。全て、繋がった。繋がってしまった。気づきたくない事実に気がついたのだ。心の中でガラガラと何かが崩れていく。精神に忘れられない錆がつく。全員、兄弟で、姉妹、だったのか。景色が歪む。耳が痛い。体が傾く。視界がブラックアウトする。

「お嬢様ー」

そして何かに抱きとめられて、私は、いけないと分かっていたのに、愚かにも安心してそのまま黒い波に意識ごとさらわれてしまったのだ。

No. 3 『夢』

気がついたら私はどこかの部屋に立っていた。

葉脈のような電子線が張られた、黒と灰色の世界。四方に伸びていて、それぞれ扉へ続いたエントランス。橙子に始めて会ったときと似た既視感を感じたが、私はそれを無視して目に付いた左側の扉を開けてみる。

真つ暗な世界に鉄錆た匂い。手術道具のような針がそこかしこに突き刺さり、どこからか煩いサイレンの音が響いている。

私にはその世界が気持ち悪くて仕方なかった。頭の中身がこんがらがってぐちゃぐちゃにかき混ぜられたように思考が食われる。寒気が走る身体を震わせて煩く響くサイレンの素を探そうと、そつと歩きたした。

吐き気と纏まらない思考は無理矢理つなぎ止めて、重たい足を動かす。今にも何処かへ走って逃げ出しそうになる体をあえてゆつくりと動かし、周囲を探る。

やがて見つけたサイレンの発生源は地面に根付いたスピーカー。色とりどりに光るそれは、ここが夢だというのなら警鐘の具現化なのだろうか。針が突き刺さるサークルの中央に血だまりができているが、私は一層強くなった鉄錆た…… 血の匂いを振り切るようにそこから遠くへ、遠くへと逃げ出した。

「また既視感……」

黒い世界から黒い部屋に入り階段を下る。それだけで頭痛と吐き気は少しずつ薄れていった。

カン、カンと鉄でできた階段を下ると、そこには真つ白い壁が広がっていた。一度も見たことがなかったが、外見からそこが病院であると確認できた。もしかしたら、ここは私の住んでいる病院の外なのかもしれない。

そして、見慣れた待合室と受付が外から見えて入口に入る。周りには不気味なほどに静かで、私はもぬけの殻となった病院をひたすら上へと登って行った。病院の奥に進む勇氣は残念ながら私にはなかった

のだ。

屋上に着き、これまた見たことのない景色が広がっている。ふと、起きたら屋上に行ってみたいなどと考えながら真つ暗にいたトンネルへ入る。屋上にトンネルなんて、普通はあるわけがないのだけだ。

不思議と、トンネルを抜けたらそこは美しいガラスの回廊だった。そこでまた、既視感。私は何を忘れているのだろうか？ それともこれは何処かで見たとあるのだろうか？ 分からない。知るためにはここを探索する必要がある。

「結構綺麗かも」

ガラスで出来たタイルの下は赤い空洞が広がっていたが、繊細なガラスの道に赤いコントラストはなかなか綺麗だと思えた。

暢気にこんなことを言っているべきでないことは分かっている。サイレン響くあの空間の気持ち悪さなど忘れて鼻歌まで出てくる始末。我ながら呆れる。そして道なりにガラスの回廊を進んで行くとベッドが三つ佇んでいる場所にたどり着いた。そして、一気に現実へと引き戻されるのだ。

ベッドには膨らみが二つ。一つは長い黒髪が少し見えていて、足元の膨らみが極端に小さい。そしてもう一つは頭のほうから僅かに包帯が覗いていた。捲らなくても自然と誰か分かってしまう自身が恨めしい。

最後の一つは包帯が覗いているベッドの隣。…… 私は入るつもりなんてない。二人には悪いがどこかが欠損するような痛みは御免だ。

無視してまた下へと続く階段を見つけて入り込む。少し下がったところで大きく広がる空間。そしてまた下り階段がある。

ザリ…… ザリ………

響くノイズに顔を顰しかめる。なんだか、思い出さなければいけないことを思い出しているような気分になってくる。そういえば、砂嵐は胎

児の聴く音に似ているのだったか。心象風景を表す夢の中だということは解っているが、夢に出てくるものはどこか抽象的で混ざり合っていたり分離していたり、どうにも信用できない。

ザリザリザリ……

既視感を憶えてふと考えた。今まで既視感を感じた場所と、そうでない場所があることに。エントランスとサイレン響く気持ち悪い世界には既視感を感じた。しかし、何かが足りないような気がした。次に辿りついた病院は知っている場所だったがなんだか違う気がした。知っているのに、そこに病院があることが間違っているような、そんな違和感。そしてガラスの回廊。ここには既視感を感じて、またテレビ画面の砂嵐じみたノイズが走るこの場所に。そして私はこの先に行こうとしている。まるで導かれるように。

既に既視感の正体には気づいていたが、私はその結論を意識の外に追いやってそのまま階段を下りた。

…… 私は何度警鐘と既視感を無視してきたのだろうか。そのツケが精神に順調に罅を入れ、そして今ここに現れる。

「ぎやあああああああー！」

辺りに響く声。上を指差す人。咄嗟に目を瞑る人。耳を塞ぐ人。その両方をする人。別の方向を見ていて気づかない人達。

そして直様響いた耳が破裂したのではないかと勘違いする程の鉄と煉瓦がぶつかる轟音。それに混じって僅かに聞こえた、柔らかい何かが潰れる音。

響く悲鳴と一時的に止まった足音。遠くから聞こえてくるけたた

ましいサイレンの音。でも私は知っていた。その救急車が乗せるべき患者などいない。なぜなら全てすり潰された肉と、血だけになってしまったからだ。だから私が今ここにいる。

“私”が潰された場所を見ると、その向こうに涙を流す少女。そして、少女と目が合つて暗転…… 赤が塗りつぶされ、黒に染まつていく。

目が覚めると、今度はよく知る天井が目に入った。まあ、真っ白なだけなのだが。

「風様？」

「あ……」

そこには心配そうな表情をしたメイ子さんが水差しを持って佇んでいた。どうやらずっと私が起きるまで傍に居てくれたらしい。目が潤んで今にも泣きそうだ。いつも優しくそうだけれど少し無然とした気の強そうな態度は何処へやら。

しかし私が寝た理由。それを考えるとあまりにも不安だ。彼女を疑いたくはないが、それでも彼女はあくまで父が寄越したメイドなのである。

「あなた、昨夜見たんでしょ？」

「一体なんのことでしょうか。お嬢様は昨夜お休みになられたあと一度も起きておりませんよ」

貴女は何も見えていないし、何も聴いてない。そう言つてほしいという願望を込めた目で静かに彼女は言う。いつも接する時よりも硬い表情。緊張と悪夢で湿った病衣の袖を握り、私は「怖い夢を見たの」と呟く。

全て夢の出来事。

そう、昨日見たカルテも、悲鳴も、病院の真実も全て質の悪い悪夢。そう思つておくことにする。彼女と、私のために。

「あのね、変な夢なの。鉄の匂いと黒い場所をずっと歩いてたの。風

邪をひいた時みたいに頭が痛くて、気持ち悪かった」

「それは…… 凧様。夢は人に話す少しづつ楽になると聞いたことがありますわ。私が毎日少しずつ読みますから、覚えている限りを日記にしてみませんか？」

引鉄は引かれた。彼女に言われてしまったのならもうやるしかない。一番に信頼する彼女のために。きつと、ドロドロとした、読むだけで不愉快な夢日記ができてしまうだろう。だって、そういう夢になってきてしまっている。若干六歳にて既に暗い記憶を引きずる私に “ ゆめにつき ” は重すぎる。

鉄錆た世界

未だ未完成のようだがあの世界はまだまだ広がり続ける。私自身の死を引きずる限り、そして、この病院の狂気を見続ける限りずっと。そしていつか赤黒く、凄惨な光景広がる世界になる。そう、記憶の奥底に嫌なものがこびれついて、錆びつくことはもう止められない。自覚してしまった時点で終わりなのだ。知りたくなかった。始めての既視感で既に気づいていたはずなのに私は放置した。そして止められなくなった石ころはどん底へと転がっていったのだ。

二重死亡フラグが建っているなんて聴いてない！ 神は私に死ぬと言うのか！

No. 4 『自由』―聖誕祭―

ゆめにつきき。一般的には夢で見た出来事を忘れないように起きてすぐ日記を書いたもののことを言う。

しかし、私がこの単語を聴いたらまず間違ひなく思い浮かべるものがある。それはききやま氏製作のフリーゲーム^{ゲーム}。ゆめにつきき

”

内容は、外への扉を異常に嫌がり、引きこもりだと思われる少女が夢の中を冒険し、エフェクトと呼ばれる変身アイテムを蒐集^{しゅうしゅう}していくゲームだ。

ベッドから夢の世界に入り、自室の扉から夢世界のエントランスに入り、複数存在する扉から異なるマップに入り冒険する。

マップには記憶の何かを示唆するようなものや、エフェクトが存在したりする。そしてゆめにつきプレイヤーは、主人公の引きこもり理由を考察をして楽しむのだ。

会話もなく、主人公の名前も “窓付き” という曖昧なものであり、探索するだけのゲームで、普通は楽しめそうもないが熱狂的なファンが多い。かくいう私もその一人である。

このゲームは収集した全てのエフェクトを捨てることで主人公が自殺し、エンディングを迎える。それが鬱ゲーと呼ばれる所以なのである。

フリーホラーゲームの中で青鬼やIbなど有名なものと肩を並べる作品で、ゆめにつきに影響されて製作された派生作品も多く存在する。

その派生作品の中でも三大派生と呼ばれるものがある。 “ゆめ2つき” “夢日誌” “そして” “f10w^{ドットフロウ}” の三つのことだ。

ゆめ2つき（ゆめにつき、またはゆめつつきと読む）はゆめにつきファンが多数で一つの作品を作り続けている作品であり、主人公はうろつき。一つの考察に他人の夢の世界を渡り歩いているという説もある。

夢日誌は童謡の世界を進むような本家よりも毒気が抜けた世界観で成り立つ作品。しかし一部殺傷の表現がエグい。主人公の名前はうそつき。

そして・flow。ゆめにつき派生の中で一番残酷で直接的グロが含まれる作品。エンディングは複数あるが全て一つのエンディングに繋がる。生きているか死んでいるかは定かではないが、四肢切断などかなり痛いエンディングであることには違いない。

名前は “ さびつき ” として、エフェクトを捨てる名前が “ 錆 ” になる。私が一番好きだった作品である。

私が抱いていた既視感はこちらだ。私が見た夢の中はあまりにも・flowの世界観に似すぎている。そして、私が無意識に向かっていたのは移動エフェクトの取れる場所。こんなときにまでゲーム脳を出さなくてもいいのに……。

さらに最初の既視感。それは橙子に対してだ。・flowには通称オレ子と呼ばれるキャラクターが存在する。オレンジ子でオレ子。彼女は常に橙色の潜水服を身にまとい、さびつきと手を繋いでいるオブリエクトがあったり、夢のいたるところにいたりさびつきにとって大切な存在であることが分かるキャラクターだ。

そして、次に足のない姉さん。彼女は恐らく義足子さんと呼ばれるキャラクターだと思われる。そうなると目隠し姉さんも、とは思うが今のところ思い当たる節はない。そのうち分かるだろうか。

と、まあつまるところ私はさびつきなのだ。だが、狛枝凪斗でもある。二重の死亡フラグとは、ようはそういうことである。そして、私を殺すはずのメイド…… 梅子さんのことを恐怖するかといったらそうじゃない。だって彼女は恐らく青子^母さんが努められなかった母という存在として、私に接してくれている。そう、いくら理解しているとはいっても納得はできない。

母親代わりの女性を嫌えるはずがないのだ。たとえ、未来の死神だったとしてもだ。

「凧様」

「なあに？」

「僭越ながら貴女にプレゼントを買って参りました。お気に召すかわかりませんが…… どうかお受け取りください」

そう言つて透明な袋に包まれた白い花を渡してくるメイ子さん。なぜ？ と疑問を持つていると「クリスマスですので」と微笑みながらカレンダーを指差す彼女。

「あ、そうだったっけ。そんなに時間経つたんだね……」

そう言つてからベッドの下から今までずっと作つていたものを取り出す。

「はい、これ。私からのクリスマスプレゼント！」

渡したのは白いマフラー。橙子用にも作つていたが、これはメイ子さん用に作つた長いマフラーだ。そして、今まで貯めに貯めていた二つの封筒に入れた分厚い手紙も預ける。

「こつちの手紙は燃やしてほしいの。できれば外で。焚き火の中に入れてもいい。でも、絶対に中を見ないでね」

「…… かしこまりました、お嬢様」

マフラーを手に絶句していた彼女は私の言葉にやつとこさ反応を示すとぎこちない動きでマフラーを巻く。そして満面の笑顔で「有り難き幸せですわ」と言った。絶句するほど喜んでもらったのならこちらも嬉しい。

メイ子さんを見送つてから橙子の所へ行く旨を書いた手紙を机に置いて、ちらりと彼女から贈られた花を見る。

「アネモネ」

花の名が書かれている小さな札を見て溜息。白いアネモネの花言葉は希望。私にぴつたりだ。しかし、その他にも期待だとか、真実だとか厄介な言葉も入る。メイ子さんは最初の希望くらいしか知らなかったと見える。

いやはや花言葉とは難しいものだ。これがペンタスとかだったらそれこそ希望があったかもしれない。ここまで文句をつけといて言

うのものなんだがまあ、彼女のプレゼントがどんなものであれ、嬉しいことには変わらないのだ。

私は自室から出ると真っ先に橙子の病室へと向かった。勿論、防護メット片手に。

走り去る際、隣の部屋の「面会謝絶」を気にしないようにして通り過ぎる。

未だ私は幸福だが、いつか自身に降りかかるだろう彼女達の末路。恐怖が無いだなんて、言えなかった。

「とーうこちゃん！」

がらがらと扉を開けて暖かい部屋に入る。迎えた橙子ちゃんはほわほわした笑顔で、布団に座っていた。

「いらつしやい風ちゃん」

「そういえば橙子ちゃん、今日は何の日か知ってるよね？」

「うん、勿論知ってるよ」

お互い後ろ手に何かを隠しながら対面。橙子ちゃんが「せーの」と言つて言葉が重なつた。

「クリスマス！」

「クリスマス！」

同時に出すプレゼント。橙子ちゃんはオレンジ色のマフラー。私は白いマフラー。お互いに交換して「やっぱり！」と二人揃つてきやいきやい騒ぎ合う。こういうときは年相応に見えるかもしれない。それも全て橙子ちゃんのおかげだ。最初から自分がさびつきだと知っていたらきつとこんな関係にはなれなかつただろう。そもそも、ゆめにつき、ゆめにつき派生系に正解の解釈なんてないのだから気づくはずがない。分かりやすいメイドさんと橙子ちゃんて気づくべきだったかもしれないのだが。

「そういえば、そつちの病棟でまた面会謝絶になつた子がいるみたいだけど大丈夫？」

「あー……私の隣の病室の子だね。なんか、少しでも目が見えるように手術するつて言つてたかなあ。もしかしたら意識が戻つてないのかも」

あの夜の、あの時の、目隠し姉さんの悲鳴が過ぎるがそれを無視して真実を知りに行ったのは私だ。たとえ手術室前まで行っていても何も分からなかっただろうが、それでも私は行くべきだったのかもしれない。

現実逃避をして、見て見ぬふりをしたのは私なのだ。

後暗い事を考えながら、接することを、橙子ちゃんは許してくれるだろうか。

「なんか、凧ちゃん辛そうだよ。辛いなら私か、メイドさんに言ったほうがいい」

「ん、ありがとう。最近怖い夢見たりしてるからちよつと不安で」
橙子ちゃんの優しさが嬉しかった。本当はひとりですぐ考えたほうが良かったのかもしれないが、病室に一人でいたら、また夢を見てしまいそうだったから。

最近になって感じる罪悪感がちくちくと胸を刺して痛みを訴える。贅沢な悩みだ。彼女達は私と比べるのもおこがましいほど、苦痛に耐えているというのに。

「そういえば新しく重体患者が来たみたいね」

ふと思いつき起きたように言い出してから、「私の隣にいるんだ」と悲しそうに笑った橙子ちゃん。

その患者は男の子で、血の色素が変異を起こしてしまっているらしい。血が変質してしまっているため、血を一旦抜いて溜め、正常値に戻す成分を混ぜてまた戻すという循環する点滴を打っているようだ。勿論、未知の病気だ。

詳しくは聴いていないが、血の色が違う。少し、聞き覚えがある。主にゆめ2つきで。好奇心が先行して隣の病室に突撃しに行きたくなかったが、我慢しておくことにした。

No. 4 『自由』―複体―

「はい、お嬢様。少し痛いですよー」
「いっー！」

子供の敏感肌はお注射の痛みが顕著です。精神年齢は二十歳くらいなのにこんな子供のような悲鳴をあげてしまうなんて、とちよつと絶望してみたり、くぐもつた声で必死に痛んでいる腕から目を逸らす。

前世では平気だったのだが、なぜか今世になってからはやたら痛く感じるようになった。さらに打たれたあとは暫くぼーつとしたり、見えるものが歪んできたり、変な音が聞こえたりとやばそうな症状が出るのがしばしばだ。

もしかしたら、全部幸運にも生存しているだけで、本来はやばい薬を打たれてるんじゃないかなろうかと思えてくる。メイ子さんも送り出す度に心配そうな顔をしている。

周りの大人は私の反応を見て書類を書いているだけだし、こんな実験紛いのこと他の患者にはできないのだろう。あと、最近の夢の内容を訊かれるようになった。相変わらず続く自分の死に様と気持ち悪い鉄パイプ世界を歩き回ったりするだけなのでまだイベントというイベントには遭遇していない。

そもそも、本来病院がある場所でのパレードとか見ていないので、未経験のことは夢に出ないことが分かった。だから、本来アパートがある場所に病院があつたのだろう。

端的に言うと、これからそういう経験をするとということだが……今は現状を楽しんだほうがいいだろう。幸い、よっぽどのがなければ幸運の加護で死ぬことはないだろうし。

「気分はどうですか？ お嬢様」
「キモチワルイ」

最悪だよ、あんた達のお陰様でね。

くそう、早く終わってくれないかな。メイ子さんに会って癒された
い。

「コーラ。依然中毒症状は出ていない様子ですね」

おいコーラってやばいお薬の通称じゃねえか、人を廃人にでもするつもりかこいつら。いくら幸運の加護があっても苦痛は受けるんだぞコノヤロー。

目の前がチカチカしてくる。やっぱゲームの花で起きるイベントは麻薬関連だったのか。これは夢に出るだろう。

ああもう、検査を受けると性格がどんどん歪んでいく気がする。早くメイ子さんに会いたい。



「こんにちは」

検査が終わり、明滅する視界をどうにか正常な思考で追いやりながらふらふらと歩いていると、突然声をかけられた。振り返ると目に付くおかつぱの白髪。おお、初の男の子登場。しかも怪物君兄（正常）じゃないか。

怪物君というのは夢の世界での追いかけるキャラクターのことである。

特徴はさびつきによく似た白い肌、白い髪。その顔は顔面が崩れていたり歯が剥き出しになっていたり、恐ろしい形相をしているキャラクターだ。

夢の中で捕まってしまうと出口のない場所に閉じ込められ、エントランスに戻るエフェクトがないと夢から覚めるしかない状態にされてしまう。

おかつぱの兄、七三分けの弟、ツインテールの妹としてネットでは分けられている。

今回出会ったのはおかつぱ頭なので兄のほうだと判断した。

「こんにちは」

少し怪訝そうな顔をして応答すると、女の子みたいな綺麗な顔を歪ませていきなり近づき、私を近くの病室に放り込んだ。首根っこを掴んで放り投げられたので首が一瞬絞まって苦しかったが、それよりも今はバランスを崩して尻餅をついたことに意識が向かう。地味に痛い。空き教室ではないが、空き病室に連れ込まれるというシチュエーションには別にキュンとはこなかった。初対面だし、睨まれているから敵意を感じるし、当たり前か。

「なに?」

お菓のせいで割とイライラしているうえ、地味に尻が痛い。さすろうとした手は人の前だったことに気付いて空を彷徨い、そのまま頭に添えられた。

尻餅ってこんなに痛かったっけか。そんな恨みを込めて睨むが相手はどこ吹く風。まったく、イライラが最高潮になる前に早く終わらせてほしい。

「お前がオリジナルか」

「はあ?」

スカートを掃って立ち上がる。謝る気もなさそうだし、全然関係なさそうなことを突然言い出したことにビックリだ。

いや、そもそもキミ誰さ。知識では知ってるが、実際に会って名前を聞いた事もないはずだ。私は怪物君を知っているだけで、彼自身のことを知っているわけではない。一応初対面だというのに失礼すぎやしないだろうか。それとも、この年齢の男の子はこんなものなのだろうか。前世と合わせてもおおよそ十五年以上は昔の記憶なのでどうにも思い出せない。

高校生くらいのときならば鮮明に思い出すことも出来るし、好きな漫画、ゲームの台詞や攻略法なんかも記憶に残っていて色褪せる気配がない。もしかしたら死んだときに持っていた記憶は消えることがないのかもしれない。だが、小学生時代の記憶など高校生にもなっても詳細に覚えているはずがない。結局、何も分からない。

「知らないのか?」

「いや、知ってるわけじゃないでしょ。初対面だもん」

うわ、自分でだもんとか言つて鳥肌立った。イライラしているらしい彼の動向を見守りながらゆっくりと腕をさする。

「ごんのー」

頭が壁にぶち当たつて盛大に鈍い音を立てる。くつそ馬鹿になつたらどうする。彼は手を壁につきながら私を憎しみらしいものが籠った目で見える。非常に嬉しくない壁ドンだ。やっぱりキユンとはこない。流石に今の私より少し年下か、同い年くらいの子供にキユンキユンしてたらシヨタコンになつてしまう。精神年齢は(ほぼ)二十歳なのだ。いやでも今の年齢は同じくらいなのだからあるいは……いやいやいや！ なにを考えてる私！ それは犯罪だ！ 見た目は合法でも精神的には犯罪者だ！

つて、何を考えている私！ いくらお元気になる薬でハイになつているからつてこんな思考はいけない。心の中でこんなことを考えていたらそのうち薬にのみ込まれて口に出してしまうかもしれないのだ。頭が可哀そうな子だとか絶対に思われたくない。もう手遅れだとしても、表には絶対に出すわけにはいかないのだ。

怪物君が押し黙り、何かを爆発させるように私を睨む。その目は、父親を見るときの私に似ているような気がした。

「俺は！ お前のコピーだよ！ アルビノの癖にやたらと丈夫で、子供らしくない知性！ そんなやつが生まれたから！ あいつら同じものを作ろうとしてんだ！ お前のせいでどれだけ兄弟が死んだと思つてる！」

別次元に吹っ飛んでいた思考能力が急速に戻り、頭がスツと冷静になるのを感じる。

ああ、完全なる八つ当たりだ。そう思った。そして、私を再現しようとしている大人達が哀れになった。確かに彼は年齢にしては頭がいいほうなのだろう。だからこそ、オリジナルである私を憎んでいる。でもそれは、モデルが私だっただけで、大人達の勝手。だが、私を再現することなど不可能だ。私の体はこの世界産だが、魂は既に成長しているもの。両方ともこの世界原産でできた子供達が私になる

ことなどではしないのだ。それに、私には超絶的な“幸運”も備わっている。真似などできるはずがない。でなければ私がこんなにも注目されることなどなかったはずだ。

しかし、これである時見た私に似た子供達や溶液に浸かった私の説明がつく。あれは実験の過程で生まれた犠牲者たちなのだろう。ホルマリンは死体を保存するためのものだ。他にも、別の液体に浸かっている赤ん坊がいたしね。

アレがなんなのか、ここまでくればもう分かるわね？ 苗木クン。おっと、またエキサイトするところだった。

気になるところといえば、一つ訂正したいところがある。私はアルビノではない。髪が白いだけで目はいたって普通。日に弱いわけでも病弱なわけでもない。あくまで私自身は健康だ。まあ、人間は急激なストレスを受けると髪が白くなるというし、それが原因だろう。生まれる前に既にショックは受けていたのだ。転生だなんて世にも奇妙なことが起こったのだ。前世のショックを引き継いで生まれてきたとしてもおかしくない。

「知らないものは知らない。キミ、私に死ねって言うてるの？」
「……」

この反応は言わずもがな、多分思っているのだろう。なにせ、私がいなくなれば一番出来のいい子供がその座に着き、成り代われるのだ。だがそうしたら次点の子供がまた成り代わろうとするだろう。無限ループの切っ掛けになるのはごめん。

ああ、そういえば、flowはループ系の解釈をされることもあったな。こんな些細なところに落とし穴が待ち構えているのか、身近な選択肢にこうして罠があると分かった以上はこれから気をつけることができる。ひとまずは助かったので彼には感謝しておこう。でも、優しく接することは残念ながらできない。私だってイライラしているのだ。あっちも八つ当たりしてきているのだから、こちらもそれだけ返してあげようか？

悪戯心がむくむくと湧きあがり、私はりん子姉さんの真似をして嫌らしく笑みを浮かべた。

「やだよ。死にたくないし。それにキミが私の代わりになつたとして、他の子が祝福してくれるとしても思うの？ 今度はキミを憎むだけだと思うけど。このことについて、キミはどう思う？」

やだ、私。挑発しすぎ？

まあ本当のことだし、少し調子に乗るくらいは許されるだろう。

彼の言葉通りに捉えるのならコピーとやらは沢山いるのだろうし、全部予測で言ったことだが嫌そうな顔をしているので少なからず当たっているのだろう。勿論、あの溶液に浸かった子供たちではない完成品がね。

そんなことよりも閑話休題そろそろ壁ドン解除してくれませんかね。

「ちっ」

舌打ちをして去って行く彼。

どうせなら本音を言ってくれたほうがこちらも気が楽なのに。変なところで大人のような行動をするな。子供の外見に、大人のような態度。って、これ私じゃないか。こりや怪しまれても仕方ないな。あんなあべこべでちぐはぐな違和感普段お目にかかれるものじゃないし、こうして外から見るとなんとも分かりやすいものだ。メイ子さんも違和感がある気持ち悪いって思っているのかな？ それは少し、嫌だなあ。

あ、彼の名前を訊いてなかった。あつちは知ってるというのに。まあ、暫くは怪物兄とでも呼んでおこう。

「死んだ同胞ねえ」

それにしても、私の元に犠牲になっている存在があることを考えると悲しくなってくる。だが、今は自身が割と不幸だと思っているし、自分の面倒を見るのが精一杯なのだから私に何かを望むだなんてお門違いだ。

自分が自己中心的に考えているのなんてとつくに分かっているけれど、それでもこの日常で他人の心配をできるほど私は出来た人間じゃない。姉さん達ならともかく、今しがた知り合ったばかりの人ならなおさらだ。

人間と言うものはそう器用にできていないし、今しがた考えているように言い訳を考えるどうしようもない生き物だが、自分優先になる

のは仕方ない。動物だつて生存本能があるように、人間にもそれはある。私は少し自己愛そが強いだけだ。

それから病室に戻り、隣の部屋から響いていた絶叫とガラスの割れるような音をBGMにして私は眠りについた。このときに思い出していたれば少しは心構えができたというのに、すっかり夢のことは忘れていた。

そして、私の癒し（メイド）に会えなかったことに絶望した！

No. 4 『自由』―現展覧―

りん子姉さんの言う自由ってなんだろうな。足を失う以前の彼女もあまり出歩くことはなかったが、それでも中庭に行ったり、病院から出ることがないにしてもかなり行動派だったはずなのだ。あの人は自由に憧れることを諦めてしまったのだろうか。

暗い瞳には諦観すら、浮かんでいなかったけれど。

「忘れてたあ」

また扉のあるエントランスホールで目が覚めて、夢を見てしまう事実をすっかり忘れていたことを自覚する。

しかし今の時点でできることは既にやってしまったていたし、走っても追いかけてキャラ（コピー達に会ったので出現してるかもしれない）に勝てるわけがないし、さてどうしよう。

そういえば、原作でいう義足子であるりん子ちゃんが出てきたことだし、エフエクトの “ 機械 ” は取れるのではないか。それに私の解釈通りなら “ 潜水服 ” や “ 内蔵 ” 、 “ スライム ” に “ 植物 ” なんかも出現していてもおかしくはない。

ちなみに内蔵の解釈は母親から自分が生まれたことの現れだ。でもそうすると私達は皆あの人を少しずつ殺しながら生まれているってことになるんだよね。あ、なんだか言い知れぬ罪悪感が。

植物は病気の象徴とされることが多いけれど、メイ子さんにもらったアネモネが切欠になってエフエクトが増えているかもしれないし、私はスライム状になった “ 私 ” も見た。思えば嫌なエフエクトばかり増えるなあ。こう、猫とか増えてくれてもいいのよ？ はあ、この調子だとサイケデリックも増えてる可能性があるし、探索あるのみだね。

「うええ」

場所は足跡通路。床一面に人間の足跡や、肉球の足跡が散らばっている不思議な部屋である。それらは連続的に続いていて、なにか得体の知れないものが通った跡であることをありありと表現していて、どこか不気味な印象を受ける。

何回も連続で弄り続けると確率で別の所へ通じるギミックのある場所は、気にはなるが今回関係ないのでスルー。一番奥に突き進む。

目の前には真っ赤な球体に幾つもの黄色い目玉という生理的嫌悪感を煽る不気味な触手の塊。そしてなによりそこらじゅうに生えている赤い触手の大元だ。かなりの巨体である。

こいつを私は少し似ているな、という思いからモルボルなどと呼称している。こいつに関しては呼び方が人それぞれなので、こう呼んでいるのは私だけかもしれないが。

そりゃあさびつきを丸呑みしちゃうくらいだから大きくないと意味がないのだろうけど、こいつはちよつと度が過ぎている。やはり原作のさびちゃんも中学生か高校生くらいだったのだろうか。今の私に奴は大きすぎる。それに、触手はちよつと……。

…… 小説の窓付きがタコ(仮)に捕まったときエロいとか思ってますよなさい。これは、怖いわあ。行かないやだめ？ だめかな？ ですよねー。いつまでたってもエフェクト集まらないから仕方ないで、でも今回はちよつと…… うう、女は根性！

「ひいひいひいー！」

触手が巻きつく！ 笑ってるし！ 変態！ このロリコンどもめ！

「はあ……」

私もうお嫁にいけない。

私に酷いことする気でしょう！ エロ同人みたいに！ エロ同人みたいに！ なんて冗談のような気持ちで潜り抜けた瞬間喉の奥から思い切り触手で引っ張られて放り出されました。

聞いてないよこんなの！ うん、さびちゃんは凄い。あれを平然と何度も行ったり来たりするなんて私には無理だ。気のせいだと思いたい服は少し湿っている。よだれ？ いや、気のせいだ。そうに決まっている。

そしてやってきたのは黄色いビームのようなものが此方に向かって飛んでくる弾幕通路。一本道の直線で、私は弾幕に逆らいながら進

む。

飛び交うビームっぽいものには夢の中とはいえ、傷つくのは嫌なので手を出せなかった。

幸い箒はあるから空飛ぶイベントができたけれど、ゆめにつき本家のように青空を飛ぶわけじゃなかったから全然気持ちよくなかった。風もないし空気は生温いし最悪な気分だ。

箒？ もう一度同じ道を辿ってみたらちゃんファミコンとFC世界がありませんでしたよ。ええ。魔女さんめっちゃ美人でした。茶髪で黒いトンガリ帽子、真つ黒なドレスのようなワンピース。手に持っていない状態で箒を呼び出し、跨るところから丁寧^{ニナ}に教えてくれた。喋らないのでちよつと大変だった^{ニナ}が箒の扱いは覚えることが出来たので結果オーライ。

あと、ガラス回廊改め、雲タイル通路。前に案外綺麗かもと思っていた自分を殴りたい。あのときは盲目的にFC世界に向かっていたから周りをよく見ていなかったのだ。原作のように浮いている通路はずなのに周りに血痕とかが散らばっていました。地面があるかのように点滴スタンドがあるのに、そちら側にはいけないのだから不思議だ。踏み出してみようとしたら危うく落ちかけてしまった。危ない危ない。

もう一つの癒しスポットな猫さんはまだいない……ちくせう。勿論、flowはやりこんでるからワープ場所くらい分かる。この先にサイケデリックがあるが鉄パイプがないからあのわかりにくいジッパーを壊して移動することもできない。

それに、今行ってもラブホ街、もとい歓楽街はきつとまだない。あったとしたらそれは前世の記憶に関することだ。また自分が死ぬ瞬間は見たくない。目を覚ます寸前に目が合う少女のことは気になるけれど、仕方がないだろう。

と、いうことで向かう先は機械か、植物のあるところか。しかし今、私がいるところとは正直正反対の場所である。とりあえず、箒での飛行は達成したので元に戻ろう。

こういうときに“腕”があると楽なのだが残念ながらそれも

反対側である。具体的に言うとな最初のエントランスホールで私は上に進んでここに辿り着いたが、それらがあるのはエントランスから下に抜けた場所なのだ。実に遠い。

腕というのは頭や肩から腕が生え、それらと共に自分を抱き締めるとエントランスホールに戻れるという便利なエフエクトだ。エントランスホールには自力で戻るか、一度夢から覚めてまた眠るしか戻る方法がない。ゲームでは何度も寝たり覚めたりできるが、現実では面倒だし、基本1日に一回しか寝る機会はないので一方通行の多い夢の中では重宝するだろう。ゆめにつき本家のキャラクターであるモノ子ちゃんに似ている姿になるのがポイント高いし、可愛いから私はこのエフエクトが大好きだ。

丁度モルボルさんは一方通行だし、記憶がまだ幼いので（決して私が幼いとか、そういうのではなく）どこがどこに繋がってるか見当もつかないのだ。まだ経験していかないことは夢には現れない。だから歓楽街もまだないだろうし、学校だってない。本来アパートがある場所に病院があつたのがいい例だ。と、いうわけで本日の冒険は終了である。

「経験なんて、これからもしたくないのに」

経験しないなら重畳。しかしそれは叶わないのだろう。逃避の場フロウを選択しのはずなのに現実をまざまざと見せつける心象風景を背に、私は頬を抓った。

No. 4 『自由』 ―喫茶店―

「おはようございます、 風様」

朝起きて、傍には既にメイ子さんが控えていて、それで挨拶をしてくれる。それから、朗らかな笑顔に釣られて私も「おはよう」と返す。当たり前のように微笑む彼女がそこにいるだけで私は頑張れる気がする。

ああ、幸せなんだなあと実感しながら朝食を食べて朝の歯磨きから着替えまで、短い手足に悪戦苦闘しながら奮闘する私を手伝ってくれた彼女。少し恥ずかしいけれど、あなたが神か！ 日常でもたまにお母さんと口走りそうになるこの口をチャックしてお礼を言う。

メイ子さんにとってははしつかりしているけれど年にしては口数の少ない女の子だろうか。変なことを言わないように我慢しているだけなのだけど。あれ、でも結構喋ってはいるような？ なら甘えて来ない女の子？ むむむ。

ちなみに朝食は洋食である。ミントが乗ったヨーグルトにこんがり焼けてピーナツバターの香りを漂わす食パンと瑞々しいサラダ。それにお気に入りの胡麻だれドレッシングが少し垂らしてある。私自身がそんなに食べるほうではないので本来付くはずのスクランブルエッグその他は断っている。

病院食？ 院長の娘っただけで私病気じゃないもの。病室にいるのは実験動物みたいに弄りまわすためなのだからあのクソ親父には呆れる。本来は私室があってもおかしくないというのに。ただ、メイ子さんは私だけの特別らしいのでそこだけ感謝。でもあれだよね、特別扱いされているのは彼の幸運による恩恵があるからなのよね。

「風様、 本日はどちらへ行かれますか？」

「…… 美味しいケーキが食べたいな」

「畏まりました」

最近甘いものを食べてないから無性に食べたくなったのだ。

「テラスカフェがあるのでそちらに行ってみてはどうでしょう？」

「なに言ってるの？ 一緒に行こうよ」

きよとんとした表情でこちらを見やる彼女。いつもはツリ目気味の賢そうな印象を受けるそれがまん丸になり、口に手を添えている。動揺のせいか後ろに流れた黒髪の綺麗なおさげも尻尾のように揺れている。

「あはは、変な顔」

珍しい表情に思わず吹き出してしまったが、物凄く失礼なことを言っていないか私。嫌われたくはないからちよつと焦って「変な意味じゃなくてえつとえつと」とテンパっていると、いつものように微笑んだ彼女が手を差し出して来る。

手を繋ぐのなんて、一体何年ぶりだろうか。このなんでもないような動作が、私にはとても嬉しく思えた。

「お嬢様はどれが好きですか？」

向かい側でメニューを見る彼女を見て沈黙。

「チョコが好き。だからガトーショコラがいいなあ」

そうですか、と微笑んでラズベリーのケーキとガトーショコラを頼むメイ子さん。あのあと、場所を教えるからすぐに去ろうとした彼女を必死に引き止めて今に至るわけだ。

ちなみに人前なので風様とは呼ばない。

ベリー系のケーキも程よい酸味があつていいよね。朝食を食べた後だからあまり入らないけど。誰だよデザートは別腹なんて言ったの。私には無理だ。

「では今度、食後のデザートにお持ちしましょうか」

「うん」

手作りお菓子……、なんて俺得なのだろうか。まあ、いつものご飯は彼女の手料理なのだから今更、という感じだがとにかく嬉しい。私の好きなものを訊いてくる辺りが特に。

「――」

「？」

なんとなく、何かが聞こえたような気がして振り返る。

「お嬢様、どうなされましたか？」

「ううん、なんでもないよ」

届いたケーキを少しずつ食べながら考える。カフェなので周りが騒がしいのは納得できるが、なんだか腑に落ちない。まあ、考え事をしていたら美味しいケーキも美味しく食べられないので視線をメイ子さんに戻す。

「あ、あの、一口貰っていい?」

「どうぞ」

ずっと差し出されるお皿に手を伸ばし、スプーンでラズベリークリームがついたケーキを掬い取る。代わりに、と自分のケーキの皿も差し出すが遠慮されてしまったので自分のフォークにケーキを乗せて彼女の目の前に持っていく。驚いていた様子だったが、今度は大人しく食べてくれた。やっぱり女の子なら分け合いつ子は定番だよな。

「ね、美味しいでしょ」

「ありがとうございます、お嬢様」

ケーキは美味しいけれど、これを橙子ちゃんと食べられないのが残念だ。ミニのやつなら糖分大丈夫かな。やっぱり駄目かな。食べ物だと検査とかに引つかかる可能性があるし、身に付けるもののほうがいいんだろうな。でもマフラーはあげちゃったしねえ。

「そうだ! お菓子作り教えてよ」

「お菓子、ですか?」

別に感謝の印をあげるのは橙子ちゃんにだけってわけじゃないのだ。メイ子さんにもサプライズで用意しよう。なんとかバレンタインには間に合わせたいから料理本かなにかも用意してもらおうとする。前世で料理はできたが、片手間で済ましたただらけた生活をしていたので今世では女子力を高めたい。(検査が) お休みの日にでも実行したいと思う。

「そう、こういうの作ってみたいんだ」

「少々時間を頂ければ許可を取って参りますわ」

「お願い!」

困った顔をする彼女に、胸の前でパンツと大きな音を立てて手を合わせ頭を下げる。すると決心してくれたのか、うふふと笑って席を立った。

「畏まりました。ここで待っていてくださいいね」

「はい」

デジャヴだ。前もこんな感じで橙子ちゃんへの面会許可をもぎ取ってきたのよね、彼女。

あまり時間がかからなそうなので残ったケーキを摘む。勿論、メイ子さんは既に食べ終わっていたので自分の分だ。お子様サイズの口では大人の食べるスピードについていけないはずがない。

「お見舞いなんですけど、青井翠君あおいあきらの病室はどこでしょうか」

「ああ、あの子の。本人の許可が必要になりますけれど、お名前を伺ってもっ…」

「——です」

聞こえてきた会話に興味を惹かれて受付の方を見る。そこには、百羽鶴程の鶴を持ってカウンターを見上げる高学年くらいの女の子がいた。

「え」

思わず口をついて出そうになったうろちゃん？という台詞を飲み込む。

紫を基調とした服。寝癖なのか、違うのかよくわからないけれど、両側が犬の耳のように跳ねた色素の薄い髪。年はりん子姉さんと同じくらいなのに結構膨らんでいる胸元。妬ましい。はっ、違う違う。そんなことが言いたいのではなくて、つまり、彼女の姿はゆめ2つきのうろつきちゃんにそっくりなのだ。流石にゲームのように成長した姿でないせいか髪は明るい金でなく、多少色素が薄い程度だが。しかしあの特徴的な髪型を間違えるはずがない！

これは接触のチャンスだろうか。いやしかしメイ子さんが早く戻ってくるかもしれない。よし、伝言を頼もう。いつも看護師達には非道な検査を受けているんだ。少しくらい困らせてもいいだろう。

「よかったら案内しようか？」

素早くお皿とプレートを片付けて「ごちそうさま」を伝えてからカウンター付近へ近づく。そして手を後ろに組んでにっこりしながら言うのがポイントだ。

「お嬢様!？」

看護師が驚愕しているがまあいいだろう。精々院長の娘の我が儘に付き合ってくれ。

「隔離病棟の例の子でしょ？ 私も橙子ちゃんの所に用事があるから案内くらいすぐできるよ。忙しいんでしょ？ その代わりメイには私の部屋に戻るように言っただけだよ」

にっこりと子供特有のあどけない笑顔を向ける。気持ちだけは刑事に話しかけるコナン君だ。ただし、私のほうが下手である。

いいでしょ？ いいでしょ？ と笑顔で訴えかける私にいい顔してない受付さんだけれど、表情はどことなく面倒そうだから許可するだろう。そもそも、私に逆らうのも良くないことだしね。皆さんは何故か他の兄弟姉妹にはでかい顔しているのに私にだけはご機嫌伺いをしてくるのだ。実質、院長の娘は私だけになってしまっているらしいからね。兄弟姉妹に好い顔しない看護師達のこと嫌いだし、立場を利用して無理を通して自分も嫌いだ。が、やはり権力は使いたいものである。うろちゃんと仲良くなりたいたいし。

ミーハー？ ええ、よく分かっておりますとも。人間、実現可能な欲は発散しておかないとね。

「か、畏まりました。では空井さんはこの方について教えてください
ね」

「は、はい」

「こちら、仮にも受付でしょう？ そんなあからさまに嫌な顔をしていいのだろうか。とりあえず、うろつきちゃんに接触成功である。ぶい。」

No. 4 『自由』―談話―

看護師が許可を取り付けてきたので現在はうろちやんと一緒に廊下を歩いている真っ最中である。相変わらず真っ白い廊下を真っ直ぐ進みながら隣を歩く彼女を見上げる。横顔はまだ幼さが残っていて、軽く顔にかかっている濃い茶色の髪がさらさらとして綺麗だ。どんなシャンプーを使っているのだろうか。病院のような公共施設にあるようなシャンプーは安いものが多く、髪がぎしぎしになっってしまうというのはよくあることだ。ホテルや温泉施設なんかがあるだろうか。今世と前世でどのような違いがあるかは分からないが細かいところはそんなに変わらないだろう。劇的に変わっているとしたら、この世界には天才秀才が多すぎるといったところだろうか。あと、天才達への鼻唄がああの学園では激しかったし、世界全体でそれが言えるのかもしれない。うろちやんは、どちらに属するのだろうか。

不意に横並びで歩いていた彼女がこちらを向いて「えーつと」と口に指を添えて言う。

「そういえば、まだお礼を言ってなかったね。案内ありがとう」

うろちやんは突然見知らぬ子供に案内されることになったためか、距離感を掴みずらそうに少しぎこちない感じで話した。

「いいんだよ、ついでだしね。お姉ちゃんなんて言うの？私は風って言うの。」

お姉ちゃん。なんてあざとい響きなのだろうか。この年齢の特権だろう。相手も丁度りん子姉さんと同じくらいの年だし、大体十歳過ぎたあたりだろう。

「私？織月だよ。空井織月^{うついりづき}。お見舞いに来たんだー」

「そっかー。じゃああの子の友達なんだねー」

「そうねー」

なんだかほわほわした雰囲気で喋りながら病棟の廊下を歩く。いとお姉さんですわー。こちらに合わせて間延びした喋り方までして、くすくす笑っている。

そういえば、うろちゃんといえば広大な夢の世界だと思うけど、あれは彼女自身の記憶なのか、それともやはり人の夢を渡れるのか。うろちゃん自身が関わる部分は確かにあるんだろうけど、昭和路地とかは絶対違うと思うのよね。…… イベントあるけど。エフエクトの背伸びとか、遊園地マップとかは絶対彼女の経験だと思うのだけど。うろちゃんは道化恐怖症持つてるイメージが定着している気がする。まあ今は関係ないね。とりあえずは、お近づきになりたいので楽しく話そう！

「お姉ちゃんは怖い夢とかって見る？ 友達と夢の話で盛り上がるこ
とが最近多いんだ！」

いきなり楽しさの欠片もない話題だが、ええ勿論確信犯ですとも。彼女はもう夢を見ているのだろうか。あの狂った夢を。遊園地の強制起床イベントといい、彼女は十歳以前に怖い思いをしていると想像できる。既に恐怖の夢に囚われているとするならば、私の質問に対して浮かべた笑顔も心なしか引きつっているようにも見えてくるから不思議だ。

生前の私はあまり夢の内容を覚えていない、もしくは夢を見ない人間だったから尚更現状に困惑しているし、以前から夢を見ていたわけではないので姉さんたちの気持ちも理解することができない。夢を見る人の心境も最近知り始めたばかりだから彼女達の正直な気持ちを知りたいのである。皆狂ってしまったって分からないから恐らく正常であろうろつきの気持ちなら分かりやすいだろうと思う。最低だって？ 自覚あるよ。でも、精神が成熟済みである私には純粹な子供がどんな気持ちでいるのかなんて想像できないのだから仕方ない。

まあ、そんなことを頭の片隅で考えているのだが本当はただたんに彼女が本当にうろつきなのか、そしてもう夢を見るようになっていくのが気になるだけなのだけだ。

「見るよ。美味しいケーキを食べる夢とか、虹が綺麗な空の夢とか」「いい夢だね！ 最近は怖い夢とか見るから羨ましいな。でも、ガラス張りの床から空が見えたりするのは綺麗だったなー」

全部正直な感想だ。嘘は吐いてない。言っていないことはあるけれど。とりあえず、今のところの彼女の夢は楽しい夢ぐらいしかなく、うでなによりである。私の考察は間違っていたようだ。まだ遊園地の恐怖を夢に見ていないということはきつとまだ経験していないのだろうし。私と同じように言っていないことがある可能性も否定できないが。

それにしても、彼女は子供を扱うのが上手そうだ。人差し指を立てて少し屈んで話しかけてきたり、後ろ手を組んで笑ってみたりと仕草も可愛らしくてとても目を惹かれる。眼福である。

「千羽鶴凄いなね。自分で折ったの？」

「千羽はないから良くて百羽鶴だけだね。張り切っちゃって一杯作っただけどこれだけ作るのがやっとならったんだ」

彼女が手に持っているのは折り紙で作られた鶴の束。色とりどりの紙で折られていて、丁寧に作りこまれているのでどれだけ熱心に折っていたのかがなんとなく分かる。それだけ、青汁君（仮）のことを心配しているのだろう。楽しそうに笑っている彼女からは心配だとか、そういうところが表情に出ていないのでなんとも言えないので、彼の病状はそこまで深刻というわけではないのだろうか。

「お見舞いなんだよね、その子は大丈夫なの？」

「翠あきつのこと？ 点滴で血を綺麗にしていれば前よりずっと良くなるみたいよ。その代わり病院からは出られなくなっちゃったけどね」

やはり、今すぐにも命に関わるようなことはないようだ。点滴を打っていれば寿命がぐっと伸びる。そんな感じだろうか。うろちやんは「お医者さんが許してくれないんだ」と、病院でしか会えないことを告げ、少し寂しそうな顔をした。

しかしすぐに元気を取り戻して「久しぶりに会うから楽しみなのよ」と言う。

しかし私ばかり話してしまっているのだが、いいのだろうか。彼女も話したいことぐらいあるはずだが、もしかしたら私が幼いので聴きに徹してくれているのかもしれない。

「織月お姉ちゃんまた来てくれる？」

目的地までもう少し。なので話を切り上げ、隣にいる彼女を見上げ、言う。うろちゃんは朗らかに笑いながら私と目を合わせ、頷く。本当に気持ちのいい人だ。聞き上手な上、話し上手。それにお見舞いの話も暗い印象を与えずにこちらの意識にスツと入り込む。お見舞いにしては少々暢気かとも思ったが、そう思わさない何かがある。

「うん、またお話できたらいいね」

歩いているうちに病室についていた。勿論橙子ちゃんの病室の隣だ。

うろちゃんて病院っていったらやっぱり青汁君だよ。だけれど青汁君イベントは強制殺害。彼のお見舞いに来たって言うし、友達みたいだしどんな経緯でそうなるのか興味はあるけれど、他人の出来事だから干渉はしないし、できない。あわよくば……とは思うけれどもそれでは非常識すぎる。そのうちどこかでばったり出会えるなんてことがあればいいな。

「ついたよ。またね、お姉ちゃん」

「うん、ありがとう。助かったよ」

そう言ってお互いに手を振って別れる。

メイ子さんとお菓子を食べて、さらには食べさせあいつこをして、うろつきちゃんにまで会えた。今日はとても有意義な日だったと感じられる。これでもまだお昼前だ。これからもっと楽しいことがあるのだろうかとかワクワクとした思いを胸に秘め、自室への道を進む。隣室なのだからあのオレンジ色の部屋に寄れば良かったのだが、残念ながら燈子ちゃんにはヘルメットがないと会えないのだ。

「お嬢様、あまり無茶をしないでいただけますか」

疑問符のない言葉に帰った自室で泣くような思いをするなど、満足感で一杯だったこのときは思いつきもしなかった。

No. 4 『自由』―錯乱―

隣室の目隠し姉さんとの面会がとうとう許された。その報せを聴いたのはうろちゃんとお出会ってから少し日が経ったときのことだった。あのあと、自室でこつてりとメイ子さんに絞られ、不貞寝したあとにやっと許可が出されたらしい。

夢では特に変化もなく、関係者（私やりん子姉さんなど）にしか許されていない面会をするために隣室の扉の前へと立つ。

扉に手をかけるが、そのまま少しの間取っ手を見つめて時間が立つていく。手が震えているからだ。前のように気軽に立ち入ることができないのは、連日聞こえていた隣室から響く破壊音の所為だ。ずっとずっと何かを壊した音や、ぶちまける音が続いていた。

だが今は不思議と静かで、いつそ不気味に思うほど音がしない。もしかしたら、心臓の動く音が大きくなりすぎて一時的に周りの音が聞こえなくなっているのかもしれない。とはいっても耳が聞こえなくなるような物理的な意味ではなく、本を読んでいるときとか、何かに集中しているときに周りの音が聞こえなくなる、あの現象のことだ。物に当たっているくらいなのだ。手術が成功したとはとても思えない。むしろ失敗よりも最悪な事態になっている可能性すらあるのだ。

りん子姉さんのときも無性に嫌な予感がしていて、面会可能になってからは至って普通（少し言動が狂気じみているのはいつも通り）だったが、本人曰く病院の職員が彼女の病室に入る度に怒鳴り散らしていたということらしい。

彼女が大きな声で話すことなど想像もできないが、本人が恥ずかしげに「あんなこともあったものだよ」「などと言っているので間違いはないだろう。嘘を吐いていない限りは。それに、あのカルテを信用に足るとするならば職員には凶器えんびつを振り回して取り乱したりしたことは事実なのだ。

りん子姉さんのときは足を失っても私たちの前では取り乱す素振りも見せなかった。果たして、目隠し姉さんもそうなるだろうか？

否、無理だろう。常日頃感情をあまり表に出さず厭らしい笑みを浮かべている胡散臭さ全開のりん子姉さんに比べれば彼女は酷く感情的だ。良くも悪くも子供らしく、沸点の低い彼女では怒りの奔流に飲み込まれてしまっているのが関の山だ。精神的にもまだ未成熟で、脆い。そんな子供がシヨックな出来事に遭っている。

私は何と言葉をかけるべきなのだろうか？ 何を言うべきなのだろうか？ 目隠し姉さんに言う言葉が一向に見つからない。私の貧弱な語彙力ではかけるべき言葉が見つからない。きつとこのままでは彼女の前でも口を開くことができないだろう。引き返すか、このまま当たって砕けてみるか、二つに一つ。

きつと数分も経っていないだろうが、何時間も取っ手を握っているように思えて覚悟を決めた。ええい！ 当たって砕けろ！

「こんにちは」

ガラリと扉をスライドして開けた瞬間、真横を何かを通り過ぎていった。

「出て行きなさいよー」

そこにはボロボロになった病衣を着た、包帯だらけの彼女がいた。相変わらず両目を覆う様に鼻の上から包帯が巻いてあり、前はなかった体のほうにも包帯が沢山巻きついていて、特に腕が酷かった。服から出ている場所の多くは包帯が占領していて、これではまるでミイラだ。

彼女の病衣は何かで突き刺したように穴だらけで、そこら中に綿の出たぬいぐるみや枕やらが転がっている。相変わらず言葉が見つからず私が黙ったまましていると、彼女は二度目の開閉音が響かないことに怒りを見せた。

「だから出てけっつってんでしよう!？」

近くの床頭台しょうとうだいに置いてあった花瓶が盛大な音を立てて引き倒され、粉々に割れてしまう。そのときに傷ついたのか、彼女の腕に巻いた包帯から赤い染みが広がった。

「あの、姉さん?」

私が戸惑いながら声をかけてもなお、彼女は甲高い声を上げて私に

退場を命令し、罵声を浴びせる。美人の罵声はときにはご褒美になるものだが、この場合は最悪だ。当たり前だ。友達の悲痛な言葉をご褒美に変換する人間なんていないだろう。いたとしたらそいつは恐らく変態と言う名の紳士^{外道}だ。

「姉さんちよつと」

「うるっさいのよお！ あんたなんか嫌い嫌い嫌い！ 白髪なんて気持ち悪いのよ、近付かないでよ！ いっつもいっつもそうやって大人ぶってき、見下してんじゃないわよ！ 可哀想だつて思ってるんでしょ!? 馬鹿じゃないの!? あんたのほうがよっぽど大事にされてるもんね！ ねえそう思ってるんでしよう!? 化け物のくせに！」

パニックというのだろうか、錯乱と言うべきか、ともかく、思うことを次々と喋っているせいか早口な上に支離滅裂だ。いつもこう思っていたのだろうか、と考えると少し辛くなってくる。

だが、こういうとき何を言えいいのかややはり分からない。口を開けど出るのは息ばかりで言葉となつては現れず、唇を軽く噛んで悔しさを閉じ込める。友達が苦しんでいるときに何も言えないだなんて、早く何か言うべきだ、なんて言葉が頭の中をぐるぐる回るが一向に思考は纏まらない。

叱咤しても、激励をしても悪化させてしまいそうに感じるし、下手なことを言ってしまったら溝は決して埋まらない。そんな気がするのだ。

荒く、短い呼吸をし、涙が止まらないのだろうか、包帯が広範囲にわたり塗れている。あのままでは辛そうだ。何も言つてはいけないのなら、なにか行動に移すべきなのだろう。こういうとき、何か下手な慰めをするよりもただ傍にただで人は安心するものだ。アニマルセラピーなんかそれがそれに当たるだろうか。純粹な動物と一緒にいて、与えたものがそのままそっくりこちらに還つて来るのがあるのがあるだろう。動物は好意には好意で返す。動物は裏切らない。そんな言葉があるくらいだ。ただ傍にいてというだけでも効果はあるだろう。これがもしだめだったとしても諦めてはいけないのだ。でないとなら女を落ち着けることはできない。無言でも傍に居続ければそのうち

冷静になってくれるだろう。わりと楽観的だが、不思議と彼女が危害を加えてくるかもしれない可能性は除外されている。

「ハッ、ハッ、そんな目で見ないでよ！ 気持ち悪い、気持ち悪い、気持ちわる……」

狂ったように言葉を続けて自分自身に言い聞かせるようにしている彼女に無言のまま抱きつき、ベッドに押し込む。

下手をしたら目の見えない彼女は頭を打ってしまうかもしれないので、急に抱きついて驚いた一瞬の硬直の間に一気に押し倒した。しかし驚いたのもつかの間、多少長くなつた爪で腕を思い切り掴まれ、血が滲むし、首目掛けて噛み付いてきたので慌てて避けたが密着しているせいで避けきれずに右肩を激痛が襲う。息を切らせながらひゅうひゅうと音を立てている彼女に少しまずいな、と判断して背中を一定のリズムで叩く。体格の差で既に上下は逆転して私が押し倒されるような状態になっていたのでこれは簡単なことだった。

「姉さん、ゆっくり、ゆっくり息して」

「……」

ふうふうと荒げていた息は段々と静かになっていき、やがて肩から口が離れて掴まれていた腕の拘束も緩んだ。今更になって肩が痛くて生理的な涙が出て、視界がぼやける。どうやら落ち着いてくれたようだ。

「よかったあ」

思わず私は安堵の息を吐き、全身の力をゆっくりと緩めた。緊張と痛みで思つた以上に体が固まってしまっていたらしい。

「……悪かったわ」

落ち着いた後の目隠し姉さんは顔を背け、噛み付いて血が滲んでいる箇所を少し撫でてから言った。とても小さい声だったが、錯乱してしまっていたのだから仕方ないだろう。落ち着かせなければ自傷行為にでも走りそうだったから止めたのにすぎない。実は、本当に止められるとは思っていなかったのだけだ。

「また三人で会う気になってくれたら許すよ」

「目のことは言わなくてもいい？」

「言いたくないなら言わなくていいと思う」

「そう、なら今日は一人にしてくれる？ 明日からはちゃんと付き合うわ」

「分かった」

一息に問答を終えてもう一度姉さんに抱きつく。

「私姉さんのこと好きだよ」

「そう」

素っ気無く姉さんは答えたが、今度は振り払おうとはしてこなかった。

「そういえば、私名前を貰ったのよ」

上のお姉さん。りん子姉さんが言う。その言葉に対して私はカルテを見てしまった罪悪感しか感じられなかったが、何も知らない目の見えないお姉さん。目隠し姉さんは違ったようだ。純粹に「とうとう貰えたのね。いいなあ」と喜んでいる。いつもの毒舌つぶりは発揮されていない。この反応からするに彼女も名前がないのかもしれない。だとしたら、私に名前があることも含めて父親、病院の院長に鼻負さだれているから私に対して毒舌気味なのだろうか。私が自意識過剰なだけだと信じたいところだ。

「りん子って言うの。やつと貰えたわ」

「じゃあこれからはりん子姉さんね。よろしく」

目隠し姉さんが言う。それにりん子姉さんも嬉しそうに笑った。

私は何も言えずにいた。一体何を言えればいいというのだ。罪悪感と、あんな意味でつけられてしまった名前喜んでいるりん子姉さんを直視できない。病院側への怒りがもやもやと胸の中で渦巻いていく。

「ちよつと風、まだそこにいるわよね？」

「え、あ、うんいるよ」

「何よ黙っちゃって。あんたは名前があるからいいけど、私達にとっては大事なことなのよ。少しくらい喜んでくれたっていいのに」

目隠し姉さんが責めるように言った。

そうだ、彼女は目が見えないから私が黙っていると何もわからないのだった。私は余計なことを知ってしまったけれどこの人達は純粹に喜んでいて。それに、自傷ばっかしているあのお姉さんが喜んでいいのだ。とても大切なことなのに、自分ほうじうじと情けない。彼女達だつてこの理不尽な毎日に弄ばれている被害者だ。辛いのは私だけじゃない。ごめんね姉さん達。

「お名前、教えてくれないだけだと思つてたからちよつと吃驚し

ちやったの。ごめんなさい！」

「なんだそんなこと。そういえば教えてなかったわね」

「うん、りん子姉さんおめでどう」

目隠し姉さんは少々不満そうに「頭足りてないだけだと思ってたわ」と言っているが、りん子姉さんが嬉しそうなので反論はやめておいた。とにかく、私だけが辛いわけじゃないことを覚えておこう。そうしないと自分勝手な人間になってしまいそうだった。

「私も早く名前欲しいなあ」

目隠し姉さんが言う。少し前まで傷だらけだった腕や足はもう包帯も取れて傷跡もなく、綺麗なものだ。本来ならば名前を貰うということはあまりいい意味でないということをしりん子姉さんの一件で知ってしまった故に、彼女には申し訳ないが名前がないことを良いことだと思ってしまう。

錯乱していた彼女の姿が目には浮かぶ。もしかしたら、彼女が名前を貰うのは時間の問題かもしれない。

嫌な予感と、真実を知ってしまった罪悪感を胸に、私はそう思った。

No. 4 『自由』―翠緑―

「そこにいる子、入ってきなよ」

うろちやんと出会ってから一ヶ月とちよつと。今回はとうとう、例の男の子に会ってみたくて病室の前でどうしようか迷っていた。

勿論、隣室の橙子ちゃんには挨拶済みだ。やんわりと相手の都合を考えるように言われたのでこうして様子を見ていたわけだけれど、中から声をかけられてしまった。無神経だということとは自覚しているので、これは悪いことをしたなあと思いつつも扉をスライドさせて中に入る。

「ごめんなさい。いきなり来ちゃつて」

謝りながら中に入つてすぐに目に付いたのはやはり点滴の色だ。なるほど、あれがグラスに入つていて「これは青汁だよ」と言われれば信じてしまいがちそうだ。それほどその点滴は濁つた深緑色をしていて、言つてしまえば沼の水をそのまま絵に描いたような、酷く汚い苔のような色をしていた。私は知識として知つているからこそ納得できるが、この緑色の液体が血液だと誰が思うだろうか。医者もきつと目を白黒させながら診断したことだろう。

そしてそれに繋がれた少年もまた、酷く青い顔をしていた。髪の毛は血の色のように濁つていないが、明るいとほ言いがたい緑色。これを例えるならば瑞々しいピーマンの色だろうか。それに真っ白な包帯をずさんに巻いていて、余つた端が頭の後ろから鉢巻のように流れている。顔の整つた結構な美少年だが、顔の白さの所為か男の力強さよりも線の細い女性的な見た目をしている。将来、女性によくモテそうだ。

「いらつしやい。ああ、別に悪く思わなくていいんだよ。こういうのには慣れてるんだ」

物珍しそうに彼の姿を上から順に眺めてから言われた一言でまたチクリと胸に刺さり少し恥ずかしくなる。ミーハー魂が染み付いているのは自覚済みだが、呆れられるのは流石に嫌だ。相手を舐めるように見て自分の知識と照らし合わせる。こんな分析じみたことをし

ているようでは人に嫌われてしまうだろう。しかし、この悪癖はすぐには改善できないと確信できてしまう。ほぼ無意識の行動ではあるが、自覚があるだけまだましだろうか？ いや、言い訳を考えている時点で論外だろう。早めに改めなければならぬ。

「それでキミは？ やっぱり僕のこれを見に来たのかな？」

そう言っただけは点滴を指差す。そこには点滴が二つついていて、一つは普通の点滴で、透明な溶液が入っている。もう一つは前述したような淀んだ緑色をしている血液が入っている。この血液にもう一つの液体を少量混ぜて再び体に戻す。血液クレンジング療法というやつだろうか。そんなものでこの色は戻せないと思うのだが。

「不思議そうな顔をしているね？ その緑のは僕の血だよ。変てこだろ？ これのせいで長く生きられないだろうからって、ここにいますよ」

今までは普通に生活出来ていたのにね、と愚痴を漏らすように彼は言う。少々自虐気味なのはこんな病院にいる所為だろう。ここにいれば誰だって精神に異常をきたすだろう。そう断言できるほどこの病院はおかしいのだ。目隠し姉さんだってあそこまで追い詰められていたのだ。つくづく子供には酷な場所だと思う。

私が不思議そうな顔をしていたのなら、それは血液クレンジング療法が有効なのか、という疑問のためだ。私はそれが血液であるということを知りながら知っていたわけなのだから。しかし、彼が勘違いをしているならば都合なのでそのままにしておこう。

「あの、アキラさんと合ってる？」

その一言で彼の表情が変わる。

「受付で訊いたのかい？ キミに漢字が読めるとはとても思えないよ」

「織月お姉ちゃんに訊いたの」

「なんだって！ 彼女に会ったのか？」

今度こそ、その整った顔を驚愕に染めて彼が言う。

あれからうろつきは何度もお見舞いに来ている。その姿を何度か見た上、一度私の部屋へと招き入れたことすらあるのだ。彼女がどれ

だけ彼のことを心配し、献身的に見舞いに訪れているかがそれだけでわかるだろう。

この一ヶ月間、少なからず週末には毎回訪れているし、それ以外にも、学校が終わる夕方頃に紫色のランドセルを背負ったまま顔を見せに来ることがある。訪問回数は恐らく十を超えているだろう。ランドセル姿のうろつきに胸キュンしたのは秘密だ。

「う、うん。お友達なんですよ?」

「ああそうだよ。彼女は大切な幼馴染だからね」

途端に警戒心を緩めてきた彼に苦笑する。先程までの刺々しくとっつきづらそうな美少年の姿は何処に。織月という魔法の言葉で現在の彼は年相応の少年らしく頬を緩ませ、本来の姿であろう爽やかさを前面に押し出している。

「もしかして、キミが織月の言っていた、道案内をしてくれた子かな?」

「うん、そうだよ」

そう言うと、彼は「ああ、やっぱりそうか」と呟いてから笑みを浮かべた。

「お姉ちゃんキミのこと凄く楽しそうにお話してくれたよ」

「それは嬉しいな。織月は良い笑顔をするからそれがいつも楽しみなんだよ。でも今は駄目だね。僕のほうが写真機も手に出来ていないし、手元に絵の具もないから」

この人は写真を撮るのが好きなのだろうか。それとも、絵を描くのが好きなのだろうか。困ったような表情でやれやれと手を挙げる彼を見ていると、きつとどちらとも好きなのだろうと思えた。うろつきのその時、その時を収められるのならなんでも。

なんとなく、青汁君とうろつきが恋仲だったらいいのにと首を振る。確かに翠君のほうはかなり好意を表しているし、織月も健気に病院通いを続けていて両想いの可能性は十分にあるが彼らの間柄は私が勝手に決め付けて良いものではないのだ。

「お姉ちゃんってどんな人なの? お兄ちゃんの話、聴きたいな」

いつまでもキミ呼ばわりでは流石にきつくなってきた。なので無

難にここはお兄ちゃん呼びだ。あぎといような気もするが幼子なんてそんなものだろう。五歳前後の子供は下手すれば名前呼びをしてくることもある。この辺が落としどころだろう。

私が彼女のことを訊きたいのは、自然体の彼女を知りたいからだ。私のような年下相手ではきつと優しく接するように気を配るはずだ。それでは自然体とは言えないだろう。

「いいよ。でもいざ話をするってなるとなにも思い浮かばないな」

そう言ってから少し考えるように黙り込むと「そうだなあ」と声をあげてから続ける。

「キミって甘いものは好きかい？」

「うん。チョコレートとか」

「あの子は凄い甘党でね。あ、甘党っていうのは甘いものが大好きってことだよ。週末には毎回少ないお小遣いで材料を買ってきては大好きなショートケーキを作るんだ。朝仕込みをして、昼は僕に会いに来て自慢してくれるよ。それに」病院に禁止されてるから持ってこれないの、ごめんね」としよんぼりしながら嬉しいことを言ってくれるんだ」

それは限りなく自慢話のようで、その本質は惚気話だった。だけれど、とても幸せそうな彼を見てしまえば話に水を差すなど無粋だと分かる。私はただ黙って話を聴くだけだ。

「それと、そうだな……格好良いものが好きで、女の子よりも男の子の方が話が合って、そのわりにはキラキラしたものが好きで、音楽を聴くのが好きで、とても女の子らしいところもある。少しチグハグで統一性なんてまるでない奴だけれど、目は真っ直ぐ向いているんだ。あいつはあいつなりに一点を見つめてて、それに向かって歩いている。いや、走ってるのかな？ともかく、何があってもあいつは信じたことをそのまま貫くんだろうと思うよ。それにかなりのマイペースさだよ。よっぽどのことがない限り少しも変わらないだろうね。逆にそこがいいところなんだけれども」

最後にしっかりと褒めているあたりやはりベタ惚れだろうこれは。そう思わずにはいられなかった。リア充め。

しかし、やはり彼もどこか子供らしくない。何か問題があったり、天才だったりする人は成熟が早いのだろうか。それとも私と同じ転生者だったりするのか？ いやそれは…… ないとは言い切れないが現時点で分かることなどないだろう。あるいは、キャラクターそのものに主人公補正のようななにかがあるのだろうか。優秀な人間として生まれてくる、みたいな。

「いつも明るく笑ってて、それが曇るところは見たことがないよ。僕はあの笑顔が好きなんだ。元気が出てくるからね。今でこそこそうやって病院に押し込まれているけど、本当はその必要はないんだ。こんな気持ち悪い色をしていても血は正常に働いていたからね。だから幼い頃は黙認されてただけど、最近流行ってる風邪をひいてからというものこれだよ。どうやら寿命自体が極端に短いらいんだけど、そんなものは嘘だと思ってる。今までは健康体だったんだから。ああ、血の色以外はね。ともかく、彼女の笑顔が唯一の活力になっているんだ。病院食はまずいし、甘いものも出ないし、織月の手料理が恋しいよ」

「美味しい料理が食べられないんじや楽しみは本当にそれだけだね。私もケーキが食べられなくなったら泣いちゃうかも。でも、それより友達に会えなくなるのはもつと嫌だなあ」

この病院がいかに腐っているかがよく分かる。この健康体であるはずの少年をきつと欲しがっていたのだ。今までは検査をしても正常で、風邪すらひかなかったことで手が出せなかったのだろう。それが、流行の病にかかったことで異常ありと決め付けて病院に確保したんだ。その風邪にかかったことでこの腐った病院に切欠を与えてしまったのだ。だとしたら面会謝絶されていないのはまだましな処置なのだろうか。それさえなかったらこの人はもつと荒んでいたに違いない。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんのこと大好きなんだね」

流星にあんな惚気話を聴かされてしまっっては言うしかない。このリア充め、末永く爆発しろ。

「えっ、と。どこでそれを！ じゃなくって、ええと、ど、どうしてそ

う思ったのさ」

おやおやあ？ これで動揺するだなんて脈ありありですね？ 他人の恋話美味しいです。先程子供っぽくないだなんて思ったけれど前言撤回。普段は大人っぽいけれども、こういうところは年相応なんだ。なんだか可愛い。

「すつごく楽しそうに話してるから、かなあ」

「そ、そうかい。まあ、大切な幼馴染だからね」

あら素直。思わずにやにや顔になりそうなのを抑えて彼を見る。ごほん、ごほんどわぎとらしく声をあげてから翠君は真剣な表情に戻った。

「…… キミはとても幸運だね、あーつ、と」

「凧だよ」

「そう、ナギちゃん。キミはとても幸運だよ。なんせとても活力に溢れているのだから。友達も一杯いるだろ？ この病院内ではそういう子はごく僅かだ。僕みたいに何度も見舞いに来てくれる子がいるのだって運がいいほうだけどね。それだっていつまで続くかは分からない。学校もあるし、あの子も外で遊ぶほうが好きだからね。いつ、心が離れていくかなんて分からないよ。だから、キミはその幸運を大切にしたいほうがいい。…… キミには少し難しかったかな？」

黙り込んだ私に寂しそうな顔をした翠君が言う。きつと彼には難しいことを聞いて顔を顰める子供のように見えたのだろう。だがそれは違う。私はあるワードに敏感に反応してしまったにすぎない。そして心の中に漏らす。なぜ今、 “幸運” などというワードに惑わされねばならないのだ。いや、彼はただ思ったことを言ったにすぎない。きつとそうだ。なのに、こんなにも動揺させられる。

身近な幸福にはいつも感謝していた。そのはずだった。なのに何故、私はこんなにも動揺し、カルチャーショックを受けたのだろうか。身近に友達がいること。大切な人がいること。それは幸運に分類されてしまうのか？そこだけが気になって冷や汗が流れる。

原作での彼の言動からするに、才能としての “幸運” は多数派意見で、一般論的に幸運だとされることが起きたときにのみカウント

されると推測できる。それは物理的な幸運であって、精神的な幸運はカウントされないということだ。

例えば、彼の幸運は物理的に帰ってくる。当たりの宝くじを拾ったり、偶然生き残って遺産を受け取るなどだ。だが、好意を向けられたり、優しくされたり、目に見えない精神的なものを与えられてもそれが幸運としてカウントされてないのは本編だけでは微妙だが、合っていると思う。そうでもなければいちいち細かい事柄全てを幸運と不運で考えなければいけなくなる。それはあまりにも些細すぎて「才能」とは言えない。人間少なかれ運に左右されることがあるのだ。「才能」とされるくらいなのだからもつと大規模なのだろう。そう、TRPGで常に決定的成功か決定的失敗をするかという極端な「才能」と考えればいいのだ。しかしこれは所詮、推測ではないのだ。

では日々の幸福は幸運に分類されるのだろうか。友達がいる良い人間関係は幸運か？ 相對する病院の人間と、怪物君からの拒絶で不運だとすると一応辻褄は合うだろう。なら、メイ子さんや橙子ちゃんからのプレゼントは？ 前に不運が来ていたとするなら気絶したところと、悪夢を見たこと。それに非合法的な人体実験。こう考えると幸運と不運がきちんとサイクルしているように考えられる。

「友達を大切にしなよ。身近にある幸せを一杯抱きしめて落とさないようにするんだ。物にして残すのもいいかもしれないね。友達との写真。好きな人とのツーショット。なんでもいい。思い出はとっておくものだよ」

翠君はちらりと床頭台しょうとうだいの上にある写真立てを見てから顔をこちらに戻す。その写真には小学生に上がったばかりであろう翠君と、織月の姿が写っている。「入学式」と書かれた立て看板の前で真新しい深緑のランドセルと、紫のランドセルを背負った二人が笑顔でピースサインをしている。それはもう戻ることのない光景だ。

「さあここらで終わっておこう。もうすぐ検温の時間なんだ」

彼が言っただけで初めて私も時計を確認した。病室に訪れてからすでに二時間は経っている。ここに来たのが午後二時前後だったのでもう

すぐ回診もあるだろう。自分も早めに戻らねばならない。

「お話ありがとう」

「いいや、僕も久しぶりに織月と医者以外で話したからね。楽しかったよ」

手を振って別れ、急いで病院の廊下を歩く。またメイ子さんに叱られるのは嫌なのだ。そして彼の言っていたことを頭の中で繰り返し返す。

“ いつ、心が離れていくかなんて分からないよ。だから、キミはその幸運を大切にしようがいい ”

私は胸中に燻るもやもやとした気持ちを飲み込み、そつと心の中に仕舞っておく。そしてそれを後悔する日が来るのだろうか、と考えてやめた。先にできる後悔などあるはずがないのだから。

No. 4 『自由』―錯誤―

そこらにある色と同じ真っ白いシートと、真っ白い布団が真ん中から徐々に汚い緑色に染まっていく。それはやがて黒くなり、ベッドの真ん中にしがみついて永遠に離れなくなるだろう。これがあるいは、正常なものだったのなら立派な日の丸ができていたのかもしれない。

戻ることはないそれがドクドクと音を立てながら更に大きくなる円を見つめる。ある種の芸術品のようなその光景に私はうっとりとして、ただただ見つめるのだ。

熱い視線に気がついた芸術品もこちらを見て、青い顔を更に青くしながら細かい音を発する。それはとても穏やかなもので、思っていたものとまるで違ったが、私にはその方がとても嬉しく思えた。

特別な夜。

特別な相手。

特別な行為。

特別な言葉。

ああ、なんて素晴らしい響きなのだろうか。

こんなにも胸が踊る出来事なんてもう一生味わえない。

自然と口の端が上がり、緩んだだらしない姿を晒す。それを見た芸術品もまた同じように口元を緩め、そっと視線を交わせる。その瞬間は何十分にも感じられたし、もつとあつたような気もするが実際にはそこまで時間は経っていないだろう。

大きく遅れて酷くのろまな警報が鳴り響いた。

それにピクリと反応した芸術品は弱々しい手で扉を指差す。それから、間に合ううちにと自らの生命が流れる箇所 hands を添えた。一層

青白くなった顔に私はキスをしてその場を後にする。

後悔など、選択肢には入っていない。お互いにやりたいことをしたに過ぎないのだから。



それは、うろちちゃんが始めて訪問してから一月と半分ほど経った夜のことであった。

真夜中の深夜二時。いつものように悪夢へと誘われていた私はけたたましい警報ベルによって叩き起こされた。現実でも飛び起きるような唐突さだ。それが夢に反映され、 “ 偶然 ” 雲タイル通路で足を踏み外し、ベッドから落ちる強制起床が発生してもおかしくはない。

「なにになん？」

ぶつけた頭をさすりながら辺りを見回すが、自分の部屋ではなにも起きていない。当たり前だ。そう簡単になにかあつては困る。きよろきよろと忙しく視線を動かしていると扉が開き、メイ子さんが顔を出す。

「風様、少し厄介なことになってしまいましたので今夜中はこの部屋に留まり、決して外には出ないでください」

暗い顔をしたメイ子さんが一通り部屋を見渡し、何事かに気が付くと同時に「驚かせてしまいましたか？」と心配そうな声で言った。

なぜそんなことを言うのかが分からず、彼女の視線を辿るとベッドの上からずり落ちたような形で布団が私の肩にかかっていた。私自身も起床してから立ち上がりもせずに状況把握に勤しんでいたもので、端から見ればベッドから落ちたことは丸分かりである。

「あ、だ、大丈夫だよ。メイのせいじゃないから！」

「そうですか？ なら、いいのですが」

大丈夫だと言っているのに、メイ子さんはそのまま私の傍にしゃがみ込み、頭を撫でる。どうやら、怪我がないかを確認していたようで、「たんこぶはできていないようですね」と言って立ち上がる。それから、これからは起こしに来た本題のようなので私もそれに倣い、立ち上がって気持ちを切り替える。

「先ほど申した通り、今夜中はお部屋に留まって頂くことになります。お手洗いいに行かれるのでしたら私がいる今のうちに済ましておいたほうが良いでしょう。」

「分かった」

一体なにが起きたというのだろう。侵入者？ それとも患者の症状が急変でもしたか？ はたまた、どちらともだったりするのかな？ 思考を巡らして考えるが何一つ答えは出ない。説明を受けたわけでも、ましてや現場を見たわけでもないのだから。

「わかった。トイレに行く」

強制起床だからといって目が冴えわたるわけでもないし、寝ぼけ眼を指で擦る。目を擦るのは良くないことだとよく言うが、眠気には抗えない。大きなあくびで再び目元を涙が濡らしたので、もう一度それをぐいっと拭いた。それから片手を彷徨わせてメイ子さんの服の裾を掴む。一人で行ったらそのまま廊下で寝てしまいそうだったからだ。

「では風様、お一人で出来ますね？」

「うん」

流石にこの年でできなかつたら問題だ。メイ子さんは「冗談ですわ」と口元を押さえて笑っている。こちらをリラックスさせようとしてくれたのだろう。いつの間にか肩に入っていた力が抜けている。

私も少し冗談を、と思って声を出したが、「メイこそ寂しくないの？」という面白みもない言葉になってしまった。それにメイ子さんは「成長をすぐ傍で拝見できて感無量ですわ。嬉しくて涙が出てしまいそうです」と律儀に答えてくれている。つまりは「寂しくは感じず、むしろ喜ばしいことだ」と返答してくれたのだ。こちらも、ここまで想ってくれると気持ちが良いし、嬉しい。まったく、良い意味で期待を裏切ってくれる人だ。

お手洗いを出てメイ子さんのところへと戻る。手はしっかりと洗って石鹸のフローラルな香りがする。それを子供らしくいい匂いだとメイ子さんに自慢してから自室に戻った。

これから朝までずっと病室に留まっていなければならぬ。いつもなら飲み物を買うに行くくらいは許してくれるメイ子さんが駄目だと言うのだ。大人しく寝ることにしよう。

部屋の前でメイ子さんと別れる。これから二度寝に入るわけだが、未だに「腕」が取れていないのである意味幸運だったのだろうか。今夜は「腕」を取るために真面目にやろう。未だに怪物君は出現していないのでできるだろう。

ガラリ

扉を開けてすぐに私は凍りついた。今までであった眠気は吹っ飛び、背中が氷水を浴びせられたかのように一気に冷えていく。先程まであった安心感はどうにない。

なぜなら、誰かの瞳がベッドの下で輝いていたからだ。

「ひっ」と短い悲鳴をあげて慌てて口を押さえる。しかしもう遅い。なぜならメイ子さんはすでに帰ってしまったているし、自分が硬直している間に随分と遠くに行ってしまっただろう。それならば気がついていないふりをするか、この場から逃げ出すか。しかし気がついていないとするならば硬直しすぎている。これは駄目だ。なら今すぐにも逃げてメイ子さんに追いつけばいい。そう判断して逃げ出そうとするが、後一步遅かった。

「ねえ待つて」

誰が大人しく待つものか！ そう言おうとしてから気がついた。どこかで聞いたことのある声だ。扉にかけた手と、反対の手がその人によって掴まれる。怯えながら振り返ったそこにいたのは果たして、空井織月その人だった。

「おねえ、ちゃん？」

搾り出した声は震えていて、か細い。こんなときでも思わず「うろちゃん」と呼称しそうになり、慌てて言葉を変えた。

「驚かさないでよー」

「あはは、ごめんね。びっくりさせるつもりはなかったんだけど」

苦笑いを浮かべて頭を搔くうろちゃんはどこか憎めない。それが彼女の効果なのか、あるいは知っている人であったからなのかは分からないが、私はすぐに安心した。知識は沢山持っているが体に釣られて精神は子供のようになっていたのか、すでに涙目である。

しかしその安心感もつかの間。すぐに「何故今の時間に彼女が此処にいるのか」が気になりだして止まらなくなる。再び硬直した私に彼女は不思議そうに問うた。

「どうしたの？ 風ちゃん」

「ごつちのセリフ、だよ」

また声が震え、体も随分と涼しくなってきたところだが大きな声で、しっかりと逆に問い返す。はぐらかされても嫌だからだ。

「なんでこんな夜中に入院してないお姉ちゃんがいるの？ どうして？」

「アキラが心配でこっそり見に来たんだよ」

笑顔を崩そうともせずには彼女は続ける。大きな動揺もなく、しかもその言葉一つ一つを聞いても、なんら罪悪感など見当たらない。無邪気にただ笑っているだけ。それくらいしか私には分からなかった。しかも、その判断が合っているかなど分からず、全ては推測でしかない。いつもは優しいと思っていたその笑顔が、今は不気味で、怖くて仕方ない。

無駄だと思いながら、震えがこれ以上大きくならないようにカタカタと震える腕で体を抱きしめた。口を引き結んでおかないと歯が上下して音が鳴ってしまいそうだ。視線が一定に定まらず、目が泳ぐ。彼女の笑顔を直視できない。怖い、怖い、怖い。

「嘘だよ。面会時間は絶対。受付にはいつも人がいるし、こんな時間に来たら追い返されちゃう。それにお姉ちゃんくらいの年なら警察呼ばれちゃうよ」

彼女に合わせるにはならない。そう判断して徹底的に攻める。納得してはいけない。彼女の言葉に乗ってはいけない。瞑りたくなる瞼を押し上げ、泳ぐ目で彼女を見る。

私が怯えていることなんてすぐに分かってしまうだろうが、これが私にできる精一杯の虚勢だった。

「あらあら、やっぱりアナタ頭いいんだね。そこは普通、知人だったことに安心して泣きついた挙句、泣きつかれて寝ちやうってところだろうに」

この病院のことならばよく知っているんだぞ。そう暗に示して言うと彼女は嬉しそうに言った。……嬉しそうに？ どういうことだ。自分の所業がばれそうになれば普通焦るものではないのか。そんな疑問が頭の中を過ぎり、ますます彼女の笑顔が不気味に感じる。しかし、そんな些細な疑問は後回しにしなければならぬ。

「この騒ぎもお姉ちゃんのせい？」

「騒ぎって、まあ大事件かもね。人一人死ぬんだから」

胸中に衝撃が走る。間抜けにも「は？」と息が抜けるような声を出し、啞然とする。もはや私は棒立ち同然だ。震えすらも一瞬で飛び、

脱力して腕をだらんと下げた。

「どういうことだ？ 人が死ぬ？ そんな事件をこの子が起こしたというのか？ そんなのありえない。ありえてはならない。信じたくない。そんなことをしておきながら笑っている彼女が理解できない。したくない。圧倒的な悪を目の前にしたかのようなこの虚脱感。知人が恐ろしい人であったことへの恐怖感がないまぜになつてぐちやぐちやだ。」

それは単純な恐怖よりも複雑で、震えが出ることもない。全ての反応を拒否して、なにもしようとは思えなくなる。胸の奥に無理矢理錘を押し込まれたような感覚。濃く、深く、それは私の心の中に浸透し、冒して行く。

私を冒すそれはきつと、「超高校級の幸運」がなによりも嫌悪する感情。^{ぜつぼう}

「前に、話したでしょ？ 病院側がいけないんだよ？ アキラを縛り付けて、寿命まで明かしちゃってさ。そんなの知りたくなかった。知らずにと遊んで、一緒にいて、全部終わってから泣きたかったんだ。でももう無理。無理矢理延命されてる上に体をいじくられて、私は引き裂かれた」

「お姉ちゃん、ちよつと」

気持ち悪い感情を押し流し、言葉を遮ろうと思った。でも、それはできなかった。彼の言葉が蘇ってくる。織月はかなりの「マイペース」なのだ。

「だからね、解放してあげたの。これでアイツはもう自由。どこにも行けるし。私の傍に来ることだつてきつとできる。病気と、この病院から自由にしたの。アイツは最後に笑ってくれた。全部同意の上でやったこと。全部アイツとした約束なんだよ」

ああ、だめだ。彼女は笑顔を崩さない。心底、良い行いをしたのだと思っているからこそできることだ。罪悪感なんて微塵もない。それどころかそれをいけないことだと欠片も思っていないのだ。

それは狂気。誰かの隣で笑っているときと同じように笑っているのに、今の私には恐ろしさしか感じられなかった。

静かに泡立つ肌が、まだ私が正気であることを教えてくれる。彼女の言葉に揺さぶられる中、僅かな良心が耳を貸してはいけなさと訴える。

「私、嘘はついてないよ。心配してた。だからこそ自由にさせてあげた。夢は見るよ。怖い夢。そこはとつても綺麗だけどアイツがいないの。それが私が怖い夢。でもそれも今日で終わり。ずっとこの先一緒だから」

間違つた正義と言うのだろうか。翠君も決して嘘はつかなかった。甘いものが好きで、彼と一緒にいるのが好きだった女の子。

「あいつはあいつなりに一点を見つめてて、それに向かつて歩いてる。いや、走ってるのかな？ともかく、何があつてもあいつは信じられたことをそのまま貫くんだろうと思うよ。それにかんりのマイペースさだ。よつぽどのことがない限り少しも変わらないだろうね」

彼は最初から気づいていた？ なのになぜ、自分が死ぬことを受け入れてしまったんだ？ 確かにお似合いのカップルだとは考えていたが、私はこんな悲劇が見たかつたわけじゃない！

彼女が貫いている道は一般人とは圧倒的に違つてしまつている。他人との錯誤をもともせず貫き通し、そして今ここにいる。思つていることとやつていることは殆ど一致しているのにもかかわらず、微妙にズレがある。そしてそのズレが致命的なのだ。あんなにも仲の良かった翠君が “ 変わらない ” と言っているのだからきつと彼女は変わらない。変えられない。そもそも、知人でしかない私が何か意見を言つても聞き入れてはくれないだろう。

「狂つてるよ」

「褒め言葉だね。その狂いでアイツを自由にできたなら満足だよ」

涙目で訴えてももはや意味はない。これ以上彼女の言葉を聞いてはいけない。ぎしり、ぎしりと心が悲鳴を上げ、どうにかなくなってしまひそう。

流されたほうが楽なのでは？ 一瞬浮かび上がった考えを振り払い、話を翠君のことから逸らす。

「どうやって入ったの？ 受付も、警備もいるはずなのに」

「二ヶ月間なにもしてなかったわけじゃないんだよ？ そのためにアタタの病室も覚えたんだしね」

彼女はうっとりとした恍惚の表情で言う。ああ、話題逸らしに失敗したようだ。これは地雷。知らなければよかったことまで知らされてしまった。

初めて会ったときの彼女を思い出す。

きよろきよろとしながら、笑う彼女を道案内した。

何度も面会時間ぎりぎりまで訪問してきて、見かねて私の部屋に案内した。

部屋で色々な愚痴を吐いた。

何度もされる彼女の質問に疑いようもなく答えた。

分からないだろうと高を括り、父と看護師のことを話した。

私はずっとずっと利用されてきたのだ。

そうはつきり宣言されたように言いようのない悲しさに襲われる。が、それも一瞬で奪われた。

「私達、もう共犯者なんだよ。そこは分かってる？ アタタが頭いいのは最初の会話で分かった。だからね、ほら朝まで話しましょ？」

目の前が真っ暗になった気がした。暢気に話している間に逃げ道を塞がれた。知らなかったとはいえ、彼女に情報を与えていたことは事実なのだ。今日、この場で話したことは、利用されたことは誰も知らない。

私はこの人を部屋に匿うしかない。

私はそこで人生初の悔し涙を流した。どうしてこうなってしまったのだろうか？ いくら考えても、やっぱり答えは見つからなかった。

病院は人を狂わせる。今日一日だけで今までの平和の分、代償を支払わされた気がする。しかしまだ私は六歳。この病院から離れることは当分ないのだ。絶望と狂気と身に受けて苦味とえぐみを味わい、涙を流す。心が悲鳴を上げる。もう、これ以上は無理だと危険信号を出している。

やがて、耐えられなくなった私は口を押え、しやがみ込んだ。すると、彼女は先ほどまでの異様な雰囲気はどこへというくらいに変化した。私の気も知れず、心配そうな顔で近づいてきた彼女と目が合い、限界を迎えた私はえづいてベッドへ倒れ伏す。その瞬間だけ、織月の驚いた表情が目に入って少しだけ気が晴れた。

そして私は防衛本能が発する眠気に身を任せ、静かに意識を落とした。

No. 4 『自由』 —空月—

翠あきとは仲の良い幼馴染だった。

「り、織月ちゃん皆とは一緒に遊ばないの？」

「うん、ちよつと気になるからあつち行くの」

「ええ、でも……」

彼と出会ったのは幼稚園に通っていた頃。その頃、私は現実と夢の区別すらついていなかったから周りにはかなり不気味な子供に見えていたはずだ。夢の中で友達と思った人間が現実にはいないパターンなんてよくあることだが、幼かった私はそんなことも分からなくって、日常でいないはずの友達の名前を出したり、温かい夢の中で水浴びすれば海に言ったと吹聴した。嘘だと思われたのは必然だし、気味悪がられたのも必然のことだった。

そして、そんな変な子だった私の傍でいつも孤立していたのが翠だった。

「ねえキミさ、いつもここにいるよね。なにしてるの？」

いつも彼は幼稚園の広い庭の中で、決まって大きな木の木陰に入って座っていた。皆と遊ぶこともなく、誰と喋ることもなく、たった一人で。いつも変なことを言って輪から外れていた私とは違って自分から輪に入らない翠に私は興味を持ったんだ。

「キミには関係ないだろ？」

翠はそのとき、画用紙一杯に絵を描いていた。幼稚園生にしては上手すぎるほどのその絵には、元氣一杯に遊ぶ子供たちの日常風景があった。砂場で遊ぶ子、ボールを蹴ったり跳ねたりしている子、先生にくっついたまま喋りを楽しんでいる子、鬼ごっこしている子、小さな木に登ろうとしている子、そんな無茶をしようとしている子供を必死に宥めている先生、そして、つまらなそうにしている私。そこには、日常がぎゅつと凝縮されていた。

素敵だと思った。普通は幼い子供がこんなにも綺麗に絵を描くことなんて無理だと知らなかった私は、ただ純粹に見入った。

「わあ！すごいすごい、こんなに楽しそうな絵初めて見たよ！」

「え、楽しそう?」

私の言葉に、翠は途中までなんでもないような態度をしていたけれど、それもすぐに崩れた。私が楽しそうだと言った途端にすぐ嬉しそうな顔をしたんだ。それから、私は頬を染めて「でも」と言葉を続ける。

「キミも、絵の私も楽しそうじゃないね」

「そ、そう……だね」

さっきまでの嬉しそうな顔がすぐしよげて残念そうな顔に変わる。私は、そんな顔をしている彼が素敵な絵を描けるなら、笑った彼はもっと素敵な絵を描けるんだろうと思ってその頬を指で思い切り釣り上げさせた。

「ら、らにするのあ?」

「変な顔。そんな顔してすごい絵できるんだから笑ったらきつともっとすごい描けるよね?」

「は、はなひてえ」

「あはは!」

ちよつと涙目になった彼の頬から指を離して今度は自分の頬に指を当ててむにゅと釣り上げさせて笑う。私はただ彼の絵が見たい一心で笑わせようとした。困った顔をした彼は私の真似をして「いー?」つと言いながら自分の頬を上げる。それがなんだかおかしくて、私はずっと笑ってた。

「ふふっ、ねえ。キミのこと描いてもいい?」

「おお、ホント!? 描いて描いて!」

「わわっ! それじゃ描けないって!」

彼も少し頬を染めて笑ったあと、大人みたいな雰囲気なくなつて私と似た不思議な感じのする喋り方で話した。私はその喋り方が友達になれたっていう実感が湧いて好きだと思った。少しだけ偉ぶっているのに押しには弱くて、すぐに動揺する。彼と友達になれたのはそんなちぐはぐな感じが面白かったからかもしれないし、おかしなことを言う私を拒絶しなかったからかもしれない。なぜこんなにも自然に友達になれたかなんて今になつてはよく分からない。でも、

友達というのはいつの間になくなっていくものとはよく言ったものだと思います。

絵のモデルになることなんてなくて、もっぱら幼稚園の課題で両親の顔を描いたりするぐらいで絵に触れることもあまりなかった私はその絵の中に入って行くような、そんな妄想をした。絵の中に入るだなんて、まるでいつも見る夢のようで、とても身近だったけれど遠かったもの。そんなだから感動して思わず翠に抱きついちゃったわけ。

「じゃあね、ちえーんそー持った私描いて！」

「え、なにそれ？」

「こう、格好良いやつ！」

当時見たホラー映画の影響とか、アニメの影響とか、戦隊物とか、早いうちから格好良いものの魅力に夢中だった私はない知識を振り絞って彼にその格好良さを教え、語った。今思えばものすごく迷惑だったんじゃないかって思うけれど、今は笑い話になっているから別にいいと思うんだ。それに、このときは知識不足だし、見たことないから駄目って言われちゃったけど、ちゃんと調べて描くって言ってくれたから。

「そっかー、じゃあまた今度調べたら描いてね」

「そうだね」

「よっし、ならこのポーズはどう！これとこっちどっちがいいかな！」

「うーん、じゃあ最初のやつで」

それから、翠とは急速に仲良くなっていた。

作り方を教わった甘いお菓子を頑張って作って持っていたり、お気に入りのプラモを持ち出して見せたり、絵本を読んで演じてみたり、水遊びして虹をつくったり、それぞれの格好良いと思うものについて話してみたり、絵のモデルになりながらいつもお互いに好きなものを話しながら過ごした。

「ケーキ作れるようになったんだ」

「へえ、織月がねえ」

「私だって女の子らしいところぐらいあるんだよ」

大人には背伸びした話し方をする翠の態度に少し憧れたりもしたけれど、中学校になつたら離れ離れになるかもしれないことを聴いてからは真逆のことを願うようになった。子供のまま、翠と一緒にいたい。ずっと遊んでいたい。そんな希望があった。

小学生になつて、翠は写真にも手を伸ばして沢山思い出を切り取つて残した。同じ絵関係のクラブに入つて放課後の遅くまでずっと絵を描いたり、描かれたりを繰り返したし、体育が苦手な彼をからかったり、勉強が苦手な私は逆にからかわれたりして過ごした。

絵も、写真も、その場その場を切り取つた大切な思い出だ。

入学式のときはご両親が写真を撮つてくれたから、二人で写つている珍しい写真が撮れた。入学して少ししてから桜並木の間を走り回つて花弁を追う私が写真に収められたし、五枚も一気に花弁をキャッチした瞬間を撮つてもらえた。そのあと描いた絵には手を広げて桜並木の中を走る私を描いてもらえたので、下手だけれどその絵に続くように私の隣を歩く翠を描いた。

健康診断はドキドキしたけれどあまり面白くなくてメモ帳を使つて絵しりとりをしたつけ。身長が女の子である私のほうが高くて自慢もした。そのあと翠は牛乳を二本も飲むようになったので私も張り合つて沢山飲んだ。

遠足じゃ、自由時間のとときとお昼休みのとときを二人で景色のいいところを探し出して渡り歩きながら簡単な絵を描いた。翠は学校に帰つてからその絵を完成させてコンクールで優勝してた。やっぱり翠の絵はすごいんだと胸を張つて言えたけれど、女の子が周りに増えて絵をねだるようになったので少し複雑だった。でも、すぐに翠が私の傍に来てくれたのでもやもやするものも全部全部吹き飛んでいった。

プールでは運動が苦手な彼に横で教えながらいつかのときみたい

に大きく水飛沫を上げて遊んで、二人して先生に怒られた。運動会ではビリになる翠の分を挽回するために一位を何個ももぎ取つた。一緒にお母さんと作ったお弁当を食べて、卵焼きが私作だと知つて絶賛してくれた。結局運動会自体は負けちゃったけど、そのあ

と反省会と言ってさらにお菓子を作って一緒に食べた。

学習発表会ではやっぱり翠の描いた絵が褒められていて私まで嬉しくなってしまうた。学芸会で赤頭巾になるか、狼になるかで揉めて翠が赤頭巾で、私が狼役になって可愛い姿を絵と写真にして残した。恥ずかしそうに「なんでボクが」っていいながら赤い頭巾を被った翠は女の子の私よりも可愛くて少し嫉妬しちやったくらい。

この頃にはもう夢と現実の区別がつくようになっていて、夢の世界での行動範囲が劇的に増えた。色々なものを経験する年頃だったからかもしれない。その中には翠と行った綺麗な公園や場所なんかもあったし、絵の中のような場所もあった。中には翠の絵が沢山飾られている場所もあって、まるで美術館のようなところを見つけて目も覚まさずにと眺めていたからその日は盛大に寝坊した。

後日何度も冒険しているうちに似ても似つかないけど雰囲気だけはそっくりで絵を描いている人を見つけて話しかけた。そうしたらやっぱり彼だったみたいで、思い出の中と同じように偉ぶった口調で話した。

ときどき話が噛み合わないこともあったけれど、現実でも夢でも彼に会えて幸せだった。そう、あのときまでは。

「嘘でしょ翠ー」

「あ、ごめ、りづき……」

彼の血が緑色であることはとっくに知っていた。怪我の手当てはいつも私がして、周りには隠していたから。そうしなければ昔の私のように彼が一人になってしまおうと思ったから。私は気持ち悪いとは思わなかった。なんだか映画の登場人物みたいで格好良いとか、そんな馬鹿みたいな発想が出てきて怖いとは思わなかった。

彼の両親は殆ど家にいないから風邪をひいたときは私が隠してある鍵を使って家の中に入り、門限の時間まで看病した。でも、その日はいつもと違った。そのとき彼が罹ったのはただの風邪じゃなくて、流行っていた性質の悪いもので、寒い冬だというのに布団もろくにかかっていない状態でいたから悪化してしまったんだと思う。救急車

を独断で呼んで、翠は無事病院に運ばれたけど私はそのときの決断を後悔するしかなかった。

翠は入院して、もう一生病院から出られない。そう聴いたのは学校で説明があつたときだった。随分遅れて知らされたそのことに私は焦つた。だから学校が終わつてすぐに帰つて、暫く話すのも遠慮していた両親に問い詰めた。そしたら、彼の血のことを訊かれた。知つていたのかと。正直に答えればもう二度と会わないように言いつけられて、でもそれじゃあ納得できなくて今まで以上に喧嘩した。ただでさえ夢見がちな私に辟易していた両親も限界だったのかもしれない。それから朝と夜に挨拶をして、最低限のことを日常で話すだけでも殆ど話すことはなかった。

日々足りないお小遣いで買い溜めた折り紙で鶴を折つて、誰に教わるでもなく千羽鶴を作ろうとした。でもお金も時間も足りなくて結局中途半端なまま病院へお見舞いに行くことになつちやつた。

「よかつたら案内しようか？」

そんなときに出会つたのが彼女、凧ちゃんだった。

最初はなんだこの子、つて思つただけだった。でも、翠のことを知つているみたいだから便利かもしれないなんて軽い気持ちで案内をお願いした。話についていけてなかったので返事がおざなりになつちやつたけれど彼女はなにも気にしていないようだったのですぐあとに続いて歩いた。

彼女の印象は正直、あまりよくなかつた。白い髪、藍色の目。違和感のある笑顔を受付の人に向かつて振りまき言葉の端々にあるどこか偉そうな口調。それはまるで大人のように、そうでない中途半端な複雑なもの。

でも、話を聞いているうちにそうも思わなくなつた。彼女はどこか翠に似ているのだ。子供っぽいんだか、大人っぽいんだか分からない変な子供。なんだか社交的な翠みたいで面白かつた。それに、夢の話振つてきたときの表情はどこか怯えている子猫のようで、私と同類なのだとすぐに分かつた。だから表面上の綺麗な夢だけをつらつら

と並べ立てて安心させる。

周りをきよときよと確認しながら歩く私は不思議に写っていないだろうか、変に思われていないだろうか、そんなことばかりが気になってしかたなかつたけれど必死に飲み込んで我慢した。

「お見舞いなんだよね、その子は大丈夫なの？」

「翠のこと？ 点滴で血を綺麗にしていれば前よりずっと良くなるみたいよ。その代わり病院からは出られなくなっちゃったけどね。…… お医者さんが許してくれないんだ」

けれど、不意打ち気味に訊かれたその言葉に少し本音が混じってしまったのを言ってから気がついて、怪しまれていないか焦った。けれどそんなことはただの杞憂だと彼女の表情を見て安心する。

「久しぶりに会うから楽しみなのよ」

取り繕いは間に合ったようでもうになかった。ほっと胸を撫で下ろし、またきよきよと周りを確認しながら歩く。

「織月お姉ちゃんまた来てくれる？」

そんな話をしてくるということは目的地はもう少しなんだろう。賢い彼女にはまた会いたい。そう思って本日最後になる言葉を出す。

「うん、またお話できたらいいね」

言っつてすぐ目的の病室についた。

「ついたよ。またね、お姉ちゃん」

「うん、ありがとう。助かったよ」

そう言っつて互いに手を振って別れた。

「さて」

頬を叩いて病室に入る。

「やあ、織月」

「久しぶり、翠」

泣きそうになる感情を鎮めて椅子を引っ張り出し、床頭台に鶴を置く。

「思ったよりも元気そうよかったよ」

「そんなことはないよ。この通り、点滴してるし」

ぽつぽつと、そんなことを話してお互いに黙る。いつもならここで

馬鹿笑いしながら色んなことについて語り始めることができるというのに、なにも思い浮かばなかった。

「心配、した」

「うん、心配かけたね」

「ずっと学校来なくて、つまんなかったんだからっ」

「ボクも、ずっとつまらなかつたよ」

律儀に彼が返してくるもんだから抑えこもうとしていた何かが決壊して、溢れ出した。もう、どうしてくれるのさ。

「なんで？　なんでずっと病院から出れないの？　変だから？　だつたら私だつて！」

「いいんだよ、そんなに自分を追い詰めないでよ。織月らしくもない」

「変なのに」と続くはずだった言葉は彼の優しい声で遮られた。困った顔で、穏やかに私を宥めてくれる彼のベッドに顔を押し付けて泣く。そして、まるで子供あやすかのように膝の上に乗った私の頭を撫でる翠に縋りついた。

「翠、長く、生きられないって、皆言うのっ、違うよね？　そんなこと、ないよね？」

「……　大丈夫。大丈夫だよ。ずっと一緒にいるから」

「わたし、アキラに会えなくなるの、やだあっ」

「ボクだつてキミに会えなくなるのは嫌だよ。ほら、落ち着いて。ボクはここにいるから、ね？」

みつともなく泣いて、男の膝の上で抱きしめられて、ひたすら互いに寂しさを紛らわせ合った。言おうと思っていたことも上手く言葉にできなくて、保留にしてまた今度会うことを約束して帰った。

そして次の週も、その次の週も、毎週のように病院に通い詰めて、夙ちゃんの病室でお茶したあとにとうとう言えなかつたことを吐露することにした。拒絶される覚悟もしていたし、嫌われる覚悟もしていた。私の我侷に彼を付き合わせる道理もないと知っていたけれど、我慢ならなかつた。理性もなにかもが壊れてそれしか選択肢が思い浮かばなかつた。

一生翠は病院で過ごし、ひっそり死んでいく？ 自分が彼の傍にいられなくなる？ そんなの嫌だ。だったら、だったらいつそ彼を自由にしたい。そうしたら、ずっと傍にいられるよね？ 夢の中ならばずっと一緒になれるだから現実から夢の中に彼は移動するだけ。そしたら病院なんかで会う必要もない、理不尽に泣くこともない。

「いいよ。それが織月のしたいことなんだつたらね」
「え……」

拒絶されると思っていた。嫌われると思っていた。そうすれば私は立ち止まれたのかもしれない。いや、止められることを期待していたのかもしれない。でも、駄目だった。許容されてしまった。

そのとき、ギリギリで踏みとどまっていた何かが壊れた気がした。

「そっか、じゃあ明日の夜。いいかな？」

「そうだね、じゃあ明日」

「約束ね？ 絶対だよ？」

「うん、約束だ」

計画はすぐに実行された。深夜、あらかじめ確認していたカメラのないルートを通ったり、隠れて進んで病室に辿り着く。

彼はその日、起き上がって私を待っていた。ベッドに座り、窓から見える空を眺めている横顔が真剣な表情をしていて、病室の電気がついていないお陰で月の光に照らされる姿はどこか神秘的だった。

「翠、来たよ」

「ん、いらっしやい」

はつとしたようにこちらを向いた彼は優しく微笑んで手招きをした。私がベッドの傍まで行くときいつもする動作だ。

「いよいよだね」

「うん、これですつと一緒に」

彼の言葉に頷いて笑う。

特別な夜。

特別な相手。

特別な行為。

特別な言葉。

こんなにも胸が踊る出来事なんてもう一生味わえない。そんな気がした。

「織月、ずっと一緒だ」

「うん、ずっと一緒だね」

彼に刺さった血を元に戻すほうの針を力任せに引き抜き、ベッドに放る。本当は離さなくてもよかったのだけど、翠自身がばれないようにするにはそうしないと駄目だと言っていたから実行しているだけにすぎない。

流れ出した緑はベッドを徐々に侵食して大きな緑色の日の丸を作り始める。座った体勢から力が抜けて倒れこんだ彼は薄く笑って掠れた声で言う。

「最後の、絵だよ。キミへの、プレゼントっ、だから、よく見ておいて、ね」

「うん」

か細くて、苦しそうな声で翠はそう言った。だけれど、私はそれよりも早くに上の空になっていた。彼自身が美術となったその光景に見惚れていたからだ。私は笑って、彼も緩く笑った。幸せだった。これでずっと一緒。そう確信して最後に軽くキスをして背を向ける。彼の生涯最後の作品を完成するまで見られないのは残念だけれど、私が見られるのはここまです。

「大好き」

「っ……も」

きつとこれは私の生涯の中で、最初で最後の告白になるんだと思う。それを彼に捧げるのに迷いはなかった。目を瞑ったままの翠から同じく、返事が返ってきて想いが通じたことに頬を染めて顔を覆う。嬉しくて嬉しくて涙が出た。

それから、警報が鳴ってすぐに置いてあった思入学式撮った二人揃った写真い出の品を懐にし

まって走った。警報でやってくる病院関係者が絶対に来ない方角へ。

そして目的地についてひとまず安堵する。顔には笑みが浮かんだままで、一人個室に入つてにやにやと彼の写真を眺めた。

やがて、廊下から音がして彼女が戻ってきたのを知ってベッドの下に隠れる。きつと賢い彼女はすぐに気がつくけれど。

「ひっ」

「ねえ待って」

短い悲鳴をあげて逃げようとする彼女の背中に声をかける。

「おねえ、ちゃん？」

震えた声で確認をしてくるのでくすくす笑ってベッドの下からこんにちは。

「驚かさないでよー」

「あはは、ごめんね。びっくりさせるつもりはなかったんだけど」

驚かす気でベッドの下に隠れていたのだからこれは真っ赤な嘘だ。それから何かに気がつき、考え込んだ様子の彼女に自然と口の端が吊りあがり、心の中で「さすがだね」と呟く。それからわざとらしく問いかけるの、「どうしたの？ 風ちゃん」って。

「こっちのセリフ、だよ」

再び震え始めた彼女の声に笑みを深くして黙ってその理由を聞く。「なんでこんな夜中に入院してないお姉ちゃんがいるの？ どうして？」

「アキラが心配でこっそり見に来たんだよ」

またわざとらしく彼の名前を呟いて頬に手を当てる。笑ってる。ああ、私笑ってるよ。寝るのが楽しみで仕方ない。早く彼に会いたい。でも、今夜はオールナイトしないと翌日起きる前に見つかったらここにいることを怪しまれちゃうから我慢我慢。

風ちゃんは震えながら、気丈に私へと言葉を返してくる。

体を抱きしめちゃうくらい怖いはずなのに、とつても強い子だ。でも、だからこそその姿が翠と重なってしようがない。偏屈で、虚勢を張っていて、融通が利かなくて、偉そうなのにどこか脆くて、繊細。

目線を泳がす彼女を真つすぐと見つめながら返事を待つ。きつと風ちゃんは期待通りに応えてくれる。怯えながらも、声だけははつきりと強く保って彼女は言った。

「嘘だよ。面会時間は絶対。受付にはいつも人がいるし、こんな時間

に来たら追い返されちゃう。それにお姉ちゃんくらいの年なら警察呼ばれちゃうよ」

「だいせいかいー！」

心の中で拍手して首を傾げる。さすがは凧ちゃん。彼に似てるだけはあるよね。私がいっぱい考えてできた計画も、すぐに分かっちゃうみたい。本当に子供っぽくないな。でも、そこがいいんだよね。

「あらあら、やっぱりアナタ頭いいんだね。そこは普通、知人だったことに安心して泣きついた挙句、泣きつかれて寝ちやうつてところだろうに」

何度でも称賛したい。ああ、幼いのに本当に賢いのね。まるで昔の翠のよう。だから、私は “変” な彼女が好きなのだ。

「この騒ぎもお姉ちゃんのせい？」

「騒ぎって、まあ大事件かもね。人一人死ぬんだから」

あっけからんとして言い放つと案の定彼女は声を漏らしてとても驚いた。先ほどまでぎゅっと抱きしめていた腕を下してぼーぜんとしちやうくらいに。こんなことを平然と言い放つ私がおかしいのは自覚済み。でも止めることなんてできない。あのとき全部壊れちゃったんだもの。

ビデオを一時停止するように立ち止まった彼女に私は続けた。

「前に、話したでしょ？ 病院側がいけないんだよ？ アキラを縛り付けて、寿命まで明かしちゃってさ。そんなの知りたくなかった。知らずにはずつと遊んで、一緒にいて、全部終わってから泣きたかったんだ。でももう無理。無理矢理延命されてる上に体をいじくられて、私は引き裂かれた」

「お姉ちゃん、ちよつと」

「だからね、解放してあげたの。これでアイツはもう自由。どこにも行けるし。私の傍に来ることだつてきつとできる。病氣と、この病院から自由にしたの。アイツは最後に笑ってくれた。全部同意の上でやったこと。全部アイツとした約束なんだよ」

夢中で話して、恍惚に身を任せて、嫌われようが拒絶されようが構わないと想いを全部彼女にぶちまける。私の想いが人に理解されな

いだろうことなんて分かってる。昔からそうだったから。でも、ぶちまけられずにはいられなかった。全部全部、彼に少しかけ似ているように似ていない彼女には知っていてほしかった。知っているだけでいいんだ。

この気持ちをずっと押さえつけて生きるのはとても苦しい。現実世界では翠がその役をやってくれていたけれど、もう夢の中でしかぶちまけられないから。だから “外” で知っている人がほしい。たったそれだけのことなのだ。

「私、嘘はついてないよ。心配してた。だからこそ自由にしてあげた。夢は見るよ。怖い夢。そこはとつても綺麗だけどアイツがいないの。それが私が怖い夢。でもそれも今日で終わり。ずっとこの先一緒だから」

夢の中ならいつでも会える。話もできるし、思い出も語れる。だからその素晴らしさを彼女に説いた。だけれど、やっぱり私は昔から変わらず変な子のままなのだ。怯える彼女に安心させようと思っても、さつきからずつと笑顔は浮かべたままだし、それ以外に安心させるような表情を私は知らない。

そんなこんなで私が考えているとき、凧ちゃんは言った。

「狂ってるよ」

「褒め言葉だね。その狂いでアイツを自由にできたなら満足だよ」

深くなる笑み。ああ、やっぱりそうなんだ。自覚はしていたけれど、やっぱり私は変な子なんだ。改めようだなんて絶対思わないけれど。だってそれが私。夢を渡り歩く狂った姿なのが私の本質。

そして、今まで誰も言わなかったことを言つてのけた彼女に拍手を贈ろう！ 褒めてるんだよ？ それを指摘するのは簡単なことじゃないからね。

「どうやって入ったの？ 受付も、警備もいるはずなのに」

「二ヶ月間なにもしてなかったわけじゃないんだよ？ そのためにアナタの病室も覚えたんだしね」

本当は、最初からこうするつもりで案内の最中監視カメラの位置を記憶していたし、それがただのハリボテでしかないことも知った。こ

の病院は狂っているから、カメラが致命的な傷になりうることだってある。

一度夜中に忍び込んだけれどそれがばれることもなかったし、何度だって同じことをして確認した。私にはこんなことでしか確認することができなかつたけれど、もつと大人だったら火をつけて確実な確認をしてみたりしたかもしれない。そんな日々の中でたまたまお茶に誘われ、チャンスだと思つて尻ちゃんの部屋がどこだか覚えた。

それを確かなものにするのに約一ヶ月。一週間に一度とか、放課後に少しだけとかしか来れなかつたことを考えると、きつと上々だよね。

「私達、もう共犯者なんだよ。そこは分かつてる？ アナタが頭いいのは最初の会話で分かつた。だからね、ほら朝まで話しましょ？」

こうやつて私を部屋に匿っている時点で第三者が見れば私たちは共犯者だ。彼女は逃げられない。だけれど、一つだけ誤算だったのは彼女が私に耐え切れず、気絶してしまったことだろうか。

頭を撫でてベッドに寝かせ、私はただひたすら椅子に座つたり、ベッドの端に座つたりして時間を潰した。そして、翌日の早朝になつてから個室を抜け出して病院から脱出する。

運が良かったのか、少なくとも一回くらいは見つかる覚悟をしていたというのに誰に咎められるということもなく帰路に着き、誰もいない家に帰った。私が計画を進めたのは丁度両親がいなくなるタイミングだったからということもあつたからなんだ。

「はいふう」

ベッドに倒れこんで羊を数えるまでもなく、私はすぐに睡魔に誘われ夢の世界に旅立った。

探し回つて、歩き回つて、どこにいるかも分からない彼を病院のような場所でもうやく見つけることができた。でも、やつと見つけた彼

は無意識のうちに消えていつてしまった。

私が、この手にしたチエーンソーであのときの巻き返しのようになりつけてしまうからだ。何度も何度も、どんなに話そうとしても私の手は勝手に動いて彼を血だらけにしてしまう。

凶器も、方法もまるで似ても似つかない光景のはずなのに緑色の日の丸だけはとてもよく似ていて、それも途中までしか見れずに何度目か分からない夢から覚めてしまう。

なんで？こんなはずじゃなかったのに。

どうして？ 何度会いに行っても話してくれないの？

ねえ、お願い答えてよ翠。話してよ翠。

病院にいた彼に話しかけるのは諦め、美術館にいる彼に話しかけてみる。それでも彼は絵を描くだけで、しつこく話しかけて出て来た会話はやはり噛み合わない。

その会話が過去にされたものだと気がついて今更ながらに愕然とした。

これも、あれも過去の彼。じゃあ今の翠はどこにいるの？

なんでなんでなんで、どうして「また会えたね」って言ってくれないの？ どうして笑ってくれないの？ どうして抱きしめてくれないの？

後悔なんてしてないのに、どうしてこんなに苦しいの？ 悲しいの？

返事をしてよ。いつもみたいに偉ぶって話してよ。

キミの色んな話が訊きたいよ。

ねえ応えてよ。

どうしてこんなに胸が痛いのか教えてよ。

ほら、いつもみたいにさ。もったいぶってないでほら。

「応えてよお……」

どんなに叫んでも、縋りついてても、もう二度と彼が私に笑いかけてくれることはなかった。

No. 5 『怪物』―植物―

ふと気がつくところこそはエントランスホールだった。

ああ、私は気絶してしまったんだな。そう理解して頷く。あんな無邪気きよさを目の当たりにして正常でいるほうがおかしいのだ。私はいたって正常である。優しいお姉さんだと思っていた彼女の豹変は、それだけ私にとってショックな出来事だったのだ。その場に膝を抱えて座り込み、俯く。少しくらい感傷に浸っても許されるだろう。

夢の中では案外冷静な自分。今は、たとえこの世界が現実を投影する。現覧會会場 “ だとしても、心地よく感じてこの場所を愛おしく思ってしまう。それほど精神的に参っているのだ。こちらに逃げ込んでしまったら最後だ。とにかく、この気持ちを切り替えて探索しよう。

今まで手に入れたのは “ ほうき ” と “ 潜水服 ” 、それに “ ジョウロ ” だ。ほうきはともかく、潜水服は前日の夢で手に入れているし、ジョウロは一度下の扉に入ったことがあるのでついで見つけている。エフェクトのジョウロとユウレイは双子の霊から手に入れることができる。仮にユウさんレイさんとしておこう。その片方、分け目が左のユウさんからジョウロを受け取ると、自由に雨を降らせられるようになるのだ。

どうやらエフェクトはそれを身につける、あるいはそれに成っている自分を想像すれば使うことができるようだ。これは魔女さんに教えてもらったのでちゃんと身につけている。最初はアイテムか何かに変化するのだと思っていたが、自分自身に備わった力になるらしい。

こう、片手を横に広げて召喚！ みたいにするといいらしい。

私が今回手に入れようとしているのは “ 植物 ” “ “ 内臓 ” “

“ 機械 ” だ。予定としては一つくらいは確実に手にいれておきたいと思っている。これらを狙う理由は単純。その効果ではなく、た

だ単に覚えやすいところにあるからだ。エントランスに移動できる
“腕” は便利だが、少々探索するのが面倒なところにある。落ち
着いたときに取りに行くほうがいいだろうと私は判断した。

まずは植物だ。あれならまだ狙えるだろう。そう決心して私は立
ち上がり、エントランスから左に行つて着くアパート（今は病院）に
向かう。そこからエフェクト “植物” をとることができる。左側は
一番最初に行つた、あの気持ち悪くなるサイレンが鳴り響く場所だ。
サイレンの意味はほぼ間違ひなく警鐘で合っているだろうが、攻撃性
を表す殺傷エフェクト “鉄パイプ” がまだ存在していないので無視
するに限る。恐らく、ここに鉄パイプが現れてしまったとき。それが
正常な私とのお別れを選択する場面になるだろう。私が大往生する
まで現れないことを祈ろう。

うるさい世界を歩き回り、トンネルに入る。そして病院のエントラ
ンスに繋がり、周りを見渡す。前来たときは一直線に屋上へと向かつ
たが、今雲タイル通路に用はない。なのでもう一つの入り口を探す。

暫く歩き回つた結果、現実で自室であろう位置の扉が開きっぱなし
になっていたので入る。中にはベッドもなく、床頭台もなく、真ん中
に白い花が咲いているだけ。白い花は百合のように細長い。葉も細
く、汚白色に濁っている。茎も大分細くて頼りない。これがなにを表
すかなど分かりきつたことだ。……そのためか少し気に食わない。
踏み潰してやりたい衝動に駆られたが、足を踏ん張ることで押し込め
た。色んなゆめにつき派生でも自分自身を示唆する象徴を壊すと自
分に返ってくるし、死ぬ可能性もあるから手を出したくない。強制起
床の元になりそうなものは避けるに限るだろう。

暫く唸るように白い花を睨みつけていたが、本来の目的を思い出し
て再び周囲を見渡す。すると、すぐ近くに現実の部屋ならばあるはず
のない紫の扉を見つけることができた。病室の扉に似つかわしくな
いドアノブ式の扉で、どこかで見たような紫の下地に濃い藍色の模様
が私を威圧する。

ただ似ているだけで、実際に見たら少し違ふところがあるのだが、

私には “ うろつき ” の服にしか見えなくて絶句する。それでも今回はこの先に向かうしかないのだ。まったく、毎度毎度嫌な思い出を突きつけてくる夢だこと。

「おらあつー」

頬を叩いてドアノブを掴み、開く。少々乱暴になった上になんとも女らしくない掛け声になったが気にしない方向で。

開いた先にあつたのは思い出したくもない、あのホルマリン漬けだらけの廊下だった。無限に続いているような錯覚さえ覚えるような、とても長い廊下だ。一步、歩く。そして後ろを見ると案の定、先程見たものよりも丈の高い花が咲いて戻れなくなっている。一步、また一步と進み、次第にその速度は上がっていく。そして、手術室の前で今度は前方にも植物が咲き誇っていき、進めなくなってしまった。

この植物は私の背よりも高く、複雑に入り乱れていて強引に通ろうとしても石のように固くて体が隙間に入らない。正規の手順を踏まないやはり通ることはできないようだ。

通れないことはある程度予想がついていたことなので冷静に手術室へと入り、奥にある手術台の上に咲いた真っ赤な花を触る。触るだけでゆっくりと萎んでいったので、焦れた私は両手で台へと押し付け、押しつぶしてやった。先程白い花を踏み潰せなかった鬱憤を晴らし、すつきりして手術室を出る。

そして全ての花がリセットされたように引つ込んだ廊下を再び進んでいく。

突き当りの部屋に入り、真っ白な壁を網目状に張った植物達が私を迎え、目に悪い光景に少し気分が悪くなった。さらに奥の部屋へと進み、ぽっかりと空いた穴を潜ると出迎えてくれたのは一層不気味で二メートル近くもある巨大な白い花と、それを囲むように咲いた四つの白い花だ。…… 恐らくはとても身近な人達を表しているのだろう。これは踏み潰してはいけない。

自分の夢なのだからそれがなんであるかなど簡単に想像がつく。順番に身近な子供たちを思い出して踏まないように中央へ進み出る。

「貰うね」

真ん中で咲いている大きな花の茎へと手を当てる。するとみるみるうちに指先から腕、体、顔へと伝播するツタ。新たな恐怖体験だったが不思議と痛みはなかった。

髪の毛の左側に赤い花が咲き、私を可愛らしく装飾してくれたが、それも最初だけだ。右目が突然真っ赤に染まり、浮遊感を感じるようになる。

何が起きているか大方予想はついていたが、手で目元を確認する。

手元の感触から分かったのは花が目をくりぬき、突き出してきていることだ。痛みがないのは本当に不思議だ。

次に、足元を覗き込んで確認すると、足の変わりに植物の根が生えているのが分かった。原理は夢だからとしか言えないが、なんの不由もなく目も見えるし、歩くこともできるので問題ない。

だが、痛みはなくとも少し気分が悪くなったのでほうきを持った自分の姿を思い浮かべる。すると一瞬目の前が真っ白になってから足や目の機能も元に戻り、着慣れた魔女の服を纏い、ほうきを手に持っていた。頭の上でまとめた白髪に赤いリボン。魔女の宅急便のような衣装はかなり可愛いので私もお気に入りだ。

「これがしつくり来るよね」

手をグーパーして感触を確かめる。何ら問題はない。

そして元来た道を辿って行く。ここで一方通行だったことを思い出したのだが、手術室に入ってみると、再び赤い花が咲いていた。「ラッキー」と自嘲気味に呟き、咲いた花を潰して植物を消す。本来は元来た道に戻ることはできないのだが、なぜだか全ての植物が消えている。

思わぬ幸運に鼻歌を歌いながらほうきに乗り、最初のエントランスホールに戻って来たあたりで一息をついた。

「これも試さないかね」

エフエクトには組み合わせることで更に効果を発揮するものがある。ゆめ2つきなんかではこれが顕著で可愛いものがあるのだ

が、flowで出る効果は、やはり見た目的によりしくないので気分がいい使い方ではない。が、ここはやっておくべきだろう。

右手を差し出してイメージをすると握った手の中に硬質な感触が現れ、ずしんと重くなる。手元に現れたジョウロを見つめ、そういえば一度も使ったことがなかったなと思って傾け、水を撒く。が、ジョウロの先から水は出ず、代わりにポツリ、ポツリ、と頭上から雫が落ちてきて小雨が降りだした。

ジョウロは雨を降らすエフェクトなのだ。不思議と塗れた感じがせず、本当に演出だけの効果しかないようだ。ジョウロを二度、三度振って最終的に豪雨となったが四度目にジョウロを振るとぴたりと雨が止んだ。四度で効果は打ち止めだ。

あまり気は進まないが、ファンなら全ての効果、イベントは見るべきだろう。もう一度ジョウロを振り、雨を降らせてから目を瞑り、植物が自分の体を覆うのをイメージする。

「へっくしー」

右手から程よい重さが消え、身体中が途端にかゆくなり、鼻がむずむずしてくしゃみをする。思わず目を開けると右目の視界が赤く染まり、どこから生えてきたのかわさわさと植物のツタと葉が腕や足、はたまた体まで覆っていく。そして浮遊感。足が完全に植物に取り込まれ、足と同じ太さのツタになる。……決して足が太いわけではない。ツタが太いのだ。子供の体で、さらには人体実験でやつれている部分もある。栄養はメイ子さんのおかげで全く問題がないが、痩せているほうだ。むしろ痩せすぎで少し不健康。話が脱線した。

この状態で雨を浴びて、ツタが生長するところを想像する。すると落ち着いていた植物達が動き出し、右の視界が完全に塞がれ、巻かれている植物がさらに増えてまるでギリースーツのようになる。

いや、そこまでではないか。手で右目の辺りを触ると赤い花が完全に眼窩から飛び出してきている。痛覚が反応せず、違和感だけなのは夢だからなのか。

やはりあまり見た目はよろしくくないな。気分もよくない。見た目は幻想的なんだか、気持ち悪いんだかなんとも言えない。

よし、次に行こう。テンションが下がったなら新しく探索したほうが楽しいだろう。

この夢の中は楽しいとはお世辞にも言えないのだが…… 気にしないでおこう。目指すべきは下の通路。 “内臓” を取りに行こう。うん、またまた気が進まない。まあいいか。

植物状態を解除してほうきを手に持つ。普通の植物はまだいいが、生長してしまうと動けなくなるのだ。

エントランスから右手に向かい、扉を開ける。右にあるのはとても楽しい音楽が流れる音楽の世界だ。ここにあるはずのエフェクトはまだない。それはもう確認済みである。

用があるのはこの先で、ミュージックボックスらしき物体を横目にジグザグに移動しながら適当に散策し、奇妙な赤い塊を二つ見つける。今まで見てきたミュージックボックスとは違った歪な形をした赤いオブジェクトだ。これの間に入ると暗くなり、通り過ぎたらすぐに周りの景色が変わる。

静動脈通路。私は血管通路と呼んでいる場所だ。赤と青のタイルが所々並んでいたりと、螺旋状になっていたりする場所で、歩を進めるとハート型にタイルが配置された広間がある。この道の模様が血管通路と言われる所以だ。

そこを通ってまたもや現れた赤いオブジェクトの間を通ると、またワープした。この赤いオブジェは赤血球を表していたのかもしれない。

何故なら、繋がっている場所がまっしろしろすけな病院前なのだから。

いつも行く病院とは違い、その外観は白いだけでどこまでも高く続

いている壁しかない。そこにぽつかりと入り口となる穴が空いていて、その近くに人のような形をした心電図が二つと、点滴が二つの計四つの物がある。

心電図に触れるとピーン、となんともいえない間抜けな音を立ててその生存を知らせる。しかし、片方は反応が悪く、ずっと真つ直ぐな線が走っているだけでうんともすんとも言わない。つまりは誰かが死亡しているということだろうか。一瞬緑色の髪の毛が頭の中を過ぎり、思考停止させる。

嫌な思い出を一旦忘れ、整理するために来ているのだから仕方ないことだとはいえ、なんだか複雑な気分になった。苦虫を噛むような気分とよく言うが、こういうことなのだろうか。

思考停止させた頭を前に向け、音を出さないオブジェは無視して中へと入る。中は思ったとおり、十字路のようになっていて、それぞれの道に赤い斑点が彩られている。この法則は知っているので迷いはない。しかし、これはゲームではないのでいちいちぶちまけられたケチャップの数を数えに向かわないといけないのが面倒だ。そして、一番汚れている廊下を突き進んでいく。誰か掃除してください。

廊下を抜けたら、もう一度先程のような怒トデカイ壁にぶち当たる。今度は心電図が四つもあって大盤振る舞いだ。だが、点滴は二つだけ。心電図はどれも正常に動いているようでないよりだ。そして一番に気になるのが、その壁が真つ白なだけではないということだ。入り口から浸食するように流れ出るケチャップと、盛大にペンキをぶっかけたような入口周り。

現実逃避もこの先に行けば無意味になることがよく分かる。なのでアレをケチャップと言うのはこころでやめておこう。ありゃ血だ。どこをどう見ても血にしか見えない。ドロツとした粘液で、固まりかけているのにいつこうに黒くならない。中途半端な赤。臭いはしないが、見た目はよろしくない。

「ふー……」

息を吐き、一旦心を落ち着かせる。それから一步、一步踏みしめて穴の先へ進む。血は踏んでも滑らず、まるで土砂降りの後の地面のよ

うなぶよぶよとした柔らかい感触があるだけだ。
潜る。

途端に耳につくおどろおどろしい呻き声のような音と、視覚一杯に広がる赤黒い世界。暗い中、光るように赤い道が広がっていて、そこかしこに血溜まりに沈んだ点滴や豆腐ベツトがある。耳を塞ぎながらさつさと通り抜けようと、ほうきに乗る。今までは雰囲気を楽しもうとほうき片手に歩いていたが、ここは楽しむ気すら起きない。ほうきに横乗って進み、次への入り口を見つけた。

それは海面から顔を出したジョーズの白色の違いで、大口を開けて獲物が飛び込むのを今か、今か、と待っているように見える。いや、既に獲物がかかった後なのかもしれない。なぜなら、尖ったギザギザの歯から一定の間隔を置いて血が滴っているのだから。

「……」

モルボル同様、これに入るのには少し抵抗がある。あの有名なジョーズの色違いの姿。怖くない訳がないだろう。

すぐ目の前に立ち、左足に跳ぶ血液を目にして顔を背ける。怖いのなら見なければいいのだが、下を向くと血液が目に入る。なら、と思いを瞑る。相変わらずピチャリ、ピチャリ、という音が聞こえるが幾分かはマシだ。その状態のまま三步進む。そして目を開けるとそこは既に別の場所だった。

赤い背景に、黒い歯のようなモノが歯を剥き出しにして笑っている。聞いただけならきつと意味が分からないだろうが、事実だ。歯が笑っている。

ハツとして周りを見渡すと道が別れているが、片方はまだ何もなく、奥の通路にはもう一つ、歯が笑っているような入り口がある。また食べられるのか、勘弁してくれ。今度はなにも考えずにそこを通った。

再び変わる景色。風景が二転三転して、目的地付近に到着した。まだ少しあるが、同じエリアに目的のエフェクトはある。……見たくない景色だ。

ここの名称は“胎内”一番おぞましくて、一番泣きたくなる場所だ

と思う。

壁は肉のように赤茶色で、時々脈動しているのでなんとなく生きていることが分かる。ドクドクと動く壁や床。ぬちゃぬちゃと糸を引き、柔らかい床に生理的嫌悪感を抱き、しゃがみ込む。

先程の血液広間では欠片も感じられなかった嗅覚が刺激され、嘔吐感が込み上げる。蒸したような空気なのに生温く、肌を空気が舐めていく。しゃがんだまま口に手を当て、浮き上がる脂汗をそのままに目を瞑る。気持ち悪い、気持ち悪い、キモチワルイ……しかし、夢の中なのだ。まだ、かろうじて抑えられる。これが現実だったらゲロインになっていたこと間違いなしだ。

とりあえず、抑えつけた気持ち悪さを飲み込み、立ち上がる。そして、これ以上この感触を味わいたくないのでほうきに乗った。私はいちいちほうきから降りる癖があつていけない。歩かないとなんだか冒険をした気がしないからだ。まったく、これだから何度も嫌な思いをするのだというのに。

ほうきを操りながら別れ道を左へ進む。そこはのちのちエフェクトが配置されるだろう場所で、見学だけでもしておこうと思い、そして後悔した。

そこにいるのは分かりきったことであつたが、それが何よりも私の感傷を誘った。

青いワンピースを着て、振り乱した髪を前に垂らして俯く。母親^{あおこさん}の姿。露出した肌は死人のように白く、髪の間から覗く唇はガサガサで赤い斑点がその顔を彩っている。徐々に目線を上げていくと本来眼窩がある場所にはなにもなく、ただ赤い。ひび割れた唇と裂けた眼窩。顔中に見受けられる抉られたような傷。頬はこけるところという次元を既に超えていて、肉が剥き出しになってたり、文字通りピンクの頬になっている。

「覗き込むんじゃないかった……」

口元を押さえながら三人いるソレの、一番奥にいる青子さんを見ると何かの台座のような物に座っているのが分かる。少し近づくと

やっぱり嫌な気分が蘇った。

彼女が座っているのは肉のベッドで、そこから伸びた管が沢山絡みついて、縛りつけている。気持ち悪い。好奇心を見せないで早く進めばいいのに、と自分でも思うが、どうせ後から来るのである。慣れておかないと本当にゲロインになってしまう。それだけは嫌だ。

「次はー、こっちか」

元来た道を少し辿り、今度は反対側の道へと進む。真っ直ぐ続く肉壁の間を通り、にちゃにちゃと音を立てて肉を伸縮させている穴を通る。本当に体内を進んでいるような感覚さえある。夢なのに。

穴を抜けたら胎内迷宮だ。子宮の形に別れた道を行き、わりとすぐに目的地を見つけた。しかし、その入り口の前にはワープポイントがある。目的地に行こうとすれば否応無くワープさせられる作りになっているのだ。正面に入口と、ワープポイント。まず、真っ正面からワープポイントを使い、おぞましい無垢の世界に入る。出てきた所からではいつまで経っても目的地にはつかないので、出来損ないの赤い胎児を避けながら入って来たときと同じ位置から真っ正面にもう一度ワープポイントを踏む。すると今度はワープポイントの向こう側へと出ることができて、目的地の入口に着くことができた。長かった。いやあ長かった。

入口から入り、広間に出る。暫く移動すると奥に青子さんが仰向けに倒れているのが見えた。お腹の辺りから見せられないものが溢れ出ている。周りには四つの風船のようなオブジェがあり、二つは歯がついていて笑っていて、もう二つは血塗れになっている。まるで青子さんを囲って守っているような…… これもやはり身近な人達を想起させる。

ゆつくりと青子さんに近づき、ほうきから降りる。

にちゃつと不快な音を鳴らして足を下に着けた。粘液っぽいものが足元にあるわりにやはり転ぶことも、滑ることもない。

ごくりと喉が鳴る。それは興奮からではなくて、不思議に歩み寄るような、怖いもの見たさで夜抜け出すときのような少しの恐怖。私は

静かに歩み寄り、無言で青子さんの髪を触った。これで「内臓」ゲツトだ。

ドンツ

いきなり突き飛ばされたような感触がして、仰向けに倒れる。ビチャアツと派手に音を立て、私は肉の地面に背中を打ちつけた。粘液が飛び、頭がトランポリンの上みたいに跳ね上がる。倒れても衝撃だけで、まったく痛みはない。

弾力のあるそれに手をつき、体を起こす。粘液で少し滑りそうになった。こんなときだけ思い出したようにリアルさを出すのはやめてほしい。

上半身を起こし、目を向ける。驚いた間の一瞬にエフェクトが手に入ったのか、私の腹は青子さんと同じように裂け、出てはいけないものが色々と溢れ出してしまっている。嫌なエフェクトだ。ほんつとうに気持ち悪い。ヘソの緒のような気官が途中で千切れているのが最高に不快だ。

つらつらと不満を述べてから豪快に腹（の中身）を撫でる。やはり麻痺したように痛覚は遮断されているが、一丁前に粘液が掻き回されるような嫌な音は聞こえてくる。

やる気が一気に削がれた。

一方通行を通って来たことだし、起きよう。そう思つて頬をつねる。

気分転換をしたかったが、結局現実でも夢でも嫌な思いをしただけになってしまった。

暗くなる視界。先に機械を取るついでに橙子ちゃんに会いに行けば良かったと、今更後悔した。

No. 5 『怪物』―厭忌―

暗闇の中で時計の鳴らす音が反響してうるさく響く。カコン、カコン、と迫り来るような音に耳を塞ごうとして、気がついた。いくら暗闇の中だからといっても、すぐ目の前にあるはずの自身の手が見えないのは明らかにおかしい。カコン、カコン、ヒールのような音が近づいてくる。何も見えない。何も分からない。ただ、音だけが聞こえてきて体を震わせることしかできない。

「……………」

目を開けていても、閉じていても景色は変わらない。耳を塞ぎたくてそこに耳があるであろう場所に手を持っていく。そして、感覚だけがやたらと鋭敏になって、ヒヤリと耳元をなにかが覆う。自分の手だ。そうでなくてはならない。体が動かない。なにか、恐ろしいものに絡め取られたかのように硬直する。金縛りだろうか。それとも、恐怖だろうか。カラカラに渴いた口、ましてや開くことさえできないのに悲鳴があげられるはずもなく、音もなく消えていく。自分の音はなにかもないのに、あの、カコン、カコン、という音だけは相変わらず響いていて、泣きそうになった。動かない体、動かない顔に涙が流れて頬が濡れる。何故こんなにも怖いのだろう、何故こんなにも近づいてほしくないと感じるのか、正体不明のそれに私は唯一動く心の中で願う。「こっちに来るな」と。

「…ギ… ……」

聴覚だけが刺激され、耳を覆う冷たいなにかがまったく意味をなしていない。

「な……………さま」

一層体ごと包み込んで隠してよ。そう思うと耳元にあったものがわさわさと移動しはじめ、体を覆っていく。そうして何もかもが飲み込まれて、体の感覚が消えた。

「……………ギヤヤヤ」

立っているのか、座っているのか、はたまた浮かんでいるのか、なにかも分からなくなつて闇の中に自分が溶けて消えてなくなるん

じやないかと思った。怖い、怖い、怖い…… 怖い！

「風様！」

意識が浮上する。目を覚ましたとき、そこにいたのは正しく女神様だった。

「メイ……」

声が掠れて上手く名前を呼べない。酷く汗をかいて、身体中の水分が搾り取られてしまったかのようだ。

「風様…… ひどくうなされていたようですが…… 水差しを用意しております。水は飲めますか？」

長い黒髪を後ろで緩いおさげにしたメイ子さん。目は充血して赤っぽいが、全体的に黒くて、メイド服に似た看護服を着ていて、いつも私を助けてくれるお姉さん。まだこの人も学生だろう年齢なのにこんなところにいていいのか。そう疑問に感じてしまうくらいだ。

彼女は清潔なタオルを桶の水に浸し、硬くしぼったそれで私の額の汗を拭いてくれている。そして、プラスチックでできた水差しを差し出された。飲めるか？ という言葉に頷き、そのまま上半身だけを起こす。一瞬腹から何か余計な物が出て来ていないかなどと心配してしまっただが、あれは夢の中の出来事だった。まさか、夢から覚めたと思っただらもう一度一般的な悪夢を見るとは思わなかったし、気が動転している。

「メイは…… 学校とかないの？」

喉を潤してから問いかける。無意識に出た言葉だった。何故こんなことを今訊くのか分からないし、本当は口に出すつもりなんてなかった。だから目を丸くして言葉に詰まるメイ子さんを見て、しまったと内心思う。だが、ずっと訊きたかったことだったので好奇心が理性に打ち勝ち、自分の発言を打ち消す言葉はついぞ口から出ることもなかった。

「義務教育は終わっておりますし、高等教育も教えて頂いておりますので問題ありませんわ。高等学校には…… 通っております。スカウトが来たこともあります、全て断りました。ですが、お嬢様……

私はあなたのそばに居られてとても幸せなのですわ」

戸惑いながらも応えて、それでも彼女は優しい顔で言った。高校生活に憧れはしなかったのだろうか。いや、そんなはずはない。後悔していないだろうか。彼女の表情は優しげで、そんな風には見えなかった。まったく、そんなことを言われたらなにも言えないじゃないか。メイ子さんはずるいな。たまには叱ってくれたっていいのに。話したくないことをわざわざ言う必要もないのに。どうして彼女はこんなにも優しいのだろうか。どうして私を大切にしてくれるのだろうか。そんなことは彼女にしか分からない。その胸の内を私が知ることにはできない。だから私も私の思いを吐露することもなく仕舞う。彼女の優しさが毒のような安心感と僅かな恐怖を生み出していることなど、知られないほうがいいのだ。

「…… そう」

「さ、お召し替えをして、朝食を摂って、歯を磨いたらお勉強の時間ですわ。準備いたしましょう？」

「うん」

真剣な顔になっていた顔が微笑みのために緩み、立ち上がる。メイ子さんは精神的にとても強い。よっぽど大人よりも大人らしい。そう思っ、ベッドから降りた。

そういえば、勉強外で医学書を読んでいるときに新たな発見があったのを忘れていた。一般的な勉強の合間に挟んで教えられる応急手当の詳しい仕方や医学用語。医者になるつもりのない私にとっては覚える必要はあまり感じられない教科だが、そのときの私は別のことに興味を覚えたのだ。

小さく載っているマイナーな病。そこにあつた記述には衝撃を受けた。

・さび病

一般的には植物体に起こる病気の呼称。進行すると植物体が汚白色になる。

・ナイトメア症候群

正式名称 // 狂気感染精神性症候群 // 別名 // 錆病^{Rust}

あまり広まっていない病気だが、別名の方が有名。由来は発症後、

進行が進むごとに髪や肌が白くなることから植物のさび病になぞらえたことから。トラウマや、恐怖心を煽る夢を見ることが特徴づけられている。途中で耐えられず自殺するケースや、耐えても最終的に衰弱死するケースが見られる。トラウマを抱える精神的に不安定な患者が発症するケースが多い。

とにかく、連日続くゆめにつき特有の悪夢の原因は分かった。恐らく、この病院は錯病についてを研究しているのだろう。精神性のものなだから発症理由はある程度突き止められているのだろうか。そうでなければ、あんなに沢山の錯病発症者がいるのはおかしい。偶然？ そんなはずはない。思い当たる節はいくらでもあるし、狂気じみたところが錯病を発症させるためにあるのなら一応納得できてしまう。…… 認めようとは思わないが。

医学書を閉じる。勉強は既に終わっていたが、暇で読んでいたのが幸運だったのか、不運だったのか、こうして原因を知ることができた。まあ、幸運だったとカウントしておこう。



「おい」

検査と言う名の人体実験が終わり、廊下を歩いているとき突然声をかけられた。なんだかデジャヴだ。声的にもデジャヴ。

「なに？」

バツシヤア、と派手な音を立てて水飛沫が上がる。なんてベターな嫌がらせだ。白い髪から透明な水が滴る。しかしただの嫌がらせにしては悪質だ。嗅覚を刺激する臭いと、消毒液特有の臭い。ホルムアルデヒド。所謂ホルマリンの希釈液だ。こんなものを浴びせてくるなんて、禿げたり爛れたらどうしてくれるんだ。

「とりあえず、持ち出したのがバレたらマズイと思うんだけど」

そう言った頃には既に彼は逃げた後だった。曲がり角に消えていく後姿だけが見えた。廊下は走つちやいけません。

病衣はビショビショ。スリッパも同じく。自分は濡れ鼠。そして今は幼女である。…… なんだろうか、この犯罪臭は。

「メーイーー！」

叱ってもらうのは後にして、足早に自室へと帰る。いつもはペタペタと音が鳴るスリッパはペチャペチャと湿っぽい音を立てながら上下し、服や髪から液体が滴り落ちる。早くお風呂に入らないと本格的に禿げるかもしれない。目に入らなかつたのは幸いだったが、顔がヒリヒリと痛み引きつっているので早々に処置しなければならぬ。

それにしても、あの子は開き直つてでもしたのだろうか。殺したいのか？ という疑問に対して沈黙していたはずなのだが、そこらへんも吹っ切つたのか？ 嫌がらせにしては質が悪いので注意しなければならぬだろう。

病室のドアを開けると、よく濡れた手がヌルつと滑つた。あら、溶けてる。

「はい、できました。」

処置をしてもらつて少し。風呂に入つたら殆ど落ちたがやはり手はスベスベになつていて、髪はギトギトになつていた。本格的に洗い流した後だが、あと一歩足りず、暫くこのままらしい。薄い消毒液だつたことが本当によかつた。はたして、これは幸運か、不運か。微妙だな。まるつと不運にカウントして良いのだろうか。

「それにしても、困りましたね。どうしましょうか？」

メイ子さんが問う。

確かに悪質ではあるが、このことが院長にでも知らればあの子はきっと酷い目に遭うだろうし、あまり表沙汰にはしたくない。

「院長に知られたらきつと大変だから、私が持ち出したことにおいて。勉強の成果を知りたくて怪我人を探して走つてたら転んで被つた。そのくらいでいいでしょ？」

「ですが……」

「ダメ。これは命令だよ」

「……承知致しました」

結構渋つていたが、念押しするように権力を使うと少し悲しそうな、心配そうな表情をしながら無理矢理納得してくれた。事なかれ主義でごめんね。

それから、毎日小さな嫌がらせを受けることになった。アレは流石

にやりすぎたと反省したのか、スリッパがお風呂場にあつたり、ベッドのシーツが剥がされていたり、すれ違ふときに転ばされたり、水差しが壊されていたり色々だ。全部チクチクとした攻撃で、最近私がドジするようになったという噂がつきまとうくらいの可愛らしい嫌がらせだ。橙子ちゃんに会いに行くためのメットが割られていたのはキレそうになったが、メイ子さんがどうにか宥めてくれて、橙子ちゃんには新たに笛を貰った。地震が多いからと自分に贈られてきたオレンジと白の笛の、その片方を私にプレゼントしてくれたのだ。最近本当に天使なんじゃないかと背中を確認する日々を送っている。今日も翼は確認できなかった。ああ勿論、新しいメットも手に入れることができたので結果オーライだった。

しかし不思議なのはその手数だ。メイ子さん曰く、私が別のところで直接悪戯されているときには既に部屋が荒らされているらしい。それに、私が転ばされたときに見たのは真っ白なツイントールを揺らす女の子だった。だから少なくとも三人はこの嫌がらせに参加している計算になる。

やられているほうとしては年相応の幼稚な嫌がらせから、リミッターが外れているんじゃないかと疑うような派手な嫌がらせまで様々なので飽きもこないが、いい加減鬱陶しい。あと、検査帰りに悪戯されるのが一番よくない。ただでさえ検査でイライラしているとこののに、悪戯までされたら大人気なく怒鳴り散らしたくなるのだ。子供だろうって？ 精神は枯れてるから大人でいいんだよ。

「そうだ、橙子ちゃんを癒されよう」

京都は遠いが橙子ちゃんの部屋は一階違うだけだ。すぐに行ける。そう思いいたって鼻歌混じりに階段を降り、廊下を渡り、隣の病棟に移る。そして橙子ちゃんの部屋の近くに繋がっている階段を上がり、スキップなんてものをしてながら一段、二段。そして一段ずつ上がるのに焦れなくなったからには一段飛ばしに。

今日は何を話そう？ 翠君のことがあったり、いろいろあつて随分久しぶりに感じる。ついこの前に笛を貰ったばかりだというのに。

せつかちな私は最後には二段も飛ばして階段を駆け上がり、異様な

ジャンプ力を発揮する。からだは軽い…… こんな幸せな気持ちで走るなんて初めて！

もうなにもこわくな

「あ」

フラグを建てたのがいけなかった。

ドンツとまたもやデジャヴを感じる擬音を出して私は宙を舞う。最後の階段を登り切ったそのとき、腕が伸びてきて押し返されてしまったのだ。二段も階段を飛ばして走っていたのでそれはとても簡単だったろう。まさか、夢の出来事が別の形で正夢になるとは思わなかった。内臓飛び散らしはしないだろうが、よくて打撲。悪くて骨折か。

視界がぐるぐる回って一気にスロウモーションになる景色。空を切っていく体が階段の方を向き、犯人の姿を一目見た。揺れるツインテールに七三分け。それに見覚えのあるぱつつん。全員集合かよ、豪華なことだ。

にやけるツインテール。

悪い顔をした七三分け。

驚いているぱつつん。

三者三様で大変よろしい。こんな状況じゃなかったら眼福だったろうに。腕から離されたヘルメットが先に落ち、カッーンと音を立てながら転がって行くのを見る。そしてそのまま、私は背中から着地した。

鈍い音と衝撃に、力を入れていたはずの首が簡単に動き頭を打つ。一種のムチ打ちのように首が引きつり、強かに打ち付けた背中の感覚が麻痺する。そして痛みがスツと引き、一息吐いた途端またビリビリと痛み出す体。痛い、痛い、痛い！

頭を打つまいと体を強張らせていたのが幸いして頭はさほど強く打っていないが、体の方はそう上手くいかない。むしろ逆効果で、肘や背中の骨が軋んで悲鳴をあげている。まあ、生きていれば重畳だろう。できれば怪我もしたくないのだが、まあ無理だろう。痛みで辛うじて意識を保っているので再び麻痺したら目の前が真っ暗になりそ

うだ。とりあえず漏れる呻き声を抑えつつ、助けを呼ぼう。

「……エ、イ」

だめだ、上手く声が出ない。こんなんでは大きな声も出せない。しかし、すぐ近くに転がっているオレンジ色の笛が視界に入った。痛む体を無理矢理這わせて笛に近づき、フラフラする頭を定めて伏せたまま食らいついた。貧弱な肺活量に加え、満身創痍で碌にできない息を整え、必死に笛を吹く。

そして、功が奏してピーーツと甲高い音が鳴った。

一番最初に気がついたのはやはり、彼女だ。階段上にあるすぐ近くのドアが開く音がする。

「凧ちゃん!」

ヘルメットの奥にある表情を泣きそうに歪めて彼女はこちらを見ている。そしてすぐさま階段を駆け降りて来て、そばに来た。

「ちよつと、大丈夫!?!じゃ、ないよね。こんなとき、どうすればいいのお?だ、誰かあ!凧ちゃんが、凧ちゃんがあ!」

泣きそうな顔で、時折ゴツンとヘルメットを壁に当てながら人を呼ぶ。階段の上にはもう誰もいない。このままでは彼女が犯人扱いされかねん。私は意地でも意識を失うわけにはいかない。せめてメイ子さんが来るまでは持たせなければ。

「橙子、ちゃん。そばに…… いて?」

「う、うん。誰か、誰か来て!怪我人だよお!」

次々と足音が聞こえてくる。橙子ちゃんの声も頭に響くが、これもなかなかだ。しかし、私のことを思って助けを呼んでくれているのだから咎めるなんてとんでもない。多少頭が痛かろうが彼女の涙を増やすわけにはいかない。なんでだろう、さっきまで怪物三人に対してイラついていたところがあつたはずなのだが今はとても穏やかだ。あれ、フラグじゃないよね?

「お嬢様!」

「どうされましたか!」

次々やって来て大声で話しかけてくるものだから「話すから黙りなさい」と言う。痛みはあるが、ずっと伏せていたので大分楽になっ

た気がする。軋む手を突き、上半身だけを起こす。ついでに橙子ちゃんを犯人扱いし始めている周りを黙らせる。思ったよりも低い声が出てびっくりだ。

「調子に乗って階段から落ちた。その子は関係ない、助けを呼んだだけだよ」

「とにかく、処置致しますのでこちらへ…… 立てますか？」

今更かよ。というかさつきから座り込んで喋ってるのにどうして立てると思ったのか。

「お嬢様！」

メイ子さんの姿が見えて、ふっ、と力が抜けるのが分かった。

「メイー！」

「メイドさんー！」

橙子ちゃんも見知った顔なので声をあげる。もう既に泣き始めていてだみ声になってしまっているが、それだけ私を心配しているということだ。嬉しくないわけがない。それに、私の妄想でなければメイ子さんの瞳も心なしか揺れている気がする。

「なぜ誰も担架を持ってきていないのですか！」

メイ子さんは怒り心頭でそう言うと、橙子ちゃんの頭を撫でてから私を抱き上げる。

抱き上げる？

姫抱っこ…… だと!? (略)

長く話してしまった。とにかく、私は鼻血もののイベントにエンカウトしたのだ！怪我をしていなければ美味しかったものを。ああ悔しや。

◆◆

そして、無事看病イベントまで美味しく頂いて数ヶ月ほど安静にした。その間も悪戯はきていたようなのだが、家具をずらしたり、寝るときに鼻を摘まれたり、可愛らしく小憎たらしいものばかりだった。常にメイ子さんがいるので悪戯しにくかったのかもしれない。とにかく、久しぶりに平和なひと時を過ごせた。いつも波乱万丈だった？余計なお世話ですよ。数ヶ月穏やかなだけまだマシだ。

「凧様、どうぞ」

「あーん」

「はい」

暫くはメイ子さんとラブラブして過ごそう。リンゴを頬張りながら
らそう思った。

No. 5 『怪物』―療養―

「却下させていただきます」

涼しい顔で言い放ったメイ子さんの言葉にベッドに寝かされたままの私は涙目になりながら迫る彼女の手を防ぐ。

「メイが過保護過ぎるんだって!」

「だめだといったらだめです」

うるうる涙を溜めたいたいけな少女に揺らがないだなんてあなたは鬼か! いつもは女神のように優しくして私のことを優先して考えてくれているというのに、今はその優しさが私を苛んでいる。どんなに懇願しても、どんなに訴えてもメイ子さんは首を縦に振らない。

「そこをなんとか!」

「恥ずかしいのは分かりますが、こればかりは我慢していただかなければなりませんよ」

なぜこんなことで恥ずかしい思いをしなければならないのだ。ただ罇が入っただけだというのにこの対応はなんだ! 松葉杖を使えば問題なんてないはずだろ? どうして許してくれないんだ!

「トイレくらい松葉杖があればいけるってば!」

「だめです」

私は見事に崩れ落ちた。

そう、怪物たちによって階段から突き落とされた私は怪我を負って療養中の身なのである。一生懸命這いながら笛を口に咥え、思い切り音を鳴らして助けを呼んだあのときだ。私は酷い全身打撲で動けなくなっただけだと高を括っていたが、左足が見事に折れていたのだ。

まあ、折れていると言っても酷い罇が入って危ない状態であるだけなので松葉杖があれば恐らく歩いてトイレに行くことぐらいは出来るはずだ。

だというのに彼女は過保護にも尿瓶片手に真顔で待機している。これはきつい。肉体的にも精神的にもいろいろときつい。これがまだおまるとかならはまだ分からないこともない…… がやっぱり嫌だな、うん。たとえば肉体が六歳で、精神も多少それに引きずられてい

るとしてもこれはない。

扉を少しだけ開けてくすくす笑っている白いツインテールが見えるが無視だ無視。誰のせいでこうなってると思ってるんだまったくもう。

「ほら、せめて車椅子とかさ」

「そんなに嫌ですか」

「嫌です」

いくらメイ子さんのことが大好きでもこれはきついんだって、分かってくださいよ。両足骨折とかならまだこの対応も納得できるけど、罅が入っただけで大袈裟なんだって。

「畏まりました。では車椅子を借りてきますので少々お待ちください
ね」

「うん、よろしく」

その対応を食事とかに回してくれればいいものを……なぜ不服そうな顔をしてるんだメイ子さん。早く行って来なさい。まだ催してないから多少時間かかっても大丈夫だよ。

ガラリと音を立ててメイ子さんの姿が扉の向こう側へと消える。先程覗いていたツインテールは既に何処かへと行ってしまったようだ。メイ子さんからは見えないからって堂々と覗き込みに来るのやめてほしいな、本当。私からは丸見えだったの。

ベッドに寝ながら天井を見上げる。病院特有の染み一つない真っ白な天井だ。次にチラリと目を傍に向ける。白いカーテンに、広くは開けられない窓。窓際には小さなジョウロとそろそろ限界を迎えそうな赤いアネモネ。所々の葉が茶色く変色し、花も元気がない。枯死してしまうのも時間の問題か。だが季節的にももうすぐ梅雨となる時期だからよく持ったほうだと思う。

本で調べたところ、アネモネの開花時期は3〜5月の少し肌寒い時期らしいのでかなり持っているほうだ。枯死したあと夏には球根を掘り出して保存しておけば翌年もまた同じ花が楽しめる。メイ子さんがアネモネを買ったのはクリスマスMASの時期なので温室で育ったアネモネだろうから実に半年は咲き続けている。私の世話が上手いの

か、メイ子さんの世話が上手いのか…… まあ確実に後者なんだろうけど彼女からもらったものが長く楽しめるのは良いことだ。

アネモネから目線を動かし、部屋の中を見渡す。ベッドには相変わらずお気に入りピンクの猫クツション。それに床頭台の上には携帯ゲーム機。中身は勿論S I N S O K U N E K Oだ。結構やり込んでいるが中々難しいので成績はあまりよろしくない。あれで何十コンボも決められるメイ子さんがおかしいのだ。私が下手なわけではない。何個も迫る魚を猫を操作してポイントを獲得。それも時折追加されていなくならないお邪魔物体を引つ掻きで退けつつポイントを取って行かなければならない。裏技で文字通り猫を神速にすることができると非常に扱いにくく、沢山落ちてくる魚やお邪魔物体を全て取得・引つ掻きしなければならず、失敗は三回まで。高ポイントを取るなんて不器用な私には無理難題だ。

部屋には他にもシャワー室がある。トイレは表にある共用のものを使っているのではない。十分な大きさの風呂は病院の浴場を使わなければならぬので基本私はシャワーしか使わない。髪も整えるのが面倒なのでわりとぼつさり切っている。その代り天然気味な髪はすぐ寝癖がついてびよんぴよんと跳ねることになる。

あと目立つ物と言えば小さな冷蔵庫に医学関係の本や漫画・小説関係。まだ一冊しかない日記と筆記用具類などだ。刃物などは持ち込めない。なので鋏もカッターもない。果物を食べる際に使うナイフは毎回メイ子さんが持つてくるので支障はない。まあ、患者が自傷行為をしないために必要な措置だろう。りん子姉さんのことがあったので鉛筆も没収されるかもしれないと思っていたが、特にそんなこともなく毎日ゆめにつきをつけている。

空を見つめ考え事をしながら改めて部屋を見渡していると新たな発見をすることが多い。部屋の隅まで掃除してあるからぴかぴかだ。メイ子さんが掃除をしている姿を見たことがないのでいつ掃除をしているのかが分からないのが謎なのだけだ。

姉さんや橙子ちゃんの部屋よりも物が多いというのもこの部屋の特徴だろうか。整理はされているが雑然として生活感に溢れて

いる。そんな感じだ。りん子姉さんの物が殆どない部屋とか、目隠し姉さんの手すりや点字の多い整理された部屋に比べるとやはり整理されていても汚く感じる。橙子ちゃんの部屋は壁紙や天井も温かいオレンジ色で、柔らかな雰囲気の小物が多く全体的にお洒落な部屋だ。

部屋だけでもそれぞれの特徴がなんとなく分かるのがなんだかおもしろい。

「ごんにちはー」

メイ子さんはまだ帰ってこない。そろそろ考え事をするのにも飽きてきたとき、扉が開いて目隠し姉さんが顔を出す。相変わらず目には包帯を巻いていて白い杖をついているが足取りは随分と軽やかで目が見えているのと変わらない足取りだ。それだけで病院内を歩くのに慣れてるのがよく分かる。

「お邪魔するよ」

その後ろからはりん子姉さんがぎこちない歩みで歩を進めて入ってくる。ちゃんと義足をつけているみたい。部屋から出ても意味がないからと足を切断したというのに、ものすごく珍しい光景だ。

「来てくれたんだー」

「本当はこんなもの使いたくないんだけど、この子がどうしてもつて言うから着けてみたわ。ま、妹のためだものね。いつもはこつちに来てもらってるし、たまにはこうするのもいいかもしれないね。どう、風。違和感ないかしら？」

りん子姉さんはさらりと髪を払いながら近くの椅子を引っ張り出して座る。慣れないせいで義足を使うのも疲れるのだろう。黒光りする義足がスカートから覗いていて、まるで長いソックスを履いているようにも見える。彼女の白い肌に映えるそれを一旦見回してから私は「うん、違和感ないね」と言った。

「ちよつと姉さん！　ち、違うわよ！　あんたが寂しくて泣いてるかもしれないから仕方なくお見舞いに来たのよ。そのついでにお喋りして場を明るくしてあげようとしただけで！　姉さんと呼んだのだって1人だけ仲間外れは嫌だし、ってあああああ！　違うんだって

ば！ んもうこの馬鹿風！」

目隠し姉さんがあわあわと顔を振りながら手で覆う。包帯と手の隙間から覗く頬は赤く、目が見えていたらきつと左右に泳がしていただろう。ツンデレ気味に否定をしようとして、でもお見舞いに来たことは事実で否定しきれないから顔を真っ赤にして行き場をなくした羞恥心をぶち撒ける。困ったらとりあえず馬鹿風って言っちゃ姉さん可愛い。

「そっかそっか。でも遊びに来てくれただけで嬉しいよ姉さん」

「そ、そう？ ま、まあそれだけ元気そうなら大丈夫そうね」

そう？ と少し上ずった声で顔を逸らす姉さん。心なしか声色がなんだか嬉しそうだ。

「キミは素直じゃないね。ま、そんなところが魅力的なんだけどね」

椅子に座ったまま手を組んでりん子姉さんが言う。いつもよりもにやにや笑いが増しているように感じるので目隠し姉さんの反応を楽しんでいるのかもしれない。わざわざ反応の大きい言葉を選んでいるあたりに悪意を感じる。

「姉さんは余計なこと言わないでよ！」

「ああそうかい。そんな意地悪なことを言っているとキミの恥ずかしく秘密をバラしちゃうよ？」

意地悪な表情でりん子姉さんが言う。その一言で一瞬凍りついた目隠し姉さんが口をパクパクとさせながら何かを言おうとするが言葉が出てこないらしい。秘密？ 秘密ねえ。目隠し姉さんに言われてないことなんてあつたっけかな。まあ秘密なんて誰にでもあることだから気にしないでおこう。反応からしてどうやら知られたくない秘密のようだし。

「姉さんのほうが意地悪じゃないの！ んもう」

小さな声で呟きながら俯く姉さん。りん子姉さんはそれに気付いていながらうふふと笑い、乗り出してもう一脚椅子を出し、座るように促す。

「ほら、キミも座りなよ」

りん子姉さんは彼女の手を引いて椅子の背を触らせ、場所を知らせ

る。姉さんはそれに吃りながら「ありがとう」と小さく言つて座る。杖はすぐ近くのベッドに立て掛けてあるので立つときも問題ないだろう。

「改めて、お見舞いありがとうね」

「ああ、話し相手がないからつまんなくてね」

「仕方なくよ仕方なく！」

友達がいるっていいことだなあ。

しみじみとそんなことを考えながらお喋りに集中する。なんでもない話題でも今の私にはありがたい。暇で暇で仕方なかったのだから当たり前だ。私はよく愚痴を漏らしているがメイ子さんは軽々しく病院内のことで愚痴を言ったりしない。真面目な人だ。

「そういえば、今日はメイドさんいないの？」

目隠し姉さんが言う。メイ子さんは先程車椅子を借りに行ったので暫く戻って来ないだろう。しかし、確かに帰りが遅いような気がする。道中で仕事でも入ってしまったのだろうか。

「メイは車椅子借りに行ったよ」

「え、なんで？」

「そりゃあ、私と同じ理由だろうね。アシがないとトイレにも行けないもの」

「って、なんで分かるの!?!」

足はあるよ！と突っ込みそうになる自身を抑えて姉さんに食つてかかる。皮肉にも自嘲しているようにも聞こえるから困る。こんな言葉遊びのようなことを言つて、他の人の反応を楽しむのが姉さんの常だ。結構質が悪い。

横ではてなを浮かべた顔で首を傾げる目隠し姉さんに癒されながらベッド傍の水差しを取り、水を飲む。だめだ、興奮しちゃいけない。私は大人だ、そうだろう？ 大人気なく怒鳴っちゃだめだ。

「メイが過保護なんだよ。杖をつけば私だつて歩けるはずだよ」

「どうしても言うなら私の杖、貸してあげても——」

「治りにくくなるからだめなんだろうね。骨くっつけてからならまだ分かるけど。今は甘んじて受けておいたほうがいいよ」

「そ、そ、そうね。ちゃんと寝てなさい！」

目隠し姉さんの言葉を遮ってりん子姉さんが言う。真つ当な正論だったから私は何も言えない。恥ずかしいからと言って療養期間が伸びたらそれこそ馬鹿だ。馬鹿風の称号は返上するつもりなので大人しく言うことを聞いたほうがいいのかもしれない。あんまり納得したくないけど。

頬を真つ赤に染めた目隠し姉さんが手に取った杖を握り締めながら姉さんの言葉に乗っかる。誤魔化しきれていないからかりん子姉さんが横目でくすりと笑っているが何も言わずに話を続けてくれた。そこは配慮してあげるのね。

「じゃあ、私たちはそろそろ行くことにするよ。メイドさんによろしく」

「大人しく寝てるのよ！」
「うん」

りん子姉さんはベッドの端で体を支えながら義足で立ち上がる。少々ふらつきながらなので側から見ていると危なっかしくてしょうがない。だけれど私は動くことができないので見ているしかできない。

目隠し姉さんは握り締めた杖についてスツと立ち上がる。こちらには手慣れているので危なげない。ずっと盲目のまま過ごしていたからか耳が良く、部屋の反響音でなんとなく全体像が掴めるらしい。大きな欠点があるとそれを補う機能が鋭敏になるのは生命の神秘だね。

「じゃあまた」

「今度はこつちに來なさいよ！」

「早めに治すよ」

お互いに手を振って別れる。

今まで人がいて賑やかだった空間は一気に静まり返り、私の息遣いだけが周りに響く。お手洗いにはまだまだ行かなくても大丈夫なのでひと眠りすることにしよう。



エフエクト“うで”を探しながら夢の中を歩き回っていたが幾ら探しても見つからず、頬をつねる。ぴりりとした痛みが自分を襲ったあと、ゆっくりと目を覚ますと既に夕方になっていた。

「あら、起きられたのですね」

「ん、おはようメイ」

欠伸をしながら声のしたほうへ目を向ける。

そこには椅子に座り、刺繍をしながら微笑んでいるメイ子さんがいた。

「メイ、車椅子借りられた？」

寝ているときはさほど気にならなかったが、流石に半日経っているので少し辛い。シーツを掴みゆっくりと体を起こす。

「ええ、行きますか？」

「うん」

自覚したら余計酷くなってきた。メイ子さんの手を握り、車椅子に移動させてもらう。動かし方は電動のものなので殆ど把握しなくても大丈夫だ。それに今はメイ子さんが押して行ってくれるので問題ない。

病室を出て少しし、メイ子さんに手伝ってもらってどうにか恥ずかしい思いはせずに済んだ。これはこれで恥ずかしかったが。車椅子を押されながら病室まで戻る。途中、院内で怒鳴り声が聞こえてきたのだがメイ子さんが耳を塞いでしまったので内容を聞き取ることができなかった。なにかが起きているのだろうか。それともなにか起きる予兆なのだろうか。不安が過る。

リンゴを剥いてもらいながら不気味なほど赤い夕陽を見て、私はもう少し穏やかな日常が続くことを願った。

No. 5 『怪物』 ー傷ー

劇薬が宙を舞う。

そして、ソレは不運にも手を滑らした加害者へと降り注ぎ、幸運にも助かった私を地獄へと叩き込む。驚く顔。そして、ジユワアと鳴る嫌な音。肉の焼ける臭いが周囲に漂い、次の瞬間大絶叫が病院の隅々にまで響き渡った。

私は勘違いしていた。彼の幸運は今までの日常で起こったもので全てだと思っていたのだ。だけれど、幸運はそんな生易しいものではなかった。それが分かってしまった。理解わかってしまった。ああ、これが幸運か。こんなものが幸運なのか。彼の苦しみを、人格を歪めてしまふほどの苦しみを私はなめていた。今までの幸福の代償はあまりにも大きい。

幸運が私に牙を剥く。

そして思考停止。

目の前が真っ赤に染まる。なにが起きた？　なにがあった？　分からない、分からない、理解りたくない！

「ーーーっああああ！」

目の前にあるこれはなんだ？　白に赤が斑になっていて、転がっているこれはなんだ？　一時的に耳が聞こえなくなるほどの大音量で叫んでいるこれは、これはなんだ？　何も見たくなくて、俯く。すると目に入る赤、赤、赤。どこにも逃げ場がない。逃げ場？　逃げればいいのか？　ここから？　あんなに苦しんでいるのに見捨てる？　私？　いやいや、ここは病院だろう。手当する人なんて沢山いる。逃げるか？　いや、逃げられない。足が動かない。怖くて、怖くて、震えてしまつて固まつたように動けない。どうすればいいの？　助け

を呼ばばいいの？ あのとときの橙子ちゃんのように。

これはなに？ これはなに？ もう顔がぐちゃぐちゃで分からないよ。あれが人？ そんなわけない…… そんなはずない！ あんなものが、私のよく知った、悪戯三人組の、次男だなんて、認めない！ 認めない、認めたくない！ ああ、でも私がああなっていたのかもしれないなんて！

あのととき、私を階段から突き落とした彼の顔が蘇る。記憶の中にある悪い顔をしていた七三分けの姿が崩れる。崩れ落ちる。どろどろと溶けて、皮が剥がれて怪物が剥き出しになる。

私と話した長兄はここにはいないし、妹もいない。ここには二人だけ。私たちだけ。酸で爛れた顔が崩れ、溶けて、目も、鼻も、耳も、皮膚も真っ赤に染まりぐずぐずになる。

ああ、彼は本物の怪物になってしまったんだ！

「いつ、やっ……うあ、ああああああ!!」

今更のように口が動く。でも、体はいっこうに動いてくれないのだ。涙が出る。狂ったように悲鳴をあげながら、両手で耳を塞いで、泣き続ける。悲鳴が重なり、理性が擦り切れ、その恐ろしさに身を任せただけ泣き叫ぶ。

「メイ、メイはどこお!? いやあ、いやあ、！」

目の前には狂ったように暴れまわり、顔を押さえる怪物。顔は血だらけで原型がない。それなのにそこから悲鳴をあげて真っ白な廊下を彩っていく。

これが薔薇ならどんなにいいか！ 白い薔薇をその血で赤く染めた兵士のように怪物は暴れる。暴れまわる。

そしてその状態で何分、何十分。はたまた何時間経ったろうか。私には分からない。短い時間だったのかもしれないし、長かったのかもしれない。突然怪物は動きをピタリと止めた。

「う……あ……」

ヒタリ、足音がする。私は目を閉じて泣くだけでなにもできない。周りで騒ぐ大人なんか知らない。メイがいなから頼れない。なんにも感じない、感じたくない。こんな現実早く夢に変わってしまえばいいのに！

「ひっ！」

とても強い力で肩を掴まれる。捕まえられる。逃げられない、怖い。なのに、私は驚いて目を開けてしまったのだ。

原型のない顔。髪はもう白くない。ぐるぐると爛れて混ざった血肉。もう悲鳴をあげていないソレ。そんな顔が目を開けたらそこにあつた。すぐそこに、それこそ、キスするように近く。呪いをかけるように近く。酷い臭いが鼻につき、ダバダバと血を垂らしている。私もまた、鼻水と流れ続ける涙で床にシミを作っている。

肩が外れるんじゃないかというくらい強く掴まれ、圧迫される両肩をガクガクと揺らして腰を抜かす。今まで保たれていた均衡が崩れ、座り込む。そして、私が倒れば当然の如くソレも倒る。ああ怪物が私に迫る。

べったりと服についた赤。

頬に跳ねた血飛沫。

血で固まった髪先。

肩についた赤い手形。

手折れた怪物。

理性を奪うには十分すぎた。あまりにも酷すぎる光景に意識が保つはずもなく、静かになる音、見えなくなる視界。全てを拒絶して散り散りになった思考が深い海に沈んでいく。

そして、ぷつぷつりと意図が途切れてブラックアウト。

ねえメイ。どうして、どうしてこんな目に遭うのが私なのかな。神

様はどうして私を選んだのかな。こんなに苦しいのはどうしてなんだろうね。

ねえメイ。私って本当に嫌な奴だよ。あなたはと思う？

私の心の中を知ったらメイだって軽蔑するだろうね。私が思うんだからきつとそうだよ。だって、ああなるのが私じゃなくて良かったなんてことを思ってるんだ。正直に言ってください。

ああならなくて良かったなんて考えている私は嫌な奴でしようか。薬品を被ったのが長兄じゃなくて安心してしまった私は最低でしようか。

血に塗れた怪物を一瞬でも嫌悪してしまった私をあなたは嫌いますか。

苦しみを誰かに代わってもらいたいだなんて考える私を嫌いますか。

それでも死にたくないと思う私を軽蔑しますか。

きつと怪物になったのが橙子ちゃんでも、姉さんでも、私は変わらなかったと思うんだ。そんな私は最低？生きる価値なんてない？そんなの、分からないよ。

ねえメイ、教えてよ。私は間違ってるのかな？

No. — 『番外小話』 — 起床 —

夢の中でなにをしたのかもよく覚えていない。ただただ錯乱して走り回っていただけだ。

現実をまざまざと見せ付けてくる夢の中で分かることは、寝ても覚めても苦しみから逃れられないということだけ。真つ暗な井戸の中でそう思った。

目の前にはあのとときの姿で時間が止まった怪物。顔面は血だらけで、ぐるぐると渦を巻いたようになっていく。ぽたり、ぽたりと滴る血が気持ち悪い。条件が揃わないと出現しないはずなのに何故ここにいるかは分からない。だが、一つ分かるのはゲームと違ってその手がこちらに迫ってきていることだ。

がっしりと肩を掴まれる。

あのとときと同じ状況、あのとときと違う場所。

迫る顔。そして肩に違和感。

ぽっかり開いた無骨な歯の並ぶ大きな口が肩に刺さる。

鋭く尖ったそれで噛み付かれるが当たり前のように痛みはない。だが、精神的に耐えられそうにない。

疲れを癒すために寝るのにどうしてこうも疲れさせるのか。私は噛み付かれながら頬を抓った。

——とまあ頭は冷静だったけれども、わりと捕まり方が怖くてビビっていたことは内緒だ。



「知らな……くない天井だなあ」

目を覚ますと電気の消えた蛍光灯が眼に入る。きっちり閉まったカーテンと、鍵のかかった扉。鍵はついこの間危ない目に遭ったので付けられたのだ。それに新調された水差しに、清潔な布団。それと、

ベッド横に一脚の椅子と、布団にもたれかかる愛しのメイド。

付きっ切りで看病してくれていたのだろうか、ほどけかけている三つ編みを緩く梳いて丹念にほどく。長い黒髪がするすると肩に降りてとつても綺麗。こうするといつもよりも大人っぽく見える気がする。三つ編みはやっぱり子供っぽい印象を受けるものだ。寝息をたてている姿も、いつも少し吊ったようになった目許も緩みあどけない感じがする。癒されるなあ。嫌なことは全部忘れよう。夢の中にだけ仕舞いこんでおけばいい。人間の素晴らしさは忘却にこそある。人間って素晴らしいよね！

「ん……なき、さま？」

「あ、起こしちゃった？」

目を擦りながらこちらを見る彼女が可愛い。女性としても、なにもかも彼女には適わない女子力的に残念な私だが、可愛いものは大好物だ。

「看病ありがとう」

笑顔は百点満点。いや、別に作り笑顔ってわけではないが、笑うことって大切だよ。

「風様！お体に異状はありませんか!?体が軋んだり、どこか違和感はありませんか!?」

「へ？」

寝ぼけ眼だった彼女だが、意識が覚醒するや否や勢い良く起き上がり、素早く身だしなみを整えてから捲くし立ててきた。別にどこも痛くないし、違和感もないと思うのだが、そう彼女に告げると安心したように「そうですか」と息を吐いた。

「風様は三日ほど目を覚まされなかったのです。体にお障りないよう全力を尽くしましたが、その、心配で……」

なんと、三日も寝ていたのか。なるほど、彼女が疲れた顔をしているのもその所為か。私の看病を付きっ切りでしてくれていたに違いない。

自覚したら喉が渴いてきた。それにお腹も空いた。まだまだ朝食を摂るには早すぎる時間ではあるが、もう暫くは眠れそうにない。寝

すぎると眠気は覚めないもののだが、流石に何日も寝ていると体のほうも活動をしたほうがいいと判断するのか、眠気は暗闇の彼方に溶けていつてしまった。メイ子さんはその限りではないだろうが、私はもう起きる。そうなれば仕事があるのだから彼女も起きていなければならなくなるだろうが、朝食を摂った後は休むように言えばいいだろう。彼女は私専属のメイドなのだから。

「メイのパンケーキが食べたい。クリームとメイプルたっぷりのやつ」

「お飲み物はどういたしましょうか？」

「さっぱりしたのが飲みたい。待ってる間は水でも飲んでるよ」

「かしこまりました。では少し待っていてくださいね」

メイ子さんの料理はなんでも美味しい。何故あんなにも家事スキルが高いのが理解できない。十代にして花嫁修業なんていらなくらいに家事ができているのは本当に羨ましいし、妬ましくもある。

生前の私は精々一人暮らしで身につけた簡単な料理しかできなかったしぐうたらしていたからアイロン掛けも下手くそだ。あと、服のセンスも絶望的だ。死んだときなんて全身真っ白ワンピースに帽子なんていう幽霊ファッションだったのだ。あれで清楚可愛いとか思っていた私は一体なんなんだろう。

「お待たせいたしました。さき、温かいうちに召し上がってください」

「いただきます」

ほかほかなパンケーキにバターがとろけ、皿の上にふんわりとしたクリームが乗っていて、お好みでつけることができるようになっていくようだ。そしてなによりもたっぷりとかかったメイプルシロップ！私の注文通りにたっぷりしっかりかかった甘いメイプルやクリームに頬も緩み、一口目からだらけた表情になってしまった。メイ子さんが私を微笑ましそうに見守っているが、彼女はちゃんと朝食を食べたのだろうか。

「ちゃんとメイもご飯食べた？」

「いいえ、これからです。風様は気にしないでください。きちんと摂

りますから」

まあメイドが主人と一緒に食事するというのは駄目なのだろうが、個人的には二人で食事したいものである。だからカフェに行ったときなどは一緒に食べたり、女子高生のように食べさせあったりするのだ。

「夜明けだねえ」

「ええ、そうですね」

時刻は四時。朝起きるにはまだまだ早い時間だが空は白み始めている。もうそろそろ夜が明けるだろう。

「それじゃあ、メイはもう休んでいいよ。ご飯食べてきて」

「よろしいのですか？……かしこまりました。お飲み物は小型冷蔵庫に入れましたのでそこからお持ちください。それでは食器もお下げしますのでこちらに」

そうして一旦停止していた日常がまた始まるのだ。

日没がすぐ傍に迫っていることを知らないままに……。

No. 6 『日没』 ー目ー

午前八時。つい二時間前に回診が終わり、現在は朝食の時間である。

といっても私は既にメイ子さんの作った朝食を済ませているのだが。

昨夜はついに夢の中で怪物に出会った。やはり現実が夢の中に投影されるようだ。現実でも彼のことを怪物だと思つてしまったからか、夢の世界でもおぞましいなにかに成り果てていた。私はそいつに肩を噛まれ、あまりの怖さに故意に起床した。眠りの中でまで嫌な思いをしたくなかったというのもある。

起きたのは午前三時。悪夢と、あの出来事があつてから三日も寝ていたこともあつて私は眠気が完全に飛んでしまつてこんな時間までずっと暇していたのだ。

「なぎー、起きたんだって？ 遊びに来てやったわよ」

鍵をかけた扉の外から女の子の声が聞こえる。あの生意気そうな口調と、棘が見え隠れする声色は目隠し姉さんのものだ。相変わらずまさにツンデレと言いたくなるような声をしている。だがそこがいい。

りん子姉さんはクーデレな感じだし、ミステリアスな声色。目隠し姉さんは言わずもがな、ツンデレらしいツンデレで、橙子ちゃんは優しくして純粹そうなヒロインチックな声色だ。だけれど別にアニメ声というわけでもないのが凄いと思う。雰囲気だけでそう聞こえるのだから不思議だ。

「姉さんだね？ どうぞ、入ってよ」

私？ 私は…… どうなんだろうね。粕枝の影響か、さびつきの影響なのか、微妙に低いけれど別に女の子らしくないわけでもない、と思いたい。

「おお、本当に起きているのね。三日も寝たままだって聞いていたし、

面会謝絶されていたからつまらなかつたのよ。ああ、別に心配してたわけじゃないわよ。遊び相手がいらないから退屈してただけだもの」

はい、ツンデレいただきました！ でも顔には出しません。そんな蕩けた顔をしていたらなんだこいつと思われるだけだ。いや、しかし彼女は目隠しをしているし、目が見えないのだから別に構わないのではないか。そう思い至つて遠慮自重はしないことにした。

「なに百面相してるのよ。とにかく、りん子姉さんのところに行くわよ。久しぶりに三人揃うんだから」

「そうだね。楽しみだな」

正直、りん子姉さんには苦手意識を持っている。足を亡くしてしまったあれ以来あの人は本格的に狂ってしまったているのだ。

一見普通に見えるが、価値観がズレている。そしてそれよりも、あの人の思想に、仄暗い瞳に、私は引きずられてしまいそうになるからだ。目隠し姉さんなら多少、ツンデレ特有の扱い辛さがあるだけで済むので気楽でいい。この前のように錯乱することもあり、ヒステリックな一面も持っているがそこが女の子らしさを引き立てている。

りん子姉さんもこの前見舞いに来てくれたときのようにからかいの矛先が私に向かなければノリやすく暗い雰囲気も気にならないのだけだ。

元来人付き合いなんてものはお互いに多少の苦手意識くらいは持っているものだろう。その人の全てが自分に合っていて気楽だと思ふのならそれは運命の出会いを果たしたか、相手が汚い部分を隠して上手く人付き合いしているだけだ。

まあ人間大なり小なり苦手なものはある。それでも群れて生きる生き物なのだから人間は “受け入れる” ことがとても得意だ。日本人は特にその傾向が強いのだし。その中で少しでも己を出せる相手を探し、友になる。無意識下でそんなプロセスがなっていると、どうだろうか？ 安直すぎるか。いや、それよりもロマンが欠片もない。友達になる過程なんてものを考察しても虚しいだけだ。気が合えば友達。それでいい。深く考えていたら何もかもに興味が向かなくなるかもしれない。知識というのはなによりも大切に業が深いも

のだ。持ちすぎてしまったらそれこそ仙人のように悟りを開いてしまったら俗世を去らねばならなくなるほどの無力感に襲われるに違いない。

「おはよう姉さん」

「ああ、おはよう二人とも」

考え事をしながら歩くのも、いつの間にか目的地に着いていて、その過程をどうやって歩いたか覚えていないなんてことがあるのも、多分誰にだってあることだろう。

目隠し姉さんが扉を開けて、奥からりん子姉さんの絡みつくような視線がこちらに向く。今日はきちんと義足を付けているようだ。

「凧、久しぶりね」

「うん、久しぶり」

軽い挨拶を交わしてから近くにあつた丸椅子を引つ張り出す。一応面会用の椅子なのだが私達以外に誰かが使うことはない。そも、身内が私達意外には残念ながら怪物やクソ親父くらいしかいないので誰も長居して見舞い用の椅子なんて使わないのだ。

「まあ、何も用意出来ないけれどゆっくりしていくといいわ」

「話しに来たんだから嫌と言っても勝手に邪魔するわよ」

「あはは、まあお喋りしようよ」

長い黒髪を揺らしてりん子姉さんが言う。義足を付けているというのにベッドから移動する気はないようだ。

「そういうえば、凧。あんた怪我したり、怖い目に遭って気絶したりして、三日も寝てたみたいだけれど体のほうは無事？」

「精神的にキただけだから体のほうは異状なんてないよ。今朝は美味しい朝ご飯も食べたし、一応回復してるはず」

「そう、それはよかった」

事実だ。ただちよつと悪夢の内容が酷かつたくらいで体自体にはなにもない。メイ子さんが寝ている間も体制を替えさせてくれたりしていたのだろう。軋むようなこともない。ただ姉さんに最近の不幸のことを訊かれたのに少し動揺しただけだ。

「そうみたいね。今朝行ってみたらピンピンしてたし……」

小声で「心配して損した」なんて言葉が聞こえてきたが、彼女の名誉のために聞かなかった事にしよう。そうしよう。そんなことをしたら怒られてしまうだろうから。

「もう凧も悪夢を見て日記をつけるようになったみたいだけれど、あなたののはどんな世界なのかしら」

独白でもするようにりん子姉さんが言う。疑問系が付いていないあたりにちよつとした悪意を感じるが、気のせいだろう。最近には嫌なことがあるすぎて疑心暗鬼気味だ。これでは被害妄想が過ぎる。

「そうだな…… 暗くて、白黒で時々赤くて、植物に巻きつかれたり植物になったり、お腹が裂けてでろんってなったり、変なサイレンが鳴ってたり、怪物が出たり、そんな世界」

「気持ち悪いわね」

「うえ、よくそんなんで普通にしてくれるわね。さすが凧」

二人とも正直者だな。一周回って逆に清々しい。

「りん子姉さんは率直だね。あと、姉さんさすが私ってどういうこと？」

私自身気持ち悪いと思っているのだからそれを言われるのは当然だと思うが、目隠し姉さんの言った余計な一言はいただけない。それってつまり馬鹿っていいいいのかコノヤロー。

「凧太いわねって言いたいだよ。それとも馬鹿だから分からないかしら？」

「言った！ 言っちゃったよ姉さん！ 私は馬鹿じゃないよ！」

「なら凧太いの方だね。凧らしいわ」

「りん子姉さんまで……」

まるで名案だとも言うように手を合わせて拍手を一つ打ち、私のことを凧太いと見事に言っただけたりん子姉さん。私はそんなに凧太くはない。むしろ豆腐メンタルな臆病者だ。忘却を望んでいる時点でそれは決定事項だろう。

「そういう姉さんたちはどうなのさ」

問いかけるとピクリと肩を震わす目隠し姉さん。りん子姉さんのほうには反応がない。どうやら受け入れるか諦めるかしているよう

だ。それともダンガンロンパで言う絶望しているからなにも思わないのか。ねっとりしたジト目だけでは心理学を習ったって意図は読めず、少し分かったとしてもそれが正解かどうかはなんとも言えないだろう。

「私はそうね、暗いのは多分皆一緒だと思うけれど、メスとか鉛筆とか、尖ったものが沢山散らばっているわ。フォークでケーキと一緒に食べられそうになったり、矢に乗って飛んでみたり、とにかく尖ったものが一杯。別に尖ったものが怖いわけでもないのに、変よね」

確かに、私も赤かったり黒かったりするものが嫌いなわけではない。ぼかしたけれど、内臓とかもゲームでは引いたものの普通にプレイすることができていたし。だがこの世界の夢とはすなわち現実の延長線上である。つまり、りん子姉さんは実験と称して嫌な目に遭ったことが多いのだろう。だからメスとかが出るのだ。それで無意識のうちに苦手意識が出来て、それに関連するものも勝手に夢世界に入ってきた。こんな感じだろうか。

矢は、まあ早いイメージがあるので移動エフェクトだろうか？ 確かゆめにつき派生の *no st Al ige* で流星、ホウキ星が移動エフェクトであったはずだ。それと同じように早いイメージのある矢は多分そうだと思う。殺傷エフェクトは尖った物の中で選ぶには膨大すぎて検討もつかないので保留。

人の夢を考察するのは楽しいが、それはネットだけにしたほうがよさそうだ。なんだか気分が悪くなる。というより、自分が当事者でもあるから他人に夢考察されるのを考えたらなんだか複雑な気分になるしね。

「ところで、あんたは？ ヒイラギ」

「え？」

その言葉にその場が凍り付いた。

りん子姉さんの目は真っ直ぐ目隠し姉さんを捉えているし、その一言で目隠し姉さん——ヒイラギ姉さんの肩がビクリと震えたからだ。

「……」

「そろそろリラックスしてきたと思っていただけけど、まだ無理かな。どう？ まだ、話さないの？」

彼女が言いたいことはすぐに分かった。私は面会謝絶を解除されてすぐにその経緯をかいつまんで話したし、夢の話もした。だが、彼女だけはその話題に一言も口を挟まなかったのだ。

不穏な空気が流れる中、辛うじてどもることなく私は口を開く。

「姉さん名前もらってたんだ。でも、約束通り話したくないことは話さなくていいからね」

「なんだよ風、まるで私が悪者みたいじゃない。でもね、あんたも私も、嫌なことは話したし、受け入れたわ。そろそろ秘密にするのが苦しくなってきた頃合だと思うの。別に話さなくてもいいけれど、それじゃあ後ろめたい気持ちのまま、満足にお喋りもできないわ。全部吐き出したほうが身のためなんだよ」

姉さんは俯いて震えている。流石にそんな状況の彼女に無理強いさせる気はない。確かに彼女は正論を言っている。このままでは秘密を抱えた罪悪感で会話も楽しくできないだろう。ずっと怯えていなければならぬ。でも、だからと言って少し強引なりん子姉さんのやり方には納得できないのだ。

「それでも、本人が納得できないと話したって意味ないよ」

「お人好しだなあ。それに短絡的。いや自分勝手かな？ 風だつて気になっていたんでしょ？ 人は正直でなくちや。私は嘘が嫌いだよ」

「だからって強要するのは駄目だよ。それに嘘は言っていない」

私は一言も「知りたくない」なんてことを言っていないのだから嘘ではない。彼女は正直者すぎる。自分が吹っ切れているからって他人にもそれを強要するのは駄目だ。絶対にやってはいけない。

「それとも、ヒイラギ。あんたはそんなに……信用できない？」

ビクリと彼女の肩が震え、とうとうヒイラギ姉さんは体を腕で抱きしめ、しゃがみこんでしまった。

「ちよつと姉さん！」

「あんたはどいてな」

ベッドから動かなかっただけで義足は付けたままだった姉さんが勢いをつけて立ち上がり、カツカツと硬質な音を立ててヒイラギ姉さんに近づいていく。あれ、姉さんあんなに歩くの上手だったっけ。

私は止めようと動いたのだが、彼女の素早い行動とあの、仄暗い瞳に怯んで一瞬近づくのを躊躇してしまった。

「風。あんた友達がどんな奴でも受け入れられると思う?」

「そ、それはどういう意味で?」

「あらゆる意味で」

目の前にしやがみこみ、震えるヒイラギ姉さんではなく、こちらに視線を寄越した彼女の目はとても冷たい。そんな彼女に私は言葉を一つ一つ選びながら言った。

「なにか間違った行動をしているのなら指摘する。でも姉さんのいう『どんな奴でも』が変えようのないどうしようもないことなら多分、受け入れるよ」

姉さんはヒイラギ姉さんをそっと抱きしめるとその頭をゆるやかに撫で始める。そして、声だけは冷たいまま小さく呟いた。

「そう、やっぱりあんた自分勝手よね」

「自覚もないし」と溜息を吐いてから姉さんは屈み、ヒイラギ姉さんの頭を撫でてから言った。

「あんたは絶対に受け入れるわ。そういう性格だもの」
撫でていた手をだんだん下へ滑らせていき、その包帯に手をかける。

「大丈夫よ」その一言に顔を上げたヒイラギ姉さんの包帯は広範囲に渡って塗れていた。声を抑えているせいか息が詰まって頬も紅潮している。包帯が淡く灰色になり、彼女は真っ直ぐとりん子姉さんを見上げていた。

はらり

包帯を丁寧に解かれて頭の後ろに尾を引いていた純白のそれも取れていく。そうして現れたのは、目を瞑ったヒイラギ姉さんだった。

だが、すぐ異状に気がついた。左目の目頭から鼻の頭までぱっくりと傷口があり、目尻のほうも耳までとは言わないが大きく裂けた後が

ある。元が綺麗な顔立ちをしているだけに少し残念だが、それでも十二分に可愛い。それが、目を閉じたままであつたならの話だが。

「姉さん……これ……知って……」

「み、見ないでよお！ どうせ風だつて怖がるんだ！ アイツらみたいに気持ち悪がるんだ！ やっぱりだめよりん子姉さん！」

りん子姉さんは黙って彼女の頭を撫でる。

彼女は目を開き、とてつもなくその大きな目に涙を溜めている。目は真っ赤に充血していて、沢山泣いたことが分かる。しかし、彼女は左目しか開いていない。右目には縫合痕があり、そちらは開けないようになっていいるのだ。そして、開いている左目はあろうことかぱっくり開いた傷までも開き、その目が鼻の上にあれば単眼と言えるほどに大きな目をしていた。焦点は合っているので視力は無事回復したらしいが、なるほど、これは荒れるわけだ。私の反応が怖くて頭を振るその姿は直視もはばかられるほど痛々しい。

りん子姉さんのジト目が私に刺さる。

正直、怖い。大きな目はこちらを不安にさせる。それでも、彼女は彼女だ。少しきこちない動きになってしまったら拒絶されて、終わりになるだろう。でもそれは嫌なのだ。りん子姉さんの言うように私は自分勝手なのだろう。打算的とも言うべきか。彼女に拒絶されたくない。だから私は息を落ち着けて、普段通りになるよう笑顔を浮かべた。

「ヒイラギ姉さん」

にやりと笑つたりん子姉さんが抱きついてくるヒイラギ姉さんをそつと立たせ、その背がこちらに向くように移動する。相変わらず拒絶の言葉を撒き散らし、りん子姉さんの病衣を涙で湿らせていたが、今なら無防備だ。今しか、チャンスはない。

「ヒイラギ姉さん。私言つたよね？」

ますますりん子姉さんに引っ付き、姉さんは苦笑を浮かべてその頭を撫でている。

「私ね、姉さんのことが大好きなんだよ」

あのときと同じ、後ろから抱き着いてその背中に頭を埋める。今度

はりん子姉さんもいてふたりでサンドイッチにしているのだ。悔しいが、二人のほうが安心感は段違いだろう。

「っ——」

泣き声を抑える必要なんてない。私たちはちゃんと受け入れる。そして、これまでと同じ日常を過ごすんだ。

「あああああ！」

私たちに抱きすくめられて泣く彼女。それを見ながら頭を撫で、「あんたならそう言うと思ったよ」と言うりん子姉さん。

そうしてようやく、本当の友達になれた気がした。



「姉さん、知ってたでしょ」

「なんのことかしら？」

泣きはらして寝てしまったヒイラギ姉さんを撫でつつ彼女は冷たく言い放つ。

「ヒイラギ姉さんの…… その、目のこと」

隣り合って座り、こちらに視線を向けない彼女に問う。表情を変えない彼女は一度黙ると虚空を見つめながら答えた。

「ああ、知ってたよ。それがなにか？」

「嘘が嫌いだって、言ってたのに」

「誰が嘘つきだって？ 私は一度も知らないなんて言っていないわ。あんたが勘違いしてただけだよ」

「私は一言も「知りたくない」なんてことを言っていないのだから嘘ではない」

「 風だって気になっていたんでしょ？」

確かに、そうだ。私も、彼女も嘘なんてついてない。気になってたんでしょ？ なんて質問も過去形だし、無理矢理捉えれば自分も気になってたが既に解決しているという意味にもなる。

ああそっか、りん子姉さんも私と同じ。なんとなく、似てるんだよなあ。

だからなのか、こんなに彼女が怖いと思うのも、気持ち悪いと思うのも、惹きこまれてしまいたいそうなのも…… そっかあ、同族嫌悪なのか。同族嫌悪だったのか。

「そっかあ」

「そっかあ」

そっけなく返した姉さんと目が合う。

「姉さん、私言いたいことがあるかもしれない」

「奇遇だねえ。私もだよ」

にやりと不敵に、そして不気味に笑った彼女と互いに指をさして言い放つ。

「私姉さんのこと嫌いみたいです」

「私アンタのこと嫌いだわ」

くしやり、と鋭い視線が崩れて笑う。

ああ、友達って素敵だなあ。

互いに笑いあいながらヒイラギ姉さんの額を撫で、そう思った。

No. — 『番外小話』 — 写真 —

「お写真を撮りませんか？」

橙子ちゃんの元へ行つたときにそうメイ子さんが提案した。

「え、でも私、素顔出せないよ？」

だが、橙子ちゃんは困つたような顔をして言う。少しくぐもつた純粹そうな声に心苦しくなりそうだ。なにこの子超天使！

「それなら私も、ヘルメット被つたまま並んで撮るよ。それならいいでしょ？」

「ええ、そうですね。ささ、並んでください。防護服越しても笑顔はちゃんと写りますから」

ほら、翠君も思い出は大切だと言つていたし、なにか形に残るも物を作つて置いた方が良さのかもしれない。メイ子さんもそれを感じているのか、それとも、ただ単純に写真を撮りたいのかは分からないが、こんな長閑のどかな日があつてもいいだろう。目の前で揺れるメイ子さんの三つ編み尻尾を見ながらそう思った。

「ほらほらお嬢様方窓のところに並んでください。撮りますよ」

「ダメ！メイも撮るんだよ！」

「そうですね、一緒に写りましょう！」

狼狽しているメイ子さんの手を二人して引つ張り、お互いにクスリと笑う。予想外のことが起きたときにメイ子さんは弱い。困惑とも、喜色ともとれる面白い顔をしている彼女に悪戯気に笑つてから「タイマーがあるでしょ」と後押しする。

「か、かしこまりました。それでは、私は後ろに」

メイ子さんの言葉を遮るように私が言う。後ろで微笑む彼女もいいが、私的には保護者な位置取りよりももつと仲の良さそうな写真が撮りたいのだ！

「それもダメ！ほら、真ん中でしゃがむの！」

「あ、そうするの？よし、それにしましょう！ほらメイドさんも早く——！」

上手く橙子ちゃんも乗つてくれたことだし、安心だ。これならメイ

子さんも断れまい。

「あらあら……承知いたしました。では、いきますよ」

苦笑いをしてカメラをセットし、窓際へと小走りで近づくと彼女を真ん中にしゃがませて両隣から挟み込み、片手でピースをする。綺麗に結われた黒髪からシャンプールの良いに香り。思わず顔が緩みそうになる変態衝動を抑えて橙子ちゃんを見る。悪戯つ子のように微笑む彼女と目が合い、また正面を向いた。

パシヤリ

乾いた音が鳴ってカメラが作動する。終わったことが分かり、すぐさま立ち上がったメイ子さんはどこか嬉しげに歩き、撮れた写真を見定めている。

「どうだった？」

「ええ、綺麗に撮れましたよ。はい、どうぞ」

「わあ、本当に綺麗に撮れてる！メイドさん凄いいねえ」

メイ子さんからカメラを手渡されて覗き込む。

薄いオレンジ色の暖かいイメージを持つ壁紙に窓際の観葉植物。窓の外には青々とした樹が生えていて、青空を引き立てている。そしてその前にいるのが私たち。正面から見て真ん中で穏やかに微笑むメイ子さんに、左隣に照れ笑いをしている橙子ちゃん。右側に満面の笑みを浮かべて大きくピースサインをする私。少し、恥ずかしい。

「お嬢様、お写真を撮るのであればお友達のお二人の所でも一枚いかがでしょうか？」

「あ、それいいですね。行ってきなよ、凧ちゃん」

ふいにメイ子さんがそう言った。相変わらず微笑んでいるので真意は読めないが写真を撮るのが楽しくなってきたのだろうか。だが、今日は橙子ちゃんと遊ぶ約束があるのだ。

「え、でも約束は？」

私が言うと橙子ちゃんは朗らかな表情で「私は大丈夫だよ」なんて言う。

「思いついたときにするのが一番だもんね！」

「うーん、橙子ちゃんがそう言ってくれるならじゃあ行って来ようか

なあ」

「それでは行きましようか」

手を繋がれながら橙子ちゃんの部屋を出る。

「じゃあまたね、橙子ちゃん！」

「またねえ〜」

さて、次は姉さんたちだ。

「こんにちわー」

この時間ならば二人ともりん子姉さんの部屋にいるだろう。私は行けないこともあるが、二人は、どうかヒイラギ姉さんはほぼ毎日りん子姉さんの部屋へと通っている。昼食の時間は終わっているし、大丈夫だろう。

「ん、馬鹿風じゃない。今日は約束があつたんじゃないの？」

「あら珍しい。あんたが約束を放つてこつちに来るなんてなにかあつた？」

初っ端からわりと酷いことを言うヒイラギ姉さんは置いて、やはり約束があると言っていたのにこちらに来たのは珍しく感じられるのだろうか。

「橙子ちゃんのところまで写真を撮つたんだよ。だからこつちでもと思つて」

ジト目になってヒイラギ姉さんを睨むが、包帯をしているのでどこ拭く風。りん子姉さんは面白そうに眺めているだけ。まあ、無駄な抵抗はやめておいて、本題である。

「へえ、そうなの。残念だけど、私ベッドから動く気ないから。義足をいちいち付けるのも面倒だからね」

りん子姉さんが言う。やはり足を切ってしまったのももう不要だからと考えているようにしか思えない。それとも、言葉通りにただ面倒なだけなのか。にやにやした笑いになんだか複雑な気分になってくるがいつものことなのでスルー。

「ならベッドに座つてるところでもどう？」

「私は別にいいわよ。でも、現像したのはあとで頂戴ね」

「ならそれで」

ヒイラギ姉さんの許可も得たことだし早速写真を撮ろう。

「メイ！」

「はい、承知しておりますよ」

メイ子さんがカメラを持って前に出る。りん子姉さんはその場から動かず、ヒイラギ姉さんを手招きしている。見えないはずなのに、ヒイラギ姉さんも頷いてベッドに座る。今回は三人なので普通にメイ子さんに撮ってもらうことにする。

「はい、チーズ」

パシャリ

二度目のシャッター音が鳴る。というか、メイ子さん意外とお茶目だった。まさかメイ子さんの口から「はい、チーズ」が出てくるとは思ってもみなかった。

「では、現像して参りますのでお待ちください」

そう言って彼女が持ってきたのは二枚の写真。

これからはずっと私の部屋に飾っておこう。そう思った。

No. 6 『日没』 ―茶会―

「メイ、疲れた交代！」

「まだ混ぜ始めたばかりでしょーが！ 私に貸しなさい！」

「あ、ちよつと、ヒイラギ姉さんいきなり揺らさないでえ！」

押しつけられてよろけ、後ろのテーブルに肩をぶつける。

辛うじてボウルから手を放していたので大事はなかったがじいと痺れる腕に悶絶しながら余裕でボウルの中身をかき混ぜる姉さんを睨んだ。

しかしいつものように軽く包帯をしていることもあつてか姉さんはそんな視線にもどこ吹く風。

「いったーい！」

「いちいちアンタは大げさなのよまったく。交代するなら私がやってあげるつてのに……」

ガシヨガシヨとボウルと泡だて器が擦れる音が心地良い。

私はぼそりと言われた言葉に少しにやけながらも卵白に足すグラニュー糖の準備をし始めた。

「予熱開始。あ、あと牛乳とバターはもう溶かしてあるからね。まったく、やっぱりハンドミキサー使えばよかったんじゃないか」

「泡だてを自分でしたいと言ったのはお嬢様ですわ。ヒイラギ様も任せてしまつていいのですよ？」

私が姉さんの言葉でほっこりしていると聞こえて来たりん子姉さんとメイ子さんの辛辣な言葉。た、確かに泡立ててみたいとは言ったけど！ ハンドミキサー拒否したけど！ こういうとき普通は交代しながらやるものじゃないですかね？

「言い出しっぺなんですからちゃんとやってください。お嬢様の我儘にお応えするのはキョウイクに悪いんですから」

「うう」

意気消沈。まさにそれが今の私を表す言葉だ。いつもだつたら多

少は無茶な要求でもものむというのになんでだ。甘えすぎなのか？子供っぽ過ぎるといいうのも問題なのだろうか。どのくらいのさじ加減が一番いいのかが分からない。大体、周りにいる子供の精神年齢が高すぎるんだよ。

「おや、メイったらいつからそんな熱心なことを言うようになったんだい？」

「甘くてはお嬢様のためにならないかと」

下準備をしている二人の問答が聞こえて耳を澄ますとそんな会話をしていた。

ああ、気になる。もう一度ヒイラギ姉さんと交代し、ガシヨガシヨとボウルの中身をかき混ぜながら意識を集中させる。

「今でも甘々なくせに……」

「何かおっしゃいましたか？」

「いや、なんでもないよ」

りん子姉さんの眩きにメイ子さんが笑顔で答えている。見なくても分かる。なにか誤魔化すときのメイ子さんはいつも怖いくらいの笑顔なのだ。

「はい、グラニュー糖」

グラニュー糖を小分けにした器をヒイラギ姉さんが持ってきた、のだが。

「姉さんそれ卵黄」

「あ、あれ？ これくらいの重さじゃなかったっけ？」

最初のときよりも細かく分けたから重さも変わっている。ま、交代してもらった私が分けたんだけれども。これを言うと怒られそうだから黙っておこう。ちよつと狼狽している姉さんも可愛いし。

音と匂いと感覚と包帯越しに見える光だけでテキパキ動ける姉さんは十分すごいんだから少しくらいこういうドジッ子ぽいところがあったほうがいいよね。私がそうさせているんだけれども。

ちよつとした悪戯心だからしょうがないね。

「卵黄はまだだよね？」

「まだですね」

「ケーキ型のほうも準備したよ」

「ありがとうございます」

やっぱり楽しいなあ。皆でお菓子作りするの。

唐突な提案だったけれどちゃんと採用されて良かった。

橙子ちゃんは私たちと違って正規で入院している子だからお菓子は食べられないし、防護服があってもあちらの病棟からは許可を取らないとやって来れないので不参加だ。

「角ができるまでしつかり混ぜてくださいね」

「はい」



「うわあー」

皆でお菓子作りをして、テーブルに並べたケーキを席について眺める。いつもは全部メイ子さんが用意してお茶会をするのだが、こうして手伝ったり料理を覚えたりするのもいいものだね。メイ子さんは立場を考えてなんでも自分で用意しようとして私にはなにもさせないようにしているようだけれど提案されたら断れないし、普段疲れているんだから息抜きがないとね。

多目的室を一室借り切り、近くの簡易キッチンで作ったケーキを運んである。普段はお湯を沸かしたり、電子レンジが置いてあるだけの場所らしい。メイ子さんが普段利用している場所は病棟から遠いので流石に許可が下りなかったようだが、今日はこれで十分だ。

猫柄のテーブルクロスを敷いて、椅子には嵩増しのクッションを乗せて小さい私達でも大人用の椅子に座られるようになっていた。

大きなお皿には赤くてぷっくりと太ったイチゴの乗ったショートケーキがホールで。私たちの前にはそれぞれ簡素な取り分け皿とフォーク。カップには桃色を少し混ぜたような綺麗な琥珀色をしたローズヒップティー。大きめのビンにはとろりとしたハチミツ。砂

糖壺には白い角砂糖。

手作りにしては綺麗に形が整えられたケーキができて皆大満足だ。

「では、お茶会を始めましょうか」

メイ子さんが手を合わせ、音頭をとる。皆子供なのでこういうところはお茶会・おやつ会だとしてもしつかりしている。私たちは入院患者には食べられないものを頂くのだから尚更に。病院食は薄い味付けだから甘いものを食べるのにも許可がある。その分私たちは健康的には問題がないからお菓子を食べられるわけで、お菓子を食べる際にも「いただきます」が恒例だ。

「それでは、いただきますしよう」

彼女の言葉に合わせてそれぞれが違うタイミングで「いただきます」を言う。こんなところは皆子供らしく少し大きめの声で誇らしげになっていて、面白い。

「……結構綺麗にできたわね」

唯一椅子にクッションを敷かなくても肩より上が見えるりん子姉さんがぼそりと呟いた。

まじまじと取り分けられたケーキを眺め、フォークを入れるのに少し戸惑っている様子が窺える。だがそのわりには机の下で足をぶらぶらと揺らし、楽しみにしていることが分かる。義足は付けたままなので勢い余って私の足にちよつとしたダメージが来るからだ。そのことを言ったら普段は見れない狼狽える姿が見れたかもしれないが、本人の名誉のために黙っておこう。

「うん、いい匂い。メイドさんがいるからかしらね。いつも美味しいもの用意してくれるしお店でも出せるんじゃないの?」

頬を染めてフォークを手にしたヒイラギ姉さんが髪を揺らしながら言う。

メイ子さんのお菓子は本当に美味しいから私も同意の声をあげた。「だよね、メイのご飯は美味しいし、あんまり甘いものが食べられない私でもメイのケーキは毎日でも食べられるくらいだよ。あ、でもお休みの日にこんなことで呼んじやってごめんね」

「お気持ちありがとうございますのですがお店だなんてそんな…… 皆様に喜んで頂ける今が一番の至福のときですから凧お嬢様も気になさらないでくださいな」

今日メイ子さんは写真を加工してペンダントにするため外出して来ていたのだ。そのためにお休みを回してくれたというのに、朝出かける前に思いついた私の我儘で帰り道にケーキの材料まで買ってきてくれた。お菓子作りの指導までしてくれるし、凄く自然に幸福だなんて言っちゃうし、やっぱり女神か。

そんなことをさらつと言っちゃうものだからこちらも一瞬何を言っているか分からなくなつて、出て来た返事はどれもながらの拙いもの。ええい、情けない！

「あつと、ええと、あつ、ありがとう。メイ」

「照れてやんのー」

「おや珍しい。イイもん見させてもらったよ」

隣に座ったヒイラギ姉さんに顔を覗きこまれ、正面に座っているりん子姉さんにはからかわれ、ますます顔が熱くなる。ケーキを掬おうとしていたフォークは宙を空振り、取り落とす。

「あー」

小さく乾いた音が鳴り、手に持っていたフォークがテーブルに落ちてしまった。

「あら、落としたフォークは変えて来たほうがいいですね。少し待っていてください」

傍に控えていたメイ子さんが落としたフォークをさつと拾い、部屋を出る。私が引き留める隙が一部もありはしなかった。流石のメイドである。

「あー……」

「何やってんのよ。もーおバカ」

「キミって本当にメイドさんのこと好きだよね」

「うえっ？」

この際、からかわれるのは別にいいのだが毎回変な所に目をつけるのはやめてくれませんかねえ、りん子姉さま。姉さんの被害者はヒイ

ラギ姉さんだけで十分だと思うよ。

「そ、そりゃあそうだよ。育ててくれてるし、お母さん…… みたいなものだし」

そこで惚気る。それが私。

「うわあよくそんな簡単に言えるわね……」

「はあ熱い熱い」

「引かないで!？」

ああなんだか懐かしいな、この女子会みたいなノリ。生前はよくこんな感じでからかわれたものだね。んでも今は今、昔は昔。幼いながらも自然に女子会のような雰囲気になるのに少し感動。うん、やっぱ少しは弄られてもいいかな。そういうのは正直苦手だけど、二人相手ならいいかもしれぬ。

「お待たせ致しました。フォークをお持ちしましたのでお使いください」

「ありがとう、メイ」

今度こそ、とフォークをケーキに差し入れる。手伝ってもらったおかげでふわふわと仕上がっている。生クリームも市販のものとは違って手作り感溢れる少し物足りないくらいの出来だが、そこがかえって作った達成感があつていい。苺も上等。甘酸っぱくって何個も食べたくなるくらいだ。

そんなに見つめてもあげないよ、ヒイラギ姉さん。

「苺ならまだありますし、ヒイラギ様もおかわりなされますか？」

「お、お願いするわ」

おお、用意周到だな。パックの余りでもあつたのかな。

「ああそうだ。メイ、写真の方の首尾はどう？」

「ええ、大勢の写真ですので小さいロケットペンダントに収めるのは難しく、大きめの物を扱うことになってしまったのですが……」

申し訳なさそうな顔をして言いよどむメイ子さん。ロケットペンダントは元々一人分の写真がメジャーだし、お願いしたのは私だからそんなに注文をつける気もない。彼女が優秀だつてことは私が一番よく分かっているからね。

「それなら大丈夫。多少重くてもデザインがいいなら気にしないし」
「承知いたしました。楽しみにしていてくださいね」

笑顔で応える彼女に私も思わず顔がにやける。

「食べないんだったら貰ってもいいかしら？」

「アンタだけよ、まだなの」

メイ子さんと目を合わせて笑いあっていたらいつの間にか手が止まっていたみたいだ。半分ほど食べたケーキにフォークを入れ、食べ進めていく。

食べ終わった二人の姉にはメイ子さんがカップを温め、紅茶を入れてる。りん子姉さんはビンからハチミツを入れ、ヒイラギ姉さんは角砂糖を入れ、優雅に口をつける。小さくアチチという声が聞こえてきているので温度が高いらしい。紅茶の温度は高い方がいいんだろうけれど、子供は猫舌だからしょうがない。

「お嬢様方、食器をお下げ致しますわ」

「ありがとうございます」

「その、お嬢様。食器をお下げしたら下がってもよろしいでしょうか」
食器を重ね、出ていく一歩前で思い出したように彼女が言った。

メイ子さん自身もケーキは食べ終わっているし、紅茶は自分でも入れられる。冷蔵庫には予備のお茶もあるから温かい紅茶がなくなっても変えが利く。

彼女にあまり長く休みを使わせるのもよくないだろう。それに、今日は彼女にとってお休みの日なのだ。色々やりたいこともあるだろうし、外出でもしてくるのだろう。

「いいよ。あとの用意は私達でもできるし」

「そうね、片付けも風がやるし」

「りん子姉さんはずっと立ってられないものね」

「え」

「ヒイラギは見えないし、危ないもの」

「え」

私の言葉も全てスルーされ、二人はにこやかにメイ子さんを見送る。

「ありがとうございます。あとはよろしくお願いいたしますね風お嬢様」

「メイまで!?!」

その後、紅茶のおかわりも、食器の片付けも、全て私がやったというのは必然のことだった。

No. 6 『日没』―秘密―

私が生まれ変わってから、今は何度目の春だろうか。

橙子ちゃんに出会ったのは六歳の頃だった。それからクリスマスにはプレゼントを贈りあつて、誕生日を迎えて、七歳になった。

そしてうろつき、織月りづきや翠あきら君に出会い一時期は楽しく過ごしてそれが一気に崩れた。今でも織月ちゃんの笑顔を思い出すことができ。あれから彼女は病院に訪れることはなかった。どうやらメイ子さんが私の部屋に戻った夜明け頃には既に誰もいなかったらしい。それ以来、会うことはできていない。

それから怪物兄弟に階段から突き落とされて数ヶ月療養していた。思えば、一番は橙子ちゃんに出会った頃として、二番目に平和だったのはこのときかもしれない。メイ子さんとくだらないことで言い争ったり、姉さんたちがお見舞いに来てくれたつけ。この頃、八歳になった。

そしてまた半年がたった頃、忘却できない心の傷トラウマができた。三日も寝て、姉さんたちと本当の友達になって、それから検査もあれども楽しく暮らせていたのだ。

お茶会を姉さんたちを交えて開き、時々仕事で断られるときもあったが、月に何回かメイ子さんにお菓子作りや料理を教わった。楽しいひと時だった。

そして、その間はずっと傍にメイ子さんがいた。支えてくれていた。

だというのに今は違う。

あまりにも楽しくて変化に気がつくのが遅れた。

一番大切な人なのに、気がついてあげられなかった。

私はそんなに薄情な人間だったのかとただ愕然とした。

初めに気がついたのはそう、心優しい橙子ちゃんであった。

「最近なんだかメイドさんの様子がおかしい気がする」

その一言に私は凍り付いた。目先のことばかりに注目して私は一番の宝物を放り出し、惚けていたのだ。メイはなにがあっても大丈夫

だと、そう無意識のうちに思っていたのだろう。愚かなことだ。日常は簡単に崩れる。今までそう学んできたはずだったんじゃないか。お前は一体なにを見て、何回後悔したのだ。自分ばかり責める声が木霊する。勿論そんなものは妄想で、幻聴でしかない。それでも自分を責めたてずにはいらなかった。

メイ子さんは今まででは過保護なまでに傍にいたというのに、今はとても帰りが遅い。日が経つごとに目に隈ができていく。夜もまともに眠れていないようだ。注視していればすぐに分かることだった。今までの私は本当になにをしていたのか、自己嫌悪に唇を噛み締める。

一体どうしたのだろう。なにがあったのだろう。これが杞憂であればいいのだけれど、橙子ちゃんや姉さんたちも口々に心配を口にする。嫌な予感がした。だが、既に手遅れな気がした。

思い出せ、なにか予兆はなかったか。いいやなにもなかったはずだ。なぜなら彼女はほとんどの時間を仕事と私に割いている。その間になにかがあればすぐに分かっってしまうだろう。なにがあった？ いつ、どこからおかしくなった？ 考えても答えは出ない。

私の目が離れたときなんて…… 思い立ってしまった。あのとときだ。あのとときしかない！ なんせ私は三日間も寝ていたのだ。半日気絶するのでは空白のある期間が違いすぎる。なにか切欠があったとしたらあのとときしかない！

「メイ……」

真夜中。メイ子さんは帰ってこない。いつもなら既に仕事を終え、自室にいらるであろう時間なのだからここに訪れないのは当たり前のことだ。しかし、私はどうしようもなく寂しかった。早く顔を見て安心したかった。

ピンクの猫クッションを抱きしめて必死に目を瞑る。

…… 眠れない。

焦燥感が首をもたげて私に襲い掛かってくる。駄目だ気になって仕方がない。それでも翌朝にならないと彼女はここを訪れない。また部屋を抜け出しても碌なことにはならないと核心できるし、そんな

ことに心の天秤を傾けてはいけない。判っている。理解しているのだ。理性では納得していても、精神は納得してくれない。黙って枕を濡らし、後悔に打ちひしがれることしか今の私にはできないのだ。

折角姉さんたちと本当の友達になって、幸せが戻ってきたと思ったのにどんだん周囲が仄暗くなつていく。ああ、なぜこんなにも幸運は私を追い詰めるのだろうか。

自分の才能については理解しているつもりだ。超絶的な幸運。でも私はこれに苦しまされている。周りもこれによって被害を受ける。現に、怪物次男は幸運にも薬品を被らなかつた私の代わりになり、犠牲になっている。

これではまるで、私が皆から幸運を奪い取っているようだ。こんなもの幸運じゃない。幸運ならば私は幸福であるべきだ。ならこの才能はなんだ？ まるで幸せになんてなれやしない。周りから幸せを奪い取っているのに私自身は幸せなんかじゃない。

例えば、狛枝凪斗は抽選で選ばれたから「超高校級の幸運」と呼ばれているだけ、本人が自分の才能を「幸運」という名前に落ち着けて納得しているだけだ。本当の名前は誰にも知られていない。この幸運もまた、私にとつての怪物に他ならない。名前をつけるなら、そうだ理不尽なこの現象に相応しい名前を決めるとするならば……

「 奇跡 ”

そう奇跡。幸運の出来事は少なからず本人が幸せに思う出来事がある。苗木は結局幸運ではなく希望だったわけだし、狛枝がそうだったとしてもおかしくはない。

奇跡というのは偶然の頂点である。その結果は良いとも悪いとも限らない。幸不幸は関係ないのだ。

これならばきつと今の私の状態が言い表せる。そうだ、こんなものが幸運なわけがない。自分だけに起こる奇跡。だから周りの被害は関係なく起こる。

なんて皮肉なんだろう。一度死んだ私が奇跡的に記憶を宿し、生まれ持った才能が理不尽な奇跡。こんなことならば記憶なんていらなかつたというのに。

「おはようございます、 風様」

がらりと、扉が開く。いつの間にか夜は明けて、起床の時間になっていたようだった。

私は突如解放された感情に流されるがままクッションを放り投げ、メイ子さんの白衣へと抱きつき、そのまま目一杯抱きしめる。

視界の端でクッションが窓にぶつかるのが見えた。

「どういたしましたか？ そんなに泣かないで。どこか痛むところでもあるのでしょうか。それともまた怖い夢を見たのですか？ 私はここにいますよ。どうか安心してください」

「メイ、〜」

疲れた顔をしたメイ子さんには申し訳ない。だけれど大泣きしてしまった今となっては涙腺は緩みっぱなしで止まる気配をみせない。自分でもどうにもできないのだ。

「なぜそんなにも泣いているのですか？ 風様は少しのことでは泣かないでしょう？ なにがあつたのですか？ 私に教えてくださいな」

背中を一定のリズムで叩いて優しい声音で「ゆっくり、落ち着いてくださいね」と声をかけてくる彼女に、更に涙が溢れてくる。次から次へと出てくるそれに自分自身も困惑するくらいだ。

「どこにもいがないでええ！」

「風様はとても大人っぽいですから失念していたようです…… ごめんなさい、寂しかったのですね。どこにも行きませんし、置いていきませんから安心してください。私はずっとお傍にいます」

頭を撫でながら屈んで抱きとめてくれているのが温かくてとても気持ちよく、さつきまでどこかにいついた眠気が顔を出してきた。大泣きして眠くなるなんてまるで子供だ。

だが、今は子供なのだから許されるだろうか。精神年齢なんてもうどうでもよくなってしまった。これで大人なのに子供みたいなことをして変だと言われてももうどうでもいいな。ある程度体に精神が引っ張られているのは間違いないのだし、もう私は生前の私ではない

のだ。こんなにも大好きな人がいて、大切な友達がいて、帰郷の意思なんてとうに消えてしまった。最後の最後まで私は薄情者で、親不孝者だった。あのとき私は生まれ変わったのだから、知識を利用することはあれど前の私は封じよう。今の私は優柔不断で、自分勝手なただの子供なのだ。

「メイ、なにが、あつたの？ 最近ずっと忙しそうで、すつごく疲れ
てる」

鼻声が治まらない上に涙と一緒に鼻水まで出る始末。完全にみつともない。震え、引きつりそうになる声でそう問いかける。

きよとりと目を丸くした彼女は「なんでもありませんわ。近々自由になる予定ですので」と軽い調子で言う。 “自由” の単語でピクリと肩が跳ねたが、彼女の言う意味はきつと通常のものだ。

メイさんに引つ張られ、その肩に私は頭を預ける。これでは彼女の表情が見えないではないか。しかし、その分私の顔を見ることはできないだろう。先程からあつてないような遠慮をなくすことができる。

思いつきりその白衣に顔を埋め、服を汚してしまうことが判つていながら泣き喚いた。それも大声で。きつと彼女にはうるさいだろう。服も汚して、手間をかけさせるだろう。それでも今はただの子供でいたかった。

「風様が悲しむならば、縛られるのはやめにいたしますわ」

そう呟いた彼女はそつとベッドに私を降ろし、何度目かも判らないが頭を撫でる。

「寂しいのは今日で終わりです。深夜までには帰りますから、心配は
しないでくださいいね」

「う、うん」

正直心配だった。だが、真剣な顔を見てしまえばそれを断ることも
できない。

「行って参りますお嬢様」

「いってらっしゃい」

その日一日、ついで彼女に出会うことはなかった。



「メイ、いい加減にながったのか教えて」

それから何度目かの個人料理教室。メイ子さんと一緒に好みのケーキを作って、お互いに食べあう。そんなひと時。

なんとなく既視感を覚えて頭の中の引掛を探す。なにか重要なことを忘れている？ なんだったつけ、とても重要で、大好きで大嫌いな事柄^{イベント}。

「風様、訊かないほうがよろしい事柄というものがあるのですよ？」

思い出さなければいけない。でないと、また私は後悔することになる。だけれど、何故だろう。もう手遅れで、終わりきってしまったという気がするのだ。なにか取り返しのつかない選択ミスをしたような違和感。

「私は――」

それ以上聴いてはいけない。心のどこかで封じた私が囁く。

「お嬢様」

それでも、私は聴かなければならないと思った。

「人を」

彼女に向き合えないといけない。私の唯一の人。一番大切な人。だからあのときのような生半可な気持ちではなく、本気で、彼女を受け入れなければならぬのだ。

「殺めてしまったのです」

ああ、解っていたはずなのに。どうして忘れていたのだろうか？ 生

前は大好きだった。しかし、今は大嫌いになった事柄。^{イベント}

メイドさんは、彼女は、どこかホテルと思われる場所で人を殺めてしまうのだ。

「どこにもいかないで」

だから私は引き止める。彼女がどこにも行かないように。正体を暴かれた鶴のようにどこかへと逃げて行ってしまわぬように。

彼女は私の言葉に非常に驚いたようだった。物憂げに潤んでいた瞳が大きく開かれて一筋、涙が頬を伝う。

「なにがあっても、必ず帰って来て。誰にも言わないし、そのことは忘れる。だから、どこにも行かないで」

自分勝手さはもう自覚した。それでも願わずにはいられないのだ。私が唯一と言える希望^{ひかり}。それを失ったらきつと生きているはずなのに、死んでいるのと変わらない空っぽな状態になってしまいうだろう。なんとなく確信できた。

だから彼女を縛る。私のお願いで。そして、きっと彼女は断らないのだ。

私はずるい。それに誰よりも身勝手だと思う。でも、そんな私を愛し子としてくれるメイ子さんがなによりも尊い。おかしいな、一人で生き続けるよりももっと難しいはずなのに生きる目標が変わってしまった。

自己中心的だって罵られてもいい。

独善的だって嫌悪されてもいい。

自分勝手だって嘲られてもいい。

我儘だつて見放されてもいい。

他の誰よりも、メイだけが傍にいてくれさえすれば私は生きていくのだ。

独占欲？

共依存？

なんとも言えない。

私は彼女と進み続けるだけだ。

二人とも五体満足で寿命まで生きる。それが新たな目標。

八歳と半年ほどのときに起きた出来事だった。

No. 6 『日没』 ―恐怖―

「メイ、あの……」

「どうなさいましたか？ 凧お嬢様」

「…… いや、やっぱりなんでもないよ」

あれから、少しメイ子さんと接するのが怖い。

会話の度にちらちらとあのときの会話が脳内に浮かび、どうにかして彼女が追い詰められるのを止められなかったのかという罪悪感に胸がちくりと痛むのだ。これがただの自己満足で、自分勝手な思いだということは十分理解しているが、やはりああすればよかった、こうすればよかったという後悔の渦に飲み込まれてしまう。

先にできる後悔などない。だが、人間どうしてもそう考えずにはいられないのだ。死を悼むのは人間ばかりではないが、たればを考ええるのはきつと人間だけの特権なのだろう。

いつまでももうじうじとしているのは好まれない。理解している。しているが、これからのことを思うと憂鬱にもなるだろう。私の人生はかね考察に近いところを通っている。それが不安で仕方ない。

あのとき、私が動いていたら？

―― でも、怖い。

あのとき、私がつと考えていたら？

―― 知りたくなかった、思い出さなくなかった。

あのとき、私が一歩踏み出せば？

―― きつと、崖から真つ逆さまに落ちるだけ。

最底辺まで堕ちればきつともう失うものはないというのになぜそんなことを考えるんだい？

―― それでも、私は幸せになりたい。

幸運なのに？

―― 他者と分かち合えない幸運のなかが幸福なのか。

現実は一瞬停止も、リセットも、やり直すこともできないのだ。でも、それでも進むしかないのなら、やはり私は生きていたい。その過程で脱落する者はこの先、きつと増えるだろう。ただ一人の人間ができることなどたかが知れている。自嘲の念と濃い諦観が胸中を支配し、彼の大嫌いな感情ぜっぼうが鎌首をもたげて私を嘲笑う。だから私は暗い感情を胸に抱きながら理性で最良の選択をするのだ。

目の届く範囲でしか私は動けないのだから、世界中の苦しんでいる人を、惨劇を、患者を、友達を、親を見捨てることになってもただ一人、メイこそが傍にいればいい。手の届く範囲に常に置き、気にかけて、彼女が決していなくならないように命令権を使用して雁字搦めにして、そのたった一つだけを守る。

もう、私にはそうする道しかないのだ。

そんな選択しかできないのだ。

だってそれ以外にできることなんて知らない、思いつかない。確率が低すぎる。多くを手に入れようとすると、私の生存確率が減ってしまう。

心のどこかで、世界中が絶望に染まってしまえば私は “ 普通

” になるんじゃないかという思いが確かに存在していて私は自身に恐怖した。そして、その感情を大事に大事に仕舞い込み、理解しているながら飼いなすのだ。そんなことをしても意味はないのは分かっている。今更世界が変わったって私が変わるわけではないのだから。私が変わっても世界が変わらず動き続けるように。

しかしこの思いを殺してしまえば後々暴発しないとも限らないし、今はしっかりと向き合って、その上で受け入れ、のみ込み、理性を保つ。

こんなことをしていれば間違いなく “ 超高校級の絶望 ” 様に目をつけられるだろうが、最初から絶望して、その上で自分と上手く付き合っていけばきつと影響されることもない、と思いたい。

私が壊れるとしたら、それは……

「熱があるようですね」

「そう、かな……」

この人が死いなくなつてんでしまったときに他ならないだろう。

「大丈夫だよ、メイ。ちよつと暖房が効きすぎちゃってるだけだから」
「そう、でしようか？」

「ほら、メイの顔もちよつと赤くなってるし、今朝の検温とかは大丈夫だったし、検査で容赦なく弄りまわされたからちよつと疲れてるだけだつて」

無機物が歯を見せて不気味に笑ってるのも

医者が全員狛か枝れ凧たれに見えたのも

ペンがナイフに見えたのも

室内に虹がかかつて見えたのも

医者の一挙一動に腹筋崩壊したのも

経過観察している人たちに × される光景を幻視したのも

ありえないことに死にたくなつて、仕切りのガラスに何度も頭を打ちつけていたのだった。一時間も気絶すれば全部治ったしいつよりも軽い方だった。だから問題ない。

「ちよつとトイレ行つてくるね」

「お送りします」

「うーん…… 分かった」

正直過保護すぎると思うが、きっと私にはこのくらいが丁度いいのだろう。むしろいきなり離れてしまったら過保護とか言うわりにダメージ食らいそうな気がする。

がらりと手元も見ずに扉を開けたことに小さな後悔。一步踏み出し、気が付いたときには既に遅く、その先にいた白髪頭にぶつかってしまった。

「おつ、と」

「あいたつ、つて」

互いに姿を認識し、沈黙が落ちる。

「あー…… その、だな」

目を泳がせる彼は前髪ぱつっんの怪物兄だ。なんだか複雑そうな顔をしながら言葉を探しているようだ。

なぜここにいるのかとか、あれからどうなったのかとか、私を恨んでいるかとか……色々訊きたいことがあったが、彼の表情は憎しみでも、恨みのそれでもないような気がした。

何か言いたいことがあるのだろうが、それを躊躇っている。もしくは突然顔を合わせてしまったから心の準備ができていなかったのか。彼の顔を認識した瞬間からぱちくりと瞬きを繰り返す自分と、歪んでいく視界を自覚しながらぼーっと彼の顔が視界に入らないように目を逸らす。

体は熱に浮かされるように熱くなり、知覚できるほどに心臓の動きが早くなる。ぎゅつと締め付けられるような感覚と、吹き出る汗。目が霞み、耳鳴りのような、砂嵐のような気持ち悪い音が聴覚を叩く。

やばい、彼の顔が見られない。

もう一度見たらどうなるか容易に想像できてしまうのが嫌だ。

「えっと、階段のときは、わ、わる、か、わ、わ」

あまりにどもってしまっているでくすりと笑い、一瞬気が緩む。

「!?……っあ、ううう」

笑い、目線を上げ、頭をかきながら苦笑する彼の表情を直視してしまったのだ。

目が離せない。

視線を動かせない。

体が動かない。

まずいと思ったときにはもう遅かった。視界が勝手に歪み、ぐるぐる混ざる。

その姿に無残な七三分けの次男を想起し、彼に合わせて虚像を作り出す。

例えばそれが自身の作り出す幻の姿だと自覚していたとしても、心の奥に刻み付けられた傷が私を蝕み、それが現実だと錯覚させようと苦しめる。

苦笑で歪んだ顔はその笑顔だけを切り取るように口だけが大きく

顔の真ん中に鎮座し、目元は潰れ、木の皮のように撫ぜればぼろぼろと剥がれ落ちそうなほどに肉はぼろぼろ。その上で、大きく陥没している。

肌が溶け、ケロイド状になったそれはまるで人の形をとったスライムがどろどろに溶けて元に戻ろうとするかのような有様。

私のとは違って綺麗な白髪がはらりと抜け落ち、肉は焼かれ、一歩間違えば肉塊がそこにいるかのような錯覚さえ引き起こす。そこから逃れたくて忙しなく視線を移動させても首元まで抉れ、咽仏が露出し、腕は骨まで見えて床には赤い水溜まり。

「■△○※??:◇」

声はもはや聴きとれず、耳鳴りと相成ってきいきいと響く悲鳴のよう

に聴覚が受け取り、ぞわりと肌が粟立つのを感じた。彼の周りにある病的に白い壁には飛沫が飛び、ずるりと落ちた肉が床に落ちる音さえ耳を叩くように響く。

幻聴の洪水と、幻覚の凄惨さにあのとときに戻ったような錯覚を始め、五感が狂わされていく。

「ごめっ、き、こえな、つう、ううえ」

意識せずともぼろぼろと落ちる涙。胃の中が引つ繰り返ったかのような吐き気。

ああ、胃の中身を今すぐぶちまけ、楽になつてしまいたい。そう考

えるもトン、と当たった手の温もりにギリギリのところまで思いとどま

る。

傍から見た私はきつと青褪めていることだろう。

だってこんなにも気持ち悪い。

きつと葉の影響がまだ残っていたのだ。でなければこんなに酷い

フラッシュバックが起こるはずがない。

「つふ、う」

ひゅつと息を吸い込み、メイにもたれかかる。

「◇○、◆?・△□?」

しかし、骨の見えるその腕を伸ばされてはたまらない。それが幻覚

だという自覚があったって見えるものが全てだ。聴こえるものが全

てだ。これが現実なんじゃないかという不安が過り、とても耐えることなんてできない。

「うっぶ、うあ」

もう、無理。

「△、□■！」

その後の詳しいことは割愛になるが、予定通りトイレに駆け込み、耐えきることができなかったことだけは申告しておこうと思う。

気分も良くなり、謝ろうと部屋に戻った時には既に怪物兄の姿はなかった。

No. 6 『日没』 ―白黒―

それは、寒さも厳しくなってきた冬の出来事だった。

今世で始めて、病院の外に出ることになった。それはとても素晴らしいことだろう。しかし、私にとってはそれがなによりも残酷なことだったのだ。

どうしてこんなにも不幸なのだろうか。そんなことを真剣に考え、てしまうほど私は参っていた。

「……」

西洋式の黒い^喪ドレス^服を身に纏い、ただ目の前にあるものを見つめる。

目の前には棺。その中にはもう二度と目を開くことのない彼女がいる。白く、化粧を施されて人形のように整った顔。白髪が目立つ長い黒髪。

前に見たときは頬がこけ、顔が青白く不健康で、諦観の浮かぶ目をしていたその人。棺の中にいるその人は見たこともないくらい健康的な顔をしていて生気に溢れていた。きっと私が生まれてくるずっと前はこんな顔をしていたのだろう。既にその魂は天へ還ったというのに生きていた頃よりも生気を感ずるだなんて皮肉なものだ。

「っ——!!」

どこかで狂ったように叫ぶ声が聞こえる。男泣きの醜い声。

私は声も上げず、瞬きも忘れ、信じられないその光景に呆然とするしかなかった。こんなにもまともな葬式が行われる意味も理解できない。クソ親父は非人道的な実験を妻にしていた。かなり衰弱していたし、体のあちこちに傷痕がついていてもおかしくはないのに、何故言及されない？ 母は苦しんでいたというのに！

だが、ここで私が真実を叫んだとしても周りにいるのは病院の関係者だけ。メイ子さんが理解を示してくれていたとしても彼女もまた未成年。大人が信じてくれる道理はない。こんなときだけは本当に身勝手な大人を恨みたくなる。所詮子供だと見下すあいっつらを見返したくなる。腹の中に溜まったドス黒い気持ちを渦巻かせ、冷めた目

で泣く男を遠く見つめる。ああ、腹立たしい。一番妻を苦しめたのはお前じゃないか。なのになぜ泣く？なぜ悲しむ？それは実験体がいなくなってしまうための悲痛の叫びなのか？なんでなんでなんで、なぜ唯一と決めた女性をそんな風に扱うことができるんだ。

これが、これが病院関係者のやることか？人の命を救う機関がすることなのか？こんなんじゃない、ただの犯罪組織と変わらないじゃないか。子供を実験に使用して、妻を使って研究し続けるなんて、まるで拷問みたいじゃないか。

そんなアイツが、あんなヤツが超高校級の精神科医候補だったなんて信じたくもない。こんなことをしたヤツが、あんな狂ったヤツが、希望の象徴に少しでもなりそうだったなんて、そんなことはありえない、ありえない、ありえない、ありえないありえないありえないアリナイ……

「お嬢様」

隣にいたメイ子さんが私の手をその手で覆う。耐え難い思いにより握っていた拳を優しく包まれ、黒く渦巻いていた感情が霧散していく。みつともなく取り乱してしまっていたようだ。心の中の悪態だったのにもかかわらず気づいたのは、そこはメイ子さんだからだろうか。

なぜ、あんなにもアイツが超高校級候補だったことに黒い気持ちが向いたのか漠然としていて分からないが、やはりこの体が狛枝凪斗をベースにしているからなんだろうか。私自身、希望に人生を見出しているわけではないのに。なんとも不思議なものだ。

だがまあ、爪が刺さって血が出るだなんてことは起きなかったが強く握り締めていたことは事実。顔にもそれが表れていたのかもしれない。ギリギリと噛み締めていた口を緩ませ、メイ子さんを見上げる。

「ごめんなさい」

「いいえ、私もお嬢様の気持ちは痛いほど解りますから」

彼女もやりきれないような、どこか悔しそうな、そんな滅多に見せない感情を表に出して悲しんでいる。その目許はどこか潤んでいる

ようにも見えて、必死にそれが流れ出ないようにしているのが予想できる。私が泣かないのだから彼女も泣かない。そんなことを思っているのかもしれない。そうだとしたら、少し嬉しい。だがそれと同じくらい寂しく思った。悲しみの気持ちくらい思い切り吐き出せばいいのに。

「さ、お嬢様。枕花を供えてさしあげましょう。奥様も喜ばれます」「うん」

枕元にそれぞれが一輪ずつ供えていく。それは胸元に置かれた白菊だったり、大きな蘭だったり白いものが多いが、彼女を彷彿とさせる青い色をしたデルフィニウムも供えられている。私はそれデルフィニウムを一輪手に取り、頭の横に置く。メイ子さんは薄桃の百合を選んだようだ。

アイツ親父はいつまで経っても彼女の傍から離れることもなくわんわん泣き叫ぶばかり。そんな父親と顔に何も出さない娘である私を見て顔を顰める関係者もいるが泣きそうなメイ子さんが頭を撫でながら「気にしないでくださいね」と言ってくる。気にはなるが問題はないだろう。

チクチクと胸が痛んだが、分からないフリをした。

そのまま時間が経っていき、霊柩車が発車し、私たちもそれを追う。火葬場ではすぐさま彼女の姿が消えてなにをするでもなく、呆然としたまま他の人たちに混ざり火葬が終わるのを待つ。父親の姿が見えなかったので、もしかしたらずっと祭壇の傍にいて見ていたのかもしれない。

本来火葬中は暇なものなのだが、今はなにかを食べる気も、飲む気も全く起きず、なにかをする気力もない。関係者は普通に備え付けの新聞を読んでいたりと、なにか話していたり、携帯電話を弄っていたりと自由に過ごしている。その中で私は一人だけ宙を見てぼうっとしているだけ。メイ子さんが心配してジュースを勧めてきたり、小腹は空いていないかと訊いてきたり配慮してくれているが、それでも上の空だ。そんな状態で一時間、二時間と過ぎていき、やがて係員の人が空ろな目をした父親を連れ立って来た。火葬が終わったらしい。

係員の先導により収骨室に案内され、父親が相変わらず空ろな目で骨壺を危なげに受け取り、母親だったものの頭上へ移動する。少しゆらゆらと揺れて虚空を見つめるその姿はよく言えばショックで上の空。悪く言えば狂った異常者だ。

順番に、親しい者から骨箸を受け取る。私とメイ子さんが一番最初だ。二人で何回か箸渡しをしながら骨壺にその骨を納めていく。そして次々と骨は壺の中に納まっていき、とうとう最後の一つが納められる。ただでさえ小さく感じた彼女がとても小さな壺に納まりもう二度とその姿を見ることはなくなる。

「母さん」

案外冷静にその声は出た。震えることもなく、涙で視界が滲むこともなく。

最期まできちんとお母さんと言ってあげることができなかった。

最期まで彼女を母親なのだと認識することができなかった。

私はこんなことになるまで、前世の記憶を引きずっていたのだ。今更だけれど、青子さんが母親で良かったと思う。失ってから気づくなんて、私は馬鹿だ。だけれど、これだけは言いたかった。彼女がどうか安らかに眠れるように。

「ありがとう」

火葬場を出て、空を見上げる。夕日が空を赤く染めるのが見える。周囲の建物は皆影のように黒く塗りつぶされ、夕日の毒々しい赤を背景にしてとても映える景色だ。今の精神状態に染み渡るようにこの景色は美しい。今まで我慢してきたものが思わず溢れ出しそうな、そんな感じがしてうずくまる。不安定になっている心ではどんなに些細なことでも壊れてしまいそうだ。

静かに頬を濡らしながら先日降り積もったのであろう雪を掻き集める。そして一心不乱に手のひらサイズのかまくらを造って移動する。意味はない。ただそうしたかっただけにすぎない。だが、遊んでいるという意識もなく黙々とかまくらを造った。ドレスが雪で汚れようと気にはならなかった。

帰っていく一団と、メイ子さんの後ろ姿を見送って雪の中また空を

見上げた。

宵が近づき、赤に黒が混ざり始めて一層不気味な色が広がっている。まるで夢の中にいるみたいだ、と苦笑して立ち上がる。

「お迎えが来てしまったのでもうここにはいられない。」

「お嬢様、お願いですから逸れないでください。心配したのですよ。」

「うん…… 帰ろうか、メイ」

「ええ、帰りましょう」

赤くなつた目を優しくハンカチで押さえ、耳の横を通って軽く髪を梳く彼女の手は冷たい。先程まで夕方だったというのにいくら日が落ちるのが早いとはいえ、既に暗くなり始めている。結構な時間探してくれていたのであろう。心配させてしまったことへのお詫びとお礼を込めてその手を握る。感情が昂ぶって熱くなつた体温には心地よいそれを頬に当て、「メイの手冷たくて気持ちいいね」と素直な感想を洩らす。思ったよりも震えた声に一人で驚き、苦笑すると正面から優しく抱きとめられ、体を持ち上げられた。

「重くないの？」

「成長をこの身で実感できるのですから問題ありませんわ」

「重いつてことでしょ？ 誤魔化しても無駄だよ」

「そうとも言いますね」

うふふ、と笑って歩き出すメイ子さん。抱っこされたまま移動するのか、そうなのか。

またいなくならないように捕まえておこうとでも考えたのか、どこか嬉しそうに笑う彼女では判断できない。

「こうしていれば運転手にも、私にも見えませんわ」

その言葉で気づく。

彼女は泣くところを見られたくないと思っている私を気遣ってこうしているのだと。

じわり、じわりと溢れてくる思いに流され、声を出さないようにするのが精一杯になる。今、なにか喋ってしまったら震える声が一層涙声になってしまいそうだ。

メイ子さんの服を正面から掴み、顔に押し当てる。服を汚してしま

うのを承知でこうしてくれているのは分かるが、さすがに鼻水をつけるわけにもいかない。上手くできない呼吸で口を開け、鼻を時々すする。傍から見れば泣いていることは一目瞭然だろう。それでも良かった。メイ子さんの気遣いが嬉しかった。自分のせいで怪物が死に、友達の災難を知り、メイ子さんが大罪を犯し、そして母親が死んだ。思えば、泣く機会はいくらでもあったのだ。怪物の死ではそうとう取り乱し、泣き喚いたらしいがあまり記憶には残っていない。自分のために泣くことはすれど、こんな風に誰かのために泣くなんてことはなかったはずだ。

やつれる前の、元気な姿を見たことがなかった。

本気で笑う姿も見たことがなかった。

その目に希望を宿している姿を見たことがなかった。

一緒に食事したことも、話したこともなかった。

傍にいたのはそう、ほんの少しの時間だけ。

きつとすぐに声も思い出せなくなるだろう。

それでも彼女は、私の母親だったのだ。

メイ子さんの腕の中で目を瞑る。

平穏は近日中に終わってしまうだろう。そんな予感を胸に、私は心地良い体温に揺られながら眠りへと落ちていった。

「メイってばどこからこんなものを持ってくるの？」

「お嬢様がお望みでしたから」

大きな袋の中を覗き込みながら彼女に問うが返ってくるのは答えではない。はぐらかされているようで思わず目を顰めて中にあるものを掴む。

「じゃあメイにはこれね」

何故か入っていた黒白スタンダードなメイド服にガスマスクはな
いから13日の金曜日のホッケーマスク。いつもの格好もメイドつ
ぽいが今日は白衣を脱いでいるし、いつもよりも短いスカートを履
いている。これで銀の盆にケーキかパイを乗せてたら完璧だ。

「お嬢様はこういうご趣味で？」

「違うよ。腹いせにおかしな組み合わせを選んだだけ」

白い巻きスカートに白いシャツ。白い髪はトップで結って真っ白
な猫耳カチューシャ。スカートの下にスパッツと白い猫の尻尾を付
けられていきなりパーティをしようだなんて言われても困るだけな
んだもの。まっしろしろすけな状態でカボチャのケーキでも食べた
ら汚しちやいそうで怖いよ。

格好が未だ出現していないエフェクト「ねこ」に似ているのは気
にしない方向で。

「アンタは似合ってるからいいじゃない！ 目隠しに魔女だなんて似
合わないわ……」

「私は長いスカートで義足が隠れるから丁度いいけどね。黒いのが好
きだから悪魔もなかなか気に入ってるよ」

「ところでなんで私が天使？ 魚系とかじゃなくていいの？」

上から順番にヒイラギ姉さん、りん子姉さん、橙子ちゃんだ。今回
はヘルメットを被った上にいつもの服の上からダボつとした天使の
恰好をしているから病室から出ている。体調も良いらしいし、低脂肪
のカボチャケーキやあっさり系の料理が並ぶので参加している。恰

好は勿論私の趣味である。天使だよ天使。病院だと若干縁起悪いかもしれないが、ハロウィーンの仮装は病院でやると大体縁起悪くなるから皆一緒だ。

ヒイラギ姉さんは前髪と帽子で大きな目を隠し、俯き気味に足をもじもじと動かしている。短めのスカートだからか恥ずかしいのかもしれない。黒系の衣装が良く似合う。グッドチョイスだね、メイ子さん。

りん子姉さんは長めのスカートだが少しスリットが入っていたり、透かしのフリルが入っていたり控えめな露出が効いている小悪魔だ。黒い巻き角もよく似合っているし、ワンポイントアクセサリーの真っ赤なネクタイも似合っている。少し露出があらうと本人は義足が隠れるから嬉しそうだ。

「メイドさんもさ、もつと可愛いのかっつけようよ！」

「えっ、あの、それはその…… 橙子様…… お、お嬢様お助けを！」
そう言って橙子ちゃんが袋から出してきたのはなんと、ウサ耳。それもバニーガール使用の派手で片耳が折れているやつ。これは、これはもう笑うしかないよね。ホッケーマスクにメイド服に真っ白なウサ耳。なんだろう、このミスマッチな感じ。助けを求める声がメイ子さんから思わず漏れたみたいだけれど私は助ける気なんてさらさらない。嘖き出して親指を立てながら笑い転げる。あ、笑い過ぎて涙が。

「っふ、ふふ、橙子ちゃんナイスチョイスだねっ…… ぶはっ、だめだっ、ごめんメイっ、むり！」

「ほう、これはなかなか」

「え？ …… ふっふっ、あ、ごめんなさいいつでも、あははは！」

りん子姉さんは静観する体制になっているし、ヒイラギ姉さんは俯いた体勢から軽く見上げ、すぐに笑いを抑えるように口を塞いだ。でもやっぱり抑えきれなかったみたいだ。

「さ、早く料理を頂きましょう！ ですから手を止めてください。手を止めてくださいませ。橙子様お手をっ」

テンパってるテンパってる。そんなに嫌かな、ウサ耳。まあそんな

こと口が裂けても言えないけど。なぜって、後で報復に同じ格好させられるかもしれないからだ。今はそつとしておいて空気になろう、そうしよう。早く忘れてくれることを願う。

「おじようさまあー！」

珍しく年相応に恥ずかしがるメイ子さんを眺めながらその日一日を過ごしていくのでした。

No. 7 『逃亡』―落陽―

気がついたら私は夢の中にいた。

確かに、色々とシヨックなことが続いて精神的に弱ってはいたが、気絶はしていないはずだ。…… 連日泥のように眠っていることは自覚しているが。

「エントランスじゃ、ない？」

メイ子さんが大変だった偽りの平和の中で既にエフェクト”ホイツル”は入手済みであるし、姉さんたちと本当の友達になった際は上の扉を開け、『奇形物世界』にてエフェクト”モノアイ”を入手した。

心の中では未だに認めたくないという思いと、あれは事実だと責める思いに挟まれかき混ぜられたままではあるが、『煙突世界』。いや、『火葬場』と言えいいのか。そこで西洋式の美しい喪服、”ドレス”と牢屋の世界で青子さんの”死体”を入手してある。そのどれもが私の記憶に根ざす忌々しい象徴。エフェクトだ。

これで現在入手したエフェクトは全部で九個。

- ・ほうき
- ・潜水服
- ・ジヨウロ
- ・植物
- ・内臓
- ・ホイツル
- ・モノアイ
- ・ドレス
- ・死体

の順に九個だ。

ほうきの出現する意味はよく分からないが、恐らくは『自由の象徴』だろう。潜水服は橙子ちゃんだろうし、ジヨウロと植物はメイ子さんに貰ったアネモネと『病気の象徴』。内臓は『母から生まれたこと』の象徴。『贈り物』。モノアイは

『ヒイラギ姉さん』で、ドレスは『喪服』、死体はそのまま『母親の死』だ。

まだ手に入っていないのは十五個もある。その中でも出現すらしていないエフエクトがあるのでまだまだ先は長い。そして、それが意味するのはまだまだ不幸が続いていくということ。憂鬱にもなる。

さて、少し現実逃避してしまつたが今は夢の中だ。しかも、いつもとは少し毛色の違う夢である。夢の中なのになんだか妙な感じがするが、最初に目を覚ましたのがいつものエントランスホールではなく、植物に侵食されたどこかの廊下だったのである。

「なに、ここ。もしかして、植物回廊？」

そこかしこに亡者のような植物に侵された少年少女や怪物のような白髪がいる。どうやらこちらを襲ってくるような気配はないようなのだが、その真つ赤に充血した目はうつろで、足を引きずって歩いたり、座り込んでいたり、様々だ。彼らが悲鳴をあげていないのが幸いなくらいで、もしもこの場で彼らが叫んでいたらまさに地獄絵図、阿鼻叫喚だ。そして私の耳も潰れていただろう。多少のうめき声すらもないことに若干の恐怖を感じるが、本当に幸いだ。

「部屋の前なのか」

そこは植物に侵された部屋の前。どこに誘導されているのか検討がつかないわけではないが、果たしてどちらに行つてほしいのかが分からない。それに、本当に知っている場所と繋がっているのかも分からない。

周囲にはゼンマイのようになった緑色の植物と、赤い花を咲かせている植物がある。なにも言わず、なにもしない子供たちは放つておくしかないのだ。右手を中空にかざす。すぐにほうきがその手に現れ、魔女の宅急便のような姿になる。白い髪は少し長くなり、赤いリボンでポニーテールとなっている。エフエクトほうき。便利だ。

「こつちかな」

とりあえず、今は必要のない左の通路は無視して勘に従い、右の通路へ行く。白い怪物たちの間を抜け、相変わらずどこまでいっても植物だらけの廊下だ。入り口を抜けたあとには白髪だけでなく、黒髪の

子供や茶髪の子供もいる。赤い花を咲かせるその姿はエフェクト植物を使った私の姿とよく似てる同じ境遇の子供たち。

周りに生えている赤い幹の植物も緑の幹の植物も皆例外なく白い花が咲いていて、そこかしこに生えている。白い花であることには、やはり意味があるのだろうか。たしか植物のさび病は白くなっているらしいし、それを表しているのだろうか。

今度も右側の入り口を通る。すると目の前に飛び込んできたのは“植物”を取ったのと同じ部屋。真ん中にはあの大きな花と、周りに四つの小さな花が咲いている。しかし今回はそちら側に行くことはできない。なぜなら、ゼンマイたちが通せんぼしているから。もしかしたらなぎ倒すことも可能なかもしれないが、武器は持っていないので今は無理だ。

隣の入り口を通って、今までとは違った暗い世界に入った。先程と同じように緑や赤の白い花を咲かせる植物がいたるところに生えているが、不思議と私の前にはなにもなく、一本道になっている。これは知っていたことだ。もう忘れかけているが、この先にあるものも知っている。予想通りならば、とうとう来てしまったのか。早い。早すぎる。まだ母が逝ってしまったから一ヶ月と経っていないというのに。

ああ、ここから先に進みたくない。進みたくなって、ほうきから降りた。足が重い。胸の中に鉛が入っているようだ。今すぐにでも、例え夢の中だとしても気絶して何もかもから逃げ出したかった。それでも足を進めるしかない。そうしなければ自分が生き残る可能性すらも潰えるかもしれない。それだけは放棄するわけにはいかない。痛いのは嫌だ。死ぬなんてとんでもない。なにがなんでも、たとえ自分の精神が悲鳴をあげていてもそれだけは諦めることはできないのだ。死を遠ざけるにはそうするしかないのだ。

「日没、か。嫌だなあ」

そして私は光射す世界に踏み出した。

「っ……」

不気味な空と、右側に伸びる電柱の影。水溜りのような落とし穴。

そして、西に向かって引き寄せられるように歩いていく同属たち。諦観の思いでホイッスルを取り出す。オレンジ色のそれは橙子ちゃんからもらったものだ。これは私が吹いた方向に夢の人物たちが動いてくれるというものだ。そのわりに音はならないのだが。とにかく、無駄だと分かっているながら私は東を向いてから笛を口にくわえ、思い切り吹いた。

こちらに迫ってくる子供たちの歩みが止まる。

しかし、それ以上のことはなにも起こらない。

ここで西に向かっていている子供たちは歩みを止めることこそできるが、反対側へと進ませることができない。日が落ちる。まるで死に向かって歩いていくようだ。ゲームをしたそのときからここは嫌いだ。子供たちが死に行くのを私は止めることができない。だから、嫌いだ。

「うう……」

少しずつ、足を進めていく。皆とは逆に、東の方へ。東南の方向へと斜めに歩きながら行くとやがて歩きもせずになにかを囲んでいる集団が目に入る。赤い空を映した水溜りが沢山ある場所。その中心部に倒れたお母さん。そして、それを囲む黒と白の子供。

ああ、そうだ。あの諦めた目をした人はもういないのだ。

ますます気分が悪くなって元来た道を戻り、光から影へと身を隠す。すると今度は植物回廊に戻るでもなく、真っ白な病院へと繋がった。この夢は私になにをさせたいのだろう。

「私の部屋だ」

そこは私の部屋だった。白くて嫌な場所。でも、好きな色。歩き回って、橙子ちゃんやりん子姉さん、ヒイラギ姉さんがいることに安堵を覚えたが、皆こちらに興味を向けることもなく、その場に佇んでいるか歩き回っているだけだ。それに少しだけ寂しく感じて外に出る。診察室に入るといたのはクソ親父。まったく、人の夢にまで入ってきて不快にさせるとはなんてやつだ。

「あれ、既視感？」

少し、焦燥感を覚えた。今まで既視感を無視して碌な目にあつたこ

とがない。診察室を出て玄関に向かう。ほうきで飛んでいても遅く感じて、私は自らの足で走り出した。

「お母さん!」

そこには、いるはずのない人青子さんが待っていた。飛びつきたくなつたが、すぐ眩暈に襲われて抱きつくこともままならない。

目が覚めると、また自室にいた。

「あれ?」

目を擦る。頭を振って周りを見渡す。

カチコチと硬質な音を立てて時計が現在時刻を主張している。いつもよりも随分と早い起床だ。部屋の周囲はとても、静かで、物音一つなく、生の音も、静の物音も聞こえやしない。そう、なにも聞こえない。

私は音を立てないようにベッドから降り、いつも寝るときには外すホイッスルを身につける。ベッドの脇にある床頭台には写真立が二つ。それを見てから胸元に揺れるロケットペンダントに触れる。

アネモネは既に枯れかけていて、その脇に置いてある小さな掌サイズのジョウロをポーチに詰めた。なんだか淡々としている私に笑ってしまいそうだった。だが、周りはとても静かなのだから笑ったら皆を起こしてしまう。それだけは避けたい。私が出かける準備をするのは必然だ。

なぜなら、静かで、静かで、飾り気のない白い壁がそこにあるから。理由はそれだけで十分だよ。

ああ、一刻も早くここから出なければ。魂に刻まれた記憶から本能的に、そう思った。

自室からそろりと抜け出し、ふらふらと、じぐぎぐに、まるで酔つたように走りながら玄関を目指した。走って、走って、誰かの部屋の前も通り過ぎて、目に留まる全ての変化を受け入れず、耳に入る全ての音を拒絶して、ただ無我夢中で走った。足がもつれそうになるのも我慢して、なにかにぶつかりそうになってもじぐぎぐに移動して避け

た。誰かが呼び止める声も、恨めしそうな目線も、全てを拒絶して、振り切りながら一生懸命出口まで走った。

「あうっ」

とうとう出口の前で転ぶ。もう駄目だ！ そう思ったときには、誰かに抱きとめられていた。

「メイ！」

「風様！・早くこちらへ！」

いつもの白衣のようなメイド服ではなく、私服のような服装に身を包んだ彼女に抱きつき、後ろを振り返る。そして自己防衛本能が遮断していた全てがこの目に、耳に届き、理解したくなくて放棄したそれを強制的に理解させられる。

そこにあつたのは、正しく地獄絵図であつた。

「見てはなりません風様！」

メイ子さんの注意虚しく、私は見てしまったのだ。

白い壁は赤や別の白で汚され、病院ではないなにかおぞましいものへと成り果てている。

私を通つて来た道のいたるところに人間が横たわり、生の光を失つた目がこちらを睨んでいたり、まだ息のある者が床に絵を描きながら這いずりこちらに手を伸ばす。

許容しきれないほどの悲鳴と笑い声が開けた聴覚を叩く。いつそ耳が壊れてしまいそうなほどの轟音。そのせいで頭は割れるのではないかというほど痛み、意識にもやがにかかる。

そしてその真ん中で狂った父親が刃物を手にして兄弟達を蹂躪している。

姉さんたちが変わり果てた姿で横たわっている。

橙子ちゃんが、そのヘルメットを外して倒れている。

残った怪物の一人が抵抗むなしく胸を突き刺され絶命する。

倒れたもの、血を流したものの、頭と体が離れたもの、部位欠損しているもの。そこに地獄をぎゅっと詰め込んだようなそんな阿鼻叫喚。

やがて廊下の奥で暴れていた父親は私たちに気がつく、歪な笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

ひたり、ひたりと足音を立ててアイツが近づいてくる。

アイツの持ったメスやハサミが割れた蛍光灯の光でキラリと光る。

死が、近づいてくる。

「なにやってるんだよお前！」

「お嬢様、こちらです」と言うメイ子さんに手を引かれてその場から逃げ出そうとする背中に、いつか聞いた怪物兄の声が響いた。悲鳴が木霊する世界でも聞こえたのは、それが近くから発せられたからに他ならない。

走りながら振り返る。

「おらあー！」

赤い目を充血させた彼がこちらに迫る殺人鬼の背中にタツクルを仕掛け、一緒に倒れこむのが見えた。

強く手を引かれて、見たのは一瞬。だが、それでも彼が笑みを浮かべているのは分かった。

前を向いて走る、走る。暫く怒号と笑い声が響き渡り、なにかを叩き潰したような鈍い音が背中から響く。それでも振り返ってはいけないと心に念じて前を進む。

裾についた血が足を濡らして気持ち悪かった。そしてなにより、皆を見捨てて自分だけがのうのうと生き延びたことに罪悪感で一杯になった。二人で生き残る。それは達成されたが、ちつとも嬉しくなかった。

…… はは、私はなにを言つて、いるんだ？

自分が生き残ればいいと言いながらなにを世迷いごとを言っているんだ。これが本音か？ 違うだろう。私は誰よりも死を否定して、誰よりも生きたがりなのだ。ちよつと親しかつた人物他人が盆から零れ落ちたってなんだっていうのだ。

ああ、今ならりん子姉さんが言いたかつたことが分かるよ。姉さんは私のことを偽善者だつて言いたかつたんだ。

そう、その通り。

自分が嫌われたくないから、死ぬ可能性を少しでも低くしたいから恐怖を押し込め、震える手を叱咤し、ヒイラギ姉さんに手を差し出した汚い偽善者だ。

優柔不断すぎて笑えない。今だから気づけた。でも、もう戻れないんだよ姉さん。

私は私。〃 生き残らなくてはいけない 〃 それが私の行動理念。凝り固まってもう解けない固定概念。

他のなにを犠牲にしたとしてもそれだけは変えることができない。生存することが全て、私の全て。そう、〃 自由 〃 こそ至高であるとした空井織月のように。

思えば、私は自分のことを棚に上げて随分織月に対して怯えてしまった。それはつまり他人から見た私が彼女となんら変わらないということに他ならない。そんな私とずっと友達だと思ってくれていた橙子ちゃんや姉さんたちには感謝するが、すでに彼女たちはいないのだ。もう私を止める人なんて、誰一人居やしない。

ほら、隣にはなによりも大事な人メイ子さんがいる。

大事な物は全部傍にある。それだけで万々歳ではないか！

私は生きる。生きてこの地獄から抜け出すのだ！

「うふふ、ふ、あは、はは、あははっ！ あはははははははははは！」

気がつくとも私は壊れたように笑っていた。とめどなく溢れる涙をそのままに狂ったように笑い続けた。そんな中、ずっと私の手を握り続けていたメイ子さんには感謝してもしきれない。

いつしか私たちは警察に保護され、二人一緒に話をさせられた。

相変わらず私は笑っていたのでメイ子さんだけ。そのときに、耐えられなくなった私はとうとうやらかしてしまったのだ。

「うふふ、ははっ、ははは、うううえ、あ、う…… うううう！」

胃の中身が逆流するように口内を叩き、こみ上げた衝動のままに私はその場にうづくまる。抑えようと伸ばした手の隙間から漏れ出るモノが床をビシヤリと濡らしていく。薄汚れた警察署の床が更に汚

れていき、慌てたメイ子さんが服の中からタオルを取り出す姿が見えた。

謝罪の言葉も喉の奥に粘液で絡まり出てこない。ゲホゲホと咳をして目には涙を溜め、大きな音を立てて机に手をかけ、やっこのことで立ち上がる。

「うううううう……」

「風様……」

メイ子さんが私に近づく。ふらりとよろけた私はそのまま彼女に寄りかかるように身を預け、メイ子さんはメイ子さんで服が汚れることも気にせずに私を受け止める。

「お……、め……」

「気になさらないでください」

警察の目の前で嘔吐してしまった私は、メイ子さんに抱きかかえられたまま意識が暗く塗りつぶされるのを感じた。

最後の足掻きか、抵抗か、これが夢だったらしいのに、と今まではちつとも本気で思わなかったことをドロドロの顔で、笑みを浮かべたまま考えた。

No. 7 『逃亡』 ―MONSTER―

始まりは些細なことだった。

毎日弄くられる体と実験の日々。それは俺と同じ白い髪、赤い目をした仲間たちも一緒だった。皆名前はなかった。皆、その赤い目で医者からは冷たい目でで見られていた。そんな中、実験室へと向かう俺たちとどこか似ていて、決定的に違うアイツを見かけたんだ。

俺たちとは違う藍色の目。俺たちには世話をする人間だなんていないのに、奴にはいて、その上名前と呼ばれている？ 俺たちにはそのどれもがないものだというのに、当たり前のようにそれを享受している風という女。嫉妬しないほうが人間としてどこかおかしいほどに俺たちとアイツは違っていた。

それからすぐに医者に問い詰めて分かったのはそいつがオリジナルであること、そして、アイツと同じ眼の色にならない俺たちへの明確な差別と不本意ながら世話をする事になってしまったことの厳しい目線。アイツの名前が狛枝凪とあって、院長のお気に入りであること。才能を持った子供であること。つらつらと並べるそんな言葉に怒りを覚えた。そんな奴が存在するせいで、少しそいつと違うだけで俺たちは毎日痛みつけられ、ときには仲間の死を見送っているか、と。

俺たちなんて名前もないただの有象無象だ。最初はただ嫌な境遇への怒りと鬱憤を原因に叩きつけられればいいと考えていた。あわよくばそいつを排除して、特別扱いされるその座を手にいれようとも。でもそれが間違っていることを叩きつけられて、俺は愕然としたのだ。

その日、あらかじめその廊下をアイツが通ることを知っていた俺は仲間たちに黙って計画を実行に移した。そいつを呼び止めて近場にある誰もいない病室に叩き込み、少し痛みつけてやればいいと考えていたのだ。

「こんにちは」

片手で頭を押さえるという変な格好で壁伝いを歩いていたアイツを眺めながらやり過ぎ、丁度後ろを取った状態になってから隠れていた個室から出て、呼び止める。アイツは嫌そうな顔でこちらに振り返ると心底面倒そうに挨拶を返してきた。ああ、そんな態度が俺を苛々させるんだよ。有象無象に声をかけられる道理なんてない、みたいなその態度が怒りを加速させるんだ。

無言のままアイツの襟首を掴んで先ほどまで潜んでいて、出て来たときに開けっ放しにしていた個室に放る。普通ならば同世代の子供を片手で掴んで放るなんてことはできそうにないが、体格の差もあり、尚且つコピーされた仲間の中でも力が特別強い方である俺だからこそできることだ。

アイツはそのままされるがままに、というよりも何が起こったのか分からないのか一歩二歩下がってから崩れ落ちた。咄嗟にバランスを取ることができなかったのか。こういうところはただの子供だと感じさせる。目を丸くして暫く呆然としていたオリジナルだが、やがてはつとしたように首を振るところこちらを睨みつけてきた。

「なに?」

無意識なのか、また頭を片手で押さえつつこちらを睨みながら見上げるそいつにさっさと本題を出したくて声をかける。

「お前がオリジナルか」

痛そうに尻へと向かう手をこちらの目線に気がついたアイツは慌てて止めて、それを隠すように呆れたような声を出してそっぽを向いた。

「はあ?」

俺が見下すような目線をしていたのを嫌がってか、スカートを軽く掃って立ち上がる。心底嫌そうな顔をして襟元を広げ、片手を後ろの方へ移動したためもしかしたら打撲くらいはしたのかもしれない。ざまあみろと思ったが、少しだけ罪悪感が胸をくすぐった。

考え込んだように暫しの間沈黙したあと、アイツは思い当たる節がないのか首を傾げる。それに、俺たちの存在を知っているものだと思っていた俺は焦りを感じさせぬようになるべく低い声で問うた。

「知らないのか？」

「いや、知ってるわけないでしょ。初対面だもん」

知らないのか、そうか知らないのか。思ったよりも早かった回答に苛立ちが募りどろどろとした黒い感情が湧きあがる。知らされていない可能性？ そんなもののクソ食らえだ。その答えはまるで俺たちが取るに取らない存在だと、自分にとってはどうでもいいものなのだと、所詮有象無象でしかないのだと言われているようで嫌だった。けろりとしてそんなことを言い放つこいつのことが気に入らない。目の前が真っ赤に染まったような感覚がして、気がついたときには奴の首元の服を掴んで壁際に追い詰めていた。

「俺は！お前のコピーだよ！ アルビノの癖にやたらと丈夫で、子供らしくない知性！そんなやつが生まれたから！ あいつら同じものを作ろうとしてんだ！ お前のせいでどれだけ兄弟が死んだと思ってる！」

昔は同じ病室に詰めきれないほどの仲間が寝泊りしていた。だといふのに、毎日の厳しい検査や手術、実験でそのほとんどは病室に二度と戻ってくることはなかった。同じ病室で、ここまで成長できたのはもう三人しかいない。

お前に想像できるのか？ 新しい実験の話が来るたびに仲間同士で騙し、押し付け合い、先に眠ったり、すぐに起きない奴が実験室送りにされた。そんなことがあるから何日も眠らない日が続いて、生き残った奴らはみんな眼の下に隈をつくって笑顔も知らないまま育った。涙が枯れ果てるまで過酷な実験は続き、喉が潰れるまで叫んだ。

実験室送りになって運よく生き残った俺でも忘れられない。舌を噛まないように布を口に詰め込まれ、押さえ切れないよだれが顎を伝ってベッドに染みを作った。そのせいで息もろくに出来ず、過呼吸に陥ったり殆ど効かない麻酔のせいで痛みを我慢できずに何度も気絶した。実験が終わる頃には水分も枯れ果てて、無事とは言えない状態で病室に戻ると数少なくなった兄弟たちが急いで水差しを差し出してきた。一命を取り留めてもそんなことの繰り返し。多かつた仲間間は徐々に減っていき、廃人と化した仲間には涙したこともあるし、何

度も見送った。

そしていつしか仲間実験体になることを押し付けることもなくなり、それぞれがその役割をローテーションで担うことを了承した。この頃から騙し合いとは聞こえのいい間接的な殺し合いはやがてなくなり、今の俺たちがいる。同じ病室の奴らはとうとう、三人しか残らなかった。他のところでは全滅したところさえある。三人も生き残っているのは稀で、とても運のいいことだといけ好かない医者が嬉々として語っていた。

アイツになるのが無理だということとは理解している。どんなに努力したって、どんなに似せようとしたってそれが報われないことはアイツを見れば一目瞭然だ。何もかもが違う。どこを？ と訊かれたら答えることはできない。ただ漠然と、アイツがこの世界にいることがどこかおかしいような、それが一種の奇跡であるような、そんな錯覚を覚える存在であるという曖昧なことしか言えない。そして、それが俺たちとは何もかもが違う所以であるということも。姿かたちが似ているだけで俺たちがアイツになることができないのは残酷な事実として襲い掛かった。初めてその姿を目にしたときも何となくそう思っていたが、今日目の前にして、話をして、より深く理解した。こいつは化け物、いや、怪物であると。

何事かをまた考え込んでいたアイツは冷たい目をして言った。

「知らないものは知らない。キミ、私に死ねって言ってるの？」

「……」

何も言えなかった。最初は確かにそう思っていたので、事実そうだったからだ。やはり、こいつは俺たちとはどこか違う。何度も刷り込まれ、賢くなった俺たちとは違う。殆どそういうことはされていはいはずなのにすぐそんな回答が出てくるのはおかしい。普通は自分が殺意の対象になっていくことなど気づけるはずがないのだ。

「やだよ。死にたくないし。それにキミが私の代わりになつたとして、他の子が祝福してくれるとも思うの？ 今度はキミを憎むだけだと思うけど。このことについて、キミはどう思う？」

アイツらはそんなことしない。そう言い放ってやりたかった。だ

けれど、本当にそうだろうか？ アイツらは俺を祝福してくれるだろうか。そう思ったとき、心の中で否定している自分がいることに気がついた。騙し、騙され、間接的にだとしても殺し合いを生き残った奴らだ。今度は俺の立場を羨んで狙ってくるかもしれない。それが例え、支え合つて生きてきた仲間だとしても。俺だつたらどうする？ 仲間の誰かが特別な地位に就くことができたら俺はどうするだろうか？ きつと嫉妬するだろう。どうしてアイツだけが苦しみから逃れているのだ、と。

そんな自分自身に苛立ち、可能性を示したオリジナルの服を掴んでいた手を外す。今以上に泥沼と化しそうな状況には俺だつてなりたくないし、これ以上こいつと一緒にいたら狂わされてしまいそうだったからだ。

「ちっ」

自身への苛立ちから漏れ出た舌打ちに目を瞬いているオリジナルを捨て置き、さっさとその場から去る。アイツは何も言わずに言論に勝つたとも思っているだろうか。それはそれでむかつくが、あの場に残って何か言うことのほうが不毛なことであることは明らかなので自身の心情は無視だ。

それから数ヶ月ほど経つて、重体患者の自殺騒ぎがあつたりしたことで以外は殆ど平和に過ごすことができた。自殺騒ぎは病院側が握りつぶすのに必死でこちらに目が向かなかつたこともあり、過酷な検査地獄は暫く免れることができていた。アイツとも関わず、弟と妹は興味津々のようだったが俺がそれを抑制することで平和にしていた。しかし、それもすぐに終わりを告げた。

「舐められたままじゃだめなんだつて！」

「そうは言われてもな」

「そーよ上にい！下にいの言う通りこのままじゃだめだつて！」

仲間の我慢の限界がきてしまったのだ。説得はしたが、もうやる気が最高潮を振り切つてしまっている二人を止めることはできなかつた。この二人だけに任せると過激なことをやりかねないのでとりあえず見本を示すことにした。

用意したのは検査室から盗んだホルマリン液。そしてそれをかなり薄めた消毒液をさらに薄め、絶対に怪我をしない程度にした液体。これをバケツ一杯に用意して何ヶ月か前のように個室で待ちうける。二人には逃亡先となる廊下の角に待機してもらい、自分だけがバケツを持つて隠れる。入院している俺たちや訳ありで身寄りのない患者しかいない病棟の廊下であるため俺のことを注意するような人間はいない。それにほぼ無人だから嫌がらせがばれることもない。アイツが告げ口をしたら終わりだということは理解しているが、そのときはそのときで外の世界に飛び出すときが来たということでもいいだろう。

「おい」

アイツの背後から声をかける。そして、振り返るか、返らないかのときに思いつきバケツを振るって液体をかけた。服と頭の上を狙ったので目に入ることはないだろう。アイツがびしょ濡れになったのを確認してからバケツを持ったまま走り、アイツの視界に入る前に廊下の角を曲がる。合流した仲間たちは嫌らしい笑みを浮かべながら喜び、二人とも片手を上げたのでそれに応え一人ずつハイタッチをした。

「いいな、怪我させない程度の嫌がらせにするんだぞ。劇薬を使うのも駄目だ。危険だからな。分かったな？」

「……はい」

「はい」

少し返事が怪しかったがまあいいだろう。

それからは毎日細かい嫌がらせを二人で実行していたようだ。すれ違いざまに転ばせたと聴いたときは姿を見られたことが明らかかな状態だったので複数で嫌がらせしていることがばれたと焦ったが病院側も、アイツもなにも動きがないので不思議には思ったが仲間には何も伝えなかった。本来ならばすぐ告げ口されて病院から逃げ出すことになるかと思っていたからだ。もしかしたら、アイツが何も言わずに我慢してくれているのかもしれない。

「あ、上にいちよつとこつち来て！早く早く！」

妹に先導され、走って向かったのは隣の病棟の階段の上。そこには既に弟も来ていて、階段横の角に身を潜めていた。なにをするのかと問うても口元に人差し指を当てて「しいー」と言うだけなので黙って同じように身を潜めた。他の病室の仲間とかくれんぼでもしているのだろうか。

そこに身を潜めてから少し時間が経ったとき、タツタツ、という階段を上がってくる音がした。随分と間延びしていて二、三段階段を飛ばしてスキップしているような歩き方に動き出そうとした俺を弟が押さえつけた。そうしているうちに目の前に現れたのはいつかの白髪で、そいつを妹が笑いながら両手で押し、弟も立ち上がって援護するようにアイツを階段のほうへと押し出した。

「あ」

あげた声が被ってアイツと目が合う。焦った俺はすぐさま笑う弟と妹を連れ出し、迂回ルートで自室に戻る。アイツがどうなったのかは分からなかったが、逃げていく中どこかで甲高い笛の音が聞こえた気がした。



その後は劇的な変化が俺を襲った。もう思い出さなくても弟と妹が単独行動を起こしているときに片方がとんでもないことを犯したからだ。俺はそのとき、アイツに思わぬ大怪我をさせたことで謝るべきか、否かを体裁だとか色々なことを引き合いにだして悩みに悩んでいた。いや、これは言い訳か。俺があいつらを監督していれば弟は、弟は、し、だめだ。認めなければならぬ。例えそれが弟の自業自得だとしても、それがショックであることに変わらないし、見当違いの怒りをアイツに向けそうになる。

弟は死んだ。

アイツを×して、その座を手に入れようとしたがために。俺が躊躇ったその道を進んだがために、俺たちはたった二人だけになってしまった。

三人でずっと耐えてきた。確かに、騙し騙され、お互いに死を押し付けあったこともあった。だが、支え合って生きてきたのもまた事実。兄弟のように育った三人のうち一人が欠けた。

「上にいい！なんで、なんで仕返ししてやろうとは思わないの!? 上にいい！」

「酷なことを言うが、あれは仕方ないことだったんだ。他愛ない嫌がらせだったらしい。だがな、危険物を扱うのは駄目だとお前らに言っただけだ。そうだったろう？俺が見ていれば……こんなことにはならなかったんだ。」

「上にいい……」

「俺だって悔しいし、悲しいし、アイツに仕返ししたいとも思ってる。けどな、アイツに当たるのはなんか違う気がするんだ。お前も、勝手なことをするんじゃないぞ。俺は、お前を失くしたくない。ただでさえ二人になっちゃまったんだから……」

俯いた妹の頭を撫でる。他の病室の奴らはオリジナルに興味ないようだし、誰かが欠けるということもないだろう。

あと何回、こうして仲間といられるか分からない。あと何回、俺が生きて食事できるかも分からないし、あと何回笑えるのかも分からない。そして、あと何回アイツに謝るチャンスがあるかも分からない。

一度だけ、そうただ一度だけ謝りに行こうとしたことがある。

アイツのいる病室の前に立ち、小さな勇気を握りしめて佇む。何度も謝る練習をしていたがどうしても許されんじやないか、そんなことを言われてもアイツにとっては取るに足らない、どうでもいいことだと切り捨てられるのではないかと、いつも得体のしれない怯えに襲われて実行することはできなかった。

そうこうしているうちに俺がまだ迷っているというのに病室の扉がスライドして開く。

何か声をかけようと咄嗟に出る言葉もなく、何も見ずに出て来たお間抜けなアイツがぶつかってきて出そうと思っていた言葉ではない声が漏れる。

「おっ、と」

「あいたつ、つて」

あちらが俺に気がついて硬直する。俺よりも少し低い頭の位置、華奢というより病的な程に細い肩が揺れる。そんな姿に何も言葉が出ずに暫く沈黙が落ちた。

「あー…… その、だな」

散々練習したはずなのに言葉を探しながら目を泳がす。なぜだかアイツを直視することができなかった。

「えっと、階段のときは、わ、わる、か、わ、わ」

いざとなると言葉が引つかかって出てきやしない。素直に謝ると決めていたというのにこんなにも難しいものだったか。アイツもアイツで頬を紅潮させたままとろんとした目を泳がせている。

「悪かったな」

異変に気が付いたのはすぐだ。俺のどもり具合に笑いを漏らしたアイツの様子がおかしくなった。

熱に浮かされたように赤い顔、胸を押さえ、苦しそうなうめき声。俺の顔を瞬きもせずに見たまま硬直し、動かない姿。その額に汗を浮かべ、俺のことを見据えたまま徐々に目を見開いて行き、大きくなる瞳孔。荒くなる息、恐怖に歪む顔、泣き出しそうな表情。全てが混ざり合ってアイツが錯乱状態に陥っているのが傍目にも理解できた。

「ごめっ、き、こえな、つう、ううえ」

錯乱状態に陥りつつも律儀にアイツは返事を返してきた。耳にも異常があるのだろう。焦ってアイツの背後にいるメイドを見る。

するとすぐにメイドも対処し、崩れ落ちていきそうなアイツを支えて立たせた。その様子が尋常でなく苦しそうで、何か恐ろしいものを見たような顔で俺のことを見続けるアイツにもやもやとしながら熱を計ってやろうと声をかける。

「っふ、う」

「おい、大丈夫か？」

「うつぶ、うあ」

熱を計ろうと伸ばした手を払いのけられ、突然駆け出すアイツを唾然としたまま見送り、もう遅いと思うが思わず声が漏れ出る。

「あ、おい！」

慌てて出した行き場のない手を彷徨わせ、その場に降ろす。そして漠然とアイツが思ったことを考えた。

そうか、俺のことが怖いのか。

そう結論付けるには随分と時間がかかってしまったが、謝りたいのに怖がらせてしまうのなら手を引くしかないだろう。そのときはそうするしかなかった。

あと何回、アイツに謝るチャンスがあったのかは分からない。

だけれど、とうとう俺はアイツに謝ることなく二度と会えない場所に行くことになってしまった。だから心の中だけでも謝ろう。

すまない。お前に嫌な思いをさせた。

トラウマを植えた。

そして、何もしなかった俺をどうか憎んでくれ。



最期ときは唐突に訪れた。

気がついたら周りは阿鼻叫喚の地獄になっていた。妹も部屋からいなくなっていて、俺は痛む頭でベッドから起き上がり、長年世話になったその部屋から出る。何かが起きているのだと、何かが終わるのだと本能のような奥深くの場所で自分自身が叫んでいた。

廊下に出ると、すぐにそこが地獄になっているのだと気がつけた。まるで殺人鬼が複数そこを通ったかのように白い壁や床が血や脂で

汚れ、蹂躪しつくされた光景が目の前にあったからだ。

「なんだ、これ」

情けないことだが足はがくがくと震えていたし、血と脂で彩られた廊下に足を進めるたびに滑り、何度もその中に転んだ。もしかしたら、足がもつれてまともにも立ってはいなかったのかもしれない。壁伝いに片手を預けながら進み、時折倒れ伏した犠牲者達の姿に足を止め、迂回したり跨いだり、自身の青ざめていく顔色がありありと自覚できた。ビチャビチャと音を立て、転んだせいでぬるつく服に苛立ちながら酷くゆつくりと進み、玄関を目指す。妹もそこにいると、なぜだか確信できたからだ。

「いってー」

手術台がなぜか部屋からはみ出していて、それに気づかず思い切り手をぶつけて崩れ落ちる。様々なものがぐちゃぐちゃになっていて、書類もばらばら。廊下の血の海に沈んでいる私物らしきペンやらなにやらもそこら辺にある。

案外裸足で歩くのは危険なのかもしれないが、血で塗れた廊下に靴下を履いたところで気持ち悪くなるのは目に見えているので足元を軽く視野に入れつつ進むことにする。

やがて、もうすぐ玄関口だというときに角から飛び出してきたのはアイツだった。

俺が見えていないのか、ふらふらとおぼつかない様子で走りながら器用に障害物を避けて玄関を目指していく。

「上にいゝ、いゝ」

アイツの姿に目を奪われ、足を止めたとき、すぐ近くから妹のくぐもった声が聞こえた。

「ここかー」

近くの部屋の扉は半分外れかけていて、妹の体からは細く短い刃物で何度も傷つけられたらしい跡があった。気力だけで話しかけているようで、壁に立ったままもたれている妹を受け止めて体を支える。

「風様！ 早くこちらへ！」

外から声が聞こえる。もうすぐ出口だ。せめて妹と共に外の世界

に一步踏み出した。そう思った俺は妹の腕を自分の肩に回し、一緒に歩けるようにする。

「行くぞ」

「だめだよ、上にい」

「文句言うな」

一緒に一步、一步步いて玄関を目指す。しかしそれも無駄なことだと、誰かに嘲笑われた気がした。

「上にい！」

「なんっ!？」

思ったよりも強く妹に突き飛ばされて近くにあつた受付の内側に倒れこんだ。そして、妹の絶叫を聞きながら恐怖で身が竦む自身をどうしようもなく情けなく思った。

自分は妹と一緒に外に出るんじゃないのか？

その夢が潰えようとしているのに、自分は何をやっている？

怯え、竦んで、震えているだけじゃないか。俺は長男なのに、なんにもできない。

弟は自分勝手だったがやりたいことをやったし、妹は傷ついていたのに俺を守った。

じゃあ俺は？

なんにもしていないじゃないか。

何もかも中途半端じゃないか。

俺はなにを迷っているんだ？

そんなことをしているから何も貫けない、なんにも出来ない！

「見てはなりません風様！」

メイドの声が響く。気がつけば受付の向こう側に病院の院長が薄ら笑いを浮かべながらアイツとメイドを見つめて立っていた。

アイツは病院内に広がる壮絶な光景に今更気がついたようにその場に固まり、こちらを見つめているだけ。

——無防備なその姿に、今まで震えていた足が嘘のように動いた。

無我夢中で、なにを言ったのかも分からなかった。

周りも見ず、ただ駆けてアイツだけを視界に入れて、そして足をもつれさせて倒れ込む。

唇を噛んで見据えた先には、硬直して動かないアイツ。恐怖に竦む自身が情けなく思えた。

アイツが傷つく？

アイツが死ぬ？

アイツが、俺の前からいなくなる？

許さない。認めない。

一度としてちゃんと謝れていないというのに、口に出して言えてないというのに、アイツがいなくなるだど？

そんなの、絶対に許さない！

動け、動け、その震えを、その怯えを振り払え！ 奮起しろ、立ち上がれ、アイツが消えていなくなってもいいのか！

床に手を付く。右足を動かす。立ち上がる。震える足を叱咤し、左右に一歩ずつ。

こんなにも走るとは難しいものだったか、ガチガチと鳴る歯の音を背景にアイツに向かう影を睨み据える。

そして、それが何を意味するのかさえも考えず、アイツに迫る殺人鬼に全速力でぶつかりに行った。

これでいい。中途半端な覚悟しかない俺にはこれがお似合いだ。アイツはひどく驚いていたが、それでいい。

さあ、早く走るんだ。そして逃げ延びてくれ。そうだ、そのメイト。早くそいつを自由にやってくれ。早く、早く。

さあ、早く！

「行かせねえ！」

見送る時間もなく、起き上がろうとする殺人鬼の上に跨り押さえつける。気色悪い笑い声を上げ続けてもがくそいつに鳥肌を立てながら殴りつけるが、そのときは突然訪れた。

殺人鬼が近くに転がっていた鍬を再び手に取るのが見えて押さえ込もうと手を伸ばす。しかし、スロウになった俺の体はその隙に弾き飛ばされ、仰向けに倒れこんだ。視界の端に笑う殺人鬼の顔が迫る。そして、突然俺の視界は真っ赤に塗りつぶされた。

「うっ、ああああああ！」

右目に走る灼熱。倒れる自分の体。笑いながら立ち上がる殺人鬼。そして、手にされた椅子。俺が最期に見たのは、狂った殺人鬼の姿だった。

「……」

ああごめん、最後までちゃんと謝れなかったな。

ただ俺はお前が羨ましかっただけなんだ。幸せそうな場所にいるのにそうじゃなくて、暗い目をしているお前が憎らしかった。幸せな立場にいるというのに自分がいかにも不幸ですよって顔して、被害者ぶって、そんな顔が大嫌いだっただよ。

だがそんなお前の場所を俺達が奪う権利などなかった。それが分かっているからただ謝りたかった……いや、もしかしたら本当は、ただ普通に話したかっただけなのかもしれないな。

そっか、俺はただお前と話したかっただけなんだ。

今更気づくなんて馬鹿みたいだな。

せめて立場なんて気にせずになだの子供として、お前に出会いたかった。

弟も妹も助けてやれなかった、何もできなかった、何も行動しなかった俺にはここでの惨めな死にざまがさぞお似合いだろうよ。その代り、お前のクソ親父は連れて行く。安心しろ。

だからお前は幸せに生きろ。

そして、俺とは違って、ゆっくり死ね。

「すま、あかつ——」

届かないとは分かつているが最後に言いたかった。
なあ風、すま^あな^りが^がと^とな^な。だから当分お前に会わないことを祈つと
くよ。

Good Luck
No. 8 『逃亡後』 別離

ザザザ…… ザザザザ……

ノイズが走る。そう、まるであのときの巻き返し。

ザザ……

《…… 県内の○○○病院にて無差別殺人事件が発生しました。……

県警は—— ザザ—— 火災も発生しており早急に—— なお、生存者は二名おり—— ザザ—— さんが行方不明となっており行方を追って—— ザザ—— の研究をしていた○○○さんが感染しザザ—— 行方不明の○○○さんザザザ—— ザ、ザザ——

》

「ああ、もう。使えないラジオだな」

所詮ラジオなんてそんなものか。そう結論付けてスイッチを切る。本当はテレビで何度も聞いたニュースだったが、今一度流し聞きをするにはラジオが良いかとつけていたのだが、ノイズ音で余計に気になっってしまった。BGMにもなりはしない。本当に期待外れだ。

「お嬢様、そのニュースは……」

「とんでもないよね、あんな狂気じみた人体実験がついぞ発覚することとはなかった。普通の人なら頼もしい警察も私にとっては無能とか思えない仕事っぷり」

ゴウゴウ耳に当たる風の音を極力意識せずにメイ子さんの声を聴く。なにもこんな風のうるさいところで話さなくても、と思われるし

まいそうだが、この話題はこういうところではしか話せない。ある程度離れば言葉はかき消されてしまうので都合がいい。

私たちはとあるマンションの屋上にいた。

錆だらけの非常階段に、錆だらけのパイプ。屋上の貯水タンクは酷いもので、私だったら絶対にこのマンションの水を飲みたくない。

入り口付近から声が聴こえる位置にまで移動したメイ子さんは痛ましい顔をして私を見つめている。そんなに見つめてもなにも変わらないのに。

「本当、おかしいよ」

あの事件は世間に公表されたが、人体実験と研究の痕跡は残っていなかったらしい。いや、消されたと言ったほうが良いだろうか。なぜなら、都合よく起こった火災が全てを無に帰してしまったからだ。何故か死体で見つかった父親と、行方知れずとなった無口な看護師さん。あの場にいた私たちならばなんとなく結果は予想できる。私たちは偶然燃えなかった玄関の監視カメラによって猟奇的な犯行をする父親が写りこんでいて完全な被害者であることを証明できている。

火災はかつて母がいたところから起こったようだ。そこであれば面倒な代物を全て燃やしくせることが分かっていたのだろう。あの看護師さんは本当に謎だ。皆も置いてきてしまったことだし、名実共に二人だけの現状。いや、写真や小物は身につけていたから心情的には二人きりというわけでもないのだが—— やめよう。虚しくなるだけだ。

とにかく、被害者であることが証明されてから何度かマスコミがうるついたものの、引きこもったまま過ごしていたためストレスとイライラが溜まるだけでなにもなかった。引き剥がすのには苦労したものの、私が幼く、メイ子さんもまだ大学生で通じる年齢のため警察が配慮してくれたようだ。無能ではあるが、これだけは感謝している。メイ子さんが矢面に立って過労にならずに済むからだ。

「お嬢様、いえ、風様」

「それ以上は言わないで。知ってるから」

メイ子さんが悲しそうに口を噤む。きつとその内容を言っても言

わなくても同じ表情を見せるのだから関係ない。屋上のフェンスに手をかけ、寄りかかるふりをしながら夕日を眺める。

寄りかかるフリなのはもし方が一にフェンスが外れ、不運なことに墜落死しましたってなりたくないからだ。

でも、夕日に惹かれるのはなんだか分かる。今この場からなら手が届いてしまいそうな、夕日を掴んでしまいそうな、そんな風に思えるほど屋上で見る夕陽は不思議だった。

これが夢の中であつたならば、箒を使わず躊躇いなくその光の中へと飛び込むだろう。そして夢の中で死に、強制起床させられるのだ。それもいいかも、だなんて考えて風で攫われる髪を押さえつける。

—— ああ本当に綺麗だ。

火が静かに消化されていくような、光が引き絞られていくような、花火が散っていくような…… あるいは、生命の終わりを表すような、そんな感想を抱く。

夕日は終わりの象徴。でもまた朝日は昇る。だけれど、死者は決して蘇ることはない。恨んでいるだろうか。憎んでいるだろうか。のうのうと生きている私を、皆はどう思っているだろうか。たとえばそれが独りよがりだとしても、そう思わずにはいられない。罪悪感などとうにないが、気になるものは気になるのだ。それがたとえ、自己満足だとしても。

「メイ。私のお願いを聴いてくれる?」

「…… はい」

もはや命令だな、拒否権は初めからない。自嘲しながら笑って、声をかける。だが、私は振り返らない。彼女に背を向けたまま何度も訪れるこの世の終わりの一つを眺め続けているのだ。

「ねえメイ。私、キミに呪いをかけようと思うんだ」

「なんなりと」

声に、詰まった音がした。

なにを言い出すのだと吃驚したのだろう。昔から彼女はクールな

のに変なところで素直で、ちよつと天然で面白い人だ。私なら彼女の好きなものは何でも分かるし、スリーサイズまで把握済み。言うなれば、私は彼女の説明書だな。知りたいことが知れる説明書。だがそれはあちらも同じことだろう。私のことはそれこそ離乳食やつてた頃から隅々まで知られているのだ。そう思うと少々気恥ずかしいが、お互い様だな。

「いつか、私になにかとんでもないことをやりそうになったとき、狂って正気を失ってしまったとき、そんなときが来たらどんなことをしても止めてね。キミにはその権利がある。いや、義務かな。これは大好きなキミだからこそそれに頼むこと。ね、受けてくれるよね」

疑問系はやめた。

自分勝手に、傲慢で、偽善者なんていう最悪な私に付き合い続けた彼女のことだ。

彼女は断れない。

それを、私は知っている。

ああ、卑怯だ。嫌われても仕方ないことをしている。それでも、この問答は必要だった。私が独りで生きるか、それとも隣に彼女がいるのか、そんな別れ道。

「お望みのままに」

「……ありがとう」

蚊の鳴くような小さな声で言い、彼女に向き直る。

いつの間にか伸びた髪が現実でも魔法の格好ができるほど長くなっていて鬱陶しい。だから鋏を取り出して、肩の上でぎつくばらんに切ってしまった。髪が伸びて重くなれば少しはクセ毛も寝癖も直るかと思っていたが無駄骨だったよ。

いや、恥ずかしいことだが本音で言えば髪を切るだなんて思いつきもしなかったのだ。それほどまでに余裕がなくて、なにも見たくなく

て、なにも聴きたくなくて、なにも話したなくて、なにもやりたくなくて、なにもできなかつた。

だがこれでもう誓いは済んだ。ただの口約束だけれど、きっと彼女は守るだろう。それならば問題ないのだ。

「いつか、迎えに来てね」

「ええ、いつか」

知っていた。私に引き取り手がついたのは知っていたことだった。

メイ子さんがこの屋上に来て、とても悲しそう、嬉しそう、複雑な顔をしていたからその心情をなんとなく悟ってしまった。私が普通の家庭に入れることを喜ばばいいのか、己の感情に任せて悲しめばいいのか分からないのだろう。

「私の一番は、いつまでたつてもキミしかいないんだからね」

「ええ、存じております」

子供のように念を押して、満足する。

「暫くさよならだよ」

「願わくば、貴女様が幸せになれますように」

互いに誓い合って、屋上を後にした。

手を繋いで、少しずつ階段を下る。エレベーターは使わない。あと数日間。大好きな彼女と幸せに過ごすことにしよう。最後のひととき。

夕日はとつくに空の彼方へ姿を消していた。

No. 9 『小学校』 ―現状―

大好きなお姉さんたち、大好きな友達、大好きな母親、大嫌いだった父親、そして、大好きなメイ子さん。

みんなが皆、幸せそうに笑っていた。姉さんたちは障害を受け入れられ、橙子ちゃんは病気が治り、産みの母はとても健康的になって微笑み、父親は狂っていたのが嘘のように穏やかで優しげな目をして見守っていて、メイ子さんが笑顔で私を抱きしめる。そこには幸せが溢れていて、不幸なことなんて欠片もなくて、皆が私を囲んで笑っていた、幸せそうに。その中心で笑っている私を私が見た途端にこちらを向いて悲しそうに笑った。

なんで？ そんなに幸せそうなのにどうしてそんな悲しそうな顔をするの？

その言葉にますますあの中心にいる “私” は悲しそうな顔をして首を振る。口を開けて何かを言っているのは分かるのだが、ノイズがかってなにを言っているのかは分からない。言葉は伝わらない。「むなしいだけだよ」

心のどこかで思っていたことが自分の口から飛び出る。それに驚いて口を手で押さえると中心で笑っている “私” はその通りだと言いたげに首を縦に振った。そして、自分の母親にそっくりな諦観の浮かんだ笑顔を浮かべて手を振るのだ。さよなら、とでも言うように。

「ちよつとー」

私が声をあげてすぐに彼女は立ち上がり、その手に現れたものを振りぬき、周りにいた大好きな皆をその手にかけた。真っ赤に染まる白い床はあのとときの巻き返し。カラン、と乾いた音を立ててその手から滑り落ちた鉄パイプを恍惚の浮かぶ表情で見つめて彼女は笑った。

そして、最後に残ったメイ子さんが血だらけで俯く私に上着をかけ、お辞儀する。狂ったように笑う彼女を抱きしめるメイ子さんの後ろにあるのは真新しいチェーンソー。

被ったフードの、その隙間から覗く私とは違う真っ赤な目に思わず

手を伸ばして失敗する。ゆっくりと倒れる彼女は笑いながら言った。「キミは私みたいになつたらいけないよ。分かったね？」

言い聞かせるようなその声を最後に意識が薄れ行く。ああ、分かっていた。あの幸せな場所がただの夢でしかないことを。分かっていた。それが叶わぬ希望^{のぞみ}であることなど。もう終わってしまったことなのだから。

ピピピ　ピピピ　ピピピ

「んう……」

バシン、と大きな音を立ててえらくベターな音を鳴らす目覚まし時計を止める。

「さびちゃんに会っちゃった、のか？」

朝一番に思ったことを言う。そして、次々と言葉に直して夢を忘れないようにしてから近くの机の上に出しっぱなしになっている日記帳にその日の夢と考察を記載するのだ。もう、読む人は近くにいないけれど。大分溜まった日記帳の一番最初、ダンボールに保存してあるそれを手に取りパラパラと捲る。

「あはは、きつたない字だな」

随分昔に書いたそれに小さく笑い、大事に仕舞いこむ。今の両親に見つかったときのためにダンボールには「必要な物、見たらダメ」と書いてあるので捨てられることもない。一日に一回、それを確認して制服に着替える。白いワイシャツと赤いネクタイ、紺色のベターなブレザーに、同じく紺のスカート。髪は寝癖もなにもないくらいの天然っぶりなので指通りが良くなるまで櫛で梳く。首には一目惚れして買ったオレンジ色のヘッドフォンをして、最後にワイシャツの中に隠れるように同じくオレンジ色をしたホイッスルと、皆で撮った写真が入ったロケットをかける。

「よっし、行くか」

自分の部屋から出て、階段を下りダイニングに顔を出す。既に用意された朝食を摂るために椅子に座り、これまたベターに正面で新聞を読んでいる伯父さんに挨拶をする。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

私は現在、あのクソ親父の兄である寛人ひろとさんと、その妻である和子さんの元にお世話になっている。

漫画や小説にあるような冷たくされたり、盥たらいまわしにされるようなことはなく、私のことを不憫に思った子供のいない夫妻が引き取ってくれた形になる。ありがたくもあるが、メイ子さんと離れる切欠になつてしまったことが否めないのが正直に言つてしまうと心の中ではかなり複雑な感情で満たされている。ありがたくもあるが、心の奥底では有難迷惑だとも思っている。こんな心の内を境遇を中途半端に知っている周囲の人に知られたらなんて薄情な奴だ、とか、恩を仇で返すなんて、と言われるに違いない。

「いただきます」

食べやすいように簡単に作られた卵焼きと白米を頬張り、噛めばシャキシャキと音を立てるサラダを食べる。そして食事を済ませた後に洗面所に立ち歯磨き。もう一度簡単に身なりを整えて携帯電話やらもろもろの物が入った鞆を手に持って玄関を出る。

「行って来ます」

「行ってらっしゃーい」

和子さんの声を背景に自転車に乗り、駅まで十分。電車に乗り込んでは早々に席を取り、学校では開けない携帯電話でネットを見る。

希望ヶ峰学園の新生スレッドは今年も大いに盛り上がっているようだ。そして、毎年最終的になる話題は “超高校級の幸運” についてだ。必ず妬み関連のレスがついていたり、目に見えない才能についての証明についてだとかのレスがついている。これに関してはまだ学園側も研究段階なので証明はなされていない。

そもそも、目に見えない才能である “他人の夢を散歩する” ことが

できるうろちちゃんが一般人認定されている時点でお察しだ。ちなみに、彼女との接点はあれ以来ほとんどなかったが、夢関係のスレッドで知り合い、また交流するようになっていた。名前がうろつきだった時点でもしかしてと思い、さびつきの名前でそれとなく事件の話とかしていたら向こうから接触してきたのだ。苦手意識はまだ抜けないが、普段は明るく良い人なのでよくチャットやスレッドでお世話になっている。

現在も学校に行く間なんかは夢関係のチャットで会話したりするのが日課だ。チャット名は “ 夢散歩同盟 ” で、創始者は不明だが、新しく管理人になってくれる人を募集していたので私と織月姉さんが管理人になった。まだ人数は少ないが、原作勢がたまに來たりして居ついていくのでわりと重宝している。勿論、ミーハー魂的な意味で。

さびつき

【最近また超高校級の幸運についてアレコレ噂されてるみたいだね。うろちちゃんはと思う?】

うろつき

【どうって、正直あんまり興味ないけどさびちゃんがそのうち幸運枠で入学しそうなことは分かるよ。青汁にそう言われたことがあるんでしょ?】

さびつき

【キミは幸運だねとしか言われなかったけど、それってアリなものなのかな】

うろつき

【私だって散歩が云々言われたことあるし、的を得てるでしょ。人の特別な部分を見抜いちやうのがアイツだったわけだし】

さびつき

【へえ、そんな特技があったのか】

—うそつきさんが入室しました—

うそつき

【やあやあ、二人ともおはようさん。クソ面白くもない話題で盛り上がってる意味が理解できないうそつきちゃんですよー】

うろつき

【おはよー。またまたあ、話に入りたくせにく。それにしても、うそちゃんが朝に来るのは珍しいね】

さびつき

【はよー。確かに珍しいな。ところで、二人は希望ヶ峰行きたいと思う？さつきの話題からしてもしかしたら幸運枠で行くことになるかもしれないから参考までに。こんなことスレッドで訊いたら自意識過剰乙とも言われそうだし。】

うろつき

【フリなの？ 自意識過剰乙。ええー、やだ。予備学科でも行きたくないな。煌びやかなのはどう考えてもスカウトされた人だけだし】

うそつき

【自意識過剰乙。マジレスすると普通の高校行った方が幸せでしょうよ。予備学科なんて、妬みを増幅させるようなものがあるのが理解できないし。てかさびつきさん私と同じ年でしょ？まだ中学生にもなっていないのに気が早いですねーw】

さびつき

【まあまあ、もしもの話だからな。ほら、私が行くとき一緒について来てくれるとか……】

うろつき

【それはない】

うそつき

【ないわー】

さびつき

【；|；】

うそつき

【もし決まったらご愁傷さまですw】

さびつき

【くそう。そろそろ駅に着くからまた今夜ね。落ちまーす】

うろつき

【おつー】

うそつき

【おつおつ】

—さびつきさんが退室しました—

今のチャットで交流していた人で、うそつきというのは文字通り少々捻くれた女の子。同い年で、私の家に近い小学校に通っているらしい。まだ会ったことはないので分からないが、今度うろちやんと一緒にオフ会に来るかもしれない。三大派生、夢日誌の主人公だ。

でもチャットで同じ境遇の子たちと交流できるようになったからといって幸福だというわけでもない。夢の出来事を語らって無理矢理オモシロオカシク話すことができるようになったが現実が幸福になるわけでもないのだ。幸運にも夢を見ること自体は苦痛でなくなったが、現実是非情である。

そしてここで一つ、私が行くであろう希望ヶ峰学園についてを頭の中で主観を交えながら分析しておこうか。

希望ヶ峰学園というのは一等地に巨大な敷地を有する政府公認の特権的な学園で、その全てが政府からの寄付金で成り立っているというところでもない学園。しかしその実態はというと才能ある者たちのためにミィハーな少年少女たちを釣り上げ、莫大な学費を払わせるという規模も劣悪さもとんでもないことをしている学園だ。天才の為に湯水のように使われる研究資金が莫大であるためそうやってお金を集めないと続けていられないのだろう。

ゲームであればまさしく溝を生みそうなすんなばらしい設定だと恍惚としながら賞賛できたものだが、これが現実となるといけない。そんな爆弾を抱えてさらに大きくさせているようなそんな学園死ん

だつて入りたくない。文字通り、既に死んだ身だが絶対に入りたくない。

だが現実には非情である。私にはこの学園に入ることが既に運命づけられている兆しがチラホラとあるのだ。名前とか、名前とか、名前とか色々だ。

それはとてもかく
閑話休題

この学園は全国各地からありとあらゆる分野の超一流高校生を集め、将来を担う “ 希望 ” に育て上げることが目的とした場所であり、才能というものを研究する場所でもある。そして、ここに選ばれた高校生で超一流の才能を持った人間のことを “ 超高校級 ” と呼称するのが最近では普通になってきている。

昔はネット用語でスラングしかなかったが、希望ヶ峰の〇〇の才能を持った〇〇なんて言い方は長すぎて皆この超高校級の〇〇という呼び方を始めた。数年後にはもうこの呼称が当たり前になっていくかもしれない。

脱線してたな。あと思い返しておくべきなのは、あのふぎけた都市伝説についてとかかな。そう、私たちのようなマイノリティ以外がこの学園を語るるときについて回る都市伝説のようなくだららない言葉があるのだ。

『この学園を卒業できれば、人生において成功したも同然』

この学園の卒業生が様々な業界で活躍しているので一応事実に基づいた話ではあるのだが、こんなに胡散臭い文句はここ以外にないだろう。そもそも、希望の学園なんていうそのネーミングも大概胡散臭い。

こんなことをいうのは少数派どころか、私たちのように既に絶望を経験した人間にしか分からない価値観なので迂闊にこんなことを口走ったらそれこそ予備学科辺りの学園信者に消されかねない。だから、身内限定のチャットでもぼかしかことしか言えないのだ。はつきりと批判してしまえばコンピューター関連の才能を持った人に見つかるかもしれないから、オフ会で会ったときなんかは自室でこっそりと密談するか、日記に不平不満を洩らすことしかできない。不便なも

のだ。

とにかく、そんな良い意味でも悪い意味でも人気な希望ヶ峰学園の入学資格は四つ。 “ 現役高校生であること ” “ 各分野において超一流であること ” “ 抽選に当たること ” “ 予備学科生として入学試験を受け、莫大なお金を払って狭き門を突破すること ” だ。

本来は前者二つが希望ヶ峰学園としての絶対条件であり、抽選で本科になる生徒はたった一人のうえ、入学してからも運についての研究が待ち受けている。

現役高校生であることの項目は年齢が少々過ぎていても高校に通っていればクリアーできる。現に無印のダンガンロンパに登場する葉隠^{はかくれ}康比呂^{やすひろ}は高校卒業できずに3ダブしていると言っていたし、厳格な年齢制限はないと言っているだろう。

そして各分野で超一流であること。これは絶対条件だ。超高校級のギャンブラーであるセレスはぼかしてあるがライヤーゲームを何度も切り抜けているような描写があつたし、超高校級の文学少女である腐川さんは若手女流小説家であり、純愛小説のベストセラー作家である。

超高校級の御曹司である十神白夜は世界屈指の巨大財閥の跡取りで、壮絶な跡取り争奪戦を切り抜けてのし上がった猛者である。その上、家の力に頼らずともデイトレードで400億以上もの個人資産を築き上げるほどだ。

超高校級のアイドルとしてスカウトされる舞園さんは国民的アイドルグループのセンターマイクだし、桑田はプロも目を付ける高校球児で一切の練習をせずに勝てる飛び抜けた野球センスを持っている。

天使こと大神さくらさんはあらゆる武道に通じる地上最強の女子格闘家だ。

これだけの才ある高校生しか希望ヶ峰学園の恩恵は受けられないのである。そりゃあ憧れの的にもなるだろう。

それに抽選で当たって超高校級の幸運として希望ヶ峰学園へと入る人間は毎年たった一人だけ。運という不確かで見えない才能

を研究するべく学園側が設定した入学方法である。日本全国の中からたった一人。もしかしたら宝くじの一等よりも確率は低いかもしれない。妬まれるのも無理はない。

予備学科生は同じ学園に在籍しているだけという特権を欲しがるお金を搾取するためだけに学園へ入学を許された高校生たちだ。本科の生徒とは滅多に会えることもなく、学園にいるからといってお金が搾り取られるだけで自分が才ある子供になれるわけでもない。

こんな制度で超高校級の絶望が出てくるまでよく爆発しなかつたと関心すらする最低最悪の制度だ。不満を持つ人がいない事実がもうやばい。

学園の教師たちは私がいた病院の人たちとそう変わらぬ。才能 “ という麻薬中毒者たちだ。その研究が法律で定められているラインを超えているか、いないか、理性が残っているか、いないかの危うい違いでしかないと思う。

とまあここまで語つといてなんだが、まだ私は小学6年生なわけです。こんなプロログのようなことはまた今度、近くに訪れる未来にでも言うことにしようか。

現在私の通っている学校が駅を出て十分もすれば見えてくる。

ヘッドフォンを外し、携帯の画面をいじって電源を落とす。私立の小学校に通っているため、こういうところは煩いのだ。これが中学生になったらもつと酷い扱いになるかもしれない。それに、ただでさえ髪色と天然パーマで色々言われるのに、付け込まれる隙を晒すほど馬鹿ではない。

ホイッスルとロケットに関しては何見だと言つて許可をもぎ取っている。問題ないが、やはり目はつけられている。医療機関最大最悪の事件の生き残りであることで甘やかされているとも思われているのか、やんわりとだが私にはバレバレな絡み方をしてくる教師がいるのだ。もうすぐ卒業するにしても小学生相手になんて先生だ。

蔦巻小学校。そこが私の通う小学校の名前である。

少し古い上に名前通り煉瓦造りで蔦が沢山巻かれている旧校舎のある自然豊かな小学校だ。

私が事件の生き残りであることで選ばれたとても穏やかな場所で、障害者用の学級も別校舎にある良識あるところなので今のところはイジメなんかが起こる気配もない。自然豊かなために林業の職業体験など、普通の小学校にはないイベントが多くてそれなりに楽しんでいる。

そういえば、毎年十何人も才能ある高校生が出てくる時点でこの世界の才能ってインフレしてるよね。中学校の部活とかスポーツ系の大会とか物凄く競争率高そうだと進路先を決める際に眺めていた中学校一覧を見て思った。

一番近い場所にしようと思ってるので進学先は同じく私立の「渦巻中学校」かな。パラリと捲った書類を横から覗いて来た子が「目があああ」なんて細かい字を見て悶えているけれど知らない。

あとの学校生活は美化委員やっているくらいでクラブも入っていないから特に面白そうなおことはない。それなりに交流がある子たちとこっさりパラノイアごっこをするくらいだろうか。現実がパラノイアになりかねないのに妄想でもそんなことをするなんて、と思うかもしれないけれども面白いのだから仕方ない。

と、まあこんな感じが私の日常と言えはいいのだろうか。肩身が狭いといえばそれまでだが、少なくともパラノイアやってくれる友達がいるのだから精神的にはそこまでやられているわけではない。夢以外に精神的に参ることはあまりないのでもしかしたら病院生活よりも快適かもしれない。そんな日常だ。

ここにメイさんが居れば、もう叶わないことだが皆が居れば、そう思わずにはいられない。心のどこかで、あの悲しそうな赤い目に罪悪感を感じたが、私はそう願った。

No. 10 『笑顔』―旅行―

そう、それは旅行帰りのことだった。

生ぬるい幸福に浸かって恐ろしい「幸運」を野放しにしていたのが祟った出来事だった。

突然だが、私は今旅行に来ている。

青い空、白い雲。青い海、白い波。ゴミのない白い砂浜。

海辺で鳴くウミネコたちがみやみやあつあつと可愛らしい声で鳴き、アザラシが遠くの岩肌で寝そべっているのが見える。

私の立っているこの場所はガラパゴス諸島の一つ。ダイバーが多く訪れる場所であり、東に行けばアシカの住むロボス島。西にはカメの保護園。沖のキッカーロックの下は有名なスノーケリングスポットになっていて、運が良ければハンマーヘッドシャークを見ることがもできるらしい。いや、私の場合運が悪ければ、かな。

どちらにせよ、泳ぐのが好きだからといって沖に出るのだけは勘弁願いたい。どう考えてもパニック映画さながらのことになるのは目に見えているからだ。シヨノーケリングしていた人がボートの傍から急にいなくなり、血だけが海面に浮かび上がるなんて体が震えるほどベターなことにリアルでなりかねないのだ。

ただでさえ島と島を渡る際の船移動が高波に襲われたりするのになんかことになったら暫く日本に帰れなくなりそうだし。

ここはサンスク……なんとか島。両親から聞いたはずなのだが思い出せない。外国の場所の名前って日本語だと言いつらいし、発音しにくいし、覚えられないのも無理ないと思う。

私はそのビーチに一人佇み、ひたすら潮溜まりを見つけては観察するだけに留めた。パレオ付きの子供用水着に黒いパーカー着用。

暑い、長いパーカーなのでフジツボで膝を切るといふ事態にもならないはずだ。フジツボで膝を切って皿にフジツボびつしりみたいな都市伝説のようにはなりたくないからね。

粕枝の幸運は不運があれば来ることが予見できるが、不運のほうは不規則でやってくるため油断大敵。海なんて危険生物の巣窟は以ての外。プールでも排水溝にホイッスルが吸い込まれて溺れかけたことがあるというのに海に入るなんてとんでもない。

どうせダイビングしたらゴマモンガラやサメに出くわし、浅瀬で遊べばウミケムシを踏み、モンハナシヤコに骨を折られ、デンキクラゲに遭遇して瀕死になる未来しか見えない。もっと沖に行けば潮の関係で戻れなくなり、サメの集団がぐるぐる取り巻き、助けに来た人が次々と……

ああだめだ。嫌な予感がぬぐえない。

海好きなのに入れないだなんて悔しいなあ。

とりあえず海に入れない理由は海水の塩分で肌が炎症を起こすつて言っている。なので両親も泳げないなら教えてあげよう！みたいに無理矢理克服させてこようとはしない。そこは安心だ。

山だつてスズメバチの巣が上から降つて来る（クマが近くにいて攻撃中だった）し、鈴を持っているのにクマとエンカウントした数は数十回にもものぼり山小屋やコテージに泊ればムカデとこんにちは。トイレにはマムシかヤマカガシ。なぜだ。がっちり服装をかためていてもヒルがいつの間にかくっついていて、チャドクガの毛がコテージに残っていることなんてザラ。

両親とはプライベートな理由で泊まる場所を分けると言つてあるが、実際にはこれが原因である。あの優しい人たちをこんなことに巻き込むわけにはいかない。スズメバチの巣が降つて来たのも朝の散歩中で必死に遠回りして逃げてコテージ付近に来ないようにしたしね。

遊園地に行けばデッドコースター状態が発生しかねないので行くこともできず、プールでは前述の通り排水溝に引き込まれて溺れかけたことがある。映画は幸運なことに前の席なんかを取ることができ

るとその後トラブルに巻き込まれやすくなるし、不運期間だともれなく背中にジューズが飛んで来たり、マナー違反な人たちの近くになつたりするしビデオカメラ撮影している人が背後にいて濡れ衣を着せられそうになったりする。

ああ、不幸だ……

まあ、それはともかく
閑話休題

私がここに来たのは純粹な旅行と、 “人を恐れないアシカ” を間近で見るためだったりする。

勿論、人を恐れないはずのアシカが私を襲ってくる確率は五分五分だ。事前に幸運な出来事があれば間違いなく襲って来ると断言できずしてしまうこの才能が疎ましい。

両親は熱心にバードウォッチングに勤しんでいるが中々見つからないらしく、これが難航しているため今は三日目。アオアシカツオドリやダイビングでシユモクザメを見るまで帰るつもりもないんだそうだ。

既にエスパニョラ島にて二日を過ごし、大量のガラパゴスアホウドリを撮影してきたようなのでもういいんじゃないかと思うが、私としても小学生最後の夏休みだから思い出と自由研究用に絵日記なんかを残していたりする。勿論夢を書く方の日記は別なので二冊。

私たちがこの一週間で行った島はまずこのサンなんとか島。ここに空港があるのでエクアドルを経由してやってきている。それからほど近いサンタ・フェ島。エスパニョラ島。一番最後にフロレアナ島で有名なポスト・オフイス湾の無人郵便局を覗き、ここサンなんとか島に帰ってきている。

実は私自身も諸島内で唯一熱帯性であるガラパゴスペンギンを見てみたかったのだが叶っていない。その代りと言ってはなんだが自然公園内や海岸で遠目にウミイグアナを目撃しているのでちよつと満足。

海で泳げないならばその周囲にいる動植物を鑑賞したり、貝を拾ってみたり、砂の城を作るしかない。

「あー！」

そして、どんなに海辺から遠くで砂の城を作っても高波かその辺の子供に破壊されてしまう。ああ、原作通りだね。狛枝はなにかを完成させることができない。編み物は大丈夫だがミシンを使う裁縫は必ず誤作動で停止したり滅茶苦茶に縫い付けられてしまったり散々だ。ハンドクラフトを趣味にするのは諦めろという神様からのお達しだろうか。ええいつ神なんて大嫌いだ！

岩肌の近くで僅かにある砂で城を作るのはやめ、ふとすぐ近くにあった潮溜まりを視界に入れる。

「あ、ウミウシ発見」

ウミウシなら、手に乗せる人もいるし問題ないよね？

そろっと手を伸ばし、潮溜まりに浮かぶ小さな生き物を……

「凧ちやーん！」

遠くから声が聞こえ、勢いよく振り向く。岩場の向こう側に保護者の寛人^{ひろと}さんと和子さんの姿を認めて声を上げた。

「あー寛人さん^{ひろと}和子さ、うぎい!？」

海水に浸していた指に電流が走ったような痛みが襲い掛かり、情けない悲鳴を上げて手を素早く抜き取った。

「で、で、電気クラゲだとお!？」

お前潮溜まりなんかにいちゃいけないやつだろ！ というよりも本当にまずい。殺人クラゲで有名な上アナファイラキシークショツクを引き起こすやばいクラゲだ。いや本当、なぜこんなところに！

必死に海水で洗ったが腫れはやまず、病院送りになって国へ帰るのが一日延びたの言うまでもない出来事だった。

No. 10 『笑顔』 ―占拠―

それは、旅行帰りのことだった。

「音楽を聴くのは構わないけれど、携帯電話はちゃんと機内モードにしておくんだよ」

「はーい」

通路側に座る寛人さんがヘッドフォンを首に掛けた私に向かって言う。

その表情はとても満足気で、しきりに島内で撮影した写真を確認していた。

「ガムの用意はできたかしら？ 耳が詰まるのは困りものよねえ」

「そうですよねえ。寛人さんが平気なのが信じられないくらい！」

真ん中に座る和子さんが沢山あるガムや飴の中からお気に入りのお味を見つけて窓側に座る私へと渡してくれる。珍しく曇った空港の空を眺めながら私はそれを受け取り、何度も忘れ物がないかを確認しながら包みを開ける。

「パスポートもちゃんとバッグの中に入れてたものね」

「はい。パスポートなかったらここにはいませんよ」

「うふふ、そうよねえ」

包み紙を丁寧に畳んで携帯しているビニール袋のなかに捨て、真っ青なガムを口にポイと入れる。一噛みで爽やかな味が口内に広がり、目が覚めた。これは日本に帰ったら時差ボケが酷そうだぞと思いつつ胸元で揺れるホイッスルと写真入りのロケットを手で掴み、笑う。

ロケットペンダントとホイッスルは、さながら神父さんがいつも十字架をつけているかのように毎日毎日ずーっと身につけて行動している。

これは大事な思い出であり、そしてそれと同時に私を戒めるものなのだ。彼ら、彼女らをどんな幸福の沼に浸かたって忘れてしまわないようにと。忘れられないようにと。

こんな私を過去に囚われているという人がいる。

だけれど、私は現在に生きていないという認識もない。
ホイッスルと思いは私の胸元に。

昔のゆめにつきは捨てられずに段ボールの中に。
今の私には短くなつてしまったマフラーも丁寧に洗い、クリーニングし、毎年使用しているし、マンシヨンのベランダで育てている花々にはメイにもらったジョウロでお世話をしている。

初めて私を家族として迎え入れてくれた四人との思い出も未だ残っている。ブラッシングでとれた毛を使って作った編みぐるみは二つとも現在も私の部屋にあるし、今の両親にプレゼントされたものも色あせずに保管してある。整理整頓を欠かさずしなければゴミ屋敷まっしぐらだと自嘲しながら毎日思い出の蓋を開ける。

扉から飛び出して、そのまま何処へと消えて行つてしまった真つ白で華奢な彼女。

そして、それを探す際に起きた悲劇。

—— やだあ！ —— 死なないでえ！

傾く電柱。

色褪せる犬小屋。

今でも柔らかな彼の感触がこの手に残っているように錯覚するほど、鮮明に覚えている。

瀕死の状況で応急処置の一つでもできなかつた私にその鼻を押し付けふすふすとかすれた声で鳴く「あの子」を。

自分が死なずに済んだことを心のどこかで喜ぶ私を決して責めず、守れて心底嬉しいのだというように一振りだけ動かした尻尾を。

忘れられず、忘れず、今もその形見を使つて製作したぬいぐるみと共に過ごす私を人は弱いという。過去に囚われているという。でも、それでも良かったのだ。

—— 欲を言えば、最後まで犬猿の仲のまま逝つてしまった怪物の思い出も保存しなかったが、彼との思い出は探しても探しても何も見つからなくて、夢の中^{きおく}にただ閉じ込めることしかできないのだ。もう少し話してみたかったという気持ちと一緒に。

「凧ちゃん、もうすぐ出発するって」

「え、あ、はい」

窓際に凭れた私の肩を軽くつつかれ沈んでいた思考が浮上する。

『皆様、まもなく離陸いたします。座席ベルトをもう一度お確かめください。』

アナウンスが流れ、お互いにベルトをチエックして搭乗員に見せる。

そのとき、エコノミークラスの方からやって来た二人の男が何かを頭上に掲げ、叫び出した。

「全員静かにしろ！」

なまりの強いスペイン語で話す男が掲げたものは真っ黒に光る拳銃であった。

一瞬で静まり返る機内。搭乗員も硬直し、じりじりと後ろに下がるが既に入り口は閉じているし、離陸準備に入っているので退路は断たれている。

望みはパイロット席から通信を繋ぐことだろうが、そちらの扉からも一人登場し、後退していた搭乗員を捕まえてハイジャック犯と話し始めた。これでビジネスクラスはどちらの扉にも犯罪者が張り付き、おまけに拳銃を持っていることになる。

大笑いをするハイジャック犯に、私は既視感を感じた。

ああ、いけない。

気づいてはいけないことに気づいてしまった。

思い出しているいけないことを思い出してしまった。

自分の視線がついと観光情報誌に向き、それを再確認する。

『San Cristobal』

—— その日はちょうど家族でサンスクリトバル空港から 飛行機に乗る予定だったんだけどね。

なんとびっくり！ 飛行機がハイジャックされたんだよ！ 酷い不運だと思っただろう？ ——

それで、その後、どうなるんだっけ……？

記憶の奥底に埋もれた台詞が脳裏をよぎり、小さな窓から空を見上げる。

……その途中で、空港内にいる人たちが私と同じく空を見上げ、逃げ去っていく姿を捉えた。

赤い。

赤い赤い小さな点が分厚い雲を貫いてこちらに向かって来る。

それはまるで狙ったように煙の尾を引いて真上に向かって落ちてきていた。

目を見開き、その姿を捉えようと食い入るように見つめ、窓に張り付く。

そして、急に周りの音がゆっくりに聞こえるようになった。

こちらに向かうそれが枝分かれし、複数に変わる。赤黒く、眼前に迫るような錯覚を抱かせるそれに記憶の中の大きな黒い鉄板を重ねて私は口を開いた。

「あ、あ、あああああ！」

意識もせず出て来る叫びにハイジャック犯が何事かを叫び、黒い凶器を私に向かって構える。

「いやだあああああ！」

あつさりと引き金にかかる指と、止めようとする周囲の叫び。そして軽い音を鳴らしてその指が引き金を弾く。

だが、拳銃から弾が出ることはなかった。弾が引つかかって出てこない状態、ジャムだ。

視界から外れた赤黒い球体はいつの間にか見えなくなっていた。

そして、拳銃がジャムだったことに苛立ちを隠せない男が一步後ろに下がり、仲間に場を任せた途端にそれは起きた。

パァン！

金属音の後に何かが破裂する音が響き、一瞬目の前が真っ白になっ

た。

ああ！

見た。

見てしまった。

人の頭が変形していくさまをこの目で。

一瞬で命を刈り取られるその光景をこの耳で。

刹那に起こった出来事を私は理解してしまったのだ！

男の下顎がだらりと垂れ下がり、捕らえられた搭乗員の頭上へシヤワーのように骨の混じった血飛沫が降り注ぐ。それを被ってしまった彼女は何か起きたのかも分からず、ゆっくりと頬を濡らす血を手にとり取った。

「え、あ、い、いやあああ！」

声を漏らしてその正体に気づいた彼女はがくがくと体を震わし、甲高い悲鳴を上げる。

一瞬にして正気を失い、自分に覆いかぶさる男を除けて逃げ出す彼女に男たちは焦った様子で次ぎ次ぎと発砲する。

よだれを垂らし、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔を歪め、発砲された搭乗員は逃げ切れるわけもなく崩れ落ちた。

この時点で場は阿鼻叫喚の嵐となった。

子供の泣き声。女性の甲高い悲鳴。男性の怒鳴り声。ヒステリーを起こす者数名。呆然とする者。他者に襲い掛かる者さえいる中で二度、発砲音が鳴った。

「てめえら撃たれたくなかったら……」

そしてまた、発砲音ではない何か別の音がその場をまた狂わせた。

赤黒い玉。

私が空に見ていたそれが飛行機の天井を突き破り、丁度話していた男に着弾したのだ。

軽い音と共にその男の頭は仰け反り、体が傾く。

そして、数瞬の間を置いてそこから紅白の花を散らせた。

弾け飛ぶ血液に脳漿、小さな骨の欠片。

首の骨が折れたのか、男の顔は折りたたまれるように肩へだらんと垂れ下がり、衝撃に耐え切れず皮一枚で繋がっていたその顔がこちらをじっと睨みつけ、自重によりぼとりと転がった。

あられが降っているかのような軽い着弾音が天井から響き、幾つかはその硬い機体を突き抜けてハイジャック犯を地に伏せさせる。

そして轟音と共に飛行機の機体がぐらりと傾き、男の顔が苦悶の表情をしたまま私の足元に転がってきた。

私は漸く思い出した事柄で頭がいつぱいになり、ぐるぐるとかき混ぜられるような支離滅裂な思考に顔を青ざめさせる。

転がって来た男の頭に嫌悪感が沸き上がり、背筋を這うように撫であげた。

私は思わず足を引っ込め、自分を抱え込むようにして席の上に足を上げた。

そこでようやく私は周りの音が聞こえないことに気がついたのだ。

「や、だあ」

そう呟いて隣に座る和子さんの胸に顔を埋める。震える彼女の声で何か言われたような気がしたが、私には聞こえなかった。

優しく撫でる女性の手。それが突然離されたとき、私は何度も何度もしているはずの迂闊な選択を回避しようともしない自分を呪った。

私を心配して来たのだろう。寛人さんが席を立ち、顔をこちらに覗かせていた。

二人は少し顔を青ざめさせているが私を不安にさせまいと笑顔を作り、私の頭を撫でる。

ああ、優しい人だ。私にはもったいないほど本当にいい人たちだ。

もしかしたら、私を引き取ることになんてならなければ夫妻は幸せに暮らせたのかもしれない。

だからこそ、私は何も言えない、言う資格はない。

…… なんでだなんて、口が裂けても言う資格はないのだ。

何も聞こえない。

口を大きく開いた寛人さんの、優し気な父親の顔が歪んで、その口から小さな石ころが吐き出される。

それは尚も勢いよく空を滑り、私に迫った。

ああ、いつそこで死んでしまえたならば幸せだったのだろうか。

でも、そんなことを考えておきながら欠片もそう思っていない自分に嫌悪感が沸き上がる。

…… ありがとう。

条件反射だったのか、和子さんが何事かを叫んで私の頭をその体で抱え込んだ。

衝撃が頭のすぐ傍に来てなおも直進し、ずぶりと嫌な感触がして右太腿に激痛が走る。

「いつ、う、ぐううう」

覆いかぶさる和子さんをそつと座席に凭れ掛けさせ、視界が暗れたその光景に自分の脳を疑った。

倒れている人々。泣く人々。逃げ出す人々。

後頭部から口までを斜めに貫かれ、幸いにも痛みを知らぬまま逝った寛人さん。

彼にぶつかったことでは減速せず、私を守ってつぶてをその身に受けた和子さん。

そして、二人の体を貫いてもなお止まることのなかった拳大のつぶてが私の右太腿に突き刺さり、ごっそり肉を抉って行った様。

「あ、はは……」

体はびっしよりと濡れている。

何って、汗と、赤い粘着質のものと、白いどろどろしたもの。ああ、これは目玉だろうか。骨片だろうか。

自身から流れる血と、両親から噴き出した血にまみれもはやなにがなんだか分からない。血と、脂と、骨と、体の部位が飛び散って全部私に降り注いだ。

がりりと下唇を噛んで歯を食いしばり、自分の足にくぼみを作った石をどける。

…… 甘い。

自分のものか、顔にかかった和子さんのものか、判断はつかないが、ただ甘いだけ漠然と感じた。

次いで、つんと鼻に来る刺激臭に自嘲の笑いが浮かぶ。

「っ……ふ、う」

どくり、どくりと太腿が脈打っているように感じてしまう。

傷口が深すぎて血が足りない。

意識が霞みかかり、夢の中へ自分が入り込もうとしていることが分かる。

視界の端に映るのは、あの子わんこと同じように私を守れて心底安心したような和子さんの表情。

ぶるりと体を震わせて目を閉じる。

あごめんがなさいとう。

血を流し過ぎて寒気すら覚える体を自分で抱きしめ、まだ温かい彼女の体に寄り添うように身を預けた。

あごめんがなさい。

生理的にうっすらと滲んだ涙で頬を濡らしながら声を上げる。

「…… やい」

写真展、楽しみにしていたのにもう二度と父の作品は見ることできかないね。

「…… め……… やい」

母の和やかな表情も、優しい表情も、私に向くことはもう二度とない。

「いめ…… なや、い」

私はただ、自分が生きていることに感謝するしかできないのだ。でもなぜだろう、謝罪の言葉しかこの口から出すことができないのは。

私は確かに生き残ったことを喜んでいるというのに、なぜ涙しか出ないのだろう。

「ごめつ、なさつ……」

しゃくりをあげ、段々冷えていく体が怖くて、寄り添った彼女に縋りつくように自分を横たえる。

……こうして頭を撫でてくれた思い出も今日で最後だ。

ごめんなさい
ありがとう。

あの子たちと一緒に虹の橋の袂で待っててね。寿命を終えたら、必ず向かうから。

それまではあなたたちの分も含めて精々長生きするよ。

根拠？

……だってほら、憎まれっ子世に憚るって、言うでしょう？

「はは、はは……」

遠くに聞こえる救助活動の音を余所に私は意識を手放した。

No. 10 『笑顔』 ―追憶―

誰かが呼んでいるような気がした。

沈んだ意識の中で、誰かが……

「毎晩毎晩、場合によつては日に何度も、ここに来るのはなんだか……飽きてくるよ」

まず意識が戻ったら周囲を確認。これ定石。

うん、相も変わらず薄暗い夢の世界だ。四方向に引つ張られている放射状の黒い線。白い床。黒い床のときもあるが、今回は真っ白な床に黒の線だ。扉も変わらず、静かに鎮座している。

夢の中では平和なのだから今は何も考えないようにしよう。手続きが面倒だな、とか、そんなことが頭に過る自身を自己嫌悪しつつさでどうしようかと考える。

どうせエフエクトも増えていないだろうし、記憶が若すぎてどこがどうやって世界が繋がっているのか現時点では分かっていないし、いつも通りに知っている場所を見回りつつ、ダメもとで新しい道ができていないかを探して行こう。

毎日同じ夢を見るものだからこの作業にも、碌に疲れがとれない睡眠をしていることにも慣れてしまった。

「とーうーとーちやーん」

下の扉から入った世界を更に進み、ここは海底世界。

定期的にくくくくと口元から水泡が上がり、明るい海面へと昇っていく。

周囲を見渡すと辺り一面マリンブルーの透明な海の中、自身の身長よりも尚高い海藻がゆらゆらと風いでいる様子が窺える。ゲーム画面で見るとよりもずっとずっと綺麗な海の中だ。前世でも今世でもダイビングだなんてことはしたことがなかったからとても新鮮だ。海の中とはこのような場所なのだろうか。透明で、自身の体が軽くてふわふわとしたこの感覚。一度でも味わってみたかったなあ。

「遊びにきたよー！」

そんな海の底で歩いている彼女の、オレンジ色のヘルメットからぶ

くりと水泡が上がった。静かに歩む彼女の周りをくるくるとスキップしながら回ってみても、彼女は何も言わずただそこに居るだけ。

そして正面に来たところでピタリと立ち止まる。

私の着用したエフエクト、潜水服からも彼女と同じように泡が上つていった。

何も反応を示さない姿に少しだけ虚しさを覚えながら彼女のヘルメットの中を覗き込む。反射でよく見えないが黒髪の少女が微笑んでいるのがなんとなく分かった。無表情よりももっと人形然とした表情に胸が締め付けられるような、言いようのない感覚に支配され、私はすぐに目を逸らしてしまう。

ふと視線を背後に回せば彼女の後ろを鮮やかな色をした小魚が泳いでいくのが見えた。そしてそれに手を伸ばしてみても小魚は華麗に身を躲し、逃げて行ってしまう。そりやそうか。

ぶくり、とまた水泡が上がる。

もつとよく見ようと周囲を見渡すと三メートルほどの砂の塔がそこかしこに建てられていた。

本当に綺麗な場所だ。ここだけは夢の世界のどこよりもはつきりしていて、鮮やかで、人工的な不気味さなんか一つもない良いところだ。

きつと、この海底世界は橙子ちゃんそのものなのだろう。日差しが海面に差し、光の帯を水中に降らす。どこよりも光に溢れていて、私の知る誰よりも希望に溢れていた人。明るくて、透明で、パレードが起こらなければ普通に闘病して、普通に退院するか、大きな病院に転院するか—— いずれにせよ、殺されるなんていう最悪な結末を迎えることはなかったはずなのに。

「はあ、なんでこうも学習しなんだろうね、私は」

オレンジ色の潜水服を着た彼女の手を取る。もう随分と小さく感じるようになってしまったな。私もかなり成長したし、仕方ないのかもしれない。だけれど、この子はあのときのまま、成長しないままだ。そんな私だって精神はまるで成長をしていない。何度繰り返しても、私は何もできない。何も行動できない。なにも知らうとしない。

一人で懺悔しながら、オレンジ色の彼女を抱きしめる。ああ、冷たい。冷たいよ。

ぼこぼこ彼女のヘルメットから水泡が流れていく。

—— 静かだ。

「…… ずつとここに入り浸ってるのも、なんだしね」

名残惜しく思いながら、私は下へ、下へと降りていく。

すると、海底であるにもかかわらずそこには崖が広がっていた。そしてその中心にぽつんと錆びた鉄の階段が設置されている。向かう先は暗闇。橙子ちゃんのいる場所より深い所は光の差さない諦観と、絶望の照らす領域。

潜水服を解除して白のスカートに紺のハイネック姿…… つまるところ、いつものというようなお気に入りの服へと姿を戻す。

カン カン

「まっくらだな」

独り言を零しながら一度目の踊り場に出た。

横には暗闇の中に扉と同じくらいの大きな穴。しかし、そこにはなにもない。ぽっかりと口を開けた穴からは生暖かい風が吹き込んでくる。

今までは手を出さなかった場所だが、懐かしい思いが胸を包んでいる今ならこの先に行ってもいいかもしれないと考えられた。心の整理がついたのか、それとも贖罪か、やっと彼女を迎えに行こうと決心がついた。橙子ちゃんが背中を押してくれたのかもしれない。そう思えば幾分か足取りが軽くなった。

一歩、踏み出す。

さあ、と温く感じる風が頬を撫で、通り過ぎていく。

暗闇の世界にはピンクやオレンジの淡い光が行き交っていた。星のように大小様々で明るさも違うそれらはホタルのような幻想的な雰囲気を纏っている。

足元は真つ暗で、上も下も、左右さえも分からぬような有様だがそこは夢である。恐怖心もなく扉から少しずつズラして大きな部屋を歩く。

基本的に夢の世界は行き止まりがなく、端に到達したらまた部屋を
ループする仕様になっている。だから扉を中心としてまず左にひた
すら歩き続け、もう一度扉が見えてくるまで歩数を数える。一周した
ら三步ほど上下のどちらかに移動して同様に一周。こうしたほうが
迷子にならず、便利だからだ。その代わり作業になってしまったって多少
疲れが出てきてしまうのは仕方ないのかもしれない。

「ん？」

仄かに漂う光が茶色い机を照らしていた。いや、木の板が張られ、
腰掛けるのに丁度良い高さにあるそれは机と言うにはあまりにも広
く、中途半端な高さしかなかった。座って机として使うには高すぎる
し、椅子を使えば低すぎる。これは骨組みだけのベッドだろうか。

その上にはまだ何も無い。

「え、うそ」

モノアイや潜水服のエフェクトは手に入れてもりん子姉さんの象
徴たる “ 機械 ” はそこにはない。

それはなぜなのだろうか。条件は満たしているはずなのに、分から
ない。

骨組みだけのベッドにそっと触れて目を瞑る。

ただ硬い感触と冷たさを感じるだけで何も起こらず、目を開いた。
りん子姉さんは私のこと嫌いだったし、もしかしてそのせいだろう
か。いや、流石にそれはないか。エフェクトとは私の中に根づいた強
烈な印象を持つ象徴たちのことだ。相手の意向関係なく私の印象に
強く残っていれば現れるはず。

ということとは私の問題なのだろうか。

折角勇気を出してここまで来たというのにあまり意味がなかった。
エフェクトが現れていないということは分かったがそれだけだ。

ま、なるようになるさ。ベッドに背を向けて次行く場所を考える。

「次は…… 胎内洞窟か」

あそこなら母さんにも会える。そう考えて道を遡るようにして引
き返す。

手をかざし、箒を手に取り変化した服と髪を眺めて異常がないこと

を確認。肩に垂れてくる長いポニーテールの先を背へと払い、軽く箒へと腰掛ける。

本来エフェクトとしての「ほうき」は跨って乗るイメージ通りの使い方ができないが、箒の使い方が行きたい方向に体重移動をしたり、軽く頭の中でナビゲートしながら行うことなので慣れればこの通り横乗り飛行ができるのだ。今更な説明だが、魔女さんの指導はジエスチャーだけだったから覚えるのにかなり難航した。今はこの通り運転も楽にできるのでそのうち立ち乗りを練習したいところである。

あと、懸念していたお尻への痛みはまったく快適である。なので横乗りは体制が楽だとかそういう理由でなく、ただ恰好つきたいからやっているだけに過ぎない。自分の夢の中なのだし、誰も見ていないからこそできることだ。

すすいと箒を操り、ともすれば鼻歌を歌いながら悠々と飛行していく。

エントランスまで戻り、右の扉へ。陽気だけれどどこか不協和音のような不可解な音楽の鳴る部屋の中にある赤いボックスのようなワープポイントを抜ける。

ドクン、ドクンと脈打つ静動脈通路を飛行しながら通り、独特の音を鳴らす心電図を横目に真っ白な十字路を血の多い方向へ進む。本当は、血の少ない方向に進めば母さんの眠るベッドに辿り着くことができるが、一対一で会うほど私はまだ立ち直れていない。きつと、部屋から出られなくなってしまうだろう。橙子ちゃんは大きく広い場所だったからまだなんとか誘惑に勝つことができたが、あそこは個室だから誘惑に勝てる気がしない。さっさと抜けるに限る。

おどろおどろしい音が響く血みどろの空間に何も思わずに飛行できている自分に少々引きながら一直線にアルビノジョーズ（命名）の元へと進む。感覚が麻痺してきているのは自覚済み。まあ、ホラー映画に耐性ができるように演出だけの夢の世界には動揺しない。……

世界観だけにだが。

勿論、初めて遭遇した恐怖イベントや現実と連動したイベントには

まるで耐性がないのでS^正A^気N^度値はガリガリ削れていく。できれば遭遇したくないが……。ゲームアの血が騒いでな、無意識に抜け目ない探索をしようとしてしまうのだ。どこになにかあるのかを憶えていれば意図的に探索漏らしをすることができのだが、知っている知識と齟齬のある現時点ではそれも難しく、とまあ察してくれって境地に至っている。

血の滴るジョーズの口を潜り抜ける。肩にピチョン、となにかが落ちてきたような気がしたが気にしないでおく。どうせエフェクト解除すれば汚れもなくなるし。

不気味な歯が笑っている。ここを抜ければ、と北側に進もうとしたがその景色に何かが引つかかって箒の動きを止める。

「あれ？」

こんなところにマンホールなんてあったっけ？

北側のワープポイントには少し東に進んでからでないと行くことができない。その東側に蓋が開いている上に梯子まで掛かっているマンホールがあつた。真つ暗な穴を覗いても底は見えず、ぽっかりと口を開けているだけ。そこはかとなく不気味だが夢の中でのエリア切り替えの大抵はワープなのでこのマンホールもどこかに繋がっているのだろう。ここに於いて新しい場所の発見だ。

「マンホールって言ったら……」

メイドさんの喫茶店 “ シュガーホール ” と巨大スライムのトラウマイイベント。あとは歓楽街に繋がる場所でもある。もう一つ、floorプレイヤーにとって（考察的な意味で） 人気なキラのいる場所に辿り着くが今は見られないかな。中学生にもなっていないし、まだ出会っていないから。

意を決して箒を握りしめたままマンホールの下へ降りていく。チキン？ 穴の中は暗くて何も見えないんだ、怖いに決まってるでしょう。いい歳した自分がこんなに怖がりとか、とも思わなくもないが飛び込んで奈落に真つ逆さまよりはマシだ。ここまで来て強制起床とか勘弁してくれ。

「よし、と」

箒に乗っているため水音はしなかったが、マンホールの中はちゃん
と下水道になっていた。と言っても綺麗な水が流れているので汚い
わけではない。これは下水道に入ったことのない自分の貧相なイ
メージのせいだろう。それともここは上水道なのだろうか。どちら
もあり得るがとりあえず、汚いよりは探索しやすいのでありがたいと
思っておこう。

西の方角。まあ、この場合は左（降りてきた私にとっては右）へと
進むとシユガーホールがあるはずだが、何も無い。オレンジ回廊への
ワープポイントはあるが今は保留。全部の場所を見て回らなければ。

変なグミで出来たような生き物を避けて梯子のある方とは逆のコ
ンクリートで出来た道へ渡る。今度はそこを通過して右側（降りてきた
私にとっては左）へ進む。

やがて見えてきたのは水色の超巨大スライム。形はドラクエの
ヌーバみたいに見えるのが丸く、下に向かってドロドロに溶けている感
じ。

そいつをスルーして更に小さな横穴へ入る。

なんだか入ってすぐ見える奥の排水口らしきものからドバドバ水
が出ているような気がするがこれもスルー。だから強制起床はだめ
なんだってば。こんなところで確率低いイベントへのスイッチが出
てきても困るんだって。

私がギリギリ通れるパイプの中を通る。ここまで来ると水は錆で
赤く濁ってしまっている。箒で浮いている今はいいが、見たところ足
首よりも高い位置まで水が来ているようだ。降りたら悲惨なことに
なりそう。やはり移動エフェクトは万能だった。

そして下水道を抜けるとそこは……安そうな鉄板で出来た錆だ
らけの迷路だった。柵はついていないがただそれだけ。下の方まで赤
錆が侵食していて迂闊に寄りかかったりしたらばきりと簡単に折れ
てしまいそうだ。そんな橋のような道がどこまでも枝分かれしなが
ら続いている。

だがなんだか見覚えのあるような、ないような。そんな違和感を覚
える。こんなときは勘に従っていけば幸不幸関係なしに何かしらの

結果に辿り着くことは経験則で分かっている。まあ、適当にブラついていけば何か見つかるだろう。

ひとまず自分のいる位置からすぐ下に突き進んで行く。道は真っ直ぐ続いているわけではないので何度か横にズレたり、折り返したりしているが、かね下方に向かって進んでいけていようとする。そして感じる。

そして一番下に辿り着いた時、その違和感の正体を知った。

似ているのだ。ぐねぐねした道がああ病院の奥の奥、実験場の複雑怪奇さと。そしてその証拠が記憶の奥底に残っているこの場所と、この “ エフエクト ” だ。

ぐねぐねと蠢めく青いような、藻の色のような透明な物体。いや、粘液体？ ぷるぷるなんて自分で言うような可愛らしい生物とかけ離れたその形、どろどろな見た目。あんまり触りたくないが、私はそれに触れる。

エフエクト、 “ スライム ” ゲットだ。

そう、この物体は病院で見ってしまった失敗例。液体の中の溶けた私たちが。スライム状になった私たち。足元がどろどろに溶けていくのが分かる。手が、足が、体が、頭が、固体から液状になっていく不安定感。なのに行きたい方向に進む体。一歩進むたびに鳴る不快な水音。やろうと思えばできる頭の下までどろどろのぐちゃぐちゃなスライムになり、縮む動作ができる。これは某有名な三角っぽいシルエットのスライムではなく、子供の頃流行ったりした液状化物体になるエフエクトだ。

案外心の奥底には細かい道筋を覚えているものなのだ、と妙なところで感心する。この程度のことでは僅かな恐怖と不快感を覚えることはすれど流石に発狂したりはしない。これに痛みが伴えばもれなく発狂コースだったろうが、残念だったな！ って、なに一人でドヤ顔してらんだらう私。自分の夢に対して対抗意識持ったって虚しいだけなのに。

もう一度エフエクト、箒を使って細かい探索を続ける。

今回はエフエクトを手に入れて収穫があったし、なにもないような頬を抓って起きよう。

しかし悲しいかな、そういうことを考えていたからか立派なフラグが立っていたようだ。

マップで言えば先程スライムを取得したのが左下の方なら、今いるのは恐らく右上の方だろう。そこに薄っすらと灯った街灯が二本立っていた。おいおい嘘だろう？ とぐるぐると考えながら呟く。明らかなワープポイントだ。しかもこの場所は有名だからわりと鮮明に覚えている。

「えー……」

もう疲れたよパトラッシュ。

逃げ出したくなかったが勘はココを指しているようだ。好奇心が刺激されて起きるといふ選択肢はとうに消えている。ここを放置して次に回すなんてとんでもない！

考えていても無駄なことは分かっていたので迷わず街灯の真ん中に飛び込む。するとそこは暖色系の光が優しく灯るどこかの住宅の前に出たようだった。階段の上に一軒の家。間違いない、ここは兄妹の家だ。

確信して階段を上がっていく。周りが暗いせいかわかりの灯る玄関以外は黒いシルエットとなって沈んでいる。しかしそんなところが幻想的な雰囲気醸し出していた。

「お、おじゃまします」

相手が返事をしないことは分かりきっているが、日本人の性分なのか挨拶の言葉が口から飛び出る。しかし、そんな思考を嘲笑うかのようにはそれは起きた。

「いらっしやい」

大きな茶色のカーペットとシンプルなベッド。

一本だけチカチカと光る蛍光灯。

シンプルすぎる部屋の内装。

口を開いたのは私にそっくりな黒髪の男。

「アレ？ そんな顔してどうしたのさ。ボクの顔になんかついてる？ おつかしいなあ、キミならボクのことも分かんと思っただけで目元に刻まれたピエロのような刺青。」

もしも彼が白髪であったなら、きつと鏡写しになったように私とそっくりだったろうと想像がついた。

出てくる言葉は聞き覚えのある声、口調で紡がれ、見覚えのある動作で考え込んでいる。

「まあ、しょうがないか。所詮、その程度なんだね」

彼の後ろには黒髪ロングの小さな少女。

その姿は生前の私に似ているようにも、似ていないようにも見える。

「……は、え？」

ムツとした顔になった彼は、聞き覚えのある声で、口調で、仕草で、目で、色が違うはずなのに私は彼を　　“彼”　　だと認識しているのだ。

思考がガタついて何も考えられない。頭の中が真っ白だ。

思考停止、それが私にできる唯一のことだった。

だって、あまりにも残酷すぎる。

大好きで大好きで、でも現実に居たら面倒くさそうな人だなと、そう思っていた人が目の前にいる。そんなことが信じられると思うか？　だってだってこんなことって、こんなことがありえるわけがない。

「そんな顔されても困るよ。まったく、誰だってキミなんか幻滅されたくないと思うんだけど？」

目の前には、絶対に会いたくなかった人が、会えないと思っていた人がいた。

そう、そこには狛枝凪斗が立っていた。

No.?? 『生誕祭』 ー再ー

「メリークリスマス！」

「メリークルシミアス！」

「メリークルシミアス！」

…… あれ？

大きな破裂音とともに色とりどりの紙吹雪が舞い、飛んできた紙紐が頭に降りかかる。

目の前にいるのはクラツカーを持ってカラカラと笑っている、露出度高目なサンタ服を着たうろつき…… 空井織月だ。その後ろでにやりとおかしそうに笑いながら使い終わったクラツカーを投げ捨てているのはうそつきこと、貫洞うつろ。

相変わらず犬の耳のように跳ねた茶髪を揺らしているのが織月。

病院では散々な目に遭わされそれ以来チャットでしか会話していなかったが、私が新たな両親の元に行つてからはたまに会っていた。普段は明るいお姉さんだからあまりトラウマも刺激されることがなく、安心して付き合える。

たまに夢の中で会つて戯れている翠君あきこの話になるとうすら寒いヤンデレの目になることがあるが、一応それだけである。現在は一人暮らしの大学生。今回集まつたこの部屋は彼女の部屋だ。

うつろちゃんは織月と夢についてのチャットを立ててから出会つた同士だ。ハンドルネームは「うそつき」。そう、ゆめにつき派生の一つ、「夢日誌」の主人公だ。薄い金髪ボブの髪に青や紺の服を好んで着ている女の子。

あと、普段見る服から想像するにロングスカートやワンピースを好んで着ている節がある。口調は少々乱暴なところがあるが、私たちの中では一番女子力が高いと思われる。

飾り付けられた部屋に不釣り合いなほど大きなパソコンが机の上に二つ鎮座し、その雰囲気合ったご馳走達は隅の机へと追いやられ

ている。その中に、シャンメリーと一緒にして隠すように置かれたシャンパンにキツ、と織月を睨むと暖房の所為だけとはとても思えない赤ら顔でバイクの免許証をチラつかせた。だけれど彼女の誕生日はまだもう少し時間がかかるのだ。成人式もまだなのに一体何をやっているのか。犯罪ですよ。

そう呟きながらコートを脱ぎ、マフラーを外し、仕舞い込んで二人と同じようにパソコンを取り出し、机に置く。

「おやおやあ？ ご飯は食べなくていいのかな？」

「どうせ先にコツチを済ませる予定だったんでしょう？」

上ずった声で私の肩を叩く織月の言葉に返事を返してスレッドを開く。

「オフ会だつてのにスレ開くとかないわー」

「議題はこつちでしょ」

にやにやと笑っているうつろちゃんに言い返してパソコンの画面をコツコツと叩く。弄られ慣れているから別にいいけれど、乗るのはなんだか癪だ。希望ヶ峰学園について書かれたスレッドを開き、来年の幸運枠が決まったという噂をピンポイントで映す。

「情報ダダ漏れなのは一体何なんだろうね」

それには黒い目線を引かれた白い髪の少女の写真が貼られていた。スレの反応はやっぱりだとか、悪女のくせにとかの恨み言ばかり。彼らの中では私の存在は事件唯一の生き残りではなく、事件を引き起こし被害者面をしている世紀の大犯罪者だ。噂だけが独り歩きをして私が殺人を犯したことがあるだとかの笑えない話まで書かれている。

一体だれの仕業か知らないがいい迷惑である。

「いい迷惑だよ」

「へー？ よかったね」

にししと笑う同い年のうつろちゃんの頭を押さえつけ、乱暴に撫でまわす。低い位置にあるその頭は私にとってかなり丁度良い位置にあるので嫌がらせには十分だ。

「なんだよ、自分ばかりでかくなつてさー！」

「女にとって高身長なことはマイナス要素なんだよなあ」

「そんなこと言うなら100cm分けるよ！あと胸も寄越せ！」

私の身長は現在170cm。彼女の身長は150cmやつと行つたくらい。

本来の狛枝風斗は180cmだから女であることにマイナス補正がかかっているかもしれない。それでも高すぎるくらいだ。

男性は自分よりも身長の低い女性のほうに惹かれる場合が多い。女性も自分より身長の高い男性に惹かれやすい。だから普通に生きて、老衰で死にたい私にとって、身長が高いというのはコンプレックスでしかない。

胸は大きい方がいいと生前は思っていたが、いざ大きくなってみると可愛いデザインで尚且つ大きいサイズの下着なんて滅多に売っていないから不便だ。小さめのサイズのほうが種類もデザインも豊富で羨ましい。ま、持つ者の愚痴ってやつかな。

そうやって口論をしている私たちを微笑ましそうに眺めている織月は放っておいて、スレッドの方に視線を移す。

曰く、どんな動物も手懐ける飼育委員がいる。

曰く、必ず優勝に導く敏腕マネージャーがいる。

曰く、大財閥の御曹司がとうとう入学する。

曰く、ある国の王女様が来日してきた。

曰く、中学生にして仕事を請け負うほどのメカニックがいる。

曰く、あの人気バンドのボーカルが一人入学してくる。

曰く、若き天才写真家が入学する。

エトセトラエトセトラ。

既に噂は大きく広がって行き、スレッドには個人情報などなかったかのように新たな天才たちの顔写真や彼ら、彼女らが載っている掲載誌の切り抜きなどをアップして語り合っている。その中の一つに、私が出た。

本来ならば幸運枠は一般人であるためこのような事態になることはないのだが、私はある意味有名なのだ。そのせいでこうやって明るみに出ることになっている。だが、これはこれでいい。なぜなら、いつか彼女が迎えに来るとき場所に迷うことがないからだ。私はここ

にいるよ。そういう思いで私はネット住民の所業を無視していた。下手に反応すると余計五月蠅くなるということもある。

「いやあ、まさか本当に選ばれてるとはね」

「てつきり出来の悪い嘘だと思ってたよー」

嘘だけだね、と最後に付け足してからうつろちゃんがぺろりと舌を出した。織月は朗らかに笑っている。二日酔いになってしまえ。

「一緒に来てくれたりは」

「しない」

「しねーよ」

「…… だよねえ」

スレツドから目を離して二人に顔を向ける。

「でき、なんか嫌な予感がするんだよね」

「それは嫌だねえ」

「卒業するまでずっと平和かっていうと分からないし、疑い深いことは大事だね？」

「うつろちゃんにそれ言われたくないんだけど」

「まあまあ。外は外で平和にやるから人ごとだしー」

彼女たちがこの先、生き残れるかだなんて分からない。外の世界も荒れに荒れてしまう未来が待っているのだからちよつとは注意していてほしい。多分近くに私がない分理不尽な死に遭うことはないだろうが、それでも死亡率は高い。

私の命が最優先なのは変わらないが知らぬ間に友人が死んでいるというのも寝覚めが悪い。なるべく生き残っていてほしいものだ。

「あ、そうだうつろちゃんって前から一人暮らしできる場所探してたよね？」

「あらら、嫌な予感」

「希望ヶ峰って全寮制だし、私の部屋管理してほしいんだよ。あのマンションの最上階、高くて私以外住民いないから、もう一部屋買えるし」

「でたあーお金持ちの戯言」

事実である。あのマンションの、さらに最上階ともなると高すぎて

他の人は手がだせないらしい。

エレベーターでさえも住民に配られるカードと指紋認証がなければ使えないし、セキュリティは面倒なほどしっかりしている。

未来、二人の避難場所になるならば重畳だし、なんなら最上階のワンフロア買い占めてもいいかも？

宝くじ三回当たっているし、両親と義両親の遺産もあるし、多少バイトもして貯金は十分あるし。住民以外が入っても最上階まで歩きでしか来れないのだし、安全だろう。そう考えれば最上階にうつろちゃんの部屋があれば住民としてエレベーターもつかえるようになるし、彼女と一緒に居れば織月も避難できる。生存確率はぐっと上がるだろう。もし万が一メイに逢ったなら、きっと彼女なら気づいて連れて行ってくれる。

「うん、やっぱり私ワンフロア買い占める」

「はっ!？」

「へっ?」

ポカーンとした二人に万が一のことを原作知識を省いて伝え、メイのことも託す。

「ちよっと、つまりお金は風が出すってことだろ? それは嫌なんだけど」

自立したいからこそ彼女は一人暮らしを目指している。人にお金を出してもらおうというのはやはり抵抗があるか。なら、こういうことにしてはどうだろうか?

「勿論、私が全部出すのはちよっと違うよね。だから貸しにする。ほら、奨学金みたいなもんだよ。あとで返してくれればいい。マンションだから家賃というのもなんだけど、そんな感じにすればいい。ね?」

ぐぬぬというような表情で悩むうつろちゃん。魅力的な案ではあるが自身のプライドが許さない。そんな感じだろうか。

「あ、頭金は私が出す!」

「え、すっごい高いよ?」

一部屋の具体的な金額をあげれば頭を抱えだしてしまった彼女。

アニメのような大量に汗をかいている様子を幻視した。心の中でものすごく葛藤しているようだ。たまにブツブツと独り言が聞こえてくる。

「あ、頭金の半分出す……」

湯気を出し始めたうつろちゃんがとうとう決断を出した。泣きそうな顔をしている。なんだかもものすごく申し訳なくなった。

「まあ、凧ちゃんとは私もご近所さんだし、困ったらこっちに来てもいいからね」

女神を見る目でうつろちゃんがからからと笑う織月に縋りついているが、姉さんの背後に悪魔の尻尾が見えたのは気のせいだろうか。カオスな状態が収束し、議題を終わらせる。

そして、三人でクリスマススマスディナーを食べ終わった頃、織月が奥の棚から包装をしたものを二つ取り出して来た。

「食事の後はプレゼント交換だねー」

「ま、まあそうだな」

「おー、二人も用意してたんだね」

三人でそれぞれプレゼント交換をし、開封をしていく。

織月からは、新しいオレンジ色のヘッドフォンと、舞妓さんセットにツイントールのウィッグだった。なぜに？ 確かに、彼女には「まいこ」とツイントール「のエフェクトがあるが。」

「変装セット」

語尾にハートが付きそうなほどいい笑顔だった。意味が分からん。うつろちゃんからのプレゼントは涼し気なスカーフと麦わら帽子。あとビスクドール。ドールはまだ分かるが、上記二つが分からん。なぜ夏のを冬にプレゼントするんだ。

「嫌がらせ」

サムズアップしてにししと笑う。そのわりには随分とデザインのいいものだが、まあツンデレとして受け取っておこう。ドールも可愛いし、やっぱりこの子乙女だわ。

ちなみに私が二人にあげたのは、うつろちゃんに控えめなヒマワリ柄のスカーフトと、ウサギの髪飾り。織月に黒い中折れハットと、ペン

ギンの大きなぬいぐるみ。

この間ウインドウショッピングしているとき、あのおおきなぬいぐるみに釘付けになっていたからだ。オオカミのぬいぐるみとちよつと迷ったが可愛いし、自立するし、ペンギンにした。中折れハットは…… “ バネ ” のエフェクトで似合ってたから現実でも似合うと思つて、だ。

織月はうつろちゃんになぜかうサ耳を贈っている。ウサギのぬいぐるみもだ。彼女がウサギ好きなのは周知の事実である。顔を真っ赤にして、更に涙目で喜んでくれているのが分かつて嬉しい限りだ。うつろちゃんから織月へは私のは色違いのビスクドールとチエツクのスカーフだ。織月はチエツク柄が好きだから喜んでる。

「あとクリスマスと言えば？」

「ケーキ！」

「織月姉さん反応早すぎー！」

うつろちゃんが持つてきて、冷蔵庫に入れておいたケーキを取り出してくる。ここは織月の部屋だというのに随分と勝手知つたるなにとやらという感じだ。

「シヨートケーキにシャンパンは合うよねえ！」

「二日酔いになってしまえ。あ、うつろちゃんそれ私が欲しかったやつらううー！」

「二個ずつ取つてる方が悪い。数は決まつてるんだから取っておけばいいんだよ」

こうして、中学三年生。入学前さいじのクリスマスは穏やかに過ぎていくのだった。

No. 10 『笑顔』―刺青―

狛枝風斗。

スーパーダンガンロンパ2におけるトリックスター。

頭が良く、自身の才能により不幸を明るい希望のための布石だと考え大きな結果をもたらすためにわざと不幸な目にあったり、わざと殺人を誘発させたりする壊れてしまった人。絶対的な正義となる希望を信仰する狂信者。希望を絶対的なものだと思えるしかなかった可哀そうな人。希望は絶望に負けないと、希望とされる人なら自分の絶望に^{才能}負けて死ぬはずがないと信じてやまない人。そう、信じたかった人。

そして、誰よりも自分のことを認めてほしいという願望が強かった人。

「こま、えだ…… なぎ、と……」

「そんなことも分からないの？ …… ああ違うか、信じたくないんだね？ ボクがここにいること」

私を蔑むような目を向け、背後に抱き着いている小さな女の子の頭をポンと撫でて彼は尚も続ける。

「ボクはボク、キミはキミ。でもどちらもイコールで繋がっている存在だ。ボクはキミで、キミはボクと同義。その在り方だって大きく違っているようで違ってないんだよ。…… 分からないって顔をしているね。ああ、元々そんな顔だった？ ごめんね」

延々と私のことを軽蔑の言葉で彩る彼が狛枝風斗。そうだ、これが彼だ。彼は希望の象徴たる存在以外には冷たい。 “ 幸運 ” の才能を見込まれている自分自身のことさえ彼は他の皆と比べ、卑下して見せているのだから同じ才能を持つ私にだって同じような対応なのは納得できる。

だが、いくら納得できると言ってもずっと罵倒されてはたまらない。私にそんな趣味はないし、理不尽に批判されるのに不快感くらい感じるのだ。

「キミはなに？ …… なんてこんなところにいるの」

「キミは親しい者の多くの犠牲^{不運}を踏み台に愛しい自分とあのヒトが幸運に導かれるようにしているだけにすぎないね。そのどこがボクと違うって言うんだらうね？ 幸運の代償として不運が訪れるのは当たり前なんだよ。それなのにその不運を嘆くだけでなにも行動しない。そんなキミに素晴らしい希望が訪れるわけもないのに幸せな未来を望んでいるだなんて、まったくおかしいよね」

おい、会話くらいしろよ。

それより、狛枝^{おま}凧^えと私が一緒だって？ いやいやいや、そんなわけない。

私はただ選んでいるだけだ。そのための行動だってちゃんとしているはずだ。メイと一緒にいるために何を切り捨てても何を犯そうとも構わないから、だから前だけ見据えて進んで行っている。一緒にしないでくれ。だから私がおかしいだなんて、そんなこと……

「ありえるはずないんだって！」

「あー怖い怖い。なんとも愚かな考えだと思うけど…… キミがそう思うならそれでもいいよ」

そう言ってから彼が近くのベッドに腰掛ける。眠たそうにしていく子供をその膝に乗せ、髪を弄りながら目を伏せて私たちの口論は続く。

「そんなキミの中に芽生えてしまった希望がかわいそうだよね？ 自分自身を信じられないキミが希望になれるはずがないんだし」

「だから、キミは一体なんなの？ なんでここにいるの？ その子はなんなの？ なんでなんで……！」

「ここまで言ってるのに分からないなんて、やっぱりキミもボクと同じゴミクズだよね」

焦りはますます加速して握りしめた手から感覚が消える。

優雅にベッドへと腰掛けた彼は子供の髪形をポニーテールにしながら呆れたようにため息を吐いている。

「この子がキミの希望だよ」

「どういうことだよ、その女の子が？ 私の、希望？」

口調が荒くなるのも気にせず、夢の中での対談だということすら忘

れ、目元の刺青を歪めて笑う彼を凝視する。

信じられない、信じられない。馬鹿にするような口調で語る彼のこととも、自分の夢なのにくら掴っても目を覚ますことができないという事実も信じられない。

「キミの中に芽生えた希望の象徴がこの子。前のキミと同じ容姿をしたこの子がね」

「その、子が？」

私の希望。

暗い目をした女の子は私に怯え、彼の背後へと回る。私に怯えるこの子が希望？ 分からない。ここにいたはずの刺青兄妹の片割れ。妹の方。それがあの女の子。…… 兄妹？

「やつと気が付いた？ ホント、ボクのくせに絶望的に頭が悪いね。もうちよつと考える癖をつけた方がいいんじゃない？」

余計なお世話だ。

そう悪態をつこうとする口を何とか噤み、イライラとしながらその答えを待つ。完全にあちらのペースに巻き込まれてしまっているのもあるし、夢の中で誰も聴いていないことを良いことに口調は完全に崩れているが仕方ない。

「おま、キミが……」

お前、と口をついて出そうになつた言葉をのみ込む。流石に心の中以外でこんな発言をするのはたとえ夢の中だとしても失礼だ。

「辿り着くのが遅すぎるしとんだガツカリものだけど…… そう、ボクはキミ自身。希望の兄妹は幸運だつて思わない？」

幸運の権化。偶像。それが彼。私の中の幸運の象徴。心の奥深くに存在する、幸運という形のない化け物を形にしたもの。私の中に住む本当の怪物。

浮かべた笑みは私の中に刻まれるように深く深く残る。心の奥底に恐怖として残る。その “ 笑顔 ” がいびつな形で私に刻まれる。「キミは自分が助かるにしても最初から他力本願しかしていないし、笑わせるよね。そんな状態のキミに未来があるとでも？ ただ後ろ向きに立ち止まっているだけで一歩も動けず、何にもできない。そん

「あの時間の無駄遣いだよね」

他力本願？ 私はちゃんと自分で選択して、自分で歩いてきたはずだ。なのにどうしてこんなことを言われなければならないんだ。

あのときだって本当は理解していた。見えない振り、聞こえない振りをしてただただ走り抜けた。メイと一緒に逃げ出すために。

あの子たちは助からない。だから選択した。だから見捨てた。自分の意思で。義理の両親のことだって本当は何度も島の名前が目に入っていたはずだ。それに気づかなかつただなんて、甚だオカシイだろう。

助からない人は助けられない。自分だけ助かればいい。自分だけが生きて、その傍にメイがいれば私にはそれで十分。全部、自分で選択してきたこと。とんだ親不孝者で、友達を見捨てた最低な奴で、救ってくれた家族すら見殺しにした。それが私。それが私の意思。

……でも、本当に？ 自分から足掻こうとしたことなんて、かつてあつただろうか。

「意味、分かんないよ……」

引き絞ったようなとても小さな声が出て、カーペットを玉になって落ちていく涙が濡らす。訳が分からない。意味が分からない。なんでそんなことを言われなければいけない。ぐるぐると混乱した考えが巡っては流されていく。

「もう答えが分かっているクセにいつまでもうじうじと五月蠅いな。まったく、色んな意味で期待外れだったよ……」

彼の言葉を境にして、急速に世界が遠くなっていく。

いつものように頬を抓っても覚めなかった夢が覚めていく。

そんな、まだ答えが出せていないのにここで終わりだなんて嘘でしょう？

「あ、待って！ 待ってよ！」

笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔
笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔笑顔

彼の笑顔が脳にこびれついて離れない。

ぐるぐる回る。かき混ぜられる。

初めて笑顔というものに恐怖を感じた。

拒否感が湧き上がった。嫌悪感で身震いした。

その全ての印象が私の奥に刻まれていく。

そして、叫び声をあげながら飛び起きるのだ。

「あああ、あ、あ、あ、いやだあああああ！」

それ以降私が刺青兄妹の家を見つけることは決してなかった。

No.?? 『年越』―貴女―

いつからだろう。事務的で、無機質な声に変化したのは。

いつからだろう。最低限だった触れ合いが、増えていったのは。

いつからだろう。無表情に笑顔が加わり始めたのは。

いつからだろう。憐憫が消えていったのは。

いつからだろう。微笑みかけられるようになったのは。

いつからだろう。贈り物をしてくれるようになったのは。

いつからだろう。偽りの優しさでなくなったのは。

まだ私に彼女しかいなかったとき。頼るものが何一つなく、友達の一人も、知り合いさえいなかった幼い日の記憶。

薄れていく記憶の中で、濃く残る彼女との思い出。その中に答えが見つかるような気がした。

それは寒い寒い、年越しの夜のことだった。

我儘も言わず、なんでも言いつけを守り、病室の中から出ることも叶わず、誰とも会うことができずに、ただ一人で四度年を重ねた。

打つても響かない反応が返って来ることを知りながら、何度も彼女に懇願した。それでも毎年、彼女は就業時間を過ぎるときつちりと自室に帰り、私に構ってくれることなど一ミリたりともなかった。

そのことに退屈を感じ始め、無機質な実験を受ける毎日。何もかもが詰まらなかつた。

生前の強い記憶から死ぬことに恐怖を感じていたはずなのに、何も変化がないのなら死んでしまいたいなどと、今では考えられないくらい真剣に死を考えていた。

たとえば、実験中に点滴の針を首に突き刺してやろうかとか、階段から落ちたら痛いだろうかとか、屋上から飛び降りたら意識を失ったまま死ぬのだろうかとか、そんなくだらないことしか考えることもなく、死を考えれば考えるほど何かが麻痺していった。

一生部屋の中にいることしかできなくて、一生涯生きている誰かと会

うことはなくて、誰とも親しくなれない。そんな生活ならば必要ない。いらぬ。欲しくない。

事務的な対応しかしないメイドに依存しながら、世話をするだけの自動人形のようなだと恐怖したりもした。

死んだ目をした病院関係者について生を感じることができなかつた。

私の世界はとてもちつぽけで、その中に生きていると感じる人間は一人もいやしなかった。

勿論私もその中の一つで、いつしか捨てられる玩具でしかないと認識していた。

自動人形は遅かれ早かれ壊れる玩具一つに何も感慨を抱かないだろう。病院関係者は、そもそも生きていないのだから玩具が壊れても次を探すだろう。

表面上はどれだけ優しそうに接しても、長く付き合えば理解^{わか}ってしまふのだ。

私を見てくれる人はいない。

ここに人間はいない。

あるのはただの空虚でしかなく、それに幾ら手を伸ばしたって虚しいばかり。

いつからだろう。優しさが偽りだと気づいてしまったのは。

いつからだろう。それに反逆したくなったのは。

いつからだろう。変えたくなくなったのは。

殻にこもって、自動人形の感情から必死に目を逸らして、必死に取り繕った。良い子であろうとしていた。

——それがなによりも不気味に映るということを知りながらちよつとした反抗心。

ちよつとした賭け。それは私一人だけで行った賭けだった。

大晦日の夜。

言いつけを幾つも破り、一人だけで屋上へと向かった。

別に死ぬつもりなんてなかった。ただ、昇った朝日を見て生きていくという実感がしたかった。生きて、死んで、また生き始めた。それ

を朝日に重ねたかったのかもしれないし、ただ暖かさを知りたかったのかもしれない。

誰かが来るといふ期待など、欠片もなかった。…… いや、欲を言うならば欠片はあったかも。

誰かと幸せを分かち合いたかった。

誰かと一緒に生きていたかった。

願いはただ、それだけだった。

いつも着ている病衣だけで屋上に上がり、一人ベンチに座って夜景を眺めた。お子様の脳は何度も睡眠を要求していたが、全て無視した。意地でも初日の出を拝んでやると気合を入れて、しかし一枚だけの病衣では寒くて寒くて、すぐにでも帰りたいと何度も心が折れそうになった。

冷たいベンチの上で縮こまり、スリッパしか履いていない素足を丸めた体で温めるように折り込んだ。所謂体育座りと言うやつで何分、何十分、何時間と待ち続けた。寒さでかじかみ、数分の時間が何時間にも引き伸ばされているように感じた。

寒さで死んでしまふんじゃないか。そのときはそのときだ。やせ我慢をしながらいつしか夜景を見守る余裕さえなくなっていた。俯き、膝に額を当て、悔しくて悔しくて涙が出た。生きている意味を失った。生に苦痛を感じている自分に嫌悪した。

そんなときだ、扉を開きかけたような甲高い金属音が鳴った。戸惑いを覚えるようなその音に溢れていた涙を止め、視線を上に向けた。

「でてきなよ」

誰かが来たのだと期待に胸を躍らせたが、その正体に気が付いて心の中でこっさり落胆した。

無機質で一定に鳴る靴音。メイドさんに期待半分、落胆半分いつも通りはにかみがちな子供を演じた。

「みつかつちやっつた」

彼女は無言で自身が羽織っていたカーディガンを私にかけてくれた。次いで引つ張られた手を振り払い、いつもの笑顔で「きようはわるいこなんだ」と言い放つ。彼女は初めて我儘を言った私に驚きなが

ら静かに「お嬢様」と言った。咎めるような声だった。

彼女の驚き顔なんて見たことがなかった。嬉しかった。二人きりなんだからもっと彼女の反応を見たいと思った。

「はつひのをみろの」

「初日の出、ですか」

今度は私が彼女の腕を引っ張ってベンチに誘導する。

温かい彼女の手から体温を奪ってしまうのは少し罪悪感があったが、誰でもいいから傍にいてほしかったのだ。

「なぜ」

「メイといればさむくないから」

ここでまた、メイドさんは驚いてくれた。そんな呼び方したことなかったから。いつもキミとか、メイドさんと呼んでいたから新鮮なだろう。悪戯が成功した子供のようにくすくすと笑って続ける。

「メイドさんだとながいでいんだもん。ね、メイもわたしのこと、なまえでよんで」

「しかしお嬢様……」

戸惑いが感じられる彼女の言葉に上乘せして「ふたりだけのときでいいからさ」とお願いする。

彼女に寄り添った体が段々温かくなってきているのを実感して、精一杯の笑顔を彼女に向けた。

「おねがい。でき、いっしょにはつひのでみよう？」

「……風、様でよろしいのでしょうか」

「うん。メイ、だいすき」

腕に抱き着き、二人でそのまま色んな話をした。

メイ子さんも不思議と硬さが和らぎ、ぽつぽつと私と話してくれるようになった。最初は相槌を打っているだけだったが、段々と彼女からも話題を振ってくるようになり、数分しか続かなかった会話がずっと続くようになった。

幸せだ。たとえこれが夢の中の出来事だとしても。彼女は打っても響かない自動人形なんかではなかった。れっきとした人間だった。まだまだ彼女も子供と言える年で、我儘を言いたい年頃で、それを無

理矢理仕事を理由に押しつぶしているだけだったのだ。

二人で一緒に泣いた。

どちらも寂しかったのだと、そう認めて泣いた。互いに互いを抱きしめ合い、互いの胸の中で。

「ごめんなさい」

優しさに隠れた冷たさを、私が見抜いている、いないは関係ないとはばかりに彼女はそう言った。

「それでもわたしは、メイのことすきだったんだよ」

「ええ、私も風様のこと、好きですよ」

親愛の情を確かめ合い、長い時間のすれ違いがこのときやっと解消されたのだ。

私は何を思っていたとしても傍にいてくれるメイ子さんのことを慕っていたし、メイ子さんもきつとなにかあったのだろうと思う。それは私には分からないけれど、私と同じ、寂しい思いをしていたことは何となく分かる。だから、お互いの隙間をお互いで埋めた。

「風様、ほら、初日の出ですよ」

「ほんとだ！はじめてみたよ！」

何時間にも引き伸ばされていた時間はいつの間にか数分にも縮められていた。

苦しい時間は長く感じるが、楽しい時間は短く感じる。同じ時間はずなのにこんなにも違うのかと驚いた。

「きれいだね」

「ええ」

地平線の向こう側から昇って来る日の光に目を細め、世界の始まりを目にしたかのように感動した。彼女の袖を何度も引っ張り、地平線の彼方を何度も指さしながら興奮して捲し立てた。

綺麗綺麗と言いつける私に、彼女は真に優しい眼差しを向けて何度も頷いた。

ずっとこの時間が続けばいいな。

そう思っていたが、限界はすぐにやって来た。

「どうされました？」

「ねむい……」

必死に押し殺していた眠気が達成感からか、安心感からか、また顔を出して来たのだ。

私が一人でした賭けは勝利に終わった。どういう経緯であれ、私が人間だという実感が持てるようになったからだ。これで自殺衝動は死んだ。あとは生きるだけ。

「帰りましょうか」

「もうすこしだけこのままがいい」

彼女の膝に頭を預け、頭を撫でる温かい手を両手で包み込んだ。彼女が逃げられないように。

「ともだち、できるかな」

「できますよ、あなたなら」

静かな声に安心して私は微睡の中に旅立っていく。

またいつか、きっと、彼女と初日の出が見れますように。

「また、ふたりで……」

「ええ、また、いつか」

大好きな私の保護者。

大好きな私のメイド。

いつまでも貴女と一緒に、幸せでありたい。

そう願って、私は眠りについた。

A | H | a | p | p | y | N | e | w | Y | e | a | r | T | o | f | a | v | o | r | i | t | e | y | o | u

No. 11 『探偵』―危機―

あの隕石落下事件から二年程経った。

飛行機ハイジャック& 隕石落下事件により多くの人が命を失った。

その中には生き残りも何人かいたが、その誰もが石というものにトラウマを持ち、恐怖を抱いてしまうようになってしまったのだとか。

私は別にトラウマにはならなかったけれど、それが異常であることなどどつくに知っていたので念のためと検査を受けたときにあたかもトラウマになっているように振る舞った。そうしないと不気味に思われてしまうからだ。

しかし、犠牲になった人たちの実名放送があり、生き残った者の放送はなかったが、どこからか私の名前が漏れたのか、生き残った私は既に病院最大最悪の事件での生き残りというステータスに上乘せされ専用のスレッドが立つほどに有名になってしまった。

多くは妬みの声と同情の声、ごく稀に私が全ての黒幕だとする面白おかしく脚色された考察なんかのコメント。

それらを見ているとそれが事実であるかのような気がしてくるから不思議だ。

私に残ったのは他の親戚に軒並み絶縁されて天涯孤独になったこの身と、本当の両親と養子としてくれた両親の莫大な遺産だけ。

色々な手続きを済ませ、書類援助だけしてくる親戚に関わらないように私は遠方に引越した。

他の親戚は皆、私を預かると不幸になるからと腫れものを触るような扱いで近づこうとすると拒絶してくるのだ。まあ当たり前だろう。そんな子供を預かれと言われたら私だって怖いもの。

実は毎年、どこからか住所を特定してくるメイからの年賀状が届くが、彼女まで酷い目に遭わないようにと会うことは控えている。

彼女は私を引き取る気だったようだが断ってしまったために随分落ち込んだようだ。葉書に涙の跡があった。言いようのない罪悪感に襲われたが、彼女にも生きていてほしいので泣く泣く断りの報を入

れている。

寂しくなんて、ない。

そんなことがあり、私は中学生の身でマンションの最上階に住み、私立の中学校に通うという優雅な御身分になっているわけである。

こんな状態では黒幕説が流れてても不思議じゃない。自業自得、か。生きることに執着するあまりになにがあっても平坦な考えしか思い浮かばなくなってしまった。

そのとき、そのときはパニックに陥るが暫くすると何故か回復している。両親の、義両親の葬式で泣けなかったのもそのせいか。

ともかく、私は中学一年生になった。

私の通う中学校の名前は渦巻中学校。水泳部が有名らしいが私にはあまり関係ないな。私に通っているのは今時珍しい夜間中学校なので部活動の活躍はあまり見られない。

それに、私は嫌われているから。

世間ではすっかり悲劇のヒロインとして有名になり、それと同時にネットを中心として必ず生き残るのは私が事件を引き起こしているのではないかという疑惑が広がっている。

中学生ともなればそれらの噂を知っていてもおかしくない。

白い髪。

これだけの情報が揃っていれば私を特定するのは至極簡単である。

近所に中高一貫のお嬢様学校があり、渦巻中学校も共学ではあるがお嬢様、お坊ちゃん学校に近いところがあるのでよく躰が行き届いているのか、いじめに発展するようなことはないが、彼方此方から私を見ながらの噂話、笑い声、視線、視線、視線、視線、視線、視線。

それらの全てが私にとっては恐ろしい。

何を言われているのか、笑われているのか。好奇を含んだ、または嫌悪を含んだ不躰な視線。分からないだけに余計気になり、ノイローゼのようになったこともある。誰かが笑っていれば私を嘲笑しているのではないかと被害妄想がむくむくと湧き出てくるし、病院、飛行

機、事故、旅行などの単語に過剰反応してしまう自分がいて自覚がありながらも腹ただしい。

一々怯えてしまう私も私だが、その視線が教師からも注がれるのだからいけない。

そんな目で見ないでほしい。

お願いだからこつちを見て笑ったりししないでほしい。

あの事件のことを明るい声で喋らないでくれ。

他人事だと思ってるからそうやって笑っていられるくせに。

自分自身には到底関係ないことだと本当にそう言えるのか。

他人事だと言えるのか、明日は我が身だと思ひもしないのか。

そつと腕をさすり、軽く自身を抱きしめて俯く。

何も見たくない、何も聞きたくない、何も考えたくない。

何も見ない、何も聞かない、何も考えない。

…… そうして、静かになってから黒板を見上げるのだ。

見えるのは黒板に書かれていく文字だけであり、聞こえるのは重要な単語とその解説だけである。私の周りには誰もいない。チヨークが勝手に黒板へと文字を書く。ラジオのように雑音混じりの説明だけを耳に入れてノートにとる。

数年前の逃走劇のときのように都合の悪いことは全て見なければいい。聞かなければいい。そうすれば平和なのだ。一目惚れして買ったはずのヘッドフォンは既に耳を塞ぐ為だけの道具となり、服の内に隠したホイッスルとロケットペンダントを握りしめてただ耐える。

いくら夜間学校だからといっても中学校は義務教育だ。あと少しの辛抱なのだ。あと2年と半年。どうにかなる。いや、どうにかする。

耐えて耐えて耐えて、そして救いのチャイムを聞いてからすぐ家路につく。旧校舎の前やコンビニの前を通り、マンションに着くまでは暗い中自転車に乗って行く。

そして公園の前を通り過ぎようとしたとき、物音がした気がしてキツと短い音を出しながら自転車を止めた。

聞こえるのは2人組の怒鳴り声。そちらに行けば近道になるが、さすがに危機感を覚えた私はその場を去る、ハズだった。

ガサリと背後から鳴る草を掻き分ける音に混じり、ふうふうと荒い息遣い。自転車に乗ってすぐに離脱しようとしたが、何もかもが遅かった。

自転車ごと引き倒され、頭から地面に突っ伏して組み伏せられる。腕は捻り上げられ、うつ伏せの状態でのしかかれる。

そばに倒れた自転車が虚しくカラカラと車輪を回していた。

「う、あ」

「おい、ラッキーだぞ！」

男の声だった。

押さえつけられたまま首元のネクタイを抜き取られ、後手に縛り付けられる。そして、なにか大きなものを担いだ男がその場に現れ、にやにやと笑いながら男に布を渡したようだ。布はすぐさま私の口内へと突っ込まれ、顔だけを無理やり上げさせられた。

そこには男が抱えていた荷物があつた。

人間だった。衣服の乱れた、首に太い縄の跡のある女性だった。

「え、死、え？　え？」

にやにやと笑う男が私の足を抑え、ぐったりとした女性を持つていた男が私に近づいてくる。

……死？

……いやだいやだいやだ！

足をバタつかせ、暴れようとするが動くこともできずましてや立つこともできない。逃げられない。でも嫌だ。腕が近づいてくる。首に手がかかる。嫌だ、死にたくない。首を圧迫され、息が詰まる。嫌だいやだいやだ！

「っあ……」

しかし実に呆気なく

私はその意識を飛ばしてしまったのだ。

No. 11 『探偵』―誘拐―

頭が痛い。ふわふわとした酩酊感が体を支配する。

目が覚めた時には既にお腹の辺りから担がれ、何処かへと運ばれて行く最中だった。

ゆらゆらと揺れる感覚に、触れられている場所からじんわりと広がっていく変な感覚。体が火照る。

目隠しをされているのでどこがどこだかも分からず、口には唾液ですっかり湿ってしまった布が噛まされ、いつの間にかネクタイから縄に変わった後ろ手の拘束。熱と汗で蒸れる制服が張り付いて気持ち悪い。

意識を失うときにはなかったはずである口に含まされた布になにか薬でも付けられていたのだろうか。

体を襲う違和感と変な火照りに心当たりというか、なんとなく想像がついたがあまり信じたくない。

実際にそんな薬使うヤツいたんだ、とかこんな風になるのか、とかこの変態野郎が、とか思うことは多々あるが思うように体が動かせない上に身じろぎ一つでもすると鋭敏になった感覚が一瞬で広がりに力する。

逃げ出そうにもこの状態ではとても無理だ。

「お、起きたか?」

身じろぎで気づかれたようだが今私は口を塞がれているので声も出せない。というより寝たふりをしていたほうが今は良さそうなのでなるべく動かないようにして息を擧める。寝息だ。これは寝息。苦し気な寝息。そういうことにしてほしい。

「ほれ、着いたぞ」

「ひゃっ!」

こんなのとてないよ。

男が到着を告げた瞬間に脱力していた尻を思い切り叩かれたのだ。そういえばもう一人男がいたのだったか、忘れていた。思わぬ不意打ちにたまらず声をあげる。暗闇に包まれた視界がチカチカと瞬き、我

慢していたものが全てはじけ飛んだ。

そのことに静かな怒りと殺意が沸き上がる。この誘拐犯いや、殺人犯どもめ。

「気づかないとでも思ったのか？あ？」

だからなんにも見えないんだってば！

髪を鷲掴みにするなんてやめてくれ！ 元々うねってるのがもつとくるくるになっちゃうでしょ！ これ直すの大変なんだから！

「おい、遊んでないでそれを早く処理しとけ」

間近で声が響き、ドキリと心臓が跳ねた。しかしそれはどうやら杞憂だったようで私に絡んでいた男が離れていく音がして安堵の息を漏らす。

「お前はこつちだ」

「うぎっ、つうううう」

投げられた。

抱えられた状態から思い切り投げられた。

下はひんやりとした硬いコンクリートだった。

縛られて身動きのできない状態で投げられてしまったので当然手を付いて衝撃を抑えるだなんてことはできない。

左半身からダイブし、腕が下敷きになる。手首からボギリと嫌な音が鳴った。次いで腰を盛大に打ち付け、側頭部をぶつけ、その衝撃で再び意識が飛びそうになる。左手首の激痛で体が思うように動かず、けいれんしたように震える。

…… ああだめだ、ここで意識を失ってしまったら今度こそ殺されるかもしれない。

その上こんな状態になる薬を盛られているのだ。何をされるか分かったもんじやない。そんなことになったらシヤレにならない。冗談じゃない。

スカートが捲れ上がっている状態を直すべく、悲鳴を押し殺しながら腹の力だけで体を起こし、まとめて縛り上げられた足を動かし後退する。これで少しは直つてくれるだろうか。

スカートが湿つて濡れているのを確認してしまい、うつすらとした

諦観が浮かぶ。ああ、何時間も移動させられたもんね、そりや我慢できないわ。この年になって嘔吐だけでなくなんてことをしてしまっただ。女としての尊厳はまだ守られているがこりや人としてどうよ。普通は幼稚園児でもう卒業してるわ。

「お前の血縁に身代金を要求した。それまでの間は楽しんでいけよ」
白々しい。

「というか血縁に身代金要求とな？」

あ、だめだわこれ。絶対払われないわ。むしろ厄介者がいなくなつて幸いだとも思われてるなこれは。ろくに被害届も出されず捜査もされず、手遅れになってから発見されるパターンですよ。その頃には色々失っている気がする。

ああもう、本当だめだなこれ。死ぬよりはマシかな？ めっちゃめちゃ痛い死に方するよりは激痛に喘ぐよりは別の上で泣かされたほうがまだマシか？ あれ、感覚が鈍ってるかな。だめだ、頭が回らない。

ひとり、足音が近づいてくる。

泣けてくるなあ。人生ゲームオーバーですか、いやだなあ。

暗闇の中で視界が滲む。目隠しにされた布が湿る。嫌だ嫌だ嫌だ。死ぬなんて嫌だ。ましてや、女として終わることも認められない。嫌だ。嫌だよう。

次の瞬間、布を取り除かれ、視界が晴れた。

案の定、男たちは笑っていた。小柄というより貧相な体格をした片方の男はこちらを見てニヤニヤと笑い、もう片方の大柄で力の強そうな男はなにやら通話をしながら下卑た笑い声をあげている。

二人のうち、私の目は小柄な男の手に釘付けになった。

ナイフを持っていた。果物を切るようなとても小さなナイフだ。だが、その小さなナイフでだって急所を深く斬られてしまえば致命傷になり得るだろう。

私は明確に示された死の象徴に視線を捕らわれてしまったのだ。

真っ白になっていく思考の中で妙に冷静になり、ぎりぎり理性が悲鳴をあげる音を聞いた。

そこからはあつという間だった。

男が足の拘束を解いた。きつと行為に邪魔になるからだろう。

ナイフは滑らかに制服を切り裂いていき、男の息が間近に迫る。

そして、迂闊な小男は持っていたナイフをその場に置いて準備を始めた。

しめた！

そう思うが先か、倒れたままナイフの置かれたコンクリートの床に覆い被さり、なんとか右手首を捻ってナイフを持つことに成功した。

背後には資材置き場しかない。これでどうにか縄を切って逃げ出せば死ぬことはない。苦しい思いをすることだってない。

今感じている左手首の激痛は私が無事逃げおおせるための布石だ。

既に不運に見舞われているなら次に来る幸運は絶対。利き腕じゃない手首のヒビ、もしくは骨折なんて小さな不運では上手く逃げ出せるかも不安が残るが、私はこれに賭けるしかないのだ。

いつ気づかれるかと大量の冷や汗をかきながら小さく右手を動かす。ああ縛られた状態では上手く縄を切れない。でももう少し、もう少し。

のろまな小男が大男に先にシていいかなどの馬鹿げたことをくつちやべっている。

もつと時間かけてろ。今に逃げ出してやる。

あと少し、あと少しで縄が切れる。多少左手を傷つけてしまうかもしれないが右手に力がこもる。

ブツン

切れた！

左手に軽くナイフが滑ったが殺されるよりはマシだ。

切れた縄を振り払ってその場から全力で走る。

「ほらな、よそ見するなと言っただろう」

大男の声が聞こえて次の瞬間には足を払われ、私は思い切り転倒していた。

「くっそおー！」

転倒する中で握りしめていたナイフを振り抜き、男の太股に一矢報

いる。

深々と突き刺さったナイフに苦悶の声をあげた大男は鬼のような顔をして、その手に持つていたもう一本のナイフをこちらに向かつて振り下ろして来た。

バランスを崩していた私は当然避ける暇もなく、吸い込まれるようにナイフは脇腹へと刺さった。これで骨折に加えて出血多量。ショック死しなかったただけマシだろうか。

「はっ、う……」

「てめえふざけるんじゃないぞ！」

脇腹に刺さったナイフを小男が回収し、太腿を庇った大男が私の首を掴む。そして、また盛大に投げ飛ばされたのだ。

甲高い金属音をかき鳴らしながら私が埋まったのは資材置き場。強かに長細い金属たちに背を打ち、下が崩され上からどんと落ちてくる金属の棒に全身を鞭打たれながらその中に身を埋める。

ガランガランと落ちてくる鉄の棒は狙ったように私の脇腹の傷を深くしていった。

息が苦しい。

お腹が熱い。

左手首の感覚が分からない。

酩酊感が脳内麻薬へと変換される。

ガングンと頭に響く音のせいでスイッチが切り替わり、防衛本能からか音の情報を遮断した。何も聞こえない。視界すらも歪み、霞んでいく。二人の男の手には、ナイフ。

…… 今度こそ死ぬ？

ここまでで終わってしまうのか？

痛い思いなんてしたくないのに、苦しい思いなんてしたくないのに。どうしたら苦しくなくなるだろう？ 痛くなくなるだろう？ 死んだら楽になれるかもしれない。でもそれでは意味がないのだ。

生き残るために必要な解は？ これ以上痛い思いをしないために必要な行動は？ どうすればいい。どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？

どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？
どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？

そのとき、鈍くなった耳がやけに響く金属音を捉えた。

何かが落ちて来たような、転がったような、軽い墜落音。あるいは、
転落音。それはまるで理性の蓋が外れるような、バキバキに崩れてい
くような、徹底的に叩きのめすような、そんな音に似ていた。

どこかで私を嘲笑うような、そんな声が聞こえて来さえするような

ただ無言でわたしはソレを振るい続ける。ごちゃまぜになった思考に押し出され、翻弄され、笑みを浮かべるように口角を上げて。生きなくちゃ。生きるためにはこいつらは邪魔だ。ただそれだけが頭の中に木霊して目の前が真っ赤に染まる。視界が赤に塗りつぶされて、ぐちゃぐちゃになったそいつが辺りに散乱していく。

力が入っていた小男の爪がわたしの足に食い込む。ああ、証拠が出ちゃうじゃないかどうしてくれるんだよ。

「はっ、はっ……」

動かなくなつた。真っ赤つか。

センスの悪い映画のセツトのごとく、ホラー映画の惨状を再現したように、全ては無秩序にバラついた。

まるで赤い花畑のようだと形容したとしても、呆れ笑い一つ起こりやしないほどに悪趣味極まるこの場に残るのは、複数に散らばつたそいつとわたし、そしてこれから散らばる大男。

もう小男の息遣いは聞こえない。辺りに大小様々に散らばつたそれがわたしの生を証明する。希望を証明する。あとはただ一つ、もう一人を叩き潰して完全にわたしの生を確実なものにするだけだ。

そうすればもう怯える必要はなくなる。その恐れを、死の恐怖を想起させる全てを消さなければ。

一辺倒に傾いて軋む脳がわたしに命令を下すのだ。早くアイツを■してこれを夢に帰せ、と。

わたしの血と小男の血で滑る鉄パイプを握りしめ、痛みを耐えながらこちらに向かつてくる大男を睨む。早く早く早く、アイツを殺さなければわたしが殺される。早く早く早く、小男のへこんだ頭を踏んで転がす。もう動かない。動かない。動かない。死んでいる。ああなのはイヤに決まっている。だから■す。確実に■す。ミスなんて許されない。

「q s r t g h j k l」

こっちは何を言われても分からないんだから、相手が言っていることを気にする必要はない。でも相手がなにをしてくるか分からないからそこは不便だ。大男の肉が擦れるみたいな気持ち悪い音は判別

できないから予想もできないし、まあ別にいいか。

「あああああ！」

絶叫を上げて突っ込む。そんな肝心なところで、手が滑った。血だらけになった鉄パイプはよく滑る。べちゃべちゃに汚れた手では掴み続けるのが難しかったみたいだ。

わたしの希望が滑り落ちていく。わたしの生存本能が警鐘を鳴らす。

鉄パイプが落下する無情な音が響く。

生きる可能性が滑り落ちていく。

「zxcghjkl！」

大男が傷口を庇いながら踏み込んでくる。

全身が痺れたようになってしまったわたしは、それを見送るほかになかった。

重い重い一撃を腹の傷口に受けながら目がぐるぐると回っていく。

もう無理だ。リアルで内臓が出てしまいそう。

くらくらする視界と戻って来る音。怒りと恐怖で凍結されていたはずの激痛。

死ぬ。

死ぬ。死ぬ？死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。

死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。

死ぬ。死ぬ。このままじゃ死んじゃう。

頭を掴まれる。

首が締まる。

そのまま、投げられて、ぼうんとなにかの塊に埋もれた。そして勢いのままに頭からソレに突っ込んだわたしは更なる危機感を感じて総毛立つ。

足を引きずりながらやってくる大男に、逃げようとしても動かさない体。かろうじて動いた指先にカサリとなにかが触れ、咄嗟に握りしめた。

ナイフと鉄パイプを持ったアイツがやってくる。わたしにトドメを刺しにやってくるんだ。ナイフで内臓をぐちゃくちやにされるの

か、鉄パイプで頭を潰されるのか、はたまた締め■されてしまうのだろうか。

体が動かない。指も足も顔も、なにもかも。唯一動く表情は既に諦観の笑みを浮かべ、静かに景色を映すことをやめようとしていた。

ああ、どうしよう。これが夢ならばどんなにいいことか！

戻って来た音が誰かの足音を聴き分けた。大男でもない。小男でもないアイツは散らばったから違う。ずっしり重たくないから大男とも違う。

大勢。もつと大勢。大勢がわたしを■しにくるのだ。逃げなくては、立たなくては……抵抗しなくちゃ、■さなくちゃ。もつともつともつと■さなくちゃ多勢に無勢なんだ。今度こそ死んでしまう。そんなの嫌だイヤだいやだいやだ。

誰か、誰か、死にたくない。しにたくないんだよ。しにたくない。お願いだから、誰か……

「s d f g h j k l !」

「動くな、警察だ！」

けい、さつ？

淀んだ音の中でやけに明瞭に響いたその声は、わたしにとってまさに救いの音となった。

遠くなっていく意識を繋ぎとめて、静かに耳を傾ける。俯せに倒れ込んでしまつて、体も動かすことができなくて、何も捉えることができなからだ。

何度確認してみても体は動かないし、倒れた時に思い切り打ち付けた頭もビリビリと痺れて今にも割れてしまいそうなほど痛む。指先すら動かない。だけれど、挟まれた脇腹が一番酷い。内臓が夢の中のように見えるんじゃないかと思うくらいだ。それに寒い。体温が下がってきている。

これが夢の中なら痛くないのに。……でもこれが現実だからこそ早くアイツら全員■さないと。逃げ出すためには体を動かさないと

いけない。警察なんて嘘で、大勢の仲間が来たという可能性もあるのだ。

「君、大丈夫!? ……じゃ、ないよね。寒くない?」

身近に声が聞こえて、唐突にふわりと、なんだか温かいものがかけられるのが分かった。

…………… ああ、あつたかい。

女の人の声がある。顔を上げられないから分からないけれど、優しい声。わたしを安心させるような少し低い声。

「うわ、酷い怪我。でも、もう大丈夫。すぐ病院連れてってあげるから、もう少しの辛抱だからね」

打ち付けた頭を慎重に探り、傷を確認する女の子の手つきが優しくかったから、恐怖心と生存本能に染まっていた精神が波のように少しずつひいていく。静まっていく。

…………… さむいけれど、あたたかい。優しい手。思い起こすのはメイの優しい手。

周りから聞こえてくるのは、大男の罵声と、警察の人たちの大捕り物の声。

今鉄パイプを持っているのはアイツだけでも、あれには私の指紋もべったりとついていているだろう。小男の返り血だつて私にはついていいるだろう。過剰防衛どころではない。これじゃあ流石に傷害致死にまでいたるのではないだろうか。

でも、それでもいいのかもしれない。それなら希望ヶ峰学園へ行くというフラグが折れる。死亡フラグが一つ折れる。

今回もギリギリ、幸運にも生き残ることができたのだから病院という恐怖の象徴に行くことも受け入れるしかない。

大丈夫、ハイジャックと隕石の事件でだってお世話になったし、あの病院はまともだった。大丈夫、生まれ育った病院のような外道な場所はそうそうないんだ。今回も大丈夫。きつと大丈夫。大丈夫じゃなかったら、今度は私が皆■しするしかないけれど、ど。

「君、意識はある? 名前言える? う、でもこんなに怪我してるんじゃないや流石に無理かな」

「…… お、まえだ、なぎ」

「そっか、狛枝風さんで合ってるね。よかった、君まだ意識があるんだね！」

きつとこの人が話しかけてくるのは私が意識を失わないようにという気遣いもあるだろう。意識を失ってしまったら出血多量で死んでしまう可能性だってあるのだ。そこまで思い至って、姿が見えないからその代りに私は彼女の名前を訊いた。恩人の名前を知りたいと思うのは至極自然な考えだろう。痛みを誤魔化すように笑って私は言った。

「キミ、はっ？」

「わたし？ 五月雨結さみだれゆい。探偵だよ。君を助けに来たんだ」

「結、お、ねえ、さん？」

顔は見えないけれど、彼女が驚いたように笑ったのが分かった。

「はは、お姉さんか。なんだかくすぐったいなあ」

「結、お姉さん？」

「ん、なんだい？」

「助けて、くれて、あ……」

顔を上げることができないから、彼女が触っている右手だけがあつたかくて、そこにいるんだという実感が湧く。五月雨結さん。多分年上だから、結お姉さん。

結お姉さんは苦笑して、もう片方の手で私の頭を傷に障らぬようにふわりと撫でてから言った。

「それは君が病院に行つて、助かってから聴きたいと思うんだけど、だめかな？」

それはつまり、絶対に生きて会うためにとっておけということ。この人は、本当に優しい人なんだな。

寒さとやってきた眠気をいつかのように追い返しながら話し、意識を保つ。

「ん、そっか。じゃあ、ちゃんと、助からないと、ね」

「そうだね。さ、救急車が来たからあともう少しだ」

サイレンが鳴り響いて罵声もやみ、すっかり辺りは静かになった。

私は、罰を受けるんだろうか。きつと受けるのだろう。このまま希望ヶ峰に行けなくなればいいのに。

救急車の音に「もう少し、頑張るんだよ」と言っただけを撫でるお姉さんの声に、私は慌てて言った。

「お見舞い、来てくれる？」

「うん、また会おうね」

「そっか、きて、くれるんだね」

救急隊員によって体が持ち上げられ、横を向いていた体があおむけに寝かされる。その時私にかかっていた物が落ちて横目に確認することができた。

血にまみれた、カーディガンだった。結お姉さんの物だろう。すつ、と心が温かくなつた。

「必ず会おうね」

「…… うん」

担架から見た彼女は茶髪ショートで赤い眼鏡。近所でちよつと有名な、中高一貫のお嬢様学校の制服を着ている女の子だった。

制服といつても、動きやすそうな下のキュロットは見慣れないので改造制服なのかもしれない。

探偵をやっているってことはちゃんと許可を取っているのかもしれないけれど。そんなに年の変わらない、正義感の強そうな、女の子だった。

「ちゃんと治してくるんだよ、狛枝風ちゃん——」

そう言った結お姉さんは笑っていた。そして、泣きそうな顔でもあった。

まだ中学生である彼女が探偵になった理由はきつと色々あるのだろう。その泣きそうな顔には、そこが関わっているのだろうとあたりをつけて私も笑った。

私が助かったことに対して泣き笑いをしてくれたのだと、自惚れだとしてもそう思いたかった。

握り締めていた紙宝切れくじが一等だと聴かされ、二人で驚いたのはもつともつと後の話である。

Entrance to school
No. 12 『開幕』

その日は私にとって、単なる365分の1日なんかじゃなくて、もつと特別な意味を持つ1日だった。

来て欲しくなかったその日を迎えた私は、まるで生贄になる目前のか弱い子羊のような気分を味わっていた。

目前に迫るのは私立希望ヶ峰学園。

それは私にとってはただの学校というよりも、もつとどろどろとした、悪い意味での特別な存在だった。

たとえば、囚人が処刑台に上がるとき足並みを遅くするような、肉牛が出荷されていくときのような諦観さえ浮かぶような、大津波が目の前に迫っている光景を見てしまったような、そんな圧倒的な存在に対する絶望感。

私は幼いときから、言ってしまうえば生まれたときからずっとこの希望ヶ峰学園に特別な想いを抱いていたのだ。…… 勿論、負の意味で。

そして私は現実逃避をするようにその門前で歩みを止め、ネットで見たホームページや評価を、もう一度頭の中で纏め始めるのだ。

希望ヶ峰学園というのは一等地に巨大な敷地を有する政府公認の特権的な学園で、その全てが政府からの寄付金で成り立っているというとんでもない学園である。

全国各地からありとあらゆる分野の超一流高校生を集めて将来を担う “希望” に育て上げることが目的とした学校であり、才能とそういうものを研究する場所でもある。

そしてこの学園を語るときについて回る都市伝説のようなくだらない言葉がある。

『この学園を卒業できれば、人生において成功したも同然』

この学園の卒業生が様々な業界で活躍しているので一応事実に基づいた話ではあるのだが、こんなに胡散臭い文句はここ以外にないだ

ろう。

予備学科なんてものを作り、”超高校級”に憧れ、同じ敷地内で学びたいと思う一般人の心を利用し、莫大な学費を払わせ、それを研究資金へとまわし湯水のように使い続ける。全ては才能持った高校生たちのために。才能を育成する。そんな免罪符を盾に一方的な徴税をしている学園関係者は、それでも尊敬されていた。忌々しいほどに。日本の誇る、素晴らしい組織を作ったのだと。

こんな学校が一体幾つあるのか。

皆考えることは同じだ。同じ事業が成功しているのだから真似しようとする。だから学校というものは嫌いだ。あの病院となにも変わらない。やっっていることはなにも、違わない。

しかし超高校級の名称を手に入れた彼ら、彼女らはそんな組織の思惑とは関係ない、と思いたい。

表の学園はさながら学園そのものがアニメに出てくる正義の組織かのように多くの人が憧れ、キラキラとした目で見つめる場所。子供がライダー物や魔法少女物に憧れるような、雲の上の存在になってみたいと手を伸ばし、真似をするような、そんな存在。

一度は誰もが思う、あんなキャラクターになりたい。あんな格好いいことを言ってみたい。みんなに尊敬されたい。ヒーローに、ヒロインになりたい。そんな思いが叶う場所。

学園にいる人は皆特別で、そんな雲の上の存在だ。だからこそ、予備学科制度に隙はない。……爆弾を投げ込む、カリスマある先導者さえ現れなければの話だが。

とにかく、そんな良い意味でも悪い意味でも人気な希望ヶ峰学園の入学資格は四つ。 ” 現役高校生であること ” ” 各分野において超一流であること ” ” 抽選に当たること ” ” 予備学科生として入学試験を受け、狭き門を突破すること ” だ。

本来は前者二つが希望ヶ峰学園としての絶対条件であり、抽選で本科になる生徒はたった一人のうえ、入学してからも運についての研究が待ち受けているし、予備学科生は同じ学園に在籍しているだけという悲惨な状況。

ヒーローに憧れて組織に入ったらヒーローに会うこともできず、職場の機械修理しか出来なかった…… みたいな。

こんな制度なのに “ 超高校級の絶望 ” が出てくるまでよく爆発しなかったと関心、感動すらするよ。

学園の教師たちは私がいた病院の人たちとそう変わらない “ 才能 ” という商標釣り餌をぶら下げ、才能のない子供を同じ人だと思つてないんじゃないかと考えるくらいぶっ壊れた連中だ。

原作あキャラの親の事を鑑みて控えめに言つたとしても、やっぱりこの学園は気に入らない。

と、前語つたことをまた長々と考える必要もないか。

この学園側からスカウトされた人物がタダで入学することができない。ま、私は抽選で受かったただけだけれども。織月にも、うつろちゃんにも定期的にチャットすることは伝えてあるし、もう中学校や前の高校に思い残すこともない。

赤いネクタイを締めたシャツにコート程もある大きな黒いパーカー。膝下長めのスカートは前の高校と同じ紺色。スカートの下、太ももには、ホルダーを付け、伸縮式に作つた鉄パイプを身につけている。誘拐事件から危機感を感じ、持ち歩き始めたのだ。

首には新しくなつたオレンジ色のヘッドフォンをかけ、胸元にはオレンジ色のホイッスルと、思い出の写真が入つたロケットペンダント。ヘッドフォンが織月からプレゼントされた新しい物に変わった以外、いつもの服装だ。

寮に必要なものは全てある。大量の、過去の日記帳はマンションに置いてきた。大丈夫、最上階ワンフロアを買い占め、管理をうつろちゃんに移してあるのだから隙はない。ちゃんと管理してくれるだろう。あの子が、あるいは織月が絶望堕ちしなければの話だが。

思えば、うつろちゃんにはかなりの無茶をさせてしまった。最上階の一部屋だけとは言え、滅茶苦茶高い部屋の頭金を半分も出したのだ。学生の身にはかなり堪えたはずだ。おかげで親に絞められたと愚痴っていたし、申し訳ないことをした。まあ、親がいるというのが嘘という可能性もあるのだが。

入学式だとしてもいつも身につけておきたいものはちゃんと身につけているし、先に寮へ送った物の中にはうつろちゃんからプレゼントされた夏用の麦わら帽子やビスクドールなんかも入っているし、織月に何故かプレゼントされた変装セットも送ってある。今鞆に入れているのは装飾としても使える涼しげなストールだけだ。

鞆の中身がこれから起こることに反映されるかは分からないが、ストールが反映されなかったら嫌なので一応取り出し、身につける。春といってもまだ肌寒い。違和感はないはずだ。

さあ後悔はないぞ。これから私の新しい学園生活が始まるのだ。

いつまでも暗闇を進み続けるのは飽きた。少しでも、その名前に相應しい希望が訪れることを祈り、輝かしい生活が幕を開けることを願おう。

そう決心して一歩、踏み出そうとしたときにそれは起◆た。

内ポケット■に入れた携◆電話@震／、立ち止まる。メー&@二件。デイス%レイにはあ〒二〇の名前。

そこ*は、◇励の@葉が\$・れてい×。

い*でも○談は受ける。離れ離れ&%!\$けれ□、ずっと◆ヤットで交@+*∠.そう■%ばまた同◇を見つ+∠ん#.やみ@きという—

ザザ——ネームの女の子で、とつ*+可愛いPなんだよ。風DTんやうつ■ちや、*+∠年だから仲∠+して□◆てね。あ——ザ——、—

噂——ザザザ——尋ね@#人——ザ——消え——

ザザ——なん——から、大丈——思——

——ど気を付——情——源? 月子——う私の友——

「あ、れ?」

まるで虫食いのように、脳が溶けだして行っているかのように、目がくらみ、デイスプレイに映った文字が見えなくなった。嘘だ、まだうつろちゃんのメールを見ていないのに。

雑音、脳をこねくり回されるような不快感、浮遊感。そして、一面の暗闇と、私の夢の中のような、意味深な模様に扉だけの空間。

「私はあの扉の中になければならない……?」

そんな義務感に似た思いを押し殺して俯き、立ち止まったまま考えた。

踏み出したままの一步を恨みがましく目にしてから私は気づいてしまったんだ。

もう遅かったのだ。なにもかもが、遅かったのだ。

罪を犯していなければこれに巻き込まれることはない。その希望さえも粉々に打ち砕かれた。

ああ、私は何をやってしまったんだ。まったく、遅すぎる。

だって、私はもう、そこに一步、踏み外してしまったのだから。

スライド式の扉を開けると、そこには既に何人かが集まっていた。シンプルな教室のように見えるが、私が入って来た扉を後ろ手で開けようとしても開くことはない。

明らかに異常な状態だが、まだこの教室に集められている人は何も気が付いていないようだ。

「えっと、新入生はここであつてる……かな？」

「あ、アンタもこの新入生ね？ よろしく」

「う、うんよろしく」

一番最初に声をかけてきたのは、赤い髪をボブにした女の子だ。レトロな雰囲気にするジャンパースカートに赤いチエックのネクタイ。色白で、薄いそばかすがチャームポイントだ。人好きのする笑顔がまぶしいくらい。

そして、一層際立っているのが襷がけにされた一眼レフのカメラだ。あれは一流の写真家が愛用するという高性能カメラだったはず。飛行機事故で亡くなった、父が欲しがっていたものとよく似ている。

彼女の名前は新入生スレッドを見た。彼女の撮った写真と一緒に掲載誌の切り抜きがアップされていたからすぐに分かる。……

元々知っていただろうとは言つてはいけない。

「えっと、確か〃 超高校級の写真家 〃 の、こいずみまひる小泉真昼さん、だよ
ね？」

「あら、知ってるんだ？」

「そりやそうだよ！ 私、抽選で当たっちゃったからネットで調べて来たんだ。だからある程度は分かるつもり。…… 見てる途中でちよつと眩暈がして、すぐ教室に来たから中途半端なだけだね」

あははとから笑いをしながら髪をいじる。あの人とかこの人とか、そもそも言うわけにはいかない人の情報があるし、そこは誤魔化しておく。

それに、眩暈で読むのを中断されたのは本当だ。それが人から来たメールであることを言っていないだけ。前の話からの推測で多くの

人は勘違いする。ただそれだけ。嘘ではないはずだ。

「墳ツ、ではワシのことも分かるのか？」

「……うん、そうだね。超高校級のマネージャーさん、おはようございますー！」

「応、おはよう！ 合つとるぞー！ ワシは ” 超高校級のマネージャー ”、にだいなこまる式大猫丸じやあああああー！」

「ちよ、超高校級の幸運に選ばれた狛枝凪です。ま、よろしくね」

キーン、と耳鳴りがするほどの大声で一瞬怯んだが、なんとか挨拶を返すことができた。

滅茶苦茶声の大きいこの人は超高校級のマネージャー、式大猫丸。198cmと2m近い身長を持ち、『お前が選手やれよ』と言いたくなるような筋骨隆々とした体格。青っぽい黒髪の短髪を逆立てていて、ものすごい目力をした男の子だ。目力が強すぎて目じりから青い雷光のようなものが見える。あれは幻覚か、現実か、悩むところだ。顔にはモミアゲとアゴヒゲ。

白いタンクトップの上に学ランを羽織り、首に大きなチェーンを巻いている。下は青いジャージに下駄。腰に白いタオルを下げているなど、とても高校生とは思えない雰囲気だ。30代にしか見えない。

しかし、豪快に笑うその姿はどこか親しみやすく、暑苦しいが爽やかなイメージが浮かぶ。

「貴様等、騒々しいぞー！ 俺様を寢床とする邪悪な者共が目覚めてしまうではないか！」

と、三人で談笑していると突然壁際に佇んで目を瞑っていた男の子が叫んだ。

側面を刈り上げしていて、それより上は黒と灰色のメッシュが入ったバック。赤目と灰色の目のオッドアイに左目に走る傷痕。紫色の長いストールにひざ下まである長い学ランを着用。

左袖はローアップしてピンでとめてあり、包帯がグルグルと巻かれている。さらに黒いズボンに黒い長ブーツ。

よく見たら目元の傷跡はタトゥーのようだ。指輪やイヤリングもしているみたいで、右耳に蛍光色のイヤリングがチラリと見えた。

見た目だけで考えるなら完全にコスプレか、厨二病のそれだろうか。

しかし彼は、超高校級の飼育委員、田中たなか眼蛇夢ぐんだむなのである。

そんな彼の言葉を訳すとつまり、『自分の飼っている動物が目を覚ましてしまうから、あまり大声を出さないでください』ってところになるだろう。

「キミは、超高校級の飼育委員の田中くんだね。何か学校に連れて来てるの？」

「我が破壊神暗黒四天王は現在おやすみタイム中だ。騒ぐな、愚鈍め」「おっと、ごめんね。静かにしてるよ」

そう言っつて式大クンに事情説明をしておく。

一番声が大きいのは式大クンだし、小泉さんはそういうことならと顰めていた表情を元に戻した。「なによいきなり、わけわかんない奴ね」と言っつていたが、まあ今回言っつた彼の言葉は比較的分かりやすかったので一応納得したみたいだ。

「うーん、でもそこで寝てる子は分かんないな。眩暈で中断しちゃつたし、ネットでは見てないのかも」

本当は知っているわけだけど。眩暈があつたのは本当の事だからね。

先程間近で出された大声でも起きない女の子は、よだれを垂らしながら机に突っ伏して寝ていた。

肩で揺れる猫耳パーカーとシンプルなベージュ色のスカート。黒のニーソックスで、彼女の座っている椅子にはピンク色の猫の形をしたリュックがかかっている。肩の所で外はねした、薄いピンクブロードの髪が伏せて寝ているせいで机に広がっていた。

「うーん」

「えっと、寝てるどころ悪いんだけど、ちよつといいかな？」

「……………いいよ」

眠たげな表情のまま顔を上げた女の子が、たっぷりと時間を空けてから言っつた。

顔を上げ、初めて気が付いたのだが髪かみの左側に、シユウテイシューテイング

ゲームを模したと思われるドット調の髪飾りがついている。なかなか可愛らしいデザインだ。

小泉さんが眠たげなままの、その表情を見て「だらしないわね、アంత」なんて言いながら持っていたティッシュでよだれを拭いている。彼女はそんな仕事を不思議そうに見つめたあと、またたつぷり時間をおいてから「ありがとう」と言った。

「自己紹介を、って思ったんだけど大丈夫？」

無理矢理起こしといてなんだけどさ、と前置きをしてから話す。彼女には分かりやすく言っておいたほうが無難だろう。

彼女は少し考えた風に一拍「えつとね」とおいてから首を傾げた。

「私の自己紹介……かな？」

ぐるりと見回して小泉さんと私、私から式大クンへと目線を移していき、皆が既に自己紹介というか、名前の確認を済ませていることに気が付いたのだろう。

彼女は皆が揃ってからの方がいいと思っていたんだけど、と前置きをしてから自己紹介を始めた。

「うん、分かった。……………七海千秋です。 ” 超高校級のゲーマー ” です。えつと、趣味はゲームです。オールジャンルでイケまーす。……………ふあゝ、ん……………よろしく」

途中で欠伸が邪魔しちやっただけけれど、かね予想通り。

「恐れ多いことに抽選に当選した ” 超高校級の幸運 ” 狛枝風です。よろしくね、七海さん」

そうして次々と自己紹介をして暫く経ち、時計を確認する。

私が来たのは入学式が始まる8時よりずっと前だったから集まりが悪いのにも納得できる。現在7時40分。自己紹介で10分以上経っているのでもそろそろ話題も尽きて来た頃だ。

思ったよりも七海さんとゲームの話で盛り上がる事ができたが、それだけだ。彼女は既に眠気も飛んだようで、ゲームをリュックから取り出し集中してしまっている。あの状態の彼女に話しかけても反応は帰ってこないだろう。

沈黙が場を支配し始め、気まぎれなってきた辺りで扉が再び開かれ

た。

「…… ツチ、もう人がいんのか」

「…… 随分早いんだな」

先に入って来たのは薄い茶色の短髪で、縞柄の白い線が入ったスーツに黒いネクタイというきつちりとした恰好をした男の子だ。開口一番に発せられたのが舌打ちであるあたり少し口の悪そうなイメージが第一印象に来る。

身長はうつろちゃんより5センチは高いが普通の男子よりは低いだろう150cm代だ。私と15cmくらいは身長が違う。だがそんなことは絶対に言えない。彼もネットで見たことがあるのだ。

“ 超高校級の極道 ” それが彼だ。身長が低いだの童顔だの凄みがないだの言ってしまったら指が何本あっても足りない。

その彼の後ろから一緒に来たのは真っ黒なセーラー服を来た女の子だった。

私と似ているようで違う、薄い銀髪を白いリボンで二本の三つ編みにしてまとめ、暗闇の中でも光りそうな真っ赤な瞳が特徴的だ。背中には斜め掛けにした竹刀袋のようなものを下げている。

そういえば彼女は大きな掲示板に載っていなかった気がする。知る人ぞ知る人物ってやつに分類されるらしい。

田中くんが彼女の容姿を見てなにやら無言で頷いているが、はて、彼女のことを同士だと認識したのだろうか。隅の椅子に座り、豪快に足を組み、時間をただひたすら待っている彼の傍は静かだ。

“ 超高校級の剣道家 ” 辺古山ペコだ」

「…… 九頭竜冬彦」

九頭竜クンのほうは自分が有名だから何も言わなくてもいいと思っただろうな。

それにしても、私の話題が出ないのはありがたいが、ある意味で不気味でもある。

いや、私の死神っぷりが有名なのはネットをしている人限定だから、突っ込まれることがないのだろうか。それならば怖がられることもないし都合が良い。七海さんは知っているだろうが、自分から不和

を招くような子ではない。

心配なのは左右田クンやソニアさんあたりだが、後で反応を見れば分かるだろう。

新たにやって来た二人が騒がしいなんてこともなく、また無言のまましばらく経った。

次にやってきたのは長い黒髪がザンバラになってしまっている包帯だらけの女の子だ。ピンク色の半袖シャツの上に、エプロンのような看護服を着ている。ナースシューズも履いているので病院関係者っぽい雰囲気がある。

看護学校の制服はあんな感じなのだろうか。皆前の学校の制服をベースにしているはずなのに私服に見えて仕方ない。ま、私も制服の上にパーカーを着ているのだし、人のことは言えないが。

「あ、す、す、すみませえん！ 遅刻してごめんなさい！ だからそんな目で見ないでくださいーい！」

おどおどとしながら教室に入ったことで、注目を浴びた彼女が泣きそうな顔で謝り倒している。

分かる。分かるよ、その気持ち。入学式の日、教室に入っただけで一瞬注目を浴びるその感じが嫌なんだよね。ジロジロ見られるその感じ。私も苦手だなあ。

「大丈夫、遅刻じゃないよ。時間までまだ十分もあるし、のんびり自己紹介でもしようよ」

「はわわっ、自己紹介ですかあ？ えっとえっと、えっと、っ、罪木蜜柑ですう。『超高校級の保健委員』って言えばいいでしょうかあ」

罪木さんは自身の指と指をちよんとつつき合わせながら泳いだ目線で私を捉える。今にも涙目になりそうな上目遣いは中々な破壊力を持っている。微妙に卑屈そうな笑みだが、彼女の髪と包帯と言動を考えれば出る結論は一つだけ。虐められ続けばこうなってしまうものなのか。腰が低く、顔色を伺い、自分を全否定する。

自分を否定してしまう態度はあまり好かないが、それはそれで仕草が可愛いらしく感じる。それと同時に密かなS心がむくむくと湧き上がってくるように感じたが、嫌われたくはないので理性で抑えつけ

る。

それをしても彼女は嫌がらないで謝り倒すだろうが、そういう関係になるのは憚られた。私だって第一印象くらいはよくしておきたいのだ。

だから、私はなるべく気安い言葉を選んで彼女に手を差し出した。「罪木さんだね、よろしくー。私は抽選なんかで当たっちゃったんだけど、『超高校級の幸運』の狛枝風です。」

「よ、よろしくおねがいしまひゅ。あつ、ごごごめんなさあいきなり握手なんて差し出がましいですよねえ、私なんかの汚い手に触りたくないですよねえ！」

差し出した手にしっかり応えてくれた彼女だが、すぐに返事が返ってくるとは思ってなかった私は一瞬きよんとしてしまった。それがいけなかった。視線に気が付くのが早い彼女はパツと手を放して頭を抱えながらネガティブな思考に走ってしまった。

「あ、違うんだよー嬉しいよ、罪木さん！泣かないでー！」

泣きそうな表情で、ネガティブな言葉ばかりを盾に私の言葉を遮る罪木さんの誤解を解き、慰め終わるころには既にはぼ全員が揃っていた。

まさか自己紹介でパニックトークアクションAをするはめになるとは思わなかった。そんなのはゲームの中と学級裁判だけでいいんですよ。勘弁してくれ。

最後の一人以外が揃い、これで最後だろうかと思いを見渡している。

新たにやって来た人は7人。これで15人だ。

案の定多少私を避けるようにして立っている。『超高校級のメカニック』『左右田和そうだかずいち一』

ふてぶてしく教室の中央に陣取っている。『超高校級の御曹司とがみびやくや』
『十神白夜』

ゆったりとしたペースでやってきた。『超高校級の王女』
『ソニア・ネヴァーマインド』

少し時間を過ぎてからやってきた。『超高校級の日本舞踊家』

西園寺日寄子。

ソニアさんに早速絡みに行っている “超高校級の料理人”
花村輝々。

一人テンション高く自己紹介をしまくっているのが “超高校級の軽音楽部” 濔田唯吹。

そして、だるそうにやって来たのが “超高校級の体操部” 終里赤音。

その間にも何度か式大クンが扉を開けようとしていたが、無駄に終わっているようだ。

しかしそれも人が来始めてからやめてしまっていた。先に入学式を受けた方がいいと判断したのだろう。だから後から来た人たちは、未だ自分たちが閉じ込められていることに気づいていない。

これだけ集まっても皆一様に黙っていたり、何から話せばいいかわからない様子。賑やかな人物もいるにはいるが、盛り上がりには欠けている。沈黙、静寂になるのは正直時間の問題だろう。

そして、最後の人物が教室に足を踏み入れた。

「…… あれ？」

最後に入ってきたのはいたって普通な、そんな男の子だった。

前にいた高校の制服らしきワイシャツに、校章が描かれた深緑色のネクタイと黒いズボン。赤いラインの入ったスニーカーを履いている。

私も含め、個性的な服装を来た他の皆とは違い、いかにも学生と言った感じの雰囲気だ。

髪は緑がかかったツンツンヘア。その頂点にはアンテナのように立ったアホ毛がちよこんと覗いている。

そんな彼は枯れ草色の瞳を開きしばしばと瞬きをした後、不思議そうに皆を見回した。

これで16人、全員揃った。

「…… 何者だ？」

困惑したように辺りを見渡す彼を見て、一番最初に反応したのは超高校級の剣道家、辺古山ペコさんだった。

「…… え？」

まだ状況を把握しきれていないらしい彼は、青褪めた顔のまま周囲を見渡している。来たばかりなのだから仕方ないと言うしかないが、いち早くこの状況に順応していった他の皆の方が感覚的には異常なのだ。彼は至極真つ当な、普通の反応をしたにすぎない。

「あの、大丈夫ですか？ 顔色が優れないようですが……」

金髪の美少女。超高校級の王女がそう言っただけで首を傾げた。

…… なんてどうもこの女の子たちは首を傾げるのが似合うのか。女子力の乏しい私には理解できない。

「あ、えっと」

「ねえ、もしかしてさ、アンタもこの学校の新生なんじゃないの？」

「あ、じゃあもしかして、みんなも？」

口ごもる彼に小泉さんが人差し指をピンと立たせて言った。皆分かって切っていることだったが、混乱している彼の緊張を解くには良い言葉だった。

不安げに揺れていた彼の視線がきよとりとしたものになると、すぐに結論を出す。

「そ、そういう事だ。オレらもこの学園の “ 新生 ” だってな」

左右田クンが何も喋らず、ただ状況を見守っているだけの私を見て眉をしかめた。自分の発言が私も新生であることを認めてしまったのが、すごく嫌だったのかもしれない。小心者な左右田クンのことだ。死神が同じクラスにいるなんて気が気じゃないんだろう。

チラとこちらに視線をやった彼と目が合って「ひえ」というような短い悲鳴が漏れたが、関係ないとばかりに私は微笑んで手をひらひらと振った。それにますます顔を青褪めさせていくので意味ありげに笑みを漏らす。

嫌われたくはないけれど、なんだか彼の反応が面白くってついっぴやってしまう。

彼は罪木さんとは違って卑屈になることはないし、返ってくる反応

といえば距離を置かれるか怯えられるかの二択だし…… 土下座しだそうとする罪木さんは冗談だと立ち直ってもらうのにも時間がかかる。

彼なら無視されるだけなので正直楽なのだ。

「多分…… この教室には、私達みたいな新入生が集められてるんだね」

七海さんが簡潔にその一言だけを言うと、納得したように彼は「そっか」と呟いた。

しかし直ぐに巨体な人物。…… 主に横にだが、十神クンがあと一歩で教室に入らない彼に向かって 「おい、とりあえず中に入ったらどうだ？」 と提案した。

「えっ？あ、はい！」

超高校級の御曹司故か、彼の一言には重みが随分とあった。最後にやって来た彼が思わず敬語になってしまったくらいだ。隠しきれない複雑な顔をしている彼が近くにやって来たのをこれ幸いと手招きし、一番後ろの席に座ってもらった。

後ろ手で扉を閉めていたのでやはり、彼も閉じ込められたことには気づかないようだ。

「よろしく」

「ああ、よろしく」

生返事気味に返って来た言葉は気にせず、困惑の表情を崩さない彼の横顔を見る。何事か、考え事をしているようだ。不可解な現象にあったような、UMAを目撃してしまったかのような、そんな複雑な表情だ。そして、疑問をそのままにしたくなかったのだろう、彼が顔を上げた。

「あ、ちよつといいかな？」

「…… なんだ？」

「みんなはどうしてこの教室に集まってるんだ？ ここに集まれなんて聞いてなかったけど。入学式とかホームルームとかをここでやるのか？」

その言葉を聴いて十神クンがふてぶてしく、偉ぶった仕草で大きく

領くと、「それについては、ちょうど今から話し合おうと思つていたところだ」と切り出した。

まさに御曹司様なので偉ぶっているその仕草の一つ一つが様になつてはいるが、横に伸びたお腹が多少威厳を損なわせているようにも思う。

「話し合う?」

「いいだろう。今のこいつで全員揃つたようだし、その話を始めるとするか」

「え、これで全員なんすか? どうしてそんな事分かつちゃうんすか?」
十神クンが決定事項のように言うと、すぐさま派手な格好をした女の子…… 超高校級の軽音楽部の滝田唯吹さんが質問する。

確かに人数だけでは分からないだろう。しかし、用意されている備品の数を思えば十神クンのいう事にも納得できる。

「ここに用意されている机は16脚だけ。そして、今のコイツで16人。少し考えれば分かることだ」

机の数がもつと多ければまだ来る人がいるかもしれないとも思うが、丁度ピッタリになつたのだから疑う余地はない。

「で、なんの話をするの? やっぱぼくらがこの教室に集められた理由について?」

髪の毛のセットにもものすごく時間がかかりそうな、コック帽子とエプロンを身に着けた、少々小太りの男の子が疑問を口にする。

一気に皆を纏め上げ、一つの議題についてを問う十神クンは流石だ。話題選びがとても上手い。天性のリーダー気質というのだろうか。彼に注目が集まっているのは至極当然のことだった。

「まず、確認しておくが、この中に……自分がどうやってこの教室まで来たのか、把握している人間はいるか?」

「えっ?」

最後にやって来た彼…… まだ自己紹介もしていないが日向クンひなたが驚きの声をあげる。

他の皆も声こそ上げてはいないが、驚いているようだ。この場で道筋を憶えていると手をあげる人物もない。

「気づいたらこの教室にいた…… やはり、ここにいる全員」が
そうだという事か。だが、いくらなんでも不自然だ。頭の悪そうなお
前らでもそう思うだろう?」

しかし一つだけ気づいたことがある。

それは扉が目の前にあるあの夢のような空間を、「ここに入らな
ければいけない」という強迫観念に似た思いをしたことも、皆が覚
えていないということだ。

あの十神クンでさえ「気づいたら教室にいた」と言っているん
だ。夢に親しみ続けた私だからか、それとも知識があるから例外が起
きたのか、私にも分からないがそれだけは確かだ。

この場で言う気はさらさらないけれど。

「た、確かに変だよ。どうやって来たのか誰も覚えてないなんて
…… って、頭悪そうって何!」

「この学園に足を踏み入れた途端に妙な眩暈に襲われ、訳も分からず
この教室にいる。ここに至るまでに俺が体験したこと全ても。お
前らもそうなんだろう?」

小泉さんの言葉を華麗にスルーした十神クンが続け、日向クン、
コック帽の花村クン、罪木さんと次々に同意の声が上がった。

「お、俺はまったくその通りだけど」

「えっ!? あの眩暈ってぼくだけじゃないの? でも、みんな揃って
眩暈なんて変だよー!」

「ぐ、偶然にしても、出来過ぎですよねぇ」

「では、偶然ではないという事だな」

意表を突く言葉ばかりを選ぶ十神クンに疑問の声は尽きない。

王女様が疑問符を浮かべると彼も「つまり」、と勿体ぶるよう
に一拍置き、「この妙な現象の裏には、何らかの思惑」が働いている
という事だ」と大きな声をあげた。

皆が驚きの声をあげているが、今まで静観していた式大クンが落ち
着いて話し始めた。

「墳ツ、何を気にしてるのかは知らんが、その程度は大した問題ではな
いのお」

「どういう意味だよ？」と左右田クンが言う。それに式大クンは的確にもう一つの問題を議題に出した。

「要は、大事の前の小事というヤツだ。どうしてここに集まったのかより、どうしてここから出られないかの方が問題じゃろう」

「は？ 出られねーってなんだよ？」

「えっ!? ま、まさか！」

動かずに疑問の声をあげた超高校級の体操部、終里さんの横を通り、コック帽を落としそうになりながら花村クンが扉を開けようとした。しかし、扉はガタガタと派手に音を鳴らすだけでビクともしない。

そんなことが起こっては場が混乱し始めたのは当然の帰結だろう。皆が不安そうに話し始めた。

「あ、開かないっ！開かないよっ！」

「え、なんでっ!？」

「ここに来てしばらくたった後、用を足しに便所に行こうとしたのだが、その扉がビクともせんのだじゃあつ！」

「オイオイ、どうなってんだよ？」

ざわざわと波紋が広がっていくように混乱する皆を相手に、何故か式大クンは冷静だ。彼は何度も外に出ようとしていたから慣れてしまったのかもしれない。

「わしの全力でも開かなかったくらいじゃあ。お前さんらの力では到底不可能だろうなあ」

「えー、開かないってどうしてー？ そんなのおかしいよー！」

「そ、そうだ！ そんなのおかしいだろっ！ だって、俺が入って来た時は普通に開いて、鍵が掛かった感触だってなかったのに！」

花村クン、小泉さん、左右田クン、西園寺さん。そして日向クンが椅子から立ち上がり、扉の確認をしに行った。

そして、無言でその確認を終えた辺古山さんがぼつりと呟いた言葉に、皆は顔を青褪めさせたのだ。

「一体どういう原理かは分からんが、とにかく私達がこの教室に閉じ込められたのは間違いないようだ」

「な、なんだよ、それ？」

「な、なんかさ……もしかしてオレ達って、ヤバ気な事に巻き込まれてるとか？」

私は、とりあえず皆を落ち着かせる方向に持っていくことを考え、話題を別のものにすり替えることにした。確か、無印ゲームのときも、2本編のときもこういう話題が上がったはずだ。

「閉じ込められたっていうよりも、これが ” 入学試験 ” ってことなんじゃないかな？」

「入学試験？ それって希望ヶ峰学園のか？」

立ちあがったままの日向くんが私を見下ろしてくる。困惑しきった表情には抑えきれない不安と、雨に濡れた寂し気な子犬のような、藁にもすがるような感情が見えた。

当たり前のことだが、物騒な考えよりも平和的な考えの方が受け入れやすい。パニック気味になっていた皆はそれで少し余裕ができたみたいだ。

「ですが……希望ヶ峰学園には入学試験は存在しないと聞きましたよ？」

その皆の中で未だ不安そうにしているソニアさんが事実を口にしてしまう。しかし、幾らでも誤魔化しようはあるのだ。

「表向きにそう言ってるだけで、実際は ” 特殊な入学試験 ” が行われていた可能性もあるよね。たとえば……」

「あ、違いまちゅよ。これは入学試験じゃありません」

某魔法学校みたいに。

元気づけるために発しようとした言葉が出るよりも先に、幼い舌足らずな言葉が教室に響き渡った。

「なんだ？」

「おい、デブ、いきなりカワイイ声出してんじゃねーよ」

九頭竜くんが十神くんに突っかかっているが、間違いなくあれは十神くんの声ではない。勿論、その場にいる誰の声でもなかった。

「体型についての発言を今更否定する気はないが、今の声は俺のものではないぞ」

「……はっ！ じゃあ誰だよ？」

むしろどうして十神クンの声に聞こえたのかが知りたいくらいだ。首を傾げる終里さんはとてつもなく可愛いが、ボケるにしてももつとマシなボケがあったらうに。

この場に超高校級の声優とか怪盗がいたなら何の違和感もないが、あんな幼い声を出せる人物はきつといない。

「あの一、あちしでちゆけど！」

また聞こえた。

折角落ち着いた場がまた混乱の渦に巻き込まれていく。

「もう少し落ち着けばいいのに」

「いや、こんな状態で落ち着いてられるわけないだろ！」

私が漏らした言葉にしっかりと返事をしてくれる日向クン。

まあ、人一倍警戒心が強い彼のことだ。正体の掴めない声というものはさぞかし不安感を煽られるだろう。

「誰じゃあ！ どこにおるかああああっ!？」

我を忘れ、大声で叫び倒しながら式大クンが凄い勢いで周囲を見渡した。その動きだけで周りの空気が引き裂かれていくようだ。やっぱり彼自身が選手やったほうがいいと思うんだよね。

「あの教壇の向こうから聞こえたみたいだけど？」

七海さんの一言により、待つてましたとばかりにその謎の声は喜色ばんで告げた。

「はーい！ ミナサンお集まり頂けたみたいでちゆね！ それじゃあ始めまちようか！」

それは唐突に始まった。

夢の中でもないのにピンク色のエフェクトが光り、教卓の上へとアイドルのように現れたのは、ファンシーなスカートを履いた、ピンク色のウサギ。

右耳にはピンクのリボン。背中には天使のような羽。そして、右手にアニメで見るようなハートと翼をあしらったステッキを持っている。背中の羽が動いたように見えたのはきつと見間違いではないだろう。

ファンシーな見た目のわりに目が黒いボタンのようなものだけだと、いつそミスマツチすぎて不気味さを感じる。

「なんですか？ あれは」

「えーつと…… 多分ヌイグルミだと思うよ」

困惑気味のソニアさんに小泉さんが答える。答えている小泉さんのほうもどこか自信なさげだ。自分から動いて喋るぬいぐるみなんて、種や仕掛けがあったとしてもちよつと怖いものだ。あれが一般的に言うぬいぐるみだとはとても思えない。

ぬいぐるみというのは私の作ったゴールデンレトリバーと白猫の編みぐるみのようにデフォルメした可愛い物のことを言うのだ。

…… 決して自慢などではない。

「そう、あちしはヌイグルミなんでちゅ。フェルト地なんでちゅ。魔法少女ミラクル☆ウサミ」略してウサミでちゅ！ こう見えても、ミナサンの先生なんでちゅ。フェルト地なんでちゅ。よろしくね」

大事なことから二度言いましたとか、魔法はともかく少女か？とか、どう見ても魔法少女のほうじゃなくってマスコットキャラのほうでしょとか、ぬいぐるみが先生だとか、色々と突っ込みどころがあるがまあそれは置いておいて。

「は？」

「あ、あれ？これは幻覚かなー？ ぼくにしか見えない幻覚が見えるのかなー？」

現実だよ、現実。

なんだろう、この色々詰め込み過ぎて飽和しちゃったような残念感。パツと見は可愛いのに、なんか喋られると残念感が増すよね。もふもふふわふわでもう少し頭身低くて、喋らなければ完璧だと思うんだけど。

三頭身で服着てて無表情であの喋り方だとそこはかかない胡散臭さがあるような？

「や、オレにも見えてんぞ」

「つーか、なんでチワワが喋ってんだよ!？」

「え!? あれってチワワなんすか!」

終里さんと澤田さんの漫才はともかく、あれが犬でないことは確かだ。

体高50センチもあるチワワなんて、それってなんて生物? いやまあ兎でも50センチもあつたら怖いけど。

そもそも兎は二足歩行をしない。

「……ミナサンはウサギってご存知でちゆか? フワフワと柔らかくて、モフモフと愛おしい生物でちゆ。あちし、それなんでちゆよ!

歌って踊って喋れるウサギのマスコツトなんでちゆ!」

フェルトってそんなに柔らかいわけでもないし、服着て二足歩行してる目の前にいる生物は少なくともその愛おしい生物ではないよね。ウサギのようななにかか、よくってゆるキャラかな。鹿角生やした某大仏ゆるキャラよりはシニールさが控えめだけれど、これもこれではかなかシニールだ。

具体的に言うとならフアーピーくらいかな。

「ちよ、ちよと待って! いったん整理させてちようだい!」

「はい、いいでちゆよ!」

「えーっと、みんなはどう思う? ぼくは歌って踊って喋れるヌイグルミとか、聞いた事ないんだけど」

花村クンがキャパシテイオーバーを起こしているようだ。とりあえず話を整理しよう。

「ゆるキャラなら聞いた事があるけど、それにしても小さすぎるよね」「ど、どうせラジコンかなんかだろ。ガキのおもちや如きで騒いでんじゃねーよ」

「や、ラジコンにしたってリアル過ぎんじゃね? おもちやってレベルじゃねーぞ」

スルーされた。悲しい。

九頭竜クンのラジコン説も十分考えられるが、超高校級のメカニックがリアルすぎると言っているし、その線も選びづらいだろう。

すっかりこちらの質問に受け答えしているし、どこかで応答をしている人がいるにしても、通信している場合の一瞬の沈黙ラゲがない。

「どうやって動いているかなど問題ではない。それより、その口ぶりからして、お前は知っているようだな。俺達がどのような状況に置かれているのかを！」

「もちろん知ってまちゆ！ あちしは、この “ 修学旅行 ” の引率の先生でちゆから！」

担任よりも、修学旅行の引率の先生の方が紹介が早いとは一体どういうこと？

教師も機械化する時代？ 最先端技術だけど機械的な習熟って子供のためになるのかな。ただでさえパソコンが普及して読み書きがおろそかになっているのに、先生まで機械化しちゃったら似たような子供が量産されそうだ。

でも最近は教師が次々と鬱になってやめてしまうなんてことが多いらしいし、応急処置かな。しかし希望ヶ峰に入りたがる教師だって多いだろうし、分からん。

とまあ、心の中でわざとらしく驚きつつ十神クンとウサミ先生の問答を見守る。

猫とか犬のヌイグルミっているのかな。いたら歓迎するのに。

鞆につけた自家製編みぐるみをそつと手で確かめ、握り込んだ。

「修学旅行……だと……？」

大学でもないのに入学早々修学旅行とかすごいね。初っ端から学校生活の楽しみの半分は消費しちゃうんだ。後に残った学校生活が詰まらなくなったりしないのだろうか。

「おい、修学旅行とはどういう意味だ？」

「教職員の引率の元で生徒さんが団体行動で旅行をする、学校生活における一大イベントでちゆね！」

本来は後にとっておくからこそ一大イベントになるんだよなあ。

「そ、そういう定義的な意味を聞いてるんじゃないやなくてさ」

「では、さっそく、楽しい修学旅行の旅に出発しまちよう！」

日向クンが引き留めたが、もう遅かった。

話を訊かず、教卓の上で先生がステッキをグルグルと回す。

そして、一面ピンク色のエフェクトが舞ったかと思うと地響きが起こり、壁や天井がまるで段ボール箱を解体するかのように、巨大なテレビの舞台を解体していくかのように開いていったのだ。

教卓と机、椅子、床はそのままに、変化は周囲に起きていた。

青い空、青い海、白い雲、白い砂浜。ウミネコの声、静寂に響き渡る波の音。

緑色の生き生きとしたヤシの木が太陽の光を遮り、周囲の空気は湿気を帯びた蒸し暑いくらいの空気に変貌していた。

そう、辺りを見回すと、すでにそこは南国の砂浜だったのだ。

「……………は？」

教室は教室でも青空教室だったんだよ！　なんてね。まったくふざけてないとやってられないよね。

皆は信じられないものを見たような目で、いや、真実信じられないものを見たのだから仕方がないが……　とにかく、皆、自分の目を、耳を、そして脳までもを疑ったように放心している。

「なんだよ、これ！」

そして我に返った1人の声で、再び混乱が始まった。

「えーつと……　あれあれあれあれあれあれえ！」

「ウ、ウソ……　だろ？」

「こ、ここはどこっすかあ!？」

「な、なんで!?　どうなってるの!？」

頭を掻き毟るようにして首を振る花村くん。絞り出したような声で声を出す左右田くん。泣き顔で鼻水まで垂らして叫ぶ澁田さん。混乱して周囲とウサミを見比べている小泉さん。

皆、それぞれの方法で現状把握をし、それぞれの方法で混乱していた。

そして無遠慮にも、そこに割り込まれるウサミ先生の声。

「みなさん！落ち着いてくださいーい！ 慌てる必要ありませんよー！ ほーら、よく見てくださいーい！ キレイな海でちゅよね……心が洗われていきまちゅよね…… 嫌な事とか……、すべて洗い流してくれまちゅよね……」

違う、そうじゃない。皆が混乱しているのはそう意味じゃない。説明もなしにこんな大掛かりなマジックみたいなことをして、驚くなどというほうが無理があるのだ。

「待て、詳細な説明をしろ！ 一体ここはどこなんだ？」

「どこって、そりゃあもちろん…… うーみーはーひろいーよねー！ 大きいよねー！ の海っ！」

微妙に違う 『海は広いよ大きいよ』 を歌いつつ辺古山さんの疑問にまたもやズレた答えを返すウサミ先生。

「う、海なのは分かりますけどお、どうして海にいますかあ!？」
「ねえ、そんなに叫んでばっかだと咽とか痛くなっちゃいまちゅよ?」
悲痛な声をあげる罪木さんに、不思議そうな顔をして話すウサミ先生。

なんの説明もなしにこんなことになってたらそりゃあ混乱もするし叫びもするってば。常識外のことが起きたから皆混乱しているのに、そこを説明されないとやっぱり不安にもなるだろう。

「だって、海とかおかしいですよ。わたくし達はついさっきまで学校にいたのに」

「安心してくだちゃい。修学旅行が始まっただけの事でちゅから!」
「だから瞬間移動したことがみんなを混乱させているわけで、ありえないことが起きてるからこうなってるの。その辺の説明はなしなのかな?」

「て言うか、どうしていきなり修学旅行!? 色々すつ飛ばしすぎでしょ!」

「そ、そうだ! 俺たちは希望ヶ峰学園に入学するために集まったんだぞ!」

ソニアさんの言葉にまたも見当違いな答えを言い、瀧田さんの疑問

で飛ばされた私の質問に日向クンが畳みかける。そして哀れ私の発言は再びスルーされるのだった。

間髪入れず叫んだ日向クンの言葉に、大きく反応したウサミ先生がぶつぶつと呟くように話を続ける。

「ああ、希望ヶ峰学園ね……なるへそね、そうでちゆか……希望ヶ峰学園のことが心残りなんでちゆね。だったら、希望ヶ峰学園の事は忘れてくだちゃーい！ その為の修学旅行でちゆからねー！」

それは、希望ヶ峰学園に入ることを楽しみにしていた皆を怒らせるのに十分な言葉だった。

「……は？」

「忘れろっつーのはどういう意味だ、コラア!?」

「おい、お前は何者なんだ？ 何を企んでいる？」

「ほわわっ？ 企むなんてとんでもない！ あちしはミナサンの為にやってるだけでちゆよ！ ミナサンが大きな “ 希望 ” を胸に成長する事を心より祈っているだけでちゆ！ だから “ この島 ” に危険は一切ありません！ ね、安心してくだちゃい！」

十神クンはいつものいいところを突くよね。相手にとって意外性のある言葉選びが上手だ。でもそれよりは先生の発言のほうだよね。

「この島？ 島って言ったの？」

「はい、ここは見るも美しい南国の島なんでちゆ。危険もないし、他人もいない。ミナサンの為だけに用意された島でちゆ」

南国の島と言えばサンスクリトバル島の悪夢が蘇る。

絶海の孤島に、訳も分からない喋るヌイグルミ。しかも他人がいなという見事な舞台設計。バトルロワイヤル的ななにかが始まるって言われても信じちやいそうだ。

「む、無人島、って事か？」

学園の権力で貸し切りにしたって言えばまだ説得力ありそうなのかな、やっぱり。

だからからかうような気持ちで先程考えた言葉を先生に向ける。

「まさか、バトルロワイヤルみたいな殺し合いが始まるってことはないよね？」

「ほわわっ！ こ、殺し合い!? めっ、めっそーもないでちゅ！ 暴力とか他人を傷つけたりとか、そういう血なまぐさい展開はこの島では厳禁でちゅ！ しかも “殺し” “だなんて、口に出すだけでおぞましいフレーズ…… きゃあ！ 怖い！”

途端に、文字通り顔を青褪めさせてウサミ先生はいやいや、と首を振るう。

その言葉を信じるのなら、現時点で分かるのは先生にそのような剣？な考えはないということだろうか。

でも、殺しのことを悍ましいだなんて言われると胸が痛む。生存競争の末に起こった出来事ならノーカウントかな？ノーカウントだよな？ノーカウントに決まってる。だって動物は皆生きるために動物を殺して食べてしまうんだもの。シマウマがライオンを返り討ちにしたって誰も咎めない。

うん、だから先生の言っていることは私には関係ない。そうじゃないといけないよね。大丈夫に決まってる。大丈夫、大丈夫……

「だったらお前の言う “修学旅行” とはなんだ？ この島で俺達に何をさせようとしている？」

「はい！ では発表したと思いますーちゅ！ ミナサンはこの島でほのぼのくと暮らしながら、仲良く絆を深めてくだちゃい！ それが『どつきどき修学旅行』のルールなのでちゅ！」

明るく快活に、と言ってもぬいぐるみなのであんまり表情が動いていないが、声だけは朗らかにウサミ先生が言った。

つまりは自己紹介と親睦を深めるためのレクリエーションの一種かな？

さすが希望ヶ峰学園だね。まさか新一年生に初っ端から旅行をプレゼントだなんて物凄く大規模だ。しかも島を貸し切りにしちゃうなんて、本当お金だけは有り余っているわけだよ。

まあ、なにも知らなければ予備学科生徒から巻き上げたお金をこんなことに使うなんて、と言えたかもしれないが今はそんな気もしな

い。

「どつきどき修学旅行…… だと……？」

警戒心剥き出しなのにいちいち驚く十神くんがなんだか愛おしくなってきたよ。

「何も起きず、誰も傷つかず、誰も苦しまず、ひたすら平和でほのぼのと希望を育て合う日々…… そんな、らーぶ、らーぶな」 どつきどき修学旅行 『こそがこの島でミナサンに与えられる課題なのでちゅー！』

「なッ！ なんだそれ!？」

「えーつと、という訳で…… 『どつきどき修学旅行』が始まりまーちゅ!!」

と、ウサミ先生が一旦締めたあとでふと横を見ると、とうとうキヤパワーバーを起こしたらしい日向くんが頭を抱え始めていた。

「はーい！ というわけでこれが必需品の電子生徒手帳でちゅー！ ミナサンにはこの手帳を使って “希望のカケラ” を集めてもらいまちゅー！」

「希望のカケラって？」

私が訊くとウサミ先生は律儀に答えてくれる。

「この島ではミナサン同士が仲良くなることで “希望のカケラ” というものが手に入っていくんでちゅよ！ そうやって希望のカケラを全て集め、満開の希望の花を咲かせることこそが、この島に来た目的なのでーちゅー！ それが終わればこの無人島生活もおちまいになって帰ることになりまちゅーらーぶ、らーぶ」

そう一通り説明を済ませてからウサミ先生が手帳を配り始めた。

「はい、狛枝さんの分でちゅー！」

「う、うん」

電子生徒手帳か。生徒手帳も機械化が進んでいるんだな。紙媒体の手帳が懐かしい。というか、この島に来た際簡単なメモ帳と日記帳は持ってきたがそれも一冊だけだ。足りない。

これは私にとっては死活問題だ。早急にスーパーマーケットに行かなければ。

「ひ、日向くんどうしたんでちゅか！」

そして、最後に手帳を渡された日向クンが崩れ落ちる。

信じられないことばかりで限界になってしまったのだろう。一昔前の私ならきつとああなっていただろう。現実に耐えきれず強制シャツトダウン。そんな風にね。

それが変わったのは誘拐されて、武器を持ち始めてからだ。ちよつとやそつとじゃもう私を怯えさせることができないと言っている。

砂浜に倒れた日向クンに近づいて、慌て始めるウサミ先生に適当な説明をする。

「きつと、いきなり南国に来ちゃったから熱中症になったんじゃないかな」

「えつと、ですけどこれは熱中症では……」

「それか知恵熱かな。考えすぎでよく分かんなくなっちゃったんだよ」

「ごごめんなさあい！ 余計なこと言っちゃいましたあ！」

同じく病人が出たことで近づいてきた罪木さんが本当のことを言おうとしていたので視線で止める。ウサミ先生に混乱しすぎでぶつ倒れたなんて説明をするには少し、周りに皆もいることだし、彼の名誉のためにもあまり言わない方がいい。からかいのネタを提供してしまうのもどうかと思うし。

「あれ、ウサミ先生は？」

「あいつならどっかいつちまったぞ」

罪木さんを宥めている間に消えていたらしい。慌てすぎだろ。

「ひとまず、これからどうするかだな」

「それじゃあ、島の調査なんてどうかな」

十神クンと七海さんが互いに意見交換し合い、ソニアさんや小泉さんの肯定の言葉もあり島の調査が決定したが、日向クンのことをどうするかで少し話し合った。

やはり、全員で起きるのを待つより手分けして先に調査をしていたほうが良いという結論になった。

「なら、私この人が起きるまで待ってるよ」

「で、ですがあ」

「大丈夫。別に病人つてわけではないんでしょ？」

最後まで罪木さんが粘ったが、皆自分の目で島の調査をしたいらしく快く了承してくれた。

「あ、でもその前に自己紹介しておくね。私は粕枝風。恐れ多くも抽選なんてものに当たってしまった。＼超高校級の幸運。＼だよ。まあ、よろしくね。あ、それと式大くん。私じゃこの人運べないから日陰に運んであげてくれるかな？」

「応、分かった」

そうして順番に自己紹介した後、皆は散り散りに島の調査へと向かって行った。

私も日向クンと一緒に木陰に腰を下ろし、ボーツと海を眺める。ただただ静かに、ザザン、ザザンと打っては返し、打っては返す波の音に耳を傾けると穏やかな潮風が耳元をくすぐっていった。

「静かだなあ」

ここの海だったら泳いでも危険ではないのかもしれない。

髪がベタつくのも関わらず、全力で潮風を浴びたい。そうすれば跳ねまくって直らないこの髪も少しは大人しくなるだろうか。

片手で届く範囲の砂を盛り上げてみたり、掘ってみたり、くだらないことをした。でも、観光地しか行ったことなかった私にはこんなに静かな海は生まれて初めてで、意味もなく感動した。

明るく照り付ける日差し。暖かい風。静かな海。

南国の空気を思いつきり吸い込んで、彼が早く目を覚ますことを願いながら、私はただ時間が過ぎるのを待つのだった。

No. 13 『楽園』―砂浜―

ブーツとしていると、日向くんが呻き声をあげながら薄く目を開けた。

それに反応して微睡んでいた私は目を開き、座り込んだまま彼の顔を覗き込む。

「あ、起きた？」

「……」

あれ、反応がない？

目を開いたまま彼がこちらを向いたが返事は返ってこない。

「ねえ、聞こえる……？」

あまりにも反応が薄いのでちゃんと私の声が届いているかも怪しい。枯れ草色のその瞳は虚空を見つめているようで、一点を見つめているようで、どこにも向けていないようで、周りが何も見えていないように思えた。

「ねえ、本当に大丈夫？」

尚も考え込むように沈黙を決め込む日向くんに一抹の不安を覚えた私は彼の頭上で手をヒラヒラと動かし、「私のこと見える？ 耳聞こえてる？」と矢継ぎ早に質問した。

「あ、あ」

ゆつくりと頷いて、咽に小骨が刺さってしまったかのような、不可解な表情をした彼は小さな声で「ここ、どこだ」と呟いた。

独り言に近いそれは頭の中の整理をするために発せられた言葉だとすぐに私は分かった。私の一挙一動に目を動かすこともなく、ただ虚空を見つめているのみでこちらを見ていないことは明らかだったからだ。

「うーん、大分参っちゃってるんだね。でもそれは私だって、他の皆だってそうだよ。だってほら、いきなりこんな変なことに巻き込まれちゃったんだし」

反応がないことを分かっているながら、そつと彼の額に手を置いてみる。

日陰にいたといつてもここは常夏の国、南国の砂浜だ。少し火照った彼の顔は熱を持ち始めていて、これでは適当にいった熱中症という嘘が本当になってしまいかもしれない。

「ねえってば、いつまでも寝てたら熱中症になっちゃうよ?」

そう言つて顔を覗き込んだとき、額に乗せていた手が振り払われ、彼は唐突に体を起こした。

「おっと…… 大丈夫?」

「…… 放つておいてくれ」

一人忙しなく周囲の観察を始めた彼に続き、私もスカートについた砂を払い、立ち上がる。

「そんな青い顔した人を放置しておく訳にはいかないよ」

溜息を吐いて、自分の顔を指さすようにすれば彼も無意識にか自分の顔に手をやっていた。そんなに青い顔をしているだろうか、と相変わらず青褪めた顔で確かめている。熱中症になりかけて赤くなったり、目が覚めたと思つたら青くなったり、まったく忙しいものだ。

「南の島だつて、言つてたよな……」

「うん、そうだね」

唐突に、日向クンが確かめるように言った。私はすぐにそれが何を指して言っているのかを理解して返事をする。

周囲の光景があれば十分確認可能だと思つたが確信の言葉が欲しいのだろう。いや、本当は否定してほしいのかもしれないが、周りばかりにも南の島に相応しい光景が広がっている。否定するにも無理があるだろう。これが舞台のセットだとも言えれば少しは安心するかもしれないが、私にそんな不毛な嘘を並べ立てる理由はない。

そもそも、彼が倒れたときだつて正直にキャパオーバーの知恵熱だろうねつて言つても良かったのだが、それではなんだか可哀想な気がしたのだ。異常事態でからかう人間なんて…… 一人思いついたがまあ、かねそんなことをする人はあんまりいないだろう。

しかし、そんなことを暴露されたと知つてしまったらきつと恥ずかしくつて死にたくなるに違いない。私だつたら恥ずかしくつて暫く皆に顔向けできない。

今回のことは嘘を吐いたとしてもすぐに嘘が嘘だとバレてしまう。無駄に希望を持たせるようなことをするより、現実を見てもらった方が良いだろう。…… って、私が言うとなんだか変な感じだな。

彼は周りにあるものを順に観察して行っているみたいだ。そうして自分を落ち着かせようとしているのかもしれない。

「ああ、そのモニターどこから電源が繋がってるか不思議だよね」

「……」

ヤシの木につけられた液晶モニターを見ているので一声かける。これは私の正直な感想だ。

「それ、あんまり近寄らない方がいいよ。ヤシの実って意外と重くて痛いんだ」

「……」

次いでふらりとヤシの木に近づこうとしたので一応注意をしておく。

勿論、体験談だ。

「私は泳ぐの得意じゃないんだよね。海は綺麗だけど、なにがいるかわからないし、やっぱり貸しプールが一番安全だよ」

目線が海、または地平線を見つめたので正直な感想を漏らす。まったく、せめて一言くらいなにか言ってくれてもいいと思うよ。

「やかましい」とかでもいいからさ。あんまり薄い反応をされちゃうとボケ甲斐もないし、なんだか寂しい。

「ん？ これってカメラだよな…… 監視カメラ？ まさか、これで俺達を監視してるのか!？」

私よりも監視カメラに夢中になるんだね、そうなんだね。悲しくなんてないよ。

「監視というよりも、私たちに危険がないように見張ってくれてるんだと思うよ。まさにライフセーバーいらすだよね！ あ、どっちにしろこの島には私たちしかいないんだっけ？」

「……」

先生、日向クンが冷たいです！ これじゃあ希望のカケラなんていつまで経っても集まらないよ！

ウサミ先生だったらこういうボケ反応してくれるんじゃないかな？

まったく、いくら混乱してるからといって無視はないんじゃないかな無視は。

「ねえ、そろそろ落ち着いてきた？ いきなり変な事に巻き込まれて、混乱するなどは言わないけどさ…… でも、まずは自己紹介くらいしておこうよ」

「自己紹介？」

ああやつと彼の口から名前を訊ける。

いつまでも自己紹介なしにやっていたら、心の声がうっかり漏れて、なんで知ってるんだって詰め寄られるかもしれないから早めに自己紹介はしておきたかった。

日向クンと七海さんはいくら探しても掲示板に乗ってないし、辺古山さんは探しても見つかりづらい。後者二人は挨拶済みで問題はなし、あとのメンバーは私が知っていてもおかしくない人ばかりだから大丈夫だが、一番の不安要素は日向クンの名前をうっかり呼んでしまわないかだった。ボロを出す前に自己紹介にこぎつけられて良かった。

「ほら、同じ新入生同士だけどまだ自己紹介してなかったよね？ よろしく、私は粕枝風。恐れ多くも抽選に当たって超高校級の幸運として招いてもらったちよつとした有名人だよ」

有名人。この言葉に反応がなければ日向クンはスレッドやネットには関係のない人物だと断定できる。

私自身は時事ネタとして今もスレッドでは有名だし、パソコンを多くやっていれば私のことはすぐ分かる。なんせ、白い髪なんていう特徴的な目印があるからね。テレビのニュースでも三回くらい映ったことがあるし、知ってる人は知っているだろう。

「なんだよ、ちよつとした有名人って」

良かった。知られてなくて。

ちよつぱり安心して息を吐く。知らないほうがいいこと、知ってほしくないことなんて、世の中には幾つもある。一人の人間に秘密の一

つや二つ、あつたつていいだろう。初対面なら尚更だ。

「今年の幸運枠に必ず選ばれるだろうって噂が立つくらいの幸運なんだよ、私は」

「……いきなり何言ってるんだ？」

「いや、冗談とかじゃないよ。希望ヶ峰学園は、全国の一般的な高校生の中から抽選で選んだ一人だけを　超高校級の幸運　として入学させているんだって。それに必ず当たると言われた女子高生。それが私ってこと。実際に当たっちゃってるしね」

暑苦しくて有名なあの人が海外に行っている和日本の気温が下がる。そんな噂と同程度の有名さといえればいいだろうか。

実際、私には　超高校級の死神　だなんていう不名誉なあだ名もあるが、それと同時にあそこまで幸運ならば希望ヶ峰に行くだろうという噂もあつた。彼に嘘は吐いてないし、意図的な漏れを作るくらい別にいいよね。

「超高校級の……幸運？」

「学園は不確定な運について研究してるみたいでさ、毎年一人だけ選ばれるんだって。見えないものの才能を見つけだすために日々向上するのがどうか？」

多分、同じく目に見えない才能である　超高校級の希望　

を見つけ出すための前段階として研究をしているのだろう。実際に　超高校級の幸運　の一人が希望になったわけだし、研究の方向性はあながち間違っていないかもしれない。

幸運という不確定な要素が才能として選ばれている。そんな学園の事情に複雑そうな、悲しそうな、愕然とするような、そんな顔をして日向くんは俯いてしまった。

「さて、これで私の自己紹介は終わり。次はキミの番だね」

ネガティブキャンペーンは現在取り扱っておりません。流石に原作の粕枝くんほど私はネガティブこじらせてるわけじゃないし、長々と自分語りをして日向くんを困らせるわけにもいかないだろう。よくあそこまで自分を卑下できるもんだと思うよ。自分のことをゴミクズと呼ぶなんて、私にはとてもできない。まあ、そこが好きだった

んだけれども…… 私はいたって普通の女子高生だからね。

ここはサクツと自己紹介を終わらせて日向クンの話を訊こう。
私が自己紹介を促すと、彼は戸惑いつつも自己紹介を始めた。

「ああ…… 俺の名前は日向創だよ」

そこで途切れる言葉に一旦間を置き、私からも口を開く。

「日向クンだね。じゃあ、ちよつと質問なんだけど、キミの才能を教えてください。他の皆のことならネットですし調べただけど、最後まで見ないうちに眩暈に襲われちゃったからキミのことは分からないんだよね」

別に私は才能に特別関心があるわけではないが、ここは口に出しておくべきだろう。でないと、彼は才能が思い出せないということの後々知ることになる。一人で悩ませるよりはちよつとしたフオローを入れてバランスを保っておくほうが良い。

「えつと、俺は…… お、おれ、は……」

口を開きかけた状態で、停止。

唾然として、みるみる青褪めていく表情を見て思わず「大丈夫？」と言う声が出たものの、青い通り越して真っ白になっていく顔に、思っていたよりもすごい衝撃を受けた。

「あ、れ……？」

日向クンが自身の体を抱きしめながら体を震わせている。カチカチと、なにか恐ろしいものを見たような表情で、知らなくていいことを知ってしまったようなその表情。いやむしろ、これは分からないことへの恐怖。古今東西、分からないことは怖いと相場が決まっている。だからこそ、ウサミ先生の不十分な説明で皆が混乱したのだし、今それと同じことがまた日向クンに起こっているのだ。

「日向クン、どうしたの？ 大丈夫？」

またぶつ倒れでもしたら大変だと近寄っておく。

そして、一番最初にやったように顔の前で手をヒラヒラ。指を一本立てて尚も振る。

「ほらほら、この指何本？」

「えつと、一本だろ？ じゃなくつて、まだ色々と、混乱してるみたい

だな…… なんか上手く思い出せないんだ」

「まあ、記憶が混乱するのも無理ないよね。落ち着いたらすぐに思い出すんじゃないかな？ だからさ、そんなに思いつめる必要ないと思うよ？」

「そう、だよな」

思いつめたように声を詰まらせる彼に 「これからもよろしくね」 と締め の言葉を告げる。そして皆に挨拶に行こうか、と提案をするまえに互いの懐から明るい電子音が鳴り響いた。

「おい、なんか鳴ったぞ?! 変な音がっ、しかもっ!」

慌てた様子で日向クンはポケットに手を突っ込み、電子生徒手帳を取り出した。

彼は不思議そうな顔で手帳を横から見たり、ひっくり返してみたりと念入りに調べている。まるで初めての物をちよいちよいと触る猫のようだ。警戒心剥き出しで恐る恐る触っているあたりがそっくり。

「な、なんだこれ？ PDAとかスマートフォンみたいな…… こ、こんな物が、どうして俺のポケットの中に入ってるんだ？」

電子生徒手帳を渡され、ポケットに入れてすぐに倒れたからか幾分か記憶が飛んでいるようだ。そんなメンタルで大丈夫か？ 一番いい日向クンを頼む…… じゃなくって説明しなくちゃね。

「さっきウサミ先生から配られたでしょって、そっか…… 日向クンはあの時から呆然自失って感じだったもんね」

「そ、そういえば、受け取った気がしないでもないけど。で、これはなんなんだ？」

そこで私が説明を始めるよりも先に背後から声があがった。

「てんてるてーん！ それは ”電子生徒手帳 ” でちゅよ!」

「うわっ！ お、お前、どこから出て来たんだ!?!」

「あ、っと、なんだ先生か」

なまじ背が低いだけに出て来るまで気づけないんだよね、ウサミ先生のことは。

ゲームみたいに出て来る時特有の効果音が鳴っているわけでも

ないし、死角から視界に入ってきて来るから心臓に悪い。

「ああ、驚かせちゃった？ だったら、ごめんなちやいでちゆ。えへへ、あちしって素直にごめんなちやいが言える子なんだー！ ……とところで、それってカツコイイよねー？ この修学旅行には欠かせない必需品だから、なくさないようにしてくださいねー！」

とりあえずウサミ先生が説明をしてくれるみたいだし、黙っておこう。ただでさえ少ないウサミ先生の出番がなくなっちゃっても困るし。それに彼女の台詞を少し聴いていたいという思いもある。可愛らしい舌足らずな口調は聴いててなんだか和む。

警戒心剥き出し状態の日向クンを見るのも、なんだか野良猫を観察しているようで微笑ましくなってきた。おもしろいよなー、日向クン。主に反応が、だけど。

「こ、この機械が？」

「ミナサンには、その電子生徒手帳を使って、”希望のカケラ”を集める事をお願いしてるんでちゆ！」

日向クンが小さく「希望のカケラ？」と疑問の声をあげると素早くウサミ先生が私たちにした説明と似たことを言った。

「あのね、この島では仲間同士で仲良くなると、”希望のカケラ”というのが手に入るんでちゆ。”希望のカケラ”は、ミナサンが仲良くなればなるほどどんどん集まっていきまちゆ。そうやって”希望のカケラ”を集めてって、満開の希望を花開かせる事こそが、この修学旅行の目的なのでーちゆ！ らーぶー！ らーぶー！」

そして、言うだけ言ってウサミ先生は満足したのか、ピンク色のエフェクトとともに姿を消していった。

「どんなマジックなんだろうね」

「いや、それよりも希望のカケラを集めろってどういうつもりなんだ？ まるでお遊び気分じゃないか」

「うーん、きつと、新入生同士の親睦を深めるためのサプライズなんだよ。流石希望ヶ峰学園だよ。やるのが大規模だ。それに、ただの旅行なら危険なことなんてないだろうし安心できると思わない？」

「そ、そうかもしれないけどさ」

警戒心が人一倍強いだけあってなかなか頑固だ。日向クンってサプライズとかはあまり好きそうじゃないね。終始混乱して終わりそうだ。そういう私も心臓に悪いからサプライズは好きじゃない。

私でサプライズと言ったら、不運なことばかり思い浮かぶのは仕方ないだろう。今の人生で起きたサプライズなんて嫌な思い出ばかりだよ。

「それに、皆の希望のカケラを全部集めたら目的達成でこの島ともオサラバらしいよ」

「それは本当か!?!」

先程から希望的観測の濃い私の意見は華麗にスルーしてくれていたが、オサラバのオサの部分で勢いよく日向クンが私の話題に食いついた。どんだけ帰りたいのこの子。

滅多に来れない南国の島なんだし、貰えるものだけ遠慮なく貰う精神で楽しもうとは思わないのだろうか。それとも、私が暢気すぎるだけなのだろうか。危機感の感覚も少し皆とはズレているのかもしれない。まあ、いろんな目にあってるんだし、このくらいの小さな不運は些末な出来事だよ。

「そこも覚えてないんだね。本当のことだよ。皆が仲良くなればこの修学旅行もお終い。ね、少しは安心した? 私たちが普通に過ごしていれば、案外簡単に帰れるかもしれないよ」

「だ、だとしてもだ。そんなことをさせる理由はなんだ? わざわざこんな島に連れて来て仲良く過ごせだなんて、意味不明すぎるだろ」

理由。理由か。確かに現時点では真実に辿り着くための証拠や証言がないわけだから分からないのは当たり前だけれど……今ある材料だけで出せる結論はやはり二つだけだな。

「ぎっさも言ったけど、これはきつと学園側からのサプライズなんだよ。だからちよつとは肩の力を抜いておこうよ。いつまでも緊張しっぱなしじゃあせつかくの旅行が台無しになっちゃうよ」

サプライズ説と、何らかの陰謀があるという説だ。もしかしたら希望ヶ峰学園クオリティなんてこともあるかもしれないし、あんまり深く考え込んでも日向クンがまた知恵熱で倒れちゃうんじゃないかな。

「ところで、日向クンは私以外の誰とも自己紹介してないよね？ 仲良くなる第一歩は自己紹介からって言うし、一度はしておいたほうがいいと思うよ」

「そりゃあ、そうかもしれないけど…… 肝心の皆はどこに行ったんだ？」

日向クンが目覚めるのをずっと待ってるわけにはいかないから手分けして島の探索に行った。嘘偽りのない真実だが今の彼には少々重い事実だろう。自分が重荷になっていることを知らされたらまずまず思いつめそうだし、ここはさつきも使った、嘘は言わないけど意図的に漏らしがある戦法で行くか。

「この島で過ごさせて言われてるけど、疑問だらけでしょ？ この島に名前はあるんだろうかとか、脱出手段は他に何かないのかとか、そもそも暮らすのに必要な食糧やはちゃんとするのかとかね」

「まあ、そうだな」

「だから今は手分けして探索してるんだよ。その生徒手帳には地図もあるし、現在いる場所がそれぞれ表示されてるみたいだからそれを追って行けばすぐに見つけられると思うよ。私も島を見て回るついでに日向クンに付き合うからさ、自己紹介行脚の旅に出かけようよ！」

おっと、難しい顔をしてらっしゃる。彼のことだからなんで私がこんなに親切にするのかとか、初対面なのにとか、疑心暗鬼にでもなっているそうだ。正直、私もなんで初対面なのにこんなに打ち解けているのかよく分からないけれど、昔からある私のミーハー魂がそうさせているのかもしれない。まったく、何度も火傷するはめになっているのに、どうしてこうも首を突っ込みたくなるんだろうね。

「どうしたの？ 日向クン。早く行こう」

「あ、ああ分かったよ」

こういうとき私が男だったら躊躇いもなく日向クンの手を引っ張っていけるんだけどな。ちよつとした触れ合いも女子同士なら簡単にできるのに、仮にも男の子相手だから遠慮しちゃうよね。

ちよいちよいと手招きをして「どつちから回ろうか」なんて話

をする。

「さて、どうする？」

「と言ってもな、こっちは広いし、空港も遠くにあるみたいだな」

実は空港まで中央の島へ行くのと同じ距離あるのだ。

ここは現実。島がそう単純に円周になっっているわけでもなく、空港は端の方にあり、逆に中央の島への橋は砂浜からほど近い場所にある。マーケットはホテルの近くにあり、マーケットから空港へも遠い。牧場は近い所にあるがとてつもなく広そうだ。ホテルの近くに森もあるみたいだし、なかなか判断し難い。

「よし、じゃあこの枝の、葉がついてる部分が倒れた方向に進むとかどう？」

「はあ？」

私だったらこっちの方法のほうが手早く済む。反対意見は求めません。日向クンが私を残念な目で見ている間に済ませちゃおう。

「いや、都合よく左右に倒れるわけないだろ」

「そいやー！」

そして拾った木の枝を勢いよく頭上に投げた。想定着地点は自分たちの少し前。楽に島を回れますように。

「ってイタア!？」

ほら見ろと言わんばかりの視線で日向クンがこちらを見つめてくるが、ちゃんと成功したのだから別にいいだろう。確かに、頭の上に落ちてくることは想定してなかったけど、もう少し前に投げたつもりだったけど、ちゃんと枝葉は私たちから見て右の方向へ向かって倒れている。

「牧場のほうからだね」

「そ、それでいいのか？」

日向クンが若干引き気味なのは気のせいだろうか。

「うん、だって幸運だからね」

「……行くか」

木の枝が思い切り脳天にぶち当たった場面を見られているせいか、なんだか哀れみの目を向けられているような気がする。いや、気がす

るだけだきつと。

静かに移動することを呟いた日向クンに、私は「う、うん」とぎこちなく返事をしながら大人しく後について行くのだった。

暫く天の導枝の向ききに向かって進み、一度中央の島へと続く橋を通り過ぎ、すぐ近くにある牧場へと私たちはやって来た。いやあ、長い道のりだった。具体的に言えば20分くらいの長い道のりだった。

情報交換ついでに他愛もないことを話しながら歩いてきたので、実際には淡々と歩くより時間はかかっている。体力も筋力もある男の子であれば走って10分くらいに縮められるかもしれないが、私には到底無理な話である。日向くんならば私よりもずっと早く移動できるだろう。あれ、私って邪魔者？

「ここが牧場みたいだね」

粗末な門の上に掛けられた木の板には、白いペンキで『USAMI CORRAL』と書かれている。

ペンキが乾く前に動かしてしまったのか、白いペンキが下に流れて少々ホラーチックな文字になっている。あれが赤いペンキだったら人間を養殖しているホラー映画な牧場に見えていたかもしれない。

今の状況を鑑みると笑えない想像だが、きちんと動物はいるので普通の牧場なのだろう。看板は多分、ウサミ先生がおつちよこちよいなだけだ。

牧場と道を分ける木の柵にはいかにも南国チックな極彩色の鳥がとまっている。黒と、オレンジ色と、黄色と、赤と……南国の鳥と言えば真つ先に浮かぶ印象の濃い鳥だ。

名前は分からないがとにかくオレンジ色が可愛いのであとで小泉さんあたりに記念撮影をお願いしよう。私はカメラなんて持ってないし、写真なら彼女に任せるのが一番だ。

あーあ、植物の無駄知識なら結構持っているが、動物に関してはあまり自信がない。珍しいならなおさらだ。

「牧場…… の割には、あんまり動物がいないな」

日向クンはそこかしこを闊歩するニワトリを見て、厩舎の中も全てニワトリであることも覗き見たようだ。

これではまるで鶏舎だ。牧場と言っても種類があるだろうが普通は牛か、あるいは羊や馬を思い浮かべるものだろう。流石にニワトリだけで牧場と言うのには無理がある。

「あーあ、バレちった!」

「またお前かつ!どこから出て来るんだよっ!」

突然背後から声があがる。それにビクリと肩を揺らした日向クンは怖い顔をしながら振り向いて、ウサミ先生に詰め寄り始めた。流石にこう何度も驚かされては怒りたくもなってくるのは共感する。

「あちしは神出鬼没なんでちゅ!この島のどこからでも出て来るシステムなんでちゅ!すべて、このマジカルステッキのご利益ですけどね!」

うーん、あのマジカルステッキ。あれをどうにも強調してくるウサミ先生が気になる。

やっぱりあれ一つに主催者権限的な何かが詰まっているのだろうか。肌身離さず持ち歩いているみたいだし、あれがないと何もできなくなってしまうのだろうか。その辺のことは想像するだけで明確な解が出ているわけではなかったたので私にも分からない。

気になることは気になるが、藪蛇だったら嫌だし、手は出さない。

「うーん…… それにしても弱りまちだね。牛さんのいない牧場なんて、日本人のいない日本代表でちゅよ」

もつといい例え話はなかったのだろうか。

「鶏肉の入ってない親子丼…… みたいなの?」

その場にいるのがニワトリだけに。

「それは違うぞ」

おっとここで代表的な台詞が聴けるとは思ってたなかった。スベること覚悟でボケてみるもんだね、うん。だからゲンナリとかシンナリとした顔でこつちを見ないでほしいんだけど。

呆れ果てた目で私を見ないで！ お願いだから！

「よーし！ こころは、あちしと、このマジカルステッキに任ちてくだ
ちやーい！」

と、私たちが視線で会話しているとウナミがなにやら恰好つけなが
らニワトリに向かってステッキを向けた。

「ちんぷい、ちんぷい！ ちんぷいぷい、ちんちんぷいぷーい！ え
いやー、牛さんになーれ!!」

「はあああああああ!!」

「はは、なんでもアリだね」

ステッキから放たれたピンク色の光が集まり、みるみるうちに影が
大きくなったと思ったらなんと牛さんのできあがりー。遺伝子組み
換えとかそんな次元じゃないぞ。

あと魔法使うときの掛け声がアウト気味だ。もっとううにかなら
なかったのかそれ。

「えっへん、大成功でちゅー!!」

すたこらさつさと、そんな効果音がつきそうなほど素早くウサミは
去って行った。いろいろとむちゃくちゃだ。

あーあ、なんてことだ。先ほどの道中にあった会話で少し落ち着き
を取り戻していたというのに、警戒心剥き出しな日向クンに逆戻りし
てしまったじゃないか。

「な、なんだよ今の！ と、鶏が牛にツ!」

「…… うーん、手品というよりは大大的なイリュージョンかもね、今
のは。多分最初から仕込みしてあったんだよ。私たちにビックリし
てほしかったのかもね。ほら、日向クン反応大きいしターゲットにさ
れちゃったんだよ」

日向クンがまた難しい顔になってる。この調子じゃあ落ち着いて
もらうのに随分時間がかかりそうだ。

「ほらほら日向クン。あっちに人がいるよ。自己紹介しなくちゃ」

「あ、ああ、そうだな」

それにしても牛はホルスタインだけか。ジャージー牛乳が飲みた
いなあ。

「よいしょ、よいしょ！」

牧場の片隅にいたのは金髪の大きなツインテールに白猫の可愛い髪飾りをして、オレンジ色の着物に緑の帯を締めた女の子だ。それに、しゃがみこんでいるので余計に小さく見える身長。とても高校生とは思えない幼さと、一生懸命指でなにかをしているその姿に日向クンは戸惑いを覚えているようだ。

「あ、ちよつといいか？ 自己紹介がまだだったよな？ 俺は日向創っていうんだけど」

彼がそう切り出すと女の子…… 西園寺さんは話しかけられてから初めて彼の存在に気付いたのか、間延びした可愛らしい声で一瞬日向クンへと顔を向けた。

「んー？ わたしはねー、西園寺日寄子っていうんだー。よいしょ、よいしょ！」

しかしすぐに興味がなくなってしまったのか、日向クンから視線を外し、再び足元の黒い物へと指を押し付け始めた。

「？」

何やってるんだ？ と疑問気な日向クンに彼女が説明しなかった分まで一応解説を挟んでおく。

「えつと、確か西園寺日寄子さんは “超高校級の日本舞踊家” って言われてるらしいね。日本舞踊界の若手で、海外なんかでもバリバリ公演をしてるんだって。しかも、西園寺さんの公演には日本舞踊では珍しいくらいに、若い客層の観客が詰めかけるんだって。ま、そのほとんどが男性客みたいだけど」

よつ、このロリコンどもめ！

着物は体の凹凸を埋めて着るものだし、平たい胸族のほうあまり調整せずにはすむからその分だけは楽かもね。いやでも、彼女の身長に合う着物は少なそうだから選ぶのは大変そうだ。ある程度折り込んでも限界があるだろうし。

「よいしょ、よいしょー！」

彼女は地面の黒い点々たちに夢中だ。こつちの言葉は多分無視してるんだろう。今更知れ渡ってることが目の前で言われたって気に

ならないんだろうね。

「なあ、さつきから何やってるんだ？」

「んー？ あのねー、潰してるんだー！」

あれって似たようなことを子供の頃に一度はするよね、多分。

程度は違えど子供は純粋な好奇心であれをやっちゃうから仕方ないが、高校生があれをしているとなると少し怖い。

彼女も悪意はない…… って断言できないところが悲しいけど多分深い意味はなく、楽しいからやってるだけなんだろう。

純粋さって残酷だよな。

「潰すって？」

「蟻タンだよー。蟻タン潰してんのー」

「…… はっ！」

あれごめん、アリさんふんじやった。なんて怖い話は置いて、一寸の虫にも五分の魂。小さい物こそ大事にしないと怖い目にあっちゃうぞ…… って教訓どっかになかったつけ。

「クスクス上手くお腹の部分を潰すとね、プチッと気持ち良い音があるんだー。おにい！一緒にやるー!？」

「や、やる訳ないだろっ！」

「なーんだ、そっかー。フン、臆病なヤツ」

実物を目の前にするとなんてギャツプだ。なんで古今東西口りつ子は黒いのが多いんだろうね。

とりあえず、なんなんだよアイツ。と恐ろしいものを見た目でこちらを向く日向クンに、「ああいうところも人気が出る理由に入るんだってさ」と言っておく。信じられないと言いたげに「はあ？」

と声を漏らし、次いで「嘘だろ」と愕然とする彼に「知らなくていい世界だよ」とフォローした。フォローになっっていないような気もするが気にしてはいけない。

「ほらほら、あっちにも人がいるんだし、自己紹介してきなよ」

確かに初っ端から濃いキャラに遭っちゃったのは災難かもしれないけど、皆が皆そうだとは限らないんだからそんなに嫌がらないでほしいんだけど。…… どうせ遅かれ早かれ自己紹介する羽目になる

んだし。

「おーい！終里さんさっきぶりー！」

自己紹介を済る日向クンに代わり、自分から無理矢理彼女に声をかけた。

「おーつす！ 狛枝ー。ところで、オメーは誰だ？」

あれ、私のことは覚えてるのかな？

「俺は初めましてだな。日向創って言うんだ」

「ふーん、日向、日向な。おつす！ オレは終里赤音ってんだ！ よろしくなッ！」

どうやら、本当に名前を覚えてるらしい。彼女は名前を覚えるのが苦手だと記憶していやはずだが、もしかして男子の名前が覚えられないのだろうか？

終里赤音さん。

彼女で視線が行く場所はズバリ、はちきれんばかりのメロンだろう。

シャツの第二ボタンまで外しているという大胆な服装にスラっとした筋肉。大きなメロンが乗った我儘ボディ。健康的な日に焼けた肌が運動が得意な活発な印象を抱かせる。しかし、口調は随分と野生的だ。粗雑な口調なのに好感が持てるのはきつとその人懐っこい笑みのお陰だろう。

「終里さんは、超高校級の体操部、って呼ばれる、スーパーアスリートなんだって。噂では、かなりの問題児らしいけど、体操に関しての実力は相当なモノらしいよ。ただし、基礎とか基本は滅茶苦茶で、オリジナル技ばかり連発してるらしくって、気分が乗ってる時はすごい演技をするけど、そうじゃない時はすぐに棄権しちゃうんだってさ」

これ、また聞きただけだと才能に胡坐をかいた物凄い嫌な人に聞こえるけど本人を見ればそんな疑問どっかに行ってしまうだろう。

なんというか、彼女は自由な感じだ。織月みたいな歪んだ自由じゃなくて、本当の意味での自由奔放というか、天衣無縫というか、自然体。そんな感じだ。

「……」

暫し、日向が何か考え込んだようにじっとしていたがその視線が胸に行っていることに気づく。

「あれ？ひよつとして…… 日向クンも男の子だねー」

「声がデカいぞ…… わざとだろそれ」

仲良くなるには多少無神経なくらいが丁度良い。ただし、用法容量はきっちり守りましょう。

セクハラ紛いな言葉なのは謝るがアレに見とれるのは仕方ない。女の私でも釘付けになっちゃうくらいだし、胸が肩こりの原因にしかならないことを知っていても少し羨ましくなるもんだ。でも堂々と見るのはちよつといただけじゃないよね？

若干気まぎれながら私たちは牧場を後にしたのだった。

最初は微妙な空気になりかけたが、私がボケ倒したり暢気に周りの状況を話しかけているうちに日向クンも諦めてくれたようだ。

呆れてみたり、驚いてみたり、警戒してみたり。本当、コロコロと表情の変わる人だと思う。言動もそうだが表情も正直過ぎて彼のいう事には一定の信用がおける。これから島で生活するにしても、彼は嘘なんか言わなそうだし、言ったとしてもすぐ見破れる自信がある。

なにかがあっても彼だけは信用できる。そんな気がした。あとは、この気持ちが見ての正直な気持ちであることを祈るばかりだ。変に先入観があるからそう思っているかもしれないし、長い付き合いになるなら確認ついでに仲良くなつたついでにいいだろう。

打算だらけの思惑だとしてもいい。いつか必ず後悔するとしてもいい。後悔なんて後からすればいい。今はただ楽しんでいたい。私だって、友達は欲しいと思うのだ。

「結構牧場は狭かったね」

「は？ あれで狭いのか？」

「うん、こんな島にあるにしては小さい気がするよ。結局、牛しかいないし」

「ふーん、そういうもんか」

日向クンの疑問も間違つてはいない。

あの後、牧場を出てからも暫く柵に囲まれた草原はあったが、きつとアレは牧場ではないだろう。結局牧場の奥の方に足を踏み入れることはなかったし、みんなも奥に行くことを無意識に避けている節がある。いや奥に行くという行為を思い当たりもしない、と言ったほうがいいだろうか。

なににせよ、教室の扉を見たときに感じた「行かなければならぬ」「義務感と似た現象だろう。ウサミ先生に言わせればそういう魔法がかかっているといったところだろうか。「奥に行つてはいけぬ」というルールが無意識下に溶け込み、島の探索を阻害しているように思う。

だからあの牧場はそんなに広くないだろう。映画のセットよろしく奥に行けば壁にぶち当たるのではないだろうか。しかしそれを確かめることはしない。口に出すこともない。

だって、そんなことをしたら目をつけられてしまうじゃないか。私が見えているかもしれないなんて疑われた日にはなにが起こるか分かったもんじゃやない。

安穩と過ごしていれば取り敢えず死ぬことはないのだから、この旅行は純粹に楽しみたい。

さて、次の目的地にもうすぐ到着する。

牧場を出てから丁度20分。

自分の黒い腕時計を確認し、歩きながら白い表紙の手帳にメモを書いていく。

砂浜から橋まで10分。橋から牧場まで10分。牧場からホテルまで20分。全て私の足で測った場合の時間なので、男子ならば、或いは先程の終里さんならもつと短縮できるだろうけれど、時間配分の物差しくらいにはなるんじゃないかと思う。

これに絵、或いは写真があればどこがどんな場所が把握するのも容易だ。どこかにいる小泉さんに写真をお願いするといいかもしれない。

「粕枝、なにやってるんだ？」

「ん？ ああ、砂浜から牧場までと、牧場からここまで来るのにかかった時間をメモしてるんだよ。修学旅行なんだし、みんなでどこかに集まるように言われたりするかもしれないからね。地図はあるけど時間は書いてなかったし、これがちよつとした物差しになったらいいなあって」

みんなが調査している場所を全部周るわけだし、私にできることはなにかをメモするぐらいなのだ。なんならメモ帳を使ってそれぞれにある物のリストを作ってもいいかもしれない。

「ああ、なるほど。ってなに言ってるんだよ！ さっさと脱出手段を見

つけて帰りたいつてのに、そんなのにのんびりしてる暇ないんじゃないか？」

「私ができる調査と言ったらメモしていくくらいしかないし、もしかしたらなにか役に立つかもしれないよ。やっておいて得はあっても損はないつて。ま、ただ単にメモしておくのが習慣になつてただけつてのもあるんだけどね」

そこまで否定されると若干落ち込む。

メモしたり、日記を書いたりするのは習慣になつてゐるから今更止められないのだ。

「細かいことは後でも書けるだろ。ほら、入るぞ」

「そうだね」

そこには大きなフェンスと門があつた。

隣から息を呑むような音がする。そこは、それくらい立派なホテルだつた。

「こいつは、凄い立派なホテルだな」

声を詰まらせながら感嘆したように日向クンがホテルの全容を見上げてゐる。奥の大きな建物には「Hotel Mirai」と銘打たれ、その手前に25メートルプールのある中庭がある。

大きなホテルの横には、小綺麗で整つたホテルとは違い、なにやら古めかしい木造の建物があるようだ。

そして一番手前、即ち門からすぐの場所には浅い水上に建てられたコテージ群がある。全体的に茶色で纏められ、どこことなくレトロなような、それでいて南国に相応しい様相をしたコテージの数を数えながらまたメモをする。

「〃 ホテル・ミライ 〃 ね。日本語みたいだけれど、ここは日本国内なのかな？ その割にはやけに南国チックだけど。沖縄にしては植物に見覚えのないものが多いし、普通に日本語から取つた名称なのか悩むところだね。けどまあ、人数分はちゃんとコテージがあるし、野宿の心配はなくなつたんだしひとまず安心かな」

寝袋生活は勘弁だからね。

「安心もなにもないだろ！ この島で暮らさなきゃいけない理由も分

からないのに。…… って言うか、なんで受け入れてんだよ！ この島で暮らす気満々じゃないか！」

「ま、とりあえずここが拠点になるのは確かだろうから、その安全性を確かめる意味でも色々見て回ったほうがよさそうだよね。」

会話のドツジボールになっている気がしないでもないが、まあいいだろう。

「それに、ここで暮らして仲良くするだけなら死ぬことなんてないだろうし……」

「……」

暗く、小さな声で呟いた言葉は怪訝な表情で考え込んでいる彼には届かず、ひっそりと消えていった。

「コテージは男女別になってるみたいだね」

入り口から見て左手に男子の、右手に女子のネームプレートが入ったコテージがあるようだ。

「って、あれ？ 私のコテージがない？」

そういえばそうだった。人数的にも女子が1人多くなってしまったからスペースがないのか。

「お前のコテージ、こっちみたいだぞ」

日向クンが入り口からすぐ手前の左手側を指差しながらそう言っている。どうやら私のコテージは一つ分はみ出して男子側にあるようだ。

このコテージの順番もメモしておこう。

「っと、ほら、プールサイドに人がいるよ。挨拶して来なよ」

「ってお前はどこ行くんだよ」

「あっちの女の子に少し頼むことがあるからちよつと行って来るよ」

そう言つてプール越しに別行動。

先ほど考えていた通り、小泉さんに各所の写真撮影をお願いしようと思つたのだ。そうして古びた館の前でなにやら調べている小泉さんに声をかける。

「〃 超高校級のマネージャー 〃 式大猫丸とは、ワシのことじゃああああああ!!」

プール越しに式大クンの大声が聞こえる。小泉さんはそれにビクリと反応して、声をかける前に怪訝そうな顔で振り向いた。

「あ、アンタ…… えつと、風ちゃんだっけ？」

「はろ、小泉さん。ちょっとお願いがあるんだけどいいかな？」

大声を出す式大クンを見て呆れた顔をしながら小泉さんが「お願い？」と復唱する。

「実はそれぞれの場所についてのメモをしてるんだけど、絵心はななくてさ。一人じゃ限界があるからそれぞれの場所の写真を撮ってもらえると助かるんだ。メモだけじゃどんなものがあつたか分からないから……」

「ああ、それなら任せてよ！ バッチリ写真撮っておくから」

「よろしくね。あ、あとあの人の自己紹介も聴いてあげてくれるかな？」

「あー、アイツつて砂浜で蹲つてた人？ 起きたんだ」

情けないわねなんか言いながら二人でプールサイドまで近づいていく。その間にもあの古びた館はホテルの旧館であるらしいとか、赤やオレンジ色の可愛い花が咲いた花壇の写真を見せて貰つたりと和気藹々と話しつつ、大声で挨拶し続ける式大と、それに合わせて応援部さながらに頑張っている日向クンに近づいていく。

さすが男の子だからか、どちらも元気のいい大声だ。ビリビリと空気が振動していくぐらいの声に少し辟易としながら、小泉さんを連れて二人と合流する。

「ぞ、そんな連呼しなくても忘れないって!」

バリトンボイスであそこまで大きな声を出されると、近くで和太鼓を叩いているような物凄い振動がお腹を叩くよね。

あそこに日本一熱い男を投入したら背景に炎が見えそうなほど盛り上がりそうだけれど、それは想像だけに留めておく。

「ガツハツハツハ！ 委細承知したぞお!!」

「や、日向クン盛り上がってるね。その式大クンは “超高校級のマネージャー” って呼ばれてるんだって、凄いよね」

「超高校級のマネージャー？ やる方じゃなくてマネージャーなのか？ ただのマネージャーなのか？」

暑苦しいと呟いた小泉さんの言葉は聴かなかったことにしているものごとく解説を挟む。

「ただのではないね。彼は色んな学校を転々としながら、様々な運動部でマネージャーとして活躍してきたんだ。例えば、無名の不良高のラグビー部を全国大会で優勝させたり、廃部寸前だった野球部を救って、これまた全国大会優勝まで導いたりね。噂では、アメリカリーグで活躍中の日本人投手も彼にトレーニングを頼みに来るらしいとか？」

「ガーツハツハツハ！」

流石式大クン。照れ笑いも豪快だ。

日向クンは複雑そうな顔で見つめている。絶対この人自身が選手やればいいのについて思ってるよコレ。

でも監督と同じで、ある程度そのスポーツができなくちゃ外国のマネージャーは務まらないから、きっと選手になっても凄いんじゃないかと思う。

「それに、女子に雑用を押し付けてマネージャーやらしているのは日本くらいだよ。マネージャーって言うのは雑用をする人じゃなくって、選手の体調管理とか選手が全力を出せるようにするのが仕事だからね」

そう言うってから一步下がる。

式大クンはどうやらもう一度砂浜に行くらしいのでそれを見送る。超高校級の体操選手である終里さんが気になるようだ。探しに行くらしい。

「さて、話は終わったよね？ ほらほら、そのアンタ。砂浜でぶっ倒

れた人でしょ？ 自己紹介まだだったんだから早く済ませちやおうよ」

「あ、ああ、そうだな」

はきはきと喋る小泉さんに日向クンはたじたじだ。もしかして、日向クンって気の強い女の子に圧倒されちゃうような性分なのかな。先ほど式大クンと話していたときは違い、弱々しいそんな様子に小泉さんがムツとして捲し立てる。

「あのさあ、男なんだからもっとしっかりしてよね。こういうときに女子を守るのが男子の役目でしょ？ アンタが守られてどうすんのよ」

「う、そ、そうだな」

チラとこちらを見る日向に頑張れという意味で手を振っておく。

助けを求めるような目で見られても私はなにもできないよ。

「で、私の自己紹介でしょ？ …… えーっと、私の名前は小泉真昼だよ。ま、これから色々よろしくね」

自己紹介を手慣れたようにこなす彼女に目を白黒とさせながら日向クンの視線は胸元に。 …… 胸元のカメラに向かっている。

私のようにメモ帳を携帯していたら新聞部にも見えないこともないし、才能についての説明も一緒にしておく。

「小泉さんは、超高校級の写真家」って呼ばれる将来有望なカメラマンなんだよ。私は写真に詳しくないからあんまり分からないけど、色んな賞をたくさん受賞してる若手写真家なんだって。その中でも、特に人物写真が得意らしいね。さつきはそれぞれの場所の風景写真を撮って貰うようにお願いしたんだよ」

「どういうことだ？」

「私がメモを取ってるのは話したでしょ？ 字だけじゃ分かりづらいし、私に絵心なんてないからね。小泉さんにそれぞれの場所の写真を撮って貰うようにお願いしたんだよ」

もし私のメモが使われるとして、それを完成させるのに私だけで尽力したのと二人で完成させたのでは信憑性の違いが生まれる。

特に超高校級の死神という不名誉なあだ名を知る人物にとって私

は危険人物だ。そんな私が作成したりリストなんて信憑性が薄い物。破り捨てられたつておかしくないし、一人で作ったんじや虚偽のリストだったとしても誰にも分からない。

アリバイのない人がその日一日家にいたと証言しても証拠能力を持たないように、何かがあつたとき私だけで作ったのでは証拠能力を持つことができない。

どうせなら役に立つ物に仕上げたい。それが私の思いだ。この島には警戒心の強い人物も多くいるし、協力者がいればよっぽどのことがない限り否定されることもない。

合理的な行動、合理的な言動。全て他人のためじゃない。私のための保身に成り得る行動ばかり。

日向クンはどうして他人のためにこうして行動しているのかと疑問に思うだろうが、その実私は私が可愛いだけなのだ。自分が死なないためには人の役に立ち、利用価値があると思わせることが一番いい。こうした打算的な意図ばかりなのにある程度信用してくれている日向クンにちよつぱり罪悪感が募る。

しかし私はこのやり方を変えることができない。自分のため以外に他人を思いやることなんてできない。言わないことがあるのに騙されたというのは、騙される方が悪いのだ。

他人が他人のために行動するとき、ソイツは自分のために行動しているのだ。

「で、そつちの自己紹介はまだ？」

小泉さんの声で説明と一緒にトリップした思考が正常に戻る。靄のような黒い感情を奥に仕舞い込み、一時的に封印する。

ちよつと考えると悪い風に考えてしまうあたり、私もかなりのネガティブだ。口に出して卑下はしないけれど、私も粕枝…… ということなのだろうか。

「俺は日向創だよ。えつと、こちらこそ、よろしくな」

「ふーん、日向くんね…… 残念だけど、もう私の中では『頼りない日向くん』でインプットされたから。これから取り返すの大変だよー。もつと男らしく頑張りなさいよねっ！」

気の強い委員長タイプである彼女には、日向クンは情けない男に見えるらしい。

「ま、頑張れ」

「他人事すぎるだろ……」

そしてホテルに入ろうとしたところで丁度入れ違いになるように誰かが出て来た。

黒いスーツに低い身長。女子に黄色い声で称賛されそうなベビーフェイス。九頭龍クンだった。

「あ、おい！」

「んだ、テメーは。気安く話かけてんじゃねーぞ、ボケ。なんだ、そのツラあー！ 文句あんのかよ、テメー！」

さつさと擦れ違おうとする九頭龍クンに日向クンが慌てて声をかけるが、いきなり彼は喧嘩腰で不機嫌そうに表情を歪めている。良い気分だったのが一瞬で霧散したようなその表情に慌てて私が仲裁に入った。

「お、落ち着いてよ、九頭龍クン。私たちは自己紹介に来ただけなんだからさ」

「ああ？ 自己紹介だ？」

疑問気な表情。意外と彼も感情の起伏が分かりやすいな。いつも怒っているように見えるがあれはただ単に口が悪いだけだ。

「ほら、彼との自己紹介がまだだったでしょ？」

「フン、九頭龍冬彦だ。言っておくがテメーらと馴れ合う気はねえからな」

そう言っただけでイライラとしたようにその場で待ってくれている。

日向クンは童顔のわりに態度が悪いとか思ってるな、これは。先に釘を刺しておかないと余計なことを言いそうさ。

「あのね、日向クン。九頭龍クンってね、あの九頭龍組の跡取りと目されている高校生なんだよ」

「えっ？ 九頭龍組って、まさか!？」

一般人でも知っているほど有名なグループだ。もう一つ、一般人にも有名なのと言ったら巨大な十神財閥だが、そこは後回しするとし

て。

「さすがに、名前くらいは聴いたことあるよね。構成員は軽く3万を
超えるって言われてる国内最大の指定暴力団…… 九頭龍組だよ。
つまり、彼は ” 超高校級の極道 ” なんだよ」

極道相手にコンプレックスを指摘するのは自殺行為だ。だから私
は小声であえて真正面を見つめながら親指と人差し指で銃を形作り、
日向クンに忠告を送る。

「ちなみに、彼にとってアレはコンプレックスで禁句らしいから気を
付けた方がいいよ。…… 指が何本あっても……」

銃の形にした指で日向クンと私の頭同士を計り、身長の違いの比喩を
表しながら笑顔で「バーンッ」と言いながら日向クンの頭に突き合わ
せる。

「…… 命が幾つあっても足りないかもね？」

目が合う。すぐさま逸らされる。

「…… 狛枝、きつとお前は俺の命の恩人だな」

やっぱり思ってたんだ。そして言おうとしてたんだ。

意外と日向クンも口が悪いというか、毒舌だよね。

「あははっ、感謝してくれてもいいんだよ？」

「…… やっぱりやめた」

「え、なんで!？」

「おい、コラ、終わったんならさっさとどっか行けや、ボケ」

再び急かし始めた九頭龍クンに日向クンが簡単な自己紹介をして
別れた。

そして今度こそホテル内に入る。

見たこともない観葉植物に古いゲーム機、くつろげる木のソファー
に木のテーブル。受付には誰もおらず、カメラのモニターが静かに佇
んでいるだけ。

受付の前には辺古山さんが、ゲーム機の前には七海さんがいるよう
だ。七海さんは九頭龍クンが出て行ったことも、勿論私たちがホテル
内に入ったことにも気が付いていない様子だ。

少々古いが昔の大人気シューティングゲームが備え付けられているようで、それに夢中になって取り組んでいる。

時折船を漕いでいるというのに、遠目で分かるほど高スコアを叩き出し続けているのは流石と言わべきか。

周囲をゆっくり見渡して感嘆している様子の日向クンに笑いかけつつ感想を漏らす。

「うん、外観もそうだったけど、中も立派だよね。清潔感もあるし、ほら、上にレストランもあるみたいだよ」

「もし、これが普通の旅行だったら、俺もそんな風に笑顔になってたところだけだな…… と言うか、どうしてこのホテルには俺達以外に誰もいないんだ。」

「仕方ないよ。無人島だからね」

まあ、その割には大衆向けのホテルがあつたり、牧場があつたり不思議だよね。

これでトランプが広がつてたり、グラスが出されてたり、調理室に温かい鍋なんかがあつたらかの有名なメアリー・セレスト号みたいだと言えるんだけど、現在進行形で自分たち新入生がいるからそういった寂びれた雰囲気はない。窓も大きいし、あるのはひたすら明るい解放感のみだ。

「あの、ちよつといいか?」

早速日向クンも自己紹介に行っているし、まずはそれに従おう。

「何か用か?」

「いや、ちよつと自己紹介がしたいんだけど、いいかな?」

日向クンは辺古山さんの鋭い刃物のような凜とした雰囲気にも物怖じせず、果敢に話に行っている。

初対面だとその赤い目も相まってか怖がられてしまいそうな辺古山さんだけれど、誠実で優しい人だからすぐに打ち解けられるだろう。

「自己紹介か。分かった、構わないぞ」

「俺は日向創つて言うんだ。よろしく」

「私の名前は辺古山^{ペコ}ペコ^マという。こちらこそ、よろしく頼むぞ」

本当、ギャップのある名前だと思う。日向クンも初めて聞いたから
か目に見えて驚いているようだ。

「この凛々しい彼女にはね、〃 超高校級の剣道家 〃 と呼ばれる才能があるんだよ。辺古山ペコさん。可愛らしい名前からは想像もできないけど、大人の男性でも殆ど敵う人がいないほどの剣道の達人らしいね」

段位もなくって、大会とかにもあまり出ていないらしいが、実力は確かなはずだ。公式大会なんかには出ないけれど知られている。そんな知る人ぞ知る剣道家が彼女だ。それ故に剣道に精通した人物でも知っていたりいかなかったり、まちまちだ。ネットの掲示板に載っていないのもそういう要因が色々絡まってのことだろう。

「砂浜ぶりだね、辺古山さん」

「ああ」

単純なやりとりが心地良い。辺古山さんの距離の取り方はなんだから安心できていいよね。

「それにしても、なかなかいいところだよね、このホテル。人数分のコテージもあるみたいだし、修学旅行みたいでわくわくするよね！あ、修学旅行か」

「ふむ、あのウサギの言う通りになるとしたら、確かに私たちは同じ島で共同生活を行うことになるのだろうか」

彼女の視線は日向クンに向けられている。てつきり私に向かつて話していると思っていたのか、それに気づいた日向クンは間の抜けたような声を漏らしながらも返事をした。

「え？ ああ、うん、そうみたいだな」

「男女が共に暮らす為には互いの理解が必要不可欠だ。断じて良からぬ気を起こさぬようにな。私も、仲間を斬り捨てるような真似はしたくない」

わざと竹刀袋に手をかけ、顔を険しくする辺古山さんに日向クンは慌てて手を左右に振りながら後ろに一歩下がった。完全に斬り捨てられると思っている顔だ。おっかなびっくり竹刀袋を見つめながら制止を意味するポーズで固まっている。

「き、斬り捨てるって、背中のはそれは竹刀だよな？」

「ゆえに斬り捨てるのは不可能だが、打ち所が悪ければ無事では済まぬ。いや、打ち所が良ければ……かな」

私も頭がち割るのだったらできるよ。ま、冗談だけど。冗談にならない冗談だけど。

「まあ、日向クンなら大丈夫そうだよ。草食系、とは違うけど、臆病だから手を出す度胸なんて持ち合わせてないと思うよ？」

「そうか、なら安心できるな」

「おい、どういう意味だ！」

訳知り顔で頷く辺古山さんにうんうんと頷いていると、不満顔の日向クンから文句が飛ぶ。

笑顔でもう一度深く頷き、頭の上にぴよこんと手を当てウサギ耳を表す。

「そのまんまだけど？　ね、ウサミ先生よりウサギっぽいんじゃない？」

当然、奪われたメモ張で頭をはたかれた。



「ほら、日向クン。彼女との自己紹介もまだだったでしょ？」

「あ、ああそうだな」

平たいメモ帳だったからそんなに痛くはなかったが、精神的にはかなりキタ。しかも電子生徒手帳から妙な快音が響いたので希望の力ケラ二つ目ゲットである。解せぬ。

「あ、ちよつといいかな？　自己紹介させて欲しいんだけど」
「……」

やはり七海さんはレトロゲームに夢中のようにだ。本人は少々眠そうにしているのに手は淀みなく動いているのが凄い。待っていてもいいんだけど、それだと日が暮れちやいそうだからここは気づいて

もらわないとね。

「おーい、七海さん？」

わざとらしく口元に手を当て、メガホンのようにして大きな声を出す。

その声で視線をチラとだけ動かした彼女は私がいることに気が付いてくれたらしい。よかった。あの武大クンの声でも起きなかった子だから気づかれないかと思ってたよ。

「あつ、ごめんね…… ちよつとゲームに夢中になってた…… かもしれない」

「待っててもずつと夢中になってそうだからね…… 途中でごめんね七海さん」

「ううん、大丈夫…… だと思う」

ちよつとばかり不安を煽る語尾だ。さては七海さん、無意識のSっ子だな!?

私がふざけて変なポーズをしている間に七海さんがゲーム機を見つめ、手を動かしたままに自己紹介を始める。

「えーつと、自己紹介だよね？うん、分かった…… 七海千秋です。〃超高校級のゲーマー〃 ーです。趣味はゲームです。オールジャンルでイケます。…… よろしくお願いします」

と、七海さんは私のとときと全く同じ自己紹介をしたのだ。

もしかしたら自己紹介のときはこの文句を言おうと決めているのかもかもしれない。

「俺は日向創だ。よろしくな」

「…………… うん、よろしくね」

「なんか会話のテンポが悪いな」

彼女の返事は酷くゆっくりとしている。それもひとえに手を動かさず、ゲームをしながら話しているからである。

しかし、ゲームをしながら見向きもせず淡々と喋る。ミスの一つもしていないのだから大した並列思考力である。それに比べれば多少反応が遅れるくらい些末なことだ。

彼女、ウミガメのスープとかもゲームだしできないかな？ 勘のい

い彼女と遊べれば楽しそうだ。

「ゲームをやりながらだし、ちゃんと返事できるだけでも凄いなと思うんだけど」

「て言うよりね…………… 私って自分の中で喋ることをまとめてからでないよ、ちゃんと喋れない性分なんだよね。頭の中でテキストが固まってからでないよ、上手く話せないっていうか…… 特に初対面の人相手だとそうなんだ。ま、慣れてくればもう少し早くなると思うけど」

人見知りだったりすると初対面の人とは上手く喋れないし、そんな感じなんだろう。どんな会話をすれば楽しいか、どんなものが嫌いなのか、それが分からないとなかなか話題も決めづらいしね。

「ふあゝあ、眠くなっちゃった」

おっと、七海さんから鼻提灯とよだれが。そのままゲーム機の前で寝てしまいそうだったので一応、別れ際にティッシュを渡しておいた。使ってくれるといいのだが。いや、使う前に寝てしまうかもしれない。ま、いつか。

二階に上がってすぐに見えたのはかなり広々とした空間に立ち並ぶテーブル群と、開放的な大きな窓だ。

私の貧弱な語彙力ではどうしようもないが、海の家のような雰囲気のままより高級に、豪華にしたような。超高級ホテルの様相をそのまま南国チックにしたような…… そんな雰囲気のところだった。

「ここは、ホテルのレストランか」

階段に上がってすぐに日向クンが言う。

「下にもそういう看板があったから間違いなさそうだね。いや、それにしても宴会でもできそうな広さだね。いいよね、こういう雰囲気。南国らしく解放感もあるし」

「解放感？ 島に閉じ込められてるのにか？」

クローズドサークルであることは変わらないけれど、こども規模が大きいとそういう実感もあんまりないな。やっぱり太陽が見えて、安全が保障されてるからだろうか。

「でも建物の中にずっと軟禁されるよりはマシじゃないかな？ 太陽が見えるのと見えないのとじゃ随分気持ち的にも違うよね」

「お前は暢気すぎるんだよ……」

真剣に悩んでいる日向クンには悪いが、私はそんなに構えていてもどうにもならないと思っっている。安全が保障されているうちに遊び倒しておかないと後悔するかもね。

アリがキリギリスを羨ましがったみたいに、キリギリスがアリみたいにしていればと後悔したように、隣の芝は青いし、未来は常に暗中模索だ。今現在を気楽に過ごせば一番いいのではないだろうか。

これはあくまで私の考えでしかないから、押し付けるつもりは毛頭ないんだけどね。

「ま、いいや。先に皆との自己紹介を終わらせないとね。ほら、あそこ」に話をしてる二人がいるよ」

そう言っ指さした先から聞こえて来た言葉は、なかなか際どい言葉だった。

「そうなんです…… 毒で腫れて大変なのですよ。だから、お口で毒を吸い出してくれるとですね」

凄い顔だ。コック帽とエプロンに似た制服を着た、小太りの男の子が金髪の美女相手になにやら鼻血でも垂らしそうな卑猥な顔で話しかけている。

「はあ、毒…… ですか？」

その会話にちよつと顔を曇らせた日向クンだったが、自己紹介に慣れてきたのか進んで話しかけに行っただので、私も便乗して二人に話しかける。

「な、なあ、ちよつといいか？」

「こんにちは。ほら、二人ともこの人との自己紹介はしてないでしょ？」

横から入ったためか男の子の方から「うおつと、ジャマが入ったか」という小声が聞こえたがスルー。

「どうも、こんにちは」

「こ、こんにちは。日向創です。よろしく。」

「やあ、君はニューフェイスくんだね？　ぼくの名前は花村輝々だよ。はなむらつてる巷では、超高校級の料理人、”なんて呼ばれてるけど、”超高校級のシェフ、”と呼んで貰えるかな？　その方がほら、アーバンな香りがするでしょ？　ンフフ、よろしくねー」

女の子が丁寧に挨拶をし、それに続いて、日向クン。そして花村クンが挨拶をする。

アーバン。都会的な。分からなくて調べた昔が懐かしいね。

彼、花村輝々の髪は癖つ毛のあるロカビリー風のリーゼントで、横方向に流すようにきつちりと揃えられている。頭には小さくちよこんとコック帽子が乗っている。

料理人として髪を隠していないのはいかなものかと多少思うところがあるが、超高校級と名の付く彼のことなのだから料理に髪の毛が混入することは億が一にもありえないことだろう。

服装は赤色のコックタイを締めた料理人の服に、円の中に大きく「ピ」の文字が入った赤いギャルソンエプロン。エプロンの端には彼が超一流の料理人である証の三ツ星バッジがついている。

男子にしては高いテノール声が特徴的だ。

「あ、そういえば自己紹介がまだでしたね？　遅れてしまってますみません！　わたくしは、ソニア・ネヴァー・マインドと申します。」

「ヴォセリック王国、”というヨーロッパの小国から留学生としてやってきました。色々とご迷惑をおかけすると思いますが、今後ともよろしくお願い致します」

今度は花村クンの正面にいた女の子が挨拶を返してくる。

彼女は女子なら誰もが羨む陶器のような真っ白な肌をして、宝石のような、空か海の色をぎゅっと閉じ込めたような青い瞳。照明の下でなくとも光って見えそうな見事な金髪に黒い高級そうなりボン。制服のスカートも短すぎず、長すぎず丁度良い長さでいて気品すら感じる皺一つない服装……

「こ、こちらこそ、よろしくお願いします」

日向クンが思わず畏まってしまうのも頷ける、金髪美少女だった。「目を奪われちゃったかな？　それも無理ないかもしれないね。ソニ

アさんは “ 超高校級の王女 ” と呼ばれる、本物の王女様だからね」

本来ならば同じクラスってだけでも名誉だ。

花村クンからの視線は華麗にスルーして日向クンの方へ逃げつつ彼女の話を訊く。ナチュラルに近くても彼女に見惚れている今の日向クンは邪険にしないだろう。

あ、できればもう少し右に来て欲しいんだよね。そうすれば日向クンを盾に私は花村クンから見えなくなるからさ。身長？ 日向クンの方が9cmも大きいんだから大丈夫だよ。

「あの、不謹慎かもしれないですけど、実はわたくしは少々嬉しいのです」

「え？ 嬉しいって、なにが？」

今は日向クンの自己紹介タイムだから私が余計な口を挟むわけにもいかない。でもだからと言って花村クンからのセクハラ紛いな話題を楽しむのもちよつと嫌だ。猥談は男子は男子、女子は女子で嗜むのが一番だからね。

「わたくしは、自分の国では同年代で対等の友人なんて、一人もおりませんでしたから…… だから、こういう風にみなさんで集まって、何かをするということがとても新鮮で…… 褒めて遣わします」

「褒めて遣わし？ あ、ありがとう」

外国から来てこれだけ喋れるのも凄いけど、少し日本語に怪しいところがあつたよね。この年で30ヶ国以上の言語が操れるというのも凄いが、それを考えるとやっぱり日本語って覚えるのに難易度が高いのかな。

「ちよいちよい、お三方さん。さつそくボクは仲間はずれコースかな？」

「いや、そういう訳じゃないけど」

嫌な予感がするんだよね。前世の記憶的意味でも第六感的な意味でも。花村クンの話はあんまり訊いちやいけない感じがする。精神的に大ダメージを受けそうだ。

……

猥談さえなければ喜んでお話しするんだけどねー。

「うーんと、そうだね、レストランを調べるなんて花村クンらしいよね。やっぱり超高校級のシエフとして気になったのかな？」

「ソッフ、気にならないと言ったら、ウソになるよね。そして、ぼくはウソつきになりたくないんだよ。だから正直に言っちゃうとね……うん、なかなか気に入ってるよね。ぼくのホームである港区のアーバンなムードもいいけどこういう田舎っぽい雰囲気も素敵だね。ソッフソッフ！」

鼻に抜けるような笑い方だけれどちつとも嫌味がない。でもどこか胡散臭い。うん、これが花村クンか。

「なあ、花村ってさ……」

「洗練されてるって？ まいったなー！ やっぱりわかっちゃうかー！」

「いや、そうじゃなくって、全然不安そうじゃないよな？」

トリップしかけた花村クンの言動を日向クンが引き留める。その表情はやはり曇ったままで、心中の不安を如実に表している。皆と話していても、なんだかんだで彼の不安は燻ぶったまま解消されてはいないのだ。

だけれど、そんな日向クンにソッフと得意げに近づいた花村クンは爽やかな笑顔で言う。

「不安って？ 何を不安になる必要があるの？ むしろ嬉しいくらいなのよ」

「嬉しいって、どうしてだよ」

不貞腐れたような顔をする日向クンに、顔をグググイッと近づけた花村クンが真面目な顔をしたかと思うと、次の瞬間にはだらしなく表情を崩していた。

「真面目な話をするね…… ぼくは意外に辺古山さんあたりのガードが薄いと睨んでいるんだよね。君はどう思う？」

「…… は？」

ほわい？

思考停止。それが今まさに日向クンに起きている現象だった。

「恐らく黒いティーバックだよ。その点についてはどう思う？ さ

あ、膝を突き合わせて話し合おうじゃないか。さあさあさあさあさあ！」

私は遠い目をして外を眺める。あー、空が青い。空が青いというくらい自然にエロネタを混ぜて来るのは彼の通常運転かな？

そして、呆れたような目をしてから日向クンが実に賢明な判断をした。

「いや、遠慮しておく」

しかし構わず花村クンは続ける

「それ以外では、またもや意外に思われるかもしれないけど、案外そのソニアさんもチョロイ気がしてるんだよね」

いやいやいや、本人を目の前に何を言い出すんだこいつは。

「ほら、王女つてのは非常識つて相場が決まってるでしょ？」

そこは純真無垢つて言つてあげなよ。それか天真爛漫。もしくは天衣無縫。

「たとえば、下半身が毒で腫れて大変だから、口で吸いだしてくれとお願いしてみたり」

おまわりさんこいつです。

「…… あの、なんのお話ですか？」

「いやあ、その話は後ほどじっくりと！」

「…… もし見かけたら全力で止めようね」

日向クンもうんうん頷いている。良かった。日向クンはそっち側じゃなくて。

女子が二人もいる場所でそういう話をするのは称賛に値するほど勇敢なことだけれど、それは蛮勇と言うのだよ花村クン。

「でもここだけの話。そこにいる狛枝さんはちよーつと手ごわそうだよね。小手先だけじゃ攻略はできなさそうだよ。でも彼女、意外にオレンジのハイレグ……」

「そこまでだよ！」

なんでこいつ私の下着まで言い当てられるんだよ！ しかも好きな色まで！ 誰得だよ！

スカートだから、鉄パイプ常備のためのホルダーを上の方に付けな

いといけないんだよ。ちゃんとメリットがあるから……って、なにを動揺してるんだ。

まったく、頬が熱い。これじゃあ本当のことだつてバレバレじゃないか！ 落ち着けー私。落ち着けー。

でも、一発くらい平手打ちしてもいいよね？ いや、だめだ。花村クンのことだ。それすらもネタにしてなんか言つてきそうさ。例えば、平手打ちで左頬を叩くのは求婚の意味だとか。

日本と大分常識の違いがあるソニアさんがいるとなんだか冗談にならなくなりそうさ。

「とにかく、そんな妄想を色々と繰り広げていると、この島の暮らしが楽しみで仕方ないんだよね。料理も恋も情熱が一番大事だからねー。ンフフフフ！」

でも料理の腕は確かなんだよね。

楽しみなのがちょっと悔しく感じるのは乙女心故にか。

ああもう、この修学旅行に来てからは振り回され過ぎて私が私じゃないみたいだ。なんで、なんでこんなに振り回されてるのに嫌じゃないんだらう。昔の学友とでさえこんなに早く会話が弾むようにならなかったのに。

慣れている、のか？なにに？分からない。

言いようのない不思議な心地を感じながら、私は日向クンと共にその場を後にした。

No. 13 『楽園』―商店―

ホテルから約10分。次の場所に到着である。

そこはとてつもなく大きな建物だった。しかし「Rocket punch Market」と大きく書かれた外観を見るのもそこそこに、スーパーマーケットの中へさっさと入って行ってしまった日向クンを追いかける。

「日向クン、待ってってば！」

彼もどうやら各所を周るのに慣れてきたようで―― ついでに私の扱いにも慣れてしまったようだがともかく、あまり外観を気にしないでいるみたいだ。外観なんてどうせ何度も見ることになるのだからとも思うが、それでも一々気にするのは私の気性故である。

外観にぶら下がっている看板の下を通らないようにしたり、駐車場から車が飛び出して来ないかを確認したり、その場所に大きな危険がないかを調べることが習慣づいてしまって、人がいないと分かっても、安全だと知っていても、どうにも肩から力が抜けない。

「先に行っちゃおうし……」

一人不貞腐れながら中に入ると、そこには日本のホームセンターさながらの光景が広がっていた。

入り口付近にはスーパーマーケットらしく豊富な食糧がこれでもかというくらい並んでいる。一番手前にはアメリカサイズの特大大コカコーラが鎮座し、ここが日本以外の南国であることを表している。

あの大きさのコーラを暴発させるのには一体幾つのメントスが必要になるのか、実験してみたい気もするがそこは抑える。私がそんなことをしたら大惨事にしかならない。最低でもこのマーケットを大幅に掃除する羽目になることは分かり切っているのでやめておく。

日向クンなら馬鹿正直にメントスココーラをやってくれるような気もするが、そそのかすのはやめておこう。やるとしたら反応が面白いような瀧田さんか左右田クンになるだろうけど、その話は後だ。

食料品の陳列された正面とは違い、奥の方にはサーフボードなどの海水浴品。寝間着や薄着などの服飾品もあるし、様々な種類のカー

ペットや簡単な家具、更にはなぜかミリタリーグッズまでも充実し、玩具類や調理器具まである。

ミリタリーグッズの本格さはデリンジャー型の水鉄砲やライフルのようなモデルガンがあることから分かるだろう。そんなアクティブに遊ぶ人がいるかは謎だけど。

極端な刃物こそ見当たらないが山登りなどに使う便利グッズなどもある辺り、ここにはなんでもあるのではないかと勘違いしてしまうほどだ。

少なくとも、生活するうえで必要なものは最低限揃えられるし、趣味道具まで充実しているからこの修学旅行中は思いつきり楽しめそうだ。

本を読みたくても、あまり種類がないのが少々不満だがそこはレジャー系で遊べというウサミ先生からのお達しだろうか。

「へえ、食料も生活用品も問題ないし、大きな刃物も扱ってないみたいだし……ウサミ先生の言う通り安全でほのぼのとした生活ができそうだね」

「刃物がないのは当たり前だろ？」

「ほら、調理器具コーナーがあるのに包丁はないんだよ。傷つけ合いをさせるつもりはないって、あの言葉には信用がおけるよね」

実際には調理器具コーナーにカタログがあつて、流し読みをした限りではそこで刃物の購入もできるみたいだったが、それは日向クンに教えない方がいいだろう。安全性が云々って書いてあつたから危険はないんだろうし、余計な混乱を招くよりは最初から気づかないフリをしてスルーしたほうがいい。

無料のカタログを幾つかパーカーのポケットに仕舞い、今度は食糧品コーナーの缶詰を手にとってみる。

「賞味期限も随分と先だし、食中毒になつたりはしないかな」

揃えられている食品を片っ端から調べてみても、不気味なほどに賞味期限の時期が同じだ。まるで全て同じ日に作つたかのような状態。

底知れない気持ち悪さがあるが、食べるのには問題ないだろう。これで食中毒にでもなつたらウサミ先生で遊んでやる。

「でも、食糧品だって本当に食えるものとは限らないだろ。毒とか仕込まれてたらどうするんだ？」

「……日向クンって警戒心強いよね。大丈夫だよ、もしウサミ先生がなにか考えていたとしても、そんな面白くないことはしないって」「はあ？面白くないってなんだよ」

おっと失言。

「例えばさ、何人かを誘拐してロシアアイさせるようなシチュエーションの映画があるでしょ？」

「いきなりなんだよ」

ウサミ先生がそういう思惑をするような人……人？まあ、そういう人じゃないって結論から証明をしていくのって案外大変だよ。結論が初めに分かかっていて、そこから今までの証拠や例え話なんかで徐々に証明していく。全部推測の域を出ることはないけれど、説得力くらいはある程度生まれられるだろう。

「ほら、そういう映画の黒幕って大体お互いに潰しあってる姿を見て楽しむような外道っていうのが王道でしょ？キミが言ってるみたいに、食料品なんか細工して、一網打尽にしちゃうことなんて普通はないよね。一気にやるとしても、皆がバラバラになっちゃ意味がないし、それに……一気に殺すつもりならウサミ先生が出て来た辺りで多分終わってるよ」

最後の方は暗い声を出しつつ、首を斬るように人差し指で表現するのが説得力（物理）のコツである。

多少恐怖心に囚われてくれたほうが現在どれだけ平和なのか、より大きな安心感となって返っていくだろう。最悪の想像があれば今が最上だと気が付ける。そして肩の力が抜けるはず。多分。

少なくとも私は比べる対象があったほうが安心できる。

それに、ウソは言っていない。

ウサミ先生が気づかぬうちに背後に立ってるなんてもう何度も体験したことだ。

そして、あのマジカルステッキ。あれで教室が舞台のセットみたいに崩れて南国に辿り着いたし、鶏は牛に変えられた。あんな訳の分か

らない技術を持っているのだから最初に集まったとき、一気に始末してしまうことだってできた。なのになかった。

別に思惑があるのか、それとも本当に危害を加えるつもりがないのか。私は後者だと知っているが日向クンは知らない。ならばその可能性を仄めかすだけで十分だ。

疑い深い彼のことだからそれでも疑惑は晴れないだろう。だけれど、その可能性を知っていてももらえるだけで随分と違うと思う。

ぐっと生唾をのみ込むような音を立てて彼の喉が動く。想像したのか、心なしか顔が青い。あれ、驚かしすぎちゃったかな？

「あれ？ …… 日向クン？」

「……」

とうとう俯いてしまった。逆効果だったかもしれない。

「あはは、ごめん驚かせすぎちゃったぶらあ!？」

脳天を一撃だった。



わりと痛かった。女相手にも容赦ない。

いや、しかしそれだけ仲良くなったと考えればイイかも……？

「変なこと考えてないか？」

「や、やだなあ。そんなことないよ。それにほら！ この島は無人島なんだから周りの目も気にしないで済むし、思いつきり羽を伸ばしてもいいと思うんだよね！」

苦しい言い訳である。これは酷い。

「だ、だからその無人島つてのが…… うっ!!」

「どうしたの？ …… ああ、罪木さんか」

罪木さんからの熱い視線が、日向クンを捉えて離さないと言わんばかりに注がれている。

彼女はもうやら話しかけるタイミングが分からずに尻込みしてい

るみたいだね。

「つみき……？」

「……」

日向クンは初めて聞く名前に少し戸惑ったようだが、それが彼女の名前だとすぐに気が付いたようで自己紹介をしに近づいて行った。

「あ、ああ、あのう！ふえ、ぐ、ぐ、ごめんなさい！」

「え？」

近づいて行った日向クンに対して目を泳がせていた彼女はおろおろと首を振り、目に涙を溜めて、ついには泣き出してしまった。

彼、身長高いしガタイもいいからね。ちよつと彼女には怖かったのかもしれない。もしくは緊張のしすぎか。ともあれ、女の子が泣いてしまったのはいけない。

「罪木さん、そんなに泣かないで。大丈夫、ちゃんと聴いてるからね。落ち着いてからゆっくり。ほら、日向クンも自己紹介しよう」

彼女との会話は初対面のパニック^Pトーク^Tアクション^Aで少し慣れたからどうにかなるかな？　まずは優しく穏やかな声で、ゆっくり染み込むように、罪木さんがちゃんと聴いてることを確認しながら落ち着いてもらう。

興奮していると支離滅裂になって、トリップしちゃうからこっちの声が届きにくくなっちゃうんだよねえ。

「ああ、俺は日向創っていうんだ。よろしく」

日向クンは大分自己紹介にも慣れたみたい。流れるように言ったね。

本当はこのくらい現状にも早く慣れて欲しいのだけれど、日向クンにもゆっくり慣れてもらうしかないかなあ。

「う、うゆう。狛枝さん、ありがとうございます……　はい、日向さんですねえ。私は罪木蜜柑です。えつと、えつと、本当に心から何卒よろしく願いますう。」

「私とも、改めてよろしくしてくれると嬉しいな？」

「は、はい！　わわ、私なんかでよければあ！……　うゆう、では、あの、日向さん……」

今度は驚かないように注意しつつ握手を求めると、慌てた様子で弱弱しく握ってくれた。

うん、ちよつと大変だけれど安定の可愛さである。それから日向クンのほうを向いて、何か話題を探るように目を泳がせて指をちよんと合わせた。

「えつとですね…… その…… えと…… えとえとえとえとお……」

目がとんでもないくらいに泳いで、グレースケールのようにみるみる顔が青ざめていく。あ、これダメなやつだ。

「うゆう、き、緊張しすぎて…… 頭が真っ白になっちゃいましたあ……」
せ、せつかく自己紹介の後の話題を5000パターンくらい用意しておいたのにい！ うう、ごめんなさあい！」

5000パターン…… ニュースの話とか時事ネタとかかな？
それとも、罪木さんの才能から考えるに医療関係の話題だろうか。話のタネがどうであれ、5000パターンも考えられるのは凄いことだ
と思うけど。

「そうだ日向クン。木陰とはいえ倒れてたんだから罪木さんに診てもらおうよ」

「はわわあ、そうですねえ。お体は大事にしないといけませんから……
…… 気分が悪いとか、そういうのはありませんかあ？」
「……？」

ああそうか、日向クンは彼女の才能を知らなかったんだっけ？
それなら分からないのも無理ないね。今まで話題にできなかったのにいきなり診てもらったらなんて言っても困るだけだ。

日向クンの表情をそう私は解釈したわけだが、どうやら罪木さんは
そももいかなかったようだ。

「あ、あの？ …… あ、そうですね。私なんかを視界に入れちゃつたら気分も悪くなっちゃいますよねえっ、ごめんなさあい！ そういうつもりじゃないんですよお！ 本当に本当にごめんなさあい！」
「あ、いや、違うんだ！ だから泣くなつて！」

慌て始めててんやわんやする2人を少し眺め、謝り倒す罪木ちゃん

が泣きながら去ってしまおうとしたのを手を取って引き留める。

「ちよつと待って。日向くんはただ、罪木さんの才能のことをまだ知らないから分からなかっただけだと思うよ。別にキミを見て困ったわけじゃない」

「うう、本当ですかあ？」

上目遣いで怯えたままの罪木さんが絞り出したような声をあげる。

両手を頭に被せて及び腰になった罪木さんが丁度いい位置にいたので頭を撫でてみた。「ひうつ」と怯えたままだけけれど落ち着きはしたようだ。日向くんがすかさず彼女に声をかける。

「ああ、だからさ、罪木の才能訊かせてくれないか？」

「はいい…… わ、私は ” 超高校級の保健委員 ” ですう。ですから、島の探索をしているときも日向さんの体調が心配だったんです…… でも、もう大丈夫みたいですすねえ。えへへ」

にへらと怯えた顔がほぐれて彼女の笑顔が露わになる。眉が下がり困ったような、それでいて弱ったような笑顔はとても儂いものに見える。

ちゃんと自己紹介もできてるし、彼女相手に、しかも初対面のわりには結構会話が續いてるんじゃないかな？

「罪木さんは超高校級の名前通り、ただの保健委員ではないよ。ちゃんと医療学校に通ってて、この歳でもう実力は確かなんだって。医者卵ってやつだね。日向くんも、怪我をしたら彼女に声をかけたほうがいいよ。私も応急処置くらいはできるけど、彼女は本職さんだからね」

病院育ちで学ぶことといえば医療関係だったけれど、跡取りとかそういう問題が出ることもなかったし、あの病院は火事で燃えてしまつて今は廃墟になってるから、もう二度と私が医療を学ぶことはないだろう。応急処置はできるけれど、彼女のほうが安全なのは確かだからね。

「えへっ、えへへ…… ! あっ! っ、ごめんなさい! いきなり笑ったりして! だ、だつてえ、仕方ないじゃないですかあ。久しぶりに友達ができて、褒められたのが嬉しくて…… あっ、まだ友

達って認めて貰えてなかった！ 凶々しいこと言っでごめんなさい！ 許してくださいあい！」

「大丈夫、私はもう罪木さんのこと友達だって思ってるよ。ね、日向クン？ …… ね？」

「いや、うっ、そう…… だな」

出会ったばかりなのに、とでも言いたそうな日向クンを笑顔のまま見つめていると、折れたように肯定の言葉を吐き出した。ここでそんなことを言うのは空気が読めないからね。しょうがないね。

「ふゆう、よかったあ。…… 友達、えへ、えへへ」

可愛いなあこの子。

「おい狛枝。…… そろそろ」

お互いにだらしなく笑いあっているときに日向クンから次を促す声がかかった。隣にいる私への小声だったので、嬉しきでトリップしてしまっている罪木さんには聴こえなかったようだ。

確かに、1人に時間を割いているわけにはいかない。日向クンは全員と自己紹介をしなければいけないのだ。

「罪木さん。もしよかったら今度ゆつくり遊ぼうね」

「へ、こ、今度ですかあ？」

「今は日向クンの自己紹介が優先になっちゃうからさ。あっちにも人がいるみたいだし、また会おうね」

ちよつと強引だったかもしれないけれど、彼女は今度があることに喜んでいようだ。

そうして小指を絡めるとピロリン、と軽快な音が3人の電子生徒手帳から鳴った。

日向クンと罪木さんは自己紹介をしたからともかく、私もか。これで罪木さんとのカケラは2つ。2つまではある程度親しくなったら簡単に集まるのかもしれない。

これがアイランドモードで、もし平和に過ごせたなら…… きつとすぐに仲良くなれる気がするな。まだまだこれからがどうなるかなんて分からないけれど、そういう未来があってもいいのかもしれない。

というより、本当にコロシアイ修学旅行になるとは限らないし悩むだけ無駄かな。来年のことを言うと鬼が笑うなら、未来のことなんて言ってたらモノクマに大笑いされそう。それはちよつといやだ。

「ああ、罪木。またな」

「はわっ、はわわわわあー！」

彼女がトリップをしている間にその場を後にした。



「ちらっ、ちらっ」

先程から私たちの様子を伺っている彼女に日向クンが気づき、商品棚の向こう側を覗き見る。そこにはかくれんぼの最中に発見されてしまった子供のように「見つかってしまった」とでもいうような、しかし喜びでいっぱいハイテンションの女の子が声をあげた。

「こんにちらっー！ どなたかなー!？」

「え、えっと、俺は日向創って言うんだけど」

テンションの高い子は今回初めてだからか、先程自己紹介した相手が罪木さんだったことも相まって温度差についていけないみたいだ。

「もしもーし、なんかテンション低いっすねー！ だいじよぶかなー？ 風っちゃんもなんで黙ってるのー？」

「ほら、まずは日向クンの自己紹介が優先かなって」

「あつ、そうだよね！ うんうん、まずは自己紹介からいくつすよー！

……コホン。漣田唯吹の漣に、漣田唯吹の田に、漣田唯吹の唯に、

漣田唯吹の吹で……漣田唯吹でーす！

秋山漣の漣に、田井中律の田に、平沢唯の唯に、琴吹紬の吹で、漣田唯吹ちゃんですー！

超高校級の軽音楽部に相応しい名前だよね！ 初めて聞いたときは自分の耳を疑ったけど、面白い自己紹介だよ。こういう自己紹介を

初対面でできる胆力が凄いね。

「はいっ、自己紹介終わり！そんなことよりこのスーパーに注目っす！」

親指と人差し指を開いて商品棚を指し示す滯田さん。そこには相変わらず様々な食品が並んでいる。

「ハンバーグにラーメンにチリビーンズに、ソーセージにパスタに…… それにメロンもありますなあ。これならアメリカ人も中国人もメキシコ人も、ドイツ人もイタリア人も…… 夕張市民も満足だねっ！」

「あの、滯田さん？」

トリップしちやつてる。さっきの罪木さんとは別のトリップの仕方をしちやつてるよ。

日向クンは喋る間もない滯田さんのマシンガントークに一步引いてしまっている。

「うわーっ、興奮してきたー！ 品揃えの多さにめっさ興奮してきちゃったー！ しかも、興奮したらお腹すいてきちゃったー！ じ、自分で自分がわかりません…… どうして興奮するとおなかが減るのか…… きやはは、人体の不思議ってヤツっすねー！」

うん、私も滯田さんのことが良く分からないよ……

実際に目にするとなかなか圧倒的だ。さっき砂浜で自己紹介をしたときはここまでテンション高くはなかったし、やっぱりお腹空いてるのかな？

「…… えつとね、この、なんか凄い子は ” 超高校級の軽音楽部

” って呼ばれてるんだ。前は女子高校生からなる超人気ガールズバンドでギターを担当していたらしいんだよね。彼女たちが発表した放課後ティー、じゃなくって、『放課後ボヨヨンアワー』はミリオンヒットにもなったらしいよ。」

危ない危ない。また失言するところだった。

「なんか…… どっかで聞いたことのある設定だな」

「それは違うからー！」

日向クン、それ以上いけない！言っちゃだめだから！ストップス

トップ!

「……でも、方向性の違いとかで濬田さんだけ脱退したらしくて、今はソロで活動しているらしいね」

彼女の歌を一度でも聴いたことがあるならまあ、色々と察しがつくだろうと思う。こんなに明るい子なのに、めっちゃくちや暗くてホラーな歌ばかりなんだもん。人気アイドルの歌とかと比べると好き嫌いが別れてしまうのも仕方ない。

「方向性の違い?」

「気になるっすか!」

「わっ!?! 聞こえたのか!?!」

お腹の空きすぎで色々とトリップしていた濬田さんが、嬉々としてこちらを向いた。あまりにいきなりなことだったので日向クンが吃驚して一歩下がる。

今まで後ろ向きでわいわいやっていたのがフクロウのように突然上半身だけ捻って見てきたので驚くのも無理はないと思う。

「だってー、唯吹ってミュージシャンですから! シューベルトとかバッハとかエジソンとかゴッホとか、ペレとかセナみたいな……イカした音楽家ですから!」

彼女の曲はね、うん。イカレタの間違いじゃないかな? 少なくとも私はそういうホラー系の歌い方嫌いじゃないけど、大体の人は苦手だと思うよ。

「ブルーラム、翼をもぎ取る」もそうだけどこの世界、ダウンナー系が多すぎてビックリするよ。「暗い日曜日」みたいな。あと後半音楽家じゃないからね。

「耳が高性能なのは当たり前って意味だろうけど、後半の名前……まるつきり音楽家じゃなかったぞ」

「エジソンは発明家だし、ゴッホは画家だし、ペレはサッカーでセナはF1だし、最初の二つ意外全然違うよね」

いいのか、それで。

「てへりん、こまけーことは気にしねーっす!」

「粕枝、なんでそんなに知ってるんだよ」

私は多趣味だからね。見るのだけは好きなんだ。その場所に行つて楽しんだりはできないけど。

サーキットなんかに行つたら大惨事だし、美術展は……安全だけれど大手だと事件に巻き込まれたりするね。人質にされたり、幸運だと並ばずに見れたりするけれど不運が怖いからあんまり行きたくないな。本か何かで見るのが一番だ。

この巻き込まれ具合、隠館厄介も真つ青だね。

「さて、行くか」

「ん、じゃあ次は空港かな」

「空港行くつすか？　じゃあ唯吹はもうしばらくここにいるんでお別れつすね！」

大まかに商品のカテゴリなどをメモしたあと、私たちはスーパーマーケットを後にした。

30分後にやつとついたのは金網のフェンスに囲まれた大きな空港だ。

しかし道路側からは飛行機を見ることができず、海に向かって伸びる滑走路だけが見えるのみとなっている。飛行機はどうやら中に入らないと見れないようだ。

「飛行機、あればいいね」

「不吉なこと言うなよ……」

中の大きなホールには飛行場側が全面ガラス張りになっていて、大きく開けたようなデザインだ。

飛行機もほど近い所に数機体あり、飛行機が好きな人はここから写真を撮るのもいいかもしれない。生憎と私には乗り物の良さが分からないが、飛行機マニアなんて人がこの光景を見たら感動しただろう。

右手側には誰も知れぬ荷物がずっとグルグルと回っていて、正面の天井からは「Welcome to Paradise」と書

かれた横幕が垂れ下がっている。

私は荷物が気になったのでそちらに寄ってみることにした。

「なんだ、ちゃんとあるんじゃないか。なあ、ひよつとしたらあの飛行機でこの島から帰れるんじゃないか？ …… ってあれ？」

荷物は降ろすこともできるようで、中を覗くこともできそうだなにせ、鍵がかかっているのだから。なんて不用心な。

「あー、そりゃ無理だな。故障だったら、まだなんとかなるんだけどよオ…… ありやー、ハリボテだからな」

「…… ハリボテ？」

「エンジンとかまるごと抜き取られてんだよ。だからどうしようもねーって」

後ろの方で日向クンと左右田クンの会話が無事に始まったようだ。私がいれば左右田クンが話しかけてくれない可能性もあったから離れていて正解か。

おっと、このトランクに入っているのはメダル、かな？ ウサミ先生のデフォルメされた顔が刻まれている。

それがクローバー柄の財布と一緒に三十枚も入っている。なにやらチケットのようなものまで入っているし。こちらもウサミ先生の顔がプリントされている。おでかけチケットとな？ なるほど、これはウサミ先生からのプレゼントだろうか。

しかし、四葉のクローバーが刺繍された財布とか、私に対する皮肉かなにかか？

「見つかったちやいまちたー！」

「つわ、なんだ、ウサミ先生か」

音もなく足元にいるのは怖いんだってば。

「これはなに？」

とりあえずメダルにはウサミ先生の顔が入ってるわけだし、本人に訊いてみよう。

「ラツキーでちゆね！ さすが狛枝さんでちゆね！」

「ふうん…… 私に対する皮肉かなにかなのかな？ それ」

「そ、そういうわけで言ったんじゃないでちゆよ!? あとでミナサン

と一緒に宝探しゲームをしようとしていたんでちゅ。このメダルとチケットはその景品でちゅね。お財布はおまけでちゅ」

一気にテンションが下がったせいか、かなりきつい言い方になってしまった。でも本心だから撤回はしないでおく。二人で謝りあうのもなんだか変だし。

ウサミ先生の言葉を信じるならばレクリエーションの一環で宝探しを企画していたようだな。でもメダルはなんでだろう？スーパーマーケットには値段なんて書かれた商品はなかった気がするけれど。

「このメダルは？」

「ミナサンには一日の始まりにメダル10枚がプレゼントされることになっていまちゅ！ だから狛枝さんは一足先にいろんなものが買えるようになってたんでちゅね。」

そういえば電子生徒手帳に入ってる修学旅行のしおりって項目は読んでなかったな。あとで日向クンと一緒に確認してみようか。

それと、一日メダル10枚なんてルールは初耳だな。前の記憶にはこんなものないし、省かれたところなのか、それとも所謂一つのバタフライエフェクトってやつなのか。

「食品類や生活用品はは無料で提供するつもりなのでちゅけど、娯楽用品はそのメダルで支払ってもらいまちゅ。大体の物はメダル1枚で購入できるのでーっても良心価格なんでちゅよ！ メダルをほどよく使ってミナサンと仲良くあそんでくだちゃいね。らーぶらーぶ」

「あれ、もう終わり？」

言いたいことだけ言つて、いなくなっちゃった。

判断はつかないけれど、迂闊に家具を揃えることができなくなってしまう。これは考えようによっては今後動きづらくなる可能性もあるからよく考えて使わないと。

「あ、おい、狛枝！ ちょっといいいか？」

「はーい、なにか向日クン？」

「あぎやあああああ？」

荷物の中身だけ抜き取り、パーカーのポケットに入れる。それから

トランクケースを元通りに戻して再び荷物の流れに戻しておく。

それらの作業を素早く終わらせ、日向クンと左右田クンの元に駆け寄った。案の定左右田クンは私の姿を見るなり数歩後ろに下がって悲鳴を上げる。

日向クンはそんな左右田クンの反応に困惑しているようだが今はまだ知ってほしくない。左右田クンは予想がついていたから別になんとも思わないけれど、日向クンに怖がられるのはなんか嫌だ。

まだ、なんとなく彼は私を嫌うんじゃないか、怖がるんじゃないかという意識が抜けない。もっと仲良くなれば信じられるようになれるかもしれないけれど、今はそんな気はしない。

だから左右田クンに喋られたらまずいのだ。

「あ、左右田クンと自己紹介したんだね。どうだった？ 飛行機」

「話訊かないでなにやってたんだよ…… なんかエンジンなんか抜き取られて動かせないらしいぞ」

「お、おま、おま、おまえー！」

私の顔を指さしたままぶるぶると震えている彼は左右田そうだ和一かずいちクン。

伸ばせば目元まで隠れる黒いニット帽を被っていて、顔の左側に小さな三つ編みをしていると派手なピンク色の髪が特徴的だ。右耳にはプラス。左耳にはマイナスが彫られたネジのようなピアスをしている。三白眼で鋭い目つき。口元から見えるギザ歯からチャライイメージがあるが本人は小心者の気がある。黄色と黒色の蛍光色のツナギを着ていて、その才能は “ 超高校級のメカニック ” だ。

「彼の才能はもう訊いたよね？ ” 超高校級のメカニック ” その名前の通り機械類にはめっっぽう強いらしいね。その左右田クンが動かせないって言ってたのなら、やっぱり無理なんだろうね。空の脱出路はこれで使えないことが分かっちゃったってことだ」

わなわなと手を震わす左右田クンをスルーして日向クンに説明しておく。もう聴いているかもしれないけれど一応だ。

今の事実をメモしつつ、先程あった荷物の出来事とウサミ先生の言葉も書いておく。多分後々全体に言われることだろうがこれも念のためだ。

「たどえ飛行機が使えてもなあ！ オメーがいるんなら使わねえよ！」

「まあ、そうしたほうが無難かもね？ なるほど、左右田クンはやっぱり私のこと知ってるんだ」

「うっせ、うーっせ！ あっち行け！」

こりやまた随分と嫌われちゃったもんだな。

言葉のまま死神って言われなかっただけマシかもしれない。

「粕枝、お前一体……」

ほら、もう疑いの目を向けて来ちやつてるじゃないか。せめて二日くらいは友好的にしてたかったけど、ちよつとそれも怪しいかな。

「幸運の幸運たる所以ってやつだよ。私ったらちよつとした有名人だからね。でも今は秘密。別に私がなにかしたわけじゃないしね。ほら、次行こうよ」

「…… そうか。 そうだな」

少し微妙な空気になってしまった。左右田クンのせいだとは言いたくないけれど、やつぱり爆弾投下してくれたのには変わりないからちよつと恨むよ。だからと言ってなにかするわけじゃないけど。

「そこで止まれ。命が惜しいならそれ以上近寄るな。」

「は？」

次の自己紹介の相手は厨二病チックな制服を着た田中クンだ。彼に関しては同じノリになればある程度話が通じるので難解だけれど結構楽しい。彼のハムスターたちは可愛いしね。

「フツ、下がらぬか。良かろう…… その勇気だけは認めるとしよう」

意味が分からないといった風貌でそのまま歩み寄って行った日向クンに田中クンが鼻で笑って足を肩幅に開き、腕組みをする。中々様になったポーズだ。自然にやっているあたり、かなり手慣れている。

「あの、自己紹介がしたいんだけど…… 俺は日向創だ。よろしく」

「ククク、俺様の呼び名を訊きたいか？ ほとんど無謀とも言えるその勇気…… だが、嫌いではない。その勇気を讃えて我が名を聞かせよう！ 貴様の人生の中でも忘れられぬ名前になるはずだ！」

田中クンは捲し立てていくように生まれ持ったそのバリトンボイスを駆使して口上を述べる。

「俺様は田中眼蛇夢……覚えておくがいい。いずれ、世界の全てを支配する男の名だ」

彼の名前つて物凄いかかしく聴こえるけど、実はすごい縁起のいい名前だったりするんだよね。正直変な名前であることには変わらないんだけど。でも口上を述べる彼は格好良く感じるんだよね。やっぱり記憶の中のイメージがあるからだろうか。

「さて、今度は俺様が問おう。貴様は誰のマスターだ？」

「は？」

「答えよ、貴様が契約した種族はなんだ？」

これ初対面じゃ分からないでしょ。彼の才能を知らなければ答えられない質問だよね。

「は？ なんだよ契約って？」

「さっさと答えろ！ だが、その頃には貴様は海の藻屑となっているぞ！」

「じゃあ、答えないほうがいいじゃないか！」

文字通り押し問答のようになってきたので私が間に入るしかないね。ここは、そう、ノリよく行くしかないよね！

「キミのためにお手本を見せてあげようか。…… 私がが契約せし種族は地獄より来たりし番犬と、遠い星より来たる白き猫神。それが私の仲魔よ…… 既にどちらも故郷へ帰ってしまったが、今も仮初の姿を地上に残して行った故に、私の呼びかけには答えてくれるはずだ…… なんてね」

「…… ぬいぐるみ？」

鞆につけていたゴールデンレトリバーと白猫の編みぐるみを日向クンの顔に押し付けて言えば、呆けたように彼はぽつりと呟いた。

「つまり、田中クンは動物を飼ったことがあるかどうかを訊いてるんだね。私の場合はゴールデンレトリバーと白猫の雑種だよ。もう何年も前にお別れしちゃったけど」

そしてその後手の平を顔の横で開いて笑顔で翻訳した言葉と言

う。

日向クンには微妙な反応をされたが、田中クンへはいい印象を残せたみたいでなによりだ。

「動物？ いや、飼ったことがある動物なんて、小学生の時に学校で配られたオカヤドカリくらい……」

「昆虫ではないかッ！ ハッ！ 貴様の魔力はせいぜい5だ！ このゴミめ！」

クトウルフ神話だったら魔力5もあればいろいろできるよね。なんて、今は全然関係ないか。田中クンはフェアリーファンタジーとか、ワイバーンクエストの魔力のことを言ってるんだろうし。

「ゴ、ゴミって」

「フン、ゴミをゴミと呼んで何が悪い！ ゴミ風情が俺様と対等な口を利くな！ 俺様を誰だと思ってる！ ” 制圧せし氷の霸王

” と呼ばれた田中眼蛇夢だぞッ！」

「ちよ、ちよつと待て！ 出てる！ なんか変なの出てるぞ！」

変なのとは酷いね。

田中クンの長いストールの中から四匹のハムスターがもそもそと這い出し、それぞれに思い思いのポーズをとっている。まるで示し合わせたかのような登場の仕方だ。

「我が身を寢床にして邪悪を飼い慣らす…… これぞ秘技 ” 田中キングダム ” だ！」

「さすがは ” 超高校級の飼育委員 ” だね。まるで決めてあったかのようなタイミングだよ」

日向クンはもうなんというか、絶句している。目まぐるしく事が動いているせいでついていけないみたいだ。

これじゃあまたいつキャパシテイオーバーを起こすか分からないね。気を付けておかないと。

「破壊神暗黒四天王が一角、 ” 蜃気楼の金鷹 ” ジャンPが言っているぞ。あまり俺様達を怒らせるな…… とな。こいつらは手加減に慣れていないのだ。フハッ、フハハハハハッ！」

とか言ってるはずのジャンPちゃんは、田中クンの組んだ腕の上で

寝入っちゃってますけどね。でも可愛いから許せる。

ぐーすか寝てるハムスターが体を丸めて腕の合間に潜り込んでいるのを見るとなんか色々微笑ましいよね。

「えっと、彼って変わってるけど、飼育委員としてはかなり凄いらしいよ。どんな動物でも手懐けちゃうし、絶滅危惧種の繁殖に成功したこともあるんだって。噂では動物と会話できるとか?」

動物と会話するってどんな感じなんだろう。もやもやとしたイメージが流れて来るのかな。それともはつきりと分かるのかな。一度は体験してみたいところだけれど、私が体験するしたら大往生したあとだろうね。残念。

そのままハムスターの相手をし始めた田中クンに、日向クンが投げやり気味な自己紹介をしてその場から離れた。

「あ、そうだ日向クン。生徒手帳のしおりを確認しておこうよ」「しおり?」

「ほら、これ。この島でのルールが決められてるみたいだよ」

私もすっかり見るのを忘れていたから、自分の生徒手帳を操作して日向クンと一緒に見てみることにした。

しおりの項目を開くと、ウサミ先生のドット絵と絵日記のような背景が広がり、そこに可愛らしい文字で5つのルールが記載されている。遊び心か何かだろうか。

修学旅行のしおり

ルールその1

この島では過度の暴力は禁止です。

みんなで平和にほのぼのと暮らしてくださいね。

ルールその2

お互いを思いやって仲良く生活し、

“希望のカケラ”を集めていきましょう。

ルールその3

ポイ捨てや自然破壊はいけませんよ。

この島の豊かな自然と共存共栄しましょう。

ルールその4

引率の先生が生徒達に直接干渉する事はありません。ただし規則違反があった場合は別です。

ルールその5

一日の始まりに十枚のメダルが配られます。

食品と生活用品以外はメダルで購入しましょう。

万引きはいけませんよ。規則違反に該当します。

「この島には危険なんてないひたすら平和でほのぼのとした日々、ね。最初にウサミ先生が言ってた通りだね。これを信じるのなら普通の修学旅行と一緒にいたいだし」

本当に平和で安全なら確かに楽園だね。私にとっては、だけど。

まあ、感覚としては拉致されているのとそんなに変わらないし、警戒してる日向クンが一番正しいのかもね。

「だから、あいつの言うことは信じられるって？ 俺たちは無理矢理連れて来られたんだぞ！」

「そう悲観的にならずに、もっと希望を持って物事を見た方がいいと思うよ？ 希望的観測っていうのは、人間が作り出した素晴らしい考え方なんだし」

勿論、自分への皮肉込みだ。

希望的観測で何度も痛い目に遭っているし、これは私には該当しない考え方だね。だから日向クンに向けて言ってるわけだけけど。

「さて、次の場所までには時間がかかるだろうし、休憩してから行こうか」

「…… ああ」

なにやら考え込んでソファーに座った日向クンは、ガラス越しの飛行機を見つめながら視線を上あげた。どうあっても動かないそれを見てちよつと落ち込んでいるのかもしれない。

その辺にあった自動販売機を生徒手帳を使い、飲み物を購入して片

方を日向クンに渡す。

コイン投入口がないからどうしようかと迷ったが、適当に生徒手帳をかざしてみたらいきなりビンゴだった。こんなところで幸運を使いたくはないが、意図的に使えることはあれど、使わない選択肢は存在しないし制御もできないので仕方ない。

飲み物は一応受け取ってもらえたが彼は黙ったまま空を眺めている。まだ混乱したりこんがらがって分からないこともあるだろうし、考えを整理する間に話しかけても迷惑になるだけだろう。

だから私は黙ってその隣に座ったまま過ごすことにした。

私達は長い時間をかけ、再び別の島へと繋がる橋の前に来ていた。車が二台通れそうなほど大きな木製の橋は、海を挟んだ小さな島への道筋を繋いでいる。

なぜこんなにも大きな橋なのか気になるが、腐食もしておらず、新しくできたかのようにピカピカな橋なので、渡る途中で海に真つ逆さまなんてことはないだろう。大きな幸運が来た後などの、よつぽどの不運がなければ私だって堂々とこの橋を渡ることができると予想できる。

「このはしわたるべからず……」

「いきなりなんだ、そんな看板どこにもないぞ？」

一休さんを思い出してか、日向クンが疑問気な表情でこちらを見る。それに私は海の方を見やりながら答えを返した。

「いや、こんな大きな橋だけどきすがに端っこを歩いたら海に落ちそうで危ないよねってことだよ。南国だし、危険な魚なんかいたら怖いでしょ」

橋の欄干が思ったよりも低く、間隔も広いので滑り落ちることもあるだろう。

「それを言うなら、この先が安全なのかも分からないだろ」

ごもつともである。知らない場所なのだからないがあるかも分からない。だが、それを調べるために先に進まなければならぬ。とんだ矛盾もあつたもんだな。

「それもそうだね。手帳を見る限り、この先に最後の1人がいるみたいだし、とりあえずは安全……なのかな」

「行ってみて安全じゃなかったらどうするんだよ」

未開の地に行くのはいつだって先人だ。今回は先陣を切っている。先人 “ 様もいることだし、行くだけで死ぬような場所じゃないことは分かっている。

毒ガスが蔓延するような島だったら生徒手帳のGPS機能に動き

があるのはおかしいし、こうして客観的に見ても大丈夫だろう。日向クンが心配しすぎなだけだ。

「人の足を止めるのはいつだって恐怖と諦観があるからだ。でも、足を進めるのに必要なものは一杯の好奇心とひと匙の勇気だけでいい……つまり私はこの先に何があるのか気になるってことだよ」

日向クンが、途中から何言ってるんだコイツと残念なものを見る目になっていたので後に言葉を付け足しておいた。先ほど田中クンのノリを真似したからか、癖がついているような気がする。胡散臭いやつだとも思われてたらどうしよう。痛いやつだと思われてたらどうしよう！そしたらちよつとではなく、結構落ち込む自信がある。

「好奇心は偉大だよ。さ、行こうか」

「あ、ああ」

好奇心は猫をも殺すつて言うのが定説だけどね。

その言葉を口に出す前に飲み込み、私は微妙な顔をする日向クンと一緒に橋を渡って行った。

「おお！綺麗なハイビスカスだね！」

橋を渡りきると目の前には見事な芝生があり、ハイビスカスが敷き詰められたように咲き誇っていた。綺麗な桃色で大輪の花を咲かせているので、かなり丁寧に入手をされているのが分かる。

「こんなに自然が綺麗な島なのだから『超高校級の庭師』とか、『超高校級の植物学者』がいれば狂喜乱舞したかもしれない。

「……は……」

日向クンが辺りを見回しながら情報収集しようとしている。だが、あんまり役に立つような情報はなさそうに思える。

私は近くの看板と、今しがた自分が渡って来た橋を見て日向クンに言う。

「『中央の島』だって。よく見たら生徒手帳の地図にもそう書いてあるね。さっきまでいた場所は1番目の島になってるし、他にも幾つか島があるのかもしれないよ」

橋の手前に門があり、その上部に大きく1と数字が書かれていたのだ。島の名前が数字で決まっているならば他にも幾つか島があつて

もおかしくない。

「木陰から広場っぽいのが見えるぞ。あつちに誰かいるみたいだな」

「残念、木の枝の準備は必要なかったね」

「それ、またやるつもりだったのか」

その辺で拾った木の枝を元に戻し、呆れた顔をする日向クンが指差した方向を覗き見る。

確かに木陰の向こう側にうつすらと人影が見える。少々遠い位置なので誰だかは判別できないが、恐らく最後に残った1人だろう。人影の向こう側には海もちよつとだけ見えるので見晴らしのいい場所にいるようだ。

「てことは、また右に行けばいいのかな?」

「そうだな」

今度も門を抜けた直ぐの場所から右手へ進んで行く。

暫く経つとハワイなどでよくアクセサリーにされているプルメリアという星型の、白地に黄色の花が咲いている場所に出た。ハワイで花と花を繋げたレイによくされている花だ。

芝生の上にプルメリアが突き出ているので、先ほどのハイビスカスと同じように管理されていることが分かる。

ちなみに、低木であるプルメリアの白濁した樹液には毒性が含まれているので注意だ。ミルクのような色をしているが、摂取し過ぎると最悪心臓麻痺を引き起こすので口に入れたり、触れたりしてはいけない。キョウチクトウの仲間を舐めてかかると痛い目に遭うのだ。

プルメリアの前には大きく2と書かれた門がある。だが、生憎と今は閉鎖されているようだ。無理矢理通ろうとすればギリギリ行けそうだが、そんなことを試すつもりはない。

先程の門のことも考えると、門の前には何かしらの花を植えてあるのかも知れない。

「橋を超えた向こうにも島があるみたいだけど、渡れないみたいだね」

「ああ、そうみたいだね」

門が閉まっただけでは仕方ないと、私達はそれを横目に静かに通り過ぎて行った。

更に、1番目の島への橋から、2番目の島への橋へと同じくらいの時間をかけて歩いていると、急に拓けた場所に出ることができた。近くの看板にはjabberwocky parkの文字が大きく乗っている。

公園の端からは海が臨めるようになっており、日陰には幾つかベンチが設置してあるのが分かった。この場所で暢気にお昼寝でもしたらとても気持ちがいいだろう。

公園の隅々にまで金虎の尾という公園によく使われる黄色い花と、こちらも公園などでよく使われる代表的な赤い花、フレイミングビューティーらしき花が交互に植えられ、赤と黄色がとても綺麗なコントラストを生み出している。

公園を眺めながら散歩するだけで随分と良い暇潰しになりそうである。

そして、石畳が真ん中に向かって敷き詰められ、公園の中心には虎と蛇、馬に乗り槍を持った人間……人間の肩に留まったワシだか、タカの組み合わせだった大きな銅像が立っている。

自己紹介をしていない最後の1人は、その銅像を眺めながら考え事をしてるようだった。

「綺麗な公園だね。それに、すごい立派な銅像まで立ってるよ！」

「立派は立派だけど、なんか不気味じゃないか？」

確かに、これだけ動物が集められていると立派さよりも先に、むやみに集められている感じがあって違和感を感じるかもしれない。

ジャバウオック公園。蛇馬魚鬼。魚は当てはまらないが、鬼を人間として数えれば銅像の動物とも合う。それに、ジャバウオックの語源の一つとして『鋭い』『突くもの』が数えられるから、槍も当てはまるだろう。

訳の分からない怪物の名前を冠するくらいなのだから不気味に感じて然りなのかもしれない。

「まあ、ごちゃごちゃしてるからね。でも、そんな銅像があるってことはこの島の象徴なのかもしれないよ」

「この島の、象徴か……」

ま、長い説明だし日向くんには言わないけれど。

だって私は知っている。この島の名前を。きつと記憶がなかったとしても、私はこの島の名称を知っていただろう。なにせ、2番目の両親と何度も南国巡りをしていたのだから。 “観光地 “ くらい知らなくてどうするといふのだ。

「さて、公園の入り口で色々考察するよりもやることがあるよね」
「そうだな」

日向くんは銅像を調べている巨漢の男の子に近寄って行く。

「……俺に用か？」

そして、声をかけようとしたところで逆に声をかけられ、吃驚して立ち竦んだのだ。

ゆつくりと振り向いた彼は…… たつぷりとしたぜい肉を揺らし、体格的にも大ききさ的にも圧倒的な威圧感を放ちながら腕を組み、こちらを見下ろしている。

日向くんは厳しい顔をした彼にちよつと近寄りがたく思っているようだ。一瞬気圧されたように立ち止まり、言いにくそうに口火を切った。

「あの…… 自己紹介、いいか？」

「自己紹介？」

剣呑な顔で口調を強める彼に日向くんは 「なんで怒ってるんだよ」 とでも言いたげに顔を強張らせている。

「あーつと、俺は日向創って言うんだ。よろしく」

「…… 俺の名は十神白夜だ。終わったぞ。これでいいだろう。下がれよ」

「さすがは十神くんだね」

この超上から目線。ああ、ゴミでも見るようなその視線たまらないよね。じゃなくって、何を考えているんだ私。私にそういう趣味はないぞ。その、上に立つ者特有の圧倒感が格好良いと、そう思ったただけだ。他意はない…… 私は誰に言い訳をしているんだ？

「おい、狛枝？」

「あ、うん？ な、なになかな、日向くん」

「だから、そのさすがってどういう意味なんだ？」

全然話を聴いてなかった。危ない危ない。

「十神クンはね、超高校級の中でも特に凄い部類に入るんだよ。別格と言ってもいいくらいだね」

勿論、ソニアさんも同じくらい別格と言えるだろうけど、彼の場合は経歴も凄いからね。そこも入れるとやっぱり別格扱いかな。

「巨大財閥である十神一族の御曹司で、幼い頃からあらゆる帝王学を叩き込まれた人物…… 本人も既にいくつもの会社運営に携わって、個人としても莫大な資産を築き上げているらしいよ。まさに “超高校級の御曹司” と呼ぶにふさわしい、ケタ外れな高校生でしょ？」

「ここまでの完璧超人は漫画にも滅多にいないよね。」

「おい、日向と言ったな……？」

「えっ……？」

私の説明で才能の話にならなかったからか、そのまま銅像の方へ向きなおらずに十神クンは言った。

「訊かせろ…… お前はどんな才能で、希望ヶ峰学園に選ばれたんだ？ さあ、言ってみろ。お前は超高校級のどんな才能を持っている？」

「えっと、それが…… じ、実は覚えてないんだ」

「覚えてない…… だど？」

才能の話は現在日向クンには少々辛い所があるが、まあこうして訊いてくる人くらい少しはいるよね。今までいかなかったのが不思議なくらいだ。

皆他人の才能に興味がないのか、自己紹介でも私が補足することが多かったし、自身の才能についても深く考えていない人物が多い。知っているのが当たり前だと言わんばかりな人物もいれば、自身の持つ才能を重要視していない者もいる。

持つ者とはそののありがたみを忘れてしまうものだ。だからこそ、持つ者は持たない者に嫉妬されやすい。それを持っているのはありがたいことなのに、感謝すべきことなのに、それを当たり前だと捉え

てどうでもよいものであるかのように扱う。

日々安全に暮らせるのだからって幸運と不運の変動がごく僅かで、常にバランスを取れているからなのだ。その「平穩」がどれほど危ういものなのか……知らない人も多い。

私は、それを知っている。だから、それを崩したくない。当たり前前の日常を、平和を、平穩を、安寧を、静穩を、安らぎを……私の生活。

だからこそ、平穩が約束されたこの場所にいられるのならば、なにもしなくても生きていられるのならば、私は。

「……もう話は終わったはずだが？いつまでそこに突っ立っている。」

「おい、狛枝…… さつきからどうしたんだよ。顔色悪いぞ？」

日向クンが最初に私がしたように、自身の顔を指さしこちらを覗き込んでいる。

私はそれに気が付くと、汗ばんだ手を隠すように腰の後ろへ回し、「なんでもないよ」と言った。

「問題ないのならばさつきと体を動かせ！それが痩せている人間に課せられた使命のはずだ！」

「時間取らせちゃってごめんね。行こうか、日向クン」

「ああ、そうだな」

そうしてその場を去ろうとしたとき、学校のチャイムのような音が鳴り響いた。

「今のって、学校のチャイムか？」

「どうやら、公園に設置された放送用のスピーカーから流れてきているようだ。」

そして、無造作に置かれたモニターに電源が入り、どこかの部屋で赤いソファアに座っているウサミ先生の姿が映った。

「日向クン、あそこのモニターを見て」

「ウサミ……か？」

画面の中のウサミ先生は一通り嬉しそうに拍手をしたあと、モニターに顔を近づけて喋り出した。

「ミナサン、おめでとうございまーちゅー！　どうやら最初の〃希望のカケラ〃を全員分集め終わったみたいでちゅー！　うるうるうる……　あちし嬉しいなあ」

自分でうるうるって……　効果音のつもりなのかな？

それにしても、やっぱり希望のカケラが集まってなかったのは日向クンだけだったようだ。他の皆は滞りなく自己紹介できていたのだろう。

「というわけで、そんなミナサンをさらにハッピーにするプレゼント用意をしました！　お手数でちゅけど、最初の砂浜に集まってくだちゃい。ぷすー、くすくす！　輝かしい希望はミナサンと共にね！」
唐突にモニターの電源が切れ、画面が真っ暗になる。言うだけ言つて手を振っていたウサミ先生は、もう既に砂浜へと向かっているのだろうか。

素早くウサミ先生の放送に反応した十神クンは砂浜に集合するところが分かると、その巨体からは想像もつかないほどの速度で公園から出て行ってしまった。動ける巨漢は初めて見た。想像以上に衝撃である。

あんなに速く走って砂浜までいけるのなら、ダイエットの一つくらい簡単に続ける体力がありそうなんだけどなあ。

「砂浜に集まれだつて」

「だ、大丈夫か？　なんか嫌な予感しかないぞ」

「ウサミ先生の言うことだし、プレゼントもむしろ期待外れだったりして。ま、団体行動は乱さないほうが良いね。十神クンも行っちゃつたし」

私がいるから、かなり早く行っても10分はかかってしまいそうだ。行くなら急いで行かないと。

「あれ、本当にもういない……」

「ね？　待たせちゃうから早く行こうよ」

「ああ」

そうして、汗だくになりながら走って砂浜に辿り着くと、既に皆が集まっていた。

30分かかる空港を調べていた左右田クンや田中クンも既に集まっている。どうやら私たちで最後のようだ。

「足、引っ張って、ごめんね、日向クン……」

「いや、それより大丈夫か？」

「はあ、うん…… 無理、だね」

ぜえはあ言いながら砂浜に降り、ヤシの木でできた日陰に入る。

この際ヤシの実は痛いなんて言っている場合ではない。日向クンが起きるまでもその日陰を使っていたのだ。そう簡単に不運が起こるわけではない。

春でまだ肌寒いからって長袖のパーカーを着て来たことを後悔しつつ、「お前たちが最後だぞ。なにをチンタラしているんだー」と言う十神クンに息の整えきれないうちに「ごめんね、待たせちゃつて。本当、モヤシでごめん」と返事をする。

日向クンが道路上にあった自動販売機で、生徒手帳を使い、水を買ってきてくれたのでお礼を言ってから一気に飲み干す。

走るのは10分でも辛いよ。こんな暑い中、日向クンはなんでそんなに平気そうな顔をしているんだ。

「まあ、いいだろう。それより、あのウサミが現れるまでがチャンスだ。俺達だけで話し合いをしておくぞ」

そういえばウサミ先生はまだ現れていないな。プレゼントとやらを用意してここに来るのが遅れているのだろうか。

「きやははー。お話ししよー！」

西園寺さんが砂浜のカニを目で追いながら十神クンに同意した。

息を整えながら周囲を見回してみても、異議のある者はいなさそうだった。皆、早く情報交換がしたいのだろう。

罪木さんが心配してくれたのか、「大丈夫ですかあ？」と私に言ったあと、続けてまたネガティブな方向に流れそうになるのを引き留め、「体力がないだけだから大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」と笑ってお礼を言った。

こちらを心配気に見つめていた小泉さんもその言葉に安心したようにため息をつく、十神の方に向き直った。

日向クンは自分で自動販売機で買ってきたお茶を片手に、飲むか飲まないかを悩んでいる。

「毒なんて入ってないってば」

「…… そうだよな」

体のいい毒見役にされたような気もするが、ミネラルウォーターを飲み干した私がそう言うのと、ぎこちない動きでお茶のキャップを開けた日向クンがその中身を飲む。

長く走ったのだからさすがに彼も疲れていたのだろう。

「では、感想を聞かせろ。お前たちが一通り島を見て回った感想だ」

落ち着いてきた周囲を眺めてそう十神クンが言った。

私はその言葉で空になったペットボトルを底の広いポケットに入れ、逆側のポケットから白い外装の手帳と、筆記用具を取り出す。簡単にメモをしたあと、また後で書き直す、聞き取りと情報の記録は大事なことである。

「中央の島に、封鎖されている橋がいくつかあったな。私はあれが気になったぞ」

最初に言葉を口にしたのは辺古山さんだ。彼女もホテル以外の探索をすっかり行っていたらしい。もしかすると、ホテルにいたのは探索終わりの休憩中だったのかもしれない。もしくはあそこでもなにか調べていたのか。

「あれは、みんなが迷子にならないためらしいっす！ 唯吹が無理矢理渡ろうとしたら、あのウサギがそう言ってきたんでマジっすよ！」

「迷子にならないため？ そんなに広いのか、この島は？」

次に瀧田さんが元気にくるくると回りながら大きな声をあげる。皆が知らない情報を提供できたことで喜んでいるようだ。

「でも、総合的に見るとふつーに良い島じゃね？ なんかリゾート地って感じでさ！ や、リゾート地とか行ったことねーけどな」

私と一番遠い位置にいる左右田クンが言う。

まあ、リゾート地であることは確かだ。場合によっては行ったことのない人のイメージのほうが正確であることが多いし、彼の認識は正しいだろう。

男役者が女役をしたほうが女らしくなるのと似たような感じだ。理想の像があるため、現実を知っているひとよりも信用がおけるものだ。

「あとねー、おっきい牧場があったよねー!」

相変わらずカニを目で追いかけてながら西園寺さんが言う。

「あのう、広いスーパーもありましたよ。食べ物とか生活必需品が一通り揃っていた印象ですう」

お、スーパーマーケットのことなら私も色々メモしたし、言ってみよう。

「皆分かってると思うけど、この島のあちこちに自動販売機もあるみたいだね。食品や生活必需品もしおり通りに無料だと思う。無料の物は電子生徒手帳をかざせば購入できるみたい。その代り、娯楽用品とか家具なんかはこのメダルが必要なんだって」

そう言ってクローバー柄の財布からウサミメダルを取り出す。

「そんなもの、どこにあったんだ?」

「空港で回ってる荷物調べてみたら入ってたんだよ。ウサミ先生があとで宝探しゲームをするためのために入れておいたんだって。これはその景品。勿論、しおりの内容が確かなら、皆にも後で配られると思うよ」

「あのときか…… なにやってんだよ」

日向クンが呆れたようにこちらを見ている。他人のかもしれない荷物を漁ったからか、少々心証を悪くしているかもしれない。

「ホテルも凄い立派だったよね。あそこに泊まれるなら、かなり助かるんだけど……」

小泉さんが心配そうに言う。

「ホテルにあったコテージを詳しく調べてみたんだけど、皆の名前が入ったポストが人数分あったんだ。だから皆あそこに泊まれると思うよ。ほら、ちゃんと誰がどの場所かも調べてあるよ。それぞれの場所に行くのに、どれくらい時間がかかったかも調べてあるし、あとで小泉さんと細かい表示の入った地図を作るから、欲しかったら言っ
ね」

「準備がいいわね、凧ちゃん」

「メモするのは習慣だからね。慣れてるよ」

小泉さんは感心したように頷いている。そうだよ、これだよ。この反応が欲しかったんだよ！　なんで日向くんは反応薄いんだろう。情報把握のための書類ってこういうときは重要って相場が決まってるよね？　もう少しなんかこう、褒めてくれたっていいのにさ。

「そのホテルにあるレストランも、実に庶民的で良かったですよ」
金髪を揺らし、ソニアさんがガッツポーズを取りながら喜んで
いる。褒め言葉……　だよな？

「ねえ、ぼくの話も聞いてもらってもいい？」

ソニアさんの横を陣取っている花村くんが軽い調子で続ける。

嫌な予感しかしないのは気のせいだろうか。

「ぼくはね、この島で大事なものを見つけたんだ……　とつてもカワイイ女の子たちだよ！あはっ！そっちにもこっちにもいるね！」
うげえ。

「ぎゃー！キモいつすー！チキン肌がバルバルバルウ！」

澤田さんの意見に同意だよ！

ついでにソニアさんを見ながら頷きかけた左右田くん、キミも同罪だ。

「どいつもこいつも能天気なもんだ……　誰もあの ” 重大な事実

“ に言及しないとはな」

それまで話の流れを静かに聞いていた十神くんが、一度話が途切れたところで口を出す。

どうやら、他の皆では出なかった情報を知っているらしい。

「……　重大な事実？」

立ったまま半分船を漕いでいた七海さんが 「重大な事実」 とやらに反応する。

それより寝ちやつてたみたいだけど、今までの話ちゃんと聴けてたのかな。あとで確認しておこう。

「本当に誰も気づいていないのだとしたら、大した間抜け共が揃ったモンだ」

「んだ、コラア？ エラソーな口利いてんじゃねーぞ？」

「咆えるな、愚民め」・

十神クンの尊大な物言いに九頭竜クンが不満そうに声をあげたが、言うだけ無駄だと悟ったのか、イラついたようにそっぽを向いて黙り込んでしまった。

そして、周りでは重大な事実？ と波紋が広がるように疑問気に十神クンを見つめて話を話すのを待った。

その中で、日向クンが率先的に十神クンへと疑問をぶつける。

「なあ、重大な事実ってなんだ？ ひよつとしてこの島についてなにか分かったのか？」

「…… お前たちはあの公園を見ただろう？」

「やたら迫力がある銅像っていうか、不気味な動物のオブジェがある公園のことだよな？」

日向クンも先ほどまでいた公園のことを思い出しか、動物の名前をあげつらって行く。

「しかし、あれを見たとき以前聞いた話を思い出した。太平洋に浮かぶ小さな島で、風光明媚な常夏の楽園と呼ぶにふさわしい島がある。中央の島を中心として、“5つの島”から構成されるその島々は同じく“神聖な5体の動物”を、島の象徴としているらしい……

とな」

私は十神クンの言葉を聴き、少し考えながら慎重に言葉を選び、口を挟んだ。

「十神クンの言いたいことは分かるけど…… うーん、本当にここはあの島なのかな？ あまりにもイメージと違い過ぎて判断がつかないんだよ。あと、海外旅行によく行くような人じゃないと観光地とか、知らなくても仕方ないと思うよ。私が知っている限りだここは特に…… ちよつと特殊だからね」

有名な観光地ではあったけど、ハワイとかグアムとか、もつと有名な所があるから知らない人の方が多いだろう。イメージと合わないのも確かだし。

「お前は知っているようだが、他の奴らは本当に知らないようだな…… 5体の動物を象徴とした南国の島。その島の名前は…… ジャバウオック島だ」

公園の名前もジャバウオック公園だったしね。

ジャバウオックは “ 鏡の国のアリス ” に登場する、「わけのわからないことをペラペラ喋る」の語源が有力である怪物の名前だ。

また、ジャバウオックの首を撥ねた剣は 「真理の言葉」 と解釈することができる。こうするとジャバウオック退治の物語は 「無意味な論議の場を真理の言葉で一刀両断する比喻」 に早変わりするのだ。

ナンセンスな詩を解釈すること自体が無意味なことだが、実に「弾丸論破」 ひいては言葉の刃で矛盾を切り裂く 「反論ショーダウン」 が導入された 「スーパードンガンロンパ2」 の舞台に相応しい名前じゃないか。

ジャバウオックが退治されたのがこの島なら他にスナークやバンダースナッチでもいるのかな？

ブー ज्याムを見つけてしまったら音もなく人が消えちゃうのかな？ それなんて、そして誰もいなくなつた？

いや、スナーク狩り…… 真実を探していて、ブー ज्याム…… 虚実を見つけてしまったら人が消える。つまり、死んでしまう？ それとも神隠し？ それは、どっちにしても嫌だな。って言っても、もうこの知識が役に立つことはもうないけどね。

「じゃあ、やっぱりここって……」
「ジャバウオック島……？ それが、俺達のいるこの島の名前なのか？」

私の言葉に被せるように日向くんが現状把握を完了した。しかし、その背後で十神くんがなおも呟くように考察を続けている。

「だとしても、少し気に掛かることがある。確か、俺の聞いた話では、ジャバウオック島はすでに…… いや、やめておこう」

しかし、そのまま言うのをやめてしまう。眉間に皺を寄せているの

で不用意に言っただけとはいけない情報を持っているのだろう。

「待ったれや。随分と中途半端な話の切り方じゃねーか」

「わめくな、もう少し調べて確信を得たらこの俺から話してやるさ」
途中で切られた言葉に式大クンが反応し、十神クンに言う。しかし、十神クンはその疑問をばつさりと切り捨てると再び黙り込んでしまった。どうやら、静観する態勢に戻ったようだ。

「つーか、別に島の名前なんてどうでもいーけどな。ニコニコ島だろうとパプア島だろうとさ……どっちにしろしばらく、この島で暮らさなきゃなんねーのは一緒なんだろう？」

終里さんのその言葉でそれもそうか、と張りつめていた皆の空気も緩み、思い思いに話し始める。

「南国での共同生活とかエキサイティングー！ チョー楽しみー！」

「だな！ ここには面倒くせー学校とかもねーしな！」

澤田さんと左右田クンはもうこの島の雰囲気にも慣れたようで、これからのことを楽しみにしている。

「お、おい？ みんな？」

しかし日向クンは相も変わらず、そんな皆の反応に困惑している。未だに警戒心を解いていない彼にとっては、皆の反応に共感できなくて当然だろう。一人だけポツンと置いて行かれたかのように呆然としている。

私はそんな彼から一旦離れ、皆の話が聞こえる位置にある自動販売機から冷たい飲み物を購入する。他の皆も欲しい時に欲しい分だけ購入しているようなので、遠慮はない。

そして、ついでに傍に置いてあるゴミ箱に先程飲んだ分のペットボトルを捨てて彼の隣に戻った。

一連の動作に、皆を見ていた日向クンは気づいていないようだった。

「うーん、私もこの島は気に入ったよ……参加メンバー以外は、だけどね」

「あれ？ 空耳が聞こえたなあ！」

西園寺さんは通常運転。耐性がないのか、冷や汗を流しながら花村

クンが現実逃避をしている。あんな可愛い子が毒舌を吐くと、やはり衝撃が強いのだろうか。

「不安は不安だけど。まあ、最初ほど絶望的じゃないって言うか……うん、危険も不自由もなさそうだし、なんとかやっつけていけそうかも！」

「おい、何言ってるんだよ。冷静になって考えてみろって！」

小泉さんもはしゃぐ瀧田さんや楽しそうな皆の様子を見て、そう言った。

しかし、やはり日向クンはそうやって警戒心を解いている皆に不安を覚えているようで、私の隣で大声で叫んでくれた。耳が痛い。

「俺達は希望ヶ峰学園に入学するために集まったんだろ？ それなのに、こんな島で暮らすなんて…… どう考えたっておかしいじゃないか！」

日向クンが尚も叫び続けそうになったので、あらかじめ2本買っておいた冷たいミネラルウォーターを片方彼の首に押し付ける。

「つわ、なんだ!?!」

「少し黙れ。頭を冷やすべきなのは貴様のほうだ」

いつのまにか彼が落としていたお茶を拾うと、砂浜の熱ですっかり温くなってしまっている。これではおいしくないだろう。あとでもう一度冷やす必要がありそうだ。

「つえ?」

日向クンに言いたかったことは田中クンが言ってくれちゃったし、私から言うことはあまりない。繰り返し、学園側からのサプライズを推すくらいしかできないからだ。あとは、彼の体調を心配するくらいだろうか。

「まあ、今のところは大丈夫そうなんだし、ちよつとは楽しんでみてもいいんじゃないかな？ ずっと緊張して警戒しっぱなしでいたらいざというときに疲れてなにもできなくなっちゃうと思うよ」

腹が減っては戦もできぬ。

エネルギーを余計に使っているよりも、いざというときに温存しておいた方が良さだろう。無理して気を張っても空回りしてしまうだ

けなのだ。

「そ、そもそも逃げるにしたって、その方法がないわけだしき。どうしようもないよね」

「船はねーし、飛行機もハリボテだからな」

「私が調べたところでは、外部との連絡手段も存在していないようだった。結論から言えば、救助を呼ぶのも困難ということだ」

それぞれ、しよぼくれた花村くん。空港のある方角を見ながら頭をかく左右田くん。恐らくホテルのエントランスで電話がないかを調べていた辺古山くんが続ける。

皆、楽しむことに繋げて不安を和らげているが、それが現実逃避であることは重々承知しているのだ。

携帯電話もどこかにいっちゃったみたいだし、あるのは普段使ってるメモ帳や、日記帳の入った小さい鞆だけ。これじゃあなんにもできそうにない。

恐らく皆の持ち物からも連絡手段は消えているはずだ。

「んじゃ、泳いで帰りやいいんじゃねーの？」

「そんなに泳げるわけじゃないじゃないですかあ！」

「気合じゃあああああああ!!」

「だから無理だつて！」

終里さんと式大くんはもしかしたら太平洋横断もできそうだけれど、この場にいるメンバー全員がそんなことを実行できるわけがない。現に罪木さんも小泉さんも否定している。

そもそも、島の名前が分かったからって、どっちにどれくらい泳げば陸に着くのかも分からないし、南国の海になんかは有毒だったり危ない生物もいっぱいいるしオススメはしないかな？

「だ、だったら木を切ってイカダでも作って……」

「それはダメでちゅー！ 断固としてダメでちゅよ！ ほら、修学旅行のしおりを思い出してくだちやいよー！」

日向クンの言葉を遮るようにウサミ先生が登場した。皆はもう彼女の出現に驚かないようだ。慣れ切ってしまったのかもしれない。現に私ももう慣れてしまった。

「それって、 ” ポイ捨てや自然破壊はいけませんよ。この島の豊かな自然と共存共栄しましょう ” ってやつのこと?」

私がそう言うと、ウサミ先生は大袈裟に頷きながら 「そうでちゅ!」 と話す。

「ね? ミナサンにはこの美しい南の島と共存しつつ、平和に仲良く暮らして欲しいんでちゅ」

「な、なにがルール違反だ、そんなの関係あるか!」

日向クンは完全に血が昇ってしまったているようだ。これじゃあ手を付けられない。ミネラルウォーターも首にくつつけるだけで渡しそびれてしまった。

「日向くんが罰を受けてくれる最初の ” 先人様 ” にでもなってくれるのかな? 勇気あるね…… それこそどうなるか分からないのに。本当にやるの?」

「そのウサギはルールとやらには、やたらとこだわっているようだ。万が一、お前の行動がきっかけで、全員に危険が及んだらどうするつもりだ?」

現在ある毒キノコの毒性と詳しい症状は先人がいたからこそ存在するものだ。毒が薬かはともかく、被害が出ない限りその安全性は分からない。それと同じことだ。

だから私は日向クンを冷静にさせるため、自分がやっていることが一番危険なのだと言外に注意をする。笑顔でとんだ皮肉を言い放っているので印象は悪くなるかもしれないが、今までの方法でも彼は止まらないだろうから、もうこうするしかないだろう。

「さ、さすがに ” 危険 ” は言いすぎでちゅ! あちしはそんなことしないでちゅよ!」

これでは泣きそうな顔で、必死に説得しているウサミ先生のほうに少しだけ同情しそうだ。

「と、とりあえず、おかしな行動をとらない限りは、危険はないみたいですよ」

「それに、 ” 希望のカケラ ” さえ育てれば、すぐにこの島から出られるようになるんだよ?」

罪木さんと七海さんもそう言って彼を宥めるのに協力してくれている。

一応全員不安を覚えていても、より危険じゃない方へ進もうとしているのだから、それでいいじゃないか。

「し、信じるのか？ そんな話を」

「信じるしかないという話だ。少なくとも、今はな」

十神クンのトドメの言葉で黙ってしまった日向クンに、黙ったままミネラルウォーターを渡す。

俯いている日向クンは黙ったままそれを受け取り、一気におおった。そして全て飲みきると、とても小さな声で「ごめん」と呟いた。

「怖いのは分かるよ。でも、私たちは一人じゃないんだし、ウサミ先生のことは無理でも、他の皆のことは信じてみてもいいんじゃないかな？」

私の言葉に、先程よりも柔らかくなった表情で、彼は「ああ」と頷いた。

No. 13 『楽園』―曇天―

「ねー、ところでウサミちゃん！ さっき放送で言ってたプレゼントってなんすか？」

日向クンが水を飲みながら必死に自分を落ち着かせている間に、気を取り直して瀧田さんがウサミ先生に質問をする。その質問でハツとした皆は、そういうえばそんなこともあったなと期待の見える目でウサミ先生を見つめた。

「あつ、そうだった！ いやっ！ もちろん忘れてないでちゅけど……
これでちゅよー！ 慌てないでねー！ ちゃんと全員分用意してあるから大丈夫でちゅよー！」

ウサミ先生がどこから取り出したのは彼女自身を縮尺したようなストラップだった。妙にリアルなデザインで、硬そうなのにウサミ先生が持っているお腹の部分が少しへこんでいる。あそこだけ柔らかいのだろうか。

「…… はあ、なにかな？ それ」
「えへへん！ ウサミストラップでーちゅ！ あのね、お腹押すと喋るんでちゅよー！」

クローバー柄の財布と、ウサミメダルを手にしたときと似た、若干の呆れを含ませながらそう私が言うのと

むにとストラップのお腹を強く押して、子供が玩具を見せびらかすようにそれを掲げる。ストラップは機械音を通したような、くぐもったウサミ先生の声を再現した。

『あちしはウサミ…… 魔法少女ミラクル☆ウサミ。ちよつぴりスイートなミルキーツ娘でちゅ！』

「カワイイでしょー！ らーぶ、らーぶでちよー！」

そわそわと反応を待っている先生が可愛らしく感じるのは慣れて来た証かな。呆れはするけれど、憎めないって言うか…… ただ、まあ、最初から大したもののは出てこないと確信していた私はそれだけだ

が、皆は期待していた分だけ裏切られ、一気に落胆している。

「くだらんな」

「あーあ、期待して損した」

「むしろ、期待した自分を恥じちゃうよ!」

十神クン、澤田さん、花村クンと辛辣な評価が続き、トドメに七海さんが首を傾げてさらつと毒を吐く。

「そうかな? 意外とカワイイと思うけど。特に耳がウサギに似てるトコとか」

「まあ、ウサミって言うくらいだから、ウサギでちゅよね!」

だけれど、ウサミ先生は吐かれた毒に気が付かず、丁寧に訂正をしている。その天然っぷりと単純っぷりにくすと笑う。可愛い。

微妙な顔で一人一人ウサミ先生にストラップを渡され、そして皆で顔を合わせたかと思うと、何人かを除いてすぐさま幾つものストラップが砂浜に転がった。

「あ、ちよつとみんな、ダメだよ!」

「こ、粕枝さん……!」

「ポイ捨て禁止だつて言つてたでしょ。ちゃんとゴミ箱を探さないからね!」

ウサミ先生がストラップを握ったまま叫ぶ私にうるうるとした目を向けたが、すぐにそれも落ち込んだ目に戻る。うん、ごめん。今はいじるほうが楽しいんだ。

「…… そうでちゅよ。ゴミで自然を汚しちやダメでちゅ」

「ゴミつて言つちやつてるじゃないっすか!」

え、なんで皮肉言われた本人が肯定しちやつてるの? 私には分からない。

そして、誰も拾おうとはしない砂浜のストラップを虚しくウサミ先生が回収し、少しだけテンションの下がった声で話を続ける。

「うう、せっかくもう一つプレゼントを用意したのに、そんなに悪い子だとあげたくなくなっちゃいまちゅ……」

「ん? まだ何かあるのか?」

辺古山さんが彼女の言葉に疑問を向ける。

しかし、ウサミ先生は先程のストラップのときとは違い、暢気に言葉が続ける。

「ま、ウサミストラップに比べたら、全然大した物じゃないんでちゅけど……あのね、動機を用意したんでちゅ」

「ど、動機？」

物騒な意味で使われる、普段は事件などでしか聞かないその言葉に日向クンが顔を青褪めさせる。嫌な想像をしたのか、手は固く握りしめられ、白くなっていく。

その様子から、日向クンが再び恐怖に包まれていくのがよく分かった。

「そ、ミナサンが仲良くなるための動機でちゅ。せっかく南の島に来たんだし、それっぽいことをしたほうがいいかなーって」

「なんだ？ お楽しみパーティーでもやんのか？」

「ピンポーン！でちゅ」

終里さんの暢気な推測に日向クンは驚いた顔をしたが、ウサミ先生の肯定にもつと驚愕しているように見える。「動機」という言葉は本来動くための切っ掛けのことだが、最近では事件などで犯人の動機がどうのこうのと、ドラマでもよくそう言った類に使われることも含め、動機と聴くと嫌なイメージしかないのだろう。困惑しているあたり、日向クンもそのイメージが強いのだろう。

「お祭りですか？ では、お神輿ですかね？ わあ、素敵です！ジャパニーズ浴衣、着てみたいです！」

「ソニアさんの浴衣……」

あの様子だと、ソニアさんは日本のお祭りに行ったことなさそうだね。身長も高くてストラップとしてるし、淡い色の浴衣が良く似合っている。

ジャパニーズ何とかって言う表現好きだね。あと左右田クンには同感したいところだけれど、もう少し小さな声で言ったほうが良いと思うよ。

私は怖いからお祭り滅多に行かないけど、この女子皆で行けたらすごく楽しそうだよなあ。

「ところで、ソニアさん…… ぼくの下半身が毒で腫れてしまっているの、お口で吸いだしてくれと非常に助かるのですが！」

「またか花村くん！ させないぞ！」

「ちよ、ちよつと！ 花村くんってば！」

「花村オメーなに言ってるやがる！」

「下半身ですね？ 分かりました」

「ああもうっ、これだから純粹培養お姫様は！ むやみに男の子の誘いに乗っちゃいけません！」

「私を怖がってる暇があったら左右田くんも阻止してよ！ 口だけじゃなくてさ！」

「ソニアさんも分かっちゃダメだって！」

「ああ、恥じらうその感じもいいよね！ 狛枝さーん！ きみも混ぜろぐえ」

「お、思わずダイナの手帳で叩き落としちゃったけど、そんなに分厚くないし無事だよな？ 花村くんしぶとそうだし大丈夫だよな？」

「きーもいーよー！ 砂浜で火傷こじらせて死んじゃえ！」

「くぴーっ！」

「ナイス西園寺さん！ もっと言ってやってよ！」

—— と、私たちのような一部が盛り上がっている間にも次々と皆から、お楽しみ会の内容が挙がっていく。

日向くんは騒がしい面々に巻き込まれた私や、周りを交互に見ては困った表情をしている。そんな都合よく、ちゃんとした修学旅行のようないことができるのかと、疑問符がその頭の上に踊っている。

「分かったあ！ 南の島でお楽しみパーティーって言ったら、やっぱり、バーベキューとかつすね！」

「あ、キャンプファイヤーもいいかもね」

「濁声を作って叫ぶ澤田さん。」

修学旅行に定番なその提案に花村くんが「バーベキューなら任せよ！ たまにはそういう芋臭いのもいいもんね！」と大賛成の声をあげた。

その後、手を合わせながら楽しそうに提案するのは小泉さんだ。

「キャンプファイヤーはこの人数じゃ難しいんじゃないかな？」

でもキャンプファイヤーには賛成できないかな。私がやりたくないだけけどね。

キャンプファイヤーは危険すぎる。私がいるなら尚更。今のこの状況が楽しくて、怖いことが起こってない幸運な状況だからこそだ。飛び火して大火事になっても知らないよ。

建前的には実際問題、木を組み立てなければならぬし、木を切るのはしおりで禁止されているし、木材があつたとしてもちよつと実現は難しいだろうからね。

「みんなでツチノコ殺そうよー！」

「見つけるだけじゃ飽き足らねーってか!？」

それ、まず見つけるところからはじめないとだめだよね？

西園寺さんのテンションの高い提案に引いた顔をした左右田くんがツツコミを入れる。だからしおりで禁止されてるって……あれ？ 西園寺さんがカニを踏んづけてるのは規則違反じゃないのかな？ 不思議だ。

「修学旅行とか林間学校と言ったら、やっぱり肝試しだよね！」

「却下だ！」

「肝試し！オカルトツアーですね！やってみたいです！」

「ソ、ソニアさん？」

私が提案してすぐ涙目で却下してきた左右田くんだが、それに被せるように賛成の声をあげたソニアさんによってシヨックを受けた顔になる。

ドヤ顔をして左右田クンを見たら速攻で目を逸らされた。ちよつと寂しい。

それにしてもソニアさんの趣味は幅広いな。オカルト関係が好きで、殺人鬼なんかも好きなんだっけ？ホラー映画とか。

私もホラーとかパニック物は好きだよ、そういう場所を回避するのに参考になるから。

誘拐されてから暫くミンチとか焼肉とか食べれなくなったけど、今はサメ映画を見ながら焼肉できるまで回復している。勿論白米も

う食べられる。でも朝はパン派だ。って、そんなのどうでもいいか。「ミナサン、様々なご要望があるみたいでちゅけど、海と言ったらまずは……ほーら！ やっぱりこれでちゅよね！」

と、そんなくだらないことを考えながらウサミ先生を見ると、ちゅうどステッキが振られ、ピンク色の目に痛いエフェクトと共に彼女の前に赤と青の袋が現れた。かなり定番なスイミングバッグのようだ。

「スイミングバッグ、かな？」

「ピンポン！ らーぶ、らーぶ！」

「うおおお！ ってことは！」

私が声を漏らすと、それに反応したウサミ先生が片手を挙げて声をあげた。

その、肯定の言葉に左右田クンが目を輝かせ、ギザ歯を見せながら期待に膨らんだ声をあげる。

「はいっ、ミナサンの水着を用意させて頂きまちた。とりあえずスクール水着だけど勘弁ね」

「スクール水着か……まさか普通の水着はないの？」

高校生でスクール水着か。露出が多いから、不運で転んだり色々ある私にとっては少し不安だ。いつもはスカート型だったりパレオ込みで足の怪我がないようにしているし、一緒にパーカーを羽織っているからちゃんとした水着も欲しいところだ。

「スクール水着でないちゃんとした水着でしたら、後でスーパーマーケットで購入できるようにしまちゅ。メダルはコテージに置いてあるので、入荷するまで待つてくだちゃいね！」

「今はこれしかないってことだね？」

「はい！ そうでちゅよ！」

左右田クンや花村クンがスクール水着しかない現状を把握すると、それぞれ女性陣を見ながら小さくガッツポーズしている。花村クンなんて全員を見渡しながらランフフと笑っているし、左右田クンの目線はソニアさんに向いている。

無人島なのに入荷という言葉には、誰も反応しないようだ。

「お、泳げっていいのか？ こんな状況で？」

「そんな上から目線の命令と違いまちゆよ。ただ、泳ぎたい人がいたらどうぞと思つて……」

日向クンはいくらなんでも疑い過ぎだよ。

水着くらいでなにかあるとも思えないし、安全平穏な海だつて分かつてるから私もちよつとわくわくしている。

「お、泳げるわけないだろ！ こんな訳の分からない状況の中で暢気に泳ぐヤツなんて……」

「いやっふうふうふうふうふうふうっ!!」

日向クンの言葉を遮るようにして、澤田さんがスイミングバッグを一つ手に取ってから走り去っていく。

「…… え？」

目の前の状況に呆然としている日向クンを置いてけぼりに、スイミングバッグは次々と人の手に渡っていった。

「そうそうっ！ こんなイベントが欲しかったんだよ！ 天気もいいし、泳がねー手はねーもんなー」

また一つスイミングバッグが減り、左右田クンがホテルへと向かう。

「ぼくは賛成だよ。ぼくの下半身も賛成だつてさー！ ほら、見てごらんよー！」

「下半身ですね！ 分かりました！」

「ソニアさんは分かっちゃダメだつてばー！」

花村クンとソニアさんの会話に割り込み、私も赤いスイミングバッグを手取る。その後ろで日向クンは愕然としている。私まで賛成するとは思つていなかったのだろう。

「海に入るなんて初めてだなあ。ねえウサミ先生、危険な生物もここにはいないんだよね？」

「いまちえん！ 断言しまちゆよ！ ここは安全で平穏でらーぶ、らーぶな島でちゆからー！」

私だつて楽しみにしているんだ。

だつて、初めて海に入るんだよ？ 両親の前では体質の関係上無理だつて言つて、安全を確保してきていたけれど、ここではサメが出る

なんてことはない。痺れクラゲに絡まれることもない。それはなんでもできるステツキを持った、ウサミ先生が保障してくれている。

潮溜まりに痺れクラゲがいた不運なことも昔はあったが、ここではそんなことは起きない。病院送りになんてならない。ここは安全。私の才能に皆を巻き込むこともない。…… こんなに素晴らしいことって他にないよね！ 今だったら叫べるよ、なんて希望に溢れた島なんだろうね！本当に嬉しいよ！ウサミ先生大好き！

「けど海で泳ぐのなんて何年振りだろー！」

「ぬうおおおおおっし！ さっそく着替えるとするかのおお！」

小泉さん、式大クンもその場から去った。

もうこの場に残っているのはスイミングバッグを受け取らなかった西園寺さん、終里さん、十神クン、七海さん、九頭龍クン、そして日向クンと、まだ着替えに行かない私だけだ。

「ねえ、日向クンはどうする？」

「……」

日向クンはウサミ先生を睨みつけるようにして沈黙している。軽々と乗せられている皆に反感を覚えているようだが、今回は怒鳴り散らすこともなく、悔しそうな顔で黙っているだけだ。

「そっか。キミの気持ちも分からないでもないけどさ、楽しむときに楽しむのが一番だよ。無理にとは言わないけど…… でも、気が向いたら、日向クンも来てくれると嬉しいな」

何とも言えない表情の日向クンにそう言い残して、私は走ってホテルに向かった。

途中で息切れして飲み物を購入したが、皆に追いつけることはなかった。

むしろ、ホテルの近くで先に行った式大クンが砂浜に行くところに遭遇してしまっただくらいだ。足が遅くて体力がないのは仕方ないとして、式大クンも着替えるの早くない？ 先に行った女性陣はまだ折り返して来てないよ？

真っ青な顔になりながらホテルに着き、自分のコテージに入る。

それからコテージのカーテンを閉め、キーを確認し、パーカーのポ

ケットに入れる。スーパーから貰って来たカタログは木の机の上に置き、手帳も白い手帳ダイナのだけ残して、黒い手帳キティのと日記は空っぽの本棚に収める。机の上にはちゃんと10枚メダルがあったので、これで好みの家具を揃えればいいということなのだろう。30枚のメダルとチケットの入った財布を置き、かなり自由に家具が選べることを確認した。

最初から40枚もメダルがあるだなんて幸運だよな。

バッグはひとまずベッドの上に置き、ヘッドフォンをハンガーラックの上にかけて、パーカーを脱ぐ。パーカーは水着の上に着るのでとりあえずベッドの上だ。

「うそー、これがあるんだ」

ハンガーラックにかかっていた向日葵の付いた麦わら帽子。見覚えがあるなと思ったら、これはうつろちゃんから貰った物だ。先に寮へ送っていたから諦めていたけれど、ウサミ先生も粋なことをするじゃないか。見直した。

よし、これも被って行こう。日差しもじんわりとした暑さだし、ちようどいいだろう。

浴室に入って水着に着替え、上からパーカーを着る。

パーカーはかなり長いからパレオの代わりになる。砂浜で遊ぶにしても邪魔にはならないし、泳ぐときは脱げばいい。

ポケットに白い手帳ダイナのと安全ピンで留めたロケットペンダントとホイッスルを入れ、麦わら帽子を被る。準備万端だ。

ただでさえ遅れやすいのだから早く行かなければ。

そして、私は部屋を出る。

「あれ？」

「あ、風っちゃんー！」

私が外に出ると、水着を着た女性陣が勢揃いしていた。

罪木さんは少しサイズが合わなかったのか、小さめの水着を気にし

てしきりに手を後ろへと向かわせている。おどおどとした目線が「こんなものを見せてごめんなさい」と今にも言いそうなほど潤んでいるのでウサミ先生の手違いだろうか。

小泉さんは女性陣しかいないためか、恥ずかしがりもせず惜しげなく水着姿をさらしている。明るい笑顔とわずかなそばかすがかえって可愛らしさを出していて、こちらに手を振っている。

ソニアさんは金髪の王女様であるが故に普通の水着を着ている姿はなんだかミスマツチで、罪木さんとは別に身長的な理由からか水着がよりピッチリとしているように思う。髪飾りをしていないその金髪が腰でさらさらと揺れている。どんなシャンプーを使ったらあんな風にさらさらになるのだろうか。今度訊いてみようか。

澤田さんは元気一杯に跳ねているものだから大きめの胸が揺れて、その…… 凄いことになっている。快活な彼女にはスクール水着もなかなか似合うのではないだろうか。

辺古山さんも凜とした雰囲気スクール水着は合っていないように感じるが、コテージに置いていかないのか、斜め掛けになった竹刀袋の紐が胸を強調していて凄まじい。普段もセーラー服の下から強調されているが、薄布一枚なので余計に強調されている。

パーカーを上から着たのは間違いではなかったようだ。彼女たちに比べてしまえば私なんてゴミに等しい…… って、またネガティブになってしまふところだった。女の子たちが可愛すぎるのがいけないんだよね。

「罪木さんに小泉さん？ ソニアさんと澤田さんに、辺古山さんも…… どうしたの？」

思わず見惚れてしまったが、てっきり先に行っているものだと思っていた私は、それに吃驚して間の抜けた声を漏らしながら彼女たちに質問した。

「うはー！ その麦わら帽子可愛いっすねー！ みんなカアイイーしー！ 待ってた甲斐があったってもんすよー！」

「最初の提案は唯吹ちゃんだよ。アタシが着替え終わったときも唯吹ちゃんが待っててさ……」

「行くのならば皆の方が良いだろうと、待っていたのだ」

「皆さんで遊ぶのが楽しみでしたから、備長炭させてもらいました！」
「うゆう。そ、それは便乗じゃないでしょうかあ……？」

澤田さんのテンションが最高潮である。

その後、小泉さんと辺古山さんが詳しい経緯を説明してくれたので状況は分かりやすかった。

皆一緒に行くのに待っていてくれたのだ。頬が熱くなり、口元が自然に緩む。こんなに嬉しいことはないよね、本当。こんなに幸運でいいのかな？ 後で罰が当たったりしないかな？ 皆にとつては当たり前のようなことだろうけれど、私にとっては、幸せ過ぎて泣きそうなくらいに嬉しい。

ソニアさんのわざとかと思うくらいの言い間違えを罪木さんが控えめに指摘し、もじもじと彼女も嬉しそうにしている。そっか、罪木さんもこういうことに耐性がないのか。ちよっと同族意識が芽生えちやいそうだよ。でもそんな彼女には失礼だよ。彼女は環境が悪かっただけ、私は、私自身が悪かったんだし……

「いいの？」

思わず、私がそう言うと、何を言っているんだとばかりに次々と声があがった。

「さっ！ 凧つちゃんも行くつすよ！」

「はわわっ、一緒に遊べるなんて…… 幸せですよお！」

「わざわざ許可求めなくてもいいのに。だから待ってたんではしょ？」

「お友達と水遊び…… 素敵ですわ！」

「理由を求めるなど、野暮だろう」

皆は私を泣かせたいのかな？

麦わら帽子で一時的に照れた表情と、だらしなく緩んだ口元を隠す。まったく、こんなに幸せでいいのだろうか？

お喋りをしながら移動した道中は、一人で走ったときよりも断然短く感じたし、息苦しくもなかった。同じ距離を走っているはずなのに、皆がいるだけで違うだなんて凄いな。

辺古山さんには苦しくない走り方を教えてもらいながら走り、それ

ぞれ修学旅行について楽しみである理由だとかを話しながら軽く走る。

澤田さんは皆でケイオンをやりたいと語り、小泉さんは全員の記念写真を撮ると宣言し、ソニアさんは祖国愛と同時に、こうして日本に来て、学園に入れたことを喜んでいる。

辺古山さんは私のバッグについていた編みぐるみの話題から、可愛い物好きであることが判明し、罪木さんはどもりつつも幸せそうに遊べることを喜んでいる。

私もその中で、海に入るのは初めてで楽しみだとか、幸せすぎて泣いちやうかもなんてことを言ってペンダントを握りしめる。小泉さんにロケツトペンダントのことを訊かれたが、それは今度ということにしておいた。その方が遊ぶ理由づけになる。

そしてピロリン、と電子生徒手帳が幸せの欠片を獲得したことを告げる。

罪木さんは既に2つカケラをもらっていたので進展はなかったが、澤田さん、小泉さん、ソニアさん、辺古山さんのカケラが2つになったのもあり、女性陣と仲良くなったことで私は疲れが吹っ飛んで行くような気がした。



「いやっほおーうっ!!」

私たちが海に着くと、既に左右田クンが海に入って歓声をあげていた。

「わーい、わーい！ 海ですよお！」

「うふふ、水がぬるくて心地良いですわね」

海辺で小さめだったらしい水着を気にする罪木さんと足を水に浸しながら歩くソニアさんが笑いあっている。

「うはっ、しょっぺーっす！ この海は手加減抜きにしょっぺーっす

！」

「こういうのも…… いいものだな」

さっそく海へと飛び込んで行った瀧田さんはテンションをこれ以上なくらいに上げて泳いでいる。先ほど話していたが、日焼け止めは事前に塗っておいたらしい。私も同様だが、皆肌のケアには余念がない。

そして、きよろきよろと辺りを見回しながら辺古山さんが微笑んでいる。海に入らないと決めたらしい集団を見て顔を綻ばせているのは、バレていないと思っているのだろうか。

日向クンは呆れたような顔で日陰に移動しており、他の者も大体日陰に入っている。西園寺さんだけは夢中になってカニを踏んづけているようだ。

私はパーカーを靡かせながら海辺を歩き、水の中を覗き込む。透明度が高く綺麗な海だ。暖かさも相まってちょうど良い水温となっているので、潜ることに抵抗感はない。でも、今はやめておこう。また今度一人で泳ぎに来よう。プール以外では泳いだことがないので、ちよつと恥ずかしいのだ。そもそも、久しぶり過ぎて泳げるのかも怪しい。

今は男性陣も見ていることだし、スクール水着だし、余計にね。

「おーい、スーパーから日焼け止め持って来たけど、塗って欲しい人はいるー?」

そうやって、それぞれの方法で遊んでいると、遅めにやって来た花村クンが大きめの日焼け止めを持って現れた。早速コテージのメダルを使ったらしい。しかし、女性陣は見向きもせず、海に夢中になっている。残念、皆既に日焼け止めは塗ってるよ。

「応ッ！ 気が利くのお！ では、さっそく頼むとするぞお！」

「え? ムキムキの男にオイル塗れって? …… うんっ、オツケーだよ！ ぼくって守備範囲が広いからね！」

式大クンが日焼け止めに反応し、小泉さんや遠目にだが西園寺さんがざまあみろとも言いたげに花村を見ていたが、すぐくうれしそうに答えた花村クンによってその瞳は驚愕に見開かれていた。

小泉さんなんかは呆れてしまっているし、西園寺さんはゴミでも見るような目で花村クンを見ている。

「広すぎでしょ…… 一人で全部カバーしちゃってんじゃん」

ただの女の子好きかと思ったら、博愛主義者だったみたいだね。

「ソフフ…… たつぷりヌルヌルと塗りたくってあげるね」

「な、なんじゃあ？ この弩えれえ殺気はっ!？」

ねっとりとした声で言い放った花村クンに、式大クンが身の危機感を感じたようだ。それにかから笑いしてから、木陰で難しい顔をしている日向クンを盗み見る。

まだ悩んでいるんだな。私が遊びに誘いに行くのもいいけれど、この格好で目の前まで行くのは恥ずかしい。

学友と水着で遊んだことなんてないし、水着で遊ぶのなんて、知らない人しかいない市営プールくらいだったし…… 同性ならともかく、やっぱり恥ずかしいよね。

そうして私が悩んでいるうちに、日向クンは吹っ切れたように首を振ると大声で何かを叫び、スイミングバッグを勢いよく掴む。

「どうやら遊ぶことにしたらしい。

「どうしたんですかあ？ 粕枝さん」

「ん？ なんか日向クンも遊ぶのになって、ほら」

近くにいた罪木さんが砂に埋まりながら私に質問をしてきたので、私も視線を合わせるようにしやがんで答える。

「ところで、なんで埋まってるの？」

「こうするとお友達に喜んでもらえるんです」

「普通に水遊びしてもいいんだよ？ 皆好き勝手してるみたいだし」

「うゆう…… ならどうしましょう…… 一人で遊ぶなんて…… 分らないですう……」

お友達ねえ…… 少なくとも、それは皆で遊んだときにふざけてやることだし、今はそれぞれで遊んでるんだからやらなくてもいいと思うんだ。砂があったかくて気持ちよさそうなのは確かだけだね。

「おーい、みんなー！ 俺を忘れてんじやないだろうなー！ おいおい、待ってくれってー！ 俺も混ぜてくれよー！ …… って、あれ

「？」

笑顔の眩しい日向クンが意気揚々とこちらに走ってきたが、途中でその歩みが止まってしまふ。

それは、それぞれ遊んでいた私たちも一緒だ。皆戸惑いの声をあげ、空を見上げている。しかしそれも仕方ない。

脅威的な速度で、今まで青かった空が灰色一色の曇天になってしまったのだから。

「あ、あわ…… あわわわ…… な、なんでちゆか！ これええええええっ!!」

「はわわわっ！ なんですかあ!？」

砂に埋まって空をずっと見ていた罪木さんには、その光景はよりいっそう不気味に映っただろう。それに加え、ウサミ先生の悲痛な声と、太陽を遮られたことで困惑した皆が一斉に空を見上げ、叫び声をあげていく。

「なんじゃあ、こりやあああ!？」

「な、なにが起きてるってんだよオ!？」

「どういうことっすかあ!？ いきなり寒くなったすよお!」

「あれあれあれ? ど、どういうことなのかな、これは?」

式大クンが叫び、左右田クンが急いで砂浜に上がって来る。

次いで澤田さんが水面から顔を出して吃驚の声をあげ、花村クンは完全に混乱したようで、頭を抱えてしまっている。

「み、皆海から上がって！ 海が荒れたら危ないわよ!」

「…… 何が起こっているんだ?」

冷静に判断したのは小泉さんと辺古山さんだ。素早く声をあげ、皆はその声に従って次々と海からあがってくる。

皆が一番動揺しているウサミ先生になにかあるのかと思ったのか、遊びに来なかった面々の元へと走り寄っていく。

そこでは尚もウサミ先生が混乱したように空を見上げていた。

「ど、どうして…… あちしは何もしてないのに…… こんなことが? ありえないでちゆ! こんなことあるはずないでちゆって!」

そして、ウサミ先生の声に呼応したようなタイミングで、ヤシの木についたモニターに電源が入った。

「あー、あー！　マイクチェック、マイクチェック！　あー、あー！　あー、あー！　聞こえますかー、聞こえますかー？」

モニターにはウサミ先生が使ったときのように鮮明ではなく、なにかのシルエットとノイズの強い砂嵐が覆っている。クマのぬいぐるみのように思えるそのシルエットからは、映像とは裏腹に鮮明な音声が伝わって来た。

曇天になってしまったこの場にそぐわない、いつそ能天気なほどのその声……　ウサミと違い、幼さの欠片もない癖のある声が響く。

能天気さがかえって人の恐怖を狩り立てるようなその声は、くぐもった笑い声をあげてから一方的にこう告げた。

「うぷぷ、こいちゃった？　ビックラこいちゃった？　……　ですよねー！　さて、大変長らくお待ちせいたしました。くだらない余興はこれぐらいにして……　そろそろ、真打のご登場でございますよ！　オマエラ、ジャバウオック公園にお集りくださいー！」

また移動するの!?　しかもホテルに戻って着替えてから更に公園まで行かないといけないなんて、絶望的だよ。

「ま、まさか今の声って！　あちしがなんとかしないとっ!!」

「あつ、おいっ！　待てよー！」

そう言って、日向くんが引き留めるよりも早く、ウサミ先生もその場から消えてしまった。

「ジャバウオック公園か……」

それだけを把握してすぐさま私は駆け出した。

こんなときにまで遅れたくはないのだ。決断するのは早いほうが良い。

そして、困惑の声と皆の意見を背に、私はホテルに向かって走った。嫌な予感と、確かな絶望を胸に秘めて……

Artificial Play
No. 14 『失樂園』 ―二色―

結局男性陣に追い抜かれながらジャバウオック公園に向かうと、既にことは始まっていた。

そこには右半身が白、左半身が黒で、黒い半身は悪魔のように凶悪な顔をしたクマと、白とピンクのツートンカラーになったウサギがいた。ウサギは右耳に見覚えのあるピンクのリボンをしており、大きなでべその下におむつのようなものを履いている。

「うう、グスン」

「…… どういうこと？ 十神くん」

泣いてしまっているウサミ先生に目を向け、丁度隣になった十神クンに状況を確認する。反対隣にいる日向クンは、ここに来たばかりの頃のように混乱していて何も言えないようだった。

「あのモノクマとかいうぬいぐるみがウサミのステッキを折り、ウサミを改造してしまったようだ。ヤツは “ウサミの立場があやふやだから、妹のモノミという設定にした “ などと言っていたが…… どういう意味だろうな？」

「ふうん…… わけ分からないね。現状は意味不明すぎてなんとも言えないんじゃないかな。あと、手間をかけちゃって悪いんだけどさ、ウサミ先生…… じゃなくて、モノミだっけ？ あの子はなにか言っていた？」

まさか十神クンが律儀に私なんかへ回答をくれるとは思ってなかったけど、これはありがたい誤算だね。訊き洩らした怪しい発言をメモすることができると、そこから考察を広げていくこともできそうだね。

聞いてもいないのになにか言って、ボロを出してしまったら困るし、その善意に乗っからせてもらおうかな。

“せめてマジカルステッキがあれば、性格の悪いモノクマなんて

やっつけられるのに “ などと言っていたな。俺が気になったのはそのくらいか”

次々と皆が集まり、場が混乱し始めている。その喧騒の中で、私は白い手帳に彼からの証言を書き込みつつ、モノクマの言葉にも耳を傾ける。こうやって色々できるし、早めに来られて良かった。手帳も持ってきておいて良かった。現実にはバックログなんて便利なものもないし、リセットだってできやしない。全てその人の記憶力次第だ。もしくは聞いたその場で記録を残すこと。記録と言うものはこれだから大事なのだ。

「ウサミ先生はあのステッキを使って鶏を牛に変えたり、教室からこの島に移動したりしてたから、案外魔法っていうのも出まかせじゃないのかな？」

「流石にそれはないだろう。馬鹿馬鹿しすぎる。もつとまともな意見はないのか、愚民め」

「そこまで言うかな、普通。それにしても冷静だね？ 十神くん。皆混乱してるっていうのに」

さすがに却下されたか。でもまあ、それは仕方ないか。

「フンッ、貴様等愚民とは出来が違うのだ。こういうときにこそ冷静でなくてどうする？」

「へえ、さすが超高校級の御曹司様だね？ 噂に違わない完璧っぷり、恐れ入るね」

「貴様こそ、まるで分かったたかのような冷静さだな。なにを企んでいる？」

「まさか。これでも混乱してるんだよ？ 危険は嫌いだから……ところかまわず疑ってかかりたいだけなんだけどね、キミは深読みしすぎなんじゃない？」

隣同士でピリピリした緊張感が漂い、ただの皮肉り合いになってきたところでモノクマが動きを見せた。日向くんはモノクマに夢中で、こちらが険悪な雰囲気になっているのは気が付いていないようだ。モノクマが希望ヶ峰学園の学園長だと発言したので、一応それも書き込んでおく。

チラと十神クンを覗き見ると彼の顔は心なしか青褪めているようにも思う。……なんだ、彼もちやんと人間らしいところがあるんだ。恐怖を感じている、ただの人なんだな。

自分の背筋に伝う冷たい汗を意識しながらポーカーフェイスを気取り、真顔でモノクマの説明を聴く。

「怯えるくらいならば余計な意地を張るな」

小声で聞こえたその言葉に視線だけ向けると、こちらを見ていた十神クンと一瞬だけ目が合う。しかしそれはすぐに逸らされ、静観する態勢になった。

「キミに言われたくない……」

捨て台詞を吐いて黙り込む。そして黙ったまま日向クンの左隣へと移動した。

そこからは、モノクマの大演説が始まった。

「とにもかくにも、これで全員揃ったようすな。では、さっそく、学園長としてオマエラに宣言します！ 今から」コロシアイ修学旅行 “ を始めまーす！ ”

白黒のクマはそう宣言すると心底楽しそうに手を挙げた。

「仲良く暮らすことが目的の修学旅行なんて、刺激もないし退屈だしつまんなーい！ そんなゲームなんて誰もやりたくないって！ オマエラだつてそうでしょ!?!」

それは携帯機ゲームとかならの話だよ。現実で、自分が駒になったゲーム。しかもコロシアイだなんて、誰がやりたがるものか。誰だつて死にたくはないし、痛い思いはしたくないんだよ。

急激に冷めていき、ローテンションになる一方で、真剣にモノクマの言葉を聴いている十神クンを日向クン越しに覗き見る。日向クンは更なる宣言で、想定していた恐ろしい事態が訪れたことに愕然としている。十神クンは真意を見分けようとしているのだろうか。汗を流しながらも静観の体制は崩さない。

「というわけで “ コロシアイ修学旅行 ” を始めましょう！もちろん、参加者はオマエラだよ！」

「コ、コロシアイ?」

モノクマの言葉に分かりやすく動揺している花村クンを横目に、ウサミ先生…… じゃなくてモノミが動くのが見えた。

「な、なに言ってるんでちゆか！ そんな血生臭い展開は断固として許しまちえんよー！」

そう言つて果敢にモノクマへと向かつて行つたモノミは、なす術もなくモノクマに蹴り上げられ、悲鳴をあげながらぼよんぼよんと地面を跳ねる。

「うぎやあああああ！ 痛い！ 蹴られると凄く痛いでちゆー！」

「まったくモノミって頭の弱い子だね。いくら言つたら分かるのかな。あのね、お兄ちゃんより優れた妹なんて、マンガの世界にしか存在しないんだよ？」

でも、妹より優れた姉はいないって言うんでしょ？

ぐぐもつた呻き声をあげながらお腹を押さえているモノミをしり目に、モノクマが改まった口調で言う。

「さて、少し脱線しちゃったけど、『コロシアイ修学旅行』の説明に戻りましょうか」

「うゆゆゆう…… そ、そのコロシアイって…… どういう意味ですかあ？」

泣きそうな罪木さんが、恐る恐ると言つた様子でモノクマへと尋ねる。

しかし、現実逃避しようにも文字通りの意味を提示したモノクマによつてそれも一刀両断されてしまった。

「意味なんて聞くまでもないじゃん！ もちろん “ 殺し合い ” に決まってるじゃん！」

殺し合いなんて物騒な言葉で皆が反応しないわけがなく、信じられないというように悲痛な声で左右田クンが叫んだ。

「へえ…… 殺し合いねえ…… こ、殺し合いいいいいいいいい！？」
「な、なに言ってるのさ！ そんなのありえないでしょ！」

花村クンも頭を抱えながら叫ぶ。

しかし、モノクマはいっそ暢気なほどの声で残酷な言葉を投げつけ続ける。

言葉さえも出てこない人物もいるようだ。それくらい、皆混乱している。

「だってー、島から出る条件が “みんな仲良く” とか、そんなの又ルくて退屈でしょ？ だから、ルール変更！ もし、この島から出たのなら、仲間の誰かを殺してください！ そして、 “学級裁判” を逃げ延びてくださいーい！」

「…… 学級裁判？」

七海さんが首を傾げて復唱すると、いいところを訊いてくれたと言いたげにモノクマがテンションを上げる。

「そうっ！ 学級裁判こそが、この 『ロシアイ修学旅行の醍醐味なのです！』」

つまりこうだ。

仲間内で殺人が発生した場合、**実行犯**…… クロ含め生き残った全員で学級裁判を行う。学級裁判の参加は義務である。

学級裁判ではクロと、それ以外のシロとの対決を行い、『身内に潜む殺人を犯したクロは誰か？』を議論。

最後の投票、多数決でだれがクロかを決め、答え合わせをする。

見事クロを暴き出せばクロはおしおきされ、残ったメンバーは修学旅行を続行。もし間違えた答えを出してしまえば、罪を逃れたクロだけが生き残り、島を脱出する “権利” が与えられる。そして残ったシロは全員おしおきされるという内容である。

個人的には死ぬことのないこの島から出るだなんて論外もいいところなのだが、皆はそうもいかないようだ。ここから脱出してやりたいたと言っていた面々は尚更。動揺していない人物はいない。

「つまり、誰かを殺して学級裁判を生き延びられれば、そいつだけは生きて島から出られるってわけだね。ただし、学級裁判を逃げ延びられなかった場合は、犯人だけがおしおきとなる…… うぷぷっ！ね、簡単でしょー？」

手帳に書き込むとすれば、ルール変更っていう部分かな。

変なことばかり言っているモノクマだが、それが全て出まかせかと言われると、ちよつと分からない。判断を付けにくい。今の状態では

意味不明なだけだ。

「つーか、さつきから連呼してる。おしおき。ってのはなんのこ
とだよ?」

左右田クンが恐らく、全員が気になっていたであろうことをモノク
マに尋ねる。

しかし、それは訊いてはいけないことだったのかもしれない。追
詰められている皆の精神を、さらに追い込むことになったのだ。

「噛み砕いて言うところ、処刑だね!」

「しよ、処刑!」

ソニアさんが悲鳴をあげるように、叫び、顔を覆った。

おしおきという間の抜けた言葉に込められた意味が、物騒な、そし
て妙にリアルな響きとなって胸にストンと落ちる。

処刑という恐怖の響きに皆が怯えている。コロシアイ、処刑、なん
て嫌な響きなんだろう。なんて気持ち悪い言葉なのだろう。

「学級裁判後の愉快なおしおきタイム! これも」コロシアイ修学
旅行 “のお楽しみの一つになるね。うぷぷ、どんな鳥肌モノのおし
おきが飛び出すのか、今から楽しみだなーつと…… なんちゃらク
ローで脳天串刺しとか、ユーモア満点なおしおきもあればいいよね
!」

キン肉マン好きなのかな、モノクマ。いやそれより…… ユーモア
とは一体。

「えーと、殺し方は問いません。ポピュラーな撲殺刺殺絞殺毒殺から
始まり…… 射殺殴殺轢殺焼殺爆殺惨殺溺殺感電殺墜落殺呪殺……

どうぞ、好きな殺し方を自由に選んでください。時間無制限の人
殺し放題…… 人殺しのバイキング…… 人殺しのアミューズメン
トパーク…… それが、この “コロシアイ修学旅行 “なのでーす
!」

その言葉に、私は胸が痛むのを感じた。心臓が締め付けられるよう
な痛みに加え、じくじくと腕が痛み、足が震えて立っていられないよ
うな、何か、大切な物が失われたような…… いや、そんなものは幻
痛だ。これはあの白黒クマが恐怖を煽るから起こる幻痛だ。コロシ

アイなどというありえないことを宣言されたからこそ引き起こされた物。

…… いや、もしかしたら私も、コロシアイに身に覚えがあるのかもしれないのだが、そんなことはどうでもいいのだ。所詮私も、一人の人殺しだ。

そうだ、希望ヶ峰に入る前から私は足を踏み外していたのだ。だったら、ここでも変わらず、ただ一心に生きることを目指せばいい。

皆のように、正体不明な胸の痛みというわけではないのだ。

「ふぎ…… けてんじゃねーぞ……」

九頭龍くんが前とは違い、弱弱しく声を上げる。

「そ、そうだ！ 誰が人殺しなんかするかって！」

左右田くんが蒼白な顔でモノクマに反論する。しかし、モノクマは首を傾げ 「〃 殺せ 〃 とは言っていないよー」 と、楽し気に笑っている。

「やるかやらないかはオマエラ自身が決めることだからね」

「あそこまで言っておいて、あくまでただの提案だとも言うつもり？」

「そうだよ？ 島から出るならコロシアイが条件。そう言ってるだけで、強制力はないんだよ。うぷぷぷ」

コロシアイをすれば島から出られる。しかし、私には島から出る理由もない。無視できるはずだが、悪寒が背を撫でる。

ここいらで早々に質問ラッシュをしたいところだけれど、そうするとモノクマだけでなくて、全員から浮いて注目を集めることになる。

あまり突っ込んだことを訊いてモノクマに 「殺る気満々だね！」なんて言われたくないし、ここは引いておくべきか。

「嘘は吐いていないようだな……だが、もつと質が悪い」

「…… そうだね、十神くん」

日向くんが胸を押えて息苦しそうにしているが、モノクマは構わず話を続ける。

「だけど、気を付けてね！ 青春は短いんだからね！ 40代になっ

てからコロシアイを始めても遅いからね！」

そんな40から美肌ケアを始めて遅いみたいな言い方しなくても。「し、信じない…… 信じない…… ぼくはなにも信じませんよー」と

耳を塞いだ振りをしながらそっぽを向く花村クン。ひたすら事実を否定し続けるのも、不安定な精神になるから危険だな。花村クンの精神状態が心配だ。

「さ、殺人が起きなかつたらどうなるの？ このまま私たちをこの島から出さないってこと？」

「さあ、どうでしょう！ とにかく、これからは、清く正しくコロシアイ修学旅行って方向で頼みます」

小泉さんのあの言葉でお茶を濁すってことは、別の脱出手段もあるのだろうか。ここはメモしておこう。

「ま、待ちなさいよ！ どうしてアタシたちが殺しあわなくちゃいけないのよー！」

「そんなの決まってるじゃん。オマエラには殺し合うべき理由があるからだよ」

尚も畳みかける小泉さんにモノクマが爆弾を投下する。

そして、それに沈黙を守っていた日向クンが驚きの声を漏らした。「…… え？」

しかし、思考停止のまま放心していた面々が漸くここで動き出した。

前に進み出て来たのは式大クン、終里さん、辺古山さんだ。

「待ったれや、さつきから好き放題言ってくれるじゃねーか… 直接的な暴力は好きじゃねーんだが、仕方ねーみてーだなああああッ！」

「なんだよ、バトルか？ あの白黒のヤツをぶつ叩きやいいのか？」

「誰がコロシアイなどするか…… 力づくでも止めさせてもらおうぞ」「ふざけたこと言ってるよ、この体育会系軍団が招致しないっすよー！」

澤田さんは丁度体育会系集団の後ろにいたためか、モノクマから見えるないように隠れつつも挑発するように叫んでいる。

そうやって黒幕に対して反抗をするのはお約束だが、それを黒幕が許さないのもまた、お約束である。

「あー、そうですか…… まあ、これもお約束ってヤツですかね…… そっちが力づくなら、こっちも力づくで返すしかないよね……」

テンションを一時的に下げたモノクマが背後の石像に向く。そして、目線だけをこちらにやりながら爪を伸ばし、凶悪な顔で宣言した。「力づくって…… 何をするつもりでちゅか!」

蹴り飛ばされた体勢から体を起こしたモノミが、吹っ飛ばされた位置から日向クンの斜め前へと歩み寄る。

その間にもモノクマは石像の前でぶつぶつとなにかを呟き、田中クンが喜びそうなセリフを言って腕を掲げる。

「逆巻け、光と闇の狭間から生まれし神々よ…… 古の契約に従い…… 今こそ汝らを召喚する…… いでよ、モノケモノー!」

すると石像が地震にあったかのように揺れ始めた。

表面の石が剥がれ落ち、剥がれ落ちた断面から見える動物の目玉が赤く光る…… モノクマの左目とおなじように。

そして、次の瞬間には巨大な鉄の塊となった蛇、馬、鷲、人間、虎型の兵器がモノクマの背後に降臨していたのだ。

…… トランスフォームかなにかかな?

「え、え?」

「な、なんで、石像が動いたの?」

もはや思考停止寸前な女性陣。

「石像じゃないよ! モノケモノだよ!」

「ば、化物だああああッ!」

叫び出す左右田クン。

「だから、モノケモノだつてば!」

これがアニメやゲーム、はたまた夢ならばベターな展開だっただろう。それが今、目の前に起こったのだ。混乱すると言う方が無茶である。日向クンと、反対側にいる十神クンの冷たい「は?」が聞こえてきたのも、なにもおかしくはない。私だって、目の前の光景を現実ではありえないと考えているのだ。

知っていても自身の脳が正常か、正気か疑うのだ。日向クンなんてまた気絶してしまいそうなほど放心している。無理もないが、女子が皆気絶しないのに自分だけ気絶するのはさすがに情けないよ、日向クン。

「夢…… じゃないよね」

「いてっ、狛枝！ なにするんだよ！」

「ああごめん、間違えたみたい。痛いなら、夢じゃないみたいだね。よかった…… いや、よくない、のかな？」

日向クンの頬をむにと爪つてみたが、痛みはあるようだ。

白々しいとかなんとか日向クンが元気に文句を言い始めたので気絶は回避したようだ。下は石畳なんだから、気絶なんてしたら痛いどころでは済まない。それに比べたらちよつとしたお茶目くらい別にいいじゃない。

「い、嫌です…… 嫌ですつてえ…… こんな…… おかしいですよお！」

「オレは…… 悪い夢でも見てんのか？」

「きやはは！ 夢だつてさー！ 脳みそお花畑だつてさー！」

罪木さんが泣き、九頭龍クンが棒立ちのままにモノケモノを見ている。そして、近くにいた西園寺さんが空元気なのか、本気なのか、そんな九頭龍クンをからかっている。彼女の顔色もしつかり青くなっているの、あの対応は空元気が濃厚だろうか。

「まったくもう、夢だのウソだの疑い深いんだから…… オマエラの常識というちつぽけな粹に当てはめてそれに収まらないモノは否定する…… くだらないね。なにも知らない原始人の方がまだマシだよ！ 物事をジャンル分けしたがるのって、ほとんど現代病だよね。」
ジャバウオツク島では常識に捉われてはいけないのですね！ って言えばいいのかな。現へと至る病？

でもあんな技術があるだなんて知らないし、知らないことは否定したくなるのが人間だよ。それに、自分たちから逸脱したものを倦厭したがるのも人間だ。

名前をつけるなら 「狩り立てる恐怖」 とか？ なんて、ふざけて

る場合じゃないか。

「ミナサン！ 下がってくだちやーい！ あ、あちしがミナサンを守りまちゅ！ この命に代えても…… ミナサンを守ってみせまちゅ！」

良い子だなあ、先生。名前変わっちゃったからもうモノミって呼ぶけど。

まるでアニメに出て来る美少女ヒロインみたいだ。口調が幼くなければ十分ヒロインになりそうだけど、口調のせいでマスクト感が否めないね。恐怖を前に何もできない私たちとは違って勇敢で素晴らしい人情だね。…… 勇敢と蛮勇は紙一重だけどね。

「うつぶ… あれ、なんだこれ？ うつぶ…うつぶ…あつ、そうか！ これって吐き気だね！ ベタバタの正義感に吐き気をもよおしちゃったんだね！」

右隣にいる日向クンの丁度前で、小さな正義のヒロインはその腕を広げている。

十神クンはその真後ろにはおらず、随分遠い所に移動している。私 の場所も十分距離があるが、日向クンの立ち位置には嫌な予感しかない。

「よーし、決めたぞー！ だったら ” 見せしめ ” はオマエだーッ！」

そう言ってから、モノクマは巨大な鷲のモノケモノに乗った。

健気にも、日向クンの斜め前から動かないモノミの目の前で、折りたたまれていたガトリングガンが鷲の体の中から現れる。

生徒を庇っているモノミはいよいよ泣き出してしまったが、モノクマはそれに構わず恍惚の表情を見せる。

そしてモノクマが手を挙げ、一瞬その体勢で制止した。

私は、自分たちの立ち位置を交互に見ながら、焦燥感に駆られた。嫌な予感が見事的中しそうである。

モノミの後ろにいながら呆然とその姿を見守っている日向クンの襟を掴み、勢いよく引き寄せる。力が強くないせいで、引っ張られる

日向クンが持つ無意識の抵抗と合わさり、力をかけすぎて私はその場に尻餅をつき、日向クンもよろけ、モノミの背後から外れた。

「いてっ」

「おい、何するんだよー」

日向クンが先程の位置から2、3歩離れた位置で転んだ私を見下ろしてくる。そしてその後ろで、ポケットに入っていたはずの日記帳が転がった。

「あっ……」

まるで、それを待っていたかのようなタイミングで振り下ろされたモノクマの腕を見やりながら、その場面はスローのように、だけれど圧倒的に過ぎ去っていった。

モノミの体は銃によつて次々と穴を開けていき、あたりに羽毛のように中綿がはらはらと落ちていく。

それと同時に紙屑となつていく日記帳の姿を目に入れ、間の抜けた声を漏らす。

元々薄くてあまり使っていない日記帳だったが、それなりにシヨックだったのか胸に痛みが走る。見られて困る内容が書いてあったわけではないが、思い出が失われるようで嫌だった。

「ッ、は？」

そして、離れたはずである日向クンの右頬を流れ弾が掠つていき、彼は頬から流れる僅かな血に顔を青褪めさせる。

「あ……」

最後にはバラバラとなつたヌイグルミの残がいと、穴だらけになつて水玉模様のようになったピンクのリボンがはらりはらりと風に流れ、私の手の届く範囲に落ちて来る。

私は思わず空に手を伸ばし、それを受け止めた。どうしてそうやって動いたのか私にも分からなかったが、きつと故人の思い出を取つておく習性にも似た習慣に、咄嗟に伸ばしてしまったのだらうと当たりを付ける。

尻餅をついたまま私は溜息を吐いて、穴だらけになつたそれをポケットに突っ込んだ。

日記帳はダメになってしまったが、日向クンの怪我が軽かったからよしとするしか…… ないな。

「う…… うわ、うわあああああああああつ!!」

「な、なんだよそれエエツ!!」

絶叫を上げる花村クンと左右田クンを横目で見ながら、安心して意識がどこかへ行ってしまうている日向クンに声をかける。

「日向クン、無事?」

「あ…… ああ…… 悪い、粕枝……」

ゆつくりと、座ったままの私を見下ろす日向クンに 「後でその傷手当てするんだよ?」 と言って笑う。

「ごめんと言ったときの彼の視線は、しっかり日記帳に向いていたが、私は 「大したものじゃないからいいんだよ」 と呟いて空を仰いだ。

座ったままなのは先程の銃声と轟音、風圧を間近に見てしまったため腰が抜けているのだ。リボンを拾ったあと、安心感からか、全身に脱力感が襲ったのだ。まったく、情けない。壊れたとはいえ、日記帳も回収できないし。

さて、こういうときはまず、落ち着くことが大事なのだ。そうすれば自律神経系も回復して、動けるようになる。なにも腰だけが動かないわけではないので暫く全身を動かせないが、口だけは達者に動いたので笑って誤魔化す。

「…… フン、腰抜けが。なにをしている」

気分が悪そうな日向クンは見事に騙されてくれたが、十神クンにはそうもいかなかったようだ。

なんだよ、すっかり自分も青い顔をしているってのに。人を助ける余裕があるなんて、すごいねまったく。

「よく言うよ。自分だって……」

「手は貸さんほうがいいのか?」

「…… ありがとう」

彼と話すことで動くようになり、手を取って立ち上がる。彼、こんな人に優しくかっただろうか? 違和感がありすぎてなんだか変な感

じだ。

「さて、これでオマエラも分かってくれたと思うけど……」

スカートとパーカーの裾をはらって起き上がる。

すると、モノクマの演説も佳境に入った。

モノクマの、歪な左目が赤く光る。それは無機質な丸みを帯びた黒豆のような右目を、それだけでは可愛らしいはずのその目を一層不気味にしている。その声は感情豊かなはずなのに、機械的な外見のせいで無機質なキリングマシンを目の前にしたような、そんな絶望感が足先から背筋を伝って這い上ってくるようだ。

そして同時に、モノクマに対するふつつつと湧き上がってくるような嫌悪も身体の芯に染み込んでいくような感覚を覚える。これはなんだろう？ 悲哀、嫌悪、悔恨、憎悪、悪意、殺意、諦観、反抗心、復讐心…… どれも違うようで、違わないような気もする。それら全部がぐちゃぐちゃに混ざったような複雑な感情の奔流が思考をかき乱し、今すぐにも怒鳴り出したいような気持ちになるのだ。

「あのね、オマエラはボクに逆らえないんだよ。無惨な海の藻くずになりたくなかったら、ボクには決して逆らわないことだね！ 言っとくけど、ボクには慈悲も同情も憐みもないよ。だって、ボクはクマだからね。南の島でテンション上がっちゃったー、なんて言い訳は、一切通用しないだからねっ！」

深呼吸をして、流れ込んできた覚えのない感情を抑え込む。

今これを振りかざしてしまえばモノミの二の舞であることなど分かっているからだ。

モノクマに抱いた悪意の数々を消化し、そして仕舞い込む。今、それは必要ない。死んでしまったら意味がない。下手に逆らって死ぬのは嫌だ。だから抑え込む。

私に必要なのは生存欲だけだ。

「それと、”コロシアイ修学旅行”を始めるにあたって、電子生徒手帳をアップデートしておいたからね。そこに”コロシアイ修学旅行”のルールがあるので、後でじっくりと読んでおいてください。ルールを知らなかったなんて言い訳が通用しないのは、どこの世

界でもどこの社会でも一緒だよ。ではでは… 開放的で過酷で凄惨な南国の島での修学旅行をどうぞ、お楽しみあれー！」

私が混乱しているうちに、一方的にそれだけ言い残してモノクマはモノケモノと共に去って行った。

その場の誰もが、疲れ切った顔を青く染めていた。

青い顔の理由がモノクマでない者など、私くらいだろうか。

私はこんがらがった頭の中を整理するために周囲を見渡し、観察することにした。

そして、動揺が大きそうな人物を心のメモに書き留める。後で黒い手帳に書き込むからだ。生存本能に従い、動き出しそうな者、精神の弱そうな者を順に見回し、全員分の分析を纏める。

暫く沈黙が続き、最初に口火を切ったのは目を泳がせる花村クンだった。

「え、えっと…… えっと…… ぼ、ぼくは…… あんなの信じないよ…… 以上ね…… これにて終了ね…… 信じない、信じない、信じないよ……」

その場にいる誰もが同じように思っていることを言った。そして、式大クンもまた頭を抱えて呻く。

「に、人間や動物相手ならまだしも…… あんな弩デケエ化け物相手に、一体どうしろつちゅーんじゃあー！」

「あ、ありえねーって…… どうして…… こんなありえねーことが起こるんだよ……」

「いや、ありえないこと…… ではない。モノケモノとやらは機械で動いているだけ……となれば、あのヌイグルミもそうなのだろう。そして機械である以上は…… 誰かがそれを作り、操作しているということだ」

左右田クンのありえないという回答に、冷静な十神クンが言葉を返す。

「では、その誰かの仕業か…… ? 私達がこんな訳の分からないことに巻き込まれたのも……」

そして辺古山さんがそう言ったことでハツとしたような左右田ク

ンがこちらを睨んできた。なんで私？ 評判があるからか？ いつも意図的に起こしているわけじゃないの？

「ねえ、誰なの!? それって誰なのよっ!?」

小泉さんがパニックになったかのように叫ぶ。そして、弱った表情のソニアさんに目を向けた左右田クンはとうとう私に噛みついた。

「オメーだろ！ オメーがやってるんだろオ!? いい加減にしてくれよオー！」

「……私？」

まさか、こんなところで不名誉なあだ名がネックになるとは。

困ったな。流石に言い争いになるとは思ってたなかつた。

「銀行強盗で人質にされた挙句！ 犯人だけ建物の倒壊に巻き込まれ、オメー以外の人質は全員死亡と重傷！ あの医療機関最大最悪の事件だってオメーだけが生き残って他全員死んでる！ オメーが全部やってんだろ!」

なんでそんなに詳しく知ってるんだよ、左右田クン。

「あはは、まさかのご指名だなんて光栄だね…… 大体、建物が倒壊したのだって犯人の自爆だって報道されたし、病院の件はもう一人生き残りがいるんだよ？ ただの偶然だよ、全部。私にそんな高度な技術はないし、後ろ盾だつてない。それを言うならキミこそ、メカニックなんだからあれくらい作れるんじゃない？ そのところは……」

「くだらん言い争いはやめろ」
そう言って続けようとした言葉は十神クンによって遮られた。それに予想外だったのか左右田クンも口をつぐみ、私も続きを言う前に閉じる。

すると十神クンからの両者に対するフォローが飛び出した。

「あのクマが喋っている間も俺達はずっと一カ所にいただろう。それにあの対応を考えるに録音というのも、可能性が低い。この場にいる俺達には不可能だ」

「あは……あははは……誰だつていいよ……そ、それよりさ、お腹空かない? ご飯にしちやおうよ。ね? ね?」

「……先に食べていいよ」

花村クンが全てを放り出した発言をしたが、七海さんによってそれも撃墜される。皆真剣に十神クンの話を聴いているのだ。

「いくら混乱しようとも取り乱そうとも構わない。だが、これだけは肝に銘じておけ。どこの誰が俺達を陥れようとしているのかは知らないが……今の俺達が一番警戒すべきなのは、あの非常識な機械でも、それを操る誰かでもない。それよりも、まず警戒すべきなのは……ここに居る俺達自身の方だ」

田中クンと花村クンはどこか別の方向を向いていて、終里さんは誰とも知れぬ黒幕の存在にいきり立ってるようだ。他の皆は真剣に十神の方へと視線を向けて話を聴いている。

「見ず知らずの連中と共に南国の島に連れて来られ、そこで殺し合いを提示され、そうやって植え付けられた絶望的な恐怖心から逃れたいという気持ちこそが……俺達の最大の敵なんだ」

その言葉で周囲の皆が互いに顔を見回し始めた。それは日向クンも同様で、私も視線だけを動かして先程までやっていたように皆の反応を観察する。

そして分かったのは、その可能性が自分に少しでもあることを、全員が認識しているということだった。青褪めた表情の人、ぶるぶる震える体を押える人、それに表面上は冷静な十神。

仲間を殺した生徒だけがこの島から出られる。

…… なら、この島から出る気のない人はどうすればいいのだろうか。

安穏と、平穏と、仲良くもいいかも、なんて思っていた私は、どうすればいいのだろうか。

その日は私にとっても単なる365分の1日なんかじゃなくって、もつと特別な意味を持つ1日だった。最悪の予感がする、1日だった。

――そして、気がつくところには既に日記帳の残骸もなにも綺麗なさつぱり、残されていなかった。

No.?? 『絶対絶望』―収集癖―

歩くことを止め、進むことを拒否し、前を向くことさえできなくなったモノクロームのあの子と、大人とエゴと、僅かな希望に裏切られた二つ結びの目隠しさんがいた証は小さな小さな写真の中にしかない。

間違いなく私の理解者だった暖かい夕焼け色のあの子もそつと閉じられた写真の中に。

諦めきつた目をした母親と、狂ってしまった憎い父親は、生まれ落ちた際に分けられた私の血肉の中に。

白兔のように走り去っていなくなってしまった白い毛並みのあの子と、私の代わりに轢き倒されたあの子の一部は大事に大事に編み込んでずつと共に。

優しかった第二の両親。手に掴んだ小瓶の中には、染められた大きな石ころの、小さな欠片がカラカラカラリと音を鳴らす。

私から離れていった大好きなあの子は今頃幸せだろうか。便りがないのが良い頼りであると思いたい。彼女だけは私から離れたのだから生きている。どこかで、きつと。

1番1番大好きな人がこの世のどこかにいるという事実だけで私も幸せになれる。幸せなのだ。絶対に。

欲を出してはいけない。私の中の呪いは最高で最悪で最低なタイミングを巧妙に見計らっているのだ。きつと私の大切な物はその最悪なタイミングで攫われていってしまう。

今までがずつとそうだった。全て、全て奪われた。私のせいだ。だから私は彼女に呪いをかけた。勝手に死なないように。私が生きている限り、目に見えなくとも彼女はこの世のどこかにいる。そう思えるだけで幸せだった。

だけれど…… 最期に父に立ち向かった勇敢な怪物たち。

名前のない怪物たち。彼らがこの世にいたという証はない。ない。ないのだ。どこにもない。全て焼け落ちてしまった。あのとき、あのときに。

けの生活。

“ 彼女 ” に提供された平穩。 “ 彼女 ” の望み通りに受け取った生活。何もかもが揺らがぬ外に出ないだけの、普通の生活。ここには私の望む平穩がある。形ある物たちがそばに存在する。あの子が今もどこかで生きている。それだけで私は生きていける。

たとえ変化のないツマライ日常でも愛おしい。

生きることができるのなら “ 彼女 ” の望み通りに籠の鳥になつてあげよう。排他的で、退廢的で、絶望的で、諦観さえ逃げ出すような箱庭。私だけの部屋。もうどこにも行かない、行けない。

みんなと一緒にの部屋。わたしの部屋……

そういえば “ 彼女 ” はテレビを見るといいことがあるつて言つてたつて。テレビ中継でなにが起こつているかなど、前の知識があるのだから知つている。だけれど、やっぱり少し気になった。

そしてリモコンに手をかけ、ポチりとボタンを押す。

始まつた中継に、その光景に、その大勢の中にいる1人に、私は、目を奪われ、奪われ…… 全身から力が抜けていった。虚脱感と絶望感、それに疑問、確信、憎悪、殺意。

ごちやまぜになつた思考は確かに絶望していて、私は握つていたりモコンを思い切り叩きつけた。

No. 14 『失樂園』―夜散歩―

ルールその6

生徒内で殺人が起きた場合は、その一定時間後に、全員参加の義務付けられる『学級裁判』が行われます

ルールその7

学級裁判で正しいクロを指摘された場合は、『クロだけが処刑』され
ます

ルールその8

学級裁判で正しいクロを指摘できなかった場合は校則違反とみなして残りの生徒は『全員処刑』されます

ルールその9

生き残ったクロは特別措置として罪が免除され、『島からの帰還』が許可されます

ルールその10

3人以上の人間が死体を最初に発見した際に、それを知らせる『死体発見アナウンス』が流れます

ルールその11

監視カメラやモニターをはじめ、島に設置された物を許可なく破壊することを禁じます

ルールその12

この島について調べるのは『自由』です。
特に行動に制限は課せられません

注意

なお、修学旅行のルールは、学園長の都合により順次増えていく場合があります。

「はあ……」

コテージに戻り、ふわふわのベッドをゴロゴロしながらしばし堪能した私は、仰向けに寝転がって電子生徒手帳を確認していた。

生徒手帳の項目には特に変化は見受けられなかったが、ルールの項目内に変化が起きていた。

それが、ウサミ先生の定めたルールの後に追加された、6から12までのルールだ。内容はかね、あのモノクマの言う通りである。

モノクマは変更すると言っていたがウサミ先生の作ったルールに穴が開けられたわけでもないし、コロシアイをしなければ島から出られないのかという小泉さんの質問に曖昧に答えたこともある。

希望的観測をするならば、ウサミ先生の提示した「仲良くすれば帰れる」というのもまだ有効なのかもしれない。

島からの帰還というのも、脱出する権利というのも明確な帰還方法が明示されていないから不安が残る。そこら辺を考慮すると、やはり平穩維持が無難だろうか。

「なにをするにしても、備えあれば憂いなしって言うよね」

黒い手帳を開き、ルールについての疑問を纏めておく。字が汚いのはご愛敬。人に見せる前提の白い手帳とは違い、私しか見ないのでから多少力を抜いても良いというものだ。

習字でも習っておけば違ったのだろうが、日記の早書きのせいで昔よりも字が汚くなった気がする。

ま、それはそれとして……あと懸念があるとすれば、私の哀れな日記帳を誰が持って行ったかだ。

左右田クンの熱烈な告発に夢中で、ひと時でも目を離れた私が悪いが、さすがに不気味である。大したことは書いていないが、私生活が覗かれるようでいい気分とは言えない。寝起きで書いている上に、たまに怖い夢を見てパニックになっていることもある。黒い手帳が目でないほどに取り乱した文字もあるので人によってはS A N値が削れるかもしれないくらいだ。殆ど読めなくなっているだろうが、できれば解読せずに捨てて欲しい所だね。

「背中を押されて動きそうな人物は、思ったよりもいる印象だな」

そして私は、観察した結果一覧を自分で眺め、自嘲気味に笑った。不安定で精神力の弱い人物は誰かが背中を一押しするだけで転が

り落ちていく。知識があるとは言っても死人をなるべく出すつもりはないから、論理的に説明できるようにしておかなければならない。やるやらないは置いておいて、十神くんが思ったよりも冷静なのがやりづらい。いやむしろやりやすい……のかな。警告をばら撒いて彼が巻き込まれないようにするのもいいが、かえって危険な気がする。だからと言って不発弾を放置しておく道理もない。

原作で第一の殺人が起きた理由は間違いないが、私は行動理由が違う。自分が死ぬ可能性のある殺人事件を、それも意図的に起こすメリツトなんてないのだ。

しかし、あそこで爆発した人物をいつまでも放っておくわけにもいかない。いつ、どこで私に牙を剥いてくるか分かったもんじやないからだ。生き残った未来のクロが未確定のシーンに進むのは得策とは言えない。

なにかをして誰かが死んでしまったら、信用ガタ落ちどころか恨まれて殺される可能性も出て来る。それではいけない。

さて、どう動こうか……自身の生存確率を少しでも100に近づける努力でもすればいいか。

「ま、それはあとにして……この部屋を私好みになろう」

ベースは全員同じコテージなのだから少しは趣向を凝らしたい。

なら観葉植物でも持ってこようか。でもあれって重いだろうし、カートごと持ってくるのもありだろうか。いや、花瓶でもいいか。とりあえず、カタログは片っ端から貰って本棚に収めておこう。空だとなんだか寂しいし。

カーテンも変えてしまおうか。いや、いつそ壁紙ごと変えてみるか？ 橙子ちゃんの部屋みたいに一面綺麗な夕焼け色っていうのもありかもしれない。よし、そうしようかな。ポスターでもいいけれど、一面木造が丸出しになつてるのも味気ないよね。

カーペットは白だな。私の色と橙子ちゃんの色。いいよね。

それとも木の壁はそのまま小物だけオレンジにしようか。よく考えればオレンジの壁ってかなり派手な感じするし、品がないよね。橙子ちゃんの部屋は子供だったからこそだし。

…… そうですねばかなり遊び道具もあつたんだっけか。日向クンサバゲーとかやらないかな？ やつたことはないけれど、興味はあるんだよね。左右田クンも…… やつたことはなさそうだけど、いや、そもそも私は嫌われてるからダメだな。

日向クンも青い顔のまま黙って行つちやつたし、「遊んでる場合じゃないだろ！」 って怒られそうだな。

まあ、飾るだけならいいだろう。恰好良いし。

それにスーパーの商品リストも作らないといけないんだよね。

「えーと、希望ヶ峰学園修学旅行実行委員会が、お知らせします。ただいま、午後10時になりました」

学校のチャイム音が鳴り響き、部屋のモニターの電源が勝手に入つた。

「夜は人を惑わせる…… 夜中に散歩して、うっかり殺人鬼と出くわしたらエライことになりますよ！ それが心配で寝られないというオマエラのために、ホテル内に各自のコテージを用意しておきました。それぞれ、自分の部屋で、ゆつくりとお休みくださいませ。ただし……」

モニターにはどこかで豪華な椅子に座り、優雅にトロピカルジュースを嗜むモノクマの姿が映っている。

なんて羨ましい。

「就寝の際にはしっかりと部屋に鍵をかけることを強くお勧めします。どこの誰が人殺しを目論んでるか、分かったもんじやないからねー！ うぶぶつ、ばいならっ！」

ブズン、と途切れたモニターを暫く見つめ、ベッドから体を起こす。「煽るね、まったく。でも、皆が出てこないだろう今の方が散歩には最適かな」

白い手帳と財布、コテージのキーをポケットに確認して伸びをする。

眠くないわけではないが、リスト作りにはかなりの時間が必要になるから昼間より夜に行動した方が良さそう。あんなことがあつたその夜に出歩くほど肝の据わった人がいるとも思えない。

モノクマにからかわれたとしても、そのときはそのときだ。
「あああああああああああああ！」

向かい側のコテージから随分と暴れまわるような音が聞こえて来る。日向クン、波の音が聞こえるくらい安普請やすぶしんな作りなのにそんなことしたらバレバレだよ。

ご近所迷惑で尋ねて脅かしてあげてもいいかな。いや、警戒されるだけか。大人しく聞かなかったフリをしてスーパーマーケットに行こう。

頭上に広がっている空は、星を一面に敷き詰めたような素晴らしいものだった。

超高校級の天文学部なんて人物がいれば星の位置で場所の特定もできたかもしれないが、生憎私にそんな便利な才能が備わっているわけでもない。まるでプラネタリウムのように、といった月並みな感想しか出てこないのだから。

遠くから聞こえるはずの波の音は、美しい夜の雰囲気をぶち壊す日向クンによって遮られている。

……いつまで絶叫しているんだ、あの人は。

カツ、カツ、と石畳に響く自身の靴音を聞きながら、閉まっている門を開け、道路に出る。

無人島だからいいのだが、こういうときに車が突っ込んで来たりすることもあるから手つきは慎重だ。ゆっくりと歩きだし、スーパーマーケットに向かった。

「お、開いてる」

当然のことながらマーケットには店員がいない。だから夜中は店仕舞いをしている可能性も考えていたが、どうやら24時間営業のようだ。

看板は落ちてこない。よかった。

「カタログは片っ端から貰ったし……家具に目を付けておこうかな」

欲しいのは夕ご飯と花瓶、観葉植物、オレンジ色のカーペットに小

物ラック。あとはクッションなんかがあれば嬉しいな。暑いから冷蔵庫も欲しいし、生活用品を先に運んでから大きな家具を運ぶ方がいいよね。

目星だけつけてリスト作りにとりかかろう。

食糧品は濔田さんが言っていたように、食べたいものを探せば出て来ると言えるほどに豊富な品揃えだ。野菜、肉、原料、調味料、加工食品までかなりの数が揃っている。

一品一品名前を確認してリストにするのは時間がかかりすぎるから大まかに分けて書いておこう。そんなんじやリストにならないって言われたとしても人力でやっているのだから仕方ない。

料理のレシピ本もあるみたいだね。これがあればとりあえず知らない料理でも作れそうだ。

花村クンがいるから必要ないかもしれないけど、もしかしたら彼の料理を食べられなくなるかもしれないし、みんなバラバラに食べようってことにも成り得るかもしれない。あつて損はないよね。

商品リスト「食糧」

備考 肉野菜などの生ものから加工食品まで様々。加工品の大きさはアメリカ基準である。

こんなものだろうか。

次は種類の多そうな生活用品。

洗濯洗剤や柔軟剤、リンスやシャンプー、石鹸。女性にも男性にも嬉しいドライヤーまである。化粧品もあるみたいだし、簡単なヘアゴムもある。

調理器具もこのカテゴリに入っているようだ。花村クンが良く使うかもしれないからだろうか。しかし、包丁のカタログはそつと添えであるが包丁自体は扱っていない。包丁が欲しくなったらモノミかモノクマに要請する必要があるということか。

「あれあれー？　こーんな夜中に狛枝さんはなにをしているのかな？

うぷぷ、殺る気満々だねえ。ボク、積極的な人は大好きだよー！」

「つわ、モノクマ……　背後から出てこないでよ、ビックリするから」
「狛枝さんは包丁がほしいのかな？　それともナイフ？　ま、まさか

のまさか！ 肉切り包丁かな!? いいところに目を付けるね！」

厄介なのに絡まれた。ただでさえ夜中で眠たいのに、これは疲労マシマシだね。

これ、今日寝られるかなあ。

「凶器を買うつもりなんてさらさらないよ。……どつか行つてくれないかな？」

「なーんだ、がっかりー！」

いやまてよ、これ、質問攻めするチャンスなんじゃないかな。

「そうだ、モノクマ。訊きたいことがあるんだけど」

「なんですかな？ 殺害方法は自分で考えてくれないと面白くないから嫌ですよ？」

「いや、そうじゃなくつてさ……私この島から出るつもりなんてさらさらないし」

「ふーん？ へえー？ ほうう？ うぶぶぶぶ、そっかあ」

なんだかムカツク言い方だな。

質問と言つたら……結構いっぱいあるけれど、気になるところを一つずつ訊いていくしかないかな。

「無料じゃない商品を日常的に使う場合があったら、メダルが足りなくなると思うんだけど……そういうときってどうするの？」

「ティッシュペーパーかな？ ナニに使うんですかね、はあ、はあ……」

身をよじりながら息を荒げるモノクマからそつと視線を外す。滑らかな動きが逆になんか気持ち悪かったんだ。

「いや、それは違うよ。ほら、コピー用紙とか娯楽用品のほうにあるでしょ？ 皆の分の地図でも書こうかと思っただけ、あれも買わなきゃだめかなって」

ただでさえ薄い手帳を使うのはちよつと思っていたが、メダルの消費は抑えたいし、今訊けるなら訊いたほうがいいだろう。後で困るかもしれないし。

「5人以上から要望があれば生活用品カテゴリーにしてもいいよ。要望は纏めて出して来てもいいし、個別に要望があったときでもオツ

ケー！ でも今日は特別に狛枝さんのために無料にしてあげてもいいよ。睡眠時間を削って頑張っちゃってる狛枝さんが面白いからね！」

「……で、条件は？」

「やっだなー、今言った通りだよー！」

胡散臭い。煽りに乗る気はさらさらないが、なんだかすごく胡散臭い。

ここで無条件に舞い上がってはいけない気もするが……ここは好意を素直に受けないと、無理難題が課されそうなきもする。無料より怖いものはないけれど、仕方ないかな。

「じゃあ、ありがたく使わせてもらおうかな。それとルールのことなんだけど、モノクマは変更って言ってたけど、ウサミ先生が作ったルールはそのままになってるよね？ これって仲良くなって脱出もまだありえるってこと？」

「さあ、どうでしょうね。この島に永住したい狛枝さんには関係ないことなんじゃないの？」

はぐらかす、か。ならこれは保留。

「そう……じゃあこれも躲されそうだけど、脱出する許可っていうのは？」

「そのまんまだよ？ それ以上でもそれ以下でもない……ここから帰れるってことだね！」

これも曖昧。いや、わりとそのままなのだろうか。

やっぱり脱出する手段については言及がないし、これを判断材料にして話すことができるようになったし、収穫ありってことでいいかな。

「この島を調べるのは自由って書いてあったけど、今日の朝は別の島に行けなくなってたよね？ あれって解除されたの？」

「明日になれば分かるよ！ って言いたいとことだけど、まあ、行けないよね。モノクモがガーディアンとして橋を守っているのです！」

「え、なんで？」

まあそこは予想通り。でも本当は知らないはずの情報だし、言わな

い。

モノクマ相手だとやりにくいなあ。ボロ出せないし、日向クンと違つてなんか話にくい。

「最初から全部調べられるのは面白くないでしょー？ だから制限を入れてみたのです！」

「ロシアアイが起きたら解放されるつてところかな……？」

「さあ、どうでしょうねー？ うぶぶぶ」

教える気はなさそうかな。なら、今日話せることはここまでだ。まだ食品しかリストも作れてないし、本当に徹夜することになつちやう。それは嫌だ。断じてごめん。

モノクマも、もしかしたら寝るように催促しに来ているのかもしれないが、構うもんか。

「ああそう、教える気がないのは分かったからさつきとどつか行つてよ。集中できないでしょ」

「うぶぶぶ、健気だねえ。こわあい狼に食べられないように、気を付けるんだよ？ じゃ、バイナラー！」

モノクマには心配されたくないな。

いつの間にかまたいなくなつちやっているし、どこから湧いて出て来るんだろうか。

さて、さっきの質問で生活用品も大雑把にまとめることができたし、次は近くの娯楽品にしようか。

商品リスト「生活」

洗剤やリンス、シャンプー、入浴剤、石鹸、ドライヤー、簡単なヘアゴムなど、使う機会の多い商品がここに入る。包丁以外の調理器具もここ。

理由付きで5人以上が申請すれば、他のカテゴリーの商品もここに入れることができるようになるようだ。

娯楽品はかなり雑多としている印象だ。南の島らしく海水浴に使うボールや浮輪、乗り物系もある。イルカやシャチの定番なフロートにモノクマ型フロート。皆がどちらを選ぶかは明白だろうな。

そつとモノクマフロートから目を逸らし、細々とした商品を見る。

トランプや人生ゲームなどのボードゲーム、チェスがあるのはソニアさん用だろうか。

初めてここに来たときから異彩を放っていたミリタリーグッズはリアルな様相になっていて、水鉄砲だと傍から見ても分らないくらいだ。男の子が好きそうなラインナップである。

切羽詰まった精神で、暫く買う人がいないかもしれないがちゃんとこれもリストにしておかないとね。

商品リスト「娯楽」

海水浴品やトランプ、ボードゲーム類のポピュラーな物からミリタリーグッズなどのなぜあるか分からない物まで完備。

ナイフは手品などにも使う刃が伸縮する玩具で、銃器は水鉄砲タイプとモデルガンタイプ・エアガンタイプなどがある。無駄にリアル。その隣のコーナーは少し小さいが、どうやら服飾関係のようだ。パジャマや靴、部屋着用と思わしき服が並んでいる。あと目立つのは小物系統だろうか。

アクセサリーもあるようだが、種類は少ない。ウサギとクマをモチーフとしたアクセサリーしかないのでお察しである。モノクマはモノミと張り合いでもしているのだろうか。

少なくとも幾つか私の好みに合う洋服が見つかるので、全員の好みを踏んで品に出されている可能性がある。なにもかかっていない所には「水着入荷予定」の文字があるのでウサミ先生の言っていた通りだ。

男性、女性それぞれに個別のカタログがあつたのでそれを覗いてみると、下着用のカタログだった。プライベートなどところだからだろう。女性用のほうだけポケットに入れ、次の場所へと移動する。

商品リスト「服飾」

女性陣、男性陣の好みを押えた素晴らしいラインナップ（仮定）。

各部屋に元々着ていた物と同じ着替えがあるので、マーケットにある物は気分転換のための商品である。

水着入荷予定とのこと。

最後は一番奥まった場所にある家具売り場だ。

机、椅子、カーペットや壁紙、観葉植物なんかもここにありようだ。好きを選んで部屋に置けばいいということだろうか。冷蔵庫は小さなものを説明書と一緒に購入したいところである。

花瓶もあるが、島の自然と共存というルールがある以上使い道がない。しかし、そのためなのか、色んな種類の造花が品出しされているようだ。

ポップには要望があれば追加することもできると書いてある。誕生花や花言葉の本も売っているのは、モノミの趣味だろうか。

嫌がらせのように置かれた黒系統の不吉な花言葉を持つ造花もあるが、こっちはモノクマの趣味だろう。

やっぱり商品で張り合ってるのだろうか。

商品リスト「家具」

陶器、プラスチックの花瓶や観葉植物などもこれに該当。

置物系統から、壁紙やカーペット、普通のタンスやら様々。部屋を自由にカスタマイズできるようになっていく。電気製品は説明

書付きである。造花は要望で種類を増やすことができるようだ。電気製品は説明書付きである。

入り口近くにある自動販売機はほとんどの物が無料で手に入るようだ。雑誌など飲食物以外はどうかやらメダルが必要なようである。

雑誌も私とは縁のないものが殆どであるが、暇つぶしくらいにはなるだろうか。私は読めるなら学術書でも読む乱読派だし、メダルに余裕があれば買うことも検討しようと思う。

商品リスト「特殊自動販売機」

簡単な飲食物から雑誌までを取り扱っている。飲食物はともかく、雑誌にはメダルが必要である。

「こんなものかな……」

白い手帳をパラパラと捲り、内容を確認。人に見せるものなので字はなるべく丁寧に書いた。その分時間が余計にかかってしまったが、まあいいだろう。

誤字脱字がないかをひとしきり確認したあとに、ページが残り少なくなってしまうのを認識して溜め息を吐いた。日記帳もなく

なってしまったし、まったくツイてないね。

そしてすつぱりと忘れていた腕時計に目をやると、とてつもない時間が経っていた。ゆうに3時間は経っているだろう。もうすっかり夜中だ。

これは寝不足に苦しむだろうな、と予想しつつもマーケットの奥にある台車を使おうかと近づく。

まあ、小さめの冷蔵庫と小さなインテリアくらいなら運べるだろう。

「お前、こんな時間になにをしている？」

台車の取っ手に触れた指がビクリと震える。

しかし、怯える必要もない覚えのある声に平静を装ってから振り向く。

そこにはでっぷりとした腹の肉を張り、腕を組む十神クンがいたのだ。

胸を張っているつもりだろうか。強調されたお肉に目をやり、それから視線を合わせるようにして片手をあげ、分からないといったようなポーズをする。

「家具の調達と商品リスト作りだよ…… キミこそ、なんでここにいるの？」

「夜食だ」

でしようね。

わざとらしく呆れたように 「ああ、そう……」 と吐き捨てて台車を押して冷蔵庫の隣まで移動する。

なんだか彼と話すとき皮肉合戦になってしまいそうになる。逆らいたくなるというか、なんだろう。腑に落ちない。

「お前はいいところに目をつけるな」

小型冷蔵庫を乗せようと力を入れるが僅かしか持ち上がらない。こういうときに自分の非力さが嫌になるんだよね。

「フン、もやしめ」

罵倒しながらひよいと冷蔵庫を持ち上げた十神クンが台車に置く。こちらを見下ろして誇らしげな顔をしていたので礼を言うと、思いが

けない提案をされた。

「これは俺が持つて行つてやろう。その代わりに先程言つていた商品リストやらを頂くぞ。…… ああ、当然コピーでいい」

私が不可解な顔をしていたからか、十神クンが最後に言葉を付け足した。

これは…… ありがたく要望を受けようか。立ってるものは親でも使えと言うし、どちらにせよ商品リストは皆に配る予定だった。

「なら食品は私が持つよ。商品リストは明日皆に渡すつもりだったからね」

「そうか、ならこれを頼むぞ」

そう言つて手渡されたビニール袋が軋んだ。冗談とかではなく、本気で。

重い。とてつもなく重い。どれだけの食品を入れたのだ、これは。中を覗くと、店頭にあつたあの大きなコカコーラがすっかり収まつているのが菓子に紛れてチラリと見えた。冗談じゃない。

しかし十神は台車を二台利用して冷蔵庫も二台…… 二台？

「あれ、なんで増えてるの？」

「俺も使うに決まつているだろう」

「そ、そう…… なんかゴメン」

結局冷蔵庫だけを運び、その日の夜は泥のように眠り込んだのだつた。

No. 14 『失樂園』―先導者―

「……………！……………ギ……………！」

誰かの声ノイズ音が私の世界を通り過ぎていく。

耳が痛いくらいに静かで、怒鳴られた時のような、近くで誰かが叫んでいるような耳の痛さ。まるで麻痺したように何も聞こえない。ただただ痛みだけがあって、頭が揺さぶられているような、明滅する視界がやがて白と黒に染まり、いつもの光景が目の前に広がった。

ぼんやりとした夢の中、私はエントランスホールにいる。

いつもよりもふわふわとした感覚で、私は辺りを見回した。そして、辺りに玩具のような、イースターエッグにも似たカラフルな卵を見つけた。

合計24のその卵達はどこかで見たような色合いと模様をしており、私はそのうちの1つを手に取った。

「エフエクト……………？」

淡い光と共に服装が黒いドレスへと変化する。髪には赤い薔薇の髪飾りがついており、さながら西洋の喪服のような……………そんな、
ドレス”と名付けられたエフエクトだ。

次に緑色の蔦に巻かれたような卵を手取る。すると手の中に溶け込むように卵が消え、ふわりと体が浮かび上がったような感覚がして、右の視界が真っ赤に染まり、下を見る。

今度は足が植物の根のようになり、右目を貫いている花に触ると、わさわさと揺れた。エフエクト、
”植物”だ。

それがエフエクトであることが分かり、手に取るたびに体に吸収され、変化する。まるで一度捨てた物を拾うような、その作業に私は言い知れぬ絶望感を感じていた。

赤い目玉がギョロリと睨むような模様の”モノアイ”

青地に水泡が浮かぶような模様の “ 潜水服 ”
夕焼けのようなグラデーション模様の “ ホイツスル ”
星空のような黄色の点と濃い藍色の “ ほうき ”
白地にカラフルな音符が散った “ ヘッドフォン ”
闇のような真っ黒な卵の “ 黒フード ”
腐ったような黒ずんだ茶色の “ 死体 ”
真っ赤で罅のような模様が入った “ 内臓 ”
淀んだ川のような緑色をした “ スライム ”
ごくごく普通の白地にネクタイ模様の “ 制服 ”
灰色に雫の模様が入った “ ジョウロ ”
メタリックな色をした “ 機械 ”
赤いバツ模様の入った “ 拳銃 ”
可愛らしい耳と尻尾の模様が入っている “ 猫 ”
毒々しい緑地に紫の気泡が描かれた “ ガスマスク ”
薄紫色の卵に三角頭巾の模様がちよこんと入っている “ 幽霊 ”
卵を抱きしめるような複数の腕が描かれている “ 腕 ”
十字架のような、ピエロの目のような赤い模様が入った “ 刺青 ”
砂嵐のような幾何学模様の “ テレビ ”
ポップな色合いがごちゃ混ぜになっている “ サイケデリック ”
赤い血飛沫の散った真っ黒な卵の “ 鉄パイプ ”
…… そして、最後の1つ。目のない、だるまの顔になっている赤い卵に手に取った途端に体を支えられなくなってドサリとその場に私は落ちた。

私を起こそうとして、手が空を搔くの認識して戦慄する。
手足がなかった。文字通り、ダルマのようになった私には立ち上がることができない。精々這いつくばって顎を使い、ゴミクズか芋虫のように這い回るだけである。

その状態に本来ある筈の手足を思い浮かべて歯を食いしばる。

次の瞬間にはエフェクトが解除され、手足は元に戻っていたが、言い知れぬ気持ち悪さは払拭できずに体を抱きしめた。

体を抱きしめる時に不安感を覚えたためか勝手に3本の「腕」が現れ、自分の腕と共に体を抱きしめる。頭から生えた腕は手持ち無沙汰に空を掻いているが、肩から生えた余分な2本の腕はしっかりと体を抱きすくめている。

集まっている。

全てのエフェクトが集まってしまっている。

それは本来ありえないことだ。

入学式の日、私はまだ全てのエフェクトを集めていなかった。出現すらしていなかったそれらがある。それだけで入学式の日から随分と時間が経っていることの証明となってしまう。私の内側だけの証明。私だけが確信できた証拠品。夢の世界のことは、幾ら私でも同族以外には決して話さないはずだ。それを知らない人たちがこれをお膳立てしていたとしたら、こうなることが分からなかったのも当たり前だ。

何もないエントランスホールの空を仰ぐ。

これだけのエフェクトが出現し、集まるのにどれだけの経験をしたのだろうか。今の私には分からない。だが、少なくともダルマがあるということと恐怖に震えた。

メイが約束を守ったのか、それとも事故によるものか……それは分からないが、この南国の夢から覚めるときには多大な覚悟が必要になるかもしれないことが分かった。

「メイに会いたい、な」

独りごちて、私は頬を抓った。



目が覚め、時計を確認する。

まだ時間は午前4時。冷蔵庫を運び入れてから2時間しか経っていないのだ。つまり睡眠時間もそれだけしかなかったということだ……

「ふぁ……」

眠気の悪魔が私のことを布団に押し込もうとしてくるが、それをはね退け、冷蔵庫にしまったミネラルウォーターを半分ほどまで飲む。

それだけで多少は眠気も落ち着き、静かに朝の支度を始めた。

朝から重いものを食べる気力がないので、昨夜持ってきた食パンを、同じく持ち込んだトースターで焼き、ピーナッツバターを塗って一枚食べる。

それから顔を洗い、歯を磨き、朝シャワーを浴び、何故か同じものばかり収められたクローゼットの服を着た。

それらを終える頃には既に眠気はどこかへと行ってしまい、時間が余る。皆が起きてくるであろう7時まで2時間はあるのだ。

「砂浜にでも行くのかな……」

お気に入りの黒フードのポケットに鍵と白い手帳。それに財布を入れてコテージを出る。南国の早朝は暑すぎず、比較的過ごしやすい気温だ。

ポストを調べると中に10枚のモノクマメダルが入っている。

そういえば、ウサミメダルはまだ使えるのだろうか。後でモノクマに会ったとき訊いてみよう。もし使えなくなっていたとしても記念として1枚くらいはとっておきたいものである。結構可愛いし。

そうして、着いた砂浜で昨日と違う部分に近づく。

ヤシの木にガチャガチャがつけられていて、中はギツシリと詰まっているうえ、中身が不鮮明なため何が入っているのかも分からない。

私はそのガチャガチャに躊躇いなくメダルを入れ、合計10枚を使い回していく。

そして出てきたカプセルを開くと出てきたのは番号付きの小さな鍵だった。説明書を見ると、どうやらスーパーマーケットの奥に引き換えカウンターがあるらしい。そこで品を受け取れるとのことだった。

カプセルを開いただけでは景品が分からないというのはなんだかわくわくしていいね。

早速スーパーマーケットに向かい、引き換えカウンターというところでモノミかモノクマを探す。しかし、シンとしていたので誰もいないようだ。

「おい、モノミかモノクマ。いなーい？」

「呼びまちたか！」

「呼んだー？」

「お、モノミのほうが早かったね」

呼ばれて出てくる速さでいがみ合っている…… というか一方的に八つ当たりをしているモノクマに言う。

「ガチャガチャの景品つてここで合ってるよね？」

「おーそうだったそうだった！ 早速あれを回したんですね！ 狛枝さんだったら好奇心旺盛だねえ。そうだよ、ここで合ってるよ」

「が、ガチャガチャってなんのことでちゆか!? また勝手にアンタが設置したんでちゆね！」

「ちよつとしたスパイスだよ！ こういうお遊び要素があつたほうがストレス堪らなくていいだろ？」

ガチャガチャ程度じゃコロシアイのプレッシャーとストレスはなくならないと思うけどねえ。雀の涙ほどの効果しかないんじゃないかな。もしくは焼け石に水。

「でも、わざわざ交換してると面倒くさいんですよね…… というところで、カウンターは開けとくから勝手に鍵ぶつ刺して持ってけドロボー！」

「だめでちゆ！ 自分でやったなら最後まで面倒みなちやい！」

「やだねー！ 拾った犬は元の場所に戻す派なんだよ、ボクは！」

「あ、待ちなちやい！」

そんなやりとりをしながらモノクマとモノミはどこかへと去っていった。

つまり、勝手に取ればいいんだよね？

鍵の番号を確認してカウンターの奥にあるロッカーを一つずつ開

けていく。最初に手に入ったのはトイカメラという名札のついたカメラ。次に手に入れたのはスパイのように素早く動けると噂のブランド靴。スパイ・スパイクだ。

氷点下のギャグが詰められたらしいスペクターリング。

ロイヤルウッドのブランド湯のみである、ジャパニーズティーカップ。プ。

いいんだか悪いんだか分からない2・5Dヘッドフォン。

ハーフシューズで、つま先の部分に鉄板が仕込まれている半分安全靴。

7本に別れた形が特徴的な七支刀。

“ ブルーラム、翼をもぎ取る ” で有名な逆エナジードリンク。ブルーラム。

ありとあらゆるゲームの裏技が記された超技林 第二版。

希望ヶ峰学園の紋章が入った希望の乾パン、の10種類がロッカーから入手することかてきた。

正直スペクターリングはいらぬが、部屋に飾るだけ飾っておこうか。

ブルーラムはわりと好きだが、今は退廃的になる気分ではないので後回し。そもそもこれ、自動販売機で購入できるからハズレだね。でもその不運の代わりと言ってはなんだけど、ジャパニーズティーカップと超技林が入ったのは幸運だ。

小泉さんと地図作りをするからティーカップをプレゼントできるし、七海さんともゲームして遊びたいし。

まだ1時間ほど余裕があるので先にホテルのレストランへ行っておこう。別にコテージでしか寝れないわけではないし、レストランで寝ててもいいだろう。

くありと欠伸をして誰もいないレストランに入る。

「胃もたれしそう……」

レストランには既に大量の料理が並んでいた。

サラダにコーンフ레이크、大きなピザ…… パスタにホットドック

にトロピカルといえればこれだねとでも言うように添えられたマンゴージュース。そして、それらがそれぞれのテーブルに山盛りになっていた。

肉やパンもあるし、シーフードも満載。名前の知らない南国っぽい料理がひたすらに並べられている。

朝食としてはそれぞれの料理単品で十分どころか多すぎるくらいだ。いくら人数が多いからってこの量はない。ギツタギタの油が光る肉類など見るだけでもうお腹一杯だ。

だが、散歩した自分の体は素直にお腹を鳴らしている。さすがに食パン1枚で昼まで持たすのは無茶なようだ。早く起きた分、お腹が空いている。

なるべく油の乗っていないチキンや海鮮類を皿に盛り、海藻サラダを持つて椅子に座る。私はこれだけあればお腹一杯だ。

絶対に余るだろうに、バイキング形式はなぜなのか…… 十神クンや終里さんがいるからか、納得。

ある程度食べ終わり、食器を一旦キッチンで水に漬けこむ。腕時計で確認したがまだ30分ほど時間があるようだ。私は皆が食べ終わった後に食器洗いを手伝おう。それまでは椅子に座って退屈ながら待つていようか。

だけれど、席についてぼーっとしているうちに追い出したはずの眠気がやってきた。皆が起きるまでまだ時間はある。コテージじゃなくても怒られないだろうし、いくら追い出そうとしても今回の眠気は退屈と手を組んでいて異様にしぶとい。

そしてうとうととしてはじめた私は椅子に寄りかかり、そつと目を閉じた。

—— ガタンゴトン、ガタンゴトンと規則的に車体が揺れ、長椅子の並ぶその場所に私はいた。

つり革だけが虚しく揺れ、それに捕まる人はいない。

赤く、毒々しい夕陽が窓から車内を照らすその光景がどこか妙にり

アルで、夢だと自覚があるというのに本当にその場にいるような……かさかさになった手のひらさえ意識できるリアルさに諦観と絶望感に支配される。

「つぎは、えぐりだし。つぎはえぐりだし」

暢気に響く聞き覚えのあるだみ声。

残酷な密室の中で、幻影を見ながらまた私が殺された――

「きゃあああああああああー！」

「いゝったあ!？」

不意に訪れる浮遊感。逆さまになる視界。上下が逆転し、天井が床へ、床が天井に変化する。

そして、私は椅子が後ろに倒れたことにより、頭から床へとダイブした。

「こ、狛枝大丈夫か…… って、うわ!？」

星が目の前を飛ぶように頭がくらくらとし、視界が明滅する。

心配気に声をかけてきた日向クンの顔が逆さまに映る。しかし彼はすぐさま顔を背けてしまった。

見てはいけないものを見たような、だが見てみたいという心を表すように背けられた視線がチラチラと私の隣と空中とを彷徨っている。

その顔がわずかに赤いことと視線が隣に向いていることに気が付いた私は落ち着いた頭を動かし、その隣に目を向けた。

…… そこには変わり果てた罪木さんの姿があった。

「はわっ…… はわわわわあー! こっ、こっ、こっ、転んでしまいましたー!」

両足をコンセントコードに絡めとられ、テーブルの上にあった幾つかの調味料を被り、でんぐり返しのような状態になった罪木が涙目で動くこともできずにその恰好のまま固まっている。動けないのかもしれない。

「どうやって転んだら、そんな体勢になるんだ!」

「いや嬉しいけどさあ！ 堪らなく嬉しいけどさあ！」

「ひゃーん！ 恥ずかしいですう！ た、助けてくださああい！」

十神クンが怒鳴り、花村クンが覗き込み、罪木さんが涙目で訴える。サイズ違いなのか少々食い込み気味な白いショーツが丸見えだ。それと同時に左足に巻かれた包帯が痛々しく、さらに片方の靴下が脱げてしまっている。床一面に散らばったざんばらな長髪を下敷きにもがこうとするたびに髪が引っ張られ、コードが食い込み、痛そうに身をよじり、また……と悪循環していく。

私のすぐ傍で倒れているので、もしかしたら転んだ時に私の座っていた椅子ごと引き倒してしまったのかもしれない。

つまり私は巻き込まれたのか。後ろに倒れた椅子の上で自身のスカートがめくれていないことを確認して体を起こす。溜息でもついたら罪木さんが謝り倒してくることが予想できるからだ。

あまりの光景に男性陣も一瞬目を背けることを忘れ、間の抜けた声をあげた後にハッと気が付いては顔を背ける。ただ一人顔を背けなかったのはまじまじと見入っている花村クンと澤田さんだけだ。

「むっはー！ 恥ずかしそうなお顔がカアイー！ 萌えすぎてフガフガしちゃいますなあ！ 真昼ちゃん、シャッターチャンスだよ！」

「だめよ！ と、とにかく助けてあげましょう！ ほら、凧ちゃんも立って！」

澤田さんが小泉さんに写真を要求したがそれも却下され、女子数人で纏わりついたコンセントコードを解き始めた。その間に男性陣は距離を置き、見ないようにしながら話を進めている。

どうやら皆がここに集まっていたのは、十神クンから全員に向けての話があるからようだ。

「つ、罪木さん、大丈夫？」

「うゆう…… なんか頭がガンガン痛みますけど、大丈夫ですう……」
頭を抱えて若干目の焦点が合っていないので大丈夫ではなさそうだ。

「頭打ったの？ 私の代わりに座りなよ。落ち着いた方がいい」

「うゆう…… ありがとうございますう」

先程盛大に頭をぶつけて目が覚めたので、今度は眠気冷ましのためにも立っていたほうがいいだろう。

「ドジッ子万歳！ 歓迎するよ！ 心からね！」

「でも、ドジッ子ってレベルじゃなかったよね。ほとんど手品みたいな転び方だったよね……」

凄いや顔をしながら言う花村クンに、小泉さんが困惑顔で話す。ああいう場面に出くわしたのは初めてだったのだろう。

「それよりさ、これで全員揃ったんだよね？ だったら、そろそろ始めようよ……」

眠く…… なつてきちやったし」
「そうだな…… 名残惜しいが朝食はいったん中断して、話を始めるか」

そう言つて食べ進めていた料理を一旦置き、律儀にラップで包んでから十神クンが話し始めた。

「まずは、お前達に質問だ。俺達はそのモノクマによつて殺し合いを命じられたわけだが…… そんな異常な状況下を生き抜くにあつて、今の俺達に必要なものは何だと思う？」

十神クンは唐突にそんな話を始めた。

「チツ、知るかよ。いいからさつさと本題に入れや」

「本題に入つて欲しくば、さつさと答えることだ」

そういえば本題ってなんだろう？

寝てたから話の流れが分からない。十神クンが全員揃うのを待つてたつていうのは話の流れで分かるが、何が本題なのかも分からない。この話が本題ではないつてことは十神クン自身が言っているから分かるけど。

「…… オレらに必要なモン？ そんなのメシと寝ることだろう？」

「否ッ、便を忘れておるのお…… つまり答えは 〃 快食、快眠、快便

〃 じゃあああ！」

「もつとマシな答えはないか？」

三大欲求つていうのは確かに生きる上で大切なものだし、いつもと同じように過ごすことは非日常の中であつても自分を見失わないようにする大事な心掛けだ。あながち間違つていないような気もする

が、十神クンの言いたいことは程遠いらしい。

他に意見が出る様子は特にない。意見を出し合うときってなんだか緊張するよね。これでいいのか、呆れられないかってぐるぐる考えちゃって上手く言えないんだ。誰かが口火を切ってくれないと意見しづらいんだよね。今回はすぐに終里さんと式大クンが反応したからやりやすい。

「決して焦らない、冷静な判断力とかどうかかな？」

絆って言えればいいのかもしれないけれど、絆があってもどうにもならないことだつてあるんだよ。

絆絆って言つて、考えること、相手の隙を探すことを放棄してしまえば乗り越えられるものも乗り越えられないのだ。卑怯だっていい、裏をかいて、狡賢く、狡猾に、何をしてでも生き残る。

生きるためにあれを捨てて、これも捨てて、しまいには大事だったはずの姉妹まで見捨てて、そんな私が絆がどうの、仲間がどうのなんて、言えるわけないんだ。

「みんなが焦らず大きく構えていたらあんなクマなんかの口車にも乗らないでいられるし、頭が幾つもあるんだから打開策だつて見つかるはずだよ！ 冷静さがあれば、生き残る術だつてすぐ見つかるかもしれないよね！ 今のところは誰かを蹴落とさなきゃ死ぬつてわけでもないんだし、最優先はモノクマがどう出て来るか冷静に見極めることじゃないかな？」

気づいたことを全てメモしているのも、皆を誘導するのに根拠が必要だからに他ならない。だけれど、三人寄れば文殊の知恵とも言出し、人数が多ければ多いほど有利なことには違いない。

「だが、一理あるかもしれないな。だからこそ、モノクマは私達が結束しあわないように、互いが疑心暗鬼になるようなルールを強いるのだから」

一致団結して立ち向かって来られると面倒だから、かな。少年漫画の敵方とか悪役つてそう考えると大変だよな。モノクマがベタベタの正義感に吐き気を催すのもそういう理由だろうか。いや、アイツは希望がキラキラ輝いているのが気に入らないだけか。

「なるほどな…… なかなか立派な答えだ。確かに、この状況には」
集団 “ で立ち向かうことが大切だろう。だが、その団結のために必要なものがあるだろう?」

彼の中ではもう既に出してほしい答えが決まっていたのだろう。

「じゃあ、なにかな?」

「今の俺達に必要なのは、明確なリーダーによる “ 秩序を持った統率 “ だ!」

冷静にするためにはまとめ役がいた方が良い。確かにそれも分かる。

羊は一個体をリーダーと決めて、それに従い、リーダーが優秀であればあるほど生存率も高い。それゆえ牧場では白い羊の中に黒い羊を一頭だけ混ぜたり、山羊を一頭紛れ込ませ、故意にリーダーにすることがある。そうすることで一匹のリーダーを人間が制御し、大勢の群れを自由自在に率いるのだ。だから優れたリーダーに盲目的に従う子羊になるというのも良い提案だろう。

しかしそのリーダーが危険に出向けば、羊の群れ全てが危険にさらされ、リーダーが死ねば、レミングよろしく集団自殺のように死の連鎖が起こる。そういうリスクも起こり得ることは知っておかないといけない。

「なるほどのお…… 団体競技でもキャプテンが必要不可欠だしのお」

「喜べ。俺がその役を引き受けてやろう」

うん、この流れならそう言うと思ったよ。

「私たち迷える子羊は、黙って頼もしいリーダーについていけばいいってこと?ならキミも慎重に立ち回ってくれるんだよね?狼の前にノコノコと姿を現すような真似だけはよしてね」

「貴様にそう言われる所いなどないぞ」

「は? おい、どういうことだ?」

十神くんには一蹴されたが、そんな私たちのやりとりを見ていた日向くんがきよろきよろとしながら困惑の声をあげる。今まで話題に入らずにいた彼の顔は心なしか、青い。今朝鏡で見た私の酷い隈とは

違い、不安の強く表れた顔だ。

皆も少しばかり顔色が悪く、あんなことがあった昨日の今日なのだからしかたないことかもしれない。

彼と目が合い、につこりと微笑む。

「羊はリーダーに盲目的に従う。ならそんなリーダーが危険なことに飛び込んだら？ 絶望してしまつたら？ 不安定な上にやつと成り立っているバランスを崩してしまつたらなにが起こるか分からない。だからリーダーをやるにしても、自分の面倒を見られる人じゃないとね…… おつと、完璧な御曹司様には要らない世話かな」

実際に原作では十神クンが死んだことで死の連鎖が始まつて行った。

本当は忠告とか、そんなの余分で馬鹿馬鹿しくて、私の生存になんら関係ない余計なことだけれど、彼が死んでしまつたら私が危険なヤツだつて思われかねない。

腫れ物に触るような扱いで長く生きることもしられるかもしれないが、現実ではなにが起こるか分からないのだ。

「まあ、こんな状況でリーダーになるつて言うくらいなんだし、心配ないか」

「皆は…… 十神がリーダーでいいわけ？ 強引すぎると思うんだけど」

不満そうに小泉さんが言う。

しかし、すぐに十神クンがフンと鼻を鳴らしながら答える。

「俺以上の適任がどこにいる？ 俺は十神家の ” 超高校級の御曹司

” だ。人の上に立つことを宿命付けられた人間だぞ？」

「でも、人の上に立つならソニアちゃんだつているしさ」

「いいえ、とんでもありません。わたくしなんてお飾りみたいなものですから。小泉さんも気になさらないでください」

ソニアさんは優しく小泉さんに声をかけ、辺りを見回す。

「自らそう名乗り出てくださいだったので、わたくしは十神さんがリーダーで良いと思います。皆さんはどうでしょう？」

皆はお互いに顔を見合わせて軽く頷いていく。この場でさらに

リーダーを名乗り出そうとする者もないようだ。これで決まりだろう。

「であれば決まりだな…… 安心しろ、この俺がリーダーになった以上は、一人の犠牲者も出させん。約束してやる。この俺が、お前たちを導いてやるとな！」

ビシイ！ と効果音がつきそうなほどに腰に手を当て、指をさす。その体型も相まっていいしれない圧倒感があるが、その姿にピヨンピヨンと跳ねながらテンションの高い滯田さんが声をあげる。

「うつきやー！ 頼もしいっす！ カックイーっす！ しびれるうー！」

「きやー抱いてー！」

「うるさいぞ、花村！」

花村クンがふぎげ半分にか、本気なのか分からないが十神クンに抱き着きに行くと、短い手足でルパンダイブを試みようとした矢先に本人の手によって、無言ではたき落とされた。

十神クンを熱心に見ながら何かを考えていたらしい日向くんが、それと同時に叫ぶ。わりと必死そうなその叫びに驚いた私がそちらを見ると、彼の手は強く握りしめられていた。

「さて、本題に入るぞ。俺からお前たちに、見せたいものがある」

「やつと本題？ 校長先生並に話長すぎなんだけどー！ ハゲたいのかなー？」

「で、見せたいものってなんだよ？」

西園寺さんはつまらなそうにしながらそう言う。少し怒気が混じっているのほんとうに退屈だったのだろう。椅子に座って遊ばされた足が空を何度も蹴っている。

「中央の島にあるジャバウオック公園だ。ついてこい！」

左右田クンの “ 見せたいもの ” に対する疑問を見事にスルーして、十神クンは一方的に告げてから大きな足音を立てて足を踏み鳴らし、彼はそのままレストランを去ってしまった。

「はやっ!？」

「ドスドス音出して、御曹司のくせに品もなにもないよねー」

「ツチ……」

「あそこまで走るんですかあ?」

「はっはっは、トレーニング代わりに走るのもいいのう!」

口々に文句を言いながらも、皆の足は動く。

無言で去る者もいれば、「うっきやー! 追いつくつすよー!」と叫びながら走り出す瀧田さんのような人もいる。

「や、やっぱり強引かもな……」

「あーあ…… リーダー選びに失敗したかもね」

「でも、あの場でリーダーに進み出る人はいなかったんだし、いいんじゃないかな」

私はそう言ってから、テーブルの上へ置いていたミネラルウォーターのペットボトルを掴んで外へ出る。

—— 出るのが遅かった分、バテているときに日向クンに追い抜かれそうになったのは、至極当然のことだった。

No. 14 『失樂園』―謎―

「っ、いた……」

「ちよつとナギちゃん大丈夫？」

お約束のようにまたビリである。

最後の方に残っていた小泉さんも一緒に走り彼女も疲れているようだが、先に着いていた滝田さんや終里さんが元気に跳ねたりしているせいで余計もやしな感じが否めない。

両手を膝に当て、下を向きながらせいぜいと息を吐いていると、上から小泉さんの心配気な声が降って来る。

それに私は「大丈夫だよ」と返して大きく深呼吸をし、息を整えた。

「どいつもこいつも痩せている割に遅いぞ」

ダメ押しが来たが、私はめげないぞ。

十神クンの足の速さと見た目のギャップからソニアさんや左右田くんが弾んだ息を整えながら声を漏らしている。少なからず、ホテルからのマラソンがきつかった人物もいるようなのでほつとする。

「これが、お前たちに見せたかったものだ」

そう言つて彼が指さしたものは、とても奇妙で、機械的な物だった。

タイマー アト21ニチ 03:42 11

そこにはモノクマの黒い部分だけを丸くボールにしたようなオブジェが、銅像の立っていた場所に建てられていた。

歯車が下で回り、ボールの中心には意味深な数字の羅列。数字は刻一刻と減つて行つているので制限時間のようなものにも思える。

「時計みたいだけど……でも違うよな？ カウントダウンしてるみたいだ」

日向くんがタイマーのようなものを見上げて数字を確認したようだ。

そこで、息を整えていた小泉さんや罪木さん等がタイマーに気が付

いた。

「こ、これって前に来た時もあつたっけ？」

「ななな、なんですかあ!？」

混乱し始める数人と、「否ッ、見んかったはずだあ!」と冷静に状況分析をする式大クンのような人物もいる。その様子を見た十神が口を開いた。

「今朝、改めて島の中を見回っているときに見つけたんだ。いつの間に設置されたのかは…… 不明だな」

昨夜のことは言わないのか。まあ、私が目的地に行くだけでバテているところを何度も見られているし、昨夜のうちに私が用意するのも到底無理な話だと分かっているだろう。

一度こちらをチラリと見た彼はそのまま視線を逸らし、タイマーへと目を向けた。

「あのモノクマが設置した物のようだが…… このカウントダウンは何を意味しているのだ？」

「うーん…… 心当たりすらないっすねー」

「モノクマが設置したつてのは、デザインからして分かりやすいよね！」

辺古山さんはタイマーの傍に歩み寄り、滯田さんは手で頭を抱えながら一生懸命頭をひねっているようだがすぐに諦めたようだ。

私も、あまりにモノクマらしいそのデザインをじっくりと見ながら隣にいた小泉さんに笑いかける。彼女は引きつった笑みを浮かべながら「確かに、そうだね……」と返事をしてくれた。

「ソッフ、まーた訳の分からない物が出て来たみたいだね…… でも、ぼくには関係ないかな。だって何も信じてないからね」

タイマーを一向に見ようとしない花村クンが指をつんつんと合わせながら下を向いている。

他の皆も、あの日向クンでさえも、起きてしまった出来事に関してはゆっくりと飲み下しているというのに彼はまだ認めるつもりはないようだ。分かりやすい現実逃避。だからこそ、余計に人間らしい一面が見られて私は嬉しい。

ほら、超高校級の皆って画面の向こうのヒーローヒロインってイメージがあるからね、こうやって人間らしく怯えている様子を見るとなんだか安心するんだ。ああ、彼らも人間なんだな。私と同じ、死や恐怖に怯える人間なんだって思えるから。アニメや漫画の中の超人なんかじゃない。私なんかと同じ人…… だからこそ、人は恐怖によつて、死から竦んで動けなくなってしまう。それは犬も猫も同じ。道路に飛び出した猫が、急激な恐怖に硬直して轢かれてしまうのと同じ現象。

硬直から立ち直った人間たちの集団の中に、立ち直れない人間が一人。

危うい。危ういね。うん、すごく危うい。

冷静になるということは現状を受け入れるということだ。

十神クンも、それにはきつと気づいている。さて、彼は花村クンを導けるのかな？

「もしか、爆弾ではあるまいな？」

「ばっ、爆弾んんッ!」

「鳥を爆破するのが目的ならすぐにやるはずだ。わざわざカウントダウンする意味がないだろう。常に最悪の状況を考えるのもいいが、これがはったりであるという可能性も視野に入れたほうがいいだろうな」

式大クンと左右田クンが爆弾である可能性に大声をあげるが、十神クンがその可能性を否定する。

花村クン越しに合った目線を逸らし、私は目を伏せた。

「だったら、なにをカウントダウンしてるんですかねえ？」

「意味なんてなかったりして」

「さ、さすがにそれはないんじゃないかな？」

罪木さんの言葉にわりと真剣に答えたのだが、小泉さんの呆れ声と一緒に周囲から否定の声がある。

ま、そうだよね。

「…… 謎だな」

「…… 謎でちゆね！」

間……　そして、すぐ彼女に気が付いたソニアさんが、幽霊でも見たかのように悲鳴をあげた。

「きゃあつー！」

「きゃああああー！」

「も、モノミっ!?!」

ソニアさんの悲鳴に釣られてか、同じく悲鳴をあげた彼女に小泉さんが悲鳴にも似た声をあげる。

すると、その反応と悲鳴でモノミに気づいた皆の間に波紋が広がるように次々と驚きの声があがる。

当たり前だ。モノミはモノクマとモノケモノの手によって無惨にハチの巣になってしまったはずなのだから。

「ど、どうしてアンタがここにいるのっ!?!」

「パトロールしてたらみんなの話が聞こえたので、寄ってみたんでちゆけど……」

小泉さんの捲し立てるような質問に、相変わらずズレた答えを述べるモノミ。

それに少なからず安心した私は、コテージに置いてきた穴だらけのリボンを思う。生きているのならば、いや、動いているのならばあれは遺品でなくなり、ただの悪趣味な拾い物になるわけだが……　彼女に返してもどうしようもないだろうし、そのままにしておくことにした。

「そうじゃなくって……　モノクマに殺されたはずじゃないっすか？

　なんでいるんすか！」

「あー、それでビツクリしちゃってるんでちゆか？　心配しなくても大丈夫でちゆよ！　あちしは死にまちえん！」

「そうか……　貴様は黄泉の国より蘇りし不死のモノか……　ハッ、俺様に狩られ、飼い慣らされてみるかッ!?!」

田中クンの言葉はつまりモノミの生態が気になるからペットになってってことかな。彼女、生き物じゃないけど彼にとっては許容範囲なのだろうか。

「モノミって機械仕掛けのヌイグルミなんですよ？　そもそも死ぬも

「なにもないんじゃない?」

「そういやそうか…… スペアがあればいいってただけだもんな」

「スペアって…… なんか嫌な感じ!」

七海さんと左右田くんが納得の流れにしようとしていたが本人がそれに否を唱えている。スペア以外になんて言えばいいんだ。

「じゃあ…… 残機とか?」

「うーん……」

七海さんの言った一言をモノミが吟味し始めたところで十神くんが彼女に話しかける。

「だが、いいタイミングで現れた。ちょうど話を訊きたかったところだ。おい、答えろ。このカウントダウンのタイマーにはどんな意味があるんだ?」

モノミは現在ヌイグルミと言う点ではモノクマと同じだし、内部事情をなにかしら知っている可能性もあるだろう。しかし、逆にコロシアイを提唱してくるような輩の仲間が素直にそれに答えるだなんて思えない。十神くんも鵜呑みにするつもりはないのだろう。だが、それでも訊かないよりは訊いたほうが良い。

答えを出すための式はいくらあっても困らないものだ。

「ほえ? カウントダウン? ほわわっ、これって! え、えっと、すみません。あちしにはちよつと分かりかねますね……」

「本当に知らぬのか?」

「ご、ごめんなちゃい。モノクマのすることまではちよつと把握してなくてでちゆね……」

「モノクマの妹なのに知らないんだー?」

「あちしはお兄ちゃんの妹なんかじゃありません!」

驚き方や喋りが独特なせいかわかりづらいが、彼女は本当にさつきこれを知ったのだらうと思う。胡散臭げなモノクマに比べると彼女は純粹すぎる気がするのだ。辺古山さんと西園寺さんの言葉にも、本当に申し訳なさそうにしながら返事をしている。

その兄妹設定をどうするかはさておき、モノミがモノクマの仲間である可能性は薄くなっている。

「と、とにかく…… 一緒に頑張りまちようね！ あの下劣なモノクマを、この島から追い出しまちようね！」

健気に彼女が言うが、モノミに質問をした張本人はそれを唾棄にした。

「カウントダウンについて知らないなら用はない。さっさと消えろ」

「えーつと…… 一緒に頑張つて……」

「消えろ！」

「きやあ！ ぐっつ、ごめんなちゃーい！」

モノミもモノミで押しが弱すぎるといふかなんというか、ここまでくるとなんだかいじめみたいだね。警戒する気持ちは分かるけれども。

「あの…… ちよつといじめすぎではないですか？ なんだか可哀想になつてきました」

「ソニアさん！ ソニアさんと呼んでいいですか！ いやっ、呼ばせて頂きますよ！ あんなヤツに同情なんか必要ないですつて。どうせモノクマとグルなんですから」

去つて行く哀愁漂う背中を見ながらソニアさんが悲しそうに呟き、左右田クンがそんなソニアさんの元に一気に詰め寄つて熱弁している。そのときにさりげなく手を握ろうとしていたが、突然近くに来た彼に驚いたソニアさんが一歩下がり、それを避けた。

最初の内は皆辛辣な部分がありながらもモノミの提案や遊びに付き合っていたが、それに比べると皆の態度はあまりにも変わり過ぎている。

いきなりコロシアイだ処刑だと言われ、混乱の末に自衛をしているのだろうが、それにしたつて空気が悪い。皆どこかピリピリとしていて、糸がピンと張りつめたような緊張感が漂っている。

罪木さんが転んだり、思わぬことがあるとそれも緩むのだろうが、得体のしれない恐怖感が次々と与えられるのだからそれも仕方ないのかもしれない。

「ヌイグルミのことはいいからよ、それよりあの時計はなんなんだ？」
「不気味だろう？ 誰がどうやってたつた一晩であのオブジェを設置

したんだらうな？」

九頭龍クンと十神クンが話している。

ジエバンニが一晩でやってくれましたって？ いや、凄いいけど素晴らしいことはないね。違うか。

「うーん、想像もつかないな」

「つまり、リアリティーがない！ それって致命的だよね！」

「だが、想像もつかないのはそれだけではない…… この島で起きていることは、俺達には想像もつかない謎だらけだ。たとえば、俺達16人はどうやってこの島に連れて来られたんだ？」

日向クンが考えるような仕草をしながらタイマーを見上げた。

確かにそうだ。花村クンの言う通りリアリティーがない。この島に来たときだって、動くウサギのヌイグルミが喋って杖を振り回したら、教室にいたはずなのに南国の砂浜にいたっていう非現実的な状況だったし…… うん、訳が分からないね。こんなこと、体験してなかったらカウンセリングを勧めるくらいだ。

「メンドクサーから考えないようにしてたけど…… 確かに謎だよな」

「謎はまだあるぞ。リゾート地として有名なはずのジャバウオツク島が、どうして無人島になってしまった？ この島には観光客はおるか島民さえもない。そんなことが、本当に可能なのか？」

一晩で有名リゾート地が無人島になんてなるはずがない。バイオハザードが起きたにしたって、不気味なほどに生活感の痕跡、カケラさえないというのはおかしい。様々な場所に存在する違和感を十神クンは警戒しているのだ。

それはまるで、海に漂う豪華客船の中に物はあるのに人物のいないような…… そこにいた痕跡はないのに全てがお膳立てされた無人の民家のような…… そんな違和感。

「ダンジョンの道中に落ちてる道具くらいに違和感ばりばり…… だと思っよ」

「ゲームやる人にしか分からないんじゃないかな、それ」

立ったまま船を漕いでいた七海さんがハツとした顔で言ったこと

に私が言及する。ゲームでは当たり前の定番なことだけれど現実にしてみると違和感があると言いたいのだろう。

皆の長話が子守歌になっていようだ。日向クンの隣で今にも眠り込んでしまいそうになっている。

「お、おい七海起きろー!」

それに気が付いた日向クンが慌てて七海さんの肩を揺する。ガツクンガツクンと揺れていた七海さんは「うーん」と唸ってから目を開いた。

この短時間によだれを流すほど寝入ってしまうというのもなかなか凄いな。

日向クンがポケットティッシュを七海さんに手渡し、仕方ないなどでもいうように微笑む。

正直和んだ。警戒心のなかなかとれない日向クンのことだからもっと打ち解けるのにも時間がかかると思っていたが、杞憂だったようだ。

皆を紹介した形になる私としても嬉しいことだね。仲良きことは美しきかな。

「あれだけリゾート地としては有名だったのに人がいないなんておかしいし、島民までいなくなるのはなおさらおかしいよね。近くの島に活火山があるらしいし、噴火して避難でもしたのかな? でも、それにしては綺麗すぎるというか……」

「か、火山っ!?!」

「はあああ!?! そんなのまであるのかよっ! も、もうおしまいだー! ソニアさーん、せめてもう少し一緒にいたかったー!」

それぞれが疑問を口にし、たまに外野の関係ない話なども混じってくる。

その中で十神クンの言外に示した議題に戻る各目で話を振ると、元気に花村クンと左右田クンが反応してくれた。でも結果的に話は戻らず、左右田クンなんかは火山と聴いて私をチラ見しながら絶叫している。

「ああ、火山噴火に襲われたことはないね…… なにないに、左右田クン

は熱いのがお好みなのかな？」

「うっせ、うーっせ！オメーの策略にはぜってー乗らないからな！」

フラグかな？

「分かっているとは思いますが自然災害の線はないぞ。街並みが整い過ぎているからな」

「おごる文明は没落する運命にある。無は有に……そして有は無に……」

おっと、見かねた十神クンが軌道修正に入ってくれたようだ。

それを聴いて静観していた田中クンも意見を出す。

「滅びちゃった…… んですかあ？」

一拍置いて、その意味を理解した罪木さんが絞り出すように疑問を口にした。

「…… 文明と言うには果実とよく似ています。成熟したのち必ず腐敗してしまうのです。裕福になれば民業が凝り固まります。官僚主導となり、自然と老人の力が強くなっていき…… 結果、既得権益が力を持つ保守的な風潮に陥り、そして新しい改革の芽を潰してしまう…… 悲しい風潮です」

「盛者必衰の理、だね」

それよりも、そんなに難しい日本語が使えるのに、どうしてアニメなんかの発想は古かったりズレてたりするんだろうか。ソニアさんの語学力は本当にすごいけれど、そこだけが気になるのだ。昔の名作アニメやドラマを見て語学の勉強をしていたのだろうか。いや、でもそうなるとお城でどんな教育の仕方をしているのだという疑問も湧いてくる。

謎が謎を呼ぶんだね、今の状況と同じように。

「んー、難しいことはよく分かんないけど、なんか違う気がするんだよね……」

「ゆっくり滅んだにしては、リゾート地としても有名すぎるよね。衰退していたらもっと知名度が低いはずだよ」

リゾート地がいきなり無人島になることなんて普通はないだろう。

短い期間で滅んだにしても逆にニュースになって注目されるし、十

神クンと私しか知らないというのは違和感がある。

ネット界隈で騒がれている私の噂を知っている左右田クンも、ニュースになっただけならこの島のことを知っているだろう。

左右田クンが知らないということはニュースにもなっていないということだ。

「単純にさ……あのモノケモノを使って、島民を皆殺しにしちやっただとかじゃないのー?」

「それで、無人島になったかあ!?!」

飽きて公園内のアリの巣を襲撃している西園寺さんがそう言うのと、話の流れに任せていた式大クンが想像でもしてしまったのか、眉を顰めて拳を握りながら叫んだ。

「その可能性はあるかもしれんが……確かではない。結局のところ…… 謎は謎のままだ」

虐殺があつたなら痕跡がないとおかしいし、殆どその可能性はないと思うけど。結局幾ら考えても答えは見つからないわけだ。

「ぐ、ぐぎぎぎぎぎぎぎ! なんもかんも謎だらけじゃないっすかあ!」
頭の横を両手の指でグルグルと高速で回していた瀧田さんがオーバーヒートを起こしたように前屈みに項垂れた。風船から空気が抜けていくようにテンションが下がって行っているのが分かる。

と言っても、彼女のテンションは通常よりも高いのだから、こちらから見れば十分高いままなのだが。

「そうだな……どれもこれも謎だらけだ…… だが、これだけ壮大な謎が重なると、もはや並大抵の組織ではどうにもならないはずだ」

「な、なにが言いたいんだよ……」

十神クンの考察を真剣に聴いている日向クンは、今にも夢の世界へ旅立ってしまったような七海さんを支えながら話の続きを促している。

役得だね、羨ましい限りで。

「つまりだな、この件には間違いなくなんらかの巨大な組織が関係しているはずだということだ」

「巨大な組織、ですかあ?」

現実的に考えるならば、かなりの資源と制圧力がないと島一つを無

人島にしたうえ、設備を均一に整えるだなんてことはできないだろう。

「モノミやモノクマや、モノケモノ。どれも相当の技術力を要する機械だったな」

「それに…… かなりの資金が必要だろうな。とても遊びで造れるレベルじゃねーよ」

「超高校級のメカニックであるキミがそう言うくらいなんだから、やっぱりあの機械つてすごいんだね」

「あたりめーだろオが！ 材料も高いしプログラムもまともなのが必要だし動かすのにも技術がいるし、その辺のラジコンじゃねーんだぞ！ あんなんじゃ視界も狭いし動かすのにも一苦労だったのー！」

さすがメカニック。

プログラム系はやはり専門外のようにただけれど、嫌いな私に熱弁してくれるほどには機械のことに詳しくて好きなようだ。

「あれ、会話してくれるんだ。嬉しいなあ」

「つ…… うっせ！ とにかく、並大抵の資金じゃアあのヌイグルミ一つ動かせねエってことだよ」

熱が入っていると誰と話しているのかも気にしないのかな。気が付いた途端に物凄い勢いで視線逸らされたけど。

「おそらく、そのなんらかの組織は島の監視カメラを確認しながらあの機械を同時に操っているのだろうか」

「モノクマとモノミを操ってるのは一緒の組織なのかな？ モノミの対応を見るに別々の組織が動いて対立してるようにも見えるけど」

「その可能性もあるにはあるが、あれが黒幕の茶番でないという証拠などどこにもないだろう…… 決め打つにはまだ早い」

「そうか、そうだよね……」

両方の可能性も追っているのか、十神クンはすごいな。最初から知ってる私はともかく、疑うべき可能性は全部吟味しているところが凄いよ。きつと私はそんなにできないから。

「それつらは、この島のどこかに潜んでいるのか？」

「いや、この島にいるとは考えにくい。どこか別の安全な場所でやつ

ているはずだ」

辺古山さんの言葉に十神クンが答える。

「なんだか質問責めのようになってしまっているが…… 十神クンは涼しい顔だ。」

「それは、どこだ？」

「それは分からんが…… とにかく、この件の裏で巨大な組織が動いているのは間違いない」

「それを知っていたらなんでそんなことを知っているのかという話になるしね。知っている人がいるとしたら、それはその組織の人間に他ならない。」

「ふーん、巨大な組織ねえ……どんな連中なのか想像もつかねーや……」

「頭を文字どおり捻って考えている終里さんの言葉に、十神クンが顎に手を当てながら発言する。」

「そうだな、たとえば…… 俺の十神財閥やソニアのノヴォセリツク王国、それに九頭竜組…… それらに匹敵するくらいの組織だろうな」

「分かりやすい例えとして用意したのだろうが、その場にいる関係者にとつてはドキリとする内容だ。」

「しかし、その例えの中に自身の所属する組織の名前を真つ先に挙げている所は印象が良い。視野が広く、自分を棚にあげることなく多くの可能性を追う…… 普通の人にはできないことだろう。」

「えっ!?!」

「疑われんのは慣れっこだ。勝手にしやがれ……」

「だからか、名指しで例えられたソニアさんは驚いたように声をあげ、九頭龍クンは不貞腐れたように下を向いた。」

「待て！ オメーや九頭竜はともかく、ソニアさんを疑うのは承知しねーぞ！ いいか、ソニアさんは金髪の王女様なんだ！ 金髪の王女様なんだよ！ オメーらみてーなパンピーとは一線を画してんだ！」

「はいはい、モブキャラは黙ってなって……」

「そういえば左右田クンっていつからソニアさんのことを好きに

なったんだろうか。前々から尊敬しているような節があったが、モノクマが登場してから持ち上げが更に増えた気がする。

なにか切っ掛けでもあったのか、それとも一方的な片思いなのか…… この動向を観察して追ってみるのも面白いかもしれない。

性格悪い？ なんのことやら。

「モ、モブキャラって!? オレのことか!？」

「その服ってキャラが薄いから、外見だけは派手にしよう頑張ってるんでしょー？ クスクスツ、モブキャラ業界も生き残るのに大変だねー」

「ト、トラウマだ！ これトラウマになっちゃうレベルだぞツ！」

西園寺さんの言っていることって結構当たってるよね。理由はキャラが薄いからではないけれど、元々はあんな派手ではなかったと私は知っている。

まあ、それを知っているのは余計な知識を持っているからだが…… それは、真面目で小心者な性格が格好と少し合っていないということでも十分に予想がつくだろう。

「なあ、十神…… さっきのは本気なのか？ お前のトコとかソニアのトコが関係してるって……」

「…… たとえばの話をしただけだ。本当に怪しいと言っているわけではない」

日向クンが恐る恐る訊くが、十神クンは安心させるように柔らかい口調でそう言った。

「もしそうなら十神クンもソニアさんも九頭竜クンも、なんで一緒に巻き込まれてるのが分からないからね」

私もそう言っただけのフォローをする。

日向クンは十分納得したようなので別にいいだろうが、本当は組織の人間が内通者として紛れ込んでいるかもしれないという選択肢があるのだ。

しかし、それを言えば悪い方向にばかり話が進んで肝心の話し合いが無駄に引き延ばされるだけになってしまう。

こういう話は聴きながら自分で考えてくれないと困るのだ。

「だけど…… 巨大な組織つてのは確かなんだよな？」

「確かめるように日向くんが言った。」

「そんな組織が存在するとしても…… なんのために私たちをこんな目に遭わせるのだ？」

「…… ところで、その話はいつまで続くのかな？ もっと現実的な話をしないかい？」

「辺古山さんが話の発展にかかる。」

「しかし未だ現実逃避をしている花村くんが、僅かに苛立った様子で議論に口を挟む。」

「敵の目的に関しては不明だが、正体さえ掴めればそれもわかるはずだ。つまり、まずは敵の正体を探ることだ。そうすれば必ず打開策も見つけられるはずだ。幸い、電子生徒手帳によれば、この島を探索することは自由らしい…… いいか、どこかに必ず敵の手がかりがあるはずだ。のんびりしているヒマはないぞ。死に物狂いで探せ」

「円の中心にいる十神くんは、ビシッと効果音がつきそうなほどにそれぞれを指差して演説している。」

「自然に輪ができて、しかも中心に十神くんがいる…… なんだかなだ皆は彼がリーダーであることを認めているのだろう。」

「外側から揺さぶられたくらいでは揺るがない…… そんな結束力を感じる。十神くんがいれば皆は精神的にも平穏が保たれるだろうね。」

「おーし、やってやろうじゃねーか！ で、なにを探せばいいんだ？」

「赤音ちゃん、話し聴いてなかったのかな？ 敵の正体につながる手がかりを探すんだよ」

「…… とりあえず、怪しい人を探せばいいんじゃないかな？」

「気合い十分だけれど分かっていない終里さんに小泉さんが訂正を入れ、七海さんがアドバイスをした。七海さんは話が長引いているかが、まだ眠そうだ。」

「怪しい奴ー？ あーその…… なんだっけ。チビ、こっち来いよ」

「ああッ？！」

「喜んでイクよー！ さあ、その胸でこのぼくを受け止めてー！」

終里さんは花村クンを見て言っていたので、彼のことだろう。怪しいと聴いて真つ先に花村クンとは、彼女のカンは鋭い。危ない人だというのもあるし、1番不安定な人であるというのもある。ただ、彼女は単純に挙動の理解できない人物を指したのかもしれないが。

終里さんの胸に飛び込もうとした花村クンはその腕でホールドされて首を固定されているが心なしか嬉しそうである。というか鼻血が出ている。その顔どうにかしろ。

どうでもいいが、「チビ」に反応しちやつたあたり気にしているのが丸わかりな九頭龍クンが可愛い。

「問題ない…… どれほど巨大な組織であろうと、俺様の前に立ちはだかることすらできないだろう…破壊神暗黒四天王によって、一切が灰燼と化す運命だからな！」

田中クンのストールの中からタイミングよくハムスターたちが出てくる。ソニアさんはそれを見て嬉しそうに顔を綻ばせた。

「わあ！ ハムスターさんがストールの中から出て参りましたよ！ うふふつ、かわいいハムスターさんですね！」

「かわいい…… ハムスターだと？ …… あ、ありがとう……」
「そこは普通に嬉しいのね」

田中クンが照れて口元をストールで覆い隠してしまった。

分かりやすい照れ方に小泉さんが呆れ口調で言い、瀧田さんも下がったテンションを巻き返すように動き出した。

「ギャップ萌えーってやつっすね？ うつきやー！ 眼蛇夢ちゃんかアイイっすー！」

照れる田中クンとハムスターの動きに夢中になり、距離が近くなったソニアさんの周りをぐるぐる回りながら、瀧田さんがしきりに田中クンの顔色を確認している。

「あいつ…… ソニアさんと気軽に話しやがって…… 後で絶対シバいてやるからな……」

ますます赤くなっていく田中クンに、側から見ている左右田クンがじつりと嫉妬の混じった視線を向けた。

瀧田さんも喜んでいるが、そこはいいのか。

やはり左右田クンはソニアさん限定で嫉妬をしているのか。

修羅場発生？ コロシアイ起きちゃう？ といつの間にか現れてワクワクしているモノクマは誰も気づいていないのできておき、皆は話し合いに飽きてしまったのだろうか。あちらこちらで話が脱線している。

「皆、すごいな……」

「ん、どうしたの？ 日向クン」

眉をハの字に曲げて呟いた日向クンに訊く。

大方、この緊急事態でも立ち直りの早い皆のことをさすが超高校級なのだとも思っているのだろう。頼もしい十神クン。場を盛り上げる澤田さん。意見を言うことのできる数人。マイペースな面々。

その揺るがなさに頼もしさでも感じているのだろう。そして自分に自信がないのだ。彼は記憶が抜け落ちているのだから。

「なんか…… 皆すごいよな。狛枝、お前は怖くないのか？」

「え？ 怖いよ。怖い怖い。得体も知れないし、不気味だね」

あまりに真剣な顔をしているものだから、安心させようとわざと軽い口調で言い、手をひらひらと振りながら笑う。

「マイナスなことばかり考えてると事態もそっちの方向に向いちゃいそうだからね。皆も同じだよ。あんまり深く考えたくないんだ」

「…… そういうものなのか？」

「そういうものだよ。ねえ、日向クン。あんまり焦ると思いき出せるものも思い出せないんじゃないかな？ だからさ、モノクマには警戒しつつ皆といるときくらいは力を抜いていいと思うよ」

心配する気持ちは分かるが、それでは疲れてしまうだろう。まだなにも起きていないのだから気楽に行こう。そういう気持ちで言ったのだが、分かってくれるだろうか。…… まあ、長丁場になればそのうち自然体になれるだろう。

「とにかく、これだけは言っておくぞ」

あちこちで話が脱線し、皆の集中力が限界になっていることを察したのだろう十神クンが再び話し始めた。

「殺し合いなんてバカげたことを考えるヒマはない。その前に、自分

がすべきことをしつかりとするんだ。観察し、推測し、認識し、理解しろ。それが無理でも……とにかく体を動かすんだ。そして俺について来い。俺がオマエラ全員を日常に帰してやる。わかったな。これはリーダー命令だ」

早口気味に紡がれるその言葉は早く話を終わらせてやろうという気遣いが見られた。

一息に宣言された最後の文句には誰もが心を動かされたように目を瞬いた。彼について行けばどうにかなるかもしれない。彼の言葉には、そんな安心感が込められていた。

「うはっ、超カツコイイんですけどっ！」

一瞬の間が開き、彼の言葉に対する第一声は濂田さんから放たれた。

少女漫画にありがちな握りこぶしを口元に当てて大げさに驚いたポーズをとっている。マンガ調ならば、きっと彼女は白目を剥いていただろう。

きやつきやとはしやぎながら十神クンの伸ばした腕にぶら下がる。

前に感じていた威圧感は何処へやら。濂田さんがぶら下がってもビクともしない彼の腕に、私は驚愕を禁じえない。

「伸ばした手がむちむちだねー？ クスクス、”豚足ちゃん”ってあだ名がピッタリだよー」

「と、豚足ちゃん…… だと……？ 」

そのまま復唱しないでくれるかな。なんか、十神クンが自分で豚足ちゃんって言うのと違和感が……

「フン…… この俺が、他人からそんな風に呼ばれる日が来るとはな…… おもしろい」

「あれ、怒らないんだな？」

感慨深げに呟いた十神クンに、意外なものを見たというような表情をした日向クンが言葉をこぼす。

「その程度で怒るわけがないだろう…… 俺自身を見て、そして付けられた呼び名だ。そこには ”ウソも偽りも ” ない」

十神クンはそう言った後に少し間を置き、呟くように続きを言っ

た。

「あるいは…… それこそが俺の望んでいたモノかもな。こんな状況で気づくとは皮肉だが…… なあに、気にするな。今のは独り言だ。」
「そ、そうか、わかったよ……」

困惑の混ざった日向クンの声は、尻すぼみになって消えて行く。
意味深な十神クンの発言にどう反応していいか分からなかったのだろう。

「じゃあ、十神クンの言う通り、今は余計なことは考えずにやれることをやるのが一番だね。島を探索して、なんでもいいから手がかりを見つけるんだ。そうして情報交換し合って、黒幕の思い通りにさせないようにするんだよ！ 大丈夫、皆で立ち向かえばきつと生きて帰れるよ！」

「くつき！ セリフがくつきいんだよ！」

「え？ あ、なんか、ゴメン西園寺さん……」

そうして長引いていた話し合いが終わり、皆はそれぞれ気落ちすることもなくコテージへ戻って行く。

カウントダウンやら謎は増えるばかりだが、誰も生きることが諦めていないように思う。うんうん、生存欲があるってとても素晴らしいことだよな。

皆で立ち向かえれば必ず、みんな生き残って戦える。そう思うのは本心だ。団結、できたらの話だけど。

その中で輪を乱すような人がいた場合…… ちょっとしたきつかけで殺人を企てるような人間がいた場合は、生存競争の邪魔となりえる。そういうのは早々に無力化する必要があるよね。

いつ爆発するか怯えるより、安全に、被害が小さなタイミングで起爆してしまうほうがより良いのだ。

でも、人が死んで恨まれるのは嫌だなあ。人死にが出ないように、やれるだけのことはやろうかな。うん、やっぱりこの路線で行くしかないよね。

「あ、凧ちゃん！ ちょっといいかな」

考えながら歩いているとどうも早歩きになっていたようで、公園に

残っていた小泉さんが駆け寄って来た。

私はそれに、一旦思考を打ち切って歩速を緩め、彼女が隣に並ぶのを待つ。

「ねえ、昨日言ってたことやるでしょ？ 写真はバッチリだからすぐにでもとりかかれるわよ」

「うん、ありがとう…… 地図作りの協力よろしくね」

そう言っただけで、小泉さんとホテルのレストランに向かうことにした。

…… もし、もしもそれでも犠牲が出たときは、馬鹿だねって笑って「キミの分まで私が生きてあげよう」って言ってやろう。

私さえ生き残れるなら、誰が死のうと知ったこっちやないんだから。

「レストランは既に片づけられているみたいだね」

小泉さんと一緒にホテルのレストランに来ると、あれだけあった料理は全てなくなり、散乱していた食器も綺麗に片づけられている。テーブル一つ見てみても汚れ一つ残っていない。

誰かが片づけたというより、食事を運ぶ前の状態に戻されたような完璧な掃除っぷりだ。

「えーと…… 花村ってまだ帰ってきてないのよね」

「厨房にも誰もいないみたいだし、モノクマかモノミが片づけたんじゃない？ ま、ありがたいからとやかく言うことはないね」

「そう、だよね」
きよろきよろと辺りを見渡して頷いた小泉さんが近くにあった椅子に座る。

私も続いて椅子に座り、昨日書いておいた大まかな地図と時間のメモを取り出した。

砂浜から橋へ10分、橋から牧場まで10分、牧場からホテルまで20分、ホテルからマーケットまで10分、マーケットから空港まで30分、空港から砂浜まで30分。

橋を渡って中央の島まで10分。中央の島に入ってそれぞれの島へ繋がる橋へは5分、橋から公園までは10分だ。

それらの地図の横に空白を設けてあるので、それぞれの場所を写した写真を貼りつけられるようになってる。

「風景写真はあんまり得意じゃないのよ…… こういう感じで良かったかな？」

「そうなの？ …… 安易に写真をお願いして、なんかゴメン」

「いいのよ。頼られるのは悪い気しないからね」

彼女の持つ一眼レフカメラの映像を見ながら写真を選別する。

どれも綺麗に撮られていたが、なんだか寂しさを感じる写真だった。

人物写真が好きで写真を撮っている彼女に、誰もいない風景写真をお願いするだなんて考えなすぎた。若干曇っているその表情に、私はそう思った。

「じゃあ、これとこれと……これを現像してこようか。機械はマーケットにあったから、そのついでにお茶するものでも持って来よう」

「パンフレット汚れちゃうわよ?」

「作ってるときに、なにも飲めないっていうのも疲れちゃうと思うよ」
厨房には人数分のコップが置いてあるが、飲み物は片づけられて置いていないようだ。飲み物は自分で持つてくるしかないだろう。

小泉さんは自分の服や私のシャツを見て眉を顰めたが、なんとか納得してくれたようだ。服や紙が汚れるのが嫌なのだろうか。

そうしてマーケットに赴き、現像している間に色々と調達することにした。

「あ、このカップ可愛いわね。凧ちゃん、これとかどう?」

「……! か、可愛い!」

小泉さんの手に収まるように乗っているのは白地に黒猫の模様が入ったカップだ。名前は、
「子猫のマグカップ」
というらしい。完全に私好みだった。

「こ、小泉さん! これを私に……? こんなに好みド直球な品物、良く見つけられたね! やだ、こんなに幸運だなんて、今日一日分の幸運を全部使っちゃったんじゃないかな? あとで来る不運が怖いね。でも、すつごく嬉しいよ! ありがとう!」

ピヨンピヨンと跳ねながら彼女の手を取ってカップを眺める。

猫は好きだ。それにデザインも可愛らしくて使いやすそうだ。

こんなものがマーケットにあったなんて、リストを作った時には気

が付かなかったよ。

「そうだ、これ、お礼にどうかな？」

彼女にあげようと思っていた。 “ ジャパニーズティーカップ ” を取り出し、子猫のマグカップと交換するように手渡す。すると、彼女は驚いたように目を瞬かせてそれを受け取った。

「ほ、ほんとにこれ…… アタシがもらってもいいの？」

「うん、素晴らしいプレゼントのお返しにね」

「ありがと、凧ちゃん。あとでさっそく使ってみましょ」

うん、すごく喜んでくれてる。

二人で笑いあつてから、二人で飲み物とクッキーを袋に詰め、現像した写真を手にホテルまで戻った。

「あー！ 凧ちゃんに真昼ちゃん！ お二人はなにしてるっすか！」

午前10時頃。

ホテルに戻ると、その道程で瀧田さんに会った。

彼女はもうやら島をランニングしてきたあとのようで、その髪を高い所で纏めて現在はポニーテールになっている。汗は多少かいているようだが、息一つ切らしていない。どんな体力だ。

「島の地図と所要時間を調べたからパンフレットみたいにしようと思つてさ、小泉さんには手伝ってもらつてるんだ」

「面白そうなことやつてるんすね！ 唯吹も手伝うよ！ あ、でもシャワー浴びてから行くっす！」

そう言つてくるくる回つていた瀧田さんがコテージに入つて行く。ウインクしながら手をヒラヒラと振つていたので私も手を振つて返す。

「手伝つてくれるならありがたいね」

「そうね、じゃあ先に作業してましょ」

縮小した写真を三つ折りに畳んだ地図に貼り、それぞれの場所にある施設などを書いていく。

“ 砂浜にはモノモノヤシーンがあり、メダルを使って遊ぶことができる。出て来た鍵はマーケットのロッカーに使うことができ、中に

は様々な品が入っている。＼など、モノクマの説明にはなかったことを説明するのだ。また、マーケットの項には5人以上で要望を出せば無料で手に入る品が増えることも書いておいた。これらは私の手に入れた情報なので小泉さんは知らなかったようだ。情報を整理して書きながら「へえ」と感心したように言葉を漏らしている。

「ねえ凧ちゃん、この話どこで聞いたの？」

「ガチャガチャのことは景品の説明書に書いてあった。新しいルールについてはモノクマが勝手に話していったんだよ」

正確には私が質問をしたからそう教えてくれたのだが。

「よし、あとは清書して人数分コピーするだけ……」

「凧ちゃん、真昼ちゃん、待ってたっすかー!? 唯吹がきたっすよおー!!」

階段を何段も飛ばしたように大きな足音を立てながら登って来た瀧田さんは、滑り込むようにレストランへ入って来て、近くに座っていた小泉さんに抱き着いた。

「わっ、唯吹ちゃん？」

「瀧田さん！」

「おー、作ったんすねー」

瀧田さんは完成一步手前のパンフレットを覗き込み、小泉さんに抱き着いたまま彼女の頬をつついていている。

「ねえねえ凧ちゃん、ちよこつと唯吹がアレンジしてもいいっすか？ ダメっすか？ 唯吹もやりたいっすよー！」

「文章を瀧田さんが書くくらいなら、やってもいいけど……」

「よっしやー！ 唯吹に任せて！」

困り顔の小泉さんも「しょうがないわね」と笑みを浮かべて下書きしてあるパンフレットを瀧田さんに渡す。パンフレットを受け取った瀧田さんは目を輝かせて「やったっすー！」を笑いながら近くの椅子に座った。

「私、お菓子の準備でもしてこようか」

「アタシが準備するわよ？」

「ううん、小泉さんは瀧田さんのこと見てあげてよ」

「あー…… 分かったわ」

元の文章を多少アレンジするくらいなら問題などないが、書いてあった情報を上書きされてしまったらたまらない。小泉さんに見てもらえばそうなることはないだろうし…… ずっと座っていたから少し歩きたい。

二人で交換し合ったカップを持ち、厨房に入る。

メイがやっていたように紅茶を淹れて、砂糖とミルクを用意する。

厨房には食器類が並んでいた。それで澁田さんのカップはここから取った。それから普通のコップを三つ用意して、マーケットで調達してきたラムネのビンを盆に乗せる。

お菓子はビスケットとクッキー、それにいくつかのフィナンシェ。なんだかラムネだけ浮いているような気もするが、まあいいだろう。澁田さんは紅茶よりもラムネを選びそうだし、丁度いいだろう。

「できたっすよー！」

「うん、これなら大丈夫でしょ」

レストランの方から澁田さんと小泉さんの声が聞こえる。思ったよりも出来るのが早かったようだ。盆に乗せた紅茶とお菓子を先に二人の元へ運ぶ。それからラムネのビンをテーブルに置き、「できたんだ」と声をかけた。

「凧ちゃん凧ちゃん！ できたっす！ 頑張ったっす！ 可愛くしたっすよ！ 褒めて褒めてー!!」

パンフレットを持ってこちらにダイブしてきた澁田さんを受け止める。犬のように頭を私に押し付け、ぐりぐりと動かしている。ツノのように纏められた髪が当たり、地味に痛い。私はその頭をポンと一撫でしてからその手に掴まれたパンフレットの下書きを受け取る。

「…… うん、これでいこうか」

説明書きの内容はあまり変わっていないが、随分と碎けた雰囲気のパンフレットとなっている。特徴的な丸文字は小泉さんに指摘されたのか、多少は抑えられている。さらに、随所には可愛らしいイラストが描かれている。モノクマとモノミを模したイラストのようだ。

「お茶してから「ピー」に行きましょうか」

「おお！ お菓子がいっぱいっすね！ ラムネまであるなんて風ちゃんサイコーっすよー！」

「ラムネ好きなんだね」

「この懐かしい感じたまんないっすよねー！」

そこそこ喜んでくれている。

ラムネのビー玉をカラカラと軽く移動させながら瀧田さんが笑う。ラムネのビン越しに見た瀧田さんの目が片方大きく見えて私もクツキーを手にしたまま思わず笑った。

カシヤリ、乾いた音が響く。

驚いて音の方向を見ると小泉さんが笑いながら写真機を構えていた。

「二人ともいい顔してるわ」

「そっか、人物写真が好きなんだっけ……？」

私がそう言うと、写真機を構えたまま小泉さんは照れたように笑った。

「そうよ。人が喜んでいたり、笑っていたり…… 幸せそうにしてる

写真が好きなのよね。笑顔の写真を見るとこっちまで幸せになってくるよね、アタシはそんな写真を撮りたいのよ」

「…… 真昼ちゃんカッキーすね！」

「あ、今…… 小泉さんこそ、いい顔してるよ」

「ホント？」

小泉さんは人を温かくするような笑顔を浮かべている。

彼女がその名前のように温かいから、きつとその写真も人を笑顔にすることができのさだろう。それはとつても素敵なことだ。こういう才能ならば私も皆と笑えたのだろうか…… そんな嫉妬にも似た感情が湧いてくるが、それは酷くお門違いな感情である。だから彼女には関係ない。

「その写真、あとで現像したらもらってもいいかな」

「あ、唯吹も欲しいっす！」

「じゃ、後でマーケットに行つたときに現像しましょうか」



暫くお茶会をしてから二人とマーケットに移動し、無事コピーも終わった。

全員分のパンフレットを折り畳んでポケットに入れる。

写真も綺麗に撮れていて、湊田さんと二人して小泉さんにお礼を言って大切にしまった。そこに小泉さんの写真がないことだけが少し寂しくて、湊田さんと声を揃えて「小泉真昼ちゃんさんと写真を撮りたいから、今度写真の撮り方を教えてくれるかな？」とお願いをした。

すると小泉さんは照れたように顔を振ってから小さく頷き、「いいわよ」と短く答えた。

小泉さんと、湊田さんと少し仲良くなれたみたいだ。胸の内が温かくなったように感じる。なんだかとても懐かしいようなこの感じ……まるで姉さんたちと一緒に遊んだ頃のような、そんな懐かしい気持ちに、彼女たちはもういないんだと思い出して、少しだけ寂しくなった。

三人で盛り上がったあとに腕時計を確認すると、既にお昼の時間になっていた。お茶会をして随分お菓子も食べてしまったし、あまり物を食べられないかもしれないが昼食にするべきだろう。

早いおやつのことを言ったら罪木さんに注意されてしまいそうだが…… 食べてしまったものは仕方ない。二人と一緒にお昼にしよう。

「お昼にしようか」

「もうそんな時間っすか？ いっぱい食べるっすよー！」

「アタシはあんまり食べられないわね…… 蜜柑ちゃんに怒られちゃう。なにやっつてんだろ、アタシ」

「湊田さん、そんなに食べられるんだ」

「おやつは別腹に行ってるからイケるっす！」

そんな会話をしながらホテルに戻ると、12時になっているからかほとんどの人物がレストランに揃っていた。

「おやおやあ？ 三人も昼食を摂りに来たのかな？」

レストランに入ると、中で食事をしていた面々の視線が軽くこちらに向けられた。

その中でも食事が終わったららしい花村クンがこちらにやって来ると、私たちを順番に見渡してからそう言った。

「あ、花村クン…… 他の皆も。食事は花村クンが作ったの？」

私がそう訊くと、花村クンは不満そうに口をハの字に曲げて興奮したように話始めた。

「それがね、ぼくが来たときにはもう用意してあったんだよ。勘弁してほしいよね、これはアイデンティティの消失だよ！ ま、ぼくは一つしかアイデンティティがないわけじゃないけどね……」

「これを用意してるのはモノクマだろうし、直談判してみればいいんじゃないのかな」

「えっ、あのクマに……？」

花村クンは明らかに関わりたくなさそうだ。モノクマに積極的に話しかけたりしたらモノミのようにどうにかされてしまうとも思っているのだろうか。一步踏み出せない恐怖の色がその目の中に見える。

「…… 私も要望を言ったりしたけど、なにもしてこなかったよ？」

「モノクマと話したのかい!？」

「あー、モノクマちゃんってなんだかんだでお話聴いてくれるんすよね……」

「危険ってわけじゃないのかしら」

テーブルでもぐもぐとリスのように食事を頬張っていた滝田さんが感慨深げに呟き、それを聴いた小泉さんが首を傾げている。

「あんなこと言って来るヤツが危険じゃないわけないじゃんー!」

四人で話していると、こちらも食事が終わったららしい西園寺さんが通りかかりざまにそう言った。

「まあそれはそうなんだけどね…… わざわざコロシアイを提案をし

てくるくらいなんだし、自分から手は出して来ないと思うよ。話すくらいなら大丈夫なんじゃないかな」

「凧ちゃん、度胸あるわね……」

小泉さんが呆れたように言ったが、それで嫌われたわけではないよ。うだ。

モノクマと普通に話していると疑われるかもしれないとも思ったが、杞憂だったようだね。

そこでようやく、私も椅子に座って食事を始めた。

お菓子を食べてしまったので少な目だ。皿に冷製パスタを取り分けて、新鮮なサラダを盛る。

そうこうしているうちに階下からドストスと大きな足音が聞こえてきた。この場にいらないことで物凄い違和感のあつた十神クンがやって来たようだ。

既に時間は1時を回っている。12時頃にはキッチリ食事を摂っていたような十神クンがこんな時間に来るだなんてなんだか妙な気がする。

「お、おい待ってって十神！」

十神クンは物凄い勢いで取り皿に食事を盛り付けはじめ、その後ろから走ってやって来た日向クンがその背に追いつく。

「もう1時間も昼食の時間を過ぎているのだぞ。お前の話をわざわざ聞いてやったのだからこれくらい付き合え」

「わ、分かったって……」

日向クンは随分と疲れた様子で十神クンが次々と盛っていく皿を見つめ、さらに律義にも分けられた自分の皿の上を見てげんなりとしている。十神クンがついでに盛った日向クンの皿には山ほどの肉が乗っている。油がギツタギタに光るそれを見てそつと私は目を逸らした。

「あ、西園寺さん。帰るならこれ渡しておくよ」

「は？ なにこの紙きれ……」

「小泉さんと澁田さんと一緒にこの島のことを書いた地図を作ったんだ。よかつたら持って行って」

「はあ!? 必要あるのかなー? そんなもの。時間を無駄にしてるんじゃないのー?」

そうぶつぶつと言いながらも、結局押し付けたパンフレットを受け取った西園寺さんがそれを袖に仕舞いレストランから出て行った。

「花村クンもこれ、持って行ってよ」

「女の子からのプレゼントは受け取らないとね! 時間の目安にもなるしこれで誰がどの時間にどこにいるのか調べやすくなるよね」

ナチュラルに言われた変態発言はスルーして三人でパンフレットを配る。

西園寺さんを含め、幾人かが澁田さんの丸文字に反応していたが、私ではなく澁田さんが書いたことを告げると皆納得していた。そういうイメージでもあるのだろうか。

午後1時半。驚異的なスピードで余った食べ物を飲み込んで十神クンを除き、全員の食事が終わったようだ。

終里さんは式大クンにどこかに連れて行かれ、九頭龍クンが去ると同時に辺古山さんも去る。

九頭龍クンはパンフレットを受け取らなかったが、彼の分も受け取った辺古山さんが後できっち届けてくれるだろう。

左右田クンは私が渡しに行くのと5メートル以内に近づけないので、澁田さんに渡してもらった。

十神クンも食事をする前になんとか渡すことができたので問題ない。商品リストは彼にだけ渡しているが、他の皆には渡しそびれてしまった。

あとでポストにでも入れておけばいいだろうか。

「アタシは島を周って、順番に皆の写真を撮って来るから今日は一旦ここで行くわね」

「唯吹もマーケットで探し物があるんでー、ちよーつと おいとま? するっす! 真昼ちゃんも凧ちゃんも今度遊ぼうね!」

「そっか、じゃあまたね」

食事の終わった二人を見送り、手持無沙汰になる。

この場に残っているのは食器の片づけをしている花村クン、まだ食

事中の十神クン、私と同じくどうしようかと考えこんでいる日向クンだ。

「…… 狛枝、ちよつといいか?」

少し考えたあと、何を思ったのか日向クンが声をかけてきた。朝は随分と弱った様子だったが、今はそうでもないように見える。十神クンと過ごした自由行動でなにか解決したのだろうか。

十神クンといると安心感があって気も紛れるだろうし、相談も受け付けてくれるだろう。なにがあつて元気がなかったのか、なにを話して元気になったのか…… 少々気になるがそれはプライベートなことだろうから訊かずに返事をする。

「どうしたの?」

「パンフレットつてお前が書いてたメモから情報を出してるんだろ?」

俺ももう少し真面目に探索しようと思つてさ。一緒にどうだ?」

まさか日向クンのほうから誘つてくれるとは思つてなかったよ。

「あー、それなら一旦マーケットに寄つてもいいかな?」

「ああ、どうせ島を全部周るんだ。好きにしていどうぞ」

メモ張に日記を書くわけにはいかないし、日記帳の代わりを探さないとな。

昨日は日記帳を失ったショックで忘れていたし、さつきは目的があつて動いていたから言い出しづらかったけど、二人行動のときなら大丈夫だろう。

未だに勢いを衰えさせず食事をバキュームしている十神クンの横を通り、レストランを出た。

No. 14 『失樂園』―親和2〈日向〉―

「そういうえば、さっきの商品リストって、いつ書いたんだ？」

マーケットに向かう道すがら、ついさっき渡した商品リストを眺めながら日向クンが疑問気に呟いた。

「ああ、昨日の夜に頑張って書いたんだよ…… おかげで寝不足になっちゃってさ、ほら、レストランで寝てたでしょ？そういうことだよ」

「昨日の…… 夜？」

日向クンは私の答えに一度詰まると、咽を鳴らして絞り出すようにそう呟く。

「…… ? 昨日、なにかあったの？」

「いや、なんでもない…… なあ、昨日、誰か他に出歩いているやつはいなかったか？」

震える声で言う彼の様子をおかしく思っただけで更に追及するが、明確な答えは訊き出すことができない。

「昨日の夜は家具も運んだんだけど…… 小型冷蔵庫がどうしても持ち上がらなくてさ。商品リストと荷物持ちを条件に、あとから来た十神クンに手伝ってもらってコテージに運んだんだ。だから、昨日の夜私が見たのは十神クンだけだね。」

「そうか……」

なにか考え込むようにして早歩きになる彼に小走りで追いつきながらマーケットに向かう。

「ほらほら、入ろ…… あぐっ！」

「粕枝!？」

頭上の看板は大丈夫だったが、地面に立てられていた看板が風に煽られて倒れ、私はその下敷きになった。あまり重くなかったのは幸いだが、日向クンに罪木さんのようなドジっ子を見る目で見られ、若干解せない。

「うーん、大丈夫だよ。頭打っただけだから…… これくらい軽い軽い」

「軽いって、血が出てるんだぞ!？」

看板よりもコンクリートに倒れたことで頭を打ったので額から少し血が出ているが問題はない。このくらいの小さな不運は日常茶飯事だ。怪我は慣れているので、対処も慣れている。ハンカチを押し当て、拭う。傷も小さいからすぐに血も止まるだろう。

「すぐに血も止まる。これくらいの傷なら慣れてるよ」

「慣れてるって、お前!」

「言ったよね、私の才能……」

「はあ?」

日向クンは看板の下敷きになったままふてくされている私を、不可解な物を見る目で見つめている。顔は理解できないものを目の前にしたように歪み、困惑と僅かな怯えが見て取れる。

「お前の才能? …… 超高校級の、幸運だろ?」

「その通り。だけど、額面通りの才能ってわけではないんだ」

「抽選で受かったから幸運って言われてるんだろ? そんなの……」

「才能だなんて言えない、って? 言ったでしょ、私は」 必ず抽選に当たる。 ” と言われた女子高生なんだよ」

看板を退かし、コートの手端を払って立ち上がる。血はもう止まっている。

「私の幸運は起きた不運と同等のものが必ず来るって言えばいいのかな…… 幸運が起きたあととそれと同等の不運が起きる。私の運つて、すごく極端なんだよ。希望ヶ峰学園に入学できた幸運と、こんなことに巻き込まれている不運…… っていう感じにさ」

「そんなのっ、偶然じゃないのか?」

「偶然、か…… そうだったらいんだけどね」

日向クンとこの話をするにはまだ早かったようだ。今回はここまですてにして、今日やるべきことをやろう。まだ少ししか時間が経っていないのだから、早く日記帳の代わりと、さきほどのパンフレット作りでページがなくなってしまった白い手帳の代わりを探さなければいけない。

「さ、早く店に入ろう?」

「あ、ああ……」

マーカーセット内に入り、真つ先に文具系が置いてある場所を物色する。

一番安いのでメダル1枚。しかも、クローバー柄。なんだかモノクマの悪意を感じるような気もするが、これしかないようだ。しかし、文具系に置いてあるものは全て大きさはさまざまだがノートのようで、ずっと書き続けられるほど分厚いものはない。せいぜい50ページ分。中途半端なので長く使えるわけではない。困ったな。

「ノート、か？」

「モノミの見せしめで日記帳がダメになっちゃったからさ、それに白猫のメモ帳もページがなくなっちゃったし……新しいのが欲しいんだけど、あんまり分厚いものはないみたいだね」

「ああ、あのとときのか…… そうだ、悪いことしたからこれ……」

申し訳なさそうな顔をした日向くんが懐から分厚い手帳を出し、差し出してくる。それに目を奪われて、私は興奮しながらそれを受け取った。

「え、これを私に……？」

彼がプレゼントしてきたのは、使いやすいと評判のユビキタス手帳だったのだ。

前々から欲しかったものの、ブランド品で使い潰すにはもったいないと手を出せなかった素晴らしい品だ。どうして彼がこんなものを…… そうか、モノモノヤシーンか！

彼は十神クンと自由行動を共にしているし、その間に試してみたのかもしれない。シンプルなデザインのそれは分厚く、ペンまでついていて、しかもスラスラと書きやすい見事な一品だ。小泉さんといい、ここまで私の好みの物を貰うとビックリしてしまう。

思わず受け取ってから裏表、とひっくり返しながら手帳を眺め、日向クンの手を取って乱暴に上下へと振った。興奮しきった脳内の片隅で羞恥心が湧いたが、それをも上回る興奮で頭がいっぱいになる。「ど、どうしよう日向くん、ねえ惚れていい？ 惚れていいの？ ……」

って冗談だよ。それぐらい嬉しかったってことだよ！　ありがとう、日向くん！　こんなに素晴らしい物をもらえるなんて！　看板に潰された甲斐があったよー！」

自分がなにを言っているのかも判断つかず、思わず織月やうつろちやんと話しているときのノリが出てきてしまっている。

私はそれに気がつくくと、彼の手を解放してから誤魔化すように手帳を抱きしめた。

「そ、そんなに喜んでくれるとビックリするな……」

「これは日記帳にするね。よし、じゃああとはこのクローバーのノートを手帳の代わりにしようかな」

メダルを支払い、ノートを懐に入れる。

「そうだ、お礼になんだけど、これあげるよ」

「これ、ブランド靴じゃないか？」

「日向くん足早いし、よく島を周ってるみたいだから、これがあれば少しは疲れにくくなるんじゃないかな」

彼に渡したのはスパイ・スパイク。これは別の人にあげる予定だったが、彼も有効活用できるだろう。

「すごく軽いな……　確かにこれなら疲れにくそうだ。ありがとな、粕枝」

日向クンの笑顔はここに来たときとは違い、随分と柔和なものになっている。十神クンと過ごしたり、いろいろあったからか、大分落ち着いたようだね。

さらさらと、雑に持っているプレゼントの名前を書き込んで行く。

「粕枝……」

そしてふと、日向クンが雑に書き込んだ私の文字を見ていることに気が付いて私は声をあげた。

「ああああ!!　こっちは見ないでよー！」

「……　お前って、意外と……」

「字が汚いって？　知ってるよ。人に見せる手帳と、自分しか見ないプライベートな日記じゃ分けてて当たり前だってば。さつき皆に渡したりストとかは意識して丁寧に書いてるからまだマシだけど、癖が

強すぎてあれぐらいがやっとなんだよね。丁寧に書いたせいで時間も余計にかかって寝不足だし……」

試し書きをしたユビキタス手帳をしまい、呟く。

「リストのほうも酷い物だけど、あれが直せる限界なんだよね。どうしても字が崩し字になって端が伸びちゃう……ま、そうなるのは日記くらいだし、日向クンには関係ないよ」

「結構気を遣ってるんだな」

「ああもう、これでこの話はお終いな。順当に周るなら、次は空港だよ」

「……ああ」

ああもう、恥ずかしい。

いくら字を書いたって上手くなるわけじゃない。量を書くのだからどうしても荒くなって、子供の頃よりも字が汚くなっていくくらいだ。そんなものを見られるなんて恥ずかしいどころじゃあない。

無言のまま着いた空港には誰もいなかった。皆、空港にはなにも希望を持っていないのだろう。そこには大きな粗大ゴミくらいしかないからだ。

「お、これは……」

「どうしたの？ 日向クン」

日向クンは空港を見渡したあと、いまだに回り続けている荷物の群れに手を伸ばした。

そして、一つの荷物を手に取った日向クンはその陰に隠れていた、15cmほどの小さなモノクマを手に取っている。

「なにそれ、モノクマ？」

「ああ、モノクマが島中にヌイグルミを隠したらしくてな。探せって言われてるんだよ」

「隠れモノクマだね？ 隠れモノクマなんだね？ じゃあ、私も見つけたら日向クンに教えるよ」

「やっぱり俺が集めるんだな……」

「だって頼まれてるのはキミでしょ？」

「まあ、そうなんだけどな」

隠れモノクマ以外の収穫はこれと言ってなく、次の場所へと日向クンと向かう。

そして、砂浜に着くと、左右田クンと花村クンがヤシの木を前に輪になって悩んでいるようだった。

日向クンは進んでそちらに歩み寄り、私はその後をついて行く。

「っ?!? ぐえ……」

途中でヤシの木の下のを通ると、三つのヤシの実が私の頭目がけて振って来た。

当然油断していた私はそれにぶち当たり、よろけた拍子に追撃の四つ目が背中に当たって砂浜に倒れ込む。

「あつつう……いー」

日向クンはそんな様子の私には気づかず、左右田クンと花村クンと話し始めた。

「っっ!!」

先程ぶつけた額から、止まっていたはずの血が滲み出る。

私は続けてやって来た不運に軽く苛立ち、太腿のホルダーに入っていた鉄パイプで一つのヤシの実を思い切り叩いた。凄い音が鳴るが私の力不足のせいか上手く割れず、上部にヒビが入っただけだった。

「な、なんだ!?!」

「あ……」

私は慌てて鉄パイプを収縮させ、スカートの下に隠す。それから血に染まった髪をわしゃわしゃとかき回しながらピリピリと痛む頭を押さえた。ここで武器を持ち歩いているのがバレるのは得策ではない。頭ばかり集中攻撃されて少し血が昇ってしまったようだ。

「粕枝!?! また…… って、大丈夫か?」

「な、な、なんでオメーがここに!?!」

「ええええ!?! なに、なにがあつたの!?!」

駆け寄って来てくれた日向クンの手を取り、起き上がる。

「あはは…… まさかヤシの実に押し倒されるとは思ってたよ……」

「押し…… 倒される…… !?!」

「オメーはなに想像してんだ!」

鼻血を流す花村クンにツツコミを入れる左右田クン。

「まあ、気にしないでよ。あとで罪木さんの所に行くから大丈夫だし」
さすがにここまで頭を怪我しているとぼんやりしてくる。

あとでしつかり処置をしたほうがいいな。

「ちゃんと治療しろよ?」

「うん……」

目の前には四つのヤシの実と、左右田クンの持つ大きなヤシの実。

「あれ、大きなヒビが入ってる」

「はあ!? オメーどんだけ石頭なんだよ!」

「これ、頑張れば二つに割れるんじゃないかな?」

綺麗に上のほうだけヒビ割れているヤシの実は手で十分割ることができそうだ。

「あはは、皆にとつては幸運だったみたいだね」

「幸運なのか? これ」

「私は力がないから無理だとして…… 花村クンとか左右田クンはこういうの割れる?」

二人同時に力を入れれば零すこともなさそうだし、私だと全部自分で被りそうな気がするからパスだ。

「い、いや、ぼくはそういうワイルドな料理方法を使わないからなあ…… 分かるかい? どんな相手でも、優しいテクでとろけさせるのがぼくのスタイルなのさ。食材も、女性もね!」

「うぎぎぎぎぎぎぎぎイ! 鳥さんが肌に大量発生中つすよ! コケケケケケケケー!」

「うおわあ!」

「み、濔田? お前、いつのまに……」

花村クンの背後で腕をさすりながら濔田さんが叫んでいる。

それに驚いた左右田クンが、変な格好をしながら勢いよく後ろに下がる。日向クンもビクリと肩を震わせて半歩後ろに下がった。

「ごんちらー、今来たんすよ! ペコちゃんとお手々繋いで散歩したら皆が見えたんす!」

「いや、手は繋いでいないだろう……」

「ふんふん…… うん、いいんじゃないかな！ 南国に咲く一輪の百合！ きつと夜は、昼間と逆で辺古山さんが澪田さんを翻弄してるんだね！」

「おい、妙な想像をするな。それより…… なんの相談をしていたんだ？」

凄まじい妄想力を発揮している花村クンはともかくとして……

辺古山さんがヤシの実を見てなんとなく察したように話を振った。

「実はよオ、ヤシの実を割って中のジュースを飲んでーんだけどよ…… ヒビが入ってねーやつはどうしようもなくってよ」

「なるほどな…… おい日向、その模擬刀を貸してくれ」

「あ、ああ」

辺古山さんが模擬刀を構え、目線を日向クン、澪田さん、左右田クンへと移す。

「左右田、すまないがそのココナッツを上に入れてくれないか？ 澪

田は罪木を呼んで来てやれ」

「オイオイ、そんな割り方したら中身が零れるどころかオレらにぶちまけられるんじゃないか？」

「え？」

私がキョトリと彼女を見つめると、「見るに堪えん」と一言だけ漏らされる。

「がびーん！ 凧ちゃん血だらけっすよ!? 分かったっす、蜜柑ちゃん呼んでくるっすよ？」

それから澪田さんは初めて私が怪我をしていることに気が付いたように驚きの表情を見せた。血に濡れた髪は手で押さえて隠していたからか、途中まで気づけなかったようだ。

「そうだね、近くにいたならお願いできるかな？ 澪田さん」

「りょーかいっすよ！ 超特急で行ってくるっす！」

澪田さんが橋の方へ消えて行く。確かに、生徒手帳を見てみると罪木さんの居場所は公園になっている。

「そんな轍は踏まないさ。お前たちはただ落ちて来る物を受け止める

準備だけしておけばいい」

模擬刀を構えた辺古山さんが格好良い。

その言葉を聴いて左右田クンは半信半疑でヤシの実を持って辺古山さんの横に立つ。

「ぶちまけられたら斬新なローションプレイになるね！ 全裸待機しておいたほうがいいかな？」

「必要ない」

「行くぞー、せーのっと」

高く上げられたヤシの実が重力に従って辺古山さんの前へと落ちて来る。左右に構えた日向クン、花村クンはその動きを目で追い……

「行くぞ、はあっ！」

「よっと」

「ぼくの胸に飛び込んでおいでー！」

……一滴も中身を零さずに真つ二つにされたヤシの実を受け止めた。

「あはは、すごいすごい！ 本当に零れてないよ！」

「次、行くぞ。左右田、頼む。狛枝も受け止めるのを頼めるか？」

「おうー！」

「分かったよ」

ココナッツに夢中な左右田クンは私の接近にも気にしていない。

こうして皆に混ざって遊んで行けば彼とも仲良くなれるだろうか。頭上に上げられ、割られた二つ目のヤシの実を受け止めながらさう思う。

「他のはどうしようか」

「砂が付かないように一旦置くしかないが……」

「まかせてくだちゃーい！」

「モノミ!？」

「うぎゃあああああああ!？」

残り二つのヤシの実を前に困っていると、背後から現れたモノミがレジャーシートを広げた。

日向クンは純粹に驚き、左右田クンは大袈裟に驚きながら叫ぶ。し

かしその手に持ったヤシの実を手放さなかった。そこには理性が働いているのかもしれない。

「ホントはテーブルの一つでも出してあげたいんでちゅけど、今のあちしは力不足でそこまでのことはできないんでちゅ。少しでもこれで役に立てたらいいなー、なんて！ らーぶらーぶー！」

レジャーシートを敷いて素早く帰って行ったモノミの背中を見送る。モノクマとは違って本当、いい先生だ。

「よし、では次だ」

「おー！」

次々とヤシの実が割られ、レジャーシートの上に並べられていく。

「蜜柑ちゃん呼んできたっすよー！」

「こ、狛枝さんが怪我をしたって聞いたのですけどお！」

「あ、罪木さん。血はもう止まってるけどちよつと腫れてるみたいなんだよね」

「血まで出てるんですかあ!? どんな転び方をしたんですかあ！」

それ、罪木さんにだけは言われたくないんだけどなあ。

「看板の下敷きになってコンクリートに頭をぶつけて…… さつきはヤシの実が四つも落ちて来てぶつかっちゃってさ」

「え、それってどういう状況っすか!？」

澤田さんがヤシの木と私を見比べながら目を白黒させている。

「よくあることだよね……?」

「そんなことたまにしかありませんよお！」

「たまにならあるのかよ！」

「え、たまがなんだって？」

「花村は黙ってる！」

罪木さんの言葉に反応した左右田くんがツツコミ、同じく反応した花村くんの口を閉じさせた。

日向くんはそれを見てなにも言えずに固まっている。辺古山さんはため息を吐いてヒビの入ったヤシの実を一人で割ってしまうとレジャーシートに置いた。

怪我人だと張り切り、座った私の上にまたがって治療をする罪木さ

んの目を見つめる。

薄い桃色を垂らしたようなヘーゼルの瞳は仄暗い。至近距離で治療を受けているためか、左目の下にある泣き黒子がよく見える。

安心させるように気弱そうな微笑みを乗せたその表情はどこか喜んでいられるようにも見えた。

「どうしましたかあ？ あ、痛いですかあ？ 大丈夫ですよ、消毒はしたのでしばらく安静にしているだけでいいです。それか、あとでコテージに帰ったときにきちんと冷却してくださいねえ」

消毒液を染み込ませたガーゼで患部を清潔にし、薬を塗ったガーゼで覆う。

慣れた手つきで行われる罪木さんの手はとても冷たくて、南国の空気で温められ、ぼうつとしていた頭がスツキリとしてくる。

こういうときは怯えないんだな、と考えながら「ありがとう、罪木さん」と礼を言うとともに彼女は畏まり始めた。治療が終わったためだろうか。

「そうだ、罪木さんもココナッツジュース飲んでいかない？ 美味しいよきつと」

「ウ・マ・イ・ゾー！」

私たちの後ろでは左右田くんが念願のジュースを飲んで歓喜の声をあげている。

「ゲゲー、これは……！ ほど良い甘さでココナッツ特有の青臭さもなく、まるで夜のカラカウア通りをほうふつとさせる味わいだー！」

「えーっと、それって美味しいってことなんすか？」

「ああ、今まで飲んだココナッツジュースなんて偽物だっと思えるくらいにな。狛枝、罪木も辺古山も、お前らも飲むだろ？」

日向くんがレジヤーシートの上に置いてあるココナッツを指さす。するとすぐに瀧田さんが飛びついた。

「うはーっ！ うめーっす！ めっちゃうめーっすよー！ ペコちゃんもほらほら、飲むっす！」

「あ、いや、私は……」

「飲んでくれよ、お前のおかげでこんなに美味しいジュースが飲めたんだしさ。ほら、罪木もどうだ？」

渋ったように一歩下がった辺古山さんに日向クンが誰も手を付けていないココナッツを一つ差し出して言う。

「そうそう、ちつとは南国気分も味わえたし！ マジでありがとな、辺古山！」

「ソフフ、新しい料理のインスピレーションも湧いてきたしね。このレシピが完成したら、辺古山さんに是非とも味わってもらわないと」「大袈裟だな…… 私は私にできることをしたままでの…… だが、それで皆が楽しめたのなら…… 幸いだな」

優しい笑顔を見せた辺古山さんは日向クンからココナッツを受け取った。そして、噛み締めるように 「美味しいな……」 と言う。硬い表情が解れてとてもいい笑顔だ。そんな彼女の笑みは私に懐かしい既視感を覚えさせる。ああ、私のメイに逢いたい…… ここに彼女がいたら、どんなによかったか……

「え、えとえとえと、私なんかと一緒に頂いてもいいのでしょうかあ……？」

「うん、治療したついでに飲んで行くって思えばいいんじゃないかな。沢山あるし、誰も怒らないよ」

「分かりましたあ…… 美味しいです……」

「そうだね……」



しばしココナッツパーティーに興じたあと全員で後片付けをして別れた。

レジャーシートや飲み終わった後のヤシの実ホテルに戻る花村クンと罪木さんが片づけてくれるようだ。皆で礼を言ってから改めて別れ、砂浜に残っているのは私たちだけになった。

「ね、日向クン。ちよつとガチャガチャやって行ってもいいかな?」
「ああ、別に構わないぞ」

日向クンも結局ヤシーンを回すことになった。二人で五回ずつ回して鍵を仕舞う。

「牧場の方を通つてマーケットに行くか。お前も怪我してるんだし、早く戻ったほうがいいだろ」

「気にしなくてもいいんだよ? 中央の島を見て回るくらい大丈夫だって」

「ダメだ。お前はコテージで休んだほうがいい」

そういう融通の利かないところは島に来てからずっと変わらないよね。まだ1日しか一緒に過ごしていないが、ずっとずっと長い時間が経っているように錯覚してしまいそうだ。

「日向クンって、頑固だよな」

「なにか言つたか?」

「いいや、なんでもないよ」

途中、牧場で牛を持ち上げながら「トレーニングじゃあああああ!」と叫んでいる式大クンに遭遇したが、牛は何百キロもあるという事実からそつと目を逸らしてそのままマーケットに向かった。

「おい、狛枝!、そつちはどうだ?」

「うーん、大したもののは当たらなかつたみたい」

KISSノート、第二ボタン、絶対音叉、包帯…… 戦場ナイフ。

ナイフは太腿に付けたホルダーと一緒に隠し、他のものを軽く日向クンに見せる。

日向クンの前には開いたロッカーとチョコチップジャーキー、エプロンドレス、百年ポプリ…… ビバ氷。もう一つは分からないが、日向クンが後ろ手に何かを隠しているので見せられないものでも当たってしまったのだろうか。

「コテージに置いてくるか…… なあ、狛枝はこれいるか?」

困ったようにそう言つて差し出して来たのはビバ氷。これは……

フラグかなにかかな？

結局、スプーンにアタリハズレが書かれているというビバ氷は私が
食べ、十神クンが持つて行つてくれるまで合計20回当たり続けた私
はお腹を壊して罪木さんに怒られたのだった。

NO.?? 『番外小話』―誕生日―

・病院組の場合

「ねえメイ、どこに連れて行くの?」

「行けば分かりますわ、風様」

くすくすと笑いながら私の手を引くメイに、困惑の顔を隠して大人しくついて行くととても広い廊下に出た。

それは玄関ホールへと繋がる廊下だったので不安になった私は、彼女へしきりに話しかけながら少しひんやりとしたその手をぎゅつと強く握る。

「さあ風様、お手を引かせてもらいますから目を瞑ってください。なにがあるかは後のお楽しみですわ」

「え? う、うん……」

メイはなんだかとても楽しそうにしている。

そんな彼女の表情は至極明るいものだったが、目元にはファンデーションで隈を隠したような形跡がある。巧みに隠しているようだが、毎日彼女と過ごしている私の目は誤魔化せないのだ。

その目は寝不足からかいつもより充血していて、少し怖い。口元こそ笑みを浮かべてはいるが、彼女を知らない人が今のように暗い廊下を懐中電灯一つで歩いている姿を見たら卒倒してしまいそうだ。よく知っている私が怖いと感じるのだから相当だよ、本当。

彼女の言う通りに目を瞑って引かれるがままに歩く。時折聞き取りやすいようにか、私の頭に近い位置でどちらに曲がるかなどの指示をしてくれる。

私が目を瞑っていても迷いなく歩けるのは、間違いなく彼女への信頼がなせる業だろう。分かりやすい指示とタイミング、引かれる手。

涼しい病院内の、少し薬品臭さが漂う空気。子供体温で温かい手を冷やす彼女の手。頬を撫ぜる空気と、彼女の歩く足音。彼女と、私の吐息…… 静かな病院だからこそ響く音は沢山ありすぎて拾いきれないが、これがヒイラギ姉さんの生きていた世界なのだとは理解した。

ヒイラギ姉さんには手を引く人がいたのだろうか…… そう考えるとなんだか胸が締め付けられるように痛い。

支えていたのはりん子姉さんか。随分と前のことだが、だからりん子姉さんが面会謝絶になった日に取り乱したのだろうか。そして、足を失ったと聞いたそのときも。

「着きましたわ。ささ、どうぞお座りになってくださいな。そう、そこです。そのままゆっくりとお座りください。大丈夫、騙したりしてませんよ。あなたを騙すだなんて、なんておこがましい…… あなたに私は嘘を吐いたりしませんからね」

「わ、分かっているよ…… 大丈夫、大丈夫……」

不安になりつつもゆっくりと椅子に座り、ストンと腰を落ち着ける。

「で、なんでこんな真夜中に連れ出したの？」

「では、もう目を開けていいですよ」

音を敏感に拾えるからか誰かの息遣いが追加でその場にあることが分かった。その数を数えて私はほくそ笑む。

ぷらぷらと、隠す気もないその鉄が擦れ、揺れる音。必死に息を押し殺している音。装着した機械から空気が出る音…… そして、メイの息遣い。

「ハッピーバースデー！」

目をゆっくりと開くと、そこには姉さんたちに加えて橙子ちゃんまでいた。

目の前の風景は昼間カフェとなつている場所そのもので、小さなウソクとランタンの灯りの中に皆の顔が見えた。

テーブルには大きなホールケーキ。夜中に食べたら太ってしまうなんて関係ないとばかりにデンと置かれている。橙子ちゃんはずきを食べるには一人きりにならないといけなはずだが、彼女はお喋りを楽しむために来ているようなのでいいのだろう。

メイが既に包装されたケーキを彼女に渡している。

りん子姉さんは相変わらずねっとりとした笑みで頬杖をついてこちらを見ている。ドロツとした濁った黒い目がなかなか恐怖を誘う

が、いつものことなので慣れたものだ。

ヒイラギ姉さんは「別にあんたを祝いたかつたわけじゃなくて、メイドさんのケーキに釣られただけよ」と言い訳にもならない言い訳を話している。うん、いつものツンデレだ。

「うわあ、ありがとう！ 皆大好き！」

につこりと笑ってこちらを見つめるその視線に安心しながら、誕生日の夜は静かに過ぎていく――

・ゆめにつき派生組

「はあ、やつと片付いた。手伝えとは言わないけどさ、なんで部屋でくつろいでるだけなのかな？ お前たちは」

「引越し祝いに来たんだからそりゃあくつろぐよね」

「え、私はちゃんと昼食とか用意してあげてたよね？」

綺麗に片づけられた部屋で、半目になってこちらを睨みつけるうそつきことうつろちゃん。その手には束ねられた段ボール箱。そう、クリスマスに話していたこと…… うつろちゃんの一人暮らし用に買った、マンションの最上階、その一室に彼女は今日引越して来たのだ。

片づけを手伝うためにやって来たと思われる織月りつきは早速置かれていたソファにどかりと座り、一人で酒盛りを始め、私は隣部屋にある日記の整理をしつつ昼食の差し入れをしたりなんだりとお手伝いしていたのだ。

綺麗に敷かれたラグ。向日葵模様のカーテン。日記を収める本棚。お洒落な電気スタンド。棚の上にはビスクドールが置かれ、玄関には向日葵の鉢植えが二つ置かれている。ラグの端に置かれたソファの近くにはテレビ台と、その上に乗ったパソコンが置かれ、テーブルはこれまたお洒落なガラス製。

キッチンが黄色と橙色の調理器具で統一され、寝室を彼女が整えて

いるときにチラツと見たら、あちらも向日葵模様の布団だった。その枕元には小さなテーブルと一冊の日記帳、電気スタンドがあり、まるでホテルの一室のようになっていた。

「それにしても、本当に向日葵好きだね」

そう言うのと彼女は鋭い目をほんの少し緩めて頬を染める。

「七瀬が好きだって言ってたから……」

独り言のように呟かれた言葉に目を丸くして彼女を見上げると、慌てたように首を振って「昔、ばあちゃんちでよく見たんだよ。だから印象に残ってるんだ」と訂正した。

それを見てにやにやと機嫌よく笑っていた織月が「そーかそーか、うつろちゃんにとつての大切な人なのね？」とからかうように言うものだから、うつろちゃんは先程よりも顔を赤くして叫んだ。

「うつせーんだよ！ あんなやつ大っ嫌いだばかあ！」

ツンデレがバレバレである。

「凧も！ なに生暖かい目で見てるんだよ！ 気持ち悪いんだよ！ やめてよ！」

「あはは…… うつろちゃんをいじるのはいいんだけど、とりあえずおゆはんにしらない？」

「よくない！」と途中で文句を付けられたが無視をして話を進める。

「んじや、凧の部屋で」

「…… 凧の部屋だな」

お酒を掲げながら言った織月の言葉に追従してうつろちゃんも言う。

「え、なんで？ そこは引越したばかりのうつろちゃんの部屋じゃないの？」

引越し祝いと言ったのは織月だ。なのになぜ引越したその部屋で祝わないのか。既にお酒を広げてくつろいでいるというのに。

「今日は何日だと思ってるんだよ？」

「えーと、4月28日…… あ」

自分でカレンダーを見ながら呟いて気が付いた。

「自分の誕生日を忘れてるとか笑えるわー。なんのためにこのお酒持って来たの？ ってなるでしょ」

「それは自分のためなんじゃ……」

「わざわざこの日に引越してきてやったのに気づいてなかったのかよ」

「ううっ、自分の鈍さが憎い……！」

にやにや笑って「あ、おつまみ用意よろしく」と言ってくる織月に、にししと意地悪気に笑ううつろちゃん。

「……でもさ、主役に料理作らせる気なの？」

「つまみは凧ちゃんのがいいんだ、私」

「ケーキと料理は注文するから大丈夫…… 凧の金で」

「ちよつと、私のお金じゃ意味ないんじゃないの!?!」

まったく。おつまみと言ってもあまり材料はないし、自分で自分を祝うために買って来たマグロとか梨とか、そんなものしかないんだよね。無茶な注文だなあ。

そう思いながらも自室に移動してにやけている私はどうかしてる。ああなんだろう……すつごく嬉しい。

「うわーお、相変わらず凧ちゃんの部屋は凄いね、日記の量が」

「うわっ、キモチワルッ!?!」

うつろちゃんは口が悪いなあ。1000冊くらい、毎日書いて捨ててなければ普通にたまると思うのだけど。織月だって小学生の頃から書いているのだからそのくらいあってもおかしくないし。うつろちゃんは分からないけどね。

「おお？ これなんだ？」

その声と、トントンと叩く音に反応して振り返るとうつろちゃんがなにやら機械をペタペタ触っている。大型のそれに興味を持ったようだった。

「あ、それ？ 3Dプリンター」

「はあああ!?! このサイズで!?!」

かなり大型のそれは一応非常用なのだ。具体的に言うならば、暴動が起きたときなどの。

そういうときならば何を作ってもいいだろうし……今は模型と
かを作るのにしか使用していかないのだからいいだろう。

「チェンソー作ろう！ チェンソー！」

「や、そこは釘バットだろ！」

「それで武器を作るのは、今はご法度。あと、最強は鉄パイプだから」
「なんだろうね、この武器自慢」

「お前が言うな」

結局、私がおつまみを作っている間に二人はいくつか模型を作った
り、自分の殺傷エフェクトをモデルにした武器の設計図なんかを作成
して遊んでいた。

外に出したり使用したりしなければ問題はないし、まあいいだろ
う。避難用にするこの部屋に、アレに対抗出来得る武器を造れる機
械。これだけあれば二人が死ぬことなんてないだろう…… 全ては
その予防策のために。決して友人が、同類が死なぬために。そして、
大切な人がいなくならないために。

全てを見通して用意したそれらに目をやって私は笑みを浮かべた。

「エクスカリバーだろ！」

「いいや、そこは 火かきボルグでしょ！」

まあ、なかなかくだらないことで盛り上がっているが、その話は身
内だけで盛り上がることを約束して説明書を渡しておいた。

「はい、マグロのガーリックペッパー炙り。レモンを添えて…… デ
ザートは梨のムースね」

「わあい！ 凧ちゃん大好き！」

「お、さすがだな！」

熱い議論はおつまみができると同時に終わりを告げ、そそくさと
織月が酒瓶に手を伸ばす。そしてうつろちゃんはパーティー料理を電
話片手に注文し始めた。

「ささっ、凧ちゃんも。君の瞳に困憊？」

「おいっ」

「おつまみあげないよ？」

「あ、それは勘弁」

そして平和に誕生日は過ぎて行った。

——それは、高校二年生で抽選に当たる、丁度一年前の出来事だった。

腹痛に耐えつつ、少し早めに終わった自由行動後は暫く自室で休んでいたのだが、夕方になり、気分転換にと私は砂浜を歩いてみた。

現在時刻は夕方の5時30分。3時のおやつにビバ氷で酷い目にあつたので常夏といえど朝夕は涼しくなる島内では常にパーカーを羽織っている。いつも着ているとか言っではいけない。

「足跡くつきりだなあ」

ブーツと靴下を脱いで裸足で砂浜を歩く。

じんわりと熱い足の裏と、ときおり埋まっている貝殻。海の奥の方で跳ねている尖ったダツのような魚。……ダツって跳ねたっけ？というか、危険はないとか言ってるのになんでダツ？あれがジャバ魚？かなり危険じゃないか？

そんな疑問が尽きないが、海に入ることなど滅多にないだろうから保留にしておこう。もしかしたらモノクマのせいで危険な生物が増やされたのかもしれないし。むしろ、モノクマはモノミと張り合つて色々追加していつているようなのでそれが正解なのかもしれない。不運には十分注意せねば。

スカートを広げて濡れないようにチャプン、チャプンと薄く張つた海水を蹴りながら歩く。太腿につけたホルダーが見えないように気を遣つてはいるが、傍から見れば水辺で遊んでいる白い少女だろうか……なんだか自分で少女と言うには抵抗があるが、これが私みたいな白髪の女でなければきつと絵になるのだろう。

終里さん……は、泳いでいる方が似合うからソニアさんや濤田さんならきつと似合う。

別に粕枝の容姿が整っていないと言っているわけではなく、自惚れではないがそれなりに整っているのだろうとは思っている。しかし、自分で言うのは抵抗感が凄いのだ。そんなことを言っている人がいたら、私だったら「なに調子乗ってんだテメエ」とでも言っつてやりたいくらいだ。フリではない。

……盛大なブーメランである。まったく、私は馬鹿だ。

愛おしい物に触るようにスカートの上から鉄パイプを押える。

あんなにダメだ、ダメだ、手を伸ばしてはいけないのだと思つていた罪の象徴がこんなにも大切なのは何故なのだろう。一度吹っ切れてしまったからだろうか。それとも私はあんな出来事に焦がれているとでも言うのだろうか。もし後者なら、私はとんだ殺人鬼だな。

そうだとしても、きっと織月りつきは気にせず笑い「後輩の誕生だね」とでも言いそう。うつろちゃんはどうかだろう。きつと「今更？」と言つて釘バットを持つて蔑んだ目で見られるだろう。織月はその手で直接罪を犯したから、象徴は思い出の品となつていているらしい。私は手を下した道具がそれで、ならうつろちゃんの釘バットは……まだ話してくれない。罪”に關係しているのだろうか。

“罪”を犯しても私たちは悪びれるでもなく、それしかないのだと手を出して来た。罪を犯せば生きる価値もない。そんな風に思う人もいるのだろうか、私たちは皆ある意味“生”に執着しているようなものだ。

私は死にたくないから×した。織月は奪われたくないから×した。うつろちゃんは……分からないが、あの嘘吐き娘がなにか理由を話したとしてもそれが本当かどうかは本人でさえ分からないだろう。

皆自分勝手だ。自分勝手だからそうするしかなかった。そして、私たちは永遠に許されることがない。それだけが確かなのだろう。

神様だなんて信じてはいないけれど、私がこうして生きていると言うことはそういう世界もあったということ……でも、やはりなんの手助けもしてくれない、見ているのかどうかさえ分からない存在など唾棄に等しい。少なくとも、私にとってはだが。

「死にたくない……平穩でいるためには、やっばりずっとココにいたほうが……」

いいのかもしれない。その言葉は島中に響くようなチャイムの音に遮られた。暗くなつていく気分と、恐らく最悪な見た目になつているだろう私の目元を人差し指でぐにぐにと押え、最後に一発両手で頬を叩き沈んだ気分を晴らす。

そうしなければ、あの胡散臭い熊に会うことなどできないだろう。

ましてや声を聴くことさえも。シャットアウトしようとする脳を無理矢理働かせて放送に耳を傾ける。そうすると、不自然なまでに陽気な濁声が響いた。

「えーと、希望ヶ峰学園実行委員会が、お知らせします…… やっほー！ お楽しみのレストランタイムが始まるよー！ どんな楽しい催しかは後の祭り……じゃなくて、後のお楽しみ！ 若干グダグダになったけど、とにかく、ジャバウオック公園にお集まりください！」

砂浜をブラブラしていて時間が経っていたようだ。

腕時計を確認すると現在午後6時。夕日は隠れ、夜の暗さが空を覆い始めている。

「ここからなら近いな」

今度はビリにならなければいいけど。

歩いて考えながら砂浜に製作していた巨大なSOSという文字は、その頃には波ですっかりその存在意義を失われていた。波が届かない場所で書いていたというのに、だ。まったく、自分の運が恐ろしいよ。

走って15分程で公園に着いたときには、既に十神くんがその場にいた。誰よりも早く来たのであろう彼は私をその目で見るなり少し驚いたように息を漏らすとこちらに歩み寄り、「今回は早かったようだな。放送がかかる前から分かっていたのか？」と喧嘩腰の皮肉を浴びせて来た。

「それを言うなら、いつも早くに来ているキミのほうがよっぽど怪しいんじゃないのかな？ 実はその服、着こんでるだけで痩せてたりするんじゃないの？」

ムカツときたのであくまで冷ややかな目を意識して私はそう返した。舌が絡まないように細心の注意を払って話したからか、すこしねっとりとした嫌みな口調になってしまったが、威圧感と圧迫感で演出してくる彼相手なのだからそれくらいが丁度良いだろう。迫力負

けするのはなんだか嫌なのだ。自分がこんなにも負けず嫌いだったということはこの島に来て初めて知ったことだが、そのきっかけが十神クンとの皮肉り合いとは何とも言えない。

「ふん、お前の目は節穴か？ この立派な肉が偽りでないの是一目瞭然だろう。筋肉はぜい肉よりも重い物だ。その両方があるというのは素晴らしいことなのだぞ」

え、なに言ってるのこの人。なんでぜい肉自慢してるの？

うーん、私には彼の価値観はよく分からない。

「お前こそもつと肉をつけて体力をつけることだな。そんな有様では緊急事態にも対処できんぞ」

あれ、もしかして心配してくれているのだろうか。本当に、彼の言いたいことはよく分からない。ともかく、忠告してくれているのは確かなのだろうし、そろそろ険悪な雰囲気ではやめておいたほうがいいかもしれない。

「ご忠告感謝するよ。こほん…… それよりも、ビバ氷の処理手伝ってくれてありがとうね」

「ん？ ああ、あのことか。……あの程度の量で根をあげるとはな。食糧は残さず食べるものだぞ、狛枝。勿体ないことをするのはない。しかし、俺に話を通してきたところを見ると、頼るべき者のことは理解しているようだ。喜べ、褒めてやる」

「あー、あー…… それはどうも」

物凄い遠回りな返答に、反応に困ってそっけなく答える。

それから改めて周囲を観察すると、あのタイマーのようなもの前に仮設舞台が設置されているのが目に入った。

「あれがなにか分かる？」

「知らん」

あ、はい。簡潔な返答ありがとうございます。

そっぽを向いて興味ないとばかりにそう言った彼に、私も「そう」と簡潔に返してから黙った。

気まずい空気が流れるかと思いきや、沈黙が下りてからすぐに澤田さんが走って来るのが見えたのでその空気も霧散する。

漣田さんの後ろからは二つの影が高速で迫って来るのが見える。そして明るい笑顔を浮かべた漣田さんを追い抜いた二つの影……終里さんと式大くんは競争するように公園へと駆け込んできた。息一つ乱していない式大くんの後ろで、終里さんが悔しそうに歯噛みしている。競争には負けてしまったようだ。

チラと牛を持ち上げる式大くんの図を思い出して、私はすぐに頭を振った。あんな非常識な場面、あまり覚えていたくはない。自分の中の常識が思い切り崩されてしまうし、夢の中ならともかく現実である場面に遭ってたまるもんか。

別に、式大くんや終里さんのことが苦手なわけでも嫌いなわけでもないが、なんとというか、信じたくない。この島を五周することとかの時点で私にとっては常識外だ。あれ、もやしつつ私だけ？ いや、まだ罪木さんや西園寺さんという仲間がいる……しかし、西園寺さんも舞踊家だから体力はありそうだな……本格的に体力づくりをしたほうがいいのかもされない。

「れくりえーしよん、とか！ なにが始まるんすかね！」

少しだけ言いにくそうにそう言った漣田さんが走ってきた体制のまま私に突進をしかけてきた。尖った頭がそのまま胸に飛び込んでくるのを察知した私は一旦突進を横に避け、それから手を上に挙げて彼女を歓迎した。

「や、漣田さん早いね」

「凧ちゃんも今回は早かったっすね！ ばびゅーんってなってる凧ちゃんちよつと見てみたいかも、とか！」

「ば、ばびゅーん？」

ハイタッチを要求してきた彼女に応えてから首を傾げる。擬音が多いとニュアンスではなんとなく分かるが、どうしても想像がつかない。ばびゅーんな私……うーん。

「それとも、ワープとかして来たのかな？ 人間卒業おめでどう？」

「や、七海さん私はまだ人間だよ。後、人間以外になる予定もないよ」

「人間以外のクマとウサギはワープしているようなものよね」

「あ、小泉さんも早いね」

あとから来た七海さんが眠そうな目をきらめかせるといふ器用なことをしながら話に入ってきた。それにモノクマとモノミのことを思い浮かべてか言った小泉さんも話に加わった。

確かに、いつも背後から現れるクマとウサギはその場に駆け寄る場面をあまり見たことがないのでワープしているようにも見える。

十神クンはそうして集まってきている皆を静観しながら仮設舞台の上を睨みつけていた。

そして私が来てから10分程経つと、日向クンを最後に全員が揃った。

「遅い……臆病風にでも吹かれたか？　ともかく、これで全員揃ったようだな」

日向クンを睨みつけてから十神クンはそう言った。しかし当日の日向クンは私が先に来ていたことに驚いている。私をなんだと思っているのだ。ああ、もやしか。正解だよチクシヨウ。

「粕枝……その、体調は大丈夫なのか？」

ああ、驚いてると思っただらそつちか。早とちりしてしまったみたい。

「うん、もう大丈夫だよ。心配ありがとうね」

「そりゃあ、あれだけ顔色悪くしてたらな……」

日向クンって気が利くよね。こうだから皆の信頼を勝ち取っているんだろうなあ。他称、超高校級の相談窓口はやっぱり違うね。

「で、今度はなんだっつーんだよ……メンドクセーなア」

頬をポリポリと搔いて左右田クンが言った。

しかし、それにすぐさま噛みついた人がいた。不機嫌そうな顔で辺古山さんに連れられて来た九頭龍クンだ。

「だったら、来なきやいいだろーが」

「だってよオ……逆らったらなにをされるかわかんねーし」

「へッ、わからねーからこそ、テメーに試してもらいたかったところだけどな」

まあ、なにをされるか分からないのは怖いよね。実は小粋な悪戯をされるだけかもしれないし、殺されてしまうかもしれない……どち

らか分からないからこそその恐怖があるだろう。

実際には、ただ殺されるだけではなく、おしおきという精神的な侮辱と才能に泥を塗る最悪な処刑が待っているわけだが。

「アンタ、いちいち嫌みっほいよ！ 自分だつて怖いから来たクセにさー！」

「あぁッ!？」

そんな九頭龍クンに向かって臆すこともなく意見していったのは気の強い小泉さんだ。九頭龍クンも、まさか女子から意見されるとは思っていなかったのだろう。

「さすがの極道さんでも、あの化物はおっかなかつたつてわけ？」

「んだとお、テメエー！」

彼は酷く苛立ったように一歩前に出ようとしたが、斜め後ろでその様子を見ていた辺古山さんに腕を掴まれ、止められた。

「止めるんじゃねえよー！」

「やめるんだ、九頭龍。手をあげるのはよせ」

「ほらほら、今は仲間同士なんだからいざこさを起こすのはやめたほうがいいって！」

今は、と含みを持たせて私が言った言葉は正しくは受け取られずに浸透していったようだった。現に、九頭龍クンは私の言った “ 仲間

” という言葉に対して大袈裟に声をあげたあと、鼻で笑うようにして辺古山さんの腕を振り払った。

「ああ？ 仲間だあ？ 勘違いしてんじゃねーぞボケ！ オレがいつテメーらの仲間になった!？」

「…… え？」

せっかく団結し始めていた輪がここに来て乱れた。

彼のその発言に、皆で団結しあえばどうにかなると信じていただろう幾人かが反応を示している。

シヨックは計り知れない。やってくれるな、と思いつながら 「言わせていいのか？」 と十神クンに目線で訴えると、彼はいつもと一変した穏やかな瞳で静観する態勢を崩そうとしない。

チラとこちらのアイコンタクトを受け取った素振りがあったが、喧

嘩に介入するつもりはないようだ。

「フン、この機会にハッキリさせとこーじゃねーか…… オレは殺れるぜ？」

そして、彼は今一番言っただけなことを口走ってしまった。

「…… はい？」

花村クンが目を見開いて固まった。先程まで震えていたというのにその震えさえも信じられないことを聞いたせいでピタリと止まってしまうている。

「ア、アンタ…… 今なんて言ったの？」

威勢よく噛みついてきた小泉さんもさすがにその言葉には愕然としてしまっていた。彼女の語調が僅かに震え、大きくはつきりした声は小さくすぼんでしまっている。

しかし、そんな怯えを含んだ反応に彼は勢いなのか、いけない方向に興奮してしまっているのか、僅かに頬を紅潮させて啖呵を切っている。後ろで硬い表情をした辺古山さんがなにか言おうとしたが、彼女は目を一旦瞑り、もう一度開いたときになにかを我慢したように俯いた。

「あ？ 聞こえなかったか？ だったら、もう一度言ってやんよ。オレは殺れる…… そう言ったんだよ」

信じたくない…… そんな小泉さんの気持ちを知っているながら彼は同じ言葉が続けた。その表情は不敵な笑みを浮かべてはいるが、どことなくやけくそになっているようにも伺える。しかしそう思っているのはきつと先入観があるからなのだろう。

しかしそんな私とは違い、極道という先入観も手伝ってか皆の表情は強張っている。

まるで信じられないとでもいうような、恐ろしい物でも見てしまったかのような、敵を、見つめる目のような…… 様々な視線に晒されて尚、彼は不敵な笑みを崩さない。

「なあ、九頭龍…… とりあえず少し落ち着いたらどうだ？」

「気安くオレの名前を呼んでんじゃねーぞ！ オレはなあ、テメーらなんぞとは、違う世界の人間なんだ…… 殺るか殺られるか…… 元

からそういう世界に生きてる人間なんだよ。へっ、最初の “ みんなで仲良く ” なんてルールより、今の方がよっぽどわかりやすいぜ！」

日向クンが興奮気味の彼に話しかけるが、彼にはそれすらも耳障りに聞こえたのだろう。今まではまったく気にしていなかったというのに、苗字を呼ぶことすら否定しに入る。

しかし、彼のその言葉はどこか自分に言い聞かせているようでもあり…… 壁を作っているように私は感じた。極道の自身が仲間であることに違和感や抵抗感を感じているのだろうか。

「いい加減にしないと、本気で怒るよ！」

「テメー、俺をガキ扱いしてんじゃねーぞー！」

怯えを振り払うように首を振った小泉さんが怒鳴るが、九頭龍クンは別のところに怒っている。その癩癩を起したような態度と、動かない十神クンに少し苛立ちを覚えて私は吐き捨てるように口を開いた。

「小泉さんはそういう意味で言ったんじゃないよ、自意識過剰なんじゃない？」

「ああ、っ!？」

「もう、やめよう…… そんな言い争いは不毛だ」

ますます怒って声を荒げる九頭龍クンの腕をそつと押えるように手を添え、辺古山さんが静かに言った。しかし、啖呵を切ることに夢中になっている九頭龍クンは止まらない。優しいその腕をも振り払い、彼女が少し傷ついたような表情をしたのも、当然気づくことはない。

「うつせーんだよ！ こんな仲良しごっこに付き合ってられっか！

おい、殺されてーヤツは前へ出る…… オレがこの場で殺ってやるぜ」

「おもしれーじゃねーか、是非ともやってもらいてーもんだな！」

これには私も限界が来た。キレている終里さんの言葉に同意する。

辺古山さんが傷ついているのもなんだか気に入らない。眉を下げたその困った微笑みが私の大好きな人の、寂しそうな笑顔と被ってしようがない。

ああ、くそ。誰が傷つこうと関係ないけれど、なんでだろう……
辺古山さんには傷ついてほしくない。あの九頭龍クンと辺古山さんの関係を知っているからか、どうしても自分たちと被って見える。調子が狂ってしようがない。

「やれるならやってみなよ…… 絶対勝てない学級裁判になるだけだよ。どんな恐ろしい処刑をされるのか、見ものだね？」

「そ、そんな簡単に挑発に乗ってどうすんだよっ！」

怒りと勢い任せに出た言葉はますます辺古山さんを傷つけてしまった。

こちらを睨むように動かされたその視線と、日向クンの言葉で一気に頭が冷やされて私は押し黙った。

ああ、怒らないでよ、お願いだから。

睨む赤くて少し鋭い目が彼女と被る。ああ、ああ…… 敵意を向けないで。まるでメイに嫌われたみたいでそれは嫌だ。嫌わないで、軽蔑しないで、憎まないで。

本当、なんて面倒くさい女なんだ私は。こんな気持ち、辺古山さんにもメイにも失礼なのに。

「そこまでだ。おい、狛枝言い過ぎだ」

「…… ごめん。冷静になって言ってた私が一番冷静になりきれなかったね…… でもさ、死にたくないならそんなこと簡単に言っちゃいけないと思うよ。ここじゃあ、自分の身一つしかないんだからさ」

私はとうとう彼女の瞳を見られなくなって視線を落とし、呟いた。

九頭龍クンは自分の後ろ盾に頼るのが嫌いだろうから直接的には言えないが、ここでは極道だろうが王女だろうが立場は同じだ。大きな力に頼れない以上、身一つではできることが限られる。幾ら慣れていたとしてもその慣れは後ろ盾があったからこそなのだ。この場では皆等しく、外々への人質にすぎない。

—— 殺人鬼であれば身一つでもどうとでもできるわけだが。

「九頭龍よ、お前の考え方は分かった。俺はその考え方自体を否定するつもりはない。かつて、俺にもそういう時期があったな」

口論を止めた十神クンは、どこか懐かしむように宙を見つめて話し

始めた。

「…… テメーまでガキ扱いするつもりか？」

九頭龍クンのその言葉からは、十神はそんな愚かなことは言わないはずだという確かな信頼が感じられた。

ああ、やっぱり彼はリーダーとしては最高だ。反発する九頭龍クンまでも無意識のうちに彼を信頼している。

九頭龍クンの言葉が終わると同時に十神クンは諭すような口調で優しく言葉を続けた。初日の威圧感も、リーダーとなった今はどこか遠くへと行ってしまったかのようだ。確かに彼は十神クンだということに、尊大な一面は形を潜^{なり}めている。

「だが、無暗に殺してどうなる？ 逃げ延びなければ、お前も処刑されるんだぞ？ それともそれが望みか？ だとしたら…… この苦境から逃げるだけの遠回りな自殺だな。それこそ本当のガキだ」

「なっ、なんだとッ！」

説得のために本人のコンプレックスも上手く利用している。

これでまだなにか言うようなら自分自身でガキだと認めるようなものだ。

「いいか、この島にいる限りは誰も死なせんぞ！ 一切の犠牲者はこの俺が許さん！ それは九頭龍…… お前も同じだ。俺はお前を死なせん！」

「な、なんだそりゃ、キレイごとばっか言いやがって！」

困惑気味ではあるが、先程までの怒りはもうどこにもない。

いつのまにか消えた興奮と怒りに本人さえも気が付いていないとは、流石だ。

十神くんは順々に皆を見渡して行ってからこちらを見、そして九頭龍クンに視線を戻した。強い意志を感じさせる瞳だ。

なんだか見ていられなくて、私はすぐさま合ったその視線から逃れてしまった。

見透かされた気がした。とつくに諦めてしまった私には真似できない、その強い意志に悔しさを感じた。それと同時に小さな憧れを抱いた。

「誰も…… 死なせない…… か」

私が欲しがって、でもできなくて、諦めてしまったことを彼はやろうとする。

挫折を知らないから、だからきつと、失敗を恐れていないのだ。そう、自分に言い聞かせて息を飲み込む。潤んだ瞳を、眠そうに軽く欠伸をして誤魔化した。

「確かに、一般人が言ったら、ただのキレイごとだろうな…… だが、俺は十神白夜だ。そのキレイごとを可能にする選ばれし男だ」

そう、宣言した。

「案外、言うじゃない……」

感心したように小泉さんが言う。

「十神さんがリーダーで良かったです。わたくしでは、 ” 誰も死なせない ” だなんて言えなかったでしょうから…… 見習わなければなりませんね」

「ソ、ソニアさん？ あんなにゴーインにならなくてもいいんですよ？」

力不足に嘆く王女様に、始め強引にことを進めていた十神を見習わないでくれと言いたげな左右田くん。

「くぴー！ シビれるくらいカツコイイつす！」

「ソッフ、同感ですぬ！」

両腕で体を抱きしめながら瀧田さんが絶賛し、いつものように笑った花村くんが同意する。

「おう、燃えてきたぜ！ 守るんなら任せろ！」

「チームメイトを守るのもマネージャーの務めじゃ、ワシも尽力しよう」

拳と拳をぶつけながら大声を出す終里さんに、静かに頷いて腕を組んだ式大くん。うん、心強いね。

「ま、まもる……？ 私も……？ あ、い、いや、そんなことないですよねえ。ごめんなさい、早とちりしましたあ！ ひうう……」
「ゲロブタは黙ってるよ！」

「勿論、罪木さんもその中に入ってると思うよ。全員って言ってたで

しよ？ あと西園寺さんはもう少し柔らかく……」

「うるさい！ 狛枝おねえってホントに八方美人だよねー？ 恥ずかしいくないわけ？」

うぐ、これは結構グサつと来たぞ。止まっていた潤みが再発しそうだ。でも、負けちゃダメだ。これで怯んでたら皆からの冷たい視線にポーカーフェイスで対応できる自信がなくなる。冷静に冷静に……

「八方美人なのは自覚してるけどね…… ま、いいじゃない別に」

今日は精神的に色々キてるからもういつそ泣きたいよ……

「へッ、オメーらが何て言おうと……オレはオレの好きにやらせてもらうからな」

わいわいがやがやと賑やかになる皆の言葉に虚勢を張った九頭龍クンが吐き捨てるように言ったが、威勢は先程よりもなくなっている。

「勝手にするがいいさ。だが、さっきの俺の言葉だけは覚えておけよ」
“決して犠牲者は出させない” それは、俺が俺自身に課した義務だ

「チツ！」

少ない言葉で九頭龍クンを鎮静化した十神クンを見ると、また目が合った。

「大丈夫だったろう」と訴えかけて来るそのアイコンタクトに苦笑いを返して手を振る。一応感謝のつもりで振った手だったが、ちゃんと意味は伝わっただろうか。フンと満足げに声を漏らした彼の反応を見るに、恐らく大丈夫だろう。

「あのう……」

不意に、声がした。

「うわっ！」

バツと振り向いた日向クンが声をあげ、一斉に声のした方を見た全員視線が一カ所に集まった。

そこには、白いシャツに赤いネクタイ。青いスーツのジャケットだけ着たモノクマが頭を掻く仕草をしながら、酷く居心地悪そうに立っていた。

「なんか揉めてるみたいだったから…… いつ出ればいいのかわかんなくなつちやつて、中途半端な感じで出て来てしまいました!」

「…… ねえねえ、その恰好って?」

吹っ切れたようにいつもの無駄に高いテンションに戻ったモノクマに、マジマジとその珍妙なスタイルを眺めてから七海さんが言った。

「ああ、さっきの放送でも言ったでしょ? レクリエーションタイムのための衣装だよ」

「では、まさか」

「はい! 南国の島っぽく漫才を!」

南国の島っぽいとは一体…… さっきまでのいい空気がモノクマのせいで台無しにされた気がするな。これは確信犯だろう。

「どこが南国っぽいんですかあ!」

「ですが、漫才というのはお一人でもできるものなのですか?」

「もちろん無理なので、相方を用意してきました」

罪木さんのごもつともなツツコミが入るがモノクマは我関せずだ。

ソニアさんはどこか質問がズレているような気もするが、まあ一人では漫才とは言えないよね。

「ほわわっ! なんでちゆか、これ?」

モノクマが手を指した方向に現れたモノミが困惑の声をあげた。

涙目になったモノミは白いフリルで埋まったドレスと、左胸にバラの意匠を施したコサージュを小さな手で確認して驚いている。

モノミ可愛いなあ、意外といいセンスをしている。でもそれは口には出さない。モノクマが調子に乗ったら困るからね。

「まあ、そうだろうとは思っていたが……」

呆れたようにひとつ、式大クンが溜息を吐いた。

「それじゃあ、さっそく!」 大笑いモノクマ漫才ライブ “ を始めるよー!」

「えっ? 聞いてないよー! まさかのぶつつけでちゆかー!」

慌てるモノミがなんとも可愛らしい。もうそれだけで笑えるから漫才なんてやる必要ないんじゃないかな?

「…… やれやれ、だぜ」

それをずっと眺めていた田中クンが大袈裟に手を広げて言った。その動作一つ一つは舞台の演技のように大袈裟だというのに彼がやると違和感がないのは、きつと何度も何度も、それこそ自然にその動作が出るくらいその表現を使っているのだろう。筋金入りの厨二病っぷりだ。

「まったく、緊張感もなにもないね」

「くだらないわね、ホント」

“ monoTV ” と書かれた白と赤の、記者会見でありがちなデザインの背景に、これまた紅白の提灯が頭上にぶら下がっている。そんな即興の舞台の上で、一つのマイクを真ん中にしてモノクマとモノミが立った。

No. 14 『失樂園』―漫才2―

「どうもー、モノクマでーす！」

「えつとお……モノミ、でーちゅ……」

「二人合わせて」ザ・モノクマズ」でーす！」

わりと王道な感じで二人……二匹？の漫才が始まった。

その様子を見る皆はどこことなく冷めた目をしているように思う。こんなライブ漫才があつたら、観客席の反応のなさに芸人は泣きたくなるだろうね。クマとウサギだから関係ないだろうけど。

「では、さっそくですが、ボクが得意の読心術を披露しちやおうかなー！」

「えつ？ できるのっ!？」

モノクマって結構こちらの言おうとすることを先回りにしてくるし、あながち間違いでもないだろうね。いや、分析力が極端に高いだけだっけ？

「試しにオマエの好物を当ててやるよ。えつとねえ……オマエの好物はー」

「頑張つて！ ウサギといたらアレだよ！」

勿体ぶつて言うモノクマにモノミが手を胸の前で握り？ ながら声をあげている。

「に、ん」

「そうそう」

「げ、ん！」

「食べないよ！ 人間なんて食べないよ！」

「さてと次はモノミの番だな！ ほら、なんか一発ネタやれよ！」

彼女のツツコミを無視してモノクマは話を進めた。

「な、なに言ってるんでちゅか！ 無理に決まってるじゃないでちゅかー！」

あ、これ絶対アドリブだ。もういつそ全部アドリブでやってるんじゃないかと思いはじめてきた。皆笑ってないし……」ニンゲン」とか、クマが言っているからシャレにならないよ。

「大丈夫だよ。心配するなって。ボクは笑いの神を降臨させる術を知ってるんだ。…… というわけで、生きたまま血を抜かれるのと、死んだ後で血を抜かれるのはどっちがいいと思う?」

「な、なんで、そんな残酷な質問するのっ!?!」

両方選択肢は死あるのみなのかとか、ヌイグルミに血なんてあるのかとか、色々ツツコミたいところはあるけれど、ピクリとも笑わない皆の空気に合わせてここは大人しくしよう。

「笑いの神、ミラクルホリオン神を降臨させるには、大量の血液が必要なんだよ」

「笑いの神なのに血をほしがるんだ……」

「うっふーん! おねがーい!」

わざとらしいクネクネをやめなさい! ちよつと可愛いとか思っちゃったじゃないか!

「色仕掛けで迫ってもダメ! 血なんて抜かせませんよーだ!」

いや、だから元々血なんてないでしょうに。というよりあれは色仕掛けなのか? 色仕掛けと言えるのだろうか?

「モノミはすぐにそうやって怖い顔をするんだからなー。オマエラも気を付けてくださいね。モノミって本当は悪いヤツだからね。たとえば、少年漫画の、初期の敵くらいにね!」

「噛ませ犬じゃん!」

味方フラグだけどね、それ。ついでに死亡フラグでもあるんだよね。

「でも、モノミが悪いヤツなのは本当だよ。だって、ここだけの話だけどね…… モノミって…… オマエラの記憶を勝手に奪っちゃったんだよ!」

「なんでやねん! …… って、あれ?」

おっと、冷めた空気もつと悪い空気になったぞ。

そうやって不和を煽るからモノクマの追加した商品は売れないんだぞー。買ってやらないぞー。不買運動しちゃうぞー。いいのかなー? つと、心の中で煽っても仕方ないな。

「ほら、オマエラってさ、この島にどうやって来たのか誰も覚えてない

でしょ？ それはね、モノミがオマエラの記憶を奪ってしまったからなんだ！」

「きゅ、急に何を言い出すんでちゅか!？」

モノミの焦りようからしてモノクマが本当のことを言っているのは皆にも分かってしまうだろう。モノミとモノクマが共謀して、そんな事実がないのにあるように見せかける演技をしていない限りはその線が濃く見える。

「ちなみに、こいつが奪った記憶ってのはね、この島に来るまでの経緯とか陳腐なモンじゃないよ。なんと、オマエラが希望ヶ峰学園で過ごした数年間の記憶を丸ごとなのでーす！」

「ほわわっー！」

「ふう…… 思い切って言ったらすッキリした。やっぱり、記憶喪失ネタなんて時代遅れですよね…… そんなネタを物語終盤まで引つ張ろうとするなんて、恥知らずな卑怯者のすることですよねー！ 挙句に失敗しちゃったりして！ やっぱり、大事なことは最初に二回言つとかないとね！」

盛大な自虐ネタどうもありがとうございます。…… でもなんだか若干台詞が違うような気がするけれど…… 気のせいかな。

「も、もうやめてくだちやいってー！」

「うぷぷぷ。ビックリでしょ？ 実は、オマエラは新入生なんかじゃないんだ。学園生活の記憶をなくしたオマエラが、勝手にそう思い込んでただけなんだよ！ どこかで聞いたことがあるような斬新なパクリの設定だね！ これでは賛否どころか、否だけしか残りませんよね！ でも否しか受け付けないからといって缶は投げつけないでね！ ボクはおひねりしか受け付けないから、そのところよろしくー！」

いよいよモノミの顔色が悪くなっていつている。

皆に記憶喪失を伏せておくならばその反応が一番まずいのだが、いかんせんモノミは素直すぎる。バレバレもいいところだ。

「ほ、本当に色々ダメでちゅってー！」

「キミとはやってられんわー！」

「ぎゃあああああ！ 突っ込みが激しすぎまちゅううツ！」

暢気な声でモノミのお腹へとキツイ一発を決めたモノクマが、なぜか誇らしげに胸を張っている。

やりきった感を出しながら出てもない汗を拭う仕草をするモノクマに、放心しきっていた皆がのろのろと遅れて反応を示した。

「……」

「…… は？」

「…… なんて？」

モノクマが壇上から下りてくる時間があってもなお、未だ理解に追いつけない皆を置いてモノクマはどんどん話を進めていく。

「どうだった？ 笑い取れてた？ それとも笑いのレベルが高すぎた？」

その中で選択するのなら、笑いの次元が違いすぎた…… のかな。その中って言うっておきながら選択肢を無視してるのは、うん。モノクマには逆らいたいでしょ？ 心の中だけでも。

小心者なのは自覚済みだけれど、下手におしおきでもされたら嫌だからね。ルール違反さえしなければ大丈夫だとは分かっているけど、「学園長への言葉の暴力はんたーい！ 暴力は暴力だからおしおきしてやるー！」とか言ってきたから油断ならない。人が死ぬば死ぬほどモノクマにとって都合がいいのだから、そのくらいやってきそうさ。

「おい…… 今の話はなんだ？」

「今の話って…… ああ、オマエラが “ 学園生活の記憶 ” をまると奪われちゃった件か！」

…… うん、私は知ってたけどね。

多分前の記憶がなくても、夢のエフェクトが全部揃っている時点で随分時間が経っていることは分かっていると思うわけだし。

しかしモノクマは全員がそれを知らないことを前提に話しているように思う。つまり、私の特殊な夢については知られていないということだ。それは重畳だが、“ 彼女 ” に隠し通せていることに違和感がある。いくら分析能力が高かったって限界はあると思うが、彼女相手では不安になってしまうのも仕方ない。

知られていないのならいいのだ、いいはずなのだ。

「あは、あはは…… そんなわけないじゃないっすか…… だって、唯吹は希望ヶ峰学園に入学したばっかで、すぐにこの島に連れて来られたはずで……」

「それは、オマエラがそう思い込んでるだけだよ。モノミがオマエラの学園生活の記憶を消しちゃったせいだね……」

愕然と、目を見開いている人物。

家族の心配を口に出す人物。

小さな体を震わせている、その人物が黙ったまま頭を抱えた。

「な、なに言ってるんだ！ そんなわけないだろっ！」

「いやあ、あれから何年経ったんだろうね。オマエラが希望ヶ峰学園に入学してからさ…… 家族や友人はどうなったのかね？ お世話になった人とかはどうなったのかね？ 向こうも心配してるかもね？

ね？ ね？ ねー？

“ お世話になった人 ” で反応しちゃうなんて、私もまだまだだな。

我慢しろ、私。ねー？ と可愛らしく首を傾げてこちらを見上げて来るモノクマなんて無視しろ。 “ アレ ” の煽りに乗ってはいけない。

向こうが心配してようがなんだろうが、私に会うつもりはないのだからいいのだ。私といたほうがかえって危ないのだから。

「学園生活の記憶を丸ごと奪ったじゃと!? そんなバカげた話があるかいっ！」

「そうだ！ オレがキオク喪失なわけねーだろ！」

「ダ、ダメでちゅ…… そんなヤツの言うことなんて聞いちやダメでちゅ……」

そんな言葉を聞き流しながら、私はただ一人の人物に注目し続けた。

「ぼくはそんなの信じてないからね。うん、大丈夫だよ…… 信じてない…… 大丈夫だよ…… そう、だよね……」

それは十神クンも同じ。彼と一緒に黙ったまま傍観し続けた。少

なくとも彼は衝撃の事実には驚く素振りや苦々しい表情を見せているが、私は…… 知っている話だからか寝不足が少し響いてきている。先程から目を擦ってばかりだ。さりげなくやっているだけなのもあるし、皆がモノクマに夢中になっているおかげで “空気読めない奴だな” という視線には晒されずに済んでいる。

本来のおねむキャラである七海さんは真剣な顔をしているし、こんなときに眠気に負けそうとかふざけてるよなあ。

「ううん、ウソじゃないよ。だって…… もしウソならあれはなんだったのさ？ 希望ヶ峰学園に足を踏み入れたときに、オマエラ全員が経験した “妙な眩暈 “ はさ……」

「なっ……… !？」

その言葉で、日向クンが息をのんだ。

…… なんでキミがそんなこと知ってるんだよ。モノミがやったことならなんでモノクマが知っているのか分からないし、胡散臭すぎる。混乱に乗じて言われると思わると思考停止して違和感に気づけないだろうが、すべて知っている私はその言葉に引っかけかりを覚えることができた。

冷静に物事を見て、聞いて、判断するような人物ならばこれに引っかけかりを覚えるだろうが、十神クンも結構内心は焦ってそうだし気づいてるかなあ。どうだろうなあ。

少なくとも、腕組みをしてモノクマの言葉を整理しているだろう彼の顔を見る限りでは焦っているようにはとても見えないが…… 表情などいくらでも取り繕えるのだから本心は分からない。

「うぷぷ…… あそこが “記憶の結合点 “ だったわけですよ。オマエラはあそこからの記憶がすっっぽりと抜け落ち、そして今に至るというわけなのです」

「な、なんだよそれ！」

目を見開いた日向クンがそう叫び、だんだんと呼吸を荒くしている。

「本当は…… あれから凄い時間が経ってるってことですかあ？」

「そんなことって！」

愕然とする人。絶望的な顔をする人…… 罪木さんの叫びに呼応するようになり得ない、嘘だとそれを否定する声があがっていった。「信じたくないだけでしょ？ でも安心して…… 親切なボクが、オマエラの記憶を元に戻してあげるからさ！」

「ほえっ!？」

「ただし…… それには交換条件があるんだよね」

誘導が上手いな。

ハツとした七海さんが目を細めながら 「まさか交換条件って……」 と恐る恐る切り出した。

「うぷぷ、察しちゃった？ そう、オマエラがコロシアイをすること！

それがボクの提示する交換条件です！」

「ほわわっ!？」

「オマエラは知りたいんでしょ？ 奪われた学園生活の記憶を知りたいんでしょ？ だったら殺しちゃいなヨ！ ヘイユー、殺して記憶を取り戻しちゃいなヨ！」

再び冷静さを失い始めた皆に、十神クンが動き出そうとしている。

ここで、私は昔感じた疑問をそのまま口に出すことにした。皆が沈静化することを願って。

そのためにわざと挑発的に、そして不機嫌さを装って声を出した。

「…… ぶっ」

「あらら？ どうしたの？ 激おこぶんぶん丸なの？ ボクは親切心で動機を与えてやったってのに」

「記憶喪失が嘘か本当かはおいておいて…… キミが言うには記憶喪失はモノミのせいなんですよ。なのになんで、どこが結合点だったとか、そんなことまで知ってるの？ それとも、そんなことを知ってるキミ自身が記憶を取り上げたのかな？ モノミがなんにも教えてくれないから出まかせなのか、本当のことなのかは分からないけれど…… それでもね、胡散臭いキミの言葉なんて信用できない。私は、私の記憶を信じる。そうするしかないんだよ」

周囲を見渡すと、チラホラと同意の意見があがっていた。よしよし…… 反論の糸口を見つけて皆の目に光が戻った。やっぱり、絶望的

な目よりも希望のある目の方がいいに決まってるよね。

私は私の記憶を信じる……皆にとってこの発言は記憶喪失を信じていないように聞こえているだろうが、実は逆なのだ。私には夢という根拠があるのだから、記憶喪失を信じている。でも、その根拠を言うわけにはいかないからこうして勘違いしやすい言葉を選ぶのだ。

「そもそもね、その記憶喪失だって信じてないんだから！」

「けど、それ以上に信じられないのはお互いのことですよ？」

「どういう意味よ！」

小泉さんへのやたらと鋭い切り返しに、モノクマの本気を感じた。いや、本気でもないのかもしれない。あれが通常運転なのだったら、それはそれで未恐ろしいが。

「オマエラはお互いのことをなにも知らない。だからこそ、裏切者が紛れ込んでるのに、まるで気づけないんでしょう？」

裏切者か。それってどういう意味なんだろうか。私たちにとっての裏切者なのだろうか、それともモノクマにとって？ モノクマにとっての裏切者なら、私たちの仲間だろう。そうやって曖昧な言葉でこちらの認識を誘導してくるのだから、アイツは質が悪い。

「ねえ、オマエラはどうして16人もいるのかね？ この島に来る予定の希望ヶ峰学園の生徒は、全部で15人だったはずなのに。そっか！ きつとオマエラの中に、ボクも知らない裏切者が紛れ込んでいるせいだ！ …… なんちゃって」

おちやらけて、首を傾げて、役者のような、道化師のような仕草でクルクルと表情を変えるモノクマに底知れない恐ろしさを感じる。

ゲームプレイをしているときは、こういう胡散臭いキャラクターが好きだったがこうも目の前にするとやはり怖い。関わりたくない。そういうものだと理解していても、気持ち悪い。

「な、なに言ってるやがんだ。裏切者とか…… 意味分かんねーぞ！」

「…… デタラメに決まっている」

九頭龍クンと辺古山さんがそう言うが、ますます増長したモノクマが話を続ける。

「だからさあ、どうして言い切れるのかって。お互いのことをなにも

知らないクセに。お互いの本性をなにも知らないクセに。だから、誰かが殺しを企んでいたとしても、オマエラがそれに気づくことは不可能なんだよ」

モノクマの視線が心なしこちらを向いているような気がする。気のせいだと思いたいが、色々と準備を進めているのがバレているのだろうか。

まあ、それはそれとして。

「それ以上不和を煽るのやめてくれないかな？ 昨日知り合った仲だとしても、こうやって対面して話したりして…… 少しでもお互いのことは知れてるんだ。機械越しに煽るだけのヤツがどんなお人かは全く分からないけれど、ね。どっちを信用するかって言ったたら、やっぱりコロシアイを薦めるキミよりもお互いでしょ？」

対面で話もしない臆病者なんか信用できないよ、と言外に匂わせつつモノクマを煽る。絶対的な権力を持っている相手に言われてしまふとつい疑心暗鬼になってしまうものだが、それもこうやってちゃんと話せば皆も気づいてくれるだろう。

「でもね、キミたちがお互いに信用してないのは確かでしょ？ 互いが何を思ってるのか分からないクセに、疑心暗鬼になってるクセに、なにをしてくるのかも分からないクセに、本当に安心して暮らせるとでも思ってるの？ 世の中はね、隣人が殺人鬼だったってこともあるんだよ！ ほらっ、先制攻撃あるのみだよ！ 勝者総取りの早い者勝ちだよ！ …… 生き残りたければ、自分が殺される前に相手を殺さないよね…… アーツハツハツハツハ！」

まったくその通りではあるけれど、勘違いで殺しちゃったらこつちが悪者になるじゃないか。やっぱり過剰防衛ぐらいじゃないと犯罪になっちゃうし。

高笑いしながら黙った私の周りを一通りグルグル周って、煽りに煽ったモノクマはその場から立ち去ってしまった。

あまりに煽ったら自分が見せしめのおしおきをされてしまうかもしれないと、少し冷や冷やしていたのだが、無事危機は去ったようだ。しかし、去るモノクマの背中を見送りながら誰もが引き留めもせ

ず、質問責めにもせず、立ち尽くしたままになっている。

呆然とした、魂が抜けたような状態の皆に「あんなヤツのいうことなんて、信じちやダメだよ」と言葉を零した。

「そ、そうですよねえ……裏切者なんて……いるわけないですよねえ……わ、私は違いますよ？ 怪しいかもしれないですけど、違いますですよ！ だ、だ、だから……ひうう……」

「殺さないで」言葉にならなかったそんな言葉が頭に響く。

罪木さんも不安なんだろう。私のことだつてロクに知りもしないのだから、わたしの言葉にさえ、信用していいのか分からない。そんな切実な気持ちが見える声から伝わって来た。

「裏切者っていうのが本当におるんなら、さっさと名乗り出んかい！ 後になるほどロクな目に遭わんぞお！」

「……やめろ、裏切者などいるわけがないだろう。いるわけがないんだ……あんなバカげた話を論ずる意味すらない」

「とにかく、”いないかもしれない”って思っておいた方がいいよね」

希望的観測、皆よくやるだろうに。どうしてこういうときにはできないのだろう。人間の心理って不思議なものだね。

「そうだ、一応訊くけど……モノミはなにか知ってる？」

形式的なものだが、一応念のために。訊いても無駄かもしれないが、無より有の方が推理の足しになることは確かだからね。

「ほえっ!? えっと……ミナサンに必要なのは”未来”だけでちゅ……だから、ミナサンは過去など振り返らずに……未来だけを見据えて、せ、精一杯生きていきましょう！」

「あ、逃げやがった！」

その言葉を言うと、モノミはすぐにどこかへ行ってしまった。

それを終里さんが叫んで追おうとしたが、式大クンのガツシリした手で引き留められ、不満そうに口を膨らませた。

皆がそうやって、その場で話し合いだか、不安のぶつけ合いだかをしている間に時刻は10時を回り、モノクマからの時報が入る。

”お互いの本性も知らないクセに”

その言葉に少しだけ罪悪感を覚えたが、私はそれを見ない振りをしてやり過ごす。

立ち尽くしたままで移動も何もしない皆に、ぼつりと七海さんが言った。

「ねえ、これからどうしよつか」

「とりあえず、今日は解散したほうがよさそうだ。一晩じっくり寝て、少し思考を落ち着かせたほうがいいだろう」

「それも…… そうだね」

そう言う十神クン自身も混乱しているだろうに、皆を落ち着かせる対応をするのはリーダーを引き受けた人間としての責任感か、それとも素なのか。素だったとしたら、大した人だ。本当…… 尊敬するよ。

「念のために言っておくが、決して余計なことは考えるなよ。これはリーダー命令だ。明日の朝…… 例のモノクマアナウンスの後で、レストランに集合するぞ」

「とんだ吸った揉んだでしたね……」

「その字って合ってる？」

「仕方ねーだろ、外国の方なんだからよ……」

十神クンの格好良い言葉に、ソニアさん、花村クン、左右田クンの漫才でオチがついたが気にしてはいけない。

そのまま流れで一人、二人とホテルの方向へと帰って行き、最終的には私だけが残った。

暫く漫才のためだけに用意された舞台セットを眺め、空を見上げてみる。相変わらず、作り物のような綺麗な星空だ。

「…… 七海さんじゃないけど、ねみい」

話が終わった途端に一気に眠気が私を襲う。

朦朧とした視界と覚束ない足取りで中央の島から出ようと試みる。途中で床板が抜けそうになってヒヤリとしたり、まあいろいろあったが強い眠気にはどうしても勝てず、なにも考えずにひたすら歩いた。

うーん、なにかやらなきやいけないことがあったような気がするけ

れど…… まあ、思い出せないのなら大したことではないのかな。

コテージに帰った私はそうしてベッドにダイビングしたわけだが…… 翌朝、愕然とすることになったのである。

「ああっ！ 十神クンに脅迫状出すの忘れてたあああああ！」

なにやろうとしてるんだ、とか、そんなことは言っではいけない。

No. 14 『失樂園』 ―不穏―

ああ、夢を見ている
お腹が痛い。

目を開いた私はそこが密室であることを確認すると、首を動かしただけで体中に走った電撃のような痛み在眉を擧めた。

よくよく見ると、四角く真つ白な部屋の端から私のお腹へとピアノ線が通っているようだ。痛くて後ろを見ることは叶わないが、そのピアノ線はどうかやら腹から背へと貫通しているらしい。痛いはずだ。身じろぎひとつするにもピアノ線が内臓に擦れて酷く痛む。

ピアノ線は少し動く度に、体に開いた穴を大きくしていき、体液で濡らされた部分がテラテラと光っているのが見えた。

隣には、私と同じようになった、久方ぶりに見た足のあるりん子姉さんがいるが、他の場所にはピアノ線で両断されたのであろう肉片が散らばっていた。

白く、四角い部屋に大量の肉塊と、それを踏みにじって立たされている私とりん子姉さん。

暫く無言で視線を交わし合ってからじつと痛みを耐えていたが、幾らか時間が経つてとうとう限界が来てしまった。

ああ、夢の中でさえも私は体力がないのか。なんだか虚しくなってくる。

「姉さん、どうしよう…… 疲れて、座りたいんだけど……」

「そうね…… 疲れたね、座りたいね。でも無理だよ、生きていながら動いてはいけない。糸でがんじがらめになったキミは動いたら死んでしまうだろうからね」

足が震え、少しよろけただけで腹と背中を貫通したピアノ線が食い込んでいく。その恐怖に歯をカチカチと鳴らしながら姉さんの名前をひたすら呼び続けた。

「ね、姉さん、怖いよ、痛いよ、もうやだ…… 死にたくないよ」

「私も怖いよ、痛いよ、もう…… いやだよ。でも、私は立ち続けることにも疲れてしまったんだ」

遠くを見つめる彼女に不安を覚えて手を伸ばす。

「ごぼりと内臓がかき混ぜられる音がした。」

「…… 空に手を伸ばすのにも、なにかもに疲れてしまったんだ。だから気づいてしまったんだ。足があつたつて、絡みつく糸がある限りどこにも行けないんだ。逃げ出すことも、自由を手にすることもできない。それならいつそ、足などなければいいんだよ……」

私が初めて彼女に会ったときから変わらず濁ったような、けれど綺麗な、絶望に染まった瞳がこちらに向けられる。

そう言った姉さんは長い黒髪を鬱陶しそうに背中に払いのけ、ピアノ線が食い込むのにも構わず言葉を続けた。

「ねえ、凧。暗闇の先には何があるんだろうね…… そこに希望を持つてしまうのはいけないことなのかな」

それに希望なんてない。

それは私が一番よく知っている。死んだつて、次があるのだ。絶望は一生どころではなく、永遠に続いていくのだ。悲劇は循環していく。だけれども、最後の希望に縋った彼女にそれを告げることなど、とてもできなかつた。

「凧…… 私を、殺してよ」

縋るような瞳を、綺麗だと思つてしまったから、ダメだつたのだ。

自身の中にある何かが彼女の願いに応えようと動き出す。

「ダメ、ヤダー！ ムリだよ！ そんなこと……！」

そして、彼女は立つのをやめてしまった。

バズン、と嫌な音が辺りに響く。縦に裂けたはずのその体にはなぜだか足がなかつた。

その数日後、パレードが始まるのだ。

彼女の望み通りに私の幸運が彼女を殺した。それは本当に良かったことなのか、それともいけないことだつたのか。制御など欠片もできない才能に彼女が殺された。

その濁った瞳は、無機質な瞳は誰も責めてはいなかつたけれど、それが深い錆となつて私の中に刻まれる。

彼女は死ぬ必要なつて、なかつたのに。永遠に許されぬ罪を背負つ

て墓場まで持っていくしかないのか。寿命で死ぬまで、彼女たちの、彼らの分を生きるまで私は死ねない。死んではいけない。それを望んだって、実行してはいけないのだ。

私の命は私だけのものではなくなってしまうただのだから――



絶叫をあげながらベッドから跳ね起き、汗だくになった部屋着の襟元をパタパタと扇ぎながら机の上にある手帳を眺めて数分。

十神クンに脅迫状出し忘れたあああああ！

ベッドの上で天を仰ぎ、その体勢で頭を抱える私はギリギリ声に出さず心の中でそう叫んだ。

「しかも6時半だど!? 間に合うわけじゃないでしょうが!」

あと30分でモノクマアナウンスが鳴る上に、そのすぐ後にはレストランへ集合しなければならぬ。

手紙も文面も決めてない以上、適当に脅迫状を書くわけにもいかない。定規も用意していない。定規なしで丁寧に書いたらすぐに筆跡でバレてしまいそうだ。そもそもくじも用意できていないし、昨日の私はなにを考えていたんだ! ヤシの実がぶつかつたときに全部すっぽ抜けて行ったに違いない! そうだ、全部ヤシのせいだ! ヤシのせいで一日自由行動が増えるよ! やったね風ちゃん!

「ま、まあ、掃除当番になったら女子会参加できないし? 結果オーライだね。一日延びたくらいじゃ、死ぬような変化なんて起きないでしょ」

女子会に参加できなくなるのは勿体ないし、一日伸ばすくらい平気。きつと昨日出してたら寝不足で失敗続きだったろうし、すぐバレてただろう。多分。

酸っぱい葡萄とか、言っちゃいけない。

「今の時間じゃあ、どうせ十神クンは起きて島を周ってるだろうしなあ……」

皆のために、誰も死なせないために……　なんて、本当、憧れちゃうね。

ゲームで朝、狛枝クンが言ったことが身に染みる。確か、「皆十神クンみたいに強くなれるわけじゃない。逃げてたわけではないけど、なにかを乗り越えるなんて意識したことなく、なんとなく生きていたんだろう……」　だったか。

その通りだ。なんとなく生きていたわけではないが……　乗り越えるだなんて思ったことはないな。

私は十神クンみたいになれるわけじゃない。生きたいと思ってる限りは、あんなに体を張ることができないのだ。それに、積極的に皆を先導したとして、「誰も死なせない」　なんて言葉、私には言えない。きつと嘘になってしまうから。嘘を吐くのは、あまり好きかない。誘導はするけれど、嘘はあまり吐きたくないのだ。あれ、これって　モノクマと一緒にじゃないか？　ええ、それは嫌だなあ。

しかし、蝶はモグラでないからといって嘆いたりはしないものである。私には翼もなければ尾ひれがあるわけでもない。彼が持つていて私が持つていないものがあつたとしてもそれはそれ、これはこれだ。

「はあ……　そろそろ行かないと」

気づけば7時直前。アナウンスが鳴る前に移動してしまおう。

「おはいただきますようー！」

「え？　あ、おはよう？」

ホテルロビーで濔田さんに会ったのだが、謎のご挨拶をされて困惑気味に挨拶を返す。

すると少しだけ不満そうな顔をした濔田さんがもう一度　「おはいただきますようー！」　と言った。

「お、おはいただきますよう？」

「おはいただきますよう、凧っちゃん！　えへへ、おはようといいただき

ますの画期的な挨拶を考えただー！ 唯吹はこれを広めるために旅に出るっす…… うん！ これは流行るね！」

「う、うん…… ええと、頑張ってるね？」

後から来た小泉さんや日向クンに絡みに行っている姿を横目に、階段を上がる。七海さんが真剣な顔で某落ち物ゲーをやっていたが、ものすごい連鎖を組み上げているようだったので声はかけなかった。

「……」

「…… おはよう」

レストランに入ると、誰もが沈んだ顔をしていた。そして、話そうとはしなかった。

私が軽い挨拶をするとしつかり反応があつたが、どうにも元気がないように見える。あの式大クンでさえ、お世辞にも元気とは言い難い雰囲気を漂わせていた。

そしてそのまま全員が集まるまで静かに待った。するとやがてゲームを切り上げたらしい七海さんが階段を上がってきて、後に続く辺古山さんや、小泉さんに引きずられるように連れて来られた左右田クンなど、続々と人がやって来た。

静かだったレストランは徐々に賑やかさを増していき、とうとう全員に話しかけたらしい澤田さんが日向クンと一緒にやってくるというよいよ騒がしくなっていく。

彼女のテンションに一体何人が救われているのだろうか。ふと思つて周囲を見渡すと笑顔。彼女の元気な笑顔から静かだった人たちに笑顔が伝染していく。これもある意味希望の伝染だろうか。

私も思わず顔を綻ばせてその様子を眺める。

「…… 全員揃つたか？」

黙つたままではあつたが、私と同じように微笑みを浮かべてその様子を見守つていた十神クンが確認するように話した。

「あれれ、九頭龍くんがまだみたいだね？」

十神クンの言葉に反応した七海さんがその場にいる全員を見渡してそう言うのと、悪い顔をした西園寺さんが着物の袖で口元を覆いながらくぐもつた笑いを零す。

「あはっ、もう殺されちゃってたりして……」

「ぎゃあっ！ ついに死者が!?!」

西園寺さんの言葉に真に受けたのだろうか？ 澤田さんが目を見開いたすごい顔でリアクションを取ったが、入り口付近で腕組みをして立っている辺古山さんから訂正が入った。

「勝手に殺すな…… さつき外で会ったぞ。だが、今朝は欠席すると
言っていたな」

「こんなときまで一匹狼ぶってどうすんのよ…… なにかあつてから
じゃ遅いのに」

小泉さんが苦々し気な顔で呟く

一人だけ孤立して、誰とも馴れ合おうとしない彼を心配しての言葉
だろう。

しかし、左右田クンはそうは思っていないようで不安気な顔をして
頬を指で搔いている。

「ひよ、ひよつとして…… 一人でこっそり誰かを殺す作戦を練つて
るとか……」

「左右田さんっ！ お仲間を疑うのは良くありませんよ！」

「だって、あいつつて極道なんですよ？ わかります？ ジャパニー
ズヤクザです！」

それってジャパニーズマフィアの間違いなんじゃ？

まあ、左右田クンが危機感を持っているのは分かる。あれだけ啖呵
を切っていたら誰だって怖いよ。私だって、記憶がなければ彼を真っ
先にターゲットにしていただろうしね。現在のターゲットは花村ク
ンだからちよつかいはかけないけど。

「でも、心配ではあるよね。目の届くところに来てくれたほうがどっ
ちの意味でもありがたいんだけど……」

彼が殺されないか、と彼が殺さないか、でどっちもだ。

「おそらく、あいつは呼んでも来ないだろうな。そういう男だ……
仕方ない、俺達だけで話を進めるぞ。あいつには後で誰かが伝えてお
いてくれ」

「話つて…… なんの話だ？」

あれ、今日はなにもしてないし、あっさり終わると思ってたんだけどな。まだなにか懸念することでもあるのだろうか。

もしかして動機についての話し合いか？ それとも裏切者についての？ 確かに、もうちょつと掘り下げてもいい話題だし、議題にするにはちょうど良いだろうが裏切者については十神クンが否定しているから違うかな。

記憶については全員証拠となるものも持ち合わせていないから水掛け論に推測だけが飛び合うことになってしまおうし、モノクマの定めたルールについて詳しく話してもなにか収穫があるとは思えないからどうなのだろう。

それとも……

「喜べ…… 今日之夜、パーティを開催することにしたぞ」

「え？」

…… え？

なんで？ どうして十神クンがその話をするんだ。

私、脅迫状なんて出してないのに…… 私はなにもしていないのにどうして、なんでパーティー開催の話になるんだよ。

そんなことがあるのか、どうして、どうして。その言葉ばかりが頭の中をグルグル回ってグチャグチャに混ざり合って周囲の会話を聞き流していく。

「パ、パーティですかあ？」

「そうだ、朝から一晩中の盛大なパーティにするぞ」

「ガビーン！ しかも朝までコース!？」

「言っておくが、欠席は認めんぞ。これは全員強制参加のパーティだ」
そして思考停止した脳が緩慢に動き出し、空回りでない回転をしていく。

今までにないほどによく働く自身の脳を褒め殺してあげたいくらいに視界が明瞭になっていく。なにをすべきかを、今私ができることを、生存のために起こすべき行動を正確無比に叩きだしていく。

「お、おい…… パーティとか…… こんなときになに言ってるんだよ！」

「こんなときだからこそ、なんだよ…… 言っただろう、強制参加だと。反対意見ははなから聞く気など毛頭ないぞ」

…… まったく、予想外もいいところだ。だけれど、だからこそこのチャンスに乗っかっておくべきなのかもしれない。誰かの犯行を乗っ取ってしまったら相手も動きづらくなるだろうし、乗っ取ってしまったら殺される心配も減るのだ。

結局行きついたのはそんな答え。

何者かの犯行を妨げ、自分が計画に乗っ取る。そうすればいい。今はそうするのが正解だろう。

盛大なドッキリを仕掛けてやろうじゃないか。少し悪質だけれど、皆の意表を突いて犯行を頓挫させる。そして、私が生き残り、ついでにほんの少しだけ本音で語り合えるようにするのだ。

私にできることは、私の役割を造るとするならば…… って、つまり結局女子会参加できないってことじゃないですかー！ やだーっ！

「でも、やっぱりパーティなんてしてる場合じゃ……」

「…… うーん、私は賛成かな」

小泉さんの言葉に被せるように落ち着いて言葉を重ねる。そうして言い訳じみた建前と本音の混じった言葉を続けていくのだ。

「むしろ、こんなときだからこそ、私たちが親交を深め合うべきなのかもしれないよ。ほら、私も昨日言ったでしょ？ 何も知らないモノクマより、互いの方が信用できる…… さらに互いのことを知って仲良くなればもつと信頼できる仲間になれるかもしれないよ！ 皆で生き残るためには信頼が必要だよ。ねえ、十神くんもそう考えたんでしょ？ だから、パーティなんて言い出したんだよね？」

まあ、私一人だけ生き残るのに信頼なんて必要ないんだけど…… あったほうが殺されずに済んで得だしね。

そんな最低で打算的な言葉が脳裏を掠めるが、ぐっと飲み込んで微笑む。

ああ、なんて白々しいのだろう。

「…… 意味などどうでもいいだろう。とにかく、今晚は俺達全員が

「一つの場所に集まっておく。必要。があるんだ」

「……随分と含みのある言葉だな？」

田中クンが探るように言った。もしかして疑ってるのだろうか。田中クンも厨二病に必要不可欠だけに語彙力があるほうだ。それだけ語彙力があつて、その場その場で相応しいと思う難しい言葉を言えるくらいなのだし、頭の回転は速い方なんだろう。

「とにかくこれは決定事項だ！ パーティを開催するぞ！」

「で、ですけどお……一晩中やる必要はないような……」

「なければ、そんなことは言わん」

「す、す、すみません！ じゃばって、本当にすみませえん！」

「ああ、俺も賛成だ。親交を深め合うのも悪くないよな……」

日向クンが賛成の声をあげる。

あの日向クンがなにも疑問に思っていない……？ むしろ、納得した顔をしている。いつもの日向クンなら「なんでこんなことするんだ？」って疑問だらけになっているはずなのに、一体どんな心境の変化だ。パーティの話が出たよりも、その変化が一番の驚きだ。

成長だろうか、それとも慣れだろうか。知っている記憶との些細な齟齬が気になってしょうがない。しかし、彼らは生きている。私と同じように、生きているのだ。気まぐれにいつもとは別の道を歩くように、風で乱れた髪を整えるか整えないかの些細な違い。

私の髪が黒かったとして、私の目が黒かったとして、この指先がほんの少し長かったとして、世界は変わらず周っていくような些末な違い。そんな違和感。しかし、誰が成長しようが私には関係ないことなのである。

再び思考に耽った私を置いてけぼりに話は進んで行く。

「何事にもオンとオフの切り替えが重要……こんなときだからこそ気晴らしが必要かもしれないのう」

「んじや、パーっとやろうぜ！」

「あ、そういうことなら、ぼくも料理の腕を振るっちゃうよ？」

「で、パーティを開催する場所は？ このレストランでいいのかな？」
海から空へ。思考から浮上し、七海さんの言葉に頷きかけた十神ク

ンを見て私は慌てて言葉を遮った。

「そうだな。ここで……」

「ちよつと待って」

今日は予想外なことばかりだ。

まさか十神クンがモノクマの干渉のことを考えていないなんて、思うわけがないじゃないか。考えなしと批判するつもりはないが、当然旧館の流れになると思っていた私としては予想外も予想外。言葉は焦って介入したが、内心の動揺は悟られないように眉を顰めて提案をする。

「親交を深めるならモノクマに邪魔されるのは避けたいよね。レストランじゃあ邪魔されちゃうんじゃない？ 開けた場所だとすぐに見つかつちやうしさ」

「開けてない…… 閉ざされた場所ってこと？」

七海さんの言葉に考えるフリをしながら頷く。

どっちにしろ私が場所を言わなければならぬのだ。しかし、提案してからすぐに場所を指定するなど目も当てられない。なにか企んでいますというようなものだ。

考えるフリをしながらレストランの窓からふと外を見渡す仕草をする。

「ここがダメならロビーも同じか…… あちらも閉ざされた場所とは程遠い」

田中クンも考えながら言う。確かに、ロビーではすぐに見つかるだろう。

極論を言うと、正直どこでもモノクマの目はあるのだが…… それを言っちゃあダメだろうな。

「誰かのコテージというわけにもいきませんよね…… この人数だとぎゅうぎゅう詰めになってしまいます」

「ぎゅうぎゅう詰めなら、むしろコテージで決まりだね！ いやー、女子とぎゅうぎゅう詰めなんてラッキーだ。女装して女子専用車両に紛れ込む手間が省けたよ」

…… やったことはないんだよね？ そうだよ？ そうだよ？

言ってほしいんだけど。

「オメーって、よく平気でそういう変態発言かませるよな」

「ソッフ、ぼくは変態だけど、人から好かれるタイプの変態だからね！」

それはごもつとも。多分花村クンが超絶イケメンでスリムな人だったらあまりお近づきになりたくなかつただろうし。彼は彼だからこそ愛嬌があり、憎めないのだ。

「だから、その自信がスゲーだったって」

左右田クンはツツコミお疲れさまです。なかなか絡めないから眺めてるだけになっちゃうけど。

「うーん、あ、そういえばあそこって閉ざされた場所って言えるよね！」

ほら、ホテルの離れにある…… ロッジ風の旧館だよ！」

うん、白々しいね。

「あのボロボロの？」

首を傾げて大きな窓から外を眺める七海さんに頷いて話を続ける。

「ボロボロだけど、きつと頑張つて掃除すればキレイになると思うんだよね。それに、閉ざされた場所ってあそこくらいしかないし……」

「だが、旧館への立ち入りはモノミが禁止していたぞ。なんでも……

改築予定だからと言ってな」

と、辺古山さんが言ったときだった。

「話は聴かせてもらいまちた！ この耳で聴かせてもらいまちた！」

えっへん、耳がいいんでちゅー！ ウサギでちゅからねー！」

耳を短い手でピコピコと動かしながらモノミがレストランに現れたのだ。

しかし皆の反応は冷たい。ひやっひやに冷たい。だって目が怖いもん。あんな目を向けられて挫けないモノミは凄いよ。

「そうか、貴様は耳を頼りにしているのか。だが、それは妙な話だな……」

「ほえ？」

「だったら、あの監視カメラはなんのためにある？ あれはモノクマ専用ということか？」

「……」

モノミはキノコでも生やしそうなほどしょんぼりしていじけている。

可愛いからもう少し眺めていたいが、さすがに可哀想なのでフォローを入れることにする。

「最初はモノミもモニターで放送してたんだし、あれはモノクマに盗られちゃったんじゃない?」

「それもそうだが…… まあいい。それよりも旧館の件だ。貴様もそれを伝えるために来たのだろうか?」

十神クンはまだ気にかけているようだが、一旦保留にするようだ。

「ええ、ミナサンの結束を固めるためなら、あちしも協力は惜しみません。であれば、旧館への立ち入りを許可しまちよう! あちしも協力するから一緒にパーテイしまちよう!」

そういえば女子会にはモノミも参加していたんだっけ。ああ、女子会…… ちよつとだけ憧れてた女子会……

「一緒は無理だよー。だってあんたって気持ち悪いもーん。鏡とか見ない方がいいと思うよ…… 身の程を知ったら生きていけないレベルだからさ……」

「ううっ…… 涙が出るほど温かい叱咤激励でちゅね……」

いや、モノミ可愛いと思うんだけど…… というか、叱咤はあつても激励はされてないんじゃないかな。

「えっと、じゃあ旧館で決まりってことでいいんだよね? でもさ、準備はどうするの? 改築予定で放置されてたなら掃除も必要でしょ?」

小泉さんが少し嫌そうに言っている。

皆が集まる前、段々賑やかになってきた辺りで女子会をしたいという話を聴いていたので、残念に思っているのだろう。彼女の中では全員で掃除する流れが想像できているらしい。さすがは委員長タイプ。「わたくしは掃除という汚らわしい行為は初めてなので、めたんこワクワクしてしまいます!」

「いやっ! 王女様の手を汚すなんてとんでもない!」

左右田クンは多分ソニアさんを純粋に心配してるのだと思うけれど……” 王女様 ” に拘っているうちはきつと打ち解けられないんだらうなあ。

ソニアさんは同じ年の対等な友達が欲しかったと言っていたのだし、自分を立てる人物に嬉しくは思っても、それでは友達にはなれないだろう。彼女を讃えるほど、彼女を大切に扱うほどソニアさんと友達になる道は遠のくのだが…… いつか気づけばいいね。

せめて 「女子にさせるわけにはいかない」とでも言っていれば株も稼げたと思うんだけどね。

「えー、わたしもヤだよー！ 着物じゃ動きにくいしー」

「なんじゃあ…… 誰もやらんのかい？」

自由行動でキッチン使っててよかつたなあ。

「じゃあさ、くじ引きで決めるのはどうかな？」

「くじ引き？ あみだくじでもやるのか？」

日向クンがきよとんとして私の方を見る。

「そ、キッチンに割り箸があつたでしょ？ 一つだけ色をつけておいてそれを引くんだ。印のついた当たりの割り箸をひいた人が掃除当番ってことだろうか？ 勿論、作る私は最後に残ったやつをひくってことで。これなら公平だよな？」

花村クンが気を利かせて人数分の割り箸を持ってきてくれたので、先端を赤いペンで塗って他の割り箸と一緒に握り込む。手にペンの色がつく可能性もあるが、どうせ後で汚れることになるんだし気にしない。

「では、全ての命運をこのくじ引きに委ねるとしよう！」

「じゃあ、恨みっこなしね」

そう言いながら全員が順番に引いていく。十神クンを最後にして手の中に残った割り箸が一本になった。皆の割り箸には印がない。見事に私が当たりを引いたようだ。

「え、私が当たり!？」

「はは、昨日の怪我といい、超高校級の幸運って言う割には全然ツイてないんだな」

「うー、仕方ないね…… まあ、掃除だったら任せてよ。それなりにはできるから安心してね」

「そっか、凧ちゃんか掃除当番か…… なら女子会はまた今度にしたほうがいいわね」

小泉さんが残念そうに言ったが、私一人の欠席で親交を深める女子会を止めるのは勿体ない。

「私が参加しないからって女子会中止は悪いから気にしないでいいよ。何度も女子会したっていいんだしき、そのときに私は参加するから大丈夫だよ」

「でも、それじゃあなんか悪いわよ」

歯切れ悪そうにする小泉さんは、今にも 「皆で早く掃除を終わらせて女子会をしよう」 と言いつ出しそうだ。それも十分魅力的ではあるが、今回限りはそれに乗るわけにはいかないのだ。

「うーん、そうだな…… じゃあ、皆で作ったお菓子を後で分けてもらえたら嬉しいかな。それでいい?」

「そう、だよ。うん、分かった。皆でとびきり美味しいお菓子作るから楽しみにしててちょうだい!」

「うん、楽しみにしてるよ」

和やかに纏まった話にほっと息を吐き、「ただ、あれだけ大きな旧館だし、夜まで集中したいから尋ねて来られても門前払いしちゃうよ」と手を振る。

「女子会とはこれはまた興味をそそられるけど…… パーティの料理はぼくに任せるといいさ。よーし、まずは食材を調達だ、それから旧館で料理にとりかかるとしようかな。この花村輝々がビチツと!」

“ 世界一美味しいパーティ料理 ” をご馳走しますよ!」

「それじゃあ、花村クンと私は引きこもったりマーケットに行ったり忙しくなっちゃうからこの後すぐ取り掛かるよ」

パーティの準備に関しても上手く纏まったようだ。よかった、これでなんとかなるだろう。

「では、そのパーティの件を九頭龍に伝えておけばいいのだな?」

「ああ、いったん解散して夜のモノクマアナウンス後、旧館に集合だ」

十神クンのその言葉ともに皆がその場で解散する。女子はそのままレストランに残って女子会をするようだ。立ち話を始めた男子が次々と追い払われていく様は圧倒的である。

「あれ、狛枝さんはマーケットに行かないの？」

「うん、一応先に中を見てみようと思ってるさ。どんな内装にするのかも考えたいし」

「そっか、じゃあ先に行ってくるね！」

そうして花村クンとも一旦別れる。

暗い旧館に入ると、思ったよりも埃臭くて早くも心が折れそう。事務室や廊下、大広間の確認をしてからふと気になってトイレを覗く。

「水道とか電気は大丈夫かな……あとで色々モノクマに訊いておかないとね」

それから倉庫へと移動し、蜘蛛の巣だらけのその中で適当に置かれた荷物を露になっている床下への扉の上へと軽く積んでおく。埃を被ったテーブルクロスは新調するとして……メダル足りるだろうか。いや、モノミに頼めばきつとタダで手に入るだろう。心配はいらない。

再び大広間に戻って端の方に避けられたテーブルの数を数え、領なく。大きなテーブルも小さなテーブルもあるし数も十分だ。人数的には全然問題ない。

普通に掃除道具と小物と、あとは絨毯を用意するだけで済むだろう。

ギシギシと足を取られそうになりながら隙間だらけの床を確認し、位置取りを簡単に決めていった。

それらの確認を全て終え、あとは買い物に行ってくるだけになったので外に出るため廊下に出る。

「さてきて、女子会は残念だけれど、色々準備しなくちゃね……」

マーケットの商品リストを片手に、私は笑った。

No. 14 『失樂園』―立食―

準備は全て滞りなく完了した。あとは一時間後のパーティ開始を待つのみとなっている。

実は仕掛けや煽り以外に費やした時間で倉庫以外のほとんどの掃除が完了しているのだ。ほとんどと言っても、大広間以外の場所は見栄えをよくするくらいしかできていないが十分だろう。

なんせ大広間の床は黒ずんでカビだらけ。部屋中に蜘蛛の巣がびっしりな上になにか分からない虫がひっそりと視界の端を動き回る。それだけでもう嫌になりそうなのに隙間だらけで転びそうになるわ、Gがその先に待ち構えているわ、ギリギリ避けたと思ったら蜘蛛の巣に頭から突っ込むわで不連続きだった。

罪木さんもびっくりの転びっぷりを一人で虚しく披露し、床をある程度綺麗にしてからはもう転ぶ心配はなかった。スーパから花村クンに協力してもらって運んだ絨毯を四枚、床一面に敷いたからどうにかなったからね。

本当は床から掃除をするのは邪道だけれど、どうしても絨毯を先に敷いて転ぶ対策をしておきたかったのだ。

それから椅子を使って天井付近の蜘蛛の巣を取り除き、壁の埃をはたきで落とし、照明器具を綺麗にした。それだけで大分時間を取られたが、その後はテーブルの設置や花瓶などの小物の設置くらいだったのでなんとか午後3時には作業を終わらせることができた。

余った時間は気になったところを見栄えよくするのに使い、今に至る。

なんとということでしょう！

蜘蛛の巣だらけだった玄関横のフロントは綺麗に掃除され、傾いた絵画もかけなおされて気持ちよく人を迎えられる場所となりました！

事務室の埃は取り払われ、3メートル近くの高い位置にあるブレーカーの下には大きめの椅子を設置。デスクの本棚はキッチンと整理され、隠れモノクマは日向クンのコテージポストにとうかん投函。

広間前は掃き掃除され、倉庫も古臭くてカビ臭い造形は崩さないように、床の扉の上にカモフラージュを施しました。

大広間の中は三つの大きな横長のテーブルが中央付近に置かれ、そのさらに中心に小さな丸テーブルと造花を活けた花瓶。

左右の壁際に二つずつ中央と同じ丸テーブルと同じ数だけの花瓶が飾られています。これで壁の花にもなれるし、人の中でわいわいするのが苦手な辺古山さんでも楽しむことができるでしょう！ さらにさらに、十神クンがテーブルを占領する勢いで食べ始めても皆が避難できる場所になるのです！

と、脳内劇場を繰り広げつつ仕掛けを確認。

余ったテーブル二つは奥の方に固めて置き、雰囲気の良いテーブルランプを設置している。窓が鉄板で塞がれている以上、少しは灯りを増やした方がいいだろうからね。

あと、大広間に入る扉は三つあるが、全部開け放っていると廊下の残った埃が侵入してきそうなので真ん中の一つを除き、両端の二つの扉に「Close」の札をかけている。

もう一度言おう、準備は滞りなく完了したと。

厨房に籠ってしまった花村クンの邪魔をしないようにと、パーティーの時間までやることを頭の中で復唱しながら待った。

そして、運命の時間がやってきた。

「おい、準備は終わってるか？」

ドカドカと大きな足音を立て、旧館の床が盛大に悲鳴をあげる様をまるで気にせず十神クンがやってきた。

腕時計を見ると、午後9時半。開始まで30分も前だ。彼の気合の入りようは目を見張るものがあるだろう。

「うん、終わってるよ。早かったね…… あれ？ そのケースはどう

したの？」

まるで今しがた気が付いたように視線を動かして、彼の持つ二つのジュラルミンケースに向ける。

すると十神クンはその場にドカリとケースを降ろすと私の体全体を眺めてから声を出した。

「危険物を持っていないかボディイチエックをする。なにか発見した場合にこれに入れるんだ。勿論、それはお前も対象だ。腕を広げろ」
「え？ うん……」

当然のことながら、こうなることを予見して鉄パイプはコテージに置いて来ている。だから普段身に着けている太腿のホルダーも取り外しているし、彼に危険物扱いされそうなものは何一つ持っていない。

一つ、気になるのは花瓶が危険物扱いされるかどうかだが…… 陶器の花瓶は一つだけだし、軽くて割れやすいものだから凶器になったりはしないだろう。

自己申告しておけば隠すよりも信用がおけるだろうし、訊いておいたほうが特かもしれない。

「よし、危険物は持っていないようだな」

「あのさ、一つだけ陶器の花瓶があるんだけど、一応チエックしておいてくれるかな？ 凄く軽いし割れやすいから凶器にはなりづらいと思っただけど、一応さ」

「なぜ一つだけ陶器なんだ？」

訝し気な表情。ああ、確かに故意に一つだけ陶器にしてあるけれどそれは初日に買った花瓶なんだよね。勿論理由だってある。

「商品リストを作ったときに一緒に購入した奴だよ。窓際とかテーブルの上は割っちゃうと大変だけど、テレビの横に置く花瓶はよっぽどのがない限り割ったりしないだろうし、そこは少し拘ってもいいかなって思っただけさ。パーティなんだし、テーブルの上が寂しかったから置いてみたんだけど……」

「しかし入れている花は造花か。中は変な音もしないし…… まあいいだろう」

陶器の花瓶を軽く振り、他の花瓶がプラスチックであることを確認しつつ十神クンが辺りを見渡す。

「料理はまだ並べていないのだな」

「30分あるからね。多分時間通りになるように調整してるんじゃないかな？」

「なら、そっちは後回しだな……」

まあ、調理器具を今から取り上げちやうとお楽しみ料理が出てこないからね。見ちやうと取り上げたくなくなっちやうのかな。

「俺は玄関でボディーチェックをする。こっちは任せろ」

そう言つて床を軋ませながら十神クンは玄関に向かって行った。

それからはあまり変わりもなく、10分前にきつちり来た小泉さんやゲーム持参の七海さん。あ、七海さんはパーティが始まればゲームをやめるそうだからコミュ力は問題なし。

西園寺さんはまだなにも料理がきていないことに不満そうにしている。どちらにせよ、時間になるまでは食べられないと思うけどね。

田中クンは端の方で塞がれた窓を観察し、なにやら呟いている。魔法陣がどうのと呟いている気がするのはいきつと気のせいだ。

そして泣きそうな左右田クンが入って来て辺りを見回し、更に落ち込む。お気に入りの工具が取りあげられちゃったんだっけか。ソニアさんもさつき大広間の前を通つて倉庫の方へ向かっていたようだから見つけられないのも無理ない。

このあたりでパーティ開始5分前になったので花村クンが料理を運び始めたようだ。式大クンと共に来た終里さんが涎を垂らしながら目を光らせている。

どうやら小泉さんが花村クンの手伝いで料理を運ぶようなので一緒にさせてもらうことになった。

「そうだ。凧ちゃんこれ」

「ん？ わつ、クツキーだ！」

料理をある程度運び終えたあと、再び大広間に二人で入ると小泉さんが皆で作ったクツキーを差し出してくれた。

「皆で1つずつ小分けにしたのよ」

「ありがとう、小泉さん！」

中に大きめのツノのようなものがあるが…… 濔田さんの胸像、結局皆で食べたのかな？ そこだけが気になるが、それは今度女子会に参加したときに自分の目で確認しよう。

「まだパーティ始まってないよね！ お腹と背中がランデブーしちゃいそうっす！」

お腹を空かせるために運動して一風呂浴びて来たのであろう濔田さんが来て、時間になったので外にいたソニアさんや辺古山さんも大広間へと入って来る。

「なあ、これ全部お前がやったのか？」

隣にやってきた日向クンが周りを見渡しながらそう言ってきたので、「掃除のこと？」と言葉を返すと静かに頷いた。

「うん、最初は埃とか蜘蛛の巣とかですごかったんだよ？ お陰で大広間一つ終わらせるのにもかなり時間食っちゃったよ。玄関とか事務室も少しだけやったけど、倉庫は手付かずなんだよねえ」

隙間だらけの床に絨毯を敷いたことや絵画の傾きを直したことなどを話しつつ全員集まるのを待つ。

西園寺さんはいつまでも十神クンのボディイチエツクに不平不満を漏らし、それを困った顔をした小泉さんが窘めている。そんな彼女に西園寺さんは冷たく当たりつつも満更でもなさそうだ。

珍しく私の近くにいた左右田クンが日向クンの方へと避難しつつこちらもボディイチエツクの愚痴。誰かに話したくて仕方なかったようだ。泣きそうだった表情は落ち着いているが、日向クンを捕まえてこんこんと話し続けているので相当シヨックだったのだろう。ななせ、「後で返してくれるよ、きつと」と言った私の言葉に「だったらいいけどな」と返してくれたのだ。

快拳だ。左右田クンがまともな会話をさせてくれた。それに嬉しく思いつつもぐいぐい行ってしまうと逃げられてしまいそうなので「十神クンなら返してくれるよ」と返す。

なんだか警戒心の強い野良猫を相手にしているような錯覚さえ覚える。少しずつ警戒心を解いてもらうにはこちらも付かず離れず、絶

妙な距離感を保ったままじりじりと近づいて行くのだ。勿論、時折立ち止まって待つことも重要である。少し近寄って来たからと言ってずかずかと歩みを進めてしまえばきつと逃げてしまおうだろう。

「左右田クンって猫っぽいよね」

「はあ？ いや、あんま嬉しくねーけど……」

「臆病なところとかそっくりだよな」

「うっせうっせ！ 嬉しくねーって言ってんだろオが！」

ちよいとつつくと威嚇してくるとかもそっくり……なんてことを言ったらまたフーツ！ と威嚇してきそうなので我慢だ。

しかし、彼の “カケラ” はなかなか手に入れることができないな。私は十分このやりとりが楽しいが、彼にとってはそうではない。

互いに楽しめる会話ができていようなら二つ目のカケラはすぐ手に入るだろうし、心を開いてくれてはいないのか。

「うーん……」

「どうした？ 七海」

そうやって私が左右田クンで遊んでいるときよろきよると辺りを見ている七海さんに日向クンが話しかけていた。

「モノクマが…… 入って来ないか心配だなんて」

「ああ、確かに心配だけど窓…… だよな？ 窓も塞がれて外からは見えないだろうし大丈夫じゃないか？」

「…… うん、それもそうだね。入り口も一つだけみたいだし、レストランよりは安心できる…… かな？」

首を傾げる動作がこれほど似合う女の子がいるのだろうか。彼女の親は良い趣味してるよ、本当。

「時が来た！ 今宵の宴はいかようなものとなるのか…… ふははッ！ 精々俺様が楽しめるようなものとなればいいがな！ なあ、お前

達」

ハムスターを順に撫でていきながら田中クンが時間が来たことを告げた。

…… そして、時間がきてから少し経ってから十神クンが大広間に現れた。

「待たせたな…… 花村は厨房か。それに、やはり九頭龍は来なかったか」

時間がきてから数分玄関に留まっていたのはきつと九頭龍クンに来て欲しかったからだろう。少し寂し気に言った十神クンに、「すまない。パーテイの件は伝えたのだが……」と辺古山さんが目を伏せながら言った。

そういえば先程小泉さんから貰ったクッキーの詰め合わせの中に、一緒に皆で買って食べたらしいキャンディやらチョコレートやらが入っていたが…… その中であつたかりんとうはきつと、うん、辺古山さんのものなんだろうな。今度一緒にお菓子作りするときはかりんとうの作り方でも調べてみようか。

小泉さんがな何気に「ペコちゃんは謝らなくていいよ。こないのはアイツのせいなんだからさ」と地雷を踏んでいるような気もするが、辺古山さんは普通にしている。平然とした振りをしているのか、それとも本当になにも思っていないのか…… 彼女の方がポーカーフェイスは上手なので私には分からない。

「本来であれば、全員強制参加なのだが…… まあいい。欠席者が一人だけなら問題はないだろう…… 一人ではなにも起こしようがないからな」

そう言つて十神クンが視線を下から上に上げたとき、ぎんつ、と目を見開いた。

「目エェこわッ!？」

左右田クンが驚きつつその視線を追う。

「おいっ、あれはなんだ!？」

急に険しい顔になったその視線を追うと料理の置かれたテーブルがある。

そこにはテーブルの中央にデンと置かれた串刺しの肉があつた。「危険だ」

十神クンはそうぼつりと言うと、そのままドスドスと足を踏み鳴らしてテーブルに突進していく。

そして辿り着いたと思つたら、その串料理をむんずと掴んでものす

ごい勢いで料理を頬張り始めた。

まるで歯磨きかなにかをするように、鉄串に刺さった肉を次々と胃袋へ送り込んでいく。キミの胃はブラックホールかなにかなのか、と突っ込みたくなかったのを抑えて「どうしたの!？」と声を出す。

「お、おいっ！ なにしてるんだよ!？」

「ずりーぞー！ 勝手にオメーだけ食いやがって!」

叫ぶ日向クンと、涙目になってる終里さん。ちゃんと皆が来るまで待つていたのは偉いけど、食べ物に関する執着はすさまじい。

「食っているのではない!」

「どう見たって食べてるじゃん!」

肉を頬張ったままぐもった声で叫ぶ十神クン。叫ぶたびに少しだけ飛んでいく肉汁は食事マナーもへったくれもない。小泉さんの言うことはごもつともである。

「そうではないと言っているだろう！ この料理をよく見てみる」

「よく焼けた美味そうな肉のようじゃが……」

式大クンが言う。

しかし、誘導するくらいなら最初から答えを言ってしまう方がいいのに。若干回りくどい彼の質問に周囲の人間が順に答えていく。

「そのよく焼けた肉にはなにが刺さってる?」

「…… ん？ 鉄串か」

「そうだ、この鉄串は立派な危険物だ。となれば…… 俺が責任を持って回収せねばなるまい!」

回収するだけなら鉄串から肉を外せばいいのにね。食べる必要はないと思うのだけど。

「おーい、みんな揃ったみたいだね！ それじゃあじゃんけん料理を運んで…… って、えーっ!! もう食い散らかしてるー!？」

花村クンが新たな料理を持って大広間にやって来たが、すぐに顔だけムンクの “ 叫び ” のようになって愕然とした。うん、まだパーティ始まったもいないのに食い散らかされたら困るよね。

「この料理を作ったのは誰だ?」

「ぼ、ぼくですけど…… えっと、美食倶楽部の方ですか……？」
美味しんぼかな？

「一体どういうつもりだ？ こんな危険物を料理に使うとは……」
「き、危険もなにも…… それはシユラスコといって、鉄串に肉を刺して焼く南米の伝統料理で…… ほら、南国っぽいからパーティの雰囲気にもぴったりかと思ってね」

「その鉄串が問題だと言っているんだ」

「えっ!? 鉄串もダメなの!？」

まあ、木の串だったらまだ大丈夫だったかもしれないけどね。

「その様子だと、他にもまだあるかもしれない…… おい、日向付いて来い。お前も手伝うんだ」

「ああ、分かった」

険しい顔をして飛び出した十神クンを追って日向クンが出ていく。
やっぱりどこか理解が早いような気がする。なんでだろう？ もう少し慌てる日向クンを見ていたかったのだが…… 最近はそういえば落ち着いているな。

「そういえば、モノクマにここが見つかった場合ってどうする？」

「うーん、見つからないようにするのは難しい…… かもしれないね」
彼らが出て行った扉を見つめて呟けば、七海さんが私の言葉に同意してくれた。

「って言ってもよオ、止めようとしても危険な目に遭うだけじゃねーか？」

「モノクマのせいでパーティ始められないのか!? ならオレが一発ぶん殴って……」

「そんなことをしたらなにをされるか分かったもんじゃないぞお、やめとくんじゃ」

「だ、だったら餓死するのを待ってか!? さっきから待たされてオレ……!」

終里さんに是非とも頼みたいところだけどそれだと逆にそこなにかしてることだしね。それにルールのこともあるからおしお

きざされても文句を言えない。

「それでモノミみたいに見せしめにされたらどうするのよ！ アタシ達の命はモノミと違って一つしかないんだからさ、そういうのはやめてよ……」

「そうですよお！ あんな…… あんな残酷なの…… 見たくありません……！」

「奴に分身がある限りその身を魔物としてどこまでも追って来るだろうな…… 血に飢えた魔物の狂爪から逃れるのはいくら俺様であろうと難しいだろう。ふははっ、どうしたジャンP よ、今日の貴様はやけに毛がざわつくな……」

「そうだね、モノミみたいに今のモノクマを壊したって替えはあるだろうし、見せしめかおしおきかは分からないけど、とんでもないことをされちゃうのは変わらない。あんまり強行手段はとらない方がいいよ」

「たはー、通訳いらす！ さすが尻っちゃんっすね！」

「では、一体どうするのこの話？」

話が少し逸れてきたので辺古山さんに軌道修正してもらったのはありがたい。

「えっと、私がなんとかしてみるよ」

そこで暫く考えていた七海さんが手をあげる。ふんす、と息を吐いて気合の入れようは十分だ。

「えっ、千秋ちゃんが!? 危ないわよー！」

「オメーみたいな女の子になにができるって言うんだよ！ 危ねーだろー！」

「危なくはないよ…… 私自身がなんとかするわけじゃないから」

小泉さんと左右田クンは危険だからと声をあげたが当の本人に言葉を遮られるようにされて黙った。

「さては、モノミを利用する気だな？」

「うん、モノミを上手いこと利用すれば少しは食い止めてくれるかなって思ってる」

「なるほどっ！ モノミちゃんとモノクマちゃんはライバル関係っぽ

「いつすからね！」

「まー、いつも一方的にやられちゃってるけどねー？ あいつもたまには役に立つんだねー」

田中クンの予想は当たっていたようだ。

順調にモノクマ対策が決まって行っているみたいだし、もう私が誘導する必要もなさそうだ。

「でもよオ、モノミだけに見張りを頼んでもアイツらがグルだった場合筒抜けになるんじゃないか？」

「それでは、交代で見張りをするというのはどうでしょう？ そうすれば皆さんでパーティを楽しむことができます」

「30分か一時間交代なら時間的にもいい感じなんじゃない？」

私の言葉には七海さんが反応して「……せつかく夕飯を食べずに来たのに一時間も見張りをするのは……最初の人がかわいそうだよ」
「か」と言う。つまり、30分置きの見張りにしようということか。

「朝までコースつつすから、外の空気に当たるのは眠気を覚ますのにもよさそうっすね！」

「では、二人が戻ってき次第、見張りの順番を決めるとしよう」

「ふははははっ！ 蜃気楼の金鷹ジャンP、侵略する黒龍チャンP、滅星者たる銀狐サンD、重鉄の赤像マガG……そしてこの制圧せし氷の霸王である俺様……番犬とするには強大すぎるくらいだ！」

つまりあんまりやりたくないってことかな。

「わあ！ ハムスターさん達の名前、メタンコ格好良いです！ とっても頼もしいですね！」

「つふ、こいつらもどうやら力を振るう機会を狙っているらしい……全力を投じてはこの世界が崩壊してしまうだろう。貴様はその片鱗だけでも、とくと見るがいい……！」

チヨロイ。

ソニアさんに言われたからってそんなに気合を入れなくても。

ほら、そこで左右田クンもギリイッってなってるし。

「本当は徹夜って体によくないんですけど……私が看病しますか

ら、体調が悪くなったらすぐに言ってくださいねえ?」

「食べ続けたら胃にも優しくないわい……」

「いつ、胃薬なら常備してますから! なんでもおっしやってくださいあい!」

ん? 今なんでもって…… ていう冗談は飲み込んでおくとして……

「ええと、決定でいいのかな? じゃあ……」

「あ、十神さんたちが帰ってきましたあ!」

そう私が言ったところで、大広間の扉が開いて十神クンと日向クンが帰って来た。

その手には鉄串やら包丁やらを入れたジュラルミンケースを持っている。長い鉄串もきちんと入れることができるほど大きなケースなので重そうだ。

「おい、そろそろ始めようぜ! 腹が減って仕方ねーよ!」

「…… いや、片付けなければならぬ問題がまだ残っている」

「え? まだなにかあんのか?」

終里さんがものすごくショックを受けたような顔をしている。

さっきの話し合いの最中もチラチラと料理を覗き見ていたし、相当我慢しているようだ。

「どいつをぶちのめせばいいんだツ!? やってやるから教えろ!」

「そういう話ではない。危険物を入れたこのジュラルミンケースをどこに保管しておくかという問題だ」

十神クンがケース2つを下敷きにして座つちやえば誰も取れないと思うんだけどね。

「ここに置いておくんじやダメなのかよ?」

「ケースには鍵をかけてあるから、問題ないとは思いますが…… やはり念には念を入れて、どこか安全な場所に保管しておくべきだな」

そういえば、このケースを旧館の中に置いておくこと自体があまりよくないと思うのだけど、コテージに置いてきたりはしないのかな?

「それなら旧館の奥に倉庫のような部屋がありましたよ?」

「しかし、倉庫に放置しておくわけにもいくまい」

「ならば、誰かが見張ってればいい。それなら安全だろうか？」

そうか、見張りを立てるにしても別々にする必要はないよね。

「じゃあさつき決めた、モノミと見張りに出る人が外で保管しておくとかどう？ これなら沢山の人が見張りにつくわけだしモノミも見てるから手を出しづらいと思うよ」

私の言葉に 「見張り……？ いつのまに決めたんだ」 と眉を顰めていた十神クンだが、「それも必要なことではあるな」と結論付けて頷いた。

「その見張りというのはどういう話だったんだ？」

「皆お腹空いてるだろうし、最初に見張りになる人がずっと放置されてるのは可哀想だから…… 30分ごとに交代して、モノミと外で見張りをしようって話してたんだよ」

「ふん…… ならば順番を今決めてしまうか……」

「じゃんけんで負けた人から近い時間で埋めて行こうか…… えつと、朝のモノクマアナウンスが鳴るまでやるんだよね？ なら、最初の3人は2回見張りをすることになるんだけど…… 異議はなさそうだね」

そうして大人数でじゃんけんをしていった結果、時間はかかったけれど無事に見張り当番が決定した。私は勿論、最後までじゃんけんに勝ち残ったので、見張りも一番最後だ。

【見張り当番表】

2 2 : 3 0 ~ 2 3 : 0 0	辺古山
2 3 : 0 0 ~ 2 3 : 3 0	七海
2 3 : 3 0 ~ 0 0 : 0 0	濂田
0 0 : 0 0 ~ 0 0 : 3 0	左右田
0 0 : 3 0 ~ 0 1 : 0 0	小泉
0 1 : 0 0 ~ 0 1 : 3 0	西園寺
0 1 : 3 0 ~ 0 2 : 0 0	ソニア
0 2 : 0 0 ~ 0 2 : 3 0	日向
0 2 : 3 0 ~ 0 3 : 0 0	田中

03	:00	〽	03	:30	十神
03	:30	〽	04	:00	罪木
04	:00	〽	04	:30	終里
04	:30	〽	05	:00	式大
05	:00	〽	05	:30	狛枝
05	:30	〽	06	:00	辺古山
06	:00	〽	06	:30	濤田
06	:30	〽	07	:00	七海

「よし、これで決定だね」

「ああ、では私がお腹を持って行こう」

「ちよつとだけでもお腹に入れた方がいいんじゃない？ ペコちゃんだっってお腹空いてるでしょ？」

「いや、30分くらいなんてことはない」

「そう？ なら…… いいんだけど……」

小泉さんと辺古山さんのやりとりが終わり、彼女がこつそり渡したクツキーの袋を見なかったことにして仕切り直すことにする。小泉さんの分のクツキーを渡されて、ほんの少し照れて礼を言う辺古山さんなんて見てないよ。うん、微笑ましいね。

「でもさー、そつちのジュラルミンケースは持って行かなくても良かったのー？」

クスクスと笑いながら西園寺さんが、もう一つのジュラルミンケースを指さした。

「これか…… いや、こつちのケースは大丈夫だ」

「あー、ずるいんだー。自分だけ私物持ち込んでさー！ わたしにはあーんなにねつとりとしたボディーチエックしといてさ……」

「特別扱いは当然だ…… 俺は特別だからな」

嫌み混じりな言葉に臆すこともなく十神くんが答える。そのどうどうたる態度に臆病な気がある左右田くんなんかは小さな声で「それを言われたらもうなにも返せねーよ」と愚痴っていた。

「このジュラルミンケースを手放すわけにはいかん。あっちのケースの鍵も入っている

からな。俺が責任を持って見張っておく。他のヤツに任せておくわけにはいかないんだよ」

「そ、それよりもう問題も片付いたんだろ？ だったらパーティを……」

「そうだな、始めるとするか」

「いよっしやあああああああ！」

終里さん、服！ 胸元のボタンがはじけ飛んでるよ！

「こらっ！ 男子は見るな！ ああーもう、赤音ちゃん！ ちよつとこっちに……」

「うおおおおおお！」

「聴いてない…… ね？」

小泉さんが「ボタン縫うくらいならすぐ終わるから！」と言っているが聞く耳持たず。ちよつと危ない恰好のままテーブルに突進していく終里さんを止めることはできなかつた。

「…… ひと段落ついてから縫ってあげることにするわ」

「そうした方がいいみたいだね」

そして各々テーブルに向かい、歓談を始める。

「ククク…… ついに宴が始まるか…… フハハハッ！ せいぜい俺様を楽しませてくれよッ！」

一人楽し気な田中クンの、そんな一言が合図となってパーティが始まった。

「おい、んぐ、いいのか？ もう食っていいのか？」

「とっくに食ってんじゃねーか！」

早速テーブルを一つ占領して終里さんが肉を頬張って泣いている。

あまりの美味しさに涙すら出て来るらしい。花村クンの料理にますます期待が膨らんだ。

「ハハッ…… ハハハッ…… と、止まらねーよお…… ハッハッ

ハッハ！ メシを食う手が止まらねーよ！」

「まあ、止まらなくて当然だよ。だって、世界一美味しいパーティ料理

だからね！ たとえ、満腹になつたとしても、あまりの美味しき故に食べ続けざるを得ない……それがぼくの作る世界一美味しい料理なんだよねー！」

なにそのオカルト。

「な、なんか逆に怖いんですけどお……」

「…… 食わねえのか？ だったらオレが、一人で食つちまうぞお！」
「厨房でじゃんじゃん作ってるから、こっちにじゃんじゃん持つてくるねー！」

そう言つて花村クンが大広間から出て行く。厨房に料理を取りに行つたのだろう。

「でも、とっても美味しそうです……」

誘惑に負けた人物が次々と皿を手にし、料理を取り分けていく。

「へへへっ、どうです？ ソニアさん！ これとかとっても美味しそうですね！」

「あら、ハムスターさんのお食事もあるんですね！ うふふ、口いっぱいに頬張る姿がとっても可愛らしいですわ」

「破壊神暗黒四天王のためにと花村が用意したようだな…… この俺様の話をちゃんと覚えておくと、後で礼を言わなければならぬ」

左右田クンが沢山料理を盛つた2つの皿を持って振り返ると、悲しい現実が目の前に広がっていたようだ。ドンマイ左右田クン。自身自身の分が1皿増えただけでも虚しいだろうけど、うん頑張れ。

それにしても、どうやら会話を聴いている限りだと花村クンと田中クンは互いにカケラを手に行っているようだ。とても意外だったな。

「なあ、狛枝は食べないのか？」

視界の端に大皿を使って吸引していく十神クンと、それに対抗するように馬鹿食いしている終里さんの姿が入つたが、それを見なかつたことにして日向クンの方へと向く。

「食べるよ？ どれにしようかって迷つてさ」

「お腹空いてないのか？ なら軽食くらいだと、あそこのハンバーガーが美味しかったぞ」

「ホント？ うん、じゃあオススメされてみようかな……」

そう言つてテーブルの方へ歩み寄る。

時間はまだ22時50分。記憶ではあまり食べる時間がなかつたはずだから、少しだけこの時間が長く続くように仕掛けは設定してある。

暫くは皆と歓談でもしながら過ごして、後から壁の花にでもなるるか。

テーブルの上を見ると全体的には肉料理が中心で、日向クンの言うようにハンバーガーやポテトのようなジャンクフードもあるようだった。

他にはバナナやマンゴーなどの果物を豪快に盛り付けた皿。バジルがふんだんに使われた冷製パスタ。海産物を利用したと思われる料理の数々。ふと目についたぷりぷりのエビはそれでいて艶やかで、まるで「eat me」という札でもついでいそうなほど美味しそうな自身を皿の上からアピールしている。

思わずごくりと喉が鳴った。

南国特有のトロピカルジュースや果物を搾って作られたストレート果汁100%のジュースまである。ヤシの実を使ったものも当然あり、ジュースと、実をスライスしたヤシミも並べられている。

デザートもたくさん種類があるが、肉もその勢いに負けてはいない。

肉はギトギトとまではいかずとも脂が乗っているが、脂っぽいかと言えどもない絶妙な焼き加減。時間が経っているというのにまだ肉は温かく、切り分けた断面から良い匂いが漂ってくる。

様々な誘惑にかき立てられながらも日向クンにオススメされた、スタンダードなハンバーガーを頬張った。

ツヤツヤのバンズに挟まれた肉汁たっぷりなパティ。それに新鮮なスライストマト。ピリツとしたピクルスが口の中ではじけ、チーズは形を保たせながらもとろりと口内に広がっていく…… 本当にこれはハンバーガーなのかと疑ってしまうほどだ。

ついでに取った付け合わせのポテトをかじるとほど良いカリカリさでいてほかほか。塩味が良く効いていてこれまた美味しい。

以前聞き逃してしまっただけで、ゲームでは頼っぺたどころではなくパンツまで落ちるとまで言っていた花村クンの料理だがなるほど、これはそう豪語したくなるというものだ。

花村クンが変態でさえなければ一瞬で堕ちていたかもしれない。胃袋を掌握されるということは人生の半分を掌握されるということに等しい。メイの手料理によって育てられた私が言うのだから間違いない。

大広間に入って右手側の壁際、奥の丸テーブルの上に取り皿を置いて私は皆を眺めてみる。

涙を流しながら肉を目一杯腕に抱え、食べ続ける終里さん。

グラス片手に格好つける左右田クン。

皆から離れた所で料理をチラチラと見ている罪木さん。

笑顔で歓談するソニアさん。

「ねえ、みんな！ せっかくだから写真撮ってあげようか？」

「わあ、素敵ですね！ お願いします」

「輝たちやーん！ 明日も明後日も、ずーっと料理を作ってほしいですー！」

「それは告白かな？ ウェルカムだよ滝田さん！ さあ、ぼくの胸に飛び込んでおいでー！」

「これで子豚ちゃんできえなければ完堕ちしてたつすよー！」

「ええっ！ だめなの!? そんな理由で!？」

しきりに写真を撮って周っている小泉さんに、料理を頬張って感動している滝田さん。変態発言をしながらも、輝く笑顔で嬉しそうな花村クン。

そんな時間が続き、次々と交代していく見張り番を横目に腕時計を確認する。

そろそろ壁の花にでもなろう。

カシャ、カシャ、と響くカメラのシャッター音に目を向け、皆の位置取りを確認する。

十神クンは相変わらず反対側で料理を独占しているようだ。作ってあったとはいえ、アレに料理の供給を追いつかせている花村クンも

すごいよね。

花村クンの顔が時間が経つにつれて青くなっていくのは、きっと過労のせいだろう。

時刻は午前1時25分。

「あら、もうすぐ交代の時間ですわね」

ソニアさんは、私が設置した壁掛け時計を目にしてそう言う。

「む…… う…… むうううう……！」

先程から大広間と廊下を行ったり来たりしている式大クンが唸りをあげながら膝に手をつけて、俯くように立っている。

「…… ん、式大？ どうかしたのか？」

「す、すまないが…… ワシはちよつくらホテルに戻らせてもらおうぞお！」

あげた顔には脂汗が浮かび上がり、かなり苦しそうにしているし、ちよつと泣きそうになっている。あの太柄で豪快な彼にしてはちよつと意外な表情だ。

「バカを言うな…… 勝手な行動は許さんぞ」

「止めてくれるな、十神よお…… 漢には行かねばならぬときがあるんじゃないか……！ 今、行かねば…… 漢がすたる…… クソを漏らしたとあつては、漢がすたるんじゃないやああああああああああ……！」

その魂の叫びによって何人ががぎよつとした顔でそちらを見ているが、彼はそれどころではないのだ。

「トイレなら旧館にもあるだろう。なぜホテルに戻るんだ」

「さ、さつきから何度もトイレに行っておるのだが、一向に空く気配がないのだ！」

あー、お手洗いは男女共用なうえに1つしかないからね。せめて2つあればちがうのかもしれないけど……

「こ、これは一体…… ツ!？」

「そっちはなんだ？」

今度は静かにハムスターやソニアさんと戯れていた田中クンだ。

「お、俺様の魔犬のイヤリングが…… 消えた！ 亜空間に消し飛ん

「だだとツ!?!」

「騒ぐな、どこかで落とすただけだろう」

「…… 床下とかに落とすんじゃないかな? ほらここの床、絨毯が敷ききれてないし、木が縮んで隙間だらけだから」

七海さんがどんなイヤリングなのか特徴を訊きつつ二人で床下を覗き込んでいる。

「クソだ! クソが出るぞおおおっ!!」

「うるさい、出すな!」

それは無茶ぶりじゃないかな。

「おい、こつちの皿も食っちゃまっていいか?」

「ふ、ふざけるな! それは俺の分だ!」

「おい、十神! みんなもほらっ! 写真撮るよ! ハイ、チーズっ…… ってね!」

カシャ、とまたシャッター音が鳴る。

うん、なんだか深夜テンションになってきたのかカオスなことになってるね。

「なあ、お前達…… もう少し大人しくできないのか……?」

そのとき、ピピツと小さな音がして辺りが真っ暗になった。

午前1時半ジャスト…… その言葉は誰にも拾われぬように飲み込み、場に混乱が訪れた。

さあ、停電だ。

No. 15 『奈落』 ―停電―

午前1時半ジャスト。停電だ。

辺りが暗くなると同時に、見つめていた壁掛け時計も一瞬で暗闇に塗りつぶされるように消えてしまった。

暫く間を置いて、私がしゃがみこみ、コンセントコードに手を触れたときにようやつと皆は停電に反応し始める。

「うわっ、停電だよー！」

「おいっ、なんにも見えねーぞ?!」

この声は小泉さんと左右田クンだな。

それよりも、変な行動をしているのを早々に発見されないように手早く済ませてしまおう。

「ま、真っ暗だよお！ もうお先真っ暗だよおっ！」

これは濔田さんか。

幸い、窓が鉄板で完全に塞がれてしまっているからいつまで経っても目が慣れるようなことはない。

暗闇によって齎もたらされた恐怖が、周囲の怯える言葉にも影響され波のように広がって行く。

複数の悲鳴と、皿を割る音。幾つかの料理が落ちたのか、ベシヤリと湿り気の帯びた落下音がする。それらを聴いてよせばいいのに、なんにも見えぬまま逃げ惑う足音がその場に響き渡った。

「み、みんな落ち着いて！ こういうときは落ち着かないと！」

小泉さんが逃げ惑う音に対してか、震える声で言った。

よし、目的の場所に到着。あとは手を差し入れて絨毯を少しズラすだけだ。

「俺様の傍を離れるなよ？ お前たち……」

「ひゃあああぁっ!?!」

田中クンはハムスターが被害に遭わないようにか優し気な声を出し、なにかをグシヤリと踏んだような音と罪木さんの悲鳴がこだました。

「おいっ、お前なにをしているっ！」

テーブルの脚先に右手を添えて、そう深くない位置にある光る物体の真下を少し左手で動かした。

「やめろっ!!」

瞬間、素早く引つ込めたはずの左手がなにかに貫かれて激痛が走る。

「いっづつ……!」

極力声は抑えていたのだが、僅かに漏れた悲鳴は「お、おいつ! どうした!」と心配気な声で叫ぶ日向クンに遮られた。

そして追い打ちをかけるように物凄い衝撃が全身に襲い掛かり、恐らく自分が元居た位置のテーブルへと突っ込んだ。

ガシャアン! と大きな音を立てて倒れるテーブルと、降って来る皿や花瓶。料理は既に食べきっていたから落ちて来たのは皿だけだったが、左手が痛くて受け身をとれない上に割れた皿が頭をぶつけた先にあつたのがいけない。

「っ〜!!」

どうやら額を切ったようだ。

痛みは大したことないが顔全体にぬるぬると液体が落ちて来て危うく目に入りそうになった。顔の怪我は大袈裟に血が出るから嫌だというのに。

右手で体を支え、左手を花瓶が割れたであろう場所に動かすと激痛と共にわさわさとなにか軽くて柔らかい、葉のようなものが手に張り付く。

その中を掻き分け、ようやくとコツンとぶつかったそれを素早くポケットへと仕舞い込んだ。

「電気点けろって! 飯が食いづれーじゃねーか!」

「つみ、みんなー、どこにいるのー? て、停電って…… 厨房だけじゃないのー?」

「…… あれ?」

終里さんの暢気な声と、混乱したような震える声音の花村クン。その後七海さんのくぐもった疑問の聲が聞こえた。

「これはっ…… おいつ、待て!」

よかった、十神クンの声だ……
そうして緊張が解かれる。

心底安心して私は這うように移動して倒れたテーブルの影へと移動することにした。

正直暗すぎてなにがなんだか分からないが、ぶつかったテーブルの位置くらいは流石に分かるのだ。

「……ブレーカーが落ちてしまったのででしょうか？」

ドロドロと顔を流れる粘性のある液体が鬱陶しいが、そのうち血も止まるだろう。

しかし問題は恐らく貫通しているであろう左手だ。これは予定外だ。いや、これまでが幸運に運んでいたからその分の不運だろうか？ それにしては少し小さい気もするが。

「ちよ、ちよっと待ってろ！ オレが壁伝いになんとかしてくっから」
左右田クンが移動する音が聞こえる。

壁に寄りかかり、私はじっと部屋が明るくなるのを待つ。

血が滴る音を聞きながら気が狂ってしまうのではないかと思うほど待った。

人間というものは「これはお前の血だ」と言われて水滴を延々と暗闇の中で流され続けると貧血になって死んでしまうらしい。

良い薬だと信じ込ませて、実際に良い結果が現れた時はプラーボ効果。前者と、今の私のような状態をノーシーボ効果と言うらしい。

ようはこの滴る血だと思っっている音が、実は果汁100%ジュースが垂れる音だったとしても今の私には効果覿面というわけだ。

—— え……………る……………？

耳鳴りがする。気持ち悪い…… 幻聴のようなものまで聞こえて来る始末。

闘えるだろうか、私に…… あ、なんだか無理な気がしてきた。
暫くして、周りが真っ白になるような感覚がして目を瞑る。

誰かが…… 多分瀧田さんが「バルス！」なんて叫んでいたが、まあ気持ちは分からないでもない。

瞑ったまま目が慣れるまで待つて、そつと目を開く。目の前には案の定倒れた丸テーブルがあった。

「あ……！」

「あ、あれはっ！」

幾人かの驚きの声があがり、私もつられて首を動かし、テーブルの向こうを覗く。

そこには衝撃の光景に食い入るように、一つ所に視線を集中させる皆の姿があった。

しかしどうやら、倒れたテーブルの影に隠れる私には気づいていないようだ。

「ご、ごめんなさい！… また転んでしまいましたあ！」

皆の視線の先には大胆に仰向けに倒れ、大っぴらに開いた足を閉じることできないほど哀れな姿になった罪木さんがいた。

包帯を巻いた右足にはソーセージが絡まり、男子が決して見えないスカートの中には一つ、奇跡的に皿が乗っている。太腿にはじつとりとした汗の他にお冷用の水ボトルが倒れて濡れてしまっていた。

その手は足に絡みついたソーセージと同じものが手を絡め、頭上で拘束されているような状態になっていて、この場に花村くんがいればきつと顔を上気させてルパンダイブとびこんでしていく光景だろう。

「だ、だから…… どうやって転べばそんな風になるんだって！」
「むっ!？」

日向くんがその状態を一瞬視界に入れたと思つたら素早く首を回して目を逸らした。田中くんも片足を下げ、体を逸らし、右手を大袈裟に顎付近にやって驚いたポーズをしている。顔はしっかりと赤い。「わっほーい！エッチなポーズだよー！ うひよひよひよ、こいつはたまんねっすなー！ 真昼ちゃん！ 今度こそシャッターチャンスだよー！」

「ひっ、ひいやあああ…… ら、らめれすう！ 見ないでくらはーい！」

「だ、ダメって言ったでしょー！」

澤田さんと小泉さんのやりとりは以前レストランで罪木さんが転んだときとそっくりだ。

「……これは、いわゆるサービスシーン……だね？」

「ひうつ……許してよう……！ もう許してえっ……くらさあ
いいいー！」

七海さんは興奮したように胸の前で両手を握りしめている。

「み、みなさん……そろそろ助けてあげましょうよ」

そして、ソニアさんの一言でやっと皆は話すのをやめ、彼女の救出作業を開始した。

「うゆう……ひつく……う、うううううう…… 毎度お騒が
せして、ごめんなさいー！」

「うん、気を付けようね…… 今度からさ」

座り込んで泣いている罪木さんに若干呆れ気味の小泉さんが言う。
直らないだろうかと予想していそうだが、しかしその顔は優し気で年
上のお姉さんのような雰囲気醸し出している。

「はい…… あっ、ええと……」

「ほら、立って」

「ありがとうございますう……」

罪木さんはそつと差し伸べられている手を困惑気味に見つめてい
たが、手を取るのを遠慮していることが分かった小泉さんが強引に掴
み立ち上がらせる。そして握られた手を頬を染めて見つめる罪木さ
んに向かって笑顔で言った。

「ま、ドジっちゃうのは仕方ないもんね。そんな困らなくてもアタシ
は怒らないわよ。それより蜜柑ちゃんの笑顔の写真、あんまり撮れて
ないから笑ってほしい……かな？」

「……っ、本当に、本当にありがとうございますう！」

その場にピロリン、と軽快な音が鳴った。こんなときだが、友情と
は素晴らしいものだ。

笑い泣きをしてしまっている罪木さんが小泉さんに頭を撫でられ、
微笑ましい光景が広がっている。

「おっ、良かった！ こつちも明るくなってるじゃん！」

「おやおや？ 左右田くんがブレーカーをあげてくれたのかな？」

そんなことが起こっているうちに左右田くんが大広間のドアから帰還した。それに反応した七海さんが疑問を呟くが、それを左右田くんが否定する。

「いや、それが…… ブレーカーがある事務室には辿り着けなくてよオ……」

「え？ じゃあどうして電気が点いたの？」

「さあ……」

『さあ』じゃないわよ！ この役立たず！

役立たずは言い過ぎじゃ……？

「っだー！ じよーがねーだろツ！ あんな暗い中を事務室まで辿り着けっかよ！ 目は全然慣れねーしよ！」

「あらら？」

「ん、どうしたんだ？」

ソニアさんがやつと違和感に気が付いてくれたようだ。

そろそろ貧血でいろいろとやばい。罪木さんに手当してほしいところだ。

「いえ、十神さんと粕枝さんと…… あと辺古山さんの姿が見当たらないのですが…… どちらに行かれたのでしょうか？」

「えっ！」

「いや、ペコちゃんはパーティーの最初の方からいなかったから……」

「そうっすね！ 一緒に食べようと思ったときにはもういなかったっす！」

困惑気味のソニアさんに日向くんが反応し、辺古山さんの方は停電中にいなくなっただけではないと小泉さんと湊田さんが証明した。

「しかしあの暗闇の中だ。闇に親しんだ住人でなければ移動することもままならないだろう」

いくら十神くんや私でも目が慣れることのない暗闇ではろくに動けない。そう田中くんは言いたいようだ。

そして、全員が困惑の表情で互いの顔色を窺っているとき大広間の扉が開かれた。

「ちよつとソニアおねえ！ もう交代の時間だよ！ 10分も過ぎてるじゃん！ 王女様だからって時間にルーズなのは…… つてなにこれ!？」

痺れを切らした西園寺さんがソニアさんを呼びに来たようだが、大広間の惨状に目を見開いて驚いている。今更だが、辺りはテーブルが倒れていたり料理が床に散乱していたりと散々な状態になっているのだ。そりゃあ驚くだろう。

「あ、ごめんなさいです！ 先程停電があつたので……」

「停電？ なにそれ。停電くらいでこんな状態になるの?」

「ああ…… なあ西園寺。十神か狛枝知らないか？ 停電の最中にいなくなつてどこにいるか分からないんだ」

「えー？ こつちはモノミで遊びながら見張りしてたけど誰も来なかつたよー?」

「そうか……」

日向クンが険しい顔をして辺りを見回す。そして「酷い惨状だなテーブルも倒れ……」と言いながらこちらにやつてきた。ああ、やつと見つけてもらえるのか、なんだか長かつたなあ。

「こ、狛枝!?! お、おい大丈夫か!?! おい、狛枝!…… よかつた、生きてるな。おい罪木！ ちよつとこつち来てくれ!」

日向クンがテーブルの影で、壁にもたれかかっていた私を発見する。

目を瞑って血が目に入らないようにしていたので、どうやら一瞬死んでいるのではないかと心配されたようだ。

「お皿で額を切っちゃったみたい…… 血は大袈裟だけどあんまり大したことはないよ……」

「なんで声あげなかったんだよ！ …… 見つけるの遅くなってごめんな」

「えーと…… うん、ありがとう」

「ひやああああ！ 狛枝さあん！ ううう、大袈裟なんかじゃないですよ、目の上を切ってるじゃないですかあ！ 今応急処置をしますからじっとしててくださいあい！」

周りには私の大袈裟な流血を見てかなり騒いでいるようだ。罪木さんも取り乱しつっ的確に応急処置をしてくれているので時期に血も止まるだろう。もう固まりかけていたようだしすぐに動けるようになるだろう。

「おい、無事か」

「み、みんな大丈夫だった!? つて、うわああああ!?」

大広間に十神クンと花村クンが連れ立ってやって来た。

花村クンは私の血塗れの状態を見てすぐに叫び声をあげたが、十神クンは眉を顰めて「無事ではないようだが、生きてはいるようだな」と呟く。

「どこに行ってたんだよ、十神」

「事務室だ」

「じゃあブレーカーを戻したのは十神なの？」

「ああ……」

そう言った小泉さんから目線を逸らしつつ十神クンは私へと目を向ける。

「…… その大量の羽毛はどこから出て来たんだ？」

十神クンが不思議そうな顔で花瓶が割れている場所を見た。

そこには横倒しになったテーブルの近くに、花瓶の破片と辺りに散らばった大量の羽毛が落ちているのだ。

「ああ、これ？ 造花を支えるのに入れてたんだよね。ははは、こう見るとなんだかロマンチックだね」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ!？」

日向クンが応急処置を受けている私を見ながらそう言った。血を見て結構取り乱しているらしい。

「そんなことって…… どうして?」

「あああ、あの! ちょっといいでしょうかあ?」

そう言っただ日向クンと話していると罪木さんが私の左手を取ったまま声をあげた。

「どうした?」

「あ、あのあの…… 粕枝さん…… お皿とか、陶器の破片ではありえない怪我をしているのですけど……」

「…… え?」

「なにそれ…… それってつまり……」

日向クンと小泉さんが顔色を悪くしていく。

そして全員がその事実に関心がつき始めたとき、終里さんが食事の手を止めてふらふらと奥のテーブルへと向かって行った。

「…… ん? んー?」

「終里さん、どうかなさったのですか?」

ふらふらと移動する終里さんにソニアさんがついて行き、そう尋ねると彼女は「いや、なんか臭わねえか?」と言いながらさらにテーブルの周りをぐるぐると回り始めた。

「くすくす…… ゲロブタくっさいってさー!」

「わ、私ですかあ!?!」

「いや、そうじゃなくて…… あー? なんだ、これ? 路地裏のラクガキみたいなのがすんぞ……」

「路地裏のラクガキ? スプレーみたいな匂いってこと…… ? ア

タシには…… 分かんないけど」

「シンナー臭いつてか? 嗅ぎなれてるオレでも…… っだー! 分かんねえよ! 料理の匂いしかしないっつーの!」

「お、ここのか」

鼻をひくつかせながらテーブルの周りを移動していた終里さんはついにその場所をつきとめ、テーブルクロスを思い切り引き上げた。

「っな!?!」

「な、なんですかこれ!」

「ど、どうなってるんですかあ!?!」

「ちよ、ちよつと…… みんな無事よね？ ペコちゃん、ペコちゃんを見つけないきや！」

テーブルの下には大量の赤い液体が飛び散っていた。ずれた絨毯の切れ端やテーブルクロスにべったりと赤い液体が付着し、細かいビニールのようなものが辺りに散らばっている。

その光景をみただけでは誰かがここで刺されたのではないかと思うほどの赤い液体。そして、テーブルの裏に怪しく光るナイフが張り付けてあったことで全員が恐ろしい事実を認識した。

「うそ…… これって……」

「な、ナイフ!？」

「それにさつき蜜柑ちゃんが、皿の破片でも陶器の破片でもない傷がって言ってたつすね……」

小泉さん、花村くん、澤田さんが驚きながらそのナイフを凝視している。

「これは…… この場にいる者を魔神へと捧ぐ供物にしようと企んだ輩がいるらしいな」

「っおい、それって……」

日向くんが息をのみ、十神くんの方へ視線を動かす。

そしてその視線を受け取った十神くんが軽く頷くと、決定的な一言を零した。

「俺達の中の誰かが、殺人を企んでいた…… ということだろう」

「はあああああ!？」

「きやはははっ！ ホントーにそんなことする奴がいたんだー！ 恥知らずだねー？ 今すぐ名乗りでもあげて早く恥の上塗りしちやえばいいのにー！」

「こういうときに西園寺さんの煽りはとても有用である。」

ああまで言われたら犯人はよく思わないだろう。窘めるという意味でも今の言葉に反応した人物はそう多くはない。それをよく見ている十神くんと日向くんは険しい顔で頷きあった。

「これから……」

「きやあああ！ 耳を引つ張らないでくだちやああい！ もげちやい

「まちゆうとうー！」

「やあー、真打ち登場だよー！」

十神クンの言葉を邪魔したのはモノクマと、モノクマに耳を掴まれ引きずられているモノミだった。

「なにか用か？」

「うぷぷ、面白いことが起こってるじゃありませんか！ これは乗るつきやないね！ 誘いに乗るつきやないね！ ボク誘い受けも嫌いじゃないよ？ だから……」

そう言つてどこからか「放送マイクー！」と言いながらマイクを取り出して口元に近づける。

モノクマは自分で「ピンポンパーンパーン！」と口にする
と島の全てに行き渡るように生中継の放送を開始した。いつの間にか自分をカメラで映してリポーターのような恰好にまでなっている。
用意がいいもんだ。

『現場旧館のモノクマです！ えー、殺人未遂が発生しました！ 一定の捜査時間のあと、学級闘論どうろんを行いたいと思います！ あ、言い間違いないよ？ 闘論ね？ 闘論！ 不参加者はボクの夕飯になっちゃうから気を付けてね！』

テンション高めに言い切ったモノクマはいい汗かいたと言わんばかりにタオルで額を拭っている。

「さ、殺人未遂いいいい！」

「捜査つて、なんでしよう……？」

「あ、それね…… えへん！ オマエラには ” 殺人未遂をしたのは誰か ” を議論…… じゃなくて、闘論してもらいます！ そして殺人未遂をしたクロを当てることができたらこのまま修学旅行を続行！ 未遂だからね、ちよつと怖い目に遭ってもらうよ。さらに今回のクロは不信感を持たれたうえ、犯罪者の烙印を押されたまま苦しむことになるよね！ もし当てることができなかつたら…… 殺人が成立したとして粕枝さんには死んでもらうことになるよ！」

「…… えっ？」

「今なんて？」

「私が……死ぬって…… どういう……」

「おい、モノクマ。クロの罪を暴けなかった場合は他全員の処刑ではなかったのか？」

「あ、それ訊いちやう？ 察しの良いガキは嫌いだよ！」

モノクマが十神クンの前で体を器用にクネらせながらしなをつくる。

「……」

しかし無言の圧力に負けたモノクマがとんでもないことを言い始めたのだ。

「言わなきゃだめ？ もー、しょうがないなあ…… そりゃあ、バレずに殺すことが条件なんだから修学旅行は続行だよ？ うぶぶ……」

バレてなくても肝心の “ 殺し ” が中途半端じゃあダメダメだよ！ 犯人は罪悪感と圧倒的絶望感に苛まれることになるよね！」

「ちよ、ちよ、ちよっと待ってくださちゃい！ それは酷すぎまちゅよ！」

「そ、それって犯人に1つも得なんてないじゃないか!？」

「な、なんだその理不尽さはよオ！」

3人の言葉に首をほぼ真後ろにグルンと動かしたモノクマが「得ってなあに？」と言う。

もはやホラーの域に片足突っ込んでいるモノクマに、花村クンと左右田クンは怯えつつもいくらなんでもそれはないだろうと訴えた。

モノミは「きやあ！」と言って役に立っていない。モノミエ……

「殺せなかったほうが悪いじゃん！ そもそも、上手く行っても自分が生きるか死ぬかの問題になるんだよ？ そのリスクと殺人を犯したリスクで釣り合うんだから、未遂じゃあ成立するはずもないでしょ！ 全ては吊り合いが取れなくちゃね！」

こちらをチラリと見るモノクマと視線が合った。吊り合いと言うのは、幸運と不運のことを揶揄しているのだろうか。まったく、煽るのもやめてほしいな。

本当…… 最悪だ。

「…… つまり、死にたくないなら犯人を暴けばいいってことだよね？」

「そういうことだね！」

「にやにやと忌々しい。」

つまり、わたしの火付けと今後の動機としてモノクマは動いているわけだ。動機になっていいるかどうかはともかく、わたしの性格をよく分かっているようだ。

ああ、やってやろうじゃないか。乗ってあげるよ、その勝負。生きるか死ぬか…… 遊びのつもりだったけれどもう後戻りはできない。

「へえ……」

「おい、粕枝…… 大丈夫か？」

「うん、大丈夫。ふらふらするのも治って来たし、少し動くくらいならできるよ。あ、でも討論するならこの場で、がいいな。ダメかな？」

モノクマ

「…… ま、いいよ！ 裁判場のお披露目もしたかったけどこれは闘論だからね！」

なんだか楽しそうにしているモノクマを踏みつけてやりたいが、嬉々として槍が降ってきそうなのでやめておく。心配そうに声をかけて来る皆を一瞥して立ち上がり、モノクマを睨みつけた。

「わたしは死なない…… 絶対にね」

「おい粕枝…… 本当に大丈夫か？」

「うん……」

コートのポケットに入れたそれをそつと触る。

大丈夫、私は闘える。大丈夫……

「じゃ、これを渡しておくよ！ ザ・モノクマファイル！ 怪我のことかか状況とか書いてあるから、あとはよろしく！」

「あ、あわわわ！ ええと…… へ…… ? あ、そいでちゅね、ミナサンが生きていて本当に良かったでちゅ…… 本当に……」

「おい、なにを独りで言っている」

罪木さんにタブレットのようなものを押し付けて勝手に帰ってしまったモノクマに、置いて行かれてしまったモノミが独り言を呟きな

がら背中を向けた。

「大丈夫でちゅ…… あちしはもう負けまちえん…… 必ずこのまま、このメンバーのままで朝を迎えられるようにしてみせまちゅ！」

「おい、モノミ……？」

独り言を話し続けて、モノクマと同じく勝手に去って行ったモノミに日向クンが疑問気に呟いたが、彼女に届くことはなかったようだ。

「…… 捜査か」

日向クンと十神クンがその場で全員をぐるりと見渡した。

「…… 2人か3人ここに残って現場保存を頼む。罪木は一旦狛枝を診ていてやれ。それから…… 小泉。お前は写真を撮っていただろう…… 停電前の位置関係を割り出しておけ。それから停電中のできごとをできるだけ詳しく思い出して誰か書きだしておけ。日向と七海は俺と旧館内の調査だが…… 先に停電中なにをしていたのかを聴いて回るぞ。これでいいな？」

テキパキとやることを組み上げていく十神クンを見ながらわたしは少しだけと思い、目を瞑った。

「す、すまん！ ワシはちよつくら…… ふぐううう!? ス
マアアアアン!!」

予定とは少しズレてしまったがまあいいだろう。

この程度の不運では、わたしは殺されない。

盛大に暴れて、殺しを企んだ者を白日の下に晒してやる。

「わたしは死なない……」

暗い目をした私を、心配そうな目で見る日向クンにあえて気づかないフリをした。

「……来てくれたんでちゆね、これでやつとあちしも……！」

——それぞれの決意を背景に、捜査が始まった。

No. 15 『奈落』―捜査―

ルールその13

生徒内で殺人未遂が発生した場合は、その一定時間後に、全員参加の義務付けられる『学級闘論』が行われます

ルールその14

学級闘論で正しいクロを指摘された場合は、そのまま『修学旅行が続行』されます

ルールその15

学級闘論で正しいクロを指摘できなかった場合は、『殺人の成立』および『校則違反』として被害者が処刑されます

ルールその16

クロを指摘できても、できなくとも、どちらの場合も残りの生徒は修学旅行を続行します

注意

なお、修学旅行のルールは、学園長の都合により順次増えていく場合があります。

なんとというか、無茶苦茶にも程があるだろう。

なぜ被害者が校則違反扱いになるのかさっぱりだ。しかし、学級裁判のルールでもクロを当てることができなかつた他全員が、校則違反 “ 扱いで処刑と書かれていたし、 ” 先生は生徒に干渉しない。ただし校則違反があつた場合は別 “ というルールに則つたもののなのだろう。

新しいルールを電子生徒手帳で確認し、全員に分かるように日向クンが読み上げた。それぞれに反応があつたものの、次に声を発した十神クンにより騒めきは収まりを見せる。

被害者は狛枝凪。

現場はホテル・ミライ旧館の大広間。

事件発生時刻は午前1時30分頃。

怪我の箇所は左手と額。額は皿の破片によるものだが左手は完全に貫通しており、人為的によるものと予想される。

それ以外には外傷もなく、気分の悪さなどもないことから毒物摂取の可能性は否定できる。

自力で壁に寄りかかり、停電が終わるのを待つ気力はあつたようだ。

《コトダマ モノクマファイル1》

「…… 以上だな」

読み上げた内容を頭の中で復唱する。確かに嘘は書かれていないが、どんな凶器による犯行かは一切書かれていない。そこは “ 超高校級の保健委員 ” である罪木さんがいるからいいものの、やはり自力で謎解きをさせるつもりのようなのだ。

これは、迂闊に犯人の心当たりを口に出してはいけない気がするな。謎解きをさせて楽しもうとしているモノクマに、さっさと終わらせるような真似をするのは危険行為だ。あとで訊いてみるしかないか。

「ひとまず、これから俺と日向で情報を纏める。七海は…… 後で旧館の外を調べてもらう。おい、狛枝。怪我は平気なのか？」

「うん。応急処置はしてもらったし…… でも左手は動かせないよ？」

気遣いのできる男、十神白夜。ただ、捜査協力を求める目をしているので単純に心配してくれたわけではない。そこは少し悲しいかもしれない。日向クンが優しい目で心配してくれるから尚更だ。

「お前は確か手帳を持っていたな。証言を纏める手伝いを頼みたかったんだが……」

「私が？」

意外だと言わんばかりに大げさに声をあげると、日向クンは言いにくそうに頬を掻いた。

「ああ、狛枝は今までも情報を纏めてくれてたし、そう言うのは得意かと思っただけど……」

「ああ、あの、狛枝さんは右利きですから字を書くこと自体はできます……ですけど字を書くのには左手で手帳を押さえていなければなりませんから…… 安静にしていただかなければならないので、それは……」

保健委員としての言葉を言う罪木さんは吃りながらもその口調は強い。そこは決して曲げることなどできないのだろう。医者としては本当に頼りになる子だ。これで病人を見下したり、病んでいなければ完璧なのだが、世の中完璧なものがあつてしまつたら不公平だからね。

有名なブラックジョークのように、豊か過ぎるものには大きな弊害がつけられるものなのだ。

「そうだよな……」

「あああ！ 生意気に意見してごめんさあい！」

「いや、そんなに謝らなくても……」

全て言い切ってから慌てたように謝り倒す彼女に日向クンが慌て始める。しどろもどろに「俺は専門家じゃないんだから、罪木の判断に従うのは当たり前だろ！」と優しく宥めている横で、私は貫かれて感覚のない左手を見つめてから、懐からそつとユビキタス手帳を取り出した。

「うーん、そうだな…… じゃあ罪木さんに代筆をお願いしてもいいかな？ 彼らについて回ってメモするなら罪木さんと一緒にいたほうが怪我の様子を見るのにもいいと思うし、助かるんだけど……」

「ええ!? わわわっ、私でよければよろしくお願いします！ あっ、きやあああ！」

うん、お辞儀した拍子にテーブルへ頭をぶつけるのはお約束なのだろうか。

「これならいいでしょ？ 要点は私が言うから、罪木さんはそれを書き込んでね」

「はいー」

手帳とペンを渡して立ち上がる。相変わらず服は血だらけのままだったが、着替える余裕もないのでそのまま参加することにした。手

の傷だけは罪木さんが包帯で覆ってくれたので気にならない。

「じゃあ、まずは聞き込みからだな」

「ああ」

暫くどうするか2人で話し合っていた彼らが動き出す。

それと同時に、辺古山さんと九頭龍クンを除いた全員が集まった大広間を見渡した。

しかしその前に、ずっと気になっていたことを私から十神クンに質問した。

「その前にさ、そのゴoogleみたいなのはなに？ さつきから気になってたんだけど……」

そう言うのと2人は互いに視線を交わし合い、日向クンが答えた。

「暗視スコープじゃないか？ スーパーにあるのを見たことあるぞ。十神は今までも慎重だったし、大方防犯用に持ってたんだろ」

十神クンは頷いて「俺が保管していた方のジュラルミンケースには防犯グッズを入れておいたんだよ」と答えた。

なぜ日向クンが先に答えたのだろうか？ そんな疑問はあるが罪木さんに記録してもらおう。

《コトダマ 暗視スコープ》

《コトダマ ジュラルミンケース》

「これでいいか？」

「うん、疑問は解消したし大丈夫」

最初に声をかけたのは捜査協力することになっている七海さんだ。

「七海、停電中なにをしていたか覚えてるか？ それをできるだけ詳細に教えてほしい」

声をかけるのは日向クンだ。十神クンも「とりあえず関係のなさそうな情報でもなんでもいいぞ。そんななんでもない情報でも、ないよりはマシだからな」と言っている。

「うーん…… 私は停電してからずっと、じっとして明るくなるのを待っていたからよく分からないんだ…… あ、でもなんだか皆の声に違和感を感じたんだよね。それがなんだかは、ちよつと分からないんだけど…… 役に立たなくてごめんね？」

申し訳なさそうに言った彼女の言葉を思い出しながら私は考える。停電直前に彼女がしていたことといつたら？　なんだっただろうか。怪我の衝撃で忘れてしまったっているが、少なくとも私は違和感なんて感じなかったし、日向クンも「違和感？　なんだろうな……」と分らないようだ。

罪木さんに訊いても「ごめんなさい、分からないですう……　役立たずでごめんなさい！」という返事だけ。

「ねえ、七海さん。停電直前ってなにしていたか分かる？」

「……　えっと、停電の前は……　あ、そうだ。田中くん、イヤリングがないって言ってたよね？　床下に落としたりしたんじゃないかって2人で下を覗き込んでたんだ……　粕枝さんたちは感じなくて私だけ違和感を感じてたってことは、それが関係するのかもしれないね。だから……　田中くんにも訊いてみたらどうかな？」

「そうだね。あとで訊くときに一緒に質問するよ」

《コトダマ　七海の証言》

「じゃあ、私は旧館周辺を調べてみればいいんだよね？」

「ああ……よろしく頼む」

そう言って、七海さんと別れた。

次に声をかけたのはお腹が空いて不満そうな終里さんだ。

「なあ終里、さっき言ってた臭いのことなんだけど……」

落ちた料理を見て唸っている彼女に日向クンが話しかける。すると「臭い」という言葉の条件反射か、鼻をひくひくと獣のように動かしながら終里さんが答えた。

「路地裏のラクガキみたいな臭いのことか？　オレがそう思っただけだからあんまりアテにすんじゃないよ。それより、無事な料理はないのか？　オレ、満腹になるまで諦められねーよお」

「ふん、無事な料理は残念ながらない。特別にこれを分けてやるからちゃんと話すんだな」

そう言って十神クンが取り出したのは菓子パン袋だ。自分の好物でもあるはずなのになかなか太っ腹だ。物理的な意味でも精神的な意味でも。

「おおお！　そ、それくれよ！　は、はやくはやく！　オレ我慢なんてできねえって！」

「それはやる……　が話が終わってからだ。真面目に答えろ」

終里さんが犬のように舌なめずりをしながら手を伸ばしたが、ひよいと高く掲げられたそれに届くことはない。むちむちの手を高く上げて牽制している十神くんは一息ついてからその態勢のまま終里さんを睨む。

「って言ってもなあ……　血の臭いも確かにするけど大部分がその路地裏のラクガキみたいな臭いつてことぐらいだぞ。狛枝からは血の臭いしかしねーけどな」

「ええと、じゃあ停電中はなにをしてたんだ？」

日向くんが質問を続ける。ここまでですらすらと終里さんが答えているのはきつと、十神くんが問答をスムーズに進めるために色々しているからだろう。

「ずっとメシ食ってたぞ。途中で誰かがぶつかってきてメシも全部床に落ちちまったみたいだ。くんくん嗅いで分かったことといえぼそこから中落ちた料理だらけだったことぐらいじゃないか？　オレにはそんなくらいしか分からねーって」

「ふむ、終里から訊けるのはこれくらいか……」

「そ、それで約束の……！」

「ああ、やるよ」

「ううおっしやああああー！」

また一つ彼女のボタンがお亡くなりになった。南無。

《コトダマ　終里の証言》

「ああ、そうだ罪木。お前の話も訊いておきたい」

「わ、私ですかあ？」

停電前の位置取りを紙に書いている小泉さんの元へ向かおうとしたとき、ふと気がついたかのように十神くんが言った。

「そうだ。狛枝の怪我の詳細と、停電中なにが起こったかを詳細に頼む」

「ええと……　狛枝さんの怪我は　”直径5mm程度の細く鋭利なもの

によって思い切り刺し貫かれたことによる出血」が大部分です。完全に貫通していて、暫く感覚はないと思います。腕を動かすことはできるでしょうけど、絶対安静ですね。停電中は……その、慌てて誰かにぶつかってしまって……びっくりして飛びのいたときになにかを踏んづけて、滑って転んでしまったんです……その後は踏ん張ったりもがいたりしているうちにあんなことに……ひうう、恥ずかしいですう……」

忘れてほしそうにしているのでここは転んでしまったことだけをメモしておくことにしよう。彼女に書いてもらっているので余計なことは省き、怪我の具合と起こった出来事だけだ。

《コトダマ 罪木の証言》

《コトダマ 罪木の証言2》

「あとは粕枝、お前もだ」

十神くんが鋭い目でこちらを射抜き、そう言った。

「それを言うなら日向くんは……？」

「俺はああいうことに慣れてなくって、その場からずつと動けなかったよ」

「日向が動かなかったのは分かっている。問題は被害者のお前だ」

まあ、そう来るとは思ってたよ。被害者の言葉が一番重要だからね「ええと、あの真つ暗闇だったでしょ？ だから壁かなにかを伝って移動してみようと思って……そしたらなにかにつまずいちゃってさ。傷つけられたのは多分そのときだね。手をついたときに物凄く痛くなって……ついでに誰かがぶつかってきてテーブルと一緒に倒れて……あのざまだよ」

一部だけ嘘が混じっているが、かね本当のことである。

「そうか……床に落ちてた破片に手をついたわけじゃないよな？」

「それはない……っていうのは罪木さんがよく分かっているよ」

「はい、直径5mm程度の細くて鋭い凶器……ですので破片はありえませえん！」

「アイスピックとか、千枚通しレベルの細さってことだもんね」

彼女の言葉に補足を付け加えて、「それだけだな？」と確認して

くる十神クンへ頷く。

「ふん、次は小泉だな…… そろそろ位置取りも把握できているだろう」

そう言っただストドスと音を立てながら、十神クンは小泉さん、澤田さんペアの元へ向かって行った。

「捜査なんてなにをすればよく分からないから、言われた通りにしたけど…… これでもいいのかな。写真を見比べたり記憶を頼りに書いてみたのよ…… 役に立つかは、分からないんだけどさ」

「いや、十分だよ小泉」

「そう？ ならよかったわ」

自信なさげな小泉さんに紙を受け取りながら朗らかに言う日向クン。十神クンもふん、と鼻を鳴らしてすぐさま紙を受け取って見ている。問題があれば言うだろうし、大丈夫ということだろう。

《コトダマ 停電前の位置取り》

「唯吹もね、纏めてみたんすよ！ さつき白夜ちゃんが言ってたように思い出しながら一生懸命書いたっす！ きやはー！ 唯吹ったら容姿育ち性格もいい上に耳もいいっすからねー！」

「容姿育ち性格はともかく耳だけはいいんだねー？ くすくす、モノミと同類だつてさー！」

澤田さんが自画自賛しつつ纏めた紙を十神クンに提出する。

鼻高々でえっへんと声をあげる姿は可愛らしいが、すぐさまそばにいた西園寺さんがからかいはじめた。

「うひゃあ！ 正論のナイフで滅多刺しっすね！ いいじゃないっすかあ、モノミちゃんも可愛い、ウサギも可愛い、唯吹も可愛い。それでいいじゃないっすかー！」

「和の生き物って言ったら錦鯉とか金魚でしょ！ あの可愛い柄の小物はいいけど、ウサギって毛皮しか脳がないじゃーん！」

「異議あり！ ウサギも和の生き物っすよ！ 鳥獣戯画にもいるっす！ たはー！ 〃 異議あり！ 〃 だって！ 唯吹らしからぬ賢

いフレーズっすよねー！」

「…… 耳が痛い」

呆れたようにそう言いながら十神くんはその場を去ろうとする。

「あれ、停電中のことは訊かなくていいの？」

「西園寺は先程なにもなかったと言っているし、濹田の話はこの紙があれば十分だ。行くぞ」

ぎゃあぎゃあと言いつ争う両者に小泉おかあさんさんのかみなりが落ちるまであと5秒……。

「あんたたちっ、こんなときに喧嘩するんじゃないわよ！」

「うつきやあああ！」

「びえーん！ 小泉おねえが怒ったあああ！」

2人の悲鳴を背景に次に向かった。

《コトダマ 濹田の証言》

「お、おいあれ放置していいのかよオ」

「あれ、私がいるのに逃げないんだ？」

「今回はお前が被害者だからな。さすがに自殺するようなヤツじゃねーってのは分かる」

左右田くんは苦々しげにそう答えた。

実は近づいたときに一歩足が引かれたところを目撃してしまっているのだから……。そこは言わないでおいてあげよう。

どうやら勇気を出して聞き込みに協力してくれるようだし。

「なあ左右田、停電中なにをしていたか教えてくれるか？」

日向くんがさっそく質問をしていく。すると、「聞こえていたとは思うけどよオ……。」と目を泳がせながら彼は扉を指差しながら言う。

「オレは事務室まで壁を伝ってブレーカー上げに行こうとしてたんだ」

「あ、あれ？ でもブレーカーを上げたのは…… 十神さん…… ですよねぇ？」

「そうなんだよなア。結局、目も暗闇になれねーし、色々落ちてるし、皿の破片踏んで転びそうになるし、四苦八苦しているうちに明るくなっちまったんだよ。幸い、大広間から廊下に出ることはできてみたいだけだな。ただそれだけってだけでよ、大広間の丁度前のところ

で明るくなつたんだ。そのあとはすぐ大広間に戻った。ま、オレには外に出るだけで精一杯だったってわけだ」

悔しそうにそう言った彼の視線は私の左手に向かっていている。

ああ、なんだかんだ言っているにしても左右田クンって真面目で優しいんだよなあ。大方、もつと早くブレーカーを上げていれば私が怪我をすることはなかった。または犯人の姿も暴けた。そんなことを思っているのだろうか。死神だと思っっている私を疑っているわけでもないし、本当にいい人だよな。

「つーわけで、あんまり役に立たなくて悪イな」

「ううん、なんとかしようとしてくれただけで十分だよ。ありがとう」
「おー……」

笑顔で礼を述べて十神クンと日向クンに次を促す。

左右田クンは意外そうに目を見開いて私を凝視していたが、ふつと息を吐いて素っ気ない返事をした。

背中を向けたところと、自身の懐からピロリンと音が響いて笑みが溢れる。

「なんだかこういうのも…… 悪くないな。大事に生徒手帳を撫でてそう思った。」

「よかったな、 狛枝」

「…… うん」

日向クンは私が彼に嫌われていることを知っている。だからこそ、そうやって声をかけられたことも、笑顔を向けられたことも嬉しくて笑う。

《コトダマ 左右田の証言》

「次は花村クンだね」

「ああ」

真剣な顔で十神クンが頷いた。

「え、停電中なにをしたかった…… 最初は厨房だけ停電しちゃったのかと思って慌てて飛び出したよ。それで大広間に行ったんだ。大広間でも停電してるみたいだったから事務室に行こうと思ってさ、廊下に出たところで丁度明るくなって、その後は鉢合わせた十神くん

と大広間に戻ったよ」

「……」

「ど、どうしたの?」

「ああ、いや、厨房のコンロなんかは使えなかったのか?」

十神クンが黙り込んでしまったが、日向クンがなにかを察したように慌てて話を続ける。そしてその質問を待っていたとばかりに花村クンは嬉々として答えた。

「厨房のコンロは全部電気で制御するタイプだったからね、全滅してたしなんにも見えないからかえって危ないと思って使わなかったよ。チャツカマンも同じ理由だね」

そう言う彼は、一切私とは目線を合わさずに質問に答えていった。

《コトダマ 花村の証言》

「ソニアさんは停電中なにしてた?」

「そうですね…… わたくしは停電というのも初めてで、どうすれば良いのか分からなかったのですが、ひとまず動いてはいけないと思ってその場でじっとしていました。留学してくる前に日本は地震大国だからと事前知識を詰め込んでおりましたが、停電は予想外でしたので…… お役に立てずすみませんです」

「いや、停電なんて滅多に起こらないからそう落ち込む必要はないぞ」
ソニアさんも動かず、じっとしていたのか。

これでじっとしていたのはソニアさんと七海さん。小泉さんも動き回って皿をひっくり返す人に注意していたし、女性陣はどうやら停電の中冷静に行動していたようだ。

「…… そういえば田中はどこへ行った?」

十神クンがふとそう言っただけで、田中クンの姿は見えなかった。

「そういえば、いないな」

「式大といい、辺古山といい、自分勝手すぎるぞ」

「ま、まあ式大クンは仕方ないんじゃないかな? …… ほら、ずっと我慢してたみたいだし……」

「それもそうか…… なら、見つからない連中は後回しにしてテーブ

ルを調べるとするか」

そう言つて、いよいよナイフの見つかったテーブル周辺に近づいた。

「…… すごい臭いだな。これは…… シンナーか？」

十神クンがしゃがみこみ、テーブルの下を覗くと同時に顔を顰めた。テーブルクロスによつて遮断されていたためか、相当臭いがかもっていたようだ。

テーブル周辺に飛び散っている液体からその刺激臭は漂ってくる。真っ赤なその液体はところどころが黒く変色しているが、それ以外の大部分はより赤を濃くして膜を張ったように固まり始めている。

《コトダマ テーブル周辺の刺激臭》

「気になるのはやっぱりこのナイフだよな」

日向クンがそう言つて張り付けてあるナイフに手を伸ばすと、

「触るなっ！」 と鋭い声をあげた十神クンがその行動を制した。

「な、なんだよ！」

「危険物は俺が没収する。一箇所に集めておいた方が安心できるだろう」

飄々と言つてのけた彼はべったりと緑色の蛍光塗料のついたガムテープを外し、そのナイフをひとまず持っていたタオルハンカチで包んでいく。随分大きく分厚いタオルハンカチを使っているな。自身の大きな手をキッチンと拭くためだろうか。それとも首に垂れ下げて巻くためのものか。それで麦わら帽子でも被っていたら農家の出来上がりだ。

《コトダマ ナイフ》

《コトダマ ガムテープ》

「まあ、保管してくれるならそれでいいけどな」

日向クンは言いながら床に転がった絨毯の切れ端を手にする。

その絨毯の切れ端は大広間全体に敷かれた4枚の絨毯に非常にそっくりで、一辺30cm程度に切り抜かれた正方形になっている。ナイフの設置されていた下に無造作に置かれていて、なんのためにあるのかさっぱり分からない代物である。

「これは、かなりの血痕がついているようだな」

「あ、おい、裏に蛍光塗料がついてるぞ！」

「なんだとっ!？」

絨毯の切れ端を持ち上げて模様のある表を眺めていた十神クンに、ハツとした日向クンが絨毯の切れ端の丁度真ん中を指差した。

その裏には確かに緑色の蛍光塗料が塗られている。

「ええと、裏地の中央に蛍光塗料……それと血痕」

「はい、ちゃんと書いてますよお」

《コトダマ 絨毯の切れ端》

「あとはこのビニールみたいなやつかな」

「ビニール片か…… 随分ボロボロになっているが、これは元は袋だったものかもしれんな」

ナイフの真下から周辺に飛び散るようにビニール片が落ちている。かなりの赤い液体で濡れてしまつて大部分は読めなくなっているが、床で軽く擦つてから見てみるとなにかの文字のようなものがあるのが分かる。

「このロゴつて、ロケットパンチマーケットのじゃない？」

「そうみたいですねぇ…… あそこで無料配布している袋のロゴだと思えます。たくさん包帯を買つたときにお世話になりましたあ」

「そ、そっか……」

《コトダマ ビニール片》

一通りテーブルの下を調べ終え、ふと十神クンがこちらに向くと「おい」と声をかけてきた。

「どうしたの？」

「このナイフやガムテープはロケットパンチマーケットで見かけたことはあるか？」

なるほど、そういうことか。

「ガムテープは確か生活用品の項目にあったはずだよ。……この投げナイフみたいな形状のナイフは料理関係でも危険物関係でも見かけなかったと思う。別のリストには載つてるかもしれないけど……」

そりゃあそうだ。だつてあのナイフは危険物関係のリストに

あるはずがないもの。

「そうか、ならあとでリストも見直してみるよ」

日向クンは素直にそう言ってくれたけれど、意地の悪い十神クンは「本当に、知らないんだな？」と念を押す。

私はそれに「だってあとあるリストは家具とか娯楽品だけだよ？」と、とぼけてみせた。

暫く睨み合いが続き、罪木さんと日向クンが止めてくれるまでずっと互いに火花を散らしていた。まったく、頑固なんだから。

《コトダマ 商品リスト》

「あとはほら、狛枝がぶつかっただってというテーブルとか花瓶とか、念のために調べておかないか？」

必死に話題を捜査に向けようとする日向クンは「時間もないだろう？」と時計を気にしながら私たち2人の間に入る。

午前2時20分。そろそろ眠くなる時間帯か、ハイになってくる時間帯だ。

停車して西園寺さんが交代の時間から10分も過ぎていると文句を言っていたから捜査開始は午前1時50分頃。実に30分も捜査していることになる。モノクマの設定した時間がどのくらいかは分からないが、ともかく、急いだ方がいいのは確かだ。

「そうだね…… 時間もないし、皆好き勝手にしてるみたいだし、外も調べてみないといけないもんね」

そう言って倒れた丸テーブルに近づく。角に血痕がついているから、もしかしたらここに左手でもぶつけたのかもしれない。

《コトダマ 倒れた丸テーブル》

「造花や羽毛も散らばってるし、これは…… なんだ？」

日向クンが花を支えるために入れていた羽毛と、5cm程に短く茎が切られた造花を手にした。どちらも私が近くに倒れていたためか、血に濡れている部分があるようだ。

割れた花瓶は原型を留めてはいるが、口の部分は見事に割れ、手がつっぽり入る首の部分も無残に割れている。きつと口の部分から落ちたのだろう。ただでさえ壁が薄く割れやすいのにこれでは致命的

だ。

5つのうちこれだけが陶器だったことのでかなりの被害を受けている。

《コトダマ 造花》

《コトダマ 散らばった羽毛》

《コトダマ 割れた花瓶》

日向クンが拾ったのは手首程とまではいかないがとても小さく、白いプラスチックの皿のようなものだ。それが割れた花瓶の破片に紛れて落ちているのを発見し、なにか分からずに疑問符を浮かべているようだ。

「それは恐らく水受け皿だろうな」

十神クンがそれを受け取り上から下から眺めて確認している。

「…… これくらいか。よし、次は一旦七海に経過を訊きに行くぞ」

すつくと立ち上がり、十神クンはドスドスと大広間を出て行く。スタスタと軽い足音で出て行く日向クンが後ろについているのでなんだか間抜けだがそれは仕方ないことだろう。

《コトダマ 落下した水受け皿》

途中、事務室のエアコンを確認したがった日向クンに従って事務室に入ったが、タイマーが午前1時30分に設定されていて、ブレーカーの下にデスクから引張ってきたのであろう椅子が置いてあるくらいで特に変化は見受けられなかった。

《コトダマ エアコンのタイマー》

《コトダマ 大きな椅子》

外に出ると、再びモノミがその場において七海さんと丁度話しているところだった。

「…… あ、捜査は終わったの？」

「いや、聞き込みと大広間の調査が終わっただけだ。この後倉庫にも行ってくるからまだ終わらないな」

「外の調査はどうだ？」

七海さんの言葉に日向クンが返し、素っ気なく十神クンが進歩状況を確認する。

すると一歩おいて七海さんが床下の見える金網を指差して言う。

「…… えっと、外から床下に入るのは無理みたい。さつきまで田中クンと床下に入る方法を探してたんだけど…… 外から入ろうとするのは諦めて旧館の中に戻っちゃったよ。会わなかった？」

首を傾げる彼女に可愛いなと感想を抱きつつ、先程の道程を思い出して私が答える。

「いや、会ってないから丁度すれ違っちゃったのかもしれないね」

「そっか…… あ、そうそう。話してないことがあったんだけどね……」

「おい、この捜査には人の生死が関わってるんだぞ」

話しだそうとする七海さんに十神クンがかなり怒った口調で言った。

「分かってる…… それは分かってるよ…… ただ、停電までに随分時間があつたからすっかり忘れてたんだよ……」

申し訳なさそうに、悲しそうに声を出す彼女に日向クンが見かねて「それで、言い忘れたことつて？」と話の続きを促す。

「えっとね、私が見張りをしてるときに九頭龍くんが来たんだ。私が交代制の見張りをしてることを言ったら『なんだ……』って残念そうに呟いてどこかに行っちゃったけどね。…… モノミも見てたよね？」

「はい！ あちしもバッチリ見えました！ あ、でも補足するなら、辺古山さんが見張りをしているときにも九頭龍くんは来てましたよ！

辺古山さんが女子会で渡されたお菓子袋を……」

「ストップモノミ。らーぶらーぶなのは確かだけど、そういうのはあんまり他の人に広めちゃいけない…… ってお父さんが言ってたよ」
「そ、そうでちゆか？ 乙女の秘密ってやつでちゆね！ ならこれ以上は言いまちえん！」

そうか、それなら仕方ないね。小泉さんに渡されたものを見たら、お菓子袋の中にはかりんとうも入っていたみたいだし…… 納得だ。

仲良さげにしている2人の会話を聴きながら罪木さんに書き込むことを伝える。

そして最後に、倉庫へと向かうことになった。

《コトダマ 七海の証言2》

《コトダマ モノミの証言》

あと残った式大クンと田中クンは大広間の中にいるようだったの
で戻ったら証言を訊く必要があるだろう。

倉庫に着くと、そこには終里さんがいた。

「あれ、なんで終里がここにいるんだ？」

「んー、んー？ ああ、あの臭いを辿ってたらここに来ただけだぞ？」

犬並みの嗅覚というか…… なんか人間離れしすぎているような
気もするけど。

「あー、これだこれ！ これが臭いの元だな！ あとこつちからも臭
いがすんぞ」

終里さんが指差したのは棚の上に無造作に置かれた大きな缶2つ。
棚や、棚に保管されたテーブルクロスには埃がついているのに、この
缶にはついておらずどこか真新しい。

蓋を開けるとドロリとした赤い液体が大量に入っており、刺激臭が
辺りに広がる。その隣にあったもう1つの缶は蓋の端から暗闇で光
る筋が漏れている。こちらは蛍光塗料の缶のようだ。

そして終里さんがこつちも、と言ってカゴから取り出したテーブル
クロスにはこの赤い液体がべつとりと付着し、付着した部分は乾いて
バキバキに固くなっていた。

《コトダマ 終里の証言2》

《コトダマ 倉庫のテーブルクロス》

日向クンが追加で見つけた3台のアイロンを罪木さんに頼み、記し
てもらおう。つけっぱなしになっていたそれらに日向クンは電氣量が
…… と呟いているがそれは後回しにするようだ。

《コトダマ 3台のアイロン》

「おい、大広間に戻るぞ」

「あ、ちよつと待って。私ちよつと…… その、花を摘んでくるよ」

「は？ いや、こんなときになにを言って」

「ひ、日向さんは後で説明しますからそつとしておいてあげてくだ

さあい！」

そうか、男の人はそういうフレーズを知らない人もいるのか。

十神クンも眉間に皺を寄せて「仕方ないな、後で大広間に来るんだぞ」と言っただけで去っていく。珍しく強気になって大広間へ誘導しようとする罪木さんに、日向クンもされるがままになって連れていかれた。

「…… おーい、モノクマー」

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーん！」

彼らが十分離れたことを足音で確認してモノクマを呼ぶと、待つてましたと言わんばかりにすぐさまダンボールの影から現れた。本当に神出鬼没なやつだ。

「ねえ、今回のルールのことなんだけどさ……」

「粕枝さんの言いたいことは分かるよ！ アレでしょ？ ソレでしょ？ コレでしょ？」

あちこちをその丸い手で指し示しながらふざけるモノクマに呆れた声をぶつけ、続きを促す。

「それじゃあ伝わらないってば……」

「つまり、犯人の名前を粕枝さんが言っていていいかってことだよな？」

ダメだよ！ ダメダメだよ！ メタメタのメタ推理でショートカットできるなんて、そんなゲーム面白くないでしょ？ もしそんな『解答編！ 華麗なる粕枝風の推理』なんてことしたらボクが食っちゃもうぞー！ がおー、たーべちやうぞー！

「だよねえ……」

モノクマのふざけた言葉を適度に受け流しつつ話を続ける。

「なら、やっぱりヒント役しかできないわけ？」

「そうそう！ キミは『日向くん、ここまで言えば分かるわね？』ってな感じで誘導していけばいいのです！」

うふふ、と笑うモノクマの目は監視カメラへと向かっている。

いくら私が知らない体でいるからといってもそんなあからさまに煽りに行くこともないのよね。

「それ以上のヒントは許さないよ？ …… もし、核心に迫る言葉な

んで吐こうとしたら、校則違反で鬪論に参加する資格も剥奪してボツシュートだからね！　そしたら例え間違った方向に鬪論が進んでいってもキミは軌道修正すらできない状態になっちゃうよ！　分かったね？」

「そっか、そうだよね……　つまり、うまいさじ加減でいろんな人にヒントを出せばいいわけだ」

自分がいなくても鬪論は正しく進む。

そんな可能性すら視野に入れられないほど、信じきれないほど私は日向クンを信頼していなかったのだろうか。

日向クンなら大丈夫かもしれない。正しく進めて私が死なないようにしてくれるかもしれない。なんたって主人公なんだから。

でも彼には失敗の未来も当然あるわけで……　万が一私が手出しできない状態で失敗したら？

そんな数%の可能性に怯えて私はモノクマのルールに従う。

自分で自分に呆れながら、僅かな死の可能性すらをも潰していくのだ。

それがたとえ、彼らを心から信頼することができないという状況を生み出すとしても。

モノクマは、そんなわたしを見て、1人きりで怯えるわたしを見て、とても楽しそうに笑っていた。

キーン、コーン……コーン、コーン

「はーい、時間でーす、そうでーす！　お待ちかねの学級鬪論の時間でーす！　では、全員ホテル・ミライ旧館の大広間にお集まりください！　そこで記念すべき第1回、猛烈な殴り愛……　じゃなくって、精神的な殴り合いがはっじまつるよー！」

響くダミ声に、暫く倉庫で呆然と立ち尽くしていたわたしはふらふらと大広間へと向かう扉を開ける。

人がこの姿を見たら、きっと幽鬼のようだと形容していただろう。そう、わたしは確信できた。

旧館、大広間にて殺人未遂が発生した！

犯人を見つけ、過半数以上か、全員に納得させないと彼女は “ おしおき ” で殺されてしまう！彼女はそうはならないように捜査し、見つけた証拠品の数々を持って論破していくこととなるだろう。

さらにモノクマにより “ メタなズルをしたらボツシユート ” だと宣告されているので、主観的に全て分かっている事件を客観的に見直し、それらを少しずつひも解いていかなければならなくなってしまう。

果たして彼女は無事、生還することができるのか！

それは命がけの討論

それは命がけの騙し合い

それは命がけの対決

それは命がけの謎解き

それは命がけの言いくるめ

それは命がけの信頼……

生と死を賭けた命がけの “ 学級闘論 ” が今、始まる……！

《風が入手した証拠品》

・モノクマファイル1

被害者は狛枝風。

現場はホテル・ミライ旧館の大広間。

事件発生時刻は午前1時30分頃。

怪我の箇所は左手と額。額は皿の破片によるものだが、左手は完全に貫通しており、人為的なものだと予想される。

それ以外には外傷もなく、気分の悪さなどもないことから毒物接種の可能性は否定できる。

自力で壁に寄りかかり、停電が終わるのを待つ気力はあったようだ。

・暗視スコープ

十神が所持し、停電後ブレーカーを上げるのに役立つ。スーパーにあったものだということは狛枝の商品リストにより立証されている。

・商品リスト

スーパーにあるすべての商品が記載されている。この中に暗視スコープなどの非常用用品も記載。蛍光塗料、ガムテープなどの記載もあるが、テーブルに張り付けてあったナイフだけは危険物リストにも料理器具リストにも載っていない。念のために確認された生活用品リストにもなかったようだ。確認されていないのは家具・娯楽のリストのみである。

・ジユラルミンケース

十神が持っていた2つのケース。1つはモノミと見張りの人間が所持していた危険物入りのケースで、もう1つのケースには大量の防犯グッズと危険物入りケースの鍵が入っている。

・テーブル周辺の刺激臭

十神曰く、シンナーの臭いである。刺激臭は赤い液体から発せられているようだ。

・停電前の位置取り

小泉が直前の写真や記憶を頼りに書いた全員の位置取り。

・絨毯の切れ端

裏地の中央に蛍光塗料が塗られている。

・ナイフ

テーブルの裏にガムテープで張り付けられていた。柄の部分に蛍光塗料が付着している。西洋の剣のような、投げナイフのような見た目をしている。商品リストにも危険物・料理道具欄には記されておらず、出所不明。現在は十神が保管している。

・ガムテープ

蛍光塗料が塗られている。

・ビニール片

細かくビニール状の残がいナイフの真下に大量に落ちていた。はじけ飛ぶように周囲にも散乱していて、かなりの赤い液体が付着している。ロゴを確認したところ、ロケットパンチマーケットで無料配布しているビニール袋のようだ。

・倒れた丸テーブル

狛枝がぶつかっただらしき丸テーブル。角に血痕が付着している。

・割れた陶器の花瓶

5つある花瓶のうちの1つ。これだけが陶器でできていた。口が広く、5cm程の首の部分は手がすっぽり入り込むくらいのゆとりのある狭まりがある。胴は広く、壁が薄い。

(割れ方が変とか言っではいけない)

・落下した水受け皿

鉢の下に置く水受け皿が1つだけ花瓶の近くに転がっていた。手首程ではないが小さく、花瓶の破片に埋もれていた。

・散らばった羽毛

花瓶の近くに大量に散らばっていた。狛枝曰く「花を支えるために花瓶に詰めていた」

・造花

花瓶に入っていた造花。どれも茎は短く、5cm程度しかない。綺麗に切断されている。

・終里の証言

血痕らしきものからは「路地裏のラクガキ」のような臭いと「僅かな血の臭い」がする。停電中は誰かにぶつかられた。

・終里の証言2

臭いの根本を探していたところ、倉庫でそれらしき大きな缶を見つけた。開けてみるとどうやら赤いペンキと蛍光塗料の缶だったようだ。倉庫に元々あったにしては真新しい。

・罪木の証言

粕枝の左手の怪我は直径5mm程度の細く鋭利なもので貫通してできたもの。額の傷は間違いなく皿の破片によるものである。

・罪木の証言2

停電中料理らしきものにつまづいて誰かにぶつかり、そのあげくに転んでしまった。

・澁田の証言

澁田は停電中、騒ぎの中の音を正確に聴き分けていたようである。

小泉「うわっ、停電だよ！」

左右田「おいつ、なにも見えねーぞ!？」

澁田「ま、真っ暗だよお！もうお先真っ暗だよお！」

小泉「み、みんな落ち着いて！こういうときは落ち着かないと！」

田中「俺様の傍を離れるなよ？お前達……」

罪木「ひゃああああっ!？」

十神「おいつ、お前なにをしているっ！やめろっ!!」

粕枝「いつづつ……!？」

日向「お、おいつ！どうした!？」

テールブルが倒れる大きな音。

終里「電気点けろって！飯が食いづれーじゃねーか！」

花村「つみ、みんなー、どこにいるのー？て、停電って……厨房だ
けじゃないのー?」

七海「……あれ?」

十神「これは……おいつ、待て！」

ソニア「ブレーカーが落ちてしまったのでしょうか？」

左右田「ちよ、ちよっと待ってろ！オレが壁伝いになんとかしてくつから」

明るくなったときに。

澤田「バルス！」

・左右田の証言

停電中事務室に行こうとしたが、目の慣れることのない暗闇で大広間を出ることが精一杯だった。明るくなった直後は廊下を見渡しても誰もいなかった。

・花村の証言

厨房のキッチンのガスコンロは電気で制御するタイプなので停電中は使用できなかつたし、見えないのでどこにあるのかも分からなかつた。

・七海の証言

皆の声に違和感を感じたが、それがなにかはよく分からない。

追記：停電直前は田中のピアスが床下にないかしやがんで覗き込んでいたようだ。

・七海の証言2

見張り当番をしているときに九頭龍を見た。それはモノミも見ていたし、どうやら辺古山も目撃しているらしい。

・モノミの証言

辺古山はどうやら、邪険にされつつも九頭龍になにかを手渡していたらしい。

・エアコンのタイマー

大広間と事務室のエアコンは午前1時30分にタイマーがセットされていた。

・ブレーカー

ブレーカーの下にデスクから取ったのであろう椅子が置かれている。

・パーティの料理

花村渾身の料理群。だが、その美味しそうな料理の数々は大混乱の末に殆どが床に落ち、台無しになってしまっている。

・ 厨房の備品リスト

厨房の備品リストには現場のナイフは書かれていない。花村曰く鉄串が最初から紛失していた。その他のナイフやフォークは十神が没収していて、非常用のガスコンロやチャッカマンが置かれている。

・ 3台のアイロン

倉庫に点けっぱなしのアイロンが3台も置かれていた。使われた形跡はない。

・ 倉庫のテーブルクロス

赤い液体が大量に付着した古いテーブルクロスが倉庫に放置されていた。終里によると、これは大広間の真っ赤に染まったテーブルクロスと似た匂いがするらしい。

《別行動後、日向達が手に入れた証拠品》

・ 床の隙間

大広間の床はかなり隙間だらけになっている。田中はその隙間にイヤリングを落としてしまった。

・ 田中の証言

停電直前はしゃがんでピアスを探していたが、停電してからはすぐに立ち上がり怯えるハムスターを宥めていた。

・ 式大の証言

11頃からずっとトイレが占領されて空く気配がなかった。事件後暫くして再び行つたときは空いていた。

・ 九頭龍の証言

旧館には行っていない。ずっとコテージでくつろいでいた。

・ 防火扉

大広間から出ですぐの、厨房や倉庫へ続く廊下に防火扉が設置されている。火事の延焼を防ぐためのものである。

・ 恥ずかしいポーズ

「も、もう思い出させないでくださいよお!!」

No. 16 『学級○○』―衝撃―

チャイムが鳴り、放送があつてから数分後。

辺古山さんと連れ立って来た九頭龍クンを最後に、とうとう大広間へと全員が集まった。

私はトイレへ行ったことになっていたので一応そちらにも寄り、誤魔化すように長居している。そのせいで式大クンに例の台詞を言われそうになったが、そこは省略。

いつの間にか大広間の中心にあつたテーブルのクロスが取っ払われ、小さなテーブルは壁際に積み上げられている。

勿論、証拠となる奥のテーブルと私が隠れていた丸テーブルはそのままになっているが、2つのテーブルを横に並べたその場所には人数分のスイッチが置かれている。

どうやら椅子はないようなので立ったまま討論することになるのだろう。

そしてその並べられたテーブルの前には何処から持ってきたのかさっぱり分からない教壇が置かれ、そこに置かれた椅子に1人……1匹？ 楽をしてモノクマが座っている。

裁判長が持つような木槌が側に置かれており、本来は学級裁判用の道具だったのだと分かった。

「では、最初に学級闘論の簡単な説明をしておきましょう」

そう前置きして、モノクマはグルリとその場にいる全員を見渡していく。

「学級闘論では、『誰が殺人未遂の犯人か？』を話し合い、その結果はオマエラの投票により決定されます。正しいクロを指摘できればそのまま軽いペナルティを課して修学旅行が続行されますが、もし間違つた人物をクロとした場合…… 殺人が成立したと解釈し、被害者がおしおきされ、クロ含む他全員は修学旅行を続行します」

改めてモノクマの口からルールを説明していく。

うん、いつ聴いても理不尽だね。

「本当はそれ専用の施設があるんだけど…… 今回は怪我人があるか

らね。ボクが頑張つて投票機械なんかを持参してきたよ！ はい、オマエラはテーブルに置かれた機械を1人1つ、持っていてくださいねー！」

テーブルの前に立ち、スイッチを見る。

どうやら左右のスイッチで顔ドットが切り替わるようになってるらしい。これで犯人だと思う人の顔ドットに切り替えて、一際大きな赤いボタンを押せば投票されるようだ。キチンと説明書がついていた。

こんなところだけなぜかやたら親切だ。

「始まる前に訊いておきたいんだけど……」

で、まずは言質を取らないとね。

「裁判長、いや議長かな？ であるモノクマは公正に判断してくれるんだよね？ ほら、キミの考えで殺されたらたまらないしき」

最初の余裕のあるうちは嘘も吐いてこないだろうし、大丈夫だとは思うけど一応ね。

「ま、そう思うよねー。大丈夫です！ この闘論は100%公正に判断するよ！ ボクって最良とか不正が……モノミの次に嫌いなんだよねー！」

「そのモノミはどこにもいないみたいだけど？」

事実だ。

ゲームでは縄でグルグル巻きにされて宙ぶらりんになっていたが、今はどこにも見当たらない。

それを指摘するとモノクマは面白いくらいに落ち込んだ。ブルーな表情を作り、体からキノコが生えている姿まで幻視できるくらいだ。

「まったく不出来な妹だよね…… さつきから見当たらないし、放送はしたんだからそのうち来ると思うけどね…… 来なかつたら…… 今夜の夕食がウサギ鍋になるだけだよ……」

「えっ！ アイツって食えんのか!？」

「っだー！ 目輝かせるな！ 食えるわけねーだろ、ヌイグルミだぞ!？」

モノクマの言葉に食いついた終里さんと、その発言に突っ込みを入れる左右田クン…… うん、この会話で皆の余計な緊張は取れたみたいだね。ガツチガチになってても冷静にものを考えるなんてできないし…… いい感じかも。

あんまりコントが続くと時間制限とかで切り上げられてしまう可能性も一応あるし、気をつけないといけないんだけどね。

「質問はもうないかな？ ないなら、さっ、そろそろ始めましょう！」

そう言つてモノクマが “ 学級闘論 ” の開催を宣言した。

「は、始めろつて言われても…… なにをどうしたらいいんですかあ？」

暫し沈黙が落ちてから、きよろきよろと目線を移動させていた罪木さんがそう言った。

「四の五の言つてねーで拳で決めちまえばいいんだよ！」

終里さんはいつも通り……

「ルール訊いてたんか!？」

「そうだよ！ これは殴り合いは殴り合いでも、精神的な殴り合いだからね！」

「応、選手たるもの、メンタルが弱くてはやつてられんからのう！」

「だ、だからそれは違いますつてえ！」

モノクマがもつともらしく言うと、流れるようなコントが発生していく。罪木さんが突っ込みをするとは…… まったく、終里さん恐ろしい子ね！

「今は討論しなきゃならないんでしょー？ 人の命がかかっているのによくふざけられるねー？」

えーと、捜査中ふざけて小泉お母さんに雷落とされていたのはどこのお嬢さんかな？

いや、議論を進めてくれるのは素直に嬉しいんだけどさ。

「あ、ああそうだよな…… 人の命が…… かかっているんだよな……」
左右田クンが頭に手を当て、落ち込んだ声を出している。目線はこちらに向いているのでやはりこういう状況は好ましく思っていない

んだろう。当たり前だけど。

まったく、なんで左右田クンが罪悪感を感じてるんだか。空気が重たくなっていく。

「あはは、まさか左右田クンに心配されるなんてね。キミは私のこと嫌いだと思ってたんだけど……らしくないんじゃない?」

にやにやと口元に手を当てて笑いながらそう言うところ左右田クンは不服そうに口をきゅつと噤んでから静かに「うっせーよ……」と言った。

「キミがそんなんだと、なーんか調子が狂うんだよね。ツツコミキヤラなんだからツツコミしてもらわないと」

西園寺さんのようにわざとぎときつい物言いをしてみてるけど、効果はあるかな?

「っだー、もう! オメーのために討論しようとしてんだろーが! 怪我人は黙ってろ!」

「はーい」

よしよし、元気がない左右田クンはただのモブだからね。酷いって? ここまで言わないと立ち直らないビビりが悪い。

ようやくと元気になってくれたし、私はご希望にこたえて笑顔で黙ってしようか。

「ひとまず、討論というくらいなのだから議題を決めた方がいいのだから?」

会話の区切りまで待っていたらしい辺古山さんが話を切り出す。

それに十神クンが反応して話し出す。こちらも待っていてくれたようだ。

「討論と言っても実際には “肯定” と “否定” で分けられる問題でもない。普通に議論と言ったほうが有意義だろう」

「じゃあさ、被害者は風ちゃんなんだし議題は風ちゃんにお願いしてもいいかな? アタシはなにから話せばいいか……迷っちゃってや」

って、丸投げかーい!

左右田クンには悪いけど、議論にはちゃんと参加しないといけない

みたいだね。

「ええと…… なら一番大きな議題はモノクマの言つてた ” 殺人未遂をしたのが誰か ” ってことになるんじゃないかな？」

「それが分かんねーから困ってるんだって！」

終里さんがツツコミをする…… だと!?

そんな珍しい光景に驚く私を置いて、黙って静観していた九頭龍クンが痺れを切らしたように言い始めた。

「粕枝は旧館の大広間で刺されたんだろ？ だったら、怪しいのはそこにいた連中じゃねーか」

「はいはい、自分は犯人じゃないって言いたいわけね？」

呆れたように言う小泉さん。

その言葉を気にせず九頭龍クンはそっぽを向きながら続けた。

「あたりめーだ。テメーらが勝手に殺し合いを始めただけだろ。オレには関係ねーよ……」

「は？ なによそれ」

2人の会話でまたも不穏な空気に逆戻り。

私はそんな2人の空気に顔を引き攣らせつつも、必死に笑顔をとりに繕いながら細かい議題をどうするか、話し合うことにした。

皆、私のことを深刻に考えてくれているわりには議論はあまり進める気がないよね。そうなると困るのはこっちだし…… 議論を潤滑にするためには議題を投げるのが1番かな？

「ええと、とりあえずさ。まずは事件について気になる点があればそれを話し合うのはどうかな？」

「1番気になる点か……」

よかった、日向クンがちゃんと話題に乗ってくれた。

皆油断するとすぐ話題が逸れていくからね。

「気になる点というと、結構あるからのう……」

「うーん…… じゃあ粕枝さんが刺されたのはどこか…… っていうのはどうかな？」

七海さんがそう言うと、それまで顔色を悪くして黙っていた花村クンが嬉々として話し始めた。

「それだとやっぱり、狛枝さんが見つかったエアコン近くの、丸テーブルの付近じゃないの？ 血がどっばどっば出てたしね！ それはもう！ 月……」

「ふんっ、そうではないだろう！ 黙れ」

おっと、十神クンの反論が入る。

正直遮ってくれて大助かりである。いくら変態発言がデフォルトの花村クンでもその発言はちよつと……

「狛枝はなにか分からないのか？」

あ、私か。ええと、嘘を吐かずに乗り切れるかな？

「なにせあの暗闇だったし…… 私もなにも見えなくって手探りで歩いてただけだからなんとも言えないんだ。ごめんね」

日本語って便利だね。なんというか、モノクマと同じというところろに不服を感じるが、まあ仕方ない。

「それでしたら、 ” 奥の大きなテーブルの下 ” ではないでしょうか」

「祭壇で生贄を捧げようとしたのだろう。それも失敗に終わったようだが…… つは、笑止」

ソニアさんに田中クンが同意の声をあげる。

預けたままにしていた私の手帳を読みながら日向クンが考え込んでいる。それから、終里さんにチラリと視線を移してから賛成の声をあげた。

「ああ、ソニアの意見に賛成だな。ほら、終里もあそこから血の臭いにするって言ってたし」

「臭いだど？」

その場になかった辺古山さんと九頭龍クンは、終里さんが現場を発見する場面を見ていない。それを忘れていたのか 「そういえば見てないのか」と日向クンが呟く。

「ああ、あの惨状は元はと言えば終里がいきなり臭いを嗅ぎ出して発見したものだからな」

「鼻ひくひくさせちゃって…… まるで犬だねー？」

くすくすと笑いながら西園寺さんが言う。

あれは完全に馬鹿にしている目だ。だが終里さんは気にしていないし、小泉さんが少し咎めるような目をしている以外は誰も反応していない。皆、彼女の毒舌には既に慣れていているようだ。

いや、終里さんは多分分かっていないだけだと思うが、それが彼女らしいところだろう。

「ふむふむ、お宝の山じゃなくなつて」 血生臭い現場 “ を見つけちゃったつてことっすね！ ここ掘れわおんわおーん？”

「それだ…… その血生臭いつてところが気になるんだよ。なんか、違和感がないか？」

日向クンが首を傾げる。

すると七海さんも同じ方向に首を傾げて口到人差し指を当てる。シンクロしている2人を写真に収めたいところであるが今は闘論中だ。空気は読もう。

「…… 違和感……… それって、終里さんが言つてた “ 路地裏のラクガキ ” みたいな臭いのこと？」

「そういえば、そんなことも言つてたわね……」

「ならば先に、あの赤い液体がなんなのかを話し合つた方がいいだろう」

分かつている癖に。

でもこういう答えは全員で出さなければ意味がない。

納得させなければ私は死ぬ。安全策を考えれば口を出すべきではないだろうな。ま、こんな簡単な問題ならすつ飛ばしてもいいんだろうけれど一応ね。

「赤い液体か…… あのテーブルの下だろうか？ 普通に考えると、血ではないのか？」

「あ、あんなに大量に出血していたら…… 出血多量で死んじやいますよお！」

辺古山さんが大広間の隅、真つ赤なテーブル下を眺めて言う。

しかしその言葉に勢いよく罪木さんが叫んで反論した。その勢いに押されたからなのか、それとも納得したのか辺古山さんが引き気味に「ああ、確かにそうだな」と返事をする。

「だるそうにはしてるけど、風ちゃんもピンピンしてるっすよ！」
「丸テーブルの陰で見つけたときも、結構血が出てたと思うんだけど……」

澤田さんが疑問気に呟き、小泉さんは眉を顰めて痛ましげにこちらを見てくる。罪木さんの「死んじやう」という言葉が堪えたのだろうか。

しかし心配しなくても大丈夫だ。ちよつと貧血にはなったが命に別状はないのだ。病院のない今の状態で大怪我なんてしたらちよつと怖いからね。

「ああ、あれは額の細い血管を切っちゃったから大袈裟に血が出てただけだよ。手の平の傷とは別物。それに、罪木さんの処置で大分楽になつてきたから私は大丈夫だよ……さ、議論を続けようか」
パツパと議論を進めて事件を解決してもらわないとね。

私の心配をしてくれるなら早く議論を進めてほしいんだよ。心配してもらうのが嫌ってわけじゃないけどね。

「こんなときでもいやに冷静だな。お前、怖くないのか？」

「……怖いよ？ って、前も言つたつけ……私はただ、早くこのくだらない鬭論が終わらせられるようにしたいだけなんだ」

「くだらないって……テンション下がるなあ」

モノクマが落ち込もうがなんだろうが私には関係ないからね。むしろもっと落ち込んでしまえ。記憶にはないが、モノクマの中の人に私は絶望させられたんだろうし、好く必要なんかないだろう。

「あの液体はどうやら粘性があるらしいな。ふつ、雑魚の出来損ないが」

「……スライムベス、かな？」

「そういえば、スペインじゃトマトを投げ合う盛大なお祭りがあるんだけど……」

「おお、花村さん！ それはトマトティーナですね！ あれはベリーワンドアホーです！」

「そ、ソニアさん？ なんだかとってもお詳しいんですね……」

田中クンと七海さんはゲーム脳だし、花村クンとソニアさんは別の

ことで盛り上がってるし、左右田くんはツッコミだし…… 真剣に釘を刺してみても結局こうなるんだよね。まあ、この方が皆らしくていいのかもしれないけれど、混ざれないこちらとしてはなんだか複雑な気持ちだ。

「路地裏のラクガキって言ったらスプレーじゃろう」

「シンナーの臭いがするとうと…… やはりそちら方面だろうな」

見かねたのか、それとも普通に考えてくれていたのか、式大くんが例としてスプレーをあげて十神くんが賛成する。

するとどうだ、十神くんが言った言葉で「ぼくぼくぼく……」と考え込んでいた瀧田さんが勢いよく手を挙げた。

「はいはいはい！ ならペンキはどうつすか！ あんな感じにねとーってしてて、血にも見えるよね！」

「俺は、瀧田の意見に賛成だ。俺達と一緒に捜査してた粕枝や罪木も分かってると思うけど……」

日向くんは私の手帳を片手に罪木さんや私へ視線を滑らせる。

それからテーブルの下の液体を眺めている。

「…… 倉庫に赤いペンキの缶と、蛍光塗料の缶があったんだよ。だからあれは大部分がペンキだと思う」

その言葉に素早く反応したのは、小泉さんと左右田くんだった。

「倉庫にペンキの缶があったの!？」

「あー？ 確かにありやアペンキか。なるほどなー」

「おにいは怖くて近づかなかったもんねー？ 近づいてたら早くペンキだつて分かったんじゃないのー？」

「うっせうっせ！ 仕方ねーだろ！」

まあ、あんな大量の血に見えるものがあつたら近寄りたくはないよね。普通あんなになつていたら血だつて思うよ。私だつて怪我をしていたわけだし…… 先入観って怖いよね。

あれに躊躇いなく近寄る十神くんとか、躊躇いながらも捜査していた日向くんは凄いんだよ。

「路地裏のラクガキの臭いが…… ペンキだつてことが分かったか

ら、あれは血じゃないってことでいいんだよね？」

七海さんが確認するように言う。しかし、それに捜査協力していた罪木さんが控えめに手を上げて言った。

「で、でもお、終里さん…… 血の臭いも少しするって言っていましたよねえ？」

なんだか罪木さんよく喋るな。

ゲームだと診断結果1つ出すのにもどもって、更には皆の声でそれを言うのを止めようとしちゃったくらいなのに。

ここにも、小さな違和感。

「丸テーブルが倒れていた所と…… 大きいテーブルの下両方に血の臭いがしたのか……」

「あの場所には怪しく光る銀のナイフもあったな…… 狛枝はあそこで犯人と鉢合わせしたのだろう」

うん、なんだか信頼されてるみたいでいいよね。

「あの暗闇であそこに辿り着くのは困難ですからね…… 偶然そこにいたから狙われてしまったのでしょうか……」

だって誰も私が完全な被害者だって信じて疑わないんだもの。

にやつく口元を手元で隠して議論を見やる。

ああ、この信頼関係を自分からぶち壊してしまうだなんて絶望的だね。でもこれは必要なことだったのだ。多少皆の反感を買おうが、やらなければならなかったんだ。

そう、ただでさえ私のせいで多く発生するイレギュラーを少なくするために。そうでもしないといつどんなときに危ない目に遭うか分かったものではないからね！

口元とは別の手でそつと体を抱きしめて震えを抑える。大丈夫、まだ大丈夫。まだ皆との信頼を噛み締められる……

「じゃあ倉庫のペンキはなんのためにあったのよ……？」

「ええと…… 狛枝さんが装飾に使おうとしていた…… とか……？」

チラリと罪木さんがこちらを見てくる。伏せ目がちのおどおどとした顔はこちらを伺うように上目遣いにされているようだ。

「うん、まあね。壁とか床とか塗り直そうと思ってたんだけど……赤いのしかなかったから諦めたんだよね……」

「……？」

ちなみにペンキは家具コーナーのリストに書いている。だがリストには「ペンキ類」と書いて色については意図的に書き洩らし

ているので、私になにかを企んでいた証拠にはならない。日向クンがなにか違和感を覚えたような顔で考え始めたが、十神クンはどうやら助け舟を出すつもりはないらしい。

そんな2人の関係が、なんだか助手の成長を促す探偵のように見えて少しだけもやもやとした気持ちを自覚した。

どうして私はあちら側に立てないのだろう。こんな、敵対するようなことをして、覚悟はしてるというのに、揺ぎそうになる……そんな小さな嫉妬心。

「どうしたの？ 日向クン」

笑顔を取り繕って余計な気持ちにそつと蓋をする。

そうだ、同じ立場で、仲間としてクロに立ち向かっていたら彼らと勝負するなんていう貴重な体験はできない。

だからこそ、少し楽しみだった部分もあるのだ。

さて、十神クンと日向クンはどうするかな？

「なら、停電を仕掛けた人が犯人ってことじゃないの!？」

どんな反論が来るかとわくわくしていたというのに、慌ててその話題を切った花村クンに邪魔されてしまった。

花村クンの必死の妨害も微笑ましいものがあるが、私にとっては日向クンとの勝負のほうが魅力的である。ちよつと不服だ。

負けたクロにもおしおきがあるならば、私との生存欲勝負となつて少しは燃えることができるのだが…… 相手は軽いペナルティだけ

というぬるい処置しかない。

その理不尽さに冷め切っている私としては、なぜ未だに自身の罪をこちらになすりつけようとしてきているのかが理解できない。

私が死んで秘密を守ったとしても、モノクマは「犯人を公表せず修学旅行続行」なんてことは一言も言っていないのにね。

まったく、笑えるよ。

「あの停電は偶然ではなかったんかあ!？」

「あれは偶然などではない…… 午前1時30分に設定された二台のエアコンタイマー…… そして倉庫に放置されていたつげつばなしの3台のアイロン…… 停電には十分だ。ここまで来ればもう偶然とは言い難いぞ」

ようやく十神クンが話し始めた。

だから私は、"ゲーム"と同じ状況にして彼らとの勝負に持ち込むために誘導する。

「うーん、なら停電を起こした怪しい人物を特定するのが先かな？」

あんまり議論が進んだと言えない所が難しいね……」

そう、私の計画が暴かれることなんて百も承知だ。

むしろ、私のしたことがそうやって暴かれることこそが私の計画の本懐なのだから。

「そうですよね…… この議論には粕枝さんの命がかかっていますから……」

「胡散臭いモノクマのことだし…… 時間制限くらいありそうですよね……」

「偏見はんたーい！」と可愛らしく叫ぶモノクマのことを無視して議論は進んでいく。

「そうだよな…… んじゃあ怪しい奴つていやア…… パーティに参加してなかった九頭龍だろ！」

「はあ!？」

「いや、現場は旧館の中だ。パーティに参加しなかった九頭龍には犯行が不可能だろう」

左右田クンの推理に、火の粉が飛んでくるとは思っていなかったらしい九頭龍クンが素っ頓狂な声を出す。あれは完全に油断していた声だ。キレて今にもテーブルを飛び越えて胸ぐらを掴みに行きそうな彼を、辺古山さんが静止するように反論する。

しかしそれでも左右田クンは納得しない。

「じゃあ最初から旧館に潜んでたんだ！ それなら停電を起こして

こっそり殺しを狙えるだろ！」

「だから不可能だと……」

辺古山さんと九頭龍クンの視線が交差する。

しかし彼女にはなかなか言い出せない。だってそれを言ってしまうたら関係のリセットが意味なくなってしまうからね。

「九頭龍クンにはできないはずだよ」

だから私から助け舟を出すことにした。

「おいおい、それを被害者のオメーが言うのかよ」

「だってパーティ中九頭龍クンが外にいたのは、辺古山さんも七海さんも目撃してるんだよね？ あと、モノミもさ」

「ああ…… そう言ってたな」

一緒に捜査していた日向クンが頷くと左右田クンは頭をかいて大声を出す。

「っだー！ マジか！ なら…… パーティ中にいなかったのなんて辺古山くらいしかいねーんじゃないか？」

「…… 私か？」

驚く辺古山さんに、瀧田さんが少女漫画ばりの驚愕ポーズで大袈裟に引いてみせている。

「えっ、ペコちゃんが風ちゃんを!? 白髪と銀髪が似てるからって!？」

「…… 私は犯人ではない」

「犯人じゃねーってさ！」

「んな簡単に信じてどーすんだよ！」

「私はずっと…… 動けなかったんだ…… だから…… 私には不可能なのだ」

九頭龍クンのときとは打って変わって反論の声が小さい。

それだけ、自分のことに関しては頓着していないということだろうか。

「…… 辺古山の話は本当だろうか」

「立っっちゃったすか!? フラグが立っっちゃったんすね!? ぎやびー!

白夜ちゃんったら意外ー!!」

仕方ないとばかりにそう言った十神クンに、瀧田さんが目をキラめ

かせて言う。皆はそんな2人に視線を集めているから気づいていないだろうが、何気に九頭龍クンの顔が怖いことになっている。

「おいおい極道さん。なに間に受けちゃってるのよ。」

「え？ 立っっちゃったってナニが？」

「きーもーいーよー！ 絶対いやらしい意味で言ってるもーん！」

「いや、そういうことじゃないだろ。ほら、式大の証言がアリバイになるんだよ！」

日向クンに名指しされた式大クンはきよとんとして自身を指差して「ワシか？」と確認している。それに頷いた日向クンが「ほら、証言のときに言ってただろ？」と話を促すと式大クンも考えながら口を開く。

「心当たりがあるといったら、11時頃からずっとトイレが何者かに占領されていたことぐらいじゃが……」

「それは事件が起こって暫くも続いていたのだろうか？」

「ここで十神クンの援護が入るのか。」

「そうじゃなあ…… 事件が起こって、暫くしてからようやくと解放されたからのう」

「あつ、もしかしてそのときトイレに入ってたのって……！」

「そこで全員が察したようだった。」

「数人が気まずそうにしている。」

「だって、辺古山と見張りの当番以外は11時以降もちやんと大広間にいただろ？」

「そっか、それからずっとトイレにこもってたとするとな辺古山おねえとしか考えられないんだねー」

「…………… そ、そういうことに…………… なるな」

物凄く言いにくそうに辺古山さんが肯定の返事をした。

「に、2時間も便所に籠ってたのか？ それなら最初から言えっつーの！」

「言えるわけじゃないじゃん。アンタってデリカシーってモンがないの？」

「それだけ長いということは…………… 間違いなくクソじゃな…………… ガツ

ハッハ！ 言えんわなあ！ そら、クソしておったとは言えんわなあ！」

「ねえ、デリカシーって習わなかった？ 男だらけの国にでも住んだの？」

この流れるような追撃、嫌いじゃないよ。

自分が同じ目に遭いたいかって言われたらNOだけど。

「なんで皆さん放っておいてあげないんですかあ！」

「無ツ、すまなんだ！」

「い、いいんだ…… それより…… この話題はやめにしないか？」

「だが、匂いはさほど強烈ではなかったぞ！ お前さんのすぐ後に入ったワシが保証しよう！」

そしてトドメである。

やめたげてよお！

「…… も、もういいだろうっ！」

「ええと、あまり言及するのはよろしくないのですが…… お腹を壊してしまったのでしょうか……？」

ソニアさんが凄く言いづらそうにしているが、それは確認しなければいけないところだろう。

「そうだよ…… 誰かが下剤を盛ったとか、そういうのは考えられねーのかよ！」

「しかし料理は全員食べただろう。料理が原因でない以上、辺古山の不調は偶然ということになるな」

九頭龍クンが花村クンを睨んだが、それを十神クンが否定する。

「ねえ、用を足しているときに暗くなるのってどんな気分？ 逆に興奮するとかはある？」

「俺が話題に出しといてなんだけどさ…… もう、やめとけて……」
日向クンが物凄い申し訳なきそうにしている。

それに応えてか、田中クンが元の話題に戻して話し出した。

「しかし、生贄を捧げる儀式をできた者など、他には宴を企画した十神くらいではないか？ 静観などしてないで、なにか言ったらどうだ」

まあ、ここはいつも通りに喧嘩を売っておこう。

「そういえば…… 十神くんは暗視スコープを持ってたんだよね？
それでブレーカーを上げたって言ってたけど……」

「そっか、停電の中…… あのテールブルまでいけるとしたら暗視ス
コープを持ってた十神くらいなんだ」

私の言葉に誘導されてくれた小泉さんがそう言う。

「あれだけリーダーリーダー言っただくせに、殺人を企むなんてとん
だ詐欺師だよなー？」

その言葉を聴いた瞬間、僅かに十神の眉が跳ね上がった。

「それは違うぞ！ 十神は……！」

日向くんが慌てて十神くんの援護に走ったが、それを本人が手で制
した。

「いい…… パーティを企画した理由はある…… 言いたくはな
かったが…… 仕方ないな」

そう言っただけ十神くんは懐から折りたたまれた紙を取り出した。

「…………… え？」

それを見て、私はそれ以上言葉が出なかった。

「はあああああ!？」

「こ、これは……！」

「な、なんだ…… これ……」

「はあ？ どういうことだよ、これ」

様々な反応が波のように広がっていき、そして、小泉さんがその紙
に書かれた言葉を呆然と呟いた。

「…… 明日夜…… 十神白夜は…… 死ぬ……？」

震え声で言われたその言葉に私はもう言葉が出なかった。

見覚えのありすぎる文字で書かれたそれに、自分の記憶を疑った。

それは、その紙に書かれた字は…… 端が伸びていて、止めの部分が
まるで滑ったように線を貫いているその字は、私が崩して書いた字に

…
とてもよく似ていた。

No. 16 『学級○○』―勝負―

大広間は静まり返っている。

当たり前だ、皆その内容に釘付けになり、驚愕しているのだから。今まではまだ心の余裕を保っていたられたのだが、流石にこれには私も思考停止した。

しかしそれは皆の驚愕とは別物なのだ。皆はそんなものが送られていたという事実には、私は、自分そっくりなその筆跡に。

思わず本当に脅迫状を出し忘れていたのかと考えてしまったくらいだ。確かに私は脅迫状を出し忘れたはずである。記憶には一切ないし、あの後は疲れてすぐに眠ったのだ。そもそも脅迫状を作ろうとしていたことさえ頭の中からすっぽ抜けていた。私にできるはずがない。

十神クンは真剣な顔で、そして日向クンは鋭くこちらを睨みつけてきている。

ああ、そういえば日向クンには試し書きしたあの字体を見られているのだったか。これは予想以上にまずいな。

やはり、私自身が議論に参加していなければダメだ。死ぬ。

「これって、脅迫状？ いや、殺人予告状…… つすか!？」

「な、なんで…… なんでこんなものがあるんですかあ!？」

罪木さんの意見に同意したい。

パーティを開催する以上なにかあったんじやないかとは思っていたけれど、まさかそう来るとは思わなかった。完全な予想外だ。

「十神クンは、こんなものを受け取ってた…… っってことなの?」

冷静を装いつつ、確認するようにそう言う。

「ああ…… これが昨日の朝、届いていたらしい」

すると十神クンが頷きながら視線をつい、と移動させた。

えっと、つまりどういうことだ? 十神クンが受け取ったんじやないのか?

「届いてたらしいって?」

「あ、ああ…… 昨日の朝、俺のコテージのポストに届いてたんだよ。」

それで…… 昼前十神に相談してたんだ」

私の質問に答えたのは、意外にも日向クンだった。

それで私は漸く納得したのだ。なるほど、ずっと挙動不審だったのはそのせいかと。腑に落ちなかった部分が全てストンと収まり、今までの違和感が次々に紐解かれていくのが分かる。

日向クンの顔色が悪かったのもそのせいだし、前夜なにをしていたのか訊いてきたのもそのせいなのだろう。

つまり、私と自由行動する前に殺害予告をされている十神クン自身に相談したということか。

彼らの昼食が遅くなったのもそのせい…… その割には十神クン自身は気負っている様子がなかったが、そこは流石「御曹司」と言ったところか。命を狙われるのは慣れていそうだからね、なるほど。

「これがあったから十神はパーティを開いたんだ…… だから十神が大量の防犯グッズを持ち込んだのも納得だな」

日向クンがそう言ってフオローに回る。

それを聴いた数人が「どうして全員に相談しなかった」と訊くと、「十神自身が余計な混乱を招くべきでない」と判断したという答えが返ってくる。

今の混乱した状況、そして互いに向ける僅かな不信を見ればその判断が正しかったことがよく分かる。混乱に陥ればその分計画は実行されやすくなるのだ。彼がそれを避けたのも理解できた。

しかし、犯人に繋がる手がかりが本格的になくなってしまったためか左右田クンが頭を抱えて叫ぶ。

「なら、誰がどうやって猟枝を殺そうとしたんだよ！ 狙われてたのはオメーだろ!? 暗視スコープだって、オメーしか持ってなかったんだぞ!？」

その言葉にたつぷりと時間を置いて、十神クンは口を開いた。

「…………… 誰がテーブルまで行くことができたか…… そして、誰ならあのナイフを仕掛けることができるかそれを求めることが重要だろう」

「な、なら停電前の立ち位置からどうにかならないかな!？」

花村クンが食い気味に声をあげる。

必死なその声にいつそ微笑ましく思いながらにつこりと笑顔を向けてみると驚愕の表情でこちらを凝視し、そしてぶるりと体を震わせた。バレているってこと、分かったかな？

その反応が楽しくて心の中でせせら嗤う。必死だ。すごく必死に罪から逃れようとしている。でもそれを暴くのだ。

…… そう、そのために用意した舞台なのだから。

「そうだね…… 犯人…… なのかは分からないけど…… 怪しい人の手掛かりにはなる…… と思うよ？」

「ふうん、それって…… なにかな？」

暴かれることこそが今回の目的なのだ。精々ふてぶてしくしているよ。

馬鹿にしたような余裕の雰囲気を作り、七海さんに視線を向ける。すると彼女は私のそんな表情を不満そうに口を膨れさせて「むう」と声を漏らした。可愛い。

そうして七海さんを観察しているうちに日向クンが小泉さんから貰っていた位置取り表を凝視していた。

「…… まさか……」

先程は筆跡でこちらを睨んでいたというのに、それには驚くのか。脅迫状と停電にした人物は別だと思っていたのか…… いや、実際に別なんだけれども。

ともかく、日向クンは信じられないとばかりに声を漏らし、こちらを見た。口が半開きになってはくはくとなにかを言おうとしているが、どうやら言葉に出ないらしい。

「ど、どうしたのですか？日向さん」

ソニアさんの言葉に黙って彼は位置取り表をソニアさん渡した。

そして周囲にいた人物が軽くそれを眺めて、日向クンと同じように目を見開く。

「ねえ、日向…… 嘘だよね……」

紙も見ずに立ち尽くしていた小泉さんが絞り出すように声を出し

ている。

「小泉おねえ？」

そんな小泉さんに表を軽く見ながら西園寺さんが尋ねると、小泉さんはこちらを見ながら体を震わせた。

「アタシ、アタシ…… さすがに自分の書いた表くらい覚えてるわよ…… でも、信じたくない……」

「……」

十神クンは真っ直ぐとこちらを睨んできている。

その顔が、その目が如実に語っている。 “ お前は どうするのだ ” と。

彼はきつと犯人が分かっている。でないとは暗闇の中、誰かを追いかけて外に出たりはしない。見失ってしまったのだとしても、それが誰かを明確に見ることができなかったのだとしても、それがどこへ逃げて行ったのかが分かるのならば、あとは誰が行動できたかを逆算すればいいだけだ。

なのにこうして回りくどく推理をするということはこちらを試しているか、それとも私と同じように皆を納得させるためにわざとそうしているかのどちらかだろうか。

「えっ、どっ、どういうことっすか!？」

「は、早く言わんか!」

澤田さんと式大クンは分からなかったようで、日向クンに問い詰めるようにまくし立てた。

それに日向クンは、やるせなさそうに下を向き、唇を噛む。

「信じたくない…… けど、凶器を取りに行けた人物なんて……」
言い淀む。

しかし、彼はその次の瞬間には顔をあげ、凛々しい顔でこちらを、この私を、指差した。

「粕枝…… お前しか…… いないんだよ」

「……」

思わず口元が緩みそうになるのを必死に抑えて 「え、私？」 ととぼける。

死への恐怖は現在、追い詰めやすい相手であることに、そしてボロを出し始めている相手に薄れている。モノクマは怖いがもう私が死ぬビジョンは見えない。1%でも死ぬ可能性がある限り油断はしないが詰め方は理解した。

だから今は、彼との真剣勝負という心待ちにしていた展開により歓喜していたって罪はないだろう。

そんな喜色ばんだ心とは裏腹に、表情は驚いた風にする。きつと演技することに慣れた人物ならば私のチャチなこの演技もバレるのだろうか、”彼”がそんなことをするようにには思えない。

バラされたとしても問題はないのだけれど。

そう、全ては計画通りに進んでいるのだ。

私のやったことが暴かれるのは必然。全てはそのため用意した仕掛けだ。彼なら私の用意したチャチな仕掛けなんて突破してくれる。解明してくれる。推理して、暴いてくれる。そんな信頼を寄せて作った仕掛け。殆ど知っている通りにやったにすぎないけれど、それでも”もう1つ”の仕掛けを隠し、殺人者を炙り出すには十分なのだ。

「粕枝……さんが……？」

人一倍人の表情を読むことが上手い罪木さんが言う。

信じたくないとしても言うように震える声を出しているが、その言葉にはどこか確信めいた色が混じり、確信してしまった自身の言葉さえも信じられないと息を詰まらせている。

「んー、どうして私だけ凶器を取りに行けると思ったの？ ……そこを教えてくださいなないと、反論できるものもできないかなあ……」

反論なんてはなからするつもりなんて、ないんだけどね。

「そ、そうだよ！ ソイツは偶然テールのとこまで行っただらろ！？」

粕枝だって、捜査のときに”壁かなにかを伝って移動したら

”って言うってたらろ！”

「……………」

ごめんね、左右田くん。折角信じてくれたのにさ、こんな場面で裏切るような真似をして、きつとますます嫌われてしまう。彼は裏切

りに酷いトラウマを持っているから。だからきつと今まで以上に付き合い辛くなる。

それは少し寂しいけれど…… 私は人間関係よりも爆弾処理を優先したいんだ。だから、ごめんね。

俯いて黙ってしまった小泉さんも、ごめんね。そりゃあ、仲良くしていたのだから信じたくないよね。小泉さんは女子のことを無条件で信用しているみたいだし、きつとこれが終わったあとと彼女はぎこちないながらも変わらず接してくれるのだろう。そんな優しさが私は好きだ。

あのまま付き合っていけば友人にもなれたのかもしれないが、それをこちらから拒否するようで本当に悲しい。

だが、人間関係とか仲間とか友情とか、その全てよりもなによりも、犯人を暴き晒し上げることが優先するのだ。

私が、生きるために。

「電気スタンドだ……」

日向クンが決定的な言葉を言う。

一斉に視線が電気スタンドへと向く。

そんな中で私を見つめているのはただ一人、十神クン。睨むように責めるように向けられたその目と自身の目を合わせて笑う。

「電気スタンドだとお？ 明かりを頼りにしたとでも言うんか!？」

私の笑みに彼が返したのは、同じく笑み。

砕けた笑みではなく、凛々しく挑戦を受けるぞとでも言うような笑み。

そんな視線の交わりは、彼が話し始めたことで一方的に断ち切られた。

「いや、違う…… 使ったのは電気スタンドの電源コードの方だ」

「で、電源コード…… ですかあ？」

彼が視線を外して電源コードへ向ける。それから小泉さんが撮った写真を手にして、私だけがそれを伝ってテーブルへ行けたのだと説明した。

「エーテルを手繰る目印としたか…… 貴様、やるな」

「電源コードを手繰りながら移動すれば、卓上ランプのあるテーブルまで辿り着けるだろ？　そうやって目的のテーブルまで移動したあとは、蛍光塗料を目印にしてナイフを取ればいいだけだ……　どうしてお前が……！」

日向クンの表情は崩れ、悲しそうに下げられた眉に少しだけ罪悪感を感じる。しかし、それがたった2日で築いた絆の現れだと思うとそれだけで幸せになれるのだ。たった2日だ。それだけで彼に信頼されていた。

今まではそんなことはありえなかった。

誰かに嫌われるか、段々と分かる私本来の性格で多少仲良くなれるか……　いずれにせよたった2日でここまで信頼されたのは初めてだ。

きつと、橙子ちゃんくらいじゃないかな？　こんなに早く打ち解けていたのは。

メイでさえ信頼を築くのに時間がかかった。

姉さんたちには多分、心のどこかで嫌われていた。

怪物クンとは結局嫌われたまま、すれ違ったままだった。

うろつきはこちらから一方的に苦手意識を持っていた。

うそつきはうろつきに紹介され、互いのことを話すまで随分時間がかかった。

日向クンの心境としては、あの日あ のとき、織月が青汁クンを “ 手に入れた ” ことを知って、その狂気に恐怖した私と同じなのだろう。

ああ、私はすっかり織月に影響されているようだ。

それ即ち、私が狂ってしまったということ。

私はもう、手遅れ。

私は最初から絶望に生きていたのだ。

「粕枝さんがテーブルまで行けたのは偶然じゃない……　ってことですかあ？」

「でもでもー、凧ちゃんは “ 壁かなにかを伝って “ って、言ってたっすけど……　ってまさかあ!？」

言いながら気がついた澤田さんが驚愕を浮かべる。

「ああ、嘘はついていないんだろう。だからこそ質が悪い」

「は？ まさか、自作自演ってわけー？」

「……」

ダメだ。今なにか喋ったら笑ってしまいそうで、なにも言えない。

「こ、こういう場合って…… 投票はどうなるの？」

「んん？ ボクに言ってる？ えーとー、ルールのにはね、自殺だった場合は読んで字の如く自分を殺したという扱いになります！ なので粕枝さんが自殺未遂だった場合は犯人も粕枝さんってことになるよね！」

西園寺さんの煽りも、花村クンがさっさと投票を終わらせようとしているのも、止めることができない。

しかし、これを止めようとしている人物がいるので私はなにも言わない、言えない。

自身の言葉に確信しながらも、いつも自分の言葉をきちんと最後まで聴く。そんな私を彼女が放っておくわけがない。

別に打算で付き合っていたわけではないが、まさかここまでとは思わなかったよ。

嫌われたくないから、このまま利用してほしいから、頼ってほしいから、そんな思いを抱えた彼女が不安そうな顔でこちらを伺っている。

「な、なら早く投票しちやおうよ！」

「ま、待ってくださあい！」

「ゲロブタは黙ってろよ！」

西園寺さんの言葉に多少怖気付いたが、言葉は続く。

悲鳴のようなその声をあげながら彼女、罪木さんは疑問点を出す。

「な、なら殺人予告をしたのも粕枝さんということになりますよねえ……？ それってちよっと、おかしくないですかあ？」

「豚足ちゃんをやるうとして自滅したってことでしょー？ 自業自得じゃーん！」

「うーん…… でも、やっぱりそう考えると不自然だよね……」

西園寺さんや花村クンはさっさと終わらせたいのだろうが、罪木さんの言葉に七海さんが同意したことで話し合いが続行される。

「あはは、罪木さんありがとう。私なんかを信じてくれるんだね。うん…… やった覚えのないことの罪まで押し付けられるのは、ごめんなかな?」

「狛枝……?」

日向クンがこちらを見る。

それに私は俯くことで隠していた笑みを晒す。

それを見た幾人かが口元を引きつらせたが構わず話を進めた。

「確かに、停電を仕掛けたのは私だよ。でもね、やった覚えのない殺人予告のことまで押し付けられるのはごめんなんだよ…… それに、あのナイフはガムテープでテーブルに張り付けられたままだった。つまり、あれは誰も使っていないってことになるよね? 私が自分で自分を傷つけたのなら、ナイフが使われた形跡がないとおかしいんじゃないかなあ?」

笑みを浮かべたまま 「そうでしょ?」 と同意を求める。

しかし、いつだって邪魔をしてくるのは十神クンなのだ。

「いや、あの殺人予告は確かに狛枝のものだ」

「そんなに自信満々に言うだなんて…… 殺人予告が私のだって証拠でもあるのかな?」

日向クンの証言でも出してくるかな? しかし所詮昨日一瞬見ただけの証言だ。証拠にならならないだろう。

「これだ……」

《破れた日記》

「えっ」

思わず声が漏れた。

余裕を崩して本気で驚いてしまったのだ。

なんで十神クンが私の可哀想な日記を持つてるのだろうか?

確かにモノミのおしおきでバラバラになっちゃったとはいえ日

記はプライベートなものだ。さすがに彼が持ち去ったとは考えられないのだが……

「なんすかそれ？　ちょーボロボロの紙？　つすけどー……」

「ちよつと、すごい穴だらけじゃない。なによそれ？」

やめて、興味津々に食い入らないで！

「字下手だなとか言わないで！　分かってるから！　自覚済みだから！」

夢日記なんて意味不明な内容なんだから見ないで！　厨二で書くポエム並みにヤバい代物だから！

私の動揺を誘う物なのなら大成功だよちくしょう！

「ま、待ってー！　なんで十神クンがそれを持つてるの？」

「十神、それなんだ？　……　なんだか、見覚えのある字のような、ないような……」

「これは狛枝の日記の一部らしい」

「えっ、えええっ!?　こ、狛枝さんの商品リストとか……　手帳とは全然字が違うじゃないですかあ……　!」

分かってるってば！　なんなの!?　学級裁判中に一度は公開処刑しないとイケないルールでもあるの!?

心の中が修羅場真っ最中なのですが！

「そういうえば……　狛枝が試し書きしてた字は……　こんな感じだったよな気がするな……」

「日記とこの殺人予告は筆跡が一致している。それが証拠になるだろう」

落ち着け私。

「辺古山さんもこんな心境だったのだろうか……　落ち着けー、落ち着けー。」

「はあ……　その日記の切れ端に私の名前が書いてあるわけじゃないでしょ？　それに……　その字と殺人予告のどこが似てるって言うのやっ。」

「それは…… っこだ！」

日向クンが脅迫状と日記を見比べながら指摘する。

その文字はモノクマが大広間の傍にあるモニターを通して映して全員が見えるようにしている。

確かに、文句のつけようがないくらい私の筆跡を真似されているのだ。

さすがにこのままではまずい。

「この ” 死 ” の文字、上の部分が飛び出してるだろ？これと殺人予告の ” 死 ” の文字はそっくりだ。これで証明できるだろ！」

「で、でもでもお、私が見た粕枝さんの手帳はもっと綺麗な字で書いてありましたし…… その破れた日記と特徴が一致したからといって粕枝さんが殺人予告を送ったとは限らないと思いますう……！」

幸いなのは痛い子扱いされていないことだろうか。なにか言いたげな左右田クンの目線が気になるが別にいいだろう。あとで思う存分突っ込んでくれ。

「そうそう…… 1つだけ類似点があったからといって私の字とは限らないんじゃないかな？ もう1つ…… どこが似てるかを指摘することはできる？ ねえ、日向クン」

「なら…… これだ！」

「この ” 日 ” の字だって下の線が横に伸びてるだろ？ 2つも一致する箇所がある以上、これはお前の字だ！ それに、俺はお前の字を見たことがある。粕枝、お前忘れてるだろ？ あのととき、お前はプライベートと人に見せる字は分けてるって言ってただろ？ そ

ツを肅清するがいい！」

勝手なことをいうメンバーは別にいい。

しかし、彼は別だ。日向くんだけは別なのだ。

困惑する日向クンの顔には僅かな恐怖の色。あのとときの、うろつき
の狂気を前にした私と、同じ表情。震える声。

分かる、分かるよ。怖いよね、知っている人物なのに得体が知れな
い…… そんな恐怖。

「ねえ、日向くん…… キミこそ重要なことを忘れてるよね……？」
にやにや笑いが張り付いたまま言葉にする。あのとときの織月もこ
んな気持ちだったのかな？

「筆跡が同じだからってキミが受け取った脅迫状は私が送ったもの
だって言うの？ クローバーの手帳を千切って書いたものだって？
私がそれを持っているから？」

ああ、晴れ晴れとして、面白くって仕方がない。

「…… それは違うよ？」

呟いただけのその言葉は、不思議とその場に大きく響いた。

「さあ日向くん。私の無実は紛れもない、キミが証明するんだよ！
覚えてるよね？ キミがユビキタス手帳をくれたときのことをさ！」

「そ、それは……！」

！
彼相手に絶対に勝てる反論を仕掛けるだなんて、なんて楽しいんだ

「お、おい日向…… どういうことだ？」

押し黙った日向クンに左右田クンが尋ねるが返事はない。

「あのととき私はね、手帳の残りページが少なくなっちゃって困ってた
んだよ…… モノミのおしおきに巻き込まれて日記帳も銃弾で穴だ
らけになっちゃったし…… その穴だらけになった日記をなんで十
神くんが持つてるかは置いとくとして……」

そこで一呼吸おき、続ける。

「…… その後日向クンと一緒に行動して、マーケットで日記帳の代

わりについて言つてユビキタス手帳をキミはくれたよね？ でもプライベート用の手帳もページが残り少なくなつてたからって私はクローバーの手帳を買つた……」

「粕枝おねえがその手帳を持つてた事実が変わらないでしょー？ 言いつにしか聞こえないんだけどー？」

煽りは無視無視。

所詮雑音台詞だ。私はその言葉に返答してやる義理などない。

「ねえ、日向クン…… 昨日の朝、殺人予告が届いて不安になつたんだよね？ リーダーになつた十神クンが狙われてるつて…… だから十神クンに相談したんでしょ？」

「な、なんでそんなこと!？」

日向クンが驚愕の表情で言う。まったく、案の定か。なんて分かりやすい子なんだ。

「分かるよ。この私が一番最初に仲良くなれたのが誰だと思つてるの？ キミと長いこと行動しててちよつとは分かつてるんだよ。昨日の朝、キミは明らかに顔色が悪かつたからね。昨日の私には見当もつかなかつたけれど、今やつと理由が分かつたよ。それに十神クンと行動したあと、私と一緒に島を回つたときは気分の悪さも軽くなつてたみたいだったし。あとはそうだな…… あれだけ警戒心の強いキミがやけにあつさりパーティーに賛成したり、十神クンのサポートをしてたからつていうのもあるかな……？ 最初から知つてたならその対応も納得できるからね」

「だからそれがなに？ 言いたいことははつきり言いなよ！」

「またも西園寺さんが噛み付いてくるがそれも無視する。」

無視されすぎて涙目になつてゐる。うん、なんかごめんね。

「えーとね…… つまり…… 粕枝さんは “ 殺人予告が届けられた後にクローバーの手帳を手に入れた ” つて言いたいんだよね……？」

「そうそう、ありがとう七海さん」

「そ、それじゃあお前さんには殺人予告は出せなかつたということか!？」

まあ、あの手帳はマーケットで普通に手に入るからアリバイ作りでもう一冊買ったんじゃないかって言われたら終わりなんだけれども。

これが日向クンがくれたユビキタス手帳ならガチャでしか手に入らないから完璧な証拠になるのね。ユビキタス手帳は特徴がなさすぎるブランド物だから……

「なるほどな…… その手帳は予告後に手に入れた物だったのか。なら俺の勘違いということになる……… すまない」

「えっ、え？　なんで十神クンが謝るの？　ちよつと…… キミがそんなこと言うのと違和感が凄いからやめてほしいんだけど……」

かなり失礼なことを言っているが私に鳥肌が立っているのは事実。

いつもは傲慢な御曹司キャラだから、彼が謝るなんてイメージはない。さすがにそれは気持ち悪いからやめてほしい。

「つまり、どういうことっすか？」

「ここまで話したのに、何一つ分かってないのと一緒…… ってことでしょー？」

「そっか…… じゃあ別のアプローチを試みないと…… ダメなのかもしれないね」

七海さんが言ったその言葉で、その場ではまた初めから考え直すこととなった。

「まあ、私が停電を仕掛けたのは確かだからね…… それで電源コードを使ってあそこまで行ったのも事実…… あのテーブルのところで刺されたのは確かだよ」

「新たな議題か…… ならば銀のナイフが血に塗れていない理由はどうだ？　あれが凶器なのだろう？」

「そ、そ、それは違いますうー！」

おっと、ここで罪木さんか。

凶器の話題に彼女が出るのは当たり前といえば当たり前なのだが。「ゲロブタは黙ってる！　あんたと同じ息吸ってるだけで気持ち悪くなるんだよー！」

「ひゃっ、あの…… そのっ…… も、もういいですう……」

「いやいやいや、罪木さん頑張って！　それ言ってくれないと私死ん

じやうから!」

「は、そ、そうですねえ…… えへへ、頼ってもらってる…… 狛枝さんに…… えへへ」

恍惚の表情でとても嬉しそうに身をよじっている。まったく、本当に歪んでいるな、この人は。

「で、えーと…… 罪木、言いたいことはなんだ?」

「くだらんことならば言うなよ」

なんでそこで釘を刺すんだ! 彼女が話さなくなったらどうしてくれるんだよ!

しかしそんな心配もいらなかったのか、とろけた顔で放心していた彼女はハツとして慌てて言葉を続けた。

「っは! あ、その…… 凶器のことなんですけれど…… 本当に、ナイフが凶器なんでしょうか……?」

「はあ!? 違うのかよ!」

左右田クンが叫ぶ。

「その…… 狛枝さんの左手は直径5mmくらいの鋭い刃物で貫通しています…… ですからナイフはありえないんじゃないかと思うんです……」

「ツチ、そこから考え直しさせられるのかよ…… 俺は関係ねーんだからさっさと解決しろっての」

無実が決まってからは傍観を決め込んでいた九頭龍クンが、うんざりとした様子でそう言った。

「ちよつと、そんな言い方することないじゃん!」

「九頭龍…… あまり和を乱すな…… そんなことではまた疑われてしまうぞ」

小泉さんが批難し、辺古山さんは冷静に論じた。

そうすることで再び舌打ちをした彼は押し黙る。

「5ミリ? って言ったら爪楊枝とかみみたいなヤツってことか?」

「ねーよ! 爪楊枝は5ミリもないからな!」

終里さんも考えてくれてはいるがなんとというか、うん。頭脳労働は向かないよね。

「アイスピックとかならマーケットにもあった気がするけど……」
「千枚通しもあったす！暇つぶしに工作しようとしてたら意外と高くて…… 雑誌の方にメダルを使っちゃったす！ てへりん、唯吹ったら集中できなくて困るっすねー！」

花村クンと澤田さんが候補をあげるがどれも空振りだ。

というより、どこから刺したかを確定しないと凶器の幅が大きくて特定できないのだ。

「あとは……」

と、十神クンが置かれたジュラルミンケースに目線をやったところでその話を遮った。

「えっとね、まずはどこから狙って私を刺したのか…… それを解き明かすことで凶器も一緒に分かると思うんだ」

「狛枝はどこから刺されたのか…… 分かってるのか？」

日向クンが一向に答えを教えない私に訝しげになっているのが分かる。しかし、教えるわけにはいかないんだよね。

「暗闇で ” 上下 ” もあやふやだったしねえ…… でも、テーブルの近くで刺されたのは確かだよ？ 外を調べてた七海さんなら…… 分かるかもしれないね」

「…… あ、そっか…… 必ずしもテーブルの下で狛枝さんを刺さなくてもいいんだね？」

「そうそう…… 七海さん、外で調べてたでしょ？ だからそこかなーって」

「つまり、どういうことだ？」

あはは、日向クンが混乱してる。

七海さんは多分天然だろうが、私のは確信的犯行だ。

…… ちよつと楽しくなってきた。

「テーブルの下だけど、テーブルの下じゃないところだよ……？」

「ほら、田中クンもそこにいく方法を探してたよね？」

「おいお前ら、なぜ遠回しのヒントなんだ」

なんでって…… 面白いから？

あの十神クンを突っ込みに回させるとは七海さんも侮れないね。

え、私も？ ほら、私は確信犯だからね。

「えーつと…… 黙秘権を行使します？」

「うーん…… ねみい……」

「寝るなよ！ まだ討論中だぞ!？」

「無視…… だと……？」

あ、意外とシヨック受けてる。

「そうか、分かったぞ！ 床下 だ！」

日向クンが頭をぐりぐりとしながら考えていたが、どうやら閃きア
ナグラムは成功したらしい。

それからはわりととんとん拍子に議論が進んでいった。

床下に行く方法は田中クンが失くしたはずのイヤリング…… 魔
犬のイヤリングを身につけていることで証明し、床下には倉庫から行
けることが判明したのだ。

彼に確認してみると、床下の天井には一箇所だけ蛍光塗料が塗ら
れ、暗い中で一箇所だけ丸く光って光っていたようだ。

「闇の渦巻く中、鈍く光る物体…… あれこそ、犯人が用意した目印に
違いない！」

「そっか、凧ちゃんが用意したナイフを取って、蛍光塗料の光が動いた
瞬間を狙えば刺せちゃうのね」

「凧っちゃんの計画を乗っとうとしたんすね！ まるでマウンティ
ングしたがる犬っすね！」

「でも、あのナイフを取るにはテーブルの下に入らなくちゃいけない
と思うんだけど…… どうして粕枝さんは無事だったのかな？」

花村クンがそれを言うのか。

いや、仕留めたと思っていたからこそ、なのかな？

「そりゃあ、対策しておいたからね」

「対策だど？」

「そう…… 裏に蛍光塗料がついた絨毯の切れ端があったでしょ？」

そう言えば暫く考えた風だった日向クンが納得したように頷いた。

「…… そうか、それをナイフの真下に置いておけば下から見てる犯
人には、ナイフが取られても分からないのか！」

「そ、だけど表にも塗料を塗るべきだったって後悔してるよ。おかげで触っちゃって少し動いちやっただよね」

本当はナイフを取る気なんてさらさらなかったから、故意にズラしたんだけど…… まあここはうっかりということにしておこう。

故意にズラすことは血に見立てた赤いペンキを用意していたことでバレバレだが、自信満々に言っておけば大抵の人は違和感を抱かない。

それでも気づかれてしまったら連鎖的に悪事が暴かれていくだろうけど。

「そうして動いた目印に向かって一気に凶器を刺す…… なるほどな」

こうなることを予見していたからこそ、マーケットの袋に赤いペンキをたっぷり詰め込んで、絨毯の切れ端の上に乗せておいたのだ。人を刺した感触とじゃあ随分と違うと思うが、今回は上手くはまったからよしとしよう。

犯人が都合よくそんなチャチな手で騙されるかについては、私自身の幸運を信じた。

暗闇の中、誰かを殺すために凶器を突き上げる。

刺した感触が変だとしても、上からビチャビチャ液体が落ちてきたらそれは血だと錯覚するだろう。肉を捌くのに慣れてると言っても、殺人を犯したことのない彼なら尚更だ。

強烈な匂いで違和感を抱くかもしれないが、そこはいつ停電が復旧するか分からない焦りから失念するところだと判断した。

だから全てはダミーの証拠品。殺人未遂には全く関係のない、人死に出ないための陳腐な仕掛けだ。

「しかし、床下で刺した方法は分かるんだが、じゃあどうやって倉庫まで行っただんじやあ！ 廊下も真っ暗闇だったんじやろう！」

「そーだぜ！ オレもなんとか事務室までブレーカーを上げに行きたかったんだけどよオ、廊下に出るだけで精一杯だったんだ。そんな状態で倉庫まで行ってさらに床下に入るなんて、常識的に考えて無理だろ！」

「常識的に考えて普通にできると思うよ? …… 灯りを使えばね」
そこは議論をすつ飛ばす。

たった一言でばっさり反論を斬られてショックを受けている左
右田くんはさておき、さっさと進めるとしようか。

もう日向クンとの勝負が終わっているし、楽しみはなくなった。私
は基本的に生以外のことには興味がないからね。

「灯りを使ったら廊下に出ていた左右田さんや…… ブレーカーを上
げに行った十神さんに見つかってしまわないですか?」

「あ、えとそれなら…… 防火扉がありましたからあ…… 灯りを漏
れないようにするのもできるんじゃないかと…… うゆう、で、出過
ぎたことを行つてすみませえん!」

「いやいや、いいんだよ。ありがとう罪木さん。ま、そういうことだ
よ」

「それに十神の “ やめろ ” って怒声から推測すると、犯人が何か
してから十神は行動していたみたいだな」

え? あ、そうなつちやうの?

えー、面倒だなあ。

「さっき、私がナイフを取りに行つたつて…… 言つたよね? あの
とき私はそれを止めようとした十神クンに突き飛ばされちゃったん
だ。だから悲鳴も上げたし、丸テーブルに突っ込んで…… 電源コー
ドもどこにあるか分からないし手の平が痛いしでなにもできなかつ
たんだよ。突き飛ばされる瞬間に…… つまり十神クンに見つかつ
て私の行動を咎める声をあげてから私は刺されたはずなんだよ」

そういえば言つてなかったからね。

「ん? じゃああれは狛枝を止めようとしたときの声だったんだな
……」

「ま、そういうことだから…… 多分そのあとの “ これは…… お
い、待て!” の方が犯人を追いかけて廊下に出て行こうとした声だ
ね。で、そのあとに左右田クンも廊下に出る、と」

なんか喋りすぎたような気がするが……モノクマは沈黙している
し大丈夫か。

「廊下に出ることができて…… 防火扉を使つて倉庫に行くことができた人物…… これだけで大分絞れた…… と思うよ？」

「ああ、そうだな……それができるのは……」

日向クンが私のときよりも、私のときよりも……！ 大分躊躇ってから彼を、今回の殺人者うらぎりものを指差した。

「花村、お前だ！」

No. 16 『学級○○』―決着―

どうしよう…… この状態。

その後すぐに反論し始めた花村クンは段々と口調を崩しはじめ、そしてその場はカオスに包まれた。

「しじみがとうるるって、ぼかあはくなまたた！」

通訳がいない。

「えーとー……」

追い詰めたのはいい。

しかし、少々追い詰め過ぎたのか、彼はかなり意味不明な言語を操ってこちらを翻弄してくるのだ。本当にどうしよう。

頭を抱えるが良い案はなかなか思い浮かばない。こんなときにモノミがいれば通訳してもらえるのに！

「うぎやあああ！ 輝々ちゃんが狂ったああああ!? どなたか通訳できてる方はいらっしやいませんかああああ!?!」

「あ、わ、私医者のお卵ですう！」

「ちげエよ！ 確かにそのフレーズは医者想像するけどよ！」

花村クンの無茶苦茶な言動のせいか、他の皆の言動もおかしくなってきたようだ。

それに私はつられて笑いつつ話を続ける。

「モノミはどうかかな？ 一応教師なんだし、生徒の地元くらいは把握してるんじゃない？」

「ですが、これはモノミさんでもさすがに分からないのではありませんか……？」

「ソ、ソニアちゃんは何ヶ国語も話せるんだよね。その…… やっぱり分からない？」

「申し訳ありませんです、わたくしにも皆目見当がつきません」

「ボルテツカアアアアア!!」

もはや別の言語である。

ことの発端は日向クンによる追求である。

暗い廊下を攻略するための、電気を使わないカセットコンロとそれがバレないための防火扉。

廊下に出ている左右田クンに見つかからずに倉庫まで行けるのは、厨房から向かった場合だけだ。なぜなら、大広間の前の廊下と厨房までの道にしか防火扉がないからだ。

防火扉の本来の用途を考えれば当たり前のことだろう。あれは厨房から火事が発生した場合に火が広がるのを防ぐ役割がある。

おまけにカセットコンロは厨房にあった1セットだけときた。ここまで揃えばは言い逃れは難しいが、“ 狛枝凪斗 ” のフォローのない状況で彼は一足早く方言丸出しの状態となっているのだった。

「停電とききやーのぼかあゆーったこつちやドドブランゴ！」

「あ、これはなんとなく分かるかも？」

「停電のときに花村クンが言ってたことはどうするのか…… ってことかな？」

私が怪我をしたあとに聞こえていた科白のことを言っているのだろう。厨房だけが停電になったのではないのかと、そんな言葉が暗闇の中で響いていたのだ。

「『つみ、みんなー、どこにいるのー？ て、停電って……厨房だけじゃないのー？』 って、確かに聞こえてたっすね」

「花村の声が…… 大広間で上がっている？」

澤田さんが思い出しながら復唱すると辺古山さんが初めて知った事実の驚愕の表情を浮かべた。

「でも、花村って停電の瞬間は厨房にいたんでしょ？ それが、どうして大広間にいたのよ？」

小泉さんが疑問気に言うのと、つまりながらも花村クンは説明する。「て、てつきり厨房だけが停電になったのかと思って、慌てて飛び出しちゃってさ…… 勿論、廊下も真っ暗だったけど皆の声を頼りになんとか壁沿いに移動したんだ」

「まあ、厨房から大広間であれば、壁伝いに移動できない距離ではない

が……」

「なーんかウソくせーなあ!」

彼の言葉に疑わし気な声色で言う式大クンと終里さん。

「けど、輝々ちゃんの声は確かに大広間で聞こえてたよ! 唯吹のキャラ設定に懸けて断言するっす!」

「…… 本当にそうなのかな?」

「…… うん、狛枝さんの言う通りだよ。これもきつと」どこから刺したかの問題 “と一緒だと思うんだ。”

私の言葉に同意を示した七海さんはこてんと首を傾げる。

その視線の先には答えを挿んで頷いている日向クンがいた。

ついでに黙ったまま日向クンを観察している十神クンを見る。どうやら流れは全て日向クンに任せているようだ。

「どうしてだよ…… どうしてみんなしてぼくに言いがかりをつけてくるんだよ!」

「そりゃあ、死にたくないからだよ」

私の淡々とした言葉に花村クンが絶句した。

真理のような真実をただ告げる。暗い笑みで、自身に死をもたらそうとしている彼を視界に入れて、虚ろになっているであろう瞳にありったけの恨み辛み…… ついでにモノクマに抱いている敵意や憎しみも乗せてからただ見つめる。

彼を怖がらせるポイントは決して睨まないことだ。そうすることでこちらの精神がやられているのだと認識させ、暗い瞳の中に潜ませた悪意に気づかせる。

デメリットがあるとするれば、それに気づいてしまうのが花村クンだけではないことだろうか。

「バレたって犯人は死なないんだよ? なんになんで認めないの? 嫌われるのが怖いから? そんなの、死ぬことに比べたらちつとも怖くないと思うのだけど…… まあそれはあとにしようか…… 日向クン、彼に止めを刺してあげてよ。こんなの、さっさと終わらせて話し合いでもしよう」

「ま、まだ、ぼくが犯人だときま決まったわけじゃ……!」

「…… 大広間の声のことだけど」

ひどく言いづらそうに日向クンが話し始める。

「…… この床は木が縮んで隙間だらけになってるだろ？ これなら床下から声をあげても皆に聞こえるはずだ。証拠は、停電したとき床下を覗こうとしてた七海だ」

「…… あべばべっ!？」

そう、今回の停電では七海さんがしゃがみ込み、床下に近い位置にいたのが重要なのだ。これにより、彼の主張はあっけなく崩れる。

「確か…… 七海は停電の中、なにかは分からないが違和感を感じてたんだっただな」

「…… うん、今思えばあの違和感って下から声が聞こえてきてたからだったんだね」

「そうか、あえて床下から声をあげ、その場にいることを印象付けようとしたのだな？」

「そうなの、花村？」

辺古山さんと小泉さんの、女性2人の声に彼の肩が震える。

「ちよ、ちよつと待ってよ!」

「ど、どうなんですかあ、花村さあん!」

「話を聞いてよ……」

「おい、どうなんだよチビ」

彼の顔が俯き、ギリリと歯をかみしめるような音が響いた。

「ちよつと待ってちゆうとろおがああああ!!」

「あー、また輝々ちゃんが狂っちゃったすううう!」

せつかく普通に戻ってたのに! と澤田さんが頭を抱えて叫んだ。
「きさんら、さつきからなにおう抜かしてるかあ! ぽかあ停電とききは広間にいたゆうとるやるがつ!」

「あ、でもさつきのよりは聞きやすいかも……」

「程度の問題じゃねーだろ!」

「絶対都会出身じゃないよねー?」

「どこ弁当なのでしょう? わたくしも、検討つきかねます」
「弁当!?!」

「〃当〃はいりませんよソニアさん……」

どこ出身なのかの議論が密かに始まっているがそれは置いて、
「ふう、ふう……その違和感がぼくの声だつて確信はないんじゃないか！ あ、あのあとすぐにまた廊下に出て、事務室に行こうとしてたからぼくは大広間にいなかったけどさ！ まあ、その前に停電は回復したんだけどね……」

自身の出身を推測されているせいか無理やり標準語に戻した彼が言う。

その言葉に彼が十神クンと一緒に来たことを思い出す。

確かにこの言葉だけを聞けば大広間の前の廊下で十神クンと合流したように思える。だが、それは不可能なのだ。

「残念だけど〃詰み〃だよ花村クン」
チエックメイト

酷薄な笑みを意識して、私はそう言った。

「花村……証言のとき、お前は言ってたよな？ 停電が終わったと

き大広間の、すぐ前の廊下にいたって……」

「そ、そうだけど……」

その言葉に左右田クンが素早く反論しようとしていたが、それだけでは材料が足りない。視線を送って彼に見えるようにバツテン印を小さく作った。

一応気がついたらしい彼は不思議そうな顔をして一步出ていた足を戻し、言葉を飲み込んでいる。

「そのとき、そばには誰かいたかな？」

「いなかった、と……思うけど……」

そう、大広間の廊下まで誰にも会えなかったのだから彼はそう言うしかない。しかし、それではおかしいのだ。

「じゃあ左右田クン、どうぞ」

「え？ あ、ああ……あ、あのときはオレも停電が終わったときは廊下にいたぞ？ だけど花村はそのときいなかったな」

「う、うううう!？」

左右田クンは停電をなんとかしようとする事務室に向かっていた。そして、辿り着けずに停電は終わった。彼らは停電が終わったとき、大

広間のすぐ前の廊下にいたのだと同様の証言をしているのだ。そして、左右田クンはそのとき見回しても誰もいなかったのだとも言っている。

今回の停電では十神クンも外に出ていて罪木さんが転んだときのエピソードを話に出すわけにはいかないのだ。そのときいなかったのは十神クンも同じだからだ。ならばどうすればいいか？

証言は十分な距離をとって行ったために互いにどんな証言をしたのかが皆は分からない。それを逆手にとって嘘を吐けば吐くほど自身の首を締める状況を作り出したのだ。

さらに、花村クン自身から誰もいなかったと証言させることで左右田クンの証言に重みを持たせる。

左右田クンは停電復帰後すぐに大広間に入ってきたから犯人だという可能性は微塵もないのだ。

これは決して私だけの力でできたことではない。十神クンや日向クンが効率的に彼を追い詰め、さながら将棋のごとく王手をかけたからこそできたことだ。

あとは言い逃れが決してできないよう、彼がクロである証拠品を提示するだけでいい。

ちらりとモノクマを見ても我関せず。

どうやら、ここまで花村クン犯人ムードが流れていると覆りようがないからか、私が議論のショートカットをしようとしてもボツシュートにはならないようだ。

「直径5mmで、床下から届くとしたら50cm以上は必要だとすると…… 凶器は大方 “ 鉄串 ” だろうね」

「えっ、鉄串!？」
「ああ、パーティ前に花村は鉄串が最初から一本欠けていたと言っていたな」

やっと喋った十神クンが腕を組んで偉そうに言った。

「その欠けていた鉄串が凶器なんじゃない！ しかし、ならその凶器はどこへ行ったんじゃないあ？」

「おい花村！ その鉄串をどこに隠したんだよ！」

式大クンに合わせて終里さんが拳を打ち合わせながら、さながら脅しのように言う。

「あ、ああ、あああああ！」

「あ？」

誰かが尋ねた。

すると花村クンは泡を吹きながら叫ぶ。

「あびりるらびーん！！」

「アヴリルラビーン！」

「なに真似してんだモノクマ！」

「えー？ 面白いからいいじゃーん！」

モノクマが叫びに便乗してその手に持った肉を掲げる。いつの間

に。しかし皆はまだ気が付いていない。それ以上にインパクトの強い花村へと視線を向けているためだ。

「意味不明なことと言って誤魔化してるだけだろ！ さては、島のどこかに処分しやがったな！」

「あ、ポイ捨て禁止のルールがあるからそれは無理だと思うよ」

モノミがいないので代わりに私が言う。モノクマは言う気がなさそうだしね。

「えー？ 皆してウサミストラップ投げ捨てたときは大丈夫だったでしよー？」

「…… あれは多分目の前に本人がいたからじゃないかな」

やるせない顔をしたウサミを思い出す。うん、やっぱ可哀想なことをしたかもしれないね。

「日寄りちゃんはどう？ 見張りしてるとき、花村が来たりした？」

「ううん、来てないよ。だから外に凶器を持ち出すのは無理じゃないかなー？」

「つまり、この旧館のどこかに未だに隠されていると考えていいのか」
辺古山さんの言葉で辺りを見回す。

端に避けられてはいるが、大広間は相変わらず汚い阿鼻叫喚な状態のままである。

「お尻に挟んでないっすか？」

「そ、それは物理的に無理なんじゃないかな……」

「隠蔽するならばその者のテリトリーに置きたがるだろうな。テリトリー外で結界を設置するのは凡人には難しいだろう」

「花村よお、漢らしく潔く言ってくれんかのお？」

「お、おとおおとおお、お……」

おっと。

「おじやんばらのでふでふもんば、かつぺんなぞぶっこみらるぶすもんぞー！」

「……おーい、モノクマー」

さすがにこれは分からない。

というところでモノクマに全てを丸投げすることにした。

「えー、めんどくさー。えーとねえ、〃ド田舎のイモヤローが何を抜かすかー！〃 だつてさー。うぷぷ、とんだブーメラ……」

「だまらつしやああああい！」

「あ、うん分かった。ありがとう……」

「やっぱり私たちが突き止めるしかない…… かな？」

日向クンが考え始める。

やはり1番の隠し場所は厨房だろう。厨房ならば彼が全て把握しているし、他人が勝手に探し回ることも滅多にない。

事実、捜査の際も、パーティの前も調べたのは十神クンと日向クンだけなのだ。

「きよ、凶器なんてどこにあんだべさあ！」

「鉄串の隠し場所は…… 骨つき肉の中だ！」

苦し紛れか、罵詈雑言の嵐と共に吐き出された言葉は、真つ直ぐとそれに対抗した日向クンがあっけなく打ち砕いた。

「なな、ななな、なに言ってるんだよお！ そんなとこにぼくが隠すわけないじゃないか！」

「さすがにそれはねーだろ！ だ、だつて食い物の中だぞ!! そんな勿体無いことそいつがするはずねーって！」

「そうだね、〃超高校級の料理人〃 いや、シエフかな? ……」

が、食べ物を粗末にするようなことをするはずがないって、誰もが思うだろうし」

私の言葉に続くように十神クンが口を開く。

「ああ、そこは俺も信頼していたからな。調査不足になってしまったようだ。しかし、食べ物を冒瀆するようなその行為、許さんぞ」

「う、ううう」

ギン、と睨みつける十神クンに怯んだ彼が涙を流し始めた。

その彼の頭に乗ったシェフ帽と、エプロンについた三つ星バッジがまるで埃を被ったかのように見える。

帽子は事実床下に行つたときに汚れたのかもしれないが、バッジの方はキラキラと光っていた面影もなく、彼の心や行いと同じく黒ずんでいるようにも見える。

「シェフの名誉やプライドを捨ててまで、キミは私を殺したかつたんだね……」

震える肩。ガクガクと鳴る膝。

目は恐怖と罪悪感に染まり上がり、無意識に思い描いていた“脱出”の希望を打ちくだく。そして出来上がったのは絶望にも似た失意の表情。

その表情にモノクマが満足そうにしているが、そうは問屋が卸さない…… が、それはあとだ。

「さて、モノクマ。その食べてる肉が例の骨つき肉でしょ？ 中身はどう？」

「もふつもふもふもふ…… いやー、やっぱり締めたての牛肉は美味以外のなにものでもないよねー！」

「ぎゃあああ！ クマが肉食ってるううううう！? って、よく考えたら普通っすね」

「お、オレも食いたかった……っ！」

がくりと終里さんが膝をつく。

同時に十神クンも愕然とした様子でモノクマの食事風景を見守っていた。

「もふっ、なにこれ、うまいもんだなあ…… 生まれて初めて食べたよ

。なんて言うかその、野生の頃を思い出す味だ」

「野生ってなんだよ！ オマーぬいぐるみじゃねーか！」

「うーん、30点！」

「なにがだ!? 肉がか!? それともオレのツツコミか!？」

「5点！」

「オレかあああああ！」

左右田クンはドンマイ。

そうしているうちにモノクマが肉についていた骨を綺麗に抜いた。

肉を支えていたはずのそれは、どんなに綺麗に食べても筋の1つは残りそうなその骨は、まるで初めから肉から切り離されていたようにツルツルなままだった。

「おやおや？ なんかお肉の中から…… こんなん出てきましたけどー！」

それは、骨の柄をした、鉄串だった。ツルツルなのは当たり前だ。骨の部分は両端だけ。それ以外はカモフラージュに必要なかったのだ。

もう片方の骨には焼き鳥に使う小さい串がついていた。それで骨が落ちないように固定していたようだった。

「あばばば、あぶ……」

「それって!？」

「鉄串…… ですよね？」

「あ、骨の部分が取っ手になってるんだ。凝ってるね……」

「肉が鞘となり骨が柄となる破滅の剣！ それで粕枝にカタストロフィをもたらそうとしたのだな！」

はっはっはっ、という高笑いが響く。

その無駄に高いテンションが羨ましい限りだ。

「ぼ、ぼくはぼくはぼくは…… ! 違う、ぼくは人を殺そうとするよ
うな人間じゃ…… そんなはず…… う、ううう…… ううううう
…… !」

今にも泣き出してしまいそうな彼に、親切でもなんでもない、ただ後押しとして、私は言った。

「後から後悔することなんてできないんだよ…… 所詮、キミは他人を犠牲にして別の結果を求める人間だったってことだね」

「う、うわああああ……！ うわああああん！」

「お、おい狛枝…… それは言い過ぎだぞ」

「はい、話し合いはあとでしてねー」

泣いている花村クンや、修羅場に入りそうな私たちを見やりモノクマがそれを制する。

「投票の結果、クロとなるのは誰か!? その答えは正解なのか不正解なのかー!? うぷぷぷつ！ ワックワクのドッキドキだよね！」

そして投票の説明を交えながら話し、結果がギルティの文字が浮かぶスロットのような機械によって出た。

しかし大量のメダルは出ず、結果だけが示されているように、この現実では1日に1度支給されるメダルだけが私たちの生活費らしい。なのに日向クンにだけはカクレモノクマを発見することによって10枚ずつあげているのだから少し羨ましく思う。

これが主人公特権というやつか。

必ず誰かに投票しなければいけないルール故か、花村クンはまだ認めたくないのだと言うように私へと投票したようだ。

「はーい、大正解でーす！ 1人潔くないのがいたみたいだけど……
そう！ 今回のコロシアイ…… もとい狛枝さんの殺人未遂事件のクロは、花村輝々クンなのでしたー！」

「あば、あばばばばっ」

「マジかよ…… よりにもよってお前みたいなのが殺しをしようとしたってのか……？」

分かってはいたようだが、それでも信じられないとばかりに九頭龍クンが呟く。

場はしつとりとした悲観ムードへと移行してしまったようだ。

「ぼくは…… ぼくはただ、ただ皆を助けたかっただけなんだよ……
なのに、なんで、ぼくは人殺しなんかじゃ…… う、ううう……」

「なんでオメーみたいなのがそんなことしようと思ったんだよ！」

「ぼくは…… 人殺しを企んでた狛枝さんを、止めようとしただけな

「んだよ！」

「……」

とうとう泣きながら吐露し始める言葉に私は黙って耳を傾ける。そして機を待つ。最初の目的は達成したも同然だが、彼の心を完全に折っておく必要があるのだ。

……そして私という人物を、皆知ることになる。

「止めようとしたって、どういうことだ？」

「ぼくは…… 朝から旧館で料理の仕込みをして、そ、そしたらね……」

時折混じる嗚咽が痛ましい、が、私の心は一切痛まない。彼から視線を背けたままポケットに手をつっ込んだ。

とんだ不真面目な態度だが皆は花村クンの話に夢中になっているから構わないだろう。

「大広間から笑い声が聞こえて…… 気になって覗いてみたんだ……」

そしたら……！そこで見ちゃったんだよ。掃除当番だった粕枝さんが、テーブルの下にナイフを仕掛けているのを……！な、なんか嫌な予感がして…… それで、そのまま様子を見てたら、マーケットから持ち込んだアイロンを倉庫に置いたり、エアコンのタイマーをいじったりして、ずっと一人で笑って…… だからぼく、問い詰めたんだよ…… そ、そしたら！ そしたらさあ！」

ああ、それね。

あのときは大変だったなあ、一人でずっとニヤニヤしてるって結構きついんだよね。

あのときは確か…… 彼を勘違いさせるために言葉を選びながら話したんだっけ。



「あ、バレちゃったかな？」

悪戯がバレてしまったような、そんな爽やかな表情を浮かべて私はそう彼に言った。そして用意していた科白を次々と吐き出して言ったのだ。

「ば、バレちゃったって…… なにしてるの!? どういうつもりなんだよー!」

「勿論…… やるつもりだよ?」

「…… え?」

「花村くん…… 言っておくけど、私を止めても無駄だよ。たとえ今止めたとしても私は絶対にやってみせるからね! うふふ、皆の驚いた顔が楽しみだよね? あ、そうそう…… バラしちやだめだからね。それじゃあ楽しめないでしょう?」

そうしたら人差し指を口につけて、しい、と言うと彼は途端に怒り出して「ふざけてるの!」と叫んだんだ。

「な、なんだよそれ! いくら出たいからってそんなの…… つ!」

「…… そうか、そう思われちゃうんだね……ま、それはそれとして…… ねえ、キミはこの島から出たいって、思う?」

私に語る希望だなんてない。だけれど、彼にはその希望があるはずなんだ。だから、そつとあと押しをした。

「そりゃあ、出たいよ…… 残してきた、病気がちのお母ちゃんが心配だし……」

「その別れから2年も経ってるんだよね…… 心配だよな? 無事だって、見て安心したいよね? 私も心配だよ、安心したいよ……」

私の言葉は途中で途切らせて、「でも、私がないほうが安全だから」という言葉は飲み込む。

「だから、ね? 心配することも大事だけどさ、今はそれを吹き飛ばさなくっちゃ。そう思わない?」

うふふと酷薄な笑みを浮かべて彼を誘う。裏切り者への道へとゆっくり。

真意と嘘は決して言わず、曖昧な言葉と彼の勘違いだけで進んでいった会話は、私自身へ最後の保険を作る。

そして、今に至るわけだ。



「こ、粕枝…… どういうことだ？ お前の、こんなことを計画したお前の動機はなんなんだよ！」

「曖昧すぎて分からないって？ 今ので分からなかったんだ？」

「あ、会いたい人がいるんじゃないんですかあ？」

「ううん、それは違うよ罪木さん」

目を伏せる。

そして、罪木さんに言われた “ 会いたい人 ” を…… 織月を、うつろちゃんを、そしてメイの姿を思い、そつとその思考を放り捨てる。

今は必要ではないからだ。

私は友達を守るために友達を捨てることにした。

大切な人を守るために遠ざけた。

大事なひとたちは、私にとつての最高で最悪のタイミングで、シユチユエーションで死んでしまいうに違いなからだ。

全てを捨てて守ると決めた。

青空の下で、あの人たちが幸せに生きられるのなら、私はただ生きているだけの状態になってもいい。

そう、決めた。

だから、この島で感じた心地良い優しさも、友達になろうとされる皆のことも、理解しようとしてくれるその姿勢も、全てを拒絶してただ生きたい。

だから、今から芽生えかけた私への友情きぼうを踏みにじる。摘み取る。そして、手折る。育つ前に根元から。そのほうが、皆のためでもあり、私のためでもあるのだ。

「…………… 動機？ 私の……？」

俯いて視線を伏せたままに呟く。

なにかを押し殺しているようにも見えらるだろうし、あるいは推理物に慣れた人ならばお約束の発狂がこのあとに来るのだと予想するかもしれない。

そしてぐるぐる巡る思考で言いたいことを全て纏め、そして準備する。

なんとなく、絶望していた罪木さんの気持ちが見えるかもしれない。

皆は優しい私を好んでいるだけで、本性を、本質を知ってしまったらきつと離れていくのだ。それがなんだか嫌だ。

どちらも知って、それでいて認めてくれる人などいないのだ。

そうしてくれた人にはもう会わない。

だから、遠慮はしない。

そう、皆私を嫌いになればいい。そして、ありったけの恐怖を感じればいい。生きたがりに手を出せばただでは済まないと思えばいい。そうすれば私は死なない。殺されない。安全だ。

周りからは、誰もいなくなるだろうけど。

「私の動機が…… この島からの脱出だって、外の世界に出ることだって…… 言いたいなの？」

俯いたままでこぼす。

その言葉に 「それ以外にねーだろーが！」 と九頭龍クンが悪態をついた。

ついに顔をあげると、皆が顔を青ざめさせているのが見えた。睨みつける日向クンに、十神クンに、珍しく眠そうでない七海さんに、順に視線を移動させて口角を上げる。

そして、感情の爆発と共に吠えた。

「あはっ、あはははははは！ 違うよ全然違う！ 見当違いもいいところだよ！ って言うか、むしろ逆なんだよね！ 皆勘違いしてるみたいだけどき、私はこの島から脱出することになんか、欠片も興味がないんだ！」

「お前の目的はなんだ？」

淡々と、十神クンが言った。

私はそれに反応するように高くなった声がある程度落ち着かせ、皆に言い聞かせるように、浸透させるように一気にトーンを下げた。

「最初にウサミが言っただけは覚えているよね？ 平和で平穩で……何一つ危険のない生活…… 死と隣り合わせじゃない、普通の生活……なんて」

きっと皆は刺激が足りないのだと言う私を想像しただろう。しかし、私はそんなことを言うような頭のおかしな犯罪者ではないのだ。

「……なんて、なんて素敵なんだろうね！ もしそんな生活ができたなら幸せ以外のなにものでもないよ！ 他になにもなくたっていい…… 私はただ “ 死の危険のない完全で絶対的な平穩 “ がほしいだけなんだよ！」

「そ、そんなの分からないじゃない…… 完全な平穩かなんて、分からないわよ…… どうして、凧ちゃん……」

小泉さんにはとてもお世話になった。

だから怖い目にあわせないように、目を伏せて体を抱きしめて表情を隠す。

興奮で紅潮しただらしない表情は別に構わない。しかし彼女に濁った瞳を向けることだけは憚られた。

「本当に安全か断定できないって？ 証拠なんて、私達全員がこの島に辿り着いている事実で十分じゃないかな？」

その言葉に疑問を抱くのは殆どの人物が共通したのだが、左右田クンの反応だけは他の皆とは圧倒的に違った。

「 “ 超高校級の死神 “ …… オメー、そんなに……」

私の性格を知り、事故の全てが不本意であることを知った彼の瞳は、同情の色をしているのだろうか？ 窺い見ることができない今の状態では分からない。

「そう、私はネットなんかでは “ 超高校級の死神 “ だなんて不名誉な呼び名がついているんだよね。ま、本当の才能は “ 幸運 “ なんだけど…… 私の幸運の才能はある意味理不尽でさ、私が大切だと思った人は、ことごとく死んじゃうんだ。その代わりに宝くじに当

たったり莫大な遺産を手に入れたり……不幸と同じくらいの大きな幸運がやってくる。この才能は制御なんてできない。だからこそ、私は1人で暮らしてたわけだけど」

チラリと日向クンを見る。

多分彼はできるだろうから…… なにがとは言わないが。

「まあ、そんな感じで飛行機に乗ったり船に乗ったりすると決まっても不幸な事故が起こるんだよ。ね？ 証拠になるでしょ？」

「あばばば、も、もう唯吹限界つすう……」

「わー、なんか電波っぽいこと言い始めたよー？ 語っちゃってさー、恥ずかしくないの？」

全ての言葉を受け流し、そして続ける。

「この島に飛行機で来たんだったら隕石も落ちてこなかったってことだし、不時着も、ハイジャックも…… バードストライクも、積乱雲も、燃料不足も、整備不足もなにも起こらなかったってことだよ！

安全に、辿り着いたってことだね」

「じ、人生でそんな波乱万丈な事故に見舞われ続ける可能性なんてどれだけだよ…… あ、ありえねー」

左右田クンなら、飛行機に乗っただけでこれだけのトラブルに見舞われる私のありえなさが等身大で理解できるだろう。

なにせ彼はメカニック。整備の大切さなんて当たり前に知っているし、日本の技術者がそれに手を抜かないことも知っているだろう。なのにこれだけのトラブルに見舞われる私の存在は衝撃だったよ
うだ。

「船でも同じことだよ？ この私がいって、なにも起こらず何事もなくこの島に辿り着いたことこそが奇跡に等しくて、とっても素晴らしいことなんだ！」

バツと顔を上げる。

その顔は恍惚に歪んでいるだろう。

「だから私はモノミのあの言葉を少なからず信じてるんだよね。私の幸運の恐ろしさは、左右田クンなんかがよく知ってるんじゃないかな…… ま、記憶も少しは気になるけどね…… それでも私が外に出た

いだなんて動機にはなり得ない！ だって私は一生ここで暮らしたいくらいなんだからさ！」

「なっ、ななな……」

再び叫びだしそうな花村クンだが、どうにか押し止まっているようだ。

「だからね？ 外に出るためだけに冷静さを欠いて殺人を犯すような裏切り者には、人を殺そうだなんて思えないくらいに徹底的に叩いて…… 晒し者にしなくちゃならないんだよね…… そしたら皆が自主的に監視してくれて殺人も起きにくくなるから」

左右田クンは「オメーのがよっぽど危ねエよ」とでも言いたげな顔をしているが、残念ながらそれは自覚済みである。

「動機はそれだけ。ね？ 私は殺人するつもりなんてないし、できないようにこうやって沢山仕掛けをしたんだ…… 全ては私が死にたくないから。私が死ぬ可能性が1%でもあるのならそれを全力で排除する。…… だから、私を将来狙うかもしれない花村クンを嵌めた。それだけだよ…… そして…… 皆が私の話に冷静さを欠いてくれるのを、待っていたんだよ！」

バツとポケットに手を入れる。

そして取り出したのは、一丁の拳銃。
リボルバーと呼ばれるそれを、近くにいる花村クンへと向けて構えた。

「あはははは！ このときを待ってたんだ！ 裏切り者には制裁を！ さあ、キミの吃驚した顔を見せてね？」

「なっ!?!」

解けかけた左手の包帯など気にせず、開いた額の傷も気にせずに笑みを浮かべる。

そして引き金を引こうとした瞬間、十神クンが動いた。

その手には私が用意したはずの、蛍光塗料がついたままのナイフが

握られ……

それは一直線に私の腹に吸い込まれていった。

静まり返った部屋の中で、腹に埋まったそれを確認した私は少々驚きつつも笑った。

パアン、とその場に破裂音が響く。

「きゃああああー！」

「うわあっ!？」

私の腹に刺さったナイフ、そして突然の銃声に幾人からか悲鳴があげられ、皆が反射的に目を閉じた。うずくまって自身を守った人物もいる。

そんな状況で私を止めようとした辺古山さんは縫い付けられるように静止し、式大クンや終里さんもあまりのことに出しかけた足をピタリと止めた。

十神クンは片手で私の腹にナイフを刺し、そして私は目の前にいる彼に照準を向けて遠慮容赦なく銃を撃ち放った。

武器同士、そして思考同士が交差し、交錯したこの状況に私はやりと口元を歪める。

それはあちらも同じ。

彼の頬には赤色の液体が弾け、さながら血のようにその肌を汚していた。

「……」

そして銃を移動させ、彼の額にピタリとくっつける。

「と、十神！ 獏枝！ なにやってるんだよ!？」

それを見た日向クンが叫んだ。

腹から血が出ることはない。

彼が傷つくこともない。

ゴツリと当たる銃身は本物のようには重くなく、とても軽い調子で装填された弾を打ち出す準備に入った。

「いい加減にしろ。ふざけるのも大概にするんだな」

至近距離で一層低くされた声が耳をくすぐり、くすりと笑みが漏れた。それを見た十神クンは不愉快そうに眉をひそめさせ、いつものよ

うに「ふん」と短く息を吐く。

「つふ、ふふっ」

その言葉に思わず含み笑いが漏れる。

もう少しこうしていたかったが、まあいいだろう。

「あつははははは！ 怖かった？ 怖かったよね？ 怖かったなら、殺人なんて考えちゃいけないよ？ …… 私みたいなのがいるんだか、いだっ!？」

言いながら勢いよく花村クンへと振り向き、腹からナイフが外れる。そして同時に十神クンから銃身を離すと、すぐさま奪い取られて頭をそれで殴られた。

一瞬間が揺れて意識が混濁したので優しさの欠片もない一撃だったことが分かる。

さすがに不服なので、生理的に飛び出した涙を拭いながら「ひどくないかな？」と訴えたのだが、彼はそれを一笑に付して言った。

「自業自得だろう。悪ふざけにもほどがある。本当に殺人が起きるところだったぞ」

「えー？ 暗闇の中でナイフと絨毯の切れ端見ただけで私の思惑に気づいて乗っちゃうキミもキミだよな？ その頭の良さを別のことに活かせないの？」

恐らく彼は暗視スコップで見たナイフとその真下から少しズラされた絨毯、そして散った赤い液体に気づき、私が刺されたのだと思っ

た。そして素早く隙間だらけの床に注目し、真下から聞こえてくる台詞と音を拾いどちらの方面に向かったかを予測した。

それからは大広間から出てブレーカーをあげるだけだ。

多分ナイフの秘密は捜査しているときに気が付いたのだろう。

あの短時間でそこまで考えられる頭があれば事前に事件を防ぐくらい難なくやりそうだが、そこは少し詰めが甘いのもかもしれない。

「お前も大概だ。そんな回りくどいことをするぐらいなら直接注意喚起や説得をすればいいじゃないか」

「やだよ。そんなことしても止まらないかもしれないでしょ？ 人は

嘘を吐く生き物なんだからさ、騙される前に2度とそんなことをしないように体に教え込まないとね」

「え、か、体に？」

衝撃から漸く回復したのは意外にも花村クンだった。自身のキャラ設定にかけて早く復帰したのだろう。

それを受けて他の面々も困惑を浮かべながら恐る恐るこちらに寄ってくる。

「こ、粕枝さあん！ け、怪我は！ 怪我はないんですかあ!？」

私を恐れもせずに駆け寄ってきたのは罪木さんだった。

それに「大丈夫だよ」と優しく言って、破れてさえいない服を見せた。

「あ、あれえ？ どうしてでしょう…… 確かにあのナイフが……」

心配気にしつつも瞳の奥に喜びを携えていた罪木さんが首を傾げながら言った。そんなに残念そうにしないでほしいものだ。どちらにせよ、左手の怪我で暫くお世話になるのだから。

「ううんと、それを言うならそうだな…… ヒントは3つ」

目の前で指を3本立てて指折りしながら皆に言う。

「たとえば、どうして私がこんなものを持っているのか？ これの正体はなんなのか？ 捜査したときに不自然な部分があったと思うんだけど…… それがどう関係するのか？ もっと言うなら」 凶器の持ち込み方法

“ 私が倒れていた現場の違和感 ” っていうのがヒントかな？

十神クンは気づいてるみたいだけだね。それを説明すれば、この銃も…… 十神クンの持つるナイフの正体も分かると思うよ

さて、討論の延長戦とでも行こうか？

そう宣言してモノクマに目を向ける。

「いいよね？ モノクマ」

「うーん、まあいいよ！ 用意したトリックが全部解き明かされないなんて仕掛けた側としては面白くないだろうしね！ 特別に、花村クンへのちよつとしたペナルティは一旦預けておくよ！」

モノクマが言うと、花村クンが予想外の言葉に動揺して叫び声をあ

げた。

「ええ!? だって、修学旅行は続行だって……!」

「続行だけど…… まさか罰がなにもないなんて思ってたの? そんな都合のいい話があるわけないじゃーん! オシオキはしないけど、死なない程度のペナルティは必要だよねー? うぷぷ」

鼻で笑ったその声に絶句する花村クン。

まあ死ぬことはないだろうから、私としては良かったねとしか言えないのだが、彼にとっては残酷な話だろう。

生きることができるのならその他のことは抜きにして私は諸手を挙げて喜ぶけどね。

「さて、どう思う?」

「それを解かなきゃなにも教えてくれないんだろ?」

日向クンが破れもせず血も流れていない私を真っ直ぐと見つめて言った。

「こんな私の言うことを信用してくれるなら、ね?」

「そんなの……!」

左右田クンが声を荒げる。

それに対し、僅かに心を痛めつつ私も日向クンを見つめ返した。

「十神も教える気はなさそうだし、お前は自分で仕掛けた謎を全部解いて欲しい…… ってことでいいんだな?」

「うん、そうだね。折角頑張って考えたのに分からないまままだなんてあんまりでしょ?」

「そもそもさー、謎なんか解かなくても犯人は分かっただから終わりでもいいんじゃないのー?」

「だってさ。それを選ぶこともできるけど、日向クンはどうする?」

日向クンには3つの選択肢が存在している。

1つは私か十神クンにナイフと銃の正体を訊くこと。

これはどちらも教える気がないのだから選ぶことのできない選択である。

2つ目に謎を解くこと。

私の仕掛けた全ての謎を解き明かし、完全に私の計画を論破するこ

とだ。これが現状、私の望む選択であり、私は彼に負けることでようやく満足できる。

最後まで明かされない謎があってもそれはそれで面白いが、私は自分の仕掛けたものくらいは全部解いて欲しいと思っっているのだ。

そして3つ目は謎を解かず、私の挑戦を跳ね除けてそのまま修学旅行を続けること。議題であった犯人は見つけているし、投票済みである。

モノクマによる義務は修了しているので所詮ただの延長戦であるこの提案に乗らなくとも変わらずに世界は回っていく。

しかしその選択をすれば恐らく私は彼に興味を失うことになるだろう。今後行動を共にすることもなくなるだろう。

そもそも彼が今後も私に関わってくれるかは絶望的なのだが、それでもこちらの気持ち的に全然違う。

興味を失ったとしてもきつと生き残るために裁判で補助作業はするだろうが、その対応は「ずっと見て楽しみたいから手助けをしてあげる野良猫」から「自身を守ったことによりその足元にあつた小石にも影響がたまたまなかった」ような状態になるだけだ。

「猫」と「小石」……随分と違うものだ。

そうなればきつと私はツマラなくて退屈で暇でとても平和で素敵な世界にどっぷり浸れるのだろう。

私の思惑に気づき、解き明かし、利用して見せた十神クンがいるのでそうはならないだろうが、日向クンのことを私は所詮□□□□だと鼻で笑うだろう……「狛枝風斗」のように。
長い長い沈黙が落ちたような、そんな引き伸ばされた体感時間を震える手で体を抱きよせることで誤魔化す。

数分か数秒か、それとも一瞬だったのか。

日向クンは迷う素振りなど少しも見せずただこちらを真っ直ぐ見つめたまま断言した。

「謎は解くぞ。じゃないと俺も少し、納得できそうにない」

……弱々しかつた日向クンはどこに行っちゃったんだろうね。

こんなにも彼は精神力があつただろうか？ それとも、私を信じよ

うとしてくれているのか。もっと単純に嫌われるだけだと思っていたが、それは杞憂だったらしい。

「……死にたくないってのは誰だって思ってるはずだ。少なくとも俺も思ってる……でも、お前のは行き過ぎだ。なんだろうな、分かるんだけど、理解はできないんだよ。でも、それだけで終わらせるのは怖いんだ。理解できないものを理解しないままにするのは、嫌なんだよ」

聞き覚えのあるその科白に、思わず口元がゆるゆると上がっていき。

「生存欲というものは生物全てが持っている性質だ。鼠は猫を噛み殺し、ヌーの群れは子のためにライオンに集団で襲いかかることも稀にある。生を諦めぬその気概は評価しよう」

「あははっ、生物を知り尽くした田中クンにそうやって褒められるなんてね」

要は非常に動物的であると言われたようなものだが、別に構わない。事実だからだ。

それに、なにをしても生を諦めてはいけないと道を示した彼にそう言われると嬉しいものだ。

「がっはっはっはっ！　そこまで突き抜けておるのも珍しいのお！

粕枝は走ることに向いてそうじゃなあ！」

「それってつまり逃げ足のことだよな？」

「おいおい、早く帰ってメシにしてえんだから早くしてくれよー」

「おっとそうだった。じゃあ日向クン、まずは……持ち込まれた方法についてかな？」

そうして、実際には一騎打ちの形となる議論の延長戦が開始した。

「勿論、私と十神クンは解答を知ってるから、それ以外の皆で考えてみてね。日向クンに仕掛けた勝負だけど、一応議論だからね」

戸惑い気味になっていた全員が再びテーブルの前に集まり、モノクマはそれを退屈そうに眺めている。

ずっと沈黙しているので実は寝ているのかもしれない。

「持ち込まれた方法っすか？　そりゃー、掃除のときっすよね？」

「十神は全員にボディチェックをしていた。私の竹刀も1度部屋に置いてくるように言われたからな」

「オレもお気に入りのレンチを問答無用で没収されたからな。それ以外には考えられねーよな」

「ああ、俺も持ち込んだタイミングは掃除のときで合ってると思うぞ」
これは全員正解。まあ、当たり前か。先程花村クンからおかしな私の様子について説明があったばかりだからね。

「うん、正解。じゃあ、どこに隠していたんだと思う？」

人差し指を唇に当てて首を傾げる。

視線は日向クンに固定。余計な所に視線を動かすと気づかれてしまいそうだからね。

辺古山さんなんかは結構こちらの動向を伺っている部分がある。慎重な彼女らしいのではないだろうか。こちらがなにか仕掛けてこないかを身構えているようだ。

心配しなくとも、私は現在武器を持っていない。銃も十神クンに取り上げられちゃってるし。

「どこについて…… テーブルの下じゃねーのかよ」

「まさか！全部のテーブルになにか隠してるんじゃない?」

ぶつきらぼうにテーブルを顎でしゃくって指した九頭龍クンに、反応した澤田さんが大袈裟に引いたように叫んだ。

「いや、使ってたテーブルはクロスをとって隅に置いてあるし、俺たちが今使ってるこのテーブルにも…… そんなものはなさそうだな」

まあ、同じ仕掛けを使うなんて脳のないことはしないからね。そんなんじやすぐに十神クンにバレちゃうし、銃も没収されちゃうだろうから……

「粕枝が倒れてた所の違和感…… か」

日向クンがメモを見返している。

どうでもいいけれど、あの手帳後で返してもらえるのかな。証拠品保存には持ってこいだから譲っちゃうのもありか? いや、それだと私の手帳がなくなるし、日向クンには別の手帳を買うことをお勧めしておこう。

「そういえば、羽毛と水受け皿だったか？ あれの存在が引つかかるんだよね……」

「つてか、羽毛なんてなんのためにあるんだよ。意味分かんねーよなア」

「それは言ったでしょ？ 造花を綺麗に立たせるために詰め物にしてたんだよ。…… あ、日向クンと十神クンにしか聞こえてなかったんだっけ？」

それと、演出のためにね。

羽根舞う中に血の赤が混じる…… なんとなく格好良いし。

「あ、ま、待つてくださあい…… 造花を立たせるため…… ? それじゃあおかしいですよー!」

あ、そうだった。そうだよ。メモを記していた罪木さんも推理ができるんだった。

というよりも、あれをメモしていたからこそ内容もキチンと覚えてるのだろう。矛盾に気がつきやすくなるのも頷ける。

「花を活けるのに詰め物使うとか邪道でしょ」

舞踊家の彼女には気に入らないことをしてしまつたらしい。

普通はそんなことしないからね。そう、普通はそんなことをしない。そこもまた重要なのだ。つまりは必要だったからそうしたということなのだから。

「日向さん、メモを、メモを見てくださあい!」

「…… 花瓶は破片を見る限り結構深い構造をしているみたいだな。なのに肝心の造花は短く切られてるなんて、おかしいぞ。これじゃあすぼまった部分から下は空洞になる……もしかして、ここに銃を隠してたんじゃないか!」

メモと現物を見比べていた彼が、ようやくと気づいた。

でも、少しは足掻いてみないとね。

「銃を花瓶の中に入れていた…… 確かにそうかもしれないね。でもさ、あの花瓶は十神クン自身が振って調べたんだよ？ 銃なんかが入ってたらすぐに気づかれちゃうと思うんだけど、そこはどうなのか

な日向クン？」

「さつきも言ってただろ。羽毛をぎつしりと、詰め物にしてたって。その状態なら羽毛がクッションになって中身は揺れないし音も鳴らない。違和感を持つことがなければきつと十神も中は検めないだろう？それでやり過ぎしたんだ！ 多分、造花を支えてた本当の道具は水受け皿の方だ。あまりにも造花が短いと花瓶の口に引つかかったような状態になって違和感が出るからな。水受け皿の大きさと、花瓶のすばまった部分は大体同じ大きさだろう？」

僅かな足搔きは全てメモに残された証拠により滅多斬りにされた。ここままで綺麗に解かれてしまったのならもう足搔く必要もない。

私は自身の仕掛けが解かれた嬉しさを隠さずに笑む。彼ならばやってくれると信じていた。私の期待に応えてくれるって、信じていたよ。

身勝手な期待だけでも、それでも私は日向クンに暴いて欲しかったのだ。

「うん、正解」

にっこりと、笑顔を浮かべたままに言う。

「じゃあ、後は…… 私たちが怪我をしていない理由。つまり、この銃とナイフの正体だ」

「あー？ 怪我してねーってことはナイフでも銃でもないんだろ？

ったく、腹減ったから早く帰ってーんだけど」

終里さんの言うことは間違いではない。だが、その正体を暴いて欲しいこちらとしては不十分な答えだ。おまけをつけても赤ペン三角と言ったところだろうか。

「確認してない商品リストは娯楽品と家具だけ…… ですよねえ」

「娯楽品？ …… ちよつと、十神いいか？」

日向クンが十神クンから商品リストを預かり、目を通す。

そこで、最初の方に書かれたそれに気がついたようだった。

「……手品用の伸縮ナイフにサバゲー用の水鉄砲……これか！ つまり、そのナイフも銃も、偽物ってことなんだな」

「ほう？ だから怪我がないんじゃないあ！」

正確に言うと、水鉄砲というよりペイント弾を打ち出すおもちゃな
んだけどね。

まあ、おもちゃという点では合ってるし、と私は頷き花村クンに視
線を向けた。

「その通り…… この私が殺傷力のある道具を使うはずないでしょ
?」

「で、でもあのとき…… !?」

「私、一言も “ 殺す ” だなんて言っていないよね?」

そう、こういうときのための保険だったのだ。

納得はされないだろうが、私は “ 辛気臭い皆を元氣付ける趣味の
悪いドツキリ ” を仕掛けていただけなのだから。

それに気がついたからか花村クンは顔色を悪くして座り込んでし
まった。

「趣味最悪すぎない?」

「それで納得するやつがいるわけねーだろ!」

「意図的な勘違い…… だね」

西園寺さん、左右田クン、七海さんから次々言葉が投げかけられる
が、今は説明の途中だ。

「おもちゃを使ったのは…… ほら、万が一自分に向けられたと思う
と怖くて仕方がないもの。現に、十神クンが突きつけて来てくれたわ
けだし?」

「ふん、偽物だと知った上でやっているのだから文句を言われる筋合
いはないな。その中身は赤いペイント弾だろう? …… まったく、
おかげで襟元が汚れてしまったじゃないか。これはオーダーメイド
なんだぞ」

あら、怒ってる。

十神クンの服って白いし、文字通りサイズの意味でオーダーメイ
ドだろうし、一張羅を汚したとなるとそりゃあ怒るか。

コテージのクローゼットには10着くらい入ってるから、あの怒り
ようは恐らくポーズのようなものだろうけど。

ああ、でもコテージに置いてある思い出の品とかホイッスルが壊れ

たりしたら私も怒るな。替えがあってもきつと怒る。彼女たちから貰ったのは最初の1つだけであって、同じものだったとしても他の物には思い出は詰まってない。そういう感じの拘りがあるのかもしれないな。

「ええと、責任持つて私が洗濯するっていうのは…… どうかかな？」

ほら、えーつと…… 私掃除とか洗濯とか得意だし…… ？」

「ふざけているのか？」

あれ、ダメだったかな。

「当たり前だろう。完璧に元に戻して見せろ。それが誠意というものだ」

あ、そうですか。まったく、びつくりさせないですよ。

「あのー？ そろそろいいーいー？ 解決はしたでしょー？」

さて、とうとうつまらな過ぎてスタイリッシュユー人ジエンガをしていたモノクマがお待ちかねだ。

「ああ、狛枝の仕掛けは全部解いた」

そうそう、私の仕掛けは全部解いてもらった…… って、あれ？ なにか忘れていることがあるような気がする。

「…………… ねえ、脅迫状の送り主は？」

先程から青ざめた顔をしている花村クンが呟いた。

それにその場にいた全員が硬直し、そして叫んだ。

「っだー！ そうだよ！ まだそれが分かってねーじゃねーか！」

「…………… モノクマ、もう少し話し合いがしたい」

「やーだね！ オマエラ遅いんだよ！ 遅すぎるんだよ！ あまりにも遅すぎるからボクもう飽きちゃったよ！ ジエンガでアート作るのも飽きてきたんだよ！ …… ボクの示した議題はもう終わってるからね！ だから話し合いするならペナルティの後に……………」

七海さんの言葉を却下したモノクマが、言いかけたところでその場にピンク色の光が満ちた。

「そこまででちゅー！」

光の中から現れたモノミは、以前とは少し格好が変わっていた。ウサミのときのようにとまではいかないが、無力化されてしまった

オムツ姿のモノミよりもグレードアップされているように感じる。

「エツヘン！」

リボンはヒョウ柄…… いや、あれはチーター柄かな？ になっていて、若草色のケープを羽織り、アゲハチヨウのような意匠のリボンが括り付けられた箒を手に行っている魔女っ子スタイルだ。

以前のウサミ状態は魔法少女アニメの衣装といった感じだったが、こちらは魔女っ子アニメ風といえればいいのだろうか。ベクトルは似ているが全くの別物である。

「帰ってきまちた！ あちしバージョンアップして帰ってきまちたよ！ これでモノクマの思う通りにはもうさせまちなん！ 以前のよくな大きい力がありまちなんが……」 副担任 “ になつたあちしが、新たなルールによりミナサンを守ります！ 」

「は？ え…… はあ?!」

左右田クンが2度見する気持ちも分かるよ。衣装だけではあるが、それくらい変わってしまったているのだから。

「モノミちゃんがグレちゃったー!?!」

「グレてなんかいまちなんよ！ イメチェンでちゅー！」

その姿にモノクマが沈黙し、そしてイラツとしたような顔になってのっしのっしと近づいて行く。

「……………」

「こ、今度は負けまちなんよ！」

完全にモノミの目の前に辿り着いたモノクマはなんだか残念なものを見るような目で上から下まで眺めてため息をついた。

「あ、地味に傷つくやつでちゅよそれ！ やめてくだちやい！ そんな目であちしを見てもなにも変わりまちなんからね！」

精神攻撃はどうやら効いているようだ。

「副担任……？ そんなのにした覚えはないぞ！ 妹は大人しくおにーちゃんのお仕事っぷりを眺めていなさい！」

がつ、と音がしそうなほど強くモノミの腕を掴んだモノクマが叫び始める。それにビクビクとしながらモノミが慌てて「み、ミナサン！ 電子生徒手帳のルールをご確認くださいちやい！」と負けじと叫ぶ。

呆然とモノクマとモノミの無言の喧嘩を眺める人もいるが、私は素早く生徒手帳を懐から取り出してルールを確認する。見れば日向クンや十神クンも確認しているようだ。

ルールその13

人に怪我をさせてしまった場合は『副担任』によるペナルティが課せられます。

ルールその14

ペナルティは生徒の体を傷つけるものであってはいけません。

ルールその15

『担任』と『副担任』は互いの役目を侵してはいけません。

これは、生徒のルールじゃなくて教師に課するルールのようなだ。

やはりモノクマもモノミもルールは遵守しなくてはいけないのだろう。そして、モノミがコロシイルールを、モノクマが希望のカケラルールを削除しないということは2人ともにルールを作成できても消すことはできないのだろう。

ということは、一応希望のカケラによる脱出手段も生きていると言っているのかもしれない。

「べーだ！ どーでちゆか！ 一矢報いまちたよ！ あんたが議論に夢中になつてる間にやってやりまちた！」

「なんだとー！ 妹のクセにー！」

でも、モノミもルール追加するなら『教師間の暴力禁止』も入れれば良かったのに。また負けちゃったらどうするのだろうか。

「きやあああー！ こ、このつ、えいやー！」

「いてっ、お兄ちゃんにそんなことをするやつは、こうしてやるー!」
「やああああ! 負けまちえん、負けまえんよー!」

ボロボロになりつつも、以前のようにモノミの服は奪われていない。リボンもテープも随分頑丈にできているようだ。

モノクマにダメージが通っているような気は全くしないが、少なくとも現状よりも悪いことにはならないだろう。

一進一退の攻防はモノクマが「あーやだやだ」といった風に首を振ってモノミから手を離れたことで終了した。

「あーもう、めんどくさいなー! ウサギ鍋にしてやろうと思ってたけど、反抗期なら仕方ないな。仕方ないから、オマエの家をメチャクチャにするだけで勘弁してやるよ。うぷぷ」

「えっ! そ、それは…… 行っちゃった。」

モノクマが消えた方向を向いて落ち込む彼女に、状況説明を求む全員の見線が集中している。

その視線に気づいてかモノミが顔をあげ、花村くんの方へとぼてぼてと足音を鳴らしながら進み出た。

「な、な、なに? なんなの!」

「…… くすん。ということ、危ないことをした花村くんは一人でここのお掃除をしてもらいまちゅ……」

それがルールに追加されたペナルティということで良いのだろうか。

「え、そ、それだ、け……?」

「おいおい、さすがにそれは甘すぎだろーがよ」

甘っちょろい罰は九頭龍クンのお気に召さなかったらしい。まあ、極道だし、そういうケジメみたいなのはしつかりしてそうなものね。

「あのさ、脅迫状のことはどうするの?」

小泉さんが恐る恐ると言った様子で周囲を見渡した。

それに答えたのも、モノミだった。

「不安の種は残るけど…… これでもモノクマの危険さを実感できたと思いまちゅ。これ以上犯人探してギスギスするのはミナサンも嫌

だと思えますし、もう二度とこんなことにならないようにミナサンで注意しまちようね！」

つまり見逃すってことなのか？

丸頭龍クンほどではないが、私もそれは甘すぎだと思うぞ。

「…… ということで、今回は初犯だから情状酌量の余地ありと判断しました。そもそも、脅迫状を出ただけでなにもしてまちえんからね。やらかしちやつたヒトにはあとでよく言っておきまちゆから、ミナサンは各自コテージに籠っていてください。あちしの耳はいでちゆから、誰かが外に出たらすぐにわかりまちゆよ」

つまり誰が脅迫状の送り主かを確認しに行けばモノミにバレるということなのかな。

モノミは遠くを見ながら小さな声で「スプレーの音がしまちゆ…… 早く止めないと」と言って落ち込んでいる。耳がいいというのはこの反応でよく分かった。

「あの、ぼくはどうすればいいの？」

掃除を言いつけられた花村クンが困惑しながら問うた。

「あ、花村くんはここでお掃除でちゆよ。あちしはその間に注意しに行きまちゆので。あとおさぼり厳禁なので気をつけてくださいちやいね！といっても、おさぼりしても注意以外、特に罰もないわけでちゆが…… 注意ついでに全員のコテージにお邪魔させていただきまちゆので、犯人探しは諦めてくだちやいね」

犯人にだけ注意をすれば、安普請な扉のせいでこのコテージにモノミが行ったことが分かってしまうからか。

それが隣のコテージならば耳聴く察した誰かがその情報を漏らしてしまうかもしれない。だから全員のところに行つて誤魔化しつつお話をすると。そういうことかな。

「はい！ では解散でちゆ！ 花村クンは掃除して待つててくださいちやいねー」

反応が遅れつつも1人、また1人と旧館から出て行く。

心配そうな小泉さんの視線を受け流し、こちらを見る日向クンに笑

顔で手を振り、やりきれない顔をした左右田クンに心の中で「ごめんね」と呟いた。

ハイテンションで出て行く瀧田さんを見送り、小泉さんを涙目で追いかける西園寺さんを横目に十神クンを見る。

「今は夜中だ。明日洗濯はしてもらおうからな」

「…… うん」

「ふん」といつものように言いながら十神クンが去る。

その背中に手を振りながら次々と扉から出て行く面々を見送った。

「…… 罪木さんは行かなくていいの？」

「その…… えつと…… 粕枝さんのやったことが正しいとか、正しくないとか、そんな無粋なことは言いません…… 私も、この状況は怖いですから…… ですからつ、ですからつ、えつとえつと、うううう…… 上手く言えませえん……」

ぐるぐると目を回して泣きそうな目をしている彼女は、私になにが言いたいのだろうか。でも、きつと私を認めてくれているのだと思う。

「ゆつくりでもいいし、言わなくてもいいよ…… 私のこと、友達だと思ってくれてるんだね。わたしは、嬉しいよ」

「そう、思っけていてもいいのでしょうか…… 私粕枝さんのこと、理解できないのに…… それでも友達だつて言えるんですか？ 私、私なにもできないんです…… ラクガキを私の体でもらうとか、モノマネをするとか…… そういう方法しか知らなくて…… 分からないんですよ！」

ぐちゃぐちゃな顔で泣く彼女に、なにができるだろうか。

私には分からない。友達なんて、すぐに死んでしまふか私と同じ夢仲間かのどちらかだったから。

「分かってくれようとするその気持ちがあるんだから、きつと友達なんじゃないかな。友達じゃなければ分かるうともしないんだからさ」だからそんなありきたりな言葉しか言えないのだ。

「じゃあ、コテージに帰ろうか」

鼻血を流しながらこちらを観察する花村クンと、微笑ましく

「らーぶぶらーぶなのはいいことでちゆ」と言うモノミを無視して、互いにコテージに戻る。

「あ、あ、あのー！」

「どうしたの？」

「また明日…… ですか」

「うん、また明日ね」

パアツ、と花を咲かせるような笑顔になる彼女に、なんだか突き放すことができなくなってしまつて苦笑いをする。

「友達…… なのかな……？」

打算的な考えが抜けない己を嫌悪し、疑問を持ちつつも私は自室のベッドに腰掛けるのだった。

このあと、めちやくちや説教された。

―Self Satisfaction―
No. 17 『開放』―災難―

午前5時。私はイライラしていた。

私が最後だったからなのか、やけに長いモノミの説教が2時間前に終わり、やつと眠りについたところだったのだが…… 無遠慮に響くノックの音で無理矢理覚醒させられてしまったのだ。

「早朝に男2人で女性の部屋に訪ねに来る…… うん、なかなか危険なシチュエーションだよな？」

文字通り、寝不足でイライラしていた。

そのために据わった瞳と貼り付けたような笑みでチグハグな様相をしながら彼らを睨み上げ、言葉は裏腹にふざけるように吐き出されていく。

「キミたちにそういうことをするなどは言わないけどね、ちょっと非常識だと思うんだよな…… 私としては」

さすがの私も2時間の睡眠では深く眠り込み過ぎて夢も見られないし、体力の回復などできるはずがない。

今は太腿のホルダーから外されている鉄パイプの置き場所を確認しつつ流すように視線を2人に向けた。

「あのね、私は死にたくないって言ったよね？ 私を害することがなければ別にキミらに手を出すことなんてないんだよ？ …… むしろ、そんなものを手にして、こちらに向けた時点で本当は返り討ちにしてやりたいところなんだよ」

彼らの持つ金属バットが後ろ手に隠される。

女性相手にそこまでする度胸はないらしい。

「見逃してあげるからさっさと帰ってよね」

言って、扉を勢いよく閉める。

その向こう側からは「うおっ」という短い悲鳴が聴こえたが無視をして瞼を擦った。

「…………… ふあ…………… あー」

そういえば寝間着のままだったな。女性として失格だが今はそんなもの関係ない。

無意識に出てくるあくびと眠気に従い、私はイライラを抑えるように再びベッドへと身を沈めた。

「あー、殴られなくて…… 良かった……」

簡単に堕ちていく意識の最後に独りごちる。

あれ、目覚ましセットしたっけ？ そんな疑問を抱きながらも睡魔には逆らえず、そのまま私は気絶するように眠りについた。



薄暗い闇の中、私は周りを赤色の地獄に囲まれた教室にいた。

他にいるかつてのクラスメイトたちは次々と連れ出され、地獄の中へと消えていく。

1人1人消えていく彼らの行く末と自身の末路を想像しながらひたすらに順番が来るのを待った。

私の順番になり、先生だという誰かに呼ばれて歩き出す。足は勝手に動き、逃げ出すことも抵抗することもはや叶うことはない。

おどろおどろしい、真っ赤な光に照らされた地面がぬらぬらと光りこちらの廊下をじんわりと侵食しようとしている。

左を向いてみれば遠くに沼のようなものが見えた。その中には突き落とされ、沼に浸かった瞬間からドロドロと溶け出していく人物とその悲鳴が響き渡ってくる。まさに血の池、と言ったところだろうか。

右を向けば巨大な大穴が空いていて、そこに並んだ人影が押されながら落ちていくのが見える。穴からギリリと光る巨大な針が覗いており、そのあまりの太さに刺さってしまった人間は自重によって真ん中から2つに裂けていく。針山地獄のようなものだろうか。

後ろを振り向けば私の出てきた場所が牢獄であったことが分かる。

内装は私の記憶にある教室そのものであったが、外装は完全に牢屋である。よく見れば周りにも沢山の牢獄が存在している。

前を向けば見えてくる死神のような大鎌を持った二人の人物。

そしてその真ん中には見上げるような断頭台が備えられている。

ああ、そういえばそんなオブジェクトがあったなあ。

漠然と考えながら勝手に動く足を見つめる。

ワープと同時に前の私は死んで、新しい私が構成されるのだ、なんてね。

「そう……」

目を伏せて断頭台に登る。

その間に入った瞬間、私は死んだ。

「…………… さ…………… んー！」

ノックの音がする。

「…………… え…………… ださあんー！」

ゆっくりと浮上する意識。

暑さ故か足で挟むようにして抱きかかえている柔らかな布団を確かめるように探る。足を移動させるたびにひんやりとした冷たさを体に伝えてくるために、一層穏やかな睡魔が私を誘うのだ。

「んう……………？」

私はそのまま寝返りを打って…………… 再び眠りにつこうとしてから、

ようやくその声に気がついた。

「粕枝さあん！ うう、無視はいやですよ……………！ わ、私がいけないんですね。私が嫌いだから？ う、うう…………… やっぱりお友達だなんて私の思い込みだったんですね…………… 勘違いだっ…………… ひっく、うう」

女の人の声、か？ 聞き覚えのある……………

「………………………… えっ？」

間拔けな声をあげてから段々と弱々しくなる声に罪悪感を抱き、瞼を開くことすら億劫にも思えるほど襲いかかる睡魔を押しつける。

そして薄っすらと目を開き、カーテンの外がすっかり明るくなって
いるのを確認した。

「…… あれ?」

細長く巻かれた布団をばつと払いのけ、時計を見た。

AM 08:10

「あああっ!」

完全なる遅刻である。

「ままま、待つて罪木さん! 今起きた! 起きたから!」

大声で叫びながら今にも帰つてしまいそうな弱々しい声をあげる
彼女に待ったをかける。

「嫌いになつたわけじゃないから! あんまり寝れてなくて、それで
ええつと……!」

言い訳をしながら服もそのままに扉に勢いよく手をかける。

「ぎ、気づかなくてごめんね!」

「…………… あ」

扉を開けてから綺麗に腰を45°に曲げて顔の前で両手をパンツ
と合わせる。我ながら見事な謝り体勢である。

なんならジャンピング土下座でもかまそうと思つたがキャラじゃ
ないし、なによりそれじゃあ罪木さんが困つてしまうだろう。これ以
上困らせるのは起こしに来てくれた彼女に失礼だ。

「…… よかつたですう」

彼女の小さな呟きが聴こえた。

「あの、狛枝さん…… その、お洋服が……」

そして言われた言葉にはたと気がつく。

変わらずに曲げられた姿勢のまま視線だけを自身の体を滑らせる
ように見ていく。

Tシャツに半ズボン、髪はボサボサ。眠気眼で背後には這い出た後
のベッドと落ちたタオルケット。

完全なる寝起きの格好。だらしない部屋。

女の子が見られたら恥ずかしさで死ぬような有様である。

「あ…… つと、えつと…… ごめん。ちよつと待つててね……………」

みるみるうちに赤面していくのが分かる。

そうか、これが顔から火が出るというやつか。全く知りたくなかったよ。

尻すぼみに伝えて扉を閉める。

それから無言で頭を両手で抱えてイナバウアー。「あああああつ！」という心の叫びを漏らさぬように暫くその場で悶えて洗面台に向かった。

まずは身支度からだ。

清潔にし、いつもの服を用意。それからベッドメイクを施して朝食は摂らずに飲み物だけペットボトルのお茶で済ませる。

ああなんてだらしない。友達になったばかりの子とするようなシチュエーションじゃないぞこれ！

平常心平常心……

そして心がある程度落ち着かせてから扉をゆっくりと開ける。

「いや、ごめんね待たせちゃってさ」

「え、あ、はい？」

何事もなかったかのように振る舞う私に戸惑う罪木さんは曖昧な返事をして首を傾げた。

「えっと、朝食はもう終わったよね。なにか進展あった？」

そういえば、こうやって私に話しかけてくれるというのはかなりラッキーなことではないだろうか。

普通あんなことがあったばかりじゃ腫れ物を扱うような状態になるというのに。なんとというか、本当に懐かれてしまったんだな。

慕われて嫌な気分にはならないけれど。

「モノミさんがモノケモノをやつつけて2の島に行けるようになったって言っていました…… 十神さんもこちらの島でやることはありませんからそちらを探索するそうです。他の皆さんは脱出方法がないか探すと早速向かって行っちゃいましたね。勿論、狛枝さんを心配する声もあったんですけど…… 島の探索に人員が必要だからと、私が代表でここに…… あ、私なんかじゃ迷惑でしたよねえ。やっぱり日向さんとか小泉さんが……！」

「ううん、罪木さんが来てくれて嬉しいよ。じゃあ私もその探索とやらに向かおうかな…… どうせなら一緒に探索しない？」

頬を掻きながら提案をすれば彼女は花が咲くようなあどけない表情でふにやりと笑った。

喜んでくれてなによりである。

「えっと、じゃあ中央の島に行ってみようか。もう皆はそっちに行ってるんだよね？」

「は、はい！ 日向さんも先程出て行きましたし…… あ、でも小泉さんと西園寺さんはあ……」

私が一步出ると、罪木さんが思い出しながらそう言った。

しかし小泉さんのコテージへと視線を移動させて、言いかけた彼女は突如 「きゃあっ！」 と声をあげて私の視界から消えていった。

「えっ」

慌てて視線で追うと、彼女の長い髪がばさりと揺れながら置き去りにされていく。

その足はずるりと踏み外されてコテージ脇の水路へと向かっていった。

反射的に出た悲鳴と、咄嗟に瞑られた目。その状態で前に突き出された手が泳ぎ、助けを求めるように私の長いパーカーの裾を掴んだ。掴んでしまった。

「つく」

ぐん、と引っ張られる感覚がしてよろける。どうにか踏ん張ろうとも試みたが、やはり一人分の重さをもやしの私が支えきれぬわけもなく同様に下へと落ちていく。うん、知ってた。

その時点で既に諦めの境地に至った私はせめて溺れない程度の深さであればいいなあと思いつつながら僅かな浮遊感を楽しんだ後に無事、着水。

水位は低く、足首くらいしかなかったので溺れることはなかったが、仰向けで水に浸かっている罪木さんの上に私が重なるように着地してしまった。

かろうじて彼女にダメージを与えることはなかったが、重なり合っ

て倒れているためか二人ともになかなか起き上がれない。

さらに服が水を吸って透けているうえに罪木さんの顔は上気している。

おい、なんで興奮してるんだよ。

「お、おい大丈夫…………… か…………… ?」

暫くすると、頭上から声が聞こえた。

初めの方は勢いよく滑り出していた言葉はこちらに近づくとつれて尻すぼみになっていき、とうとうこちらを覗き込んだ彼と目が合うと沈黙する。

「…………… あ、ごめん！」

彼、日向クンが顔を赤くしながら目を逸らす。

「へ……………」

「きゃああ！ み、見ないでくださいあい！」

なんだこのラッキーイベント…………… ああ、主人公だからか。

自身と罪木さんの透けた服装を見比べながらため息を吐く。

しかし彼は女子コテージの方から来たようだった。それにポケットに入ったあの三角の形をした膨らみ…………… どうやらイベントのお楽しみをした後だったらしい。連続でこんなラッキーイベントに遭遇するのは日向クンが日向クンだからか。顔を赤くしてそっぽを向きながらも別に顔を手で覆ったりしないあたりにも男を感じる。

「…………… 引き上げてくれるかな？」

「えっ、はあ!? …… いや、そ、そうだよ……………」

さすがに胸のあたりにあるコテージの床によじ登るのは面倒だ。

まずは泣きながら「見ないで」を連呼している罪木さんを立たせて慰めながら腰を支えて持ち上げる。

力があまり入っていないためか私でもあっさりを持ち上げることができた。

その状態の彼女の手を日向クンが取り、引つ張り上げる。

私はその間に同じようによじ登ろうとするがお腹まで上がったあたりで息切れを起こした。なぜだ。いくらなんでも力がなさすぎるだろう。

「おいおい無理すんなって」

「……」

なんか悔しい。

むすつとしたまま引き上げてもらい、濡れたパーカーの端をぎゅつと絞る。このままではいくら常夏の島だとて風邪をひいてしまうだろう。医師が風邪をひくなど以ての外だろうし、私が風邪をひいて罪木さんのお世話にはあまりなりたくない。

医者としての腕は信用しているがヤンデレ状態の彼女に治療されるのは、体力こそ回復するだろうが精神力がごりごり削られていきそうだからだ。

「…… 着替えてから探索に行こうか」

「はいい！」

「風邪ひかないようにしろよ…… って罪木には余計なお世話だったかな」

先に探索に行くらしい日向クンと分かれてそれぞれのコテージに入る。

軽くシャワーを浴びながら先程の出来事を振り返ると、あの恥ずかしさを思い出して顔が紅潮するのが鏡に映った。

「うわあ、見苦しいなもう……」

一つだけ幸いだっただのは、濡れてくつきりとそこにあるのが分かるようになっていた鉄パイプの存在に2人ともが気づいていなかったことだろうか。

現在は午前9時だ。

レストランに集合していた皆は7時から8時くらいまでに探索に出発したのだろう。遅れた分きちんと探索しなければ。

「絶対薬局とかあったら罪木さんは留まるだろうしなあ…… 図書館とかないかな……」

こういうとき、あくまで零す言葉は推測である。

断言していないのだから口に出しても勘がいいだけで終わるはずだ。どこで誰が見ているか分からないから、その対策だ。

もろもろの準備を終えてコテージから出る。

しかしまだ罪木さんは準備中のようだ。コテージの中からなにやらひっくり返すような音や小さな悲鳴と盛大に転ぶ音が聞こえてくる。

「はあ……」

私のミスも勿論あったわけだが…… まったく、探索はいつになることやら。

No. 17 『開放』―狼狽―

「うう、ごめんなさいー！」

「いいんだよいいんだよ。私も似たようなことするからね」

歩きながらそんなやりとりをして慰める。

先程から謝られすぎて、途中から回数を数えていたのだが、余裕で両手の指の数を超えてしまった。30分足らずでこれだ。

むしろ今までがまともにも会話できていた方なのかもしれない。

あれからずーっと聴かされている身としては目的地に早く辿り着けることを祈るのみだ。

「あ、ほら開いてる」

そう言つて指差したのは “ 2 ” と大きく主張する門。

その前にいた筈のトラ型モノケモノは綺麗さっぱりいなくなっている。本当に倒したらしい。1匹目であるし、今の变化したモノミならばわりと余裕だったのではないだろうか。

そんなことを考えながら橋を渡ると、半分ほど歩いたところで目的地が見えてきた。奥の方に巨大な建造物があり、その外観に植物や水やらが張っていて、遠くにビーチのようなものも見えているので期待できるだろう。

「さて、どうしよつかない」

「ど、どうしましたあ?」

適当な木の棒でも探そうとしたところで丁度罪木さんが一歩踏み出していた。それに少しだけ残念に思いつつ 「んー、なんでもないよ」と返して同じ方向へと足を向ける。

彼女の足は私たちから見て左の方向へ、ダイナーへの道へと踏み出されていた。

私の悩んだ反応を見た彼女は自分がかたしてしまったのかとおろおろしながら 「こ、狛枝さんの行きたい方向に行きますからあー！」と叫んでいる。

別にそんなこと気にしないのになあ、と思いながら私は彼女の手を取って歩き出した。

「遠慮しなくていいよ。私はどっちに行こうか迷ってただけだから」
「はわっ、はわわわあ！」

ぼわん、と顔を赤くして俯いた彼女がされるがままになっていた手をそつと、そして弱々しく握り返してくる。

まるで本当にそんなことをしていいのかと、怒られはしないだろうかというような受け取り方で、おつかなびつくりといった様子の彼女の手を少々強引に引いて左の道路へと進んだ。

「もう少し自己主張しないとね」

そう言うのと途端に戸惑う罪木さん。

個性、というよりは主体性を潰されてしまっている罪木さんには少し難しいことかもしれない。だけれど、彼女にははにかみでもいいから嬉しそうに笑ってもらいたいものである。

気弱で、全て受け入れているようで拒絶している。そんな彼女の心が少しでもほぐれるように。

少し面倒だとも思っているし、打算も混じっているが、それでも優しい本音で彼女に接することはやめない…… 本当に面倒ならばこんなことはしないさ。だって、関わらなければいいだけの話だもの。

これは罪木さんだからこそやっていることだ。自己主張が薄くて、いつも泣き笑いをしていて、それでいて鬱屈とした感情を溜め込むだけ溜め込む彼女の癒しにでもなればいいと思う。

きつとそんな彼女が本当の笑顔を見せてくれたなら…… 最高のはずだから。

「私はキミを嫌わないよ…… 皆だってそう。この島にいる皆は、きつとキミを拒絶しない」

手を引いたまま歩く。

背後にいる彼女の拳動は分からないが、その手が僅かに震えていることは分かった。普通よりもひんやりとした手の平が私の熱で少しずつ温まっっていく。

そういえば、手が冷たい人は心が暖かいのだったか。

「キミはもつと我が儘を言ってもいいんだよ…… 我が儘を言ったら、西園寺さんは怒るかもしれないよね。終里さんは面倒臭そうにす

るかもしれない。十神クンや左右田クンだつてもしかしたら『はあ？』つて疑問に思うかもしれないね。でもさ、きつと西園寺さんは聞いてない振りをしてなんだかんだ人の話を聴いてるし、終里さんだつてキミの言葉を否定してしまうわけではない。十神クンだつたら相談に乗ってくれるかもしれないし、左右田クンは心配してくれるかもしれないよね」

話しながら想像する。

例に挙げなかった人たちだつてきつと彼女を酷い目に合わせたり、無視したり、邪険にすることはないだろう。

苦手意識はあるかもしれない。だけれど、それはまだ彼女のことをよく分かっているからだ。彼女がどんな人で、どんなことを思っていて、どんな過去があるのか、そんなことを知らないただのクラスメイトならばどう接していいか判断がつかないだろう。

別に嫌っているわけじゃない。どうすればいいか分からないだけだ。

西園寺さんは同族嫌悪も混じっているからよく分からないけれど、でも罪木さんと境遇は似ているから、カケラをこつこつ集めていけば分かりあうことだつてできるだろう。

私は、そんな彼女が少し羨ましい。

「日向クンは……………」

目を閉じる。

思い浮かぶのは、キリツとした顔の彼。そして、ことあるごとに私を心配してくれた優しい表情。

「………… 日向クンはきつと、優しく笑つて………… 『しょうがないな』つて言つて我が儘を聞いてくれるんだろうな…………」

ぎゅつと握られた手が少し痛い。

俯いたらしい彼女の髪が後手に引いた拳にかかっている。

「やっちゃいけないことといいことつてのがあるから、きつと無条件で受け入れてくれるわけじゃない。私のしたことは “許されないこと” だね。でも日向クンは、それが私だつて自分の中で完結させてるみたいだ。あのときの………… 勝負をしたときになんとなくそう

思った」

ダイナーの中で食事をしている式大クン、終里さんに見られないようにその奥のトンネルへと向かう。

そこには、一面のプライベートビーチが広がっていた。

「日向クンは、私があんなことをしていても正面から向き合ってくれたんだよ？ 怖がる必要なんてない。きっと皆キミのことを認めて許して “くれる”」

ぽつり、と手の甲に降った雫と、押し殺された声に気づかない振りをしてビーチハウス内に入る。

ばたん、と閉まるドアと密室に2人きり、さらに相手は泣いているというシチュエーションで、なんだかいけないことをしている気分になっってくる。

「罪木さん……」

「ごめ、なさっ…… もう少し、このままで…… おねがっ…… しますう……」

手は繋いだまま。私は後ろを振り返ることなくその場で彼女が泣き止むのを待った。

こういうときに抱き締めてあげられればいいんだけど、それは日向クンの仕事だよな？

「あの、あのあの……… あ、ありがとう、ごさいますう」

「えっと…… もう後ろ向いてもいいかな？」

「あ、は、はいごめんなさあい！」

まずはこの謝り癖をどうにかしないと西園寺さんには受け入れられないかもしれないなあ…… と、私がそんなことを考えている間にも、罪木さんは泣き顔を歪ませながらぽつりぽつりと本音を吐露し始めた。

当初の狙い通り、やはりビーチハウスには誰も入ってこず、こういう話をするのにはもってこいの場所であったようだ。

「私…… 嫌われるよりも、どうでもいいって、思われるのが怖いんですう…… 私が透明になってるみたいで、必要とされないのが怖いんですよお…… だって、不要になったら…… すぐに捨てられちゃう

じやないですかあ！」

彼女の頭にそつと手を乗せる。

それだけでまた罪木さんの涙腺が決壊し、その手が空を掴むように彷徨う。

私はそれを手に取って、震えを抑えた。

「患者さんは私しか頼る人がいないから、だからそれが私は嬉しいんです…… 怪我をしてる人も病気の人も無条件で私を信頼して頼ってくるのが嬉しいんです…… 必要とされているのが分かるからつ、だから私よりも弱い人たちを助けるんです…… だって、だって、そういう人じやないと…… 誰も、こんな醜い私を、見てくれないじやないですかあ…… ！」

その叫びを遮ることなく、彼女が落ち着くまでひたすらそのままの状態で続けた。

「罪木さんはさ、人の観察をするのは得意だけれど、人が自分に向ける好意には気づかないよね……」

「あ、あの…… っ、っごめんさ……」

反射的に謝ろうとしてきた彼女の口元に人差し指を当てて言葉を遮る。別に、私は罪木さんを責めているわけじやないのだ。

「ううん、そういうことじやなくってさ…… もっと、周りを見てみなよ。キミを見る皆の目は無関心かな？ 侮蔑してるかな？ キミをイジメてた人たちと、同じ目をしてると思う？」

「…… いいえ、そんなことは、ありません…… 怖いくらいなものしてこなくて、怖いくらい…… 優しくって…… イジメられないのなんて、初めてで…… どうすればいいのか、分からないんです……」

「喜んでいいんだよ。ぎこちなくでもいい、皆とも仲良くなるろう？ きつと罪木さんなら、できるから」

そうだ、接し方が分からないだけ。

なら、これから学んでいけばいいのだ。

「ちよつとずつ慣れていこうね。ほら、私も練習相手になるからさ。お散歩したり本を読んだり、ゲームしたり…… いろいろやっていこ

うね」

「は、い……………！」

これならもう、きつと彼女は大丈夫だ。

なら、今度は…………… 私の番かな。

「罪木さんの気持ち、聞いちゃったからさ…………… 私のこと、キミにな

ら言うよ。今までは、あんまり人に言ったことはないけど、聴いて

…………… くれるかな？」

少しだけ緊張する。

彼女はきつと拒まないと思っっているのに、拒絶されたらどうしようとも思ってしまう。

人の悩みを無理矢理聴いたそのクセ、自分の悩みも聴いてもらおうだなんて、なんて自分勝手なんだろう。

「聴かせて、ください……………」

未だしやくりをあげながらつつかえつつかえで言った彼女から視線を外して首にぶら下がった橙色のホイッスルを掴む。

「私はね、幸運なんだよ」

嫌なことを、勇気を出して言った彼女に敬意を抱いて、というか、私が話したくなっちゃっただけの自己満足。自分勝手さ。

言いたいことはぐちゃぐちゃだけれど、許可を貰えたのだから、ちゃんと伝えないと。

「そうとしか言いようがないんだけど…………… 代償が必要な ” 幸運

” なんだ。そのせいで両親も死んじゃったし、義理の両親まで死んじゃった。友人だって皆死んじゃったし、愛犬も私を守って……………

皆、皆仲良くなつた人は私を置いて行くんだ。2度と手に入らない人が死んで、機会があれば幾らでも手に入るお金が手に入って……………

そんなの、いらぬのにね…………… だからこそ、私は死ぬわけにはいかな

いんだよ。皆の分まで生きなくちゃいけないんだ。最初はただ痛いことが嫌いなだけだったんだけどね…………… 死体の山に座って生きて

る私は、死んだ皆に引き摺り下ろされることは容認しなくちゃいけないけど、他の誰かの手でその死体の山をなかつたことにされることだけは許せないんだ。だから殺されてやらない。死なない。殺される

くらいなら殺してやりたいくらい、私は私を守りたい…… 死にたく、ないんだ……」

きゅつ、と目を瞑って彼女の顔を直接見れなくなった。

今まで誰にも言えなかったことを吐き出して少しだけすつきりしたような気がする。

「……えつと、私にできることなんて、あんまりないかもしれないですけどお…… 狛枝さんが怪我をしたら絶対絶対治しますし、なにがあっても延命処置しますう！皆さんのことだってそうですよお。死なせたくないなら、失いたくないなら…… 無理矢理にでも助けてみせますう！だからだからだからあ！」

『私も見捨てないで』『一緒にいて』

そんな言葉が、聞こえた気がした。

「…… ありがとう」

まずいスイッチを踏んだかもしれない。

でも、そんな不器用な気持ちも嬉しく思う私がいる。

ピロリン、と希望が芽生える音が、私の心がほぐされていく音が、した。

そうして手を繋いだまま黙っていると罪木さんがなにやら扉の方に向いた。

何事かと思つて私も耳を澄ませると、どうやら2人分の足音がこちらに向かってくるようだ。

「罪木さん、こっち」

たとえ相手が女子だったとしても泣き顔を見られるのは避けたい。

彼女の手を引いて奥にある大きなウォークインクローゼットへと身を隠す。そして扉が閉まったと同時に誰かがビーチハウスへと入ってくる。

「ですから、いい加減歩み寄らないと無駄に怒りを買うことになってしまいます」

「うるせーっつーのー！どいつもこいつも弱気で俺を自分たちと同類だと思つてやがる。俺はためーらとは違つて、はつきりさせとくしかねーじゃねーか！」

「しかし……！」

この声は。

2人の声に動こうとした罪木さんを押さえつけてきつと口を塞ぐ。もごもごと口を動かして再び泣きそうになっている罪木さんに、もう片方の手の指を口元に持つていくことで声は出さないでいてもらう。そして私は釘付けになってしまった。その声に、その口調に……その、言葉に。

「うるせーぞ！ 今の俺らはただのクラスメイトだって言ってるだろーが！ 敬語はもうやめろって！」

「2人きりのときくらい許してください……」 “ぼっちゃん” “その言葉を聴いた瞬間、頭が真っ白になった。

” お嬢様 ”

真逆の言葉であるはずなのに。なのになぜこんなにも私の心を揺さぶるのか。

それ以降の会話は聴くことができなかった。

思考がぐるぐる回り、彼女、辺古山さんの紡ぐ “ぼっちゃん” という言葉だけが頭の中で反響する。あの子の声と重なる。そして、その単語に悲痛な剣士の最期を思い出して目を見開いた。

彼女^{あの子}が死ぬ？

主人を守って、最後の最期で分かり合えた筈の彼女が果てる姿が網膜に焼きついたように再生される。

悲痛な最期。痛ましい悲劇。しかしそれは現実となる。

彼はそれでも前に進むことができたが、私はどうだ？ 私のあの子がもし死んでしまったら？それも、自分の不始末で。

耐えられない。耐えられる筈がない。

重ねてしまったのが運の尽きか、罪木さんとの会話で揺れた心が「このままでいいのか？」と言う。「キミはまだなにもしようとしてないの？」と嘲笑^{わら}う声が聞こえる。

死体の山を、犠牲者たちがいたという証を、他ならぬ私を死なせるわけにはいかない。痛いのは嫌だし絶望なんて味わいたくない。

そのためには誰からも恨まれることなく、もしくは手を出されない

立場にいるしかない。

だけれど揺らぐ。

私の中の狂気はそれくらいで突き崩せるものではない。

しかし、死なない努力をするのに見て見ぬ振りをするだけが正解なのかという疑問も湧いた。

はじめは思っていた。いや、十神クンが生き残ったときにも思っ

た。

『誰も死ななければいいのに』

そんな記憶が彼女のたった5文字の言葉で無理矢理引き上げられる。

そんな後悔絶望すると分かった餌希望に食らいつくだなんて、自殺行為だ。いけない。そんなものに揺らがされてはいけないのに、ずっとチラついていたメイの顔がより鮮明に、はつきりと思いきこされた。

はくはくと口を動かしながら目を見開いて閉まったクローゼットの扉を見つめる。

どうやら、一切動かずにいたからか2人は私たちに気がついていないようだった。2人はそのまま、言い争いをしながらビーチハウスを出て行った。

「あの…… 狛枝さん、大丈夫ですかあ？」

「…………… ごめん、私は大丈夫だから早くここから出よう」

体を動かしていないと混乱してしまいそうだ。

しかし彼女は許してくれないらしい。手を強引に掴み、困り眉はいつもと同じだがどこことなく強気に「だ、ダメですよお！」と言っ

た。

「すごく青い顔をしていますう…… 狛枝さん、あんまり寝ていない

んでしょう？… ここですし休んで行きましょう！」

「いや、でもこれは精神的なものだから……」

「それでもですう！」

さきほど 「なにがあっても助ける」 と豪語したせいも積極的だ。

どうやら折れてはくれないらしい。

「分かったよ…… 10分だけね」

そう言って腕時計を外し、彼女に預ける。

「ですけどお……」

「皆も探索してるしさすがにあんまり待たせられないよ」

私の言葉にしぶしぶといった様子で頷いた彼女と座る。

クローゼットの程よい暗さが丁度眠気を誘い、壁に身を預けてそつと目を閉じる。

包帯が巻かれた左手が拳一つ分の熱を私に伝えてくるようだ。

それに影響され、ぐるぐるした頭の中は不思議と安らぎ、すぐに睡魔に引き込まれていく。

「ありがとう……… 罪木、ちゃん……」

酷くたどたどしい手つきで撫でられた頭が、なんだか心地良かった。

ピロリン！

* キボウノカケラ コンプリート！ *

“ 罪木の包帯 ” を 手に入れた！

「……んう、う？」

壁に身を預けていたはずだが、いつの間にか彼女に膝を貸してもらっていた。額に置かれた手がひんやりとじていて心地良い。

「えつと…… ありがとう、罪木さん」

名残惜しくも思いながらその手を退かし、礼を言う。

「…… さん……」

しかし彼女は少しだけ残念そうな顔をして呟いた。

「う…… その、まだ慣れてないから…… ちよつと恥ずかしいんだよ。だから暫くは “ ちゃん ” 付けは勘弁してほしい…… かな」

あの時はひどく安心してしまっていて気が緩んでいたのだ。

しかしうつろちゃんや織月のようにそう簡単にはいかない。あれは付き合いが長いから…… 罪木ちゃんとは、精々数日の付き合いであるし、言い慣れしていないから暫くは心の中で呼ぶに留めるとしよう。

なぜこんなにも心を許してしまうのか。分からない。

どうしてこんなにも “ 親近感 ” を感じるのかが分からない。

同情しているのだろうか…… 「こんな私を認^許めてもらいたい」というその似た思い。

私にはそんな自分を受け入れてくれる人がいたけれど、罪木ちゃんにはきつといなかったのだろう。だからこそ、あの方とやりに傾倒してしまったのだ。

「そ、そうですよねえ…… 私もいきなり名前で呼ばれるのは、その

…… 慣れていないので……」

じつと見てみると残念そうなのは変わらないが、同時にほつとしていることも伝わってきた。もしかしたら、私がちゃん付けをしたら自分もそうしなくてはならなくなると思っていたのかも知れない。

確かに彼女にはさん付け以外の想像がつかないし、についても違和感

がある。

「お腹空いたよね。ちよつとだけダイナー寄ろうか」

私が話題転換にと腕時計を見ようとして宙を手が彷徨う。

そうだった。腕時計は罪木ちゃんに……

「ええと…… 狛枝さんは朝食を摂っていないんですよね。確か式大さんや終里さんがいましたよね…… 今もいるでしょうか……」

彼女がさり気なく手にした腕時計を愛おしいものに触るよう撫ぜ、こちらに向ける。返してくれようとしたようだが、これは彼女に持つていて貰った方がいい。なんとなくそう思い、受け取ってから彼女の左手に付け直す。

「い、いいんですかあ？」

控えめに聞こえたその声に微笑んで「うん」と言う。

「この島から出るまで、持つていて貰えるかな？ その代わりに罪木さんの包帯を一巻き貰えるかな？」

そう私が言うと、不思議そうな顔をした罪木ちゃんが私の左手をチラと見て首を傾げた。

「えつと、包帯を巻くのでしたら私がしますけれど……」

「ああ、そうじゃなくてね。御守り代わりに、かな。キミって言ったら包帯かなって思つて。暫くは左手に巻いたままになるだろうし、治つた後も付けさせてもらおうよ」

「は、はわわわ……」

罪木ちゃんは言われたことを徐々に理解していったのか、みるみるうちに頬を赤くして顔を覆ってしまった。

それから暫く綺麗な浜辺を視界の端に歩き、洞窟を抜けてダイナーへと入った。

中にはいまだすごい勢いで食事している2人がいるようだ。

「や、お2人ともさつきも見たけど食事中？」

「ふおうーほへふらいもー」

「ガツハツハ！ 一汗かいた後にシャワーでもと思ったがどうやら今は故障しておるようでのお！ 代わりに飯にすることにしたんじゃあー！」

つと、情報だね。

日向クンじゃないから誰からこういう情報が聴けるのかは分からないんだよね。シャワー室は故障中、とメモ帳にさりとペンを滑らせる。

「なるほど？　じゃあ、あそこは入れないのかな」

「モノミが着替えも禁止と言っていたぞ！　ルールと同じ扱いのようじゃから気をつけるんじゃないぞお！」

「わ、分かりましたあ……！　情報感謝いたしますう！」

罪木ちゃんも目をきゅつと瞑つて大袈裟なお辞儀をしている。大分皆と接するのも慣れてきているのだろうか？　隠れて私のパークの裾を握っているが、それでも人を信用しようと頑張っているのかもしれない。

「終里さん、オススメはあるかな？」
「ん」

食べながら指差したのはメガ盛りなハンバーガーとポテトの山だ。どうやら、ファーストフード系が多く、美味しいらしい。

なら、私はチキンも追加で頼みつつメダルを消費しますかね。スーパーマーケットの食品やホテルの食事は無料だがこういう場所の食事はどうやら無料にはならないらしい。

なぜか自動でカウンターから出てくるそれらを受け取って2人の前に座る。

それから遠慮なくほいほいとチキンを攫っていく終里さんに対抗して向こうのポテトを摘まみつつ、島の話をした。

終里さんは黙々と食べ続けているが、式大クンはどうやらお喋りな模様。島の周辺は泳ぎながら確認していたらしいのでどこに何があるのかも知っているようだ。

しかし文字通り泳ぎながら外観を見ただけなので、外観でどのような建物か分からない場合もたまにあるそうだ。

彼が分かったのはドラッグストアと図書館。遺跡は廃墟かな？と言っている。まあ、普通あれが遺跡だとは思わないだろうね。

「ドラッグストア……　ですかあ！」

「図書館か」

「おお！ 食いつきが良いのお！」

やっと暇潰しできる場所ができて嬉しいんだよ。本を読むのは嫌いじゃないし、私は乱読派だからなんでも楽しめるからね。でも、距離的に先に行くのはドラッグストアだろうか。うーん、私が言うのもなんだけれど、長くなりそうだなあ。

さしてブランドに興味のない女性でも買い物は長いけれど、それが医師の卵。それもドラッグストアなんて組み合わせじゃあどれだけかかるか分からない。

「あ、あの…… 狛枝さんは図書館が気になる…… んでしようかあ？」

「ん？ うん、私はそうだね。でも、罪木さんはドラッグストアに行きたいんでしょ？」

これは別行動するのが一番良いのかもしれない。情報収集ならそれぞれに合った場所に行った方がいいだろう。

「なら…… 先に図書館に行きましょうかあ……」

あ、なんだかしよんぼりしてる。

じゃなくて、いやいやいや！ なんでこの子は遠慮してこようとするのかなあ！ 献身的すぎて逆に怖いくらいだよ！

「情報収集だけなら別行動の方がいいかもしれないよ？ ドラッグストアはできればキミに把握してほしいし、私は本を読むのが早いからなるべく図書館の中身を把握できるように頑張るよ。この島のこととか、外のこととか、いろいろ調べられるようにするからさ。その間は、万が一のことがないために医療関係をしつかり固めておかないかね？」

ただ別行動をしようと言うだけだと彼女は落ち込んでしまうからね。そうならないために幾つかフォロワーしつつ言葉を重ねてはいるけれど、それでも罪木ちゃんが残念そうだな。

一緒に調べないのは自分のそばにいたくないからなんじゃないかという視線が刺さる。

これはもう一押しした方がいいのだろうか。

「キミならすぐにもドラッグストアの中を把握できると思うよ。そう、” 信頼 ” してる。ああ、私の方が多分時間がかかるから終わり次第図書館に来てくれると助かるな」

「しん…… らい…… えへへ、分かりましたあ！ ドラッグストア内のお薬は錠剤で見分けられるくらいまできちんと把握しますねえ！」

よしよし。こういう言い回しは ” 信頼 ” を盾に脅しているみたいで嫌だけれど、彼女の場合そうじゃないと納得してくれないからなあ。

いやしかし、これはチョロすぎるのではないだろうか。この子の将来が心配である。…… 既に手遅れな気もするが。

「じゃあ、情報ありがとうね式大クン。終里さんも」

「ん！」

「応、気をつけるんじゃぞお！」

結局チキンは2つしか食べられなかったな。おかしいな、6個入りのやつを頼んだはずなんだけど。まあポテトも摘めたし、お腹は満たされたから別にいいかな。

罪木ちゃんもファーストフードは健康がどうのと言いつつ、きちんと食べられたようだし十分だろう。…… どうやったら罪木ちゃんのように胸に栄養が行くのだろう。少食のようなのに不思議だ。

「近いのはドラッグストアだよ。そっちに寄ってから分かれようか」

「そ、そうですねえ…… ふゆう、緊張しますう……」

伏せ目がちにしているが目は輝いている。

薬を目にできるのをとても楽しみにしているのだろうね。

「えへへ、これで狛枝さんの怪我を早く治せますねえ……」

予想外の答えに目を見開く。

本当に嬉しそうに、そう言った彼女は頬を赤く染めながら無意識ながらに私の左手を取って包帯の上から傷口を優しくなぞってくる。

それはさながら心臓を撫ぜられているようで、痛まないように加減されているのが分かるのに、そのまま傷口にずぶりと指先が入ってき

そんな狂氣的な危うさがあった。

私は、それにぞわりとしたなにかを感じながら乾いた笑いを浮かべて誤魔化するのだ。

やはり、この献身っぷりは空恐ろしい。

メイとはまた違ったアプローチ。彼女ならきつと思つていても口に出さずに黙つて手当をするだろうし、なんだか新鮮でもあり恐ろしくもある。

あまり優しくされすぎるのも心臓に悪いものだ。

「あ、あの罪木さん…… くすぐつたいから……」

「あ、ご、ごめんなさい！ つい……」

しゅんとする彼女は可愛らしいが、やっぱり恐怖心は薄れない。

それを悟られないように泡だつ肌を押さえつけ、彼女の視線をそこから逸らすように 「ほら、見えてきたよ」 と遠くを指差した。

「わあ……！」

上手く誤魔化されてくれたようだなによりである。

目の前には大きく、そして清潔そうなドラッグストアが建つていた。中は明るく、そして花村クンや小泉さんなどの姿がチラホラと見える。

花村クンがなにを探しているのか非常に気になるが、私がいると逃げてしまいそうなので着いていくのはやはり遠慮することにする。

「じゃあ、あつちに図書館があるようだからそつちで合流しようね。キミが来るまで私も情報収集しておくから」

「はい！ なるべく早くに行けるようにしますねえ……！」

そう言つて、わりとあつさり別行動を取れた。

説得つて結構大切なんだね。もう少し粘られると思つていたけれど、彼女が素直でなによりである。

手を振り合つて2手に別れ、今度は1人で図書館へと向かう。

図書館にはソニアさんや十神クンがいるイメージがあるから、情報収集も案外早く終わるかもしれない。

そして時間にして20分程歩き、ようやく図書館らしき建物を見つけた。

館のような煉瓦造りでレトロな雰囲気醸し出している。こういう外観の古い建物はイギリス辺りの綺麗な建物に似ていてなんだか好きだ。

突風が吹いたり、窓ガラスが突然割れてこないことを確認して中へと入る。

1度こういう建物の前を通ったときに、中で暴れる子供が本で窓を叩き割る場面に遭遇したことがあるのだ。十神くんやソニアさんはそんなことには絶対ならぬだろうが、ソニアさんに付いて回っている左右田くんは機械弄りを始めて暴発させそうだし、やはり注意をしておいて損はない。

「あら？ 粕枝さん、起きてきたのですね」

建物の中に入ると、扉の音に気が付いてかソニアさんがこちらを振り向いた。その手の中にはなにやらパンフレットのようなものがあるので、この島のことを調べていたのだろう。

周りにはモノクマの銅像と、その下にラクガキした上で蹴落とされているウサミの銅像があるが、それらを邪魔そうに避けながら十神くんがこちらに向かってくる。

「ふん、寝坊だぞ。ここに来たからにはきっちり働いてもらうからな。そら、そっちの棚を調べておけ」

彼の手には何語かも分からない大量の本と…… お菓子の入った袋。

しっかりと袋からトングが見えるので、マナーは悪いが本を汚さないようにはしているらしい。

そんな彼が指差したのは2階部分の奥の棚だ。

「2階は手をつけてないの？」

「ああ、さすがに2人だけでは手が足りなくてな。もう1人くらいいれば捗るんだがな…… 英語以外がダメな奴らが多すぎる」

苦虫を噛み潰したような表情でそう言う彼の視線は、私が英語以外もできると確信したような真っ直ぐさがあった。勘違いかもしれないけれど。

「と言っても、私英語とドイツ語とフランス周辺の言葉しか分からな

いよ？ ラテン系は…… あんまり旅行に行かなかったから微妙かな。英語もクイーンズ・イングリッシュとアメリカ英語くらいは見分けがつくけど、他はできれば辞書が欲しいところかな」

英語とドイツ語は医療機関にいたからメイに教えて貰っていた。他の知っている言語は基本、2人目の両親と旅行に行っている間に覚えた常用言語くらいが限界だ。

いくら〃 狛枝^{わたし}〃 の頭がハイスペックだからと言って、使わなければ覚えられないし、ソニアさんや十神クンみたいに英才教育を受けたわけでもない。乱読しているうちに覚えられるものもあるけれど、辞書片手にやらないと無理かな。

今度2人から各国の言語について教えてもらうのもいいかもしれないな。

「それだけ分ければ十分だ。このジャバウオック島にある蔵書の多くは英語だからな。あと多いのはスペイン語か…… ならそっちはこの辞書を使え。他に分からない言語があれば俺かソニアに訊け。分かったな？」

ふん、と鼻を鳴らして分厚い辞書を手渡してくる十神クンに笑顔で受け取る。やっぱり面倒見が良く、優しい人だな。

ともかく、これで私のやることが決まったので2階に上がるとしようか。

「じゃ、ありがたくこれは使わせてもらおうね」
手を振って2階に向かう。

それから1番近い位置からざっと表紙を眺め、英語のタイトルが多いことを確認して島の情報を得られそうな本を探していく。

パンフレットや島の概要、神聖な5体の動物についての由来。ジャバウオック島周辺の海洋調査書。生体調査書。はたまた娘のイグアナに関する伝説や伝記の類まで乱雑に並べられているようだ。

また、地質調査の書類を纏めたものや自然保護区に設定された際の条約など法律関係についてもあり、島と島を繋ぐ橋の建設企画はこの〃 地質的問題 〃 と 〃 自然保護区認定 〃 により、島の生態を著しく変化させる恐れがあるとして白紙に戻っている。

そのため、現在でも島間の行き来は連絡船を使用していると、そんなことが分かる。

つまり、この島に橋がかかっているのはおかしいということだね。まあこの事実をどう捉えるかは皆次第だけれど、確かこの情報つて下のパンフレットにもなかったっけ。

ついでに海洋調査によると周辺にはサメもいるみたいだね。いや、いたみたい、つて言ったほうがいいのだろうか。モノミの “ 安全平穏な島 ” っていう言葉が嘘になってしまうからね。

先程泳いでいた式大クンも、海の中は綺麗なもので、危険な生物はいないようだったって言っていたし。

とまあ、英語で分かるのはこのぐらいだろうか。

他にある分厚い本やらは皆単語を見た限りラテン系っぽいし、スペイン語だろうか？全部十神クンに任せるわけにはいかないし、タイトルだけ辞書で調べて気になったものだけを持って行こうか。

「ん？」

あれ、なんだか奥の棚が光ったような……？

いや、そんなゲームみたいなこと、この世界であるはずがないよなあ。でもやはり、気になるものは気になるのだ。

幸いまだ見ていない棚だったし、こちらも調べてみようか。

「光って見えたのは、これか」

1冊の本を手にとってみるが、特に変わったところもない……わからないか。

紫と淡い群青の格子模様の表紙だが、しかし、タイトルがないようだ。なんだか見覚えのあるような模様の表紙だが、なんだろうか。思いつけない。

一先ず好奇心に身を任せて表紙を開いてみる。

そこに書いてあったのは、微妙に見覚えがあるような、そんな文章だった。

『日照り猿の飼い方』

・ 日照り猿は雑食ですが、水分の多いものを食べさせるとお腹を

壊すことがあります。

・ ゲージには、おたくずを敷き詰めましょう。新聞紙を細かく裂いたものでも可能です。

・ ゲージを掃除する際には、日照り猿を一度水の張った桶に移した方が良いでしょう。

・ 日照り猿は、決してつがいのまま飼ってははいけません。

・ 日照り猿は、飼い主であるあなたの行動を真似る習性があります。愛情を持って育てましょう。

・ 日照り猿が言葉を覚えたら、すぐに毒を飲ませて殺してください。

「なに、これ……」

見覚えがある。しかし思い出せない。

本から目が離せなくなり、そして一定のリズムで響いていた紙の捲る音が聞こえなくなる。無音。耳に痛い程の無音。

鼓動が早くなり、頭が痛くなる。

無理矢理頭の中に誰かが押し入ってくるような、普段眠っているときならばそれもあるさう受け入れられるそれを、こうして「起きているとき」にされるのは受け入れ難い。

痛い、痛い、痛い。目がくらむ。ページを捲る手が、止まらない。

やだ、怖い。まだ、待って。

『ころんだら、「脳」すりむいちゃった』

頭の中で、誰かの囁き声が聞こえる。

誰かの笑い声が聞こえる。

ぐわんぐわんと頭が揺れて、そして思い出す。

「り、づき……ねえさ……ん？」

頭が痛い。やめて、無理矢理入ってこようとしないで。

待って、お願い、もう少し待って。

「……は、あ……っ」

背中に流れる脂汗と明滅する視界、立っていられなくなり彷徨った手が何かを掴み、それに体重をかけてバランスを取る。

痛いほどの静寂に、誰かの手が後ろから肩を掴んで、反射的にその手を弾いた。

「っ、やめてー！」

「お、おい大丈夫か？」

そして、弾いた手が誰のものだったかに気が付いて、傷ついたような寂しい顔をする日向クンの表情を暫し目を見開いたまま見つめる。

「拐杖、もう大丈夫ならいい加減離れろ」

静寂は打ち破られ、目の前にも誰かがいることに気が付いてそっと視線を上げる。身長差で上にある顔には眼鏡の奥底でひやりとするような視線がこちらに向けられている。

私の手はそんな彼の、十神クンの服の裾を苦し紛れに握り混んで継り付いていた。

「えっ、あつ、っ、ごめん！」

「はあ、まったくなにをやっているんだ……」

驚きでばさりと落ちた本を目で追うと、その表紙は「彼女」の格子模様ではなくなっており、『化学』の文字が踊っている。

「元素記号、こういうのが苦手なのか？」

ああ、純粹に疑問に思っただけで訊いてくるのはやめてよ日向クン！

まさか白昼夢を見ることになろうとは……

「元素記号と言ったら意味が分かると怖い話ですね！ 暗号！ 遺言

！ あれは素晴らしい出来です！」

「そ、ソニアさん？ 今はその話じゃないと思うんですけど……」

あ、いや、嫌とかではなくてですね……」

なんだか、彼らのやり取りを聴いていると息が抜ける。

どうやら安心してしまったようだ。

「はあ…… 大丈夫、目眩がしただけだからね……」

「体調が悪いならそうと言え。無理をする前に罪木に見てもらおうんだな」

「あ、えつと…… 罪木さんとはここで待ち合わせだから、暫く下で休

ませてもらおうよ」

結局、十神クンやソニアさんに殆ど任せっきりになってしまった。これでは罪木ちゃんに会わせる顔がないや。

「お、おい狛枝足元気をつけろって！」

「え、あ……」

もはやお約束なのだろうか。ええ、勿論足を踏み外しましたとも。このまま一直線に突っ込めば本棚が倒れてくるおまけ付きだ。

ああ、なんというか…… ごめん、あとはよろしくね、罪木ちゃん。そしてそのまま、物凄い衝撃と圧迫により視界は暗転していった。

No. 18 『一刻』―信用―

私が目を覚まして辺りをぐるりと見回すと見覚えのあるひび割れたような模様の床が視界に飛び込んで来た。

今回は線が白く、床全体は真っ黒に染まっている状態になっている。

夢。久しぶりの我が夢の中である。

あれだけ派手に転んでおいて本に埋まったのだから気絶して然るべきものだろう。できればあまり怪我をしたくないのだが、どうなっているかはまだ分からない。

夢の中では現実の怪我は影響しないので、自身の左手も包帯は巻いていない。紫色の服に真っ白なスカート。お気に入りのその服をざっと眺めてくるりとその場で回る。

「うん、特に問題なし……かな」

皆といるときの格好でないのは少し残念だが仕方ないだろう。

右手を翳し、ほうきをその手に。一瞬で変わった服装と頭のリボンを手で確認してからほうきに横座りする。

「メイに会いたいなあ」

たとえそれが夢の中だとしても。

と、今回なにをするのかを決めてほうきの先端の方へと体重をゆつくりかけていく。それに従い、滑るように走り出した景色を眺めながら私は目的の場所へと向かった。

「欲を言えば顔を見たいよねえ……」

『Sugar's hall』

そんな看板を確認して店内へと入る。

簡素な雰囲気にしたバーだが、そのカウンターの中にはコーヒークップを拭いている黒髪三つ編みの女性。メイ子さんだ。

顔にはガスマスクをしており、いつも細められた綺麗な赤い瞳を見ることができないが、尻尾のようにゆらゆらと揺れる三つ編みと、皺

のほとんどないメイド服が彼女であることを証明している。

空いている席は1つだけ。私はお財布の中を軽く確認してから真っ黒な酔い潰れた客の隣に立ち、右手を振り上げるように頭上に掲げた。

「お金ちよつとだけ足りないからね」

やることは1つだけ。

握り込むようにして振り上げた手の中に冷たく、硬い感触の物が現れる。酔い潰れた客も、その隣でちびちびとケーキをつつく怪物兄も、メイ子さんでさえなにも気にせずに過ごしている。

さあて、私はメイのケーキを食べなくちゃいけないんだ。文字通り、酔い。潰れた。お客さんになつてね。

にやりと笑い、私は全力で鉄パイプを振り下ろした。

「ケーキセット頂戴？」

空いた席に座ってお金をカウンターへ置く。少々赤く変色してしまっているが、夢の中の通貨は基本的に誰かの血に塗れているのであまり気にしない。結局は鉄パイプでなにかを殺したときに手に入る物なので、もしかしたらこれが通常なのかもしれないが。

「……」

無言でコーヒーとケーキを用意するメイを眺める。欲を言えば喋ってほしいのだがそうもいかないようだ。

ちびちびとケーキをつつく怪物の長兄は発狂しておらず、額から左目を覆うように血が垂れているくらいだ。これが発狂していたら顔がぐるぐると渦巻いたような真っ赤な渦で埋め尽くされ、その中にぽかんと白い歯だけが覗く怖い様相になるのでこのままでいい。

彼の横には真っ赤に染まった鉄パイプが立てかけられ、未だそこから血が滴っていることからどこかで何かを殺してきたのかもしれない。

「……」

そちらを向くと、私と違う真っ赤な瞳はこちらを睨むように細められ、眉が顰められていた。

「ああ、ごめんね。キミにはなにもしないよ」

このバーに彼がいるのはかなりのレアイベントなのだが、彼に先ほどの客同様乱暴を働こうとすると返り討ちに遭うのでなにもせずそう言った。

彼に向かつて鉄パイプを使うとその隣に立てかけてある鉄パイプで返り討ちと言うには生温いくらいの勢いでぐつちやぐちやに殺されるのだ。勿論、強制的に起床させられる。

死にたくないの彼のことは眺めるだけにとどめて、差し出されたショートケーキを頬張る。

記憶の中にある彼女のケーキとなら遜色のない美味しさだが、やはり会話がないことで少しだけ物足りない。ああ、賑やかなティータイムが懐かしい…… 近いうちにまた女子会開いてもらおう。

「美味しかったよ。また来るね」

お辞儀をするメイへと手を振り、「怪物クンも」と声をかけるとため息を吐きそうな顔をしてそっぽを向いたままひらりと手を振ってくれた。ツンデレめ。

頬を抓って視界が暗転する。

平和的な起床なんて、いつぶりなんだろうか……

「ふあ……ん」

目を覚ますと、そこはホテルのロビーだった。

柔らかなソファに横になっていたようで肩はこっついていないが、階段から落ちた上で本棚にぶち当たったときの影響か節々がどこことなくだるい。

きよろきよろと視線を彷徨わすと、同じくソファに身を沈めた罪木ちゃんの姿が目に入った。

「あ……」

「起きたか？」

「…… 十神クン？」

2階のレストランから降りてきた十神クンはこちらを確認すると、少しだけ口を綻ばせた。

「あー、昨日はごめんね。ここまで運んでくれたの？」

「罪木は自分の部屋にと言っていたが…… 俺が担いでいるとはい

え、そう簡単に女子の部屋に入るわけにはいかんだろう」

え、なにこの紳士。

「というか、十神クンが担いでくれたのか。そこまでしてくれるのは意外だ。」

「うん、私もそれには賛成かな…… 意図せずとも人の部屋に入っちゃうのは遠慮しちゃうし」

ましてや、自分の部屋に勝手に入られるのも良いとは言えない。

「昨日、お前は気絶していたから知らんだろうが2の島で発見があった」

「発見？ 図書館でなにか見つけたの？」

十中八九遺跡のことだろうとは思うが私はまだ見たことがないの
で首を傾げる。

「お前はそのとき寝ていたからな…… 図書館から20分程の場所に遺跡があった。希望ヶ峰学園の外観によく似ていたがコケや蔦葉で覆われ、まさに遺跡という様相だった…… しかし妙に文明的な大きな鉄の扉があつてな……」

「遺跡って言うほどの外観じゃあ、モノクマが言うみたいに数年の記憶を失つてたとしてもそうはならないよね…… 私が入学式で見たときはちよつと古そうだったけどピッカピカだったし」

SFという単語は十神クンの口からは絶対出ないだろうし、失言しないようにしておかないと。

「ああ、俺もたかが数年ではああならないだろうと思ってるが…… 記憶の話についてはまだ本当のことか分からないから。保留するしかないだろう…… 問題なのはその鉄の扉にパスワードを入力するパネルと、恐らく間違えたら使用されるだろう機関銃がついていたことだ」

「えっ、銃!?!」

そういえば、あの銃ってモノクマに乗っ取られたあとに付けられたのだろうか。後輩たちがそんな物騒な物を取り付けるわけもないし、本来は監視カメラとかだったのかもしれない。

「それじゃあ…… 迂闊に触れないね」

「モノクマやモノミもその場にいたが、どちらも入れないと言っていた。まあ、その話が本当かは怪しいが…… 反応の仕方から少なくともモノミの方は本当かもしれないな」

結構丁寧に教えてくれるんだなあ。

ポケットに入っていたメモ帳に書き込みながらペン先を顎へとくつつける。考えるポーズだ。

「ああ、あと…… 世界の破壊者と呼ばれる組織がこの島に俺たちを連れてきた…… とかモノクマは言っていた」

「モノミは？」

「否定的だったな…… しかし、世界の破壊者とは言っていたが主語が半分抜けていたからお得意の曖昧な表現をしただけかもしれない」

ああ、そこは十神クンも分かっているんだ。

「裏切り者の話も誰にとってのかは言っていないし、世界の破壊者の話もそうなら…… もしかしたら……」

“モノクマにとって” “かもしれないよね、とは口に出さなかった。それは勿論十神クンも分かっていることだし、口に出してしまえばモノクマが出張ってなにか言ってくるかもしれない。あまりあれを刺激したくないのでどちらとも理解しておきながら口には出さないのだ。

「…… ふん、その世界の破壊者とやらは恐らく”未来”を掲げているだろう。鉄の扉にそんなロゴマークが彫ってあったからな」

「ふうん、尚更絶望絶望言ってるモノクマとは正反対って感じだね。まあ、第三者の可能性もあるけれど」

スレスレの会話をしながら寝息を立てる罪木ちゃんの腕をそつと持ち上げる。午前6時30分。もうそろそろ朝食の時間だ。

「裏切り者については、今名乗り出たところで糾弾されるだけと分かっているようだから本人に任せたいほうが良いだろうな。俺たちはこうして理解できているが、納得しない者もいる。あまり波風立てるべきではない。だから今は…… 全員で立ち向かえるようにしなくてはな」

全員。その中に私が含まれている。

それは彼の真っ直ぐ射抜くような目を見れば簡単に分かった。

あれだけのことをした私を、自分がいいなら皆はどうでもいいと言
い切ったような私を、それでも守るべき仲間として彼は見なしている
のだ。

なんてお人好し。なんて馬鹿な人。

でも、その心遣いが…… いや、その人柄が私は好きなんだろうと
思う。お人好しで絶対に損をするような実直さ。だが、本当に尊敬で
きる人だ。

「…… キミのことだから私になにも思うところがないわけじゃない
と思うんだけど……、責めてはくれないんだね？」

目を伏せて確認するように問えば彼は鼻で笑うように「ふん、俺
のように完璧な人間は違うが、そうでない人間が弱気になるのは当た
り前だろう」と自慢気に言った。

「っはは、キミって傲慢だよねえ……」

「上の人間が傲慢でなくてどうする。優しさしか持ち合わせていない
のならばそれは無能でしかない」

「それ、新手の自虐ネタかなにかなのかな？」

「…… ふん、朝食の時間ださっさと行くぞ。今日の飯は期待してお
くんだな」

あーあ、話逸らされちゃった。

くすくすと笑って2階へと上がっていった十神クンから目線に移
す。

近くではずうつとゲーム機で遊んでいた七海さんもいるが、どうや
らゲームに夢中で話の内容は聞いていなかったようだ。時間にも気
づかずに未だ記録更新中である。

「罪木さん、罪木さん……」

ゆさゆさと揺すってみるも、腕を絡ませてくるだけで起きてくれな
い。花村クンにこんなところを見られなくて良かったと思っただが、よ
く考えなくとも他の皆に見られるのもなかなか恥ずかしいのではな
いだろうか。

「罪木ちゃん起きてってばー!」

「はうつ、あれえ……？ 私……」

ようやく起きた罪木ちゃんはきよろきよると辺りを見回し、私をその視界に収めると目が一気に覚めたのか、目を見開いた。

「こ、粕枝さん怪我はっ、怪我はありませんか!? どこか痛いところとかだるいところとか、あ、あと痣になっついていないかも見ませんか! えと、熱は…… ないようですけど今日は無理しないようにしてくださいさい!」

一気に捲し立てられ、パーカーをごく自然に剥がされ、半袖から痣がないことを確認してくる彼女の勢いにちよつと泣きそう。

やめてっ、ここはホテルのロビーだよ! 半袖まで脱がそうとしてこないで! 場所を考えて!

「わ、分かった分かったからさ! あとで怪我の具合は見てもらうから、今は朝食行こうよ! どうせあとでお風呂入るんだし……」

「はっ! そ、そうですよねえ、ごごごめんさあい! 私またなにも考えずに……!」

「気持ち嬉しいから…… ほら行こう?」

続々と人が集まって来ているから早く行かないと。

「あれ、殆どバイキング形式じゃない……?」

そこにはいつもの豪華なバイキングはなく、人数分の和食が並んでいた。しかし奥には炊飯器が3台置かれ、その横には焼きたてのパンが大量に積み上がっている。あれらは恐らく和食で足りなかった分の補給だろうが、十神クンや終里さんのことを考えるとそれでも足りるか怪しいところだ。

さて、いつもは雑多な料理ばかりなのに今日は毛色が違うようだ。一体誰が? とも思ったが、料理と言ったら彼しかありえないだろう。

「お、おはよう皆! 今日はぼくが腕によりをかけて最高の朝食を用意したんだよ!」

明るい声とは裏腹に緊張と不安が表情に現れている彼、花村クンがその場に現れて皆をぐるりと見回した。

「おっ、花村の料理がまた食えんのか! ちよつと少ねーけど」

「まあ、日本食ですわね！ わんだほーにつぽんです！」

「ほう、破壊神暗黒四天王の分まであるとは……」

田中クンの言う通り、人でも食べられるようになっていくひまわりの種がガラスの小皿に盛られている。和食と洋食がないまぜになっ
てはいるがむやみな雑多さはあまり感じない。さすがは花村クンだ
と言えるだろう。

「はあ？ なに考えてるわけ？ あんた、自分が何したか分かってそ
んなこと言ってるのー？」

しかし喜ぶ面々がいる中、顔を険しくする人物も勿論いるものなの
だ。

「ちよつと日寄子ちゃん……」

「だってそうじゃん！ 人を殺そうとしておいでよく料理なんて出せる
よねー？ 今度は毒殺でも企んでるんじゃないのー？」

「お、オメーそれは言い過ぎじゃねーか……？」

西園寺さんが警戒するのも無理はないだろう。少なくとも、止めよ
うとしている小泉さんにも僅かな不安は見えているし、左右田クン
だって言い過ぎと言っているが、それは肯定しているようなものだ。

日向クンも戸惑っているようだし、九頭龍クンは舌打ち。辺古山さ
んだって眉を顰めている。

「…… そうやって言われることなんて承知の上だよ」

花村クンが悲しそうな顔でぼつりと言った。

「皆には酷いことをしちやったし、人を殺そうとしたのはぼくだから
…… 言い訳なんてきかないことも分かってる」

私のせいでやったのだと言うこともできるのに、彼はそうしない。
恐らくそれでは誠意を示すことにはならないからだ。

「モノミも、やれることをやっていればきつと皆わかってくれるって
言ってくれたけど…… でも、ぼくがやれることなんて、料理しか思
いつかなくて…… ぼくが誇れるのは料理しかないから…… だか
ら皆が笑って美味しいって言うってくれるような料理を作りたいって
思ったんだ。許してくれなんて言わないよ！ でも、ぼくにできる誠
意の示し方なんて…… これしか、思いつかなかったんだ……！」

花村クンの原点は “ 皆を笑顔にする料理 ” だったよね。でもそれを彼は忘れてしまっていた。料理に固執して、豪華な料理を、自慢できるようなものを彼は目指そうとしていた。

大好きな母親の言葉さえ忘れてしまっていた彼が、洋食にこだわっていた彼がこうして和食を作ったというのはつまり、そういうことなんだらうね。

「……」

あの終里さんでさえも困惑してピリピリした空気の中動かずにいる。

十神クンだって西園寺さんのいう言葉を聞き流せるはずなく言い合いが始まっているのだ。誰も動かない。動けない。そして誰も食べようとしない。

「はあ……」

だから私は早歩きで花村クンのそばまで歩いて行き、そして随分と低い位置にある彼と視線を合わせた。

「つ…… 狛枝、さん」

それから軽く笑みを浮かべて近くの席に座る。

それらの行動を見ていた日向クンが止めようとしていたが、それを無視して小さく 「いただきます」 と声に出した。

「え……？」

困惑する花村クンを尻目によく焼かれた鮭の切り身に箸をつけ、白いご飯と一緒に躊躇いなく口にした。

その瞬間に広がる鮭の旨味とジューシーさ、さらに程よくのった脂が白いご飯とマッチしていて至高の美味しさを私に伝えてくる。その上、ほかほかと温かく、まるで胸の内すらも満たされるような味わい深さだ。

何度も何度も噛み締め、出汁がよくきいた味噌汁を一口。

「うん、美味しい…… お袋の味って、こういうものなのかな……？」

私に母の味が知れた時期なんて2人目の母が死ぬまでのたった数年だ。産みの母に至ってはろくに会話もしたことがない。ましてや、

料理なんて味わったこともない。

私にとってのお袋の味はメイの手作り料理だけだ。でもそれだつて本当の母ではない。しかし、そんな私でも涙が出るほど、花村クンの料理は暖かかった。

「ほらほら、冷める前に食べなくちゃ。せつかくこんなに美味しいんだから、冷めても美味しいんだろうけどもつたいないよ」

ありえないものを見る目で西園寺さんが見てくるが、それを無視して顔だけ皆に振り返る。

「オメー…… 殺されそうになったんだぞ!? なんでそんな平然としてんだよ!」

「ありえないーい! 偽善だか知らないけど、よくそんなことできるよねー?」

批判なんてなんのその。私はやりたいことをやっているだけだ。だから少しだけ箸を止めて言う。

「〃 やらない善よりやる偽善 〃 とも言うし…… 討論であれだけこき下ろした私が言うのもなんだけどき、私はただ、彼の才能を信じようと思っただけだよ。花村クンはこういうときに…… 皆に笑顔になってほしいときに変なものを料理に混ぜたりしないよ。きつと、ね。旧館のときは必死だったから仕方ないって割り切ることにしたんだ」

本来、誰よりも料理を愛する彼がそれを汚すようなことをするはずがない。それはゲームでなくとも、現実の彼を見れば一目瞭然だった。

もしかしたらふざけてなんらかのことをするときもあるかもしれない。でもそれは皆を笑顔にするため。

彼の原点は、いつだって芋くさい田舎の料理屋なのだから。

「ふん、言われるまでもない。お前らが食べないのなら俺が全部平らげてやるぞ?」

「あー、ずりいーぞー! オレも食うって!」

素早く席に着く2人に習って徐々に、徐々に皆が動いていく。

あの西園寺さんだつて小泉さんに促されて席に着き、自分の好きな

和食に目の輝きを隠せていない。

「あんまり無茶はしないでくださいよお」

「粕枝…… お前なら食わないんじゃないかと心配してたんだけどな…… 心配するだけ損だったみたいだな」

「ふふ、私は命の危険には敏感だから毒なんて入ってたら多分分かるよ。でも、ほら…… やつぱり仲間っていいなあって思うんだ」

それぞれ箸の進みは早い。

九頭龍クンは仲間を簡単に疑い、拒絶する姿勢に少し反感を覚えていたようだが…… それは仁義と仲間を大事にする極道故だろうか。この分だと、昨日私が襲撃された件については話さないほうが良いのかもしれない。

「なあ、お前ってやつぱり……」

言いかけた日向クンがそのまま口を噤む。

なにを言いたいのかは分からないが、多分それは違うと思うよ。

だって私は、自分の命のためならなんだってする、そんな業突く張り自分で自分勝手な人間なんだから。

「ごちそうさまでしたっ」と

手を合わせて爽やかに言い切り、皿を持ってキッチンへ。

しかし目敏くそれを見た花村くんが小走りでこちらにやって来て手を差し出す。

「ああ、やっておくからいいよ」

「これくらいやらせてよ…… お詫びも兼ねて、ね」

普段は自炊をしているからなんとなく彼に頼り切りになるのは嫌だし、そもそも彼と話をするために口実を作っているのだから代わりにやってもらってしまおうと困るのだ。

目を伏せて視線をつい、と逸らしてから再び窺い見る。

少しあざといかもしれないがゆっくり話をするのにはこうするのが1番手っ取り早いと思う。

「え、でもこれは…… ぼくの仕事だし……」

洗い物の手伝いくらいならば滅多に不運なんて来ないし、料理もやり慣れているからか不運の来る頻度は少ない。

罪木ちゃんと一緒に料理をしたら不幸な事故に遭いそうな予感があるのでご遠慮願いたい、プロである彼と一緒にならば安全だろう。渋っているが、これを逃すと彼とゆっくり話す機会は巡ってこないと思う。

これから料理を提供してくれるのだろうし、彼はスーパーマーケットとホテルを行き来するくらいしかしなくなるんじゃないだろうか。

私はなるべく他の島の探索をしたいし、この機会を逃す手はない。

入浴がまだなので清潔さに関しては何と不安だが、髪を縛るリボンくらいは探せばあるだろうし、洗い物ならそれくらいの処置で十分…… だよな？

「あーあー、そう言ってまたそそのかすつもりなんですよー？ ぷーくすくす、チョロ過ぎるのもどうかと思うなー？」

まあ西園寺さんの言うこともごもつともである。

2人きりになればまた彼をそのかすかもしれない。もしかしたら今度こそ殺人事件が起こるかもしれない。そんな危険をわざわざ犯そうとする私を彼女は軽蔑の目で見ている。ああ、西園寺さんの距離が離れていく……。しかし、今は花村クンだ。

彼のフオローに回りたいのもあるし、いろいろと訊きたいこともある。思い出話なんかにだって付き合うし、不安を吐露したばかりで大丈夫だろうとは思うが万が一爆発されても困るので、私を責めたり罵倒したりしてストレス発散してもらうのもいい。

別に罵倒されたいわけじゃあないが、一応のところの責任つてやつだ。彼は私を責める権利があるし、私はそれを受けなければならぬ義務がある。私はそれだけのことをしたのだから。彼を、彼の心に、傷をつけてしまったのだから。

「今はもう、なにもするつもりはないけれど…… やっぱり信用はないよね……」

「…… 2人きりじゃなければいいんだろ?」

西園寺さんからの言葉に苦笑いをして答えると、話の流れを聴いていたらしい日向クンがすぐ側にやって来て言った。

「ええと、それって…… 洗い物に付き合ってくれるってことなのかな?」

目をぱちぱちと瞬きし首を傾げる。あざとさは続行したままだ。

「ああ、花村が不安ならそうすればいい。俺には才能の記憶さえないんだし、そのほかされる理由がないだろ?」

「日向クンがそう言ってくれるなら…… ねえ、どうかな? 花村クン」

2人で顔を見合わせてから花村クンの眼前に迫る。すると一歩、二歩と下がった彼がほんのりと顔を赤くして背を向けた。照れ隠し、だろうか。意外と迫られるのは苦手なのかな。

「手間は…… 増やさないでね」

そう言って周囲にあった大量の皿を持ってキッチンに消えていく。

「了承してくれた…… ってことでもいいんだよね?」

「ああ、そうだろうな」

柔らかな笑みを浮かべた日向クンと目が合う。そしてすぐさま逸らされた。

さつきはいいコンビネーションで花村クンに約束を取り付けることに成功したが、まだ気まずいのかもしれない。私もぎこちなく笑ってから「行こうか」と小さく呟く。

すると彼も小さく「そうだな」と返した。

かちや、かちやと食器が擦れる音がする。

「あー、まあ…… そりやそうだよねー」

「だからいいって言ったのにさ……」

残念ながら、私たちが食器を洗う音ではない。

花村クンが次々と食器洗い機に皿を並べていく音だ。

「あの人数の小皿だけでも量は多いから、あるのは当然だよ。でも、まあ大皿は入らないし、そつちは洗わないといけないけどね」

そう言いながら何枚も重なった大皿をシンクに移動させ、花村クンは3つのスポンジを手にこちらにやってきた。

「じゃあ、ちゃんと綺麗にしてよ？　綺麗に料理を盛り付けるお皿も、

皆の手に取られるフォークやスプーンも、料理を彩らせるためにちゃんと洗わないとね！　最高の料理を乗せるんだから、食器も最高のコンディションでないと！」

「……　すごいな」

ぽつりと呟いた日向クンの言葉に被せるように花村クンが続ける。

「ほら、綺麗な女の子とベッドのコンディションが最高のものじゃないといけないのと一緒だよ！」

「つて、おい！」

「花村クン、一言余計じゃないかな？」

そうだった。この人、料理と同じくらいそういうものに情熱を捧げてるんだった。

少々げんなりとしながら大皿を洗い、清潔な布巾で拭いていく。この調子ならば洗い物は早くに終わりそうだ。

「そうだ、この後暇だったら花村クンに料理を教わりたいんだけど、いいかな？　あ、日向クンもどう？」

「ぼくが？ いいけど、厳しいよ？ むふふ、手取り足取り腰取り教えてあげるからねえ！」

「ひ、日向クンも一緒に教わろうね！」

ぞわぞわと立つ鳥肌を押しえて頭を振り、日向クンに笑顔で訊いた。なんとというか、身の危険を感じた。

「あ、ああ、そうだな。一緒に料理を教わることにする」

有無を言わせぬ笑顔で押したのが効いたのか、日向クンは苦笑いをしながらか了承してくれた。

「ところで、なにを作りたいの？」

疑問気な顔で首を傾げる花村クンに少し考えてから答える。

「美味しいおつまみの作り方が知りたい、かな？」

昔から花村クンに会ったら教わりたいとは思ってたんだ。

うろつきこと織月りづきは細い割に大酒飲みでおつまもがんが食べれるし、私が作るペースじゃあ間に合わない。うそつきことうつろちゃんには私よりも年下なのでお酒は飲まないが私の作った料理は遠慮なくぱくつく。

どうせならあの2人にもなるべく美味しい料理を食べさせてあげたいから作るなら「おつまみ」だよな。

「つまみって、狛枝…… お前未成年だろ？」

呆れた表情をした日向クンにじつとりと睨めつけられ、大慌てで手を振った。

「ち、違うよ！ 私が飲むんじゃないくて、成人した友人がいるから…… その人にいつも私が作ってるんだよ！ 私の誕生日まで私がおつまみを作ったりさ…… でも、どうせなら美味しい料理を食べさせてあげたいでしょ？」

「へえ…… 狛枝さんの口から友達って言葉が出てくるとなんだか意外だなあ…… あ、べ、別に狛枝さんに友達がいらないと思ってたわけじゃないからね！」

「ああ、友達があんまりいないのは事実だから気にならないよ」

大慌てで付け加える花村クンがおかしくて、口元に手を当てて笑う。

事実だから自嘲する気も起きないくらいだ。

「あー……で、粕枝は美味しいつまみの作り方を教えてもらいたいんだっけ？」

「そうそう……日向クンもどうせならなにか教わったら？ 超高校級のりよ……シエフに料理を教わるなんてなかなかできないことだよな」

おつまみって言ってもかなり幅広い。

肉関係のこつてりしたものもあるし、野菜を使ったあつさりテイストのものもある。果物を使ったものも美味しいし、なによりチーズを使ったのもいいよね。

厚揚げに卵を垂らしてチーズをトッピングするだけで濃くて簡単で美味しいおつまみができるし、そういう簡単なレシピをどうしたらより美味しく作れるかを花村クンには教えてもらいたいのだ。

「俺か……俺は、花村の作った美味しい和食がどうやってできてるか知りたいな……昼までに教わるなら簡単な方がいいよな。ううんと、肉じゃが、とかいいんじゃないか？」

「肉じゃがかあ………平凡で定番でおもしろみもなくイモっぽい……」

そこまで花村クンが言ってから日向クンは「そこまで言わなくても」と口に出そうとしたけれど、その後続いた話に言葉を失つてとてもとても、優しい目をした。

「でも素朴で安心する……日向クンにぴったりの料理だね……」

「花村クン？」

どこか懐かしんでいるような目をしながら彼がぼつり、ぼつりと言う。

「肉じゃがっていいよね。電車の中で食べた、母ちゃんの肉じゃがはシンプルだったけど、泣きたいくらい美味しかった……」

その言葉に私はメイの作った手料理の味を思い出そうとしたけれど、残念ながら具体的には思い出せそうにない。

人は、自身の感覚から遠いところから忘れていくのだ。味覚は遠い。故に、忘れるのも早い。

だから、それを覚えていられる花村くんが少しだけ羨ましくなつた。忘れまいとして思い出の品を鎖にする私とは違い、純粹に思い出だけを胸に抱き続けることができる。そんな、花村くんには……

「…… そうだよ」

ぼつり、確信を持った声で彼が呟く。

その語調はどんだん力強くなっていき、そして希望に溢れるように明るい口調へと変化していく。

「ぼくは、人を笑顔にする料理を目指してたんだ…… あははっ、今更思い出すなんて、馬鹿だなあ。もう、日向くんのせいだからね……」

泣きそうな顔で大皿を抱える彼は背を向けてその顔を見られないようにしていたけれど、多分背の高い日向くんにも、勿論私にも見えてしまっていた。

「いつかこの島から出るんだ！ …… でも、それまではせめて皆の笑顔が保てるようにするよ…… ぼくなりの方法でさー！」

「花村……」

「…… うん、きつとできるよ。今のキミなら…… はあ、そんなこと言われちゃうと肉じゃが食べたくなっちゃうよね。なら、今日は私も日向くんと一緒に教わろうかな」

おつまみならまた今度でいいし、図書館でレシピでも調べてどれを教えてほしいか決めておくほうがいいのかもしれない。

「あ、悪い…… 合わせてくれたんだな」

「ううん、大丈夫。今度また料理を教わりに来る口実になるからね？」
バツが悪そうに頭を掻く日向くんへ指を内緒の形にして答える。

すると背を向けていた花村くんが勢いよく振り返り、サムズアップをしながら私に近づいてきた。

えっと、その、なんだ…… 顔がだらしなくなってるけど、大丈夫？

「うん、大歓迎だよ！ 2人きりでみっちりねっちりより教えてあげるね！」

「……」

言い方がすごくこう……

「…… 複数で教われよ？」

「あはは…… うん、そうだね……」

身の危険を感じる。

なんでだろう、花村クン相手ならば負ける気はしないのに寒気がする。私は死の危険以外だと諦める癖があるから洒落にならない。

誘拐されたときだってそうだ。あのときはナイフを見たから正気に戻ったが、それがなければ多分私は抵抗できなかつただろう。本当に洒落にならない。

「女子会を開く前に何人かで教わりに来るかもしれない、かな。そのときはよろしくね」

「うーん、女子会ならスイーツだよ。スイーツは専門外だけど、過程は似てるからぼくも勉強になるしちょうどいいかもね！」

叱ってくれる小泉さんあたりを誘えばきつと安全なはずだ。

しかし、長年の疑問が解消された気分だな。そうか、花村クンってお菓子は専門外なんだ。意外だったけれど分野が分野だからそういうものなのかも分からない。どちらも器用でなければできない分野だからできるものだと考えていた。

「じゃあ肉じゃがの前に、まず簡単なフランベの仕方を……」

「肉じゃがでお願いします」

即答した。いや、できるわけないでしょ！

なぜいきなり上級テクニクを披露しようと思ったんだ！

「え、でも……」

「なあ粕枝…… フランベってなんだ？」

「料理番組とかで料理作ってるときに炎がすごい勢いで上がったりするのがあるでしょ？あれだよ」

私の説明を聴いて疑問を浮かべていた顔を驚きに変えた日向クンが花村クンに視線を向ける。

彼は誇らしげに胸を張っているが、残念ながら身長が足りないのペンギンが胸を張っているような微笑ましさがある。

「ほら、見たくない？ フランベ。近くで見たらすごいよ？」

率直に言って、熱そう。

寂しそうな顔で念押しされても困るよ。それに、フランベ見せるにしても作った料理は誰が食べるのかという問題がある。私たちでも構わないけれど、それじゃあお昼が入らなくなりそうだしね。

「ふん、遠慮はするな……俺が平らげてやる！」

「わあっ!?!」

「十神!?!」

「つどこから出てきたの!?!」

「俺が導いてやる！」のポーズでキッチンの入り口に立っている十神クンに皆で驚いた。

エスパーかなにかなの？ 料理センサーでもあるのかな、この十神クンは。モノクマやモノミ並の出現の仕方だった。しかし、これじゃあ花村クンの提案に乗るしかないかなあ。

その代わりに肉じゃがも大量に作らないといけなくなるかもしれない。うん、これ手間が増えただけじゃないかな？

最初に花村クンから手間は増やさないでって言われたけれど、これ私たちが原因じゃないから私たちは悪くないよね？悪くない……よね？

「よーし！ 張り切っていつちやうよー！」

でも、まあ花村クンが楽しそうだからいいのかな。

暗くなっていた表情も今は生き生きとされていて、とても楽しそうに料理に取り組んでいる。その姿には影なんて見えないし、少しだけ丸められた背中はどこか小さな母親を彷彿とさせる。

これでもう、彼は殺人なんて考えないだろう。考えられないだろう。

初めて間近で見る料理の技術に興味津々の日向クンに、美味しそうに自身の料理を食べる十神クン。

そんな彼らに囲まれた花村クンはとても幸せそうにその腕を奮っている。

料理を愛し、それを食べる人たちのことも愛する…… まさに “超高校級の料理人” という名前に相応しい光景だ。

この光景の中にきつと1人、また1人と増えていって、最後には全

員でまた、あのパーティーのような楽しい催しを開けるようになるだろうな。

こんなことは言いたくないけれど、試練を乗り越えて希望がより輝くっていうのも、あながち間違いではないのかもしれない。

「と、十神くん！ 食べるの早すぎて用意が間に合わないよ！」

「俺のためにもっとその腕をあげるんだな！」

「うわあ、傲慢」

「はははっ、でも十神らしいな」

ゆつくりと笑ってその輪に加わる。

「時間かかってるから、このままいくとお昼は肉じゃがだね」

「まあそれもいいかもしれないな。俺、花村の肉じゃが食ってみたいし」

「俺は一向に構わん！」

そんな喧騒を背景に、また一つ “希望” のカケラが生まれる音がした。

それからは以前の調子に戻った花村クンと全員分の肉じゃがを作り、随分と賑やかになつた昼食を終えた。

昼食前から食べ続けていた十神クンは昼食時になつても2人前以上食べていたが……もうなにも言うまい。

でも1つだけ疑問があるとすれば、十神クンの胃袋についていくつあるんだろうっていうことだ。絶対に1つじゃないでしょ。牛みたいに胃袋が4つあるんじゃないの？　と思いたくなってくる。

それを言うと西園寺さんあたりに「豚足ちゃんは牛じゃなくて豚でしょー？」と言われてしまいそうだが。

昼食後は1人で図書館まで来て以前手に取つた化学の本を中心に読み込んだり、オカルト本を読み込んだり、ソニアさんが言っていた意味が分かると怖い話なんかも暇潰しに読んでいる。

なかなか面白いものだが赤いレンガの話はトラウマを直撃した。

――女性の悲鳴が聞こえてその場に駆けつけると、女性の目の前には赤いレンガの道の上に巨大な鉄板があつた。彼女に大丈夫かと訊くと「ええ、大丈夫です。私も悲鳴を聞いたときは驚きました」と答えた――

潰れた瞬間のことを思い出して思わずぶるりと体を震わせる。

赤いレンガと鉄板の話はこれ以上見たくないのですさつさとページを捲つていく。それから、羅列されたカレンダーの数字を見つめながらメモ帳に書き込んだ。

面白い謎解きだ。

片方の手で引き寄せた化学の本をパラパラと捲り、元素記号のページに赤いペンで数字を付け足す。それからそれら全てをメモ帳に書き写した。

いずれ使うときが来るのだろうか。使わずに済めば良いのだが。

考え方が多少変わったせいで保険をかけたくなってしまう。それも、モノクマになんとか気づかれられない方法をだ。

あの人だって万能ではないはずだ。オカルト趣味はソニアさんくらいしか持ち合わせていないだろうしこの方法ならば安全だろう。

本当はこの仮想現実を夢と仮定してエフェクトを使えるかどうかも調べたいところだが…… 皆の見ているところではリスクがありすぎる。痛い人扱いされるのはごめんだ。

2階の椅子に腰掛けながら天井へと視線を向ける。

学習開始から既に2時間。2冊同時に読み進めていっているので大分精神的に消耗しているし、目も痛い。

ごく普通の読書なら4時間くらい没頭していられるが同時読みしている上にメモまでとっているのですすがに高スペックな脳でも限界はあるのだ。

これがパソコンならもう少し頑張れるのだが、そちらの方面の才能を持つていない私ではとても扱えないだろう。彼なら、プログラマーなら何台も同時に操れたりするのだろうか…… そこまで考えて頭を振る。

不毛なことを考えてもしょうがない。どうせ彼はいないんだから。

「甘いもの食べたい……」

目頭を揉んで瞬きをする。

確か1階の本棚に料理関係の本があつたはずだ。お菓子のレシピなんかも載っていないだろうか。

疲労した頭を癒すのには甘いものが1番。和菓子なんて特にいいんじゃないか。そう思つて階下を覗くと、そこには辺古山さんの姿があつた。

なにやら周囲をキョロキョロと見回して私の目的地たる本棚から1冊の本を取り出すのが見える。デカデカと書かれた表紙には「和菓子」の文字。

…… 人知れずそんなことをするだなんて怪しいなあ？

にやける口元を誤魔化して袖で覆う。彼女なら少しの物音で私がいることに気がついてしまうだろう。

マーケットの防犯グッズの中から購入していた双眼鏡で、軽く本の内容を覗き見る。明らかに不審者の動きだが気にしない。

そこにはやはり、 “ かりんとう ” の文字。

そうかいそうかい、坊ちゃんの好きなかりんとうを手作りしたいんですね？

ますますにやける口を気合いで引き結び、平静を装って階下へと大声を出した。

「おーい、辺古山さーん！」

瞬間、ビクリと肩を跳ねさせた彼女は反射的に竹刀袋へと手を伸ばした。

本は現行で読んでいた物を数冊トートバッグに入れて階下に降ろる。どちらにせよ本を借りるには下の無人受け付けで本の題名と私の名前を記入しなければならぬのだ。彼女の邪魔をしてしまうのはいたしかたない。

…… 故意的でないと言えば嘘になるけれど。

「な、なんだ、狛枝か…… なにか用か？」

さつと後ろに隠した本を見ない振りをしながら 「えーとね」と悩む素振りを見せる。

「実は本の読みすぎで頭が痛くなってきた。気分転換に甘いものでも作って食べようと思うんだけど…… 辺古山さんもどう？」

和菓子とかいいなあって思ってるんだけど」

わざとらしすぎるだろうか。しかし 「ふ、ふむ」という彼女はあからさまに動揺している。達観して大人っぽいと言っても彼女も女子高生だ。好きな人に好きな物をプレゼントしたいのが乙女心というものだろう。

「なんかいいレシピ知ってる？」

そう言っって首を傾げる。

さあ、私を存分に利用してくれてもいいんだよ。 ” 友達と一緒に作ったからお裾分けに来た ” なんていう建前が都合良く手に入るんだから遠慮なんていらぬ。さあさあさあ！ かりんとうを作りたいって言っってよ！

「…… これなんて、どうだろうか」

「ふむふむ、わらび餅に大福。色んな和菓子が載ってるね」

後ろに隠していたレシピ本をおずおずと差し出してくる彼女から受け取ってパラパラとページを捲る。まあ、これを見せてくれただけで万々歳だ。

「お、かりんとうの作り方まで載ってるんだ。いいなあ」
わざと話題に出してチラリと彼女の反応を伺う。

「ああ」

案外平然としているようだった。

1人のときとそれ以外では大分違うようだ。普段はなるべく”道具”らしく感情を抑え気味にしているのかもしれない。

でもそれも完全ではないだろう。顔は平然としているが、頬が少し赤いのだ。まったく可愛らしいことだ。

「よし！ これに挑戦してみよう！」

「そ、そうか…… 分かった。ホテルへ戻ろう」

レシピ本の貸し出しカードは彼女が書いていた。なんだかんだで楽しみにしているのだろう。

「ん、マーケットには寄らないのか？ エプロンも材料も必要だろう」
「材料は粉系統とかベーキングパウダーとか、あとは黒糖かな？ シンプルなものいいけれど、甘みの強いやつが食べたい気分だし……
まあ、キッチンを見てみればあるかもしれないし、先に確認してみようよ」

九頭龍クンの好きなかりんとうがシンプルなやつなのか、黒糖のやつなのかは知らない。だからそこは自身の気分優先だ。辺古山さんの反応も良いのでこれで正解なのだろう。

エプロン？ 私は持つてるし、辺古山さんにするプレゼントって言ったら…… ね。

自室から畳まれて包装されたままの”エプロンドレス”を彼女に手渡す。

そう、エプロンドレスだ。あのメイド服のような白と黒のフリルのたくさんついたエプロンなのだ。そして、これはなぜか辺古山さんが喜ぶプレゼントの1つに入っている。

主人に逆らえないようできて実は主人を操れる。そんなアイテム

説明なのだが、まあ彼女の場合それに喜んでるわけではないだろう。

「こ、狈枝……？」

困惑する彼女に微笑んで肩を掴む。

ガツ、と思ったよりも入った力に辺古山さんが驚いた。

「辺古山さんっていかにもクールビューティな感じだけど、こういう可愛らしいものも似合いそうだと思ってたんだよ」

肩を掴む手にさらに力が入る。

「い、いやしかし…… 私がこんな……」

頬を染めて遠慮するように手を振る彼女。どうやら私を無理矢理振り払う気はないらしい。先程図書館で殺気らしきものを向けてきたのは相手が誰かも分からぬ者だったからだろう。

想像したのか恥ずかしそうにしている彼女の反応を見えますますエプロンドレス姿を見たくなる。

別にメイの姿に近づいてほしいわけではない。純粹に似合いそうだしゲームをしていたときも思っていたことだ。

「い、いささか私には可愛らしすぎるだろう？」

絶対に逃がさない。



数分後、そこにはすっかり折れた辺古山さんの姿が！

いや、これじゃあ “ 刀のような ” と表現のつく彼女にとって縁起が悪いか。

ふむ、つまり可愛さは正義！ ってやつかな。

「に、似合うか……？」

足を擦り合わせエプロンドレスの裾をちよんと掴み、頬を染めて嬉しそうな、恥ずかしそうな。そんな複雑な表情を浮かべて私から視線を逸らす。やはり恥ずかしいものは恥ずかしいらしい。

「やっぱり似合うね。うん、すごく可愛い！」

「これでご主人様も悩殺だね！」

いや、九頭龍クンはあれで真面目でお堅い人だからなにかあったのかと辺古山さんを心配したあと、恥ずかしがる彼女を見てこんなことをした私にドスを持ち出してくるところまで想像できる。

そして内心ではサムズアップしていそう。

「よーし！ エプロンの試着は済んだし早速キッチンに行こう！」

かつてないほどテンションが高い私は彼女の手をとって走り出した。

「あれ…… エプロンなんて持っでご飯でも作るの？」

途中ゲームをしている七海さんに会い、仲間に加える。

「あら？ 3時のおやつにでも洒落込もうと思っていたのですが、お2人もおやつでしょうか？」

花村クン不在で困っている王女様も巻き込んで突発的な女子会のような有様になった。

「ふむ、ではお茶はわたくしにお任せください！ アフタヌーンティーの心得も持ち合わせていますから！ 泥舟に乗った気持ちで待っていてくださいね！」

「泥舟ではなく大船だぞ。それでは沈んでしまうだろう」

「…………… ねみい」

なんだかこの人数だと皆でケーキ作りをしたことを思い出すなあ。

「後で30分くらい寝かせる必要があるからそのときにティータイムにしようか」

提案をして数を決める。

やはり人数分作ってしまうのが1番いいようだ。なので量は多めに設定し、4人でそれぞれボウルを使って薄力粉、ベーキングパウダー、砂糖、塩を入れて混ぜ始める。勿論傍らには卵も用意しており、準備万端だ。

どうやら粉類と必須な調味料やらなにやらは花村クンが既にカスターマイズしていたらしい。きちんと元の場所に戻しつつ混ぜる作業をする。

七海さんも先の女子会が初のお菓子作りだったからかまだまだ新鮮な気持ちで挑んでいる。

いつも眠気に襲われている瞳はキラキラと輝き、好奇心でいっぱいだ。

ソニアさんは意外にも疲れることなくずっとボウルの中身を混ぜている。彼女の方が先に仕上がりそうさ。

逆に辺古山さんは余計に力を入れて混ぜているためかよくボウルの底面と混ぜている器具がガチガチと音を鳴らしている。あれでは余計疲れてしまいそうさ。

「うふふ、花嫁修業みたいですね」

「そ、そうか？」

途端に動揺する辺古山さん。

ガシヨン、と甲高くボウルが悲鳴をあげた。

「花嫁修行……？」

知らない単語だったのか、不思議そうに呟いた七海さんはしかし、納得したように明るい声を漏らした。

「修道院でやるっていう、あの花嫁修行のこと……？ お菓子作りのことだったんだ……」

完全にゲーム知識だよね、それ。

しかもあの有名なならクエストV。

「まあ、花嫁修業って言ったら料理が筆頭にあげられるかなあ……」

「じゃあ部屋に誘うのは……？」

「それは知らなくてもいいことだと思う」

「なんの話をしているのだ」

「ゲームの話だから気にしないで」

そんなことを言いつつ全員が混ぜ終え、できたかたまりをサラップで包み冷蔵庫へ。

30分程時間を見ながらティータイムを楽しんでまた作業開始だ。

「ソニアさん180度の油用意しておいてー」

「合点承知です！」

これは私がやってはいけない作業である。一步間違えば殺人犯の

出来上がりだ。

辺古山さんはこういうのに慣れていないだろうし、七海さんは今にも夢の世界に旅立ちそう。王女様だからといって特別扱いなんてしていたら悲しまれてしまうし、こういう作業をソニアさんは慣れていると判断した。故に彼女に任せるわけである。

「七海さんと辺古山さんは打ち粉をしてから伸ばしてからかりんとうサイズに切つてね」

レシピ本を見ながら指示し、自分は先にかりんとうを絡めるものを作る。油を煮立たせている2つ隣のコンロに鍋を置き、黒糖と大きさ4の水を入れて焦げ付かないように混ぜながら煮立たせる。

その近くでは辺古山さんの見事な包丁さばきによつて準備が終わった油の中に次々と生地が入れられていき、端から綺麗なキツネ色へと変化していく。

七海さんは生地を伸ばし終えて暇になったのかレシピ本を覗いてからクツキングシートを私の隣に広げた。

揚げ上がったかりんとうがぽい、ぽいと粘度の出始めた鍋に入れられ、水分がなくなるまでどんどん投入しながら菜箸で絡めていく。そのまま十分絡めて七海さんが沢山用意してくれたシートの上に乗せていった。

つやつやと黒く輝くできたてほやほやのかりんとうに誰かが息を飲む。

「お、おいしそう……」

「成功だな、良かった」

「グレイトです！ 早速包装しておやつとして配りましょう！」

皆あげる人は決まっているようだ。

「よーし！ 皆のところら突撃しようー！」



「ああ、そういう経緯だったんだな。俺たちのところに届けに来たのも……」

そう言いつつも嬉しそうに笑う日向クンに2袋分のかりんとうを押し付けて笑う。

「そーうーだークーン。あんまり落ち込まないでよ。ソニアさんから貰えなかったのは残念だったろうけど……」

「うっせ、うっせー！ オレは受けとんねエからな！ ソニアさんは絶対来るっての！」

まあ、だからこそ意地を張って一向にかりんとうを受け取らない彼の代わりに日向クンに2袋渡したんだけどね。

…… 田中クンと花村クンに彼女が渡していたことは言わないほうがいいのかもしれない。ますます彼が傷つくだろうし。

辺古山さんは罪木ちゃん以外の女子の分を渡しに行った。…… 1つだけ余計に持って。きつと、うまくいっているだろう。私はそう信じている。

「後は終里さん、式大クン、十神クンだね。ふふ、喜んでくれるかなあ……」

罪木さんには後でコテージに戻ったときにあげよう。1番出来がよくて甘そうなやつを特別に選んだんだから喜んでもらわないとね。

翌日、そこには少しだけ距離が近づき気安くなった主従2人の姿があった。

No.?? 『空月』——夢遊病は絶望を愛してる——

「織月」

「愛しい人が私の名前を呼ぶ。

その動作、仕草、声、目線。全てが私にとって特別で暖かで、そして私が手に入れたもの。手放したもの。

でもね、いいんだ。だって、受け入れたから全部。

あの日壊れた心はつきはぎに修繕されて、彼が生身の私の横にいない事実には酔いしれて、絶望して、そして……それが永遠であればいいと渴望した。

「それでねー、凧ちゃんったらあんなに嫌がってたのにすっかり学校生活を楽しんじゃってるらしいんだよねー」

ベッドのそばにある椅子に座り、足をぶらぶらとしながら今日の報告だ。

緑色の髪をした大好きな彼がそこにいる。それだけでこんなにも私は幸せになれる。

「ふーん、でもどうしてそんなに嫌がっていたんだらうね。ボクは外の世界を見れないから分からないな」

「そりゃあそっすだよー！　だって私もあの学園のことはよく分かんないし」

確かに、国からの支援もあるというのに資金のためだけに予備学科なんてものを設立してしまった学園には不信感が浮かぶ。

しかし、そんな方針を取るのになにもあの学園だけではない。誰でも思いつくような商法だ。私だって思いつく。それを実行して隠し通せるかどうかはまた別だけれど。

「私でも凧ちゃんの言葉だけじゃ信じられなかったもん。この目で、この体で、偶然人体実験に選ばれた予備学科生の夢に入り込まなきゃとてもね。それくらいあの学園ったら秘密を隠すのが上手いんだよ」

「予備学科生？」

「そうそう、名前は知らないけどね。なんていうか、コンプレックス持ってるからかごちゃごちゃしてて、ゲームと勉強道具と卵の多い夢だったね。大方、変身願望でも持ってたんじゃない？」

私がそう言うのとアキラは首を傾げて「それだけでどんな人か、内容が分かったんだね」と言った。

だから私は得意気にふふんつ、と声をあげて大好きな彼に今までの努力を自慢するんだ。

「夢の分析だったらもうお手の物よ！ 何人、何百、何千人もの夢をこの人生で見えてきたんだからさ！ 才能が夢を渡り歩くだけだつて言っても、それが成長しないわけじゃないんだよね。心理の分析は分かんないけど夢で心理を判断することなんてちよちよいのちよいだよ！」

「へえ、意外に努力してるんだね織月は」

「じゃないと危なくて尻ちゃんやんと遊びに出かけられないからさ」

自分の身は自分で守る。時に理不尽な幸運を受け流す術を得る。

それが彼女と親しくなるために必要なことだった。壁を打ち払うためには彼女にとつての、“失われない希望”になる必要があったのだから。

「動機はさておき、いろいろ便利なんだよ？ 寝てちよつと散歩するだけで身近にある危機を夢を介して知ったり、本物の予知夢を見た人のおこぼれに預かったりね。彼女と旅行に行く前日までに夢の遠出をすれば危険かどうか分かるんだよ」

「はは、そこまでするなんて好きなんだね、彼女のこと」

一瞬なにを言われたのか分からず硬直する。

「え、や、やだあアキラったら嫉妬？ だいじょーぶだよ。後にも先にも、愛してるのはキミだけだよ」

「別に嫉妬じゃないよ。ただ、キミにそうやって友達ができたことが嬉しくてさ」

分かっている。そんなことは分かっている。

友達はキミだけだなんて、もう言えない。大切なものができた。自

由にさせてあげるのではなく、一緒に縛られ、前を向いて歩く大切な友達だ。

だってアキラは私の好きな人だもの。もう友達ではない。

「ふふふ、私ったら恵まれてるね。さて、そろそろ今日は帰るよ」

「…… また来るかい？」

「毎日会いに来るよ」

「ボクに会う気はないの？」

「まだ会いには行けないなあ」

そんな矛盾した問答をして一呼吸。

「だって私にとって、キミしに会あうってことは希望に他ならないもん。まだまだ絶望にありふれたこの世界で、私は生きなくちゃ」

罪はなくならないけれど、私は前に進まなくちゃいけない。

私の友達ともう1度遊べる日が来れるように。どこかにいる同士に会うために。そして、アキラの分まで長生きするために。

「希望の反対言葉は絶望。光と影みたいなものだよね。どちらもなくなることはない。私はキミの死を背にして視界に入れることは許されない。なーんて、絶望的」

「だから、ここにボクがいるんだろう？」

彼は私の精神が作り出した幻。そんなことは分かっている。

だけれど彼もまた、私が私であるために必要な存在なのだ。きっと彼がいなければ私は狂ってしまうから。

「それじゃあまた明日」

手を頭上に掲げる。

現れたのは、腕が思わず下がりそうになるくらい重たい本物のチェーンソー。

「また明日、織月」

「うん…… 翠あきり、愛してる」

「何度だって言ってあげるよ織月。ボクも、好きだ」

そしてチェーンソーで彼の腹を貫いた。

無慈悲な機械音が彼の腹の中身をぐちゃぐちゃに掻き回して溢れ出す。しかし彼は、アキラはただ1つの悲鳴もあげることなく微笑ん

だま薄つすらと空気に溶けるように消えていく。

音の出ない口の動きは「愛してる」の5文字を表していた。

「キミは永遠に私のもの。だけれどもう永遠に会えない……ふふふ、なんて悲劇的なんだろうね。でも、だからこそ素敵なんだよね」世界中を絶望に染め上げた女の子の気持ちも少しは理解できる。

でも、共感はできそうにない。だって彼女が愛しているのは絶望という名の“未知”だもの。

私には全部が分かってしまう神様の瞳はないし、世界はまだ未知に溢れている。唯一私を絶望させられるのは彼だけ。そう、未来のない過去の存在である彼こそ私の愛する絶望であり、希望でもある。なんて矛盾。なんておぞましい。

今でも鮮明に思い出せる最期の言葉と表情は確かに私を愛してくれた人のものだ。

「あとは誰に会いに行こうかなあ……」

彼の消えた病室で考える。

本当は彼を殺さずとも頬を掴ってまた眠れば夢遊することができ。でもそれはしない。それは逃げるということだから。

昔の私は逃げて逃げて、彼に会いたくても最後は殺すしかない夢に絶望していつも頬を掴っていた。でもそれでは彼は応えてくれなかった。私の中で死んだままだった。

ある日絶望に暮れて全てを受け入れてみた。

開き直ったとか、悟ったとか、いろいろ言い方はあるけれど、確かに私はあるとき絶望していた。

作業のように話さない彼に向かってその日あったことを語ってチェーンソーで殺す日々。ときに腕を切り落としてみたり縦に真っ二つにしてみたり、横一線に振り抜いてみたり、首を切り落としてみたり…… 思い思いのやり方で殺した。

そうしたら急にストーン、と腑に落ちたのだ。

彼が死んだ事実から目を逸らして逃げてしまったら、なんのためにアキラは死を受け入れた？

それに気がついた日から私は自分の愛情表現を彼を斬ることに見

出した。同時に、記憶の中にある会話しかしなかった彼は次第に知らないことを喋るようになり、会話が噛み合うようになり、そしてあの日のように毎日の死を微笑んで受け入れるようになった。

罪悪感など初めからない。

遊園地で人柱になった日も、サーカスショーで殺戮をした日も、強制的に脳が覚醒するような出来事があっても、毎日通って毎日話して毎日殺した。

ゲームの配管工が崖下で積み上がっているようにこの病室に何度緑色の血が流れたか分からず、彼の死体が積み上がっているかも分からない。

そんな狂った世界が私の日常であり、全てだった。

私は絶望^{かれ}を愛している。それでもこの精神の部屋の外で私は希望の一部として動いている。

それらはひとえに凧ちゃんちゃんの存在が大きい。

誰よりも絶望している彼女がああして幸せを掴んでいるのだ。だから私も希望でありたいと思えた。

彼女が残したマンションや荷物、そこに住むことになった同士の存在も私を縛る楔になる。

沢山の人が私を形作っているのだ。その沢山の人が私を希望側だと思ふのなら希望でありたいと思う。それが私の行動理由。

だって私は、人の夢が寄り集まった^きうろつき^{ほう}なのだから。



「ふう……」

とりあえず目玉爆弾のエフェクトを使い、扉の部屋へと戻って独りごちる。

「どれに……ん？」

いつ見ても沢山ある扉達を眺め、その先にある誰かの夢を夢想していると1つだけ見覚えのない夢への扉があることに気がついた。

それは水色と白色のパステルカラーの扉。どこかメイドさんの服に似たそれは今夜現れた初めての扉だ。

「ふーん」

なにも考えずとも先に手が動いていた。

金色の取っ手を回し、押し開く。中は広大な青空のような場所だった。パステルカラーの眩しい、優しい世界だ。雄大な空と、淡い色彩。それは頼もしさと優しさの同居した人物を表す。

空がどこまでも広がっているので度量も大きい。

エフエクト “ バイク ” に跨り、意味もなくもう1つ “ オオカミ ” を発動する。頭上でピクリと動く犬耳はなんとなくお気に入りなのだ。

いつも夢の中を探索するときのように斜めに段階的に移動しながらしらみつぶしに青空の中を泳ぐ。

するとすぐに石造りの階段のようなものを見つけ、中に入った。

中は暗かったので “ カンテラ ” で照らしながら進み、1番奥にあったのはビデオテープのようなもの。

『Z.V.』

そんな文字が書かれたテープだ。

カンテラを消し、いつでも逃げられるようバイクをその場に現してからそのテープを手にとってみる。すると、一瞬だけなにか映像のようなものが脳裏に無無理矢理入ってきた。

どこかの教室、始まる殺し合い、疑心暗鬼、心配、愛による逃避、妬み、長い黒髪の男と、チェンソーを得物にした男の最期。

「あーあ、チェンソーは片手で使うものじゃないのに」

自業自得。勉強不足だね、と独り言を言ったのだけれど……

「そうですね。素人が使っていていいものではありません」

抑揚のない声はその場に響き、私は素早く後ろに下がってから振り返った。

「不思議なところですね。ここはいったいどこなのでしょう。該当する情報がないですが」

先程脳内に流し込まれた映像にいた長い黒髪の男だった。

それと同時に、彼が以前見た予備学科生の成れの果てだと知る。髪長さや色こそ違おうが、顔つきや声、身長はまったく変わっていないからだ。

「ここは夢の中。キミは夢の中にいるんだよ。いわゆる、人の深層真理の中だ」

「夢…… 深層真理…… なるほど、理解しました。あなたがこの才能の持ち主ですね」

驚いた。学園側には私の才能は漏れていないし、幸運や希望という強い概念でさえ発掘に苦労しているあちら側が私のような個人で完結している才能を見つけ出せるとも思えない。

しかし、この人は理解している。なるほど、あるとき夢に見た人体実験はこういうことなのか。

それは間違いなく成功している。

なにせ、学園側が知らないはずの才能まで彼は持ち合わせているのだ。概念が曖昧すぎて再現など不可能なはずなのに。

「希望ヶ峰学園風に言うなら、さながら “超高校級の夢遊病” かな？ 残念ながら学園の人は私に気がついてないみたいだけどね」

「そうですか…… この夢は雪染ちさの夢ですね。単純すぎて分かりやすい。ツマラナイ」

「そう。ならさつさと夢から覚めちやいなよ。頬を抓るだけで済むからね」

名前の特定まで簡単にできるとは、既に何年もかけて私が習得した技術までできているし、まったく学園はなんて化け物を生み出してくれたんだ。

「ところで、さつきの映像を見ててちよつと試したいことができたんだよね」

「……」

ぐにつ、と真顔で自分の頬を抓ろうとする彼に向かって走り出す。

「やっぱりこれは、反撃されちゃうのかな！」

下からスイングするように腕を振るい、その手の中にチェーンソーが現れ、振り抜く瞬間だけ両手で持った。

「ツマラナイ」

その腕を引き寄せられ遠心力でグルンと回る。

腕は制御が効かず、回転の動きに従って私の首へと向かってくる。

「あーあ」

「……」

負けちゃった。

そう思った瞬間には視界が大きくぶれ、息ができなくなった。

ブイイイン、と無機質な音が私の意思を離れても鳴り続け、飛んだ生首で見た光景は、首の断面に上から降るようにチェンソーが刺さっている姿。

クビチョンパの上、傷口からチェンソーが暴走し上半身がぐちゃぐちゃになる。

—— 相変わらずの真顔が私を見つめていた。

私が現実で起きることができたとき、私は本物の夢遊病患者のように台所まで移動しており、自身の首を包丁でかつ切ろうとしているところだった。

危なく、夢と現実、両方で殺されるところだったと気づいて冷や汗が流れる。

いや、自業自得だけどね。

「おっかないなあ」

それ以来だ。私の夢にもう一つ、強制起床が追加されたのは。

もう2度と黒い羊には手を出さない。トラウマがまた一つ、増えた。

「ごめんね、今日は一緒に帰れないんだ」

眉を寄せて両手を胸の前で合わせて私は言う。

茶色のブレザーが風に任せて少し揺れていた。

「そ、そうですかあ…… 残念ですう……」

「そんなこと言っていないでさっさと行きなよー？ いちいちゲロゲロの百合なんて見せないでくれるー？」

それをあの子はとても残念そうに言っつて、西園寺さんはいつものようにうげえ、と表情を顰めて辛辣なことを言うのだ。

「えー？ 唯吹はそういうのむしろウエルカムなんすけど！」

「ん、はい、今日の1枚。どう？ 綺麗に撮れてる？」

夕闇に沈む場所ですんなやり取りをして、皆はもう1人が到着するのを待っていた。

ゲームの内容は―― のことだから大分曲げられているのだろう。私たちは大抵玄関前でなく、予備学科の使う門の前でたむろして集団下校していたから。

そもそも、本科と予備学科は相いれず、本科生徒が予備学科に入ることではできても、予備学科生徒が本科の建物に入ることではできないのだ。

だから私たちは予備学科生に絡まれないようにしながら門の前で彼女の友人を待つことにしていた。

それでもサインだとか、CDが欲しいだとか、写真を撮ってほしいだとか、どんな風にスカウトされたのだとか、まあいろいろお願いされたり訊かれたりするのだ。

最初の方は私がいることで人除けになっていたが、人畜無害なことが分かったのか遠慮なく寄ってくるようになっていた。

多分親しみやすく接しているからだろうけれど、騙されちゃダメだよ？ 平和な状態だからこうなのであって、サバイバルとか人狼ゲームとかパラノイアだと生き生きと人を騙す側に回るからね。

「えつと罪木ちゃん、時間は分かっているよね？」

「はい……夜8時、ですよねぇ」

こっそりと耳打ちをしてうん、と頷く。

その日は、私にも約束があつて一緒に帰ることは叶わなかった。

過去通えなかったからと通信制の高校で勉強を初めていたらしいあの子から接触があつたのが1ヶ月前。

私のメイドとして正式に雇い、スカウトを受けたのは3日前。

そして来春、なぜか私の後輩として学園に入学することになったと報告を受けたのは昨日……

本名を頑なに隠していた彼女の秘密を知り、主従としてではなく――として気安く接してほしいと言っているのにあの子は頑として譲らなかつた。

今日は織月やうつろちゃんとおの子と、あともう1人の夢仲間希望ヶ峰学園スカウトの記念でパーティをするのだ。

そのための迎えが来ているので、予備学科生の彼女を待つ余裕はない。なにせ主催として色々用意しなければならぬのだから。

花村クンから色々とお教わつていて助かつた。

七海ちゃんは毎日彼と逢いびきと洒落込んでいるので一緒に帰ることはないし、辺古山さんは道場だし、九頭龍クンはそれに付き合っている。式大クンや終里さんはトレーニングで毎日どこかの施設を壊している。ああ、今日は噴水が猛烈な水飛沫を上げているのが見える。

きっと水道管がなにかが破裂したんだね。学園側も直す才能持ちも大変だ。あと、いちいち確認次第叱りにいく先生も……

「じゃあまた後でね」

「は、はい……病院に寄っていくので少し大変ですけど、遅れないように頑張りますう」

「転ばないようにねー！」

「ふえええん！ し、心配してもらえるなんてえええん！」

大泣きする彼女に手を振って別れる。

今日はメイド服以外の彼女を見られるのだ。なんて楽しみだろう

！

「おまたせー！ さ、このまま買い物に行っちゃおうか」

前は大分悩んでいたけれど、それも先生のおかげで吹っ切れることができた。辺古山さんたちもそこら辺の事情は解決しているようだし、なんなんだろうあのチートな先生。

あの人のことは知らないから私のいなくなった世界でなにか進展があったのかもしれないけれど、知らないからこそわくわくするよね。

七海ちゃんがいる時点でもう目が点だったけど、ゲームの話で結構盛り上がった。

七海ちゃんは版權ゲーム。私はフリーゲームで意見交換しながら遊び、2人ともに知っているゲームは彼にプレイを任せて眺めることに徹する。特に彼は突出した才能がないだけで大体のことが出来るバランスのいい能力を持つてるからさくさく攻略してって見ていて面白いのだ。

同じ予備学科でもキャラの濃い、田中クンに負けず劣らずの「厨二病」患者もいた。しかも同類だったからビックリだ。

しかもあんまり才能に固執してない女の子だった。親に過剰な期待をされて入っただけな上、親を嫌っているから入寮してずっと帰っていないらしい。おかげで別に患っていた心の病も緩和され、今日も元気に勇者になったり魔王になったり吸血鬼になったりしている。

是非とも田中クンに引き合わせたい。魔王と勇者で遊び始めるかもしれないし。

ともかく、今日は同類たちとお祝いだ。さっさと買い物へ行こう。

「え、窓？」

上を見上げたとき、〃割られた窓の隣〃の部屋から、陶器の割れるものすごい音が響いた――



沈黙が場を支配した。

始まりは、夕方にあつたモノクマの放送だった。

ジャバウオック公園に集まれという言葉に皆嫌々と集まると、ゲーム機が用意されていた。

ゲームセンターにあるような箱型のゲーム機で、隣にごく丁寧に大型モニターまで用意されている。

皆でやることも想定されている今回の “ 動機 ” なのだ。

「そのゲーム機が…… 動機？」

七海さんの顔がすごい不満そうだ。

ゲームの才能を持つ彼女にはまあ、許せないことだろう。侮辱されているようなものだもんね。

「実はね、このゲームのテーマは “ ミッシングリンク ” なんだ。ほら、ミステリーではお馴染みの題材でしょ？ 隠された関係ってやつだよ！」

ミッシングリンク。隠された関係。

これは辺古山さんと九頭龍クンのことだろうと思う。

関係を隠している人なんて現状ではあの2人以外には思いつかないし、私の知識で該当するのはそれくらいだ。

私の人間関係なんてメイくらいしか該当者はいないし、そもそも彼女は避けているからこの島に関係あるはずがない。

「そ、それどういうことですかあ？」

「まあまあ、気になるならほら…… やってみ！」

反応した罪木ちゃんにモノクマがどうぞどうぞ、と手をゲーム機に向ける。

「はあい！」

「ダメだよ、断わんなきゃ！ 畏なんだからさ！」

素直すぎる罪木ちゃんに小泉さんが注意する。

「つーか、それが動機になるならプレイしなけりゃいいだけじゃね？」

「ガツハツハ！ その通りじゃのお！ 弩えれえ冴えてるじゃねーか！」

左右田クンと式大クンは見ることに消極的だ。

でも、プレイするたびに思っていたけれど、モノクマが説明するよ
うに誰かがゲームをしてしまったらおしまいだ。

それにこれには初めてゲームクリアした人への特典があるし、原作
通りに九頭龍クンが狙い撃ちにされてしまったら誰も気づけなくて、
クロになる。それが誰かは別としてね。

「待って」

だから私は、皆の消極的な姿勢を変えてみようと思った。

死ぬか生きるかにおいて皆が見ない選択をするのならば、私はきつ
と見るだろう。内容を知っていたとしてもだ。だけれど誰がいつ、ど
んな思いでゲームを見るのかは分からない。

ならば、少しでも生存確率を上げるには全員で警戒し合える方に賭
けたほうがよっぽどいい。

イレギュラーがないとも限らないし、警戒できなければ防ぐことも
できないのだから。

「ああ、見ない方向で決めるのは軽率だ」

私がおかを言う前に十神クンが口を出した。

「……」

「……ふん」

一瞬だけ交差した目線で彼が私と同じ考えを持っていることに気
がつき、頷く。

なぜこんなにも以心伝心なのか分からないが話しやすいのは確か
なので流れに乗ることにしよう。

「あのさ、皆が約束を守って見ない……なんて果たして言い切るこ
とができるのかな？」

「お、おい狛枝！ なに言っただよ！」

焦って日向クンが私の話を止めようとするが、今回十神クンは私の
味方なので話は強引にでも続けることにしよう。

「言えるよ…… 皆のこと、信じてるもん」

七海さんが頬を膨らませて抗議してくる。

あーあ、主人公とヒロインにこうも反撃されるとやり辛いね。まるで皆を悪い方向へ誘導しようとする悪役みたいじゃないか。

ま、そんなの私の知ったこっちゃないけどね。

「……信じる。信じるって素敵な言葉だよな？ でもさ、無条件で信じるなんて言ってもそれは信じることの放棄だよ。ただ先延ばしにしているだけ…… 信じたいのなら疑わなくちゃいけないんだ」

裁判のときのように手を大きく広げて演技調の態度。

本当は “ 信じたいから疑う ” って言葉は七海さんの受け売りなんだけど、今はまだそう思えるほどの意識はないのかな？

心の片隅でそう思いつつ、声は大きく、尊大に、目は細めて恐怖を煽るように。意味深な雰囲気醸し出して皆の反感をわざと買う。

そうすることで十神クンがやりやすいならば私はいくらでも悪役になってあげる。

皆を納得させるように、精々上手くやってよね。

そういつた意味で目線を送り喉の奥でくつくつと笑う。

また伝わった。

「お前たちは月の裏側に兎がいるという言葉を信じるか？」

現実主義の十神クンが言った言葉に、にわかには皆が騒ぎ出す。

「まあ！ あのお話は本当だったのですか！ 十神さんは見たことがあるのでしょうか！ 気になります！」

「ふっ、その話は機密事項になっているのではなかったか？ 人間どもに知られてはいけないことだろう？」

真っ先に反応したのは、目をキラキラと輝かせたソニアさんと厨二病全開な田中クンだ。まあ、予想はついていたから別にいいけれど。

「待て待て！ なんでそんな話に飛躍してるんだよ！ 意味分かんねーって！」

「はー？ そんなもんいるわけじゃないじゃん！ 月に兎つてのは風流の話で、実際にいるわけじゃないしー」

うん、左右田クンと西園寺さんの言葉の方が大多数の人は同意するだろう。そんなオカルトめいたお話は普通信じられない。

でも、だからこそ “ ある “ ことと “ ない “ ことのお話にはもってこいなのだ。

「ふん、ただの例え話だというのに大袈裟な……」

「皆はさ、 “ 悪魔の証明 “ って知ってるかな？」

交互に話を進めていく。

そうすることで信用が地に落ちている私の話も受け入れられやすくなるのだ。

「これは哲学の話で、まあいわゆる屁理屈みたいなものだし、この話を使えば “ 存在しないもの “ がなくなっちゃうわけだけど……」

「お前たち愚民にも分かるように簡単に説明してやろう」

私は回りくどく分かりづらい言葉で説明しているので自然と十神クンへと視線が集まる。

モノクマは飽きたのか懐から別のゲームを取り出して隅っこに座っている。憎たらしい。

「もう1度、今度は粕枝に聞こうか。月の裏側に兎がいるかどうかを知るためにはなが必要だ？」

「実際に確かめているかどうかを証明する。それしかないよね？」

単純に兎がいるか、いないか、どちらか片方を証明することができればいいわけだ。

「悪魔の証明とは、つまり “ ないことを説明するより、あることを説明するほうがより良い “ という話を表現したものだ」

“ ある “ ことを積極的事実。 “ ない “ ことを消極的事実と表し、事実の有無を立証するには積極的事実を証明させるほうがより妥当であるという哲学の話だよ。

「たとえば、モノクマはモノクマという生物であり、この世界のどこかにもしかしたら群れで生息しているかもしれない…… ほら、嘘だっていうなら “ 生物として存在しない “ って証拠を出してみなよ？」

茶化しながらそう言うと、モノクマが唐突に 「ドツキーン！」 と言いながら 「つぶ、野生の血が騒ぐぜ」 などと口走り始めた。

大丈夫、私は信じてないし。ただの例え話だから。

「いる、いないの真意が曖昧な話によく出される証明だ。そうだな…… アイルランドに蚊はいない…… では想像し辛いか」

「北海道にゴキブリがいなくて話は？」

私がそう言うと、澤田さんが「いきなり分かりやすくなったっす！」と声をあげた。

「ふん…… では」北海道にゴキブリがいらない」ことを証明するのに必要なのはなんだ？」

「北海道全域を調べるとかか？」

日向クンが困惑の表情を見せている。

「調べたところで本当にいないって断言できるの？ もしかしたら1匹だけいて、移動してるから見つからないだけかもしれないし、調査漏れがあるのかもしれないよ？ 本当に証明するなら、全ての箇所と同時に調べないといけないよね？ 現実的に無理なんじゃない？」にやにやと笑って嘲る。

ちよつと楽しくなってきた。

「逆に、いることを証明するのはもつと簡単だ。調査中に1匹でも見つけることができればそれでクリアだからな。だからいることよりいないことを証明するのは不可能だ」

「つまりなにが言いたいのよ？」

「一見関係のない話だからこそ小泉さんが顔を顰める。」

でも、だ。これは必要な話なのだ。

「ねえ、」自分はゲームをしてない」って証明できるはずなのに、本当にしないの？」

それが私たちの言いたかったこと。

ゲームをしていないかを証明するには24時間一睡もせず、尚且つ全員がこの場にいられて互いの無実を証明し続けるしかないのだ。

そんなの無理に決まっている。ならばいつそ全員で内容を把握して対策に務めた方が良く。そういうことだ。

「すごいなあ、皆一睡もしないで互いを監視し続けることができるの？ 私にはとてもできないや」

「おい、さすがに白々しいぞ」

ヘンペルのカラス理論だと数学の考え方が混じってくるし色々複雑だから利用しない。そもそも実行できないし。ともかく今は、ないことの証明は不可能である。 ” ということが分かればいいんだから。

「……」

そうそう、そうやって不安に思う気持ちは大切だ。なぜならその気持ち私たちの言葉の後押しになるんだからね。

「見た、見てないって主張するだけじゃあ平行線になるし、本当に見えないのかも証明できないなら、全員で見ちやつて対策を講じるほうが現実的だと思わない？ ほら、リーダー様もそう言ってるし」

我ながら胡散臭いね。

「まあ、反対されてもお前たちの反応を見る限りだと強行したほうがよさそうだ。そんなに疑心暗鬼になられていたらなにが起こるか分からないからね」

疑心暗鬼にさせたのは私たちだけだね。

この十神クンなんだか黒いなど思いつつ、だけれどそれもいいかもしれないと思い始めている私がいる。澤田さんの言ったように、太つてなければ惚れていたかもしれない。別に太っているのが悪いわけじゃないけどね？

「でー？ 結局見るのー？ 見ないのー？」

モノクマがものすごくつまらなそうにしている。ざまあみろ。

「…… 分かった」

相変わらず決断が早いね、日向クン。

そうしてプレイヤーは七海さんが担当し、私たちはイレギュラー混じりのトワイライトシンドローム殺人事件を見ることになったのだ。

その中では私も出演していて、そして私の知らないもう一人の出演者も出ていた。私を迎えに来ていたあの人は誰だろうか。

クリア特典を見て騒ぐ九頭龍クンや、他の皆の声が段々遠のいていく。ああ、見ることをノリノリで勧めたのは私だというのに、なぜここまで心を揺さぶられなければならないのか。

なぜ私は、この動機に自分が含まれないと、思っていたのだろうか。

イレギュラーが起こることは予想していたのに、どうして私は想定していなかったんだ？

しかし、なぜ、スタッフロールに“コマエダ”の文字が2つ並んでいたのだろうか。

私には、分からなかった。

……
……
……

もう、2人とも手紙を受け取っただろうか。

自室でくつろぎながら、私はポストに入っていた手紙を弄んで、そつと溜息を吐いた。

カチ、コチ、と無機質に鳴る時計の音が静かな部屋に満ちる。コテージ周辺には誰もいないのか、部屋だけではなくこの世界に1人だけ取り残されたような……そんな錯覚を覚えてしまうくらいに静かだ。

片方の手をついたベッドのシーツがクシャリと皺を作る。

「3時にチャンドラビーチのビーチハウス、ね」

小泉さんが呼び出されるのは何時だったか。

学級裁判の内容もストーリーも覚えてはいるが、詳しい時間などは失念してしまっている。プレイ中も気にしたりはしなかったからな。

基本的にメダルを集めるために1章と、生前は好きだった黒幕の台詞を聴きたいがために6章を回すくらいだったのだ。

記憶自体は焼き付いて離れないので皆の好みや展開、台詞などはまったく問題ないが、証拠品の内容のようなかなか細かい部分は少し怪しい。

「今日、かあ……あああー、昨日は忘れてたのになあ……」

昨日はあまりにも平和すぎて実感が湧かなかった。

ゲーム初心者の罪木ちゃんに七海さんとゲームの楽しさを教えたり、終里さんとアイス巡りをしたり、式大クンと日向クンと体力をつけるために特訓したり、式大クンの “アレ” を受けて虜になって

しまいそうになったり、女子で海水浴をする約束をしたり……

思わずとろけてしまいそうで、そして素晴らしい日常は今日、終わりを告げるのだろうか。

少なくとも、誰かが止めに入ったりしなければ彼女は止まらないだろう。いや、もしかしたら止めに入られても止まらないかもしれない。

彼女は他の皆とは違い、 “ 今 “ の記憶の時点で既に人を殺したことがあるはずだ。私の過剰防衛とは違い、全ては大切な人のために。

“ 私は—— お嬢様、人を殺めてしまったのです “

思い出すのは、やはり私の大切な人の声。私が赦した行い。そして、見て見ぬ振りをした罪。

重ねてしまう、どうしても。それが2人ともに失礼なことだと分かっていたもだ。

「私は……」

手紙に書かれた文字は見つめていてもなにも変わらない。分かりきったことを再確認して私は時計へと視線を移した。

そして、時計に刻まれる午後2時の文字をじっと見つめながら昨日の提案を思い返していくのだ。

「みなさんで親睦を深めるために海水浴などいかがでしょうか？」

ソニアさんの提案で翌日、ようは今日の夕方行われることになった海水浴。あのとときのメンバーはゲームで見た不穏な疑心暗鬼を払拭し、気分転換には最適だと大手を振って賛成したのだ。

「あ、あのね、アタシちよつと体調悪くて…… 今日部屋で休んでいようと思うの」

「私泳げない！ だから精々楽しんでくれば？ 私牧場でありたん潰してるからさー！」

だけれど、普段はこういうイベントに積極的に参加しそうな小泉さんが断り、次いで西園寺さんも断ったことで、ああ避けられないのだなど諦観を覚える。

「えつと、私はほら、怪我があるし…… 用事もあるから今回はパスす

るよ」

当然、私も断るしかなかった。

そう、翌日……つまり今日は彼女が殺される日。

そして、そんな中に1つだけ投入されたイレギュラー。

私が受け取った手紙は何度見ても3時指定だ。

「……そろそろ、行こうかな」

自由行動にも出ずに1人、部屋で手紙を眺めていた私は意を決して現場へ行くことにした。

しっかりと手に馴染む伸縮式鉄パイプを流れるように太腿のホルダーへと通し、いつものコートを羽織る。左手は相変わらず包帯に覆われたままだが、なんとかなるだろうか。

大丈夫、殺されるくらいなら殺せばいい。

大丈夫、怖いのなら見逃せばいい。

そうやってざわつく心を落ち着けて深呼吸する。

なんで私、わざわざ殺害現場なんかはこのこと行こうとしてるんだろう？そんな疑問が首をもたげて私に覆いかぶさるが、答えは1つしかない。

「坊ちゃん」

彼女のせいだ。彼のせいだ。

あの2人の関係性を改めて認識しなければきつとこんなに悩まなかった。こんなに息苦しい思いをすることもなかったのに。以前の自分ならば絶対にやらないことをしてしまおうとするほどに、あの言葉は私を内側からゆっくりと壊していく。

私が死なないなら、別に誰が死のうと知ったこっちゃんない……はずなのにどうしてこんなに苦しい？

長年かけて築かれてきた砦が内側からボロボロに溶けていく気がする。ああ、なんて気持ち悪い。

「……」

眉をしかめて手紙をぐしゃりと握りつぶす。

これにもう用はない。丁寧な字で書かれたそれをゴミ箱に投げ入れて時計を確認した。

もう行かなくては。後悔がやってくる前に。

静かにコテージから抜け出て、不思議と誰ともすれ違うことなく第2の島へと向かう。きつと皆海水浴の準備中なのだろう。

これがなければ皆の水着姿を是非拝みたかった。私も、新入荷された水着を買って泳ぎたかった。きつと怪我にしてみるけれど。

そんな小さな後悔だらけで重い足を引きずる。

人生にはなにがあっても、そう、死があつたとしても続きがある。それを知ってしまった私はしかし、もう2度と死ぬ恐怖を味わいたくなくて現実から逃げ出した。

たとえば、私と同じような立場の人がいたとして、その人が心の強い人なら道筋を辿りながら全員を救おうと思うのも当然のことだろうと思う。

生前の私ならば間違いなく、迷いなく皆を死なせないように努力しようと思えただろう。でもだめだ。だめなのだ。

頭上に落ちてくる死。瞬間的な痛み、骨が押しつぶされる感触、そして心の中が死にたくないという恐怖一色に染まり上がる感覚。

いつだって鮮明に思い出せてしまうあの恐怖を味わいたくない。

思い出すだけでぶるりと震える体は正直だ。

それでも、今私はその恐怖に向かつて歩いている。

異常だ。異質だ。狂ってしまったんじゃないかと自分自身さえ信じていることができない。

それもこれも、全部全部彼女のせいだ。

責任転嫁などということは分かっている。でも私を狂わせたのはあの一言が原因であることは間違いない。

聞かなければよかった。

知らなければよかった。

そうすればきつと、もつと楽だったろうに。

変わるのが怖い。変わっていく自分が怖い。その先になにが待っているのかと考えるだけで恐ろしい。

もしかしたら屈辱の死が与えられるかもしれない。もしかしたら無念の死になるかもしれない。

そんなもの、受け入れたくない。だから、発想を転換する。

これは、この歩みは彼女たちのためなんかではない。殺される彼女でも、殺す彼女でも、取り残される彼でもなく、そう、自分のためなのだ。

この先、彼が成長することは知っている。だが、足並みが揃っていない今、それを崩されてしまえば一気に絶望側へと落ちていく。タガが外れ堰を切った小さな殺意は増幅していき、爆発する。

そうなつては誰が誰に殺意を向けるのかなんて、予想すらできないのだ。それは困る。万が一私にそれが向けられたら困ってしまう。だから自己満足に行動して、勝手に平穏を掴もうとしている。

—— ほら、間違いなく私のためじゃないか。

だからなにも心配することはない。私は変わってなんかいない。変わつてなどやるものか。そうやって自己暗示をする。

大丈夫。怖くなつたら引き返せばいいのだから。

ビーチハウスの前に着き、時計を確認する。

2時55分。

怒鳴り声が聞こえるのでまだ中に3人はおり、そして事件も起こっていないらしい。

「この女は、この写真に写ってる血塗れの女は俺の妹なんだよ……」

おい、だから本当のことを話せよ！」

ゲームのクリア特典の話だろう。

ゲームを最初にクリアしたのものには特典が1つ配られるのだ。

だけれど全員でクリアしたので皆その内容は知っている。罪木さん、瀧田さん、西園寺さんなどがどこかの玄関前で撮影されたと思われる写真。これは希望ヶ峰学園の制服を着た3人が写っていたので恐らく小泉さん撮影だ。

そして、もう1枚は金髪の女の子が血塗れになっている写真。床も大きく映され、倒れた水槽と撒き散らされた砂利がしっかりと写っている。窓の下もかろうじて見えるので、ゲームの証拠品としては完璧な代物だ。記憶と少し写真の内容が違う気がするがそこはあれだ、いわゆる1つのバタフライエフェクトとやらだろう…… 多分。

ともかく、その写真に九頭龍クンは酷く動揺していたのを覚えている。

私もそのとき、2度現れた「コマエダ」の文字に大分動揺していたため詳しくは覚えていないが、あのときは九頭龍クンも一旦頭を冷やして怒鳴りつけはしなかったはずだ。

だからこそ、わざわざ事件の関係者である私たちを1対1で尋問しているのだろう。

「あんたの……妹……？」

ビーチハウスのトンネル側にある裏口に軽く耳を押し当て、中の様子を探る。震える小泉さんの声がよく聞こえる。どうやら防音性は特にならないようで安心した。

「そうだ……なあ、なんでオレの妹が写ってんだよ…… なんてあいつが血塗れなんだよ…… 説明しろ…… こんな写真偽物だよな…… ? なんでこんなもんが…… 記憶のねえ2年間にながあったって言うんだよ！」

「だ、だから知らないって！ 記憶がないんだよ？ あんたもそうでしょ!」

聞き耳を立てる必要もなく既に会話が漏れ聞こえている。

私は、中にいるであろう辺古山さんに気づかれないう息を殺し、なるべく敵意を持たないように意識をしながら動かずに徹した。

「この写真はテメーが撮ったってモノクマが言ってただろーが!」

「そんなの知らないわよ!」

「テメー知ってて証拠を隠滅したんだろ!」

ヒートアップしていく口論にしかし、いるはずの辺古山さんは反応しない。もしかしたら、クローゼットにでも隠れているのだろうか？ いるのが分かっていたら小泉さんもなんかしら反応を示すだろうし。

「あんた、ほんつとう最低ね……」

吐き捨てるように小泉さんが言った。

「なんだと?」

「っ、確かに! …… この写真は、アタシがあえて外したアプローチ

に似てる…… この写真は人物を追ってない、状況を押さええてるだけ…… 多分、状況証拠とか、説明のために撮ったんだと思う……」

泣きそうな声で言う彼女は、苦しげに言う。

「あんたの妹さんを殺した犯人を、見つけるためにした、んだと思う……」

そうは言うが、ゲーム内での彼女は友達のためにその証拠写真を隠滅したのだ。彼が信じようはずもない。

「なに言ってるんだ」

「写真家、だもん。自分の撮った写真の意味くらい、分かるわよ……」
「でも、それをしなかったのはテメーだろうが！ 結局証拠隠滅して、犯人を庇って！ 信用できるわけねーだろー！」

「っ、あいつの作ったゲームなんて信用しちやダメ！ …… 最初の方に十神も、凧ちゃんも言ってたでしょ？ あんたはアタシたちよりも黒幕を信じるの？ 信頼しろなんて言わないわよ！ でも、少しくらい考えてくれたっていいじゃない……」

「……」
あれ、もしかして丸く収まりかけてるのかな？

そう、思ったときだった。ボタンと、クローゼットを開く音が聞こえた。

同時に、反射的に体が動くのを、私は止めることができなかった。

「ペッ！」

「え？ や、やあああああ!？」

扉を蹴り開けて素早く滑り込むと、ちょうど辺古山さんが金属バットを振り上げたところだった。

その意図を察した九頭龍クンが叫び、辺古山さんの殺意に気づいてしまった小泉さんは悲鳴を上げてしゃがみこむ。

そして、私に感じられるもの全てがスロウになっていき、考える暇もなく駆け出していた。

1歩進む。

辺古山さんがこちらに気づき、驚いたのか一瞬動きを止める。

1歩進む。

私は捲れ上がったスカートの下から鉄パイプを手にし、下に振るうようにして縮めていたそれを思い切り引き伸ばす。

1歩進む。

再び辺古山さんの視線が小泉さんへと向けられる。

振り下ろされる金属バットが風を切る音がした。

ダンツ、と踏み込んだ足が床を軋ませる。

なにが私を動かしたのか…… そんなもの分からない。

ただ、あえて言うのなら体が勝手に動いていた。

だからこそ、私はこの恐怖に立ち向かっていったのだろうか。変化する自分を思考の中では認められないまま、小泉さんと辺古山さんの間に割り込む。

「豹枝、なぜ止める?」

「ペコォ!馬鹿、なにやってるんだよ!」

盛大な金属音を鳴らしながら2つの武器が拮抗する。

当然、受け手であるこちらはあちらよりも力が必要だ。火事場の馬鹿力でも出ていなければきつとあつさり押し切られて殺されていただろう。現に、火事場の馬鹿力が出ている今の状態でも額に鉄パイプが当たってすごい音を立てた。

じりじりと両手で持った鉄パイプがさらに押され、血が流れてくる。今更のように左手がズキズキと痛み、包帯が赤く染まっていく。

しかし退くことはできない。

「聴いちやったんだ、キミたちの会話」

「なに?」

拮抗したまま会話に興じる余裕があるとはさすがだな。

私なんて今にも殺されそうで焦っているというのに。

「な、凧ちゃん……」

軽く横目で見てみると、小泉さんは泣いていた。

あまりの衝撃に膝をついてしまった私を、後ろから彼女が支えてくれている。脇腹からお腹に回された手が、妙に暖かい。

「〃 坊ちゃん 〃」

そう私が言うと、動揺した彼女の力が、一瞬緩まる。が、すぐに先

ほどよりも強い力でこちらを押ししてきた。

さすが、暗殺をしていただけはある。殺すことに躊躇はないようだ。

「目撃されたからには、もうお前のごとも見逃すことはできない」

「…… 小泉さん、逃げなよ」

「え、待って、待って、坊ちゃんって？ な、なんでペコちゃんが？」

な、凧ちゃんのこと置いて行けるわけないでしょ!？」

せつかく逃してあげようってのに。

それに、彼女が逃げてくれなくちゃ私が死んじゃうかもしれないじゃないか。

「私を殺したくないのなら、逃げて人を呼びなよ…… もう、皆が海水

浴に来る時間が近いんじゃない?」

「凧ちゃ…… ん、分かった」

抱きしめられた手が離れていく。

「ペコ、やめろって!」

九頭龍クンが彼女の手を抑えているおかげで逃げていく小泉さんは安全だ。

彼が殺意のようなものを持っていたのは確かに感じたが、それは既に霧散しているようだ。

しかし、少しはマシになっているが、もはや私の手の感覚は死んでいる。

最初に支えきれず、額に擦り付けられた鉄パイプが金属特有の嫌な音をあげながら軋む。視界の端で、擦られた額からたくさん血が流れていくのが見えた。さつきよりも酷い。これは大怪我だな。

「ねえ九頭龍クン。彼女を早く止めないと、彼女死んじゃうんだよ? 早く命令しなよ。やめろって。そうしないと、彼女止まらないよ?」

「な…… なんでテメーそんなこと知ってんだよ…… ! おかしいだろ!」

混乱しているところ悪いけど、早くしてくれないかな?

痛い。痛い痛い痛い。

このままだとまずいって。

「ぐ、う……く、分かるよ、キミの気持ち…… だって一緒だから」
「…… 坊ちゃん、惑わされなくてください」

小泉さんは逃げたのだから、私を殺したとしても彼女の生存は絶望的だ。だが、その方が彼女にとって都合がいいのかもしれない。

だって彼女の目的は、九頭龍クンをクロと言い張って生き残って外に出てもらうことなんだから。彼女が犯人だと分かっていたほうがかえってその計画は実りやすい。

「キミたちの呼称から、すると、主従なんですよ？ ほら、私と一緒に だから、私が生きるためには全力で言いくるめるしかない。」

「私もね、自分の…… メイドさんが、いるんだよ？ これでも大病院の娘だもんね…… だから」

目に血が入りそうさ。でも拭うわけにはいかない。

喋っている力が抜けてしまいそうさ。

「私は、きつとあの子が死んだらきつと立ち直れない。それは九頭龍クンも同じだと、思う……」

「……」

「坊ちゃん、聴いてはなりません！」

「つ…… 私はっ！ キミたちの会話を聴いてからずつと、辺古山さんのことをあの子に重ねて見てた……！ 私のことをお嬢様と呼んでくれる、あの子に！ だから私は知ってるんだ。離れ離れになっていいことなんてない。キミたちにはっ、離れる理由なんてないはずでしょ!？」

いつの間にか、血とは別に、頬に暖かいなにかが流れ落ちていく。

ああそうか、私は離れたくなかったんだ。だから一緒にいられて、尚且つ関係のやり直しをしようとしてた九頭龍クンが、羨ましかったんだ。

「私の幸運は大切な人が死んでいく…… だから私はあの子を遠ざけるしかなかった……！ キミたちには、そんな障害ないはずでしょう？ なのになんで積極的に離れようとするんだよ！」

私はあの子を殺さないために離れる選択肢しか選べなかったけれど、彼らには別の選択肢がある。それが、羨ましかったんだ。

そんな選択肢があるのに、それを選ぼうとしない彼女に、きっと私は変わって欲しかった。

「羨ましいよ！ 私はあるの子を避けるしか方法がなかったのに、キミたちは一緒にいられる！ なのになんですれ違ってるんだよ！ どうして大切な人を見殺しにしようとしてんだよ!?! …… だから命令しなよつ、そうしないと止まらないなら、ねえ、九頭龍クン！」人に変わってもらうためには、きっと自分が変わらなくちゃいけないだね。

手に滲む汗が鉄パイプを滑らす。金属バットの力は随分と緩まっていた。

「ペコ、やめろ」

「坊ちゃん…………… それは、命令ですか？」

静かに彼女が言った。

「いいや違う。これは命令じゃねえ」

ああ、彼女自身の意思で選ばせたいのね。

まったく、頑固な彼女はこれで動いてくれるかな？ そろそろ意識が飛びそうなんだけど。

柄にもなく必死に叫んじやったりしてるから、体力のない私にとっては辛い。火事場の馬鹿力もそう長く続くもんじゃないしね。

「……………」

「ペコ」

静かに九頭龍クンがその名前を呼ぶ。

そして、金属バットをだらりと垂らし、俯いた彼女が震える声を漏らしながら1歩、2歩と下がる。

「…………… あなたを、無事に島の外へと…………… それが私という道具の使用命だと、そう、私は……………」

「違うっ！」

そんな彼女の正面に立ち、九頭龍クンが真っ直ぐとその視線を合わせて彼女を揺さぶる。

そう、私は気づかせただけでよかった。

最後には自分の手で、自分自身の意思で前に進む。だからこれでい

い。2人は2人の意思で未来を作るんだ。

「ずつと言つてただろっ…… オレは、道具としてじゃない、お前自身を必要としてるんだって！」

「ぼっ、ちゃん……」

ああ、眩しいな。

なんで私は、こうなれなかつたんだろう。

カラン、と血に塗れた鉄パイプが手から滑り落ちる。

膝立ちで支えていた体は力が抜け、ペタンと床に座り込むことになつた。

そうだ、この2人の、こんな関係が、見たかつたんだ。

この世界の外側から見ていたときに望んだ光景がここにある。

どうでもいいと切り捨てていた希望がここにある。

私が諦めていたものがこんなにも近い場所でキラキラと輝いている。これが希望？ いや、それとも未来？ そんな言葉で言い表せない

“輝き”が羨ましい。

あえていうのならそれは、“羨望”か“渴望”の現れだろうか。

希望のように大袈裟じゃなくて、もつと俗っぽい望み。それが、これこそが私の心に溢れている言葉だ。

私も、メイとこうなれたのかな？

今からでも遅くはないだろうか。

変わるの怖い。怖いけれど、変わって輝く彼らを見たらそれも薄れていくような気がした。

「メイ…… メイは、私を許してくれるかな」

小泉さんがダイナーから人を呼んで来たのだろう。

次々となだれ込むようにして入る人波を眺め、私を泣きながら抱きしめる罪木ちゃんと小泉さんの肩に頭を預ける。

病院を所望する罪木ちゃんの声と、それに応えるように現れたモノミに、安心した私はゆっくりと意識を手放した。

l Addicted or Darkness? |
No. 21 『入院』 | 見舞 |

“ やみつき? それともくらやみ? ”

気がつくど、私は村の中にいた。

そう判断したのは、周囲が木々に覆われており、木でできた寂しい家屋が並んでいることからだ。

田んぼは泥臭く、そして、稲は腐ったような…… 夢特有なのかは分からないが、いやに色鮮やかな青色をしている。

私は怪我で気絶してしまったはずなので、きっとここは夢の中なんだろうと思う。でないと、南国の島からいきなりこんな辺境っぽい場所に来れるはずがない。

乾いた風が吹き、真つ青な稲が揺れる…… そんな場所に佇んでみると、背後から声がかけられた。

「風」

覚えのある声、りん子姉さんだった。

「姉さん?」

なぜ、こうも “ 悪夢 ” を見るときは姉さんが出てくるのだろうか。彼女は私にとって恐怖の象徴かなにかなのだろうか。それとも、罪悪感の象徴だろうか。

しかし、先に忘れるはずの声をこうして覚えていられることには感謝している。忘れてはならない思い出を、声を、夢の中ただけだとしても感じられるのは嬉しいことだ。

彼女は機械の足を器用に踏み鳴らし、こちらにやってくる。

「気をつけなさい。ここでは、転ぶと死んで……」

「あ……」

そう言うがいなや、彼女は足元の石に躓いて転んでしまった。機械の足では躓いても感覚がないので、気づくことができなかったのだ。姉さんの顔は驚きと失意に暮れ、そして、その体が地面にベシヤリと倒れてしまう。

私は目をそらすことができなかった。

彼女の腹が、手が、顔が、転んで地面に接した部分から青ざめていき、その目玉がドロリと腐り落ちた。

「ひっ」

なんでいつもいつも、姉さんが死んでしまうのだ。

これではまるで私が姉さんを殺しているようではないか。

…… いや、事実私が殺したようなものか。だから、きつと彼女が…… 彼女たちが死んでいくのだ。夢の中でさえもそれは変わらない。い。

「……」

次に気がついたのは私を見つめる、虚ろな目。

ボロボロの白衣に裂けた口元。その手にはあのとぎのようにはさきを持っていて、どうしようもなく恐怖を煽られる。そんな目玉がギョロリとこちらを向く。

私を捉える、大嫌いな父親の目。

それは私の知っている狂った目だ。そう、私はその目しか知らない。私は、父さんの昔を知らない。母さんが愛したはずの、父さんを知ることができない。

だから、きつと、彼は怪物としてしか出てきてくれないんだろう。

私は、その場から動くことができずにいた。ただ父さんが鋏を構えて向かってくるのを見つめ続けることしかできない。

動こうと思っても、転んでしまうのではないかという恐怖で思うように足が動いてくれないのだ。これでは動けたとしても足をもつれさせてしまうのは目に見えている。

「う、あ……」

まるでパレードのときのような巻き返し。

しかし、隣に私を守ってくれる大好きなメイドはいない。私はどうすればいい？ 父さんは、私を殺したいほど憎んでいるのか？

いや、違う。あれは私の中のイメージでしかないはずだ。だって、私と出会う前の父さんのことなんか、知らないのだから。

優しくかったのか、どんな風に怒るのか、母さんとどう過ごしていたのか、私を…… 子を愛してくれていたのかさえ、分からない。

そうこう悩んでいるうちにも父さんはゆっくりと近づいて来て、私を捕らえようとしてくるのだ。

「やっぱり馬鹿だろ、お前」

…… そのとき、背後から聞こえた言葉に反射的に振り返ろうとして、しかし両頬に添えられた誰かの手に阻止されてしまう。

「お前もつと後に死ねって、言っただろ」

「…… っかい……」

名前のない、彼を呼ぼうとして視界が反転していく。

どうやら父さんに襲われる前に、足を掬われて転ばされてしまったようだった。

一瞬だけ見えた彼の真っ白な髪と、僅かばかり細められた赤い瞳だけが、閉じる意識の中に刻み込まれていった。



「…… は……？」

目を開くと、そこには真っ白な天井が広がっていた。

ああ、大嫌いな天井だ。まるで私が生まれ育った、あの病院のように。大嫌いな景色。しかし、思い出の一杯詰まった景色だ。

「粕枝さあん！ 目が覚めたんですねえ！」

薄っすらと開けた目で、声が聞こえた方向に目を向ける。

同時に体を動かすと、頭がずきりと痛んだ。動けなくなるほど酷く

はないので、少し休めば普通に過ごせるようになるだろうか。

「罪木、ちゃん……」

私の目の前には、泣きそうな…… いや、泣きじやくる罪木ちゃんの姿があった。寝ている私に抱きつきながら泣く彼女のせいで、着せられた病衣はどんどん湿ってくる。

そっか、そんなに心配させちゃったのか。まったく、仕方ないなあ。

「粕枝さん…… よかったでちゅ…… あちし、ミナサンを呼んできまちゅね！」

空気を読んでか、後ろで涙ぐんでいたモノミも扉を開けてとてとと走り去ってしまう。

あ、しまった！ 罪木 “ ちゃん ” って言っているとこを聞かれちゃったか。でも、まあ、モノミならいいかな。そう思えるくらいには彼女を信用している。

「罪木ちゃん…… 大丈夫だから、私は大丈夫だから……」

控えめに肩を押して彼女を離れさせると、一旦私は頭痛を覚えながらも体を起こした。

「よかったですう…… ! よかったですう…… ! 治療が間に合ってよかったですう！」

それって間に合ってなかったらもしかして…… いや、考えるのはやめておこう。確かに出血多量とか、ショックとかで逝きそうな気はしたが…… うん、やっぱりやめておこう。

…… でも、罪木ちゃんが 「必ず生かしてみせる」 という約束を守ってくれたのは理解した。

「ありがとう……」

「あ…… ど、どういたしまして、ですう…… !」

泣いている彼女の頭を撫でながら、暫くそのまま微睡む。少し眠いが、これ以上寝ているわけにもいかないだろう。

そうして一息ついたとき、病室の外から大音量の足音が聴こえてきた。まるで漫画のようにドドドドと音を立てながら向かってくる複数の足音。その中でも一際大きな足音がドンツ、と廊下で響き渡り、唐突に扉が開かれた。

「目が覚めたというのは、本当らしいな」

足音から察しはついてはいたが、そこにいたのは勿論十神クンだ。入ってきた瞬間にブルンと震えたお腹が、走ってきたことを表していた。「本当だよ。ところで、複数の足音が……」

そう言いかけたとき、次々と病室に人が雪崩れ込んで来る姿が目に入った。

「なぎつちやああん！ よかったっすうううう！」

「な、凧ちゃん！ 目が覚めたって！ よかった、よかったあ！」

「ちよつと偽善者女！ こ、こ、小泉おねえ助けてくれたって…… だから無事でよかったって…… ああああもう！」

「心配していました…… よきにはからえ！」

「ソニアさーん…… それはちよつと違うような……」

「だ、だから全員で入ったら、パンパンになっちやいますよお！」

最初にダイブしてきたのは澤田さん。お腹は平気とはいえ、頭を揺らされてちよつとグラつときた。

小泉さんは控えめにやって来たが、目元が赤く、泣き腫らした跡があることが分かる。まったく、女の子がそんなやつれた顔してちやあだめだよ。ハンカチ…… はないよね。まあ、泣いた後すぐに顔を洗うなりしないと目元の赤みは防げないし、仕方ないか。

西園寺さんの貴重な初デレはやっぱり小泉さん関連だったみたいだね。あはは、なんだかくすぐったい。

ソニアさんは相変わらず、微妙に使い方の間違った日本語を使っているし、左右田クンが控えめに指摘している。

罪木ちゃんの台詞は、間に「病室」が入らないと危ない発言になりそうだ…… さすが罪木ちゃん。今度注意しておこう。

「粕枝さん…… 皆で、お見舞いに来た…… んだよ？」

「ああ…… 皆でな」

後ろからひよつこりと顔を出したのは七海さん。そして…… ゆっくりと誰かを先導してくるように日向クンがやって来た。

「……」

「……」

無言で互いに顔を逸らしながら……しかし距離が近い、九頭龍クンと辺古山さんだ。九頭龍クンが僅かに前へ出て、辺古山さんを庇うようにしている。辺古山さんは、そんな彼の前に出て行こうとしているが、その度に袖を引つ張られて止められている。

互いに互いを庇おうとしているように見られる。

これは、私に糾弾される、または危害を加えられるとも思っているのかな？

「……怒ってはいるよ」

視線を上げ、ベッドに座ったまま彼女たちを見つめる。

辺古山さんはどうやら覚悟の気持ちが強いようだが、九頭龍クンはどちらかというところ、彼女を守る方に集中しているのかな？

彼女が危険に晒されようとしたことで反省はしたようだが、それよりも彼女の身の安全優先かな。

あくまで彼女を優先するとは……うん。そういうの、嫌いじゃないよ。

「……さて、どうしてあげようかな？」

にやりと顔を歪める。

とりあえず狛枝らしく掻き回してみようかな？

怒っているのは確かだし、でも報復で殺す気はないんだよね。私がやるのは正当防衛だけだもん。

それに、この2人のことは好きだし、ギスギスしたいわけじゃあない。させたいわけでもないし、日向クンの方もなにか言いたそうにしているから、それを聞いてからでもいいかな。

「なあ狛枝……九頭龍も辺古山も自分から名乗り出たんだ。だからさ……」

「ん、まあ予想はついていたし、討論にならないように小泉さんを逃したのは私だけれどさ。害意はないから安心しなよ……次はないけど」

最後だけ低めの声で言うのは忘れない。念のためね。

「とりあえず……お見舞いありがとう」

「ごま……えだ……」

辺古山さんが苦しげに言う。

「すまなかつた……！」

「俺も、すまねえ！ お前も、十神もこんなことにならねーようにああしたってのに…… 動揺しちまって……」

「まあ、呼び出すのなら全員一緒にしてくれていたほうが良かったよね。1人ずつ呼び出すなんて、殺そうとしてるしか思えないし…… 疑心暗鬼になってたなら、尚更十神クンとかにも相談して欲しかったな」

苦笑すると、九頭龍クンが土下座し始め、辺古山さんがそれに続いて…… と連鎖的に極道流謝罪が始まりそうだったので、十神クンに立上らさせてもらった。

だって、あのままだと原作通り切腹しだしそうだったし。それに2人だから辺古山さんまでケジメつけようとしたら、お世話するの罪木ちゃんだし…… 2人してベッドに並ぶことになるのはちよつとね。

「さて、キミたちモノミからペナルティは貰った？」

「まだ…… だが」

「じゃあ、私が決めてもいいかな？」

ほらほら、そんなに顔を青ざめさせないでよ。

別に、辺古山さんの見てる前で九頭龍クンに切腹させたりなんてゲスな考えは持っていないんだからさ。

チラリと日向クン、それに七海さんの顔を見る。

「？」

疑問気にする2人は同時に首を傾げた。

お見舞いに来てくれた皆でできることといえばなんだろう？ そんなの、1つしかないよね。

だいぶ頭痛も治ってきたし、包帯は取れないだろうけれど座ってする遊びくらいならできるだろう。

病室じゃなくて、この病院の2階には会議室もあるし、玄関は待合室になってるから広くできているだろうし、全員1つの部屋に入っただけにかすることもできるはずだ。

「それじゃあ、ゲームをやろうか」

「……は、はあ？」

険しい顔をしていた九頭龍クンは、拍子抜けしたように目を丸くした。辺古山さんも驚いており、他の皆も呆気に取られている。

目を輝かせているのは七海さんだけだ。

「疑心暗鬼になるのはお互いのことをよく知らないからだよ。そうでしょう？ ゲームでもしながら親睦を深めて、ゆっくり皆のことを知ればいい。…… ね？ 七海さん」

「…… うん、うん！ 私いっぱいゲーム持って来る！ モノミちゃんにもお願いして用意する！」

あ、モノミ “ ちゃん “ って言っちゃってる。

まだ親しいことは隠しておきたいだろうし、そこは追及せずによろかな。

「あ、えっと、なら2階の会議室を使いましょう！ あそこなら皆さん全員入れますう！」

「お、ならオレは電気街で大型テレビ調達してくるわ。十神、式大、手伝ってくれよ」

「いいだろう」

「応、勿論じゃあー！」

「なら、わたくしと七海さんはモノミさんをお願いしに行きましょう！」

「いいの…… あるといいなあ」

この流れるような行動力だよ。まったく、凄いな……

これだけでもう、皆が輝いて見える。なんだか狛枝クンの気持ち分かる気がする。こんな綺麗ならもっと綺麗なのを見たいよね。

でも希望も、絶望も人数分しか存在しない有限資源だ。それをわざわざ減らしてまで質の良いものを用意するってのは、やっぱり理解できないけれど、希望も悪くないなあなんて思うんだ。

その後、2時間ほどで戻ってきた左右田クンたちは超大型テレビを会議室まで運び、モノミ…… とついでにモノクマが用意してきたゲームのラインナップを確認することになった。

「パソコンのフリーゲームも用意してみました！」

「フリゲーもテレビでできるように改造してあるぜ！」

ナイス左右田クン！

じゃあ、テレビの調整が終わる前に、某有名な狩りゲーでも先に
行ってみよう！

……

……

……

「ふっ、俺様の華麗な技で魅せてやろう！ ふっ、はあっ！」

「どおりやあああ！ スタンとったぞおい！」

「って、なんで男子だけなんだよ！」

「んふふ、上手に料理してあげようじゃあないかあ！」

「花村は肉焼いてないで早く来いよ！」

今日もツツコミはツツコミだった。

ちなみに田中クンが太刀で式大クンがハンマー。左右田クンは格
好つけて大剣。花村クンがボウガンだ。

左右田クンが大剣の慣れない操作に戸惑って何回か華麗に撃沈し
たけれど、無事に赤い熊は倒せた。

それにぐぬぬとなっているモノクマを見学しながら女子は女子で
高難易度に挑む。

今回はイビルモンドだ。例のあいっだが、なぜか生前に知っている
別のモンスターと混ざって頭がリーゼント風になっている。顎だけ
じゃなくてリーゼントまであるだなんて、なんて凶悪なんだ……

「あ、やった。激運と金運がついてる。次に来る不運が怖いね……」
猫さんの料理にはある程度種類によって絞られるが、食べるとラン
ダムな効果が現れる。

今回は猫の激運と金運、それに悪運がついているものを発見し、さ
らに全部発動することができた。激運は手に入るアイテムの数が増
えやすくなるし、金運は文字通り報酬が上がる。ラッキーだね。

1つ不安があるとすれば悪運まで発動しちゃったことだ。悪運は

クエスト開始時に不幸なことが起こる。それがなにになるかで変わるが、まあ私だしなんとかなるだろう。

「クエスト開始……だよ」

「ソニア、行きまーす！」

「唯吹に任せるっす！」

「あ、目の前」

勿論、上位のクエストなので開始時の位置はランダムだ。

そして、私はイビルモンドの目の前。それに加え悪運の効果によりスタミナは最低値。逃げるにしても絶望的。

ああ、不運だね！　これがさっきの幸運の反動なんだね、ぬるい、ぬるいよ！　そんなこともあるのかといっつももどり玉を所持している私に死角はないのだ！

そんなこんなでひと段落させて次に移る。

男子の方ではキレイな左右田くんが、華麗な爆弾祭りをして味方を巻き込んでいる。一体なにがあったし。

ああ、剥ぎ取り中に田中くんが演出で小タル爆弾を……邪魔されて怒ったんだね。結局全員で爆弾祭りしてるけど。

「俺がプレイヤーか？」

「そうそう、頑張ってるね」

そう、日向くん。一番平凡だからこそキミのプレイングが見たいんだ……　リアクションのために。

次に始めたのはフリーゲーム「魔女の館」だ。

魔女の館の前から物語が始まり、巨大なバラが出口を塞いで出られないので、館に入ってバラを枯らすためのものを探すゲームだね。

黒猫が意味深なアドバイスをしてきたり、こちらの精神を扶けるような仕掛けが多いゲームだ。

あれ、これって結局絶望エンドが最良……　っていうか、真実のエンディングは絶望しかないよね？　日向くんたちにやらせていいのかな。

「うぷぷぷ、楽しんでいってね！」

なるほど、選んだのはモノクマか。

そう思うとあの黒猫の台詞あくまがモノクマの台詞に見えてくるから不思議だ。

【やつははらをすかせている】

「カエル……こんなことってないだろ！ な、なあ七海、猫枝……」

私たちは揃って目を逸らした。

上げて落とす。カエルと仲良くさせておいて道中に犠牲を余儀なくさせる仕掛けを用意するだなんて、このゲームの中でもよくできた部分だと思うよ。1番はトゥルーエンドの演出だけだ。

結局、私がカエルを大蛇の部屋に押し込む操作をした。慣れてるし、皆が軽く絶望してるけれど、それくらいは乗り越えられるよね？

あとあとオタマジャクシから「おとうさん、しんじやった」「おまえがころした」なんて追い打ちが来るけど、耐えられるよね？

「わあ、可愛い……」

次は、ユートピア。西園寺さんも納得の綺麗な舞台だ。モノミチヨイスだね、さすが。

ユートピアは、植物状態の少女の、夢の中にある病院が舞台だ。ゆめにつきと違う点は、少女と同じ病室に偶然入院することになった主人公が、その夢の中に入り込んでしまうことか。

白いシルエットの魚が背景の白と青に溶けて美しい雰囲気ゲームだね。

これは最終的に希望に繋がる良いゲームだし、絵も綺麗、雰囲気もいい良作だ。植物状態の少女が、主人公と一緒に折った鶴を頼りに前に進む。……直接描写はされていないけれど、きつと植物状態から復帰することになるのだろう。

まさに希望に終わる物語。最後の方の難易度が高いけれどやっておいて損はない。

こちらはさくさくと進み、魔女の館ほど絶望感がないからかすぐに

クリアできた。

まさか日向クンがあそこまで操作が上手いとは。火の手から逃げるアクシオンはなかなか難しいから、正直1発クリアできるとは思っていないかったよ。

その次は、またモノクマか。

アリスメア。どうあがいても犠牲が出る絶望ゲームだ。

最初から最後まで、一人称とテンションがコロコロ変わるチエシヤ猫あにま翻弄されたまま終わることも多い。先に進むためには1人1人絶望させていかなくちやいけないのも、なかなか辛いね。

主人公に全員助ける条件として、甘い言葉を囁くところはどこかモノクマ…… 中の人に似ている。そんなキャラクターチエシヤが好きだったのだが、今現実にはモノクマがいることを考えると、こいつも現実と化したらなんて最悪なんだろうかと思ってしまう。

「大丈夫、ダイジョウブ、ダイジョウブ……」

先生のおまじない。これ、好きなんだよなあ。

某アニメの「絶対大丈夫だよ」に匹敵するくらい好きだ。

お次はモノミ。

クロナのレクイエム。うーん、才能の有無で葛藤するような物語だから日向クンには少し辛いんじゃないかと思うけど、モノミにもなにか意図があるんだろうし、まあ…… いいのかな？

あ、でも番外編の「con amore」まであるし、憎しみに打ち勝つのは愛というテーマだからモノミにはピッタリかな。

この物語は、大きな屋敷から家出した天才ヴァイオリニストの少年が辻馬車で適当な場所まで出かけることから始まる。

呪われた屋敷。そこで呪いを祓ってほしいとお願いを受けて、同じく呪いを持っている主人公が立ち向かっていく。

このゲームでの呪いっていうのはようは「絶望した心」そのものことだ。呪いは侵食し、そしてついには自我まで食いつぶして、最後には理性のない化け物が残されてしまう。

そんな呪いになってしまったクロナを助けるのが目的だ。

実は主人公も、天才ヴァイオリニストである自分と、そして秀才で

しかない弟との関係でいろいろあつて呪いを持っている。

「あなたの呪いが愛に変わり、浄化されますように……」

黒猫と、人間、2人のクロナから言われてそれぞれの愛する人を救った言葉だ。

うん、やつぱりこの言葉も名言だなあ。感慨深いものだ。

これには、恐らく才能のない妹を持つ九頭龍クンもじつくりと読み込んでプレイしていた。

モノミの最後の言葉にも通じる気がするし……

そう考えてモノミを見る。

皆と一緒にゲーム画面を見ながらとところどころヒントを出したり、一緒に感動したり、くるくると表情を変えている。

「あ、日向くん…… そつちじゃなくて……」

「ん、待ってくれ、考えるから…… 花札だから……」

現在やっているゲームは物の世界だ。

花札を使ったギミックがあるので、あらゆるゲームに詳しい七海さんが指導しているんだろう。

それにしても、日向クンと七海さんがゲームをしているのを見ると、思ってしまう。

もう少し、こんな時間が続けばいいのになあ。

「……で、なんで人狼することになったんだっけ？」

全員で卓を囲み、自身の持つカードを見ながら言う。

私の役職は猫又。狼…… クロに咬まれると咬んだ狼を道連れにし、投票で処刑されると自身に投票した人物の中から、ランダムで道連れにする役職だ。村役職の中でも処刑されにくく、進行役になることもある。処刑されても爪痕を残していく…… 実に私らしい役職だね。

「おいおい、コロシアイ修学旅行中に人狼ゲームってやばくねーか？」

「…… え？ 現実には現実、ゲームはゲームだよ…… 疑心暗鬼になるからといって、騙し合いのゲームで本気を出さないのは、ゲームに

失礼…… だと思うよ?」

「あ、ああそうだよな…… 遊ぶなら全力で、か」

左右田クンが不安要素を挙げたが、七海さんと日向クンがそれを止める。最もなことであるし、騙し合いで皆がどう行動するのかというのにも興味がある。パターンが分かれば対処法も…… って、だめだな。こんなことを考えてちや皆のことを信じてないみたいじゃないか。

つつい、いざというときのことを考えてしまう。

今はただ普通に遊べばいい。そう、猫又が進行役をやる必要ないよね? だって互いにシロだと分かっている 「共有者」 がいるんだから。

引つ掻き回して傷跡を残して、なるべく狼側に被害を受けてもらわないと。猫は村側なのだし、村の勝利を狙おう。

そうして順調にゲームは進み4日目。

最初にゲームマスター^Mをやるうとしていたモノミは第一犠牲者役となり、霊界という名の仮眠室で待機。

ちなみに吊り…… つまり処刑のことは皆で 「追放」 と言っている。GMがモノクマなので、念のためにだ。

「4日目昼時間開始だクマー! なんと! ゲロゲロに平和な朝だよ! やったね!」

モノクマは 「うぷぷぷ」 と笑いながら、夜時間に人が咬まれたなかったことを告げた。

この場合、狼に咬まれても死なない 「狐」 を咬んでしまったか、もしくは狩人の守る人を襲撃対象にしている襲撃が失敗したかのどちらかだけれど、どうだろう?

3日目は共有者の片方として罪木ちゃんが名乗り出ていたが、未だにもう片方は出てこない。しかし、やたらと罪木ちゃんにアドバイスしていた七海さんや、気にかけていた日向クンあたりがもう片方だと当たりはつけている。

とりあえずどちらにも対応できるようにしておこうか。

私は役職を持っていることをバラさないようにしながら潜伏して

いるので、いつ追放されるか分からない。だができれば狼に咬まれて道連れにしていきたいところだ。

「…… 共有 C O 相方生存、だよ」

「あ、相方合ってますう……」

ほう、七海さんと罪木ちゃんが共有者ね。なら、こうすれば狼の標的になりやすいかな？

「ああ、やっぱり七海さんだったんだね」

こういう発言をしておけば、もし平和が狩人の護衛成功だった場合、それも七海さんが3日目夜の標的だった場合、狩人候補に私になるということだ。

狼の襲撃を防ぐ狩人は見つければ咬まれる確率がぐんと上がる。これで本物の狩人さんが隠れられるのなら良し。ついでに狼が食らいついてきて道連れにできれば万々歳だ。

まあ、なんとなく視線を感じる気がするから私が咬まれるだろうな。

よし、じゃあ引つ掻き回していかないかね。

投票時間ギリギリに……

「あとは頼んだよ、罪木さん」

「え？」

投票が終わって私ではなく、ギリギリ式大クンが追放されたようだ。

これで、あとは咬まれてお仕事終了かな。

【狛枝風さんの死体が発見されました】

【十神白夜さんの死体が発見されました】

「はいはい、さっさと仮眠室に行つた行つた！」

「……」

「……」

黙ったまま十神クンと顔を合わせる。

眉を少しだけしかめた彼は、やられたな、といった表情でため息を吐くとそっぽを向いてしまった。

ふふふ、彼相手に勝つだなんてね。

なんだか嬉しくてガッツポーズをしていたら、その分厚くて大きな手が頭の上にドスンと乗せられた。

……痛い。けれど、なんだかあたたかい。

「今度は引つかかってくれたね？」

「偶然だ」

1回目の学級闘論では、ことごとく読まれてしまっていた。それがあつたので、今回こうして騙されてくれたことを嬉しく思うのだ。

彼の本当の才能のことを鑑みると、これって凄いことだよな？

なおも激しくかき混ぜられる髪の毛が跳ねる。

元々寝癖がひどいというのに、これでは直らないじゃないか。

「こんな感じが、続けばいいなあ」

私の漏らした独り言は拾われない。しかし無言の彼もなんとなく同意しているのが感じられて、やはり私は笑った。

昨日の人狼は無事村人の勝利になったけれど、左右田クンやら日向クンには結構怒られた。そりゃあ、宣言もなしに意味深な発言。更には噛まれて2死体。狐か猫かってことで真つ二つに意見が割れてたからね。

大混乱に陥ってたのは仮眠室にある霊界用モニターで楽しく見ただけれど、後から来た九頭龍クンには「性格悪いな」と苦笑いされてしまった。

「でも、楽しかったでしょ?」

そんなことを言うのと照れたように頬をかいて、そっぽを向いてしまう。残念ながら彼は辺古山さんと同じ陣営になれなかったようだけれど、それもそれで楽しかったろう。

辺古山さんも、これがきつかけで皆に若干ドライなところが緩和されるといいなあ。九頭龍クンにだけ甘くて、一步引いて見ているような部分があるからもう少し仲良くなりたいたい。いや、歩いてくるのを待つんじゃないくてこつちから引きずってでも連れて来ればいいのかな。

よし、そうと決まればそうしよう。

額が割れて包帯が痛々しいが、頭痛自体はなくなっている。島を歩き回ってリハビリするくらいは許可が取れるだろう。

大声を出されてしまうと痛いから、滝田さんとかと一緒に騒げないのは残念だが……

「粕枝……ん、待たせてしまったか?」

「で、用ってなんだよ?」

3回のノックの後、扉が開いて入ってきたのは辺古山さんと九頭龍クンだ。

「ううん、とつづくに準備してたから大丈夫だよ。2人ともいらっしや

い」

そう言つて近くに置いてあるパイプ椅子を勧める。

一瞬視線を交差させた2人は、なにも言わずに九頭龍クンが椅子に腰掛けることで逸らされる。

「ペコも座れよ」

「ですが……」

「対等に接してくれつて言つただろ？」

「…… 坊ちゃんよりも先に座るわけにはいきませんから」

そう言つてゆつくりと座る彼女。

九頭龍クンの言葉には大分弱いみたいで、片腕を抱きしめてちよつとだけ嬉しそうにしている。可愛いなあ。

「ええとね…… ほら、昨日のペナルティじゃあキミたち、不満でしょ？ あれだけのことをしたのに遊ぶだけだなんて…… つて罪悪感がある。違う？」

昨日の驚いた顔と、自分たちが楽しんで良いものかと葛藤するような表情を思い出しながら、提案するように人差し指を立てる。

「確かに…… きつちりケジメをつけることに慣れちまったオレたちにはちときついな……」

「恨まれるのは慣れてる…… それが暗殺者というものだからな。しかし、一緒に暮らす以上はやはり、罰してほしい」

九頭龍クンは原作でも切腹してたから分かっていたけれど、もしかして辺古山さんあんまり動じてない？ これは態度を緩和するのに随分……

「だが、何故だろうか。お前たちには嫌われたくないと、思うのだ。組の者の助けとなるよう、坊ちゃんの道具として剣を振るってきたが、こんな風に思うのは…… 初めてだ。だから、ちゃんと謝らせてほしい……」

「どうやら、私の思い違いだったみたいだね。」

辺古山さんはもう大丈夫だ。

九頭龍組に拾われ、九頭龍クンの剣として、道具として生きてきた彼女は彼本人に人間としての自身を求められ、そして私たちと意思を

持った人間として過ごしてきていい意味で変化しているらしい。

まだまだ固いところもあるがそれが彼女の魅力だろう。

「粕枝、改めて言う。すまなかった……」

苦しげに目を細めて、ベッドに頭を打つんじゃないかというくらい頭を下げる彼女。

それを無言で見つめ、背中をそつと支える九頭龍クン。

私は首元のロケットペンダントをぎゅっと握ってから、彼女の伏せた頭にそつと手を乗せる。

「……？」

上目遣いでこちらを見上げてくる彼女に微笑んでみせてから、そつと「何度でも言うけど、私は許すよ」と口にした。

「あのとき、勢いで言っちゃったけどさ…… 私にも、九頭龍クンにとつての辺古山さんみたいな、大切な人がいるんだ」

彼女たちには話しちゃったから、いいかなと思って目を瞑る。

そうすると、辺古山さんのさらさらとした髪を撫でるこの状態で、まるでメイを撫でているような錯覚を覚えてしまう。

髪の色も、髪型も、雰囲気もそんなに似ていないのになぜだか、彼女の主に対する態度でメイを想起してしまうのだ。

本題のペナルティは、後で言えばいいかな。

「テメーが言ってたやつか」

「うん…… 私は病院の院長の娘でさ。病院で暮らしてて、なぜだか専属のメイドさんがいたんだ。当時中学生くらいなの、ね。今思えば中学生をメイドとして雇ってるなんてでんでおかしな話だけれど……」

私はその人に育てられたと言っても過言じゃないね」

自分と重ねられているからか、辺古山さんも私に撫でられた状態でそのまま聞いてくれている。

最初は手を跳ね除けられるかと思っていたけれど大人しくしてくれているようだ。ありがたい。

もう少し、この記憶に浸っていられるのだから。

「名前は…… 知らない。正確な年齢も、知らない。なんにも言ってくれなかったから、私はメイドのメイと呼んできた。いつもお嬢様っ

て呼んでくれたり、2人のときは風様って呼んでくれたり、すつごく優しい人だった」

片方の手ではロケットペンダントをいじくり、もう片方の手では刃古山さんの頭を撫で、目線は真剣な目をしている九頭龍クンに向ける。

「医療機関最大最悪の事件って、知ってる？」

「…… 小耳に挟んだくらいだな」

そりやあそうだよね、だって私たちがまだ小さいときの話だし、詳しく知っている左右田クンのほうがおかしいというかなんというか…… 臆病だよね。

「あれ、私の暮らしてた病院で起こったんだ」

静かに息を飲んだ音が聞こえた。

それが目の前の彼からか、それとも彼女からなのかは分からなかったが、続ける。

「みんな、みんな死んじゃった。私の父さんが、みーんな殺した。私はそんな中で、大好きな友達とか、姉妹同然に育った子たちを見捨ててメイと逃げた」

見えなかつたんじゃない。聞こえなかつたわけじゃない。

今思えば、私は見て見ぬ振りをしただけだ。

そこらに転がる死体を見えないふりをしながら避けて走り、助けを求める声を見捨てて玄関まで走った。助けていたら自分の死ぬ可能性が引きあがるから、ただひたすらに。自分以外どうなろうと知ったこつちやないと逃げた。

最低だと思う。私は友達も姉妹も、狂った父親さえも見捨てた。全部捨て去った。そんな私がここでの平穏な生活を渴望しているのはおかしい話かもしれない。そのうち報いがくるかもしれない。

それでも、私は前を向こうと、変化を受け入れてみようよと、やっと一歩踏み出したのだ。

「私の才能は幸運。大きな不運が来れば大きな幸運がやってくる。そういうものなんだ。ハイジャックにあつたらハイジャック犯が隕石に当たって死に、私を引き取ってくれた人たちも死んだ。そういう才

能だってことは病院から逃げ出したとき既に分かってたから……」

私は自身が傷つかなかったためにメイと別れた。いや、メイを捨てたのだ。

「いつかメイを殺してしまうかもしれないからって、メイと別れた。この空の下のごくかで生きていてくれればいいやって捨てたんだ。だから、そんな障害もないのにすれ違つてるキミたちを見て、おせっかいを焼きたくなつたのかもしれないね」

ふるふると震える辺古山さんの伏せられた表情はなにを思っているのだろう。

自分が捨てられる想像？ それとも同情？ 九頭龍クンに捨てられるはずがないっていう自信？

分からないけれど、嫌われたくはないなあ。

「私はダメだったけど、キミたちは……」

ぱしん、と乾いた音が響いた。

「え……」

弾かれた腕が空中を彷徨う。

顔を上げた辺古山さんは怒っているように目尻を吊り上げ、唇を引き結んでいた。

よく見れば九頭龍クンも少し怒っているようで……もしかして、嫌われちゃつたかな。

「なぜ、お前は諦めている？」

「え、えつと……？」

辺古山さんの真剣な目に、怖くなってより一層ペンダントを握りしめた。

「お前も、過ちには気づいているんだろう。ならなぜ、初めから諦めているんだと言っているんだ」

静かな怒気を混じらせてこちらを見つめる彼女。

九頭龍クンも言いたいことがあるそうだが、彼女一人に任せてしまっている。

「お前だって会いたいんだろう？ 一緒に過ごしたいんだろう？ 私たちに気づかせておいて自分は諦めているなんて、ふざけてるのか？

会いに行けばいいだろう、この島から脱出して、そしてやり直せばいいだろう」

「い、今更探したって……」
怖いのだ。

一度捨てた私を彼女が許してくれるのか、もう一度やり直させてくれるのか、分からないから怖いのだ。

約束をしていたって、あちらは忘れているかもしれない。忘れられているかもしれない。それが、怖いんだ。

だから彼女たちに説教紛いのことをしておきながら私はなにもできていない。

……こんなんじやあ怒られるのも当然か。

「私を、お前の大切な人に重ねているのなら分かるだろう！ 私は、たとえ坊ちゃんに本当に道具扱いされようと、捨てられようとも想いが変わらない自信があるぞ！ それともなんだ？ お前のメイドはそれくらいの情しかないか？ なら私とそいつを比べるのをやめるんだな。その程度の情しかないやつと、重ねられたくないなどないぞ！」

そう言う彼女の声はどこまでも冷たくて、そして、暖かい。そんな矛盾を孕んだ声は重たく私の中に入っていく、響く。

そうか、この言葉は辺古山さんの九頭龍クンへの思いを疑うようなものなのか…… そうだよね、辺古山さんはなにがあっても九頭龍クンを嫌わず、そばに続けるよね。そっか、そうだったんだ。

やっぱり、似た立場の人に訊くと違うな。ちゃんとした答えが返ってきた気がする。

似ていると思った彼女だからこそ、その言葉がメイ自身に言われているようで、代弁されているようで、するりと私の中に届くのだ。

しかし、それはメイの言葉ではない。辺古山さん自身の言葉だ。それを忘れてはいけない。

そもそも、他の人と重ねること自体が彼女にとって失礼だよね。

メイの想いは直接私が聴かないといけないのだ。私も、メイの想いを疑いたいわけじゃないのだから。

…… 私が勝手に怖がっているだけ、か。

「メイが死ぬのは、嫌なんだ。失うのが、怖いんだよ。だから才能のコントロールができない私が、そばにいたら危険だからって……でも、そっか。置いてかれるのは、嫌だよね……」

「そうでなければお前の手が震えるわけがないだろう。撫でる手が震えていたら何事かと思うぞ…… 坊ちゃんの想いを汲み取れなかった私がこんなことを言うのも、どうかも思うが……」

少しだけ歪む視界で九頭龍クンを見れば、思わぬ告白のような言葉に、耳まで真っ赤にしていた。

「テメーらのせいだぞ」

視線に気づいたのか、赤い顔のままそっぽを向く彼。

そんな彼に、辺古山さんは何事もなかったように「ほ、坊ちゃんどうされました？ 私になにか……」とおろおろしている。この子、自分が告白紛いなことをした自覚さえないようだぞ。

九頭龍クンは苦勞しそうだなあ、と苦笑して目尻を拭う。

「そっか、メイも迎えが来るのを待っててくれてるよね。なら、早くここから脱出して迎えに行つてあげないとね」

視界は相変わらず歪んでいるが、心は晴れ晴れとして暖かい。

早くこの2人のように、分かり合えるようになりたい。そんな思いが強くなっている。

会いたい。けれど、それは全員で脱出してからだ。

「あはは、とんだ告白タイムになっちゃったね」

「っつ……!?!」

私の言葉に素早く反応した辺古山さんが顔を赤くしている。

いやあ、そういう意味で言ってるわけじゃないんだけど、これは自爆かな？

「だめだなあ、私。次会うときまでにはこのネガティブ思考どうにかしないとね…… つと、ペナルティのことだけど」

「あ、ああそうだったな……」

助かった、という顔をして九頭龍クンが話に乗ってくる。

辺古山さんの件があったからだいぶ性格が丸くなっている気がする

る。辺古山さんも今の話で打ち解けてくれたようだなによりだ。

「この病院、きつと3番目の島だよね？」

「そうだ。ウサギが門番を倒して開放されたんだとよ」

九頭龍クンがぶつきらぼうに言う。

そうか、やはりなにかしらのことが起きれば順調にモノミが門番を倒してくれるのか…… それとも、時間経過でモノミが確定で倒してくれるのか…… 事件が起こるたびにモノクマがわざわざモノケモノを弱くしている可能性もあるが、モノミもパワーアップしていることからそれはないと思う。

まだなんとも言えないかな。

「2人に3番目の島を案内してほしいなって」

2人の仲の邪魔になっちゃうかもしれないけど。

「そんなことでいいのか？」

「オレはいいけどよ、罪木の奴になんか言われねーか？ ペコを見る目が、なんつーか……」

ああ……、そりゃあ友達が殺されそうになったら警戒もするよね。

「なら十神クンも一緒ならどう？」

「…… それなら罪木も納得してくれるだろうか」

この、十神クンの圧倒的安心感よ。

罪木ちゃんも十神クンがいれば安心するだろうし、私も安心するし、一石二鳥だよね。

「なら早速、罪木さんに一時帰宅許可を貰って来るね！」

そう言っただけで座っていたベッドから降り、病室を飛び出ようとするが横から伸びた手によりフードを捕まれ、思い切り首が締まった。

「うぐっ」

「あ、す、すまない……」

やり過ぎたと思ったのか辺古山さんはすぐに手を離してくれた。

いや、突っ走ろうとしたのは私だから辺古山さんは悪くないけどね。

「罪木から許可を貰うのは私たちがやってくる。お前はもう少し寝た

ほうがいい。散策は昼からでもいいだろう?」

「何時から待ってたのかは知らねーけどよ、そんな血が足りてませんーって顔で嬉々とされても困るんだよ」

そう言われてしまうと不安になってくる。

今朝顔を洗いに行ったときは昨日よりも顔色良くなってると思っただけけれど、そんなに顔色悪いのか? それとも単に気遣いか?

なにはともあれ、気遣われていることは確かだしここは大人しく待とう。

「なら、罪木さんをここに呼んできてくれるだけでいいよ。私が説明しておくから。2人は十神クンを探してきてほしい」

「ああ、分かった」

頷いて去っていく姿を目で追う。

もう、彼女の姿にメイの影が見えることはなかった。

そう、前を向いたから。今度は本物の彼女に会って、私も謝るんだ。たとえメイが私を覚えてなくてもいいから、軽蔑していてもいいから。

今まで1人にしてごめんって。信じられなくてごめんって言って

…… それから、大好きだって伝えよう。精一杯の親愛を示して、

それでまた昔みたいに彼女のケーキを食べるのだ。

…… 今度はここにいて、全員で。



2人を見送り、一息吐いたところでベッドへと戻る。罪木ちゃんが来るまでの間は少し、微睡んでいよう。

そうして目を瞑るのだが、なんだかおかしい感触がした。

生温いような冷たいような…… これは一体?

「ハア、ハア…… 粕枝さん、シャンプー変えた?」

「っ、うわあああああ!?!」

布団から転げ落ちて後退り。

そこには、ベッドの上には頬を赤らめて身をよじるモノクマの姿が……

思わず殴り飛ばさなかった私を褒めたい。もし殴ろうものなら校則違反でボン、だ。

「んもう！ オマエラったらボクを放っておいてイチャラブしちゃってさー！ 青春しちゃってさー！ 爆発しろー！」

「物理的に!?!」

「こつちくん！ やめてよ、外で見張りしてたモノミはどうしたんだよ！」

「ずっとスタンバってました！」

「ず、ずっと布団の中に？ い、いつから……」

「狛枝さんが着替えに行ってる間に！」

「そ、そうなんだ……」

気づかなかった。ていうか、さっきの話全部聞かれてたのか？

え、恥ずかしいんだけど。モノクマに見られたとか最悪もいいところだ。弱味握られそう。

「…… とところで、狛枝さんったらこの島にずうつといたいんじゃないのかったの？」

小首を傾げるモノクマに僅かな悪意を感じ取り、少しだけ言葉を考えてから答える。

「確かにこの島は安全で平穏だけれど、それはキミがいなければだよ。キミみたいな危険な肉食動物がいるんじゃないやあ、やってられないと思わない？」

「トウシク…… はじめてクマ扱いされたクマ！ がおー、たーべちやーうぞー！」

…… 遊ばれている気がする。

「ふざけてるの?」

「ふざけてる? ふざけてるのは狛枝さんじゃない?」

「はあ?」

急に真面目ぶって喋り出したモノクマの目は赤く、ギラギラと光り

輝いている。いきなり怖くなったモノクマに困惑が隠せないのだけ
れど。

「皆と一緒にここから出る？ 諦めないでオマエの大切な人に会う？
そんなこと、オマエが本当にできると思ってるの？」

「…… できるよ。私は、ちゃんと向き合うつて決めたんだ」

淡々と、そう言ったがモノクマも笑うことすらせずに続けていく。
「いざ生死の分かれ目になったら他人を見捨てるクセに？ 三つ子の
魂百までって知ってるよね。生まれついてきたものは覆せないんだ
よ。絶対に、絶対にね」

なんだ、これ。

どうしてこんな真剣にモノクマは言ってるんだ？ いつもならう
ぷぷとでも笑いそんなものなのに。

私を絶望させたいだけ？ いや、それだけじゃなさそうだな。なん
だ？ なんでこんなに…… “彼女” は言い聞かせるように話
してくるんだ。

分からない。けど、私に言えるのはこれだけだ。

「やってみせる、絶対に。絶対に全員でこの島から帰って、今度こそ平
穏な暮らしに戻るんだ。それで、メイに会って、謝って、ありがとうつ
て伝えるんだ。だから私は負けない。それまで、私は “死ぬわけに
はいかない” なんだ」

沈黙。

そして、いつもは気にならない機械音を鳴らしながらモノクマの目
がこちらに向けられる。

「クマ、クマママ、クマーハツハ！」

「え？」

とうとう、うぷぷ笑いも飽きちゃったのかな？

「そう、ここから帰りたい理由ができてセンサーなによりです！」
どの口が言うんだか。

「なら、ボクにちゃんと示してみなよ。やれるもんならやってみろク
マー！」

「…… 絶対に、やってみせるから」

「うぶぶぶぶぶ、絶望が待ってるかもしれないけども?」

「絶望がなくっちゃ、ハッピーエンドにならないでしょ? 最初から幸せへの道しかないなら、それはノーマルエンドだ。そう思わない? モノクマ」

「幸せなエンディングしか存在しないシナリオなどどこにもないのだ。」

「それに、少し難易度が高いくらいが丁度いい。」

「〃 真実の終わり」が幸せとは限らないよ? まったく、くつさいくつさい。やってらんないクマー!」

「はいはい、もうちょっつかいかけてこないでよね」

クルクル回りながら扉を開けて出て行くモノクマ。

その方向には背を向けたモノミが立っていて、扉が開いたことに気づいたのか、こちらを振り返って驚いている。

「あー!? モノクマ! どーして中から出てきたんでちゆか! 狈枝さんの睡眠を邪魔しちゃだめでちゆー!」

「ボクの睡眠を邪魔する権利はオマエなんかにはないだろー!」

「早く病院から出て行くでちゆー! 病院は静かにしないといけないんでちゆからあー!」

「いてっ、いてっ、叩くなよー」

多分、1番うるさいのはモノミだと思うよ。

結局寝付けずにその後は、罪木さんが来るまで待ちぼうけしていたのだった。

クリスマス 「九頭龍 辺古山 日向」

ウサミ先生が旅行に来た日にちを覚えてくれるのは、なぜだろう。確か11月の半ばくらいが今回のスタートだったか。

今回の、と私が言っているのはこれがアイランドモードであるがゆえに、何度も周回しているんじゃないかと考えているからだ。記憶は勿論ない。私にとっては今回が1回目だ。だが、季節を考えるとありえないと感じるのだ。

ウサミ先生は「学園周辺は今寒いでちゆから、暖かい気候のこの島に旅行しに来たんでちゆよー」と説明していたし、確かにそのような実感がある。

皆とある程度親しくなっているのも、初対面ではないと認識できるのもそのせいだろう。だが、学園での記憶は一向に思い出せる気配がない。

皆そのことに違和感を覚えているはずだが、誰1人として疑問を浮かばない。あの十神くんですら…… だから、このことを知っているのはきつと私1人。いや、もしかしたら日向くんなら分かっているかもしれない。でもそれを確かめる術はない。

まあ、それはともかくとして修学旅行は50日間。

12月に入って折り返し地点に入った今日、課題達成のためにマーケットで資源探しをしていたときのことだ。

辺古山さんと2人で必要な乾電池や水、接着剤などの種類を的確に揃えながら静かに作業をしていた。

豪語してしまったこともあり、普段は掃除が多く、たまに課題に必要な物を集めるときも、こうして比較的体力を使わないような場所を指定してくれる日向くんには感謝しかない。

スケジュール管理があまりにも完璧なために、今や第2のリーダー扱いだ。

さて、暫く静かに作業していたが、真面目な2人でやっていたためか思ったよりも早く終了してしまった。

そこで私がマーケット内で自由にしていればいいと提案したとき、

辺古山さんは少し躊躇ってから話を切り出したのだ。

「少し、相談してもいいか？」

「勿論だよ」

それは見事な即答だった。反射的と言っても良いかもしれない。

「粕枝…… 手芸や洋裁はできるか……？」

躊躇いがちに訊かれた言葉に面食らって首を傾げる。

「できるよ？… もしかして、辺古山さんもやるの？」

「いや、やったことすらない…… しかし、ほら、もう12月だろう？」

「そうだね」

なんとなく話を察した私は先に必要なメダルの数を頭の片隅で計算し始める。ウサミ先生に直談判してみることも念頭に入れた。

「坊ちゃんにプレゼントをしたいのだ。この島の気候は暖かいが、本土に戻ったときはきつと寒いだろう？ だから、クリスマスにでも暖かいマフラーや手袋を差し上げたいと思っているのだ。協力…… してくれないか？」

勿論です。というかむしろ協力させてください！

なんだよその可愛い動機は！

思わず緩んでくる表情を隠しきれずに明るく「断るわけないでしょ？」と笑った。

……

……

……

12月24日のことだ。

「おい粕枝…… ちょっといいか？」

お昼を済ませて外に出ると、なんだかそわそわしている九頭龍クンに呼び止められた。

皆に関係がバレて以来、辺古山さんと一緒にいないのは大変珍しいことなので私が驚くと、素早く近くの旧館へと押し込まれてしまった。

「なにか用かな?」

ま、まさかそんな展開が!? 辺古山さんというものがありながら!?! ということは冗談でも言えないので、心の中だけで叫んでおく。彼に限ってそんなことはありえないと断言できるから。

「あー、なんていうかよ…… その、前にペコが作ってきたかりんとう、テメーが教えてやったんだろ?」

めっちゃめっちゃいいにくそうに、だがそわそわと落ち着きなく目を泳がせながら話す彼は常より可愛らしさが出てきている。こんなことを言ったら怒られちゃうかな。

まあ、怒られるだけで済むのは仲が良いってことだから、悪くはないけど。

「そうだね。辺古山さんったら健気なんだから、キミが羨ましいくらいだよ。今日も…… あ、いや、なんでもないや」

「そ、そうか……」

その言葉だけで背後に花が見えるような錯覚を覚えるほど、とつても嬉しそうだ。言葉には決してしないけれど。

私がつかり漏らしそうになった言葉も、照れている彼には聞こえなかったようだ。よかったよかった。

「で、だ…… ペコの好きなモンって、なにか心当たりはねーか……?」

彼が辺古山さんの好物やら好きなものやらを知らないとは考えにくい、よね。

「…… それってつまり、なにをプレゼントするか迷ってるってこと?」

「な、なんで分かった!?!」

もうなにこの主従尊い……

「あっはは…… なんとなくというか、私だったらそれで悩むかなって思ってた」

同じ主だし、私も昔はメイになにを贈るか迷った経験があるからね。

そのときは姉さんたちや橙子ちゃんによく相談したものだ。

うーん、こういう話題って女子がするものだと思ってたけどなあ。

ほら、ドラマとかでよくあるやつ。プレゼントの相談をしてるだけなのにデートと勘違いされて修羅場になるあれだ。

…… って、これ辺古山さんに見られたらまずいのでは？ いや、

大丈夫か。もし勘違いしたとしてもあの子、「坊ちゃんがそう望むのなら」 って引き下がるようなタイプだし、そもそも皆と遊び歩くのはよく見る光景だし、大丈夫…… だよな？ ヤンデレになった

りしないよね？ あの子がヤンデレ化したら押し斬られる未来しか見えないよ？

「…… よし、じゃあマーケットに行ってみようか」

語尾が若干震えていたのは気のせいだ。きつと。

「あんま来たことねーから知らなかったが、結構いろんなもんがあるんだな」

そう言つて商品を見渡す彼。

マーケットには誰もいないようだ。

「で、なにをあげればいいのかだっけ……？」

「ああ。情けねーとは思うが、オレはあんまりペコのことを知らねーんだよ。だからさ、なにを選んででも結局違う気がして決まらなくて、こんな日になっちまったんだ」

「なるほどねえ」

大丈夫大丈夫。そんなの、これから知っていけばいいんだからさ。

そのための修学旅行なんだ。だから今は存分に悩んでしまえばいい。離れ離れになることなんて、この旅行ではないんだから。

平穏で幸せで、らーぶらーぶなこの世界に恐ろしいことなんて、なにもないはずだから。

「ならさ、こういうときは自分が貰って嬉しいものをプレゼントするものだって相場は決まってるよ！ だからじっくり商品を見ていこう？」

正直言うと、こういう方面に詳しくそうなソニアさんでなく私を相談相手に選んでくれたのはとても嬉しい。

ソニアさんだったらもつと上手く言えたのかもしれないし、良き相談相手になったのかもしれない。でも、選んでくれたからには全力でキミたちの間柄を応援しようと思う。

きっと辺古山さんは、九頭龍クンからの贈り物だったらなんでも喜ぶと思うけど、自分の好きなものを好きな人が選んで贈ってくれたらもつともつと嬉しいよね。

だから私は、それを手に取った九頭龍クンを意外に思うこともなく、少しだけ恥ずかしそうにしている彼に「きつと喜ぶよ」と言った。

原作の通信簿でも思ったことだが、やはり彼は「それ」が好きらしい。

迷わず会計に行く彼を見送り、私も後を追いかける。

杖の一振りで可愛らしいプレゼント包みをするウサミ先生を前に、九頭龍クンの横顔はうつすらと微笑んでいるように見えた。

そしてクリスマススイブの夜。九頭龍クンに協力して、待ち合わせの場所だけ教えてもらった私は、チャンドラビーチの木陰に隠れて2人が来るのを待っていた。

「坊ちゃん、このようなところで本当に良かったのですか？」

「ああ、ここにいい」

辺古山さんはうまく私に気づかずにいてくれたようで、静かにその光景を見ることが出来る。野次馬のようで少し心苦しいが、片方の許可を貰っているし、誰にも話す気はない。乱入なんて以ての外だ。

「ペコ…… メリークリスマス」

口をぱくぱくとさせながら最後まで言い切った彼は、勢いよく背後に隠していた包みを差し出す。

それにびつくりした辺古山さんが一瞬硬直し、それから恐る恐る手を出して受け取る。

彼女の顔は夜なのでよく分からないが、きつと嬉しさと真つ赤に染まっているだろう。

俯いて包みと、その中にある可愛らしい“アンティークドール”を目にした彼女は胸の前でぎゅっと抱きしめる。

それから、片手でそれを持ったまま辺古山さんが自身の用意してきたマフラーをそつと、九頭龍クンの首に垂らした。

巻きはしない。ここが南国だからだ。

「一緒に、必ず帰りましょう。そのときには坊っちゃん…… これをお使いください」

「ははっ、きつとあつたけえな……」

お互いがお互いに、泣きそうな震えた声で言う。

手を取り合える距離で、首にかけられた、丁寧に編まれているマフラーを握り俯く九頭龍クン。

「坊っちゃん……… これからも、私を道具だと思ってお使いください。私は貴方の剣となり、盾となり……」

「ちげえだろ。テメーは道具なんかじゃねえ。オレの大切な相棒だ。ペコも大概頑固だな」

「……」

辺古山さんは一瞬黙り込み、しかしすぐに泣くまいと堪え、震えた声で言った。

「貴方がそう望むのなら…… 訂正、します。いえ、違いますね。

これは…… 私の意思だ。坊っちゃん、これからも私と共にあってくれますか?」

「あたりめーだ!」

言い放った九頭龍クンの声は、とつても嬉しそうだった。

そうして認め合う彼らの頭上にふわり、と白い欠片が降ってくる。

「なっ、南国に雪だと……!?!」

「へへっ、風流じゃねーか。きつとウサミが祝ってくれてんだろーよ」
「そう……… ですね。ウサミならこういうこともできてしまいそうです。まったく、粋なことをするものですね」

ちつとも寒くはないのに降ってくる雪に感心し、私はその花卉を1

枚手に取る。

するとそれはキラキラと輝く希望のカケラとなり私の心を暖かくしてくれるのだ。

2人が去った後で、すっかり九頭龍クンにも忘れられていることを苦笑してチャンドラビーチから出る。

するとそこには、訳知り顔で佇む日向クンがいた。

「あれ、なんでこんなところにいるの？ 日向クン」

「こんな夜中に、部屋を訪ねていなかったら心配にもなるだろう？」

その言葉に目を丸くして「え、あ、ごめんね？」と反射的に口にする。

すると彼はふつ、と微笑んでから「帰るぞ」と言う。

「うん……」

「あ、そうだ粕枝」

「なに？ 日向クン」

「メリークリスマス」

偶然目に入った時計を見ると、丁度午前0時を回ったところだった。

あまりにも爽やかに言われてしまったものだから顔が熱くなる。こんなんだから彼は皆から好かれるのだ。

不意打ちにも程があるだろう…… まったく。

「メリー、クリスマス」

仕方ないなあ。

わざとゆっくり歩く私に合わせて、一緒にコテージまでの道を歩む。

そういえば元旦は彼の誕生日なんだよね。

もうすぐ今回の50日間は終わってしまうけれど、次はきつと彼の誕生日を祝ってあげよう。たとえば、覚えていないとしても。

彼と見る南国に降る奇跡は、素晴らしく美しかった。

翌日、部屋の中から予備のパンツが一枚消えていた。

クリスマス 「西園寺 小泉 罪木 澪田」

「えー、クリスマスとかそんな幼稚なものまだやってるのー？」

クスクス、と忍び笑うようにする西園寺さんが言った。

純和風な物や可愛い物が好きな彼女は、西洋の行事であるクリスマスには否定的な意見を持っているようだった。

丁度時期もそれくらいということ、ウサミ先生からは “花飾り

”と “満ジャバ全席” の課題が出ている。

クリスマスパーティーも十神くんたちが企画しているので、おでかけチケットを使って彼女と出かけているときに話題に出してみたのだが…… この通りご機嫌斜めになってしまった。

彼女と付き合うのは中々難しい。

「幼稚っていうより…… なんだろう、習慣化してるから……？ いや、違うなあ」

私が答えに詰まり、悩み始めると西園寺さんは 「それよりちゃんとして七草粥とか、昔からの伝統を守った方がいいに決まってるもん」と唇を尖らせた。

「それに、西洋行事って食べ物も飲み物もサイズがみーんなバカみに大っきくて下品だよー。やっぱり日本のちっちゃくて可愛いお菓子みたいなやつじゃないとねー」

「ああ、和菓子が可愛いのは同感かなあ。夏の水羊羹とか、涼しげで見ても楽しい、食べても美味しいってすごくいいよね。色も鮮やかなんだけど控えめでさ」

西園寺さんのお気に入りはレモン抜きグミって分かっているが、それはこの島に和菓子がいないからだ。和菓子を食べたいのなら作る必要があるが、芸術的なまでの和菓子は作るのも手間がかかるし難しいし、きつと西園寺さんはそういう器用なことはできそうにないから提案したとしても却下されるだろう。

「でも、クリスマスプレゼントを貰うとなんだか特別な感じがするし、そういうのも悪くないと思うんだよね」

「狛枝おねえってもしかして、未だにサンタクロースを信じちやつてたりー？ そんなものいるわけないのにー！」

まあ、いないといえはいないけれど、いるといえはいるんだよね。

世の中、皆サンタクロースになれるのだから。

「いる…… って思ってたほうがロマンはあるよね」

「はあー？」

「とても身近な人が実はサンタクロースって素敵じゃないかな？」

私はメイがサンタをやってくれていたから、今度は私が誰かのサンタになる番なのだ。それが今日ならば、私は西園寺さんのサンタクロースにだってなる。

だって、「サンタクロースなんていない」 って言うときの彼女はとても悲しそうに、自分に言い聞かせるように言うのだ。

そんな表情を見て、なにも行動しないのはおかしい。

「いないっいたらいないんだよ！ サンタなんて、今まで1度も来たことないもんっ！ どんないい子にだって、我慢してたって誰も来てくれなかったんだよ？ だからサンタクロースなんてっ、いーなーいー！」

「西園寺さん？」

断言するように…… いや、自分自身に言い聞かせるように彼女は足を踏み鳴らした。

しかしすぼまった着物の裾のせいとか、その草履のせいとか、うまくバランスをとれなくなって西園寺さんがたたらを踏む。

倒れる前に彼女はなんとか持ち直し、思わず差し出そうとした私の手は宙を漂い、所在なさげに泳いでしまう。

「っ！ 狛枝おねえといっても楽しくない！ わたし帰る！」

「え、ちよ、ちよつと西園寺さん？」

見事に地雷を踏んでしまった。

なぜ日向くんは同じ内容をあんなに鮮やかに聞きだせるのだろうか。

疑問は尽きないがやってしまったことは変わらないのだ。今度なにか埋め合わせをしなければ…… いや。

「サンタクローズなんていない、か」

昔、転生の概念があることから神様か、それに類するものはきつと確かに存在するのだと思っていた。しかし、人を助ける、人の思うような神様はいないのだと、そういう意味で「神様なんていない！」と私は言ったことがある。

そんなときにメイがしてくれたのは、言ってくれたのは……

『あなたとこうして会えたのも、こうして笑っていられるのも、私は神様がくださったものだと思っています。それくらい、私にとっては特別なことなんですよ。私と出会ったのは、凧様にとって特別ではありませんか？』

否定を肯定に、無信から信仰に、ないよりもあったと思った方がより特別で素敵なことだと教えてくれた。

西園寺さんは、日本舞踊の家元だ。だが、彼女が活躍しているのは、その才能で無数の人を弾いてきたからである。

本来ならば家元を継ぐような家系でないはずの彼女が家元をやっているということは、つまりそれだけ妬まれ、僻まれ、そして虐げられてきたということでもある。原作の通信簿だと、味方は父親だけだったとか。

そして彼女は自身を強くし、言葉で責め立て、殻を厚くした。彼女の気の強い物言いは自身を守るために身につけた術なのだ。

だからこそ、似たように虐げられて尚、ただ受け入れるだけになった罪木ちゃんと反発する。似た境遇だからこそ、嫌悪感を抱いてしまいうのだと思う。なにやられてるだけになってるんだよ、と。

でも彼女は表面上を強くしているだけで、内側はとても弱いから。きつとクリスマススの楽しみを知らなかったことも、境遇のことも、悔しきや悲しさでいっぱいになっている。

余計なお世話かもしれないし、もしかしたら勘違いかもしれない。

でも…… やってみなくちゃ、分からないよね？

さっそく私は、その場で電子生徒手帳の地図を確認し、 “ 彼女たち “ がどこにいるのかを調べ始めるのだった。



「ちよつと、やっぱりこんな夜中にはやめない？ 迷惑だつて。日寄子ちゃんももう寝てるかもしれないし……」

「ほ、本当に私がいてもいいのでしょうか。せっかくの喜びも、私なんかを見たら吹っ飛んじやいますよ……」

「ひやつふうううう！ 辻サンタクロースつすよ！ どちらどちらどらー！」

「しーっ、瀧田さん、声大きいって」

深夜。と言つても夜の11時だが、その時間にホテルへと集まったメンバーがいた。

小泉さん、罪木ちゃん、瀧田さん、そして私である。

そこに西園寺さんと辺古山さんを加えれば立派な “ トワイライト組 ” と呼ばれるメンバーの完成である…… 私はそこに入らないんだけどね。

ともかく、私たちが夜中に集まった目的は1つである。

「プレゼントは？」

「用意済みっす！」

「服は？」

「皆さん可愛らしいですう」

「カメラは？」

「バッチリよ」

瀧田さんの横にはデンと置かれた大きな白い袋。サンタクロースか持っているイメージの、あの袋だ。あの中に考えに考え抜いたプレゼントが1つ入っている。

それから、その場にいる皆は無難なサンタクロースの格好をしている。小泉さんはタイトスカートのようになっている露出の少ないサンタ服。罪木ちゃんは瀧田さんに着せ替え人形にされた挙句、1番露

出の多いワンピース型のサンタ服を着せられ、濬田さん自身は大幅にアレンジされ、ライブのような煌びやかなデザインのサンタ服を着ている。

私はいつもと違い、スカートではなくキュロットだ。ベルトの上から鉄パイプを装備し、上の服の長い裾で隠している。白いボンボンのついたケープも羽織っているので1人だけなんだか派手だ。

サンタ帽子にふわふわのうさぎ耳らしきものがついていて罪木ちゃんもなかなかだが、トナカイの皮…… という設定の帽子を被っている濬田さんもなかなか目立つと思う。

小泉さんはカメラを首から提げていること以外は、お手本のようなサンタ服コスチュームだ。

さて、こんな集団の目的は…… 西園寺さんへ幸せを運ぶサンタとなることだ。

集まったところで西園寺さんのコテージ前へと移動し、侵入経路を確認するが……

「隊長！ どこもかしこも鍵が閉まっています！」

「あたりまえじゃない……」

「む、濬田さん西園寺さんは？」

「さつきから窓バンしてる唯吹たちにビクビクしてるよ！」

「ダメじゃん!?!」

思わず大声を出してしまい、慌てて口を塞ぐ。

濬田さんが指差した窓を私もチラッと覗いたが、どうやら私たちの正体には気づいていないらしい。物音に起きてビツクリしてしまっただけのようだ。

しかし、死角となるところで濬田さんが窓を叩いたり、ホラーの演出みたいなのをしているので強く出るにも出られず怯えているようだ。

「うーん、開けてもらおうんじゃないよね」

言った直後、私は自分の発言に後悔した。

「なら強行突破するっすよ！ 丁度風っちゃん鉄パイプ持ってるし！」

ねえ、それってなんてラフメイカー？

「え？ さすがに危ないわよ。普通に入れてもらえばいいって」

「そうですよお…… お怪我なんてしてしまったらあ…… えへへ」

まずい、罪木ちゃんが西園寺さんに頼られる想像してて色々とまづいぞ。恍惚としてるじゃないか！

そりゃあ普段自分より強い人が自分に頼るしかない状況って優越感感じやすいだろうけどさ…… ま、その辺はもっと楽しいことを後で教えればいいだけだし、今はなにも言うまい。

「あのね、小泉さん……」

ゆらり。そう効果音が付きそうな動作で彼女を見つめる。

「な、なに？ 凧ちゃん……」

そう、私はもう覚悟を決めた。

この “ キミだけのサンタクローズ計画 ” は私が提案したのだ。それを達成するために少々の犠牲は致し方ないだろう。

…… この場に辺古山さんがいればこの役を押し付け、いや、譲ったのだが仕方がない。ウサミ先生に謝って修復してもらえばいい。

「こういうのは、お約束っていうんだよ」

「えっ、えー、凧ちゃんまで……」

ちよつとやりにくそうにしている小泉さんだが、結局のところ彼女も西園寺さんには喜んでもらいたいのだ。幸せに、してあげたいのだ。きつと、この場の全員が。

「ふゆう……」

不安気に揺れる罪木ちゃんの横顔を見て、両手で彼女の帽子を前が見えなくなるようにずり下げる。

「は、はわわ粕枝さあん!？」

「大丈夫」

それから、帽子の両端につけられているウサギ耳の上からポン、ポンと軽く撫でた。

「大丈夫、嬉しくないなんてこと、あるはずないよ」

西園寺さんへのプレゼントを決めたのは彼女だ。

ココロンパを出来なくても分かる。分かっってしまう。彼女は 「自

分なんかが選んだ物、嬉しいはずがない」とか、「自分が選んだものだと知ったら、きつと捨ててしまうだろう」とか、そんなことを考えている。

「あんなに一生懸命選んでたじゃない？ ほら、自信を持つて」

「は、はい……」

すー、はーと深呼吸をし、罪木さんが自身の頬を抓る。

そうして自分の心を切り替えようとしたのだ。ここは現実だと。大丈夫なのだ、色々な意味を込めて。

彼女も随分と成長したものだ。

「よし、準備はいいっすか？ 日寄子ちゃんがまたベッドに入っちゃったんで、また窓を叩いておいたよ！」

とんだ睡眠妨害もあつたものである。

西園寺さんがキレて出てこないのが不思議なくらい、質の悪い悪戯だ。

「私は大丈夫だよ」

「よっしカウントするよー」

鉄パイプを構え、窓の下に立つ。ウサミ先生が来る気配はない。気づいていないのか、それとも黙認しているのか、分からないが今この瞬間には有難かった。

「さーん」

西園寺さんのすすり泣く声が聞こえてくる。

どれだけ安普請な作りなんだと文句を言いたいが、今更なのであまり気にしないようにしよう。

「にー」

この聖夜に、得体の知れない物音。そんなんじやあ自身を不幸に思っても仕方ないよね。彼女は怯えている。

しかし、窓ガラスが割れたとしても怪我をしない位置で怖がっているため、このまま本当に強行突破だ。

「いーち」

ふと中の時計を見ると、丁度2つの針が天辺を刺したところだった。

「ぜろー！」

その言葉と同時に全力で鉄パイプを振り下ろす。

ガツシヤアアン！ と、派手な音が響く。だが音が派手なだけでガラス片は比較的近くの位置に落ちているので、上手く彼女を巻き込まないようにはできたようだった。

そして短く悲鳴をあげた後、きよんとした目でこちらを見る彼女に、横から顔を出した仲間たちと告げる。

「メリークリスマス！」

西園寺さんの顔が泣きそうに歪められ、しかし泣き出さずに「はあ？」と返してくる。

こんなときにまで辛辣なんだから、もう。

「キミに笑顔を届けに来たんだよ」

かの歌のようにそう言い、靴のまま部屋に入り込む。

小泉さんは多少躊躇ったようだが、そのままついてくることにしたらしい。

「ちよつと靴のまま入らないでよ！ じゃなくて、なんなの!？」

混乱気味に言葉を捲したてる西園寺さん。まあ、当たり前だよ。私だったら、いきなり窓が割られたら殺されるかと思うし。

「辻サンタクローズしに来たんだよ！ 日寄りちゃん！ むはー、鉄パイプ持ってダイナミックお邪魔しますとか超クールつすよね！」

「は、はあ？ バツカじゃないー？ わたしサンタクローズなんて信じてないもん！」

怒ったように顔をそらす彼女に、私は「窓は後で直すから、ごめんね」と言ってから続けるように言葉にした。

「あのね、西園寺さん。サンタクローズって、いるかいなにか、なんじゃなくってさ、きつと、なる、ものなんだと思うよ」

私がそう言うと、瀧田さんや小泉さんが言葉を続けるように言った。

「今日は唯吹たちが日寄りちゃんのサンタつすよ！」

「あのね、日寄りちゃんに喜んでほしくってさ……」

「こ、小泉おねえまで……」

愕然とする西園寺さんに、罪木ちゃんが一步近寄る。

「こつち来んなゲロブタ女！　なんで部屋入って来てんだよ！」
「……………」

怯えたような、悲しそうな、そんな表情をコロコロと変えて罪木ちゃんはそのプレゼント袋をぎゅつと握りしめた。

「わ、私も、西園寺さんに喜んでほしくって、それで……」
眉をしかめる西園寺さんは受け取ろうとはしない。
だが、それではいけないのだ。

この2人が仲良くなるにはなにか切っ掛けが必要なかもしれない。

だから私は小泉さんと目線を合わせ、西園寺さんに受け取るように言ってもらおうとしたのだけれど、俯いてぷるぷると震えていた罪木ちゃんは涙を堪えるように口を引き結んで顔を上げ、意を決したように手を差し出した。

「受け取ってください！　わ、私だって、拒否されたら悲しいし嫌なんですよお！　だから、せめて、中身を見て決めてください！」

小泉さんも、瀧田さんも、そして西園寺さんも、押し付けるように手を差し出した罪木ちゃんに面食らって驚いている。

勿論、私もだ。なにせ、彼女が受け身でなくなったのはこれが初めてだからだ。

いつもの彼女なら「受け取ってもらえないのは私が気持ち悪いからなんですよね、ごめんなさい！」　くらいのネガティブ発言をしてしまうから。

だから、素直に嫌なことを嫌と彼女が言うことはとても珍しく、そして良いことなのだ。

「は、あ？」

「受け取ってください！　絶対気に入りますからあ！」

困惑する西園寺さんへ押し付けるように袋を渡し、彼女は目線を合わせた。

やはりその顔は泣きそうなのを必死に堪えているようで、不安を押し隠そうとしていることが丸わかりだったのだが、決して西園寺さん

から目を逸らさなかった。

「強く、なったんだね」

「あれが笑顔に変わったたら、きつといい被写体になるわね」

小声で言った言葉に同意する声が1つ。

空気を読んで黙っている漣田さんは、輝く笑顔でその様子を見つめながら抱きつきに行くタイミングを伺っている。

きつと受け入れられたらそのまま2人の間にダイビングしに行くだろう。

「変なもの寄越したらすぐに捨てるからね」

そう言つて奪うように袋を受け取り、西園寺さんは背を向けた。

「……っあの、ど、どうでしょう……?」

沈黙が続き、耐えられなくなった罪木ちゃんが尋ねる。

「……」

彼女は驚いたように、その風呂敷包みの中に入れてある扇を手にする。菖蒲の描かれたその扇はセンスが良く、私も欲しいと思うほどに綺麗だ。

華美というわけでもなく、慎ましやかに描かれたそれをじつと見つめ、西園寺さんはそつと開いたり閉じたり。

「……なんだ、罪木も少しは分かるんじゃない」

「……!」

大事そうに扇を帯に差し、罪木ちゃんを見つめ返した西園寺さん。

「深夜に来た非常識さは許してあげる。あと……ありがとう」

「さ、西園寺さん!」

とうとう堪えていた涙が嬉しさのあまりに決壊し、西園寺さんに抱きつく罪木ちゃん。

「よかったっすね蜜柑ちゃあああん!」

そこにダイブしていく漣田さん。

「うん、いい写真」

泣き笑いする罪木ちゃんに抱きつかれ、満更でもなさそうな微笑みを浮かべる西園寺さんと、その2人をくつつかせるように抱きしめる漣田さん。

その3人を写真に収めて小泉さんは満足そうに呟いた。

「凧ちゃんはいいの？」

「…… 行ってくる」

身長が大きいために一番後ろで、幸せそうな罪木ちゃんを撫で回す。

「メリークリスマス」

呟いて笑う。

大きな風呂敷包みに描かれたハナビシソウと、扇に描かれた菖蒲の意味を知るのはきつと私だけで良い。

パシヤリ、また1枚旅の思い出が増えた。

クリスマス 「終里 七海 式大 十神」

「そういや、ウサミが言ってるクリスマス…… ってなんだ？ 粕枝と七海は知ってるか？」

終里さん、七海さん、私で掃除をしているときにつまらなくなってしまうのか終里さんが言った。

レストランの床をモップで、ガシガシと突きながら遊び始める彼女に私は苦笑いをする。体力のある彼女はいつも森や山、海などで採集に出てもらっているので掃除はさぞつまらなだろう。

でも私がそんな場所に向かったら過労でダウンする未来が見えるので、彼女とこうして作業するのは滅多にないことだ。

七海さんにはゲーム感覚で早くピカピカにできたら、負けたほうがアイスを買ってくると言っている。眠たそうにしながら一生懸命掃除してくれている。

「くりすます……？ 私も分からない、かな。粕枝さんは分かる？」
拙い口調でクリスマスを口にする七海さんが可愛い。そうか、七海さんは知らないのか。そうだよ、だってまだ成長途中なもの。行事なんかは生きていけば耳にしたり、目にしたり、実行したり…… 実際に体験することが多いから普通は知っている。

しかし2人の環境は特殊だから、知らなくても無理はないね。

「クリスマスっていうのは12月25日と、その前日のクリスマスイブを合わせた行事のことだよ。元々は神様の誕生日を祝う日だったんだけど、日本だと25日の朝、良い子にしていると特別な人…… サンタクロースっていうんだけど、その人からプレゼントが貰えるってものなんだ。大切な人にプレゼントを贈ったり、大切な人と一緒に過ごしたりする日だね」

私は両親とクリスマスを過ごせたことなんてないけどね。

いつでもシングルベルだ…… いや、メイや仲間たちがいるか。

「大切な人と……」

「ふーん」

七海さんは誰を想っているのだろうか。

終里さんは眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに言った。

「オレらは良い子じゃねーってことかよ」

ぼそ、と呟かれた言葉に目を瞬かせる。

そうか、彼女はスラムみたいところで育って、そこでたくさんの弟たちのお姉ちゃんをしてたんだっけ。

誘われたからと体操選手の道に入ったのも、全ては弟たちのためだ。

油断していると次の日には誰かが死体となっている。そんな環境で育てばクリスマススを知るはずがないし、自分たちは良い子じゃなかったのかと怒るのも分かる。「あんなに頑張っていたのに報われなかった」と、思ってしまうのも仕方ない。

西園寺さんもそうだが、育つ環境が悪かった人物はどうしてもクリスマスに反感を持ってしまうようだ。

身近にサンタクロースがいなければクリスマスなんて来ないからね。

「あとね、クリスマススは日頃お世話になっている人に、感謝を込めてプレゼントしたりするんだよ」

「プレゼント……」

終里さんはとっくにモップで遊び始めていたが、七海さんもとうとう手を止めてしまった。

私はそれに笑いを漏らしながら窓を拭いていた布をおろし、「ちよつと休憩しようか？」と言った。

その瞬間に終里さんがモップを投げ捨てたのが印象的だった。

そうか、そんなに掃除はつまらないかあ……

うんざりしている様子の終里さんのため、パパッと冷たいレモンスカッシュを作り、3人でテーブルにつく。

「プレゼントって、なにをするの？」

七海さんが両手でグラスを包み込んで首を傾げる。

言ったあとストローからレモンスカッシュを口にして、幸せそうに笑みをもらした彼女にこっちまで幸せになってくるようだ。

「おかわりい！」

「はいはい、いっぱい作ったからどんどんどうぞ」

終里さんの食事スピードが早いのは知っているから、予想はしていた。だから驚きはしないさ。満面の笑みで美味しそうに飲んでくれるし、味わってはいるだろうから構わない。

そのため、彼女用になにか作るときは大量に作る癖ができています。

「大好きな人への日頃の感謝って言っても、単純でいいんだよ。なにかをあげるのもいいし、なにかしてあげるのもいいんだ。その人が好きそうな物をあげたり、あとは小さい子なんかは肩叩き券なんてものをあげたりね」

肩叩き券なんて、今でもあるのかなあ。

「私、日向くんになにかしてみようかなあ」

「終里さんはなにかしてみないの？」

「オレか？ あー、あー？ やるんなら式大のおっさんに、か？」

「そうだよね！ やっぱ終里さんなら、式大くにだよね！」

「お、おい七海テンションどうした……」

胸の前で手を握り、終里さんに迫る七海さんは興奮気味だ。

前はここまで感情豊かではなかったもので、どんどん成長してるんだね。良いことだ。

「オレにセンスなんてねーし、肩叩きでもしてやるか？ いや、でも

おっさんのほうがそういうのは上手いしな……」

「そういうのは気にしちゃうだめだよ。やってあげることの意味があるんだから、きつと式大くんも喜んでくれるって」

式大くんならどんなに強く肩叩きしても動じずに喜びそうだし、軌道修正は無粋だからね。

「おおそっか、ははっ、ならさっそく行って……」

「…… と、その前に掃除が終わってからね？」

「お、おう」

「あ…… 忘れてた、かもしれない」

お掃除に妥協は許さないよ。それが 「掃除が得意」 だなんて口走っちゃった私のこだわりだ。

お掃除はそれから1時間程で終わり、休憩していた分の遅れはシヤ

カリキになっていた私が頑張りました。

上の空状態になっていた終里さんがね、飽きてくるとすぐ遊び始めちやうから苦勞した。今度から広い場所の掃除には連れてこない方がいいかもしれない。

この辺は、作業の振り分けをしてくれている日向クンと要相談だ。さて頑張らないと。私は掃除当番長だからね！

七海さんにはたまに掃除しに来てもらおう…… 眠そうにしているわりに効率がいい。

それから、昼食を挟んで自由行動だ。

「日向くん、今日一緒に遊ばない？」

「ん？ ああ、いいぞ」

七海さんはどうやら一緒にゲームをするようだね。彼女らしいといえれば彼女らしいか。プレゼントとしてもいいかもしれないね。

「おっさーん！ ちょっとビーチ行こうぜ！」

「無？ なんじゃあ、お前さんかあ。またバトルか？」

「おう！」

って、あれ？肩叩きするんじゃないかったか？

「どうした狛枝」

「ん？ うん、ちよつと気になって……」

一緒に自由行動をしようと思っていた十神クンに不審に思われてしまったようだ。

「なにかあったのか？」

「えつとね、クリスマスプレゼントの話をして、肩叩きでもってなつたんだけど……」

「なぜか闘いの話になっていて不思議に思ったと」

「うん」

やはり人と自由行動しているときに、別の人のことを考えるのは失礼だろうか。

「見に行ってみるか？ 俺は構わん」

「え、いいの？」

「2度も言わせるなよ」

「あ、ありがとう」

十神クンったら男前だなあ。

じゃあ、ありがたく追いかけてみるとしよう。

そうだ、終わったら十神クンに肩叩きしてあげよう！ きっと肩凝りするだろうし、頑張ってくれている彼への感謝も込めてプレゼントするとしよう。

ということで、場所は第2の島の、チャンドラビーチだ。

終里さんたちとは違い、私は足が遅いので、合わせてくれた十神クンと共に遅れてビーチについた。

秘境にあるような岩のアーチをくぐり、ビーチに入ってみると衝撃的な光景が広がっていた。

「うおおおおおおおおお！」

「おおりあああああああ！」

既にバトルは済んでいたのか、ビーチに胡座をかいた式大クンに、終里さんが物凄い連撃を叩き込んでいる光景だ。

式大クンの目からは星が飛ぶ幻影が見える…… って、あれ強く叩きすぎなんじゃ？

「太鼓の達人……？」

「いや、あれが肩叩きなんじゃないのか？」

「えっ」

あの連撃が？

攻撃しているようにしか見えないんだけど…… 式大クンも目が

やばいし。

まあ、でも……

「あれが終里さんなりの、精一杯のプレゼントってことなんだね」

「式大も心なしか嬉しそうだな」

え、私には痛そうにしか見えないんだけど。

「私も十神クンに肩叩きしてあげたいなって、思うんだけどどうかな？」

「あれほど強くは叩くなよ？」

真面目な顔でそう言う彼に、笑って手を振る。

「あんなに強く叩けないってば」

「ふん」

顔を逸らす彼の表情は変わらないが、こちらを見ないということ
は、冗談を言って恥ずかしくなってしまうのだろうか？

「俺の部屋に行くぞ」

「…… え？」

「なにを変な顔をしている。肩叩き、するんだろう？」

「あ、そういうことね」

びつくりした。いや、変な意味を想像するなんてことは…… 私は
そこまで不純じゃないぞ。そうそう、ホテルのロビーなんかでやると
思っていたからびつくりしただけだ。そのはずだ。

「他になにがある？」

「いや、なんでもないよ」

2人で部屋に向かい、そこで十神クンの肩叩きをした。

十神クンは普段動き回っているせいも随分と凝っていたようだ。

しかし、殆どが脂肪だと思っていたが、よく見てみると筋肉もすこ
い。これだからあんなに運動神経がいいのだろうか。

「お客さん凝ってるね？」

「ふん」

満更でもなさそうな十神クンと、その日1日はまったり過ごすこと
にした。

クリスマス 「ソニア 田中 左右田」

「明日はクリスマスですね！」

「ん？うん、そうだね」

第2の島、図書館で適当な推理小説をパラパラと捲つてるときだ。唐突に上から声が降つてきて、その弾むような声に私は生返事気味に答えた。

あまりに嬉しそうだから誰かデートにでも誘うのだろうか。そう思つて本を片手に2階へ上がる。

そこには様々な動物の本と、オカルトな本を広げて同時読みを繰り広げているソニアさんがいた。

片方は英語、片方はドイツ語と同時に読んでいたら言語がごつちやになつてしまいそうなラインナップだが、彼女はなんなく頭に入れていくようで次々とページを捲っている。

この王女様非常にハイスペックである。

「ソニアさんの国もクリスマス、やるの？」

「わたくしの国では色々な宗教派閥が争っているので中々公にはできませんが、一部ではマカngoがソリを曳ひいてサンタクロースを連れてくると言われていますね」

いや、だからマカngoってなんだよ！

婚姻のときに見せ合つたり、動物のようだったり、いろんな種類がいるようであったり、やはりマカngoの正体が分からない。どんな動物なのか気になる次第である。

原作では、この島の名前がジャバウオックだったりすることからマカngoはスナークみたいなものだと思つていたけど、これでますます分からなくなつてしまつた。

欧州の文化は複雑怪奇です……

「さ、サンタはプレゼントをしていくのかな？」

「いえ、我が国でのサンタクロースは金色の衣装を纏つて、飾つてあるパンツに現金をねじ込んでいきます」

突つ込みどころしかない件について。

「恋が始まりそうなきときは本人のパンツに直接現金をねじ込んでいくとか……」

本当にこの人の国はどうなってるんだ。

そんな現金なサンタ嫌だよ。子供の夢をなんだと思っているんだ。

「しかし、良い子でなければ黒服を着て臍物をプレゼントしていくサンタクローズも世の中にはいるとか…… なかなか奥が深いものです！」

そう言う彼女の手元には英語の本。

あれは都市伝説特集のようだ。黒服サンタは確かにオカルト話で存在しているけれど、聖夜にそんな物騒なことをされたらと思うと怖すぎる。

恐らく口裂け女のように、子供に良い子でいてもらうための方便かなにかだろう。

「まさか臍器提供までするサンタがいるとは思いませんでしたね！」

ビックリです！」

違う、そうじゃない！

明らかにホラーな話なのにどうやったたらそんな解釈になるんだ？

それにあの話では臍器プレゼントのために前の子供の臍器を抜いているって話だし、どちらにせよホラー映画的なサンタには変わりないんだよ。

「そうそう、日本ではあの○ツクの教祖が、改宗しようとするベツドの下から這い出てきて肅清されるのですよね！」

「それ以上いけない！」

やめて！ その話はいろんな意味で危なすぎるからやめて！

「そ、それよりさ…… ソニアさんは誰かにプレゼントしたりするの？」

「わたくしですか？ そうですね…… 田中さんのハムスターさんたちにプレゼントを贈ろうかと思っています。いつも可愛らしいお姿を見させてもらっていますから」

そ、そこは田中クンにプレゼントをあげるわけではないんだ。あれ、意外とソニアさんって天然か？ もっと田中クンのこと好きなん

だと思っていたけれど、今はそうでもないのかな。

左右田クンに関しては言わずもがなだけれど……

「田中クンにはなにかあげないの？」

「…… そうですね、なにか差し上げても、いいのでしうか」

ハムスターにプレゼントをあげるのは良くて、なぜ主人の方にあげるのは迷うのだろうか？

これは、なにか秘密がありそうだね。

「ほら、日頃の感謝とか。ソニアさんって結構田中クンと一緒にいるから、てつきりあげるものだと思いますな」

「そう、思われてしまいますか？」

「うん？ どういうこと？」

ソニアさんはどこか物憂げな表情で目を伏せている。

震える金色の睫毛が芸術的で、なぜだか人を逸脱しているような感覚を抱いてしまうほどだ。

触れたら折れてしまいそう、とはこのことなのか。

普段の元気な姿からは想像もつかない高嶺の花然とした姿に、私はなんとなく彼女の考えを察してしまった。

「悲劇にはならないと思うけどな」

その言葉に反応した彼女は、大きな不安を抱えているようだった。

「つまり、立場違いで引き裂かれてしまったら可哀想だど？」

「っ違います！ 確かに、少しだけ距離は置いています、それはわたくしのためなのです」

そうか、引き裂かれるのが嫌なのは彼女の方なのか。

同世代の “ 友達 ” という立場の人間ができたのは、この島に来てからが初めてなんだったっけ。島に来てからがあまりにも楽しくて、友達として好きになって、離れたくないんだね。

そうか、そうだよね…… あと少して今回の修学旅行は終わる。

今の彼女にとっては、初めてで、最後の修学旅行になるかもしれないわけだ。

仲良くなってしまうたら、離れがなくなってしまうたら、もし、恋でもしてしまえば、待っているのはロミオとジュリエットのように

な結末。悲劇あるのみ。きつとそんな不安を抱えているのだ。

だから距離をとって、特別を作らないようにしている…… とか？
だから自分のため、なのか。

「もしかして、左右田クンに対してツレないのもそのせいだったりする？」

「…… 悪い方ではないんですけど、あの人、わたくしのことを見てくれないじゃないですか」

一瞬だけ目を伏せ、すぐに困ったような笑みを浮かべる彼女に、既に憂いは見えない。本当に憂いが消えたのか、それとも王女様お得意のポーカーフエイズなのか。答えなど、言わずとも分かっってしまうというものだろう。

「ああ、左右田クンはソニアさんのこと、王女様として持ち上げてばかりだからね」

「わたくしはクラスメイトです。クラスメイトには上下関係など存在しないはずですよね？ そういうドラマティックな関係も憧れますが、わたくしは皆さんと平等に扱って欲しいんですよ」

そのわりには、たまに王女様の言動が出てくるけどね。そちらは癖だと思っけれど…… ずっとやってきた言動はなかなか直すことはできないものだから仕方ない。

「やらない後悔よりも、やる後悔なんじゃない？ 行動を起こさないとよりは起こしてしまった方が気も楽だし、もしかしたら吹っ切れちゃえるかもよ？」

いつも元気で、良い意味で空気を壊してくれるソニアさんに、そんな悲しい顔は似合わないよね。

こう言うとなんだか私がタラシみたいだけれど、私のクラスメイトったら皆可愛くて性格も良いんだから、甘くなってしまうのも仕方ないと思う。

「それにね……」

そんな風に思い悩むのもいいけどさ、その姿って……

「そういう悩みってさ、凄く王女様らしいよ？」

「っそ、それは！」

王女様扱いされたくないって話なのに、本人が王女様モードじゃ説得力がないかなあ？

「ふふ…… 凶星だね？」

普通の女の子という生き物は素直に実直に、そしてときには一人で突っ走ってしまったたりするものだ。

それでもときには悩んだりするだろう。だけれどそれは「どうしたら喜んでもらえるか？」だとか、「迷惑じゃないだろうか？」とか、行動を起こすことを前提としたものだ。

「立場の違いで悲しませてしまうのでは？ 苦しむのでは？」なんて悩みは二の次でいいんだよ。

「ソニアさんはもつと素直になればいいんだよ。後悔は後からしかやってこないんだから、今から構えてどうするのさ？」

悩める乙女な姿は相手の男ひとだけに見せるべきものだ。

友達だから相談には乗るけれど、私としてはそんな悩みがあることこそが少し羨ましいところである。

引き離れたことを後悔したことはあるけれど、私はメイを好きになって後悔したことなんてないからね。

「そう、ですね。力を入れすぎていたみたいです。よおし！ なら早速田中さんに贈るものを考えなくては！」

そう言つて本を片付け、図書館を飛び出していくソニアさんを笑顔で見送りハツと気づいた。

「あ、左右田クンを応援したつもりだったんだけど……」

失敗してしまった。ごめん左右田クン。



あれから、少し。

どうやらソニアさんに火がついたらしく、すぐに田中クンと出かける切っ掛けを作ったようである。なんて行動の早い子だ。

そんな2人組と1の島の島の砂浜ですれ違い、私は誰を誘って遊ぼうかと考えていたところであった。ヤシの木から手が生えて、引きずり込んで来たのは。

「ひいひい!?　とうとうおばけにまで目をつけられっぐう!」

首が!

「オレだよオレ!　妖怪扱いするんじゃないぞ!」

「あ、オレオレ詐欺は間に合ってるよ」

「ちげーよ!　オレだよ!　左右田和一だっつーの!」

うん、今日もツツコミお疲れ様です。

「ところで、そんなにヤシの木に引っ付いてどうしたの?　妖精にでもなった?」

「なんでそーなるんだよ!　ほら、あそこに麗しい姿でソニアさんが散歩してんだろ?　……　余計なものいるけど」

その視線の先には、相変わらず楽しそうに牧場の方へ向かうソニアさんと、いつも通り難しい言い回しを平然としている田中クンの姿。

田中クン自身は、家畜という存在を憂いている部分があるからか牧場を好かないようだが、この島ではわざわざ屠殺せずとも食材が手に入るので悲しい動物の姿は見ずに済むし、たまに向かつては餌付けしているようだ。

今日はそれにソニアさんもついていくのだろう。

ハムスターにプレゼントと言っていたから、それもあるだろうし。

「おっと、狛枝ア、ちょっと協力してくれねーか?」

「え」

まさか巻き込まれるとは。

「……　で、田中クンだけ引き離して欲しいと」

「ああ」

「無理だよね、きつと」

「な、なんでだ!」

いや、そんな意外!　みたいな顔をされてもねえ……

「そりゃあ、私で田中クンが釣れるはずないしね。キミが頑張ってソニアさんを誘うか、空気読まずにあの中に突っ込んでくればいいじゃ

ない?」

「おい、なんでオメーはオレにだけ辛辣なんだよ」

「はあ……」

思わず呆れたような目を向けてしまつて急いで取り繕い、首を振る。

「そもそも、今のキミじゃあソニアさんは振り向いてくれないよ?

考え方が違うし」

左右田クンつてチャライ見た目なのに、喋ると残念なところが目立つから余計になんというか…… いじりたくなつてくるよね。まあ、相談くらいはちゃんと乗るけど、そういうのは超高校級の相談窓口ウツに持つて行つて欲しいよ。

「ど、どういうことだア?」

「いや、それは自分で考えるべき…… あ」

「ん?」

後ろを振り向きそうになる彼に、慌てて静止の声をかけ、こちらに集中してもらう。

「いや、なんでもないよ…… ほら、キミつていつも王女様王女様つて言つてるからさ…… もしかして彼女のが好きなんじゃないかって、王女様だから尻尾振つてるだけなんじゃないの? って」

「つちげーよ!」

思つていたよりも大きな声で反論されてびっくりしてしまった。

それは彼の後ろにいる “ 人たち ” も同じようで、ジャリと砂を擦る音がする。

しかし、私の言葉で火がついてしまつたらしい左右田クンは止まらない。

「ソニアさんはソニアさんだろ! 王女様じゃなくなつたつてオレはついてくつつの! ただなんつーか、いつもキラキラしてるし、喜んでくれると思つてだな……!」

「ふつ、不器用な奴だ。彼のハシビロ公でも貴様よりは分かりやすいぞ?」

「んなあ!?! なんでオメーがここにつて、そ、ソニアさん!?! なぜここ

にいらつしやるんで!」

ともかく、ニュアンスが違ったけど、ハシビロコウだよね? 公
じやなくて。あ、違うか、もしかして敬称の意味での公? 鳥に?
いや、威圧感ある鳥だけどさ……

ようやくと真後ろに来ていた2人に気がつき、左右田クンが顔を
真っ赤にしている。そりゃあ、あれだけ大声を出していたらバレるっ
てもんだよねえ。

それにしても、彼の顔の赤さは怒り故か、それともさきほどの告白
のような言葉を聞かれて恥ずかしいが故か…… 答えは1つだけか。

「左右田さん……」

「は、はいっ! なんでしょう!」

「よきにはからえ! です」

普段よりも王女様然とした顔でするりと手を伸ばし、厳かに言い
放った彼女に思わず私まで膝をつきそうになる。なんで田中クンは
平然としていられるのだから。

左右田クンは呆然としていたからか、膝をつくこともなかった。

「…… え? え?」

「遊ぶのなら皆で、の方が楽しいですよ。付いてくるのであればお
好きにどうぞ」

「貴様1人増えたところでやることは変わらん。これからサタニマス
として魔界フェスタを開くのだ。さぞや恐ろしい宴になるだろう!」
えっと、今回ののは翻訳できないや。サタニマスはなんとなくクリス
マスの言い換えだと思っけれど、魔界フェスタってなにさ。

うわあ、気になる。

「あ、私も行ってみたいかな? ほら左右田クンも」

空気を読まずについて行ってみることにした。

「そ、ソニアさんが…… ソニアさんが……」

そうだね、デレてくれたね。

感極まっている彼を引きずって一緒についていき、もふもふフェス
ティバルを楽しんだのは別の話……

クリスマス 「花村 モノクマ ウサミ」

「辺古山さーん、ひだりひだりー！」

「ペコ！ 右斜め前だ！」

「ペコちやーん！ そこ！ そこつすよお！」

「むー！ むー！」

12月25日の昼間、私たちは揃って砂浜にいた。

ウサミ先生の提案でスイカ割りをすることになったからだ。

現在スイカ割りに挑戦しているのは辺古山さん。九頭龍クンのネクタイを頭に巻いて目隠しにし、その手には竹刀が握られている。

彼女はどうかやら九頭龍クンの指示にのみ従っているようだが、それは罠だ。肝心の彼は傍に埋められたモノクマへ誘導しているからね。

このアイランドモードだと思われる平和で穏やかな島では、モノクマへの暴力で罰せられることがない。ウサミ先生がモノクマに勝った世界なので、そんなルールは追加されてないからだ。

だからこうして、喋れないようにされたモノクマ目掛けてスイカ割りをしても全く問題がない。

それに今のこの状況は、タチの悪い悪戯を仕掛けようとしていたモノクマが悪いので同情の余地は一片もないのだ。

式大クンが押さえつけ、左右田クンが口を塞ぎ、西園寺さんや瀧田さんが渾身の穴を掘って嬉々として埋める姿はとても輝いていた。

「はあっ！」

「むー！ ー！ ー！ ー！」

機械なのでさすがに割れることはなく、どうやって作っているのかわからないが、モノクマは大きなタンコブを作って前のめりに首を倒した。

砂浜からは頭だけが出ている状態となっているので気絶している

かどうかは分からないが、間違いなくダメージは負っているだろう。
「む、すまない。間違えてしまったようだな」

「もー！ ペコちゃんったら冬彦ちゃんの指示しか聴いてないんすもん！」

「す、すまない……」

澤田さんが口を尖らせて抗議すると彼女は、九頭龍クンの声しか聞こえてない事実に関顔を赤くして謝罪した。

「はあっ！」

「お見事でちゅー！」

スイカ割りは失敗してしまっただが、目隠しをとった辺古山さんがスイカを宙に上げ、一刀両断する。

スイカは砕けることもなく、綺麗に割れてウサミ先生がキャッチした。

それからウサミ先生が杖を振るとその場に全員が入れそうなほどのレジヤシートが現れて、いつの間にかスイカも人数分に分けられていた。相変わらずすごい魔法である。

「ええと、そろそろ夜の準備をすべきかな？」

塩を2つまみスイカにかけて味わったあと、片付けムードになったので声を漏らす。

それに答えたのは、近くにいた小泉さんだった。

「そうね。そろそろパーティの飾り付けもしないと」

今日は12月25日。つまりはクリスマス当日である。

これはなにかしなければ、と企画されたのが平和なパーティである。昼までは遊び、その後皆で準備に入るのだ。皆で、だ。私1人で掃除するわけじゃないのだ！

それに、毎日交代で掃除しているから旧館もさほど汚いというわけではない。すぐにでも使う、となるとなんとも言えないが、2時間もあれば飾り付けも掃除も終わってしまうだろう。

ということ、全員が一旦ホテルに向かうことになった。

「あ、ねえウサミ。なにか大きなプレゼントボックスはないの？」
そう言ったのは小泉さん。

「…… どうせ大きなボックスを用意するなら、誰にどのプレゼントが当たるか試すのも面白そう、だよな?」

「ああ、いいなそれ。プレゼント交換もいいけど、そういう形式にもしてみるか? 十神に相談してみるよ」

七海さんがその話に便乗し、日向クンが淡い笑みを浮かべて十神クンの元へと向かっていく。

2人のリーダーはきつと素敵な企画にしてくれるだろう。そう、信頼してるよ。

「狛枝さん、ちよつといい?」

「どうしたの? 花村クン」

「買い出しを手伝ってほしいんだよ。ぼくは仕込みで忙しいから、足りなくなりそうな食材を買ってきてほしいんだ」

「分かった。あとでメモをくれたら行ってくるよ」

そうやって横並びに歩く。

こうして一緒にいるとすごい身長差だなあ。

「そうだ、届かない調理器具とかあったら教えてよ」

「あんまり身長の話はしないでくれる?」

「まあまあ……」

身長の話題が地雷なのは花村クンもだったようだ。九頭龍クンといい、別に可愛いからいいじゃないと思うが。

いや、可愛いと言われるのがダメなのか。

「それじゃあミナサン! ホテルのレストランにプレゼントボックスを置いておくので、その中にお好みのプレゼントを入れてってください! あとで旧館まで運び、プレゼント交換会になりまぢゅ!」
どうやら、プレゼントボックスの件は可決されたようだ。

全員、ウサミ先生の用意した巨大なボックスに自身のプレゼントを詰めて作業に入っていく。

女子は旧館の掃除に飾り付け。式大クンなど、男子はクリスマスツリーのような大きな道具の設置。花村クンは料理の仕込み。日向クンと十神クンはそれぞれ手伝いながら現場監督だ。

「それじゃあ、ちよつと買い物に行ってくるけど…… 他にもなにか

必要なものはあるかな?」

「紙のリング作ったりするから折り紙と、飾り用に風船とかどうかしら」

「小泉おねえにさんせーい!」

「日寄子ちゃんは相変わらずすねえ」

花村クンのお使いついでに女子の方で必要になりそうなものも確認する。

ああ本当に、全員でパーティの準備をするっていいなあ。こんな広い場所を一人で掃除することを考えたらゾツとするよ。

「よし、じゃあ行ってくるね」

「い、いつてらっしやいですうー!」

脚立の上でハタキ片手に言ってくる罪木ちゃんに手を振る。

あ、ほら…… そんなに勢いよくこつちを向くと脚立が。

「あ、ふああ!?! い、痛いれす…… あ、ひゃあああ! み、見ないでくらさーい!」

脚立が倒れて落ちた罪木ちゃんは、相変わらず不思議なポーズで固まってしまう。立っていたはずの脚立がなぜか足を空に向けて設置され、その中にお尻を挟んでしまった罪木ちゃんも同様に、宙に向けて足を広げてしまっている。後手にハタキを持っていたために脚立に引っかけり、腕を上げることも難しそうだ。

奇しくも転ぶと扇情的なポーズになってしまうのはなぜなのか、苦笑しつつ、彼女を助ける小泉さんたちを横目に買い物へ出かけることにした。

ロケットパンチマーケットまではすぐだ。

さっさと買い物が終わらせて掃除に参加しなければ…… そうしてノボリのそばを歩けば、突風が吹いてそれが倒れてくる。そのうえノボリの棒部分だけが外れて頬を掠めて飛んで行くわ、「クリスマスセール中」の文字が踊る垂れ幕が外れて首を絞められるわ、マーケットに入るまでに不運に遭いまくってしまった。

「は、え?… なんでこんなに……」

不運続きはマーケット内に入ってからも続いた。

棚が倒れてくるわ、ペンキを被りそうになるわ、倒れてきた調理器具類と、顔のすぐそばにビイーンと音を立てて刺さる包丁に冷や汗が流れるわで散々だ。

幸いお使いした物に影響はないが、あまりにも危険すぎる。

不運にも捲れた床に足を取られ、転んでしまったときも荷物は背中
でキャッチしたので無事だ。

「不運すぎる……この、私が？」

この不運はさすがに不自然すぎる。

なにかこれから起きるといえるのだろうか？ 僅かばかりの不安を
覚えながらも、私にはただ進むことしかできないのだが。

「はあ……」

予定よりも大分時間がかかってしまったが、荷物は無事だ。

怪我をして頭は痛いけれど…… まさか空からジャバ魚が降つて
きて刺さるとは思わないじゃないか。

「あとで罪木ちゃんに手当てしてもらおう……」

そうして旧館に入るも、とても静かだ。

「あれ？」

先ほどまでは確かに賑やかな声を響かせて掃除していたはずだ。

まさか私がない間に掃除が終わるだなんてこともありえないし、
どこにいったのだろうか？

ひとまず厨房に顔を出してみると、そこには花村クンだけがいて、
忙しそうに料理の仕込みを続けていた。

「ねえ花村クン、皆どこに行つたの知ってる？」

「あ、狛枝さんおかえりなさい。皆はレストランに行つてるよ。なに
かあつたみたいでさ、ぼくは仕込みがあるから行けないけど、見てき
たらどう？」

なにかがあつた？

やはり、なにかよくないことでもあつたのだろうか。

脳内に過るのは死体発見の場面。しかし、これはアイランドモード
のはずだ。皆で掃除していたのだから1人になる人なんていないし、
皆信頼を築いている。そんなことが簡単に起こるはずがない。

首を振って悪い方へ行こうとする思考を正し、「うん、行ってみるよ」と笑う。

引きつってしまったような気もしたが、まあいい。すぐさま踵を返し、頼まれた食材だけを彼の届く位置に置く。

「早めに戻ってくるよ。だって今日は楽しい楽しい、クリスマスパーティーなんだからね」

そうなるはず、なんだから。

無性にする嫌な予感を振り払いながら足早にホテルへ向かう。

段々と早くなつていく歩みがとうとう小走りにまでなり、ホテルロビーは通らずに横の階段から直接2階のレストランへ駆け込んだ。

「…………… ああ、そういうこと」

目の前に広がった光景は、その場所には、50cm四方の大きなプレゼントボックスが “ 6つ ” ある光景。

そのボックスの全てが白黒に塗られて放置されている。

ボックスを塗った際に溢れたのか、ホテルのレストランには白黒のペンキがぶちまけられてしまつて悲惨な状況だ。

ボックスの前には愉快に笑うモノクマの後ろ姿。その奥には、私の登場に驚きつつ、モノクマに憤る皆の姿。

「粕枝！」

「なにが、あつたの？」

予想はついている。ついているが、一応状況確認くらいはしなければ。

「そ、それが…… プレゼントボックスをどうしようかって見に来たらもうこうなつてて……」

小泉さんが強張った声で言い、モノクマを睨む。

「オマエラのプレゼントはこの中の1つにしか入ってません！ あとは全部爆弾なのです！ うぶぶぶ、ぶひやひやひやひや！ リア充なんて爆発しやがれ！」

「ど、いうことなのです……」

落ち込んだ様子の子ニアさん、明らかにテンションがガタ落ちしている瀧田さん、憤りを示している男の子たち……

「爆弾と言われると迂闊に手を出せんからな……」

苦々しげに舌を打つ十神クン……

プレゼントボックスに目をやってみても、決して見分けはつかない。

「……」

ああ、そうか。

だから、なのか。

そつと目を瞑り、ほくそ笑む。

「こ、粕枝さん？」

このために不運が来ていたのか。

だったら、私は私の才能を信じるだけでいい。

一歩一歩進み、横並びになったそのボックスを見比べてみるが、やはり分からない。分からなければ、勘で、この才能を信じて、選べばいい。それだけの話なのだ。

「私はね、幸運なんだ」

覚えのある台詞を謳うように言葉にし、1つ、ボックスに手をかける。

「おい、迂闊なことは……」

「こういうときに限っては、私も役に立てるね」

こういうときにしか役に立てないとも言っけれど。

制止しようとする十神クンの声を遮り、ボックスを潔く開いた。

「…… ほら、当たり前だよ」

開いたボックスの中には、それぞれが用意したと思われるプレゼント袋が入っている。色とりどりのそれをかき分け、自身が入れた分を探して取り出す。

そうすることでこれは安全だと皆に伝えるためだ。

「な、なんと！ くそう！ 持つてけドロボー！」

「いや、元々あんたのじゃないでしょ……」

モノクマの言葉に呆れたように言う小泉さん。

彼女が思わずといった様子で呟くと、それを皮切りにして皆も緊張を解いたようだ。次々と喋り始め、瀧田さんなんかは私に向かってル

パンダイブしてくる始末だ…… 満更でもないけどね。

「ふん、無茶をする……」

「あんまり心配させないでくれよな」

「ほら、私って幸運しか脳がないから……」

自嘲気味に言った言葉に、日向クンの目が鋭く光ったような気がした。

「それは違うぞ！」

「…… え？」

困惑の声をあげれば、凜々しい顔で台詞を言っていた日向クンが、表情を柔らかくさせ、優しい笑みを浮かべる。

「お前は掃除だって真面目に頑張ってくれるし、皆を励ますのも上手いし、いろいろやってくれてるだろ？ 俺たちだって頼りにしてるんだ。そうだよな？ 十神」

「…… まあ、信頼はしている」

「…………… そっか」

そうだね、あんまりネガティブな発言はするもんじゃないね。

日向クンに例の台詞を言ってもらえたのは嬉しいけれど、ここで言われるのは予想外だったかな。

学級裁判のないアイランドモードであろうことから、聞く機会なんて来ないものだと思っていたよ。

「み、ミナサン！ 大丈夫でちたか!？」

「あ、ウサミじやーん！ どこ行ってたのー？ わたしたちのピンチに來ないとか無能もいとこだよねー。ほら、このクマ見張っておいてよー！」

そういえばウサミ先生は来るのが遅かったね。

「あ、あとね…… これ以外のプレゼントボックスは爆弾が入ってるらしいから、処理をお願いしたい…… と、思うよ」

「冥界の奥底に封印するべきだろう。俺様がやってもいいが、これから闇の宴があるので……」

「はわわわ！ わ、分かりました！ パーティが始まるまであちしが見張っておきまぢゅ！ それと、これの処理も任せてくださちゃい！」

そう言つてウサミ先生がモノクマを引きずつていく。

「あー！ なにするんだよお！ リア充爆発させるんだー！」

「アンタはこつちで大人しくしてなちやい！」

「妹が冷たいー！」

「アンタの妹になつた覚えはありまちなん！」

どこことなく哀愁が漂っているようなモノクマと、怒り心頭なウサミ先生を見送つた私たちは誰と言うでもなく、そのままパーティの準備に戻つて行つたのだった。



パーティは滞りなく進み、深夜。

どこからともなく聞こえてくる花火のような音に釣られ、私は一人パーティを抜け出して砂浜までやってきていた。

「ウサミ先生……とモノクマ」

そこには、モノクマと偽プレゼントボックスを括り付けたロケット花火を打ち上げる先生の姿があつた。

夜空にはボックスの中の爆弾も含め、大輪の花が咲き誇るように火花が散っている。

処理はどうするのかと思つていたが、大分ダイナミックな方法で処理していたらしい。

「つふ、汚い花火だぜ……でちゆ」

その台詞が風に乗って聞こえてきて、思わず吹き出してしまう。

その音に気がついたのか、ウサミ先生はキョロキョロと辺りを見回し、私を捉えた。

「あ、み、見られてしまいまちたか」

「うん、なにか大きな音が聞こえるから気になつてね」

言いながら隣まで来ると、最後の花火を打ち上げるところだった。モノクマの叫び声がドップラー効果でどんどん遠くなつていく。

それを見届けた後、彼女はどこからともなく取り出した杖で一振り……すると、淡いピンク色の光が雲間を貫き、なんと雪が降り始めた。

「え、寒くないのに……ここ、南国だよね？」

「うふふ、あちしからのクリスマスマスプレゼントでちゅ」

悪戯が成功したかのように笑う先生に、私も釣られて笑う。

「あはは、おつかれさま。ありがとう、可愛いサンタさん？」

「えへへ、喜んでもらえる先生冥利に尽きまぢゅね」

1人と1匹で静かに海を眺め、空からもたらされる奇跡を手にとってみる。雪はふわふわとしていて、少しだけ冷たい。

「らーぶらーぶ、できまぢゅたか？」

そうして2人でいると、ウサミ先生が確認するようにそう言った。

「うん、おかげさまで。平穩で安全で……そして退屈だけれどつても暖かい1日だったよ。ありがとう、先生……これからも、よろしくね」

「はい、でちゅ」

そう言つて笑いあう。

来年もらーぶらーぶでいられますように。

いつまでも私たちの先生でいてね。

大好きだよ、ウサミ先生。

No. 21 『入院』―案内―

大分手間取ってしまったが、罪木ちゃんからは無事に許可が貰えた。

今度なにか埋め合わせでもしようかな。

そして今、お昼を食べた後の時間なのだが、病院の待合室で3人を待っていた。

すると、真っ先に十神クンがやってきた。

「早いね」

「ふん」

「もしかして心配してくれてた？」

「俺と違って不安になりやすいお前のために来てやってるんだ。少しは感謝しろよ」

「あはは、勿論」

不安になってるのは罪木ちゃんの方だけどね。

「待たせてしまっただろうか」

「よお、狛枝。怪我は痛まねーか？」

その後すぐに2人が到着する。

息を切らせている九頭龍クンと、まったくそんな様子のない辺古山さんが対照的だ。

「ううん、皆すぐに来たからびつくりしちやったよ。怪我はもう痛まないし、大丈夫。さ、行こうか」

3人を促して病院から出る。

意識を取り戻してから、初めての外出だ。第3の島も初めて目にすることとなる。

病院から一步踏み出し、周りを見渡す。

なんというか、すごくハリウッドというか、アメリカな雰囲気のある島だ。住居というか、廃墟が沢山あり、サボテンが至る所に生えていて、いかにもカウボーイやガンマンがいそうな場所である。

荒野のような雰囲気のある地面に、そこらをコロコロと転がる草、タンブルウィードが転がっている。

あの転がる草つてアニメ特有の演出の一種なのかと思いきや、実は実在する植物なんだよね。種が出来ると枯れて、転がりながら種を撒く植物なんだそうなの。

前に1度アメリカに行ったとき、2人目の父さんに教えてもらった。

勿論、アメリカに行つてなにもないわけもなく、1回銀行強盗の人間にされて太腿を撃たれたりした。あれは痛かったなあ、うん。治るのに暫くかかったし、帰ろうにも歩けないから苦労した。強盗？自分で仕掛けた爆弾で自爆してたよ。私は爆風でさらに怪我しただけで済んだけど。本当幸運で嫌になる。

「どこから案内してくれるの？」

一通り外を眺めたあとに九頭龍クンに尋ねる。

今回案内役に頼んだのは2人だから、十神クンには訊かない。彼は付き添いだからね。

「ああ、そうだ。テメーにも見て欲しいモンがあんだよ」

そう言つて彼が先導して行った場所は、病院の隣に位置する「映画館」だ。

隣、といつても田舎特有の隣家まで何kmみたいなものなのでそう近いわけではない。

周りも、荒野と廃墟ばかりで見た目にも楽しくない光景しかないうえ、調べても基本なにもなかったり、モノミの隠れ家になってたりしただけで特に収穫はなかったらしい。

でもそうか、映画館か。だけれど、あそこつて意味ありげでなにもないんじゃないか？

「え、映画館？…なんで？」

「またモノクマが変なモンを作つたらしくてな、全員見るように誘われたんだが一旦断つたんだよな」

「ああ、迂闊にモノクマが制作したのを見るのはよくないだろう？」

九頭龍クンと辺古山さんが苦々しげにそう言う。

これは、こないだのことが教訓として活かしているのかもしれないね。

「それで俺と日向に相談が来たわけだが…… お前の意見も訊くべきだという結論になった。全員の意見を一致させる必要がある、とな」なるほどね。私はあの映画が動機でもなんでもなく、だからのだって知っているけれど、他の皆は当然知らないわけだ。

だから、前みたいに関機なんじやないかと心配しているんだろう。悪魔の証明を持ち出して全員で見るよう勧めたのは私だし、これはちゃんと見るべきだろうなと思う。

…… 内容がくだらなすぎて、原作の^{わたし}狼枝は150万出してもいいから見なきゃ良かったと言っていたが。

それを知っているからあまり気は進まないが、致し方ない。

「まあ、動機かもしれないっていうのなら全員で見るべきだよね」

「やっぱりそう思うか？」

「日向の話によると、見ないなら150万円のステッカーを買うように言われてしまったらしいな。私たちはそんなこと言われなかったように記憶しているが……」

「俺もそんなことは言われなかったな」

「あいつからかわれてんだよ……」

どうも話を聞くに、日向くんはモノクマにからかわれることが多いらしい。きつと反応が面白いからだよね。私が左右田くんをよくからかうのと同じ理由だ。

「なら、案内してもらった後にでも皆を誘おうか」

「ああ、そうすることにしよう」

中に入るとモノクマに映画を勧められるということで、私たちは次の場所に向かうことにした。

荒野は次第に建物の数が増えて行き、商店街のような物が見えてきた。ところどころにチカチカとネオンのようなものが見えて、電気製品が沢山置いてある場所に出る。なんだか、南国の島というには似つかわしくない場所だ。

「左右田くんが喜びそうな場所だね」

「ああ、他の場所は調べても良い物がなかったが、この場所には」人類史上最大最悪の絶望的事件 “とやらの概要の入ったパソコンが

あった。眉唾ものだが、モノクマのことといい、記憶を失っているらしいことといい、無視はできないだろうな」

へえ、十神クンは嘘情報だつて決めつけずにちゃんと考察してるんだ。視野が広いんだね。

日向クンはともかく、左右田くんなんかは信じてなかったと思うから、殆どの人は信じてないものだと思っていたよ。

「そうだね、最初から切り捨てるようなことはしないほうがいいと思う。ほら、もしも運転つて大切でしょ？」

「あー、そうだけどその例えはどうなんだよ？」

九頭龍クンが呆れたように言う。

まだ運転免許を取つてない人もいるだろうし、あんまりピンと来ないものなのかな？」

「うんと、じゃあ転ばぬ先の杖？」

「微妙に違う気もするが、まあ意味は通じると思うぞ」

1回考えて言つてみると、辺古山さんが思案するように手を顎に添えて頷いた。

「内容はどんなものなの？」

知つてはいるが、一応訊いておかなければなるまい。

「希望ヶ峰学園で予備学科による暴動が起き、それを切っ掛けにして全国、全世界へと広がつていったテロや事件全てを総称して “ 人類史上最大最悪の絶望的事件 ” と言うらしい。さらに、その規模はもはや事件と呼べるものでなく、災害や天変地異のような “ 現象 ” とさえ言えるほどのものへとなつて…… という内容だね」

「普通に考えたらSFかなにかみみたいな話だね……」

普通に考えたら、の話だけだね。

私はそれが本当に起きたことだと知つている。

その結果どんな状態になつているのかは、残念ながら知らないわけだけれど…… ああ、せめて番外編の発売まで生きていたら良かったんだけどなあ。

「ふん、記憶しておけば役に立つことがあるかもしれないからな。全て忘れるよりも記憶の片隅にでも置いていたほうが良いだろう」

「なるほどね…… 場所は覚えておくよ」

それから自由に電気街を周っていると、テレビやパソコン、音響機器から玩具の類やゲームのハードまで様々な機械が並んでいた。どれもこれもいわゆるジャンク品とやらが多いようだが、もしかしたら使えるものもあるかもしれない。

そこらは左右田クンの分野だが、どうだろう。彼、真面目な人だけれど機械の改造や組み立ての方に目がいきそうだから、意外なところにある手がかりを見逃しそうな気もするんだよね。さすがに信用してなさすぎだろうか？

今度の自由行動のときにでも、色々話を訊いてみようかな。彼ならニコイチして携帯電話を使えるようにできそうだし、連絡手段が使えるようになったらいいな。

ふむふむ、ゲーム大会のときにテレビを探しに来たのはこの電気街なんだろうな、きつと。古いとはいえゲーム機もあるし、七海さんも喜びそうだ。

奥まった場所にあるカメラ？のようなものがある店は、恐らく原作であった盗聴や盗撮用の機械がある場所だろう。よくある監視カメラのようなものや、分かりづらそうな小さいカメラもある。四角い機械は盗聴器だろうか？悪用はされないだろうが、これらの使い道も日向クン、十神クン、ソニアさんなどと話す必要があるだろう。

日向クンはまあ言わずもがな、混乱はしやすいが真摯に脱出方法を探してくれているし、十神クンはリーダー。それと、ソニアさんは女子代表つてところだからね。小泉さんも最初はソニアさんをリーダーに推していたし。

「さて、ゲームなんかはまた探しに来るとして…… 次に行こうか」

「ん？ もういいのかよ」

「うん、場所は覚えたから今度また見に来るよ」

「分かった。では次に行くか」

そう言った辺古山さんはすぐさま「行きましょう、坊ちゃん」と優しい声で続ける。

それを聞くが早いか、九頭龍クンも電気街に背を向けた。

「ほら十神クンも」

「ああ……」

珍しく重苦しそうに歩き出した彼を押しして、私は九頭龍クンたちについて行った。

途中、人が簡易的に泊まれる「MOTEL」があつたが、本当に泊まれるだけで特になにもないらしい。食事は自動で出てこないし、個室には小さな鏡しかないし…… まあ、コテージよりは防音がしっかりしているようだが。

あとは、駐車場があるくらいか。

なにかあつたときはこちらに泊まれば良いということだろうか。

さて、簡易ホテルの次に着いたのはギラギラと歓楽街のようにネオンが輝く建物だ。荒野にあるには違和感がある、なんとも場違いな建物だつた。

「ふうふうふうふう！」

「ふふん、素晴らしい音楽だよねー！ わたしこーんない曲で踊るの初めてだよー！」

「…… これでもいいの、かな？」

「はいはい3人とも！ 笑顔笑顔！」

「西園寺の好きな曲って和風系じゃないんだな……」

中では瀧田さんがギターを演奏し、西園寺さんがいつもの橙色で薄い薄桃色の可愛らしい着物で日本舞踊を披露している。

さらにその横では七海さんが微妙な顔でトライアングルを鳴らし、その3人を小泉さんが撮影している。

横には同じく誘われたらしい日向クンがトイカメラを構えながら微妙そうな顔をしている。

もしかしたら小泉さんとの自由行動でカメラについて教えてもらっているのかもしれない。

「ここって、なんだろう？」

いや、ここが何をする場所かは知っているが、初見じゃあ分かりにくいと思うんだよね。だから一応九頭龍クンに訊くことにした。

「あー、瀧田が言うにはここは「ライブハウス」らしいな」

「ライブハウスかあ……」

ライブ？

軽音楽部のシャウトに、日本舞踊の舞に、トライアングルで、ライブ？

「そこは気にはしてはいけないだろう」

「あ、うん」

澤田さんに誘われ、九頭龍クンにも推されて舞台上に剣舞しに行く
辺古山さんを見送る。

少し恥ずかしそうだったが、ギターをかき鳴らしながら迎えにきた
澤田さんに連れていかれた。

「さすがペコだなー」

「あはは、どうせなら写真だけじゃなくって、動画も撮れば良かった
ね」

「あ、なら今度ビデオカメラも探してくるか」

日向クンが「フレームを……」などと教わったことを復唱しながらカメラを構えていたのだが、一旦下ろしてそんなことを言ってきた。
た。

これは、また同じようにライブする可能性が出てきたね。今度は他の
皆も参加したりして、またゲーム大会のように楽しいイベントになり
そうだな。

「あっちの倉庫も見て来るね」

「ああ」

奥にある倉庫へ入って行く。

どうやら舞台に使う諸道具が置かれているようだ。

様々な絨毯や壁紙、ペンキ、脚立は同じものが二脚あり、ライブに
必要そうな楽器類、また、衣装を確認するための大きな姿見と人数分
の尻尾アクセサリーらしきものがぶら下がっている。

椅子にはライブハウスの宣伝用なのか、同じステッカーが山ほど積
まれている。この島には16人と2匹しかいないというのに、誰にど
れだけ配るつもりなのだろうか。

正直資源の無駄だ。裏面の白紙で絵しりとりでもやる以外に使い

道もないよね。

「はあ、はあ！ 熱いdisりにもボクは負けなげ…… そう！
クマだからね！」

「っ!？」

なんとなしに姿見を見ていたら、一瞬だけモノクマが映ってなんか
言って消えて行った。

焦って鏡をペタペタ触ってみるがすり抜けることもなく、そこには
ただ私が映っているだけである。なんだこのホラー。

「……」

うん、考えるのはよそう。モノクマだし、考えるだけ無駄だ。

「十神クン、見終わったよ」

「ああ、ならこの島はもう見て回ったことになるだろうな」

「あれ、そうなの？」

「このあと進んでも病院に戻るだけだな」

「そっか」

未だに続いている剣舞や演舞。澤田さんの演奏は激しい音楽にシ
フトチェンジしていた。七海さんのトライアングルが小さく鳴って
いるのがなんとなくシニールだ。

「ふっ、はあー！」

「ららららら〜」

「うy p a a a a a a a a a a a a a a a a!」

「……」

なんだこのカオス。

そういえばこのライブハウス、バーがあるみたいだね。カウンター
と席があるから、そこで飲食できそうだけれど…… 私たちは記憶上
ギリギリ未成年だからお酒は楽しめないんだよね。

「そこは安心してちゅー！ ここにはしゅわしゅわした飲み物しかありま
ちえんー！」

「ねえ、なんでキミたちはそんな急に湧いて出て来るの？」

「ふえ!? そ、そんな虫みたいに！」

4人の演舞を見ながらラムネやコーラで乾杯することにした。

「おう狛枝、兄弟の盃でも交わすあ？」

「ちよつと、なんで酔っ払ってるみたいになってるの？　というか、あれって婚姻以外は女の人とやるものじゃないでしょ！　辺古山さんとやってあげなよ」

「おー、そうだなあ」

え、待ってよ。これ絶対酔ってるよね？　酔ってるよね？

九頭龍クンって炭酸でも酔っちゃう人？　いや、そんなわけはないよね。たまにジャンクフード食べてるときに、炭酸も飲んでるし……

確かに牛乳飲んでるほうがよく見るけど、まさかそんな、ね？

「おい、貸せ」

「おい、オレのだぞお」

十神クンが彼のグラスを奪って空のグラスに少し移し、飲んだ。

「……　これは日本酒、だと!?!」

「え!?!」

「そ、そんな！　お酒は置いてないはずでちゅよー」

バーテンダー姿のモノミが慌てて手足をばたつかせているが、そこは信用のないモノミである。

冷ややかな目線を無言で浴びせられたモノミは悲しそうにしながらお冷やを用意してきた。

「あー？　もっとしゅわしゅわ持つてこいよ」

「ほらほら、そんな格好悪い言葉使ってるよ辺古山さんが悲しんじやうよー」

「……」

件の辺古山さんが彼の変化に気づいていないのは、幸いだけれどね。

「まったく……」

「まあ、しかたないよね」

カウンターに伏せてしまった九頭龍クンを見ながら、未だライブをしている4人と、撮影している2人を眺める。

結局、案内はしてもらったけれど2人の心は晴れただろうか？

まあ、楽しかったからいいんだけどね。

だがモノクマは許さない。絶対にだ。

私の病室に鉢植えの彼岸花置いたの絶対にあいつだよ？見てたよ？ 夜中に置きに来ているの。

和やかな風景を眺めながら、次会ったら物理的じゃない仕返しをしてやる…… と私は決めたのだった。

No. 22 『波乱』―花火―

普通に比べたら大分早い朝、病院の個室で、私たちはじっと見つめ合いながら緊張の汗に苛まれていた。

「あの、罪木ちゃん…… そんな、もう…… 無理だつて……」
ベッドから身を起こしたまま、じりじりと後退する。

しかし背後には壁しかないので逃げられる場所もない。私は首を嫌々、と振りながら視界が歪むのを感じた。

ああ、こんなにあつさり泣いてしまっただなんて情けない。

だけれど、仕方ないじゃないか。罪木さんが強引なのがいけないのだ。

「あつ、そんな押し付けけないでよ……！」

「えへへへえ、ダメですよ。怖くないですからね？ ほら、一瞬だけですよ…… ちよつと我慢するだけですからあ」

「そ、そんな先つちよだけみたいない方しないでよ！」

ガタガタと体が震える。

開かれた足はじつとりと汗ばんで、押し付けられた “ それ ” を見て私は青ざめた。

なぜだろう。すごく怖いのだ。初めてではないというのに、体が勝手に反応してしまう。

「はい、じゃあ縛りましようね」

「ふつ、うう、きつい、きついんだつて！ も、もうやだあ……」

嫌だ嫌だ嫌だ！

だけれど、いくら懇願したつて罪木ちゃんは容赦なく私の体を拘束するのだ。

思わず彼女の服を掴んで涙目になりながら縋り付く。私の怖がる姿と、縋られている事実からか彼女の目は恍惚としていて、妙に色っぽいような気もする。

彼女の口の端から垂れる涎のせいで、どうも肉食獣に狙われたヤギのような気持ちになってきてしまう。

ああ、これから私は食べられちゃうの？ そんな気持ちになりなが

ら目を瞑る。ああ神様！　今までクソだなんだと言っててごめん
さい！

誰か、誰か助けて！

「おい、なにをしているー！」

「はい？　お注射ですけどお」

「と、十神くん……　助けてえ……」

そう、私はベッド端に追い詰められ、無理やり押し広げられた足の
間に彼女が座り、私の腕をゴム紐で縛って手すりに押し付けられてい
た。

昔から注射は苦手だったが、危ないお薬の思い出がある分知らない
間にトラウマとなっていたようだ。

「怪我したのは頭だよ？　注射なんて必要ないよね!?　ねえ？　十神
くんもそう思うよね！」

だってこの注射の中身桃色なんだよ!?

絶対怪しい薬だって！　彼女の才能には信頼を置いてるけれど、そ
の注射だけは絶対に嫌だ！

「ふん、それだけ喚けるのなら問題ないんじゃないか？　大人しく治
療されておけ」

「そ、そんなっ!?!」

このときほど絶望したことはないと思う。

注射の痛みは少しの間だったし、なにも起こらなかったけれど、
朝っぱらから物凄く疲れてしまった。

「ところで、十神さんはどうしたんですかあ？　体調でも悪くされま
したかあ？」

「いや……」

十神くんは輝く彼女の目から流れるように目を逸らし、「瀧田か
ら伝言だ」　と呟いた。

「狛枝の快気祝いも兼ねて、今夜チャンドラビーチで花火大会をする
らしい。主役は参加するんだぞ」

「あ、う、うん分かった。教えてくれてありがとう」

「わあ……　！　花火ですかあ、振り回すととっても綺麗ですよええ。

あ、私に押し付けるのもいいですよ！　いつも皆とやってましたからあ……！」

「そんなことはしないよ……」

「所々彼女の重い過去が垣間見えるのが、色々と闇深いね。」

「ねえ、罪木ちゃん。花火は観て楽しむものだよ！　皆でわいわい楽しもうよ！」

「ふえ？　は、はあい……　えへへへ、皆で花火……」

「確かに伝えたぞ。午後8時にチャンドラビーチだ。俺たちは昼の後に打ち上げ花火の準備をする。お前たちも時間があるのなら手伝えよ」

「分かった、教えてくれてありがとうね」

「そう伝言を伝えてから、彼は去って行った。」

「さて、花火かあ……　花火って言ったら浴衣だよ。ねえ罪木ちゃん、ロケットパンチマーケットに行つて準備したいんだけど、いいかな？　もう私、元気だよ？」

「注射で疲弊した精神も、夜に楽しみが待っていると思つたら俄然元気が出てきた。だって、皆の浴衣姿が見れるんだよ！　楽しみじゃないわけがないだろう！」

「原作では皆ピンクの浴衣だったが、これから準備して西園寺さんや小泉さんに協力を要請すれば、皆に合う浴衣を探すこともできるよね。着付けもできるだろうし。」

「そういうことなら大丈夫ですよ！　ご一緒しても、いいですかあ？」

「うん、勿論」

「だって、罪木ちゃんの浴衣も選ばないといけないしね！　腕がなるなあ。どんな浴衣があるんだろう？　そこは商品を用意しているモノミのセンスに期待しないとね。」

「コテージから殆ど移動してある道具類と、服飾品から出かける準備をし、罪木ちゃんを誘う。」

「それからさつそく2人でロケットパンチマーケットへ向かった。」

「おお！　凧っちゃんも来たんすね！」

「あれ、皆も?」

私たちがマーケットに着くと、既にそこには女子が全員集まっていた。

「あら? 狛枝さんと罪木さんも浴衣選びですか?」

「やつぱり、みんな考えることは一緒みたいだね」

「もう、わたしはいつもの着物でいいって言ったのにー」

「浴衣って、着るの初めて…… だなあ」

「あんな動きずれーもんよく着る気になれんな……」

「やはり…… 着ないと駄目か……?」

まさか終里さんまでいるとは思っていなかったが、もしかして誰かに連れて来られたのかな? この感じだと、皆で浴衣を着るのに積極的そうな濤田さんや小泉さんかな。

「男子たちがお昼に打ち上げ花火を運んでくれるみたいだけど、アタシたちは先に準備を済ませておかないと」

「女性の買い物は校長先生の話くらい長いものですからね」

うーん、と言いながらソニアさんがそう例えるが、それは違うと思うよ。いくらなんでもそこまで校長先生の話は長くないし。

「あー! でも学園長の話は長かったよねー!」

西園寺さんが嫌味っぽくくすくすと笑うと、水泳用品の近くに置いてあった大量の動物型フロートの中から白黒の物体が飛び出してきた。

「それってボクのことー?」

「ぴゃあああああ!? 浮き輪が動いたー!」

濤田さんか盛大に引いて、逃げていく。

私はなるべく冷たい言い方になるように目を細めて、「…… ねえ、いきなり出てくるのはやめてくれない?」と言った。

ふっ、と鼻で笑うするようにしたのがポイントだ。

「それに今から着替えもあるし、男子禁制になるの! アンタは出て行きなさい!」

「そうでちゅー! アンタは出て行きなちやい!」

「あーれー!」

フロートの山から今度はモノミが出てきてモノクマを蹴り飛ばした。

私たちはルールのせいでモノクマに手を出せないが、彼女ならば問題ないのでごく助かる。

「たまには役に立つじゃない！　ありがとねー！　じゃあ後は帰っていいよー」

「参加させてくれないんでちゅか!？」

結局追い出されたモノミはトボトボと寂しそうに去っていった。

その後は順調に浴衣を選び、皆で着付けの練習をした。

小泉さんが着物の着付けまでできる人なので何人かが同じように覚え、それぞれに着付けをすることができるようにしたのだ。

ちなみに、罪木ちゃんがやると時間がかかる上に帯でぐるぐる巻きにされてしまうので、彼女は他の人に着付けができない。

そうして決まった浴衣は皆それぞれの趣味で決めたものだ。

と、言っても似合っていないわけではなく、皆似合っているので写真が撮りたくなった。後で小泉さんをお願いしようと思う。

さて浴衣だが、私はさらつと見た上でピンと来た黒地に赤い椿と蝶の舞う浴衣を選んだ。

髪と合うかどうか心配だったが、同じく真っ赤な椿の簪で髪を纏めてみたら違和感がなくなってくれた。赤と黒で締まったイメージにすると白でも合うんだね。

勿論のこと、巾着は赤っぽいけれど橙色の物を使っている。今までの道具も少しだがこれに入っている。

次に罪木ちゃんだ。

罪木ちゃんは白地に薄桃色の百合の柄だ。

儂げだが所々に見える包帯がどこか色っぽい。桃色の百合を象った簪で髪をアップにしているので、うなじが髪の間からチラリと覗いている。

あと、いくらタオルを詰めて調整しても胸が強調されてしまうのであまり詰め込まないことにしようだ。

小泉さんは罪木ちゃんと同じ白地に橙色と薄緑色の撫子柄だ。笑

顔を意味する撫子は、笑顔を撮ることが好きな小泉さんにピッタリだ。

耳の後ろにつけた撫子のコーム型リボンが大人な雰囲気醸し出している。

西園寺さんは小泉さんを選んでもらったようだ。

いつもの明るい橙色ではなく、今回は薄水色の地に赤と黒の金魚が泳ぐ、少々子供っぽい浴衣だ。

髪型は後ろでポニーテールにしている、そこに大きなりボンをつけている。どうやら子供っぽい感じで纏めているようだ。お祭りにいる子供のような感じだろうか？

澤田さんは薄桃色の地に白と紅色の強い桜柄だ。派手好きな彼女にしては優しい色合いの浴衣になったのではないだろうか。

髪もいつもとは違い、ツノではなく和風美人な感じに簪を使っている。こちらも桜だ。

皆浴衣に合わせて髪飾りを決めているみたいだね。というか、ツノのない澤田さんなんて初めて見たよ。逆に違和感がある。

辺古山さんは終始恥ずかしそうにしていたが、しっかりとソニアさんに世話を焼かっていた。

彼女は紺地に白桔梗と蜻蛉トシボの柄だ。引き締まったイメージと、蜻蛉が前にしか進めないことから目標に向かって真っ直ぐ進む、勝ち虫として験担ぎの意味もあるらしい。

桔梗は誠実や従順といった意味もあるのでピッタリだ。

終里さんは勘で決めたらしい。黒地に真っ赤な梅が派手だ。

だがワイルドなイメージの彼女にはかなり合っている。髪飾りをするとそのイメージが崩れて違和感が出るのでなにもしていない。

そのうち飽きて浴衣もはだけさせてしまっそうだしね。

ソニアさんも黒地で、花は赤い牡丹だ。

彼女は気品を強調するような浴衣になっているみたいだね。立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花と言うし、牡丹は良いイメージだ。

髪も見事に簪で彩られている。左右田クンが大手を振って喜びそ

うだね。

七海さんは白地に淡い青や桃の紫陽花の浴衣だ。

紫陽花にはネガティブなイメージの花言葉もあるが、彼女の場合は家族団欒が一番しっくりくるね。雨のイメージもあって涼しげだ。

髪は下ろしたまま後頭部にコームリボンがついている。その中にこつそりといつものヘアピンが混ざっているのが七海さんらしいよね。

こんな感じで全員がどうするかを決め、浴衣を確保してから解散になった。



そして午後8時。

私たちは事前に女子で集合し、着付けをしてからチャンドラビーチへ向かって行ったのだった。

「みんなー！ 女の子たちの到着だよ！ さあっ！ 早くその浴衣を
はだけさせぶべらー！」

「よーし花村ー、ちよつとあつち行こうなー？」

「ひ、日向くん！ ぼく、ぼく…… そういうのも大歓迎だよ！ さあ
岩陰にくほあっ!？」

「テメーいい加減にしろや」

「ソニアさんに手出しはさせねーからな！」

すかさず花村クンが日向クンと九頭龍クンと左右田クンにドナドナされていった。保護者組…… 保護者？ まあ、大変だね。ありがたいけれど。

「応！ 終里、似合ってるのうー！」

「あー？ そうかよ。ツチ、動きずれーったらありやあしねえ」

「今は体を動かすわけじゃないからいいんだよ？」

終里さんがつまらなそうにしているが、まあそのうち花火に目を奪

われて楽しんでくれるだろう。

「はあー、花村がすっかり立ち直ってくれて良かったけどな……あれはちよつと困るよな」

そんなことを言いつつも笑って「花村らしい」と言える日向クンは本当にいい人だよな。

「まったく、毎回毎回キモいつつのー!」

「まあまあ、あれが本来の彼なんだから、ちよつとは大目に見てあげてもいいんじゃないかな?」

西園寺さんがあまりなことを言うので一応フォローを入れておく。あれはあれでムードメーカーになるからいいんじゃないかな? 多分……

「賑やかで楽しいですし、構わないと思います……」

「そ、ソニアさん!」

あ、左右田クンがショックを受けている。

浴衣を褒める余裕もないようだな。

「ふつ、地獄の宴が今宵始まる…… さあ魔法の印を打ち上げる時が来たのだ!」

田中クンはどうやら早く花火が見たいみたいだね。

「花火の熱気でビンビンになっちゃうね!」

「ははっ、まったく、花村は懲りないよな」

復活の早い彼を呆れたように笑う日向クン。

そんな彼に私も笑いながら相槌を打つ。すると、こちらに気がついた日向クンが驚いたような顔をして近づいて来た。

「粕枝、お前って黒と赤が似合うな」

「っ……」

いきなりの不意打ちに顔が熱くなる。

褒められ慣れないせいかな毎度反応してしまうのが悔しいところだ。そういうのは七海さんや罪木ちゃんに言っておいてあげてよね。褒めてもなんにもしてあげられないからさ。

「あつ、ありがとう…… 日向クンは浴衣着なかつたんだね?」

「俺たちは裏方作業をしてたからな。時間がなかつたんだよ」

「そ、そっか」

なーんだ、残念…… じゃなくって、花火だ花火。

小さな線香花火は後回しにし、吹き出し花火を使って遊ぶ。お互いになかなか近づけなくなるのがたまに傷だが、皆で鑑賞することはできるのだ。

「ひゃあーやめてくださーい！」

「待てー！」

「ちよ、ちよつと日寄子ちゃん！」

吹き出し花火を持った西園寺さんが罪木ちゃんを追いかけ回している。ああ、なんだかこういう光景って花火をやるときの風物詩なのだろうか。よくいるよね。花火持って走り回る人。

私は危ないからやらないけど。水を張ったバケツの近くじゃないと怖くてできないよ…… たまにガソリンだったりして大惨事になるけれど。

他には終里さんや式大くんが大道芸のように花火を回して遊んでいる光景が目に入る。

田中くんは焚き火のように花火を集めてなにやら召喚の儀式チツクなことをやっている。その横ではソニアさんが安全確保のためにバケツを運んで行った。左右田くんは相変わらず相手にされてない。

遠くに線香花火を楽しむ主従の姿が見えるが、あまり邪魔をしてはいけないだろうな。

「おーし、打ち上げるぞー！」

ソニアさんにアピールすることを諦めた左右田くんが、格好良いところを見せようと打ち上げ花火に火をつける。

すると、次々と打ち上げ花火が空に飛んでいった。

「たーまやー！」

「かーぎやー！」

私たちがそう言って代表的な掛け声をしていると、疑問に思ったのか七海さんが「なんで、たまやとかぎやなの？」と首を傾げた。

「ああ、それは……」

私が言いかけたときに近くにいた十神クンが「昔の二大花火師がいた店の名前が玉屋と鍵屋で、花火を見た客が讚えて屋号を叫んだのが由来らしいな」と詳しく説明してくれていた。

悔しい、私が説明しようと思っていたんだけどな。

「なるほどねー」

七海さんは納得したように何度も頷いた。

「そういえば、あんな大量の打ち上げ花火どうしたの？ 随分派手に打ち上がってるみたいだけど……」

日向クンに訊くと、ちよつと言いにくそうに「ああ、それか」と零した。

「モノモノヤシーンで大量に “壊れたミサイル” が出て来てな…… 処分に困っていたら左右田が引き取ってくれたんだよ。それで、色々改造してできたのがあの打ち上げマシンなんだと」

なるほど、確かに先程から自動で打ち上がっていつているようだ。最初に火をつけてからは誰も手をつけていないのに。

さすがはメカニック。こんなこともできるんだな。

そう感心していたところ、例のマシーンからジジジ、と不吉な音がした。

「えっ？」

「ちよつと、あれまじいんじゃないの？」

小泉さんが不安を訴え、日向クンが慌てて左右田クンの元へ走っていく。

ジジジ、と不吉な音が続いている。

「きやははは待て待てー！」

「ふわあっ!？」

西園寺さんに追い詰められた罪木ちゃんが転び、倒れこむ。

いつの間にか現れたタコに絡みつかれたり貝に挟まれていたりともう大変な格好で転んでしまったようだ。

「おい左右田ー！」

ジジジ、不吉な音を立てながら発射された花火はまっすぐに飛ばず、様々な方向に落ちていく。そのうち1つは第1の島の方へ、もう

1方は…… 転んだ罪木ちゃん目掛けて降り注いでいた。

「あ……」

呆然とした罪木ちゃんが絶望したように空を見上げた。

近くにいた西園寺さんも恐怖に硬直してしまい、その場から1歩も足を動かさない。

「っ罪木ちゃん！」

「ツチ、世話がやける」

私と十神クンは同時に走り出し、そして私は追い抜かれていった。

彼は素早く西園寺さんを回収して離脱し、私は…… 私は、 “ 思うこと “ しかできなかつた。

「狛枝さん!？」

恐怖に取り憑かれる。

また、大切な人がいなくなるのか？ また友達を目の前で失うのか？

そんな、強迫観念に近い恐怖。

左右田クンのミス？ そんなわけがない。

私だ。私の幸運のせいなのだ。きつとそうなんだ。だから友達になつた彼女が危ない目に遭うのだ。

きつと今までの私なら諦めていただろう。だけれど、今の私はもう決めたのだ。どんなに問題が難しくたつて、諦めないって。

やつと掴めたんだ。やつと皆と一緒にここから出たいと、心の底から思えることができたんだ。

だから、彼女が私のせいで死ぬだなんて絶対に許さない。

幸運のせいだからって諦めて、手を伸ばすことすらしなかつた私は

…… ちゃんと前に進めているかな？

だって、皆で幸せになるって決めたもんね。

—— 手を伸ばす。

「死なせないっ！」

彼女に伸ばした手で、私は全力で突き飛ばした。

背後に迫るパチパチと火花を散らす音。もう間に合わないと、分かっていたから。

「狛枝！」

遠くで十神クンの焦った叫び声が聞こえる。

ああ、珍しいなあ。そんな感想を抱きながら、罪木ちゃんのいた場所に前転の要領で転がり、少しでも離れようと努力した。

大丈夫、人を助けたいからって生きること諦めたりするほど、私の生への執着は甘くないんだからさ！

最後まで生き汚く、泥臭く。それが信条。醜かったっていいんだ。死ぬよりはマシだから。

耳元で爆音が響き、一時的に耳が機能しなくなる。

だけれど、火傷だらけで煙を纏いながら転がった先は海だ。

泣きたくなるほど傷口にかなり染みたけれど、なんとか私は生き残った。生き残ったんだ！

「ははっ」

なんだ、簡単だったんだ。

思わず泣きながら笑う。

「あはははっ！」

諦めなくつたって、良かったんじゃないか！

私が足踏みしてただけだ。私が怖くて進めなかったから、自分の死が怖かったから救えなかっただけ。

なんだ、こんなにも、こんなにも1歩踏み出すのは簡単だったんだね！

ちゃんと、私は前に進めている。辺古山さんのときもどうにかあったが、今回もどうにかあった！。こんなにも簡単に運命は変えられる！

「あはははっ！」

もしかしたらあのときも、あのときも、ずっと昔のときも、私が諦めなかったら人を救えたのかもしれない。それをしなかったから、失われただけかもしれない。

私を絶望させていたのは、他ならぬ自分自身の諦観だったのだ。

「粕枝さあん！。粕枝さんしっかりしてくださいさあい！。う、うえ、わ、わたっ、私のためなんかにっ、うえええええん！」

泣きながらでもしっかりと私を海から引き上げ、治療を施してくれ

る罪木ちゃんはさすがだね。

「ううん、後悔してないから、大丈夫……でも、また怪我増やしちやってごめんね」

「そんなのいいですからああ！早く治療しないと！」

「お、おい無事か!?悪い、オレのミスだ！」

左右田クンが心配そうに寄って来てくれる。

「ううん、無事だからなんの問題もないよ。大丈夫」

「いや……あれは、オレのミスだったの！今度からはミサイルの部品なんて使わねーことにするわ。怪我させちまって、悪い」

「悪いって思うんなら、今度怖がらずに遊んでよ」

「お、おう……」

その後もそろそろと集まってくる皆は、口々に心配の声をかけてくれた。

私を病院まで運んだり、治療を手伝ってくれたりと至れり尽くせりだ。

「あつたかいね……」

「ん、なんだ？ 狛枝」

「ううん、なんでもないよ…… 日向クン」

“ 失いたくない ”

今まで以上に深まった想いに覚悟を決める。

いつか来る、私への挑戦状。動機。それを見据えて、しかし精一杯に笑ってみせた。

「た、大変でちゅー！ 狛枝さんのコテージが！ さっきの花火で炎上してました！ 急いで消しまちたが、その…… 建て直しすることになっちゃいまちた」

…… どうやら、不運はまだ終わっていなかったらしい。

「どうしよう、帰る場所がなくなっちゃった」

「じゃあ、もう少し入院しましょうかあ」

その言葉に、ふと鉢植えに植わった彼岸花の存在を思い出した。

「……まさかね」

僅かな不安を胸に抱きながら、その日も私は病院に泊まったのだっ
た。

No. 22 『波乱』―密会―

「悪いね罪木ちゃん。火傷だけだろうとやっぱり痛いものは痛いし助かるよ」

そう言つて私は、お礼の意を込めて彼女に紅茶を提供した。

メイに教わったこともあり、私でもそれなりのものにはなると思う。

流石に罪木ちゃんも疲れているだろうし、これくらいはしてあげないかね。

私の泊まる病室に彼女を待たせ、カップは仮眠室から拝借してきたものだ。それに紅茶を淹れるための手順を踏んで事前に温めたり、まあ色々してホッと一息ついてもらおうというわけである。

「はい…… 狛枝さんが無事でなによりですう……」

だけれど、ドラッグストアに寄ったりと大分時間をかけて買い物をしていたためか既に夜時間だ。彼女も紅茶の温かさに眠そうにしている。

「大丈夫？ 私は大丈夫だから、仮眠室でちゃんと休んできなよ。ほら、紅茶を飲んだらさ」

「…………… はい」

時折カクン、と首を揺らして本当に眠そうだ。

「おかしい、ですねえ…… 深夜の回診には、慣れているはず…… なんですけどお……」

不安気に揺れる瞳を真っ直ぐと見ながら、私はカップの中の紅茶を揺らす。猫舌なのだ。

「コロシアイなんて言われて、拳句に殺人未遂が2度も起きてるんだから普段より疲れててもおかしくないよ？ ま、そのうち1つは私が引き起こしたんだけどね」

悪びれることもなく笑つて彼女に寝るように促す。

心底不思議そうにしてはいるが寝る気はあるようで、眠気と戦いながら私の紅茶を飲み干すと、ふらりとした足取りで病室の扉へと向かつて行く。

「送っていくよ」

「あ、ありがとうございますう……」

彼女の背中を支えて階段を上がり、2階へ。

それから近くにある仮眠室に入り、すっかり目を瞑っている彼女を誘導してベッドへ入れる。

「あーあ、こんなんじやあイタズラされ放題だね……？」

くすくすと笑いながらおやすみ3秒した彼女の額を撫でる。熱は待っていない。

「まあ、そうさせたのは私なだけだね？」

彼女がよく寝ていることを確認して手の中の小瓶を弄ぶ。人差し指の第二関節辺りまでしかない小さな小瓶だ。その中に入っている塗り薬のようなものはほんの少しだけ減っている。

別に毒を盛ったわけではない。コロシアイなんてしたら追い詰められるだけでメリツトなんてないし。

そもそも私は皆で脱出するって決めたんだから、そんなことをする理由がない。

ただ、彼女に聞かれると困ることをしようと思っているから、よく眠れるようにしただけだ。

つまるところ、これはただの睡眠薬なのだ。

彼女の見えていないところでカップを用意したのは、そこでこの薬もカップの底に仕込んでいたからだ……まさかバレないとは思っていないかった。それとも分かっている受け入れたのか。

罪木ちゃんのことだから私に殺されるのなら……とか思っているのも不思議ではないから少し不安になる。私は殺そうだなんて思っていないから期待には応えられないけど。

「さて、病室に戻らなくちゃね」

彼女がすやすやとよく寝ていることを念入りに確認してから仮眠室を出る。静かになった病院の中をコツ、コツ、と自分の足音だけ響かせて病室に戻り、いつもの黒い方のメモ帳を取り出す。

ほとんどの荷物はコテージからこちらに移していたし、コテージが炎上してしまってもあまりダメージはなかった。

「さて、始めようか……」

再び用意した紅茶は2人分。側には蜂蜜の瓶と金のスプーン。

睡眠薬は使っていない。だってそんなことをしたら校則違反で殺されちゃうし。

「おーい、モノクマー！」

私がわざとらしく口の前に手を当てて呼ぶと、どこからともなくモノクマが飛び込んで来て「呼んだー？」と可愛らしく首を傾げた。

「そうそう、呼んだのは私だよ。ちよつと訊きたいことがあってさ」

「人払いまでして訊きたいことってなにさ。あ、もしかしてやつとコロシアイする気になってくれたのかな？」

「コロシアイはしないけれど、そのコロシアイのルールについて知りたいんだよね」

「なんだよ、する気満々じゃないか！」

「だからしないって」

する、しない、の問答を無理矢理押しやってメモ帳を開く。

どうせ生徒手帳には追加されないし、ここで聴いたルールは書き留めておかないとね。

「まず1つ目、殺人未遂のときになんかアナウンスしてたみたいだけど、あれってどういう仕様なのかな？」

「もう、しょうがないなあ…… あれは本来死体発見アナウンスになるんだよ。3人以上が死体を発見したときに鳴らしてオマエラを集めて捜査させるためのものだね！」

仕様は原作と変わらない……と。

「3人…… その3人ってクロも含むの？」

「うーん、臨機応変に対応していききたいところだけど、その場合クロは含まないよ」

これも変わらず。

「1度に殺していい人数はあるの？ 皆殺し、とかだったら裁判にならないでしょ」

「原則2人までだね！」

まあそれも当たり前か。

「じゃあ自殺の場合は犯人は誰になるの？」

「オマエの殺人未遂のときにも言ったよね？自殺は自分を殺したことになるから、クロは死んだ本人になるよ」

そりゃあそうだよね。

なら、これはどうだろう？

「えつと…… 殺人と殺人未遂が同時に起こった場合って、両方アナウンスするの？ それとも片方だけ？ クロの指摘は？」

「そんなにいっぱい入らないよお」

妙な言い方しないで早く答えてよね。

「がつくし…… ノリ悪いなあ。えーつとだね……その場合は殺人の方だけ適用されるよね！アナウンスも殺人の方だけでクロの指摘も殺人の方だけだよ。その後ギスギスしてるオマエラを見るのも楽しそうだしね！」

うわあ、悪趣味…… まあ、分かったことだけれど。

あとは……

「アナウンスのことだけど…… 他人が殺した瞬間を目撃しちゃって、目撃者も殺された場合は、最初に発見した人数によっては死体発見アナウンスにタイムラグができるのかな？ つまりは、被害者になっても発見人数に加えるかってことなんだけど…… それとも発見人数に入るのは生きてる人間だけ？」

死体を発見した人数をカウント1、2として…… 誰かが殺した瞬間を目撃した場合、その1つ目の死体はカウント1。で、そのまま口封じに目撃者が殺されればカウント0の死体も出来上がる。

この2つを全員で発見した場合は問答無用で死体発見アナウンスが2回分連続で流れるだろうが、もし最初に発見したのが2人だけなら？

まず1人目の死体発見アナウンスが流れて、全員が合流した後にかウント0だった死体のアナウンスが流れることになるだろう。

このタイムラグも推理の材料になってしまいうだろうが、つまりそういうことだよね。

その辺のルールの詳しい部分まで知っていないと落ち着かないん

だよ。

「変なことを考えるね。うぷぷ、そこがまた面白いんだけどさ……
ねえ、やっぱり狛枝さんコロシアイする気はないの?」

「ないよ。ただ、もしコロシアイが起きたとしたら推理材料は多ければ多い方が良いつて思ってるだけだし」

「うぷぷぷぷ、うぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷー!」
「なに?」

なにをそんなに笑っているんだ。

「狛枝さん、なんだかんだ言いつつ、やーっぱり皆のこと信じてないんだね?」

「……」

とんでもないことを言い出すクマを睨みつけるが、効果はまるでない。

「凶星でしょ? 所詮オマエはオマエなんだよ。幾ら信じてるなんて言っても、それは口だけ。疑ってばかりで自分が死ぬのが怖いんだ。だけどそれを知られるのが怖くて睡眠薬なんてもので使つて聞かれない状況を作つて、このボクと密会なんてしてさ」
「……」

そりゃあ、そうかもしれないけれどさ。

信じたいって思うのは、そんなに変なことなのかな。信じたいからこそ、いろんな状況を想定して疑うのはよくないことなのかな?

ひとつひとつ紐解いて、疑う余地なんて一片もなくなるまで疑い続けるのは悪いことだろうか。そうしなければ信じることができない私は……

「つて、話を逸らさないでよ。で、どうなの? 被害者は発見人数に含まれるの?」

「うーん、そういう事態になつてから考えたいところだけど…… 狛枝さんがこの退屈をぶつ壊してくれるなら教えるよ?」

「どう言う意味かな……?」

「うぷぷぷぷ……」

コロシアイをしてみせろよ、つて言いたいのかコイツ。

「してほしかったらこっちのやる気を引き出す材料でも用意するんだね…… 用意できたらの話だけだ」

「ふうん？ ま、いいよ。ところで、被害者を含むかだけど、含むことにするよ。その被害者がクロじゃなくてシロならだけだ」

誰かを殺した人物が被害者になってもクロだから発見人数のカウントには含まないってことだね。

「じゃあ次は…… クロが複数人の場合、裁判はどうなるの？ どちらも当てなければいけないのかな？」

「場合によるよね。ボクがそうしたほうが面白いと判断したルールになるよ。早い者勝ちか、どっちも当てるかはボクの気分によって変わるわけなのです！」

どうせ、死んでほしい人物がクロに浮上したらそっちに押し進めるんでしょ？ モノクマにとって排除しておきたい人間だっているだろうしね。

「ロシアイコロシアイって言ってるけどさ、明らかな自殺の場合とか、クロが明らかな状況のトリックもない殺人だった場合はキミの言うロシアイに含まれるの？」

「そうだったら萎えっ萎えもいいとこだよね！ 多少こっちで攪乱するかもしれないけど、辺古山さんとオマエの件みたいなことがあったら裁判は行われないうし、裁判が行なわれないとロシアイではないよね！」

分かり易すぎる場合はロシアイには含まれない、か。

「じゃあ…… 協力関係にある5人がそれぞれ2人殺して、その5人とスケープゴートだけが裁判までに残った場合、スケープゴートに投票すれば全員勝ち上がりになったりするの？」

「…………… へえ」

私たちは16人。

その内5人が協力関係を結び、2人ずつ殺していけば10人死んで残るはクロ5人とシロ1人。

間違えた裁判結果で死ぬのはシロだけだから、結果5人のクロは勝ち上がるができるわけだ。

少人数だけだが、確実に生き残って島から脱出できる…… 〃 権利〃 が与えられる。

「やっぱりそんなことを考えてるってことは……」

「だから、コロシアイするつもりはないんだってば」

「うぷぷ、今はそういうことにしておいてやるよ」

「で、どうなの？」

すっかり冷めた紅茶に、今更のように蜂蜜を混ぜて口に含む。うん、溶けないね。当たり前か。

「実行できるんだったら勝ち上がりにしてやるよ。たまにはそういう完全勝利もありかもしれないしね！」

「ふーん」

ああ、もう蜂蜜が玉になって甘ったるい。…… 淹れ直してこようかな。

「コロシアイのためならキミって犯人に協力したりするの？」

「あんまり深入りはしないよ？ 公平な裁判長でなくちやいけないし……」

あ、でもやりたいトリックに必要なものがないとかなら融通するかもね！ ボクはサバンナでも1番優しいって評判だったんだからー！」

…… クマってサバンナにいるものじゃないよね？

「ま、いいか。質問はこのくらいだからもう帰っていいよ」

「用が済んだらってすぐそれなんだからあ……」

キノコを生やしながら落ち込むモノクマにしつ、しつ、と手を振って空のカップを手を立ち上げる。淹れ直して仕切り直ししなければ。こんなんじや睡眠導入にすらならないよ。

「それじゃあモノクマ、おやすみ」

「ま、まさかこれがツンデレ？ ハア、ハア…… こ、この気持ちはなんだろう？ なんだか動悸息切れが……」

「そのまま死ねばいいのに……」

「おやすみー！」

眩いて帰って行くモノクマから目を逸らす。

それから目の前の扉に手をかけて、再び紅茶を淹れに行こうと思っ

ていたのだが……

「…… え？」

混乱して状況がよく分からない。

「……」

モノミにゆっくり休みたいからって人払いしてもらってたはずなのに…… どうして。

「あ、あれ……？ どうして十神くんがここに……」

サア、と顔が青ざめていく気がした。

語尾が震えてカップがその場に落ちそうになる。

待って、もしかして今までの全部聞かれてた……？

「お前、なにを企んでいる？」

鋭い声で射抜かれて胸が痛い。

ああもう、なんでこんなタイムミングで聞かれちゃうかなあ。いや、もしかしたらバレバレだったのか。でも、モノクマにいつかは訊こうと思ってたことだしなあ。

「……」

気づかれないよう深呼吸。

すぐに表情に余裕を貼り付けてにへらと笑う。

「あ、バレちゃった？」

「……」

「あ、ちよつと！」

私を押しつけて病室に彼が入ってくる。

私が止める間も無く、彼はすぐに私の使った睡眠薬の瓶を発見した。

「…… コロシアイを始めるつもりか？」

「……」

それは心外だな。全くもって不本意だよ、十神くん。

「…… そんなわけ、ないよ」

絞り出すように声を出してベッドに腰掛ける。

さて、聞かれちゃったからには黙っててもらいたいんだけど……どうしようかな。

「罪木に優しくしていたのもそのためなのか？」

「違うよ。罪木ちゃんと仲良いのは確かだし、睡眠薬を盛ったのも確かだけど、話を聞かれたくなかっただけだしね」

疑ってかかってくる彼の言葉を切り返し、「返してよ」と小瓶を奪う。案外簡単に取り戻せた。わざとなのかは分からないけれど、彼も本当によく分からない人だ。

「だって、私がコロシアイゲームに本気になったとしたら…… まず狙うのはキミか日向クンだよ？」

目を見開く彼ににやりと笑いかける。

残念ながらキミが病室に入って来た瞬間に鍵は閉めてあるし、逃げることはできないよ？ そういう意味で笑みを貼り付け、からかうように小瓶を指で弄ぶ。

「キミはリーダーだからね…… キミが崩れたら皆混乱して推理どころじゃないし、日向クンはそんな皆を再び纏めることのできそうな人物だから…… それに、2人とも私の真意を見抜いて、謎を解いてくれた人だしさ」

「あのときの討論でそこまで考えて観察していたのか？ そんな素振りはないと思うがな」

でも事実だ。

まず私がクロになるなら、暴かれて殺されるのは勘弁したい。本気で勝ちを狙っていくなら賢い人物を狙うのは当然のことだろう。

私にコロシアイをする気があるのなら、の話だけれど。

「いいのかなあ？ こんなところで2人きり……もしかしたら今すぐにもキミを殺そうとしてるのかもしれないよ？」

くすくすと笑いながらこちらのペースに巻き込んでしまおうとするのだが、そこはさすが十神クンだ。まったくペースを崩してくれそうにない。

「ふん、やろうと思っているのならそんなことは言わんだろう」

「なんだ、少しは驚いてくれてもいいと思うんだけど」

「これでも少しは驚いているぞ。お前がモノクマ相手にあんな問答をしているとは思わなかったからな」

そりゃあ、日頃から死にたくないって言ってる私がコロシアイのルールを確認するなんて誰も思わないよね。

「あははっ、やっぱり十神くんには敵いそうにないよ。キミともっと真つ当な勝負でもできたら面白いんだろうけどなあ」

「人狼ゲームがあつたらう」

「あれは共倒れだったじゃない」

確かに、あれは楽しかったけどさ。

「さて、お見舞いに来てくれたのか、私の様子を見に来たのかは分からないけど、そろそろ帰つたら？」

お見舞いは文字通り。様子を見に来た…… は、悪いことを考えていないか見に来たって意味でだ。

「……」

深夜0時を越えたあたりで流石の私も眠くなってきた。

最近は入院しているのでそうでもないが、入院する前は図書館から借りて来た大量の本の整理とか、メモとか、深夜まで色々やっていたから総合的には寝不足の類に入るだろう。

罪木ちゃんさえ起きていなければ、0時過ぎるのは当たり前になつているし……

淹れ直そうとは思っていたけれど、もう紅茶なんてどうでもいいや。

「……」

あれ？ 十神くんが反応しない。完全なる無視だ。

さすがの私も無視は傷つくんだよ？

「十神くん？」

「…… 十神くん？」

俯いたままの彼が、間を置いて私と全く同じ言葉を言い放った。

「え？」

「え？」

待って、どういうことだ？

先程から彼は俯いたままだ。そう、丁度0時を過ぎた辺りから……まさか。

「っ！」

彼の額に手を当ててみると…… とんでもない熱を持っていた。

「これはっ！」

「これはっ！」

私の動作を真似してこちらの額にも手を当てて来ようとする彼の手を掴む。全身すごい熱だ。

「十神白夜はかませメガネです」

「十神白夜はかませメガネです」

鸚鵡返し…… うん、これは間違いないね。

あいつ、つまらないからってさっさと始めたんだな？ 私にチャンスだぞって、いいから早くコロシアイを起こせよって言っているんだ。

それにしたって唐突すぎるだろうに。なんでこんなタイミングで始めちゃったのかなあ……

「……」

「……」

さて、放っておくわけにもいかないし、罪木ちゃんを急いで呼んでこないと。

彼女に盛った睡眠薬は快眠できる程度の量だったから起こすこともできるはずだ。

まさか、彼が、十神くんがこうなってしまうだなんて思いもしなかった。

「うっ……」

どこかで誰かを嘲笑う声がする。

そうして、思わぬ時期にモノクマの今回の^{絶望}動機が始まったのだ。

虚ろな嘘を重ね重ねて嘯み、色合わせ

「あれれー？ さびつきサン、はっけーん！」

小学4年生。

いつもの駅、いつもの改札を抜けて帰るところで、私は気になる単語を聞くことになった。

「え……？！」

「あつはは！ やっぱりアンタがさびつきさん？ 生まれる前から知ってたよ？」

私はただただ、疑問を浮かべることしかできなかった。ネット内では使っていない。しかも夢関係のスレッドやチャットでしか使ったことのない単語を、まさに個人を示して言われるのは初めてだったからだ。

振り返った私が見たのは、にししと意味ありげに笑う同年くらいの子だった。ショートボブで元々なのか、少々明るい色をした髪で、有名な私立小学校の制服を着ているようだ。お金持ちの子供だろうか？

しかし、 “ やっぱり ” ってどういうことだ？ それに、生まれる前から？ そんなわけないだろう。まさか、私と同じ転生者なわけもないだろうしね。

「えっと、キミとは初対面…… だよね？ 知ってたって、どういうこと？」

「はあ？ 嘘に決まってるだろ常識的に考えて。まあ、アンタがさびつきだーって分かったのは本当だと思うけど」

うーん、中々きつい物言いだな。

しかし、この子の雰囲気どこかで見たことがあるような、ないような……

とりあえず、私はさりげなく人の邪魔にならない場所まで移動して話を切り出した。彼女が大人しくついてきたのが意外だったのだが、「で、本当のところはどうなのかな？ キミは誰？ なんで私のこと

知ってるの?」

「そりゃあ、私秘蔵の裏表ルートで調べたに決まってるだろ?」

「…… えっと」

「ちよつと、そこで反応に困られても困るんだけどさ…… あー、アンタのことはネットで知ったよ。あのチャット、中々興味深くてさー!」

つまり、彼女は普通の人にとってはくだらないと思うような、そんな夢日記談議のチャットに興味を持ったということだ。あんなふざけた話を信じている? しかも、本人を特定するまでに。

彼女は一体なんなんだろう? 私も俄然興味が湧いてきた。どうせ行きずりの一期一会な関係だし、少し話してみても面白いかもしれない。

面白いかそうでないかは大事だよな。

「もしかして、あのチャットに参加していた誰かだったりするのかな?」

「まあね。さて、アンタには私がかかるかなあ?」

にやにやと笑いながら口元を隠す彼女は妙に大人びているような気がする。私が深く関わる人物は妙に大人びた人ばかりだ。一期一会とは言ったが、もしかしたら深い関係になるかもしれない。そんな微妙な感覚がする。

それにしても、この子が誰かか。そんなの簡単だ。だって、これまでの会話の中でそのヒントは掴んでいるのだから。

よく考えたら明るい髪の毛のショートボブってところもぴったりだし、あのうろつきでさえ幼少の頃ははつきりした金髪でなかったのだから、彼女も金髪でないのはおかしいことじゃない。見慣れた服装でなかったから分かりにくかったただけだ。

暗い青に向日葵模様のスカーフ。それに全体的に配色が青系と黄色系で纏めている辺り、イメージカラーはそのままだし……

「そっか、キミは “うそつき” さんだね?」

「ぎーんねんっ、大正解! そうそう、私はアンタ等の言うところの “うそつき” だよ。驚いたか?」

「ここは合わせておくべきかな？」

「そうだね。まさかこんなところで話しかけられるとは思ってなかったよ」

「そうだろう？ でも気をつけてた方がいいよ？ アンタの居場所を特定するのって簡単だったからさー！」

まさか。マスコミはともかくとして、いくら新聞で騒がれても、テレビでニュースになっても幸運なことに住所特定まではされたことないんだよ？。そもそも、私に近づくと殺されるって言われているからわざわざ特定してまで接触して来る人なんていないからね。

「どうやって調べたのは知らないけど、少なくともそれは嘘……だよね？」

「そりゃあ、もちろん！」

堂々と言つてのけた彼女は続けて自己紹介するように豪語する。

「だって、私は生まれついで为天邪鬼だからさ。嘘を吐くことはもちろん、裏切りも騙りもお茶の子さいさいだね！」

「あんまり自慢にならないような……」

「まあねー。人から嫌われるのはそのせいだけど、それが私だしな。ほら、生物兵器を作る施設に売られたり……キメラだつて見たことあるんだぞ！ あとは嘘を吐きまくつて恩人を傷つけたり、それでも励ましてくれた恩人を裏切つて殺したり、看護師を騙して病院から逃げ出したり、金持ちの未亡人に取り入つて養子になったり……それに、産まれたときだつて両親の期待を裏切つてたくらいだからさー」

からからと笑いながら何うようにこちらをみるうそつきちゃん。その瞳は笑いに歪められているように見えて、その実こちらを慎重に探っているように見える。

その本質はただ強がつているだけのような、なんだろう……よく分からないけれど放っておけないなにかを感じた。

「まあ、大半は嘘だけどさー！」

「真実も混ぜてるんだ？」

「さあ、どうだろう？。実は私にも分かんないんだよな」

急に真顔になるのはやめて欲しい。ちよつと怖いからさ。

「でも、なんで特定なんてしたの？ チャットで話せばいいんじゃない？」

「だって、仲間だろ？」

あ、ほらまた真顔。

「うん、まあ同じ夢仲間だろうけれど」

「ほら、”ウソツキ”仲間だろ？ みーんな夢のことを話しても嘘だって言ってる、しまいには売られて病院送り。そこでも色々言ってるらしいの間にか”恩人さま”しか私の話を聞かなくなったし、意味分かんねーよなー。心が落ち着かない？ 構って欲しいから嘘を吐く？ 馬鹿じゃねーのかって」

捲し立てるように語り出した彼女の内容は、結構衝撃的だった。

そうか、彼女はそばに共有できる人がいなかったのか。恩人とやらはそうでもないようだが、彼女は仲間を求めていたのかもしれない。

「だからさ、アンタも仲間でしょ？ 嘘つき仲間。羊飼いは羊飼いでしょ？」

笑顔でこちらに来る彼女が少しだけ恐ろしくて、一步下がったところで柔らかいなにかにぶつかった。まるでそれは人間のように……って。

「わあっ！」

「やっと思つけたよ…… ほらほら、うつろちゃん。迷子になっちゃ駄目だよ？」

頭上から聞こえてきた声は聞き覚えのあるものだ。

お腹の前に腕が回され、抱きしめられる。

私はそれが誰だか分かって安心し、ゆっくりと視線を上げた。

「お久しぶりだね、凧ちゃん。2人とも、もう知り合っちゃったんだね！」

私が引きあわせる予定だったんだけどなあ

のんびりとした口調で言うのはうろつきこと、織月姉さんだ。彼女がいるってことは、やはりうろつきはチャットで見かけたうろつきで合っていたようだ。

「はあ？ アンタが迷子になったんだろ？ 私はきちんと目的のさびつきサンも見つけたからね。迷子じゃない！」

「世間的には年上から離れたら迷子って言うんだよ。知らなかった？」

「知るかよそんなの！ しれっと嘔吐くな！」

「うそつきちゃんにだけは言われたくないなあ」

そんなやりとりを聴きながら私は考える。

もしかして、最初から織月に紹介してもらおう話だったのではないだろうか。それを私が知っているか、いないかは別として。

織月のことだからドツキリでも仕掛けたかったんだろう。どつちが迷子になったのかは、どうでもいいことなので別にどちらでも構わないが。

「それで、ええと…… 自己紹介する流れかな？」

「はあ？ さつきしただろうが！」

「そうだねーうつろちゃーん。ハンドルネームしか教えてないよねー？」

にこにこしながら言う織月がなんとなく怖く感じるのは、私だけなんだろうか。

「つて、いつから見てたんだよ、アンタ」

「生まれながらの天邪鬼辺りかな？」

「結構前からじゃん！ なんでもっと早く話しかけてくれなかつ、いや、なんでもない……」

言いかけたうそつきは顔を赤くして目を背けた。

すっかり織月のペースに囚われているみたいだね。なんというか、若干チヨロい気もする。ツンデレかな？

「じゃあ私からかな…… 多分知ってると思うけれど、私は狛枝風。幸運とか死神とか、色々呼び名はあるけれど…… 髪が白くて変な夢を見る以外は普通の小学生だよ。キミは？」

普通じゃないじゃん、とかは突っ込まない方向で。

そんなのは私自身が分かっているからね。

「私は貫洞うつろ…… アンタ等と話してた」 うそつき “ 全ての私が私だよ。暇潰しのチャットだったわけだけど、まあ…… 多少は役に立ったかもね」

「改めて、私はうろつきこと空井織月うついりづきです。今回仲介役になってただけど…… まあ、細かいことは別にいいよね」

「でも会って損したわ。なーんか、がっかりだし？」

そんなことを言う彼女の表情はどこか嬉しげで、すぐに嘘だと分かかってしまう。しかし、自然に口からそんな言葉が出て来るあたり、筋金入りの天邪鬼のようだ。

これは人生苦勞していそうだな、と苦笑いして受け入れる。夢に悩む、夢に苦しめられる。きつと彼女もそんな人だから。同類だから。

でないと織月が私に会わせようとするわけがない。

それが分かっているから、私は彼女のどんな嘘も、内容をじっくり考えてみることにした。

その嘘の裏にはきつと本心が隠されているはずだから。

嘘の裏に本心があることなんて、そんなの当たり前のことだけれど…… それを見つuckerのはとても難しいことだから。まずは、彼女を同類として暖かく迎え入れよう。

かつてメイが、私を受け入れてくれたように。

ウソツキの少女が浮かべる微笑みは、果たして本心か否か。

それは本人にも分かりはしない。だって、彼女は自分自身に嘘を吐いているから。

そんな “ うつろちゃん ” との付き合いは、これからどんどん長くなっていくだろう。そんな予感を胸に、とりあえず私は近くの喫茶店を指差した。

「お茶でもしながら少し話そうか。門限があるから長くは無理だけど」

「門限に帰るとか馬鹿なんじゃないの？」

「いやあ、捻くれてるね……」

「はんつ、門限なんて看護師…… じゃなかった、親を騙くらかせば引っかからないっての」

分かりやすい嘘とは果たして知られたらという本心か、否か。

それは誰にも、分からない。

No. 22 『波乱』―混乱―

私の真似をして同じように部屋を出ようとする十神クンを止め、ベッドに座らせる。

ふむ、と口元に手を当てて少し考えてみると、彼も同じ動作をした。推理するときのようなそのポーズが私よりも様になっていてなんだか悔しい。

真似をするなら、と私は暫く目を瞑って様子を見ることにした。10秒程で片目を開けて確認してみると、ちゃんと彼も目を瞑っている。

次に音を立てないように睡眠薬の小瓶を取り、手をつけていなかった水差しへ溶かす。水差しは予備があるので睡眠薬の入っていないものも用意してカタリと置く。

その音で彼が目を開けたが、熱に浮かされているのか焦点が合っていないように感じる。これは本格的にマズい状況だろう。なんて厄介な。

睡眠薬入りでない水差しを手に取り、彼の目の前で飲んで見せる。すると彼も睡眠薬の入ったそれを飲んだ。

それからもう1度目を瞑って彼にも目を瞑ってもらう。元々熱で体が動かしづらくなっているはずなので、そのまま力の入っていない熱い彼の体をゆつくりとベッドに押ししていく。

思った通りうまく体が動かないのか、抵抗らしき抵抗はなかった。

「……」

喋ると真似させてしまうので黙ったまま、さつと布団をかけて立ち上がる。このまま寝入ってくればそれでいい。

起こさないように端の方にかけてあったパーカーに袖を通し、この病室の鍵を回収。ついでに人をこの部屋に呼ぶため睡眠薬もポケットに入れて証拠隠滅しておく。

最後に静かに病室から出て後ろ手で鍵を閉める。

カチャリ、と乾いた音がした。

「…… はあ」

詰めていた息を吐いて階段を上っていく。

今の出来事だけでもドツと疲れたような気がした。

「罪木ちゃん、罪木ちゃん患者だよ。救急の患者さんだよ！」

そう言つて仮眠室で眠る彼女の頬をペチペチと触れる。

起きる気配がないので思ったよりも睡眠薬が効いていたようだ。このまま彼女が眠ったまま死体になったりしたら笑えないが、しっかりと胸が上下しているのでそんなことはない。

ということは睡眠薬の効果だけでなく、元々疲れていたのもあるのだろう。

「罪木ちゃん…… 起きてよね」

よく寝ている彼女に対し、ちよつとした悪戯心が顔を出したので耳元で囁いてみる。仕上げにいつも夢の中でやっているのと同じように彼女の頬をつねってみる。

「んん……」

そうしてやつと彼女が目覚めた。

「……」

「……」

「……」

「あの…… 罪木ちゃん？」

目が覚めてキョトンとしている彼女と暫く無言で見つめ合い、まさかこのタイミングで彼女も絶望病にかかってしまったのかと焦って声をかける。

その可能性を考えてしまったせいか1歩彼女から足を引いたが、彼女はそんなことも気にしないで 「…… え？ え？ こ、粕枝さあん？ どうしたんですかあ？」 と驚いたように声をあげた。

どうやら寝起きで頭が働いていなかったただけのようだ。

「私の病室まで十神くんが様子を見にきてくれたんだけどね、その彼が熱を出しておかしな行動をとるようになってしまったんだよ。私じゃあどうすればいいか分からないから罪木ちゃんを呼びに……」

「と、十神さんがですかあ？」

急患だと聞いてすぐにベッドから降り、近くにかけてあったエプロンを彼女が身につける。それから真剣な顔をして罪木ちゃんは私の手を掴んだ。

「行きながらですけど、詳しい症状を教えてくださいませんか？ えっと、熱だけですか？ それとも別の症状もありましたか？ 十神さんはなにかだるいとか痛いところがあるとか言っていないんですけどかあ？」

さすが医者のお。急いでいながら状況の確認までしてくれるんだね。

「なんとというか…… ただの病気って感じはしなかったね。私の言葉をそのまま鸚鵡返しして、行動も真似してきたんだよ。なんか変だなんて思ってた額に触って見たらすごい熱を持って…… どちらかというと身体的な症状じゃなくて精神的な症状だと思うんだけど……」

普通に考えたら精神科案件だよ、あれ。

「精神的なものですかあ…… 十神さんもリーダーシップをとって頑張っていましたし、気疲れしてしまったのでしょうかあ……」

「それにしたって変だよ…… その前までは普通に話してたのに、午前0時になった直後おかしくなるなんてさ……」

ありえないよね。

そんな病気が本当にあったら恐怖だ。さつきまで普通に話してた人がなんの脈絡もなく突然おかしくなるなんて……

「なんでもかんでもモノクマのせいにはしたくないけど、どう考えても普通じゃないよ……」

「…… とりあえず、私も頑張りますから…… 朝になったら皆さんにも確認してみましよう。もしかしたら他にも同じように苦しんでいる人がいるかもしれませんし……」

今から皆の個室を回るのは確かに非効率的だね。それよりも翌朝レストランに集まるであろう皆の様子を見た方がいい。

それに、十神くん以外にも患者がいるとは言い切れない状況だし。

「なら、私も看病手伝うよ。これでも病院の娘だし、基礎的なことは分かるからさ。それに……」

一拍置いて目の下にクマができている彼女を見やる。

「キミこそ、過労で倒れちゃうんじゃないのかな？　ほら、他の皆の健康チェックもしてるでしょ。気づいてるんだよ？」

「あ、知ってたんですねえ……」

寝不足気味なのは私も一緒だが……　まあ医者の不養生よりは私が倒れる方がマシだろう。私を心配してくれる人なんて……　結構いるか。

嬉しいけれどとつても複雑な気分だよ、まったく。嫌われるように動いていたのにどうしてこうなってるんだだろうなあ。

日向クンや十神クン、罪木ちゃんに小泉さん……　結構な人が私のフォローをしてくれてるせいかな、今のところモノクマにしかヘイトが集まっていないみたいだ。過ごしやすいから構わないけど、パティのとき覚悟してたのが馬鹿らしくなってくるよね。

あとは小泉さんを庇って殺人を止めたことも大きく関係しているのかな。あーあ、本当皆いい人ばかりで怖いくらいだ。

「お気持ちには、ありがたいんですけどお……」

「とりあえず、手伝うよ。お茶汲みでもいいからさ……　キミが起きて頑張ってるときに私が呑気に寝てるわけにはいかないよ」

被せ気味に言った言葉で罪木ちゃんが目を瞬かせる。

「キミを起こしといて私は寝るって、罪悪感があるんだよ。ほら、そんな私の罪悪感を取り除くと思つて……　手伝わせてくれるよね？」

「あ、ありがとうございますう」

ほとんど脅しのような言いぐるめの仕方だったが、結果オーライだ。

その後は罪木ちゃんに眠くならないようにコーヒーを入れたり、必要な薬を確保するためにドラッグストアまで走ったり、過去似たような精神病がなかったかどうかを、図書館で急いで借りてきた本で調べたり……　ちなみにドラッグストアはともかくとして図書館は普通夜時間は閉まっているようだったが、モノミを呼んで入らせてもらっ

た。

しかし、そうして調べた資料の中にも特定の精神病と言えるものはなく、『強い精神的ショックによる混乱』としか言えないことが分かった。

故にまずは熱を下げることを目標として十神クンの看病をして過ごすことになったのだけれど……

「あの、狛枝さん…… お手数なんですけど、十神さんの着替えを持って来て頂けますかあ？ 病衣はちゃんと大きいサイズがあつたんですけどお…… そのお…… 他に必要な物などもありますし……」

ああ、言いづらいのは分かるよ。でもそうか、必要な物ねえ。

「あ、じゃあ日向クンのところにも寄ってみるよ。彼、十神クンとも仲いいし…… それで着替えの用意をお願いしてみるよ。私は気にしなくても十神クンが気にしちやったら悪いし」

提案してバツの悪そうな顔をとる。

1度十神クンのコテージには行ってみたかつたし、ちようどいいと言えるかもしれないが、正直なところ日向クンを誘うのは気が進まなかつた。けれど、こういう事態ならば仕方ない。

そう開き直って十神クンのポケットを無遠慮に探る。

「こ、狛枝さあん？」

「だって鍵がなかつたら入れないでしょ？ まさかモノクマに開けてもらうわけにはいかないし…… 私だって窓ぶち破つたりピツキングしたりなんてしたくないしさ」

「それもそうですなえ」

納得してくれたようなので気にすることなく、次々とポケットの中を探っていく。すると彼の上着の内ポケットに鍵は入っていた。

「よし、行ってくるね」

「い、いってらっしゃいですう」

パーカーにいつもの手帳が入っていることを確認して同じ場所に鍵を入れる。いくつかプレゼントアイテムも入っていたが構わないだろう。

「十神クンのコテージかあ…… 冷蔵庫が2台もあつたりして？」

3台あった。

コテージに入った私は衝撃的な光景すぎて思わず息を飲んだよ。テーブルに置かれた手帳や、図書館から借りてきたのか大量の本。高価そうな万年筆。私が集めたデータを元により正確に描かれた島全体の地図。ジャバウオック島に関する資料と、現在の島と資料との齟齬を纏めた書類。

普段も皆と一緒に調べまわっているが、独自でもかなり動いていたらしい。

しかしその中により一層異彩を放つのはやはり冷蔵庫だ。最初に私と運んだ冷蔵庫よりも大きい物が2台一緒に並んでいる。

好奇心に駆られて中を見てみればお菓子にジャンクフード類に炭酸飲料にとやたらめったらカロリーの高そうなものばかりが詰められている。

痩せるより意図的に太る方が難しいともいうが、よくこれだけのものを食べられるな。私には一生理解できない領域なのだろう。ある意味尊敬するよ。

次にテーブルに置いてあった一冊を手に取りパラパラと捲ってみる。罫線だけ引かれた白紙のそれを見て私は「そうだ」と呟いた。

「日向くんは呼ぶにしても他の皆はこのことを知らないし、ホテルロビーにでも置き手紙とか残しといたほうがいいよね」

レストランは夜時間の今は入れないし、十神くんが入院することを報せておかないと。ないとは思いますが、日向くんも病院に泊まるかもしれないし。

「ようしよ…… つと」

懐から出した手帳のページを1枚破り、それに彼の万年筆を借りて伝言を書く。

「十神くんが風邪をひいてしまったので病院に連れて行きます……と」

皆に見せるものなので丁寧に書き、うんと頷く。

それから、伝言を書くからとテーブルに置きっぱなしにしていた手帳を懐に入れる。もう1冊も最初に彼の手帳が置いてあった場所に

置き、やっとな来の目的を思い出した。

「あ、着替えとタオル用意しなくちゃね」

制服は別にいいが、クローゼットの下の引き出しを開ける勇気は私にない。ならばここはベテランパンツハンターの日向クンに任せるべきだそうするべきだ。

好奇心に駆られて思わず一人でコテージに入ってしまったが、当初の予定では日向クンを連れてこようとしていたのだった。

私はもう1度、チラリとテーブルを流し見てからそのまま、一旦コテージを出た。

「夜遅くにごめんね」

「…… いや、大丈夫だ。事情はあらかた分かったし、気にしなくていいぞ。それより十神の容体はどうなんだ？」

「うーんと、精神的な疲労…… なのかな。そんな感じでちよつと変な行動するようになってしまったからちゃんとして見えないといけないんだって」

罪木ちゃんが言っていたよ、と伝えて並んで歩く。

日向クンならば絶望病にかかっていないと思っ来てみれば正解だし、良かった良かった。

彼まで絶望病になっていたら私が心労で死んじゃうよ。主人公が動機に引っかけたら笑えないし、誰が事件を解決するんだって話になっちゃうもんね。事件は起こらないようにしたいけれど。

「私はタオルとか回収しておくから、日向クンは着替えをよろしくね」
手早く鍵を使ってコテージに入り、日向クンも入るように促す。

少しばかり遠慮している風だった彼は、キョロキョロと辺りを見回して「本人に招き入れてもらいたかったな」と呟いていた。

そうだよ。私もできるなら仲良くなつてから招いてほしかったよ。

「さすが十神……」

なんて言っている日向クンの独り言がたまに聞こえてくるが、あま

り深く考えないようにしよう。サイズなんてどうでもいいじゃないか。

彼と違って私はパンツハンターじゃないし。

「これでいいか？」

暫くして、私がタオルなど必要なものトートバックに詰め込み終わった頃に日向クンも準備ができたようだ。適当に見繕ったバッグに着替えを詰めてもらったのでそのまま受け取る。

「ありがとう」

「ああ。だけど着いて行かなくて大丈夫か？ 着替えもあるんだろ？」

「それなら慣れてる罪木さんがやると思うけれど…… そうだね、できれば来てくれた方がいいかもしれない」

そう私が言うと、すぐに日向クンは頷いて「なら、ちよつと待つてくれ」と言っつて自分のコテージへ入つて行つた。

私はその場で待たず、先にホテルの入り口にメモ用紙を貼り付けに行つた。

それから自身のコテージの方向を見てみればその姿は跡形もなくなくなつていて、新たな土台だけが建築された状態に変わつていた。

この分では3日か4日もあればコテージに帰れそうだ。モノミも仕事が早い。

「待たせたな。じゃあ行くぞ」

「うん、そうだね」

そうして病院に着いたはいいいけれど……

「がおー！ 病院へのお泊まりは患者と看病する1人だけだぞー！ ルール違反したら…… 分かつてるよね？」

ギラリと長い爪を見せつけるモノクマが日向クンを威嚇する。どうやらモノクマは日向クンがここに泊まることになるのがお気に召さないらしい。

モノクマの爪が異様に光っていて、よく研がれたナイフのようだ。あれに貫かれたら痛いどころじゃないだろうな。きつと死んでしまふよね。

「おいおい、なにやってるんだよ」

「あ……」

なんとなく手を伸ばそうとして日向クンの腕に遮られる。

あれ、なんで私、モノクマに近づこうとしているんだ？

「うぷぷぷ」

意味ありげに笑うモノクマに、日向クンはため息をついて言う。

「なら着替えだけでも手伝って帰る。それならいいだろ？ モノク

マ」

「むむむ、しょうがないなあー。早めにしろよー？」

妥協したモノクマが背を向けようとするが、それを「あ、ちよつと待って」と言っただけで私が引き止めた。

「なに？ どうしたの粕枝さん」

「十神くんがおかしくなったのはキミのせい？ あれはなんなの？」

あれが動機であることなど把握済みであるが、日向クンは知らないし、それを教えることも兼ねての質問だ。

「ああ、それね…… それは朝、オマエラが揃ったときに教えてやるよ。うぷぷぷ、楽しみにしてるんだね！」

「つまり、キミのせいなんだね……」

「バイナラー！」

逃げた。

まあ、これで日向クンもモノクマのせいだって分かっただろう。

ともかく、今は十神クンの看病こそが重要事項だ。ふらふらとしている場合ではないな。

日向クンに続いて病院内に入り、十神クンの病室を目指した。

「なにやってんだよお前ら」

病室に入った途端、私は目眩を覚えた。

床に包帯だらけで転がった罪木ちゃんと、それを真似して布団の上で転がっている十神クン…… 頭が痛いよ。

「まずはこれをごにかしないといけないな」

「…… そうだね」

日向クンがコテージに帰れた頃には朝時間まであと少しというと

ころになっていた。
ああ、先が思いやられる……

No. 22 『波乱』―絶望病―

翌朝、罪木ちゃんと十神クンを病院に残して私はホテルへ向かった。

2人の朝食はスーパーで買って持って行ったので、栄養に偏りがあること以外は特に問題ないはずだ。病院にもっとちゃんとしたキッチンがあれば良かったんだけどね……。仮眠室でお湯を沸かすくらいしかできないから仕方ない。

そして、レストランに着くと想定通りにかかなりの混乱が場を支配していた。

「もう、もうあたしやだよお！ おうち帰してえ！」

「終里、お前さんどうしたんじゃあ!?!」

終里さんはレストランの隅でずっと泣いている。

男勝りとも言えるいつものぶつきらぼうで明るい態度は見る影もない。それに式大クンも大分心配している様子だ。

「皆さんおはようございます！ 今日もいい天気ですね！ 良い日になりそうです！」

「み、澪田もか!?!」

「はい！ 澪田唯吹の澪に、澪田唯吹の田に、澪田唯吹の唯に、澪田唯吹の吹で……。澪田唯吹であります！」

「あ、そこは変わらないんだね……」

澪田さんの言動には日向クンと七海さんが反応している。しかし、クソ真面目病といってもそこまで言動自体は変わらないんだね。不思議だ。

「おいおい、どうしたんだこりゃあ?」

「あら、小泉さんと西園寺さんは来ないのでしょうか……。？ 十神さんと罪木さんは、狛枝さんの書き置きで来れなさそうなのが分かりますが……」

「あれ、2人とも来てないの?」

よかった、左右田クンとソニアさんは無事なようだ。

十神クンが絶望病にかかっているから、他にも予想外なところがか

かっている思っていたけれど、今のところは大丈夫なようだ。だけれど、まだ小泉さんと西園寺さんが来ていないようだね。なにかあったのかな？

花村クンは朝食もキッチンと並んでいるのできつと無事だろう。今日の朝食はイタリアンのようだ。

「……」

無意識に伸びた手を戻し、私は首を振ってお皿を取る。

それからパスタやピザなどを取り分けて割り箸を取った。

「粕枝、肉は食べなくていいのか？」

「ううん、今日はいいや。あんまり食欲がなくて」

日向クンが豪華な朝食を見ながら私に言ってくれたが、今日食欲がないのは本当だし別にいい。徹夜明けにあまり食べ過ぎても良くないだろうし。

「えっと、様子見て来た方がいいかな？」

フォークをクルクルと回してパスタを絡め取りながら七海さんが提案する。

「もうちよつと待とうか」

「瘴気に侵され、狂気に支配された者はこれだけか？」

田中クンが「病気になったのはこれで全員ですか？」という意味で発言した。するとお互いを確認しあっていた極道コンビが頷いて「坊ちゃんは無事ですな」、「ペコも大丈夫だな」と続けている。

あの2人は付き合いが長いから互いに変なところがあつたら気がつくだろう。

それ以降、ソニアさんや左右田クンなど、異常をきたしていない面々は大丈夫だと主張していく。

「…… 私もこの通りだね」

笑顔で言うと、日向クンが頷いて「そうだな」と言ってくれた。

うん、日向クンは当然大丈夫そうだね。

「ぼくも大丈夫だよ。あ、いや大丈夫じゃないかも…… 女の子に毒を吸い取って貰わないとぼくは…… もうダメかもしれないよ……」

「まあ！ 今すぐ治療しましょう！ 吸い出せば良いのですね！」
「ソニアさん!? 違いますからね！ 花村のは冗談ですから真に受け
ちやダメですからね!」

食事の用意が終わって厨房から出て来た花村クンも、彼らとの漫才
で無事を報せてくれたので、本格的に分からないのは小泉さんと西園
寺さんだけだ。

「ごめん、待たせたわ。日寄子ちゃんがちょっと変でさ、連れ出すのに
時間かかっちゃったのよ」

そうして、それぞれ互いに確認が取れたあたりで階段から小泉さん
と、彼女におぶわれた西園寺さんがレストランにやってきた。

「……」

おぶわれた状態の西園寺さんは手をだらりと下げていて、完全に小
泉さんが頑張っておぶっている状態だ。自分の体を支えようともし
ていないので大変そうだ。

しかし、おぶわれていることはともかくとして、西園寺さんが小
泉さんの迷惑になるようなことをするだろうか？

なんだか変だ。そう判断して彼女たちに近づき、「西園寺さん、ど
うしたの？」と尋ねる。

すると小泉さんが困った顔をしながら「今朝からこの調子なの
よ」と彼女を背中から下ろした。

「……」

彼女はポカンとした顔でそのまま座り込んでいる。なにも喋るこ
ともなく、完全に脱力しているように見える。

「西園寺さん、そんなに縮こまってちゃあ蟻さんみたいに潰されちゃ
うよ？ 普段自分がやっっていることを体験したいのかなあ？」

「おい、なに言ってるんだよ」

煽るようににやにやとしながら彼女の顔を屈んで覗き込んでみる
が、効果は特にないようだ。いや、僅かに目線を上げたがその目が問
題だった。

「ふーん、本当になんの気力もないんだね」

空虚だった。何も見ていない。思考すらも放棄しているような脱

力の仕方。明らかに異常な反応である。

彼女なら真つ先に噛み付いてきそうなものなのに、これは絶望病にかかっているともみていいだろう。

彼女の額に手をやって、自身と比べて見て眉を顰める…… やっぱりそうみたいだ。

「……」

ため息を吐いてふらりと立つ。

「あちつ！ これは、すごい熱だな……」

私の真似をして西園寺さんの額を確認した日向クンが、ビックリしたように後ずさった。それだけ熱かったということだろう。

「とにかく、これで病院にいる2人を除いて全員だよね。おーい、モノクマー！ 説明してよ！」

私も寝不足で大分危ないが、そんなことを気にしている場合ではない。先にモノクマに原因を訊いておかないといけない。

「はーい！」

「ねえモノクマ、この状態はなんなの？ これもキミのせい？」

続けざまに質問を浴びせて行くと「うぷぷ」と笑ったモノクマが勿体ぶって「それはね……」と言葉をためる。

「はーい！ 御察しの通り、これが今回の動機です！ この島に生息する小さな虫が媒介する伝染病…… これは絶望的な様々な症状を引き起こす」絶望病「なのです！ 言い表すなら終里さんは」

泣き虫病「で、澤田さんは」クソ真面目病「、西園寺さんは」

「脱力病」……「だね！」

モノクマが全員を見回して「うぷぷ」と含み笑いをする。人を馬鹿にしているようなその赤い目と目があつた気がして、すぐに逸らしてしまった。

それからさらに続けてモノクマは言う。

「絶望病の人に触れた人ももれなく伝染するので気をつけてね！ うぷぷ、汚物は消毒だーって今の内に始末しておくのもありかもしれないね？ うぷぷ、ぶひゃひゃひゃひゃ！ アーッハッハッハ！」ひとしきり3段笑いを堪能したモノクマは満足したのか、騒然とす

る皆を置いて再びどこかへと消えていってしまった。

「う、移るってマジかよ!」

「ちよつと、なんで避けようとするのよ!」

「……でも、これが全員にかかったら危ないかもしれないよ? 一応、対応は考えておくべきだと思います」

七海さんのいう通りだ。

これで全滅なんてしたら笑えない冗談でしかないからね。

「今のところ……患者に触れたのは私と、罪木さんと、日向クンと、小泉さんだね」

式大クンは近くで心配していたが触れてはいない。

隔離しようと言い出す肝心の西園寺さんが絶望病になってしまっているのです、仕方がないが私が誘導するしかないだろう。

「一旦病気が落ち着くまで、患者は全員病院に引きこもっていた方が良さそうだね」

「そ、それって隔離するということですか? ですがそれはさすがにやり過ぎなのでは……」

「え? ソニアさんは全滅したいの?」

申し訳ないが、全滅だけはいただけない。だからその言葉には賛成できないよ。

「全滅!」

「嫌でしょ? 全滅するのはさ。なら切り捨てることも大事だよ……」

私たちのことは気にしないでいいから、避難しなよ」

「貴様……自ら下ろうと言うのか?」

「……違うよ。別に、この病気が治らないなんて言っていないでしょ? 治るまで集中治療したほうがいいって言ってるんだよ」

私がそう言っただけを向くと日向クンが眉を顰めて「お前、さつきから言いたいことが滅茶苦茶になってるぞ?」と私に向かって手を伸ばす。

「……ごめん。でも、余計なお節介だよ」

伸ばされた手を素早く左手で弾いて、一歩引く。

嫌われ役になってでもちゃんと治療していく方針にしないとダメ

だ。

…… こういうとき、きつと十神クンならもつと上手く皆を纏められるんだろうな。そう思うと少しだけ悔しいけれど、今の私にはこういうやり方しかできそうにない。

スカートが皺くちやになるくらいに拳で握りしめ、皆に見えないよう太ももを思いつきり抓って頭を覚醒させる。

「治療してる間だけだよ。皆だつてモノクマの動機に乗せられるのは嫌なんじゃないの？ 治療しない皆もなるべく3人以上で固まって行動してればいいし、病院に行く人たちは早めに病気を治せるように協力してくればいい。連絡がつかないことなら…… なんかしら方法を考える必要があるけれど……」

「ああ、それならオレがなんとかするぜ」

俯いたまま淡々と言葉を告げたが、左右田クンがやつと反応してくれた。

「なんとかできるの？ なら、よろしく頼もうかな……」

「ああ、通信機みたいなものでもいいならなア。それなら電気街でなんとか見繕つてみせるぜ！」

「あ、あの…… 隔離は決定事項なんでしようか……？ ？」

「うーん、今はそうするしかない…… と思うよ」

よし、これで同じ流れにできたかな。なら、もうやることはない。

あとはここにいる患者を病院に連れて行くだけだ。

「小泉さんも、西園寺さんに触れてるから一緒に来てもらってもいいかな？」

「最初からそうするつもりだったから別に遠慮しなくていいのよ？」

日寄りちゃんも唯吹ちゃんも、赤音ちゃんも…… 皆心配だから」

そう言つて、彼女の言葉にすら反応しなくなった西園寺さんを背負った。その姿はどこか寂しそうで、こちらが申し訳なくなる。

仲、いいもんね。

「じゃあ日向クンは終里さんを連れて来てくれる？ 昨日十神クンと会ったからキミも危ないだろうし」

私が言った言葉に少しも疑問を持たず、彼は頷く。

昨日、日向くんは十神くんには触れてないんだけどね。まあ、長時間側にいたし、範囲内だろう。

「澪田はどうするんだ？」

「澪田さんなら言葉で言うこと聞いてくれると思うよ。ね？」

「はい！ 病院についていけばいいのですね！」

「そうそう、その間は手でも繋いで行こうか」

「つつこりと笑って彼女の手を持つ。」

「じゃあ、左右田くん。連絡手段が整ったら病院に来てね。あと、皆は一箇所にちゃんと留まってること。いい？」

「ああ、準備できたらそっちに説明しに行く。コエーけど、触れなければいいんだよね？」

「そのはずだね」

これからの方針をしつかりと決めて彼らと別れる。

同じ島のモーテルに誘導することはできなかったが、どうせ通信機の範囲が狭いので、そのうち皆揃って第3の島に来ることになるだろう。

それからは、西園寺さんを背負った小泉さんと、終里さんの手を引いて行く日向くんと一緒に病院に向かった。

話し合いの最中も終始戸惑っていた花村くんには暫く会えなくなる。あーあ、美味しい食事が暫くできないとか絶望的だよね……嫌になるよ。

終里さんを励ましながら前を歩く日向くんをじっと見つめる。彼とは少し気まづくなってしまうが、これで良かったのだ。これで良かったはずなのだ。

無防備な彼の後頭部を見つめながら無意識にスカートへ手が伸びるが、いつも所持しているそれがなかったために手は空を切った。

…… まったく、こんなじゃあ鉄パイプは暫く側に置けないな。

伸ばした手をギュツと握り、空になったホルダーをスカートの上から押さえて苦笑いをした。

澪田さんと握った手が妙に熱くて、心地良くて、七海さんではないけれど無性に眠たくなってくる。寝不足が祟ってか頭がふわふわし

ているようだ。

……その衝動を押し殺しながら、無言のまま病院に着き3人を他の病室に入れる。

その後はふらふらする私に、罪木ちゃんが心配して、「休んでくださいあい！」と一生懸命お願いされてしまったので、自分の病室へと戻ることとなった。

日向クンと小泉さんはモノクマのルールがあるので治療に付き合ったあと、夜時間になったら一旦コテージに帰るらしい。

ふらふらの足取りでベッドに入り込み、私はそのまま…… 電池が切れたように眠りについた。

……

……

……

なんだか息が、苦しい。

そう感じ始めたのはいつだったのか。

「…… っふ」

だらだらと流れる汗に熱い、熱いと悲鳴を漏らす体を叱咤してなんとか瞼を上げる。うっすらと映った視界には恍惚とした “ 彼女 ” の姿があった。

しまった、と思ったときには遅かったのだ。

必死に抑えつけていた言葉がポツリ、ポツリと頭の中に浮かんでは消えていき、そして錆のようにこびれついて消せなくなってしまう。

「おはようございますう」

彼女の瞳に映った歪んだ愛情が私の姿を捕らえる。

蛇に睨まれた蛙のように、あるいは思わず手を伸ばしてしまいそうになる甘い蜜を見つけたような、矛盾した感情が私の頭の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

「つ、みき、ちゃん……」

昼間はずつと起きていたから大丈夫だった。

そう、例え “ 熱 ” があっても耐えられた。耐えてみせていた。
“ 衝動 ” にも抗ってみせていた。

耐えられたのがなぜだかは分からない。もしかしたら、モノクマが私を苦しめたかっただけなのかもしれないが、確かに私には理性が残されていたのだ。

「えへへへ……」

ヨダレを垂らした彼女の顔が間近に迫る。

首に埋められたそれは私の体と同じくらい熱くて、彼女が絶望病にかかっているのは明白だ。

まさか左右田クンの通信機が作られる前にこんな事態になるとは思っていなかった。正直想定外。しかも今は鉄パイプも身につけていない、完全な無防備だ。

それに……

「分かってますよお…… 今貴女は絶望病にかかっていますよね？」

さあ、貴女の願いを言ってみてくださいよお…… 我慢なんてよくありませんからねえ」

妙に艶っぽい声で放たれた言葉が私の中に浸透するように入り込む。

耳元で微かに聞こえた笑い声はどう聞いても真っ直ぐとは言えず、歪んでいる。

そして首に鋭い痛みが走る。

しかし、わざと急所を外したそれに甘ささえ感じられて、痺れるような感覚に歯噛みした。

—— たりない。

首から流れる暖かい血液が布団を汚す。

少しずつ傷つけるように動かされる手に持っている物は、見ないようになっているのに嫌でも視界に入り込んでくる。

先程から私の視界の端にチラチラと映ったのは銀色の輝き。

そして、とうとうそれに目を奪われて思わず手を重ねてしまってい

た。

—— ああ、死にたい。

心の奥から溢れ出るようなその衝動に目を瞬かせる。

彼女の持つメスを、手を重ねたまま自らの首に添えて笑みさえ出してくる私は今、完全におかしくなっている。

分かっている。分かっている。分かっているけれど、我慢をしなければいけないのは分かっているけれど、それでも抗いがたい。

熱に朦朧としながら僅かな反抗心さえ押さえ込まれる。

モノクマへの憎しみさえ消え失せて、胸いつぱいに溢れる自分自身への殺意と、罪木ちゃんへの殺意。

死にたい、殺したい。

相反する思いが混ざり合ってぐちゃぐちゃになる。

「どうしたんですかあ？ さあ、言ってみてくださいよお」
言ったら最後だと、分かっているけれど。

「大好きな、大好きな…… 貴女に言っただけですよお」
意識の外で形作られた笑みが、肯定してしまう。

あれ、私、外に出てなにがしたかったんだっけ。どうして、死にたくなかったんだっけ。どうして、殺されなくなかったんだっけ。

…… どうせ3章これを乗り越えても死ぬ未来しか見えないのならば、諦めてしまおうか。

どうすれば？ どうしたい？ 分からない。

分からないよ、教えてよ十神くん、私はどうすればいい？ 日向くんだったらなんて言うんだろう？ 言ってくれるんだろう？ 分からないよ。

死にたい。違う。殺されたい。違う。殺したい。違う。どうせ死ぬのなら、一矢報いたい。…… 。 どうすればいい。分からない。どうしたい。分からない。助かりたい？ …… 。 皆と、ずっと、一緒にいたい。 …… 。

「貴女は今、無性に死にたいんでしょう？ ねえ……」

否定、否定、肯定、否定、否定、肯定、肯定、肯定。私は……

「さびつき、さあん？」

.....

「え？」

なんで、なんでキミがその名前を知っているの？

自殺衝動さえどこかに飛んで、一気に頭の中がクリアになったのが分かった。

No. 22 『波乱』―暗病―

今…… 彼女はなんて言った？
私を、なんと呼んだ？

殺意と死への憧れがぐちゃぐちゃに絡まり合って混ざり合い、訳が分からなくなっていた頭が妙にすっきりしている気がする。

相変わらず熱は持ったままだ。だって、触れ合っている彼女の体がさして熱く感じないからね。

絶望病に侵された私たちが近い体温でいるからこそ、熱かったり冷たかったり差を感じないわけだ。

だから、つまりこれは…… 分からない。分かるはずないよ。

「さびつき……？ なんのことかな？」

笑みは引きつっていないだろうか。声は震えていないだろうか。

いつものように大げさに笑って、わざとらしく演技してみる。

せつかく生存願望を思い出せたので逃げることも考えたが、首元は押さえつけられているのでそれはできない。

押し付けられたままのメスでつ、と一筋、また一筋と血が流れていく。

「またまたあ…… 私のことが分からないんですかあ？ いけない人ですなあ……」

彼女が一層顔を近づけて私の首筋に埋める。

「いっ……」

首筋の傷をなぞられ、血を舐め取られたことでピリリ、とした痛みが襲い体が思わず震えた。しかし必死に動こうとしても、やはりお腹の上に乗っている彼女を退かすことはできない。

そもそも、最近は夜時間にいろいろすることが多くて寝不足なのだ。それに加えての高熱。人を持ち上げる程の体力は残っていない。

「ああ、そういえば…… 顔を合わせたのは入学してからですからあ…… さすがに分かりませんかあ？」

「…… 入学式の日ここに連れてこられたんだから、初対面なのは当たり前じゃないのかな？ それ」

彼女の言いたいことは分かるが、それは私が知らないはずの情報だ。私や十神クンのような人ならば、この言葉から失われた2年間のことを指すのだと察しがついてもいいかもしれないが、モノクマの言う「記憶喪失」の話そのまま鵜呑みにしているというのも違和感がある。普通なら本当の可能性を視野に入れつつ信じない方針で行くだろうからね。

観察したところ、今の彼女に私を殺すつもりはなさそうだし、今のうちに会話して時間を稼いでおいたほうが良さそう。そうすればいつか誰かが……いや、そんな悠長に構えている場合ではない。

考えろ。打開策を見つけるんだ。

私は、こんなところで……「殺されるわけにはいかない」「んだから。」

「しらばっくれても無駄みたいだね……なら、キミは誰？」

「私は私ですよ……罪木蜜柑ですう……」

「質問を変えようか……」

注射、病院、長い黒髪……そもそも「さびつき」を知る機会なんて1つしか思い当たらない。

「そうだね……キミは夢日記をつけたことがある？」

「ええ、ありますよお」

やっぱりか。

まさか、原作キャラクターの中に私と同じ同類がいるとは思わなかった。それも、よりによって罪木ちゃんなのか。

問題は彼女が誰なのかだ。うろつきとうそつきには入学前に面識がある。ゆめにつき派生の主人公は膨大な数がいるから絞り込むのも大変だ。

チャット上でのハンドルネームは私の「さびつき」や織月の「うろつき」などから、最後になるべく「つき」の入るものになっていた。

そのために、私が知っている派生の主人公の名前が何人も集まったことが分かっていたのだが、派生全てではないとはいえ知り合いの数は多く、その中から絞るだなんてほぼ不可能に近い。

不正解したらどうなるか分からない以上、片っ端から名前を挙げて行くのは避けたい事柄だ。

ならば、ならば、彼女は…… これで、決め打つ。

「キミは………」 “ やみつき ” “ さん、なのかな? ”

私の言葉に恍惚とした笑みを更に深めて彼女は 「はい」 と、肯定した。

「…… 本当に?」

「嫌ですねえ、あなたがそう言ったんじゃないですかあ」

自分が言ったことだけれど、とても信じられなくて思わず疑問を返していた。

“ やみつき ” “ …… それはゆめにつき派生 sick mind の主人公の名前だ。長い黒髪に白いリボンを左右につけたとても可愛らしい女の子。彼女は病院や教会に縁があり、作中に樹木に磔にされた人型が見られることから、彼女は植物状態なのではないかと言われている。

また、この sick mind には主人公が3人おり、内2人の主人公は姉妹だと考察される。最後の1人 “ いらつき ” は “ やみつき ” の友達と考察されることが多い。

一般的には姉の方が “ やみつき ” で、妹の方が “ くらやみ ” だと言われているが…… 私の知っている彼女に姉妹なんていないはずだ。

それに、彼女を “ やみつき ” とするにはいくつかの違和感が残るのだ。

「……」

「えへへ」

私が頭の中で考えながら彼女の様子を見ると、彼女は特に何も言うことなくただ笑っている。相変わらずメスは持ったままだが、まだ使うつもりはないようだ。

そもそも、 “ やみつき ” という少女は皆から愛されている少女である。必要とされていた少女なのである。

そう、妹に植物状態にさせられ、親友 “ いらつき ” が妹の “

くらやみ “ を殺そうとするほどに愛されていたのだ。

罪木ちゃんには悪いが、見た目以外に似ている部分は皆無に等しい。それが私の中の評価だ。

対して、 “ くらやみ ” は両親からも必要とされず、姉との思い出をエフェクトではなく写真という形で収集していく主人公だ。少なくとも姉は “ くらやみ ” を認めていたかもしれないが、逆に言えば姉以外に “ くらやみ ” を必要とする人物はいなかった。

性格や性質だけ見たら罪木ちゃんが “ やみつき ” であるはずがない。あるはずがないんだ。

「やみつきさんって妹さんがいるんじゃないっけ」

「はい、いますよお…… 姉ですけどね」

は？ 姉？

なにを言っているんだ。チャット内では妹だと言っていたが……

「分からないって顔ですねえ…… ねえ、粕枝さあん…… そもそも、

“ やみつき ” の経歴に矛盾があるとは思いませんか？」

彼女がクイズでも出すように笑う。

分かっている。矛盾だらけだ。しかし、それは私の知っている余計な情報も含めての話。チャット内で言っていたことに、どこか矛盾があったのか。

「いつも言っていましたよねえ…… “ 可愛い妹がいる ” んで

すうって、それからそれから、 “ たくさんのお菓を飲む ” のが大

変とかあ、 “ 妹がずっと看病してくれる ” とかあ、 “ 植物状態

になった ” とかあ……」

……見えた。

なんでこんなことに気がつかなかったんだらう。

「それは違うよ…… 植物状態になってたらチャットなんてできるわけない」

「うふふふふふ……」

自ら正体をバラしていくのか。

そうか、キミは…… キミの正体は、 “ やみつき ” と名乗っている “ くらやみ ” だったのか。

よく考えたらそうだ。チャットのハンドルネームなんて全て自称でしかない。他人から与えられた名前ではないのだ。ならばいくらでも自分を偽ることだってできるし、植物状態の姉の性格を装って書き込みをすることだって簡単にできる。

彼女の家族関係は原作で語られることがなかったが、きつと姉妹なんていなかったはずだ。これは、私が “ さびつき ” であることで生じたズレなのだろうか。

「また、すぐにバレてしまいましたあ……」

「また……？」

つまり、学園生活で既に私は見破っていた…… ということなのか。

「お姉ちゃんが悪いんですよ…… あの人はなんでもできませんでした。だからお父さんやお母さんからチャホヤされて、ドジばかりな私に居場所なんてありませんでしたあ……」

これは、彼女も話したいのか。

かつて、私が彼女に話したときのように。

「そう、あの人は秀才でした。でもでもお、希望ヶ峰学園にスカウトされたのは、私だったんです」

彼女の顔が愉悦に変化していく。ヨダレまで垂らして、本当に嬉しそうに。

「あの人に特別な才能なんてありませんでしたあ…… あの人はただの秀才止まりだったんです。私は嬉しかったんですよお？ これですよと認められる…… やつと許してもらえるって」

歪んでいる。

彼女が “ 超高校級の保健委員 ” になった理由が “ 自分の怪我を治していたら自然に医療関係が得意になった ” という時点で、家にさえ居場所がなかったらしいことは考察できていた。

分かっていたはずなのだけれど、正直いざ目の前になると結構怖い。

「うふふふ、怯えないでくださいよお……」

「あれ、分かる？」

「分かりますよお…… でも狛枝さんは逃げようとしませんよね。諦めているわけでもありませんし、私を受け入れようとしてくれている…… そんなところは、私大好きなんですう」

「そっか……」

それは…… 受け入れるって、ちゃんと決めてたからね。

「えっと続きですねぇ…… 私は “超高校級の保健委員” としてスカウトされました。それで、みんなは許してくれたと思いますかあ？」

そんなはずがない。

それで認められていたら、彼女はここまで歪んでなどいないのだから。

私は静かに首を振った。

「そんなに悲しそうな目をしないでください…… 同情なんてほしくありません。でも、あなたの思った通りなんです…… 私は、私は決して許されませんでした」

—— どうしてお前が

—— なんであの子じゃないの？

—— あの子に “それ” を譲りなさいよ

「そんな風に言われましたあ。おかしいですよねぇ、スカウトされたのは私です。スカウトの通知を貰ったのも、私です。ですけど、それを寄越せって言ったんです。お前には相応しくない、学園に直談判するって」

同情するなど言われても、できないよ。

どうしても、悲しくなってくる。それが自己満足でしかないことは分かっているけれど、罪木ちゃんがにこにここと笑いながらこんなことを言っているのが、1番私は嫌だ。

「でも、直談判は結局されませんでしたあ…… 本人が、お姉ちゃんがそれを止めたからですう」

—— やったじゃないですか！ 私、蜜柑ちゃんを応援してるから。絶対絶対、お父さんたちに認めさせるから、蜜柑ちゃんは気にしちゃうダメですよ

「あの人は、私の唯一の理解者でしたあ。だから…… だからこそ……」

—— ねえ、あんた…… ずっとお姉ちゃんを独り占めする方法を知りたくはない？

「偶然知り合った女の子が、教えてくれたんです」

—— それはね…… あんたがずっとずーっとお姉ちゃんを看病できるようにすればいいのよ！ そのお手伝いを、私様がしてやっても構わないわ！

ここで出て来るのか…… モノクマ。

いや…… 江ノ島盾子。

「特別なお薬の仕入れ方を教えてもらって、お姉ちゃんに渡しました。ずっとずっと飲ませ続けましたあ。そしたら、お姉ちゃんは眠り続けることになったんです。当然、疑いは私に向きましたが、バレることはありませんでしたあ。大好きなあの人をずっとずっと看病し続ける…… 私がいないとあの人は生きていられない…… なんて、なんて、素敵なことなんでしょうか！」

罪木ちゃんはメスを下ろすと、注射器を懐から取り出して頬ずりする。

「まさか……」

「その、まさかですよお」

私も、そうしようというのか？

頭を動かせ、思考しろ。いま、この状況をどうにかするにはなんて言えばいい？ これを切り抜けるのに必要なことは、なんだ？

考えろ私。私ならできるはずだ。確かに死ぬわけではないが、そんなのは嫌だ。植物状態になんてなってたらメイに謝れないじゃないか！

外で皆と楽しく過ごすことだつてできないじゃないか！

そんなのは、嫌だっ！

誰か…… 誰か……ううん。

「……」

目を瞑る。

誰も来ない。いやそもそもそんな可能性を考えてなんていられない。

本当は、もしかしたら誰かが来るかもしれない……けれど、それを信じられるほど、私は強くなってるんだよ。信頼よりもなによりも、どうしようもなく死ぬのが怖い、臆病で卑怯な奴なんだ。

私は、誰かが助けてくれるなんて都合の良い希望が抱けない。

こんな私で、ごめんね……日向クン。

「粕枝さん？」

冷静になれ、落ち着くんだ。動揺してはいけない。

いつものようにすればいい。煙に巻くような詭弁で言いくるめ、なんとかこの状況を打開するんだ。

たとえ彼女を傷つけようとも、今だけは関係ない。だってこれは私が生きるために必要なことだから。

「……」

そうして、私は口元に笑みを浮かべた。

嘲笑うような、馬鹿にするような、残酷な笑みを貼り付けて、できるだけ冷たくなるように、言い放った。

「キミ、馬鹿でしょ」

「はあ？」

どうしよう、豹変中の罪木ちゃんが怖い。でも、頑張らなくちゃ。

「そんなことで満足できるなんて、案外大したことないんだね」

「どういうことですかあ？」

怒ってる。

でも、彼女なら今の馬鹿にした私に手を下さないと確信できる。

何故なら、彼女の願いはそれでは達成できないからだ。

「本当、キミって臆病だよな」

私ができることじゃないけどさ。

「怖かったんでしょ？ お姉さんに必要とされなくなるのが。だから、お姉さんが優しく接しているうちに、思い出が汚されないうちに

“ 標本 ” にしたんだ。いや、保健委員のキミに言うのなら “ ホルマリン漬け ” の方がいいのかな？」

彼女は彼女に好意を向けている人物を永遠にしようとしたのだ。永遠に自分を好きだと言った頃のままでいてほしかったのだ。時間が進めばいつか嫌われるかもしれないから。実は嫌われていた、なんて残酷な真実を知ってしまうかもしれないから。

だから美しい思いのまま、植物状態にして保存しようとした。ゾツとする話だよね。

だから、今彼女に暴言を吐いている私とその注射器を刺されることがない。

「キミは人が信じられないんだね。当然だよね、両親にすら必要とされないだなんて、あーあ、可哀想」

とんだブーメランだ。

馬鹿みたいだね、彼女に言っている言葉全て私にも当てはまるんだ。

「黙ってください……あなたがそんなこと、言わないでください……」

「残念だけど、私はキミの期待には応えられないね。だって、私を殺そうとする人を好きでい続けるなんて無理に決まってるでしょ？」

「やめて…… やめてやめてやめてやめてくださいよお！」

「私は今のキミは」

壊れたように「やめて」を連呼する彼女にトドメの言弾を撃ち込んでやろうか。たとえ残酷でも、彼女の願望をそのまま受け入れることなんて到底できないのだから。

「許して許して許してえ……」

「私との約束を守らないキミなんて、大っ嫌いだよ」

「あ…… ああ…… つ、や、約束………？」

そう、約束だ。

たとえ口約束でも、今の彼女はそれを破ろうとしていたのだ。許せるものではない。

「キミが言ったんでしょう？ なにがあっても私を助けてみせるって。皆のことも、助けてくれるってさ」

——粕枝さんが怪我をしたら絶対絶対治しますし、なにがあっても延命処置しますう！ 皆さんのことだつてそうですよ。死なせたくないなら、失いたくないなら…… 無理矢理にでも助けてみせませう！

「あ……」

「キミにとってあの約束つて嘘だったの？ 心から思つてくれたことじゃなかったの？」

「ちがつ、違いますう！ 私は、本当にっ」

「私は嘘が嫌いだよ…… ねえ罪木ちゃん、物事には許されることの限度があるんだ」

勿論、パーティで私がやらかしたことは許されることではないよ。そう注釈してから彼女に問う。

「キミは、キミのしようとしていることは許されることだと思う？」

たとえ絶望に染まっていたとしても、この言葉が届けばいいと思う。

「ゆ、許され、ません。大切な人を失う絶望なんて……… 本当は」

「本当は？」

「……… 嫌に、決まつてるじゃないですかあ」

彼女の注射器を持つ手が震え、上を見上げれば、大きな瞳一杯に涙を溜める彼女の顔があった。

「絶望を…… 肯定すれば…… 痛く、ないじゃないですかあ。悲しく、なくなるじゃないですかあ…… だからだからだから、心に包帯を巻きました。そうすれば、痛く…… ないからあ」

キミが絶望に堕ちたきつかけはそれか。

「悲しいのは嫌です。苦しいのも嫌です。全部肯定しちゃえば悲しくなりませんし、苦しくもなくなります…… だからっ、あんなことがあつても私は、喜んで、いられたんですう……」

あんなこと？ 学園生活でなにかあつたのかな。それともお姉さんの件か？

さすがに覚えていない私では推測することができないな。

「ああ、そつか…… だから狛枝さんは…… あの人が死んでも、絶望しなかったんですねえ」

「…… なんのこと？」

江ノ島盾子の死についてか？

それなら知っていたから、という理由もあるけれど…… 私、あの人のことは人間として大嫌いだし、絶望する理由にはならないと思うけど。

「ですが、私たちには使命があります…… コロシアイは、起こさなければなりません……」

「それって、キミはモノクマ側ってこと？」

「私は裏切り者ではありません。ですけど、思い出してしまったからには、やらなくちゃいけないんです」

裏切り者を名乗ることもできたはずだが、それはしないのか。

「ねえ、なんでキミはモノクマに従うの？ 絶望病とか、絶望なんて言葉を使ってさ…… それがモノクマの求めるものなの？」

「そうですね。私たちは、絶望を伝染させなければなりません。あの人のために……」

私 “ たち ” …… ね。

それにしても、あれだけ否定してあげたつてのにまだそんなことを言うのか。それじゃあ私がここで死ぬ運命が曲げられないじゃないか。

「モノクマが求めるのが絶望なら…… どうしてそれに従うの？」

「…… へ？」

だって、あの1人でSMしてるような人のことだよ？

サドでもマゾでもいけちゃう上に計画がぶっ壊されて喜んじやうような人だよ？

全てが上手く行ってしまったら、それこそモノクマにとっては予定調和でツマライなことだ。なぜ、そう考えない？

「モノクマが絶望を好んでるなら、絶望させてやればいいじゃない。私たちが絶望させられるだけなんてアンフェアだよ。だから逆

らってやればいいんだよ」

この詭弁が上手くいかなければ私は殺される。

それはダメだ。私はこれ乗り越えなければいけない。

私は “ここで死ぬわけにはいかない” なんだ。

「計画をぶっ壊して、絶望させてあげればいいんだよ。ねえ、罪木ちゃんはどうしたい？ ねえ、やみつき。キミは同類わたしと絶望あいつ、どっちを選んでくれるのかな？」

死にたくない。

その言葉に全てが集約した渾身の命乞いだ。

まるで面倒な恋人のような言い分だが、この究極の選択に全てはかかっている。

「絶望についていったらキミはひとりぼっちだ。絶望が大好きなモノクマがキミに希望をくれるわけがないんだからさ。でも、私たちは違う。キミはそれを知ったでしょ？ 知れたでしょう？ ほら、キミはどうしたい？」

「私…… は」

モノクマが邪魔しに来ないのは疑問だが、モノクマはコロシアイにあまり関与しないはずだから自重しているのだろうか。

見ているのならせいぜいやきもきすればいい。そして自分が関与できないことを絶望すればいいんだ。

「私は…… つー！」

彼女が注射器を振り上げる。

そして、まっすぐ振り下ろされたそれは、私の頭の横スレスレを通り、枕に突き刺さった。

「罪木ちゃん……」

「う、うううえ…… うえええん！ ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！ できません、私には、できませんっ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

私の上に乗ったまま、彼女が私の肩に顔を埋めて泣きじゃくる。

それは彼女の言う “あの人” への謝罪だ。私は、彼女の信頼を勝ち取ることができたのか。

…… 私自身は欠片も皆を信じていることができているのに？なんて皮肉なんだろう。

「あ、はは……」

モノクマはザマアミロだね。計画が上手くいかないことに、せいぜい絶望すればいい。喜べばいい。

…… いや、こんな汚いことを考えていては彼女に失礼か。

「……」

彼女に言うべきことは…… 「よく頑張ったね」？ それとも褒め言葉？

いや……、どれも違うな。

「ありがとう、罪木ちゃん。私を信じてくれて、ありがとう」

「こ、まえださあん……！ わたしわたし、大変なつ、ことを……でもっ！ でもでも私はあ…… うえええん！」

泣き続ける彼女の背に手を置き、一定のリズムでささる。

震えながら泣く彼女は打ち勝ったのだ。確かに、絶望に打ち勝ったのだ。

しかしどうしても思ってしまうのだ。これで、良かったのだろうか。いや、良かったはずなんだ。

…… たとえ、今後彼女を悲しませることになるかもしれないけれどもだ。

「やて……」

彼女が泣き止んだタイミングで言葉を漏らす。

罪木ちゃんは涙を手で拭きながら、「ど、どうしましたかあ？」と弱々しく言った。

おっと、手で拭いちやったら涙の跡が赤くなって残っちゃうよ。あとで冷やしたハンカチを使って、ちゃんと拭こうね。

「ねえモノクマ、見てるんでしょ？ 出てきなよ」

見られていなかったらそれはそれで恥ずかしいが、奴には反則とも言える。目。と。耳。があるからね。

殺人が起こりそうなきには必ずこちらを監視しているはずだ。

「……」

「ひゃう!？」

「えっと、ツツコミどころはたくさんあるけど……」

モノクマは静かにベッドの下から這い出て来たが、そこはなにも言うまい。

耳までぺたんと伏せて怪しいキノコを頭から生やし、明らかに落ち込んでいますと自己主張しながらモノクマは俯いている。

「しよぼんぬ……」

「……」

ふざけたことを言っているが、中身が中身だからか罪木ちゃんの震えがすごい。

私は、足の間で震えている彼女の背を撫でたままに、そっと自身の肩に彼女の頭を寄せる。なにも聞かなくて良いようにと。

図らずとも向かい合って抱き合っているような状態になっているが、女同士だし別に構わないだろう。あ、罪木ちゃんが嫌じゃなければだけれど…… そのままモノクマを見ないように縋り付いてきているので、多分大丈夫だと思いたい。

…… やだな、意識すると恥ずかしくなってくる。

「ボクは…… ボクはとても悲しいです」

「ああそう…… ねえ、今どんな気持ち？ 絶望しちゃったかな？」

「だったら良かったじゃない。絶望が好きなんでしょ？」

1度言ってみたかったんだよね、これ。

「ちよつとー！ なんでコロシアイしないのさ！ 罪木さんは絶望に絶望してた頃の記憶で、オマエは殺人衝動に自殺衝動…… コロシアイにならないほうがおかしいじゃん！ 女同士の百合百合しい友情なんて見せつけてくれちゃってさあ！ せっかくボクが用意したのにー！」

わざとらしく怒ってみせるモノクマとは視線を合わさずに彼女の耳を塞ぐ。

モノクマに逆らう選択をした今、彼女を責める言葉は毒にしかならないからだ。

「って言われてもね…… ならなかったものは仕方ないでしょ。だから

らさ、私をその気にさせることはできなかったキミの負けだよね？」
「途中までその気になってたくせに？」

それを言われると弱いなあ。

彼女が「さびつき」と呼んでくれなかったら、きっとそのまま殺されていたに違いはないね。

「はあ…… 入学前から繋がりがあるのは知ってたけど、まさかあの状態の罪木さんを止めちゃうなんてね。…… ちよつとおもしろいじゃん！」

「…… 絶望的に？」

「もつちろん絶望的に！ …… でもロシアイはしてもらおうよ？」

オマエのためにスペシャルな動機を用意してあげるからさ…… うぶぶぶ」

なるほど、さすがのモノクマも知らないことを分析する、なんてことはできないよね。いいことを聞いたよ。

「キミのことだから最初から私に勝たせる気がないと思ってたけど、ちやんと手加減してくれてるんだね。今回は助かったよ」

につこりと笑って言う。

勿論煽り目的だ。こいつのことだから手加減されているわけがない。

「ボクだって心が読めるわけじゃないんだから、その辺のさじ加減は大変なんだよ？」

おつと、乗ってきたか。

でも…… ちよつと気になる単語が聴こえたな。

「へえ、あまりにもこつちの感情に機敏だから、心でも読まれてると思ってたよ」

なんでもない風に装って言う。

きつとバレているだろうが、あからさまに探りを入れるようなことはしない方がいいだろう。

「そんな卑怯なことができるとしたらモノミしかいないよね！」

これは冗談か、それとも本気で言っているのか。判断がつかないが、そつちはモノミに訊けばいいや。

「そうだね、心なんて読めたら私たちの ” 超高校級 ” なんて相手にならないくらいなの ” 超能力 ” だもん」

“ 超高校級どころではなく超能力 ” …… そう言いたいところだが、それはできない。

そんなことを言ってしまったらモノクマの中身が ” 私たちと同じ超高校級 ” であると断定するような行為になってしまうからだ。

普通、こんなデスゲームを主催するのは大人をイメージするものだ。金持ちの道楽にしても主催は大人が取ることになるだろう。変態犯罪者の殺戮ゲームだったとしてもそうだ。

なんらかの大きな組織が絡んでいることが分かっても、そのトップが高校生だなんて誰が思うだろうか？

だから今、私が奴の中身を ” 高校生 ” と断じてしまえば推理が飛躍すぎて不自然になってしまう。

…… 私がそれを知っていることを知られてはいけないのだ。

「ま、それはとにかくとして…… ねえ、モノクマ。ちよつとお願いがあるんだ」

「コロシアイの相談ならいつでもウエルカムだよ！」
「違うよ……」

この様子だと本当に心が読めるわけではないんだな。

「…… どうせキミはこの病気の特效薬でも持つてるんでしょ？ それを貰いたいんだけど…… ほら、動機が機能してないんだからもういいよね？」

「……」

拒否の姿勢か。なら、ちゃんと取引きする必要があるのか。

「モノクマにとっておもしろいと思えるような ” 見世物 ” を用意してあげる。だから特效薬を頂戴。…… できれば錠剤がいいなあ」

注射なんて渡されたら罪木ちゃんに打ってもらわなくてはなくなる。その注射の中身が毒だった場合、クロになってしまうのは彼女だし、万が一の可能性も考えて錠剤をこの手で飲む方が良さだろう。

「いいでしょう！ それで手を打ってあげるよ。で、いつそのおもしろいことは始まるのかな？」

「左右田クンの通信機次第だけど…… 明日の夜か、その次の明け方くらいかな」

悩みつつも大体の時間を伝える。

それを聞いたモノクマは机の上に2粒の錠剤が入った袋を置く。

「2粒だけ？」

「あとは成功報酬だよ！」

「…… しょうがないな」

殺人衝動なんて持っていたら危ないし、1粒は必ず私が使うしかないよね。

本当は十神クンにあげて、あとのことを丸投げしたいくらいだけれど…… いつも頑張ってくれてるから、もう少しだけ休んでいてもらいたいし、素直に私と罪木ちゃんを使おう。

「あ、そうだ」

トテトテと足音を立てながら病室の扉まで歩いていき、モノクマは背を向けた体勢からいきなりグリーンと首だけを回して言った。

「おもしろくなかったらペナルティを用意するからね！」

「…… 精々頑張るよ」

首だけ回るってどこのホラー映画だ。キモいわ。

「もういいよ、罪木ちゃん……」

モノクマが扉から出て行って静かになった病室には、私の声だけが響いた。

「…… あれ？」

返事がない。

肩を軽く叩いてみても、揺すってみても効果はないようだ。

「…… 泣き疲れて寝ちゃったの？」

寝言もなく、すうすうと安らかな寝息を立てる彼女の頭を撫でる。

「モノミにも訊きたいことがあったんだけど、しょうがないなあ」

現在は午前3時。

アナウンスマスまであと5時間は寝ることができるね。

最近徹夜続きだったから、きつと疲れていたのだろう。それに加えて絶望病で精神的にもかなり負担がかかっているはずだし、起こす

のも可哀想だ。

一旦自分だけ手の届く範囲にある水差しを取って錠剤を1粒飲み込む。もう1粒は朝、罪木ちゃんに飲んでもらうことにしよう。

「よいしょ…… っと」

そつと起こさないようにベッドへ彼女の体を倒し、自分もその隣に横になる。

ぎゅっとお腹をホールドされてしまって抜け出すわけにもいかなかったのだ。

色々やるためにも体は養生しておかないとね。

「…………… おやすみなさい」

静かな部屋に落ちた音は、誰にも拾われず溶けて消えていった。

No. 23 『狂言』―計画―

「……………!」

瞼が重たい。

なにか聞こえている気がするが、なんだろう？

「ね……………むい……………な……………」

うつすらと瞼を開けてみれば、目の前には安らかに眠る罪木ちゃんの顔がある。抱きしめられているせいか、とてもあたたかい。いや、もしかしたら私だけ熱が下がっているからそう感じている可能性もあるが、心地良いあたたかさだ。

……………私ももう少し寝ていたいなあ。

「狛枝―？ いないのか―？」

扉がノックされる音がする。

「……………？」

誰の声だ？ ええと…………… あ、日向クンか。

今更なにしに…………… いや、あれ？ なんて日向クンの声がするんだろう。

「開けるぞー？」

開ける？

…………… え、この扉を？

「えっ、あ、ちよつと待って!」

寝ぼけていた頭が一気に覚醒し、体を起こしたのは良かったのだが、無情にも扉は開かれていく。

罪木ちゃん、昨日あんなことをしようとしていたのに鍵をかけていなかったのか？ いや、もしかしたらモノクマが扉から出て行ったせいか？

もういいや、全部モノクマのせいだ!

「狛え……………だ……………?」

「ひ、日向クン…………… ええと…………… お、おはよう?」

慌てて首の傷を手で隠し、血塗れの枕は布団で隠したものの、バツチリ見られた。見られてしまった。

「…… すまん」

「待つて待つて！ 帰ろうとしないでよ！ 誤解…… 誤解だつてば！」

昨日罪木ちゃんに物騒な意味で迫られ、シャツは乱れているし本人は寝息を立てながら腰に抱きついて離れないし、色々とまずい。

泣きそうになりながら必死に彼を引き止めて手を伸ばした。

「罪木さんが離れてくれないんだよ！ お願いだから助けて！」

「あ、ああ……」

助け起こされて罪木ちゃんを引き離し、ひとまず着替えがあるので日向クンには外で待つていてもらうことになった。

男の子に寝起きを見られるとか最悪もいいところだが、わりとみっともない場面を目撃されてばかりな気がするので今更かもしれない。

「ふゆう、ごめんなさい」

謝りながら慌てて着替える彼女を待ちながら髪の毛を整える。

「罪木ちゃんはこっちに来てから夢日記つけてないんだ」

着替え終わった私は、1ページ欠けたクローバーの手帳をペンでペシペシと叩きながら言った。一定のリズムで叩き続けていると、なんだかまた眠くなってくる。

ああいけない、あとでコーヒーでも淹れようかな。

そういうえは、今更だけれどゲームでは病院は飲食禁止になっていたつ。私たちが咎められないのは入院患者と看護要員だからだろうか。

まあ、モノクマにわざわざ訊くことでもないか。

宣言した以上、アイツへのパフォーマンスを実行する前に会うのはなんか違う気もするし。

「はい、というより…… あの人の看病をするようになってからは頻度が少なくなつて、今ではしていませんねえ」

「そっか」

なら、ほぼ生まれてこれまでずっとと言つてもいいほど書き続けている私が異常なのか。まあ、それはそうか。高校生になるこの歳まで

毎日欠かさず日記をつけるだなんて、正気の沙汰じゃないよね。それも毎日毎日延々と歩くか死ぬ夢ばかりだし。

いや、日記なら毎日書くのは当然のことか。しかし世間一般で三日坊主なんて言葉もあるくらいなのだから、そこまで集中力が持つのはあり得ないと言っていると思う。

ページ数のそんなに多い日記帳を使っているわけではないし、夢に出て来たオブジェなんかも考察交えて書いているからどうしても何ページか使うはめになるんだよね。

だから日記100冊超えなんて馬鹿みたいな数になるのだ。棚いっぱい自分の日記とか結構恥ずかしいぞ。

うつろちゃんに見つかったときは大分恥ずかしかったしね……

「終わりましたあ」

「よし、じゃあ行くこうか」

時計を見てみれば午前9時30分。恐らく日向クンはレストランで話し合っただけで、こちらへ来たのだろう。もしかしたら朝の放送が鳴る前から起きていたのかもしれないが……それなら悪いことをしたかな。

「おはよう、日向クン」

「おはようございますう」

「ああ、おはよう」

何事もなかったかのように挨拶を試みたが、どうやら合わせてくれたみたいだ。先程のことはもう忘れよう。

「で、こんな時間にどうしたの？ 私たちは寝坊しちゃったけど……そつちでなにかあった？ ……まさかまた感染者が出ちゃったとか？」

十中八九左右田クンの通信機のことだろう。

そんなことは分かっているが気が急いても仕方ない。まずはちゃんと彼の口から確認しないとね。

「いや、今の所俺たちの方で感染者は出てないぞ。ほら、左右田が連絡手段を作るって言ってただろ？ それが出来たから報告にな……

お前たちはここから離れられないだろうし、昼にまた説明するために

左右田とここに来るから、それを伝えようと思って」

なるほど、直接左右田くんが今来なかったのは2通りあるかな。

1つ目は単純に感染が怖いから長時間ここで待つのが嫌だった…… 2つ目は機械の調整を今もしているから、とかかな。

通信の範囲をできるだけ広げるために時間をかけて調整しているのかもしれない。

まあ、それでもこの島のライブハウスくらいまでしか電波は届かないだけだね。

しかし、直接届けに来てくれるのか。感染している可能性のある日向くんにも会っているみたいだし、ゲームとでは大分態度が違う気がする。もしかして左右田くんとは既にソウルフレンドになっただり？ まあ、同じ時間をずっと過ごしているわけじゃないから、私には知りようがないんだけども。

昨日だって、患者が出て感染の恐れがあるはずのホテルにそのまま泊まっていたみたいだし、終里さんはまだ暴走していないし、流れも結構違うね。

私の影響？ いや、そう考えるのは自意識過剰か。 ” 皆が仲良くなったから ” いい意味での変化が起きたってことでいいじゃないか。

ただ、あのままホテルも危ないからとモーターに泊まってくれれば良かったのと思わないわけではない。ほら、そうしたらもっと私が楽だったのにつて。パフォーマンス実行的な意味だね。

「ええと…… じゃあお昼までは自由行動ってことでいいのかな？」

「ああ、12時半頃に花村の作った弁当と一緒に持って来るよ」

「えっ！ ご飯、持ってきてくれるの!？」

自分でもどうかと思うくらいに驚いて思わず日向くんになじり寄ってしまった。

「だけど花村くんのご飯だよ？ …… 花村くんのっ、ご飯だよ!？」

暫く食べられないと思ってたから嬉しいなあ。どんなお弁当なのかなあ。きつと家庭的なお弁当だよ。やだなあ、こんなドツキリがあるなんて、すごい楽しみじゃないか。

「あ、あのさ…… 凶々しいようだけど、その…… デザートに梨のコンポートが欲しいなあ…… なんて、ダメかな？」

「いいと思うけど…… 梨か？ 林檎とか桃じゃなくていいのか？」
むう、日向クンは分かかってないなあ。

私は梨が好きなんだよ！ 林檎はパサパサしたハズレもたまにあるから苦手なんだよ。桃は柔らかいやつなら好きだけどね…… でもやっぱり梨だよ！ 瑞々しくてシャクシャクで甘くてとっても美味しいんだ。

あ、でも林檎でもメイの選んだやつはハズレもないし、彼女の作ったウサギ林檎は喜んで食べるよ。それを考えると花村クンの選んだものなら大丈夫そうだけど、やっぱり好物を食べたいよね！

というか、日向クンだって草餅が好きで桜餅が嫌いなのにそんなこと言うだなんて分かかってないねえ。

電子生徒手帳の通信簿欄にもしつかり好き嫌いは書いてあるっていうのにさ。

だからそんなことを言う日向クンには少し意地悪してもいいと思うんだ。

「日向クンもさ、草餅が食べたいのに桜餅が用意されたら嫌じゃないの？ それともせっかく用意してくれたものだからって喜んで食べるの？ 少しもガツカリしないの？ 草餅と似たようなものだからって言われて許せるの？ 草餅？ 桜餅じゃなくて？ なんて言われて大丈夫なの？ ねえねえ」

「あ、いや…… すまん」

勝った…… つて、私はなにと戦っているんだ。

つい熱くなってしまったが、まあ好きなもの話だから仕方ないよね。こんなことを言ってるようじゃそのうち皆でキノコタケノコ裁判なんて始まりそうだしやめておこう。

…… ちよつと面白そうだななんて思っただけよ。不毛な争いになるだけって分かっているしね。

「り、林檎ダメなんですかあ？ じゃあ、今度入院したときは梨でウサギさんを作りますねえ」

「ありがとう、罪木さん」

いや、できれば入院するような事態にはならないでほしいのだけれど。罪木ちゃんだから許せちゃう。

でも首搔つ切られそうになったことだけはちよつと許せない。絶対に本人には言わないけど。冷静に対処できたから良かったものの、内心はものすごく怖かったんだよね、あれ。

「って、話脱線してないか？」

「…… あ、つい熱くなっちゃって…… ごめんね。デザートの件はよろしく頼んだよ」

「あ、じゃあ私も同じものがほしいですう…… お願いしますね、日向さん」

「ああ、分かった。じゃあ12時半だからな」

そう言つて日向くんが出て行つた。

「…… 行つたかな？」

「さすがに、ああ言つて寄り道はして帰らないと思いますよお」

「だよねえ。よし、じゃあ罪木ちゃんもこのお薬飲もうか」

「…… え？」

ああ、そういえば聞いていなかったんだっけ。

「モノクマと取引きしたんだよ。アイツを楽しませるパフォーマンスをする代わりに絶望病を治す薬をもらったんだ。ただ、熱を下げたり性格を元に戻すくらいでそのとき考えてたこととか、思い出したことはなかったことにならないと思うよ」

私も熱は下がったが、自殺衝動を持っていたことはしつかり覚えているしね。違いがあるとすれば理解ができるかできないか、だろうか。1度生まれ変わったことにできないからね。

「ですけど…… 私は自力で熱を下げることができますし、別の方に使つたほうがいいんじゃないですか？ ほら、十神さんとかあ」

それもそうだけど、十神くんは休ませてあげたいんだよね。それに、彼が復帰しちゃうと計画を途中で気づかれそうだし。

いつもいつも彼には肝心なところで気づかれてしまうし、彼を巻き込むわけにはいかない。

…… なんてあんなに私のことを先読みできるんだ。警戒されるのかなあ。

「…… なら、薬は今夜まで一旦保留ってことで」「分かりましたあ」

誰に使うかも考えとかないとね。

ただ、まあ、罪木ちゃんが使わないなら、1番の候補は終里さんだな。

幸い、モノクマと決闘する前に絶望病になったから式大クンも無事なままだが、問題は絶望病が治った後なのだ。

決闘をなくすためには彼女の溜まったフラストレーションをどうにかするしかないのです、この計画に加担してもらってモノクマを驚かせれば少しは気分も晴れるんじゃないかって思うんだよね。

それで納得するかどうかはまだ別だけれど。

「じゃあ計画を話すね……」

大体原作通りの計画だが、今はまだ通信機の仕様が分かっていない状態なのでぼんやりとした計画だ。それよりも大事なのはモノクマをいかに驚かせるかという点だ。

この世界はモノクマの掌の上にあるのでアイツを驚かすだなんて本来は不可能。よって、モノクマは残りの薬を用意する気なんてはならないと推測できる。アイツが楽しめるものといったらコロシアイしかないのです、薬を用意するしたらコロシアイをしなければならぬわけだ。

それに、モノクマ自身の目的が “コロシアイそのものではない” ということが重要だ。アイツは死体がたくさん欲しいだけだからルール違反があれば嬉々として処罰するし、今の状況はかなり気に入らないはず。

だからこそ、次に提示される動機は原作通りになるだろうと予想できちゃうしね。

私知知っている点はぼかしながら推測として罪木ちゃんに話し、同意を得ることが出来た。記憶を持っている彼女ならば合っていることが分かるからだろう。

だけれど、彼女自身からその話を聞くことはしなかった。モノクマの気に障って彼女が殺されるかもしれないので、私が詳しく言おうとする彼女を止めたからだ。

そしてこれからも、核心に触れるようなことは言わないように釘を刺しておいた。あくまで絶望病にかかっていない、記憶のない状態として推理するように頼んだのだ。

でないと彼女が裏切り者扱いされてしまいそうだし。

「で、ではあ、先にモノミさんに会うんですねえ」

「うん、私が色々準備してくるから罪木ちゃんは皆の看病お願いね」「全力で取り組ませてもらいますう！」

そんなやり取りをして私は病院から出た。

さて、皆は今どこにいるだろう？ 電子生徒手帳のGPS機能を稼働させてマップを開く。

一応マスクはしているが、GPS機能を駆使して皆を避けるつもりなので必要なかったかもしれない。

誰もいない場所というと、図書館か。

丁度いい、見たい本や借りたい本もまだあるし、メモしたいこともある。あとは、今回の計画にはあまり関係がないが、今後のために電気街でパソコンを1台拝借しておきたい。ビデオメッセージなんて自意識過剰なものを作る気はないけど。…… って言ったら私の中の幸運さんに怒られそうだね。

でも、私だったらもつと分かりにくいものを残すかなあ。暗号とかわくわくするし、楽しそうだよね。

「よし、これとこれと、これを借りて行こうっつと」

「ちよ、ちよつと待ったー！」

図書館で嬉々として机に本を積み上げて行くと、案の定モノミがやってきた。マントをバサバサとさせながらこちらに急いで向かって来る姿が妙に愛らしい。

元のモノミと違った衣装なので違和感はまだ拭えないが、魔法使っぽいこの格好もなかなか可愛いと思う。

「どうしたのモノミ、図書館の掃除？」

「このホウキはお掃除するためのものじゃありません！」

冗談はここまでにしておいて。

「で、何の用かな？」

「粕枝さん、既に20冊以上借りてるのにまた借りるつもりなんでちゆか！ 借りるなら先に本を返してください！ 一つも一つも後で返すって言ってまちゆけど、いつ返してくれるんでちゆかー！」

ご立腹である。そりやそうか。

今までも図書館によるたびに5冊以上借りて行っていたからね。目をつけられるとは思っていたよ。

「えーと…… 死んだら返すよ？」

「返す気ゼロでちゆかー！ それから、そんな縁起の悪いことを言うてはいけまちえん！ ミナサンで生き残るんでちゆからー！」

「えー、必要なだから仕方ないじゃない。ほら、私が借りてるのって科学の本とか教科書類ばかりだし、勉強してる人が他にいないんだから勘弁してよ。調査のために島のことを書かれた書類とかもそうだし…… 確かに、ソニアさんに勧められた意味が分かると怖い話とかを纏めた本も借りてるけどさ」

「それでもちゆ！ 借りた本は返すものでちゆからね！」

「でも借りる本の上限は書いてないよね？ 借りるときは貸し出し表に記入ってだけでさ」

「うっ、そ、それを言われると痛いでちゆね……」

いつにも増して先生っぽいことを言ってくるなあ。

まあ、聞く気は毛頭ないんだけどさ。

「それを言うならさ、私よりもいっぱい本を借りてる十神クンにも文句を言っしてほしいな。私ばかり酷いよ」

「十神クンにも常々言ってまちゆが……」

しくしくとわざとらしく泣き出すモノミを見るに、いつも誤魔化されるのだろうか。

「まあ、それは置いといて…… モノミに訊きたいことができたんだよね」

「クスン…… あちしに？ なんでちゆか？」

昨日モノクマが言っていたことを確かめないかね。

「モノミって魔法的ななにかで心を読めたりする？ ほら、鶏を牛に変えることができるくらいだし…… モノクマにも同じこと訊いたら、そんなことできるのモノミくらいだよねって言われたんだよね」
モノミはその言葉を聞くとすぐにキノコを生やしながらいじけるように俯く。

「あちしにはできまちえん……」

「えっ、できないの？」

「その機能はモノミにされたときにどこかへと消えちやいまちた……」

「…… 機能？」

「おいおい、こんなところで失言してるんじゃないよ。大丈夫かな？
この子。」

「あ、いえ、ち、ちち、違いまちゆ！ 技能って言ったんでちゆよ！
てつきりモノクマに奪われたと思っっていたんでちゆが…… もしかして、別の誰かに……」

最後の方は独り言のように声が小さくなっていく。

それにしても言い訳が下手くそすぎる。本当に大丈夫なのか？
この先生。下手をしたら誰かさんと残念2トップになってしまうのではないだろうか。それくらい言動管理がガバガバなのだが。

だが、これでモノミにもココロンパが不可能そうなのは分かった。
モノクマやモノミにできないのなら気負う必要はなさそうだ。良かった。

「そうだ、モノミ。お願いがあるんだけどさ」

あとは、計画の肝に必要なお願いだ。

この世界はモノクマの掌の上…… だが、今はゲームとは違ってモノミの力が少し戻っている。なら、モノクマの鼻を明かすこともできるのではないだろうか？

私はそう考えている。

「グス…… なんでちゆか？」

「あのさ、モノミって……」

私は、その可能性に賭けたい。なによりも、狛枝凪という存在として…… その存在を賭けてでも、だ。

「10分だけでいいんだ。モノクマの目と耳を、完全に塞ぐことってできるかな?」

さあ、始めようか。

長い長い時間をかけて幸運勝負と行こうじゃないか、モノクマ。

全員がこの世界から出られる可能性を少しでも上げるために、私はどんなものでも利用してみせるよ。

歌え、虚ろなる渴望を

ジジ、ジジ――

「な、なんだ……？」

困惑した表情を見せる彼はそのモニターを食い入るようにジツと見つめていた。

「あ？ それで連絡取るんじやなかったか？」

その隣には日向をコテージにまで起こしに行っていた終里の姿。彼女もどうやら状況が掴めないなりに考えているようだが、突然の出来事に困惑しているようだった。

昼頃に大歓迎を受けながら左右田と共に通信機の説明をしに来た日向は、朝と夜の放送が鳴った30分後にモーターへと泊まっている左右田他、皆へ連絡を取ることになっていた。

病院側として看病に回った罪木、狛枝、小泉、日向と、病气予防のためにモーターへと避難している他の皆が無事に連絡できるようと、左右田が電気街で拾ってきた盗聴・盗撮装置を改造して通信機として使えるようにしたのだ。

だが、家庭用の機械故に限界があり、その電波範囲は病院からモーターへは届かず、モーター側の皆は病院の20分程歩いた位置に存在する “ ライブハウス ” を連絡場所としていた。

「ライブハウス…… だよな？ 左右田聞こえてるか？」

通信機が設置された翌日、日向は病気が治ったと言う終里を連れて病院まですぐさまやってきた。

その時には既に通信機の受信ランプが点滅しており、彼はすぐに連絡を取ろうと応答ボタンを押したのだが…… 映し出されたのは、真つ暗なライブハウスの映像だった。

コツ、コツ

通信機の中から微かな靴音が聞こえ、映像にぼんやりとした明かりが映る。

通信機の斜め前に口ウソクが置かれたようだった。

そして次に浮かび上がったのはライブハウスのステージの様子だ。

まるでなにかの儀式をするかのように円状に置かれたロウソクが次々と灯っていき、それが映し出された。

ギイ、ギイと床を鳴らして歩く黒く長いパーカー。

暗闇のためかいつもよりも強調された白髪頭は俯かれ、その表情はおろか、彼女の正面すらロクに見えない状況だ。

「拍枝……？」

呟いて日向は猛烈に嫌な予感に駆られた。

ギイ、ギイ

彼女の行く先には脚立と、天井から吊り下げられた円状の縄がぶら下がっている。

ギイ、ギイ

「お、おいマズイぞ！ 終里、ライブハウスに急ごう！ 走れば間に合うかもしれない！」

実際、彼の足ならば走って迎えば間に合うかもしれない。

すぐさま飛び出していく彼に終里は「あ、おい待てよ！」と言いながらモニターをチラリと見やる。

「まだメシも食ってねーのに！」

飛び出して行った彼を追いかけ、終里もその場から駆け出して行った。

ギイ、ギイ

モニターに映し出された映像は、脚立の上上がった彼女が首に輪をかけると同時に一斉にロウソクの光が途切れ、真っ暗闇となった。

ジジ——ジ——

モニターの通信は、そこで途切れた。

……

……

……

「開かない!？」

「おら日向どけ！」

10分程して、ライブハウスに辿り着いた2人はその扉を開けようと四苦八苦していた。

「あ、あれあんたたちどうしたのよ？」

「あ、終里さんこんなところにいたんですねえ……」

「小泉、罪木、ちよつとこの扉を開けるの手伝ってくれ！」

「は？ どういうこと？」

「説明は後でする！ 早くしないと狛枝が自殺する……！ いや、もしかしたら手遅れになるかもしれないんだ！」

小泉と罪木が連れ立ってやって来て、扉をこじ開けようと皆が必死に揺らす、やはりなにかが詰まっているように開かない。

「あの、私狛枝さんといなくなった終里さんを探していたのですが…… 狛枝さんになにかあったんですかあ？」

「あたしはこの近くで探し回ってるこの子にお願いされて一緒に探すことになったんだけど」

手は休ませず、困惑気味の彼女たちが言う。

「通信機に狛枝が自殺しようとしている映像が映ってたんだ！」

「ええ!？」

「開かない…… 仕方ない、壊すくらいの勢いで行かないとダメだ！」

「モーターの皆に応援を……」

「そんなことしてたら手遅れになるだろ！」

焦った様子の日向が「全員で一斉に蹴り破るぞ！」と提案する。

その場にいるのは女子だけだが、緊急事態のため小泉はなにも言わずに同意した。

「行くぞ……、せーのー！」

日向、終里、小泉、罪木の蹴りによりバキバキと不吉な音を立てながらゆっくりと扉が開いていく。

「電気、電気はどこだ？」

「ここですうー！」

…… そしてその中に、彼らは見た。

ギイ、ギイ……

そこには、天井からぶら下がる縄。そして、その下に吊り下げられた、力無い狛枝の姿が、非現実的な光景が広がっていた。

「あれ？　なんでオメーらまでここに……　ひぎやああああ!!」
「そ、そんな……!!」

そしてタイミングよく、モーターに泊まっていたメンバーが朝の連絡のために訪れた。訪れて、しまった。

おかげで彼らは、病院にいる十神、西園寺を除いて全員が彼女の変わり果てた姿を発見してしてしまったのだった。

「ドキドキワクワク……　あー！　ワクワクが止まらねー！」

ボヨン、といつものようにどこからともなく現れたモノクマが皆の前に立つ。そして、ゆっくりとぶら下がった狛枝に近づいて行った。
ギイ……

縄はつい先ほど “ それ ” があつたように微妙に揺れ続け、そしてゆっくりと回転しながら、狛枝の体が正面を向き始める。

「ひっ!?!」

誰かが息を飲んだ。

「……」

そして、真横に向いたあたりで勢いよく狛枝の頭が持ち上がり、正面を向いた頃にはしたり顔をして笑顔を向けていた。

「死体が発見されました！　……　なんちゃって」

左手をあげて笑みを浮かべたまま狛枝が手を振る。

「……　おどろいた？」

「…… はあ？」

しまった！ 皆の冷ややかな視線…… 私の発言力ゲージが下がってしまったようだ！

日向クンの冷たい声に思わずぶるっちやうぜ！

「これは…… どういうつもりなのかな？」

七海さんが普段のようにのんびりとした口調で言うが、逆にそれが責められているようで怖い。

なんというか、胃が痛いよね。お腹に縄を回して吊っているから別の意味でお腹が痛いけれど。

「あ、罪木さん。ちよつと脚立直してくれない？ 降りられないからさー」

「へ？ は、はあい！」

「もうそのままでもいいんじゃないか？」

まったく日向クンは冷たいなあ。

まあ、腹を立ててるキミの反応は間違っちゃいないんだけども。殴りたくなくなるくらい怒らせられたのなら万々歳だよな。

…… それに、モノクマも驚いてくれたみたいだしね？

「なーんだ、つまんねーのー」

おい、驚いてた癖にそんなこと言わないですよ。これでも結構頑張ったんだからさ。ペナルティとか嫌だよ？

「このままだとお腹が苦しくてさ……」

背中から伸びた縄のフックを天井の丸い縄から外して脚立に降りる。

「な、なな、なんのつもりだよオメー！」

それからパーカーを脱いでゆっくりと結んだ縄を解いていると、涙目の左右田クンが叫んだ。

「あはは、ちよつとしたドッキリだよ。病気で皆緊張してるし、和ませてみようかと……」

白々しくそう言うが、どんどん私の発言で空気が悪くなっていくのを感じる。

モノクマとの取引きのことは話すつもりなんてないし、話す必要もないと思っている。だってモノクマに頼み込んで皆を治す薬を貰うために芝居を打ってるなんてさ、なんか格好悪いし。

生き残るために云々演説かましといて皆のために行動してるとか、大馬鹿者もいいところだ。

だけれど、覚悟はしていたがすごく胃が痛い。あとで罪木ちゃんに胃薬貰おう。

「おいおい、さすがに悪趣味すぎるぞ。テメー、そんなことするやつじゃねーだろ」

「応、和ませるところか…… 逆効果じゃあ」

「…… はあ」

「あ、でも吊られてる粕枝さん…… 結構……」

「ちよつと、変な扉開かないですよ？ 花村」

1番傷つくのは辺古山さんのため息だよね！ 間違いない！

あと花村クンはやめてよ？ ネクロフィリア的ななにかに目覚めちゃったらもう手遅れだからね？

「さて、と…… あれ？ 終里さん治ったの？」

今しがた気がついたように言う。

「あ？ なにいつてんだ。オメーが…… もがもごー！」

「そうなんです…… 日向さんと一緒にいたみたいですけど、一体どういう経緯でここに来たんですかあ？」

危ない危ない。

「ああ…… 終里が病気が治ったからって俺のコテージに来てたんだよ。で、朝の放送も近いし病院に一緒に向かったんだ。そうだよな、終里」

「んぐんが…… あー、そうそう。起こしに行ったんだよ」

終里さんに協力してもらったのは失敗だったかな？

でもこれで少しはストレス発散に…… なってない気もするなあ。ちゃんと見てないとモノクマに特攻しそうでまだ怖いよ。

「うーん、30点ー」

「えっ」

え、嘘、なんでそんなに低いの!?

「ちなみに合格ラインは？」

「90点！」

「……」

取り引きした私とモノクマにしか分からない会話だが、はたから見れば偽死体の出来についてとか、ドツキリの点数に聞こえるだろう。

まさか私がペナルティを受けるとは誰も思わないだろう。

絶望だあ…… なにされるか分からないってすっごく怖いんだ

……

「あ、でもオマエのコテージが直つたらしいから部屋を整理してきてからでもいいよ？ ほら、ボクって優しいクマだからね！」

それって長期的になにかされるって宣告されてるようなものなんだけれど…… 余計怖くなってしまった。

「あのさ…… 狛枝さんは暫く病院には行かないでおいたほうがいいと思う……」

「どういうこと？」

七海さんが少し怒ったようにこちらを見ている。

「これ以上混乱させてほしくないんだよ…… だから、あと3人の病気が治るまでは大人しくしてほしいんだ。そうしないと、皆も多分納得できない…… と思う」

周りを見渡すと、確かに険しい表情をした人物ばかりが目に入る。

「はいはい、いう通りにしておくよ…… 和ませるのには失敗しちゃったし」

「パーティのときといい、オメードツキリ下手くそかよ！ つーか、本気でドツキリになるとでも思ってたんか!？」

思っていないけど。

だって悪意あるし。

「とにかく…… あ、小泉さん、日向くん、病院の荷物をコテージまで運ぶの手伝ってくれない？」

「お前なあ、どの口で……」

「貴様でワープゲートでも作り出すんだな……」

「それくらい自分でやれって」

「え、でもあたし手伝うわよっ」

「それだと狛枝さんの罰にはならないよ。やっちゃいけないことだったって分かってもらいたいもん」

おっと、七海さんがかなりのご立腹だ。

さすがに偽ロシアイはそれを止める立場にある彼女にとって嫌なものだったらしい。

しかしそうか…… 私が全部運ぶのか……

「あ、あのお…… 私が……」

「残念ですが、罪木さんは皆さんの看病がありますし……」

「ご、ごめんなさい……」

不安気に揺れる彼女の瞳がこちらに向けられる。

「あ、じゃあ大荷物持ってウロウロしても気にしないでね」

それに心配ないよ、という意味で言っただけ私にはライブハウスから逃げるように飛び出した。

泣いてなんか、ない。自分でやるって決めたことなんだから。

「うぷぷぷぷ」

結局、30冊近くある本や着替えをコテージに全て移動し終えるまでお昼になってしまった。

ぐう、と鳴ったお腹に少し考えたが、その足はレストランではなくスーパーに向かわせることになった。

いくつかの食料を買い、非常食を少しだけポケットに入れてその他に気分転換になりそうなものを探す。

とりあえず造花を買い、目に付いたペンキと日めくりカレンダーも買い物袋に入れた。

前模様替えしたコテージは跡形も無くなってしまったのでもう一度模様替えることにしたのだ。

そしてコテージに帰り、花瓶に紫色のアネモネを飾ってテーブルの上に置く。紫って落ち着くいい色だよな。

それから本棚に収めきれなかった借りた本を同じくテーブルの近くに置いて、後でスペースを作ったときにすぐ片付けられるようにし

ておく。

なぜスーパーにあつたか分からない日めくりカレンダーを眺めながら皆の誕生日に1つ1つ花丸をつけていき、ベッド脇の窓に画鋏で留める。

ペンキは大量に余ったので後で旧館にでも押し付けに行こうかな。暫く匂いが取れないだろうがまあ、寝るぶんには大丈夫だろう。

……と、そこで来客を告げるインターホンの音が響いた。

「誰かな？」

そうして無防備にも扉を開けた私は首を傾げる。

「……あれ？ 誰も——」

白黒のなにかが足元をすり抜けたのを確認したときには既に遅かった。

背後からドン、と押されて1歩、2歩と前につんのめるように進んでしまう。

それから大きな影が私を覆い隠し、頭上になにかがいることを悟った私が慌てて逃げようとする、冷たい金属の足がしっかりと私の肩を掴んでしまった。

「……あ」

顔が青冷めて行くのが分かる。

鉤爪のような金属は肩に食い込むようにして私を固定した。

恐る恐る見上げると、そこには大きな鳥型モノケモノ…… 通称トリケモノと、それに乗り込んでニヤニヤと笑うモノクマの姿。

「粕枝風さんのペナルティを開始します！ それでは、張り切って行きましょう！」

直後、私は生身のまま大空へと連れ去られた。

「あぐ……っうあ」

肩が……！

「あああああ?！」

ぐるぐると視界が回り、スピードの圧と空気の薄さで段々と脳に酸素が行き渡らなくなり、視界が明滅する。完全におしおき並みのヤバさで、このまま殺されるのかと思うくらいに酷い空中散歩だった。

「……っ！ うっ………」

視界の端にジェットコースターのような物が見えた。観覧車のようなものまで見えて、さらにはお城らしきものも見えたが、そこから先は覚えていない。

情けないことに、ここまできて私の脳は気絶することを選んだのだった。

そして、眼が覚めると私は1人、建物の中にいた。外れた肩はいつの間にかはめ直されたようだった。

ピンク色のドギツイ壁や床、イチゴ模様の悪趣味な建物……知っている場所だ。

「オマエのペナルティは1日断食だよ！」

嘘つけ。

どうせ明日にはこの「第4の島」を調べに来た日向くんたちがやって来るだろう。そうしたらコロシアイが起きるまで絶食じゃないか。

つまり、私に餓死の危機が一足早く訪れたということ……

そうか、これが私の動機ってことか。だってこれが私の動機になり得る1番の状況だもんね。

“死にたくない”っていう願望しか動機にならないのなら、無理矢理死の危険に晒すしかない。これは私へ狙い打った動機提示なのだ。

「じゃ、ボクは他のヤツらのところに説明しに行くから自由に過ごしてね！ この密室になったドッキリハウスでさ！」

そうして、モノクマはいなくなってしまった。

「……とにかく、寝れる場所探さないと」

1日だけならば普通は寝て過ごすことを選ぼうだろう。

なので2階にある客室を順に調べ、豪華な客室のある場所に滑り込み、腰を下ろした。

実はスーパーで買った携帯食料がポケットの中にあるんだなあ。

うん、メモ帳もペンも無事だ。しかし、ヘッドフォンは室内だったので置いてきてしまった。ホイッスルやロケットペンダントはいつ

も身につけているから問題ないが、ちよつと寂しい。

「……ん？」

なにかおかしなところはないかと室内を軽く見渡していると、違和感に気がついた。気がついてしまった。

「モニターに……溝？」

ちよつどなにかを通すように空いている溝がある。

しかしカードリーダーにしては溝が太い。もつと別の……

「あ、もしかして電子生徒手帳？」

勘でしかないが、思い当たるとすればこれくらいだろう。

そう思つて迂闊にも生徒手帳をスツと通す。思いついたこの方法で1発で通つた。思わぬラッキーだが、果たして……これは私にとつての不運に他ならなかつた。

ジジジ……

突然起動したモニターにビックリして私は後ずさる。

そして、映し出されたその光景に……絶望することとなつたのだ。

『ザザ——』

そこは、どこかの放送室のようだった。

いや、私はこの場所を知っている。そこは、その場所は、希望ヶ峰学園の放送室……江ノ島盾子が根城にしていた場所だった。

そこにある光景に、私は思わず硬直して目を逸すこともできず、
それ “ を見た。

『ザザ——』

モノクマの目の前で足を揃え、静かに頭を下げている女性の姿。

青と白のメイド服に、白のカチューシャ。ゆつたりした長い黒髪を1本の三つ編みにして後ろへ流している彼女。

その目は見えないが、きつと充血で少し赤いのだろう、よく見知つたはずの、女性。

『……』

嫌だ。見たくない。そんなの、見たくない。

やめてよ。彼女が、メイが、モノクマに頭を下げてる光景なんて見たくない。

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

モノクマに頭を下げたまま、彼女が言った。

「あ、あ……」

映像はそこで途切れ、モノクマのニヤニヤ顔が画面いっぱいに映し出される。

『粕枝風さんの義理のお姉さん……』

粕枝明海あけみさんはこのように、

ボクに忠誠を誓ってしまいました!』

お姉さん？ メイが？

脳裏に思い出されるのは、トワイライトシンドローム事件のゲームで並んでいた、2つの “ コマエダ ” の文字。

そうか、そういうことだったんだ。でも、こんなところで、知りたくななんてなかったよ。

『さて、なぜこのようなことになったのか…… そんなの明白だよね！ だって、子供ができないからって引き取られた子供なのに、子供ができれば次々とそのメイドにされちゃったんだからさ！ 恨んで当然ですよね！ ふざけんなって話ですもんね！ ブヒヤヒヤヒヤヒヤ！』

やめて

『だって捨てたのはオマエなんだから！ ボクが拾ったってなんの問題もないでしょ？』

やめてよ

『オマエは誰からも必要とされてないんだよ！』

やめてっば！

耳を塞いで、目を瞑って、だけれどガンガン響くモノクマの声はそんなものおかまいなしに私の脳を侵食していく。

「っ!!」

そんな光景から逃れたくて部屋を飛び出した先で、また私は絶望した。

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

そこら中にあるモニターが次々と起動して先ほどの映像を流し始める。

「やめて、やめて、やめてってばあああああ！」

逃げても逃げても、逃げられない。

どこに行ってもメイからの否定の言葉が木霊する。

足をもつれさせながら走り回り、階段から落ちて怪我をしても、壁をガンガンと叩いて手に血が滲もうと、誰も助けてはくれない。

私がここにいることなど、誰も知らない。

「出して！ 出して出して出してよおおお！ 嫌だ嫌だイヤだイヤだよ！ もうやめてええええええええええ！」

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

『オマエは誰からも必要とされていないんだよ！』

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

『オマエは誰からも必要とされていないんだよ！』

『私の主人はこの世でただ1人でございます』

『オマエは誰からも必要とされていないんだよ！』

「もう…… イヤだ……」

壁を叩き続けて、血塗れになろうとまだ殴り続けた。

爪が剥がれたって構わない。頭を叩きつけて額が割れたって構わない。

むしろ、このまま死んでしまったほうがマシなんじゃないか？

そんな悪魔の囁きを脳裏に焼き付けながらボロボロの体でズルズルと壁にもたれかかる。

「ここから、出してよ……」

視界が揺れる。

ポツリ、ポツリと涙が滴っていく。

「助けてよお……… 十神、クン……… つ」

泣きながらももう1度壁を叩く。

「そばにいてよお……… 罪木ちゃん………」

響き渡る音の全ては私を取り囲んでいるようで、延々と再生され続けている。

「…… 迎えに来てよお……日向クン、さっきのことは謝るから……
お願いだから見捨てないでよ……もう虚勢なんて張らないからっ、だ
からっ、だから1人にしないで……!」

誰も、来ない。

誰も助けてくれない。

「あはは……どの口が ” 助けて ” なんて言うんだ……突き放した
のは、私なのに……馬鹿みたいだ」

こんな私なんか、誰も必要としてくれるわけないじゃないか。

一瞬、罪木ちゃんの顔が脳裏によぎったが、それは映像の言葉に
よって粉々に打ち砕かれてしまった。

私なんて、いらない。

そうでしょう？ 頭では分かっている。けれど、信じたくなかった
んだよ。

「教えてよ……っ…… もう、分かんないんだよお!」

『オマエは誰からも必要とされてないんだよ!』

「……………」

そしてわたしは、かんがえることを、ほうきしました。

Who is the murderer? |
No. 24 『欺瞞』 | 焦燥 |

「私の主人はこの世にただ1人でございます」

—— ジジ

「…… ですからあなたの傀儡になることはできません。しかし、今だけはあなたに従います。依頼として、ですが」

—— ジ…… ジジ……

「依頼料にお金は必要ありません。たった一つの情報。これだけあれば十分ですわ。内容？ 分かっているでしょうに…… 勿論、あの方の監禁されている場所の情報のことですわ」

—— ザ

「ええ、あの方の為ならば私は味方であろうと仲間であろうと、たとえばクラスメイトであろうと正々堂々不意打ってご覧に入れましょう。ただし、この目であの方が無事であることを確認するまでは私は好き勝手にやらせていただくので悪しからず」

—— ザザ

「ですから…… だから…… あの子には、 凧には、 手を出さないで

……！」

……

「ねえ、それってメイドとして？ お姉ちゃんとして？」

「妹の安否を心配しない姉がいるとでも思うのですか？」

モノクマ劇場^Mに入ったテレビ画面には、ただ否定の言葉だけが残り、その後のやり取りが放送されることはなかった——

「……」
携帯食料でなんとか1日待たせたが、ほとんど寝るだけで1日過ごすというのはなんとも不健康なものだ。

動いていなかったと言えれば嘘になるので、そうは言わない。
少なくとも、気絶している間に騒音が止んだので軽く調べて回ったりはしていた。

だが、調べていただけで “ 特になにをする気にもなれず ” に今度はマスクットハウスの粗末な客室の中で、粗末なせんべい布団の中に入って震えていた。

そう、体は震えていた。寒くなどないのに、歯はガチガチと音を鳴らし緊張で頭が冴えたまま、なにもできずにただ震えていた。

気分を変えたくてストロベリーハウスから移動して部屋も変えたのだが、粗末な客室ではかえって逆効果だったようだ。

辛うじて怪我をした部分を罪木ちゃんにもらった包帯を巻いて誤魔化しているが、彼女に見られたらすぐにバレてしまう。

あの私が “ 恐怖に怯えて、動機に怯えて ” 縮こまっているなんて馬鹿らしい話だ。勿論そんな姿を皆に見せるつもりもない。

弱さを曝け出すなんてことは、私には “ 耐えられない ” ことだからだ。

モノクマも、私の “ 様子を見にも来なかった ” わけだし、どうしようもなかった。

ガチャリ、そんなときに個室の扉が開かれた。

「…… 狛枝?」

彼に話せば、楽になれたのかもしれない。

でも、布団の中から合わせた日向クンの真っ直ぐな目を見ていたら、こんな私を見て欲しくなくて、暴かれたくなくて、とてもじゃないけれど、そんなことはできなかった。

「…… やあ日向クン。こんなところになんの用で来たのかな?」

来てくれて、嬉しかったと。今すぐ怖かったと、彼に泣きつきたかった。

でもそんなことはしない。いらぬ。私なんかがそんなことをしても信じてもらえないってことぐらい、分かっているのだ。

自業自得すぎる自己完結。いくら絆を深めたって、結局のところ人間死ぬときは1人だし、生きていくのも1人なのだから自分の悩みは自分で解決しないと意味がない。

「あのなあ……俺たちはお前が監禁されてるって聞いて心配して……」

「どうせ、他にもなにか動機があるんでしょ？」

「は……？」

優しい声で心配してくる彼を冷たい声で突き放す。

「モノクマに誘導されて来たんでしょ？ どうせ。もしかして全員来てるのかな。私のためだけに全員が来るとは思えないし、きつとこの島から脱出するための道具とか…… そうだな、あとはキミの才能の手がかりとかをエサにされておびき出されたんでしょ？ 馬鹿だなあ、そんなの罠に決まってるのに」

「そ、そんなに言うことないだろ!？」

「凶星なんだね…… ほら、やっぱり私なんてどうでもいいんじゃない……」

酷い八つ当たりだ。

自覚しているが、どうしても激情を逃す場所が見つけれなくて、彼にぶつけてしまう。

違う、別に怒らせたいわけじゃないのに。

日向クンを傷つけないわけじゃないのに、なにやってるんだろう、私。

「それは違うぞ！ どうでもよくなってる……！ お前だって仲間だろ？ どうしたんだよ猪枝、なんかお前、おかしいぞ！」

おかしい……？

そっか、そんな風に見えるのか。なら、 “直さない” “いけない” かな。

だって、いつもの私はもつと楽観的で、愉快犯で、日向クンを困らせたり心配してもらったり、十神クンとライバルみたいな関係で、罪

木ちゃんと同士で、もつともつと明るいんだから。

「……あれ、気落ちしてるように見える？ まあ、これだけそこら中同じ模様だけの場所にいたらちよつと気が滅入っちゃうくらい許してほしいかな。なかなか気持ち悪くてさ、寝付けないしご飯もないし喉も渴いたし、気分は最悪もいところ。あ、でも八つ当たりなんかしてごめん。頭も冷えたし、私はもう大丈夫だよ」

「本当にそうか……？」

大丈夫、大丈夫。

ノイローゼ気味になってただけだし、そのうちまた元に戻るって。メイのことは保留にしておくとするか……。そもそも、外に出てから確かめればいいだけの話だもんね。

「ほら、それより皆は？ 来てるんでしょ」

心配する彼に、立ち上がってから歩み寄り肩を叩く。

日向クンは突然普段通りに戻った私に困惑しているが、ここはゴリ押しだ。病は気からともいうし、明るくなりたいときは明るいフリをしていると自然と明るくなっていくものだ。

皆と会って暫くすれば悩みなんて吹き飛んでいくだろう。

…… 餓死の危機には変わりないけれど。

「あ、ああ…… 今皆でこの中を探索してるんだ。俺たちはストロベリーハウスの3階で目が覚めたから、多分このマスカットハウスの1階に集まると思うぞ。罪木にも会ってやれよ？ すごい心配してたからな」

なんとなく彼女とは顔を合わせづらいというか…… 罪木ちゃん、自分のせいで私が攫われたとか思っているもおおかしくないからなあ。それに、彼女相手だと怪我が増えていることにすぐ気づかれちゃうだろうし。

「そっか、なら……」

「おい、いつまで個室を覗いて…… 狛枝？」

もう1度扉が開くと、そこには驚いた顔をした十神クンが立っていた。

「あれ、十神クン？」

そうか、絶望病も治ったんだね。良かったよ。

「……」

「あの…… 十神くん？」

彼は無言でこちらに歩み寄って来たかと思うと、そのまま私の全身を上から下まで見回した。それから、すつとさらに近寄って来た彼が私の顔に手を伸ばす。

「え、え？ な、なに……？」

困惑して思わず後ずさりそうになるが、肩に置かれた手で引き止められた。

「お、おいなにしてるんだ十神？」

彼の指が私の目元に寄せられ、すぐに解放される。

まったく、なんだったんだ。

「日向、先に1階に行っている。もうこの階ではここが最後だったろう」

「ああ、分かった…… ないとは思うけど、変なことはするなよ？ 粕枝はお前のご心配して、ちゃんと看病してたらしいからな」

そういう言葉が出て来るってことは、十神くんは自分が病気の間にあった出来事を教えてもらったってことなのか。

つまり、私の悪趣味なドツキリも知っていると…… あ、これは怒られるな。

というか、あんなドツキリに付き合わされた日向くんがフォローしてくれるとは…… いや、それが日向くんなのだろうけど、もう少し怒りを買っていると思ってたから意外だったかな。

それこそ裏切り者なんじゃないか？ と疑いをかけられてもおかしくないくらいのことをしているからね。

「それじゃあ、先に行って粕枝のことは報告しておくぞ」

「ああ、やっておけ」

扉が閉まる。

ここは粗末な客室であるため外の音が筒抜けだ。要するに、こちらの音も筒抜けだろう。あまり大きな声では喋れない。

しかし一体何の用だろうか？ やっぱり怒られるのか。怒鳴られ

るのは好きじゃないから、やめてほしいなあ。彼なら諭すように説教してくるぐらいだろうが……

「お前、その怪我はどうした？」

心臓が跳ねる。

目を見開き、私はその一言で簡単に動揺してしまった。

「なんのこと？」

白を切っても今更だ。彼には見抜かれている。

「うまく誤魔化しているようだが、額に切った跡があるし、左手の包帯も前は掌までしかしていなかったろう。だが今は指先まで包帯で覆っている上、右手にも包帯を巻いている。隠しているようだが、左足も少し引きずっているだろう。大方階段から落ちたか？ それから…… 目元が腫れている」

「……」

ははっ、見事にバレてる…… しかも泣いていたことまではつきりと。

でも包帯はしばらく取れないし、他に誤魔化しようがないんだよね。血だらけだったから拭うものはハンカチと包帯くらいしかなかったし、水がないから当然目が腫れるのを防ぐこともできない。

「…… 皆には内緒でいてほしいんだけど」

「罪木や小泉にはすぐ見抜かれるんじゃないか？」

「…… っ、じゃあ私はここに閉じこもってるよ。部屋割りは好きに決めていいけれど、私は1人にして。こんな姿見られたくないんだよ。理由は…… 私がなにかしないように閉じ込めておいた、なんてどう？」

「しばらくは人と顔を合わせたくない、でいいだろう。そこまでして皆からの不信を集める必要はないし、俺個人としても無意味としか思えんな」

言ってくれるよね、本当。

こども神経を逆撫でされるなんて……

「……」

「仕方ないな……」

そう言つて十神クンは懐からなにやら取り出した。

「……？」

「じつとしていろ」

私が疑問に思っていると、彼が目の前でファンデーションらしきものを準備し始める。

「え、え!？」

まさかそんなものを持つているとは思わないじゃないか!

混乱しつつも大人しくされるがままになっていると、彼は丁寧に私の目元にファンデーションを塗っていく。

「御曹司が無様な姿を見せるわけにはいかないからな。弱みとも取られかねん。強がりしたいのならこういう術を身につけておくべきだ」

彼がコンパクトの鏡をこちらに向けると、すつかり私の隈や腫れが目立たなくなっていた。これが御曹司…… いや、詐欺師の技術か。

今度お願いして習つておこう。これは便利そうだ。

「生存報告を含めて一応顔合わせはしてもらうぞ。持つている情報とちゃんと報告するんだな。その後のことは好きにしろ。部屋のことも少しは考えてやる。しかし、今はまだ脱出できないと決まったわけではないからな。部屋割りの話は後だ。いいな?」

「う、うん分かったよ。会えばいいんでしょ? 会えばさ……」

なんて強引な……

しかし私だけが持つている情報なんてあつたかなあ。

いや、1つだけあつたな。

そうして、私は十神クンと共に階下へと降りていった。

「あれ、皆いないのかな……?」

「モノクマの地図によればブドウ回廊とやらの先にマスカットタワーというものがあるらしい。このホールにいないのならばそつちだろう」

「ふむふむ、地図ね……」

ストロベリーハウス 地図

マスカットハウス 地図①（現在地）

マスカットハウス 地図②

そうこうしてブドウ模様だらけの気持ち悪い場所を抜けて行くと、吹き抜けになっていて天井の見えない広場に出た。周りには緑色の波模様のような光が揺らめいていて、床には大きなウサミがブドウを啜えている絵が描かれている。よく見たら壁はライトアップされるだけだし、絵も裏側から光で投影されているだけだと分かるが、まあ気づく人は少ないだろう。

反対側にはイチゴ模様の扉がある。普通ならあの先になにかあると思うのだろうが、生憎私はあれが飾り扉だと知っているので脱出口でないことくらい分かっている。

こちらではないストロベリータワーの方にはブドウ柄の飾り扉がある。一生懸命拭いたから血の跡は残っていないだろうが、ブドウの扉には幾つか私の引つ掻いた跡が残っているかもしれない。

「こ、粕枝さぁんー」

話し合いをしていた全員が、罪木ちゃんの声によってこちらを向いた。

その全てに安堵の表情が浮かんでいることに私は困惑したが、見て見ないフリをして歩み寄る。

「おい、感動の再会は後だ。どこまで情報交換をした？」

「どこを探しても食糧が一切ないってことと、船の部品を見つけたっ

てことだな。ただ、その部品つてのが……」

「ふはははっ！ どうだ見よ！ モーターだぞ！ まさに船の部品ではないか！」

「だからッ、それはラジコンじゃねーかって！」

どう見てもオモチャの部品だよ。

「少し古い話をしよう。俺様は悪魔と人間のハーフとして産み落とされ、そのどちらからも忌み嫌われた存在…… 誰かにラジコンを買ってもらったことがないせい、これが酷く愛おしく思える……」

「…… んな話聞いてねーよ！」

まあまあ、左右田クンが怒鳴りなくなる気持ちも分かるけど。

「やーい、やーい！ 騙されてやんのー！ ボクは本物の船だなんて一言も言つてないもんねー！ バーカ！ バーカ！」

「……！ ……！ ……！ ……！ ……！」

なんて幼稚な煽り方だ。

ただ、それでも左右田クンにはショックだったようで、口はパクパクと動いているが声にならない叫びをあげている。

「でも、狛枝さんがいるっていうのは本当だったんだね。良かった……」

そう言つて安堵した息を吐いたのは七海さん。

彼女は眉を下げて 「ごめんね、私が余計なことを言わなかったら狛枝さんが1人になるなんてことなかったのに……」 と謝ってきてくれた。

きつと、「病院にはもう来ないでほしい」という話のことを言っているのだろう。

「私の自業自得なんだから七海さんは気にしないでいいんだよ？」

「そうもいかないよ…… でも、無事で良かった……… また会えて、良かったよ」

……あつたかい、気がする。

そうだよ、絶望したまま死んだりしなくて良かった。そうしたらいくら夢に慣れた私だとしても “本当に “死んじやうかもしれないもんね。

「狛枝さあん……」

私のそばに寄り添ってくれる罪木ちゃんもいることだし、さつきから心配そうに私を見て、「良かった、凪ちゃん」なんて言っている小泉さんだっている。その後ろでこちらを伺う西園寺さんも。

澤田さんなんて今にも抱きついて来そうだし、花村くんは「1日食べてないだろう狛枝さんに料理を振舞ってあげたいのは山々なんだけど……」なんて嬉しいことを言ってくれている。

辺古山さんは九頭龍くんの隣で相変わらず佇んでいるし、式大くんも生身だ。ちゃんと、生きている。皆生きている。生きているんだ。「他に報告はあるか？」

十神くんもずっとリーダーシップを取り続けていて、どんなものにも負けない。仲間。っていう繋がりを感じ取ることができる。

ああ、素敵だなあ。皆、それぞれ自分の出来ることをしているんだ。いらぬ人なんていない。皆必要なメンバーなんだ。

……私にできること、か。

「もう知ってるヤツもいるだろうが、言つとくぜ。このマスカットハウスの2階にもストロベリーハウスと同じように客室が並んで、ラウンジには向こうと同じように電話機もあった」

「だが、こちらにある電話機にはイチゴ模様のボタンが付いているが、ストロベリーハウスの電話機にはブドウ模様のボタンがついていた。もしかしたら、それぞれ連絡を取り合うことができるかもしれない…… というのか坊ちゃんの見解だ」

「なるほど、ボタンの模様はそれぞれの連絡先を表しているのですね。うん、これも知っている。」

「唯吹たちからはここの3階のことっすね！」

「モノクマが。モノクマ資料室。があるって言ってたでしょ？ それを調べに行ってみたんだ……」

「えと、えと…… モノクマさんに関する情報がいろいろありましたけどお、脱出にはなんの関係もない部屋でしたあ」

「なんつーか、有名人が思わず建てちゃった郷土記念館みたいな残念な感じだったね！そこはかとなく漂う微妙さがグッドっす！」

あれはモノクマの悪ふざけが詰まっていた感じだからね……読むと意外と面白いかもしれないけど、くだらなさすぎて笑えてくるかどうか。

なんていうの？ 失笑？ 苦笑？ うん、モノクマには悪いけど、無意味な部屋だよ。

「あとね、資料室に迷子がいたんだ」

七海さんが言ったあとにその後ろからぴよこつと顔を出したのはモノミだ。

「し、心配でついてきたんでちゆけど…… あちしまで眠っちゃって……」

「ヌイグルミなんだから睡眠なんて必要ないじゃん！ 馬鹿にしてんの!？」

「でちゆよね！ あちしの扱いはそうでちゆよね！ もうこんな扱いには慣れっここでちゆから落ち込んだりはしまちえんよ！ へへっ悲しいね！ 慣れちゃうなんて悲しいね！」

「うーん、なんか荒んでるね……」

そりやあまあ、今までわりと蔑ろにされてたからね。

原作よりはマシとはいえ、信じてもらえないってなったら荒むのも仕方ないよ…… うっ、なんか私にも突き刺さってる気がする……

「けどよ、オレは素直に嬉しいぜ！ モノミがいてくれてよ！」
「ほえっ？」

あ、モノミが終里さんにちょっと期待してる。

でもダメだよ。希望なんて持ったら打ちのめされちゃうよ。

「なあ…… オメーって完璧にヌイグルミなのか？ どっかにウサギの肉の部分とか残ってねーのか？」

「食糧としての期待!？」

モノミはおいといて……

どうやら話を聞く限り、皆は「日向・十神」、「ソニア・田中」、

「九頭龍・辺古山」、「小泉・西園寺」、「左右田・花村」、「終

里・式大」、「瀧田・罪木・七海」で別れて行動していたようだね。

「あと、私からだけれど…… どうやらこのドツキリハウス全体に冷

暖房装置が設置されているみたい。どこかに電源盤があるらしいね。多分、皆が調べてないらしいファイナルデッドルームとやらにあるんだらうけど……モノクマが言うには「殺すための凍死用」と「殺すための脱水用」装置で設定できる温度がすごいから、探さない方が賢明だと思うよ」

ファイナルデッドルームは原作でもあったが要するに凶器の宝庫へ行くための部屋だ。

脱出ゲームを成功させてリアルロシアンルーレットを成功させれば極上の凶器が存在する。オクタゴン。へと行くことができる。

しかし、誰もロボットではない現状極上の凶器は使えないし、極上の凶器の内容は原作と違うって思っていた方がいいね。

「マジかよ……」

「やはり、あのファイナルデッドルームには近づかない方がいいか……？　しかしな」

「ああ、多分電源盤に行くのは無理だと思うよ。それなりの歓迎があつてさ……私も探索は諦めたくらいだし」

「粕枝さんが諦めるくらいって……」

これで皆あそこには近づかないだろう。

万が一入ったとしても、脱出ゲームさえクリアすれば退路はできるんだし、無理にロシアンルーレットをする必要はない。そういう仕様になっていた。だからロシアンルーレットで死者が出ることもないだろう。

「……報告はこれくらいかな？　それじゃあさっきの話の続きをしようか……」

そう言つて七海さんが話したのは、結論から言うとマスカットタワーとストロベリータワーが同じ場所だという話だった。

ストロベリーハウスはマスカットハウスへ向かうための連絡エレベーターを背にして左手にタワーがあるが、マスカットハウスだとその逆で、右手側にタワーがあるのだ。

故に2つの建物は1つのタワーを中心として鏡合わせのような構造になっているということだ。

まあ、鏡合わせというにはどちらかの建物にしかない部屋があったり、そもそもハウス全体の形が違っていたりして相違点があるが。

で、タワー内の模様や色は全て光で投影しているだけなので、入る回廊によって内装が変わる仕組みになっていると。

さらに、七海さんによるとこのマスカットタワーの扉が開かれたちようどそのとき、ストロベリーハウス側の入り口が自動で閉まってしまったため、扉は片方ずつしか開かない仕組みになっていると推測されるわけだ。

「椒図しやうずは閉じるを好む」っていったところだろうか？ 両方開けたらなにか良くないことでもあるのかな…… なんてね。

そういったわけでないか物を置いてストロベリーハウスまで行き、2つのタワーが同じ場所である検証をするわけになった。

人が残るのは心臓の動き一つでも感知するセンサーのせいで無理だとモノミが言っているので、置いていくのは七海さんの電子生徒手帳だ。

私が皆の1番後ろになってついて行くと、それに気がついた罪木ちゃんが歩みを遅くして私の隣についた。

「粕枝さん…… あの……」

私の顔を見ながらなにか詰まっている様子の罪木ちゃんに「ん、どうしたの？」と問う。

すると、彼女はうまく言葉にできないのか散々悩んだあとに言った。

「どこか、痛いところはありますか……？」

一瞬間を食らったが、微笑んで心配してくれた彼女の頭を撫でる。「バレちゃったか…… 怪我はもう痛くないから大丈夫だよ。ありがとう…… 皆には内緒にしておいてほしいな」

「あの…… えつと…… はい、分かりましたあ」

なにか引つかかりを覚えたような顔で彼女が頷くが、本当に傷は痛まないから大丈夫だ。

「さあ、行こうか。置いてかれちゃうよ」

「はいー」

その言葉の真意に気がつくのは…… 全てが手遅れになってから
だったのだ。

—— そう、先にできる後悔なんてどこにもないのだから。

ウコロシア

結果的に言うと、2つのタワーが同一の場所であることが確定した。

ストロベリータワー側に戻ってもきちんと七海さんの電子生徒手帳があつたからだ。

しかし、皆は勘違いをしている。

2つのタワーは2つの建物の中心に存在し、扉は片方ずつしか開かない？ そんなことはない。確かにこのタワーは同一の場所ではあるが、それは向き合った建物の中心に位置する場所ではないのだ。

このタワーは床だけが動く特殊なエレベーターとなつている。そして、ストロベリーハウスとマスカットハウスは向き合った場所にもない。

この2つの建物は横繋がりではなく、ストロベリーハウスを上にして縦方向に一繋がりになった建物になつているのだ。

つまり、マスカットハウスは3階建ての建物。その上にストロベリーハウスがあるために厳密に言えばストロベリーハウスは4階から6階の高所に位置する建物なのだ。

ならば連絡エレベーターは？ 本来ならばあれは横方向に移動するエレベーターで、それぞれの建物を繋いでいたのではないかと思つていただろう。実際、タワーが中心にあると思つている皆はそう思つている。しかし、それも間違いである。

あのエレベーターはマスカットハウスから外周を回るようにゆつくりと上へ登り、最終的に正反対の位置へ移動するエレベーターなのである。巨大な建物に管状の物が巻きついていてのを想像すればいい。エレベーターはその中を通るのだ。

だからストロベリーハウスでは連絡エレベーターから見て左側にタワーがあり、マスカットハウスではタワーが右に位置するのである。エレベーター内でコンパスを見ればそれは一目瞭然なのだ。

その建物の構造こそがドツキリハウスがドツキリハウスである所以である。横繋がりに見えて縦繋がりである。それがこの建物の秘

密だ。

だからタワー内の反対側に見えるお互いへの扉だと思っているのはただの飾り扉であり、あれが開かれることなんてない。

だからそれを知りながらもあれに向かって爪を立てていた私はただの馬鹿である。冷静さを欠いていたとしか思えない。なんて恥ずかしい。

本格的に出口がどこにあるのか分からない、とんでもない構造の建物なのだ。

あるとすればマスカットハウスだろうが、見つかりやすい場所にモノクマが用意しているわけもなく、現在は本当に餓死の危機だ。

一食分の携帯食料があったとはいえ、ほぼ2日飲まず食わずに過ごした私はへろへろである。

断食で1番辛いのは2日目から3日目だと言われているし、頭もうまく回らないから手遅れになる前に手を打たなければ終わりだ。

「喉乾いた」

大問題なのは水が一切ないことである。

人間は断食だけでは約1ヶ月間生きることができる。

急激に痩せることができるので3日間くらいを断食に費やして痩せるダイエツトなんかもあるくらいだ。

断食を利用して自身の命を懸けたデモなんかも存在する。

しかし水もなしに断食をすることは普通ない。水は人体に必要な要素だ。水さえあれば断食しても生きていられるが、水がなければタイムリミットが大幅に減少する。耐えられる限界は4日か5日くらいか？ その間にも体力を消耗し、考える思考能力も消耗してくることを考えると、先を見越して行動を起こす人間が1人でもないかと本当に全滅するかもしれない。

「私にできること…… 私にしか、できないこと…… か」

マスカットハウスの粗末な客室で考える。

部屋割りは私の希望通りに決まった。

人数が多いために大半の人は2人部屋になるが、私はこうして1人で粗末な部屋に泊まることできている。

原作通り、式大クンやらがレディーファーストと言って建物を選ばせてくれたので女子はマスクットハウスだ。

皆で相談した結果だ。真っピンクよりは緑のほうが幾分か目に優しいからね。

服も部屋も緑にして閉じ込めると補色関係にある赤を見なくなつて自傷し血を見るなんてリアリティあるホラ話もあるが、人間はそんなことで簡単に狂わないので、一応安全だと言える。

同じ色ばかり見ていると気が滅入って来るのは確かだけれど。

と、まあそんなことは置いておいて、具体的なメンバーはこうだ。

『マスクットハウス』

豪華な客室1 七海・ソニア (ラウンジ側)

豪華な客室2 小泉・西園寺

普通の客室 辺古山・濤田

粗末な客室1 終里・罪木

粗末な客室2 狛枝 (ラウンジ側)

私が泊まっているのは、ラウンジの隣で1番階段に近い所に位置する粗末な客室だ。原作で日向クンが泊まっていた場所だとも言う。

だが私がやろうとしていることを考えると罪木ちゃんと同室の方が都合がよろしかったかもしれない。まあ、それは仕方ないことなので相談は後にする。

そして男子が泊まっているストロベリーハウスの部屋割りはこうだ。

『ストロベリーハウス』

豪華な客室1 田中 (ラウンジ側)

豪華な客室2 十神

普通の客室 九頭龍・式大

粗末な客室1 左右田・日向

粗末な客室2 花村 (ラウンジ側)

お互いに話し合いした結果こうなった。

花村クンはどうやら満場一致で1人部屋にされたらしい。

同じ部屋だとなにされるか分からないからね、仕方ないね。

豪華な客室に関しては十神くんが優先されたけれど、もう1つの部屋の方はジャンケンで決めていた。霸王が豪華な客室になったのは原作通りである。

あとやはり左右田くんはまだ日向くんを疑ってはいないらしい。既にソウルフレンドになっていたようだ。

代わりに裏切り者疑惑がある私がいるから、という理由もあるだろうが。

今まで私の計画を暴いて来たのも日向くんと十神くんだし、この2人のことは結構信頼しているらしい。あの臆病な彼をここまで信頼させるだなんて素晴らしい友情だね。さすが日向くんだ。

いや、原作通りとかパンツハンターだとかは関係なく、さすが”と言っている。彼の人となりは現実で見ても聞いて、実際に判断しているつもりだ。そこに多少先入観はあるだろうが、日向くんが信頼に足る人物であることは間違いない。

最初は混乱し通しだったのに、テキパキと十神くんと共にチーム分けしたり、やることを提案したり、メンタルケアまでしているようにも思えるし…… 一つの間にか頼もしくなっちゃってさ。

ちよつと眩しいや。

…… 私の集めている希望のカケラは停滞している。当たり前だ。あれだけ怪しい行動をしていたら集まるものも集まらない。

九頭龍くんと辺古山さんは結構集まっているがこの建物内で集め切るのは不可能だろう。マックスまでいったのは後にも先にも罪木ちゃんだけになりそうだ。

なぜか十神くんと日向くんのカケラがあと1つというところまで来ているが、日向くんはともかくとして十神くんのカケラが貰えることはないだろうな。

彼のカケラは、コロシアイ時空では決してコンプリートできない仕様になっているのだし。

部屋割りを決めて皆が体力温存のために眠りにつき、その翌日となった今日は色々あったが、それは割愛。

現在皆にとっては2日目。私にとっては3日目である。つまり眠

りについてから1日中、皆とはなにもなかったと言えるだろう。

他に気になっていることといえれば極上の凶器がなんなのか、かな。

原作と同じならば、タワー内の高低差こそが凶器だったが、生体反応のセンサーがあるからそれが使えるかは微妙。あれはロボット式大クンに生体反応さえ検出できなくなる。"おやすみスイッチ"があったからこそ落下死させることができたトリックだ。

もしかしたらファイナルデッドルーム内にセンサーを切る装置があるのかもしれない。もしくは冷暖房装置こそが極上の凶器か……いや、それはないな。

だって、あれは " 後から追加 " されたものなのだから。

とまあ、長々と情報整理していたことだが、それ全て現実逃避である。

「凧ちゃん?」

扉の外から小泉さんの声がする。

私は億劫に思いながらも体を起こして、扉を開けた。

「小泉さん、どうしたの?」

「どうしたもこうしたも、今日どこにも見当たらなかったから気になって……」

そりや当然だ。皆にとつての2日目の朝——つまり今日の朝から夜時間になるまでずっと見つからない場所にいたのだから。いや、見つけれない場所といったほうがいいのか?

つまり自由行動はボイコットしていた。

原作でもいるだろう? 特定の章で絆を深めることができなくなる人物が。そもそも見つからなければ自由行動で拘束されないし、動きやすくなる。このドッキリハウスではそれがしやすい。

今までは島からの脱出を目指して積極的に絆を深めていたが……結局このドッキリハウス内でマックスにすることはできないと判断したから放棄したのだ。

探し回っていたらしい日向クン、十神クン、罪木ちゃんなどには悪いが、私だって秘密の1つや2つあるのである。ちよつとくらい単独行動するのは許してほしい。

3日目になればモノクマ太極拳が始まるので体力的に厳しくなるし、色々行動するのは今日が限界だったのだから。

ロボ式大クンがいれば飲み物には困らなかつたのだが、彼をロボにするのは彼自身を冒瀆するようなものなのでどうしても避けたかつたし、仕方ない。仕方ないつたら仕方ないんだよ。

「蜜柑ちゃんが心配してるから顔出したらよければね」

「うん……分かった。後で会うよ」

……夜中にね。その言葉は飲み込んで笑顔で別れを告げた。

何度も思うが皆は2日目だが、私は既に飲まず食わずで3日目である。

いいか、飲まず食わずだ。これは大きい。

しかも1日目に大泣きしたり結構血を流しているから余計時間がない。

初日の怪我は血が止まってちゃんと塞がっているが、罪木ちゃんから貰った包帯をこれで使い切っちゃったのも惜しいかな。

そんな大切な物のことも頭の片隅に追いやるくらい今は切羽詰まった状況なのだ。

明日にも倒れるかもしれない。死んでしまうかもしれない。僅かな恐怖と、倦怠感。体感的にタイムリミットはあと2日くらいだ。その前になんとかしないといけない。

思考能力が低下してはどうにもならなくなるし、私には時間がないのだ。

大丈夫、大丈夫、私は死なない。

たとえなにがあつたとしても、死なない。

心の強さを保て。でないと、本当に死んでしまいそうだな。

それではアイツの思うツボだ。脳死に至ってしまえばアイツに利用されるだけ。江ノ島盾子の新たな肉体となつて世界を絶望に染め上げるだけの存在になる。

そんなの許さない、許せない。気持ち悪い。絶対に嫌だ！

絶対に、絶対に、利用されてたまるものか！

……私は、絶対に死なない。死んでたまるか。

夜中。

全員にモノクマから翌日7時にタワーに集まるようにとは言われたが、私は遠慮なく行動していた。

明日の朝モノクマ太極拳をするためだろうが、そんなの関係ない。メモは残した。あと2日のタイムリミットのために、今日話を通しておく必要がある。

“あの場所”にいたモノミにも、脱出の手助けをする代わりにお願いをしておいたし、時間さえ間に合えば問題ない。

勝負は夜中の12時になる前の10分間。その間に話を通す必要があった。だからメモを用意し、呼び出しを行う。

モノクマに勘づかれる可能性を含めると、これが最後のチャンスだ。さすがに不審に思われるので、10分間のアドバンテージはこれ以降もう使えなくなるだろう。だからこれで最後。最後は話し合いのためだけに使用する。

今日はただ話すだけだから何の問題もないだろうし。万が一の時を考えて準備はしているが……大丈夫だと信じたい。

差し当たったっての問題は翌日の太極拳に遅れるかもしれないということだね。

何の問題もない……はずだった。
マスクットタワーで暫し待つ。

僅かな緊張によるものか、汗が流れる。少し、暑いな。

ストップウォッチと時計を所持しているので時間を気にする必要はない。

しかし、来たのは呼び出しをした人物ではなかった。
それが誤算。

それこそが最大の油断。予定外の出来事。
しかしそれこそが、この事件の始まりとなったのだ。

最初で最後の学級裁判。
その幕が開ける。切っ掛けが今、訪れたのだ。

「え……？　なんでキミがここに………？」

—— ジジ

…… 私意識は、そこで途切れた。



「…… はっ？」

午前6時40分。

早めに起きたために男子の中で1人だけ彼はマスカットハウスへと移動し、同じく早起きした2人の人物と行動を共にしていた。

雑談をしながらマスカットタワーに向かった彼—— 日向が見た光景はあまりにも信じ難かった。

「いやああああ!?　こ、狛枝さあん！　十神さあん！」

一緒に来た罪木が駆け寄っていく、折り重なった2人。

仰向けに倒れた十神の、その下敷きになるようにぐったりとした狛枝が横たわっている。その2人の中には大量の血溜まり。

十神の腹にはピンポン玉程の大きさの風穴が空き、顔はどことなく青ざめているよう。

異様に “ 暑い “ タワー内には、十神、狛枝2人の変わり果てた姿があった。

「嘘……」

七海が呟く。

日向はそれに心底同意したかった。しかしできない。

目の前の光景がそれをさせない。

「こ、狛枝さんはまだ息がありますう！　誰かつ、誰かお水を！　血が

足りない上に熱中症で脱水症状が……！ 誰かあ！ 絶対に助けてみせますからあ！ だからお願いですうっお水を！ 誰かお水を！」

錯乱する罪木。

その直後、ここ2日間聞いていなかったアナウンスが流れ始めたのだ。

…… 忌々しいアナウンスが。

『死体が発見されました！ 一定の捜査時間の後、学級裁判を行います！』

「なんだよ…… これ」

日向が呆然としながら呟くが、目の前の光景は変わらない。

罪木が言っているのは狛枝の生存のみ。つまり、その上に倒れている彼は……

『オマエラー！ 速やかにマスケットタワーへ集合しなさい！ いやー長かったね。本当に長かったね！ オマエラよく粘ったよ。けど、その平穩もここまでだよ！ そう、そうだよ。長らくお待たせしたコロシアイが始まったんだよ！ ワックワクするね！ ということとで、捜査するオマエラが役立たずだと、困るから食料も用意してやるよ！ やったね！』

雑音とさえ取れるモノクマのアナウンスを聞き流しながら、日向はよろよろと歩いていく。

「な、ななな、なんでちゅかこれはああああー！」

アナウンスによつて素早くやってきたモノミが、悲痛な声をあげながら2人に走り寄っていく。

異様に暑いタワー内。そして、2人の下に広がる不自然な程大量の血溜まり。まるで狛枝を庇うかのように手を広げ、仰向けに倒れている十神。

その下敷きとなり、脱水症状で今にも死んでしまいそうな狛枝。

側に転がった何かのビンと、僅かに血で汚れた鉄パイプ。

嘘だと思った。

夢であつてくれと、願った。

しかし、その場の光景は変わらない。

そこにあっただのは十神白夜の死と、瀕死の狛枝凪とという状況。
コロシアイ開始という最悪の事態が今、始まった――

胡蝶は誰が為にあるのか

館内時間午前6時50分 死体発見アナウンス後……

「白夜ちゃん!? 凧っちゃん!? なななな、なんなんっすかこれはああー!?!」

その場にやってきた人物たちはすぐに悲鳴をあげることとなった。そしてまた、憤りを露わにする者もいるのである。

「おい……! 誰だよこんなことをしたのはよお! なんでコイツらがこんな目に遭わねーといけねーんだ!」

「坊ちゃん、落ち着いてください……!」

「ペコー・テメー許せんのかよこんなの! 絶対にオレが仇を討って…… ペコ?」

九頭龍の肩にかけられた辺古山の手…… その反対側の手は憤りによってきつく握られていた。血は出ていないが、その痛みでギリギリ衝動的になりそうな自身を律しているのである。

眼光は鋭く、彼女も決して怒っていないわけではなかったのだ。

それを見て九頭龍も頭を振る。血が上ってしまったっていた自身をゆっくりと振り返り、「悪い、テメーらも同じだよな」と一言漏らす。

本来ならば辺古山を喪うことによって劇的に変化する彼が、まだ途上ではあるがゆっくりと進んでいる。それがよく分かる光景だった。

そして怒りに吞まれず、正確に現状を受け止めた一部の者は素早く動き、現場の保存を最優先と判断した。

彼女…… 七海は悲しそうに眉を寄せた後首を振り、小泉に声をかけた。少し残酷とも言える言葉を……

「小泉さん…… 酷なことを言うようだけど、この現場の写真を撮ってくれない?」

「え……?」

小泉の戸惑いは当然だ。彼女は笑顔を撮ることを生業とした写真家である。死者をその目で見ることにも初めてであったのだから、抵抗を覚えるのは当たり前のことなのだ。

「粕枝さんのことは罪木さんがなんとかしてくれる。彼女が起きた後じゃ現場が最初にどうなったのか分からなくなっちゃうから、お願い…… 少しでも情報がないと、今度は本当に皆が死んじゃうことになるかもしれないんだよ……」

絆を深めて、リーダーシップすらとりかけていた日向は未だ現場の状態に呆然としている。その光景を現実だと認めたくなかったのだ。彼にとって親しい人物が死ぬのは初めての出来事である。本来ならば意に沿わぬ経験を経て成長している彼だが、今の彼にはその経験が圧倒的に足りていなかった。

故に理解はしていても素早く動くことができなかつたのである。だからここは七海が動くしかなかったのだ。

「今度のは鬪論なんて優しいものじゃない…… お願い、小泉さん……」

眉を寄せ、真剣に七海が語りかける。

すると、その言葉に揺れていた小泉が動いた。

「母さんも、こんな気持ちなのかな…… それに…… 過去のアタシも……」

小泉の母親は戦場カメラマンである。そんな母親に憧れつつも彼女は笑顔を撮ることに拘り続けた。いや、厳密に言えば特別拘っているわけではない。全てを記録するのが写真家であると彼女は知っているが、どうしても笑顔ばかり撮ってしまっていたのだ。彼女は人の笑顔が好きだから。

しかし、そんな彼女はトワイライトシンドローム殺人事件のゲーム中できちんと重要な証拠写真を撮っている。

それが犯人であろう友人の決定的な証拠になると知って放棄しようとしてしまったが、九頭龍の妹であるという少女の死体の写真は捨てなかつた。そこにもきつちりと犯人に繋がる証拠が捉えられていたのにも関わらずに、だ。

粕枝の知っている原作とのちよつとした相違点だが、それによって “彼女たちの現実” が変わることもあるのだ。

モノクマはそれが過去の小泉が撮った物だと言う。

そのときできたのならば、今やらないわけにはいかない。

それが最後の証拠になる可能性だってあるのだ。

粕枝にとつては生死を分けるものだったが、実質モノクマのお遊びであった学級闘論とは違い、学級裁判では全員の命が危機に晒されるのである。そうなつては遅すぎるのだ。

「どんな状況でも写真を撮る……それが写真家^{アタシ}の使命なんだよね……！」

その責任感の強さによって彼女は震える手でカメラを構える。

目の前には悲惨な光景。

十神は手を大きく広げるように仰向けに倒れ、その下にはそれを支えようとしたのか右手を彼の下敷きにされ、自由な左手で喉を掻きむしったように、赤くなつた首と熱で苦しめられ、顔が火照つた粕枝の姿。

血溜まりに倒れたその痛々しい2人。

側には血が流れ出している鉄パイプと、錠剤の入ったビン。

その全てを正確に捉えるように位置取りを決め、小泉は睨むようにそこを見つめた。

写真のため一瞬離れることとなつた罪木はそわそわと落ち着かなくタワ―内を歩き回っている。

「……」

手を震わせ、焦りを募らせる彼女の服の裾を掴む者がいた。

「日寄りちゃん……」

いつの間にか手の震えは止まり、悪い緊張は消えていた……

パシヤツ

《コトダマ 現場写真》

「ありがとう……」

七海が礼を言うと、小泉ははにかみながら「アタシはアタシにできることをすることにしたのよ」と言つて気負う必要がないことを伝える。

その言葉に僅かに微笑んだ七海は素早く介抱に戻つた罪木を一瞥してから日向を見る。

「どうしようか、日向くん」

「あ？ あ、ああ……」

日向の動揺は晴れない。

「ええと、こういう状況のときはひとまず現場保存のために何人か残っていたほうがよろしいのですよね」

ソニアが発言する。

そして混乱が継続しつつも頭をフル回転させながら日向がそれに對して答えた。

「えつと…… 狛枝の介抱をしてる罪木はまず残るだろ？ あとは…… 終里か式大に頼んでおきたいな」

モドキとはいえ1度学級裁判は体験しているのだ。それに捜査も。それなりに冷静に対処していると考えられた。

この光景を見たならば、幾分か原作の最初よりもスムーズだと狛枝は感想を抱いたかもしれない。

「応、承知した」

「そ、それでもいいけどよ…… め、メシはまだか!? さつきメシが貰えるって言ってたよな!」

「この期に及んでメシの心配かよ! …… って、やべエ…… オレも腹減って力でねーし…… こんなんで本当に学級裁判なんてできるのかよオ!」

終里の発言に對して左右田がツツコミを入れたがそれはブーメランのように自身の腹に突き刺さってしまったようだった。

涙目になつてうずくまる彼に、まだ立ち直れない花村。

そこに倒れている2人はどんな形であれ、彼の凶行を止めた者たちなのだから。信じられるわけがなかった。

「嘘…… だよね…… ? ねえ狛枝さんって嘘が嫌いなんじゃないかかったの? それともまたタチの悪い冗談…… ? あ、タたないとかそういう意味じゃなくて…… じゃなくて…… と、十神くんまで協力しちゃってえらく手が込んでるよね…… そうだよな? そうなんだよね?」

「闇の料理人よ…… リアルワールドを認識する術も失つたのか?」

「シェフだつてば……………」

花村が律儀に田中の発言を訂正して彼らの元へ歩み寄る。

ゆつくりとした足取りは鈍重であり、それだけ認めたくないのだと否応にも周囲の者は理解した。それは皆同じだったからだ。

「……………」

浅く呼吸をしながら熱に浮かされる粕枝を、罪木が必死に熱を冷まそうと自身の服にしまつてあるありったけの物を使って試みている。

しかし、写真を撮つたあと式大によつてどかさされ、隣に横たわることとなつた十神の体は動かない。そう、呼吸の僅かな動きさえも……見ることができない。

「ぼく…………… 頑張るからさ…………… 十神くんが満足するまで腕が痛く なつても料理作るからさ…………… 梔子そば感覚でいくらでも用意する からさ…………… だから目を覚ましてよ…………… ねえつてば!」

その場で自分よりも混乱している人間がいるならば、人とは冷静になれるものである。それを日向が自覚した時、 “ それ ” はやつてきた。

「やあー、お待たせ! まずモノクマファイラー! …… の、前に オマエラに嬉しいプレゼントだよ! モリモリ食べてモリモリ捜査しよう!」

そう言つて人数分のアンパンと牛乳が配られた。

「うおっしやあああああ!」

「それは張り込みのときの食料だろーが! こんなんで足りるわけ ねーだろオ!」

「でもでもー、唯吹たちお腹空いてるし……………ないよりはマシとい つかー?」

到底満腹には至らないだろうが、湊田の言う通りないよりはマシだ と各人食事を開始する。

罪木はそれすら押しつけて治療をし続けていたのだが……………

「……………つ罪木、ちゃん? …… ダメだよ、ちゃんと食べなくちゃ」

彼女の目覚めによつて状況は大きく動くこととなる。



…… 熱い。

熱に浮かされて頭の中を埋め尽くしたのはその言葉だった。

冷たい手が、額に当てられ心地良い。だが体中の熱はなかなか外に逃げず、貴重な水分は汗でどんどん逃げ出していく。

自身の体が非常にまずい事態にあることも分かったが、朦朧として起き上がることはおろか、目を開けることさえも億劫になっていた。意識が目覚めたとき、最初に思ったのは「生き残ったのか」という感想。1つ1つあった出来事を思い出しては憂鬱な気分陥っていく。

…… あのまま死ぬたら楽だったかもしれないというのに、なんて冗談じゃないよね。

だって、それじゃあ意味がないから。会話からモノクマが皆に食糧を与えたことは察したが、どうやら罪木ちゃんは手をつけていない様子。両手共に私を支えているので食べられないと判断できるわけだ。

なので億劫ながらも目を薄つすらと開く。それだけで随分疲れた。

「…… つ罪木、ちゃん？」

だいぶ掠れた声が出た。

「…… ダメだよ、ちゃんと食べなくちゃ」

キミが死ぬのは許さないんだから。

「こ、粕枝さあん!!」

私の目覚めに気づいた彼女は涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。

みつともないだなんて思えない。それだけ心配してくれたのだと、不思議と満たされた気持ちになった。

こんな顔をした彼女はもう2度と見たくないけれど、そうはいかないだろう。

だが、それが私なのだからついてくるのは彼女の勝手なのだ。精々

私も、今は傲慢に生きるとしよう

「ねえモノクマ…… 牛乳じゃあ余計喉が乾きそうなんだけど」

とりえず適当な文句を言う。

私がモノクマにクレームをつけたいだけなので理由はなんでもいいのだ。こう、いいようにされてるといい加減にムカついてくるんだよね。黒幕ならちよつとした仕返しくらいドンと受け止めるべきだよ。

「もーワガママだなー。じゃあなにがいい？」

「生理食塩水に近ければなんでも…… プカリでも許可する」

「じゃあプカリね！」

ということで大量のプカリを摂取し、水分補給。

驚くほどに脱水症状は一瞬で緩和され、動けるくらいまで回復した。

これぞプラシーボ効果だよ。実際には夢の世界なので食事も必要ないが、脳がそれを本物と認識しているのでお腹も空くし喉も乾くし、それによってノーシーボ効果が働いて餓死もするわけなのだから。

夢の中だと自覚してはいるが、特別丁寧に味を噛み締めて飲み食いしたのでしっかりと脳が認識したようだ。こうやって都合よくプラシーボ効果を利用できたらしいのだが……

この世界では強い意志が重要となる。思い込みっていうのが大切なのだ。

つまりアイデアが高いと死亡率も高いし生存率も同じくらい爆上げされる…… つてなんて例えをしているんだ。

「だ、大丈夫ですかあ……？」

罪木ちゃんが不安気に言ってくる。

大丈夫つてのはキミが一番よく知ってるでしょう。この世界では思い込みが重要なんだって。だから私は大丈夫。

ゆっくりと体を起き上がらせて隣に安置された彼の死体を間近で見ると。

私と折り重なった同じ位置にある傷口。貫通したそれは心臓部を

ひと突きにされている。つまり、彼を通して私にも傷がつけられたのである。

まさか彼がこのタワーに来るだなんて思っていなかったから完全に私の思惑を外れて斜め上の方向に進んでしまった。

計画自体に支障はないけれど、彼が死ぬのは予定外であり、終わってしまった今ではどうしようもない事実である。

先にできる後悔なんて、どこにもないのだ。

それに、私が後悔なんてしていたら、こうなっている十神クンに失礼だ。

「ごめんね、十神クン…… いや、ありがとう……」

目を閉じ、首を振って立ち上がる。

少しよろけたが兼ね問題はなさそうだ。

「ちよつとちよつと！ 凧つちゃん顔真つ青つすよ！ 全然大丈夫じゃなさそうじゃないっすかー！」

失礼、大問題だったみたいだ。

いやいやいや、だからといつて私が捜査に参加せず寝てるのはありえないよ。

じゃないと…… あの場所を捜査する人物がいなくなり、高確率で完全犯罪になってしまいそうだし。

「私だけ寝てるわけにはいかないよ…… それにこの暑さの原因をなんとかしないといけないし、私が1番証言力がありそうだからね……」

まあ、必死だったから刺された瞬間のことはあんまり覚えてないんだけどね。役に立たない可能性もあるが、捜査能力のある私が参加しないわけにはいかないだろう。

「本当に大丈夫なんだな？」

「うん。なんなら誰かとセットで捜査してもいいし」

罪木ちゃんは現場検証があるから無理だけれど。

「あの一、そろそろ纏まったかなー？」

モノクマが拳手しながら小声で言った。

「うおっ!?! いたのかよー！」

「いたよ！ ずっと機会を伺ってたよ！ ったく、なんでモノミと扱
いが同じなわけ？ ボクはそこが不満なのです」

「だって、同じヌイグルミじゃねーかよオ」

「あーあー、そんなこと言ってるもモノクマファイルあげたくなく
なっちやうなー」

「すみませんでした！」

鮮やかに左右田クンが負けたところでモノクマファイルだ。

日向クンに渡されてそれを一緒に覗き込んで確認する。さて、内容
は如何に？

真 モノクマファイル1

被害者は十神白夜、狛枝凧の両名

現場はドッキリハウス内のマスカツトタワー。

事件発生時刻は不明。

十神白夜の傷跡は心臓部を貫通し、反対側まで突き出ている。

それ以外の外傷はなし。

狛枝凧の負傷は同じく心臓部付近の刺傷だが、心臓には到達してお
らず、傷はそれほど深くはないようだ。

また、熱中症による脱水症状が見られていた。

《コトダマ 真 モノクマファイル1》

「こ、これだけか？」

日向クンがモノクマに言うが、「これだけだよ？」 とこともなげ
に返されてしまった。

これではほとんどなににも分からないようなものなので困惑するの
も当たり前だろう。

なにせそこに書いてあったのは、死亡時刻不明、凶器不明という事
実だったのだから……

BOX55

「な、なんだよこれ…… 凶器も事件があった時間も分からないのか……？」

日向クンが呆然と呟くが、それを覗き込んだままに私は「いいや、死亡推定時刻くらいは分かるんじゃないかな？」と言った。

軽く左の袖を折りながら立ち上がったときにわりと胸が痛んだが、その確認よりも先に彼へアドバイスしておこうと思ったのだ。

パーカーのポケットに入れていたクロージャーの手帳を取り出し、後ろの方のページから先ほどの情報を書き込んでいく。

コトダマ管理は大事だからね。

「死亡推定時刻…… 分かるのか？」

「そりゃそうだよ。だって昨日十神クンのことは皆見かけたりしたでしょ？ なら夜時間の間に事件があったとしか思えないじゃない。それにさ…… ここに決定的な証人がいるんだよ……？」

自分を指差してニヤリと笑う。

すると、日向クンは「それもそうだな」と言っただけで頷いた。

これで夜時間に事件が起きたことは証明できるね。そもそも、私が生き証人となるわけだから、死亡推定時刻を誤魔化すためにタワー内を暑くしたのだとしたら、皆にとっても犯人にとっても無意味になっってしまうし。

いや、私が熱中症で死んでたら無意味ではなかったかな？ ……

まあいいや。それはありえないし。

「その辺は学級裁判で議論するとして…… 今は証拠の確認を進めたほうが……」

「ちよ、ちよつと待ってくださいあい！」

そうしてさらに調べようとすると、罪木ちゃんに止められた。

「ん、どうしたの？」

「先にその怪我を治療させてくださいあい！ 血だらけじゃないですかあー！」

…… あ、そういうえば私刺されていたんだっただか。

あまりの痛みに気絶するくらいの傷だが、どうやら暑さと長時間傷口を晒し続けたことで感覚が麻痺しているようだ。

先ほど起き上がった時に痛んだのはそのせいか。

包帯も新しいのが欲しいし、ついでに貰おう。左手はいつもしているからともかく、右手は飾り扉をガンガン叩いたときについた傷やらなにやらいろいろと見せられない状態だからね。包帯で隠してしまおう。

相変わらず着替えはないので左脇腹から胸にかけての辺りが血塗れだが、まあ仕方ないだろう。

《コトダマ 熱中症だった粕枝》

…… ということで、右手の傷は隠しつつ包帯も貰ったし、胸…… というより脇腹？ の傷も応急処置してもらったから多少動くくらいなら大丈夫だろう。

いつも怪我したまま動き回っているし、何度目かの飛行機事故のときなんかは骨折した状態でサバイバルしたりしてたからね。痛みに関係なく動けるって便利だ。

…… 痛いのは嫌いだっていうのに、なんで慣れちゃってるんだろうね。悲しいなあ。

「じゃあ、罪木ちゃんは引き続き検死のほうよろしくね。あとは……」

「あ、証拠品がなにか見つかったらアタシに声をかけて。キツチリ証拠写真を撮るからさー！」

「わたしは小泉おねえと一緒にいるよ。そういうの向かないしー」

「うん、なるべく2人1組のほうがいい…… と思うよ」

小泉さん、西園寺さんは一緒に行動。

七海さんはどうやら捜査に積極的なようなので日向クンや私と一緒に証拠集めかな？

「唯吹は皆から昨日の夜のこと訊いてみるつすよー！」

式大クン、終里さんは現場で見張っていて、他の人も動き出してるみたいだ。

「万が一のこともあるし、お互いを見張る意味も含めて複数人で行動したほうがいいね」

「では、わたくしは十神さんの個室に向かってみます。どなたか一緒に来ていただけますか？」

お、ソニアさんはいいところに目をつけるなあ。

「はいはい！ オレがお供……」

「ぼく、行ってもいいかな」

「な、なんだとオ!!」

左右田クンがやっと2人きりになると意気込んでいたが、その野望は真面目モードっぽい花村クンに阻まれてしまった。

俯いている彼だけれど、十神クンを見て、私を見て、そして目を逸らす。まだまだ信じられないのか、勇気が出ないのか…… 声は震えているように思える。

「十神くんをこんな風にしちゃった犯人を、ぼくも見つけないんだ！」

でも今はまだ心の整理がつかなくて…… 十神くん自体を見るのはできそうにないし、先に周りから調べようと思ったんだ」

……そっか。

なら、今のうちに心の整理をしないといたほうがいかもしれないね。彼を殺した”犯人”は、必ずこの中にいるのだから。

そして、その憤りと遣る瀬無さを思いつきりぶつけてやってよ。

……それが犯人のためだよ。

「それでは、一緒に参りましょう。そうして、十神さんのために手がかりを見つけましょう！」

「うん……！」

「は、入り込めねー…… だと……!?!」

いやいや、2人以上で捜査すればいいんだからついていけばいいのに。

タワー内に機械はないし、エレベーターも壊れてないんだから、精々いつも通りの振る舞いで場を和ませてあげてよね。

「それじゃあ、私たちもやろうか」

「ああ……」

「そうだね……」

まずは死体の確認からかな。

既に検死を開始している罪木ちゃんのそばに寄り、覗き込む。

「……う」

「大丈夫？ 日向くん」

「ああ……」

私は見慣れているけれど、それでも身近な人の死は堪えるものだ。しやがみこんで全体を観察する。

十神くんは心臓をひと突きにされたわけだから…… 左胸付近に小さな風穴が空いている。これが致命傷で間違いないだろう。

私も一緒に串刺しになっていたわけだが…… 思い出したくもない。

即死かどうかは分からなかったが、即死であってくれと願うばかりだ。こんなことになってしまったってなんだけど、あんまり痛い思いをしてほしくなかった。

…… 私のせいで。

いつも疑問に思っていたけれど、私の周りの人ってなんで痛い死に方をしなくちやいけないのだろう。見るこちらも辛いのにさ。

それが幸運の代償みたいなものか…… いや、今回は考えても無駄だな。

「あれ…… なんだか違和感がある…… かも？」

「どうしたの？ 七海さん」

「うーん…… なんだろう。血の流れ方がおかしい…… 気がするよ
うな……」

七海さんが言う血の流れ方を見てみる。

確かに、いくら仰向けになっただけからといって、 “ 背中側だけ ” に大量の血溜りがあるのは不自然かもしれない。彼の服の前面はあんまり血で汚れていないみたいだし、全て背中から流れ落ちていくように見える。

「罪木ちゃん、どう思う？」

「ええと、可能性があるのは凶器が栓をして血が吹き出さなかったから…… とかですかねえ」

「そうか……」

《コトダマ 不自然な血溜まり》

「あ、それとですが…… やはり死亡推定時刻は前後してしまいますねえ。夜時間のどこか、としか言いようがありません」

「それはなんでだ？」

「あ、あの…… えっと…… 死体が温められているからです…… それで死後硬直が遅れて、具体的な死亡推定時刻が分からなくなってしまうているんですよ」

おお、なんだかサスペンスドラマみたいだ。

さすがは罪木ちゃん。

「そういうえば…… 今は少しマシになってるけど、タワーに来たときはすごく暑くなってたな」

「犯人の目的は死亡推定時刻を誤魔化すこと…… なのかな？」

2人がそう言うが、罪木ちゃんは目を伏せて否定する。

「そ、それは断定できません。それを誤魔化して意味があるのは数日かけた殺人だけです…… アリバイ作りのために行うのが普通ですから、今回のこれは無意味でしかありません……」

「そうか、夜時間には多分皆アリバイがないよな。…… まあ、それは後で聞き込みしてる瀧田に訊いてみるしかないか」

「なにか別の目的があったのかもしれないねえ」

《コトダマ 異様に暑いタワー内》

別の目的か…… 部屋を暑くする目的って言ったたら、先ほど言った死亡推定時刻の誤魔化しと、もう1つあるよね。この場に、凶器…… らしきものはないのだし。

もしくは、私を殺すため…… とかが皆に思いつく可能性かな。

「凶器らしいものはやっぱりないか……」

「…… あの鉄パイプが凶器だとは思わないんだね」

日向クンが刃物が凶器であることを前提に話しているので、そう訊いてみる。別に疑われたいわけではないが、こうも犯人から除外され

ているとそれはそれでもやややするんだよね。

「いや、十神の傷は胸部だけだろ？ あれはどう見ても刺し傷だし、鉄パイプは関係ないだろ……？ なんだ……？ おい、粕枝。そんな不安そうにするなよ」

「不安……？ 私……？」

私はそんな顔をしているのか？

「それにほら…… 十神くんの頭にも体にも外傷はないみたいだし、そこはモノクマファイルに書いてある通りだと思う。だから鉄パイプで殴打したような跡もないし、致命傷は胸の刺し傷であつてははずだよ。そうでしょ？ 罪木さん」

「は、はい！ 致命傷は刺し傷で間違いありません！ ただ、少しだけ気になるのは十神さんの顔色ですねえ。即死にしてはかなり青ざめているようですし…… 覚えておいたほうがいいかもしれませえん」

即死なのに苦しんだように青ざめている…… ね。

《コトダマ 苦しんだ十神》

「あー、にしても腹減ったなー」

「っわー！ どうしたの終里さんー！」

くんくん、と匂いを嗅いでいるように終里さんが死体のそばにしゃがみ込んだ。彼女が覗き込んで来たのでびっくりして思わず尻餅をついてしまい、そのまま包帯の下にある傷に響いた。

「いったあ……」

「大丈夫か？」

そう言つて手を差し出してくる日向クン。

「…… え？ あ、うん…… ありがとう」

あまりに自然に手を取られたから驚いたが、そのまま彼に引っ張り起こしてもらった。ちよつと恥ずかしい。

「それで、終里さんはどうしてこっちに？」

「なんか…… 十神から甘い匂いがするような……？」

くんくん、と匂いを嗅ぎながら終里さんが探り当てたのは十神クンの襟元だ。

「なんだ、食い物持ってたわけじゃねーのか」
がつくりと肩を落とす彼女の視線の先を覗く。

「黄色っぽい…… シミ、か？」

「変だね…… 十神くんはこういうのに敏感だから汚れがあるなんておかしいよ」

彼の襟元に、僅かながら黄色っぽいシミができていたようだった。

《コトダマ 襟元のシミ》

「匂いの発生源はこれなのかな……？」

「あー、なら狛枝。なんかお菓子とか持ってねーか？」

「え、なんで私？ …… 持ってないよ」

「おつかしいなあ…… オメーなら持つてると思ったんだけど……」

なんか、妙に確信していたように感じたけれど、ちよつと怖かった。
捲った袖をぎゅつと握りしめながらぶるりと震える。

こんなことをしている場合じゃない。ちゃんと捜査しなくちゃね。

「……ん」

十神クンのポケットを探るとすぐになにか紙のようなものが掴めた。

引っ張り出してみると、どうやらメモ書きのようである。

なんの特徴もないメモ用紙に一言、「12時にマスカットタワーにて」と書かれている。

なるほど、これを持っていたから十神くんはここに来たのか。キツチリメモまで持って来ちゃって。 “あの人” が来なかったのは、そもそもメモを見ていなかったからだだったか。

「狛枝、それなんだ？」

「呼び出しのメモだね」

「十神が呼び出されたのか……」

さて、どうしようかな？

呼び出し状を書いたのが私であると言うのがいいか、悪いか……
ま、それは裁判で言えればいいか。

《コトダマ 呼び出し状》

「む、蜃気楼の金鷹ジャンPよ、知将たる貴様が騒ぐとは何事だ……」

「？」

田中クンは珍しくソニアさんと一緒にいずにこちらに残留している。

そんな彼がジャンガリアンハムスターの一匹と会話しながら十神クンのそばに寄った。ちなみにもう一匹マガGというジャンガリアンがいるはずだが、今はストールの中に見えるように見ることができない。

「行け！　そして俺様に貴様の出した答えを見せるがいい！」

シユバツ！　と効果音がつきそうな勢いでハムスターが十神クンの下からなにか紙のようなものを啜えて田中クンの肩に再び登っていく。

「ふはははは！　これが貴様の答えか！」

「ちよつと見せてもらってもいい？」

気になったのか、七海さんがジャンPクンから紙を受け取る。

「つふ、またつまらぬことをしてしまった。行くぞ破壊神暗黒四天王よ。消費したマナの補給に向かうとしよう」

あ、ハムスターのご飯はまだだったんだね。

ということとは……　今後彼に会うにはストロベリーハウスの3階にある公園に行かないといけないね。あそこには唯一向日葵が咲いているから、ハムスターたちの食事だけはちゃんとできるのだ。

じゃないとハムスターって共食いもするんだっけ？　田中クンの絆で繋がってるあの子たちは大丈夫なような気もするが、万が一のこともあるだろう。

「それ、なんだ？」

「うーん……　ザラザラしてるね。それに、これにもちよつと血がついてるみたい」

「ちよつと見せてもらってもいいか？」

「うん」

そうやって七海さんが日向クンに紙を渡す。

裏表をじっくり見て、触っていた彼は「ああ、これが」と呟いて結論を出した。

「これ、ヤスリだな」

「ヤスリ……？」

「ああ、木とかの柔らかい素材の角を丸く整えたり、削ったりする道具だ。なんで血がついているのかは分からないけどな」

《コトダマ 血痕のついたヤスリ》

「へえ……」

興味深そうにヤスリを見る七海さん。

もしかして知らなかったのかな？ ゲームにヤスリが出てくることってあんまりなさそうだし、それ以外に知識を吸収する術もないから知らなくて当然かもしれない。

季節行事なんかも知らないことが多いみたいだし、本来学校で教わることはあんまり知らないのかもね。

「十神くん自身を見て分かることはこれくらいかなあ」

「ああ、そうかもしれないな」

「あとは罪木さんの詳しい検死結果待ち…… かな」

「もうちよつとなので待っていてくださあい……」

ならばそのもう少しの間にできることをやるか。

「さつきも話題に上がったけど、一応鉄パイプも調べたほうがいいんじゃない？」

「ああ、それもそうだけど…… なんでこれがこつちに落ちてるんだ？ お前の護身用だったんだろ？」

おっと、とうとう証言をしないといけないのか。

「…… 落としたんだよ。十神クンに突き飛ばされちゃってさ。それでタワーの、あの位置までよろけて…… 気がついたら目の前に十神クンがいて、刺されて、なにがなんだか分からないうちに一緒に倒れてたんだ」

鉄パイプは入り口近くに落ちているわけだから間違いいではない。

血に濡れている理由にはならないけれど。

普段は半分の15cm程度に縮めてスカートに隠しているが、いつも持ち歩いているのは辺古山さんとの一件以来皆が知っていることだ。

「だから誰に刺されたのかは見ていないんだよ」

《コトダマ 狛枝の証言》

「この鉄パイプ、外側は血に濡れてないけど、内側は結構血がこびりついてるみたい」

「本当だな…… でも、なんで内側だけなんだ……？」

《コトダマ 血塗れの鉄パイプ》

「あと気になるのは、この落ちてるビンだよね」

私が言っただけで持ち上げると、中の錠剤がザラリと動いた。

「えーとなになに……？」

七海さんが持ち上げられたビンのラベルを読んで、段々顔を険しくさせていく。

その反応で、この錠剤の正体が日向クンにもなんとなく分かるようだが、一応私も訊いておく。

「なんて書いてある？」

「えーっとね……」

モノクマ特製睡眠薬

“ 安らかな眠りをアナタに ”

概要

- ・ 1粒でぐっすりによく眠れます。
- ・ 2粒で寝付きの悪い人も安心です。
- ・ 4粒で誰にも邪魔されず10時間ほどずっと眠れます。
- ・ 8粒で昏倒するほどの驚くべき効き目になります。
- ・ 永遠におやすみしたい方は10粒ほど一気に飲み込みましょう。

とてもよく眠れます。

永遠に眠れます。

謳い文句が酷い。

「これ、要するに危険な薬じゃないか！」

「10粒で致死量…… 毒薬と言ってもいいんじゃないかな」

その通りだよ。

「モノクマ特製っただけでも嫌なのにさ…… 日向クン、減ってるかは分かる？」

「…… いや、元々何粒入っていたか書いてないし、使っていたとしてもあまり使ってないんじゃないか？ そんなに、一気に減っているようには見えないしな……」

「キミの見解だと使われたかどうかは不明……か」

ビンいっぱいに入ってるもんね、薬。

《コトダマ モノクマ特製睡眠薬》

「あ、あの…… 結果が……」

そうこうして死体周辺を調べ終わったとき、罪木ちゃんからお呼びがかかった。

私たちは小泉さんと彼女に教わりながらカメラを構える西園寺さんに撮影を任せ、再び罪木ちゃんの方へ向かった。

「なにか分かった？」

「はい…… まずですね、致命傷は刺傷で間違いありません。それから、即死であることも間違いありません。直径5 cmから8 cm程度で、長さは30 cmくらいの凶器ですねえ。恐らく槍や、杭のような形状だと思います。胸部を貫通しているのですが…… そんなことができるような人は限られていますし、恐らく倒れたときに貫通したのでしょうねえ。手で貫通させたのなら相当力がないと無理だと思いますう。あと、私が気になったのは血の量が少し…… 多すぎるような気がすることですねえ」

《コトダマ 罪木の検死結果》

「血が多すぎるっていうのはどうしてだ？」

「その…… 2人ぶんの血液にしては多すぎると言いますか…… 狛枝さんは失血死していませんし、この量だと2人とも失血死していてもおかしくありません。だから不自然だなぁっと思っただんですけど…… あ、あの勘違いかもしれませんし……」

自信なさそうに目を伏せる彼女に日向クンが首を振って応える。

「そんなことないぞ、罪木の見立てなら間違いないだろ？」

「うん、そうだよね」

《コトダマ 多すぎる血の量》

罪木ちゃんだもの。彼女は自信が足りないだけだから結果は確か
なはずだ。

「罪木さんのこと、皆信頼してるからあんまり気負わないでね……」

「は、はい…… その、ありがとうございます……」

嬉しそうにモジモジとしている彼女を微笑ましげに見てからふと
考える。

もし、私が死んでしまっていたら、彼女のこんな笑顔はもう見れな
かったかもしれない。

…… なおさら死ねないな。夢の中なら、意思を強く保たないと。

「ええと、それと…… 専門的なことなので分かるかどうかなのです
が……」

「聞くだけ聞いとくよ?」

罪木ちゃんがこう言うことは本当に専門的なことなのかな?

「血液凝固の仕方が…… 変なんですよ」

「…… は? 血液凝固?」

「はい……」

それはまた素人には分からなそうな……

「ええと、血液というものは酸素に触れると凝固を始めるのですけど
…… 床の血は殆ど乾いてますが、大量に流れ出たために重なり合っ
た部分など、中心の方はまだ固まっていななんです。ですけど、ほと
んど空気に触れないはずの、十神さんの傷口の中は既にカチコチに固
まっているんですよ…… 変ですよねぇ?」

「ちよ、ちよつと待ってくれ…… つまりどういうことだ?」

傷口の…… それも深い傷の場合はなかなか血が固まらないだろ
う。それは血が流れ続けているからだ。そして床に流れて空気に長
時間触れている箇所は固まるのが早い。床の血が完全に乾くまでに
十神クンの傷口が完全に固まっているのは不自然だって言いたいの
かな?

なにせ、凶器が栓になって空気に触れていなかったはずなのだか
ら。

凶器が栓になっていれば傷口から血は流れ続けるし、固まることはない。

「ならなぜ先に固まっているのか？　彼女はそれが疑問なのだろう。「ぎっつき、凶器が栓になって血が吹き出さなかったって結論になったよね？　なら、外に流れ出て空気に触れた血より中の方が先に凝固してるのは不自然なんだよ。凶器で塞がれてちゃあ、傷を塞げないからね」

死んでいるにしても細胞や血の性質は変わらないわけだから。

「もしかしたら私の血が混ざっちゃったのかな……？」

「た、確かに粕枝さんにも軽い拒絶反応は見られましたけれど、そこまです強いものではありませんし、そんなに混ざってしまったとは思えません！」

「そっか」

私はO型。十神くんはB型。

献血とかする人にはピンと来るかもしれないが、私の血が十神クンの血と混ざってもそこまで拒絶反応は出ないはずだ。

逆に彼の血が私の血と混ざるとものすごい拒絶反応が出るはずなのだけれど……　それがあつたら私はこんなに平然としていられないのでそれはないと断定できる。

この凝固の問題は現時点だと謎としか言えないだろうね。

《コトダマ　罪木の証言》

「タワー内で調べられることといたらこれくらいかな……？」

「そうだな」

「うーん、分からないことだらけだね……　あとは、十神くんの使った部屋かな」

「そう言う七海さんに　「いや……」　と静止して思案するフリをする。

「十神クンの使ってた部屋にはソニアさんたちが行ってるんだよね？」

「う、うんそうだけど……」

だって、私がこれを言わないと誰にもこの事件は解決できそうにな

いんだもの。

「じゃあ、誰も行かないだろうし…… ファイナルデッドルーム^Rに行ってみない？」

絶句した2人に、告げる。

「この2つのタワーのどこにも電源盤も冷暖房装置もなかった……なら探していないのはあと一箇所だけ。そうでしょう？」

悪魔の囁きのように誘導する。

そして、いつものようにニヤリと笑って「どうする？」と、選択権を私は投げたのだ。

実質一択だけの、選択を。

渴望 Searching

ファイナルデッドルーム。通称FDR。

その中は脱出ゲームとなっており、なにより厄介なキャラクターである。 “ 狛枝風斗 ” を唯一操作できる場所である。

モノローグによって語られるその心情、行動の仕方など、ファンにとっては喜ばしいイベントだったのではないだろうか。かく言う私もそうだ。 いや…… そうだった。

久しぶりに感じるこの前世との差異は、自身が “ 狛枝風 ” という存在だと確立されるにつれて薄れていった。

前世の私は前世の私だし、今ここにいる私という “ 狛枝風斗 ” に近い問題児もまた、間違いなく私なのである。

だが、今ここではその差異がはつきりと感じられる。感じてしまう。

なぜなら、それは私が “ 怖い ” と思っていたからだ。この場所を訪れた、その初めての瞬間恐怖を感じた。

おどろおどろしい雰囲気、退廃的な、無機質なコンクリートの壁。無造作に書かれた大きな数字。奥に見える鉄格子。

…… その前の床にある丸い切れ込み。

その先に待っていることを知っている故に浮かぶ恐怖。それと、本当に日向くんたちをこの先に案内していいのかという迷いも。

彼らをこの先に連れて行けば、恐らく学級裁判の証拠は全て揃うだろう。 そうなれば…… いや、迷っている場合ではないのだ。

やらなければならぬ。 たとえ怖くとも、それが “ 約束 ” だからだ。

「な、なんだ…… あれ…… !」

鉄格子の奥には血に塗れた扉が待ち構えている。

本来その扉には血なんてついていないはずだった。 廃墟の中のようなこちら側とは違い、あの扉は白く塗られている。 …… というより、廃墟的な趣向を誰かに言われて仕方なくペンキで修正したような

違和感がある。

退廃的な場所の先に、真っ白でまるで病院のような…… 無機質ととるか、清潔感があるとするかは人それぞれだが—— の扉が待ち構えている。

その扉には大量の血液をふりかけたように真っ赤な液体が滴っていた。

その光景には見覚えがある。久しぶりの、 “ 夢の光景 ” の、その再現だった。

“ 無 ” のエフェクトというものがある。

それはエフェクトを全て捨てた上でしか行けないし、手に入れられないエフェクトのようなものだ。

“ エフェクトのような ” と形容するのはそれがエフェクトであるかは本当に分からないからだ。

本来エフェクト入手時にはエフェクトの名前が表示されるが、この無のエフェクトには名前がない。空白の表示がされるだけだ。故に無のエフェクト。

3つの内1つは巨大な母さんの腹がパツクリと割れて行くというもの。

2つ目はビン詰めにされたさびつき。

3つ目は…… 口だけの、巨大な笑顔の壁画。

昔見たそれらの再現のように、その手前の部屋を再現するかのよう

に血に塗れた扉だった。

「さっさと通り抜けちゃおうか……」

「…… 狛枝？」

訝しげに呟く彼を置いて必要な仕掛けを解いていく。

どうせ後ろの扉は開かなくなってるからね。

直球でパスワードを打ちにいかないのは一応初めて来た風にしておきたいからだ。あからさまに何度も来てます、とは言えないし。

そうしたら1番に容疑がかけられるのは私になる。それはつまりらないから。

「むー」

最後の電気信号のような物を暗記してパソコンにパターンを打ち込む。ゲームではこれが分からなくて1週間ほど悩んだものだが…… 法則を覚えているというのものもあるし、今は頭の出来が以前より良くなっているからね。

日向クンや七海さんも仕掛けに必要な道具とか色々探して来てくれたりしたからスムーズに済んだ。

これ、毎回モノクマが片付けてるのかな？ まあいいや。カチリ、と音がして丸い切り込みがせり上がって来る。

それから台座がぐるんと回って、そこには一丁の拳銃が備え付けがあった。鎖付きで持ち出せないようにはなっているが。

そばにはご丁寧に弾が置かれていて、好きなだけ詰めることができるようだ。

この時点で後ろの扉は開いているらしい。退路はあるが、進むにはロシアンルーレットをしなければならぬ。

「脱出ゲームクリアおめでとーうー！」

そうして現れたモノクマに「これ、どういうこと？」と白々しく訊いてみる。

するとモノクマも合わせて最初のときのように説明し始めた。

「なにつて、ロシアンルーレットだけど？」

「ロシアンルーレット!?!」

「…… て、なに？」

七海さんが首を傾げたことでモノクマも説明より先にそちらの話に入る。

「いわゆるギャンブルみたいなものだね！ この拳銃には6発の弾丸を込めることができるんだけど…… 1発だけ詰めて、自分の頭に銃口を押し付けて順番に撃っていくスリル満点な遊びなんだよ！」

「え、それって……」

「そう！ ギャンブルに負けたら死、あるのみなのです！」

日向クンの顔が青ざめる。そりゃ、普通に生きていけば実弾入りのロシアンルーレットなんてやらないからね。怖くて当然だ。

「ただーし！ ボクはジャパリ…… じゃなくてサファリパーク1優

しいクマだから、1人1回ずつルーレットをやったらここを通ってもいいよ！ 当然、前の人が回した後は再装填して自分で弾倉を回すんだよ。そうじゃないと自業自得の死を他人のせいにされちゃうからね！ あ……でもこれってコロシアイになるかな…… ハアツハアツ…… 興奮してきたぜ！」

くねくねしながらキモい動きをキモいこと言いながらやっている。どうでもいいが、前はサバンナとか言ってたかったっけ？

…… え、辛辣？ 憎つくきモノクマだし……… 心の中で罵倒するくらい許して欲しいかな。どうせ聞こえやしないんだし。

「あ、退路はあるから、こんがり焼かれてチキンになる前にニワトリは帰ってもいいよ？」

そこは臆病者って言えばいいのに、無駄に煽って来るのが腹立つよね。

「ねえ、モノクマ。物は相談なんだけどさ」

「なにになに？ 聞いただけ聞いてあげましょうではないですか！ ボクだったら優しいからね！」

どこがだよまったく。

「3人分のロシアンルーレットをするのって…… ありかな？」

「はあっ!？」

「粕枝さん……？」

日向クンが私の腕を掴んで首を振る、がそうはいかない。

「お前、なんか焦ってないか……？」

「別に、焦ってなんかかないよ。このほうが合理的で効率が良いって思っただけだからさ」

実際、本気で運試しをすることになる2人よりも、幸運効果を私が使い果たす方がマシだ。こういうときにおいて私の生死がかかっている場合、失敗はありえない。私は私の、そんな幸運を信じているから。

「いいよ？ ただし同じ方法は通じないからね！ 1回1回別のやり方で突破できたら3人共、ちゃんと通してあげるよ！」

まあ、そうなるとは思っていた。

ならば、まず最初は簡単なことからだな。弾を1発込めて、回す。

「これは日向クンの分ね」

撃って、沈黙。

空虚な音だけが鳴り響き成功したことを確認する。

ごく普通の日向クンには普通のロシアンルーレットがお似合いだよ。

「次は七海さん」

こちらは原作狛枝がやっていた5/6ルーレットだ。

「こ、狛枝さんそんなことしなくてもいいよ。私が自分で……」

七海さんの言葉を無視して弾を5発分詰めて目を瞑る。

引鉄を軽く引いて、空虚な音。成功だ。

1発分の空白のみを引くのは彼女の原作再現だ。きつと1発しか詰めていなかったら私の頭に弾丸がぶち当たっていたんじゃないかな？

「私の分」

1発込めて、頭へ。

「同じのは……」

モノクマがなんか言っているが無視だ。

引鉄を引く。成功。

続けてもう1発込めて回す。引く。成功。

3発目を込めて回す。引く。成功。

4発目を込めて回す。引く。成功。

最後の5発目を込めて回す。引く…… 成功。

さすがに6発目は詰めない。リボルバーなのでジャムにかけるのは無理だ。

「……ふう、これでいい？」

「ワクワククのドッキドキだねえ！ オマエも魅せてくれるじゃんか！ いいよ！ 文句なしに最高だよ！ オマエラとつと奥へ進みやがれってんだー！」

思わぬところでモノクマのテンションをあげてしまった……これは失敗したな。モノクマを楽しませるのはいい加減癪に触るって

のに。

ちなみに、最初やったときは5/6だったので実際には今のが七海さんの分だったりするんだ。嘘ついてごめんね、2人とも。

「あの、狛枝さん……ごめんなさい」

「すまん」

「そこはありがたいのほう嬉しいかな？」

…… まったく、2人とも気負いすぎだ。

私の幸運はこんなことでは揺らがないんだからもっと信じてくれてもいいんじゃないかな？

「…… うん、ありがとう。でも、もうあんな無茶はしないでね」

「ああ、助かった。でも見てるこっちが怖いから、ああいうのはやめてくれよな？」

「善処はするよ」

都合のいい言葉に逃げて、ぬるりとした感触の扉を開く。

そこにあつたのは、小さな部屋だった。

左奥には大きなはめ殺しの窓がついており、その近くに電源盤らしきもの。それから右奥には冷蔵庫と壁の棚にズラリと並んだ凶器の数々。それからゴミで一杯になったゴミ箱に、床には小さな扉。

そして、白い床に僅かに垂れた血。

ここでなんらかのことが行われたのは、誰が見たって間違いなかった。

「ここでなにかあったのか、やったのかは、分からないけど…… 狛枝

さんがここに来ることを提案してくれなかったらまずかった……

かもしれないね」

「ああ、明らかに犯人がここに來たって感じだもんな。それじゃあ調べに行くか」

まずは凶器探したが…… 床は血に染まっているというのに刃物類にそれらしきものはなく、ただ沈黙している。

それに30cmほどの刺突武器のようなものなんてなかなかないものだ。刺突武器にしたって、精々モリや槍くらいなものだし、それらは30cmよりも明らかに長い。

他には斧やら鋸やら、スタンダードな包丁からプラスチック爆弾が作れそうな粘土質の爆発物らしきもの、謎の水晶玉やベツタベタに金箔の付く模擬刀やトイレットパーパーなど、真面目なものからふざけたものまで集めてある。雑多でガラクタを置いているような印象すら受けるくらいだ。

「さて、電源盤はつと……」

電源盤は全館の明かりも担っているようだ。その中の一つに、キツチリと冷暖房装置のスイッチを発見できた。

温度は35℃…… うん、死ぬるね。

我ながらよく死ななかつたなと褒めたい気分だ。

どうやら7時間程稼働していたようだね。もう止まっているみたいだし、タイマーでもセツトされていたんだろう。

「うっわ…… よく生きてたな、お前」

「…………… そうだね」

俯いて答える。

《コトダマ 電源盤》

「あれ…… なにか落ちてる？」

「ん、どうした七海」

2人が冷蔵庫近くまで歩いて行き、離れたところで顔をあげる。

窓に映った私の顔は笑っていた。それはそれはもう、凶悪な。そう、笑顔。無のエフェクトで表された象徴。

「……………」

死の危険。裁判。緊張。なにかかもで恐怖がどつと押し寄せて来て、もう笑うしかないよねこんなの。

「どうしたー？ 狛枝ー？」

「あ、うんごめん。窓の外のこととちよつと…… あとで言うよ」

唇を噛んで、血が出る。

痛くない。痛くなんてない。大丈夫、きつと大丈夫だから。

「これ、なんだと思う？」

「うん？ …… 甘い香り……？ でも十神クンの襟とはまた違った感じの……」

くんくん、と匂いを嗅いでみるが、そのゴムや粘土のようなお椀状の物がなにかは分からない。直径10cmに満たないそれは一見ただのゴミにしか見えないが、どうやら椀の部分に血がついているみたいだ。

《コトダマ お椀状に固まった粘土質の塊》

「一応メモしておくよ。七海さん、なんか袋持っていない？ 保存しておきたくて……」

「…… あると思うよ」

リュックを漁って袋を取り出した彼女から受け取る。証拠品だし、裁判で提出すればこれがなにか分かる人がいるかもしれないからね。「さつき窓がどうの言ってたけど、どうしたんだ？ やっぱりここは2つの建物に別れてるんだろ？」

「それなんだけど…… 先にこっちの方を調べよう。後で言うからさ」

今言ったら混乱させて捜査時間が終了する可能性すらある。それは困るから先に証拠の確保だ。

「ほら、この冷蔵庫なんていかにもって感じするよね。保管庫。 ”なんて書いてあるし”

冷蔵庫を開けてみると、上の段に所狭しと薬瓶が置かれ、下の段は空白となっていた。

…… ただし、そこにはお椀状の塊と僅かな血がこびりついていたが。

温度を見るとマイナス20℃に設定されている。

どうりで血痕が凍りついてしまっているわけだ。

「またこれか……」

「というかこれ、冷蔵庫というよりもはや冷凍庫だよね」

《コトダマ 冷蔵庫の血痕》

《コトダマ お椀状に固まった粘土質の塊を更新》

薬は全て凍りついてしまっていて、使えなくなっている。

なんとかラベルだけは読めたが、毒薬のようだ。もしかしたらあの錠剤も元々はここに入れていたのだろうか……？ しかし、冷凍室

並みの温度に設定されているので毒薬は全て台無しになっているが。

「もう1台冷蔵庫があるみたいだね」

そちらを開けると、そこには2つのビンが入っていた。

温度は…… 普通の冷蔵庫並みだ。

「ええと…… ビンの1つはクロロホルム、だって」

「それってドラマとかでよくあるやつだよな……？」

そうだね。サスペンスドラマなんかじゃあ人の気を失わせるのとかに使われてるのをよく見るから、あんまり詳しくない人でも知っていることが多い薬品だ。

「減ってるね……」

「ああ……」

《コトダマ 減っているクロロホルム》

もう1つのビンはどうやら毒薬のようだ。

モノクマ特製毒薬

“ アイスコーヒーのお供に ”

- ・ 自殺、殺人共に使える毒薬です。
- ・ 凍結しやすいので冷凍室ではなく、冷蔵庫に保存してください。
- ・ 沈殿性なのでお間違えの無いようにご利用ください。
- ・ 使う分だけ凍らせてください。1日凍結していると毒の成分は薄まって翌日には消えてしまいます。1日以内ならば溶けても毒薬として機能します。

さっそく憎いアイツの飲み物に氷としてぶち込んでやろう！

ご利用は計画的に！

相変わらずふざけてるのか、という謳い文句だな。死ねって言うてるようなものじゃないか。

「減ってるな……」

「減ってるね」

「…… うん、ほとんどないね」

使ったことがあからさまだが…… まあいいか。

《コトダマ 凍結する毒薬》

あとはそこに置いてある、一杯になったゴミ箱かな……？
そう思つて視線を向けると、それに気がついた日向クンが「なんだこれ……？」と言いながら手をつ込んだ。

いや、まあ…… 尊敬するよ、ある意味。

「つうわ、これ、血か……？」

ゴミ箱から引き上げた彼の手は血塗れだった。

しかしその尊い犠牲のおかげで溢れ出して来たゴミはその全容を明らかにしていき…… すぐに私たちはそれがなんだかを悟つた。

「空の輸血パックだね」

そう、そのゴミは使い切られた輸血パックだった。それも大量に。調べてみると全ての型があるようで、どうやら入口の扉にかけられていたのもこの輸血パックの血だったようだ。

《コトダマ 空の輸血パック》

「これは…… 後で罪木に相談だな……」

「あ、ならその床扉からマスカットハウス内に出れるんじゃない？」
私がそう言うと言向クンは疑問を浮かべて、「は？ なんでだ？」
と言う。

そういえば窓の外の説明をしていなかった。

「ほら、窓の外を見てよ」

「…… これは」

「うーん、私の推理は間違つてたんだね…… いい線いつてると思つただけだなあ」

このストロベリーハウス1階に位置するはずのファイナルデッドルーム。その窓から見えたのは、明らかに高所の景色だ。そして、タワーの向かい側に存在すると予測されていたマスカットハウスはどこにもなかった。

《コトダマ ドッキリハウスの秘密》

七海さんの推理もあるときあった材料だけではあれが限界だったのだ。

タワーを中心にして2つの建物があるわけではなく、この建物は全

部で6階建ての建物だった。

その事実を知ってびっくりしている2人に言う。

「ね？ だからその床扉を降りればそこはマスカットハウスのはずなんだよ」

別々の形からなる二つの建物。その余った部分にこのFDL……いや、その奥の秘密部屋、オクタゴンは存在する。

「さつきと報告しに行こうか。私は念のためもう少しここを調べておくよ」

「ああ、じゃあ先に行ってるぞ」

「私も……」

2人ともがオクタゴンから脱出し、罪木ちゃんの元へ向かった。

私はそれを見送ってただ笑うだけ。

「日向くんが本当に欲しい才能の手がかりは最初のロシアンルーレットでもらったけれど…… まあ、今はいいよね？」

誰に言うでもなく独りごちて毒薬のビンを突く。

カッソン、とガラス特有の音が爪の先から響いた。

《コトダマ 希望ヶ峰学園プロフィール》

それと、モノミにはあとで話を通しておかないといけないし……この準備もおこななければ。

鉛筆を取り出し、自身の “ 現在持っているクローバーの手帳 ” を塗りつぶして行く。

すると、とある文字が浮かび上がって来た。

《コトダマ クローバーの手帳》

「約束は、守るよ…… いや、元からそうするつもりだったんだからあんまり関係ないかな？」

約束は守る。

だからキミも約束通り、名誉を汚されても怒らないでね？

…… これは必要なことなんだから。

この世には自分自身にしかできない役割というものがある。

だからこれは私たちにしかできない、私たちだけの役割…… のはずだった。

「キミは覚えてるかな、あのときの人狼ゲーム。楽しかったなあ……」
立場は逆になっちゃったけれど、またああやって遊べればいいよね。今度は負けないから……

キミの仕掛けた最期の大仕事詐欺、いや、私たちの仕掛ける大きな大きなギャンブルじみた詐欺を、最後まで貫いてみせるよ。

ありがとう、十神くん。

これは私たちの渴望。

皆で生きる目覚めことのできる、最後の可能性に賭けた…… 渴望なんだ。

傲慢な自己満足に彩られた、希望よりも俗っぽい…… そんな望み。

まさか、被害者がクロの計画を元に計画を立て直しただなんて誰が思うだろう？

そんな前代未聞の学級裁判が…… 史上最悪の出来レースが始まる。

それは私の負けで繋がる物語。

暴かせること前提の、学級裁判。

死んで始まり、死んでまた続くことを願う、私なりの未来。

死んでも終わりになんかしてやらない。だって、この世界は夢の中”なんだ。

夢ならば、それを見ている人間がどう動かしたって問題ないだろう？

それに結果が変わらないのなら、過程がいくら違っても問題なんてないよね。

だから私は動機を隠す。私の、私たちの動機だけは隠し通して事件を暴かせる。

この事件は最初から凶器不明、死亡推定時刻不明、動機不明の事件だったんだ。

だから隠し通す。

誇張に誇張を重ねて本当のクロと、嘘の過程を創り出す。

…… たとえ、 “ 私たち ” が悪者になったとしても。
震えはとうに止んだ。

覚悟は既に決まっている。

ならば、あとは全力で楽しむだけだ。

……目を閉じる。

「精々楽しませてもらうよ、最期くらいはね」

—— どこかで始まりを告げる鐘アナウンスが鳴り響いた。

希望のカケラ 残り——

日向	5	/	6
小泉	4	/	6
罪木	6	/	6
濤田	3	/	6
ソニア	3	/	6
辺古山	4	/	6
七海	3	/	6
田中	2	/	6
九頭竜	4	/	6
左右田	2	/	6
十神	6	/	6
西園寺	2	/	6
花村	4	/	6
式大	2	/	6

終里

2
／
6

誇張は誰が為にあるのか

《 第4章 真・証拠一覧 》

ついに起こってしまったコロナイ。

それに巻き込まれたのはいつも事件を食い止めようとしていた十神白夜と、別の方法で事件を未然に防いでいた狛枝風だった。

リーダーがいなくなり、生き残った狛枝はなにかを隠している……

？ 日向はその全てを暴くことができるのか。

様子のおかしな狛枝。

困惑する日向。

青ざめる罪木。

三者三様の学級裁判。

終わりで繋がる物語。

それが今、始まった――

「そう、それは……」

それは、命がけの ” 信頼 ”

私たちの渴望した ” 未来 ”

私たちの動機は、私が一緒に持つていく。

私の仕掛けた大きな大きな謀。

黒兎の仕掛けた大きな大きな詐欺。

この世界が夢だと知っている人にしか実行できない、命懸けの真実。

まるで胡蝶の夢。

胡蝶が死んだら、その夢を見ていた人はどうなるのかな？

死んでしまうのだろうか、それとも変わらず続いていくのだろうか。

そんな、憶測だらけの賭け事。

知られたらお終いの学級裁判。

さあ、勝負だよ…… 日向くん。

今度は本物の、命を賭けた勝負だ。
モノクマなんて関係ない。
私たちは私たちが楽しくやろうじゃないか！

《コトダマ一覽》

・現場写真

狛枝が起きる前の状況。

十神は仰向けに倒れており、その下に狛枝が倒れている。

狛枝の右手は十神の背に潰され、左手は喉を掻き巻るようにしていた。そばには錠剤の入ったビン。そして入り口付近には血塗れの鉄パイプが落ちていた。

・真　モノクマファイル1

被害者は十神白夜、狛枝凪の両名

現場はドッキリハウス内のマスカットタワー

事件発生時刻は不明

十神白夜の傷跡は心臓部を貫通し、反対側まで突き出ている。

それ以外の外傷はなし

狛枝凪の負傷は同じく心臓部付近の刺傷だが、心臓には到達しておらず、傷はそれほど深くはないようだ。

また、熱中症による脱水症状が見られていた。

・熱中症だった狛枝

長時間室温が高い場所にいたために熱中症になっていた。

脱水症状まで出ていて、狛枝は瀕死の状況になっていた。

・不自然な血溜まり

血液は十神の背面から流れ出ている、刺されたと思われる正面はあまり血に濡れていなかった。

・異様に暑いタワー内

日向たちがタワー内に入ったとき、異常な程の暑さだった。

・苦しんだ十神

即死したはずだがどこもなく青ざめて苦しんでいるようにも見える。

・襟元のシミ

十神の襟に黄色っぽく、甘い匂いのするシミがついていた。

普段の彼ならこんなシミは作らないし、そもそもあること自体を無視できないだろう。

・呼び出し状

十神が所持していた。

「12時にマスカットタワーにて」と書かれている。

・血痕のついたヤスリ

血痕が僅かについたヤスリ。

倒れた十神に潰され、隠されていたのを破壊神暗黒四天王が見つけた。

・狛枝の証言

鉄パイプは護身用に持っていたが、十神に突然突き飛ばされて落ちてしまった。

その後は十神が目の前を覆っていて、彼と一緒に刺されてしまった。

十神を刺した人物は見る事ができなかった。

・血塗れの鉄パイプ

狛枝がいつも護身用に持ち歩いている鉄パイプ。伸縮式で、いつもは半分の15cmの状態で太もものホルダーにつけている。

何故かパイプの内側だけに血がこびりついているようだ。

・モノクマ特製睡眠薬

“ 安らかな眠りをアナタに ”

概要

- ・ 1粒でぐっすりとよく眠れます。
- ・ 2粒で寝付きの悪い人も安心です。
- ・ 4粒で誰にも邪魔されず10時間ほどずっと眠れます。
- ・ 8粒で昏倒するほどの驚くべき効き目になります。
- ・ 永遠におやすみしたい方は10粒ほど一気に飲み込みましょう

う。

とてもよく眠れます。

永遠に眠れます。

・ 罪木の検死結果

致命傷は腹に空いた刺傷痕で間違いなく、即死である。

凶器は傷口からして直径5 cmから8 cm程度で、長さは30 cm程度の槍や杭のような形状のもの。

十神の巨体を貫通しているので普通の力では犯行が難しい。

罪木は倒れた時に貫通したことも視野に入れているようだ。

・ 多すぎる血の量

罪木の見立てでは2人分の血液量にしては多すぎる。

2人共に失血死していてもおかしくないほどの量がある場にあるようだ。

・ 罪木の証言

血液凝固の状態が明らかに不自然である。

床の血溜まりよりも新鮮な血が存在する傷口の方が早くに固まっているのはなんらかの原因があるのかもしれない。

血の混在による凝固の可能性もあるようだが、より拒絶反応が起きやすい粕枝の傷口はそれほど強く拒絶反応を示していなかった。

2人の血液型は通信簿により、粕枝はO型。十神がB型だと判明している。

《テンノコエ》

血液型と輸血したときの拒絶反応については、私からご説明させていただきます。

まず、O型の血液はどの血液に輸血しても拒絶反応がそれほど起こりません。

これはA、B、AB型内には同名の抗原があるものの、O型にはこの抗原がないからです。この抗原は赤血球に含まれています。

また、この赤血球の抗原に反応する抗体が血清には存在し、A型に

はB抗原に反応する抗B、B型には抗A、O型にはその両方がありますがA B型にはどちらも存在しません。

故にA型とB型を混ぜると拒絶反応が起こり、O型を別の血液に混ぜるのは拒絶されませんが、O型にA型、B型の血液を混ぜると重大な拒絶反応が起こるのです。

この場合、2人の血が傷口で混ざっていたとすると強い拒絶反応が起こりうるのは狛枝風様のほうなのです。

だからこそ、ご学友は疑問に思われたのでしょうか。

以上が補足説明でした。

・電源盤

暖房の設定温度は35℃となっており、稼働時間は7時間。日向たちが発見した時には既に暖房の稼働はしていなかった。

・お椀状に固まった粘土質の塊
直径10cmにも満たないだろう塊。一見ゴミにしか見えないが、椀の中となる側に血がこびりついている。

十神の襟とはまた違った独特な甘い香りを漂わせていた。

血のついた冷蔵庫の中にももう1つ同じものが存在していた。

・冷蔵庫の血痕

保管庫と書かれた冷蔵庫。

その上部にはビンが並べられ、下部には粘土質の塊と血痕が残っていた。

冷蔵庫の中はマイナス20℃に設定され、そのせいか血痕も薬も全て凍りついていた。

ここに入っていた毒薬は使い物にならなくなっている。

・減っているクロロホルム

クロロホルムとラベルが貼られた薬瓶の中身が減っている。

無色透明の液体だが、どことなく甘い香りがする。

・凍結する毒薬

モノクマ特製毒薬

“ アイスコーヒーのお供に ”

- ・自殺、殺人共に使える毒薬です。
- ・凍結しやすいので冷凍室ではなく、冷蔵庫に保存してください。
- ・沈殿性なのでお間違えの無いようにご利用ください。
- ・使う分だけ凍らせてください。1日凍結していると毒の成分は薄まって翌日には消えてしまいます。1日以内ならば溶けても毒薬として機能します。

さっそく憎いアイツの飲み物に氷としてぶち込んでやろう！

ご利用は計画的に！

- ・空の輸血パック

A、B、O、ABの全ての型の輸血パックが開けられ、使用されている。

大量に空いたパックは全てゴミ箱に詰め込まれていた。

- ・ドッキリハウスの秘密

ドッキリハウスはタワーを中心とした横方向の建物ではなく、縦方向に伸びる6階建ての建物である。

- ・希望ヶ峰学園プロフィール

そこには日向が予備学科であることも載っており、さらに十神白夜はクラスに存在せず、代わりに「超高校級の詐欺師」の存在が書かれている。

- ・クローバーの手帳

現在持っているもの。

予想通り、とあるページを鉛筆で塗りつぶすと言葉が浮かび上がった。

私とキミの学級裁判

— MONOKUMA THEATER —

ところでオマエは信頼するのってどう思う？

ボクはとつてもいいことだと思うんだ。

信頼って言うのはさ、2種類あるんだよね。

自分を信頼すること、他人を信頼することだね！

特に自分を信頼することはすごく難しいよね。だってどんなことも責任を取るってことだからさ。

他人を信頼するのは騙すよりも簡単だけどね。だって他人に責任取ってもらうってことだもん！ 信頼するから選択を託して選んでもらえばいいんだ。そうすれば選んだソイツに責任は発生するけど、自分には責任なんかないからね。

ほら、トロツコ問題ってあるじゃない？

自分は線路の切り替え地点に立っていて、暴走したトロツコの先には5人の作業員。切り替えた先には1人の作業員がいる。オマエはどうする？ ってやつ。

あれなんてまさに責任問題ってやつだよね！

自分で行動すれば人を1人殺した責任は免れないし、行動しなければ5人死ぬけどしらばつくれば責任はないんだよ。それと一緒にだよね？

ま、ボクはトロツコを真つ二つに割って、どっちが多く轢けるか賭けるけどね！

例えば、他人を信頼して責任をとってもらったときにいざとなったら置いて逃げればいいし、極め付けに知らないフリをしておけば最高だよね！

ね、信頼するってとつてもいいことでしょ？

だからオマエもどんどん信頼してどんどん責任を押し付けてどんどん利用してやろうね！



「……………」

気まずい。

罪木ちゃんは青ざめた表情のまま黙ってしまっている。

辛うじて私のパーカーを掴んでいるが、まるで縋り付いているように離れてくれそうにない。

「…… あ、あの」

「うん？ どうしたの？」

私とは違つてとても不安そうだ。

「粕枝さんは…… 不安じゃないんですかあ？」

随分と言い淀んでから、そう言った。

不安か。不安じゃないなんてこと、ないんだけどなあ。

いつだって痛いのは嫌だし、死にたくななんてないんだからさ。

「…… 私だつて怖いものは怖いって、前にも言った気がするけど…… うん、不安だよ。そう見えないなら、きつと罪木ちゃんがそばにいてくれるからだね」

「ふえっ!? あ、あああの粕枝さん…… !?」

勿論慌てさせているのはわざとだが、本心でもある。

相手が動揺していれば多少態度がきこちなくなつてもバレないというのが1つ。

もう1つは…… こうでもしていないと、考えないようにしていないと全て顔に出してしまいそうだからだ。

だつて私は、誤魔化すのは得意でも嘘を吐くのは下手なんだから。

取り繕つて、今は “被害者の自分” をインストールするように埋め込み、演技する。

そう、いつもやっていることだ。

病院から逃げ出すときもそうだった。学校に通っている時もそうだった。見えないフリ。聞こえないフリ。そして、知らないフリ。

そうしてれば、この先の恐怖も忘れられるから。

「罪木も狛枝も大丈夫か？」

「うん……」

「は、はい……」

私に続き、罪木ちゃんも弱々しく返事する。

そして、モノクマが全員揃ったことを確認して合図をすれば “それ” はやってきた。

マスカットタワー内に巨大なエスカレーターのようなものが建物をぶち破って突き立てられた。

それに悲鳴をあげる人も、驚く人もいるが、私は密かに彼の遺体が潰されていなかったことを確認して安堵する。

ついでに私自身のことも。

モノクマのことだからついでとばかりに殺人未遂の被害者である私まで殺してくるのではないかと思っていたのだ。

そんなことをしたら本来見ている者のバッシングは免れないが、このモノクマはそんなものを恐れない。

アイツはただ死体が増えて欲しいだけなのだし、外にいるあの人たちになにもできない無力感や絶望を与えたいだけ。

本人にとっちはいくら私たちが死んだところで歓迎こそすれ、嘆くことなどないのだ。

「あー、やっと出番だよ！ 長かったね！ さてオマエラ！ このエスカレーターから移動してくださいねー！ この先はちよつとした小部屋になっていて、その先はまた地下へと進むエレベーターとなっています！ 全員が乗り込んだらエレベーターは稼働するようになってるから、エスカレーターで先に上がった人は少し待っててね！」

そこまで言っつて、ハツとしたようにわざとらしく「あつ！」なんて声をあげたモノクマに全員が注目する。

反応してしまうのはしょうがないので別にいいが、モノクマが気づいたことにロクな予感はない。

「全員つて言っつても十神くんだけは無理だけどね！ ぶひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

…… ほらね、ロクでもない。

「ふぎけんな！」

「ぶつとばされてえみたいだなあ！ オメー！」

「坊ちゃん！」

「終里、よすんじゃあ！」

九頭龍クンと終里さんが激昂するものの、複数人に止められて足を止める。

終里さんにいたっては式大クンが羽交い締めにしてもまだ抵抗しているようだ。

「なんでだよ式大のおっさん！ なんで止めるんだよ！」

「お前さん、モノケモノがいるのを忘れたんかあ！ 悔しいだろうが、今は我慢するしかないんだ。なぜ分らない！」

「うぷぷぷ、止めてもらえてよかつたねー？ 無駄に死体が増えちゃうところだったよ！ ま、その方がボクとしてはいいんだけどね！」

そうそう、無駄死にはよくないよ。

九頭龍クンや終里さんが死んじやつたら踏み台になってくれた十神クンの立つ瀬がないよ！ …… なんて “ 彼 ” のようにはいかないな。

でもダメだよ。それじゃあ意味がない。キミたちが死んでしまつたら、私たちのやったことは意味がなくなつてしまうんだ。

だから、お願いだから今は耐えてね。それが残酷でも。

「うう、でも進まないといけないんですよね……」

「大丈夫、大丈夫、ダイジョウブ…… うう…… 絶対に十神くんを殺した犯人を見つけるんだ……！」

一緒に行動していたソニアさんと花村クンがエスカレーターに乗り込む。

そうして皆は次々とエスカレーターに乗り込んでいった。

やがてエスカレーターは終わり、エレベーターホールに出る。

花村クンはあのゲーム大会のときに見たおまじないのフレーズを、しきりに呟きながら決意を固めていたようだ。

うん、頼もしい限りだね。

「オレたちだつて全部頼りきりにしてばつかじゃねーつてところ見せてやんねーとな！」

「おー、和ーちゃんもたまにはいいこと言うつすね！」
「たまにはつてなんだよー！」

「一番ビビつていいると思つていたが、案外左右田クンも決意を固めてくれていたみたいだ。ちよつと心配していたから良かったよ。」

「あーあー、くっさい台詞ばつかでキモいんだけどー」

「日寄子ちゃん？」

「まつたくさー、豚足ちゃんがいればすぐ黙らせてくれるのに……」

「一緒に犯人を探そう？　ね……？」

「……………　うん」

俯く西園寺さんに、小泉さんが優しく微笑む。

なんだかんだで西園寺さんは十神クンに懐いていたような気もするから、寂しいものは寂しいよね。

「暴食の魔王も今頃は冥界竜の背の上か。冥土の土産くらいは贈つてやるとしよう」

えーつと、多分みんなで見送つてあげようつてことだね？

相変わらず田中クンは優しいな。でもいちいち地獄系で纏めるのはなぜなのか。ソニアさんのことも闇の聖母つて言つてるし、厨二的には暗黒系で纏めないといけないのかな？

「十神くんは、確かに私たちのリーダーだったよ。そうでしょ？　日向くん」

「ああ、あいつは誰よりもリーダーらしかったよ。コロシアイを止めようとして色々なことを企画して、皆がバラバラにならないように纏めていた。だから、俺はそんな十神を殺した犯人を、許すことができない……………」

苦しそうな顔で俯く彼に、手を伸ばそうとして……　引つ込めた。
私なんかが今の彼に余計なことをしてはいけない。そう思つてしまったから、思い至つてしまったからだ。

真つ黒に染まったこの腕を、彼に差し出すなんてことは　許されない

たとえ必要なことだったのだとしても、それは理性で分かっている感情で理解できない…… 否、してはいけないものだ。

そうやって飲み込んで見守っていれば、七海さんが最後にエレベーター内に入った。

「でも、日向くんだってみんなの支えになつてた…… と思う。だから、みんなきみについていくんだよ。日向くんは才能を思い出せないって言ってなんとなく自信がなさそうだけど…… それは違うんじゃないかな。才能が分からなくても、きみはきみなんだよ。今、みんなが着いてきているのはきみだからなんだよ。だから…… もつと自分に胸を張っていいんじゃないかな……？」

「七海……」

2人が決意を新たに、頷く。

それを私はエレベーターの隅で腕を組みながら眺めていた。

わざわざ折った左袖の端をきつく握り締め、いざい人となると途端に心細くなる心中を誰にも悟られぬようにそっぽを向いた。

「…… 狛枝さん、顔色悪いですよお……」

「そんなこと、ないよ……」

そんな私に寄り添ってくれる罪木ちゃんには申し訳ないが、態度が素っ気なくなってしまう。

まったく、自分の顔色も悪い癖に人の心配ばかりするんじゃないよ。そうは思っても口には出さない。

今は声を出したら震えてしまいそうだ。

静かにエレベーターが降りていく。

稼動音だけは妙に耳に残る気がする。

それがまるで処刑場へ向かう私への歓迎の声みたいで…… なんとなく不愉快だった。

「罪木ちゃんはさ……」

震え出さないように注意しつつ、ポツリと呟く。

「あのときの人狼ゲーム、覚えてる？」

その言葉にキョトンとした彼女は目をパチクリして肯定を返して来る。

恐らく、私が気を遣って明るい話題を投げたのだと思っっているのだろう。

「はい。十神さんが狼で、狛枝さんが罫にかけて道連れにしたときのことですよねえ……あのときはいきなり任せたなんて言われて、びっくりしちやいましたよお」

共有からしたらたまったものじゃないだろうね、あの展開は。

でも、それをやるのが私だ。そのあと散々怪しい発言をするごとに疑ってかかられたっけ。

「楽しかったよね」

「はー」

あまり意味深なことを言ってもフラグになりそうで怖いけれど、言わずには……話さずにはいられなかった。

1度話し始めたら止まらなくなってしまった。

それだけ、口を動かしていないと沈黙に圧殺されてしまいそうで……そしてやはり自分も不安になっているのかと気づく。

「また、みんなで遊びたいよね?」

「……………」

彼女には記憶がある。

だからこの世界が幻想であることも知っているし、彼の心臓が現実には破壊されたわけではないことも知っている。

夢と現実。その境界線はきつとその人にしか判断できない。

だから彼が死んだのなら、現実の彼も脳死してしまっているのかもしれないが……そうでない可能性もあるのだ。

彼の意思は強い。だから大丈夫。そう、信じているけれど……賭けの行方は私も同じところに行かなければ得ることができない。

彼女にこんなことを頼むのは酷だ。

私を生かしてほしいだなんて約束しておいて、私がそれを破ろうとしている。

彼女は後悔するだろう。

彼女は傷つくだろう。

彼女は泣くんだろう。

それでも進むしかなかった。

彼に私の計画を気付かれた、そのときから。

「私もまた、みんなと遊びたい。いや、遊べるようにしてみせる……」

「…… 粕枝さん？」

さすがに怪訝に思ったのか、青ざめたままの彼女がさらに不安そうにする。

「約束だよ、罪木ちゃん。また、一緒に遊ぼう…… 全員揃ってさ」

「で、でもそれは……」

無理だ。

そんな顔をしている罪木ちゃんの手を握る。

包帯越しなのに、できたばかりの傷がピリリと傷んだが気にしない。い。

「ほら、約束…… 私たちは死ぬわけにはいかない。だから絶対にモノクマに勝って、退屈な日常を取り戻すんだ」

嘘のない宣誓。

だけれど、その実それは罪木ちゃんに向けたものではない。

「約束…… してくれるんですよねえ？」

「…… 私は約束を破らない。だって」

「嘘は嫌い…… ですよね？」

「…… あははは、罪木ちゃんは私のことをよく分かってるよ」

そう、約束を破るわけじゃない。

だから信じて。私を、私の言葉をキミだけは、信じていて。

私もキミを信じるから。キミたちが迎えにきてくれるって信じているから。

私はみんなを信頼する。

それは逃げなんかじゃない、負けなんかじゃない。

これは、未来に進むための一歩。

「約束……」

「はい、約束ですう」

指を絡めて、笑い合う。

たとえばその一歩先が崖だとしても、その先になにかが待っているな

らば私は進む。

私1人で生きてたとしても、それはもう私ではなくただの抜け殻となってしまう。それに気づいた。気づけたから。

自己中心的で、自己満足な、欲張りもいいところな願望。

死ぬのは怖いけれど、私は死なないと約束した。

だから胡蝶は死んでもそれは所詮夢の自分。

起きた人物は何も変わらない日常を過ごし、未来を謳歌する。

何度も死んで、何度も起きて、そんな日常を鬱陶しく思ったことも

あったが、今では自身の夢に感謝できる。

だって…… 夢の中で毎日死ぬような日常を送って来なかったら、こんな賭けを思いつきもしなかったのだから。

私は死なない。

終わりなんて来ない。

これからもずっと続けられるように。

希望のカケラが、絆の証はずっと変わらず続いていく。

エゴかもしれない。けれど……

これが私の渴望した未来への選択だ……！

長い長い駆動音がようやく止まり、目の前の扉が自動で開いていく。

目に入ったのは、やって来た初めての裁判場。

思っていたよりもずっと広いその場所に足を踏み入れ、私はしっかりと前を見た。

迷いは、ない。

欲を言えば彼に演技指導してほしかったくらいだけれど……今はもう、それはできない。

円状に並べられている席には特に名前が書いてあるだとか、似顔絵が書いてあるだとかはなかった。

いつもゲームでは自分の席につけとかなんとか言っていたが、今回は自由席なのだろうか？

悪趣味にも両端が尖ったような線の描かれ方で十神クンの遺影に罰点印が押されている。そこはモノクマが席につく、裁判長席のすぐ近くだった。

戸惑いつつも日向クンがモノクマを真正面から捉えられる位置に行く。要するに時計で6時の位置だね。

ならば……と私はモノクマの丁度前に。つまり日向クンの真正面である12時の位置に立つ。

16人分の席があるので時計とは微妙に位置がズレるが、概ねそのくらいの位置と言っただろう。

そして私の左隣……1時の位置には十神クンの遺影があるため、罪木ちゃんは右隣の11時の位置に。

日向クンの隣にあたる5時と7時の位置にはそれぞれ左右田クンと七海さんが立った。

つまり、12時の私を支点として時計周りに十神クン、花村クン、終里さん、式大クン、小泉さん、西園寺さん、左右田クン、6時に日向クン、七海さん、瀧田さん、ソニアさん、田中クン、辺古山さん、九頭龍クン、そして……罪木ちゃんが席に着いたのだ。

「おい、その悪趣味なモンはなんだ？」

九頭龍クンが遺影を指して言う。

ああそうか、皆はこれを見るの初めてだから…… って私も初めてだけれど、それでもゲームでは普通に見てきたから違和感なんてなかった。ちゃっかり隣の席を確保しちゃったしね。

「見て分からない？ 遺影だよ遺影。ほら、1人だけ仲間外れだと可哀想でしょ？」

「悪趣味すぎるぞ……」

悪意のこもったモノクマの気遣いに対し、反感を持つのは皆一緒だ。

うぶぶといつものように笑うモノクマを睨みつけたり、歯を食いしばって眉を顰めたり…… それぞれ反応は違うがそれは否定の意思に他ならない。

日向クンの言った通り、「悪趣味」としか言いようがない思いやりだ。

「そのバツはどういう意味だよ？」

「皆の分の立て札もあるよ？ ほらほら、これをその席に立てられないうようにしようね？ うぶぶぶぶぶぶ！」

明確な答えが返ってきたわけではない。

しかしモノクマが見せたいくつもの立て札と、その写真には真顔の皆が貼り付けられている。

いったいいつそんな写真を手に入れたのかとか色々気になるところはあがるが、十神クン以外の立て札に罰点印がなかったことで皆は無理矢理悟らされてしまった。

その罰点印は、その人物が “ この世界で死んだ ” ことを表しているのだ、と。

「本当、悪趣味……」

呟く。

モノクマの持った立て札には勿論私の分もある。

ああ、この裁判の後、あれにピンク色の罰点印がつけられるのか。人によって印のつけ方は違うので、私にはどんな風に印が付けられる

だろう？ と少しだけ疑問に思う。

確認することなど、できはしないけれど……

「さて、十神クン以外は席についたかな？ それじゃあ学級裁判……開廷します！」

最後まで彼をそんな風に扱うのか。

そうか、そうか…… 許さないよ、絶対に。

「おっと！ そんな怖い顔しないでよ。うぷぷぷ……」
ギリリと唇を噛んで耐える。

恐らくモノクマを睨んでしまっていただろう。

そんなの私らしくない。ここは飄々としていないと。

こんなことで動揺していたら、彼に笑われてしまう。

「では、最初に学級裁判の簡単な説明をしておきましょう」

うぷぷぷ、とひとしきり笑ったモノクマは早速と言った風に説明を始めた。

その言葉は淡々としていて、私にとっては何度も聞いた。皆にとつては初めての口上を述べていく。

「学級裁判では、誰が犯人か？」を議論し、その結果は、オマエラの投票により決定されます。正しいクロを指摘できればクロだけがおおきですが、もし間違った人物をクロとした場合は…… クロ以外の全員がおおきされ、生き残ったクロだけにこの島から出る権利が与えられます！」

前にも思っただけれど、やはり「権利」としか言わないんだね。

そんな都合のいい言葉に騙されてしまうのが人の心というものだけれど。

「みんな！ まだまだアンパンだけじゃお腹空いてるだろうけど頑張って行こうね！ 無事生き残った人には豪華な給食が待っているからね！ な、な、なんと！ ウサギカレーです！」

ウサギって美味しいんだっけ？

そもそもモノミは中綿しかないんじゃないかな。

「あちしはあんたなんかになんか負けまちなからカレーになんてならないんでちゅよ！ 残念でちたね！ 美味しいニンジンサラダをたっぷ

り振る舞うからね！ 勿論ミナサンにでちゅ！ 絶対絶対！ そんな理不尽なルールはあちしが許しまちえんから！」

「つて、なんで捕まってるんだよ!？」

モノクマはモノミをカレーにするだなんて一言も言っていないし、さつきから気になっていたけれどモノミは鳥籠のような檻に捕まっているし、もうどこから突っ込んだらいいのか分からないよ。

「そ、そのこれは……！ ニンジンがでちゅね……！」

「釣られてんじゃねーよ！ 非常事態なんだぞ!？」

「はいはい、遊んでないで始めるよ。あんたこそ非常事態なんだから落ち着きなさいって」

「左右田おにいが一番うるさいよねー!？」

「っ!?! ………………」

あ、左右田クンがまた撃沈してる。シヨック過ぎて言葉が出てこないみたいだ。

原作でいうぎにやあああ！ の劇画風とも言えるものすごい顔で固まっている。

ちよつと、こつち見ても助けないからね？ ていうかその顔でこつち見ないでよ。笑わせたいのかな？

でも笑ったら傷つくだろうし目を逸らす。ますます傷ついた表情をした気がしたがきつと気のせいだ。

どうせなら隣の日向クンに慰めてもらえばいいのに。

「えつと…… それじゃあまずなにから話そうか……?？」

「まずは何について話し合うのか…… それを決めるところから始めてみましょうか。それでは皆さん！ なにについて話したいか、それぞれ主張なさいー!？」

そのやりとりに戸惑った様子の七海さんが言い、ソニアさんがそれを纏めて議題提供をする。

十神クンがいなくなってしまうたからか、自分が頑張らねばと自身を奮起させているようだ。いつも通りには見えるが、少々強張っていて動きが固いような気がする。

さて、最初の議題は何を話すか…… だね。

「唯吹は “ みんなのアリバイ ” を訊いてきたよ！ この耳でしっかり記憶したからね！」

「話すのならば不明瞭な部分を話し合うのがいいだろうな。ならば “

凶器 ” か……」

「ああ、だけどそれなら “ 死亡推定時刻も分かってない ” “ んじやなかったか？”

「現場は “ タワーの中 ” “ で間違いない…… んですよねえ？”

「えっと、そもそも…… “ 事件の概要 ” “ がまだよく分かってないんだけど…… “ ぼくは駆けつけただけだし、そこが分かっていないと話が噛み合わなくなっちゃうんじゃないかな”

澤田さんはアリバイについて。辺古山さんは凶器で九頭龍くんが死亡推定時刻について。そして罪木ちゃんが現場が間違いないことの確認を求めて、花村くんが事件の流れを知りたい…… っと。

最初に相応しい議題とえば、花村くんの言っている事件の概要かな？

それが分かっていたほうが議論もしやすくなるだろうしね。

よし、『 私は花村くんの意見に賛成 』だよ！

「先にそれをはっきりさせたほうがいいと思う。日向くんはどう？」
発言して日向クンに同意を求める。

恐らく彼もそういう流れのほうがやりやすいはずだ。

「ああ、それは賛成だが…… 先に訂正だけさせてもらうぞ。九頭龍、死亡推定時刻はおおよそ分かっているぞ。それは皆のアリバイを確認していけばはっきりするはずだ」

「そうか。なら、事件の流れをはっきりさせてからそつちの話に移るのがいいみてーだな」

しつかりきっぱり論破までしちやってるよ。

はあ、生『 それは違うぞ！ 』はなかなか見れないなあ。今からそれが言われるのが楽しみだ。

勿論、十神クンに報いるために計画は完遂するし私は死ぬ。けれどやはり裁判とおしおきは花形である。どうせ死ぬのなら楽しんで満足して死にたい。願わくば、日向クンにキチンとトドメを刺されたい。

自分から自白するだなんて面白くない。そう面白くないんだよ！歪んでいるだなんて分かっている。自分が恐怖でおかしくなっているのも理解している。死ぬことを心待ちにしているだなんて頭おかしいと思うよ？ でも止められない。止められないんだよ！

恐怖を麻痺させて、恐怖心を凍結させて、楽しみにだけ目を向けて…… 殺されることで繋いでいく。

残される側のことを考えていないわけではないが、その衝動は抑えられないんだ。

死にたくないのは勿論変わらないけれど、今は目的の為にそれが振り切っちゃって一周回ってしまった状態だ。

だから私には覚悟こそあれ、躊躇いなんて微塵もないんだよ。

「じゃあ最初は事件の流れについてだね？」

内心のことは少しも漏らさず、確認のため周囲を見る。

「事件の流れのう。なら第一発見者に訊くのが1番だろう？ 第一発見者は誰だったか……」

式大クンがそう言うのと、真っ先に日向クンが反応して続ける。

「俺と七海と罪木だな」

「あ、待って…… 粕枝さんの話は聞かなくていいの？」

「先に発見したときの状況を知ってから…… のほうがいいかな」

花村クンの言葉に一瞬ドキリとしたが、すぐさま七海さんが意見をに入れてくれた。

助かったよ、心の準備がまだだからもう少し待ってね。

「わ、分かったよ。じゃあそれも後だね」

さて、何言うか決めておかないと。

「ではお3人方、証言をお願いしますー！」

ソニアさんか合図して3人は顔を見合わせ、順番に話し始めた。

「と、言ってもこれといったことはなかったんだよ。朝の…… 6時半は過ぎてたから40分くらいだと思う。モノクマから7時に集まるように言われてたし、そのくらいに起きて外に出たら…… 罪木さんに会ったんだ」

七海さんが言う。あれ、同室の人は？ と思ったがどうせ言及があるので今は見送ることにする。

「は、はい…… 早起きできたので先にお手洗いに行っておこうかと思ひまして…… 同室の終里さんは気持ちよく寝ていましたから…… 遅刻してしまいそうなら後で起こしてあげようと思つてたんです……」

「ソニアさんは起きてただけだね、身支度が結構かかるみたいで後で合流することになってたんだ」

なるほど、確かにこんな状況でもいつも通りにするってとても大切だからね。

ソニアさんは髪も長いし大変そうだ。

「それで、マスカットタワーの前で会ったんだよな」

日向クンもどうやら早起きしていたみたいだ。

「そうそう。日向くんと会つて、一旦タワーに誰かいないか確認しに行つただけど……」

七海さんの言葉が詰まる。

「そ、そこで…… 見つけてしまつたんですね……」

ソニアさんが目を伏せて手をぎゅつと握る。

まあ、死体を発見したんですねとは言いたくないよね。

「それから罪木が叫んで、七海が皆を呼びに行こうとしたところに放送が鳴つたんだ」

なるほどなるほど。私たちのことは3人で見つけたんだね？

…… うーん、これで2人で見つけたとかならルール上推理難易度は大分下がったのだろうけど、3人で発見したとなるとルールのにおかしなところはなくなるね。

最初の発見が2人で、3人目が合流したときに放送が鳴ったとかならば、私がシロでないという証拠になっちゃうからね。

死体発見アナウンスは3人のシロが死体を見つけたときに流すものだから、十神クンの死ぬ瞬間を見ただろう私が放送の人数に数えられていないのはおかしいということになるからね。

勿論、私はクロだから発見者の人数には入らない。

「発見時刻は6時50分だったよね？ 40分くらいから行動してたらなおかしなところはなさそうね……」

「そうだな……」

小泉さんが確認するように呟き、それを日向クンが肯定する。

そして彼の視線は話していた小泉さんからゆっくり私へと移された。

「私は日向クンたちに話した通り…… と言っても時間までは言っていなかったっけ？」

それを “ 証言 ” する合図だと受け取って話し始める。

「夜中の12時にタワーまで行ってたんだよ」

全て事実だから焦る必要はない。

「そこで十神クンと会って、護身用に持ってた鉄パイプも落として、あの場所で彼が刺されて、そして私も刺されちゃったわけだ」

ただ少し、言っていないことがあるだけだ。

「あ、あの…… 粕枝さんに同意しますうー！」

ん？ 罪木ちゃんが同意してくるんだ。

かなり食い気味に來られてビックリしちゃったけれど、この肝心な証言を肯定してくれると助かるといえば助かるかな？

最終的には私を徹底的に追い詰めてくれないと困るからさ、最初の方は疑われない位置にいないとね。

ちゃんと順序良く、最初は疑われないようにしつつ、そして悪足掻きしながら最悪のクロとして退場するのが理想だ。

その方が罪悪感とか虚しさとかを少しでも抑えられるからね。

皆には後腐れなく、私を悪者として裁いてもらわないと。

「十神さんには12時にタワーに來るよう呼び出し状が出されていた

「んですよねえ？」

「ああ、そうだな。狛枝が十神のポケットから見つけていたぞ」

「なら、狛枝さんもそうなんじゃないですかあ？」

「ほうほう、そこまでキミは私を信用してくれているのか……。」

目を伏せ、頷く。

「こういうの、きつと十神くん相手だったから見破られるんだろうなあ。」

「そう、私も12時に行かなくちゃ行けなかったんだよね…… 勿論躊躇いはあつたけどさ……。」

「どっちとも取れるように言うのは私の得意とするところだよ。」

「んで？ 結局犯人は誰なんだよ。あんまムズカシーこと言われても覚えらんねーって」

「まあそう言うな。お前さんは分かる部分だけ追っていけばいい。分からん部分がワシが教えてやるからな！」

「終里さんがそろそろ退屈そうにしているが、式大くんが頑張っているのでまだよしとしよう。」

「恐らく日向くんには彼女の力が必要になるだろうし、ね。」

「それでは、先程日向さんがおっしゃられていた死亡推定時刻についてはどうなんでしょうか？ 皆さんのアリバイで分かるようになるのですよね？」

「ソニアさんが先程話題に出たことを再確認するように日向くんへ振る。後回しにしていたので、次の話題はすぐこちらに移ったようだ。」

「ああ…… 皆殆どは部屋で寝てただろうしな。濔田、確認お願いできるか？」

「はいはいはい！ ちゃあんと全員に訊いて、この耳で記憶したよ！ たつはー！ 唯吹つたら高性能すぎて怖いくらいっすねー！」

「わー、耳以外に取り柄がないくせになんか言ってるよー？」

「が、ガビーン！」

「口頭で直接ガビーンなんて言う人初めて見たつてのもあるけれど、西園寺さんもなんだかんだ濔田さんの耳は優秀だつて認めてるんだ」

ね。

「貶しているようにも思えるけれど、つまりはそういうことだよね？
「まあ創ちゃんと言う通り殆どの人は自室にいたし、同室の人が目撃してゐるっす。寝てる間なんかはさすがに分かりようがないんだけどね！」

「そんなやり取りをしたあと落ち込む様子なく彼女は続けていく。
「あ、でもペコちゃんは夜時間になってから冬彦ちゃんのところに行つて、冬彦ちゃんの同室の猫丸ちゃんは赤音ちゃんとストロベリーハウスの上階にある公園に行つてたみたいっす！ 要するに唯吹も蜜柑ちゃんも部屋に1人だったってわけっすね！」

「ほほう、らーぶらーぶかな？」

「いやあ、絆を深めるのはいいことなんじゃないかなあ…… なんて口に出したら空気読めてない上におっさんくさいか。」

「辺古山さんたちに限つて不純異性交遊的なことはないだろうし、式大くんたちは特訓していただけたらどうしね。」

「それと、第三者が目撃してないから私と坊ちゃんが本当に会つていたのかも確認のしようがないと言つていいだろう」

「あれ、そんな不利なこと言っちゃっていいの？」

「一応これは学級裁判だし、現実の法とはなんら関係ないから」 親しい間柄による相互アリバイは不成立。 “ だなんてことにはならないのにさ。”

「でも、まあそれを自己申告するなら式大くんたちにも適用されないとおかしいよね。」

「なら、終里さんと式大くんが実際に会つていたかも証明はできない…… と」

「で、でもそれをアリバイに数えないなら…… 仲のいい人同士だと皆アリバイがないってことになるらぬ？」

「まあそういうことになるよね。」

「でもそれだとほとんどアリバイとして成立しなくなつちゃうから……」

「わざわざ部屋を移動してまでつてなるとそうなるかな…… ? だ

から、ずっと部屋にいたらしい小泉さんと西園寺さんペア、七海さんソニアさんペア、左右田くん日向くんペアはお互いにアリバイを証明できるとなるね」

ちよつと苦しいかな？

「逆に俺様や闇の料理人のような1人でいた者や部屋を移動していた者はアリバイがないと言いたいわけか」

この考えでいくとアリバイがないのは辺古山さん・九頭龍くん、罪木ちゃん、濔田さん、終里さん・式大くん、田中くん、花村くん。そして、私と十神くんということになる。

「十神クンのことは夜時間前に目撃した人もいるよね？」

「ああ、俺が夜時間直前までは一緒にいた」

ふむ、日向くんか。

カケラ集めでもしてたのかな？ 島に来た当初から一緒にいることが多かったし、まったく仲がよろしいことで。

「だったらやっぱり、十神くんが殺されたのは夜時間のとき……さらに言えば私も時計を見て12時前に行つたからそのくらいの時間が死亡推定時刻つてことになるよね」

筋道立てて考えればそうなる。

そもそも私が証人となるので、私の証言を信じられない人向けの説明だ。

「ああ、そういうやそうだったっけか……アリバイ確認しなくても分かつたんじゃないか？」

「唯吹の活躍がっ!？」

「左右田さん、そういうことはあまり言つてはいけません」

「あ、そ、そうですね。悪い濔田」

「フウウウウ！許したげるから嘸ませて！」

「っだー！やめろオオオオ！」

……なんて思つて見回しても、だーれも私を疑つていないんだよね。臆病な左右田くんできえこれだ。まったくこのお人好し共め……普通の詐欺にも引つかかっちゃうんじゃないの？ 私はそこが心配だよ。

「そっか…… 単純に犯人を絞り込むなら、やっぱりアリバイありきで考えた方がいいかもしれないね」

七海さんが結論づける。勿論、それを考慮しないとシロの範囲が狭すぎるからね。

グレーが多いと考えるのも大変だから、まずは誰ができたかを考えるのが1番だ。

「だけだよオ…… 残りの、” 動機 ” は食糧だとしても、そもそも凶器はなんだよ？ まだ分かってないんだよな？」

左右田クンが控えめに疑問を挙げる。

「…… そうだね。それじゃあ次はそれについて話そうか」

丁度いいので議題は最大の謎…… 凶器から行こうか。

— 議論 開始 —

「凶器？ なんのその辺に落ちてた ” 鉄パイプ ” だろ？ 狛枝が落

としたのを犯人は利用しやがったんだって。これで終わりだ終わり」

「ちげーよ！ 狛枝自身がさつき ” 刺された ” って言ってただ

ろーが！」

「そうそう、 ” 十神は刺殺 ” されたって結論は出てるんだよ、赤音

ちゃん」

罪木ちゃんの検死結果を元に、私が小泉さんの言葉に同意しようとしたときだった。それが起こったのは。

ますます顔を青ざめさせた彼女が、私の予想外の行動に出たのだ。

日向クンも七海さんもすごく驚いただろう。なにせ、その ” 検死

結果 ” を出したのは彼女自身だったから。

それを彼女自身が…… 罪木ちゃん本人が否定するようなことを言うだなんて、まるで予想外だ。

「それは違いますう！ 十神さんの死因は…… ” 毒殺 ” なんですよお！」

それは偽証。

検死の仕方は、彼女にしか分からない。

それを利用した、苦し紛れの偽証だった。

「どうして……？」

小さく呟いて彼女を見る。

彼女は間違いなく、私の方を見て、今にも泣きそうな顔でそう言っていた。

「もしかして……」

彼女は、気づいているのか？ 私が、クロだということ。

血液凝固のことは彼女が1番よく知っている。ならば、”十神クンに拒絶反応が出て、私に出ない”血液型も当然分かっている。

彼女がクロを暴く近道にいることは分かっていた。

けれど、まさかこんな……

「つ、罪木……？」

どうして毒殺なんて……？

そんなの、可能性は一つしかない。

「と、十神さんは毒によって自殺した可能性もありますよお」

彼女は分かった上で私を庇っている。

馬鹿なことを、なんて言えない。

泣きそうだななんて…… 思っていない。

嬉しいだなんて、思っていないもの。

仲間が、罪木ちゃんが偽証してまで私を庇う？

ならば…… 私はさらに嘘を重ねてそれを論破してあげよう。

証拠なんてない。彼女自身が嘘をついているから検死結果を元に論破することはできないのだ。そう思い直したとでも言われて仕舞えばなんとも言えなくなってしまうから……

だから私も嘘をつく。嘘に嘘を重ねても、なんら問題はないよね？

目には目を歯には歯を……… 嘘には嘘を。

『その嘘、塗り潰させてもらおうか！』

……ごめんね。

でも、私はキミの優しさを踏みこむ。
さあ、決別だ。

No. 25 『学級裁判』——太陽編——

『その嘘、塗りつぶさせてもらおうか!』

心の中で宣言し、表向きには罪木ちゃんを指差して「残念ながらそれは違うよ、罪木ちゃん?」と宣言する。

不敵な笑みを浮かべ、真っ直ぐとその瞳を見れば彼女はひどくショックを受けた顔をしていた。

なぜ? どうして? そんな混乱に巻き込まれていく彼女はシドロモドロになり、呂律が少々回っていない。青ざめて、泣きそうに顔を歪めて…… ああ、可哀想に。裏切られた気分や絶望というものを、彼女は突きつけられているのだろう。

けれど、その絶望をキミは乗り越えなければならぬ。

そこで潰れることは私が許さない。さあ、”許して”ほしければ私たちが踏み超えていけよ。

「毒殺とは限らないよ? だって、タワー内の毒薬は”減っていない””減っていないよ?””だからさ!”」

「……」

私が宣言をして数拍置き、日向クンが目を瞑る。

そして彼が悩んでいるうちに七海さんが動いた。

「わたしは粕枝さんに同意する…… と思うよ?」

私にとって予想外の援護に、目を開いてなにかを決めたらしい日向クンの言葉が更に後押しする。

「おいおい、そういうときはちゃんとはっきり言うんだぞ七海」

「そっか、そうだよね」

「ああ、だから俺も…… 粕枝の言葉に賛成だ!」

ほっと息を吐く。

彼らも私と一緒に捜査していたのだから、彼女が検死結果を覆してきたのは分かっているはずだ。

だから”彼女の独壇場”にならぬよう、そのフィールドに上がることなく否定しなければならぬ。それには嘘をつくしかないの

だ。

少なくとも、今検死ができるのは彼女だけなのだから。

「実はファイナルデッドルームに3人で向かったときにね、タワーにあった毒薬とまったく同じ物を見たんだよ。タワーの薬もそうだけれど、内容量は30粒と多いんだか少ないんだか微妙な数字でさ、ビンいっぱいに入ってたでしょ？」

言いたいことに気づいたらしい日向クンが引き継いでいく。

「いくらなんでも人が死ぬぐらいの…… 10粒以上減っていたら見た目の変化で分かるだろ？ファイナルデッドルームにあった薬もそうだけど、どちらも同じぐらいの量が入っているようにしか見えなかった」

実際には、あそこにあった毒薬は “凍結させて使う毒薬” と “クロロホルム” 以外は完全に凍りついてしまつて中身が判断できる状態にはなかったんだけどね。

でも凶器を毒薬だと断定してしまうにはまだ早い。

だから嘘をついて別の可能性も皆に探ってもらわないといけなのだ。

「…… だから、毒薬が死因だつていうのはまだ分からないんじゃないかなつて思うんだ」

七海さんの言葉に続いて言う。

「死因の1つくらいにはなるかもしれないけど、断定してしまうのは早いんじゃないかな？もっと皆で話し合つていけばきつといろいろ見えてくるはずだからさ」

「う、うううう…… な、なんでですかあ…… どうして否定ばかりするんですかあ……」

恐らく、その否定という言葉は “庇われた私がそれを拒否” “したことを言っているんだろう」

それもそのはず、せつかく庇つた相手自身がそれを台無しにしてきたのだ。困惑もするし混乱するのも当たり前だ。

「おいおい、こりゃあどういふことだ？」

「説明を求めてもいいか？」

おっと主従コンビが困惑しきった全員の言葉を代弁してくれたよ
うだ。

「罪木ちゃんは勘違いしちゃったんだよ。裁判前はその大きな傷跡から
刺殺」だって言ってたんだけど…… ほら彼女自信があまり
ないでしょ？ だから不安になっちゃったんだよ。よくあること
さ、彼女みたいに気弱な子に絶対的な判断と責任を求めるのは少し酷
だよ。だから気負うことはないんだよ…… ね、罪木ちゃん？」
クラスメイトの前では口に出すときずっと「罪木さん」と呼
んでいたが、それを解禁する。

その言葉は一見フオローのように思えるかもしれないが、わりと彼
女のプライドを傷つけるような言い方を意識している。

彼女の「超高校級の保健委員」としてのプライドを刺激し、侮
辱することで反抗心を煽る。ムツとするように仕向ける。

なのに、傷つくような表情だけを見せてカケラも私を睨んだりする
様子がない彼女に私自身がショックを受けた。

…… やめてよ、少しは怒ってみせてよ。

これでは、一方的にいじめているようなものじゃないか。

「む、ということは刺殺でも毒殺でもあり得るということか？」

「…… そういうことになるね！ どちらの可能性も検討していった
ほうがきつと早く犯人も見つかるよ」

彼女が信じられないような物を見る目で唾然とする。

クロがクロを見つけ出す手助けをしているのだから驚くのも無理
はない。

「保健委員のくせに視野が狭いとか終わってるねー？ ノイズ撒くく
らいなら黙ってろゲロブタ！」

「ええと、その、罪木さんはあまりお気になさらないでくださいね？」

西園寺さんの罵倒と同時にソニアさんのフオローが飛ぶが彼女は
黙って俯いてしまう。

傷ついた…… のもそうだろうが、あれは考え事だろうか？

「というわけで、凶器の問題はどちらも視野に入れて考えるところとして
…… まだ断定はできないし、他に分からないことを挙げていって」

つ1つ答えを出していこうよ。そうやって順番に紐解いていけばどんなに絡まった事件だつてきつと解決するはずだよ」

「分かることから解いていくのは学校のテストだつてそうだしね……簡単なことから問題解決してこうか！」

小泉さんが同意してくれたことで頷く。

さて、これからが誘導力の見せ所だね。一旦キミたちには事件とは関係のないところを話してもらおうことになるよ。

少しくらいは会話の誘導をしてシロアピールをしとかないと。

「じゃあ、もう1度分かってないことについて話そうか。皆はなにについて話したいか疑問を挙げていこうよ！」

ソニアさんから1時的にまとめ役を奪い取って議論を再開する。

―― 議論 開始 ―

「破壊神暗黒四天王が見出した」 血塗れの紙片 “…… 異次元から到達したのか、それともこれが因果律の定めだったというのか？”
「私としてはなんで」 暖房の電源 “が入ってたのが気になるかな。まだ目的ははっきりしてないよね？”

「オレの見立てじゃあんまりアテにならねーかもしれねーが、なんか “ 血が多かった ” 気がするぜ」

「十神の “ 襟についていたシミ ” も気になるが……」

田中くんはニュアンス的にヤスリの出自についてかな？

七海さんは暖房をつけていた目的で、九頭龍くんはさすが場数も踏んでいるのか死体の不自然さについてで、辺古山さんも死体を調べたときの疑問を挙げている。

今回の裁判、皆は積極的に疑問を挙げていて非常に同意できる箇所が多いね。あまりロンパされていけない気がするが…… 結構的確なことばかり皆が挙げているから仕方ないか。

好き勝手に喋っているわけでもなく、話し合うことをまとめ役が指示しているからかもしれないけど。

「私はファイナルデッドルームで見つけた」 粘土っぽい塊の正体

“ が気になるかな。あれがなんなのかによっていろいろ分かってくるんじゃないかと思うんだよね”

「狛枝の意見に賛成だ！」

よしよし、皆まともな意見を言っているから引つかかってくれるかは賭けだったけれど、うまく食いついてくれて助かったよ日向クン。「ところでところでところでー、そのファイナルデッドルームでもしかして皆が行かなかったあの場所っすか？」

「あ、あのピエロみたいなのが扉に描かれてた場所かよ…… よくあんな不気味そうなおトコに行ったな……」

そっか、私たち3人以外は行ってないんだもんね。まずは説明からか。

「あの部屋は脱出ゲームになっててさ、それをクリアしたらある ” 試練 ” をして奥にある部屋に行けるようになってたんだ」

「あ？ 試練？ なんだそりゃ」

「あー、それを聞いてちやう？」

終里さんの純粹さが恨めしい。

「聞かないほうがいいと思う……」

「説明しましょう！」

私が言い終わる前にモノクマに邪魔される。

くそつ、余計なことを。

「脱出ゲームをクリアすればあの部屋から後退して帰還することができますが、先に進むためにはロシアアンルーレットをクリアしなければならなかったのです！ それを見事に3人分クリアした狛枝さんは日向クンと七海さんの2人を連れて奥の部屋に到達することに成功したのでした！ チャンチャン！」

「え、えげつねエ!? つーか3人分とか正気かよ!?!」

「ひゃあ！ あちしのいないとこでそんなことを!? お願いでちゆからあんまり無理しないでくだちやい！ 人を心配させないことも大切なことだからね？ 少しはあちしを頼ってください……」

ごめんね、モノミ。これからもっと心配させることになっちゃうや。

だから少しだけ眉を下げて 「ごめん」 とだけ言う。

反省はしてるけど後悔なんてカケラもないからね。ケロツとした顔で続ける。

「その奥の部屋で変なものを見つけたんだよ。1つだけ正体が分からないから皆と話し合って考えようと思って…… 七海さん、持ってたよね？」

「うん、ちょっと待って……」

私が話を振ると七海さんはリュックを下ろして例の “ 粘土質の塊 ” をしまっていた袋を取り出す。

「これだよ」

そう言って彼女が取り出したのはお椀状の物体。

乳白色で粘土っぽく、そしてほのかに甘い香りが漂うものだ。

それを反時計回りに私の元へ渡して行ってもらおうとしたのだけれど…… 日向クンから左右田クンへと “ それ ” が渡ったとき、左右田クンは顔色を変えた。

「これって…… これどうしたんだよ!?!」

私はそれを見て内心笑いながら 「どうしたの？」 と口を開いた。

「こ、これ、この匂いもあるだろ? TNTじゃねーかア!?!」

その言葉に、意味が分かるらしい数人が硬直した。

「TNT…… って、なんすか?」

「あれ、なんか聞いたことがあるようなないような…… ううん、ぼくって料理以外のことは分からないからなあ」

「おいおいおい、テメーら知らねーのか?」

「爆弾の材料……だな」

九頭龍クンたちは当然知っていたようだ。

ニユースなんかを見ていれば分かるかもしれない情報なので小泉さんは知っていたみたいだし、ソニアさんはお国柄かな? 治安がいいとは聞かないしね。

終里さんと式大クンは分からないのか。式大クンは兵器とかそっち系のことは分からないのかな?

田中クンは恐らく厨二病知識から知っている。

私が意外だったのはTNTという単語で正体が分かったらしい七海さんの反応だ。ひな祭りも知らないのに、一体どこからつけた知識なのやら…… ゲームだとしたら、もしかしてマイクロフトか？ マイクラフトなのか？

「ばっ、ちよつと左右田おにいこつち来んな！」

「いやいや、大丈夫だって！ これ単体じゃ爆発なんてしねーよ！」

「そうだとっても爆発物なんですよ!？」

「日寄りちゃん、TNTは信管になる金属と導線がないと爆発しないから大丈夫だよ」

「こ、小泉おねえがそう言うなら……」

「オレの信用度……！！」

ショックを受けてるところ悪いが、説明してもいいかな？

「TNTってプラスチック爆弾で有名なあのTNT?」

「ああそれだそれだよ！ これがあればもしかしたらドツキリハウスから出られたんじゃないかア!？」

おう、ヤケクソだ。紛うことなきヤケクソだ。

「うんと、それは無理だったと思うよ？ それと同じものをファイナルデッドルームで見ただけど、そんなに量があるようには見えなかったし…… それにこれ単体じゃあ爆弾になるかも怪しいし、ドツキリハウスの壁は突破できなかったんじゃないかなあ」

「それに、モノクマがそんな形でも突破口を用意しているとは思えないぞ」

「そうだね。脱出の可能性は万が一にも残されてなかったと思うよ」

「うんうん、ボクへの信頼が厚いね！ 嬉しいなあ」

「褒めてねーよ！ 顔赤くしてんじゃないやねーよ！ つーかそれどーやってんだよヌイグルミなのに！」

左右田クンは今日もキレッキレだね。良いことだ。

彼はツツコミのしすぎで顔を真っ赤にしてるけどね。

「このTNTがなにに使われたのか…… それも考えなくちゃいけないのかな」

そうだね。事件自体には関係ないとはいえ、凶器には関係している

のだから、順序立てて事件を紐解くには必要だ。

遠回りだけれど、キミらがそうやって話し合っていることは無駄じゃないんだよ。

— 議論 開始 —

「なんでこんな風に歪んでるんだろうね？ 粘土で工作したみたいに見えるけど……」

「爆弾にしようと “ して失敗したとかー？ 」

「案外、最初はこの建物から “ 脱出しようとした “ んじゃない？ 」

「本当に “ 意味がある “ んでしようかあ……」

「 “ 爆殺の可能性 “ はあるのか？ 」

爆弾にしようとしたかはどんな証拠でも証明できない。論破も同意もできないから保留だよな。

だからこれは……

「ティンときたっすー！ 」

先に澤田さんがなにかに気づいたように声をあげた。

それは…… 論破のつもりなのかなあ？

「でもでもー、さっきの話合いからするに白夜ちゃんの死因って刺殺か毒殺なんすよね？ 爆殺の可能性はないんじゃないっすか？ 」

「ああ、腹の傷もそうだがこれはマスカットタワーから離れたファイナルデッドルームで見つかっている。爆殺の可能性は限りなく低いだろうな……」

「それに仮にも爆殺だったなら、ここに私はいないんじゃないかな？ 」
困った笑みを浮かべて言うと、それもそうだと全員が顔を見合わせた。

そもそも爆殺ならば火傷の1つもしていないとおかしいし、既存の傷口に爆発物をねじ込んだのだとしても傷口はもっと広がっているものだろう。

「じゃあなにに使ったんだろうね……」

「ふむ、隙間を埋めたとかどうだろう？ 」

「これだけじゃあさすがに分らないよね」

悩んでる悩んでる。

もつともつと悩めばいいよ。

「それじゃあ……一旦そのことは保留にして、別のことも考えてみよう？」

「で、ですがあれもこれもと手を出していると結論は出ないので？」

七海さんが方向転換を指示する。

それにソニアさんが異を唱えるが、突き詰めていっても分からないものは、それだけでは何の意味もない」ということだ。

「うーん、これをどうやって使ったか……それとも意味なんてないのか……それがこれ1つだけで解けないなら、もつとたくさん考えればいいんだと思う。いろんな証拠を組み合わせて……そうしたら案外一気に繋がるかもしれないよ」

結論のない議論に辟易としていた皆はその言葉に賛成の声をあげる。

「と言っても……疑問にあることはほとんど話し合ってしまったが……」

ソニアさんが困り顔で考え込む。

確かに、皆が疑問に思いそうなことは大体話している。

まあ話していないこともまだあるが、それに気づいた人がどれだけいるかが問題だな。当然、日向クンならあとで話題に出すだろうけれど。

「なら、話していないことを話そうか。たとえば……ファイナルデッドルームのこととか……そうだよね、日向クン」

「ああ、そういえばいくつか話していないことがあるな」

彼の同意を得て続きを話す。

「ファイナルデッドルームの奥にはかなりの証拠品があったんだ。それと暖房をつけるための電源盤もそこにあった。電源盤はあのドッキリハウス全館の電気設備が纏まっているみたいだったよ。私が見たときはもう暖房が止まっていたけれど、夜時間から発見までの間……7時間程は稼働してたみたい。ちなみに、温度は35℃に設定されてたよ」

電源盤についてさつと話し、息をつく。

すると今度は日向クンが後を持つように話し始めた。

「ファイナルデッドルームの奥……」

「オクタゴンね！」

「…… オクタゴンにはいろんな凶器と、冷蔵庫が二台設置されていた」

ファイナルデッドルームの奥っていちいち言ってるって面倒だもんですね。

日向クンが言い淀んだときに素早くモノクマが正式名称を口にしました。

「れ、冷蔵庫？」

「つーことはあれか！ オメーらだけ先にメシ食ってたのかよ!?!」

反応するのは花村クンに終里さん。

まあ分からないでもないけど、残念ながら冷蔵庫しているものが違うんだよね。

「いや、食料は相変わらずなかったぞ。あつたのは…… いろんな種類の毒薬だ」

「なるほどな、毒薬の出どころはそこか」

「そこから持ち出したものがタワーにあったもの…… と仮定できるだろうな」

考察をしながら話の続きを促す主従に日向クンが続ける。

「冷蔵庫には毒薬のビンか所狭しとあつたけど、上部の収納空間は無理やりビンを突め込んだような状態だった。逆に下部にはなにもなくて、僅かな血痕と……」

「…… このお椀状になったTNTがあつたんだよね」

「補足すると、この、TNTは冷蔵庫の中に1つ。外に1つ落ちてたから合計2つ使われたってことだね。それと、血痕の残っていた冷蔵庫の温度はマイナス20℃に設定されていて…… むしろ冷凍庫と呼べる状態だったよ」

「け、血液も凍結してしまうほどの温度ですねぇ……」

そうそう、罪木ちゃんの言った通りだ。

「…… それと、近くのゴミ箱に空の輸血パックが大量に捨ててあった。血液型は全て揃っていたと思うぞ。オクタゴンの扉に血液がぶちまけられていたから、恐らくそれに使ったんじゃないか？」

「そう…… ですかあ……………」

「それから、もう一台の冷蔵庫に減ってるクロロホルムと凍らせても使える毒薬が置いてあったよ」

毒薬の説明をメモを読み上げて伝える。

すると大体の人物はドン引きして聞いていたが、罪木ちゃんだけはなにやら考え込んでいるようだった。

考え始めて俯く罪木ちゃんには目もくれず、七海さんが最後にドツキリハウスの秘密を告げる。

「最後に分かったのは、オクタゴンの下にマスカットハウスの3階があったってことだね」

「は、はあ!? どういうことだよそれ! ファイナルデットルームはストロベリーハウスの1階だろうが! なんてそれがマスカットハウスの3階に繋がるんだよ!」

「ど、どういうことじゃあ? エレベーターにでもなつてたんかあ?」
今まで信じてきたものの前提がいきなり崩れてしまうと冷静に考えられなくなってしまうものだ。

「だけれど頭の中を一旦スッキリさせ、落ち着かせてからまた考えろと案外簡単に答えは見えてくる。」

「単純に考えてみなよ。ストロベリーハウスの1階の下にマスカットハウスの3階がある…… つまり、ドツキリハウスは横繋がり建物じゃなくて、本当は6階建ての縦繋がり建物だったってことだよ。だからタワーは同一のもので…… きつと床だけがエレベーターになつてただだね。片方ずつしか開かないのはエレベーターが移動しているからだと思う。私も、七海さんも日向クンもオクタゴンから外の景色を見たから確かだよ」

「1階にあるはずのオクタゴンから見た景色は、すごく高いところから見下ろす感じの景色だったんだよ…… わたしが推理を間違えちゃったみたい。ごめんね」

七海さんが謝る必要はないと思うけどなあ。

そう思ったのは私だけではなくて、混乱していた皆は落ち着きを取り戻し次々に「謝らないで！」と声をあげた。

本当に仲いいよねえ。

「と、取り乱してしまい申し訳ありません。七海さんはお気になさらずにいてください。わたくしはその推理さえできませんでしたから……」

「幻想のものはその目で見なければ正体を掴むことができないだろう。推論とはそういうものだ。この俺様ならば世に満たされたマナにより感知することが可能だったろうがな…… ふははははは！」

「そうそ、千秋ちゃんが気負う必要なんてないって！」

ひとしきり声をかけたのか、皆の顔がほんわかとしたものになる。

だけれど、こんな空気をモノクマが許すはずがない。よくよく見ればモノクマは出刃包丁を手にしてモノミのいる檻の目の前でタマネギを切り刻み続けている。

それを見てモノミが泣いているがあれはタマネギによるものか、それとも自分がカレーにされるとでも思っているのか……

ともかく、ヤツが飽きてきているのは頂けないことだ。とつとと進めるより他はないだろう。

「じゃあ、オクタゴンの情報も出揃ったことだし…… 次に話す話題を決めようか」

そう提案するとまたもや皆はあーだこーだと議論をしだす。

殆どが話し合った内容。次になにを話せばいいのかが分からない。

そんな焦りを見せる面々は未だに “ 凶器 ” の話から抜け出せずにいた。

「ど、どうしましょう…… このままでは……」

「タイムアップとかもあり得るんだよね……」

「どーせモノクマ野郎の気まぐれだ。少しは制限時間の可能性も気にしたほうがいいだろうが焦りすぎてもいいことはなにもないだろう！」

まったくもって九頭龍クンの言う通りなんだよね。

「十神さんなら…… こういうとき、どうされたのでしょうか……」

シユンとするソニアさんにそつと私は眩く。

「大丈夫だよ。皆で協力して考えていけば、きつと犯人にも辿り着けるはずだから。だから頑張ろう。そしたら皆で生き残ることが出来るよね。それを……十神くんなら望むんじゃないかなあ」

途中から独り言のようになった言葉を、聞き逃さずにこちらを見ていた人物がいた。

その1人の日向くんは思案顔。

もう1人……罪木ちゃんは青ざめたまま、目を見開いた。

そうして、唇をひき結んで俯いて、また顔を上げる。

……その目には、もう迷いは見られなかった。

「わ、私の話を聞いてくださあい!!」

――議題長 出現――

決意したような彼女に、私はゆっくりとほくそ笑む。

「は、はあ? いきなり大声出してんじやねーよゲロブタ! 耳が腐るだろうが!」

「ひうううう! ごめんなさい!」

間髪入れずに飛んできた罵声に少々怯むが、目の力までは失っていない。決意はどうやら固いようだ。

「臆するな。されば道は開かれん……」

「あんまり脅してやるなよな。で、罪木。話ってなんだ?」

援護も入ったので話しやすくなったのか、罪木ちゃんは1度深呼吸してから息を整え、発言する。

「凶器が、分かったかもしれませえん!」

覚悟を決めた彼女は協力を求める。

そうしてここから、本当の学級裁判が幕を開けた。

【 テンノコエ 】

議題長出現の文字は見えましたか？ハッキリクツキリと見えま
したね？

ではここで “ 塗り替え偽証 ” とはまた違った新要素をご紹介
いたします！

その名も、な、なんと “ ロジカル検証 ” ！

これは議題長が一人以上立候補いたしますと始まるモードでござ
います。

この場合は罪木さんですね。

簡単に説明いたしますと、 “ ロジカル検証 ” とは議題長が共通
の議題を掲げ、それを証明するために学級裁判に挑んでいるご学友様
方の協力を得て筋道を立てて行くというものです。

ですが最初は議題長も混乱したり焦っていたりとしどろもどろ。
なんと話の順序がしっちゃかめっちゃかです。

この順番を正し、さらにその証明に必要な情報を雑音セリフから見
つけ出し、その台詞を発した人物を見事当ててご指名しなければなり
ません。

指名したあととはなにについて話してほしいかを選択し、その3つの
選択がすべて合っていてクリアです。

流れとしては……

- ・ 議題に合うよう議題長の順序を正す
- ・ 議題長の台詞中出现する雑音台詞から証明に足る証言ができそ
うな人物を当て、指名

- ・ 議題長の話を証明できそうな証拠、証言の選択
の3つです。

と、言ってもこれは小説ですのでミニゲームはできません。

残念ですが、皆様はどうか頑張る風様のお姿を見守って差し上げて
くださいませ。

それではまた次回、お会いしましょう。

No. 25 『学級裁判』——乱世編——

「私の話を聞いてくださあい！」

—— 議題長 出現 ——

「凶器が分かったって…… そ、それってホントなの蜜柑ちゃん!？」

小泉さんが叫び、罪木ちゃんはいつもよりも…… そういつもよりもほんの少しだけ自信を持った表情で頷いた。

日向クンも真剣な顔をしているし、ここは重要な場面となるだろう。

さてさて、彼女はどんな話をするだろうか？

わくわくしながら、私はその議論に参加するのだった。

—— ロジカル検証 開始 ——

「凶器は既にあの場にあつたんですよお！」

「あ？ けどよー、あの場には狛枝の鉄パイプと毒薬くらいしかなかっただろーが。刺殺できるようなモンなんてなかっただろー！」

「現場には大量の血痕と倒れていた狛枝…… それに死んでいた十神と凶器になり得るもの以外はなに一つとして存在しなかった。それとも、目に見えない凶器があつたとも言うつもりか？」

「いや、目に見えなかったんじゃないよ、もしかしたら見えてるのに気づけなかったのかもしれないよね」

「あの現場が暖房器具で暑くなっていたのにもちゃんと理由があつたんですう！」

「んん、暖房を使っていた理由はまだ分かってなかったね。あれだけ暑ければたくさん汗をかいただろうね！」

「あのさ、その言い方なんか含みを感じるんだけど……」

「そういう真昼ちゃんも何を考えてるのかなー？ かなかな？」

「そりゃア、狛枝を仕留め損ねたからだろ？ 十神が庇っちゃまって狛枝にトドメを刺さねーからわざわざ脱水症状にして殺そうとしたんじゃないのか？」

「そもそも、暑くする必要があったのかもしれない…… とか」

「凶器は…… 血液なんですよお！」

「なんと!？」

「血つすかあ!? いやいやいや、無理っしょ! 常識的に考えて無理じゃないっすか! だって液体っすよ!？」

「そうか、さっき罪木も言ってたな…… だからあそこの温度はマイナス20℃になってたんだな」

「っーかテンパりすぎだろー!」

「支離滅裂だねー、言うんならハッキリしろよゲロブタ!」

罪木ちゃんはどうかやら緊張しているみたいで証拠の提示がちゃんとできていないみたいだ。それに話がしつちやかめつちやかだ。

ここは私たちが補助してあげないと皆の意見に…… 特に西園寺さんの罵倒に折れて黙ってしまうかもしれない。

さて、彼女の発言の順序を正すのならどの順番かな……

最初はやつぱり…… ” 凶器が血液 ” だってことだね。

それから次は…… ” 現場が暑かった理由 ” だ。

最後に…… ” 凶器は既に現場にあった ” ってことだ。

それから、それらに必要な情報を持っている人物の選択だね。

凶器が血液だったことに言及して…… さらに証拠を持っていそ

うな人は……

▽ 式大猫丸

▽ 澁田唯吹

▽ 日向創

▽ 左右田和一

▽ 西園寺日寄子

「キミが証明するんだ!」

日向クンを指差して笑う。

「日向クン。キミなら罪木ちゃんの言葉を肯定してあげられるんじゃない? 血液が凶器…… なんて荒唐無稽な言葉をさ」

私がそう言うと彼は真剣な顔で 「ああ」と返事をし、彼女の言葉

を裏付け始めた。

「血液を凶器にすることはできたはずだぞ」

「で、でも液体じゃないっすか!」

「…… 液体じゃなければいいんだろ?」

「へっ?」

日向クンはそこで再びオクタゴンについて話し始める。

その言葉には自信にあふれていた。

「オクタゴンには冷蔵庫があった。その冷蔵庫の一台はマイナス20℃に設定されていて…… 中に付着した血液が凍りつくほどの温度だったんだ。輸血パックは使い切られていたし、そこで血液を凍らせ、凶器にしたなら毒薬のビンが全て上部の収納スペースに押し込まれていたのにも説明がつくだろう?」

氷の凶器なんて推理物じゃあ使い古されてるよね。

でも水でなく、血液を使ったのならそう簡単には分からないし…… DNA判定がある外の世界ならともかく、ここにはそんなものを判明させる設備なんてない。なにせ、私たちは全員ほぼ素人のようなものなのだ。

罪木ちゃんだって血液の多さに着目すれど、それが誰のものかなんて分かるはずがないんだからさ。

だから皆を騙すにはとてもお手軽な方法だったんだよね。

ただ、この方法には少し弱点があるんだよね……

それは次の話にも繋がることだが、周囲の状況から推測すれば簡単に分かってしまうということだ。

なので、次になるのは現場が暑かった理由だ。これは当然……

◇ 花村輝々

◇ 小泉真昼

◇ 濂田唯吹

◇ 左右田和一

◇ 七海千秋

「七海さんが言った通り、現場が暑かったのには理由があったんだね」
「そっか、暖房がついていたのは凧ちゃんにトドメを刺すためじゃな

くつて…… 血液でできた氷を溶かすためだったんだね」

小泉さんが同意してくれたので 「勿論、あわよくば私を殺そうとしていたのもあるかもしれないけれど」と真っ赤な嘘を付け足す。わりと気合いと根性を頼りにしていた面もあるけれど、一応自分が死ななそうなギリギリのラインで温度を設定したからね。

私が自分を殺そうとしていたのなら、45℃とかの異常な温度に設定するし。あの暖房はそれくらいのことのできたからね。

あのととき、死ぬ気はさらさらなかったのさ。

最後に凶器は既にその場にあつたという事実だが…… これは簡単だよな。

◇ 九頭龍冬彦

◇ 辺古山ペコ

◇ 狛枝風

勿論、その発言をしたのは私だ。

「目に見えているのにそうとは気づけない…… まさにそんな凶器だったわけだ」

「はい。凍らされた血液を杭のような形にして刺したのだと思えます。だから現場は暖房がつけられていたんですね。凶器は処分などされず、最初からあそこにあつたんです」

— Verification —

「これで筋道通したよ！」

「これで検証できましたあ！」

2人揃って顔を見合わせて頷く。

彼女は相変わらずどうして私が協力しているのかが分からないのか、顔色が悪い。

クロが自ら追い詰められに来ているのだから気味悪く思うのは仕方ないだろうね。

「しかし、エターナルアイススピア血塗られた氷槍にするなど本当に可能なのか？」

「エターナルじゃねーだろ！ 溶けてるじゃねーか！」

「今は英語力の問題じゃないでしょ！」

「そういえば…… 氷を作る容器なんかなかったな」

真面目に呟いている日向クンと他の皆の温度差がすごい。

そうして、今度は氷の凶器をどうやって作製したかの議論に移っていくのだ。

— 議論 開始 —

「凍らせるための容器なんてオクタゴンには “ なかった ” よね。それは私も確認してるよ。勿論七海さんと日向クンも」

「 “ 毒薬のビン ” を使ったとか？」

「ビンじゃどうあっても “ 長さが足りん ” だろう！」

「あーもう意味分かんなくなってきたしよ…… メシ……」

「やっぱり氷の凶器なんて “ 不可能 ” なんすよー！」

私が話を切り出し、小泉さん、式大クンと続いでいく。

終里さんは多分もうすぐ出番になるから我慢してて！ キミがいないときつと日向クンは困っちゃうよ！

そして、澤田さんが言った一言に対して考えていたらしい日向クンが鋭い声を上げた。

「それは違うぞー！」

それはつまり、不可能じゃないってことだった。

「ずつと疑問に思ってたんだよな。鉄パイプの内側に、血が付いてたことが……」

その言葉に罪木ちゃんもハツとしたように日向クンを見た。

「も、もしかしてえ…… 鉄パイプに血液を入れて凍らせたってことですかあ？」

彼女が確信したように言ったときのことだった。

「バツカモーン!!」

「ひ、ひう!?!」

そこで式大クンが大声で割り込んだのだ。

罪木ちゃんは悲鳴をあげているが、容赦なく式大クンは彼女を自身の反論ショーダウンへと持ち込んでいく。

しかし、罪木ちゃんもただ黙ってそれを見過ごすわけではない。

戸惑いつつも、しっかりと彼の反論に対応するのが見て取れた。

―― 反論ショーダウン 開始 ――

「鉄パイプに血を入れただとお!? そんなわけがあるかあ!」

「えっ、えっと、ど、どうしてですかあ!」

「そんなもん、簡単なことじゃあ! そんなことも分からんかあ!」

「は、はつきり言ってくれないと、分かりませんってえ! ど、どうして鉄パイプじゃだめなのか、説明してください!」

―― 発展 ――

「だから簡単なことじゃあ。お前さんらは鉄パイプに血を入れて凍らせたと言いたいんだろう? そんなことをしても、” 端から溢れてしまう ” に決まっつるだろうがあ!」

「み、見落としては許しません!」

おっと、まさか罪木ちゃんが反論を斬るだなんて思わなかったな。

式大クンの大声に怯みつつもはつきりと自己主張をしている。記憶のない彼女だったらここまでできたかは怪しいが。

「て、鉄パイプで凍らすことはできたはずですよ! 先ほど話題にあった、TNTを蓋にして塞いでしまえばそう簡単に漏れたりはしません!」

「そうか、TNTはお椀状になって放置されていた…… それは鉄パイプの穴に貼り付けて蓋にしたからだだったんだな!」

「無…… その手があったか。すまんう罪木! 馬鹿なのはワシだったようだぞ!」

豪快ながら式大クンは笑って謝る。

それを表情を柔らかくして受けた罪木ちゃんは続きとばかりに指を立て、話す。

「そ、それに鉄パイプを元に凶器を作ったのなら、直径5cmから8cmくらいの太さで、30cmくらいの長さの凶器に該当しますう!」

「確か…… 最初に罪木ちゃんが言ってた検死結果がそれだったよね」

「その検死結果を簡単に覆すようなヤツの言うこと信じるのー？ もしかして皆揃って馬鹿？」

「そうは言ってもな、検死なんてできるのは罪木だけだし……他に参考に行けるのはモノクマファイルだけだぞ？ それこそ、穴抜けばかりで凶器も犯行時刻も書いてないファイルだけじゃ推理なんてできないだろ」

日向クンの言う通りだね。

穴だらけのファイルなんて精々参考文献くらいにしかならない。

西園寺さんの言いたいことも分かるが、ここは罪木ちゃんに頼るしかないんだよなあ。だからこそ、原作の3章は危なかったのだけだ。

あれは確か、絶望している罪木ちゃんが、希望のための殺しをしなかったから本気で狛枝風斗が追い詰めようとしたのだったか。希望のための殺しならいいとか、ボーダーラインがはっきりしてるんだか曖昧なんだか……

私には到底理解できないが……自分の生死に関与しない殺しは一切手を出そうと思っていなかった私も、人のことを言えないか。

でも一歩前進したよね。私も、皆もさ。

「でも、鉄パイプで凍らせたにしても槍みたいにはできないんじゃないの？」

「ああそれなら……田中。お前は知ってるだろ？」

「破壊神暗黒四天王が冥^{めい}軀^{いく}より見出した血塗られたカードのことだな？」

「め……なんて？」

冥^{めい}軀^{いく}……要するに死体のことかな？

「えっと、死体の下から彼のハムスターたちが証拠品を見つけたってことだよ」

「まあ！ 捜査協力もしてくださるだなんて……四天王さんたちはすごい方たちですね！」

「……………」

「照れてんじゃないやねーぞ田中ア！」

それ、嫉妬も込みでしよ左右田クン。

「……ふん、刮目せよ！　これが呪われたカードだ！」

そう言っただけで提出されたのは……

「ヤスリ？」

そう、ヤスリだ。

目の荒い紙ヤスリだが、どこもなくボロボロでくたびれているようにも見える。鉄のヤスリがあつたらもつと楽だつたんだろうけど、そんなものはオクタゴンになつたのでわざわざモノクマに用意させたものだ。

暖房器具は元々あつたのだが、要求してみたらわりとあつさり許可が降りたよ。鉄のヤスリは許可が降りなかつたから仕方なく、ね。

本当なら氷の容器も欲しがつたのだが……　そちらも却下された。そこまで手伝うと証拠品がなくなつて容易に勝ててしまい、クロに肩入れすることになるからなんだと。

どんな基準だよ。

「そつか、ヤスリなら氷も簡単に削れるね。まあ、少し冷たいのを我慢しないといけないだろうけど……」

「……？　冷たい、我慢……　鉄パイプ……　どうやって……？」

ブツブツと呟きながら考え事を始めた日向クンを他所に、裁判は進んでいく。

もしかしたらロジカルダイブでもしてるのかもしれない。

そしてやがて……　彼が顔を上げると、その目はまっすぐこちらに向いていた。

「また……　こんなことになるなんてな……」

「どうしたの……？　日向くん」

ああ、分かっちゃつたんだね。

そうだよ。パーテイでの仕掛け人も私で、自殺偽装をしたのも私……　いつもいつもキミには迷惑をかけてしまっている。

でもそうやって真実を暴いてほしいからこうしてキミをまっすぐ見返しているんだ。本当だよ？

でもね、私だつて少しくらいは悪足掻きしたいんだよ。だつて、た

だこのまま認めて死ぬのなんてさ、そんなの “面白くない” でしょう？

だから……

「十神を殺した犯人は……」

私も全力で抵抗させてもらおうとしようかな。

「お前だ、狛枝風……！」

生きたいのなら、キミの力で捻じ伏せろ！

でないと、今のキミらじゃモノクマに勝つなんて到底無理なんだから！

「…… えっ？」

キミに私の渴望を託せるかどうか、皆の未来を目指すことが出来るかどうか、今、ここで証明してみせてよ！

そして……

「……」

身勝手だっと思うけれど、でも…… お願いだからさ。

「……」

いつか…… 私を、迎えにきてね。

…… なーんて、私が諦めちゃったらダメだよね。

No. 25 『学級裁判』——宇宙編——

「え…… 私が犯人？ そんな冗談は……… 冗談で言ってるわけじゃ…… ないんだね」

僅かな動揺を表に出して日向クンを見つめる。

あんまり動揺しすぎても私らしくない。ここは冷静に。

冗談はよくないよ、と言いかけて彼の真剣な表情からそうではないと気づいたように嘆息する。

「どうして……？ 私は被害者なんだよ？ ねえ、どうして？ 日向クン」

絶句している面々はその言葉にやっと反応を示し、静まり返っていた裁判場に再び騒がしさが戻っていく。

「え、え、え、待って…… ついていけないよ」

「な、凧ちゃんが犯人って…… どういうこと!？」

「そいつが犯人だあ!？ んなわけあるかよ!」

「今までの話し合いにそう思わせる部分などなかったらう!」

口々に混乱を表す彼らを一瞥して日向クンはぐっと唇を噛んだ。

「なあ、粕枝。お前が犯人でないなら、もう一度この場で、あの夜起きたことを話してくれ。どうして鉄パイプがあの場合に落ちていたのか…… 説明してくれ」

なるほど、そうだね。

私の証言と、今明らかになった凶器の入手方法を考えたら私が1番の容疑者になるってわけか。

なら話してあげようか。変に嘘をつくよりも真実味を待たせた詭弁でキミの追求から言い逃れさせてもらおう。

「えつと…… あのとときは、誰かに突き飛ばされて、2人で倒れてたあの場所までよろけて、気づいたら目の前に十神クンがいたんだよ。そのときに突き飛ばしてきたのは十神クンだったって分かったんだけど…… 訳が分からないうちに刺されて、そのまま一緒に倒れちゃったんだ。鉄パイプは、最初に突き飛ばされたとき、に落として……」

「それは違うぞ!」

「……」

ぞくり、と背を突き抜けるような感覚。

その鋭い言葉に撃ち抜かれて私は口を動かすことを放棄した。

周りにはびっくりして口を閉ざしたように見えるだろうが、どうやら私は不謹慎にも喜んでしまっているらしい。

彼の真剣な瞳が、真実を暴こうとするまっすぐな心が、たまらなく心地良いのだ。

これじゃあ本物の狛枝凪斗も真っ青な変態だ。落ち着け、私。

「狛枝…… お前は、突き飛ばされるまで鉄パイプを持ってたんだよな？」

「…… うん。なにか、変なところでもあつたかな？」

「それじゃあおかしいんだよ。凶器を作るのに使われたのはお前の鉄パイプ以外にはないよな。なら、お前がそのときまで持ってたなら凶器はいつ作られたんだよ！ 突き飛ばされたすぐあとに刺されたんだろ？ その凶器はどこから来たんだ？ お前のその証言と、皆で導き出した答えは矛盾してるんだ！」

その言葉でさつと顔を青くしていく人物も、泣きそうな顔で頷く彼女も、大声で混乱を叫ぶ人も、皆私を見ていた。

「うぶぶぶ、盛り上がってますました！」

モノクマが豪華な裁判長席でなにやら操作したのか、私の席だけが前に移動し、皆の真ん中に立つ。

疑問、疑念、疑心、猜疑心、恐怖心…… そんな様々な視線の中心に立って私は顔を俯かせることができな。まったく、なんていうプレッシャーだ。モノクマも嫌な演出をする。

「確かに」

私が俯いたまま声を漏らすと、静かな裁判場に大袈裟なくらい響いた。

そう、私が犯人なんだよ…… なんて自白をするかと思っているなら大違い！

私はそんなツマラナイことなんてしないんだ。

裁判だというなら確かな証拠を持って私を追い詰めればいい。そ

れまでは、精々華やかになるよう弁舌だけで “ それらしい ” 悪足搔きをするだけだ!

このくらいの反論を打ち砕けないんじやこの先に進むことは許さないんだから。

「確かに、鉄パイプなんてものはオクタゴンにもなかったから私のしかなければ…… それだけで私が犯人扱いされるのは心外だなあ」
「イヤイヤイヤ! それだと凶器を作れねーじゃねーか! や、やっぱりオメーなんじやねーか!?!」

残念ながら、証拠がないとなんとも言えるんだよ左右田クン。

「私は凶器を見ていないんだよ? この意味、分からない?」

「…… 凶器を見ていないのなら、凶器が血液の凍った杭だとは限らない、って言いたいのかな?」

七海さんの言葉に頷く。

「その通りだよ! 私は凶器を見てない。なら、もしかしたら別の凶器で刺したあと氷の凶器を作りに行つて、もう1度戻つてきて今度は凶器を交換した可能性もあるよ。そのときは私も気絶してたから真相は不明だけど、本当の凶器はとつくに回収されて、今も誰かが持っているかもしれないよね?」

そう、私が氷の凶器を作つたり、使つた証拠が出てこない限り私がクロとは限らない。今投票すれば間違いなく私に入つてゲームオーバーだが、そんな早い退場は嫌だね!

「そんな…… さつきは氷の凶器だつたつてことで納得してたじやない! 凧ちゃん!」

「氷の凶器は使用されたらうけど、その前に別の凶器が使われたかもしれないでしょ? 私はその可能性を言ってるんだよ!」

だからもう少し、もう少し議論を長引かせるのだ。

— 議論 開始 —

「もう投票でいいじゃん! さつきとその偽善者女にトドメ刺そうよー!」

「で、でも間違えたら犯人以外は全員死んじゃうんだよね!! 嫌だよ、ぼくは皆で帰るって決めたんだから……！」

「こ、粕枝さんは…… 落とした鉄パイプを利用された、と言いたいのでしょうかあ?」

「一応、筋は通ってるけどよ」

「筋い? 筋張ったのはダメだな。食いにくいし」

「食いモンの話じゃねーよ!」

「そう、私が気絶した後に犯人は見たんだよ…… 鉄パイプをさ。それで犯人は閃いちやっただ。それを利用して凶器をもう1つ作り、本当の凶器を隠せば疑いが私に向かうってことをさ! 私が、凶器を作った証拠 “も、” 凶器を使った証拠 “もどこにもないんだからね!”」

「それは違いますう!」

「つえ?」

それは思わず漏れた素直な驚きだった。

「罪木ちゃん……?」

「あ、あの…… 粕枝さん、ずっとなにか隠してますよね……?」

彼女の視線が向いているのは、私の右手。

包帯を巻かれたその場所に向けられた僅かな視線に、私の口元は思わず引きつった。

“ そっち ” はなるべく知られなくなっただけどなあ。

「ところで、なんですけどお…… 鉄パイプで作った氷の凶器はどうやって外したんでしょう?」

「あ、あれ? さっきの隠し事ってのはいいんすか?」

「その隠し事に関係するんですよお」

「氷の外しかたかあ…… そういえば、そんなこと考えもしなかったね」

罪木ちゃんの言葉に小泉さんが反応する。

澤田さんの疑問へされた答えに、私は罪木ちゃんがどうしてそんな話をしているのかが分かってしまった。

うまく話題を逸らせたはずだったが、そこに言及されてしまう

とおしおきへの道が一気に近づいてくる。

決定的な証拠なんて1つだけでいいのに、なんてミスを犯してしまったのだから。

「それに…… マイナス20℃の冷蔵庫にあった鉄なんて、ものすごく冷たいよね」

「常温に置いて、少しだけ溶けるのを待った…… とかでしようか？」

「そんなことをしたら刺すとき杭がすぐに折れるじやろう！ 致命傷を与えられるかも分かんぞー！」

「まさか、炎熱の守護者でもあるまい」

ざわざわと話し合っている間にも、私は口を挟めない。それを確認するのは皆でないといけないからだ。

「それはですね、案外簡単なんですよお。鉄パイプの内部を少しだけ温めればいいんです…… 例えば、手で持つとか、口で息を吹きかけるとか…… ですなえ。そうすれば表面だけ溶けて少ししたら滑り出てくるくらいにはなります。それなら氷の強度もそれほど変わりませんし……」

「でも、そんなんで氷って溶けんのか？」

「はい、凍傷を負う覚悟でやればできますよお…… そうですよお？」

「粕枝さん」

罪木ちゃんの真つ直ぐな目が怖くて少しだけ逸らす。

そこには日向クンがいたが、彼もその可能性には気づいていたようだ。もしかしたら、私を指名する前に「氷と我慢」がどうか言っていたロジカルダイブで導き出したのかもしれない。

しかし、彼は自分から追求せずに罪木ちゃんに任せたままにしている。

もしかしたら、私と一番仲良くしていた罪木ちゃんにその役を譲っているのかもしれない。

「それが、どう私の隠し事と関わるのかな？」

平静を装って言うが罪木ちゃんも動じない。

私になにか隠していると強い確信を持っているのだろう。その推理を揺るがすことはどうやらできないようだ。

「このドッキリハウスに来たときから粕枝さんは “ 両手 ” に包帯をしていましたあ。その前はパーティのときの怪我で、左手にだけしていましたが、きつとドッキリハウスのどこかで怪我をしたのだと私は納得していました。実際に右手を庇っていましたから、私たちが来る前になにかあったのでしょねえ」

そうだ。でも両手だぞ？ それが片手だったのなら、今両手に包帯をしているのがおかしいと分かるだろうが、そんなことはないのに。

あの怪我すら幸運だったとすら思っていたのに。

やはり、罪木ちゃんに介抱されるべきではなかったか。

「粕枝さんのお腹の傷を治療するとき、包帯をもらいたいと言っていました。そのあと事実右手に包帯を巻いていました…… でも、おかしいですよねえ？ ドッキリハウスに私たちが来た初日はつけていたはずなのに、どうして “ 事件直後はつけていなかった ” のでしょう？」

「……」

「体温で溶かす必要があるから一旦外した…… つてことか」

「……」

くそつ、ぐうの音も出ない。

しかしここで終わるわけにはいかない。まだもう少し、もう少しでいいから投票は待ってくれ。

証拠にはまだ弱い？ いやそんなことはない。

パニックトークアクション^Tで出てくる証拠並みにこれはまずい証拠だ。

「粕枝さん、あなたが犯人でないなら…… その右手の包帯を解いてみせてください」

「嫌だよ」

だからバツサリと、その要求を断ち切った。

「なっ、てことはホントーに!?!」

「恥ずかしいことだけどき、モノクマに閉じ込められてからちよつと嫌な映像見せられて、外に出るために爪をガリガリとやっちゃったんだよね」

「映像……？」

事実だ。全く問題はない。

「爪をやっちゃったからグチャグチャでだいぶグロいんだよね。そんな有様を皆に見せるわけにはいかないよ…… それに、もし凍傷になつていたとしても、刺された拍子に凶器を無意識に掴んじやつただけかもしれないよね？」

この言葉はさっきの “ 凶器は2つだったかもしれない ” ってことと矛盾してしまうが、勢いでどうにか誤魔化せているようだ。

裁判に貢献している3人は気づいているかもしれないが、このまま続けても私が屁理屈を言い続けるのは目に見えているし、追求はしてこない。

「そんなの、屁理屈じゃねーか……」

九頭龍クンにはこうも食い下がる私の気持ちは分からないだろうね。

西園寺さんも、小泉さんも、澤田さんも…… クロになりかけた花村クンにだつて分かるはずがない。

これは、私だけの思いだから。

「なら、他にも証拠を探せばいいんだろ？」

「え？」

彼は諦めていない。前に進んでいる。

今度は日向クン主体で再び議論が始まるのだ。

「1つだけ…… まだ分かっていないことがあったな。俺は十神の襟についていたシミについて話したいんだが、皆はどうだ？」

私は左袖をそつと押さえて俯いたまま、静かに笑った。

No. 25 『学級裁判』 — HOPE VS DESP
AIR —

「わ、私からも少しだけ…… 言いたいことがあるんですけどお、先に日向さんのお話からいきましようか」

さつきから罪木ちゃんには鋭いことを言われてばっかりだから、そう言われるとなにを突っ込まれるか怖いなあ。

「ああ、十神の襟についていた黄色っぽいシミ…… あれがなんなのか、それぞれの意見を聞かせてくれ」

彼が周りを見渡すとそれぞれが話し始める。

まず口火を切ったのは式大クンだった。

「無、ただのシミではないんかあ!？」

「カレーでも食べた時についてたんじやないっすか？ 白夜ちゃんもうっかりさんっすねー!」

澤田さんがそういつて笑うが、すかさず花村クンが割り込んだ。

「いや、それにしても広範囲すぎるよね？ それに十神くんつて食べ方が意外と綺麗なんだよ！ いつも豪快に食べてるから勘違いしがちだと思うけど、ぼくが見てる限り服に汁を飛ばして食べることはないよ！ お皿もいつも綺麗だし」

シェフ目線での人物像は大分出来た人のようだ。そこは十神白夜としてマナーをしつかりしているのか、それとも食事が綺麗なのは元来のものなのだろうか。

「分かんないよー？ コテージではズボラにしてるかもしれないじゃん！ ああいうデブにはぶひぶひ言いながらカス飛ばしてるのがお似合いだしね、クスクス」

「そんなことはないわよ？ 十神つて他の男子とは違ってちゃんとシミ抜きまでしてるらしいし。こないだアタシが左右田のツナギについて注意したら、それを聞いてシミ抜きの仕方を教えに行ってたもの」

いつの間に皆カケラ集めをしているのか。

十神クンはそれだけ慕われていたってことか。

「あ、ああ確かに来たけどよ……」

「あいつも世話好きだな……」

「とりあえずカレーを跳ばしたのはありえないってことかな」

結論が出ようとしたとき、笑顔で終里さんが言う。

「おう、そーだよ！ カレーじゃなくてお菓子だろ！ なんの菓子かは知らねーけど！」

私はその言葉に硬直した。

「いや話聞いてたんか！ ？ 食いモンのシミじゃありえねーって話になっただろ！」

「はあ？ じゃあなんで甘い匂いがしてたんだよ？ 菓子以外にそんなのありえねーだろーが！」

「ちよつと待て、終里。その話詳しく聞かせてくれないか？」

日向クンからストップがかかり、訳が分からないといった風の彼女を見る。終里さんは全員から注目され、居心地悪そうに頭をかいてから「タワーでオレが言ったじゃねーか」と説明する。

「腹減ってるときに甘い匂いがしてさ、それを追ってたら十神を覗き込んでた狛枝とぶつかっただよなあ」

—— くんくん、と匂いを嗅いでいるように終里さんが死体のそばにしゃがみ込んだ。彼女が覗き込んで来たのでびっくりして思わず尻餅をついてしまい、そのまま包帯の下にある傷に響いた ——

確かに、そんなことはあったね。すぐに日向クンが手を差し出してくれて、ちよつと恥ずかしかったときだ。

それに、彼女が匂いを追っていたおかげで襟のシミに気がついたよ。うなものなので、甘い匂いの原因は襟のシミしかりありえないだろう。

「そんなこともあったな」

「でも、十神くんが几帳面な人で…… シミを作るような人じゃな

いってことは、あのシミはドッキリハウスでついたものってこと……
だよな?」

「着替えなんて勿論用意されてなかったからな。シミ抜きしたくても
できないだろうし、そもそもなんでついたのかも分からないからな
…… 黄色っぽいシミ…… 甘い匂い…… 甘い匂い…… 甘い匂い…… 甘い匂い……
……」

「……」

「……」

「……」

「あ、そっか、ドッキリハウスに食べ物がないんだから…… 別のもの
が原因なんだね……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「え、えっと、クロロホルムの成分に黄色色素のある溶液が入っていた可能性は十分あると思いますよお。なにかに染み込ませると黄色く見える可能性もありますう……」

「そうだよ、まさか色が出るだなんて思っていなかったから……どうしようもなくなくてね……」

「確かお前…… 終里に食べ物を持っていないか聞かれてたよな？」

「ドキリ、と心臓の鼓動が早くなっていくのが分かる。」

「なあ終里、どうしてあのとき…… 狛枝が食べ物を持ってると思ってたんだ？」

「あー？ そんなの狛枝からも甘い匂いがしたからに決まってるじゃないか！」

—— 彼の襟元に、僅かながら黄色っぽいシミができていたようだった。

《コトダマ 襟元のシミ》

「匂いの発生源はこれなのかな……？」

「あー、なら狛枝。なんかお菓子とか持ってねーか？」

「え、なんで私？ …… 持ってないよ」

「おつかしいなあ…… オメーなら持つてると思ってたんだけど……」

「なんか、妙に確信していたように感じたけれど、ちよつと怖かった。捲った袖をぎゅつと握りしめながらぶるりと震える。」

「こんなことをしている場合じゃない。ちゃんと捜査しなくちゃね」

——
思い起こして首を振る。

終里さん怖い。匂いで捜査しちゃうとか規格外すぎるでしょう

……

まあ、それを最後の証拠にしようとしていたのは私だが。

凍傷がバレる方が意外だったのだ。こんなにも証拠が揃うとは思っていなかった。

「皆の視線が私に注がれる。」

左袖のみ捲られた不自然な格好、両手の包帯、左腕を右手で掴み、俯く私…… 口元に浮かぶのは、笑み。

「畳み掛けるね…… でも、まあ、クライマックスの前に罪木ちゃんの話も聞いておこうかな？ なにか話があるんだよね？」

「は、はい…… ここまで来たらもう必要ないでしょうけど…… 凶器に使われた血液のことですう」

なるほど、彼女ならばどの血液型が使われたかも逆算していくことはできるだろう。そうすれば絞られたクロの範囲をさらにぎゅうぎゅうに絞ることができよう。

いわゆるオーバーキルってやつだね！ 罪木ちゃんもえげつないことするなあ。そうでもないと私を完全に負かすことができないと分かっているからだろうけれど。

「輸血パックのこと？ でもあれは全部使い切られてたんだよね。使われた血液型が分からないんじゃない？」

「そんなことはありません…… 十神さんの傷口は早いうちに血液凝固していましたが、狛枝さんはそうではありませんでしたよねえ？」

B型なら十神さんの傷はあそこまで塞がっていませんでしたし、それ以外の血液型ならあなたの方に拒絶反応が起こるはずですよ」

「狛枝さんと同じ、O型以外なら…… だよな？」

O型は他のどんな血液にも拒絶反応を起こす。

そんな私が無事で、十神クンに拒絶反応が出ているのだから答えは1つしかない。

「はい、だから凶器自体に使われたのはO型の血液…… 狛枝さんもO型ですし、辺古山さんは九頭龍さんの部屋に、そして七海さんは凍傷もシミもありません。あなたしか…… ありえないですよ！」

「じゃあ、十神クンが苦しんでいたのは？ もしかしたら毒でも飲んでたのかもしれないよ？」

「それはお前さんも否定してたじゃろう！」

「凍結させて使う毒薬は沈殿性だった。大方氷を作る際に立てかけて杭の先端にしか毒がいかないようにしたんだろ？」

「……」

全て証明が済み、私はもうどうしようもないようだ。

だが、まだクライマックスには足りない。こんな情報量じゃあ、当時のことを日向くんがクライマックス推理できないもんね！

「十神くんが…… 悪いんだよ……」

ポツリと呟き、私は顔を上げた。

「あんな ” 危険な人 ” 放っておけるわけないじゃないか！」

「…… は？」

私の大声に、今まで果敢に立ち向かって来ていた日向くんが間拔けな声を漏らす。

「ははは、そうだよ。不思議だよ。私がなぜこんなことを言うのか、分からないよね。1番皆を導いて来た人が ” 危険人物 ” だなんて信じられないよね？」

でも今から言うことは嘘なんかじゃない。

決して、嘘なんかじゃない。ただ、言わないことがあるだけなんだ。「私ね、気付いちやっただよ。彼がとんでもないヤツだっことをさ！ そんな彼を野放しにしているわけにもいかない。だって怖いんだから！ いつ私が殺されるか分からない。ロシアイを起こすか分からない！ この平穩を保つためには彼を止めるしかなかったんだよ！」

「な、なに言ってるの風ちゃん…… ? 十神が危険人物…… ?」

「粕枝さん、冗談はよしこちゃんですよ！」

「おいおい、どう考えたってオメーのほうが危険人物じゃねーか……」
「テメー、なにか知ってるんならなんで言わなかった？ ナントカの証明だなんだ言っつて、情報共有しろっつたのはテメーだろーが！」
「まさか、十神が危険人物だとは考えられないが」
私は大袈裟なくらいに誇張して腕を広げる。

「十神くんはとんでもない人だったんだ！」

画面のまえにいる未来機関オマエラもご静聴お願いします！ なーんて。

ふふ、なんで十神くんがって？ 分からないって？

…… だって、だってあんなにいい人なのって？

いい人なんてこの世界には、いやどんな世界にだって誰一人いやし

ないんだよ。

人が言う “ いい人 ” なんて所詮 “ どうでもいい人 ” ってことなんだからさ！

聖人君子だって最期には神を呪うんだよ？ 誰だって自分が大事なんだ。

だから私たちは所詮そのキャラクターの側面を見ていただけにすぎない。その本心なんて、主人公にでもなってもらわないと知ることなんてできないでしょう？ 特に、すぐに死んじゃうような人物ならね！

…… ここまで言っても分からないのかな。

だったら、教えてあげようか？

彼が如何に “ 才能 ” に踊らされていたかを！

さあ、約束通り…… キミの名誉を徹底的に傷つけてあげようか！ 許してくれるって言ったんだから、起きてから恨んで刺したりしないですよ？

…… お説教はちゃんと受けるけどね。

でも、まあ…… 私の本領発揮と行こうか！

「ずうつと不思議だったんだよね…… パーティのときに殺人予告状を出したのが誰か」

「その話は保留で終わったはずですよ！」

「そうだね、けど不思議には思ってたんだ」

そして話し始めた内容は私の推理、心情だ。

「勿論モノミは全員の個室で話をしていたからあの日には分からなかったよ——」

けど、なんとなくだけけど予感があったんだよね。

だって “ あの人 ” は私の可哀想な日記を証拠にしてこちらを追い詰めた。その筆跡が同じだからと言って私が予告を出したのだと言った。

でもおかしいよね？ 私はそんなもの書いてないんだもの。

犯人と疑われた私自身が確定で犯人ではない。そんな情報さえあれば十分に推測は可能なんだよね。

犯人は私以外の誰かということになるけれど、じゃあ私の筆跡をどうやって知ったのか？ それも書き分けているはずのプライベートの筆跡をさ。

ここまで来ればもう1人しかいなかった。

私の日記を持っていた十神くん。

けれど、彼の人柄を見ていたこちらとしては疑問だらけで信じたくなかった。

…… もちろん、彼がそんなキャラクターでないっていう先入観もあつたけれど。

「それ以降もずっと彼は殺人抑止に動いてたから、気にする必要はないのかと思ってたんだ……」

けれど、ドツキリハウスで初めてファイナルデッドルーム^Rに行つて最高難易度のロシアンルーレットをクリアしたときにさ、特典を貰つたんだよ。

「なんでそれを教えてくれなかったんだよ…… 粕枝」

「ああ、キミたちと一緒に رفتたときは実は初めてじゃなかったんだよね。ごめんね？ でも初めてだなんて一言も言っていないから騙された日向くんたちが悪いんだよ」

「んなの屁理屈じゃねーか！」

「まあまあ、落ち着こうよ九頭龍くん。ほら深呼吸、深呼吸」

「コイツ……！」

九頭龍くんったら短気なんだから。

で、その特典のことを聞きたいよね？ 当たり前だよ…… だつてその特典、日向くんが探し求めてたものなんだから。

「俺が……？」

「そう、特典はこれ…… 希望ヶ峰学園の生徒である私たちのプロフィールだよ。もちろん、才能も載ってるからさ」

「本当か!？」

ああでも、キミは知らない方がいいんじゃないかな。

そんなに変な才能だったのかつて？ そんなわけないじゃん。

「だって、キミに才能なんてないんだからさ！　ね？　替えの利く予備学科生の日向創くん……？」

予備学科っていうのは要するになんの才能もない凡人が入る場所だ。いや、才能溢れる人間の側で虎の威を借る狐をしたい人間とか、すごい人と同じ学校に通っているっていう名誉が欲しい愚かな人間が莫大な入学金を払って入る場所と言えいいのか。

予備学科差別？　してないしてない。

私はただ煽り倒してるだけだよ。皆が容易に投票ボタンを押せるように崖から突き落としてあげてるだけだ。

「つな……」

「そ……」

「ん、どうしたの左右田くん？」

「予備学科とかそんなのオレらには関係ねーだろ！　ここで会ってオレがソウルフレンドになったのは日向、オメーだけだよ！　なに落ち込んでんだシャキツとしてろよお！」

「うわあ、それを左右田おにいが言うんだー」

「たまにはいいこと言ってたって言ってくれてもいいだろ!?!」

「……　でも、日向くんは日向くんだよ」

「元々才能云々を気にする人なんてここにはいないでしょ！」

いたんだよなあ、ホントは。

今の私も似たようなものだけどね。

ところで、話がどんどんズレていくのだけど。

「予備学科のことなんてどうでもいいから続き話していい？」

「そんな言い方するんじゃないやねーよ！　テメー本当にどうしちゃったんだ!?!」

だって皆ついたら私の話を聞いてくれないんだもん。

十神くん1人いなくなったただけなのにまとまりがなさすぎて絶望的だよ。

「私たちの中にね、予備学科とは別に才能を偽っている人がいたんだ。

いや、才能だけじゃなくて、容姿声才能名前全てだね」

もちろんそれは十神クンの格好をした誰かさんのことだ。

誰かさん？ だって名前は空欄だったんだもの。仕方ないじゃない。

「そんな彼の才能は……」 超高校級の詐欺師

詐欺師なら筆跡を真似ることなんて朝飯前だよね！

「名前は載ってなかったよ。それどころか才能以外の部分が見事に空欄だらけ謎だらけ。ね？ 十神クンは皆を今までずっと騙してたんだよ。そんな人信用ならないよね！」

「……しかし、仮に予告状を出したのが十神だとして、なぜ十神は自宛に予告を出したりしたのだ？ そこが不可解だ」

「あ、確かに…… 殺人予告なのに自分が死ぬなんて書くはずないよね。ならやつぱり別の人なんじゃ」

花村クンが信じたくないとはばかりに首を振るが、残念！ 真実からは逃れられない！

「自決でもしようと思っていたのか？ しかし、それでは弱肉強食のデスゲームは始まらない…… 解せぬな」

「自分があの予告状を出されたらどうするか考えてみなよ。彼の標的は自分じゃなくて、予告状を受け取った…… 日向クン本人だったって分からない？」

「な、なぜそうなるのですか!?!」

そんなのは簡単。

さつき言ってみたいに考えてみれば分かるよ。

普通、誰かが死ぬなんて書かれた予告状を受け取ったらその人のことを心配するよね？ 心配して、気を配り…… そして、自分自身の身の安全は守らなくなり、無防備になる。

ましてや、自分を狙っている相手が、殺人予告された本人だなんて絶対に思わないからね！

でも、彼が提案したパーティは私の思い通りの場所に決定して、掃除まで私がやることになったから彼はなにもできなくなってしまうた。

学級裁判がある以上、下手に動いても自分自身が処刑されてしまうから。

「おしおきだよ！」

「あーはいはい、処刑じゃなくておしおきね。分かった分かった」

「もー適当だなあ」

モノクマがなんか言っているが続けよう。

で、彼の計画を私が利用した形になって鬪論が起きたってわけだね。

「…… 証拠は、ないのか？」

「そんな、随分と前のことですよ。証拠が残っているかなんて……」

「…… あるよ？」

え、なに言ってるの？ あるに決まってるじゃない。

彼が日記を持っていたことが証拠…… なんて言わないよ。私ももっと決定的な証拠を持っているんだ。

懐からいつものようにクロローバーの手帳を取り出して皆に見せる。

「…… ? それはお前の手帳だろ？」

「ううん、ここにあるのは十神くんが予告状に使った手帳だよ」

「なな、なんで凧ちゃんそんなものを持つてるんすかー！」

答えは簡単、十神くんが絶望病にかかった日に取ってきた。それだけ。

「彼の着替えを持っていくのに私じゃなんだからさ、日向クンと一緒に彼のコテージに入ったんだけどね？ その前に1人だけでお邪魔してたんだよ。そのとき、彼のテーブルに置いてあったから自分の手帳と交換してきちやっただよね！」

—— 次にテーブルに置いてあった一冊を手に取りパラパラと捲ってみる。罫線だけ引かれた白紙のそれを見て私は 「そうだと呟いた。」

「日向クンは呼ぶにしても他の皆はこのことを知らないし、ホテルロビーにでも置き手紙とか残しといたほうがいいよね」

レストランは夜時間の今は入れないし、十神くんが入院することを

報せておかないと。ないとは思いますが、日向クンも病院に泊まるかもしれないし。

「よしよしよ…… ごと」

懐から出した手帳のページを一枚破り、それに彼の万年筆を借りて伝言を書く。

「十神クンが風邪をひいてしまったので病院に連れて行きます……と」

皆に見せるものなので丁寧に書き、うんと頷く。

それから、伝言を書くからとテーブルに置きっぱなしにしていた手帳を懐に入れる。もう1冊も最初に彼の手帳が置いてあった場所に置き、やっと本来の目的を思い出した――

あのととき、先頭の一枚だけ破り取られた十神クンの手帳を見て思いついたのだ。

“ このまま交換してしまえば分からない ”

使っていないかった自分の手帳の、彼の手帳と同じく先頭のページを破いて置き手紙を作って交換した。

あとで2番目のページを鉛筆で擦ってみたら薄っすらとだけど、文字が浮かび上がったのだ。

私は、自分の推理が当たっていることに喜んだけれど、同時に落ち込んだ。彼がこんな危険人物だったなんて。だからそれからも彼を警戒しながら殺されないようにするにはどうすればいいかって考えてたんだ。

だって十神クンったら、私がなにかする度に私に会いに来るんだもの。さすがに怖いよね。

で、これがその証拠となる手帳なんだよね…… と手帳の先頭ページを開く。

そこには勿論、鉛筆で塗りつぶされて薄っすらと浮かび上がったその文字があった。

“
明日夜
十神白夜は死ぬ
”

『The exaggeration is for whom』

「そ、そんな……では本当に十神さんが!?」
「……………」

そうだよね、他の皆はともかくとして、当事者である日向クンは怖いよね? 恐ろしいよね? だって、これが本当ならば自分が殺されていたかもしれないのだから。

十神クンのことはもうとても信じられないでしょう? 彼とずっと一緒にいた自分に鳥肌が立つでしょう? そのすぐそばで狙われていたかもしれない恐怖が心を侵していくでしょう? そして彼に嫌悪感を抱くんじやないかな?

ねえねえどんな気持ち? 今まで信じてきたものが崩れるってどんな気持ちなのかな?

ニヤニヤと笑みを貼り付けたまま彼に真正面から言葉を紡いでいく。

黙ってしまった日向クンはなんとなく、恐怖しているような感じではないがそう煽った方がより効果的だと思うので気づかないフリをする。

「あのね」

日向クンの隣にいる七海さんが、黙っている彼を見て優しく言った。

「十神くんが最初どう考えてたのかとか、どう思って行動してたのかとか……それは私には分からないけど」

日向クンに語りかけるように、言葉を選んでいるのかときおり「んー」と声を漏らしつつ彼女は彼に届かせようと話していた。

「今まで一緒に過ごしてた十神くんが嘘だったって、日向くんは思うの?」

「でもな、七海…… 狛枝が出してきたあの手帳がある限りは……」
「むう……」

彼が弱ったように笑うのはきつと、十神クンがずっと心の支えの1つになっていたからだろう。だからこそ信じていたものに裏切られたような気分になってここまで落ち込んでいるのだ。

心は私の言葉を否定しているが、理性が証拠を認めている。

だからこそ複雑な心境で、戸惑っているのだ。

しかし七海さんは不満そうに口をへの字に曲げて日向クンの顔を無理矢理自分の方に向けさせた。

強引なそれに目を丸くした日向クンはされるがままに、彼女と目を合わせる。

「証拠は関係なしで、私は、日向くんがどう思っているのかを訊いてるんだよ?」

「俺が……?」

その言葉を聞いているのは日向クンだけじゃない。他の皆も、裏切られたと思っていただろう人も耳を貸す。

それだけ、今の七海さんは強く言葉を訴えていた。

「それで、日向くんは十神くんのこと、怖くなっちゃったの? 嫌いになっちゃったの? 今までの関係は全部嘘だったんだって、そう思っちゃったの……?」

「そんなことはないぞ! 嫌いになんてなれるわけないだろ!」

「…… うん、そうだね。そうだよね。あのね、日向くんが信じたいのならそれでいいんじゃないかな? 盲目に信じるのはよくないと思う…… けど、今まで過ごしてきた時間まで否定しちゃダメなんだと思う……ね?」

「一緒に過ごしていた時間は嘘じゃない……」

そう…… だね。だって彼、パーティで失敗してからは皆を陥れようだとかそんなこと考えてなかったらしいし。

そもそも初対面で詐欺師らしく振舞っていただけで、絶海の孤島で私たち以外いないからかだんだんと素らしきものも見えてきていたわけだし…… どれが彼の素かは判断つかないけれど、私はそう思っている。

いや、それにしても、まったく立ち直りが早いことで。

先ほど日向クンと過ごした時間がどうの言っていた左右田クンも裏切りには敏感だが、七海さんの言葉でちゃんと十神クンのことを思い直しているようだし。

「一緒に過ごして来た時間は嘘じゃない…… それは、狛枝さんも同じじゃないですかあ……」

泣きそうな声で呟く彼女の言葉を無視して、私は心底つまらない風にため息を吐いた。

「あーあ、お人好しばっかりだね……」

そんなところが好きなんだけどさ。

「…… ん？」

摩っていた左腕を近くまで寄ってきていた罪木ちゃんに取られてフリーズする。

あの、行動力ありすぎなんじゃないかな？

「なぜ、あなたが終わらせたがっているのかは分かりませんが…… 証拠を見せる気がないのなら、私が暴きますう……」

ゾツとした。

だから、反射的に振りほどこうと手が動いた。

「んなつ、罪木ちゃん、離しっ」

「嫌ですう！」

包帯にまで手を伸ばされ、さすがに抵抗するがどこにそんな力があるのかというくらい彼女の押さえつける力が強い。

そういえば絞殺することができくらい力の力はあるんだっけ。

「やめてって……！」

「絶対に、嫌ですう！」

とうとう伸ばされた袖の先には広範囲の黄色いシミ。

そして、解かれた右手の包帯の下は、悲惨なことになっていた。

「お、おい、罪木！」

「これでもう、言い逃れはできませんねえ」

「な、凪ちゃんその手どうしたの!？」

「凍傷だけではなく指先まで傷がついているじゃないか、拷問でもされたのか？ モノクマ、これはどういうことなのだ！」

凍傷はもちろんあるが、爪は剥がれかけて血で固まり、指はボロボロ。拳は壁の叩きすぎで裂傷が起こっている。利き手であるため力を入れすぎた結果だ。今までよく我慢してきたというくらいの惨状である。

そもそもメモを書くのも大分神経を使っていたくらいだ。

手を取られたまま青冷め、辺古山さんの “ 拷問 ” という言葉にそこまで酷い有様なのかと逆に感心してしまう。

「きゃあー！ 粕枝さん！」

檻の中からずっと見守っていたモノミが悲鳴をあげる。

それほど見た目に痛い状態なのだから仕方ないが、少し傷つく。

「うぶぶ、教えてあげようか？ どうしてこうなってるのか」

モノクマの言葉で後ろに振り向き、睨み付けると奴は薄気味悪い笑い声をあげながら意味ありげにこちらを見る。

その言葉に、嫌な予感がして私は振り返る。

「やめて！ もう投票でいいでしょ!? ほ、ほら、投票でクロかそうでないかを決めるんだよね？ 皆の生死がかかっているんだから早めに

……！」

「ええ？ でも動機が分からなくちゃ推理できないでしょ？」

「さっき動機は言ったでしょ!?!」

その動機も実は間違いなのだがそれは置いて、それはマズイ。

嫌だ、もうあんな映像見たくない。聞きたくない。やめて！

「動機……？ 十神が危険だから…… ってことじゃないのか？」

「やめて！ お願いだからやめてよもう見たくないんだよやめてやめてやめてやめて！」

「うぶぶ、それでは映像っ、スタート！」

「やめ——」

直接脳に刻みつけられるような、その映像。

彼女の否定。私の否定。捨てられる。棄てられる。なによりも大事な人。奪われてしまった絆のカケラ。

彼女の出生。私との歪んだ関係。

以前と同じ内容のはずなのに、何度も見たはずなのに、どうしたっ

て慣れなくて。

そんなもの聞きたくなくて、見たくなくて、固く目を瞑ったはずなのに直接脳内に押し込まれるように映像がフラッシュバックする。

塞いだ耳の中に無理矢理押し入ってくるようで、気持ち悪くて気持ち悪くて誰かの悲鳴がうるさくて、それを消したいから頭を振る。

何度も、何度も何度も何度も何度も何度も何度も――

「粕枝さあんー!」

誰かの声がした途端、体が動かなくなった。

頭を振れない。音を遮断できない。見えてしまう。

でも身動きは取れない。

なぜ?

「粕枝さあん! もうやめてくださいー!」

そこで、やっとあの音が聞こえなくなっていることに気がついた。

そして、ずっと響いていた誰かの悲鳴が、自分の悲鳴だったことに

も今更ながらに気づく。

「あ……れ?」

頭痛い。

顔を上げると、すぐそばに罪木ちゃんの顔がある。

腰に回された手は必死に私を支えようとしていたのか力が入って

ぎゅうぎゅうに締め付けてくる。

視界が赤い。

自分の席となっっている目の前の証言台が殺人現場のように真っ赤

に彩られていた。

頭痛い。

額から流れ出る血が目に入りそうになり、片目を瞑る。

「……っ!」

私を背後から抱きしめながら彼女は必死に証言台から私を遠ざける。

もしかして、あれは私がやったのか?

額が切れている。頭が痛い。血が出ている。真っ赤な証言台。

私は、聞きたくないがために、見たくないがために頭をアレに打ち

付けていたのか？

「ふゆう……っ」

私が正気に戻り、落ち着いたと分かったのか罪木ちゃんが離れる。酷い惨状に絶句している皆もそれでやっと我に返り、心配の声もあげながら「今の、映像は……」と声を漏らす。

何度も聞いたような気がしていたが、どうやら映像が流れたのは一回だけだったらしい。

「もう、せっかく用意した映像だっていうのにそんなに視聴拒否されちゃったらへこむよね……」

「……」

睨むが当然効果はなし。

「と、まあこのようにここに連れて来た初日の夜時間中ずうつと映像を見てもらっていたから、狛枝さんは外に出たくて壁殴り代行をしてたんだよね！」

「……」

「あれが、狛枝の言っていたメイドってことか……」

「……」

もう、なにも喋る気力はない。

頭痛い。気持ち悪い。吐きそうだ。

「狛枝……」

もう、どうでもいいや。

「…… この事件は、この、事件は…… とある人物がドツキリハウスに連れて来られたことから始まっていたんだな……」

非常に言いにくそうにしているが、彼の、クライマックス推理だ。終わらせようと、してくれているんだ。

ちやんと、きかないと。さいご、なんだから。

A c t . 1

「そいつはペナルティと称してドツキリハウスに連れてこられ、とある映像を見せられてしまった。以前から言っていた自分のメイドが

姉であったことと、その姉がモノクマに服従している映像だ。その映像を見て精神的に疲弊したその人物は多分、正常な思考じゃなかったと思う。そのまま俺たちが来るまでにオクタゴンまで行って十神の才能を知った。十神のことはずっと疑ってたんだろうな。その時点で、標的は決まっていたのかもしれない……」

A c t . 2

「一方、俺たちはモノクマの策略に乗せられてドッキリハウスにやってきていた。探索をしているうちに、先に連れてこられていたそいつを見つけてほっとしたけど、その後の餓死か、コロシアイかの選択肢を強いられてしまったことでそいつの変化には気づくことができなかった。その日は明るく振舞っていたそいつが裏でそんなことを考えているとはとても思いつかなかったし、思いつめていることも気づいてやれなかった」

A c t . 3

「俺たちにとっての2日目の朝からそいつは行方不明になっていた。そのとき、ちやうど殺人計画は動き出していたんだ。誰も行くことのできない場所…… オクタゴンにずっといたから誰も会えなかったんだな。そこで犯人は鉄パイプに蓋としてTNTを詰め、その中に自分と同じ血液型の輸血用血液を流し込んだ。そして凍らせて使う沈殿性の毒薬を入れ、先端部に毒薬を仕込んだ。2つある冷蔵庫のうち1つの毒薬は全て上の段に無理矢理詰めて下のスペースを空け、鉄パイプを立てかけておいたんだろう。冷蔵庫の温度はこの時点でマイナス20℃まで下げて、血液がすぐ凍るようにしていたはずだ」

A c t . 4

「次に犯人がしたのは残った輸血パックの処理だ。使った血液が分か

れば罪木にすぐバレると踏んでの行動だと思う。そいつは、誰よりも罪木と仲が良かったからな。だから使わなかった血液はファイナルデッドルームの扉にぶちまけておいたんだろう。ポイ捨て禁止や自然破壊禁止に接触しなかったのはもしかしたらそこが建物内であつて、モノクマあたりに事前に言っておいたからだと思う。それしかないからな」

A c t . 5

「夜時間になる直前か、誰もいなくなるタイミングを見計らつて犯人は呼び出し状を送つた。それに十神が乗るかどうかは分からなかつたはずだけど、もしかしたらここで十神がいかなかつたらこの事件は起こらなかつたのかもかもしれないな。約束の時間までにマスクトタワーの暖房装置をタイマーで7時間程設定した犯人は袖口にクロロホルムを大量に染み込ませて氷を溶かし、杭にして十神を迎えるためにタワーへ向かつた。このとき、氷を溶かすために包帯を解いて凍傷を負つたんだろう。鉄パイプともう1つの毒薬は恐らく事前に転がしておいたんじゃないか？ さつき言つてみたいのに、自分に疑いが向かないようにな」

A c t . 6

「そして、十神は約束の時間に来てしまった。真つ正面から行つたのか、十神とは揉み合いにはならなかつたはずだ。揉み合いになつていたら犯人に勝ち目はないからな。恐らく、ファイナルデッドルームで手に入った特典を利用して動揺でもさせたんだろう。その隙に背後に回り、袖に仕込んでいたクロロホルムで一瞬の隙を作つた。クロロホルムは気絶まではいかなくても気分を悪くさせたりはできるし、効果的だっただろうな。だけど、十神の心臓にまっすぐと杭を突き刺し、満足していた犯人にとって予想外のことが起きた」

「十神が自分の方へ倒れて来たんだ。それが偶然だったのかは分からないが、俺はきつとそれが最期の抵抗だったんだろうと思う。犯人は十神に押し潰され、突き刺したはずの氷の杭で自分も怪我をする羽目になった。その反動で杭はほとんど十神を貫通するように傷を作ったんだ。でも、犯人はその予想外の出来事も利用した。杭を刺した右手は背中に潰されていたけど、クロロホルムを塗った左腕は無事だったから自分でその匂いを嗅ぎ、自分で気絶した。元々脱水症状で自分を被害者に仕立て上げるつもりだったんだ。都合が良かったんだよ。だけどその予想外のアクシデントと、クロロホルムの特性が分からなかったせいで決定的な証拠ができてしまっていたんだ。黄色いシミっていう、証拠がな」

彼はそこまで言っすう、と息を吸い込むとこちらをじっと見つめ、指をさした。

「そうだろ？」

私は何も言わない。言えない。

「十神を殺したのはお前だ、『狛枝風』！」

シンプルな答えに、目元を下げ溜息を吐く。

やれやれ、そんなポーズ。真剣な日向クンを馬鹿にするような、そんなポーズで答えを受け止める。

やや煮えきらない。あっているはずなのに納得できていない。

そんな表情の罪木ちゃんと、なんとなく違和感を覚えているらしい日向クンをよそに裁判は残酷に進んでいく。

「よーし！　じゃあお待ちかねの投票タイムだよー！　うぶぶ、オマエラがクロだと思った人物に投票してね！　あ、投票は絶対にしてね？　しなかったらペナルティがあるからね！　ほら、さつき狛枝さんに見せたみたい映像とか、精神的にくるやつたつくさんあるからさ！」

その言葉に青冷める皆。

終里さんは映像が怖くないのかあまり気が進まないようだが、1番

時間がかかっているのは日向クンである。

まだなにか引つかかっているのか。

真つ先に罪木ちゃんが投票していたのが若干寂しいが、仕方あるまい。あれだけのことをしたのだ。許されないことはあるんだから。

” BET ”

モノクマの前に出てきたスロットマシンが赤く光り、回転を始める。BETされたのは1人分の命と、15人分の命。どちらになるかは…… もう分かっているか。

「果たして正解なのかー！ 不正解なのかー！」

いつもの口上を聞き流し、回るスロットマシンを見つめる。

同時に頭上にモニターが降りてきてスロットマシンと共に結果を映し出した。

スロットマシンで揃った顔は私のドット。吐き出されるメダルは1000や2000では足りないくらい大量だ。

そして、モニターに映し出されたのは予想外の結果だった。

終里

小泉

粕枝 一一一一一一一一一一一一

西園寺

ソニア

罪木 一

七海

辺古山

濤田

九頭龍

左右田

田中

十神

式大

花村

日向

あ、れ……？ 罪木ちゃん……？

私は自分に投票している。ならば、この罪木ちゃんに入った票は…… 彼女の……？

「はい！ 正解です！ 今回十神クンを殺したクロは粕枝さんなのでしたー！」

正解のはずなのに、なぜだか、彼女はまだ納得していないようだった。

涙で濡れたその頬を拭うことも私はできない。

—— その資格なんて、とつくに放り出してしまったのだから。

「…… どうして?」

俯いたまま溢れた言葉に、静かな裁判場はなんの答えも返さない。
私がそんなことを言う理由が分からないからだろうと思う。

「どうして? 罪木ちゃん」

「え……?」

私が視線を向けると彼女は戸惑ったように視線を彷徨わせた。

分かっていて、目を逸らしているね? 私が気づかないとでも思ったのかな。それとも、私が自分自身に投票したのが予想外だったのか。

「なんで、キミは自分に投票してるの? 証拠を探して私を追い詰めていたのはキミなのに? 同情のつもりならそんなものじゃないだよ」

わざとキツイ言葉を紡いで突き離す。

尚も追いつがってくるようならば、私にだって考えがあるんだよ。
私は皆から憎まれて退場するのが1番後腐れがなくていいんだ。
そうすれば皆は私のことなんかを気負わずに絶望に立ち向かうことができるようになるはずなんだ。

だから、だからわざわざ彼の名誉を貶めて、皆を嘲笑って、裏切りみたいな真似もして、日向クンの追求にも耐えたのに、それでは意味がない。まったくもって、意味がないじゃないか!

「同情……? そんなものではありませんよ。わ、私は、私のやりたいことをしただけです」

「へえ、キミは自分がやりたいことだからって投票を自分に入れたんだ」

それを聞いて、思っていたよりも冷たい声が出た。

「もし、皆が私に投票してなかったらどうするの? キミ1人が票を変えたところで結果は変わらないかもしれないけど、それって自分が…… 結果を間違えて皆が死んでもいいって思ったってことでしょ?」

更に言葉を重ねていくが彼女は泣きそうな素振りも見せずに「それでも、ですう」と断言した。

「でもそれって皆が私に投票するのが分かっていたからやったんでしょ？ 安心だよ、自分が好き勝手にして間違えても他人がやるから結局死ぬことはないもんね？」

「っ、違いますうー！」

薄っすらと涙が滲み出て、そしてごしごしと拭って泣いてないと言わんばかりに彼女が食い下がる。

この口論に「言い過ぎだ」と注意が入るが、これから死ぬのだから言いたいことは言っておかないと。皆の恨みや憎しみは全て私が持つていく。すつきりとラスボス戦を迎えてほしいからね。

そんなお節介。だけれど、それは彼女にとって余計なお世話のようだ。目を見れば分かる。

「…… 1つ、貴様に確認したいことがある」

「なに？ 今私は忙しいんだけど」

静観していた田中クンが腕を組んだままに言う。

別に聞きたくないわけではないが、ここはぶつきらぼうに、いかにも機嫌が悪そうに振舞っておいたほうがいいはずだ。なにせ、クロである私はこれから処刑だっというのに余計なことをされてイライラしているはずなのだから。

「貴様、先程からの問答からすると…… 己に投票したのか？」

「…… あっ」

…… と、そこで誤ちに気がついた。

皆から見えるモニターには相変わらず14票入った私と、1票入った罪木ちゃんの名前が見える。

しかし罪木ちゃんに投票したのは本人だけ。ならクロの私は自分に入れたと分かってしまう。追求していく前に少しは考えておくべきだった。

この結果は、明らかに私の性質に反している。

「貴様は闇の宴の際に何度も死を否定していたな。俺様は生物として当然のその欲求を好ましく思っただけだが…… 貴様、なぜ己に投

票した？ それは生への冒涇でしかないぞ！」

「……」

一転、私の方がピンチ……か。

そうだね、死にたくない誰よりも思っていたはずの私が、なにも反抗しないだなんておかしいもんね。

生きることを諦めることは許さない…… だから最後まで足掻く。そんな感じだったか？

彼が1番それを分かっているのだから、バレて当然だね。

今の私はおしおきを目的にしていたのだから、最初から自分が負けのつもりでいた。でも、それでは彼を誤魔化せなかった。

…… いや、私の振る舞いが未熟だったただけだな。十神クンならばきつと足掻いて足掻いて、それでも負ける。そんなシナリオを演じることが出来たのだろうか？

自分で選んだこととはいえ、やっぱり私にこの役目は難しいよ…… けど、最後まで、やらなくちゃ。私が望んで、彼にも託されたんだから。

「そうだな…… 裁判中もずっと冷静で、まるでこつちを試してるよな感じだった…… それはなんでだ？」

「それに、狛枝さんが犯人なら…… なんで私たちをオクタゴンに連れて行ったんだろう…… って思うんだけど」

「……」

オクタゴンへ2人を連れて行ったのは、公平性を保つため…… だ。表向きは。鬪論のときのように、私はどうせなら日向クンと勝負を楽しみたかった。でもそれは、死にたくない犯人がする行動ではない。

本当に知られたくないのならば徹底的に議論を誘導しながら地味に徹し、まるで人狼ゲームの妖狐のようにステルスしているのが正しい。

私は自ら動きすぎた。

真実を隠し、間違った過程に導いた結果がこれ…… 自身の矛盾を晒すことになった。

しかし、まだだ。まだバレるわけにはいかないのだ。

おしおきが確定事項になるその瞬間までは隠し通すしかない。

クロとして確定しているようなものだが、モノクマにバレて追求されるわけにはいかないのだから。

「……」

「そうだよー！ 人殺しの考えることなんて分かるはずないもんね！ 自分の身が可愛いだけの狛枝さんはオマエラを徹底的に叩き潰したかったんじゃないかな？ だって！ それが昔からオマエがやってきたことなんだからさ！」

「……モノクマ、なんの話？」

「思わぬ援護に眉を顰める。」

しかし、〃昔から〃という単語に一抹の不安を覚えてモノクマに尋ねた。それはなんのことを言っている？ それは、彼らに知られたくないことなんじゃないか？ 頭の中をグルグル回る疑問に答えが出されたのはそれからすぐ後だった。

「そうでしょう？ 医療機関最大最悪の事件生き残り……いや、病院の関係者全て見殺しにして逃げた臆病者の……狛枝さん？」

凍りつく。

私が生き残りなのは殆ど周知の事実みたいなものだったが、そんな言い方はないだろう！

「あ、それともう一つあったねー！ 確か、この島に来る前からオマエは殺人経験者だったね？ そりゃあ殺人のハードルが低くなって当然か！ むしろ小枝を跨ぐくらいに簡単か！ ぶひゃひゃひゃひゃひゃ！」

追い打ちに、思考停止する。

なぜ知っている？ いや、それよりも……その言い方では私が喜んで殺人に手を染めたようではないか。

「あ、それは……過剰防衛だったって、認められてるし、そもそもそうしなきゃ私は殺されてた……はずなんだって……！」

「殺さなくちゃ殺されるかもしれない……それってこのコロシアイもそうだよーね？」

「……っ」

モノクマの爆弾発言のせいで皆の目が見られない。顔を上げられない。皆がどんな目で私を見ているのか、想像するだけでも……怖いよ。

否定される。昔も今も人殺しだって、その事実が変わらないから。ああ、もうダメだ。人殺しと一緒に過ごしていたなんて、皆どう思うだろう？ 恐ろしく思うに違いない。私を否定して、早く殺せと、処刑してしまえと思うに違いない。

それを望んでいたはずなのに、やっぱり死を望まれるのは……嫌だなあ。

「確かに、狛枝さんは過剰防衛で人を殺してしまったのかもしれない……病院の人たちを見殺しにしたのかもしれない……」

罪木ちゃんの声が聞こえて、目を瞑る。

聞きたくない。聞きたくないよ。キミの否定の言葉は聞きたくないよ、ないよ。

「……でも、私はそんな狛枝さんを知らないんです。だって、昔のままの狛枝さんならあり得ないことをしているじゃないですか。だから、私は狛枝さんを入殺しだなんて罵れません。私だって、一歩間違えばそこにいたはずなんです……絶望病で動いた私を止めてくれたのは、狛枝さんでしたからあ」

それは、自分自身が殺人をしようとしていたことを白状するのと同じだった。罪の告白。皆が知らないことを自ら暴露して、彼女は私を否定しなかった。

「そうだな、それに……狛枝が昔のままだったなら私の犯行を止めたりはしなかっただろう」

「そうね……アタシも凧ちゃんに助けられたんだよ？ あるときはさ、サンキューね！」

「ペコも小泉も……それに俺を説得したのだからってテメーだったろ」
迷いに迷って、一心不乱に、自分を天秤にかけずに行動した結果がそこで笑っている。

「ぼ、ぼくだって、危険人物だったはずなのに……狛枝さんは真つ先

に料理を食べてくれたよね…… 美味しいって、言ってくれたんだ。そんなレディを泣かせるなんてシエフ失格だよね！」

それは、シエフ関係ないんじゃないかなあ……？
「でもそいつは豚足ちゃんを殺したんだよ？」

「それは事実ですし、許されることではありません…… が、狛枝さんが昔殺人をしたこととは関係ないはずです。今回狛枝さんが犯行に及んでしまったのは、精神的支柱を失ったこと…… ですから」

西園寺さんが真つ当な正論を言うが、ソニアさんが続けて言う。
殺人経験者だから殺人をしたわけではない。そんな風に結論づけて。

「つまり、狛枝が殺人を犯したのは全てモノクマのせいだ…… って言いたいんだろ？」

「その通りでございます…… です！」
なんで？

「つまりあいつをぶっ飛ばせば解決すんだよな！」

「応！ しっかし、拳での解決はならんぞお！」

「ふはははは！ 腕が疼くぞ…… 俺様の本気を見てみたいか？ 破壊神暗黒四天王も今宵は毛が騒つくな…… よし、行くぞお前たち！」
どうして？

「あちしはミナサンのことが大好きでちゆ。それは、狛枝さんも変わりにまちえんよ。どんな過去があってもアナタはあちしの大切な生徒なんでちゆから！」

「あくまで自分が教師だって言い張んのかよ！ …… あー、怖エもんは怖エけど…… 今までのオメーは、噂ほど酷いやツじやなかったとは、思うぜ」

馬鹿なんじゃないの？

「風っちゃんやんは白夜ちゃんと一緒に “ 導いてやる！ ” ってカツコよかったっすよねー！」

「十神くんのこと皆好きだったし、狛枝さんのことだって、結構頼りにしてた…… と思うよ」

「それなのに、どうしてお前が十神を……？　結果が合ってもやっぱり違和感があるんだよな。なにかまだ……　理由があるのか？」

「どうしてそんなにお人好しなの？　馬鹿なの？　ねえなんで？」

十神クンを想うなら私を責めて当然なのに、責めもしないし、十神クンを軽視しているわけでもないなんて……　意味、分かんないよ。

「……　ドツキリハウスに来た初日に、言いましたよねえ」

いきなりなにを言いだすかと思えば……　なんのことだ？

怪訝な顔で彼女を見つめてみれば、罪木ちゃんは真っ直ぐとこちらを見返してきた。

「どこか、痛いところはありませんかあ？　……　つて」

ああ、確かに言っていたね。

でもそれがなにか関係あるのか？

「あのときは……　私自身でもなにを言いたいのかわかなくて……　うまく言えなかつたんです。でも、今あなたに言いたいことは分かるんですよ」

きゅつと目を瞑り、そして一歩前に出る。

それから皆よりも少し私に近い位置で皆を振り返り、片手を広げて指し示す。

「あなたの居たい場所は、ここにはありませんかあ？」

いたいところって……　そういう、ことか。

そういうことだったのか。

「粕枝さんの居場所はここにありませんよお」

やめてよ、そんなこと言わないでよ。

生還すると約束したとはいえ、私は十神クンを殺してしまったんだ。

彼のことは勿論、きちんと死を悼んでいるはずだ。なのにその彼を殺した私に居場所があるだと？　馬鹿だよ、本当に馬鹿だよ罪木ちゃんは。

そんなことを言われたら、覚悟が鈍っちゃうじゃないか。

だからやめてよ、そんな優しい言葉をかけないで。泣きたく、なっ

てしまうから。

「……」

本当は、今すぐにもでも彼女のところへ飛び込んで行きたい。けれど、そんなことはできなくて…… 私にすることは許されていなくて、私自身が許さない。許せないのだ。

唇をぐつと噛んで、耐える。約束は守らなくちゃ。皆で幸せな未来を掴むために、そのための通過点で迷っている暇はない。

俯いて、出そうになる涙を押し殺して、涙声になるのを堪え、落ち着いてから言葉を紡ぐ。

—— 残酷な、否定の言葉を

「私の…… 居場所は………昔も今も、メイの前、ただだよ」

「そ、うですかあ……」

ああ、またやってしまった。

何度彼女を泣かせれば気がすむんだろう。

これでは、彼女を虐めていた人たちとなんら “ 変わらない ” じゃないか。

もう、 “ 友達には戻れない ” のかな……？

いや、こんなに酷いことをした私なんて、 “ 皆嫌うに決まってる ” ……

「それは…… 違うぞー！」

「へ……？？」

え、いきなりどうしたの？ 日向クン。

皆も戸惑っているし…… 私が気づかなかったとかではなく、やはり突然それは違うぞって言ったようだけど。

「嫌うわけないだろ？ 俯いてないで罪木の顔見てみろよ。それでもまだ嫌われたって思うのか？ なんだかんだ、皆お前と過ごして楽しかったんだ。そう簡単に嫌えるわけないだろ？」

なんのことだ？

私、なにも言っていないはずなのに……まさか、まさかこれがココロンパってやつなのか？

どうしてだ。モノミはココロンパの機能は自分から離れてどこか

に行っただって……それが日向クンだって言うのか？ 元々あったカウンセリング用の機能が日向クンについていたとでも？

なら日向クンの相談窓口はそれのせい……ではないな。ココロンパしなくとも彼は人の悩みを解決できていた。

ココロンパと日向クンが合わさり最強に見えるってやつ？

いや、ココロンパされて思ったよりも混乱してるな。落ち着け私。ていうかもう終わった？ もういい？ その辺でもう十分でしょ？」

冷や水をかけられたかのような冷たい言葉。

モノクマの言葉に青ざめた罪木ちゃんが口を覆う。

「ま、待てよモノクマ！ まだ狛枝には訊きたいことがある！」

「そんなの知らないよ…… だってボクは飽きたちゃったのです」

そうか、終わりか…… なら、先に言っておかないといけないことがあるんだよね。

「モノミ」

「わ、わわっ！ な、なんでちようか？」

檻から解放されているモノミに私の電子生徒手帳を投げて寄越し、慌ててそれを受け取る彼女を見守る。

「あのさ、私の部屋にある図書館の本…… 返しといてほしいんだよね」

「此の期に及んで言うのが本の返却かよ!？」

突っ込んでくる左右田クンはおいといて、戸惑うモノミに言う。

「ほら、 ” 死んだら返す ” って言ったでしょ？ 死んだら自分で返しに行けないし、勝手に持って行ってよ。なんなら皆で部屋の整理してくれても構わないよ」

「こ、狛枝さん…… もしかしてあのときから……？」

「あははっ、そんなわけないじゃない。偶然だよ、偶然……」

目を逸らして言う。

それから、罪木ちゃんの方を向いて 「大丈夫、約束は…… 覚えるよね？」 と呟く。

しつかりとそれを聞いた彼女は泣きながら 「はい！」 と大きく

返事をした。

「…… それじゃあ、お願いモノクマ」

「逃げなくてもいいの？」

「…… いいよ」

そんなやり取りをして頷く。皆よりも少し離れてモノクマのいる裁判長席の近くへ移動する。巻き込まないために。独りで行くために。

「はい！ それでは、 ” 超高校級の幸運 ” である狛枝風さんのために…… スペシャルな、おしおきを用意させていただきましたーっ！」

しかし、そんな配慮も足蹴にしてやって来る馬鹿もいるわけで……
「狛枝！ どうして抵抗しないんだ！ お前、これから殺されるんだぞ？ いつものお前なら足掻くだろ？ 田中の言う通り、やっぱりお前なんかおかしいぞ!！」

掴みかかってきた日向クンの手を両手で取り、俯いたままにしたいた顔を彼の耳元へ近づける。

「最期だし、教えてあげる」

そうでもしないと、きつと彼は力を緩めてくれないだろうから。

「本当はね…… この世界で殺されることこそが、私の目的だったんだよ」

「…… はっ」

間抜けなその声と、緩められた手に安堵する。

ああ、これなら私でも振りほどける。

『それでは張り切っていきましょう！』

背景で流れるモノクマの声。

「本当だよ？ だって、私は嘘が嫌いなんだから。ずっと言ってきたでしょ？ 信じる信じないはキミ次第だけど…… ああ、それとね？」

『おしおきターイム！』

「あとは頼んだよ、罪木ちゃん」

それは、奇しくもあの人狼ゲームのときと同じ台詞。

「…… え？」

戸惑う彼女を他所に、モノクマが木槌でおしおきのスイッチを押す
軽快な音が響き渡る。

「狛枝さんがクロに決まりました
おしおきを開始します」

「おやすみなさい、良い夢を……」

「狛枝!?!」

緩んでいた彼の腕を思い切り突き飛ばし、1人離れて笑う。
その次の瞬間にはモノクマカラーの首輪がしっかりと私に嵌って
いた。

「えっ、あ、狛枝さあん!!」

「……なんて、こんな悪夢の中じゃ皮肉でしかないよね」

またね、みんな。

その言葉は声には出さなかった。

引きずられるように鎖が引つ張られ、足が地面から離れる。

衝撃で首元から外れたホイッスルとクローバーのロケットペンダ
ントは慌てて手を伸ばしても、届かなかった。

引きずられながら連れて行かれるのは、遊園地。鎖は引つ張られて
いるものの、途中で死なないようにかその体はモノケモノに運ばれ
る。

華やかな遊園地。その景色をしっかりと目に収めながら移動する。
怖くない。怖くなんて……… 本当は、少し怖い。これは夢だ。
分かっていても、やっぱり怖いや。

…… もしも私が手こずっているようだったら迎えに来てよね、日
向クン。

キミのことちゃんと待ってるからさ。

私は勿論私自身を信じているし、十神クンのことだって信じている。罪木ちゃんは私がいなくてももうすっかりやれるって信じられるし…… 日向クン、キミのことも信じてるから。

だから、『キミを信じて待つ』よ。

信じられないから殺人をしたんじゃない。

信じているから、退場するんだ。

信じているから、私はこんなにも勇気を出せる。

それは勇気なんかじゃなくて、無謀なだけかもしれないけれど……それでも最期の抵抗くらいは華々しくやってみせようじゃないか。

大袈裟なくらい”誇張”して悪役として退場してあげよう！

…… 今までのことを考えると無理かも知れないけれど。

けれど、この想いは必ず彼らが見つけ出してくれる。だから私は、今だけは役者となってモノクマの目を惹きつけなければいい。

精々その黒豆みたいな目に焼き付けるといい、私の最期の大舞台をね！

【一攫千金☆どりいむしょー！】

頭の悪そうな文句の看板が下げられた、掘っ建て小屋のような場所に放り込まれてゴロゴロと転がる。

掘っ建て小屋は全て金属で出来ているようで、真っ暗だった。

そこに照明が灯り、目に入ったのは天井から下がった5本の鎖。

私は六角形の印のところに固定されているが、鎖が半径1メートル

程は伸びて動けるようになってるので普通に立てるようだ。

まあ、鎖は床に固定されているので立って少し動くくらいしかできないが。

隣には同じように5本の鎖の前にいるモノクマ。ただし首輪の鎖はされていない。

周りには観客モノクマがたくさん。

状況で分かったことは1つ。どうやら運試しさせられるらしい。

先に隣にいるモノクマが鎖を引っ張るが、なにも起こらない。

私も引っ張るがなにも起こらない。2本目も同様に引っ張るがなにも起こらなかったのだからセーフだ。

しかし、隣のモノクマが2本目を引くとそこめがけて細い針のような物が飛び出してモノクマの元へ。

モノクマは鎖を引っ張った際に足を滑らせて偶然避けることができたが、少ししか動けない私は避けられるはずもなく右肩と脇腹を針が貫通していく感触を味わうはめになった。

血が盛大に吹き出して服を汚していく……でもうめき声はあげなかった。

ここでようやく確信する。

私は、散々^{他人}自分がしてきた^{幸運}ことで殺されるのだと。

次は槍が降ってきた。なんとか避けたが、それは小屋の柱に直撃していた。

鉄で出来た小屋が揺れる。

モノクマがメチャクチャに鎖を引っ張りまくり、自分で引っ張った鎖が振り子のように当たり、小屋から吹っ飛ばされて行った。

柱が折れる。

金属の天井が嫌な音を立てる。

すぐにどうなるかを察して、私は痛みを堪えて立ち上がった。

「あつははは……泣く！」

狂ったように笑う。

落ちてくるその絶望を見つめながら手を大きく広げ、精一杯の虚勢。

引きつつているのか、分からないが笑みを浮かべて笑い続けた。

どうだ、笑いながら死ぬやつなんてなかなかいないだろう？

モノクマめ、ざまあみろ。

でも、やっぱり…… 怖いものは、怖い。

私はすぐに頭から徐々に潰されて、折れていって、死ぬんだ。

「私の小さな全力の悲鳴の笑い声は、 “ あのと き ” のような天井に押し潰され

て…… 潰されて——

……

……

……

後に残ったのは真っ赤に染まった金属の板と、瓦礫。

そして、シャワーのように降り注ぐ賞金を手にして、大喜びするモノクマだけだった。

あなたを信じて待つ

おしおきが終了した後の裁判場は沈黙に包まれていた。

初めてののおしおき、初めて人が死ぬところを目の前で見たという経験はそんな青少年たちには少々刺激が強すぎる。

とくにやみつきちゃんなんてひどい顔色だ。泣き喚いていて手がつけられないくらい。

私だって…… 悲しい。けれど、それよりもあの子が最期まで見せていた笑顔が忘れられない。

私—— うろつきこと空井織月うついでりづきは、基本的にずっと皆の夢へとダブしている。

だからその様を、その最期も看取ったわけだが…… 最期の瞬間の美しさは目を見張るものがあつたと言えるんじゃないかな。

鳥肌が立つほどの高揚感、足掻き続けるあの子の覚悟、絶望に屈しない精神。自分の「死にたくない」思いを捻じ曲げてまで決行した勇氣。なにもかもが美しかった。

うんうん、アキラの最期と同じくらい興奮した。いや、レジエントは勿論アキラの死にざまなんだけどさ。

できるなら今すぐにもあの瓦礫の場所に行つていつまでも眺めてたいくらい。

これが異常なことなんて分かっているけれど、それが私の愛というものなんだから仕方ないよね。

愛とは、殺すことと、見つけたら。

伊達に毎日アキラを夢の中で殺しているわけじゃない。

はあ、録画に取っておきたいなんて言ったら霧切ちゃん辺りから不信を買うよね。

仕方ない、心のフィルムに保存。ゾクゾクするようなあの体験を夢で追体験できるように覚えておこう。

こう考えるとこれ仕掛けているあの女…… 江ノ島ちゃんに少しだけシンパシーを感じる。

けれど私には仲間もいるし、なによりさびつきちゃんが希望側にい

たいと望むなら私も側にいてあげたいよね。メイドちゃんもそう望んでいることだし。

「これから…… どうする?」

泣き続けているやみつきちゃんを写真家の子が介抱して、剣道家の子がやつと話し始めた。

シヨックなのは分かるけどね。でもあの剣道家の子つて人の死には慣れてるんじゃないかな。いや、だからこそこんなに早く動けるようになったと言えればいいのかな。

それにしても、話し相手がいないとちよつと虚しいね。

早いところ起きて凧ちゃんがどうなったか訊きに行きたいけど、動向は最後まで見守らなくちゃ。

「あちしは…… 頼まれたことをするだけでちゆ。ですから、先に行かせてもらいまちゆね」

「あ、ま、待てよー」

凧ちゃんの電子生徒手帳を抱きしめたままモノミちゃんがその場から消える。アンテナの子が引き止めようとしたけどモノミちゃんはすぐに行っちゃったね。それだけあの子も余裕がないんだろうし、モノクマに荒らされる前に現場に行きたかったってのもあるかもしれない。

あんなあからさまになにかありますって遺言残したらモノクマが黙ってないもんね。

そんなモノミちゃんを見送ってから、七海ちゃんがやみつきちゃんの側による。

「罪木さん…… 狛枝さんのコテージに、行ってみない? モノミも行っちゃったし、なにか残っていたなら、それは罪木さんが見つけないといけない…… と、思うんだ」

「わ、わかって、ますう…… で、でもお、も、もう少しだけっ、待っていて、もらえますかあ……?」

凧ちゃんが常に身につけていたホイッスルは彼女が抱きしめている。

ロケットペンダントの方はアンテナの…… 日向君が持っている

みたいだね。

遠慮がちにペンダントを開けて、その写真を見ている彼は痛ましげにまた閉じた。

ぐす、ぐすと暫く泣いていたやみつきちゃんは立ち上がり、よろよろとしながら息を落ち着かせている。

「わ、私たちも…… 行きましょう……… 狛枝さんの、コテージ、に」

涙声ではあるものの、やっと落ち着いてきたみたいでなんとない言い切った。そうこなくつちやね。

もう気づいてもらうのは諦めちゃったけど、私が寄り添ってることで少しだけでも安心してもらいたい。

彼女の近くに寄って頭をポンと撫でる。気づいてはいないけれど、安心感があるのか目を猫みたいに細めて応えてくれた。

「応！ なら早く行かんとなあ！」

「おっし！ おっさん競争しようぜ！」

「ガツハツハ！ 負けんぞお！」

一足早く裁判場を出て行く2人。

褐色ちゃんはいつも通りだけど、マネージャー君は少し無理をしようのように見えた。あの人はきつと褐色ちゃんの明るさに救われてるんじゃないかな。

あの人って昔は体が弱かったんだっけ。資料で見た気がする。

羨ましいなあ。アキラも体質が治ってたら超高校級に…… いや、

嫉妬は見苦しいね。追いかけてよう。

「七海さん、ありがとうございますう」

「ううん、いいんだよ。ほら、1番乗りしなくてもいいの？」

「1番乗りはさすがに無理ですよ……」

苦笑しながら裁判場を去っていくやみちゃんを見送る。

王女様は厨二病君とツツコミ君と一緒に上がっていき、変態シェフ君は極道君たちに支えられながら着いて行った。あの子も殺人を止められた人だからダメージは大きいみたいだ。

けいおんの子は競争に触発されたのかヘッドバンしながら走ってっ

たし、写真家ちゃんと舞踊家ちゃんは連れ立って歩いていく。

アンテナ君はそれを見て、最後について先程裁判場に置かれた凧ちゃんの遺影へ振り向いた。

目を隠すようにバツテン印がつけられたそれを見て、なにかを言おうとするんだけど言葉は出てこなかったみたい。

目を瞑って、言えない代わりに心の中でどうやら言いたいことを言ったらしい彼はそのまま出て行く。

1番最後に出て行った彼に置いていかれないよう私もエレベーターへ乗り込む。置き去りにされちゃったら一旦起きるしかなくなるからね。

「最後まで、笑ってたな」

「いや、泣いていたよ。」

表面上は笑ってたけど、その奥にいろんなものを押し込めて泣いたよ。

「けど、笑ってなかった」

そう、それで合ってる。笑っていたけれど、違う。

なんだ、案外この子は凧ちゃんのことがかかってるんだな。

彼の手の中にある電子生徒手帳には、「狛枝凧 6/6 コンプリート」の文字。裁判前はコンプリートしていなかったはずなので、あの土壇場でコンプリートしたんだと思う。

まったく、遅いつての。おかげで人一倍臆病なあの子が一番怖い目に遭ったんだから。まったく…… 私は別に、あの子だけ生き残ってくればそれでも良かったんだけどね。できればやみつきちゃんも。

苗木君にはとても言えないけど、うそちゃんも私と同じ気持ちのはずだ。夢仲間というのはそういうものなのだし。

凧ちゃんのコテージに着くと、丁度中からモノミちゃんが出てきた。

「み、ミナサン……！」

「モノミ、手伝うぞ」

「そうそう、凧ちゃんもそう言ってたしね」

泣きそうなモノミちゃんが部屋の中へと招き入れる。

一応モノクマには荒らされていなかったようで、中は雑然として
いるものの静かなものだ。

勿論、彼女が用意していたいくつかのものもそのままとなっ
ている。

「なんだか、チグハグ、だね」

七海ちゃんのいう通り、部屋の中は整頓された場所とそうでない場
所があつてチグハグな印象を受ける。

そう、まるでわざとそうしているかのような雑然さ。

ガラステーブルには綺麗な紫のアネモネが活けられていて、テレビ
の横なんかに置いてある全ての花瓶に同じ花がある。

なのにテーブルの上には本が山積みになっていて、今にも花瓶を倒
してしまいそう。

その多くは島の資料だが、中には趣味なのかそうでないのか、意味
がなさそうな本まで混ざっている。その数およそ30冊以上。

島を調査し、本の情報と照合させた結果なんかもメモで散らばって
いるので正直綺麗とは言えない部屋だ。

メモには途中のものもあり、ああここにもう凧ちゃんはいないんだ
な……なんて感傷に浸りたくなる。

「紫のアネモネ…… ですね。花言葉は確か、 ” あなたを信じて待
つ ” だ」

「ソニアさんは花言葉も分かるんですね！ なんて少女らしい……
素敵です！」

「我が国には、花言葉のメッセージを込め、植物でマカngoの首輪を作
る習慣があるのです。それを送りあつて逢い引きすることもありま
す。日本で句を送り合うのと似た習慣ですから、花言葉くらいは網羅
していないといけないんですよ」

「そ、そうですか…… ところでマカngoって」

「して雌猫、貴様はこれにどんな意味があると取る？」

すごい形相で飼育委員を見つめているけど、大丈夫かな？ 奥歯か
らギリイッって聞こえるけど。

「罪木さん、以前粕枝さんの部屋に訪れたときもこの花でしたか？」

「い、いいえ…… えっと、確かマリーゴールドと、ヘデラは分かったのですが…… それ以外は分からないですねえ。狛枝さんが言っていたのはゼラニウムとライラックで迷ったとか…… 結局アロマ効果のあるライラックを採用したとかですかねえ」

「罪木さん、その花たちの花言葉は総じて “友情” ですよ。やはり…… 狛枝さんは花言葉を知って飾っているみたいですね」

へえ、見事なものだね。

何ヶ国語も喋れる王女様は花言葉まで瞬時に出て来るとは、恐れ入ったや。

もしかして、私たちが凧ちゃん部屋の部屋に行くとき毎回コロコロと花を変えていたのはそういうことだったのかな？

「そういえば…… 狛枝さんに言われて追加した造花も結構ありまぢゆね」

「じゃあ、このアネモネにも意味があるってことか？ 信じて待つて…… 一体どういうことなんだ？」

「それは…… まだ分かりませんが……」

「とにかく、この部屋にはなにか秘密があるのだろう。遺言にするとすることはそういうことだ。皆で手分けして探せばそのヒントくらいは見つかるんじゃないか？」

「はあ、回りくどいことしやがって……」

「ってことは、凧ちゃんて最初から自分が死ぬって分かってたってことじゃないんすか？」

「部屋に遺言がある以上、ドッキリハウスに攫われる前から計画してたってことだよな。ちよつと胡散臭すぎると思わないの？」

舞踊家ちゃんの言うことはもつともだ。

けれど凧ちゃんは元からペナルティで暫く戻れないって思ってたみたいだし、わりと自然な流れだと思っただけ。

「それより、わたしはゲロブタが絶望病だった事実の方が気になるんだけど。あんた、なんで隠してたの？ しかも誰かを殺そうとしてたんでしょ？ 誤魔化しても無駄だからね！」

「あ、そ、それは……… 誤魔化したり、しません。私は絶望病で思

い出してしまいました。それで、狛枝さんを襲ったんです。狛枝さんも、”自殺衝動”と”殺害衝動”の起こる絶望病にかかっていましたから、都合が、良いと思って……」

「ま、待て！ 罪木はともかくとして、あいつも絶望病に……？ そんな素振りなかったぞ?!」

「私とは違って、耐えてたみたいですからねえ」

「あれって耐えられるようなものじゃなかったっすけど……」

「澁田、覚えてるのか？」

「え、あ、まあ…… そつすね……」

頬をかいて誤魔化しているけれど、覚えているのはバレバレだよ。「というより、思い出したとはなんだ？」

「絶望病は、そのとき抱いた気持ちのような…… 既に起こったことは病気が治っても忘れたりはいらないですよお」

「自殺衝動に殺害衝動って、そんなもの覚えてたら……!？」

「それよりあんたが思い出したことについて聞きたいんだけどー？」
皆が皆、本を避けながらやみつきちゃんに群がる。でも、そんなことをしていると……

「お、おい皆待ってって！ そんな一気に質問して答えられるわけ……!」

「こんなところで議論したらダメだよ……!」

「ひ、1つずつちゃんと答えますからあ…… あつ、」

そこで、詰め寄せられたやみつきちゃんが本を踏んでしまい、足を滑らせた。

彼女が背中から転んでダイブしていくのは凧ちゃんのベッド。

咄嗟になにかを掴もうとしたのか、やみつきちゃんが手を伸ばして窓際のカーテンを巻き込んで倒れていく。

「罪木！」

「ひゃあああつー！」

カーテンが引きちぎれて、木枠でできた窓が目に入ったとき、その場にいた全員はそこに釘付けになっていた。

「み、見ないでくださいあいー！」

服がはだけてカーテンにより手を拘束されたやみつきちゃんは、足
の間に化学の教科書やら意味の分かると怖い話なんかの本を挟んで
盛大におっ広げている。

ちようにど危ない位置に『意味の分かると深い話』略して意味深が
乗っており、題字が大きく見える位置にある。なんてことなの……

「あ、あれ……？ どうしたんですかあ……？」

「罪木さん、お手柄だね」

ハツとしたように動いた七海ちゃんが彼女の拘束を解いて背後を
指差す。

それに促されてやみつきちゃんが振り返り、言葉を失った。

そこにはカレンダーが張ってあった。それはただのカレンダーで
はなく、バラバラの日めくりカレンダー。それも逆さまのものまで
あつて、一見めちやくちやに張られているようにしか見えない。

その中程の木枠に赤いペンキで補足するように線が引かれ、明らか
になにかあると言っているような、そんな光景。

細い木を横に組んで大雑把なブラインドのようになっていた窓に
張られた、暗号。

4	/	1	2	/	1	6	9	/	1	6	4	/	1	6	4	/	1	7	/	3	5	/
1	7	1	/	1	7	/	3															
5	/	3	9	/	6	6	/	6	(逆さ)	E	9	/	1	6	3	/	1	4	/	1		
7	/	3																				

この世界にはもういないはずの、あの子の笑い声が聞こえたような
気がした。

「アイ」の証明 ― うそつき ―

「愛」 っていうのは、その人に1度きりしか与えられないものなのだと、センセイが言った。

センセイは狭い牢獄の中にいる男の子たちにはその「愛」とやらを与えるのに、私にはなんにもくれなかった。

からっぽな、私。「うつろ」な、私。

性別がダメなら男の子っぽい乱暴な口調にした。少女趣味を我慢した。それでも、愛はもらえない。

センセイはいつだって私には冷たくて、無視をして、罵倒の1つもくれやしなかった。それはなんの関心も抱いていないということが子供心に分かってしまつて、どうしても私のことを見て欲しくて、センセイの真似をして牢屋の男の子たちで人形遊びを試してみたこともあつたけれど、結局黙つて片付けるだけ。

耳の長くて垂れた男の子の耳をチョコキンと切り落として顔の大きな子の首にくつつける。体は野犬を使つたんだつて。

それで最後に太めのチューブを鼻に差し込めばゾウさんの完成。

馬の下半身の中に生命装置を入れて、上半身だけになった友達が神経回路を無理矢理くつつけられてケンタウロスの完成。

バケモノの研究。バケモノを創造する研究がセンセイのしていること。

正直最初は怖かつたけれど、センセイが楽しそうだから私もひとつだけ心に嘘を吐いた。

センセイが楽しいなら、私も楽しくないと「おかしい」んだ。だから、楽しい。楽しい。楽しい。嬉しい。面白い。

いつしか、それは嘘ではなくなつた。

だって私は七瀬先生の娘だから。

お父さんと呼ぶことができなくても、センセイとしか言わせて貰えないにしても、センセイのことが大好きだったから。

ゆくゆくは色んな動物の長所を合わせ持った最強の人間を作るつ

ていうのが、あの人の夢なんだって。

なんちゃら学園の評議委員とかいう人と話しているのを盗み聞きしちゃったから知ってるんだ。そいつらは別の人も協力関係にあって、センセイと似た研究もしているらしい。今のところ実験に付き合うようなヒトがいらないからなんにもできてないみたいだけど。

でもセンセイはその研究にライバル意識があったみたい。

だから材料がたくさんある自分が有利だって鼻息を荒くして毎日牢屋から男の子たちを連れてった。

「助けて」

なんて言われることもあったけど、私はセンセイにしか興味がない。でも可哀想だから言ってあげたんだ。

「助けてやろうか？」

希望を見つけたような表情。

次の日にはなにに改造されるか分からない状態の男の子は私が女神かなにかのように見えるんだろうな。

「バケモノになりたくないなら、ヒトのまま死なせてやるよ」

「……え？」

希望から一瞬後には失意、そして絶望へと転落する。

その表情が本来センセイに向けられるはずだったと思うと最高に気分が良いし、なんだかゾクゾクした。

センセイが独り占めしている「絶望」を私がこっそりと吸い上げ、センセイの真似をして命を奪う。

センセイは散々痛ぶるのが好きだから、私は約束通り人間のままだ瞬間で死ぬるようにしてやるんだ。約束を守るって大切なことなんだろう？ 本に書いてあった。

様々なヒトと出会っては別れていく研究所で、最後に出会ったのは、キマイラと名付けられたなにかだった。唯一実験に成功したそいつは暴走して研究施設ごと破壊していった。まるで今までの恨みを全部晴らすような光景だった。

因果応報というやつだな。けど、キマイラは威嚇をするだけで私には見向きもしなかった。きつとなにもできないと思ってたんだな。

キマイラは当然、主犯のセンセイを足蹴にしてその牙を見せつけていた。

無視されるのは、嫌いだ。

なにより、センセイが嫌いならそんなことをするべきじゃない。

私が教わったそれは、相手へと捧ぐたつた1度の「愛」の証明であるから。

センセイはそのとき初めて私に目を向けて、「助けて」と口にした。

いつもなら向くことのない視線が私に向けられている。それだけで、理由になった。

「ねえ、助けたら愛してくれるのか？」

「ああ、愛すよ。だから愛しい娘、助けてくれ！」

私に関心を向けないキマイラを殺すのは簡単だった。

いくらか実験に成功していたとはいえ、その体はボロボロで脆いものだった。

センセイには執念で追いつがっていただけだった。

「助けたよ？ センセイ、だから私を愛してくれよ」

「アイ」がそこにあると思っていたかった。

「……………」

「I」の証明がほしかった。

「……………」

「私」が必要とされていると思ったかった。

「……………」

センセイは見向きもしない。

まるで何事もなかったかのようにキマイラの死体を蹴りつけてため息をついた。その視界に私は映らない。入らない。愛してもらえない。

どうして？

「……………」

邪魔をしても、視界を塞ごうとしても、大声をあげても応えてくれない。ただ黙々と片付けているだけ。

地面が揺れて、壊れていくようだった。

辺りに飛散した物を一生懸命集めて、手伝いをしようとしても私の触ったものには手さえ触れない。

なんで、なんで、なんで。

でも気づいてしまったんだ。

そうだろ？ 私

「……………うそ、つき」

愛を与えてくれないのなら、私が愛をあげればいいんだってことにさ。

「……………」

キマイラを仕留めた釘バットでセンセイの背中に叩きつけ、張り倒す。

「っづ!?!」

「やっと、こつちを見てくれたな」

痛みを訴えて無視できなくなったセンセイは、その瞳一杯に私を映してこつちを睨む。ああ、やっと見てくれた。

今センセイは私しか見ていないんだ。その目を恐怖に歪めて、絶望を宿して……なんて、いい気分。

「……………!」

なにか言おうとするセンセイの口に、さつき拾った針を刺し込むと酷い顔をして黙り込む。口を開けたまま、手を使って私を退かそうとしたから思い切り針で床に縫い付けてやった。

センセイの標本が完成。

でも、まだまだだ。私の「アイ」をきちんとセンセイに見せてあげないと。だってこれを「愛」だって私に教えたのはセンセイなんだから。

責任は取ってもらわないと。

「嘘つきな お父さん」にはおしおきしなくちやいけないだろ？」

口元を隠し、にししと笑って針を一気に口の中へ。

「嘘ついたら、針千本のくます、つてな」

刺して、刺して、刺して、流れ出るそれを飲み込んでみたら「うえ」と吐き出す。センセイは平気でやっていただけ、私には無理だ。大人の味ってこういう感じなのか？

「ゆるびきった!」

バズン、と業務用の紙切りカッターで挟み込んで人差し指をもらう。

「でも使い道なんてないよな」

お守り袋に指を入れて首からぶら下げる。

「……あれ?」

「……」

「あらら、寝ちゃったのか? ならおやすみの時間はまだだぞつて!」もはや手足に力が入らないようで、私が腹の上から退いてもセンセイは起き上がらない。

それをいいことに私は釘バットをセンセイに叩き込む。

何度も何度も何度も……

「グチャグチャのドロドロになっても欠片になってもネクターになってもずつとずつとずつと、愛してやんよ。その体の、隅々まで。だつてそれが愛の証明なんだろう?これは、私をこんなにしたアンタの責任だよ」

そう、私が私であるために。

アンタが教え込んだように、そんな自分を証明するように。

これは殺人という名のラブコール。

たった1度きりの殺し愛。

そうして、シミだけ残るその場所から私は巣立つ。

自分のココロに、ひとつだけ嘘をついたまま。

楽しい、嬉しい、大好きな先生、私だけのお父さん、「愛」と、「I」の証明。

こうして、私はうそつきになった。

……
……

「……ん」

「どうかした？ うそちゃん」

「織月、愛りづきってなんだと思う……？」

「愛ね…… 身を滅ぼすくらい素敵なもの、かな」

その回答にクスクスと笑って「そうか」と返事をする。

「アンタでもそう思ってるんだな」

「勿論、愛に盲目な自覚はあるけど…… 常識はあるからね」

「常識か？」

「常識だよ」

世間一般じゃあ、愛は果てしないものとか深いものって言うと思うがね。

「なら世界は非常識に溢れてるんだな」

「そうだよ、だって自分自身こそが常識なんだから」

「言ってることが違うじゃないか。傲慢か」

「人によって違うって言ってるんだよ」

その言葉に、沈黙。

「なあ、コイツはなんて言うと思う……？」

ふと、目の前のカプセルに包まれた友人を示す。

すると織月はすぐに「〃 そのときになるまで分からない〃、

でしょ」と返事をする。

「違くないな」

つかの間の夢は、ようやく忘れられそうだ。

頬を叩いて頭を振る。

さて、モニターに戻るとするかな。

…… 友人の最期を左右する、裁判を見る。

そんな、事前譚。

このせかいは

私が最初に思ったのは、いくらなんでも用意周到すぎなんじゃないかという疑問だった。

けれど、凧ちゃん希望ヶ峰学園が没落して超高校級の絶望が出現するよりも前に予備学科の危険性についても言っていたし、そもそも怖いから学園には通いたくないとさえ言っていた。

実際、希望ヶ峰学園最大最悪の事件と称される事件が起き、それを隠蔽していた学園は絶望の暴徒と化した予備学科生のデモ、そして一斉自殺などが連鎖的に起こって行った。

まあ、元々パレードと称されるデモはあったようだけど、それらが一気に悪化して日本全土、世界中にまで伝染。

全土まで広がったのは、超高校級の絶望、と呼称される14人がただ絶望を振りまくためだけに起こした、同時多発テロが発端だった。

人災というよりは、まるで伝染病や竜巻、はたまた大津波のような天災ともいべき事件だと言われている。

……この事件と、絶望の名の下に行われる事件などを総称した“人類史上最大最悪の絶望的事件”という現象は、未だに終息していない。

これを起こした14人の絶望。

だけれど、彼らを超高校級の絶望へと墮とした真犯人が2人。

その2人は、あろうことか凧ちゃんの後輩だった。

1人は苗木君がどうかしてくれただけで、もう1人の……真の黒幕は……行方不明、らしいけど。

他にも、うそちゃんに残したセキュリティ万全なマンションも、その事件によってどこから大量生産されたらしいモノクマや、絶望の残党から身を隠したりするのにも役に立っていた。

チェンソーの詳しい設計図まで蔵書の中に紛れ込ませていて、3Dプリンターで2人とも自分の武器を作ることができた経緯もある。そのおかげで塔和シテイへ凧ちゃんを探しに行ったときも大活躍

だったし、私たちは死ぬこともなくこうして生きているわけだ。

……先見性があるにしても正直異常すぎるよね、これ。

ここまで来ると本当はなにか知ってるんじゃないかな？ と察してはいるのだけど、本人が話さないくらいだから話したくないことなんだろうな、とうそちちゃんと2人で傍観している。

いつか彼女が自分から話してくれるのを待つのみだ。それまではいくらでも付き合うし、秘密を知ったとしても昔からの関係は変わらない。変えさせないつもりだからうそちちゃんと2人で外堀を少しずつ埋めていつている。

この分だったらクラスメイトも利用して外堀を埋めていこうかな…… あ、いや、利用じゃなくて協力か。

同類相手でないとも軽視してしまう。こんなことをしていたら凧ちゃんが怒るな。

でも仲間うち以外にきちんと友情を築いているのは凧ちゃんと蜜柑ちゃんだけなんだよね。うそちゃんも、かみつきちゃんも、皆仲間以外とは壁がでしやすいから。

しかし、この残された暗号を見るに自分が死ぬことは確定していたようだ。だけれど凧ちゃんは人一倍臆病で生きたがりだ。そんな子が死ぬこと前提で動くとは到底思えないので恐らく死なない確信があつてやつているのだとも予測できる。

あとは、元旦のカレンダーについた花丸マークも根拠の1つ。暗号はさすがに解読できないけれど、ずっと先のカレンダーに花丸マークをつけるなんて、まるでその日自分が生きていることを確信しているみたいだ。

もちろん、暗号に使うことを思いつく前にマークをつけていた可能性も、マーク自体が暗号の解読に関わっている可能性もあるけどね。

「これは……」

そんなことをつらつらと考えていると、やみつきちゃんを質問責めにしていく連中が新たな目的を見つけて議論を始めた。

やみつきちゃんはやみつきちゃん「あ、あとでちゃんとお話ししますからあ」と萎縮してしまっている。

ああ、もうそんなに怯えなくてもいいのに。そもそも集団で質問責めにするなんて、てことも思うが凧ちゃんの大切な仲間だし、私が口出しすることではないはずだ。

仲間のことになるかどうかとも怒りっぽくなってしまう。ダメだな。

早く凧ちゃんの生存確認をしに行きたいけどこれじゃあ暫く無理かなあ。

「もしかちて、狛枝さんはこれを見つけてほしかったんでちようかなあ……」

「わざわざ遺言に残してるくらいだもんね…… そうかもしれない、と思う」

モノクマ曰く裏切り者のお2人さんがカレンダーが張り付けられた窓を見て呟いた。

それに続いてアンテナくんが「皆、この部屋を捜査しよう」と言い出した。うん、それが自然な流れだよ。このままじゃあラチがあかないし、やるしかないよ。

「つまり、これの意味を調べるってことだよな？」

「ああ」

変態料理人君が窓を指差す。

「そもそもー、これ本当に暗号なんすか？ 唯吹にはチンプンカンプンなんすけど……」

「それを知るために捜査する…… だよな」

「あいつが部屋の整理を頼んで来たのは意図的だったんだと思うぞ。ならこれになにかあるって思うものだろう」

「本来頼まれたのはモノミだけだよ……」

それに付け加えてなんなら皆でやってもいいとか言っていたのは凧ちゃんだしね。

「ちよつと待て、その前に役割分担しとくべきなんじゃねーか？ 十神も狛枝も、毎回そういうのやってただろうが」

「そ、そうですねえ」

思い出してしまったのかちよつと泣きそうな蜜柑ちゃん。

確かに、その方が効率はいいと思うけど。

「なら、日向…… アンタが決めていいよ」

「は？ …… え？」

「ホントはソニアちゃんにやってもらおうとも思っただけど、夙ちちゃんも十神も、両方と仲良かったのはアンタだし、まとめ役にはピッタリでしょ？ 蜜柑ちゃんにはこの部屋でやりたいこともあるだろうし……」

おっと、写真家ちゃんがアンテナくんにデレている。いつの間にかそんなに信頼されるようになったのやら。出会った頃は頼りない認定されてたつていうのにな。

私は基本的に夙ちゃんや蜜柑ちゃんの周りをうろろしているだけだから他の人の進歩状況はよく知らないんだよね。そっちはモニターで苗木君たちが見てるからいいでしょって感じで。

「そうか…… なら終里と式大には入り口を開けて待機しててくれるか？ モノクマがここを荒らしに来たら困るしな。それからモノミも」

「へ、あちしもでちゆか!? 頼まれたのはあちしなのに!」

「お前、モノクマが来る前兆とか分からないのか？ それが分かるなら事前に警告してほしいんだよ」

「あ、あちしが頼られてる……!? ぐす、ぐす、先生嬉しいでちゆ…… あ、もう先生じゃないんでちた…… 悲しい!」

「はい!」

ああ、そこまで察知できるようになったんだ。

表でちーくんも頑張っていることだし、大分奪われた機能が回復してるんだね。

「俺も一応調べてみるけど、本と資料を速読できるやつっているか?」

「それならわたくしが」

「オレも一応できんぞ」

と、王女様とツツコミ君が立候補。

王女様はさっきの花言葉パフォーマンスがあつたおかげで信頼されてるけど、ツツコミ君の方は舞踊家ちゃんに「はあ? あんたが

「？」と言われてる。

「お、オレ高校に行く前はガリ勉だったんだよ……」

「なるほどー、高校デビュー失敗しちゃったんだー？　クスクス、やっぱりモブはモブだよねー！」

「うっせー！　今は関係ねーだろー！」

「つまり、勉強はできるから参考書読むのも慣れてるってことでいいか？」

「それでいいんだよ……」

ツツコミ君が大暴露しながら自分の足に傷をつけるように自爆した。

とにかく、王女様と作業できるのは嬉しいからよかつたんじゃないかな……　その後飼育委員君も動物の研究論文なんかを読むことが分かり、作業に加わって行つたけれど。

哀れツツコミ少年。

本棚担当が決まったところで次は他の場所だ。

お風呂場なんかはないだろうと思いつつ念のための確認で蜜柑ちゃんが向かい、ダンスは女子担当。服とか下着とかあるから男子は全面的に必要ななくなった本と資料の片付けた。

そして暫く経つた頃、ポツリとツツコミ君が呟いた。

「なんか……　付箋だらけだな」

確かに、本の1冊1冊にかなりの量の付箋がついているみたいだ。

けれど付箋の場所を開けて見て見ても、書かれたメモとはなんら関係がなさそうだし、ただの雑学だったり空白のページだったりと意味がなさそう。法則性もぱつと見はなさそうに見える。

「ひとまず、付箋のある場所を全て記録しておきましょうか。小泉さん、お願いできますか？」

「分かったわ」

バッテリーが無事か少し心配だが、他にもアンテナ君にもらったカメラが沢山あるらしいので大丈夫だろう。

記録するから作業の進みが遅くなったけど、皆真剣だ。

ふーん、凧ちゃんのためにここまで真剣になつてくれるんだなあ。

なんて見直しつつ、進歩を見守る。

「ダメですね。全ての本に付箋が貼ってありましたけど…… よく分かりません」

「ランダムに貼ってあるとしか思えねーな」

「ふむ、ところでなぜ元旦の部分にだけ印がついているんだろうな」

「そういうえばそっすね…… 他のところにはなーんにも書いてないし！」

分からない部分も捜査しながら、また新たな疑問を見つけた剣道家ちゃん。それにはお風呂場から帰ってきたやみちゃん…… 蜜柑ちゃんが「あの、その、憶測でしかないんですけどお」と言いながら電子生徒手帳を操作する。

「元旦って…… 日向さんの誕生日ではないでしょうか……」

「は？ た、確かにそうだけだな…… まさかそんなわけないだろう……」

「で、でもお、他の日付は皆さんの誕生日ではありませんし、そもそも同じ日付が続いたり…… これだけに印がついているとしたら思い当たるのは日向さんの誕生日だけ、ですう」

「そっか、なら…… 同じ日付が3回もあるし、元々はカレンダーが1つしかなかったんじゃないかな。きつと皆の誕生日に印をつけてたんだと思う…… そのときまでは、自分が死ぬとは思ってなかったんじゃないかな……」

「ちよ、そんな悲しいこと言わないでくださいっすー！」

七海ちゃんがそう言つてキョロキョロと辺りを見回す。

「モノミ、大量に出たゴミってどうなるの？」

「あちしが定期的に収集してまちゆけど…… カレンダーの、それも大量のゴミなんて収集してまちえんよ？」

「！…… モノミさあん、部屋の中ならポイ捨て禁止には当たりませんよねえ？」

「そ、そうでちゆねえ…… 自然を汚さないためのポイ捨て禁止なので部屋の中なら適用されまちえん。ゴミ箱にゴミを捨てようとして落として警報なんて笑えまちえんからね……」

「なら、まだこの部屋にカレンダーの残りがあつてことですよねえ……？」

「へ？ え、えつとそこまでは……」

モノミが困惑しているものの、そのままの勢いで蜜柑ちゃんは入り口に呼びかける。

「終里さあん、少しいいですかあ？」

「あ？ なんだよ、オレがいてもなんもできねーぞ」

「終里さんじゃないとできないことですよ」

この時点で私はなるほど、と察した。

「この暗号にはペンキが使われてますう…… 終里さん、 ” 路地裏のラクガキみたいな匂い ” はこの部屋の中でありますかあ？」

「んー、ちよつと待て……」

それから、換気の効いた入り口から離れ、褐色ちゃんが部屋の中で探し回り始める。

やっぱり一番匂いにするのは暗号なのか、首を傾げながら床に這い蹲り、鼻を近づけている。活発な犬みたいだなあと思いながら見ていると、彼女の頭がベッドの淵にゴツン。

「やっぱダメだな。この辺しかしないし、窓にあるやつだけじゃねーか？」

でもそれが蜜柑ちゃんへのヒントとなつたみたいだった。

「それだけ分ければ十分ですよ」

言つて同じように這い蹲り、ベッドの下へ手を伸ばす。

出て来たのはロケットパンチマーケットの大きな袋と、ペンキの缶。確かに部屋の中にあつたみたいだ。

「ほ、ほらあ…… こっちのカレンダーにも誕生日に花丸がついてますう…… カレンダー1個分ですから、やっぱり元々死ぬ気はなかったのかもしれないねえ」

「本当に誕生日だったのか……」

まあ、それでも暗号に花丸つきのカレンダーを使用した意味は分からないけどさ。

「そういえばさつき罪木さんが飛ばした本つてあるかな……？」

王女様たちが読み終わった本を整理していた七海ちゃんが言う。

「あ、す、すみませえん！ 忘れていました…… これですう」

「あれ……？」

疑問符をあげる2人をおいて、私はふと気になっていた棚の裏を覗いてみた。私なりに捜査しようと思つてね。

「これ、3冊のうちこの2冊は付箋がないよね……？」

「本当か！」

そっか、付箋があればそこに重要な部分があると思ひ込んじゃうよね。それを利用して凧ちゃんや木を隠すなら森の中つてことにしたんだ。

そつと見つけた黒い手帳を確認して懐に隠す。いくら透明でも道具を持つことはできるから、そのまま誰にも見つけられないように持つておくことにした。

「ソニア、左右田、読んで見てもらえるか？」

「……！ それは意味が分かると怖い話じゃないですか！ わたくしが読めます！ わたくしが読みたいです！」

「ならオレは化学の教科書のほうですね……」

となつたみたいだけど、読み始めてすぐに王女様が顔をあげた。

「左右田さん、ちよつと見せてもらつていいですか？」

パラパラとページを捲つてとあるページになつたところで止まり、窓と交互に見比べている。

「やっぱりそうです！ さすが粕枝さん、わたくしと趣味がマッチングしていますね！」

「あれ、もしかして解けたのか……？」

得意気に瞳をキラキラさせて王女様が近くのメモ帳を引っ掴む。

そして「整いました！」とドヤ顔を披露した。使う場面が違うんじゃないかな？ という疑問はきつと無粋なんだろうね。

「まずはこれを見てください！」

王女様が最初に出したのは化学の教科書。そのページに書かれていたのは簡略化された元素記号の表だった。赤いペンで縦の欄に8と9が追加されている。更にアクチノイド、ランタノイドの部分が最

初の文字である「ア」と「ラ」に赤い丸印。

なにかあると言っているようなものだよね。

「それからこちらでもですー!」

と言つて意味がわかると怖い話の目次を確認、ページを捲つてこちらに見せて来た。

それは認知症だった亡き母親の書齋に入ったとき感じた違和感について、そしてプレゼントしたはずのカレンダーがハサミでバラバラにされた切れ端が順序良く並んでいる光景があったという話。

そしてその切れ端の内、6/17だけが逆さまになつていたということ。これから5年ぶりに会う父の手料理を食べる…… という話らしい。

話の中に出て来た暗号は 「4/4 4/4 4/10 6/11
3/1 6/12 5/6 7/2 6/7 6/17 (逆さ)
4/10 4/14 5/16」 だ。

「カレンダー…… 凧ちゃんの暗号と一緒だね」

ポツリと写真家ちゃんが言う。

「これは意味がわかると怖い話というより、どちらかという謎解きに近いお話ですね。たまにヒントのように、母は理系の頭がいい人だった。〃のような文章が付け足されていることもありませう。答えは日付と同じように元素記号を〃周期/族〃として置き換えることでできるのです。6/17は逆さまですから、AtからtAとなり、このお話の答えは……」

—— T i T i N i A u N a H g M o R a R e
A t N i G e T e

「〃 父に会うな、水銀盛られた逃げて」となります。このお話の中で認知症で死んだとされる母は本当はボケてなかつたのではないのでしょうか？ また、これから父の手料理を食べるといふ主人公はどうなるのでしょうか？ そんな怖いお話なんです。前に…… 確か粕枝さんも図書館で読んでいたと思いますよ」

ごくり、と誰かが喉を鳴らした。

「つまり、粕枝の遺したのは……」

素早かったのは蜜柑ちゃんだ。

深刻な顔で話していた王女様からラクガキ入りの教科書を奪い取り、彼女の部屋にあつたメモ帳に解読した文字を入れていく。

できた言葉は、皆にとつてはよく分からないだろう言葉。

そして、蜜柑ちゃんや私にとつてはとても身近で実感できる言葉だった。

— K O N O S E K A I H A Y U W
E N O N a K A

「Wが逆さなら、Mですよねえ…… なら答えは、 ” このせいかいはゆめのなか ” …… ですう」

《コトダマ 狛枝の遺言》

「こ、これって……?」

「ゆ、夢……? どういうことなの……?」

” この世界は夢の中 ”

その言葉が皆に浸透したとき、それは来た。

「は、はわわわ! モノケモノ襲来でちゅ! ミナサン! 逃げてくだちやあああい!」

ピカツと、フラツシユのようなものが焚かれたような錯覚を覚える。

入り口を見ると、そこにはモノケモノ…… ウマケモノとヒトケモノが立ち塞がっていた。

「はあ!」

「な、なんでだよ! おい、モノクマア!」

逃げ惑う皆から、なんとなく目を離さずにいると、モノミが魔法を発動させるときのように一瞬だけブレているような気がした。

だけれど、それもすぐに直ったし、本人も周りも気づいていない。気づいているのは恐らく、私だけ。

この様子じゃ皆バラバラにされてしまうし、ついて行ってもメリツトはない。

……
……
……

起きた私にまず知らされたのは、ゼロとイチになって消えたはずの彼女のデータがどこにも見当たらないこと。

それを修復して待機状態にすれば意識を取り戻す可能性がグンと上がったはずなのだからか。

だというのに、どこにも見つからない。

「ご、ごめんねえ。今アルターエゴと一緒に隅々まで搜索してるから……」

「あなたは焦らないで、自分のやれることをしてちょうだい」

「おい、この島にいることはまだ嗅ぎつけられていないな？」

「うん、まだ多方面で陽動してる皆がいるから大丈夫だと思うよ」

メイドさんは1時期ものすごい取り乱し様でうそちゃんやんが鎮静剤まで使って取り押さえていたみたい。今は頭を冷やすとかで外に行っているらしい。

ちーくんこと、 “超高校級のプログラマー” “不二咲千尋君は目の前のモニターとキーボードを何台も使って元凶のウイルスが力を持つことを防いでいる。”

さらにその作業をしながら凧ちゃんの居場所を探しているからか押され気味みたい。けれど、この攻防は彼にしかできないことなので私たちは見守ることしかできないんだよね。

偉そうに 「見つかっていないか」なんて臆病なこと言ってるのは痩せてる方の十神白夜。モニターの中で死んでしまった十神君は詐欺師だから彼の姿を借りていたわけだけれど、今までのことを見るに偽物の方がよほど “超高校級の御曹司” “らしい行動をしていた。”

そんなんだからクラスメイトにかませ眼鏡なんて言われるんだよ。

他のクラスメイトと連絡を取りながら十神君に言ったのが “ 超
高校級の幸運 ” 苗木誠君。

幸運といっても凧ちゃんみたいな本物の特殊能力じみた才能じゃ
なくて、彼は本当に抽選で選ばれただけ。でもその諦めの悪さと気味
の悪い程の前向きさで今では全世界から “ 超高校級の希望 ” だ
なんて持て囃されている。

まあ、モノクマの中の人…… “ 超高校級の絶望 ” 江ノ島盾子
を破ったのが未だ彼一人だからということもあるけれど。

そんな彼らは皆凧ちゃんの1学年下の後輩たちだ。
要するに、超高校級の絶望と同級生だった人たちだね。

「まだ探していない場所、もしくは怪しい場所はないのかしら？」

「あ、あるよお…… でも、普通はすぐ開くのに、鍵が意図的にかけら
れてるみたいで、パスワードがないとダメになってるんだあ」

「え？ ちーくんなら簡単にパスワード特定くらい……」

「そ、それが…… 向こうも全力を挙げてるのか…… 桁も多いし、5
秒ごとにパスワードが変更されていくんだよお……」

「えっ!？」

これが、絶望。

いつもと違う絶望だけれど、こんなのもあるんだ。でも、こういう
絶望は嫌だなあ。

ちよつと前まで江ノ島ちゃんの絶望に共感できるかな? と思って
たけど、やっぱり私には無理かもしれないね。

「普通のジャバウォック島には干渉できるけど、狛枝さんの方は……
江ノ島さんのアルターエゴをどうにかしない限り、難しいと思う
…… 初めから中にいるか、中から壊さない限りどうにもならない
よお」

泣きそうな彼を落ち着かせ、私ももう1度ダイブを試みることにす
る。

寝すぎで寝れそうにもないが、睡眠薬を飲めば……

「なんで止めるのかな、霧切ちゃん？」

「目の前で自殺されるのは嫌よ」

「自殺するつもりはないよ。まったく、”超高校級の探偵”さんは心配症なの？」

「それでも、それ以上睡眠薬を飲んだらいけないわ。心配なのは分かるけれど、それで焦って行動してもなにも……」

その言葉で、黒い感情が心の奥底から湧き上がってくるのを感じた。

まるで、深海の底に沈めたものが無理矢理登ってくるような不快感。それを吐き出すように、目の前の子に吐き捨てる。

「……そんなの、君らが誰も死んでないから言えることなんだよ……」

「……ごめんなさい。でも、無理はしないでほしいの」

「……私も頭冷やしてくるよ」

ギスギスした雰囲気の中、いつものようにヘラヘラできるわけもなく、席を立つ。

ああ、私も人並みに怒るなんてこと、あつたんだなあなんて他人事のように思いながら…… 荒廃したジャバウォック島を肴に一杯おっ始めることにした。

「おっと、先客かな？」

「……なにしに来たんですか？」

海でも見ながらと思つて来たけれど、同じことを考える人もいたもんだ。

メイド服が汚れることも構わずに座り込み、海を眺めながらメイドちゃんは遠くを見ている。どうやら泣くまいとしているみたいで、目を見開いたまま瞬きもせず、充血で赤くなった目をもつと真っ赤にしていた。

泣かせてやろうか、なんて思つて酒瓶を片手で上げ、なんとなく持ってきた2つのお猪口を取り出した。

「ヤケ酒でも付き合うよ？ 明海ちゃん」

「……………」

黙つてお猪口を取る姿には、普段の礼儀正しさのカケラも見当たらない。気配りもできないくらいに憔悴しきっている。

お酒の付き合いを断らなかつたのが精一杯の気配りだろう。

「……」

「……」

しばらく黙って海を見ながら飲み、チラリと横を見ると彼女が顔を真っ赤にしながら、それでも泣くまいと堪えているのが分かった。

「明海ちゃんも酔うんだね。私初めて見たかも」

「…… め、メイドたる者、自分の酔いくらいコントロールできなくてどうするのよ。主人が酔ってないのに私が酔っていたのでは意味がないじゃない」

「メイドってそういうものなんだ？」

「…… 違うわ。私がそうしたいだけ」

「そっか」

今酔っているということは、それだけ気を緩めてくれている。弱みを見せる気があるってことだよな。なんとなく役得かも。

「明海ちゃん、泣きたいなら泣いたほうがいいんじゃない？」

「嫌よ」

即答だった。

「なんで？ そのほうがすっきりすると思うけど」

「あ、あの子は、搜索のためとはいえ、私がしたことですごく傷ついたのよ？ だから、私が、絶望して涙するわけには、いかないのよ……」

！ 私が絶望して泣くってことは、あの子が助からないって思うのと同じことだわ。だから私は、絶望に屈することはできないの。もう2度と、あの子を、裏切りたくないのよ！」

悲しみの涙は否定する、か。

「なら、凧ちゃんが帰ってきたときにいっぱい泣いてあげよっか。希望の涙をね」

「…… 拒絶、されないかしら」

「大丈夫だよ、凧ちゃんは」

「そう……」

凧ちゃんも明海ちゃんも血が繋がってないとはいえ、やっぱり姉妹だね。

「……っ」

「……」
だってほら、こんなにも強がりさんなんだからさ。

いつかの信頼関係

「え……？なんでキミがここに……？？」

マスカットタワーの入り口に立っていたのは……待ち望んでいた罪木ちゃんではなく、きちんとした服装に眼鏡、見覚えのある巨体。

—— 要するに、十神くんがそこにいた。

「お前、なにを企んでいる？ そんな武器まで持って、こんな呼び出し状まで用意して、なにをしているんだ」

詰問するような言い方で、こちらにやって来る彼。

思わず一步下がるが、キツと睨みつける。

軽く時間を確認してみると、あとほんの少しでモノミに頼んだ妨害が始まる。なら、私がやることは……

「…… なにを、企んでるかっつて？」

走り出し、彼に肉迫。時間はゼロに。

凍った血液が入った鉄パイプを喉元に突きつけてから、腕を下ろした。包帯をつけていないのでかなり冷たく、鉄パイプが手のひらに張り付いているのが分かる。これを剥がそうとすれば皮も一緒に剥がれてしまうだろう。

10分もしたら手元の氷も結構溶けてしまいそうだし、私には手身近に済ませてしまうか、それとも諦めるかの2択しかないのだ。

「…… 俺を殺すのではなかったのか？」

「…… はあ」

せつかく、せつかく計画したことなのになあ。

他の人なら逃げてくれるだろうし、ともかくとして彼にバレてしまったら諦めるしかないじゃないか。

…… 元々は、この世界の秘密を知っている人間が死ぬことで皆を4章のこのドッキリハウスから解放するのが目的だったのだけれど。だから、罪木ちゃんに全てを話して、最初の目撃者になってもらっつて自殺でもしてやろうと思ってたんだけどね。

既に目撃者があるならば、私の死体を発見した人数によって混乱をさせて学級裁判もかき乱せるっていう思惑だったんだけどね。

まあ、今日はその相談をするために呼び出したのだけれど、いざというときのために凶器も状況も用意しておいたのにさ、台無しだよね。

でも、時間がないからもう十神くんでもいいか。

どうせ彼には止められるだろうけど。

「時間が10分しかないから手身近に言うけど、これは私の独り言だからキミは気にしないでよ」

彼の正面に立ち、見上げるようにしながら前置きをする。

せっかくモノミを言いくるめて10分間モノクマに感知されない時間ができたのに、こんな形で邪魔されるなんてね…… まったくツイてないよ。

「……」

色々疑問はあるだろうけれど、一応黙って聞いてくれるようなので遠慮はしないよ。

「私考えたんだよね、この島って本当に現実なのかな？ つて」

そんなこと、普通は思い浮かばないことだけれど。

「教室が映画のセットみたいに開いて突然南の島に？ 飛行機にはエンジンも積んでない？ 動くヌイグルミに鶏を牛に変える魔法？ パンフレットには書いてないのに島には橋がかかっているし、そもそも天気が崩れたのはモノクマが出てきた最初の日だけ…… 他にも色々違和感はあるけれど、1番は観光地だったはずのここに人が全くいないわりに物資だけは豊富ってところ。これ、どう考えてもおかしいよね」

本当の1番は、自分自身の記憶が頼りなのだけれど。

「だからね、私はある結論に達したんだよ」

「…… 言ってみろ」

「うん、私は気づいちゃったんだよね。 ” この世界は夢の中 ” だってことにさ」

「夢だと…… !?」

思わず声をあげる彼に 「そうだよね、驚くよね」 と頷いて笑う。

「私だって、最初は私も信じきれなかったんだよ…… 推測でしかない

いしね。でもさ、もうそうとしか考えられないんだよ。集団にどうやって同じ夢を見せてるのかは分からない。今までもそう思ってたけど、別に現状維持でもいいかなって思ってた。けど、今回の動機は死ぬか殺すかの2択だった……前に、キミも見たんでしょう？ 私の日記にはたくさんの死ぬ夢が書いてあったこと……だから、賭けに出てみようかなって」

「待て、俺はお前の日記を拾っただけで内容は手紙の照合にしか使っていないはずだが？」

ああなんて、白々しい。

それを言うのなら、私も白々しいことこの上ないが。

「まだ誤魔化すつもり？ パーティのとき、予告状を書いて日向クンに送ったのはキミだって私は分かってるんだよ……ねえ、そうでしょ。超高校級の、”詐欺師”さん？」

「……なぜ、知っている」

「あれ、今度は誤魔化さないんだ？ 案外潔いんだね詐欺師って」

刺々しい言い方をして、挑発しながら彼を睨め上げる。

「私は幸運なんだよ」

「そんなものは知っている」

「あはは、私の才能を信頼してくれてるなんて嬉しいなあ」

挑発は続ける。

「ファイナルデッドルームとかいうふざけた部屋で、脱出ゲームと実弾入りロシアンルーレットをクリアしたら、とーってもいいものが入ったんだよ」

そう言っつて懐のファイルを彼に見せびらかした。

「これはどうやら希望ヶ峰学園の生徒について書かれたプロフィールみたいなものらしいんだよね。でも、おかしいよね？ ここには超高校級の御曹司十神白夜なんて人は書いてないんだ。代わりにあったのは名前も容姿も分からない超高校級の詐欺師だけ……日向クンが予備学科っていうことも分かったけれど、これって重要だよね。キミ、彼を騙してたんでしょ？」

「10分しかないんだったな？ なら言うが……」

おっと、それは信じてくれるんだ。まったく律儀な人だね。

「ああ、最初はそのつもりだったさ。日向を殺すつもりもあつた……だがお前に計画を乗っ取られて、花村の話を聞いて以来はそのつもりはなくなつたんだ。……この島を出ても、俺には居場所などないからな。人殺しをしてまで、”生きる”理由がお前たちのようにはないんだよ」

蹴落としてまで生きる理由……存在そのものが嘘でできた彼にとつては花村クンの”帰りたい理由”は衝撃的だったんだろうね。

「そっか」

「深くは訊かないんだな」

「まあ、時間もないしね」

もっと怒るかと思つていたけれど、案外心が広がつたな。いや、元々の印象通りの心の広さだったのだけれど、日向クンと予告状のことで私が疑心暗鬼になつていただけだ。

原作知識があつたからこそ起こつた思い込み、先入観。彼はそんなことをしないはずだと思つていて勝手に私が裏切られた気分になつていただけだ。彼はなにも悪くない。

むしろ、そのほうが詐欺師らしいくらいだというのに。

彼は自分に名前もなにもなく、他人に成り替わることしかできない詐欺師という才能だけで生きてきたはずだ。だからこそ自分の才能を私や、狛枝凪斗のように嫌つていると思つていたのだが、思つていたより適応していたみたいだ。

原作の彼が詐欺師らしくなかつたというのもあるけれど……

「ごめんね、キミのこと勘違いしてたみたいだ」

「それは俺も……と言えるな。それで、お前はなにをしようとしていた？この世界の秘密を推測して、なにを考えた？」

「分かつてるくせに、意地悪な人だよ……うん、もちろん死のうと思つてた」

「……ほう」

十神クンの……いや、詐欺師クンの目が細められた。

まるで見定められるような目線に居心地悪く目を逸らす。

「きつかけはあの、絶望病だよ。あれで私は死にたいと思つてた……殺りたいと思つてしまった……病気が治つてもそう思つたことは取り返せない。でも、別に絶望病に踊らされたわけじゃない。モノクマの思い通りになんてならない。私は私なりの戦い方をしたいと思えたんだよ」

「ここが夢の世界でなかったらどうする？ お前は、本当に死ぬことになるぞ」

「大丈夫、確信してるんだ。ここは夢だよ。キミは見たんでしよう？

私の、 “ 死 ” に塗れた日記をさ…… 刺殺首吊り電気殺薬殺みじん切りに奇妙な死…… 全部全部私の体験だよ。現実でも死にそうになつてたこともある……」

一拍置いて、深呼吸。

「本当の意味での死んだことも…… 記憶にある」
「なに？」

「前世の記憶なんて…… とても荒唐無稽だし格好いいものじゃないけれど…… 私は私が死んだあのと時から死ぬことがとつともなく怖かつたんだ。だ、だからずっと見ないフリをしてきた…… けど、もういやなんだよ。私が見ないフリして、どうせ助からないんだからつて放置して、それで大切な人が死ぬのはもう嫌なんだよ！ もう諦めたく…… ないんだよ！ 諦めて人の死を仕方ないで片付けたくないんだ！」

気づけば彼の胸元を掴み、縋り付いて私は泣いていた。

「キミらのせいだよ…… キミらといるのがあまりにも楽しすぎて、幸せすぎたのがいけないんだよ…… 今まで通り知らぬ存ぜぬで過ごしてれば楽だったのに、なのに、なのにつ今は死ぬほど苦しいんだよ！ 皆が死んじやつたらなんて考えたくない！ だからつ、だから夢で死ぬのに慣れてる私がやるんだ！ やらなくちゃいけないんだ！ タイムアップで皆が死ぬなんて絶対に嫌だ！ 全滅して、それで万が一夢だつて気づいていた私が生き残つたとしても全然嬉しくない！ そんなの、認めない！」

「……」

たどえこれがフィクションだと思っていた世界でも！

それでもこうして生きていることには変わらない。知らなかった一面、知らなかった表情、皆の感情。その中で、たとえばどんな事情があつたとしても私は生きることができた。触れることができた。

もう、私は戻れなくなってしまった。

死にたくない死にたくない……でも、死んで欲しくもない！そんな欲張りな感情が狂ったように涙を押し上げた。

「だからやってやるんだよ！あのクソクマに目にも見せてやるんだよ！絶対に私は諦めないって！……でも、キミに計画がバレちゃったから、もうこれは使えないかな……それとも、見逃してくれる？キミは私が自殺したってことを話さないだけでいい。上手くやるから、キミに疑いはかけさせない……だから」

「お前の話を……信じてやろう」

「は？」

なに、言ってるんだこの人。

「俺は自分というものがなかった。だから他人に成りすまし、生きる術しかなかったが……才能に逆らっているキミを見るとどうも、ね」

「え？ え？ 十神クン、口調が……」

口調が……素に変わっている……？

「これは十神白夜としてじゃないよ。ボクがキミを信じたって思っただんだ。だからさ、狛枝さん。少し耳を貸して欲しいんだ。詐欺師の戯言だとも思ってる」

それから、彼は一気に捲し立てた。

「モノクマを騙して学級裁判を開くなら、やっぱり被害者とクロになつたほうがいい」

最初は自分が被害者になると言ったが、後には残酷なおしおきも待っている。なら、ある程度安らかに眠らせることのできる被害者役になつてもらつたほうが彼の生きる可能性は少しも上がる。

おしおきはクロの誇りをメツタメタに叩きのめし、心を折りにく

る。それを知らない彼にクロになってもらっても、結局苦しい場面を押し付けるだけだし、それを彼が耐えられる保証もないのだ。

だから、彼に被害者になってもらうのは苦肉の索だった。

「もし、裁判で必要になったら…… 予告状のことをバラしていいかな？ 名誉を…… き、傷つけることになるけれど」

「構わん」

そのときだけは、なぜか十神くんモードに戻って断言された。

「あ、あのさ…… 詐欺師くんって名前、ないんだよね……？」

「そうだけど…… 不自由したことはないよ？」

「でもさ、詐欺師くんじゃ呼びづらいし、うさぎくんって呼んじゃダメかな……」

「それがボクを見て、その印象で決めたあだ名なら歓迎するけど、なんで兎なの？」

彼は自分を見てつけられたあだ名なら必ず喜ぶ。

それは西園寺さんの豚足ちゃん呼びを笑顔で許容していたことから分かる。けれど彼に兎っぽい部分はまるでない。

「キミ、モノモノヤシーンで引き当てた」 黒ウサギ読本 “好きでしよ。部屋に積み重なってたよ……」

「えっ!？」

黒ウサギ読本は様々な詐欺の方法が書かれた本だ。

それも、詐欺師相手に詐欺を働くクロサギと呼ばれる方法ばかり載った本だったので、彼は詐欺師の中でもきつと “クロサギ” なんだらうと思ったのだ。

「バレてない皆の前では呼ばないでほしいけど、いいよ」

「そうだよね、だめだよね…… え!？」

「だから、いいよ」

「あ、ありがとううさぎくん！」

これから死ぬというのに、クロと被害者になるというのに、懐で鳴ったのは希望を告げる音で2人ともびっくりしたものだ。

「暑い…… ね」

「仕込みは上々…… さて、覚悟はいい？」

薬を用意して、鉄パイプを転がし、その場で削ったものの大分溶けてしまった杭を両手で持つ。

クロロホルムは乾いてきているが、気分を悪くさせる程度のことには使えた。

そして10分前と同じ位置に戻り、3、2、1……

「……ごめんね」

「なっ」

謝る私に、驚いたように構える十神クンの背後に周ってひと突き。

「あああああっ！」

クロロホルムで多少体調を悪くしているだろう彼の背中に心臓に向かって突き入れる。

グリグリと手を回して傷口を抉ってみるが、うまく貫けず苦しげな声が聞こえてくる。

「っく」

そこで背中向きに倒れて来た彼に驚いたフリをしながらさらに押し込む。そこで杭がやつと突き抜けたが、中で折れてしまったように抜くこともできず、溶けて鋭くなった氷が私自身をも突き刺してしま

う。
焦って動こうとするけれどなにもできず、気絶もなかなかできなかつた私は暑さで喉が渴いて、自由な方の手で喉を掻き切らんばかりに糞った。

「っは……う、く……」

苦しい、苦しい、でも、彼はもつと苦しい。

私がこんな弱気になつてちゃだめだ。生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや、生きなきや……

喉が渴いてお腹も空いて暑くて頭がどうにかなりそうでそれでも耐えて耐えて耐えて耐えて耐えて耐えて耐えて耐えて……

……私の意識は、そこで途切れた。

……

……

……

「……きて……… さあん………」

私が目を覚ますと、そこは砂浜だった。

青い空、白い雲、目の前には、私を心配気に覗き込む罪木ちゃん。よく見ると、周りの皆もやつと起きたか…… みたいな反応をしている。

「あ、れ……？」

「良かったあ…… 突然倒れて心配していたんですよ。これで全員揃いましたねえ」

周りにいるのは罪木ちゃん、小泉さん、澤田さん、西園寺さん、辺古山さん、ソニアさん、終里さん、花村くん、十神くん、九頭龍くん、田中くん、式大くん、左右田くん…… 2人足りないけれど。

「あれ、七海さんは？ それに、日向くんも……」
私がそう言うと、目の前の罪木ちゃんは目を丸くして首を傾げる。

「え？ 誰ですかあ、それ。ここにいる14人で全員じゃないですかあ。ほら、モノクマさんもホテルで待っているらしいですし、早く行きましょう？」

「…… え？ モノクマ？ どういうこと？ 待って、待ってよ！」
頭の中がうまく纏まらない。

この子はなにを言っているんだ？ だって七海さんは…… 七海さんは……… あれ、七海さんって…… 誰、だっけ……？

日向くんも……… あ、あれ？ なんで、なんでなんにも思い浮かばないんだ？ どうしてだ？ あれ？ そもそもなんでそんな名前が出てきたんだっけ……？ おかしい…… な。頭がぼんやりする……

「なに言ってるんですかあ。ここはジャバウオック島で、ここにいる14人は希望ヶ峰学園の計らいでこうして修学旅行に来てるんじゃない

ないですかあ。モノクマさんはその引率の先生だって言ってますよねえ…… お話、忘れちゃいましたあ？ うーん、暑さで弱ってしまっているんですねえ…… 早めに涼しい場所に行ってお休みしましょうかあ」

暑さで…… そつか、暑さで記憶が飛んじやってるのかな。

これも落ち着いたら治るかな…… でも、なんでだろう。なんで、こんなにも、不安になるのだろう。どうして、恐怖を覚えているんだろう…… けれど、優しく看病する彼女の手が私の髪を梳く度心地よさに微睡んで行く。

「おい、大丈夫か？」

「う、うん……」

“ 怯えもせず ” 肩を貸してくれる左右田クンに僅かな違和感を感じながら皆でホテルを目指す。

その後ろで、罪木ちゃんは安心したように笑っていた。

「うふふふふふふふ」

「うふふ」

「うふふふふふふふー」

「うふふふ」

ぼうつとした頭にはなにも入ってこない。

「うふふふふふ」

私の周りの皆が “ 全員 ” そうやって笑っているのを、とうとう私は気づくことができなかつた。

「ようこそ、楽園へ」

これが私の望んだ楽園、だったっけ。私の渴望した未来、なんだっただっけ…… こんな結末を望んでいたんだっただっけ？ そうだっただっけ、分からないや。もう、分からないや。教えて、誰か。

「ごめんなさい……たす、けて………日向、クン」

——
その言葉は誰にも届くことはなく、押し潰されて……消えて
いった。

l H e a v e n i n t h e t r a s h b o
x 1

『屑入れの中の天獄』

「それじゃあオマエラ！ 今日のノルマは夜までにお魚40匹だからね！ お昼にはチャンドラビーチでスイカ割りもするから集合するように！ 夜にはバーベキューしながら花火大会を開催するし、その後にはな、なんとワックワクのドツキドキ肝試しがあります！ だからオマエラ、振るってご参加くださいね！」

ホテルではなんだかとてもまともそうなことをモノクマが言って、それぞれが仕事に行くことになった。

今までもずっとそうしてきたのだと皆は言うのだけれど、残念ながら私にその記憶はない。

「じゃあ粕枝はいつも通り釣りだな！」

「オレらはチャンドラビーチの方でバンバン獲ってくるから安心しろよなー！」

終里さんや式大クンのような武闘派はモリを片手に第2の島へと駆けていく。

どうやら私は本当に釣りをするしかないみたいだ。少し不安だが、この不安もきつと直に薄れていくだろう。

「粕枝さんは疲れているみたいですし、今日は涼しい木陰で一緒に川釣りでもしましょうかあ？」

「うん、なんだか混乱してるみたいだからそうしてもらえると助かるかな……」

彼女に向かって笑いかけようとするのだが、なぜかうまくいかない。うまく笑えない。失礼だろうかと考えて頑張つて笑おうとするのだが、表情筋がどうにもストライキしたかのように動かない。

「ご、めん…… なんか、不安で…… うまく笑えないや……」

「大丈夫ですよお。私がちやんと見ていてあげますからあ」

ぼふり、と頭を撫でられて俯く。

安心する。そのまま抱きしめてくる彼女に少しだけ恥ずかしい思いをしたが、体からどんだん力が抜けていくように受け入れていった。

その暖かさに身を任せて、今度はうまく微笑むことができた。

だけれど……

胸の奥で、なぜかじくりと痛んだような気がした。

「……俺も山に向かおう」

「あれ、白夜ちゃんは山つすかー？ 珍しいっすね」

「あれ！ いつもはモリ片手に海だけど…… まあいいわ。アタシたちは貝しか集められないし、そっちは頼んだよ！」

山に向かうのは私、罪木ちゃん、十神クン、そして田中クンに山菜収穫のソニアさんだ。

西園寺さんなんかは着物で動きづらいため、小泉さんについてまわって持ちきれなくなった貝の荷物持ちをするらしい。そんなことを彼女がするなんて、小泉さん効果はすごいなあと感心しながら山の方へ向かう。

「鈴をつけておけ。お前にはそれもあるだろうが、念のためだ」

そう言つて十神クンに渡されたのは手首サイズの鈴つきミサンガだ。

そして、首元を指さされてそういえばホイッスルを所持していたのだと思い出した。なぜ、今まで気がつかなかったのだろうか？

なんとなく……今の自分にはホイッスルがないと思っていたのだけれど、そんなことはないはずなのに。

胸元のホイッスルを確認して虫除けスプレー。それから左手首にミサンガを巻いて山道を歩く。鈴が必要なのはクマ対策だろうか？

モノクマだっているのに、なんだかチグハグだ。

……ミサンガに込める願い事はどうしようかな。ま、飾りでくれたんだろうし込めなくてもいいだろうけど。

「……この溪流ならお魚もたくさん釣れそうですよお」

「今日の夕食になるんだ。狙うならヤマメかアユだろうな」

そんな簡単に釣れてたまるか！　と思っていたのだが、2人に教えてもらいながら釣りをしたところ入れ食い状態に。しかも季節感バラバラで動物の森かなにかのようにどんどん釣れていく。

2人のペースは何十分かに一回くらいなので10分そこらで反応がくる私がおかしいんだよね。それも結構いいのばかり。クーラーボックスはすぐにいっぱいになってしまった。

「エサも使い切ったようだし……　そろそろ行くか」

「まさかお昼になる前に終わっちゃうとは思いませんでしたあ。狛枝さんはすごいですねえ」

「そ、そうかな……？」

妙に褒められるのがくすぐったくて頬をかく。

クーラーボックスを1人で持つてくれている十神クンにお礼を言つてホテルまで戻ることにした。

チリーン……

すると、山を降りる途中でやたらと響き渡るように鈴が鳴る。

周りが静かだからかとても存在感があった。先ほどまではまったく気にならなかったのに、私はそれが気になって立ち止まってしま

う。

「どうしたんですかあ？」

「おい、狛枝そこから動け！」

「へっ？　……　あいたあ!？」

「言ったそばからそれか……」

私の頭の上に降ってきたのはまさかのイガグリ！　季節外れなんてもものじゃないが、どうやら収穫できたものが増えたようだ。まったく不運なんだか幸運なんだか分かったものじゃないな。……　これは一体どちらなんだろうね。

「でも、なんでイガグリ？　ここって常夏の島だよな」

「モノクマが言うには、ここは楽園に相応しいなんでも揃う島らしい……　俺も何度か季節外れのものを見つけているから、そんなものなのかもしれないな」

「きつとそんなものですよ……　季節じゃなくてもいろんな果物が

食べられますし、ますます楽園みたいな場所ですねえ。離れるなんてもう考えられませえん」

十神クンは興味ありげに、そして恍惚として言う罪木ちゃんに私はまた違和感を持った。

「え、罪木ちゃんは帰りたくないの?」

とつさに口走ってしまった言葉は取り返せないけれど、私自身、なぜそんなことを言ったのか分からない。

けれど、その言葉が口から出てきてしまったのだ。

「こんな素敵なところで暮らすのって憧れませんかあ?」

憧れは、ある。

けれど、完璧なんてこの世にはあり得ない。なんでも揃う楽園。本当にそうなのか? でも、それを否定するだけの材料も今のところは見当たらない。

「ここには、飛行機で来たのか船で来たのか…… 分からないけれど、事故もなく皆無事にこうしているのを見ると…… 少しいいなあ、とは思うよ」

だって、誰も私のせいで死なないから。

ここでは私は死神でもなく、不幸な幸運でもなく、ただの女子高生として皆と交流できる。誰も死なず、私を置いて行かず、そばにいてくれる…… それってとても喜ばしいことなんじゃないか?

ドロドロに甘い汁を与え続けられるような、地中に埋められてひたすら栄養源を与えられるガチョウのような、そんな危ういけれど、幸せな生活。

もしそれが私によって壊されることがないのなら……

才能なんて気にしないで生きられるようなら……

ここは、確かに楽園と言えるのかもしれない。

「あれ、でも…… 罪木ちゃんは残してきたお姉さんのこととかは、いいのかな?」

その一言で、彼女が一瞬別人になったかのように思えた。

けれど、なにごともしなかったかのように罪木ちゃんは「私は一人っ子ですよお?」と笑顔で言う。

あれ、そうだったっけ。

「そっか」

好きだから、好きだから薬漬けにして、そうして彼女なしで生きられない体に…… そんな不幸な姉は、この世界にはいないのだ。

不幸な人間など、誰一人いないのだ。

だから無理矢理納得するように頭を振る。

「十神クンは？」

「……俺は」

それつきり口を閉ざす彼に首を傾げて追求するも、「いや、なんでもない」とはぐらかされてしまう。

「お前が幸せなら、それでいいだろう」

「……なんのこと？」

相変わらず意味深なことを言う彼だが、追求して答えが出ないのならそのまま答えを示されることは絶対にならない。だから疑問を引っ込めてそのままその背に着いて歩く。

—— エラーが発生しました

「いつ……」

「どうした？」

「なんでも、ない……」

視界がぐるぐる回る。

なにが嘘で、本当だったっけ？ 分かんない。分かんない。分かんないなら、放棄してしまえ。放棄すれば全て楽なんだ。だからそうすればいい。

いつもやっていたように、見て見ぬフリ、聞かないフリ、知らないフリ、そうしていれば楽だから。前とにも変わらぬ自分でいればいいのだ。

「早く、行こうか…… スイカ割りなんていつぶりだろう。楽しみだ

ね」

「そうですねえ」

「……」

十神クンからの視線を感じる。

しかし、私には関係ない。だって気づいていないんだもの。

このまま過ごしていれば幸せなんだから。私を心配してくれる人なんて、誰一人としていないのだから。この島で、私を必要としてくれる人たちの中で生きたい。惰性のようにでも、生きていたい。

「具合が悪いなら、コテージで休みますかあ？」

「ううん、スイカ割り参加したいし…… ちゃんと行く。けど、時間になるまでは休んでようかな……」

——
様

私を必要としてくれる人なんて、きつとどこにも、いないんだから。

甘い甘い、天国のような地獄の中で迷子になってしまった私は抜け出すことができない。だって幸せだから。与えられるだけの幸せに捕まって、抜け出す気も起きないほどドロドロに骨まで浸かって、まるでどこかの同人誌にでもありそうな、堕ちていく光景。

誰かが手を伸ばしていても、今の私はまた振り払ってしまうかもしれない……

私は人殺し。

意図していなくても、人の幸福を奪い去ってしまう死神。

だから、本当は分かっているけど怖かったんだ。

ここがいまだに夢の中だと気づいていても、起きるのが怖かった。嫌われてしまうのではないか。

恨まれてるんじゃないか。

あの子の心が離れているんじゃないか。

仲間が絶望に飲まれて死んでいるんじゃないか。

裁判のときはただの綺麗事で、本当は皆怖かったんじゃないか。

そんなネガティブな思考に飲まれて、揉まれて、混ざり合つて……
その隙間に誰かが楽園の夢を見せている。

分かつていても、抗えない。

いや、違う…… 抗いたくないんだ。

現実を見るのが、とてつもなく怖いだけ。私は、とても臆病だから。

「私とずっと一緒に、いてくれますよねえ？」

十神クンと別れたあと、お昼まで少しだけ休むことにした私は自分のベッドに体を押し付けられていた。

「休むんじゃ、なかつたっけ……」

「添い寝するだけですよお」

私は、抗わない。

そして……

……

……

……

—— 彼女は、向き合うことを放棄しました

「なーんて、素敵なシナリオよね！ 絶望的だわ…… ふふふふ、もつと、もーっと優しくしてあげるわ、セ・ン・パ・イ。そしてそのまま、堕ちていつてね」

その世界を見下ろす誰かがほくそ笑む。

けれど、その誰かは侮っていた。

一体のアバターが自分の手を離れていることを黙認したのは、間違
いだったのだと…… その女は、まだ知らない。

「大丈夫ですよお……」

甘い甘い言葉。

上に乗っかったまま彼女は、その冷たい手のひらを私の額から瞼へ移動させながら撫でる。

ゆっくりと閉じられる瞳に、「ああ、まるで死体の目を瞑らせようとしているみたいだ」という感想を抱いたが抵抗することなく私は目を閉じる。

「ずっとずっとずっと、幸せになりましょう？」

「……」

男女であったなら告白のような言葉。相変わらず手のひらで目を覆われたままだが、その言葉で彼女がとても近くにいるのが分かった。

首筋に吐息がかかり刷り込むように、洗脳でもされているような気分になる。

ただ墮落していく。

でも、それもいいのかもしれない。

だって幸せだから。

「…… まだ帰りたいたいんですかあ？」

「…… え？」

目を覆われたまま、不機嫌そうな彼女の声に困惑の声を漏らすとその手がずらされた。

抑えられていた部分が解放されてするりとなにかが頬を滑り落ちる。

それが涙と気がついたのは、彼女がそれを指で掬い取ってちろりと舐めたときだった。

「うふふ、狛枝さんったら案外子供っぽいんですねえ」

「あ…… ごめん、ごめん。違うんだ…… こんな、違うよ…… 違う……」

「違うって、なにがですかあ？」

お願いだからその顔で、そんなこと言わないで。

否定したくない。目を合わせるのが怖い。キミの声をもっと聴いていたいんだ。

「違うんだよ…… 幸せを、拒否したいわけじゃないんだ…… だから、だから……」

お願いだから、捨てないで。

あの人のように、私を捨てないで。大切な誰かに捨てられるなんて経験、またしたくない。たとえキミが彼女じゃなくなっても、誰だっていい。

寂しいのはもう嫌だ。

辛いのももう嫌だ。

置いていかないで。

1人になりたくない。

1人にしないで。

「飽きたりしませんよお…… いなくなったりしませんから、ずっと一緒にいましょうね」

嘘だ。

そんなの分かっているのに、その言葉に囚われる自分がいる。

どうしてこうもこの人は、私が欲しい言葉を的確に言ってしまうのか。ズルい。ズルいよ。これじゃあ、逃げられないじゃないか。

おかしい、これじゃまるで、恋人に捨てられそうな女でしかないじゃないか。

私ってこんなに弱かったっけ。前はそんなことなかったはずなのに。弱みにつけ込まれているから？ それとも私の気持ちまで彼女は分析できたのだろうか。私はこんなにも、臆病者なのか。

「…… つう、く……」

「ほら、泣き止んでください。もうすぐお昼ご飯ですよ？」

結局、泣いてしまって休憩どころではなかった。

江ノ島盾子はこんなことをしてなにをしたいんだ。こんなことをしたところでメリットなんてないはずなのに。いつ、彼女がこのお遊

戯に飽きてしまうかも知れないのに、縋ってしまう。希望を持ってしまおう。求めてしまおう。

飽きっぽい彼女のことだから私のことなんて、いつかは捨てる。分かっているのに、理解しているのに、抜け出せない。希望に見せかけた…… 甘い甘い絶望の沼。底なし沼のように捕らわれたら最期？

最後には、この意識さえ死んでしまうのだろうか。

「目が腫れちやいますよお」

「……」

この意識さえ、殺されてしまうのだろうか。

でも、そんなことはいいんだ。問題は後回し。そもそも私はこの幸せに疑問なんて持つてはいけないんだ。そうすれば楽だから。

—— ホントウに？

ホントウだよ。だって、私はウソが嫌いだから。

自己完結してコテージから出る。

見上げればどこまでも続いていそうな青空と白い太陽…… 私心のとは裏腹に、ムカつくくらい快晴だった。

「よーしよく集まったなあオマエラ！ 今日のお昼は終里さんがウツボを仕留めてきたから蒲焼きだよ！ それに季節のフルーツ！ そうスイカだよスイカ！ 蒲焼き食べながらスイカ割りだあ！」

食事のバランス悪いな……なんて感想を抱きながらウツボを捌いている花村クンの側に寄る。

「花村クン、なにか手伝うことあるかな？」

「え？ うーん、なんなら狛枝さんに元気を分けてもらいたいところだけど…… 今は大丈夫だよ！ お皿も既に出してあるし…… 狛枝さんは皆とスイカ割り楽しんできなよ」

「元気を分けてもらう」というフレーズになにやら意味深なものを感じたけれど、まあ今はいいだろう。しかし、スイカ割り、しないといけないだろうか。

いや、してみたい気持ちはもちろんあるし、あまりやったことがないからやってみたいのだけれど……いい予感はないよね。私だし。

応援と声出し指示だけに留めておこうかな？

「おう左右田、頑張れよー！」

九頭龍クンが爽やかに笑いながら左右田クンの背を叩いている。

どうやらソニアさんにいいところを見せようと名乗り出たらしいが、結果は目に見えているよね。

それと、九頭龍クンが彼の背を叩いて激励しているが、どう見ても背が足りない……おっと、睨まれるからこれ以上考えるのはやめておこう。

スイカはモノクマが用意したブルーシートの上に乗せて置いている。

左右田クンは帽子を目元まで下げたうえで目隠しをし、九頭龍クンに渡されたバットを中心にぐるぐる回る。回るのをやめるタイミングを決めるのは皆なので、しばらく回っていた彼はふらふらとした。

「うっふーんー！」

「うわー、キモいんだけどー！」

……スイカの場合から少し離れた場所ではモノクマが砂に埋まってボンキュッポンの体を自分で作っている。西園寺さんが引いているのは極めて正しい反応だと思う。クマの顔に人型の砂山だから本当に気持ち悪い。

絶望の残党が確か、モノクマの顔だけ被っていたのだったか。それの人間部分が水着を着たナイスバディな女性の身体だと思ってもらえればその気持ち悪さも分かるだろう。

ふと思いついて電子生徒手帳を確認してみれば、その校則にモノクマへの暴力禁止は入っていない。よし、殴ろう。スイカ割りの事故つて言えば問題なんてないよね！

「左右田さん、そこを左ですよー！」

「はいソニアさんー！」

積極的に嘘を吐くソニアさんに首ったけな左右田クンは他にも指
示が飛んでいるというのにまったく耳に入っていない。

そのうちヤシの木に突貫して盛大におでこをぶつけて倒れてし
まった。

「あら……」

責任とって介抱してあげなよ、王女様。

「はわあ！ 左右田さーん！」

……なんて、その前に罪木ちゃんが動くに決まってるか。

「次は誰にする？」

「私がやろうか？」

「ペコちゃんがやったらー発で終わっちゃうっす！」

「わたしは左右田おにいと同じことになると思うけどなー」

チラ、とこちらに向く視線。

ああやればいいんでしょ。せっかく用意したんだから参加しろ
よって思ってるんでしょ？ 分かってるよ。

しょうがないな…… 狙うはモノクマ。え？ スイカ割り？ ど
うせ後で全員で食べるんだから無視無視。

「運が良かったら割れるかもね」

「お、凧ちゃんやるっすか！」

「よーし目隠ししちゃうぞー！」

「あ、花村クンはノーサンキューで」

「ええっ！」

悪寒を感じるので。

自分で前髪を上げ、目隠しをする。白い目隠しだが透けはしない。
完全に勘頼りだが私の運があればなにも問題はいらぬ。

その後の不運がちよっと怖い、この世界なら大事にはならないだ
ろうし。

「よし」

バットでぐるぐる。

目は回るが目標は見失わないように。

「ストロップ！」

細胞、じゃなくって……

「左だぜ！」

「右だよ！」

「いいえ、後ろです！」

うーん、こつちかな…… と自分の勘を頼りに進んでいく。

「ちよちよちよ！ 凧っちゃん指示のないほうに行っちやだめっすよ！」

「うーん」

聞こえないフリー。聞こえないフリー。

「ええっ！ なんでこつち来るの!? う、逃げられない！ 西園寺

さーん！ 先生を助けて！」

「嫌に決まってるじゃーん！」

「うわわっ、わあー!?!」

ボコンツッ！ といい音がした。

うん、やったね。

「なにやりきったみたいな顔してるの!? わざとだよね！ 絶対見えてるでしょ!?!」

「えっ、見えてないに決まってるじゃない」

「絶対嘘だ！」

「やだなあ、私は嘘が嫌いなんだよ？ モノクマ先生は生徒の言葉が信じられないの?」

「ぐぬぬっ」

楽しい。

もちろん悪意はあるけどそれは隠しておく。 「悪意がない」 だなんて言っていないから嘘ではないよね。

「結局スイカ割りは達成できなかったかあ」

「ま、仕方ないね…… で、こちらが割ったスイカでございます」

「用意が良いなあ！」

どこから出したのかさっぱり分からないが、とりあえずモノクマが大皿に乗ったスイカを配り始めた。

私はそれを受け取ってちよつと高いところにあるヤシの下で涼む

ことにする。下は海なので景色も良いし、1人で黄昏るのもなかなか乙だろう。

いつもヤシの木でひどい目に遭うが、砂浜にはそれくらいしか木陰がないのだ。それに、ビーチパラソルは他の女子勢がいることだし今は1人になりたいからこつちのほうが気楽だ。

でも、こんなときに必ず私を誘いに来る人は……………

まあいい。輪に入れようとする…………… えっと、予備学科がいなくて寂しくともなんともないからね。

あー、えっと…………… そうそう、七海さんも、いたら夏の行事に興味津々になったりしたのだろうか。

危ない危ない、2人の名前が本格的に思い出せなくなってきた。あとでなにか書いておかないと思いつき出すことさえできなくなつてしまっそう…………… 特に罪木ちゃんといると記憶が奪われていくようぢよつと怖い。それでも、離れられないんだけどさ。

「うおおりやああああ！」

「甘いぞ終里！ お前さんの力はそんなものかあああ！」

終里さんと忒大クンはどうやらモノクマの提案でビーチバレーを始めた様子。あれ、バレーボール割れたりしないんだろうか…………… 手が当たった部分が完全に歪んでいるのが見えたのだが、モノクマ特製だと割れにくいとか？

…………… 電脳世界にそんなリアルな事情は関係ないか。

「はあ……………」

さらつと塩を振つてからもそもそとスイカをかじる。甘い、甘いなあ。タネはきちんと皿へ。ヘタに種マシンガンなんてやったらポイ捨て禁止に触れてサイレンが島中に鳴り響くことになってしまうから。

そんなことで晒しあげられるのは勘弁だ。

膝を立てて海を眺める。そんなときに、どこかで甲高い音が鳴り響いた気がした。

「……………！」

周りの音が一步遅れて私の耳に入る。

それか私の名前を焦って呼ぶ声だと気がついたときにはもう遅かった。

「っー！」

咄嗟に目を瞑ろうとしたものの無理だった。

目と鼻に激痛。ぶち当たる直前、一瞬だけ見えたのは終里さんが焦る顔だった。夢中になりすぎてコントロールをミスったのかもしれない。

体が傾き、浮遊感。ヤシの木に頭をぶつけるくらいならまだ良かったのだが、残念ながら当たりどころが悪かった。

小高い場所から一直線に海へと落ち、目が開けられない状態のまま水の中に沈む。

「あー、これは鼻血出てるな」なんてどうでもいいことを考える余裕はすぐに消えた。目が開けられないためどちらが上か下か分からず、バランスを取れなくなってもがく。

しかし手が搔くのは水だけで泡が体にまとわりついてまるで引き摺り込むように、幽霊に足を引っ張られているのではないかと錯覚するくらい水中から抜け出すことができない。

パーカーが、スカートが、シャツが、水を吸って私の足を引っ張っている。服を着たまま溺れているうえどちらが地上かも分からず、最悪の状態。

「っ、うぶ」

ボコリ、と口から酸素が抜けていく。

パニックになった私は落ちてすぐに限界を迎えていた。

気泡が私を置いてどこかへ逃げていってしまう。暴れる力も薄れて来たとき、伸ばした手を誰かが掴んだ。

「……！……！……！」

「……」

まさにこれこそが藁にもすがるってやつだろう。

私は必死にその分厚い手を掴んで離さないように力を入れる。

そのうち背に腕が回され、やっと海中から顔が出るのが分かった。

「息はできるか？」

「…… うっ、く………ぐ」

水をかなり飲んでしまったみたいで、返事をしようにもあんまりうまくはいかなかった。

耳も水の膜が張って中々音が通らないが、声からして恐らく助けにくれたのは十神クンだ。

「つげほ…… と、がみ…… グン……」

「自力で出したな？ ならもう大丈夫だろう。念のため罪木に診てもらえよ」

「げほっ、 んぐ……… わがった…… あ、りがと……」

「礼は後でいい。俺ができるのはここまでだ」

水はどうにか吐き出すことができたが、海水で喉が焼けている。すごく喋りにくいし、痛い。目はまだ開けられないし、鼻も血が出ている。たところに海水が入り込んだせいでかなり痛い。これぞ傷口に塩か？ 海水だけだ。

「粕枝さん！ 粕枝さあん！ 早くこちらに！」

…… 辛うじて感触で分かったことといえば、十神クンも服のままだなということくらいかな。本当、この人運動神経いいよね。

太ってるほうが浮きやすいんだっけ？ それにしてもあの巨体で服を着たまま服着て溺れている私を抱えるなんてすごいと思う。

「でも、ありがと」

「…… ふん」

そっぽを向いて 「俺は着替えてくる」と言い残し、去っていく十神クン。

その背中にもう一度 「ありがとうね」と言ってから罪木ちゃんの看病を受けることにした。

「わりい粕枝！ 大丈夫か!？」

「うん、大丈夫、だよ終里さんも、気に…… しないでね」

喋りづらい。

「粕枝よすまん！ わしがボールを止められればよかったんだけどな」

「気にしないでよ、無事だったんだからさ」

軽く2人と会話してからモノクマが出したテントの中で横になる。
少し休んだら、よくなるだろう。

近くにいる罪木ちゃんに見守られながら、急激に体力を失った私は
気絶するように…… 眠りについた。

朝言われたモノクマからのノルマは魚40匹分。

それらは昼前で既にクリアし、夜ご飯用に保存してあったので私は寝ているだけで夜まで過ごしたようだ。起きたときにそう罪木ちゃんと言っていた。

昼の間にあつたはずの自由行動はそのせいでスキップしたことになるが…… どうせ彼女たちと交流してもカケラは手に入らないからやらなくてもいいだろう。

夜になり、採集の際に行く山エリアの麓へ集まる。全員海産物やら山菜やらを用意してきていて、モノクマが用意したバーベキューセツトの準備を始めた。

花村クンもバーベキューに関しては1人で切り盛りするわけにもいかないので皆でワイワイと準備する形になっている。魚の内臓を処理したり、ドリンクを配ったり、サザエやホタテに醤油を垂らしたり…… 様々なことをやっている人たちを横目に私はアニメや漫画なんかでよく見る、ダイレクトに魚を丸焼きにする役を買って出ている。

案外美味しいんだよね、これが。

別の方向では塩焼きにしたり、魚を使った本格的な料理を作っていたり、つぼ焼きにしている貝を終里さんが素手でつまみ食いしていたり、ちよつとしたお祭り状態だ。

でも、やつぱり物足りない…… なにか、足りない……

そんな空虚感を身に染みながら手を動かした。

沢山ある海産物はほとんどが終里さんや十神クンの胃袋に消えていくけれど、たまに調理する役も代わってくれるので食いつぶされることはなかった。

ウニやフグなんて調理しづらいものはちゃんと花村クンが出しているので安心して食べることができる。こういうとき調理師免許持っている人がいると安心感が違うよね。

花火をやってみたりと盛り上がってきたところにモノクマが現れ

た。

さつきまで生の鮭を、あの手でどうやってか食べていたというのに、なにかまだイベントがあったらどうか？

…… そういえば今朝なにか言っていたっけ。

「オマエラー、楽しんでますかー！」

「はいー！」

そこは返事しないでいいところだよ、ソニアさん。

「楽しんでもらえてボクはなによりです！　ところで、先ほど夜時間となりました！　この意味がわかる人いるかな？」

「おお、確か肝試しじゃったか？」

「……」

「どうした終里？」

「なんでもねーよ」

一瞬終里さんの手が止まるが、その後は何事もなかったかのように魚が刺さった串を口元に運んでいく。

確か、彼女はお化けがダメなんだっけ。案外弱いところもあるもんだと思っただけだが、本人は隠しているようだし知らないフリをしておかなくちゃ。

そもそも彼女とはカケラを埋められていないから知らないはずなんだけどね。

「そう！　嬉し恥ずかし肝試しー！」

「なんか趣旨が違くないか？」

「んなもんどーでもいいんだよ！　肝試しですよソニアさん！」

「おお、ジャパニーズホラーですか？　楽しみですね田中さん」

「左右田元気出せよ、な？」

「うっせうっせー！　オメーもリア充だろーが！」

九頭龍クンと左右田クンってあんなに仲よかつたっけ？　なんて疑問に思いつつそういえばそんな話してたなあどやっと思いついた。「お化けなんかはこっちで用意してるからオマエラは存分に楽しんでね！」

お化け……　モノケモノとかじゃないよね？

「というこどでくじ引きねー!」

この場合、くじ引きでなにを引いたら幸運になるんだろう。

順番にくじを引いて行き、全員に配られたタイミングで紙の折ってある部分を開いてみる。そこには赤で7と書かれていた。

女子の赤かと思つたが、よくよく考えてみれば男女別でくじを引いたわけでもないので謎だ。

「まあまあ和一ちゃんは落ち込むことないっすよ!」

「あ、ああ、悪イな滯田。オメーが嫌なわけじゃないからな」

「そんなの分かつてるよ! ただおぼけ相手には頼りないっすと思つたくらいっす!」

「っだー! 正直だなおい!」

…… うん、左右田クンって怖いのもダメだもんね。

「ひゃう!」

「つと、罪木か。すまない」

「だ、大丈夫ですよ」

罪木ちゃんの悲鳴で振り返ると、こちらに来ようとしていた彼女が盛大に転び、十神クンに起こされているところが見えた。

腰に手なんて回しちゃって、案外彼もやるなあ。

気を取り直して、今度は慎重に罪木ちゃんがやってきて 「狛枝さんは何番ですかあ?」 と訊いてきた。

なるほど、一緒がいいのか可愛いなあ。

「7番だよ」

「そうなんですええ!」

パツと顔を明るくした彼女はしかし、自分のくじを見た途端真顔になり、そして取り繕ったように 「ああ、残念ですう」と言った。

「一緒だったらよかつたんですけどお」

「そっか、罪木ちゃんは何番?」

「6番ですう。惜しいですええ」

分かりにくいのが、絶対になにか予想外のことが起きたと見える。

もしやくじ引きになにか細工でもしていたのだろうか。

「おい、7番はお前か? 狛枝」

「あ、十神くん…… うん、そうだよ」

「まあ、見れば分かる」

もう既に他の人は組み終わっているみたいだし。

罪木ちゃんの花村クンのくじを見て露骨に顔を引きつらせている。

2人つきりで花村クンと肝試しとは……なかなか精神的に疲れそう
うだ。

…… 主に下ネタトークのせいで。

「7番目、ということは最後だな」

「そうみたいだね」

食事もそこそこに1番目のソニアさん、田中くんペアが山の中に入っていく。山の上の方にある崖で写真を撮るのが条件のようなので、1組につき結構時間がかかるらしい。30分くらいだろうか。

その間は待っている人たちで飲み食いしながら鉄板の熱を保たせていけばいいらしい。

こちらには十神くんもいるし、暫く鉄板が冷めることはありえないだろうね。

2人が山の中に入ってから15分が経過。

2番目の濔田さん、左右田くんペアが出発した。左右田くんは既に足がガクガクしていて気が進まない様子。それを濔田さんが無理やり腕を引っ張って行ったので悲鳴がドップラー効果で残されていく。ときどき悲鳴が聞こえるからどの辺にいいのか分かって非常に面白い。

この頃になると鉄板の上にあった貝類は食べ尽くされてしまった。ホタテとサザエは美味しく頂いたよ。アワビは競争率が高くて1つしか食べてないけどね。

「じゃ、オレらも行くか」

「ああ、では行ってくる」

ソニアさんたちが出発してから30分。

九頭龍クンと辺古山さんが3番目として山の中へ。

それからほどなくてソニアさんたちが帰ってきた。撮ったという写真は崖上で自撮りしたと思われるものが1枚。星空をバックに

した綺麗な1枚だ。ソニアさんが自撮り風に撮影し、その後ろで田中くんが厨二病ポーズを取っている。撮影係がいたらきつと2人でポーズをとってたんだろうなと分かる仲の良さだ。

「まだ食いたりねーよお」

「ほら行くぞお！ 山の中でトレーニングじゃあー」

食べたばかりでトレーニングして大丈夫だろうか。それと、あの2人早く帰ってきそうだが大丈夫だろうか。

その後更に10分くらい遅れて左右田くんたちが帰ってきた。

どうやら左右田くんがビビっていたのもあるが澤田さんが随分自撮りに拘っていたみたいだ。

澤田さんが遠くにいる左右田くんの頭をかじろうとするような遠近感を利用した写真を作ってきている。正直すごい。

その5分後きっかりに5番目の小泉さん西園寺さんが出発。

九頭龍くんと辺古山さんもこのすぐ後に帰ってきた。左右田くんたちが手こずっていただけでこの2人は時間きっかりだ。

写真は自撮りに慣れていないためか、1人ずつ順番に撮ったみたいで2枚あった。

十神くんが焼きそば焼いて食べ始めたんだけど、もしかして締めに入ってる？

「焼きそばじゃねーか！」

「うおっ、終里!？」

山の中で散々叫んだらしい左右田くんが小腹を埋めているとその横からひよっこりと終里さんが顔を出した。20分くらいしか経って居ないのだけれど、もしかして走ってきたのかな。軽い汗をかいているようだから柔らかいタオルを渡して、後から汗ひとつかかずに帰ってきた式大くんには冷たい飲み物を渡した。

早いなあ。

写真は式大くんの撮ったらしいブレツブレの終里さんだけだ。

恐らく走り込みしながら撮ったんだろうけど、彼女を止める暇もなかったのだろうか。

「お、お手柔らかにお願いしますう……」

「んふふ、ぼくがしつかりリードするからね！ あ、十神くん火の管理よろしくね！ 十神くんが行ったあとは小泉さんたちをお願いしてもらえると嬉しいな！」

「ああ、分かった」

花村クンと約束して十神クンは全ての鉄板を見回りながらときおり魚や山菜に手を出している。もうすぐ大量にあつた食材も無くなってしまうそうだ。

運動してお腹を空かせた終里さんがいるから尚更そうだな。すごい勢いでなくなっていくし。

「そろそろか」

「小泉さんが帰ってきたら行こうか」

火を任せるために少し遅れて帰ってきた小泉さんたちを迎えた。

2人でたくさん写真を撮ってきたみたいだ。さすがの小泉さん。自撮りなのにブレひとつないし2人とも笑顔で写っている。素晴らしいね！ 良いものを見せてもらったよ。

「頼むぞ」

そう彼が言い残して山へ足を踏み入れる。

森のように木々が生い茂っていて足場は良いとは言えないが悪路というほどではない。

30分で行って帰って来れる場所とのことなのでそんなに苦戦することはないだろうなあ、と感想を抱いて前を行く彼に着いて行く。

「あれ、こっち遠回りじゃないの？」

「こっちでいいんだ」

目的の場所へは近道するルートで皆通っているはずだが、彼はあえて遠回りにしようとしている。その意図を測りかねて立ち止まりかけたが、その腕を引っ張られて連れて行かれる。

正直危機感がなさすぎだろうと思うが、彼相手にそんなことが起こるはずがないと安心していているせいか足取りは軽かった。

「罪木ちゃんたちとすれ違えなかったけど……」

「遠回りしているからな」

「そ、そう……」

もしかして、罪木ちゃんを避けている？

そう考えて黙る。なぜ彼がこんなことをするのか、皆目見当もつかない。おぼけ役だろうモノケモノたちも出てこないし、本格的にどこへ向かっているのか分からなくなってきた。

えつと、ちゃんと目的地には向かっている、んだよね……？

「……」

「……」

元々積極的に喋る人ではないとはいえ、これはちよつと気まずいかも……？ いや、これは私が焦ってそう思っているだけか。

相手の意図が読めないと本当に怖いよ。

「あの、十神クン……」

「なんだ？」

返事は、してくれる。気にしすぎだろうか……？

「改めて、お昼は助けてくれてありがとう……」

「ああ、まさか落ちるとはな」

「私だつて落ちるとは思つてなかつたよ……」

からかうような口調にムツとして強く言うが、彼が軽く笑いを漏らしている。効果はないようだ。子供扱いされているようでなんだからなあ。

「目はもう大丈夫か？」

「うん。腫れてたけど瞼を切ったりはしなかったみたい」

「なら、いい。お前も大変だな」

「うん…… 幸運なのはいいんだけどね。あんな感じで怪我することも多いから正直あんまり自分の才能は好きじゃないよ」

自分だけならまだしも、大切な人まで奪う才能なんて…… 大嫌いだ。

「ふん、才能に振り回される…… か」

「……」

「俺の場合、〃生まれつき誰でもなかった〃ことが才能になったんだろう」

「…… え？」

死ぬ前、確かに彼と才能の話をしたけれどそんな深く話はしなかった。それに、ここはモノクマが見せている夢でしかないと思っていたのだが…… それならこんなことを言うものなのか？

「キミ……… 十神、クン………？」

「なにを言っている。俺は俺だろう」

なぜ、キミまでここにいるんだ。

私たちは…… 失敗、してしまったのか？

「粕枝、ここは樂園だ」

「う、うん…… そうかもしれない。実際、ちよつと心惹かれてるくらいだし……」

彼がこの世界を受け入れている？

それがシヨックで、侵食が進んでいく。私も染まれば楽になれるだろうか、ドロドロとしたなにかが身体中を這いずり回るような気持ち悪さを感じながら自身を抱きしめるように俯く。

けれど、彼はなにも変わらず私の前を歩いている。

「だが、本当にそう思っているのか？」

「え………？」

やつと崖上に辿り着いたが、彼は手元でカメラを弄びながらこちらを向く。その顔はとても真剣だった。

「この平穏はお前が幼少期過ごした病院となにも変わりはない。そうじゃないのか？」

いつか破綻する。

いつか壊れてしまうことが分かっている。そんな偽りの樂園。確かに、少しばかり似ているのかもしれない。

「十神クン………？」

でも……

「お前が渴望したという未来はこんなものか？ そうだというなら…… 俺は失望したぞ」

その前にさ、なんでキミが……

「……」

なぜキミが私の育った病院の環境を、知っているの……？

「キミは、誰？」

「……」今「の俺は十神白夜だが、俺に真の姿なんてない。名前もない。姿もない。ましてやお前でもない俺は誰でもないだろう？」

まさか、そんなはずはない。

だって彼はあのおとき確かに……

「私が、渴望した…… 未来」

そこには、キミもいた。

キミもいたはずなんだよ。でも、それは無理だと思っていた。

だってキミは。

「俺の最初の記憶はどこかの汚い路地裏だった…… そこから、誰かに成ってずっと生きてきた…… だから、それ以前の俺は死んだ。それでいい」

そうか、だからキミは…… 罪木ちゃんの取った「くじ」を自分のと交換したのか。こうやって私が私でなくなってしまいう前に、話をしたかったんだ。

「キミが本当に取ったくじは6番だったのかな？」

「よく、気がついたな」

「ここまで言われれば嫌でも分かるよ。罪木ちゃんとぶつかったときか…… あるいは助け起こしたときかな？ 彼女からスるだなんて随分と「悪い」ことをするんだね」

「そこまで分かっているのならいい。お前は選ぶべきだよ。どうしたいのか、答えを出さなければいけない」

崖の近くで、星空をバックにした彼からぐん、と腕を引っ張られるが、バランスを崩すくらいですぐにその手は離されてしまった。

しかし、彼はおかまいなしに崖下へ背中を預けるように沈んでいく。

「粕枝さあん！」

草をかき分け、慌ててやって来たらしい罪木ちゃんが必要な顔をして私の背後から腕を伸ばす。

伸ばされた、2本の腕。

「そっか」

もう、選択しないといけないんだね。

私が…… 私が選ぶべきなのは…… 一瞬の、迷い。
そのとき、崖の向こうから甲高い……

—— ホイツスルの音が、聞こえた気がした。

「私はっ」

腕を伸ばす。

今度こそ振り払わないようにしっかりと。

「拐杖さあん、どうして！」

「ねえ、キミはもしかして…… かい……」

「……もう言えないだろうから、言っておく。 ” すまなかった ”

…… それが ” 俺 ” の未練だったよ」

パキリ、と世界にヒビが入った…… ような気がした。

罪木ちゃんが辛うじて掴んだ鈴のミサンガは、彼女の手がかかると
すぐにぶちりと千切れ、りんとう涼やかな音を立てて落ちていく。

「きっかけは、作ったぞ」

笑った彼は、彼の顔は……

「義眼……？」

世界が、セカイが砕け散る。

ガラスのように、呆気なく。そしてゴミ箱の底は見事に破れ、私の
視界もまた……黒に包まれていく。

「遅れて、ごめんな…… 約束通り、迎えに来たぞ」

私の腕を取ってくれるのは、1人だけじゃない。

そんなことも、忘れていただなんて……

なんて、情けない。なんて、悔しい。皆を信頼していなかったのは
私のほうだったんだ。

けれど、胸に抱いたのは…… 確かに ” 希望 ” と呼べるもの

だ
っ
た。
。

鏡写しのドツペルゲンガー

暗い、暗い世界に身を沈ませていく。

ボコリ、と水泡が口の中から逃げていくような…… そんな感覚のまま下へ、下へ、導かれるように。

足が地面に着いたとき、そつと私は目を開いた。

「あれ……？」

私、確かあの世界を壊して逃げ出したはずじゃあ？

「…… っひひ」

辺りを見渡すと、そこはオレンジや淡い桃色などの暖色の光が街灯によつて照らされていた。

濃い影を落とす建物…… 1度しか来たことがないけれど、見覚えのある場所だ。

私はまた気絶してしまったのだろうか？それともまた違った方法でここに来ているのか……？

私は部屋の前に立ち、ごくりと唾を飲み込んでドアノブに手をかけ、扉を開けると……

「やあ、また会ったね」

そしてそつと扉を閉じた。

「おーい、久しぶりなのにそれは酷いんじゃないかなー？」

扉の向こう側から聴こえてくる声は前に来た時とは違い、呆れ返ったようなものではなくゲームで聴いていたような彼の語調だ。

ようするに、馬鹿にしたようなものではない。

彼は私の持っている才能…… “ 幸運 ” そのもの。 なにか、

私の中で変化があったというのだろうか。

「……」

黙ったまま扉を開いて中に入る。

「やあ」

「…… 久しぶり、だね」

様子を見ながらゆっくりと彼の前に立つ。

彼の後ろには、もう「希望」の妹はいなかった。

1対1の対決。なぜ今更になって私の夢に出て来ているのか……
そもそもこれは本当に夢なのか？ そそも分らないけれど、これだけは分かる。

これは、チャンスだつて。

「さて…… 答えは出たのかな？」

「なんのこと？」

「分かつててそんなことを言うんだから、キミもなかなか性質が悪いよね？」

生憎、キミに対して素直になる殊勝さなんて持ち合わせてないからね。あのモノクマへ向けるような反抗心しか湧いてこないよ。

「…… 前に会ったとき、キミは散々私のことを罵倒してくれたね？」
「ボクと同じゴミクスに対して敬意を払うわけないでしょ？ あれでも最低限だったんだけど」

「へえ、あれだけ貶しといてよく言うよ」

違う、そうじゃない。言い争いをしたいわけじゃないんだつてば。なんだつて私はこの人相手だところ、言動をスルーできなくなつてしまふんだらう。モノクマにはあー、はいはいでどうにかできるのにさあ。

「キミに足りないものは分かつたかな？」

「…… うん、私勘違いしてたみたい」

あのととき、独り言のように言っていた言葉は全て、私の悪いところを指摘していただけたつた。

—— 幸運の代償として不運が訪れるのは当たり前なんだよ。それなのにその不運を嘆くだけでなにも行動しない。そんなキミに素晴らしい希望が訪れるわけもないのに幸せな未来を望んでいるだなんて、まったくおかしいよね。

—— キミは自分が助かるにしても最初から他力本願しかしていないし、笑わせるよね。そんな状態のキミに未来があるとでも？ ただ後ろ向きに立ち止まっているだけで一歩も動けず、何にもできない

い。そんなの時間の無駄遣いだよね？

それら全て、私の悪いところだ。

それが今になってよく分かる。私は全て “ 諦めていた ” から。自分の才能のせいだからって責任から逃げて、死んでほしくないって思いながらも見捨て続けた。

そんな私が、死んだ人たちを嘆いて 「死んでほしくなかった。私のせいだ」 なんて言う資格はない。

だって、助ける努力なんてこれっぽっちもしてなかったんだから。なにもしてないのに 「私のせいだ」 なんて嘆いてもそんなの滑稽だ。死んだ彼らに対して失礼にもほどがある。

全部全部他力本願だった。批判されても仕方ない。結局私は他人の死を嘆きながら自分だけ大事だったということだ。

「私は…… はなから諦めてなにも行動しなかった。死んでほしくない人たちに、なにもしなかった。全部、見て見ぬ振り、聞かない振りをしてたんだよね…… なにも努力しないで幸せになろうだなんて傲慢だったんだ」

パレードだって本当は周りの惨状が見えていたし、聴こえていた。なのに無視したのは私だ。メイと生き残ることに拘って、 “ 彼 ” だって見殺しにした。

そう、見殺しにした…… “ 十神 ” “ クン ” だってあの時の自分は死んだと言っていたのだから。

「分かっているならいいんだよ。キミがあまりにも優柔不断すぎるからボクはもうイライラしちゃって仕方なかったんだよ」

「それは…… ごめん」

「なんで謝るの？ 原因に向かって謝るなんてキミは馬鹿だね」
「ちよつと!?!」

ああもう、素直に謝ったら謝ったらでこいつはっ！

「でも、変わったんでしょ？」

「…… うん、そうだよ。変わった。変わらされたよ…… お人好きな誰かさんたちのせいだね」

最初は花村クン以外に干渉するつもりなんてなかった。

きつかけは、辺古山さんと九頭龍クンの会話を聞いたことだ。あの2人の、辺古山さんの「坊ちゃん」という言葉を聞かなかつたら…… 私はきつと変われなかつただろう。

あそこで迷いが生じたからこそ、手紙を受け取ったからこそ私は事件現場に行き、そしてタイミングよく会話を聞いて…… ”あの子”によく似た辺古山さんの末路を思い出して…… そうしたら、勝手に身体が動いていた。

あのとき、私はやつと自分から行動することができたんだ。 やつと、私は自分の才能に抗って想いを貫き通すことができたんだ。

「サンキューねー」 って言つて笑つてくれる小泉さんが、まだ生きている。九頭龍クンとすれ違いながらも笑っている辺古山さんともう道具なんかじゃない。

罪木ちゃんはもう1人じゃないし、西園寺さんも少しずつ皆と近づいている。田中クンの隣でソニアさんは幸せそうにしてるし、式大クンと終里さんは今でもトレーニングしてる。

七海さんは、日向クンの隣でサポートしてるし…… 花村クンは料理の目的を思い出して皆が幸せになれる食事を用意してくれる……

そんな、幸せな世界が、私が行動して掴んだ昨日の未来。

「うん、それならもうなにも言うことはないかな…… ボクがアドバイスすることなんてもうないね」

「私はキミなんかに負けないから。キミがいくら私を幸運にしようとしても、私は私自身の幸福を掴んでみせるから。見ててよね」

「ふうん、精々頑張ってみればいいんじゃない？」

今度は、本当の未来を掴みに行かないとね。

「さしあたっては……」

私は素早く手のひらを突き出して鉄パイプを掴み、その慣れ親しんだ感触を確かめて振り抜く。

甲高い金属音が鳴り、鉄パイプは笑顔の彼が持つネイルハンマーによって受け止められた。

「才能なんていらないうって？　それがあからキミはこうして皆と出会えたのにな？」

「うーん、やっぱりダメかあ。幸運様には敵わないね！」

才能なんてなくなってしまう方がいいのに。

それも持つ者の傲慢だ。夢の中とはいえ、さすがに彼を殺すことはできないらしい。

でも1発殴ってやろうと思っていたのは行動に移せたし、一応達成かな。当てられてないけれど。

「…… まあいいや。で、なにか他にないのかな？」

「なにが？」

「ほらほら、変わった餞別とか」

「そんなのあるわけないじゃない。強いていうならいつでもボクと会えるようになるってことかな？」

「えー…… いらないよ」

「……」

あ、イライラしてる。

「でも、そうだよね…… キミは私の才能そのものなんだからずっと一緒か」

「なにを改まつてるの？」

だって、さ。自分自身なんですよ？

前までは彼をキャラクターとして見ていた部分もあつたけれど、今は私が狛枝凪だからね。彼も私の1部。受け入れるべき存在なんだろう。

「だから、キミも受け入れる…… これからも、よろしく」

「……」

「……」

ドン引き立ち絵と同じポーズで固まるのやめてよ！　完全に引かれるとさすがに私も悲しいんだけど！

「仕方ないなあ……」

呆れたように笑って手が差し出される。それを受け取って手を押しさえると、私は彼のおでこを指で弾いた。

「いてっ！」

「1本とーった！」

「子供じゃないんだから……」

デコピンだけで済んで良かったと思ってほしいね。

むしろ寛大な処置に感謝してよ！ って、調子に乗りすぎか。

「そういうえば、キミの後ろにいた」私「は？」

「キミに芽生えた希望のこと？それなら、自分の胸に手を当てて考えてみなよ」

……つまり？

「私の中にいる…… ってことかな？」

「そう。そもそもキミ自身の希望なのに独立して存在するなんておかしな話でしょ？」

それを言うならキミが独立してるのもおかしいってことにならないかな？

「ボクはキミに御されるほど安くないよ」

あ、はい、そうですか。

「……」

でもいつか、彼を制御してみせる。

そうすることができれば、あのカムクライズルのように幸運すら利用できるようになれるかもしれない。そうなれば…… もう友達を失わなくて済むのかな……

いや、大丈夫。だって日向くんがいるもんね。彼が一緒ならきつと、大丈夫……

「それじゃあ、今度はちゃんと夢で会おうね」

にっこりと笑いながら彼が手をあげる。

「えっ？」

「またね、この世界のボク。こっちはこっちで幸せにやるから、そっちはよろしくね」

「待って、それ、ど、どういうこと!？」

またかよ！ また言い逃げされちゃうのかよ！

そんなのズルいじゃないか！ 私だけにも分からないままだな

なんて、そんなの、そんなの嫌だよ！

「夢なんて人の数だけあるんだから、セカイだって複数あったっておかしくないでしょ？ この世界のボクはキミ。ボクはボク。ただそれだけだから」

彼の姿が消えていく。いや、私が夢の中から追い出されようとしているのだ。

「なんでっ、私が……！」

彼は、狛枝凪斗はここがパラレルワールドだとも言いたいのか？

なら、私はこのままでいいの？

私は、彼の場所を奪ったわけではないのか……？

そんな疑問は尽きることなく湧いてくるが、応える人はもう消えてしまった。ああ、また言い逃げされた。

これからはいつでも会えるとか言ってたけれど、それは本当なのか。あんな言い逃げされて…… 本当にまた会えるのかな……

勝手に不安になりながら、1人暗闇に取り残される。

伸ばした手は、初めは拒絶され、1度交わされて……そして最後は掴むことができなかった。

まるで掴み所のない人だ。本当、意味分からない人だよ、キミは。

「手を掴む……か」

自分の手のひらを見つめてくすりと笑う。

おしおきるとき、助けてくれようとして嬉しかったよ、日向クン。あのときは残念ながら拒絶してしまったけれど、今度はちゃんと、自分から掴むから。

「だからもう1度……」

十神クンと一緒に楽園を破壊し、確かに掴んだ感触。

それをまたもう1度…… 掴みにいくために進まなくちゃ。

意識のデータしかなかろうが問題はない。

さあ行こうか、彼らの元へ。

暗闇の世界に響く笛の音。

遠くから聞こえるそれに耳をすませて上も下も分からない場所を歩いていく。軌跡は真っ赤に染まり、血溜まりが私の歩みを遅くさせ

るが、気にせず歩く。

所々に見える死んでいった皆の象徴を横目に、「ありがとう」と感謝の言葉を紡ぎながら歩き続ける。

死体を積み上げながら生きてきた私は、彼らを忘れてはいけない。夢の中にその記憶を詰め込んで、決して忘れぬように。

人は忘れて生きる生き物だけれど、夢の中だけは残り続けるように。

後ろ向きではなく……あの苗木クンのように、全てを受け入れ、私は未来へ進んでいく。

笛の音だけを頼りに、ひたすら歩いた。

「……これは」

やがて、鏡のようなものの中から音が出ていることに気がついた。その中では皆が輪になって裁判場にいる場面が映っている。何人かは苦しそうな顔をしながら。

罪木ちゃんはぎゅつとホイッスルを握っている。彼女の想いが、私を呼んだのかもしれない。

七海さんとモノミだけが孤立している状態を見るに、もしかしたら彼女たちがAIであることがバラされてしまったのかもしれない。

それで、迷いが生じているのかもしれない。

「どうすればいいのか……？」

鏡の中で起こっている出来事は進んでいく。

まるで、ゲームの画面を見ているような気分になってきてしまう。自分ではなにも干渉できないような不安な気持ちたちが湧いてくる。

でもそれでは前と一緒なのだ。それでは、ダメなんだ。

「っモノミー」

鏡の中で、モノミが摘まみ上げられ、超巨大な江ノ島盾子の頭上に挙げられる。そして彼女は大きく口を開けて……

—— 狛枝さんがこんなことをしてしまったのは、不安だったからでちゅよね……でも、不安にならなくてもいいんでちゅよ。まだミナサンは会ったばかりでちゅけど、きつとらーぶらーぶでできるはずでちゅ。なんなら、あちしもいまちゅから、もつと頼ってくださいいね。

あちしはあなたの先生でもあるんでちゆから。

蘇ったのは、パーティの後説教されたときのこと。

ああ、先生なんだなあ…… と思ったのだ。どうせAIなんだ、なんてそんなことは関係ない。私にとって、彼女は確かに先生なのだ。

「そんなの、許さない！」

彼女だって、私が望む未来にいるんだから、そんなの許すわけない！

絶望なんかに、負けたくない！

今は夢の中だけれど夢の中ではない。ゲームの中だ。本来なら使えないはずだと思うけれど、きつと今ならできるはず。

手のひらを軽く握ると、いつの間にかそこには鉄パイプがあった。

「壊れるおおお！」

振り上げ、突進するように鏡を割る。

そしてそのまま鏡の中へ……

「ひゃあああああ！」

モノミが泣いている。

江ノ島盾子は摘んでいたモノミの耳を離し、モノミが彼女の口の中に…… そして機械が壊れるようなゴチャゴチャした咀嚼音が…… なんてこと、させるわけないでしょ！

「モノミ！」

「ふえ!? っ、狛枝さん!?!」

彼らの頭上を斜め上からモノミを突進するように攫い、「はあ?」 という反応を示した江ノ島盾子から身を逸らす。

間一髪、口の中にドボンするのを逃れたのだけれど……

「さ、さすがにホウキは使えない!?!」

エフエクト使用ができたのはさっきの鉄パイプだけだったらしい。このままだと席に突っ込んで大怪我するよ! いつものことだけど!!

「ああああああ!」

「あああ、あちしがなんとかしないと!」

先生が必死に魔女の箒を手に行っているからか、なんとなく落下速度

はゆっくりになったかもしれない…… が、それでも普通に怪我はしそうだ。

「無茶するなよっ！」

そうして2人で飛び込んだところに日向クンが滑り込み、手を掴んだことでなんとか軽やかに着地することができた。じゅつてん！

「あははは、ありがとう日向クン……」

「まったく……」

そんなこと言っても、ちゃんと迎えに来てくれたことは覚えてい
るよ。

十神クンがいないことだけが気がかりだけれど、きつと大丈夫。

「あーあ、あつちは失敗しちゃったのね。マルチタスクが面倒だからって切り離すべきじゃなかったのかなー」

大音響の、声。

巨大江ノ島盾子が直接喋ったからだった。

「おっと失礼…… 鼓膜は無事かい？」

今度は江ノ島盾子の目の前に置かれた大きな画面…… 恐らく携帯電話の中からキザ姿になった彼女が話しかけてくる。

私が復活したことなど、まるで気にすることなく…… 予想していたように……

「あ、いやーん！ なんで狛枝さんがここにいるのー？ まさか幽霊ー？」

そして一瞬真顔になった後、取り繕ったように、ムカつくほど甘えた可愛い声で驚いた。これ絶対嘘だ。断言するよ。

「でもさー、そいつがどうやってか蘇ったとして…… 十神はどうなるのかなー？ やっぱり彼は死んだままになっちゃうよ？ それでもいいのかなー？」

感動の再会もする間もなく、江ノ島盾子が煽りに来る。

「ただけれど、その場に第3者の声が響いたことで彼女の言葉が続くことはなかった。」

「詐欺師くんの身の安全なら私たちが保証しちゃうよ？」

そこに現れたのは極太アンテナが特徴の平凡顔、銀髪のクールな女

の子、十神クンの痩せた偽物、そして犬耳のような茶髪の女性にボブカットの同じ年くらいの女の子。

「やつぽー風ちゃん。あのね、詐欺師くんの命の安全は私たち、未来機関が保証するから安心してね！」

その言葉に、私は露骨に安堵した。

未来の前の日

そもそも、なんでモノミと七海さんはこの最後の裁判にいるのだろう。

確か、彼女たちが死んだからこそ卒業と留年のコマンドが選べるようになったんじゃないやなかったっけ？

ま、いつか。

「はああ、ワクワクするわね！　まるで卒業アルバムを10年振りに開いたような気分……　って知らないやつもいるんだけどね！」

江ノ島盾子の視線はまっすぐとうろちゃんやうそちゃんへ向いている。そりゃあ知らないだろう。大体会うとしても学園外だったはずだしね。

「だ、ただ誰だよ!?　なんかいきなり増えたぞオ!？」

「もしかして……　全員未来機関の方……　なんででしょうか……」

左右田クンとソニアさんが代表し、私以外の全員が困惑を表している。記憶にないのだから当たり前といえは当たり前だろうね。

「姉さん、うつろちゃん……　!？」

「姉さん!？」

変なところに驚いてる人は置いて……

「まーったく何度呼びかけても無視してくれちゃってさー。どれだけ心配したと思ってるのかな？」

「あーあ、せつかくからかいに来たのに復活するとか……　テンション下がるぜ……」

「姉さんごめん……　私は私でやりたいことがあったからさ……」

「ちよ、無視とかひどいんじゃないの？」

だつてうつろちゃんの言葉って嘘だろうし……

「おお十神……　!そんなに痩せちまって……　!？」

「黙れ、愚民が……　俺をあの偽物と一緒にするんじゃない」

「サウナダイエツトは有効みたいだぜー？　お陰様でこーんなに十神も痩せたんだからな！」

「ここぞとばかりに嘘を吐くうつろちゃんになんだか懐かしきすら感じて私は…… 思い切り抱きつきに行ってみた。」

「んなあつ!? ちょ、やめろお!」

無言で低い位置にある頭を撫で回して 「心配してくれてありがとう、うつろちゃん」と呟く。すると彼女は心底吐きそうな顔になって「冗談キツツイぞそれ…… 凧のことなんて心配するわけないだろ!」とこれまた分かりやすいツンデレを頂いた。

それにしても…… やっぱりメイはいない、か。

「…… ところで、十神くんの無事を保証するってどういうことなのかな?」

そこで七海さんが本題に戻す。

数人は本当に十神クンが痩せたと思っていたのか 「え、違うの?」
という顔になっていた。

「うん、今外でいろいろ対処してるから安全性は保証する。だから、後は皆と、江ノ島さんをどうにかするだけだ……!」

キツと江ノ島盾子を睨みつける苗木クン。

その視線に、画面の中の江ノ島は沈黙をしたと思うと、一気に泣き出し始めた。

「びええええええええん!」

「なぜ、そこで泣く」

「こんなの多勢に無勢じゃなあああああい! ただでさえあんまり削れなかったのに、相手が20人もいるとか超絶望的じゃなあああああい!」

あー、それはなんというか…… 御愁傷様としか言えないかな。

「まあいい、どちらにせよ強制シャツダウンをすればお前ごとおさらばすることになるんだからな」

痩せた十神クンがそう言うのと、なにか引つかかったらしい日向クンが焦りを見せる。

「な、なあ疑問なんだけど…… その強制シャツダウンってのをしたらさ…… 俺たちはどうなるんだ?」

「…… 安心しろ、悪いようにはしない」

十神クンのその言葉は、ある意味優しさなのかもしれないな。

「いやー、もうちよつとも分かりやすく言ってくれないと分かんねつすよ」

「ちよつと、説明するんならきちんとしなさいよね！」

「なっ！」

女子に責められる十神クンは置いて……

「強制シャットダウンをすると、この新世界プログラム…… あ、風ちゃんは分からないんだっけ？ ここはいわゆるバーチャルリアリティみたいなゲームの世界…… って言えば分かりやすいよね。全員同じ物を見せられてるから、あながち夢の中ってのも間違いじゃなかったんだよね。だから君のやったことは無駄じゃなかったんだ。そのおかげで、こうして江ノ島盾子のアルターエゴを引きずり出すことに成功したんだし……」

織月が私向けに説明を始めたため、代わりに苗木クンが強制シャットダウンについての説明を引き継いだ。

「このプログラムを強制的に終了させると、プログラム上にある全てのデータが消去されるんだ。江ノ島盾子のアルターエゴは勿論……」

その中にいる、アバターも」

「俺らが消えるってことか!？」

「消えるわけではないわ。ただ、正規コマンドの卒業を通らずにシャットダウンしてしまうとアバターの記憶は上書きされないから、あなたたちはプログラムに入る前の状態に戻ることになる」

それはつまり、超高校級の絶望に戻ってしまうということ……

「あのね、風ちゃん…… 君も、絶望だったから…… だから、それに戻っちゃうんだよ」

途中乱入した私に懇切丁寧に織月が解説してくれるから助かる。

「じゃなかったら迂闊になにも言えなくて、議論に参加できないところだったし。」

「この島で起きたことは全部忘れるということか？」

「んなっ、それじゃあ……」

九頭龍クンが辺古山さんを見る。

そうだね、今までのすれ違いも元通りだ。せつかく本音でぶつかり会えたのに、それも全て無くしてしまう。記憶は失われ、絶望に戻ってしまおう上に、積み上げてきた絆も台無しだ。

「それにー！ 七海さんもモノミもー、消えて無くなっちゃうんだよ？ さつき狛枝さんが助けたこともゼーんぶ、無意味！ 無意味…… それって…… とつても絶望的ですよね……」

「…… 七海、たちが………？」

「……」

七海さんは、それでも怯まない。
「ううん、皆は外に出るべきだよ。それで、またやり直せばいいんだから…… こうやって仲良くなれた皆なら、必ずまた同じように仲間になれるはずだよ。そうだね、日向くん」

でも、そこにキミはいない。いないんだよ、七海さん……
「でも……」

「おい、うじうじするなよー！」

「な、七海……！？」

むくれた七海さんが彼に発破をかける。

いきなり口調を変えられると、少しビツクリするよね。

「大丈夫。また、きつと会えるから…… ね？」
「………」

そうか、七海さんはもうとつくに覚悟してるんだね。

でも、日向くん自身のこと…… どうしようもないんだよね。

「ああそうですか、でもそう上手く行くんですかね？ だって、そうでしょう？ この世界に私を持ち込んだのは、あなたなんですから……」

日向創

「はあ!？」

それから続いたのは、とても絶望的な話。

日向くんが、超高校級の希望…… カムクライズルであるという話だ。

希望ヶ峰学園最大最悪の事件を引き起こし、絶望を加速させた存

在。そして、脳をいじられてカムクライズルにされた日向クンは……
強制シャットダウンをってしまったら消えてしまうんだ。

そこにいるのはカムクライズルという、日向クンじゃない別人ではない。

「俺が……消える……？」

でもそんなことで悩んでいる日向クンなんてさ……馬鹿みたいだよ。

「あっはははは！　なにを言ってるのかな、日向クンは」

「…… 狛枝？」

私を連れ戻したのは誰だったっけ？　…… キミなんだよ。

そんなキミがウジウジとしてるなんて、そんな馬鹿らしいこと黙って見てられるとも思うの？

ほら、こんなにいっぱい人がいるんだよ？　誰も死んでない！　絶望的状况なんかじゃないんだ！

「奇跡が起こらないなんて、そんなことどうして言えるの？」

苗木クンたちがいなかったとしても、私たちはきつと選んでいた。

私の渴望した未来は…… 皆で笑える未来だ！

「死んだ私を呼び戻しておいて、よく奇跡なんて起きないって確信できるね！　バツカみたい！」

そう、切っ掛けさえあれば…… きつと大丈夫だったんだ。

「死人を蘇らせておいて、眠ってるだけのキミが目覚められないはずないでしょ？　まったく、これだから予備学科は視野が狭いんだよ。才能があるとかないとか、できるとかできないとか…… そんなこと考えてる暇があったら行動すればいいんだよ！」

ほら

「ねえ？　七海さん」

「うん……」

せーの……

「やればできるってやつだよ！」

「考える前に飛び込めってね！」

グジグジ考えてるから悩むはめになるんだからさ。

たまにはなにも考えずに、やりたいことをやればいいんだ。

私みたいに、もう戻れないわけじゃないんだからさ。日向クンには、皆が生きて迎えてくれる場所があるんだからさ。

私みたいに……死体を踏み越えてきたわけじゃないんだから。

「そうか…… そうだよな…… お前も…… 本当に死ぬかもしれない状況で、覚悟をしたんだもん……」

他の皆も、そうだろう？

「ほら、花村クンも料理教えてくれるんでしょ？ 姉さんのために美味しいおつまみ作るんだから！」

「…… うん、そうだね。約束したからには手取り足取り！ 腰取り教えちゃうよ！」

「わ、私のために……！ う、可愛い妹を持つて私は幸せだよ……」
いや、妹じゃないけどね。

「小泉さんも……」

「そうね。写真家として…… 母さんみたいに色々な場所を回って、絶望の中にある小さな笑顔でも探してみようかな……」

そう、どんなところだって希望は芽生える。

それを探せば、いくらでも世界を幸福にすることができる。

「2人の絆はたとえ忘れたとしても変わらないよね」
「ああ」

「時間がある限り、またお互いにぶつかりあえるだろうーな。そうすればなんの問題もねー」

この2人が1番安定してるよね。

どうか未来でもお幸せに！

「唯吹のおお！ ライブで希望をお届けするっす！」

「汚ギヤルの思い通りとか胸糞悪いもんねー！」

「…………… 約束、ですよ……………？」
うん、そうだね。約束だ。

また一緒に遊ぶって、皆揃って人狼するって、約束したもんね。
だからさ…… 泣かないですよ。ずっと黙っているから、もしかして

江ノ島盾子に感化されちゃったのかなって思っていたけれど……
杞憂だったみたいだ。

彼女は変わらない。私と友達になった彼女は、彼女のままなんだ。
「弟子たちも待っている……か。ふ、霸王冥利につきるな」

「世界が絶望に染まっているのなら……前に立って歩く人物も必要になるでしょう。それならば、わたくしも頑張りたいです……いつも、十神さんに任せきりでしたから……」

「ソニアさんは……十分に頑張ってくれていたと思いますよ……オレだって、臆病なままじゃいらねーって思いますし……花村も変わったんだ……オレだって……！」

周りに影響され、そして前に進んでいく……

あんまり頑張りすぎても大変だから、一緒に休憩できる仲間がいる
といいよね。

「オメーに雑魚雑魚言われてちゃやってらんねーよ！もっともっとトレーニングして全部黙らせられるようにしてやるってーの！ゴチャゴチャ難しいことはオレにや向かねーし、世界がどうかデカいこと考えてられつかよー！」

「考える前に飛び込め……噴、いい言葉じゃあ。この業界に飛び込んだ時のことを思い出すようじゃなあ」

彼も元は病院にいたんだもんね……そんな彼はたった1人の人間の希望に影響されて、超高校級のマネージャーへと登りつめた。そんな人が、皆のやりたいことを応援しないわけがないんだよね。

終里さんはまさに考える前に飛び込めって感じだし。

「たとえば私がゲームだったとしても……ここで出会って、過ごしたことはなくならないよ。そうでしょ？それに……きっと、大丈夫」

「……」

そう言って頭上を見上げる七海さんはまるで誰かを探すように優しい笑みを浮かべて、硬直しているようなモノミを抱き上げた。

「ね、皆諦めてなんかないでしょう？」

「ああ……思えば、ずっとお前に振り回されてばかりだったけど

「…………… お前も皆に振り回されてたんだな」

「そうかもしれないね。だって死にたくなかったはずなのに、いつの間にか自分の命まで賭けるようになってしまったもんね。変なの、引つ掻き回してたはずなのに、1番引つ掻き回されたのは私なのかも」

死人が蘇るようなこんなくんだりない世界で、それでも素敵なこんな夢のような世界で、永遠なんて望まないから、皆との細やかな幸せを望ませてほしい。

世界の平和とか、希望の伝染とか絶望の伝染とか、そんなの関係なく、私たちは私たちの渴望する未来を望む。

人の幸せを願うのなんてとても疲れるから。

だから自分たちの幸せを目指そう。

そこにキミがいるときつと幸せは訪れないから。

「オーバーキルもいいところだつてえええええ！」

「強制シャットダウンだよ！」

全員で押す。

卒業と留年のボタンを同時に、そして…………… それぞれ願う未来を思い描きながら。

ピロン

そんな軽快な音と共にポケットから飛び出したのは、電子生徒手帳だった。それが空中に溶け出し希望のカケラとなる。

「……………！」

「モ、モノミちゃん？」

七海さんの腕から抜け出したモノミがそこに飛び込むと、次々とカケラが彼女を覆っていく。

そして現れたのは1番最初に見た、ウサミ姿のモノミ。

彼女が木の棒を頭上に掲げるとそこに次々とカケラが集まり星型を作っていく。そして本当に魔法少女のような “ 希望の杖 ” へと変化する。

巨大な江ノ島はウサミを捕まえようとすのだけれど、その手を鉄串が貫く。そして竹刀を駆け上がり、ウサミが羽ばたいて彼女の頭上へ。

メスを投げれば江ノ島のツインテールが下され、包帯でぐるぐるに巻いていくように魔法の杖から光が紡がれる。

全ての希望のカケラで、光の帯が敷かれていく。

それはまるで虹色の花のようできて…… なんとなく、寂しいような気もした。

「ああああああ！」

崩れていく、江ノ島が。

崩壊する、夢の世界が……

ああ、これで…… 終わるのか……

願わくば…… 私が、私で…… いられますように……

小さな渴望を手に、1人、目を閉じる。

l b i r d o f p a r a d i s e f l o w e
r l

窓辺のアンチキューサ

カシユツと、軽い音がして目を覚ます。

目の前のガラスが徐々に開いていき、視認したそこにはモニターの群れが存在していた。

「あ、起きた？」

視線を声の方向に動かせば、首がギシリと痛む。

長時間寝かされていたせいで凝り固まり、動かすだけで少しだけ痛んだ。

「り……づき……」

そこにいたのは犬耳のように髪をピョンピョン跳ねさせた姉さんの姿。他には誰もいないようだった。

そのことに僅かながら不快な気分になり……そして同時に安堵したように嘆息する自分に疑問が湧き上がる。私は誰がいることを期待していたというのか？

「あ、動けないよね。ちよつと待っててね。起きたばかりじゃ自力移動も難しいだろうし、今ストレッチャー持ってくるからさ」

自力移動も難しくなるほどの時間プログラムにかけられていたのか、と考え無意識に背を向ける彼女に手を伸ばそうとすることができないことに沈黙。

そうだ、私はあの屋上で――



「風様、多くは言いません。ですがどうかもう1度、お話だけでも聞いてはいただけませんか？」

「そんなことを言っつて、キミはもう私のメイドじゃないんでしょ？
なんでまだ丁寧語で話すの？ 様付けするの？ それは江ノ島盾子
様にでも言っつてあげればいいじゃない！」

それはまるで別れ話を拗らせた男女のようで、馬鹿らしく思いなが
らも体は言うことを聞かなくて、私はひたすら彼女を遠ざけた。

「うるさいうるさい！ キミの言葉なんて聞きたくない！」

遠ざけて拒絶して、溢れ出てくる涙なんて嘘だと決めつけて、キミ
を傷つけるように言葉を選んで、酷い奴だ。こんな酷い奴は嫌いで
しょ？ キミの知ってるカワイイ私なんてもうどこにもいないのだ
から、いい加減諦めてよ！

「風様……っ」

なんでキミが苦しそうな顔をするの？

苦しいのは私なのに。裏切られたのは私なのに。キミはアイツを
選んだんだ。そうでしょう？ 知ってるんだから。見せられてし
まったんだから。キミは自分のモノだって、アイツの噛い声が頭の中
に何度も響いて焼きつけられている。

「まだ分からないの？ 私は人殺しなんだよ？ もう子供じゃないん
だ。キミの知ってるカワイイ風ちゃんは今もうとつくに殺されちゃっ
たんだよ！」

分かんず屋のキミなんて大嫌い。

武器まで持ち込んで私を殺す気満々でさ。なのに躊躇うなんて馬
鹿だよな？

こんな思いさせられるくらいならいつそ殺されてしまったほうが
まだマシだ！

「あはっ、盗られたモノは、盗り返さないと……っね？」

キミは道具なんかじゃない。分かっている。

だからあれもこれも、私が裏切られたと思っつている事実も全部キミ
の意思。でもね、それを許容できるほど私はできちゃいない。

そう、身も心もアイツに奪われて失くしてしまったのなら、なにを
してでも取り戻す。

そのためにココに来たんでしょ？

キミは最後の未練である私を殺しに、そして私はキミを取り戻すためにキミを殺す。それだけ。それだけの話だ。

それとも私がキミの未練っていうのさえも自惚れなのかな？
そうだとしてもコロシアイする関係には他ならないよね！

さあさあ精々楽しくコロシアイでもしようか。絶望的な予定調和を見せつけてアイツを絶望させてやろう？ そしたら喜んでくれるはずだから……

あれ、誰が？

まあ、いいや。

殺し殺されコロシアイ。キミとするなら、構わないよ。

「…… くっ」

「なにになに？　なんでそんなに辛そうなの？」

鉄パイプを構えて突っ込んでみればすぐ側にあるチェンソーは使わず、手に持っている手甲だけで受け止めてくるメイ。

そんなものどこで手に入れたんだろうね？　知らないことばかりだ。それもアイツからもらったのかな？　ねえ、絶対に許さないから。

「探して……　いたのです……　なのに……　！」

「探して……　？　ああ、そういえば今アイツは行方不明なんだっけ？　へえ熱心だね。でも私は居場所なんて知らないよー？　ぎーんねん！」

「ちがっ」

「なにが違うの？　ああっ！　もしかして私を探してくれてた？　メイったら私のこと大好きだもんね！」

「そうです、貴女を……　！」

ありがとう！嬉しいよ、大好き！

「……　嘘吐き」

なんて、嘘だよ！

そんな嘘つかれても嬉しくなんてないよ、メイなんて大っ嫌い！
「なっ」

「私、嘘が嫌いなんだよね！」

ねえ、いつまでいい子ぶってるのかな？

そんなことしたって昔の私は戻って来ないよ？

いい加減、勘弁してよ。そんな甘言なんか騙されたくないんだから。私が騙されやすいことなんて百も承知なんだからさ、そんな嘘で惑わさないで。期待なんてさせないで。そのほうが何倍も辛いし、絶望させることになるって、なんで分からないの？

「ねえメイ、わたしのモノになって？」

鉄パイプを際どいところに打ち付けてみるが、彼女は容易く避けてとうとうチェンソーを手に取る。

私はそれを見て口元を釣り上げた。やっとそれを取ってくれたね。

「ほらほら、生存欲勝負だよ？ 死にたくないなら全力でかかってこいよ」

「……………」

俯いてないでこっち向いてよ。私を見て。

私が必要なのもうキミだけなんだから、キミも私だけを見てよ。そうしたらもう忘れられないよね。置いていかないよね。ずっとここでコロシアイしてればずっとキミは私を見てくれるよね。

無言で振るった鉄パイプは甲高い音を立てて私の手から飛び出しで行った。

鉄パイプを握っていた左手が震えて、一筋の血が流れて行く。今の攻防でチェンソーが当たったらしい。指の一本でも飛んだかなと思っただが、ただ手のひらが抉れただけらしい。なんだ、つまらない。

「なぜ…… 左手で鉄パイプを使うのですか……」

「そりゃあ利き手だからね」

「あなたの利き手は右でしょう。死にたくないのなら、なぜそちらを使わないのですか……？」

キミが知らない間に両利きになっただけだよ？ なんて嘘はもうつけないか。

嘘1つ吐くのがこんなに難しいなんてさ、知らなかったよ。なるべく嘘吐かないように生きてきたからかな？ 今日1日で一生分の嘘を言った気がするよ。それもキミだけに、さ。

鉄パイプはもう手元がないし、仰向けに倒れた肩のところにはチエーンソーは刺さってるし、「観念しろ」って言われたほうがまだ自然だよ。

「…… キミになら殺されてもいいかなって」

「…… つは？」

嘘だと、思う？

この私が言うことなんだよ？

「殺されなかったらきつとまた私は絶望のために動くことになるんだろうね…… 今がチャンスだよ？ 国外に逃げる人たちを狙い撃ちにする私みたいなのがいると復興も上手くいかないでしょ？ ほら大勢の命を救うためには1人の命を…… なんて言うよね。そういうことなんじゃないかな？」

「そのために殺されてやるとでも？ その他大勢の、為に……？」
まさか。

「殺されてやるのは、キミにだけだよ」

これが、今できる精一杯の甘えなんだよ。

このチャンスを逃したら本当に今度は捕まえられるよ。キミはそれでいいの？

「キミが泣いてくれるのなら、死ぬのも悪くはないかもね」

あーあ、追い詰めてるのはメイのほうなのに泣いちゃってさ。

上からぱたぱたと、私の服に涙が降ってくる。なに汚してくれてんの？ 制服は何着もあるんじゃないんだよ？ 案外高価な物なんだからさ。

「約束は…… 違えませんが……」

約束…… って、なんだっけ。

「あなたが間違った今、私は…… なにをしてでも、止めてみせます。あなたの許可なしに死ぬことは有り得ません。迎えが遅くなつて、申し訳ありませんでした……！」

「迎えて…… なにを今更…… つ、あ、れ……？」

なんで私泣いてるの？

「お許し、ください……」

「許さないよ」

……でも

「キミになら、殺されてもいいっていうのは…… 本心だ」

目を瞑る。額に軽く柔らかい感触。擦ったくて、久々に本当の意味で笑ったかもしれない。

瞬間、腕にチクリとした痛み。そして消える様々な感覚。

ああ、もうどこにもいけない。キミから、逃げられないな。

手を伸ばそうと思っても、もうそれはできなかつた。



私はあの屋上で自由に動き回る足も、キミに伸ばす腕も失った。

それは “ だるま ” のエフェクトが示す通り。けれど、捨てたはずのエフェクトが手元に残っていることを夢で確認してプログラムの中の私もそれを知っただろうことが分かった。

プログラムの中で、私はなにを思つたらう？

私は今……

「どうして、殺してくれなかつたの」

分かりやすく失望していた。

「どうして死んでないの……」

そりゃあ、プログラムの私は死にたくなかつた時代の自分だろう。

けど、モノクマなら、江ノ島盾子なら、1番自殺願望が強かつた私を放っておくわけがない。なのに、どうして生きているの？

…… 私は間違っているのかな。

「用意できたよ、凧ちゃん」

「おはよーさん、凧。ストレッツチャーに移すのにちよつくら持ち上げ

るぜ」

この場にメイがいないのだけが幸いか。

「うん、よろしく」

それからはあれよあれよといううちに移動させられ、病室チツクな場所に寝転がされた。うつろちゃんはそのうち義足と義手を持ってきてくれると言っていたので、それを待つことになるだろう。

長い間寝てたから私は知らなかったが、自主的に出頭してきたうちの1人である左右田くんがいつの間にか作ってくれたようだ。

神経が繋がっているかのように動かすことができるらしいから、ちよつとだけ楽しみにしておこう。自由に動けるって素晴らしいよね。

「風様、お食事をお持ちしました」

「いらない」

「風様……」

口で反抗したってどうせ無理矢理するんでしょ？　なんて際どい言葉で翻弄してみるも、彼女は眉をハの字にして困るだけだ。

なんて面白くない反応。もう少し振り回されてくれないのに。

結局私が拒否すると無理強いすることはなく、栄養を直接点滴することにしたみたい。

私と同様に起きてきたらしい罪木ちゃんが甲斐甲斐しく看病してくれた。

絶望していたときは私1人だけ塔和シテイのマンションに監禁されていたから、彼女自身のしていた活動は知らない。

そもそも私が監禁されていたのも、メイが無印メンバーと同じ学年だったからだ。無印メンバーの大切な人が1人ずつ塔和シテイに監禁されていたはずだから、それに私は選ばれてしまったのだ。

七海さんのおしおきで私だけ絶望堕ちしきれなかったというのもあるけれど……　その監禁生活中、トドメに届けられたのがロシアイ学園生活に彼女がいるという事実と、彼女が江ノ島盾子に籠絡したらしき映像だった。

そこで私は壊れてしまった。

塔和シテイで好き勝手して、召使いなんてやつたりして、そして脱出したあとは避難民の乗る飛行機や船に密航してわざと墜落させたり沈没させたり好き放題だ。

たくさん人が死んだ。

だからもう私は立派な人殺し。

その報いなんて、私の死以外にあるわけがないのに。

許されることじゃないのに、なんで私は生きてるかなあ……

絶望状態のわりに罪木ちゃんは私を親しく呼んでお世話してくれるが、一体どういうことなのだろう？ 1回訊いてみたら酷く傷ついた顔をしながら「思い出せば分かりますよお」ときたもんだ。

もしかして彼女、プログラムの記憶があるのかな？ そんなの有り得ないのに……

「粕枝さあん、義足と義手の調整が終わったそうです。使ってみますかあ？」

「お願いしてもいいかな？」

まずは義手だ。

これがないとどうにもならない。

装着してもらうと、確かに自然に腕が動く。まるで本当に腕が復活してみたみたいだ。人工皮膚なんでものまで貼り付けてあって、見た目だけは本当に完璧だ。メカニックってこんなことまでできるのか？

いや、もしかしたら不二咲クンのプログラムも関わっているのか？ そうそう、不二咲クンも生きています。

私はメイの裏切りで見るのをやめてしまったが、どうやら無印メンバーは全員生還しているみたい。ただ、クソクマを操っていた黒幕様は生死不明の行方不明らしいが、これ、まずいんじゃないかな？

ともかく、腕は完璧に思い通り動く。足も同様みたいだ。

装着の仕方は見て覚えた分で十分だ。

「ねえ罪木ちゃん、せっかく腕と足をつけたんだし今度はちゃんと自分で食事するよ」

「そうですかあ！」

ぱあ、と顔を明るくした彼女が部屋を出て行く。

…… 舌を噛んで死ぬのもいいが、それは最終手段だ。

ここは確か中央の島。プログラム世界では公園と銅像しかないが、ここは未来機関の建物だ。構造はそこら中にある案内図で、ストレッチャー移動している最中に記憶した。

皆の配置場所は分からないが、ここは幸い一階だ。多分私が歩き回りやすいように階段の少ない場所を選んでくれたのだろう。ありがたい。

「ばいばい、罪木ちゃん」

食事くらいはもらっておいたほうが良かったかな？　なんてつまらない後悔をしつつ駆ける。

なについて？

脱走に決まってるじゃない。

どこかでとても身近な人の悲鳴が響いたけれど、私はそれを無視して近くの船着き場まで一直線に走った。

誰にも会わずに外に出ることは成功。クルーザーの運転くらいなら軽く本で読んだことあるし、いけるでしょ。幸運様舐めるなよ。

「どうしました、罪木……　じゃない。どうした罪木？」

「あ、髪……」

「ああ、切ってきた。で、どうした？」

「あ、そ、そうなんですう！日向さあん、こ、狛枝さんが……　狛枝さんがいなくなっちゃいましたあ！」

「ったく、仕方ない奴だなあ……」

うーん、案外運転が難しい。

どこに着くかは運次第になるかもね。

ま、このまま海の真ん中で入水自殺してもいいけれど、それはつまらないでしょ。

なにより……

「ひっそり死ぬのは、ちょっと嫌かな」

我儘な自分を自覚して、私は自嘲気味に笑った。

窓辺に置かれた小さな青い花の花言葉は、「あなたが信じられない」

だ。まるで、今の私みたいだね。なんて……笑っちゃうや。

キミと極楽鳥花の約束を

クルーザーでめちやくちやな運転の末、流されるままに辿り着いたのは皮肉にも第4の島だった。

「……ん？ あれ、別に4の島なら皮肉に思う必要はないはずじゃ？」
自分の心の声に、今度は現実で声を出して疑問の言葉を投げつける。

なんだろう、この不思議な感じ。

「ま、いいか」

大方プログラム世界でなにかやらかしたのだろう。

そんな風に結論付けて上陸する。クルーザーは流されないようにしっかりと固定し、辺りを見渡せば一面瓦礫だらけの廃墟だった。

そりやまあそうか。中央の島は未来機関がある程度整備しているがこちら辺まで手が回っているわけじゃない。遊園地なんて楽しい物があるはずもなく、なぜこんなところに来てしまったのかと溜息を吐いた。もう少し暇を潰せそうな場所なら良かったのに。

ついでに少しの物資かなにかあれば、それを載せてぶらり世界中ふらり旅なんて洒落込もうと思っていたが、やはりそう上手くはいかない。

義足の練習がてらに瓦礫の上をバランスを取りながら歩いてみると、まるでそこに本当に足があるように動いて、バランスを取れている。さすが左右田クンだ。そこは絶大な信頼を置いているので心配などしていなかったが、こうも自然に動くとエフエクトの通り自分がダルマさんになってしまった事実をうっかり忘れそうだ。

とんっ、とん、と軽い足取りで瓦礫を蹴って跳ねていく。

さながら川の石畳を飛び跳ねるような、もしくは子供が縁石の上をバランス取りながら歩いていくような、そんなお遊びの感覚で進んでいく。

我ながら、追われているだろうに暢気なものだ。

「よつと、はあ…… はあ……」

でもすぐに息は上がった。

ずっとプログラムにかけられていて、その間の栄養は恐らく点滴だけだったろう。筋力が急激に低下していてもなんらおかしくはない。元々もやしだっただけに更に貧弱さに磨きがかかってしまっているようだ。

少しだけ痩せた腹と腰を軽くシャツを捲り上げてみて確認した。うへえ、気持ち悪い。ただでさえ痩せ型だったのにこれはないわ。病的な痩せ方ってやつかな？ バランス悪すぎて本当に気持ち悪い。しかもなんか右わき腹辺りになんか黒ずんだような打撲痕っぽいような痣が見受けられる。まるでそこが刺されたみたいに変な痣だ。「槍でも刺さったかな？」

なんて冗談を独りで呟きながらそこら辺に出来ていた水溜りに顔を映す。

すると額にも大きく黒ずんだ痣。触ってみても痛くないし、傷痕があるわけじゃない。なのに大きくついた血の流れたような、痣。

なにか…… そうだな、木のような比較的柔らかいもので何度も何度も打ち付けたならこんな風な傷跡になりそうなものだけれど、生憎と私には身に覚えがない。

「案外、本当に死んだのかな？」

あまりにあまりな大怪我具合にくすりと笑う。

まったく、そのままくたばってれば良かったのに。

我ながらしぶといなあ。そんな生に執着したいのかよ。笑わせてくれるね。私にもう生きる意味はない。メイがこつちを向いてくれないなら、私を必要としてくれる人なんてもういない。誰もいない。散々痛い目に遭ってきたんだ。今更一瞬の恐怖に怯えるほどか弱くはない。痛めつけられるよりも死ぬほうが簡単だって、なんで昔の私は気がつけなかったのだろうか？

よく漫画であるじゃないか。拷問されてる人が「いつそ殺してくれ！」って叫んでるシーン。

もはやこの世界に生きること自体が私にとっての拷問に等しい。

あのときは殺してでも振り向かせてやろうかなんて思ったけれど、現に振り返りに遭っている私がいるし、思うようになっていかないも

のだよ。

力が拮抗していたらどこぞの猫とネズミのように永遠と追いかけてこすることになっていたかも、なんて。私が弱すぎてすぐに捕まっちゃったけどね。

捕まえられて、やつとごつちを見てくれたと思ったらご丁寧に注射器で麻酔をかけられ、ショック死しないように手足を斬り落とされた。

確かに殺されてもいいとは言ったけれどね、別に生かされたくはなかったんだよ。

だって、私を殺すとき優しい彼女は罪悪感で一杯になるだろう？

私をこれから殺すって禁忌の快楽。それから失敗しないようにその愛しい瞳一杯に私を映して焼き付けるのだ。私の死を。

そして印象に残る人の死の記憶というものは、しつこい油汚れみたいに一生纏わりついて消えないものなんだ。

錆落としなんてされてやらない。換気扇の煤汚れやらギトギトの油汚れやら、迷惑なくらいに心の隅にこびれついてやる。一生離さない。

なにをしても、私のいないところで幸せを掴んでも胸のシコリみたいに、いつそキミを侵す癌のように蝕んでやるのさ。

なのに殺してくれなかった。

それはつまり私に興味がないっていうこと。いや、もしかしたら知りすぎてるからこそその選択をしたのかもしれないよね？自惚れかもしれないけれど。

あーあ、私の死に様はきつと素敵な呪いのプレゼントになっただろうに。

呪いをかける機会是他ならない彼女によって永遠に葬りさらされた。まったく気に入くわない。おかげでもう彼女は私を見てくれないじゃないか。

ぶすくれて側にある小石を蹴る。

ドミノ倒しのように小石が大きな石に当たっていき、瓦礫が少しだけ崩れる。するとそこには「ドツキリハウス」の文字。

ああ、そんなの本当にあつたんだと気がつくが今の私には関係ないね。この島がどんなところだったかなんて、もう忘れてしまった。

1度だけ旅行に来たような気もするが、覚えていない。

しゃがんで派手な看板を指でなぞってみると、幾分か鋭くなっているようで義手に張り付けられた皮膚が僅かに歪む。素手だったら指でも切っていたのだろうか？

なんとなく瓦礫に腰を下ろす。

ああ、逃走中のはずなのになにやってるんだろう。でも、なぜかその場から動く気が起きない。やる気が失せてしまった。そもそも、私は逃げてなにかしたいのか分からない。

なんとなく…… ただなんとなく。なんとなく助かって、なんとなく逃げて、なんとなく空を見上げて…… “ なんとなく “ で生きてきた。

目標も、目的も “ 生きること “ にしか見出せなくて、なのにそれすらも失われて、どうしろってんだよ。

瓦礫の上に寝転がって空を扇ぐ。

赤褐色の、環境汚染された空だ。綺麗な青空なんて今は見ることができない。そう思うとなんだか息が苦しくなってくるようだ。

いや、空気も汚染されてるんだっけ？ 中央の島は問題ないだろうが、ここはもしかしたら空気洗浄機がないのかもしれない。

それはそれで、いいのかな。

目を手の甲で覆い、暗闇に身を任せる。

すると、自分の身動きで出た瓦礫の擦れる音がより大きく聞こえてくるようだ。

眉間を揉むように手を動かすと、ふと影が射した。

仰向けになっているのに、影？ と気になって手を退け、再び空を見上げると…… そこには、鉄板があった。

「っあ」

恐怖に身を竦ませて体が硬直。すぐ近くで 「うぷぷぷ」 なんていうふざけた笑い声が響き渡る。

「っやだあー」

死にたくない！

咄嗟に出た考えはやはりこちらの世界で産まれた頃と変わらない。すぐに私がすり潰され、真っ赤なジャムに生まれ変わる。けれどおかしなことに、ジャムやペーストになっても “目を瞑っている” という感覚が存在した。

なにか変だと疑問に思い、一生懸命瞑った目を開くとそこにはなにもなかった。というか、死んだはずなのに思考できること自体がなんだがおかしい。

あの不気味に光る赤い左目のモノクマだってどこにもいない。

飛び起きてから急いで辺りを見回して、歩き回ってみるが私以外のものは瓦礫だけで他の物はどこにも見当たらない。

いや、ある。モノクマだ。それもジャンクモノクマみたいな恐ろしい姿形をしたもの。それが私に襲いかかる。

なにも持っていない私は絶体絶命だ。モノクマを見失わないように正面を視界に入れながら後ろに下がっていく。

「つううう……」

そしてとうとう追い詰められる。

背後にはもう、瓦礫の壁しかなかった。

ガオーなんて、ノイズ混じりの呑気な声をあげながらモノクマが飛びかかり、私は咄嗟に顔を手で覆った。

「……？」

どんな痛みでも受け入れる覚悟で構えたが、なんの衝撃も来ない。それを不思議に思っそろそろと脛を押し上げると、そこには無残に潰れたモノクマの姿があった。

「あ、れ？」

ころりと小さな石が足元に転がる。

「いてっ」

小さな石飛礫が頭に当たり、痛みにも悶えながらそれが “落ちて

きた方向を見ると…… すぐ目の前に大量の瓦礫が降ってきていた。

尻餅をついて、目を見開く。その次の瞬間には、また頭蓋骨が割れ、

きつとこれは罰だ。

私がやってきたことが幻覚として襲いかかってくる。

もう脳味噌がぐちゃぐちゃでおかしくなりそうなほど実感した。

許されるわけがない。いや、許されてはいけない。それが本能的に分かっているからこそ、抵抗なんてできずただ肩を抱いて震えるしかなかった。

なにが動いても、それこそ風が吹くだけでも身が竦んで動けないんだ。

「つもう…… やめてよ……」

そんな状態でも、私の耳は僅かな足音をキャッチした。

いや、これも幻聴なのかな？ 今度は誰に殺されてしまうのか。

諦観が浮かんだ顔で視線を上げる。視線が定まらない。目が霞んでいる。よく見えない。体の動かし方を少しの時間見失っていたよ
うで、 “ 見上げる ” という行為さえ難しかった。

「……」

「…… つは、あくしゆみ」

そこには、ガスマスク越しにも分かるほど瞳を潤ませてこちらを見つめるメイがいた。

最後にこれを持って来るとは、私の幻覚も大概いい趣味してるよ。

「なんのつもり？ …… まあいい、今度こそ私はキミを殺してみせようか」

都合の良い位置に転がっている石を手に取り、思い切り彼女に向かって投げれば開戦だ。

「……」

彼女は話さない。

「あのね、キミがいくら努力したってさ。キミが大好きな “ お嬢様

” なんて帰ってこないよ？」

視線で武器になりそうな物を探しながら、やれやれなんてポーズで嘲笑う。

「こんな私でごめんね。残念ながら純粋な “ 狛枝風 “ ちゃんは殺されちゃいましたってね。他でもないキミにさー！」

私を絶望に堕としたのは紛れもない、メイの行動そのものなんだから。

「キミはいい加減諦めるべきだと思うよ？ 諦めも肝心ってね。殺してくれないキミは用無しだよ。ほらっ、新しいご主人様の前で尻尾でも振ってこいよ！」

煽り倒し、挑発し、叫ぶ。

けれど彼女は表情の確認しづらいガスマスクを被ったまま首を振る。

「あなたは、まだ死にたくないと思っっているでしょう？」

「はあ？ デタラメなこと言わないですよ。キミに殺されるなら本望だって言ったの覚えてないの？ それとも私からの甘えなんて要らないって？」

「……」

突然、突っ立っていた彼女が走り出し、間合いを詰め始めた。

案外早いその攻撃に私は不慣れな義足で追いつけず、倒れ込む。

首元にひやりとした感触があてがわれ、ああナイフなんて持ってたんだなど変なところで感心するよ。

私は、とつくにこれが幻覚ではないと気づいていた。

「ならなぜ、目を瞑るのでしょうか？ 怖くないのでしょうか？」

「屁理屈言わないですよ。これはただの反射的な反応だよ。自然なことですよ？」

「そちらこそ屁理屈をこねるのはおやめになってください。素直に私のお話が聴けないのなら駄々をこねる幼児以下ですわ」

「言うねえ…… そこまで言われるとさすがにムカつくや。いいよ、少しなら聴いてあげる」

前世からの年齢合わせて大分あるというのに幼児以下？ それって精神的にお子ちゃまって言いたいわけ？

まったく、これだから大人は……

「率直に言うと、あなたは馬鹿です」

「はあっ!？」

「お静かに。人の話は最後まで聴きましょう」

うわっ、すごい煽ってくるなあ。なんだよもう。

「あなたはテレビの視聴も途中で投げ出したでしょう?」

「テレビって?」

「コロシアイ学園生活です」

「そんなの見る価値ないって」

「ほう、ならなぜ…… 私が1度江ノ島盾子に従っていたことを知っているのでしょうか?」

「……」

それは、まあ確かに途中で視聴を投げ出したのは確かだからね。

「あれは…… あなたの居場所を探るためにしたことでした」

「…… そんな嘘、私が信じることも? 嘘は嫌いだって言ってるよね?」

「どうぞ、そう思いたいのならばご自由に」

ああもう、本当ムカつく対応だ。

「私はあなたが学園にいるからこそ、スカウトを受けたのです。なのにその学園にあなたがいない。探さないわけじゃないですか」

筋は、通っている。

「きっかけは最初の動機でした。あなたが映っていました。つまらなそうに教室でクジを引きながら、早く入学してくれと。クラスメイトを紹介するからと」

そういえば学園長に言われてそんなビデオレター撮ったな。

「次の瞬間には、教室は荒れ果て殺人現場のようになっていました。心配しないわけ、ないじゃないですか」

まあ、メイなら監禁場所に殴り込みに来ることなんてありえるけれど。

「だからモノクマと取り引きしました。協力者になる代わりに、あなたの居場所を教えるようにと」

「でも、キミはあいつに忠誠を誓ったでしょ? それを私が見るとは思わなかったの?」

「私、言いましたよね。 ”私の主人はただ1人だけです ”それは、あなたのことなんですよ、風……」

なんだその言葉遊び。まるで……

「私、モノクマが主人だなんて1度も申しておりませんわ。嘘では…… ありませんよね？」

まるで、私と同じことを。

「は、ははっ…… よくできた嘘だよね…… 思わず信じそうになっちゃったよ。でも騙されないよ？ 残念……」

姉妹揃って、なに、してるんだか。

「さて、もう1度質問しましょうか」

「まだなにかあるの？」

「あなたが私の話を大人しく聴いてくださったのはなぜでしょう？死ぬのは怖くないのでしょうか？あなたの言う所の “嘘” を聴きたくないのなら、無理にでも動いて距離を取ればいいじゃないですか」「っあのね」

言葉が出なかった。

前の私なら躊躇いなく首から出血することも厭わず脱出しただろう。ナイフを持った相手に首を差し出したままなんて馬鹿のすることだ。大人しく話を聴いたところで解放されるとは限らないのだから。

「もう1つ…… 本当に殺して欲しいのなら、涙を流すのをやめていただけませんか？」

「質問じゃ、ないじゃん……」

彼女の顔が近づけられる。

首に当てられたひやりとした感触が食い込んで来る。

そのたびに溢れる涙は止めようとしてもどんどん奥から溢れてきて抑えきれなかった。どうしてだ。死にたいはずなのに。彼女に殺されるのなら本望のはずなのに、どうしてこんなに涙が出るんだ。

「あなたの望んだ結末は、どんなものですか？教えてください」

「…………… なっ、と…… いき…… た、い」

なんだ、この気持ちは。

プログラムにかけられる前はこんな風に “おかしく” なったりしなかった。なのにどうして勝手に口が動くんだ。

「あなたは死にたいのですか？」

「し、にたく…… なんて…… ないよっ」

おかしい。私はおかしくなってしまうたのか？

「あなたの渴望した未来は…… どこにありますか？」

「みんな、のところ、に……」

どうしてどうしてどうして。

「あなたが命懸けで掴んだ結果は、無意味だったんですか？」

「無意味なんかじゃないっ！」

命懸け……？ なんかのことなのか分からないのに、どうしてこんなに勢いよく否定した？

「あなたは約束を破るような薄情な方でしたか？」

「約束……」

待って、待って。そんなにいっぱい言われても分からないよ。

「また一緒に、皆様と一緒に遊びたいのではないのですか？」

「わ、たし…… 私は…… つうううう！」

仰向けだからか、このまま自分の涙で溺れてしまいそうだ…… なんて。

「くろうさぎさんとやり遂げたことは無駄ではないでしょう……？」

「う、さぎ…… と、がみクン……？」

確かに彼は詐欺師だけど黒うさぎって。なんて単純な…… あれ、なんで、すぐに彼だって分かったんだろう……？ あれ？ あれ？

「何度でも問いかけますよ。あなたは、どうしたいのですか？」

「死にたく、ない。みんなと…… 皆と、生きていたい……」

私がそう言うと、彼女は静かに微笑んで空いた手で私の髪の毛をすくい取った。

「…… よくできました」

優しく、子供に言い聞かせるように。

「ずっとあなたに誤解されて苦しんでいました…… けれど、その誤解を植え付けた私をもっとあなたを苦しめていました。こんな私を、許していただけますか……？」

こんななの、ずるいよ。

「許す。許すよ。メイこそ……信じられなくて、ごめん」

「いいえ、私が考えなしたったのです」

「メイ……でもね、私のことは許さないで。お願い」

たくさんの人を不幸にした。

私は誰から許されても、彼女にだけは、1番大切な人にだけは許されてはいけない。軽すぎるくらいの罰だろうが、私にできるのはこれくらいしかない。私は自分の罪と向き合わなければならぬのだ。

「……畏まりました」

そう言って彼女が離れる。

「あっははははは！ それ、それっ……あははは……」

彼女が持っていたのは、ただの「スプーン」だった。

私は最後まで彼女に騙されていたのだ。

「ナイフとは一言も申ししておりませんわ」

「くっ、ふふふふ……そうだね。そうだよね……っふふふ」

彼女が私を脅しつけるのにスプーンを使った。

その事実について清々しく笑った。そんな騙し方、私くらいしかないと思っていたのに！ 血が繋がっていないのが不思議なくらい手段が似ている姉妹だよ。

「まだ完全には思い出せないんだけど……なんとなくプログラム中に居た私の気持ち分かるよ……おかしいね、記憶は上書きされな

いと思っただけだよ」

「1度経験したことはリセットされたとしても、なくなりませんよ。そういうことなのでしょう。覚えていなくとも、あなたは覚えているんです。他の皆様もそうでしたよ」

「そっかそっか。人の体って不思議だね」

「ええ」

凶器がスプーンなんていう間抜けな結末だったが、それなりに緊張したし恐怖を感じたためか体は疲労感を訴えている。

「帰りましょうか、皆様のところへ」

「……怒られない？」

「叱られてください」

「……」

お叱りを受けるのは覚悟しておこう。

でも、それができるのは生きているからだ。皆が生きているから。

…… なら、大人しく叱られよう。いくら大声出されようと罵倒されようとして受け入れよう。

全員から叱られるだなんて、夢のような…… それこそ奇跡のような光景に違いないから。

「私、あの建物でカフェなんてものを営んでいるんですよ」

「…… それは、キミのケーキがまた食べるってことだね。嬉しいなあ」

「暫くは栄養をつけていただきたいので、ケーキに限らずたくさん食べてくださいね？ 約束ですよ」

「うん…… 約束」

小指を絡めて指切りげんまん。

なんて既にあげるべき指はないのだが、約束を破るつもりなんてかけらもないのだから必要ないだろう。

「平和な世界に戻ったら、個人経営の小さな喫茶店でもやりましょうか」

「…… うん」

未来へ続く約束。

それが私たちを繋ぐ鎖だと分かっているながら、頷く。

キミから逃げるのは、もうやめたから。

「…… 行こっか」

「ご案内します」

壁に寄りかかっても瓦礫に体を預けても、もう幻覚を見ることはなかった。

「…… さて、俺たちは先に帰るか」

「へ？ 合流しなくていいんですかあ？」

「そんなの野暮だろ？」

「でもお、同じクルーザーなのに先回りなんてできるんですかあ？」

「心配は無用です。僕に不可能なことは……つとと」

「日向さあん、口調……」

「つともかく！クルーザーであいつらより先に帰れはいいだけの話だろ。なら大丈夫だ」

「はあい……」

「待ってメイ！」

「承諾しかねますわ」

「お風呂は1人で入れるから！」

「防水性とはいえ、あなたはまだ義足に慣れていないでしょう。転んだらどうするのですか！そうになったら私…… 私……」

あれから、無事に未来機関の建物へと戻った私たちは盛大に歓迎された。

少し顔色の悪い罪木ちゃんと、なんとオッドアイなんていう格好良いい資質をゲットした日向クンから快く部屋に案内されてパーティーを開くことが知らされた。ゲーム内のパーティーが事件のために中途半端で終了してしまっただから、そのやり直しだそうだ。

食糧は本部からの支給品を各地で受け取った後少しずつ輸送して貯めた分があり、十分に用意されているとのことだ。

そして私は気づいていなかったが、どうやら無印メンバー…… 要するにメイや苗木クンのクラスは全員生存しているらしいことが分かった。

私は途中で視聴をやめてしまったので知らなかった。

ならばIF小説みたいな感じで戦場さんが活躍したのか？ と思っただらそれは半分正解で半分不正解みただった。苗木クンが脱出ボタンで記憶を取り戻したのはもちろんだが、その後は無理がない程度に修正を入れつつ暗躍していたのだそうで…… 我らの超高校級の希望は5章クロ（濡れ衣）に相応しい程度のことをしていたらしい。純粹な苗木クンを返して欲しい。切実に。

いや、いい子だしイメージとは全然変わらないんだけど、笑顔の下で幾通りもの道筋をシュミレートして希望へ向かうための最善の選択を取り続けていたみたいだ。おかげで無印メンバーの絆は記憶を取り戻す前で既に学園時代と同等かそれ以上のものになっていたと聞いている。

江ノ島はどうやら行方不明となっているみたいだが、再犯防止のた

めに云々と苗木クンが言っていたから大丈夫と信じたい。

本人は戦場さんや私たちを庇ったことで本部に呼び出されてしまっているらしいが、それもなんとかしてくれるんじゃないかという無駄な信頼感が存在する。

…… 彼も転生者とかそんなことないよね？

確かめる方法なんて皆無だからさっぱり分からない。

まあいいや。彼は彼の物語。私は私の物語があったということだ。

…… 妹のこまるちゃんには絶望少女のとき散々意地悪をしてしまったので兄の彼に顔向けできない、というのも追求しない理由だ。

控えめに言っても犯罪者の私と超高校級の希望になった彼だと立場が大違いだし。

現実逃避だって？

ええ、まあ…… うん。メイとのお風呂はものすごく恥ずかしかったけど姉妹だしね。気にしない気にしない。

日向クンが1度パーティの準備で呼びに来たときはどうしてやるうかと思っただけで未遂だからね。男主人公の運命に文句言うほど私は狭量じゃない。このラッキー予備学科め。

そんな私も 『髪を下ろしたメイがとても綺麗でした』 なんて小学生並みの感想しか出てこないけどね。

私なんてお湯で湿らせたときでも少しふわふわしてるもの。一瞬の直毛気分を味わうだけだ。あんなに髪が長いのに絡まらないとか羨ましいよ。

もしかしてカムクライズルもあんなにさらさらだったのかな？ 気になる。日向クン、もう既に髪切っちゃってるからなあ。なんかの才能使って髪伸ばしてきてほしい。

…… いや、実際にはそんな失礼なこと言わないよ？

「お嬢様、この島原産の草花で製作した髪飾りがございますがお召しになりますか？」

私が諦めてメイの好きなように髪をいじらせていると後ろから声がかかり、振り返る。そこには赤と黄色の花が使用されたバレッタがあった。しっかりと固定され、さらになんらかの処理が行われて

いるのか草の匂いもなく、壊れることもないようにされている。

こんなもの、いつ用意したんだか……

「一番最初に起きた日向さんが全員分のアクセサリーを製作してしましたよ」

才能の無駄遣いエ……

いや、嬉しいんだけどね？ 生花を使ってアクセサリーとか難易度

高スギイ！

「髪はもうメイに任せておくよ……」

「では、好きにさせてもらいますね」

暫く弄り回らされてできあがったのは編み込みしたハーフアップにバレッタを使用したものだ。白い髪には赤が合うしちよつとおしゃれな気分。ドレスはさすがに拒否した。

なんでもドレスも日向くんが才能を使う練習で全員分作ったとか。ジエバンニが1日でやってくれました。

お土産としてエフェクトにそっくりな黒と赤のドレスをいただきます。

「それではお嬢様。後ほど十神さんがお迎えに来るそうなので、私はケーキの補充とホールへ回ります。どうぞお楽しみください」
きつちりとしたメイドモードで彼女は去っていく。

格好つけたいのか節度を守っているだけなのか、身支度の最中はずっとお嬢様呼びだったね。久々の感覚でちよつと新鮮だった。

それにしても、十神くんってクラスメイトの方だよ？ 御曹司のほうだったら気まずすぎて泣きたくなるよ？ そもそも接点ないし、うさぎクンの方だよ？ そうだよ？

「狛枝、準備はできたか？」

「うっさぎクーン！」

「つな、なにをする!？」

飛び込んだ。

「いや、なんでもないよ。うさぎクンの包容力に包まれたくなっただけ」

「どうした狛枝、気持ち悪いぞ。熱でもあるのか？」

辛辣！ でもそこが好きだよ豚神くん！

いやね、ちよつと緊張で胃がキリキリしてたから豚神くんが相手で嬉しかったというか…… 私本物の十神くんみたいな人とは確実に相容れない性格してるからさ。

「パーティの準備は終わったぞ。後はホールに行くだけだ」

「うん、分かったよ」

彼の案内に従って建物を移動する。

義足も普通の足のように人工皮膚が張られているためいつものブーツを履いている。と言っても私のブーツに似せたものをメイが用意してくれただけだ。私のお気に入りは色々とべつとりくつついて処分するしかなかったそうさ。まあ、それは仕方ない。

パーティ会場には既に全員が集まっていた。

中央には大皿料理多数のビツフェ形式で並んでいる。野菜類やデザート類はそれぞれ別のテーブルに置かれ、混雑を避けた作りになっている。

肉料理のテーブルは一番大きいので反対側で約2名が占領していたとしても十分料理が行き渡るだろう。

ケーキは恐らくメイの手作り…… これは気合を入れて食べなければ。

病人並みの健康度でいきなり詰め込みすぎるのは良くない？ そんなこと知るか。私はメイの手作り料理を何年ぶりに堪能するんだ！

「えーつと、これで全員集まったか？」

ちよつと高いところに日向くんが上がり、未来機関の4人はそれを見守っている。苗木くん、霧切さん、十神くん、不二咲くんの4人だ。うつろちゃんと織月は近くで壁に寄りかかってそれを見ている。あの人たちもあくまで未来機関所属のはずなんだけど…… それをまったく考えていないようにしか見えない。

あ、手を振って来た。やつほー織月姉さん。

「あんまり飾った言葉はいらないよな。長くなつて我慢させるのもかわいそうだし」

そうやって向かった視線は肉料理の前でスタンバイしている終里さんだ。きつちり号令がかかるまで待っているので確かにあれは早く解放してあげたい。

「それじゃ、全員生還を祝して…… 乾杯だ！」

そこかしこで乾杯！という言葉が響き渡る。

皆それぞれ近くにいた人物とグラスを交わしあっている。かくいう私も給仕されたシャンパンを豚神クンと交わす。チン、と良い音が鳴った。

苗木クンたちはまだ未成年だが私たちは既に成人している。念願のお酒も解禁だ。

あまりに苦いものは実は苦手なのだが、ビールでなくてシャンパンやワインなら普通に飲むことができる。

私は近くにあつたテーブルにグラスを置き、まず野菜料理に向かつて突進していく豚神クンを見送る。なぜ肉料理じゃないんだろうと気になって同じく野菜料理のビュッフェへ向かうといくらか会話が漏れ聞こえてきた。

どうやら肉料理に飛びついていった終里さんを野菜料理の方へ引きずって行った模様だ。

内容的には肉で腹を埋めるのではなく、野菜から食べることでより多くを食べることが云々。料理を楽しむための伝授をしているようだった。いや、「昔言ったことを覚えてないのか」と声を上げているところを見るに、同じようなことが前にもあったのかもしれない。

そういえば学生時代に第3食堂の備蓄がバイキングチケットを使用した生徒約2名にて食い尽くされたことがあつたらしいが……もしかしてそれかな？

生徒用の備蓄全てを平らげるとかどんな胃をしているんだ。自分の体以上の質量があるだろうに。大食いキヤラの体がどうなっているのかは永遠の謎だな。

「あれ見ると野菜食べなくなるね」

「あー、あれだけ美味そうに食われちゃえばなア」

「左右田クンもその口かー。ま、肉料理でされると困るけどね」

「ああ」

お隣でサラダを取っている彼と軽く話す。

当たり前だが昔あったような怯えなどとつくに消えてなくなっている。お互いに犯罪者だったからね、今更だね。グロ耐性なんて全員ついでると思うよ。

「……もしかして左右田クンもプログラム中の記憶ある？」

「オメーまだ戻ってねーのか？ ま、そのうち出てくるだろ。バックアップも削除されてマシンを使った記憶復元装置なんかは使えねーし、自力で取り戻すしかないぞ。もしくは……日向なら記憶処置ができるかもな」

皆に訊くと大体の人はプログラムでの出来事を思い出しているらしい。日向クンに至っては最初から覚えていたみたい。でも江ノ島アルターエゴも……七海さんもすっかり消えているみたいだし、なんか都合が良すぎる気も……まだなにかあるのかなあ。

豚神クンも思い出すのに大分時間がかかるらしいし、プログラム内で死んだことが関係するのかもしれない。

別撮りしていたらしい記録映像を苗木クンたちに見せられたときはびっくりしたよ。まさか昔のままの私があんな選択をするだなんて、今でも信じられない。

あんなに熱血になれるだなんて……自分のことなのに、ちよつと嫉妬してしまっただくらいだ。早く記憶を馴染ませて思い出せたらいいな。

「んーと、今はとりあえず日向クンは頼らないようにするよ。自力で思い出したいし」

「そーか。なら頑張れよ」

「うん。あ、左右田クン、良かったらあつちのデザートも食べてね？」

メイの手作りケーキだよ。いつかお店出すからタダで食べられるのは今のうちかも！

「お、おう……お前らホントにシスコンだよなア」

若干引かれたけど宣伝成功！

あ、あとと言わなくちゃいけないことがあるよね。

「左右田くん…… そのこのチーズ、カースマルツだから気をつけた方がいいよ」

「は？ 一体なにつ、が!? ヒィィィィィ!？」

1個だけ隔離されてさらに透明なケースが被さっているからなにかと思つたらゲテモノチーズじゃないか。誰だよ、こんなの手配したの。

崩れてるから多分 “ 中身 ” は回収済みだと思うが、実態を知っている人にとってはちよつと近寄りがたい。

カースマルツはイタリア産の伝統的なチーズだ。けれど、その実態はウジ入りチーズである。穴を開けて移動させることでふんわりとした美味しいチーズになるとか…… 要するに珍味。

その説明を読んでしまったらしい左右田くんが絶叫をあげながら逃げそうになる。

「義足と義手、ありがとね左右田くん」

去り際の彼にそう投げかけたが、伝わっただろうか。

最後までいたずらしてごめんね。

「サラダサラダ〜」

つと、モツツアレラチーズやらカッタージチーズやらサラダに使用されたチーズはなめらかで美味しいんだよね。ミニトマトもつやつやでとても美味しい。環境汚染のせいで室内栽培らしいけれど、ポツプには超高校級の農家が関わっていると書いてあるので信用できる。

トマト苦手な人でも甘いトマトを使われているから安心だ。

とういかサラダ系はその農家さんが監修している野菜らしく、各地支部に支給されているものを長期保存できる冷蔵庫に入れて仕入れてきたらしい。

もちろんその冷蔵庫を作ったのは保護されたあとの左右田くんなんだつて。未来機関に協力することを技術提供することで示したのだとか。

美味しく野菜を頬張った後、いくらかの肉料理も取りに行く。

こちらは南国料理中心だったり洋食だったり様々な料理が並んでいる。

私は脂っこいものが苦手なのであつさりしたものを選んでお皿へ。るんると料理の彩りを楽しみながら最初にいたテーブルへ戻つて来た。

いつの間にか飲み干したグラスの替えが置いてある。仕事が早い。そして辺りを見渡すとうつろちゃん和織月が中央の方でなにやらシャンパンタワーを作ろうとグラスを並べている最中だった。

周辺は式大クンや豚神クンが見張っているので制作も安全に行われている。パフォーマンスだろうか？

「凧つちやーん！」

「あれ、皆」

呼ばれてシャンパンタワーから視線を外すと、近くのテーブルにトワイライト組が集まっていた。

それぞれ好きな料理をお皿いっぱい盛って、それを小皿で取り分けながら和気藹々と食事しているようだった。いちいち取りに行かないように工夫したらしい。

「いっぱい食べるのはいいことなんだけどね…… 赤音ちゃんたちを見てるとお腹いっぱいになっちゃうのよ」

「あの女がいちいち服のボタン飛ばすからおねえが心配するんだよねー。ほっとけばいいのに」

「そういうわけにもいかないでしょ?」

苦笑して小泉さんがサラダを食べている。カメラを汚さないようにバッグに入れ、テーブルの下に置いてあるみたいだ。その代わりに首に下げているのはトイカメラのほうだ。咄嗟のシャッターチャンスにはこちらを使っているらしい。

食事がある程度終わったら一眼レフで皆の写真を撮りに行くのかもしれない。

「唯吹のステージもあるんで楽しみにしててね！」

「あ、あの、私本当に動かなくていいんですかあ?」

「蜜柑ちゃんはいいのよ。料理はアタシたちで取ってくるから」

あー、罪木ちゃんが取りに行ったら大惨事決定だもんね。

「狛枝さあん！ 可愛いですよ……」

「えっ、あ、ありがとう…… 罪木ちゃんも結ってるの可愛いよ」
そう、髪を結っているのは私だけじゃないのだ。

小泉さんはおしゃれなカチューシャをしているし、西園寺さんは大人バージョンでポニーテールだし、瀧田さんはツノは相変わらずだけれどいろんなところに編み込みが見られる。皆おしゃれさんなのだ。

罪木ちゃんはツーサイドアップ。要するにやみつきと同じように左右で軽く結ばれ、後ろ髪を垂らしている状態だ。彼女に良く似合うパールリボンが使われている。

控えめに言っただめちやくちや可愛い。本人はざんばらで結びづらくてごめんなさいなどと言っているが可愛い。後で小泉さんに写真をもらおう。

全員だ…… 全員分のだ…… 不二咲くんにはプログラム内の浴衣姿とかもプリントしてもらおう予定である。

完全に変態だなこれ。

「さて、どうしようかな」

九頭龍クンと辺古山さんが視界に入ったがいい雰囲気なので突入するのはやめておこう。いい加減結婚しろ。

ときおり料理の補充に出てくる花村クンは忙しそうにしている。

となると、未来機関組は…… いた！

「やあ、こんばんは苗木クン。会えて光栄だよ」

「粕枝先輩、楽しんでてもらってるみたいで良かったです」

「…… ごめんごめん、格好つけた。敬語と先輩付けやめてもらっていい？」

なんかくすぐつたい。

「ふんっ腰抜けめ」

「だめよ、十神君。彼女は間違いなく一番勇猛だったんだから」

「あははは、な、なんかごめんなさい」

ふん、こっちの御曹司がかませなことぐらい私だって分かってるんだからね！ 霧切さんの言葉も刺さったとか傷ついたとかそんなことないぞ！

「あれはただの蛮勇だよ。私が自慢できることじゃない。ま、結果が

大事だよ…… こうやって皆生きてることだし」

「そうだね…… ボクもキミたちが生還したことが嬉しい。途中かなりハラハラしてたけど」

「それは…… ごめんね。あ、そうだ苗木くん」

「なんですか？」

「…… 妹さんと腐川さんに邪魔ばかりしてごめんねって伝えておいてくれないかな？」

絶望少女時代は監禁されていたし、モノクマは怖いし子供たちは横暴だしでストレスマツハだったんだよね。そのせいで大分辛く当たったり、絶望少女本編のように邪魔したりしてたから謝っておきたい。

本当は直接謝りたいけれど、しばらくはこの島から出れないだろうしね。

「しっかりと伝えておくよ」

「よろしくね」

そのことを妹から聞いてるだろう彼は、笑って許してくれた。

うわあ、苗木クンの笑顔癒されるう…… っと、このままだと霧切さんやら別のところにいるだろう舞園さんやらに怒られそうだ。退散退散っと。

「あ、ちよつと待ってえ、狛枝さん！」

そう言っって駆け寄って来たのは、パーティ中どこかに行っていたらしい不二咲くんだった。

「どうしたの？」

「えつとお…… 紹介しておきたくて……」

息を切らしながら言う彼の回復を待つて背中をさする。

「あ、ありがとお…… 急いで準備してきたから疲れちゃって……」

確かに彼とは自己紹介してないな。でも学生時代でも少なからず会ったことはあるはずんだけど……

「…… それじゃあ、自己紹介お願いねえ」

彼が差し出したのは、1つの端末だった。

「…… え？」

端末が立ち上がり、そこに浮かび上がったのは…… 見覚えのある人物だった。

『こんばんは、超高校級のゲーマーの七海千秋です。といっても、性格がまったく同じってわけじゃないんだけど…… 皆のことを教えてもらいながら成長していきたくないなって、思うよ』

「七海ちゃん!」

思わず口をついて出た言葉に自分が信じられない。

記録を見た限り私は彼女とそこまで親しくならなかったようだが、学生時代の私は別だ。既にちゃんづけするほど仲が良かった。

でも本物の七海さんは私たちの目の前でおしおきされてしまったし、プログラムの七海さんも消去されたはずなのに……

「さすがにまったく同じだと本人が…… あ、えつとなんでもないよお。えつと、この子は真つさらな状態だけど、記録映像は見せてあるし、ある程度この島についてのこととか教えてあって、パソコン関係のことならほとんどできるから僕がいなくても島のセキュリティは安心だよお」

『私は皆のサポートキャラクター…… みたいなものかな。よろしくね』

そっか、これからも一緒にいられるんだね。

おつと、目にゴミが……

「よろしく、七海ちゃん」

画面越しに握手したところで不二咲クンが「まだもう少し調整があるから、もうちよつと待っててねえ」と申し訳なさそうに言った。この感じだと皆はもう知ってたのかな。私が最後の挨拶だったみたい。

不二咲クンが去った後、ホール中央から盛大な拍手が響いた。

「できたー!」

「はふう……!」

どうやら織月とうつろちゃんがガラスのタワーを完成させたらしい。い。

いよいよシャンパンを垂らすようだ。

辺りが放送と共に薄暗くなり、どこからかタワーに照明が充てられる。大きなタワーの後ろに立った織月は花村クンからシャンパンと、水筒のようなものを受け取ると両方をいっぺんに流し込み始めた。するとそのあたりにもくもくと煙のようなものが溢れ出し、シャンパンは入れられた端から凍っていく。

最終的には滴り落ちるその様も凍りつき、凍ったシャンパンタワーが完成した！

なるほど、あれは液体窒素かな？面白いことをするなあ。

凍っているからキラキラと光つてとても綺麗だ。あれなら崩さずに移動もできるし。

凍ったシャンパンタワーは拍手と共に下にしている台で邪魔にならない位置まで下げられた。それから照明が付き、和やかなパーティーが再開される。

そろそろデザートも食べたくなくなって来たのでデザートビュッフェへと来ると、宝石箱のように見た目にも気を使ったお菓子の数々が視界に飛び込んでくる。

ほのかに甘い香りがそこら一带にされていて、別腹がよいしよと準備しているのが分かる。メイの手作りだから普段使えない別腹も出動だ！

「あら、狛枝さんもケーキですか？」

「うん、ソニアさんはなにかオススメある？」

既に幾つか食べただろう彼女に訊くととあるケーキを指し示される。

フォンダンショコラにチョコレートケーキ。チョコレートがふんだんに使われたケーキたちだ。

「実は祖国のチョコレートが使われているんです。名産品ですので、是非いかがですか？」

「それは楽しみだね！」

ノヴォセリツク王国の名産品はチョコレートだったっけ。マカngoとかスcongの印象が強すぎて忘れていた。言葉に甘えてたくさんチョコレートケーキを食べよう。

「ありがとうソニアさん」

「お好きなら今度祖国へ戻った際に仕入れて来ますよ」

「ん、あれ、ソニアさんの国は大丈夫……なの？」

「ええ、不二咲さんによると無事なようです。わたくしのことで大分混乱させてしまいました。皆強き者たちです。国民たちの中にはわたくしを信用できない者もいるでしょうが……どんな目に遭おうともわたくしは祖国へ1度戻るべきです。それがわたくしなりの罪の向き合い方ですから」

目を伏せて微笑む彼女に私も笑みで返す。

もしかしたら犯罪者の烙印を押されるかもしれないが、それも罪。彼女は人殺しまではしていないと思うが、先導者だったからね。

どんなに人気な王女様でも反感は買うだろう。茨の道だと思いがその道を自ら進むと言うなら引き止めることはできない。

「そっか、応援してるよ。疲れたらまた息抜きに遊びに来てね」

「ありがとうございます。それと、今回のことで少し情報が古いことが分かってしまったので勉強のし直しですね」

「……なんの勉強？」

「トレンディードラマとアニメです！」

あ、うん、そうだね。この子本当に大丈夫かな？

きつとそんなところが親しみやすさを感じるんだと思うけど。

給仕をして回っているメイにチョコレートに会うワインを貰ってテーブルに戻る。ソニアさんは壁の花になっている田中クンのところへケーキを持って行った。

……ポカポカと体が温かくなってきたので少し酔っているかもしれない。

「はふー、お姉ちゃんのケーキは美味しいなあ」

うつとりとケーキを摘んでいるとパシヤリと軽い音。

横目で音の発生源を辿ればカメラを構えた小泉さんと、録音中という看板を首からぶら下げた西園寺さんが……

「さ、西園寺さん!?! 今の消してー!」

「やーだよー」

「ま、待って待って！ ああああああ!？」

「ひやああああ！ ごめんなさああい！」

西園寺さんをダツシユで追おうとした私はふらつく足で誰かにぶつかり崩れ落ちる。声からして相手は罪木ちゃんだった。

「ふあつ、ご、ごめん罪木ちゃん！」

「い、いえ大丈夫ですう……」

私が先に転んだからか変なポーズになることもなく押し倒してしまっている。ひよっこりと顔を出した西園寺さんがいたずらっ子の顔で再びカメラのフラツシユ。

「やめてええええ！」

私の叫びは虚しく散っていった。

「うわあああ、恥ずかしい……」

「だ、大丈夫ですよ！ 可愛かったですからあ！」

ごめんね罪木ちゃん。そういう問題じゃないんだ……

ダメだ…… 酔っているからいろいろタガが外れている。少し休んでこようかな……

「…… そういえば、日向クンどこに行っただらろ」

ついでに1人寂しい予備学科でも探すかな。

足元に気をつけながら、酔い覚まし代わりに梨ジュースを2つとお皿1つを持ってきよろきよろと辺りを見渡す。会場内にはいないのかな？

「みんなー！ 今日は来てくれてありがとうー！」

せつかく始まった瀧田さんのライブだけれど、残念ながら酔っている私には大きな声がちよつときつい。

そそくさと会場を出てなんとなくこつちかなと思う方向へ向かう。

あの日向クンが完全にいなくなるとは思えないし、きつと皆の声が届く距離にはいるだろう。

そう思っって近場のテラスを覗くと、ビンゴ。

すっかりと空には月が上り、夜となっている。その下で彼は酔い覚ましするようにパタパタと自分を仰いでいた。

「こんなところにいたの？ 日向クン」

「粕枝か…… どうした?」

「いや、キミの姿が見えないからどこだろうって思って。あと、酔いを覚ましに」

「そうか」

へえ、テラスにもテーブルなんてあるんだ…… なんて思いながら2つの梨ジュースとマカロンが乗ったお皿を置く。

「キミ、料理食べてるの? せっかく花村くんが作ってくれたんだから食べない」と

「ああ、ちゃんと食べてるぞ」

確かに、側には空のお皿が置いてある。

「…… キミもどう? 梨ジュース」

「くれるのか?」

「うん」

「ならもううな」

なんだか、いつもと違って調子が狂う。

少しだけ大人っぽいというか、カムクライズルだった影響だろうか。

「ほら、乾杯」

「…… かんぱーい」

差し出されたグラスに自分のグラスを合わせて少しだけ飲む。

甘い、甘い梨の味だ。人工甘味料だとかそんなことはどうでもよくて、ただ単に梨が好きだから選んだのだが、彼はそういうの気にするだろうか?

いや、美味しそうに飲んでくれているから気にするだけ無駄か。

そういえば彼にプレゼントされることはあるけれど、渡したことはあんまりない気がする。喜んでくれていると、いいんだけど。

「粕枝、お前は記憶を取り戻したくないのか?」

唐突にそんなことを言った彼を横目で見てみるが、なにを考えているのかよく分からない。

「いや、自分の意思で思い出したいからキミの協力は必要ないよ。残念、余計なお節介だったね」

「そっか、それは残念だな」

やはり彼に皮肉は効かない。

怒るでもないし、なんとなくこのやり取りは気に入らない。

もう少し前の日向クンみたいにこう…… 打てば響くみたいな

……

「狛枝」

「…… なに？」

大人気なく拗ねてぶつきらぼうに返事を返したら、月を見上げていた彼はいつの間にか正面から私を見ていた。

赤と枯れ草色の瞳がこちらを真っ直ぐと見据えている。

それに応えようと正面から向き合えば、彼は微笑んで言った。

「おかえり」

私は息を飲んだ。そして様々な想いが胸中を行ったり来たりするような大混乱に陥り、心の奥底から湧き上がってくるような感情に任せたまま、口にする。

「ただ…… いま……？」

憶えていないはずの記憶を頼りに、ただその言葉に嬉しく思う。

差し出された手に自分の手を重ね合わせ、見つめる。

ああ、なんだろう。ずっとこれを待ち望んでいた気がする。

暗くて怖い場所にいたとき、あるいは明るいのに不穏な場所にいたときか？

不安で押し潰されそうで、でも信じて、待った。待ち続けた。

「そうそう、これ渡そうと思ってたんだよな」

そう言っただけがなにもないところから白い薔薇の花束…… というには少ないが、花束を出した。マジシャンの才能でも使ったのか。

「ほら」

渡された白薔薇の数は13。

花言葉は色々であるが、先程まで巡っていた自分の気持ちを鑑みると、恐らく「約束を守る」という意味が濃厚か。

約束…… そうだ。約束…… 一方通行の約束。確か、そうだった。

「はは…… 日向クンのくせに小洒落たことしちやって
「不服か？」

「ううん…… ありがとう……」

13本の薔薇の花束の意味は、「永遠の友情」

つまり、そういうことだろう。

「えっと、あー、えっと……」

「なんだ？」

「私と、まだ友達でいてくれるの……？」

「当たり前だろ？ これからまた色々ありそうだからな。頼りにして
るぞ」

「…… うん」

そうだよね。

物語が終わった後も、その中で時間はずっと動き続ける。

そこにピリオドが打たれたって、永遠にさよならするわけではな
い。

きっと死んだって、その次がまたあるんだろう。私のように。

私は自分の記憶と才能を憎んでいたけれど、しっかりと渴望した未
来を引き寄せることができている満足なんだろう。

憶えていなくとも、心が、体がそう言っているんだ。これが最上の
結末だったって。

・終わりのその先へ
f l o w

時は、流れ続けていく。

「これからもよろしくな」

「うん、よろしく…… 日向クン」

私はしっかりと、その手を取った。

『 |
』 Y_貴 H
o_女 a
u p
p
o_は y
b t_最 E
t a n
i 良 d
n e の |
d 結
t 果
h 果
e を
b 手
e 手
s に
t に
r 入
e れ
s れ
u た
l た
t !
!

Bad Ending Bad end①【赤錆】

※warning!!

【R15G 殺害衝動と絶望に囚われたさび枝】

ああ、楽だ……

そう、私の中にあつた “ さびつき ” の部分。それに全て身を任せてしまえばとても楽になれた。手に取った鉄パイプは私の唯一の味方となった。

メイがコロシアイ学園生活に巻き込まれ、そして “ あの人 ” のモノとなった今、私に生きる意味なんてなくなった。

それでも、いくらかの監禁生活で鈍っていた死生観は、覆されなかつた。

塔和シテイで再び私は死への恐怖を体験した。

命を狙われ、周りにいた人間は全て食い殺され、上空に僅かに見えたりヘリコプターが墜落し、そして町中にモノクマたちが溢れ返つた。

どこかの誰かさんのように気絶ができなかつた私は直接子供たちにお目にかかることができた。それこそ、幸運だつたのだろう。

みつともなく命乞いをし、そして、これが一番効果的だと自らの出生を語つた。人権を無視された実験に、大嫌いな父親。ある程度幸せだつたことは伏せてあのととき受けた苦しみをより詳しく。そしてそいつらが私の幸運によつて無様に死んでいった事実。

男の子たちはそれでも “ 大人 ” となつた私に否定的だつたが、私の訴えはただ1人に認めさせられれば良かったのだ。

モナカちゃんは思惑通り、私を利用し、そして意外なことに言子ちゃんが 「 泣き顔がきやわいい 」 からと私へ首輪をつけることに賛成した。新月クンも最終的には 「 魔物に腕輪をつける際に自分たちだけでは時間がかかるだろう 」 と肯定の意を示してくれた。

私の命は首輪に繋がれたのだ。

そうして彼らに尻尾を振りながら弱気な “ 主人公 ” 様に邂逅し、物語通りになるよう誘導していく。

その際にいくらか命令された我儘に付き合ったり、モナカちゃん經由で下される “ あの人 ” の意思を遂行した。

最初は結構精神的にきつかった。

大人である私を取り逃した人間を誘導し、私の才能により彼または彼女は不運にも事故死する。

ああ可哀想に！ 私に出会わなければもう少し寿命が延びたかもしれないのにね、あはは。

そうやって才能を悪用し、偶然を装って子供たちに対して従順に。そしてときには遠出して避難民の船を沈めたり、飛行機を墜落させたり…… あとは、 “ 主人公 ” の行く先のシステムをハッキングして謎解きを用意してみたり？

わざとサイレンモノクマに知らせて混乱させてみたり、ハサミでどうやってか切り裂かれた鉄の塊を組み合わせてジャンクを組み立てて遊んだり…… とにかく、思っていたよりも物語の妨害をするというのは楽しいものだったね。

特にエレベーターのハッキング！

あれは最高だったよ。天才を息子に持つ分、彼もなかなかのプログラマーだった。おかげでビーストモノクマをエレベーターに詰める時間も稼げないところだったよ。

プログラムの才能なんてない私が僅かでもエレベーターの制御に干渉できたのはまさに幸運だったよね！

残念ながら、その作戦は塔和シティで大暴れしてくれているメイや織月に邪魔されちゃったけれど。

その全ての背徳感に苦しんでいた私はある切っ掛けにより、それらに快感さえ覚えるようになった。

それは、見知った顔をこの手にかけてしたこと。

避難民に紛れていた “ かみつき ”

彼女を同類だと自身に刷り込んで見逃すことはできた。けれど、我

慢がならなかった。どうしようもなく存在する殺人衝動を抑えきることができなかった。

なぜなら、なぜなら…… そうすることで私が “ 殺される側 ” でないことを実感できて安心できたから。

死にたくない私はそうすることで優越感に浸っていたのだろう。心の抛り所となる写真やぬいぐるみが最初の襲撃でモノクマによって破壊され、そこから少しずつヒビが入っていた良心が、同類を殺す背徳感で粉々に砕けるのが分かった。

希望の妹の物語が終わっても、私は監禁されていた場所から居場所を移すことはなかった。

この機会に知り合ったカムクライズルと一定のビジネス関係を築き、江ノ島盾子からの指令を引つ提げて現れる彼に物資を譲ってもらう。

それが私がアパートで過ごす際の命綱となっていた。大好物の梨なんて、汚染された空気で農家が莫大な損害を被っている中買えるはずもないしね。

その点彼に頼めばどんなものでも用意してくれるから、荒廃した世界でも十分に幸せな暮らしができた。

子供たちからもらった首輪は気に入って今でもつけているし、いつの間にか私は変態になったのかもしれない。

殺人に対して忌避感を抱いていない時点で私はどうかしてる。

抛り所を失い、同族に手をかけ、抗争でホイッスルがジャンクとなった私にはもうなにもない。

私を “ 希望 ” に引き留める物はなに一つない。全て壊されてしまった。

そう、私自身さえも。

「今日は多少使えるかなあ」

とつくに壊れたヘッドホンからはノイズしか響いてこないが、今日は少し調子が良いらしい。それでも、1音2音聞こえる程度だけだ。

あれ、断線してるんだっけ？ じゃあなにも聞こえるはずないや。

あは、そうか、これは悲鳴だったね。うるさすぎて間違えちゃったよ。無音も嫌だけど不協和音の元はしつかりと潰さないよね。

「さようなら」

今日もうるさい避難民を路地裏に引きずり込んで仕事を終えた。

鉄パイプについた血を振って飛ばし、とつくに汚れが落ちなくなつた黒パーカーのフードを下す。

さすがに髪が赤色になってしまうのは嫌だし、お仕事をする際にはフードを被っている。黒いから血も目立たないし。

そして私はさつさと帰宅する。

「二仕事したあとのおやつは最高だからね」

手遅れなパーカーを洗濯機に放り込み、すぐさまシャワーを浴びに風呂場へ直行。この水道設備も何故生きているのか不思議でならないが、絶望となった他の皆のところも大体こんな感じらしい。一説にはカムクライズルがこつそりどうにかしてくれているとか、残党共が “ あの人 ” と同類になった私たちに奉仕しているからとかがあるが、どつちなんだろうね。

風呂場の鏡をふと覗いてみれば、そこにはかつての面影もなく真っ赤に染まった瞳の私が映っていた。

狛枝の瞳は藍色で、かつての私もその部分は藍色だった。髪型がどちらかというときさびつき寄りな私にとつてそれが名前以外の狛枝要素だったのだが、もう見る影もない。

「キミは私みたいになってはいけないよ……ね」

昔見た夢の内容が蘇る。その中の私…… いや、 “ さびつき

” は仲間を手にかけて喜び、その背徳感に恍惚とした表情でその死体を眺めて笑っていた。

「もう手遅れだよ」

私は、あのとときの彼女と同じ目をしている。

そして、きつと鉄パイプを振るとき同じように歪んだ笑顔を見せているのだろうか。

今更友達ごっこをしたところでそう、虚しいだけさ。自業自得だけれど。もう後戻りは許されない。

「投げ所が一つも残されていない」「私」「はきつとこうなる運命だったのだ。」

「なんてね……」

「夢が現実となつてしまつたからにはいくら考えても前に進むしかない。」

「リセット方法なんて知らないし、あつたとしたら今頃この世界は絶望に支配されてなんかいないだろう。」

「1度死んで人生をリセットした私がなにを言うかつて？ だから、死んだ先の未来なんて望んだわけじゃないんだつてば。」

「どうせ死んでもまた無理矢理続けさせられるなら狂つたままでもいいよ。むしろ今は結構愉しんでいる節があるし。」

「精神的な苦痛と罪悪感はいつの間にか通り過ぎて消えてしまつた。いちいち悩んで葛藤するよりずっと生きやすいから構わない。文字通り、生きるのに死に物狂いになつている今の方が大分心に余裕があるし。」

「首輪が好きになつちやつたのはちよつと予想外だつたけど。」

「はあ、お風呂にいとるとなんだかたくさん考えちゃうな」

「血はしっかりと洗い流し、湯船に浸かつてぶくぶく。」

「この瞳の変化は色彩異常なのか、それとも思考は変わらず私のままなのに行いが」「さびつき」「側に傾いたからか？ カムクライズルだつて瞳の色が変わつているし、精神性が別人みたいになつていてどうなつたりするのかな？ 格好良いから気に入っているけど。」

「あ、そうだおやつおやつ！ カムクライズル便の梨が私を待っている！」

「ケーキや果物は手に入りづらいから貴重だ。じっくりゆっくり味わわなければ。」

「身体も十分に温まつたので急いでお風呂場から上がり、ちよつとだけ萎れた髪の毛を飛ばす。」

「首輪はそのままに普段着として使っている適当なワイシャツとスカーフに着替え、るんるん気分で冷蔵庫へと向かい、コンポートにでもしようか？ とかそのままデザートで食べようか？ とかいろいろ」

ろ考えながら扉を開く。

「…… はあ？」

ない。

「……」

圧倒的に食糧が減っている。

その上一番楽しみにしていた梨も消えている。

別に食べたのを忘れたわけでもない。確かに仕事に行く前はあつたはずだ。

なくなっているのはこの荒廃した日常でも数日分の食糧。デザートまで持つて行っているところを見ると数人がかりの犯行であり、突発的なものというよりも前から計画していたような手際の良さだ。私が仕事してた時間はそんなに長くないから、こちらの生活パターンがある程度割れている。

プラスしてカムクラ便が来たのは昨日。

今日が1番食糧が多く、そして盗むのに最も狙い目な日だろう。

部屋の中に靴跡がないことからわざわざ脱いだのだろうが甘いね。昨日は雨だったから部屋の中に靴跡がなくなっただって外に出たらどうかな？ よく考えてみれば、今日のアパートの廊下は不自然に綺麗だった気がする。それも中途半端に。

まったくしようがないな。掃き掃除して証拠隠滅をするのならきっちり全域やつてくれないと。これじゃあ……

清掃員としても役立たずだ

「あは…… 泥棒に相応しい最高で最悪なおしおきってなんだろう？」

わくわくしながら替えのパーカーを用意して水洗いしたばかりの鉄パイプを持つ。滑らないように専用の手袋をして、振るう。

振り心地は御覧の通り、最高だ。

「食べ物の恨みって怖いんだよね」

どんな目に遭わせてやろうかと考えながらしつかりと家に施錠し、

アパートを出る…… わけもなく、身を隠す。

食糧に困った人間が数日分の食糧だけで満足するだなんて当然私は思っていない。あのわざとらしい清掃はフェイク。

私にそんな小細工が通用すると思っただのが運の尽き。文字通りに。いや、運は私が握っているから元々尽きるほどの運もなかったんじゃない？

思惑通り、窓から侵入してきたのだろう人間が内側から鍵を開け、廊下をバタバタと行儀悪く走ってやってくる二人の男。

おやおや、絶望の残党のくせに私の住居を荒らすのか。これはこれは、そういうことかな？

私を知らないか、もしくは…… 最初から “生きる” “為に絶望の残党の振りをしていたか。

いい度胸をしているじゃないか。そういう “生き汚さ” は大好きだよ。大好きだから…… なるべく好い思いをさせてから殺してあげよう。

「生き汚いのは私だけでいいんだよ」

私が生きている実感を得るための獲物は、生き汚ければ生き汚いほど最高だ。

私はコロシアイの被害者には絶対にならない。被害者になるのはキミたちの方だ。ルールのない殺戮ならば、私が万が一にも死ぬ必要はない。

そうやって安心するために。

鉄パイプをスカートの下にしまい、無防備を装う。

そしてなにも知らない振りをしながら部屋に入るのだ。

「あれ、鍵閉めたはずなんだけどな？」

そして襲い来る間抜けの攻撃を避けもせず、受ける。

「いつ……!?!」

尻餅について涙を浮かばせ、なにか罵詈雑言やら良からぬことを企む間抜け共に弱弱しく見えるように後ずさった。

やめて！ 乱暴するつもりでしょう！ エロ同人みたいに！ なんて心の中で呟きつつ様子を伺う。

ああ、なんてスリリング！

1歩間違えれば殺されるよりも酷い地獄行きのこの絶望。思わず恍惚としちゃうね。

さあ、荒廃した世界の極限状態で生きる人間が本能に抗えるわけもないのだ。

早くその本性を見せろ。迷っているの？ 仕方ない、少し後押ししてあげよう。

ナイフ片手に私を怯えさせる男に、恐怖に染まった瞳を見せてやればその方針は簡単に決定する。

嵌めてある首輪の鎖を引く男に今か、今かと待ち受ける二人の男。そのシチュエーションに少しだけ興奮を覚えた私は自分に呆れながらスカートを持ち上げる振りをする。

そして鼻の下を伸ばす馬鹿共の顔面を狙って、手に取った鉄パイプあいはうを一気に叩きつけた。

1番近くにいたやつは今ので鼻の骨でも折れたのか伸びた鼻がだらしくそのままぶら下がっている。ナイフを取り落としたのでありがたく頂戴し、心臓に向かって1刺し。驚愕の表情のまま逝った男を踏み台に2番目に近かった男の心臓を狙う。

ここらでやつと事態が呑み込めたららしい男たちは応戦しようとするも、獲物は今現在私が持っているナイフと同じものだ。簡単に受け流して腕を斬りつけてやればすぐに取り落とした。痛みへの耐性がなさすぎる。こいつらよく今まで生きてこれたな。

最後の1人はみつともなく命乞いを始めた。

私は立場が逆転して腰を抜かして立てなくなっている男の上に乗ると、極限にまで顔を近づけて囁いた。

「部屋を汚したのはキミたちの方なんだから、お掃除してくれないかな？ そうすれば、私もキミのお掃除を手伝ってあげてもいいよ」

わざと際どい位置に手を置き、精一杯の誘惑。

こくこくと頷きながらもこの状況で興奮している変態に私は猶予を与えることにした。

黙ってジュースを飲みながら彼が血で汚れた部屋を清掃するのを

眺め、死体をせっせと運んでアパートから投げ落とすのを静観した。かつての仲間に対して罵倒と悪態を投げかけるさまは見えていても愉快的余興だったと言える。

そして一生懸命になって働いた彼に盗んだ食糧を運び込ませ、一息つく。さて、仕上げだ。

「片づけありがとう。キミも私も血で汚れているから…… お風呂にでも入ろうか？」

血走りかけている目に向かって微笑み、風呂場へと誘導する。

そして先に中へ入らせ、するりと手に忍ばせたナイフを持ってワイシャツとスカートを身に着けたまま彼の後を追う。

疑問を浮かべている男に「我慢ができなかった」だとか適当なことを言って笑いかける。

そしてすぐに飛びついてきた男はぎっくりと、簡単に私の持っているナイフをその心臓に受けた。

驚愕のまま死んでいく彼に最高の笑顔を。

「キミのお掃除を手伝うって言ったでしょう？嘘はついてないよ」泥棒には泥棒を。

彼へのおしおきは「私に心を奪われ」ることだ。もちろんその心臓もね。文字通り？でも、最後に好い思いができただろう。

ああなんて、私って優しいんだらうね！

「最後に浮かべるその表情がたまらない！」裏切りの絶望。

私が最高に絶望させられたその思いを追体験できるだなんて彼は幸運に違いないね。

「あはは、これだからスリリングな遊びがやめられないんだ！」壊れ切ってしまった私を廃品回収してくれる人なんてきつといない。

一生このまま絶望に踊らされたまま過ごすことになるんだらう。

血に塗れて、絶望を伝道し、世界から朝日が消えてしまうように。

あるいは、朝日が昇るころには絶望が消えてなくなってしまうだろう。そのときには私もきつと……

背徳感に、スリルに、そしてこの抑えきれない衝動と快楽に、染まっ
てしまった私はもう後戻りなんてできないだろう。

たとえばプログラムを受けたところで変わってしまった性質は元
には戻らない。

全てを忘れても、それはリセットされたわけではない。私の中の根
本として残り続ける。それは否が応にも私に影響を与えるだろう。
矯正できるようなものじゃない。

まだ罪悪感に苛まれていた時期ならあるいは、矯正が効いたかも
しれないけれどね。

粉々に砕かれた思い出の品々のせいで振り切れてしまった私には
到底関係ないお話だ。

「うーん、おしおきの為とはいえ、無茶したなあ」

まあ、そのスリルがいいんだけど。

「早く片付けないと」

ビニールシートを使って風呂場から男を運び出し、お外にポイ。

部屋をこれ以上汚さないためとはいえ風呂場に男と2人つきりと
か……

「……」

いろいろとまずいよね。

ああ、でもやめられない。急転直下の絶望に堕ちていくあの表情が
忘れられないんだ。

あはは、我ながら趣味が悪いね。

「食糧はつと……」

ほとんど手はつけられていないが、梨が行方不明だ。

「そんな……」

絶望した。

「外で八つ当たりでもしてこようかな」

本日3回目の湯浴みが決定した瞬間だった。

「 |
Yあ B
Oな a
u,た d
rは
e間 E
w違っ n
rて ① d
oい
nま
gす |
」

B a d e n d ②【ひとりぼっち】

1度目の学級裁判は、私と日向クンの一騎打ちで終わった。

この学級裁判が始まるまで私は自由行動をある程度共にしながら皆の観察に努めていた。仲良くするべきか、否か。それはメリツトを取るのならば仲良くするほうがいいに決まっている。だから、感情がどうかは関係なく最低限触れ合うことにした。

それに、今回のイレギュラーなパーティーの開催が決まって「原作通り」に進めるためにもある程度の信用が必要だった。

結局、希望のカケラはあまり集まらなかったけれど。この経験を通して分かったことといえば、カケラの取得条件に双方が楽しむ必要があるということか。

私が無理矢理皆に合わせていたからカケラを取得するのが難しかったのだろう。

手紙を作り忘れて寝てしまったのは失態だった。けれど結局は上手くことが運んだので問題ない。

モノミがバージョンアップし、モノクマに多少抵抗できるようになったところでこの監獄のような島からは逃げられないし、脅迫状の犯人が私だと勘違いされるのも別にいい。

念のため、自分が死なないようにナイフはおもちゃを使い、絨毯の裏に塗料を使用して万全で挑んだ。狂言で終わればそれが最高の結果。

けれど、十神クンが死んだ。

…… 原作通りだ。

ナイフを確認する際床の絨毯をズラしたのが原因か、はたまたこれも原作通りにテーブルの下に潜り込もうとしたのか？ 真相は不明だけれど死んだことには変わらない。

喉元を勢いよく鉄串に貫かれ、声を封じられ、そして何度も何度も体を貫かれて…… 酷い、死に様だった。

私の日常でも怨恨による複数箇所への刺し傷なんて見る機会はないから、思わず口元を押さえるくらいに。

それからも全くもって ” 原作通り ” に進み、無事私は孤立した。

酷い吐き気と罪悪感がのたうちまわる内心をひた隠し、哄笑し、煽り、トンカツがトラウマになるほどの光景を見せつけられ、引きつり笑いをしながら 「自分はこうなりたくなんてないね！」 と宣言し、そして…… 学級裁判場から逃げ去った。

誰一人として私に声をかける存在などおらず、コテージに戻ってからは泣きながら吐いた。

胃の中身を空っぽにして、それでもなお十神クンの姿を思い浮かべてえづく。

生前は頼もしかった彼を、私と腹の探り合いをしながら唯一対等に話せた彼を。

そしてなに一つ真相を知らされずにおしおきされた花村クンを。彼のバックストーリーを知っているのは今私しかない。誰かにそれを話す前に殺された。

…… 他ならぬ、私の手によって。

2人とも私が殺したようなものだ。分かっている。分かっている。そんなの、分かっている！

「私に、嘆く資格なんてない」

それを選んだのは私だ。

引き返すタイミングはいくらでもあった。

それでも ” 原作通り ” に動くことを選択したのは、私。

花村クンという爆弾を抱えてしまうのを恐れた、臆病な私なのだ。

なぜだ？ なにがいけなかった。

誰かが死ぬリスクは最低限にまでしていたはずだ。なのに、死んだ。もう少しなにか方法はなかったのか？ そんなことがぐるぐる頭の中を巡り、あーだこーだと思考を繰り返す。

そうか、下の花村クンを騙す返り血のかわりを用意していなかったとか、そもそもパーティなんて開催させなければ良かったとか、後悔先に立たずとはまさにこのことだ。

でも大丈夫。

前から似たようなことをやってきたじゃないか。今度はそれを意図的に起こしただけ。結果はいつもと…… 幸運と変わりやしない。割り切れ、私。ここで躓いてなんかいたらこれから先進めるわけがない。そうなれば意思の力を失った私は確実に誰かに殺される。

いいか、言い聞かせるんだ。

私はただ “ 死にたくない ” だけ。

私の命を脅かす存在なら、どうなったって私は “ 悪くない ” はずだ。

だって…… 障害物が “ 勝手に死んで行く ” だけなんだから。最強のセコムじゃないか。誇れよ私。

泣いたって彼らが戻ってくるわけがないんだから。

「粕枝さんがこんなことをしてしまったのは、不安だったからでちゅよね…… でも、怖がらなくてもいいんでちゅよ。まだミナサンは会ったばかりでちゅけど、きつとらーぶらーぶできるはずでちゅ。なんならあちしも……」

「うるさいっ！」

どこからかわいて出たウサギは無神経なことばかり。

「怖くなんてない！」

まるで本当に先生みたいだ。今の私には彼女の優しさが身を切り刻むに等しいものにしか思えない。

「ご、ごめんなちゅい…… けど、覚えていてほしいんでちゅ。先生はいつでもあなたの味方だから…… ひえっ！」

思わず投げつけたヘッドホンはモノミの真横を掠め、壁にぶち当たって落ちた。

そしてモノミは逃げるようにどこかへと消えて、私は再び1人になる。

拾ったヘッドホンは壊れてしまった。あーあ、私はなにをやっているんだ。

「…… このまま、進まなければいいのに」

とても眠ることなんてできず、壁に寄りかかって膝を抱える。

久しく感じていなかったひとりぼっちの感傷は、急に周りが賑やか

になったせいかな。

まったく、私が感傷を抱く資格なんてないのに。早くこの気持ちを忘れてしまいたい。

いつの間にか早朝となり、訪ねて来た左右田クンと式大クンには深夜ハイと鬱々とした感情を上乗せして嫌味を言い、やつと日が昇りきった頃に私は眠りに落ちていった。

「あつはは、寝坊した……」

自分に手を出すのならどうなるか分からないぞ？ と誠意ある説得をした結果、原作のように拘束されることはなかったが、代わりに早朝に寝たために大分寝坊をした。今はお昼くらいだろうか。

いずれにせよ、他の皆はとっくに新しく解放された島を見回っているだろう。

皆から置いてけぼりになるのは予定調和にしてもちよつと傷つくが仕方あるまい。それだけのことをしたのは私だ。

「ブランチにでもするしかないね」

冷蔵庫に手をかけ、停止。

これを運んでくれたのは十神クンだったな。だからといって、なぜ冷蔵庫を開けることに躊躇ってしまったのかは分からない。

ただなんとなく、ふと思いついただけだ。

冷蔵庫の中にある食パンをトースターで焼き、手作りの梨ジャムを塗り付けて食べる。

このジャムは昨日、掃除を適当に終わらせて余った時間で作ったものだ。会場の掃除なんて埃さえ落ちてこなければいいし、その他の場所の景観に気を遣うほど皆とは仲が良くなかったからね。表面上の優しい猫かぶりモードで仲良しごっこしていただけ私にとっては上々だ。

日向クンとも、自己紹介以上に傍にいたら自分を見失いそうで怖かったから早々に離れたし、真に私と向き合ってくれていたのは十神クンだけ…… ってまた私は死んだ人のことをグチグチと。未練がましいぞ。

そうだ、こういうときは楽しいことでも考えよう。

梨のジャム作りは幸せだった。

梨とグラニュー糖とレモン汁少々でほんのりと甘いジャムを作ることが出来る。瓶にいくつか取り置いて私専用のものと化している。なので他の皆には欲しがってもあげないもんね。やっぱり欲しくてもないものは自分で作らないと。

花村くんもいなくなったし、存分にキッチンを使うことができるようになった。やったね風ちゃん！ …… はあ。

なんでこんなに虚しいんだろう。

「皆には会いたくないや……」

昼間はゴロゴロしながら過ごして、夜中に活動しよう。そうしよう。

あ、だめだそんなことしてたらレストランが使えない。参ったな。マーケットの家具にキッチンとか…… はなかったよね。そうだよ。私が全部リストにしたんだから間違いない。気晴らしにデザート作るのも皆から隠れながらやらなくちゃいけないだなんて辛いなあ。

別に見つかっても特になにかあるわけじゃないけれど、なんか気まぐずいからね。

2人を死に追いやったゴミクズなんかと出会っちゃう他の皆が可哀想だよ…… って、まるでこれじゃあ狛枝だ。

私が狛枝なのは確かなんだけど。まさにこれが同族嫌悪ってやつ？

「暑い……」

私がうだうだぐーたらしていたら唐突に部屋の扉がノックされた。

また左右田くんたちが性懲りもなく拘束しにでもきたのかな？あれだけ真剣な “ 説得 ” をしたっていうのにどうやらボケキャラに転職したらしい。

鉄パイプの激しいツツコミでもしてやらないと治らないのかな。

ああ、なんでこんなにイラついているんだ。

「……」

「なんだ…… いるじゃないか……」

「なんの用？」

そこにいたのは予想に反して日向クンだった。

昨日あれだけ激しい舌戦をした後だというのにこのこと私に会いに来るその気概は褒めてあげるけど、特に私の方は用がない。今更なにしに来たのかって感じだよ。キミの用なんて知らないから早く帰ってこない？

そんな風に明け透けに言ってみるのだけれど、彼はムツとしながらも譲らなかつた。

「キミ、お昼は食べた？」

「い、いやこれからだけど……」

なんでこの人、自由行動でもないのにここに来てるの？

「残念ながら私は今しがたランチを堪能したところだよ。ほら、用がないならさっさと行きなよ」

「い、いや、本当に食べたのか？お前、レストランには来てないだろ？それと、新しい島に行けるようになったからそのことを俺は話しにだな……」

扉の隙間から見えた日向クンの表情は本気だ。

彼は結構分かりやすいほうだから嘘なんて吐いてないだろう。仕方ない。ちゃんと証拠くらいは見せてあげよう。

「…… パンくらいしかないけど、ここで食べてく？ 見せなきや納得してくれないんでしょ？」

「え？ あ、良いのか？」

「レストランで食べるのならどうぞご勝手に」

「いや、ここで食べていく。それでいいだろ？」

「はあ…… じゃ、入りなよ」

なんで私が我儘言っているみたいなの？ 解せない。

「結構物があるんだな……」

「片付いてないみたいと言わないでよ。これくらいマーケットに行けばいくらでもあるからキミも少しは家具を調達してくれば？」

トースターや冷蔵庫、それに花瓶と雑誌。カーテンやラグもメダル

で揃えているので、借りているコテージというよりもこの一室だけで
ニートしながら暮らせる程度には物が置いてある。

日向クン用にトーストを2枚焼いて私お手製のジャムと作って
あった麦茶を出す。ああ、私だけのジャムなのに……

男の子ってこれだけじゃお昼ご飯にならないよね？とりあえず用
意したまな板と包丁でキャベツを切り続け、山盛りの千切りを一緒に
出す。

マヨネーズ？ ドレッシング？ そんなサービスなどない。天然
ではなく、嫌がらせも少し兼ねているからね。

うーん、あまり気にしていなかったけれど、物を焼けないのは困る
な。旧館からカセットコンロでも持ち出そうかな。そうすれば夜中
にマーケット行くだけで済むし。

「こんな風にしてるんだな」

「まあね。いつ誰が襲い掛かってくるかと怖くて怖くて、その点ここ
なら鍵もかけられるし…… 窓ガラスも飛散防止フィルム張ってる
から簡単に侵入ができないようになってるよ」

「そう、か……」

そのわりに彼を招き入れているのは矛盾するって？

その通り。別に信用しているからとかではない。身を守る術があ
るから気にしていないだけでもない。本当に皆がそこまで危険だと
思っているわけではない。

これはただのポーズだ。

病的なまでに “ 襲撃 ” を恐れ、臆病な奴なんだから刺激をして
はいけない。そう思っただけ。そうして、これ以上関わる前
に見捨ててほしいだけ。

「私ね、人が死ぬところを見るの初めてじゃないんだよ」

「…… そうなのか？」

疑いの眼差しで射貫く彼に微笑みかけて身の上話をしてあげるの
だ。

「裁判中にも言ったけれど、私は幸運なんだよ。でもその幸運は私の
身の安全は保障してくれるんだけど、周りはそうも行かなくてさ。大

切な人は皆死んでいった。それを見ているうちに、死ぬっていうのがすごく怖くなった。誰もが死ぬのは怖いはずなんだけど、私の場合それが身近すぎて、普段の生活ですら安心できなくてさ…… いつの間にかこんなになっちゃって…… 自分のためなら他はどうでもよくなっちゃったんだよ」

「自分さえ生きてればいいってことか？ それって、寂しくないのか？」

その言葉に唇を噛みしめる。

「寂しくないよ……？」

周りに誰もいないなら寂しさなんて感じるはずがないんだから。

「……、そうだ狛枝。このジャムってどうしたんだ？ マーケットにはこんなのがなかったと思うんだけど」

日向クンは優しいね。

わざわざ話題を変えてくれるだなんて。

「自家製だよ？ 私、梨が好きだからさ。昨日、パーティーの前に作ったんだ。酷いよね、世のマーケットにあるのはアップルジャムやブルーベリージャムばかり…… 好きなものを食べるには自分でどうにかしなくちゃいけないんだ」

「そうか。美味しいな、これ。また今度、食べに来てもいいか？」

「餌付けしてキミを殺そうとしているかもしれないよ？ それでも？」

「お前が少しでも “死” に近づく選択をするとは思えない。あんな光景を見せられた後だし、余計な。こっちこそ、お前と仲良くして殺そうと企んでるかもしれないぞ？ そこはどうなんだ？」

「もしそうなら、突発的に適用できる完璧なトリックを作りあげなくちゃね」

「はは、そうか」

ちよつとだけ殺伐とした雰囲気だったが、これも悪くはない。

いつの間にかイライラは治まっていて、ひっそりと彼に感謝した。

—— そんな、優しい夢を見た。

この島に来て数日のそんな記憶。

2回目の学級裁判では、最期に分かり合うことのできた主従に最低な嫉妬を抱き、絶望病に侵されながらもギリギリまで耐えていた。

看病の口実で病院に留まり、夜時間まで過ぐすことに決めていたが、いつの間にか仮眠室で寝てしまっていて……

「粕枝さあん……」

気が付いたら命の危機に遭った。

お腹の上でまたがる彼女を振り払うほどの体力はなく、熱っぽく絡みつくように首を絞める彼女に抵抗する意思すら湧いてこない。

「…… あ、く……」

まるで私の命を弄ぶように、首を絞めてはギリギリで開放し、こちらが苦しむ姿を恍惚とした表情で見下ろす。そのなんと趣味の悪いことか。

ときおり首筋をひと撫でするメスに身体を硬直させ、傷ができれば痛みに、できなければひと時の安堵に呼吸を早める。

思考には矢印が足されたように何度考えても逃げるという選択肢が除外されていく。

いつそのまま死んだらとても楽だと薄い意識が誘導されていき、生存願望が消されていく。昏い悦びに支配され、しまいには自らメスの刃先を求めるように身体が動く。

ほとんど言うことを聞かない身体ではどうあっても死が回避できそうもない。

そもそも、このまま私が先に進めたとして…… 本当に生き残ることなんてできるのか？

4章では餓死の危機に瀕することになる。そこで田中クンが動いてくれれば万々歳だが、そうでない場合は？ 皆仲良く餓死？ 4章を乗り越えても、裏切り者が死ななければ最後の裁判にはならないんじゃないか？ ほら、未来なんて見えないじゃないか。

ここで西園寺さんや滝田さんが死ぬのは分かっているが、私が死ぬとなるとどちらかは生き残るわけだ。

皆から嫌われて、死を望まれているだろう私が死ぬば、小泉さんの

遺志を継いだ西園寺さんが生き残るかもしれない。九頭竜クンのように。

それはそれで、素敵かもね。

「痛いですかあ？ 苦しいですかあ？ 素敵なお顔ですよお……あなたとの絶望した顔なんて、なかなか見られませんかあ」

なんで彼女はさつきとやろうとしないんだ。早くしてよ。

死ぬのなら、あんまり痛い思いをしたくない。早く、早く、早く！

ああ、でも…… そうか、こんなことを思っているからトドメを刺してくれないのか。

「あなたが死んで悲しんでくれる人は、もういませんねえ？ ああ、もつとその顔を見せてくださいよお」

絶望病に抗っていた思考を投げ捨てる。

そうして、諦観を浮かべてそつと目を閉じれば…… なぜか日向クンと話したときの方が頭を過った。

彼は、私の死を悲しんでくれるのかな。

もう少し皆と仲良くしておけばよかったなあ。

ああ、だから…… ね。

その…… 私に歩み寄ってくれたキミには謝らないといけないよね？

言う相手が目の前にいないのはとても残念だけれど。

「どうしましたあ？」

「別に……」

「これから死ぬのに、怖くはないんですかあ？」

絶望病でそれを悦んでる私になんてことを言うんだ。

「……」

「無視しないでくださいよお」

「……」

「わ、私のことを見てくださいよお！」

「……」

これはちよつとした嫌がらせだ。

だって、キミのことを気にしてあげるほど、私とは仲良くないで

しよ？

友達ですらないんだから。

「粕枝さあん……」

「……」

ねえ、日向クン。

私は気にしてもらえて嬉しかったよ。たとえ危険因子を見張りに来たただけだとしても、キミとの希望のカケラが唯一私にとっての支えだった。

だから、心の中でキミに謝らせてほしいな。

…… 諦めて、ごめんなさい。

《 ERRORが発生しました。危険度A。強制シャットダウンを開始します 》

—— 建物内に警報が鳴り響いています。まるでお嬢様と病院から逃げ出した、あのときのように。

けれどももうなりふり構ってはいられませんでした。モニタールームで試行錯誤していた方々には申し訳ありませんが、他の方がどうだろうと私には知ったことではないとは未来機関へ入る際に伝えていましたから、うろつきさんやうそつきさんは理解を示してくださいるでしょう。

苗木さん方にはご迷惑をおかけしますが、それを承知で同行を許可したのはあちらです。

私はお嬢様さえいればいい。

死亡処理が下されるその直前に無理矢理機械を引き抜き、眠ったままの彼女を抱いてクルーザーに飛び乗りました。

この時点でうろつきさんたちは彼らの妨害をしてくださっているでしょう。

ありがとうございます。そう携帯電話に留守電を残し、島を離れました。

凧はまだ目を覚ましません、死亡処理が下される前に連れ出したのでまだ僅かに意識が回復する望みはあるでしょう。

彼女の不本意な死など起こさせるわけにはいかないのです。

そうして辿り着いたマンションに入り、隠れ家として用意していた保存食や薬を確認します。

病院で働いていた経験は生きているもので、手早く栄養を取らせるための点滴や処置を施し、リクライニングベッドへ彼女を横たえました。

これからは私を妹を守り続けなければなりません。

傍の椅子に腰かけ、介護の勉強と趣味による編み物などに勤しみながら私は凧が目を覚ます日を待つことにします。

いつかはこの場所を知っているうろつきさんやうそつきさんも合流することでしょう。もしも、彼女たちと私の思想が合わないのなら、そのときはそのときです。こちらの意志をしつかりと貫きましよう。たとえ彼女たちをこの手にかけることとなってもです。

それでもしないと、また凧が奪われてしまう。

また凧が傷ついてしまう。

彼女にはお母様のような末路を辿らせたくありません。

幸いなことに、この手は幼少期の折から彼女の為に汚しています。あのときのように、邪魔者はこっそりと始末してしまえば良いのです。

ああ神様、どうか私たちに平穏な余生を与えてください。

私は彼女が目覚めるその日まで、ずっと、ずっと待ち続けるつもりですわ。

それこそ、この一生を全て費やしても。

永遠に、永遠に。

それが、彼女を壊してしまった私なりの償いなのですから。

「凧様…… あなたが間違ったら私が正す。でも、私が間違ったら…… 誰が正してくれるのでしょうか？」

私の言葉に返す言葉は、終ぞありませんでした。

| |
Yあ B
oな a
,た d
vは E
eは諦 n
gめ ②
iて |
vし
eし
nまっ
uた
p
|

B a d e n d ③ 【失意】

罪木ちゃんに殺されるのはうまく回避できたもの…… 私はもうどうすればいいのかが分からない。

1人ドッキリハウスに監禁され始めて数時間。外れた肩は無理矢理治したけれど、鉤爪の形の傷跡がじくりと痛んだ。

それから、偶然見つけた私への動機により、さらに自らをボロボロにすることとなった。爪は剥がれ、打ち付けた頭からは血を流し、何度も転んだ末に服の下にはどれだけの痣ができているかも分からない。

罪木ちゃんからもらった包帯はとづくに使い切り、両手を覆っている。

動かすたびにまだ痛むが、爪が剥がれているので当たり前だろう。自業自得とすら言える。自分がパニックを起こさなければここまで酷いことにはならなかったのだ。

「……いつまでも、こうしているべきじゃないよね」
痛みに耐えながら荒くしていた息を必死に整え、深呼吸を繰り返す。

辺りに満ちた鉄錆びた血の匂いがむせ返るくらいに肺の中をいっぱいにした。こんなところにいたらそのうち嗅覚が馬鹿になりそうだ。

それにこんな臭いを振りまいていたら後からやって来るだろう皆に即効でバレるに決まっている。そんなことになるのはごめんだ。

なんとか、この匂いが納まるまで身を隠すべきなのだ。

……となると、やはりそう簡単に辿り着けないあの場所に行くしかないな。

「つくう……」

壁に手について身を引きずりながら移動する。パーカーも血で汚れてしまつて正直着替えたいが、今モノクマに打診しても聞いてもらえないかどうか分からないし、なにより私が真つ直ぐファイナルデッドルームに向かっている事実を言い訳できない。

念のため見つけた部屋を全て確認しながら移動しているもの、さすがにあの場所へ向かっている事実は消しようがない。

「どこか……」

いつものように言い訳やらを考える余裕があまりない。

盲目にファイナルデッドルームへ向かわなかっただけまだ理性が働いていると言えよう。痛みで頭がどうにかなくなってしまいそうな状態でそこまで考えることができているのだからマシだ。

だがどうしても急ぎ足になるのは否めない。早く座りたいし寝転がりたいし、体を休ませたい。

「うっわ……」

壁伝いに辿り着いたその扉をドン引きするように一旦見つめ、迷う素振りを見せる。

ファイナルデッドルームの扉はピエロのような見るからに怪しい代物だからだ。中身を知らなければ絶対に入ることを躊躇うデザイン。それに気づかずさっさと部屋に入るのは不自然だからだ。

暫く迷う振りをして視線を彷徨わせ、頷く。

もしモノクマが私を見ていたのなら “ 発見されづらい場所 ” にあえて身を隠そうとしたと考えるだろう。

それでいい。そう思っていればいい。血生臭さを友達に知られるなんて私は耐えられない。

「……は……う……」

知っていた。知っていたが、思っていた以上だ。

背筋を這うように恐怖が駆け抜けていく。薄暗い部屋、血文字のような数字、鉄格子、そしてぽつんと置かれたパソコン。背後の扉は開けていたのにも関わらず、手を放して呆然としている隙に勝手に閉まってしまった。

それに気づいて慌てて扉を確認するが、鍵がかかっけていて逃げることは叶わない。

案内どころかゲームの説明にすら訪れないモノクマに苛立ちながらパソコンを調べる。そうしてようやくこれが脱出ゲームの一種だと気が付いたように舌打ちをした。

それからは数字を覚えたり道具を探し回ったり、痛む体に鞭打って暗号を解いてパスワードを入力。

働かない頭でときおり間違えながらも作業を進める。間違えたらハチの巣にされるとかのペナルティがなく、心底良かったと思いつつ最後のパスワードを入力した。

ペナルティはもうお腹いっぱい。たくさんだよ。

「……うえ!？」

カチリ、と背後から鍵の開く音がして油断している隙に、目の前に拳銃がせり上がってきて変な声を出してしまった。知っていたはずなのに不意を打たれるとは…… 恥ずかしい。

「クリアおめでとうございまーす!」

ぼよん、という独特の効果音を発しながらモノクマがどこからともなく現れる。

呑気なこいつに私は顔を顰めながら舌打ちをした。

「やだー! オマエボロボロじゃーん! そんなズタボロな雑巾みたいになっちゃって可哀想!」

「うるさい、くだらないことしか言わないならぬいぐるみらしく黙っててよ!」

「そこで追い払わない狛枝さんだーい好き!」

「私はキミのこと大っ嫌い!」

「ああん! すれ違いって悲しいなあ!」

このっ、クソクマ早く説明しろよ。

「で、なんのために出てきたの?」

冷めた目で見つめてみると、モノクマは頬をどうやってか染めながら「ドツキドキするぜ!」とかなんとかふざけたことを言っている。

だから説明するなら早くしろと。

「あ、そうそう後ろの扉の鍵はもう開いてるよ!」

自然になるように視線を扉に向ける。手が思わず伸びそうになるがその前にモノクマから「でも!」と声がかかる。

「この先の秘密の部屋に進むにはもう1つゲームをクリアしてもらわなくちゃいけないんだよね!」

「…… 秘密の、部屋」

今、血の匂いをどうにかしたい私には持って来いの場所だ。それを分かっていてこのクマはもったいぶるようになっている。死ねばいいのに。いや、壊れればいいのに？

「それはね……？ リアルロシアンルーレット！ オマエがこの台に置いてある拳銃でロシアンルーレットを成功させたらこの先に進めるようになるってシステムだよ。オマエなら楽勝だろう？」

まあ、危機は他の人に比べればないとは思うけれど。

「キミの言いなりになるのはムカつくんだよね」

「ガーン！ こ、狛枝さんが反抗期だ…… いいもん。なら最高難易度達成であげようと思ってたマル秘ファイルも廃棄するだけだし……」

こいつ、ホントに嫌な奴だな。

「待って、それってヒント？」

「そうだよ！ せっかくボクが好意で用意してあげたのに…… 日向クンの才能もこれで分かるようになるのに…… お前の大切な人間の情報まで盛り沢山なのに……」

は？ 私の大切な人……？ なにそれ気になる。

元々断る気はなかったけれど、これはますますロシアンルーレットに挑戦したくなってしまふ。

モノクマに憂き晴らし感覚で煽ると良いことあるね。よし、これからもどんどんそうして行こう。

…… 楽しいし。

「しようがないな…… やるよ。やればいいんでしょ？」

「そうそう！ やり方は……」

モノクマが余計な手出しをする前に装填し、準備。安全装置までしっかりとついているので外し、シリンダーを回す。手慣れたその様子にモノクマも「ええ」ってなっているが、キミにそんな反応されたくないよね。

あ、もしかして指示なしで弾を5つ入れたことにドン引きしてる？ それなら仕方ない。

「え、最高難易度でしょ？」

「合ってるけどね！ 度胸あるなあ」

「キミに褒められても嬉しくないから」

「もう、つれないなあ」

釣られてたまるか。

「はい、さーん、にーい、いーち…… B a n g」

カシユツと空虚な音がして沈黙する。

無事空白を引けた様子だ。頬に触れると、貧血のせいかそれ以外のせいによるのか、とても冷たくなっている。鏡でもあれば青冷めている自分を目撃することになるだろう。

息が若干荒いのは怪我のせいで決して緊張したわけではない。決して。

「無駄に発音良くてムカつくね」

「その目に風穴開けてあげようか？」

「やってみる？ ここで血みどろのコロシアイしてもボクは構わないよ！」

爪を出して左目を光らせるクマに溜め息を一つ。

モノクマはむしろルール違反者を殺す方が効率良く体を手に入れられると思っっているだろう。

私がそんな隙を晒すわけがないでしょ？

やれやれと首を振ってから「冗談だよ」と口にする。体は再利用されるかもしれないが、精神的な意味でも死ぬのはできれば勘弁したいところだ。

ファイルを受け取って中身を確認。知識通りコロシアイ学園生活のことが書いてある。

が、そこにメイの顔写真を見つけて苦い顔をしてしまう。どうやらあの忌々しい映像は真実だと確定してしまったようだ。それに少し思うところがないわけではないが、今は保留。

ざっと他のことも見てから次の部屋に進む。

そろそろ立っているのも辛くなってきた。早く休んでしまいたい。「ああそうだ、モノクマ。ちよつと寒くてさ…… 暖房設備とかない

？」

「んん？……いいよ！用意しておくからゆつくりしてなよ！」

優しい？ いやいやそんなことはない。

こいつは私が殺人を計画しているとでも思っているのだろう。だからこんな融通を利かせているのだ。

「どうしよう……」

まだこのドツキリハウスを突破する方法がはつきりしていない。

やっぱりもう少し図書館に通っておくべきだったか？ ” 罪木ちゃんと一緒に初めて図書館に行った ” とき、彼女が本棚をひっくり返したりして資料集めも上手く行かなかったんだよね。ソニアさんは大体雑誌読んでたし、十神クンが集めた島の資料もぐちゃぐちゃになるしで忙しかった。

その後もある程度通つてみたはいいが、どうにも確信が持てない。

道は1つしか見えない。

けれど怖い。

未だに踏ん切りがつかないでいる。

死ぬのが怖い。もし目覚めることができなかつたら？ 自分で死ぬなんて、本当に私にできるのか？ そもそも私のやりたかったことを皆が理解してくれるのか？

原作のようにビデオメッセージを残したくてもここでは手に入らないし…… せめて暗号くらい勉強しておくべきだったか。

皆と一緒に脱出を目指すのならここが佳境。そして、私にトラウマを乗り越える強い勇気が必要なのも分かっている。あとは吹っ切れるか、なにも考えないうちに死ぬるようにトリックを考えるかだ。

薬や毒でもいいけれど、あれは途中が苦しいらしいから真つ最中に生存本能が首をもたげてくる可能性がある。そうなればきつと罪木ちゃんに救われてしまうし、手段としては良いと言えない。

「眠い……」

それはともかくとして、血を流しすぎた。

視界がぼんやりとしていて、喉が渇く。体が休息を欲しているのが分かる。

秘密の部屋に血の匂いを充満させながら目を閉じる。起きたら携帯食料を食べて移動しよう。大丈夫、こんな怪我くらいでは死なない。

あとのことは休息してから考えればいい。

大丈夫、大丈夫、ダイジョウブ…… きつと、そのときになれば強い意志も持てる。

だって私は、この暖かい居場所を失いたくないから。

……きつと、大丈夫なはず。

それからはあつという間に時間が過ぎ、皆がこのドツキリハウスにやってきた。

携帯食料でなんとか1日分の空腹を紛らわせたが、それ以降はどうしようもない。飲み物が無い分、携帯食料がパサパサしていて余計に喉が渴いたということもある。

率直に言うと、ヤバイ死にそう。

やはりというかなんというか、十神くんには酷いことを言ってしまった。日向くんを避けたり、そうしているうちに私はファイナルデッドルームで1日過ごすようになっていた。

「うう、ううう……」

使い慣れた鉄パイプを抱きしめて、体育座りのまま俯く。

その手に持っているのは、鋭い刃を見せるナイフ。これを手首か、首に滑らせれば全てが終わる。

ある程度趣向を凝らせば、コロシアイの発生により学級裁判が行われ、私以外の皆はこの悪夢からただちに開放されるだろう。

そうすれば、あとは殺人を起こす人間などいない。

これまで、誰1人欠けることなく歩んできた皆はたった1人の人間を犠牲にすることで最終決戦へと挑むだろう。

これができるのは、私だけ。

刃を上に向け、首に当ててみるがその手はカタカタと震えてナイフを取り落としてしまう。

怖い。死にたくなんて、ない。

でも私しかこれを思いつける人間はいない。

死なない可能性があるのは、私だけ。

正確には、罪木ちゃんも覚悟さえあれば問題などない。

でも、彼女を巻き込もうとするには勇気が足りない。彼女に後のこととを託していけば安心だと分かっているものの、いざ止められてしまったとき強行できる自信がないのだ。

逃げ道を与えられてしまったら私は……

あのクソクマの言う通り、私は皆を信用できていないんだ。

仲良くして、説得して、そして一緒に歩いてきたのに私は自分自身を任せるほど信頼していない。

罪木ちゃんは私の言葉に応えてくれたのに。

彼女は私との約束を守ってくれているのに。

なんて、最低な奴なんだろう。

いつそ、槍かなんかを使って原作みたいにトラップを作るしかないかな。

こう、槍を吊り下げておいて、私がホール内に入ったとき丁度切れて落ちてくるみたいなの。

そうすれば恐怖は一瞬だし、避けさえしなければ即死できる。避けなければね。

いや、やっぱりだめだ。これだと私は恐怖に負ける。

「自分の死の算段を立てるなんて、おかしな感じ」

誰にも明かせない。

誰にも悟らせない。

誰にも止められない。

それを止めるのは己の恐怖心のみ。

「タイムアップはすぐそこだ……」

今回は時間制限がある。

田中くんが殺人に動く前に私はやり遂げなければならない。

「移動しなくちゃ……」

事前に作っておいた氷の槍を冷蔵庫から取り出し、暖房がついてい

ることを確認。ナイフは証拠が残るのでやっぱりダメだ。

ホールまでやってきて、まだ誰も来ていないことに少し安心する。罪木ちゃんへの協力要請はしなかった。彼女の最後に見た顔は心配そうに眉を寄せ、その後微笑んだところだ。その顔を悲しみに上書きしたくない。

「っは、っは……」

喉元に槍を食い込ませ、ぱたぱたと流れ落ちていく汗を見送る。

もう少し、あと少し。所詮は夢だ。なにを怖気づいている！

皆を、皆を、みんなを、死なせないんだから。

これは、私にしかできない仕事なんだから。

お願いだから、動いてよ……！

「ううっ、っ…… いやだ、死にたくなんて、ないよ…… いやだ、いやだよ…… なんでもわただけなの……？」

漏れ出でる本音が涙と共に滴り落ち、黒い感情が沸き上がる。

もういいじゃないか。だって田中クンが弑大クンを殺すのは自然な流れだよ。今までが奇跡だっただけだよ。よく頑張ったじゃないか。だからむきになって全員生存なんかを目指さなくてもいいじゃないか。

元々皆なんてどうでもいいって思っていたんだから。ほら、自分だけが生きていればそれでいいだろう？

頑張ったって、なにも良いことなんてないじゃないか。やれるかどうかさえ分からないのにやる必要なんてあるの？

そもそも、誰がこの先に幸福があると保障してくれるのかな？

人生、流されるままっていうのも別にいいだろう？

もう私は、疲れたよ。

「……………」

もしかしたら、もしかしたら…… ここが所詮夢の中だと思えてくるのなら、エフエクトがここでも使えるのなら、私自身も死なずに切り抜けられるのでは？

そんな憶測が頭の中を巡る。

そう思うとできるような気がしてきた。

この世界でも夢を見るから今まで思いつきもしなかったが、案外いけるものだろうか？

首に槍を当てながら寝転がり、目を瞑る。

“ ゆうれい ”

“ したい ” も考えたが、あれは動く死体になるだけなのでアウトだ。

幽霊ならもしかしたら身体からそのまま抜け出すかもしれないし。そうしたらじつとしていなくても大丈夫。

失敗したらそのときはそのときだ。

その場合、私は2人の命を見捨てることになるだろうが。

「ん？ んんん？」

目を開く。

そこには見事に目を瞑ったまま槍を握る私が眠っていた。

まさかの成功だ。

「なーんだ、エフェクトが使えるなら簡単に済んだじゃないか……」

本当に幽霊になったみたいはその辺を歩き回り、浮いたり沈んだり。一度モノクマが私の生死を確認しに来たが、やはり分かりにくいのかな。

そのうち朝早くにやってきた式大くんが私を発見し、暖房で溶けた血液の槍で大慌て。他の皆が集まってくると無事、死体発見アナウンズが流れる。

その間も泣いている罪木ちゃんに寄り添いながらずっと見守っていたが、彼女の診断は “ ショック死 ” だ。そりゃ傷跡なんてないからね。だけれど血まみれになっている私に謎が残っているからか、ちゃんと裁判が開かれるようだ。

裁判に関しては十神クンと田中クンが積極的にファイナルデッドルームへ行ってくれたらしいので今のところどうにかなっている。さてさて、皆が “ 自殺 ” に限りなく近い事故だと気づき始めたので、私は体に戻って蘇ってこようかな。

そして学級裁判中に乱入して驚かせてやろう！

……私、死んだ振りしてばっかりだな。

裁判中なのでまだ死体はある。大丈夫だ。

よし、戻ろう……

…………… あれ？

「うん？ エフェクト解除は普通に思い浮かべるだけで…… なら魔女に…… んん？」

できない。

「他のエフェクトは…… あれ？ あれ？ 嘘でしょ」

戻れない。

「ど、どうしよう…… どうしよう…… これじゃあ……」

目の前が真っ暗になるようだ。

戻れない。生きていることを証明できない。

これじゃあ、なんの解決にもなっていない！

「なんで……？ なんでなの……？ なんで戻れないの!？」

いくら身体に埋まろうとしても透けた身体は戻らない。

なぜ？ どうして？ わけが分からない。もしかして、これはこと

が上手くいった幸運の代償だとしても？ けれど、仮死状態になるのは

世間一般的には幸運でなんでもないだろう！ どうして？ どうし

て？

そのうち、モノクマが身体を回収していつてしまう。それと同時に、私の視界も真っ暗になっていく……

「待って待って！ モノクマ！ 見えてないの!？」

私の意識は、そこまでだった。

…… と、まあ色々あったわけだけれど。現実世界で目が覚めたら無事だった。

なんだ、大丈夫だったんじゃないか。皆のおかげで目覚められたわけだもん！ 感謝しないとね！

「はうう、粕枝さんが無事で…… 無事で良かったですうう！」

「ありがとう罪木ちゃん。約束を守ってくれようとしてありがとうね」

彼女の頭を撫でて微笑みかける。

なんてチヨロい子なんだ。将来が心配になるレベルだよ。学園生活でもちよつと優しくしたら懐いちゃってさ。まあ、同じアニメで泣いた仲なんだし、少しくらいは鼻肩してあげてもいいかな。

「罪木さん、日向さんが呼んでいますよ」

「あ、狛枝さんのお姉さん…… 分かりましたあ。ごゆっくりしてくださいねえ」

「ええ、ありがとうございます」

お姉ちゃんがやってきたようだ。

“私”が目覚めたことで喜んでくれたのだろうか。

いやあ、それにしてもお姉ちゃんか。彼女は本当にしっかり者で素敵だよ。

「お嬢様、少し2人になりませんか？」

とても丁寧な言葉で場所を移そうと促すお姉ちゃんに、私はにっこりと笑顔になって手を繋いだ。

「…… では、夜景でも見に行きましょう」

最上階のテラスに案内され、彼女は私にジュースを差し出す。さすがに寝起きでお酒を進めてくるわけではないね。

「ありがとう」

リンゴジュースだ。絶望的に子供っぽい市販の味がする。

まあ、たまにはこういうのも悪くないかもね。

「……」

「どうしたの？」

「ええと、すみません。市販のものしか用意ができていなくて…… お許しいただけますか？」

「うん、なんの問題もないよ」

ものすごく不味いってわけじゃないし、こんな荒廃した世界でジュースを用意できているだけまだマシだ。

「悲惨な夜景だね」

「ええ、本当に」

うーん、光でキラキラしてるのもなくなると、こんなにつまらない

ものになつちやうんだね。大発見。

やりすぎたか。

「ところで、お嬢様」

「ん、なあに？ お姉ちゃん」

隣にいる彼女を見上げてみると、その視線はどことなく冷たいような気がした。

「あなた、誰ですか」

心の奥底で泣き喚いているうるさい先輩ひとじちを押さえつけて、アタシは笑った。

「言うこと聞いてくれるよね、お姉ちゃん？」

「戦場さんが泣きますよ、江ノ島さん」

う。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ！

さーて、面白くなってきたことだし？

仲良くやろーね、狛枝先輩。

だって、見えてるんでしょ？

ずっと、ずっと。アタシに身体の主導権を奪われてから！

先輩とは仲良くやっていけると思うんだ。

これからも一緒に絶望しようね？

狛枝せ・ん・ぱ・い♡

| |
C_好 u r i o s i t y | B a d e n d ③ |
k i l l y o u |
|

B a d e n d ④ 【夜明け】

※ ヤンデレ&シスコン注意

荒廃した世界で面白おかしく暮らしていたら、突然カムクライズルから連絡が入った。

相変わらず棒読みだし淡々としているし、あれがリアクション芸に富んだ日向クンと同一人物とはとても思えないよね。

学園生活をしていたときは彼の麦茶をめんつゆに差し替えてみたとか、たけのこ派の彼と戦争したりしていた。

思えば日向クンは私とことごとく趣味がすれ違っていたな。

きのこたけのこ戦争もそうだし、遅れる私に代わってチキンナゲツトを購入してくれたはいいが、私がマスタード派なのに対して全てケチャップを選んでいたり…… もちろん代金は後から払っているけれど、喧嘩はした。

大体は七海さんが仲裁してくれるんだけど、3人でゲーセン巡りをしていると誰かが買物を受け持つこともあるわけで…… それが私か日向クンだと趣味嗜好がすれ違つて喧嘩になる。

というか、私が原作粕枝のように振舞っているだけなんだけどね。元はただのポーズだったけれど、だんだん習慣化していった性質だ。やはり私が粕枝だからか、そういう「らしい」ことは身に付きやすいみたい。

だから、その…… こんな絶望的な世界ではつちやけていたら「さびつき」寄りになるのも仕方ないと思うんだ。

「ええと、カムクラクンの話によると…… 要救助民に紛れて未来機関に行くんだつたっけ？」

結構やんちゃしちやつてるけど、大丈夫？ バレない？ 殺されない？

学園時代とは片方目の色が違うからむしろ気付いてくれるかが問題だろうか？

うーん…… なるべく苗木クンとか、知っている人に連れて行って

もらえば安心かな。原作でも彼が私たちのクラスを更生させようと努力してくれていたのだし。

確か、他の未来機関は絶望である私たちの処分を検討していたんだっけ？

知らない人についていつちやいけません！

ことは上手く運び、私は塔和シティに来ていた腐川さんや轟沈工クスカリバー十神クンに保護された。

モナカちゃん？ 私の暮らしていた場所と物資を調達していた残党共の連絡先を残しておいたし、命令違反すると首がボンツてなる装置をつけた人間を配備したから、まあどうにかなるでしょ。

モナカちゃんを狛枝^{わかし}風斗^{たし}がどう教育したかなんて知らないから行き当たりばったりだ。

とりあえず話しかけまくったりいろいろしたけれど…… まああの程度教育はしたし、これ以上べったりするつもりはない。

私は放任主義なのだ。

それからは暫く未来機関でお世話になった。面接したり、無口なカウンセラーさんとお茶したり、人口照明の農園を手伝ってみたり、怒鳴られたり…… いろいろあった。

そのうち絶望であることがバレて処分がどうのとひそひそされるようになり、本人にバレないように噂しろよとイラついたり、ストレスで職員を殺しそうになったり、煙草か酒を取り上げられた心境ってこんな感じなのかと実感したりもしたなあ。

殺しができないことでストレスを感じるとかもうダメだな、私。

これではただの殺人鬼だ。

深夜、苗木クンたちに連れられジャバウオック島へ行く際はやはりというか、原作通りにカムクライズルと同じ場所で休むことになった。特に会話はなかったけれど、絶望時代よく連絡してただけあり気まずくなることがなかったので、わりと心健やかに船旅を楽しむことができた。

…… こうやって回想してもどうにもならないな。

結論から言うと、ジャバウオック島のコロシアイはまったく原作と

同じ展開になった。

私が死なず、代わりにソニアさんを罫に嵌めて七海さんに殺させたつてところ以外はね。

七海さんが死んでくれないと我らが江ノ島盾子は最終決戦に持ち込んでくれそうになかったし。苦勞したんだよ？　いかに私が密室から脱出するかつてところでき。

もちろん悩みに悩んだし、自己嫌悪で死にそうにもなつたけれど…… そうしなければあの修学旅行は永遠に終わらなかつただろう。生き残るために手段は選んでいられなかつた。

それから日向クンの覚醒も見届け、皆で目を覚まし、そして……私の心が絶望のまま染まっていることに気づいたメイと一緒に逃げた。

メイは、無理に私を更生させようとは思っていないようだった。

約束は覚えていたようだけれど、「止めないの？」と訊いたら、泣きそうな表情で私の目元に触れた。

メイと同じ色になった片目が、無性に憎かった。

「もう、いいのです。もう…… いいのですよ」

泣いているメイと手を繋いで、私たちはゆっくりと…… かつての家へ、廃病院となったその場所へ向かつて行った。

ああ、とても懐かしい。

楽しかった。

荒廃した病院で思い出を見て回り、焼け焦げたところを少しずつ補修し、住みやすくしていった。

メイと2人で暮らしやすい場所を作るのは楽しかったし、2人だけで喫茶店を借り切つてケーキを作るのも、紅茶を飲むのもお店を出したみたいで良かった。やっと夢が叶つたみたいで。

水道とか電気とかはどこかから引いてきているようで、廃墟だとしても住むのに不自由はなかつたな。

転んだらすぐに怪我をするくらいいろいろ落ちているのが玉に瑕きずだけれど、それも足元を気をつければ大丈夫。

あまり片付けすぎたり、夜に電灯をつけていたらすぐに未来機関にバレてしまう。

だからちよこつとホラーな病院で何ヶ月も過ごしていたら、元から少なかった体力がもつと落ちてしまった。

実際、夢の中のようにエレベーターに血文字が出たり錆がいきなり広がったりとかかなりのホラースポットと化している。

こまるちゃん辺りなら死んだ皆の姿が見えるのかもしれないが、あいにくと私は靈感がさっぱりなようでポルターガイストやらには遭遇するが、皆の姿は見えない。

メイも見えないようだけれど、音に怯える私を撫でたり慰めたり、「あなたを恨む人なんてここにはいませんよ」と言ってくれている。

壊れかけている私を、真摯に心配してくれているようだ。

メイはたまに外に出て物資を供給しているからなんの問題もないが、私は暗闇で生活しているから精神的にもやられているらしい。

そんな生活も、数ヶ月経つと終わりが見えてきた。

メイの持ってきた情報によると、未来機関で内部分裂というか……とにかく事件があつたらしい。その結果、テレビで苗木クンたちがまた希望として取り沙汰されたり……私以外のクラスメイトが絶望を背負って旅だったニュースが流れた。

メイが言うには、クラスメイトの皆も私のことを探しているらしい。

最近は何もできていないから足取りが途絶えたままとなつていくみたい。

けれど、完璧な天才になった日向クンに見つかるのも時間の問題だろう。

幸せな生活の終わりは、そのあとすぐに来た。

「来たみたいだね」

「ええ」

廃病院の一室から玄関付近を覗くと、そこには病院前でたむろするスーツの人間たちが見えている。

こんな時代にスーツを着ているなんて、未来機関の連中くらいだろうね。一昔前は敵でなかった彼ら。保護さえしてくれた彼ら。

ふふふふ、隠れ鬼みたいで少し楽しいかもね。まあ、それもすぐに終わるんだけど。

先頭にいるのはあの優しい後輩だろうか？

それともお坊ちゃんな方の十神クンかな？

高いところから見ているからあんまりよく見えないけれど、1つ確かなのは彼らが私たちにとっての死神だということだろうか。

死神なんて言われている私が死神に狙われるなんて、なんだかおかしいね。

「準備はいい？」

「…… 1つ、申し上げたいことが」

メイとベッドの上で向き合い、笑い合う。

「いいよ」

義手にコツリとあたる物体を遊びながら、メイを見つめる。

「お慕い申し上げます、 凧様」

なんだ、そんなことか。

そんなの、とつくに知っているのに。

「私も好きだよ、メイ」

姉妹だけれど、血は繋がっていない。

キミは母と父の愛情を受けた全ての子供たちを恨んでいたよね。

たとえ実験体としてでも、両親に執着されている私たちのことを憎んでいたよね。だから、最初はあんなに冷たかったんだ。

私のことも、きつと大嫌いだったよね。

それが変わったのは、あの屋上で日の出を見たときのことだ。

キミは私をやつと見てくれたし、私もキミを見た。

お互いに執着して、抛り所に使っていた。

この病院で暮らしている間に、古い日記を見つけたんだ。

そこには、好きな人の精神病…… “ rust ” を治すために

超高校級への道を捨てた男の想いが書かれていたよ。

狛枝港^{みなと}

それが父の名前。日記を見て、初めて知った。それまで、

私は自分の父親の名前すら知らなかったのだ。

母の名前は思っていた通り蒼子^{あおこ}であった。あの人もずっと前は諦

めて濁った目なんかじゃなくて、とっても綺麗な人だったんだろ
うな。だって、あの父が皆が憧れる超高校級の名譽を蹴って治療に専念
していたくらいなもの。

母には才能がない。

でも父にはあった。

母は希望ヶ峰学園に入学できない。

学園を卒業してからでは、遅かったんだ。

だから父は仕事の合間に研究を続け…… けれど発症例が少な
かったせいで研究はなかなか進まなくて、いつの間にか“目的と手段
”が逆転してしまっていた。

母を助けるために研究をしていたのに、研究するために母を利用す
るようになった。

そして私たちが生まれ、子供のいない2人が引き取り可愛がって
いたキミにその世話を全て押し付けるようになる。

その壊れていくさまを見続けていたキミもまた、母のように諦観し
ていた。

そんなときに寄りかかれる場所を見つけたんだよね。

お互いに寄りかかって支え合って、姉妹としては変な関係だろうと
そのまま続けて…… 最後には私たち以外皆死んじゃった。

ああ、そういうええもう1人生き残った看護師さんがいたね。

病院の資料に火をつけて証拠隠滅したのはきっと彼女だろうね。
あの人、父のことが好きだったみたいだから。

もしかしたらの話でしかないけれど、私たち以外の生き残りがいた
としたら、彼女が連れ出していただろう。あの看護師さんはそういう
人だ。母から父を奪うこともなく、想いを告げることもなく、ただ信
頼された部下のままその関係が終了した。

私たちには少し当たりが強かったけれど、とても健気で誠実な人
だったんだらう。

ああそうだ、1つ訊いてもいいかな？

そう、ありがとう。

あのさ、キミが初めて殺人をしたときのこと…… 教えてくれる？

知っておきたいんだ。ほら、私も秘密を教えただからいいでしょう？　じゃないとフェアじゃないと思う。

……なるほど、言子ちゃんパターンか。あ、いや、こっちの話。それにしても灰皿で殴り殺したんじゃあ返り血も浴びたんじゃないの？　よく捕まらなかつたね。

……ええ。

さすがの私もそれはびつくりだよ。

そもそも返り血がかからないように服を脱いで誘導したと。無茶をするなあ、まったく。キミが今も無事で本当に良かったよ。

いつも我が儘を言つてごめんね。キミに無茶させてばかりだ。

えっ、別に私は無茶してなんかいないよ？

ああごめん。ごめんつてば、怒らないでよメイ。分かってるよ。いつも無茶して迷惑かけてる。

それも違う？　えっと、心配ばかりかけてるから……かな？

そうだよね。私がメイを心配しているように、メイも私を心配してくれてるんだよね。いつもありがとう。

ふふ、全部懐かしいよね。

ここ数ヶ月、長年会えなかったキミという嬉しかったよ。

空白の部分の互いに埋め合うように触れ合えた。キミを遠ざけようとしたことも謝れたし、私の真実まで告げた。

キミは真剣に聴いてくれたね。そして、拒絶をしないでいてくれた。私が異常に死を恐れる理由も理解してくれたし、絶対にもう怖い目には遭わせないと誓ってくれた。

……私は与えられてばかりのずるい子だ。

なにも返せないのが口惜しい。

……だから、言葉に表してキミに返そうと思う。私なりの、精一杯の “感謝” と “愛” を込めて。

ふふふ、絶望の私が “感謝” と “愛” なんて希望に溢れた言葉を言うのは、なんだか笑えるね。

薄っぺらいものじゃないのは確かなんだけどね。それはキミが1番よく知っているはずだよ、メイ。

キミと過ごさせて本当に良かった。

大好きだよ、メイ。

大好きだよ、姉さん。

キミも同じ気持ちだろう？

「ええ、もちろんですわ」

それは、良かった。

ありがとう。ありがとう。大好き。

そして……

「いち、に………さん」

そして、さようなら。

上がる銃声。立ち昇る硝煙。

互いの頭に押し当てた銃口が離れる。

倒れたのは、メイの方だった。

「……… ばか」

だらりと垂れた彼女の手から銃を持ち上げて見れば、その中は2箇所空白ができていた。

つまり、事前に弾が1つ抜き取られていたということ。

「仕方のないお姉ちゃんだなあ」

彼女の持つていた拳銃から弾を抜き取り、私が撃った拳銃へ装填する。これで外れることは、ありえない。

赤い花を咲かせた彼女の体を横たえ、頭を膝に乗せる。髪を撫でればさらさらとしていたが、ときおりぬめつとしたものが手に当たる。

この温かさも時期に消え去ってしまっただろう。

ああ、その前に終わらせないと。早くしないと。

まったく最後の最期まで甘い彼女に愛おしくなって撫で続ける。

涙は出そうにない。

ああ、大切な彼女。大好きな彼女。私の唯一の理解者だったお姉ちゃん。

もう、目を開くことはないし、もう私に微笑みかけることもない。

—— なんて、甘美な絶望

「これが、絶望……」

あの人が求めた、記憶を失ってまで求めた絶望。大切な人を失う絶望。

真つ赤な片目を揺らして、私は愛おしげに彼女を抱きしめた。

青い方からも涙は出てくれないようだ。

……なんて薄情なやつ。

これは絶望に犯された結末。

けれど、私は絶望でなんて終わらせてやらない。たとえば、他の人たちには同じ絶望だとしても、これは私にとつての希望となるのだ。

江ノ島盾子の望んだ絶望ではなく、あくまで私の希望のためにこれは行われるべきなのだ。

「メイ、日の出だよ」

頭を撫でながら、窓の外を見る。

まさに希望に溢れた日の出。朝日はキラキラと輝き、まるで大輪の花を咲かせる希望のカケラのように。

荒廃した世界にはひとしく光が降り注ぎ、荒れたコンクリートの下からはそのうち美しい花が咲き乱れるようになるだろう。

汚染された空気は未来機関によって浄化され、動物たちもいずれ戻ってくるだろう。

こんな清々しい朝は小鳥の鳴き声で目覚め、そして窓から青空を見上げて始まる。

ひと昔前にあつた風景、音、香り。

その全てが再び “ 始まる ” ためには “ 終わり ” が必要不可欠。

物語の “ 終わり ” には “ 悪いやつ ” がいてはならない。

…… ふう、やつぱり緊張するな。

物語の悪役もこんな感じのことを思うのだろうか。

ただただ、虚しい。

なにもないし、なにも得られない。全て手放して、捨てたのは私。後は最後に残った不要物《私の命》を処分してめでたしめでたし。これから平和を取り戻していくだろうこの世界に永遠のお別れを

告げなくては。

絶望なんかが、平和な世界の夜明けに居てはいけないのだ。

ダークヒーローは痛い目に遭うまでがセットだけれど、ただの外道は地獄に叩き落されるのがお約束つてもものだろう？

病院に突入してくる部隊が見える。

そのうち、この部屋にもお客様がやってくるだろう。

適当にシリンダーを回し、準備をする。

そして片手が届く位置にナイフと睡眠薬を置いて待機。万が一のときのために対処する物は多い方がよい。

薬を水で一気に流し込んで、震える手で銃を持つ。

メイの温もりは、私の熱で保たれている分のみだ。その額に

軽く触れる。 “ 挨拶 ” をして構える。

ドタドタと聞こえる足音。

特定するのが早い。さすがのお仕事だね。

「……か!？」

飛び込んできたスーツの男に私は苗木クンじゃなかったことにながっかりしたが、そんな様子は一切見せずにスマイルスマイル!

スマイルゼロ円。ただし初回限定版おひとり様のみ。再配布の予定はございませんってね。

ふっ、と息を吐いて一言。

「おはよう、今日はどうしても良い日になりそうだね」

戸惑う彼にとびっきりの笑顔を見せて銃口を喉元に突きつける。

慌ててこちらに向かつて来ようとするけれど、その前にことは終わらせなくちやね。

どうか、地獄で待っていて。

今、行くから。

罰を受けに行くから。

待っていて。

さようなら、さようなら。

この素晴らしき絶望的な世界にお別れを。

「こんな良い夜明けには、悪夢の終わり絶望が地獄に堕ちてしかるべき…… だよ

ね？」
永遠におやすみなさい。

— B a d
Y o u , r e d e s p a i r
あ な た は 絶 望 だ
④

B a d e n d ⑤ 【罪業】

※赤錆状態で本編突入の場合です

無事、田中クンがロボットになった式大クンを殺した。
今までは知っている通り進んでいる。正直ただ見ているだけというのもつまらなくなってきた。

1番最初は豚神クンとの駆け引きも楽しかったが、私に誘導されてあつさり殺されちゃったし期待外れだった。

彼以外の人たちは皆夜中に出歩いたりはしないし、色々やり放題なのはなによりだ。

たまーに夜食を買いに行く終里さんやら本を返しに行くソニアさんに遭遇しそうになるが、それさえ気をつければなんてことはない。皆いい子ちゃんすぎて心配になってしまいうくらいだ。

絶望病にかかるまではそれでも頑張ろうだなんて思っていたけれど、全く展開が変わらないものだから面倒臭くなってしまった。

次は5章。

狡枝^{わかし}風斗^{たし}が悪い意味で大活躍する章だ。

つまり、今回は私になにか行動を起こさないといけないわけで……最終章に行くには裏切り者がいなくななくてはいけない。

だけれども、私はできれば死にたくない。

先回りしてモノミが開けてくれた5の島は見て回り、私はついでに散歩で訪れた中央の島で、夜空を眺めた。

とても綺麗だ。けれどこれはただの映像。ここは、ゲームの世界である。

正確に言えば絶望を更生するプログラム世界の中だが、まあ似たようなものなのだから問題はない。

そこらにある花も、ここへ最初に来たときと全く変わらない。

花はオブジェクトとしてそこにあり、修学旅行のルールにより摘むことは叶わない。自然破壊となってしまうからだ。

けれど、モノクマに頼んでみれば？ モノミに訊いてみれば？

きつと、鉢植えを手に入れるくらいは造作ないだろう。

「やあ、呼んだかな？ 狛枝さん」

「こんばんは、モノクマ。応じてくれてとても助かるよ」

ベンチの後ろから声をかけられ、返事をする。

モノクマは呼び出しに応じてすぐにやって来てくれたようだ。

頼むのはモノミでもいいけれど、やはり “ 取り引き ” なんだからモノクマ相手にしないといけない。

それに、こんなことを話せるのはモノクマだけだ。

「あのさ、お願いがあるんだよね」

「おやおや？ ようやくコロシアイに参加する気になった？ いいよ

！ できることなら協力してあげようじゃないか！」

「うん、キミの望むことをしてあげるからさ、用意してほしいものがあるんだよね」

「そうだよね、まだその気には…… って、ええ？ 本当にその気になったの？」

私が淡々とコロシアイに参加することを告げると、モノクマは否定しかけて首を傾げた。予想外だったのか…… いや、モノクマのことだからそう装っているだけだろう。あの人が私ごときの思考を読めないだなんてことあり得るはずがないのだ。

「ほら、この公園の花って “ 自然破壊禁止 ” のルールで持っていないでしょう？ 造花だけだと味気ないから鉢植えにしてほしいんだ」

「ふーん、それだけ？ オマエも花が好きだよねえ」

「ああ、うん。そうかもね」

呆れるように顔を俯かせるモノクマに生返事をする。

対応が適当なのは仕方ない。なんだかモノクマの前だとやる気が出ないのだ。理由はなんとなく検討がついているけれど。

こいつには決して逆らえない。

「それから…… モノクマ。キミって死人が増えてほしいんだよね？」

「うん？ なんでそう思うのかな。ボクはただコロシアイをするオマ

エラが見たいだけなんだよ？」

しらを切ったって私は知っているんだ。

ロシアイを見て楽しむのも目的の1つだとは思うけれど、こいつの本当の目的は死体に自分のAIを上書きして復活すること。

そしてロシアイで自分に終止符を打った苗木クンたちの再現をするように、決して止められない場所でロシアイを起こし、見せつける。こちらの目的はついでだろうが、画面の前にいるだろう彼らには効果的だろうね。なんて悪趣味なんだろう。人のことはあまり言えないけれど。

「だってキミは、あのファイルに乗っていた事件の首謀者でしょ？」

ほら皆でジェットコースター乗ったときにくれたやつと、オクタゴンでもらったやつ。詳しくは書いていないけれど、私たちの崇拜しているって人間がキミなんだろう？ あの書き方だとキミはまるで死んでいるみたいだけれど……もしかしたら、このロシアイを望んでいるのもなにか理由があると思ってさ」

「それで？」

黒豆のような目が瞬きもせず無機質にこちらへ向けられている。

左側の目も内側から赤い照明が透けて見えてなんだか不気味だ。

いつものことだが、わりと怖い顔をするクマだこと。

量産型とはいえ、これをマイハサミで何体も破壊できるジェノサイダー翔って本当に凄いやね。格好良いし、ちよつと憧れちゃう。

「ルールに接触しない程度に面白いロシアイを演出してあげる。だからさ、全てが終わったら私だけは生かしてほしいなって」

「そんなに都合の良い取り引きが成立すると思ってるの？ 本気で？」

案外オマエって馬鹿なの？」

「キミは私を生かさざるおえなくなるよ。きつとね」

「……ああ、そういうこと？ 確かにそのルールは追加するつもりないけどさ」

モノクマの許可さえ取ればいいのだ。

私はただ生き残りたいだけ。他なんてどうでもいい。

本当に生き残りたいのなら、学級裁判なんて起こさなければいいの

だ。

今はいい感じに数が減ってやりやすくなったからなにも問題はない。

そのためにドッキリハウスからたんまり毒薬を拝借してきたのだし。

未だ2人以上殺してはいけないなんてルールは追加されていない。そしてそれをしようと意外に告げている私を咎めることも、モノクマはしてこなかった。

モノクマも、もうこのコロシアイに飽きてしまったのかもしれない。

「やってみれるのならやってみればいいよ。ボクは止めないからさ。うぷぷぷ」

不気味に笑うモノクマを残し、私はそつと公園を後にした。

眠い。時計を確認してみると既に丑三つ時ってやつになっている。

でもこれからまだやることあるから眠れない。今夜は徹夜確定か…… いや、寝坊してもいいか。

…… どうせ全員殺すんだし。

私は去る直前、モノクマに教えて貰ったレストランの裏手でやることを終えて欠伸をした。

あとは、終里さんのコテージにピッキングで忍び込み、とあることをするだけだ。

ピッキングの方法は図書館で見つけた本で習得済みだ。自分のコテージや旧館の扉で何度も練習したためきつと手早く済むだろう。

彼女はそもそも起きるのが遅いから、彼女が死んでも素早くは気づけないはずだ。

自室でモノクマに貰ったプルメリアの茎から白濁液を取り出す。

プルメリアは中央の島の公園にあるものと同じだ。ハワイなんかで輪になったレイを首にかけたりするだろう。あの可愛らしい花だ。けれどプルメリアの白濁液には毒性がある。過剰摂取することで

心臓麻痺を起こす結構怖い花だ。

キョウチクトウ科の花なので当たり前だが…… この白濁液を生クリームに混ぜ込んで菓子パン袋のパンを漬け込む。

それからタッパに入れてたつぷりと甘い蜂蜜をかけて保存。

毒性は保たれたままのはずだが、さすがにこうすれば味で気づくことはないだろう。

それに、あの終里さんのことだから多少美味しくない部分があってもペロリと平らげてしまいうに違いない。

なかなか杜撰な計画だが、この程度のことならいくらでもできる。

…… それに、別の場所にもいろいろと仕掛けてあることだし。数を打てば必ずどれかは成功するはずだ。

その代わりに証拠がたくさん残ろうがなんだったというんだ。

全員殺すのだから、そんなもの気にしても仕方ないだろう？

毒入りパンとその他を机の上に置いて退散。

すぐに様子を見ると、鼻をひくひくさせて飛び起きた。予想通りとはいえ、なんて嗅覚だ。

けれど、暫く鼻をひくつかせながらパンの周りをぐるぐる回っている。もしかして毒があるって気づいているのか？

野生動物がなにかなのかな？ あの勘の良さは本当に厄介だよね。

ダミーとして近くに置いた普通の菓子パンをかじりながら彼女がじいっと毒入りパンを見つめている。

賢明なことに皆に相談することにしたのか、一生懸命見ないようしながら水道の水を汲んでいる。

いや、実に賢明だ。終里さんにしてはよく頑張っているといえよう。彼女だって馬鹿じゃない。考えるのが苦手というか、面倒臭がつているだけで勘がいいし結構厄介だ。

私もそこはきちんと理解している。彼女を見くびっているつもりは微塵もない。そんなこととしていたら足元を掬われて計画がバレかねないし、危ない橋を渡っている最中に慢心して余所見するほど私は自惚れていない。

終里さんはコップに汲んだ水を一気に飲んでむせる。かさかさの

パンで喉が渴いたらしい。

それから眠気の覚めないうちにとベッドへ倒れるように沈み込んだ。

…… 1時間もすれば十分だ。私は再びピッキングすると、終里さんの口元に手を当てる。成功だ。息が、止まっている。

なぜかって？ 数打てば必ず当たるって言ったじゃないか。

あからさまに安全なパンを置いて、水道に細工していないわけがないだろう？

もちろん水道の元となる配管に毒を流し込んであるという意味で。それはレストランとて同じこと。あとは皆が起きてからのお楽しみだ。

力の抜けた終里さんを引きずって台車に乗せ、旧館へと向かう。幸い誰とも会うことなく済み、旧館大広間へと彼女の遺体を置いた。

それから5の島で仕入れて来た花火を設置。仕掛けを作っておく。

終わる頃には午前5時となっており、すっかりと辺りは白んできていた。

さて、寝るかな。

少しの仮眠を終え、確認すれば全員レストランに集まって食事の真つ最中だった。

私は先にコテージでペットボトルのミネラルウォーターとトーストで食事を済ませていたので話に参加するだけだ。

「あら、狛枝さん。おはようございます」

「あとは終里だけだな……」

「あれ、まだ来てないの？」

いつもだつたら朝ご飯のために飛んでくるのにね、と白々しく軽口を叩きながら椅子に座る。

人数が減った最近だといつもそうだが、皆それぞれ自分でご飯を作って食べたみたいだ。

お茶を寄越してきたソニアさんには「ありがとう」と言いつつ受け取るが、飲む気はないよ。死ぬし。

ご飯も食べて来たことを伝えて気を配る七海さんを引き止める。

待つこと30分。

いくらなんでも来るのが遅すぎるといふ結論に至り、皆で探すことになった。先に九頭龍くんが提案してくれたので私が提案する不自然さは免れた。

そして、事態はすぐさま動くこととなる。

なぜなら、旧館の扉がこれ見よがしに開いているからだ……

なんて…… 本当は1番最後に私がレストランへ向かう際に開けておいただけなんだけど。誘導には持つて来いだろう。

ソニアさんと左右田くんが先頭で旧館内に入り、真ん中に九頭龍くんと七海さん。最後には日向くん、私と続いていく。

大広間に辿り着いたとき、皆が終里さんの遺体を発見し、アナウンスが鳴ると同時に私は懐に隠していたクラツカーを地面に向かって鳴らした。

「はっ!？」

「な、なんですか!？」

「粕枝さん……?」

「んだよテメエ!」

「びびび、ビックリするだろうがア…… は?」

クラツカーの火薬の量を少しだけ増やしてあるため、火花が散る。辺りには煙の匂いが充満し、その次の瞬間にはいたるところに隠してあった花火が起爆した。

大広間に入る手前で立ち止まった私の目の前を、油の道突き進んで行く炎が横切る。

ちようど大広間を周回して出口を塞ぐように油を撒いておいたので、これで彼らは炎に突っ込んで行かない限り出られなくなってしまうのだ。

留まったとしても焼死しか道がないので恐らく突っ切つて来るだろうが、万が一生き残っても毒を摂取しているのでどちらにせよ同じことだ。言葉で表すのならば、*dead or die* っつてやつかな。

私を殺せばどうにかなるかもしれない? そんなことはあり得な

いよ。

だって私も解毒剤は持っていないし。どうにもならないよ？ 残念だったね。文字通りの詰みだよ！

…… それにしても部屋の中で見る花火は色とりどりで綺麗だね。皆は熱そうだけれど、安全圏にいるから私に被害はない。ふふ、高みの見物って案外楽しいものだね。威力もこれだけあれば十分だ。

5の島で見つかる花火は原作狛枝が言っていたように、島を吹き飛ばすほどの威力は出ない。あれははったりだったのだから。

けれどこの旧館1つを燃やすくらいはできるし、至近距離で着火したら人を殺せる威力が出る。仮にも爆発物だもの。

「お、おい狛枝ー」

叫んで、こちらに向かってくる日向クンに笑いかける。

「おやすみなさい、良い悪夢^{ゆめ}を」

無慈悲にも扉を閉め、ノブの上から鎖を巻いて南京錠でロック。

扉を壊せるだろう終里さんは既に死んでいる。

これで、チエツクメイトだ。

少し懸念があるとすれば、日向クンが土壇場でカムクライズルとして覚醒するか…… くらいかな。彼も命の危機になったら出てくるだろうし。

でも日向クンが生き残るだけなら問題はない。

2人じゃどうあっても学級裁判なんて起こりえないからね。そうしたらちゃんと目的達成だ。

まさかこんなにも上手く行くとは思っていなかった。

計画も上手くいったし、モノクマのご機嫌も取れたし、私の利用価値だって示せたはずだ。

これで殺されるなんてことはない。

旧館から出て燃え上がる光景を眺める。

ああ、なんだかすごく嬉しくて楽しくて悲しくて、ただただ虚しい。でも、これで。

これで私は…… ！

「あ……」

……

……

「…………… どうしてだよ、モノクマ。」

「だって、お前一人残すよりもボクがもう一人いるほうが優秀なんだもん」

私がかこまでした意味は……

「そんなもの、ないよ。当たり前だろ？」

話が違うじゃないか。

「え？　だってボクオマエを殺さないって約束してないじゃん」

ああ、そうだったね。

でも約束していたとしても、どうせこうなったんだらう？

「さあ、どうだろうね？」

ニヤニヤと笑うモノクマの顔が凄く近い位置にある。

私のお腹から生えた鋭い爪が赤い血を滴らせながら引き抜かれていくと、私はそのまま立っていることができなくなって地面に這いつくばった。

私がクロになったから、モノクマが違反者として私を殺すことかできるとなってしまったのか。

あはは、此の期に及んで隙を晒すなんて、なにを馬鹿なことをやっているんだらう私は……

目の前に、モノクマの足が見える。

「でも、分かってただろ？　こうなるの」

そうかもしれないね。

だって、上手くいきすぎていた。

私の計画は、いつもいつも最後に覆されてしまうんだ。

それは…… 原作の狛枝凪斗と同じ。計画が上手くいく幸運と、その後覆される不運。それはもはやセツトと言える。

分かっていた。分かっていたさ。キミに殺されるなんてことは。

「でも、キミの目的は…… 達成できた。それでしよう？」

「……」

予定調和なんてつまないって、キミは言うだろう。

思い出したよ、キミはそういう奴だ。学園時代から、キミはそう
言っていたらしいね。

モノクマのことは憎い。殺したいほどに憎い。けれど、私にはもう
絶望しか残されていない。

願わくば、もう少し絶望生活を楽しみたかった。

退屈な世界で掃除でもしながら生活していたかった。

それが叶わないなら、せめてキミに殺されることで終わらせられ
たら。そんな風に思った。思ってしまった。

命と同じくらい大切なメイを奪われてしまったのだから、私の命も
その手の中に奪い取ってほしい。

…… もはや、それくらいしか私にはできない。

なんて気持ち悪い発想だ。

けれど、気持ち悪いと思ってくれるのなら本望。

負の感情はそれだけ強く心に残る。これをもしメイが見ていたの
なら、もしかして？ 私を殺したモノクマを憎んでくれることだっ
てあるかもしれないだろう。

彼女の心を取り戻せば最上の結果。

最悪でも、私は彼女と同じキミ奪われたモノの1つになれる。

歪んだ精神だとは思いますが、それでこそ “ 狛枝 ” だろう？

この名前を持つ私が歪んでいないわけがないのだ。

気持ち悪くて結構。実際原作狛枝だってリアルにいれば気持ち悪
いんだからさ。

あはっ、人のこと言えないや。

…… 笑えないな。いや、まったく。

「…… 結局、全滅かな」

ごうごうと燃える旧館からは誰も出てこない。

炎に舐められているからか地面が温かい。反対に、自分がどんどん
冷えていくのを感じる。

えづきながら吐き出したのは大きな血溜まりだ。

胃も肺も壊され動くこともできず、無理矢理喋ることさえ辛くなっ
て来た。

目の前の地面すら、まともに見えない。
顔をあげることも、もうできない。

モノクマの憎らしいほど可愛らしい足音は、私に興味を失ったのか
次第に遠ざかっていく。

これは、報いだ。

死の直前だからか、よく思い出せる。

私はたくさんの人を殺め、泣かせてきた。

学園時代、田中クンと厨二病ごっこをしていたかみつきたって……
「学園に来て、同じ立場のお前たちに会えて、僕は救われた。だから今
度は僕の番なんだ。僕は勇者で、魔王で、吸血鬼で、なんだってでき
る。お前なんか、怖くなんてない！」

彼女も、私が殺した。

いつの間にか、私は “ さびつき ” だった。

目を開けば、そこに赤色が入り込んだ。お気に入りの黒フードパー
カーは変色し、もはや染みが落ちなくなってしまった。ところどころ
破れて昔の面影なんてどこにもない。

ヘッドホンは壊され、ホイッスルも失くし、なにかも失った。

八つ当たりのように鉄パイプを振りかざし、それを握ったままにな
いと眠れなくなった。

もう暫く、ベッドで心安らかに眠れていない。

きつと、そうするのは私が死んだときだけだろう。

でもそのときは永遠に來させないはずだった。

そのために、私は再び殺意を呼び戻したのではなかったのか。

…… そのために、学園時代あれだけ仲の良かった皆をこの手で殺
そうとしたのではなかったか。

心のどこかではこうなると分かっているながら歩んだのは自分、だ
ね。

だからこれはその報い。

受けて然るべきの罰なんだろう。

あはは…… モノクマのおしおきにしては随分と優しい。ただ、緩
やかに失血死するのを待つだけだなんて……

自惚れかもしれないが、最大の功労者に対してせめてもの手向けを
やろうってことなんだろうか。

もう、全身の感覚がない。

夢の中に沈み込む気配もない。

誰もいない。ひとりぼっちの死。

ああ、希望はとつくに殺されてしまっていたんだ。

心の奥底で、誰かが嘲笑う。

ごめん、人のこと言えないや。やっぱり私もゴミクズだよ。

それとも、私なんかと一緒にされるのは嫌かな。

また、続きがあるのだろうか。前のように、生まれ直すのだろうか。
分からないけれど、この想いは変わらない。

あのクソクマ…… 次は絶対にどうにかして出し抜いてやるから
な。私は負けず嫌いなんだよ。

…… こんなときでも浮かぶのは憎しみと殺意だけだなんて、馬鹿
らしいや。

こんなにも最悪な奴は幸せにはなれない。いや、幸せになってし
まってはいけない。

私にハッピーエンドなんて、きつと似合わないんだ。

地面に染み込んだ水は…… まるで私の憧れた “ ありふれた幸
せ ” のようにすぐさま消えてなくなっていくた——

B a d e n d ⑥ 【楽園】

これで、何度目の肝試しだろう。

毎回同じ配役。毎回同じ展開。毎回同じ結末……

予定調和に進んでいく楽園での生活。

この、掃き溜めのような、ゴミ箱の中のような、それとも同じことを繰り返すしかないゲームの中のような？

そんな世界で暮らし始めてどれくらい経ったのだろうか。

「お前は、本当にそれでいいのか……？」

悲しそうに呟く彼の手よりも、愛しい “ 友達 ” の手を取った世界。

きっと幸せになれるだろうと、思っていたのに。

人間とは、すぐに飽きてしまう残酷な生き物なのだ、すぐに思い知らされることとなった。

ああ、楽しいはずなのに。優しい世界に憧れていたはずなのに。同じことしか繰り返さない仲間たちに、失望してしまう。

ループする反応に、先を知ってしまった虚しさ。

次はこんな反応をするだろう。今度はこんなことを言ったら？全て試してしまった。

唯一変化し続けるのは罪木ちゃんだけで…… けれど彼女ももう、飽きている。

いつ諦めるのか？ いつになったらこんなつまらないお芝居をやめさせてくれるのか？ そんなことを囁き始めた彼女に泣いて縋り付き、続きを要求する。

呆れられてもいい。ただ見捨ててほしくない。その一心で。

私は、遙か空の向こうから聞こえてくる呼びかけを頭を抱えて無視しながら、それでも帰ることに意味を見出せなかった。

帰ってしまえば、きつと残酷な現実が待っているに違いない。

「きつと皆怒ってますよお」

「……」

「皆、本当に生きているんでしょうかあ？」

もはや隠す気のない彼女に抗うこともできず、ただただ惰性で続けていくだけ。

やはり、彼女との自由行動をしてしまったのが過ちの始まりだったのだ。

「ずっと一緒にいてくれますかあ？　ずっとずっとずっと、一緒に生きてくれますかあ？」

その言葉に、頷いてしまったのが過ちだった。

分かっているけれど、もはやその選択を選ぶ前には戻れない。

「お嬢様」

「凧ちゃん」

「凧」

「……　凧」

「バカ凧！」

「凧ちゃん」

「おい、お前」

「凧」

「凧」

メイ。織月姉さん。うつろちゃん……　りん子姉さん。ヒイラギ姉さん。橙子ちゃん。怪物クン。お父さん、お母さん……

私の心の中を犯すように入り込んでくる彼女の手が、記憶を引きずり出しその再現を試みた。

それから全員生存している。死んだはずの人たちが、今この“楽園”に。

一片の狂いもなく再現された大切な家族たち。大切な友達。姉妹。そこに違和感が入り込む隙などなく、ただ甘ったるくて私自身を腐らせるような理想の姿を映し出し、笑う。

私に笑いかける。

皆が幸せで、皆が生きていて、皆が私を受け入れてくれる。

たとえそれがワンパターンだとしても、たとえそれに飽きてしまっ
ていても、手放したくない。

まるで底無しの沼のように。

足を取られたらもう自力で出ることなどできない。
戻ることのできたタイミングは、自分で弾いてしまった。

だからこれは罰なのだ。甘い、甘い拷問。優しい懲罰。
失ったモノ全てを、偽りとして再び目の前にぶら下げられ、分かっ
ていながらそれに飛びつかずにはいられない。

現実に戻れば失った家族は2度目の死を迎えることとなるのだ。
私には、それができない。もう1度皆を殺すことなど、できるわけ
がないんだ。

後悔していた、ずっと。

それを叶えられると知って、後悔を無くせると知って、黙っている
ことなどできない。私の自己満足でしかない贖罪。

本当ならば現実に帰ってからのしなればいけない贖罪。

幻想にそれを求める私は、ただただズルをしているだけ。先延ばし
にしているだけ。

「きつと、あなたを待っている人なんていませんよお？　ここ以外に
は」

「…… 罪木ちゃん」

「はい、なんででしょうかあ？」

「私、許されないよね」

「はい、あなたは誰にも許されません。きつと」

赦されるべきではないのだ。

彼女が後ろから私を抱きしめ、その手で目を覆う。なんにも見えない
真つ暗な視界。それになぜだか安心感を覚えて肩の力を抜く。

だらりと、垂れ下がった手足と体重が彼女の体へのしかかっている
はずだ。けれど、罪木ちゃんはびくともせず私を支えたまま私の肩
へ顎を乗せる。

「ごめんなさい、狛枝さん。私、飽きちゃったんですう」

「え？」

「だから、もうおやすみなさい……」

「罪木ちゃっ……」

視界が明るくなると、そこにはもう誰もいなかった。

「な、なに?」

私は困惑し、急いで立ち上がるとコテージから外に出る。

いつものようにホテルからは軽快なBGMが流れ続けているが、どこか空虚にも聞こえるその音楽は同じフレーズを繰り返している。

どこか、おかしい……?

そう直感してホテルに入る。いつも七海さんがいたゲーム台は無人だ。

時計を見ればちょうどお昼時だったが、レストランにも人の気配はない。

食事が人数分用意され、キッチンには作りかけのシチューが火をかけたままになっていて、鍋をかき回してみればだいぶ焦げ付いていた。

花村クンが料理を放つてどこかに行くだなんてありえない。

なにか用事があったとしても、火を点けっぱなしにするなんてことは絶対にないと言える。

よく見れば食事も少々手をつけた跡があったり、誰も手をつけていなかったりと様々だ。

まるで先ほどまで誰かがここにいたかのように。

「なんでっ!?!」

私はそのままレストランを後にし、皆のコテージをそれぞれ訪ねて回った。

何度扉をノックしても、ベルを鳴らしても誰も出てこない。

「そ、そうだ生徒手帳は……」

生徒手帳のGPS機能で皆の場所を見ればいい。

そう思って確認したものの、立ち上げたその画面に私は言葉を失った。

「なんで、どうして……」

いつもなら可愛いドット絵が島のどこかしらに散っているのだが、どの島を見ても、どの場所を見ても誰の顔も見当たらない。

ただ自分のドット絵だけが虚しく現在地にあるだけで、誰もいない。

どこにもいない。

それでも信じたくなくて、全ての場所を探し回った。

旧館。ロケットパンチマーケット。砂浜。牧場。空港。中央の島の公園。それからそれぞれの島へ。

旧館はまた前のように埃を被っているし、いつもロケットパンチマーケットで食糧漁りをしている十神くんがいない。

砂浜にあるはずのモノモノマシーンはただのヤシの木に。牧場で暇を潰している西園寺さんも、破壊神暗黒四天王と一緒に笑う田中くんもいない。

空港でたまに機体を眺めている左右田くんもいない。

橋を抜けた先の公園にはモノクマか、モノミがいてもおかしくないのに誰もいない上に銅像が元のまま残っている。当然モノケモノもいない。

2の島のダイナー。ビーチ。ビーチハウス。ドラッグストア。図書館。遺跡。

ビーチでトレーニングした後、ダイナーでよくハンバーガーを食べている終里さんや式大くんもいない。

よく罪木ちゃんが入り浸っているドラッグストアは無人で、図書館によくいるソニアさんもいない。当然図書館で調べ物をしている十神くんだっていない。

ああ、ここで階段から落ちたんだっけ。なんだか、もう懐かしい。

3の島のライブハウス。病院。映画館。電気街。モーター。

元気にギターをかき鳴らしながら恐ろしい歌を歌う澤田さんも、それを撮影する小泉さんもいない。

病院はただのホラースポットのようになっていて、映画館は閉館の文字で入ることすらできない。

電気街にいそうな左右田くんはここにもいない。空港でもここでもないならどこにいるというのだ？

モーターはどの部屋も無人である。

4の島の遊園地にも、5の島の苦手な軍事施設にも立ち入ったがどこにも誰もいない。

探し回って、くたくたになってホテルに帰る頃には夕方となっていた。

レストランにあった食事は変わらずそこにあり続けている。まるでどこかの船の話のようだ。メアリー、セレスト号。

先ほどまでそこに人がいたかのような状況で無人となった船の話。今まさに、私はその状況の中に取り残されている。

キッチンの食料が補充された様子もなく、もしかしたらマーケットも永遠に補充されないのかもしれない。

なんとなく、嫌な予感を抱きながらコテージのベッドに飛び込む。これが悪い夢であってほしいと願いながら、目を瞑る。

けれど、次に目を覚ましたときも翌日も、そのまた翌日も皆が戻ることはなかった。

「飽きられちゃったんだな」

いつか、終わりのときが来るかもしれないとは覚悟していた。

いや、覚悟していたつもりで、先延ばしにしていただけかもしれない。だって、そのときが来ないように願っていたから。

そんなときが来ることを知っていながら目を逸らして、逃げてしまった。

そのしわ寄せが、これだ、

目の下にできた隈がどんどん濃くなっていくが、私はちつとも眠れなくなってしまう。

食べ物も喉を通らず、ずっと聞こえていたはずの “ 救いの声 ”

までもこの世界から消失してしまった。

私はもう、この世界でひとりぼっちになってしまった。

逃げ続けたツケを払うときがきたのだ。

覚悟して挑んだことを放り出し、甘い罠に飛び込んだ報いがやってきたのだ。

誰もいない世界。色褪せた世界。

私だけになってしまった世界。

抗うことを放棄したその先に待つのは滅びだけだった。

最後に幸せな夢が見られて良かったと言えるのだろうか。

あれが彼女の、江ノ島盾子の優しさだったのだろうか、なんてね……

十神クンは皆に自分を打ち明け、光に進んでいくだろう。

花村クンは原点を思い出し、母に会いに行くだろう。

小泉さんは世界中を周り、悲劇とその中に咲く笑顔を伝え続けるだろう。

辺古山さんと九頭龍クンはお互いに気持ちを打ち明け、対等な立場で守り守られ続けるだろう。

澤田さんはその独特な世界観と、性格の明るさで世界を魅了していくだろう。

西園寺さんは実家の期待を背負いながら、しかし甘えられる人物を見つけて強かに生きていくだろう。

罪木ちゃんは己のできることを見つけ、私がいなくても強く生きられるようになるだろう。

式大クンはいつまでも豪快に、格好良く人々を支えるマネージャーを続けるんだろう。

田中クンは荒廃した世界で動物たちと歩み、1筋の希望の光となるだろう。

七海さんは彼の心の中できつと生き続ける。そして、忘れられることなんてないだろう。

ソニアさんは1国の王女として、国民に希望をもたらすよう努力するのだろう。

左右田クンは荒廃した世界でも、その技術で復興のための希望になるだろう。

終里さんは式大クンと共に世界を回って弟たちにしたように、子供たちを助けるのだろう。

日向クンは希望も絶望も関係なく、全ての人々を未来に導いていくのだろう。

そうして、残りはまだ1人になった。

そこに、私はいらない。入らない。

こんな甘い罠にかかってしまうような哀れな蛾はもがけどもがけ

ど鮮やかな蝶々になれるはずもなく、蜘蛛の巣から逃れることもできないのだ。

5の島のとある一室で、決して開けられぬよう何重にも鍵をかけて座り込む。

本来ならあるはずの毒薬はドラッグストアに置いていない。

ドッキリハウスにも、毒薬は置いていない。ならば、”自然”に存在するものしか、私が使うことのできる毒はない。

今は誰もいないのだから、ルールを気にする必要もない。

サイレンが鳴ったところで、ルール違反を処罰するモノクマが出てくるのなら大歓迎だ。

誰もいない世界で暮らすのはもう疲れた。

ここで暮らしたのは数ヶ月……いや数年だろうか？途中で数えるのをやめてしまい、もう私にはどれくらい経ったのかが分からない。

もしかしたら夢の外と時間の経過が違って、外では1週間と経っていない可能性だってある。

けれど、私にとっては数年単位。

生きること执着していたくせに我慢が足りない？ 期間が短すぎる？ …… そうなのかもしれない。

けれど、焦がれても誰1人会うこともなくたった1人だけというのはとても寂しい。

人間というのは、1人だけで生きていけるものではないのだ。

ありつたけのプルメリアから小瓶に白濁液を集め、ハチミツと混ぜたものを用意してある。

調べたところ、これで致死量は超えているはずだ。

飲みやすさを重視してわざわざ甘くして、そして逃げ出さないように自分でも開けるのが困難になるほど嚴重に扉を閉めた。

これで最期。

私はハチミツを混ぜてもまだ苦いそれを、むせながらも必死に飲み干した。

そして用意した睡眠薬を服用し、無理矢理目を瞑る。

暗く暗く、夢の底よりももっと暗い場所へ墮ちるように……

1人ずついなくなり、幸せになった。

けれど最後に残った1人は逆の道を行った。

16人から15人に。

「……」

15人は脱出し、残った1人が死に……

「あれ……？」

世界が、揺らいだ。

そしてヒビが入り、そこから現れたのは……

「迎えに、来たぞ」

「えっ、ひ、日向…… クン？」

「俺は日向創のアルターエゴだ。本人が向かうと、お前のプライバシーを侵害することになるだろうと思って、俺がこの世界を壊しに来た」

この世界を…… 壊す？

プログラムでできた彼にときおりノイズが混じる。

けれど、その手はまっすぐこちらに伸ばされた。

「俺じゃ、不満か？」

「…… 日向、クン」

「俺は本人じゃない。だから、今お前がなにを言っても、しても」 俺

「 の記憶には残らない」

存分に、泣いていい。

そう言われた気がした。

それから、私は確かめるように彼の手へそつと手を重ね、見上げる。

感触を確かめるように握って、やっと掴んだそれを目にしただけで

もうダメだった。

「あ…… なっ、なんで…… いまさら……っ」

「遅くなって悪い」

「わっ、私が離しちゃったから……っ、私が、迷ったから……！」

だ、だからもう、キミに会えないと思っ……っ」

みつともなく、彼に抱きついて泣いた。

わんわんと。顔面を酷いことにしながら。きっと迷惑だろうな、なんて構ってられなかった。

幸いなことに本人から許可をもらっている。

普段多少虚勢を張っている分、人に見せられないような弱みを前面に押し出しながら……

今だけは、感情に任せて。

10人のインデイアンの最後の1人は、首を吊っていないなくなるか、結婚してなくなるかの2パターンあるらしい。

つまりこれは、そういうことなのだろう。

15人が脱出し、残った1人に迎えが寄越され――

— B a d e n d ⑥ —
A n d T h e n T h e r e W e r e N o n e —
そ し て 誰 も い な く な っ た

【番外編】育成計画軸ハロウィン

10月31日。本日はハロウィン。普段は持ち込みほぼ不可となっているお菓子を堂々と持ち込んでも良い日となるのだ！

風紀委員会の石丸くんは渋い顔をしつつも校則で許可されている日なので、ちゃんと見逃してくれる。

今朝見たところ、彼自身も不二咲ク……さんや大和田くんにお菓子を渡されて満更でもなさそうだった。

そんな彼も2人にお菓子を渡している姿を見ることができるところから、希望ヶ峰学園は案外融通が利くものだ。彼が用意していたのはチョコレートではなくお煎餅だったけれどね。

とにかく、学園を挙げてチョコレート贈呈が推奨される日なので私も例によつてメイと作った手作りクッキーを持参している。

霧切さんも学園長に渡したりするのだろうか。もう和解しているはずだが、未だに反抗期気味な彼女がまともにお菓子を渡しに行くかは疑問である。

苗木くんには積極的に渡すのにね…… ふふっ！

…… と、学園に行く前に寄り道をするのだった。

学園近くの公園へ行き、待ち合わせしていた人物と会う。

「お待たせしました、お姉さん！」

「やあ…… 君といい、まさか本当に来てくれるだなんて」

すっかりと大人びた彼女は相変わらず動きやすそうな服装をしている。

特徴的な赤縁メガネをしていて、少しだけボーイッシュな彼女。誘拐された私を助けてくれたあの、五月雨結さんだ。

どうやら探偵業も順調なようで、誘拐犯専門の探偵として上手くやっているらしい。たまに霧切さんや最原くんと一緒に事件に巻き

込まれたりしているが、未だに無事な辺りを見ると彼女も相当優秀な探偵だ。

子供に優しいし、巻き込まれた人へのフォローも上手い。探し物が得意な最原クンと霧切さんが事件を解いている間は、人のことをよく見たり観察に勤め不安要素をなるべく退ける役目を買って出たりしているらしい。

詳しいことは訊いていないが、彼女も大分波乱万丈な人生を歩んできたらしい。

霧切さんに結お姉さまと呼ばれるくらいなのだから、もしかしたら原作で出てきたのかもしれないが私は知らなかった。

助けられたあのおときもまさかここまで関わることになるとは思っていなかったよ。

「学園に入ってから会ってくれて感謝してるよ……」

「最原クンや霧切さんからよくお話聞いてますよ。改めて、あのおとき私を助けてくれたのがキミで良かったと思う」

「探偵として当然のことをしたままだよ！　って……　ドヤ顔で言うともた霧切ちゃんにどやされちやうかもね……」

世間話もそこそこに手提げ袋から手作りの小さなケーキを出す。

彼女には甘いもの。これがここ数年で学んだことだ。なにせ霧切さんに「クリスマスなのにミサも投げ出して一人で寂しくケーキを食べていたのよ」と言われてしまうほどの甘党らしいからね。

でも霧切さんの三つ編みはお姉さんの影響らしいし、彼女がイン・ビトロ・ローズを喜ぶのもお姉さんが理由だとか……　仲が良くてなにより。

「ハッピーハロウィン！　と、トリックオアトリート！」

「おっと、じゃあこっちもどうぞ。トリックオアトリート！」

彼女からもらったのは可愛らしい色とりどりのマカロンだ。

学校で食べても支障がなさそうな良い贈り物だった。

結お姉さんはどうやら大学は午後からのことなので、このあとケーキを食べることになるだろう。

私が来たときからすでに可愛らしい紙袋を持っていたので、きつと

先に霧切さんに会っていたんだらうな。

「あ、結構早めに来たはずなのに……」

「学園か、いつてらっしゃい」

「ええ、マカロンありますがどうぞございます。結お姉さん！　いつてきます」

手を振って別れ、学園へ。

すると校門のところまで遅めに来た幾人かと一緒になった。

「おはよう白銀さん」

「ふあ……　おはよう狛枝さん」

どこことなく眠そうな彼女の隣に行き、大きな紙袋に注目すると笑って「これは持ち帰りで作ってた仮装衣装だよ」と教えてくれた。

「どうやら大部分は学校で衣装作りをしていたみたいだが、間に合わなそうなくつかの衣装を自宅に持ち込み徹夜で仕上げてきたみたいだ。」

「気合い入ってるね。そっちの仮装はクオリティ高そう」

「うーん、でも狛枝さんのとこみたいに全員でわいわい作るのも良いよね。こっちは東条さんが手伝ってくれるとはいえ、ほとんどわたし1人だから、地味に羨ましいかも……」

「それぞれの楽しみ方は違いますわよ。隣の芝は青いとも言いますし」

「そうでしょうなあ」

と、私と白銀さんが話しているとこれまた大荷物な山田クンと、涼しげな顔で荷物を全部持ってもらっているセレスさんが会話に参加した。

チラツと見えた部分を考えるに、全部ゴスロリ衣装だろう。あとは執事服とか？　さて、誰に着てもらおうのか……　楽しみなような怖いような。

山田クン自身も大分衣装を持ち込んでいるようだし、確かにそれぞれの楽しみってやつなんだろうね。

教室に向かう途中、すれ違った腐川さんは興奮しながらピンクの耳と巻き尻尾を付けてどこかに向かっていた。

自ら豚になるとはやはり上級者か…… 本物の十神クンが逃げられるように願ってあげよう。あの人仮装しないだろうし。

「オーガは元々仮装してるようなモンだから必要ないべ」「は？」

「朝日奈…… やめておけ」

すれ違った3人が冷戦状態になっていた。

朝日奈さんを真顔にするとか逆にすごいな葉隠クン。

浮き輪ドーナツ持って仮装だよー！ とはしゃいでいた朝日奈さんが一瞬にして停止したもん。

というかなんで葉隠クンがあのおの2人と一緒にいるんだ。

「キミもすでに仮装してるじゃない…… ウニに」

「つぶ……」

「粕枝妹…… 我を庇うようなことは言わなくてもいい。自分の容姿のことは十分に分かっている」

と、言われてもねえ？

「そんなつ！ 酷いべ粕妹こまいもっち！」

「ねえ、その変な呼び方やめてほしいんだけど」

「無理だべ！」

さすが、通信簿埋める度にクズ度が上がっていくやつだよまったく。教室の傍まで行くと、舞園さんがハロウィン衣装でなにかを配っている姿が目に入った。

「おはようございます。よかつたら今夜のライブ来てくださいね」「おはよう舞園さん。是非とも行かせてもらおうよ」

チラシをもらって読む。へえ、瀧田さんと赤松さん演奏か。思い切ったことをするものだな。歌詞は誰が担当したんだろう？ まさか瀧田さんじゃないよね？ いや、ハロウィンにはピッタリだろうけれど。

音楽系の才能3人…… 楽しみにしておこう。

「よお粕枝妹！ トリックオアトリート！」

「…… あ、桑田クン」

まさか学園最初のトリックオアトリートが桑田クンからは……
でもなんで私？　すぐそこに舞園さんいるけど。

「舞園ちゃんの邪魔するわけにはいかねーだろ!？」

「ああ、なるほど……　ならキミは、チラシ配りがひと段落するまで
待ってるわけだ」

「そーいうこと！　で、菓子は何？」

「はいどうぞ。じゃ、こっちからもトリックオアトリート？」

「ほらよ」

チヨコバットつてキミね……

まあ、桑田クンらしいといえばらしいか。こういうところにとこと
なく野球が好きなんだってことが見え隠れしていて、なんだか微笑ま
しい。

「チラシ配り……　待つくらいなら手伝えばいいんじゃない？　その
方がきつと喜ぶよ」

「おう、鬼名案じゃねーか！　よっしやあ！　舞園ちゃーん！」
チヨロい。

さて、私も教室に行かなくちゃ。それにしても今日は皆賑やかで楽
しいな。

「白夜様ー！　どこにいるのかしらー!？」

廊下をものすごい勢いで走り去っていくジエノサイダー翔の姿が
見えた。どこぞでくしゃみでもしてしまったんだろう。

そして、その後ろをめっちゃ早歩きしながら石丸クンが追いかけて
いくという、名状しがたきシュールな絵面が展開されていた。

なにあれすつごい面白いんだけど。

「いやそこは走れよ！」　とその場面を見た左右田クンが激しい
ツッコミを入れているが、まったくその通りだ。

私が教室に入り、罪木ちゃんと挨拶しながら席に座る。

たまに剣道場で過ごしていて遅刻する辺古山さんも、いつも遅刻し
ている終里さんもすでに揃っていた。

十神クンが机の横に下げている袋は道を狭めるほどに大きく、いつ
たいなが入っているのか容易に想像できる。たくさんお菓子を

意して、そしてたくさんお菓子をもらいたいのだろう。

私が初日にとても驚いた生身の七海さんや、机に向かつてずっと作業している御手洗クンなんかもいる。

私の知っている限りの限りのメンバーは、日向クン以外…… 全員集合だ。

「おはようみんな！」

テンション高めの雪染先生が入ってくる。スパンツと開けられたドアはあまりの勢いに悲鳴をあげていた。

いつにも増してテンションが高いのは、やはりハロウィンだからだろうか？

学園の生徒は皆イベントごとが好きなようだ。

もちろん、1部例外もいるが。

「今日はお菓子の持ち込みが許可されてるわ。きつと1日中トリックオアトリートって言葉が飛び交うことになるわね。お菓子を用意していない人がいたら、今ここで渡しておこうと思うの」

「あちしに言ってくればすぐに補充しまちゆ！ どんどん頼ってくださいね！ らーぶらーぶ！」

「…… ということで、私たちはむしろあなたたちとのイベントを楽しみたいと思っているの。悪戯はほどほどに、みんなで楽しめるようにしましょう！ 以上、解散！」

先生とウサミが教卓に大量の飴玉を乗せる。

そして宣言された言葉に小泉さんが困惑の声をあげた。

「えつと、先生？ 授業はないんですか？」

「ないわ！」

「ええ」

「そんなの野暮だつて学園長が決めたの。まあ、十中八九霧切さんからお菓子をもらいたいんでしようけど」

学園長エ……

「なら今日はなんでもし放題つてことー？」

西園寺さんが疑問を投げかけ、雪染先生が頷く。

いつも授業らしき授業がないとか言っではいけない。

自主参加なだけで雪染先生やら黄桜先生やらは面白い話を聞かせてくれるし、聞けばちゃんとした授業もやってくれるのだ。

黄桜先生はお酒をお土産にすれば大体機嫌よく答えてくれるから楽でいいよね。先生に餌付け？ なんのことかな……

「粕枝さんトリックオアトリートです！」

「こちらこそトリックオアトリート！」

まるで挨拶のようにソニアさんとお菓子を交換する。

彼女の国ではチョコレートが名産だ。とても楽しみにしていたんだよね。

それから彼女は私とお菓子を交換してすぐ田中クンのところへ走っていった。

彼にはチョコレートではなく、ドライフルーツの詰め合わせを贈っている。動物にも食べられるようなお菓子をわざわざ選んでいたらしい。他の人に渡すときは全部チョコレートの包みになっているため、彼だけの特別だ。

ドンマイ左右田クン。涙拭けよ。

「んふふ、ぼくからの甘いお菓子はお預けだよ。お昼に…… たっぷり振る舞うからね！」

「ケーキか!? ケーキだよなあ!! お、オレ今から楽しみだ……」

「ほれ、今はこれで飢えをしのぐんじやなあ！」

「おっさんのでっかいボールおにぎりじゃねえか！」

なんか一部変な会話をしているが気にしない気にしない。

終里さんの食べてるおにぎりか爆弾おにぎりどころじゃない大きなものも気にしない。

辺古山さんは九頭龍クンと一緒に、順番に回って行っている。

ちなみに彼女たち、私とメイの関係を知ってから隠す気がなくなつたのかすでに主従バレしている。

私とメイもろともに仲良くさせてもらっている。

九頭龍クンと私が仲良くなれたのはこの関係性のおかげだね。

「あ、あの…… よければ一緒にまわりませんか？」

「あはは、断るわけないじゃない。よろこんで」

わざと気障ったらしく言っただけでその手を取ってみる。するとみるみる罪木ちゃんの顔がゆでダコのように真っ赤になってしまった。

わざととはいえ、相変わらず良い反応をしてくれるね。これだから悪戯はやめられないよ。

「いやあー！ 静子ちゃんの馬鹿あああ！」

「だ、だから、まだ強力すぎるって、言ったのに……！」

「アンタがもつと強く止めてればやめたの！ と、とりあえず研究室に逃げ込むのが1番でしょ!？」

「いいことを言う。あそこに立てこもって鍵をかければ問題はないな」

「よいちゃんもつと早く走って！」

「わ、私を、置いていく、気!？」

目の前を通過していく3人にキョトンとしてしまったのは仕方ないだろう。

十六夜先輩が安藤先輩を横抱きにして走り、そのあとをドーピングしていると思われる忌村先輩が追いかける。

そしてそのさらに後ろには目をハート状態にした先輩集団が走っている。

もしかして、またなにか薬を仕込んでお菓子を配り歩いたのだろうか。ならばわりと自業自得なのだが。

まあいい。私はその逃走劇を見なかったことにして隣のクラスに顔を出すことにした。

隣のクラスでは全員が仮装をしていた。

私も魔女の格好をしていて、罪木ちゃんは黒猫の装いをしているが、手作りのためクオリティはお察しだ。白銀さんが用意した衣装にはやっぱり敵いそうにない。

約2名、普段とほとんど変わらないが。

その2名のうち1人、夢野さんはいつもよりも少しだけ豪華な魔女っ子スタイルだ。隣にいる茶柱さんも同じく魔女っ子スタイルで、

お揃いの衣装にテンションマックスになっている。よかったねえ。アンジーさんはいつもの水着の上から真っ白なローブを羽織っていて、頭の上に輪っかをつけて背中に真っ白でふわふわな翼……つまり天使の格好だ。

浮世離れた彼女にはとてもよく似合っているし、実際めっちゃくちゃ可愛い。

「おはよう夢野さん！ トリックオアトリート！」

「ふむ、とくと見ておれよ！ ハロウィンになって魔力の強まったうちは無敵じゃー！」

普段面倒という言葉が漏れる口からは随分と元気な言葉が出てくる。

目もどことなくキリツとしているようだ。隣にいる茶柱さんのテンションが振り切れてメーターがぶつ壊れた音がする。耳がいたい。夢野さんがなにやら杖を振るうとどこから出てきたのか、飴玉と紙テープが飛び交い鳩まで出てきた。それから、彼女の杖が私と罪木ちゃんのポケットを指し示す。

夢野さんはそうすると杖を両手で挟んで思い切りぐいと押し潰す。すると…… 本当になんかどうなっているのか、杖は両手に挟まれたままするすると短くなっていき、最後には跡形もなくなってしまった。

「うわあ、すごいすごい！ それどうやってるの!?!」

「魔法じゃ…… 狛枝、罪木、ポケットを探ってみるんじゃ」

その言葉に疑問を浮かべながら、先ほど彼女が杖で指したポケットを探る。

すると、なんと包装されたジンジャーマンクッキーが出てきたではないか！ 一つのまに…… さすが超高校級のマジシャンだ。

ハロウィンに相応しいものを見せてもらえて私は大満足である。

「わああ！ 狛枝さあん！ 狛枝さあん！ クッキーですよー！」
はしゃいで喜ぶ罪木ちゃんが可愛らしい。

「ありがとう、夢野さん」

「ひとときの夢は楽しめたかのう？」

「うん、とつてもね」

夢か。

うん、こんな夢なら毎日でも見たいね。

彼女の魔法は1年で1番今日が輝くのかもしれない。

「アンジーからはこれだぞー！ お前もなにか用意してるんでしょー？ ねえねえー、なにかなー？ なにか出てくるのかなー？」

アンジーさんからもらったのはまさかのサーターアンダギー。えっ、沖縄出身じゃないよね？ それともよく似たなにかなのかな？

それと、わりとリアルな目玉の形をした飴玉だ。まさにハロウィンって感じ。

「転子からはこれです！」

茶柱さんからもらったのは麩菓子だ。これまた以外なチョイス。いや、美味しいからいいんだけど。

私もクツキーを渡して挨拶する。

あとは……

「真宮寺クン、トリックオアトリート！」

ほとんど姿が変わってない人その2だ。

元から近寄りたいたいし、まあ似合うだろう。ハロウィンというよりお盆みたいな見た目してるけれど。

「トリックオアトリート…… ハロウィンは元々秋の収穫を祝うお祭りなのサ。この日にはあの世とこの世の境目の門が開かれて死者が家族を訪ねてくる…… いわば日本というお盆だね。それと同時に有害な魔女や妖精が悪戯をしまわるから、子供にお化けの格好をさせて守っていたんだヨ。ジャック・オー・ランタンは元々カボチャではなくて、カブを使っていたと知ってるかな？ まあ、これほどの大きなイベントになったのはいろんな思惑が絡んでいるようだけれど…… アメリカではれっきとした行事サ」

「そっか、向こうでいうお盆なんだね…… 面白い話ありがとう」
「勝手に話したことだから構わないヨ。それと、はいこれ」

彼から渡されたのは透明な包みに入ったりんご飴のようなもの。でも見た目は茶色くてキャラメル色をしている。

「これは……？」

「それはキャラメルアップルだよ。ハロウィンでの伝統的なお菓子サ。姫りんごを使っているから大きさは気にならないだろう？ ああ、リンゴなのは勘弁してほしいな。リンゴには愛と美を司り、病を治す魔法の果実だって信じられていたこともあるんだ。気に入らなければ、こっちのバーム・ブラックもあげるヨ。それは中身が梨のドライフルーツのケーキだから安心して食べるといい」

彼の話はやはり、面白い。

とりあえず苦手なリンゴだが、彼の目利きを信じて後で頂こう。

「ありがとう、こんなものしかないけど…… はい、クツキー。お姉さんの分もどうぞ」

「…… ありがとう。姉さんも喜ぶヨ」

真宮寺クンと別れて横目に春川さんと百田クンを見る。最原クン、赤松さんも見守っているようだが、2人仲睦まじくお菓子を交換したり、天海クン迫真のゾンビメイクに驚きすぎて抱きついたりと大忙しだ。

リア充幸せになりやがれ。

あ、ちなみに春川さんからはチロルチョコ。百田クンからは宇宙モチーフの棒突き飴をもらった。かなり幻想的でいつまでも見つめていたいくらい綺麗で、まるで芸術作品みたいだ。

春川さん、百田クンには別のもの渡してたみたいだしやっぱりリア充幸せになれ！

「トリックオアトリート！ 星クン！」

「ん…… 俺のでもいいのか？ あんたも物好きだな…… ほら」

「じゃあこれ、交換」

星クンがくれたのは彼のミントシガレットだ。クラスメイト以外に言われるとは思っていなくて、どうも手持ちが少なかったらしい。

他の人は見当たらない。

キーボクンにはお菓子をあげられないし、入間さんは交換してもらえるか分からないけれど…… まあ場所の検討はつく。

その間に登校までに出会った人たちとお菓子を交換しつつゆったりと行こう。

「えへへへ…… こんなお菓子をもらったのは生まれて初めてですう……!」

無言で撫で回した。

「ひゃあああ!」

ボサボサになった彼女の髪を慌てて手櫛で整えて、謝る。

罪木ちゃんはそれでも幸せそうにはにかんでいた。

「やあ、いるかな? 入間さ」

「ひゃーっはっはっはー!」

カボチャのメガネをかけた入間さんがなにやら機械を向けてきたのでひよいと避けた。もう慣れたものである。

でも入学初日でパンツを剥ぎ取られたのだけは絶対に忘れない。

絶対のだ。

喋らなければ本当に美人なだけだな…… いや、その残念さが魅力か。なら、仕方ないね。赤松さんには懐いているみたいだし、悪い子ではないんだろうけれど、ごめん。私は罪木ちゃんで精一杯っていうか……

「で、なんですかこれは?」

なんてことを思っていたら奥からキーボクンが出てきた。どうやらなにか機能をつけたあとらしい。

良い予感はずっともしないけれど!

「おう! ビームが出せるようにしてやったぜ!」

「あの…… あまりメカっぽい機能は……」

「いいからやってみろって!」

「は、はい。えいやー!」

彼の手先から出てきたのは真っ白な液体だった……

「ちよっ、こつち来ないで……うあっ!」

「ひゃあああ! ご、ごめんなさい!」

白い液体がなぜか軌道修正してこちらに向かってきた。分散して入間さんの方にもだ。

しかし、こういうときに限って罪木ちゃんは転び…… そしてそれに巻き込まれた私も当然逃げるができなかった。

「冷たっ！　って……　これ牛乳………？」

「ああんっ……　ミルクビームだ！　ひゃっはー!!　こんなこと思いつくオレ様っえー!」

「よりにもよって牛乳か。それは……　それはなんというか、最悪だ。」

「食べ物や粗末にはいけません。」

「う、うう……　牛乳とか乾いたら臭くなるやつじゃないか……」

「あとでこの機能外してくださいね……　あと、そのメガネはどうしたんですか？」

「ああこれか？　これはこのメガネ越しに見た人物を自動的にハロウィン仕様の衣装に見せるメガネだ！　露出アツプで牛乳垂らしてうつはうはだな!」

「うわあ……」

「それはまた……　花村くんが喜びそうな……」

「おっしキーボ！　実験済ませたしイタズラしまくるぞ!」

「ええ……」

入間さんと、彼女に腕を掴まれたキーボくんは教室から出て行ってしまった……

「待って、この服どうすればいいの……？」

「え、えっとお……　急いで寮のお風呂に行けばなんとかなるでしょうかあ……」

「でも衣装は台無しだよね……」

ああ、メイに教わりながら作った1ヶ月間の苦労が一瞬で水の泡に……

私たちは、羞恥プレイに晒されながら誰にも呼び止められることなく、無事寮へ帰えることができた。

入間さんの教室にはしつかりクッキーを置いてきた。ああいう人だというのは分かりきっていたので仕方ない。

「ねえねえ、なんでオマエラそんなエロい格好してんの?」

「うっさい！　モノクマはどっか行ってよ！　傷口抉りに来ないで!」

「えー」

そのとき、真横から不審な音が聞こえた。

「あ、バレちった……」

「ダメよモノタロウ！　ちゃんと消音しときなさいって言ったでしよう！」

「つーか隠れるの面倒すぎんだよー！　隠し撮りはもつと情熱的にやるべきだぜえー！」

「この写真は裏で売れるでえー！」

「カクシドリ、ヨクナイ」

しばし見つめ合うこと数分。

素早く飛びかかり、カメラを奪取しようとしたものの見事に全員逃げられてしまった。

私と罪木ちゃんの人生が今、1番の危機に晒されていることは間違いない。

最原クンや茶柱さん、豚神クンなどの携帯電話にメールを送る。

【Wanted モノクマ&モノクマーズ】

「うぷぷぷぷ……」

隠れる気のないピンクブロンドのツイントールが見える。

絶対に許さない

お風呂に入ってようやく学園内に戻ってきた。

すると、向こう側から段々波のように悲鳴が迫ってくる。

またトラブルか。皆はハロウィンでもマナーは守ろうね……

「ゴン太、次のターゲットだぞー！　いけー！　虫さん愛好家を増やすんだろ？」

「うん！　狛枝さーん！　罪木さーん！」

ゴン太クンの背中で王馬クンが指示出ししている時点で嫌な予感がする……

「トリックオアトリート！」

「はい、2人も。トリックオアトリート」

手、震えてない？　大丈夫だよね？

「うん！　ゴン太からはこれ！」

「うっ」

見た目が黒い悪魔でなかっただけマシかもしれない……

でも、でもさあ…… カブトムシの形とかセミの形したチョコレールトって……

「あ、あ、ありがとう。あとで美味しくいただくよ……」

一瞬変な声が出たがなんとか笑顔を向けることができた。

「えー？ その場で食べてくれないのー？ オレたち…… 一生懸命作ったのに…… 綺麗な形になる、ようにっで…… う、うう…… ウエアアアンヴ（ジュール） ヤエヤアアア→ アイイヤエ→ ヤウイウ」

「食べて、くれないの？」

わお。

これは参ったなあ……

隣に視線を移してみると、罪木ちゃんは涙目になりつつもそっとセミにかじりついた。若干顔がしかめられている。チョコでできているはずなのに、甘いはずなのに。

「いただく、ね？」

私も結構大きいカブトムシにかぶりつく。

なぜだかめちやくちや苦い。彼の背中にいる王馬クンがすごいニヤニヤしているので、カカオ85パーセントくらいのチョコレールトを使わせたのは間違いなく彼だ。あとで絶対イタズラしてやる。

精一杯笑いながらチョコを食べ終わると、ゴン太クンはにっこり笑顔で去っていった。

これで王馬クンの自室に生クリームと歯磨き粉をすり替えたケーキを贈ることが決定したよ。

「アンタすっごいわ…… よく完食したね」

「え、江ノ島さん…… 水持つてない？」

「もちー！ 水筒は常備しとかないといっつ物資が届かなくなるかわつかわないからねー」

ちよつと戦場さん、漏れてる漏れてる。

本当、この人なんで影武者できてるのか不思議なくらい明け透けだ

よね。

「だ、大丈夫!? 狛枝さん」

「ああ、苗木くん…… 今ここを通過してラッキーだったね……」

本当、キミって悪運が強いよ。

「妹さんにもこれ、渡してね」

「あ、ありがとう……」

彼に介抱されつつ教室に戻った。歩き回るのはもう散々だ。

放課後。

音楽系3人のライブも無事終わり、下校する際に校門を通ると七海さんと話している日向くんがいた。

よく3人でゲーセンに行くので皆知り合いだ。

どうやら七海さんは雪染先生と放課後残って委員の仕事があるらしい。一緒には帰れないということだった。

「やあ、日向くん」

「狛枝……」

すっかり薄暗くなった道を2人で歩く。

私はこれから寮で夢仲間とハロウィンパーティーなのだが、彼はその買い出しに付き合ってくれるのだそうだ。正直かなりありがたい。

メイは先に料理の下準備をしているらしいし……

「この道、暗いね」

「ああ……」

街灯の乏しい道を歩き、商店街へと向かう。

そんなおり、道の先からきやつきやとなにか子供が騒ぐような声が聞こえた。

きっとハロウィンではしゃいでいるのだろう。

そう微笑ましく思っていると、その音がだんだんこちら側に近づいて来るのが分かった。

ガシャン、ガシャンやら、ピツピツとそれぞれ音のなる靴を履いているようで愉快的な音を奏でながら3人の子供がやってくる。

「トリックオアトリート！」

3人同時に言われた声にどことなく懐かしさを覚えながら笑う。

1人は大きなカボチャを被り、ジャック・オーランタンに。1人は1つ目の仮面を被って包帯少女に。最後の1人は頭に大きなネジを取り付けているフランケンシュタインスタイルだ。こちらはホッケーマスクを被っている。

「はい、どうぞ……ほら、日向クンも！」

「ああ、飴しかないけどいいか？」

「わーい、ありがとう！」

カボチャ頭がはしゃいで飛び跳ねる。

オレンジ色のワンピースがひらりと翻った。

「感謝するよ」

「ふふん、ご苦労さまね」

残り1人がなかなかのクソガキっぷりを発揮しているが、可愛らしいものだ。

ヒイラギ姉さんや希望ヶ峰付属小の子たちで慣れてしまっている。あれに比べればまだ可愛気がある。

「ありがとう！」

そう言っつて包帯少女を引っ張っていくカボチャ頭の少女が離れていく。

子供に対してお菓子をねだるようなことはさすがにしない。

子供はまだ、もらうだけでいいのだ。

「キミはいかないの？」

「……」

最後に取り残されたフランケンシュタインの女の子に聞く。

すると、俯いていたその子はホッケーマスクのままこちらを見透かすように、ねっとりした笑い方をした。

「ありがとう、風」

「え……？？」

その場で少女が霧のように消える。

「……」

「粕枝？」

「ううん、なんでもない…… なんでもないけど…… んんっ、今……
ここで見てることは、忘れて、ほしい……」

自然と頬を伝う涙は止め処なく溢れ、拭っても拭っても収まる様子を見せなかった。

そんな私を困ったように見ながら、日向クンはそっと私の頭に手を乗せる。

このときだけは背の高い彼に感謝した。

だって、私が俯いてしまえば泣き顔は見られないから。

「もう少ししたら、きっと大丈夫だから……」

「俺はなんにも見てないぞ…… それでいいんだろ？」

「…… うん」

特別な日。

特別な夜。

こんな日には、お祭りの賑やかさに惹かれて皆の大切な人が戻ってくるのだろう。

私はしばらくそのまま、動くことができなかった。

【育成軸】クリスマス2017 【出題編】

カランカラン！

昼下がりの商店街で軽快なベルの音が鳴らされる。

目の前のスタッフさんは驚いた顔で横にいるベテランさんを見つめてから、はっとしたようにクラッカーを鳴らした。

私は取っ手に触れたまま固まっていたが、金色の小さな玉が福引きの機械から出ているという現実は変わらない。

「す、すごいですよお狛枝さん！」 豪華客船クリスマスパーティーチケット “ ですよ！”

罪木ちゃんが商品一覧を指差しながらはしやいで飛び跳ねた。

「クリスマス…… 確かに十神くんは今年仕事で参加できないって言ってたけどね…… 学園でも他の皆でやるんでしょ？ どうしよう、これ」

「これに行くことくらい、皆さんきつと許してくれますよお！」

衆目に監視されながら受け取ったチケットを確認すると、このチケットだけで2人豪華客船には入れるらしい。

予定としては24日の昼頃から翌日25日の夕方までの豪華クリスマスパーティーだ。要人とまではいかないが、社交界パーティーのようなものも兼ねており、財閥関係者やお金持ちやらも集まる一般人の想像もつかない世界に行けるみたいだ。

この一般人枠のチケットはどうやら10枚しか出回っていないらしくて、本当に幸運だったということだろう。

「あっ」

まあ、そうなるよね。

「ひゃあああああ!?!」

目の前にベチャツとなにかが落ちる。

私が察した瞬間罪木ちゃんを全力で引き寄せ、その頭を自分の腕で防御しながら建物の下へ避難する。

避難が完了すると、その次の瞬間から上空から爆弾が大量投下された。

「な、なんですかあ！ このカラスの量は異常ですよお！」
「来ると思ってたよ」

そう、上空を覆い尽くさんばかりのカラス達が一斉に糞を投下し始めたのだ。

あ、罪木ちゃんを庇うのに精一杯で買い物袋忘れてきた……

「ひゃあああ！ お洋服がああ」

「不運だねえ」

2人でシヨッピングした服が糞まみれになるのを眺めながら、直接浴びなかつただけマシな不運かと肩をすくませる。

私の巻き添えになった一般通過の皆さんには悪いけれど。

「豪華客船のチケット…… こんな不運だけでいいんだ」

「え、ええ…… これでも十分不運じゃないですかあ！」

罪木ちゃんの悲鳴に生返事を返しながら日常とは一転、爆撃される商店街を眺めながら私は考える。

宝くじで誘拐。死の回避で身近な死。なら、超低確率の当選は？ いてもならこんな不運で済むはずがない。

少しだけ嫌な予感を持ちながら、私は罪木ちゃんをそのまま誘ってクリスマスを過ごすことにしたのだった。

あれから、更なる不運もなく無事に24日となり乗船することができた。

お昼ご飯は船の中でバイキング形式で摂れるようになっていたため、案内された一般人用の客室に1日分の着替えやらなにやらの荷物を置いて探索を開始した。

「なぜお前達がいる」

「あれ、苗木クンクラスの十神クンじゃない」

「……」

バイキング会場の隅にやたら豪華なテーブルがあると思ったら、すごく見覚えのある顔があった。

その見覚えのある顔よりは、痩せているけれど。ボディーガードに

睨まれながら近づくと十神クンが顔を上げてこちらを見た。

この人、バイキング料理じゃなくて1人だけコース料理食べてるんだけど。えっ、財閥の御曹司でもここまで待遇違うか？

「ねえ、痩せてる方の……」

「俺が十神白夜でなくてどうするんだ。いい加減お前達のクラスのあれの名称を決めろと言っただろう。存在することを許しているだけで俺はかなり譲歩してるんだぞ。」

「あー……」

「え、えつと……なんて言えばいいんでしようねえ……」

私が勝手に呼んでいる名前はあれけれど、豚神クンはまだ全員に正体を明かしたわけではない。

聞いて知っているのは私と日向クン。それと、偶然聞いちゃった罪木ちゃんと、察しのいい人たちだ。言われずとも察している人たちは、いつか彼が自分から打ち明けてくれるまで待つことにしているらしい。だから名称は決まっていない。

「で、なぜお前達がここにいる」

「商店街の福引でちよつとね」

「…… 呆れた幸運だな」

「褒め言葉だよ」

「はあ…… 食事の邪魔だ。さつきと失せろ」

しかたない。今日はきつと腐川さんに追いかけられない貴重な時間なんだろうし、尊重してあげないとね。

座席に777と書かれていたので、きつと1番上の階を使っているんだろうな。

私の部屋は306号室。罪木ちゃんは隣の307号室だ。

客室部分は上方の階と下方の階に分かれていて、財閥関係者などの上客は上の階に泊まっているらしいとはその辺で捕まえた太ったスタッフに聞いた話だ。どうでもいいけれど、制服がぱつぱつんぱつんすぎて明らかに体に合っていないと見える。

あとでもう1度話かけに行こう。

「もつとたくさん人がいると思っていました…… その…… そんな

なに人がいない気がしますう」

罪木ちゃんがお皿を両手に持ってキョロキョロと辺りを見回す。

確かにバイキング会場にはあまり人がいない。まだ18時台であることが関係しているかもしれない。まあ、時期に人が増えてくるだろう。

「カジノとかもあるらしいよ……」

言いながら、いくらするのか分からないローストビーフを口に含む。

十神クンが文句も言わずに食べるレベルなら一般人には手の届かない品だろう。十神クンのシェフ特製の料理も恐らく同じ材料を使っているだろうからね。

こちらのバイキングは冷めても美味しく食べられる物ばかりだが、十神クンのテーブルにあった料理は出来たてを食べるような物ばかりだった。

ああまったく御曹司サマはすごいね、ホントに。

「んむ…… んぐつんぐつ」

「さすがに今日は転ばないですよ？」

「ふあいー！」

高級なご飯を涙を流しながら食べる罪木ちゃんの頭を撫でてみると、全力で頷かれた。昔の境遇もあつてか、あまりガツガツ食べられない彼女にはきちんと食べてもらいたいところだ。医者の不養生はよくないからね。

…… でも全部胸に行くんだろうなあ。

「んんん、んぐ狛杖さあん！」

「ちよつと!?!」

言わんこつちやない。

どこかに視線を彷徨わせていたかと思えば、いきなり振り向いた彼女は自分の足を踏んでよろける。

お皿は落としてしまうだろうが、それよりも彼女を支える方が先だ。

転びそうになった罪木ちゃんの遊ぶ手を掴んで、倒れる前に無理矢

理引き起こす。

彼女の持っていたお皿はやはり割れてしまった。周りから少しだけ冷たい視線が突き刺さるが、その視線を彼女に見せないようにその頬をぶにぶにと抓る。

「ふああ、ぐ、ぐごめんなさい！」

「やるとは思ってたから、気にすることなんてないよ」

「わ、私いつもいつも……」

「卑屈なこと言うのはこの口かな？ 後悔は先にできないんだから、これから気をつければいいんだよ」

「はあい……」

周りの視線なんか気にする暇がないくらいいいじり倒してあげれば、更に卑屈を拗らせることはない。私はこの2年間でちゃんと彼女の扱いを覚えただ。手のひらで転がすくらいお手の物だ。

「お怪我はありませんか？」

「ああ、大丈夫ですよ。ごめんなさい、お皿の片付けだけお願いします」

「ごめんなさい！」

先ほどの太ったスタッフさんが掃除しにやってきたので後を任せる。

そのポケットに高額な二枚の紙片を忍びこませて手を振ると、恭うやうやしくお辞儀されてクスクスと笑ってしまう。

まったくお似合いなことだ。

「ところで、さつきはどうしたの？」

ある程度食べていたこともあり、カジノ会場に向かいながら罪木ちゃんに聞く。

すると罪木ちゃんは、転ばないよう私の服を掴んだまま後ろを振り返った。

「いえ、あの…… 会場の隅に九頭龍さんと辺古山さんがいた気がして…… 気のせいかもしれませんけど……」

「あー、あの2人ならいてもおかしくないかもしれない…… かな？」
ただし身分を隠して、だけれど。

日本有数の極道が、公的に表の重鎮達が来ている場所にいるのは誤解される可能性もあるからね。結構周りを見ていた私が気づかなかったということ、壁の花に徹していたのかもしれないし。

問題は彼らが一般人枠と重鎮枠どちらでできているか…… 一般人枠だったのなら、誰かからチケツトを買収していたりして。

普通に遊びに来ているのか、コネを作りに来ているのか、それとも極道が見にくるほどのなにかがここにあるのか…… それも気になるな。

「あ、あれ…… カジノにいる皆さんんだか沈んでいるみたいですけどお……」

カジノに来てみれば、彼女の言う通り嘆きの顔で床を叩いている人物やら、年甲斐もなく泣いているおじさんや、パンツ一枚になってしまっている可哀想な人がそこらに転がっていた。

もちろん公害を晒しているおじさんは船内スタッフに回収してもらった。

カジノディーラーの皆さんもどうやら浮かぬ表情をしているようだ。カジノの入り口近くにあるバーに足を向けてみれば、ヤケ酒を煽っている人間が多数。

バーテンダーも困惑の表情だ。

「どうしたんですか？ この惨状」

「ああ…… 皆さん大負けしてしまっただけですよ。それも1人の女の子にね。他のディーラーの皆さんもことごとく負けてしまっただうで、今最後の1人が彼女に挑んでいるところですよ。ここで1番正義感が強くて、イカサマなんて許さない人ですからね……あの人も負け知らずなので、私も勝負の行方を是非拝見したかったところです。あの人が負ける場所なんて滅多にないでしょうし」

ロックにするための氷を長めのアイスピックで慣れたように加工しているバーテンダーは、ため息でも吐きそうな勢いで視線を動かした。

まるで全勝ちしている女の子がイカサマしているような言い方が、どこか諦めているような印象を受ける。

もしかして、正義感の強いその人に負けてほしいのかな？

完全に営業用の喋り方が崩れているが、この人も疲れているのかもしれない。

まだ乗船を初めて2時間くらいで出港すらしていないんだけど……

出港は午後7時なのであと1時間ある。

午後8時頃まで夕食があり、それ以降はデザートが並べられサーブスワインやらが配られつつ、ピアノ演奏を背景にしたダンスパーティーが始まるようだ。コネ作りやら挨拶回りやらはこのときがメインになるようだ。

「粕枝さん…… 見に行ってみますかあ？」

「カジノ…… ね。強い人なら楽しめそうだし、勝負挑んでみようかなあ」

「やめておいたほうがいいと思いますかね……」

メガネオールバックのバーテンダーさんに注意をされたが、私は超高校級の幸運だ。真正正銘、幸運を才能に持った人間だ。

あとでどんな不運が来ようが、運が絡む勝負で負けたことはない。さて、どんな人が相手なんだろうなあと考えながら、ちよつとした自尊心を胸に人垣ができている場所に歩み寄って行く。

周りにいる人は負けた人か、最初から傍観していた人たちらしく手に汗握りながら円卓を囲んでいる。

「Aのファイブカードですわ」

「ストレートフラッシュ…… いや、お強いですね。イカサマもないようですし、完敗です」

ドツ、と外野が沸く。

その壁を抜けながら、ものすごく聞き覚えのある声に「なるほどね」と呟きながら前に躍り出る。もちろん人混みに押されて転びそうになる罪木ちゃんを支えながら。

「セレスさん、ひと勝負どうかな？」

「あら、粕枝さんいらしたんですね。あなたとの勝負なら楽しめそうです。受けて立ちますわ」

相変わらずお人形のようなゴシックドレス調の制服に、巻き髪ツインテール。カラコンで赤い瞳はこちらを見て蛇のように細められた。「学園長室でやった麻雀はうやむやになっちゃったからね。今度こそ運を才能に持つ者同士、正々堂々勝負しようじゃない」

「お客様、あまりこの人と勝負するのはお勧めできませんが……」

ディーラーとしては言っちゃいけない言葉だが、律儀に忠告してくる彼に笑顔を返す。金髪オールバックだが、礼儀正しいディーラーさ
んだ。

「正真正銘の幸運で選ばれた、〃超高校級の幸運〃 狛枝凪。キミに勝負をふっかけさせてもらうよ」

「……」 超高校級のギャンブラー “セレスティア・ルーデンベルクがその勝負、お受けいたしますわ。よろしくお願いいたしますね”
ポーカーフェイスでいつもの笑顔を作ったセレスさんと同じく、席に着く。

ディーラーさんは「希望ヶ峰の……そりゃ勝てないわけだ」と言いながら真新しいトランプを右手に持ったハサミで開封してから混ぜ、配り始める。

ポーカー勝負なので本当に運次第だ。

「手持ちのチップ全てを賭けましょう」

「コールしよう。私も同じだけの額を」

「こ、狛枝さんチップなんて持ってないじゃないですかあ！」

「現金換算でよろしく」

「承知いたしました」

「わたくしもそれで構いませんわ」

もし万が一負けた場合はチップ分を現金で支払う。そういうことだ。

まあ結果は分かりきっていたことだが……

「ロイヤルストレートフラッシュですわ」

「同じく」

「また同じ役。同じ数字ですか……」

幸運が相殺しているのか、向こう側にもこちら側にもファイブカー

ドが揃うことはついぞなかった。

スピードやダイヤがどちら側に出ることが多く、ハートやクロバーがこちらに出ることが多いことが、まさに運の取り合いをしている感じがする要因だ。

「引き分けにしかかなり得ませんか……」

「うーん、引き分けじゃあ幸運とは言えないかなあ。いや、キミと勝負して負けないだけ幸運なのかな？」

「仕方ありませんわ。金銭の移動はなしですわね……」

「そうだね」

私からふっかけた勝負だ。引き分けに終わったのなら賭けた分が返ってくるだけで、プラスの収入はない。そもそもチップも買ってないし。

「消化不良ですがせつかくですし、わたくしもロイヤルミルクティーをいただきに行きましょう」

セレスさんを仲間に加えてカジノ会場から移動する。

勝負している間に、そろそろダンスパーティーの時間だ。

「ああ、もう少しでこの船にいる愚かな人たちから全財産巻き上げられましたのに」

「なかなか鬼畜なことを言うね」

「あなたのせいで賞金も雀の涙ほどしかありませんし、わたくしにとってはとんでもない不運でしたわ」

「ああ、それはごめん。ついつい……」

「運の才能を持ったお2人の勝負なんて滅多に見られませんし、私にとってはとっても幸運でしたあ」

幸せそうにとろつとした笑顔を見せる罪木ちゃんの頭を撫でる。

なんだこの子、天使か。そうだ、白衣の天使だった。

ざんばらな髪はあまりよろしくないで短い髪を集めて、現在彼女はハーフアップの髪型だ。服も桃色を基調としたもので、より可愛らしくなっている。

こんな可愛い子を虐めるようなやつは許さない。絶対だ。

私の格好とセレスさんの格好は普段とほとんど一緒だが、多分セレ

スさんの衣装は普段の制服とは少しだけ違う。ほとんど制服と同じだけれど、もつとフリルが足されているように感じる。

バイキングのデザートを3人で取り分けていたら、1人で2人分のお皿を持っているスーツ姿の、見覚えのある人間を発見した。

2人に目配せをして近づく。セレスさんはそのまま席にいるつものようだ。罪木ちゃんと2人で声をかけに行く。

「最原クン？」

「え？ 狛枝さんに、罪木さん……」

「私たちは商店街の福引でちよつとね。セレスさんや痩せてる方の十神クンもいるよ。最原クンも……？？」

「十神さんは御曹司としてご招待されていますけどお……」

「あ、僕は招待されて……」

「え、探偵として？ もしかしてなにかあるの？ っつ」

私が安易に口にした。探偵。という言葉に彼は慌てて

「ちよつと！」と言いながら口元に手を当てた。

「あ、ごめん……」

「い、いやいいけど……今日は赤松さんに誘われたんだよ」

その言葉にまず思い浮かんだのは「クリスマスデートか」という感想だったが、次に気づいたのは「ピアノ演奏を背景にダンスパーティー」という案内だった。

「赤松さんが演奏するんだ？ つまり優待者チケットか…… 楽しみだね」

「う、うん……」

ちよつと複雑そうな最原クンの内心を察する。

そうだよね、赤松さんとダンスパーティーに参加したいよね。

「第一奏者は、超高校級のピアノリスト。赤松楓様です」

ざわざわとした喧騒の中、演奏者の紹介が簡単にされる。

超高校級の名前に会場が少し沸き立ち、赤松さんの演奏が始まるのを複数の男女がひと組みになって今か今かと待ち望んでいた。

壇上に現れた赤松さんはピンク色に鍵盤の柄が入った可愛いドレスに身を包んでいた。髪も上でひとまとめにお団子にしており、

いつもの雰囲気と少し違ってまた良い。

「わあ、すごいですう……」

「う、うん……」

感嘆の言葉を漏らす罪木ちゃんと、見惚れて生返事をする最原クンにクスクスと笑ってその演奏を聴く。

最初の演奏は少し切ないイメージを持った。クラシックは分からないので、後で赤松さんになにを演奏したか教えてもらわないといけないかも。

次の演奏は軽やかで明るい演奏。可愛らしい曲調。3曲目も同様だけれど、こちらはちよつとテンポが早い感じだった。

4曲目は幸い知っている曲で、多分G線上のアリアだと思う。

全てピアノソロで演奏して別の奏者にバトンタッチ。赤松さんは私たちがデザートをたらふく食べた頃に帰ってきた。

「ただいま最原君！あ、他のクラスの3人までいるんだね！」

「あ、赤松さん…… おかえり……」

おつとお邪魔かな？

「演奏、素晴らしいものでしたわ」

「すごかったですう！」

「本当？　ありがとうございます！」

いつの間にかこちらまで来ていたセレスさんと罪木ちゃんに、赤松さんが笑顔で対応する。

「今日は招待ありがとう、赤松さん」

「ううん、最原君に聞いてほしいから呼んでるんだもん。私のほうこそ来てくれて嬉しいな」

「そ、そっか……」

初々しいなあ。

知ってるかこれ、まだ付き合っていないだよこの2人……

この光景を見て、赤松さんに声をかけようとしていた男性たちが方々に散って行くのが壮観だったよ。

「ところで赤松さん。最後のやつはG線上のアリアだって分かったんだけど、他の演奏はなんの曲だったの？　クラシックには疎くて

……」

「あつ、そうだよね！ 案内には曲目は書いてないから…… えつと、最初のはウラディーミル・ヴァヴィロフの “アヴェ・マリア” だよ。ジュリオ・カッチーニの曲として広まっているから、普段は “カッチーニのアヴェマリア” って言われているけど……」

「ストップ。曲名だけ教えてくれたらちゃんと調べるからさ」

勢いよく話し始めたピアノバカにストップをかけると、ハツとしたように 「本家を聞いてくれたほうがいいもんね！」 と別の解釈をされてしまった。

違う、そうじゃない。

「2曲目はドヴォルザークのユモレスク第7番 “イン・プラハ” って曲で、3曲目はショパンのワルツ第6番変ニ長調。通称は “子犬のワルツ” だよ。全部明るくなれるいい曲だから、是非聴いてみてね！ あ、あと11時にショパンの夜想曲第2番 “ノクターン” を弾くつもりだから、そのときはよろしくね。本当は朝までパーティーは続くんだけど、そこまで起きていられないから第2部の演奏には参加しないんだよ」

さすが超高校級のピアニスト。第1部とはいえ、ラストの曲まで任されているとは。

「それじゃあ後はごゆっくりー」

「そうだね。ねえ、最原君。どのケーキが美味しかった？ お勧めはある？」

「あ、赤松さん。ドレスにつけちゃだめだよ」

「分かってるよ！ もう、最原君は私のことなんだと思ってるの？」

「だって……」

仲睦まじい2人を置いて、涼しい顔をしたセレスさんと、羨ましそうに見ている罪木ちゃんを連れて離脱する。私は甘すぎて砂を吐きそう。

「わたくしは一旦部屋に戻りますわ。ああ、お部屋は517号室ですの。なにかご用がありましたらそちらまでお越しください。起こしたら承知しませんけれど」

「来るなってことじゃないですかあ！」

「さて、どうでしょうね…… それでは、ごきげんよう」

意味深にクスクス笑ったセレスさんはエレベーターホールの方へ向かっていった。

そのまま罪木ちゃんと2人でバイキング会場に居座り、赤松さんのノクターンも聴き終わった。

時間は午後11時過ぎ。

「ちよつとトイレ行ってくるよ罪木ちゃんは赤松さんと最原クンと待ってて」

「ふえ!？」

「転ばないようにね」

ちよつと残酷なことをしてしまったが、 “ 約束 ” があるからね。

トイレではなく、甲板に上がって私は周りを見渡した。

肌寒い夜の冷え込みに身震いしながら、持参してきたマフラーを巻きつける。

密会に最適な物陰に向かうと、そこには何度もお世話になった太ったスタッフさんが佇んでいた。

別に密会がスタッフにバレたとか、そんなことはない。 “ 彼 ” が密会の相手だ。

「お待たせ、うさぎクン」

「ふん、遅いぞ粕枝」

彼がその見覚えのある体型で腕を組む。

スタッフとして働いていたというのに、なぜか満腹そうな彼の頬はツヤツヤとしていた。

会場の料理の補給がやたら早いと思っただら……

「で、なぜ呼び出した？」

彼の手には2枚の紙幣…… だが、片方はお札に見せかけたメモ帳の切れ端だ。内容は “ 午後11時甲板に ” とある。

もちろん私の字で間違いない。罪木ちゃんが転びそうになってお皿を割った際、片付けた彼にチップと共に渡したのだ。

「キミこそなんでこんなところに潜入してるの？ 仕事？ 諜報員でもないのに……？」

「九頭龍からの依頼だ。どうやらこの船に密造麻薬を積んでいる人物がいるらしい。この船はクリスマスパーティーの後、一般人などを下ろしてまた出港する。そのとき、麻薬を日本に持ち込むつもりだろう。極道としては他所の組織にシマを汚されたくないらしい。そのため、今夜中に網を張っておくつもりのような」

ああ、だから九頭龍クンと辺古山さんがいたんだね。

てことは裏で色々動いてるのか。

「お前も怪しい人物にはマークしておけ」

「うーん、まあ分かったよ」

チラツと腕時計を見ると、私がこの場に遅れたこともあり12時を回ろうとしていた。

「はあ、チケツトが当たったり、セレスさんと賭けで引き分けになったりするわりには不運が安すぎると思ってたんだよね……」

「…… お前のそれを聞くとますます嫌な予感がしてくるな」

「殺人事件でも起きたりして……」

「縁起でもないことを言うな」

そのとき、大きな悲鳴が上がった。

「……」

「…… ほらね」

「やめろ」

どちらからともなく走り出し、悲鳴の上がった方へと向かう。

そこには既に人だかりができていたが、すぐに罪木ちゃんや赤松さん。最原クンが割って入って行くのが見えた。

その光景を見てから豚神クンと目を合わせると、あちらが頷き私は歩みを止める。豚神クンはすぐさま人混みの中に消えてどこかへと行った。

ここは “ 超高校級の探偵 ” である最原クンに矢面に立つてもらった方が良い。そうすれば裏で九頭龍クンや豚神クンが動きやすくなる。

裏で探る人物が犯人の目の敵にされてしまっただけではない。

豚神クンが消えたことを確認して私は前に進み出ていく。

犠牲者は…… セレスさんに最後まで挑んでいた、あのカジノ
デューラーだった。

「僕は、超高校級の探偵」です。警察関係者の皆さんが回復する
まで、この場を鎮めることになりました。乗客の皆さんは客室にてお
待ちください」

「待つて、最原クン。警察関係者の回復して……？」

「この船に乗っていた警察関係者は全員、何者かによる襲撃で意識を
失ってしまっているらしいんだよ。明らかに組織絡みの犯行だ。だ
からしばらく僕達、希望ヶ峰学園の生徒で現場を保管してお
くしかないんだ」

組織。

例の、麻薬に関係したところだろうか。なら、やはり水面下でも騒
動が起こっているということか。面倒な。ああ、怖い怖い。

「そっか、私たちならほとんど一般人に近いし、身元もはつきりして
るから……」

「そういうこと」

最原クンに話を聞きながら人混みをモーセのように真つ二つにし
てやってくる影がひとつ。

「退け、群衆ども」

瘦せているほうの十神クンがやってきて一言。

「本島の警察に連絡を取ったところ、俺と、超高校級の探偵」で
ある最原と、超高校級の保健委員」である罪木、同じく希望ヶ
峰学園の生徒に捜査権利が与えられた。いいか、お前たち現場は荒ら
すなよ」

十神クンが仕事してる…… だと!?

というか、希望ヶ峰学園の影響すごいな。さりげなく乗客を部屋に
戻るように誘導している九頭龍クン、辺古山さんもいる。

しかし、残された容疑者達の中に予想外な人物が入っていたため、
私たちは混乱した。

「あんだだってこいつにイカサマを疑われていたじゃないか！きつとそれで……！」

「わたくし、ですか……？」

容疑者として連れてこられたあのバーテンダーに睨まれ、セレスさんが首を傾げる。どうやらこの人が言うところ、超高校級のギャンプラーという才能も疑ってかかっているらしい。

まあ、偽名使ってるし怪しいといえば怪しいか？

それと、高校生が検死することにも苦言を呈している。これは仕方ない。私だつてそう思う。どこの探偵漫画だよ。

さて、罪木ちゃんは既に検死をしている。

容疑者の証言は赤松さんと最原くんが聴くようだし…… 私と罪木ちゃん、十神くんが死体周辺。九頭龍くん、辺古山さん、豚神くんはその他の場所で別々に活動。セレスさんは一応現場から遠ざけられるようだ。

「最原くんたちとあとで情報交換して、”彼”と合流するかな」

― 捜査 開始 ―

「まずは被害者について」

被害者は梶野正義^{かしのまきよし}42歳。

カジノの古参ランプディーラーだ。ポーカーをやる円卓に突っ伏すようにして倒れ、その前には乱暴に開封されたランプの箱と、新品のランプが横に広がるように綺麗に並べられている。

なぜ新品か分かるかというと、右端にジョーカーが2枚。右からスペード、ハート、クラブ、ダイヤと並んでいるからだ。

奥に突っ伏しているのが被害者。そしてランプは被害者が広げたようにきっちり並べられている。

被害者の左手は開けられたトランプの箱に添えられ、右手は体に巻き込んで上半身の下敷きになっている。

《コトダマ 開封されたトランプ》

《コトダマ 広げられたトランプ》

《コトダマ 不自然な右手》

「よいしょっと」

「おい、荒らすなど……」

彼の上半身を持ち上げてみると、右手の中に油性ペンが握られていた。キャップが外れ、下敷きになった拍子にか円卓に黒い点がついてしまっている。

《コトダマ 下敷きになっていた油性ペン》

「ふん、犯人は一目瞭然だな」

「…… そう？」

十神クンが指差したのは、並べられたトランプ。

確かにトランプは一部が抜かれされていて、意図的に変えられていると分かるが……

《コトダマ ダイニングメッセージ？》

私は表に出されたトランプを一枚手に取り、少し眺める。すると、側面が少し黒く汚れているのを発見する。やはり、あれをダイニングメッセージとするにはまだ早いんじゃないかな。

《コトダマ トランプ側面の汚れ》

「検死結果出ましたあ！」

「教えろ」

「は、はい…… えっと、死亡推定時刻は午後23時頃から午前0時頃まで。亡くなって間もないようでしたあ。死因は背中複数の箇所にある刺し傷ですねえ。そのうちの1箇所が心臓まで達していると考えられます。けど、即死ではなく、しばらく意識があったのは確かなはずですよ。凶器は、直径5mmほどで、傷口の深さから20cm程度の長さの鋭利な刃物ですねえ」

《コトダマ 罪木の検死結果》

刃物の種類を特定することはできないか。

私は表に出されたトランプ。ダイヤの5、クラブの1、ハートの7をメモに取り、トランプを元にあつたように重ねてみる。

「だから現場を荒らすなど…… お前」

「うん、やっぱりね」

それから現場を再現するようにトランプを並べ直し、その場から離れる。

一度太ったスタッフと情報交換し、容疑者たちの集められた部屋に向かった。

「最原クン、情報交換しよう」

「分かった」

私側で調べた情報を仮説とともに説明し、私はあちら側からの情報をもらう。

第1容疑者 バイオリニストの木立イオさん37歳。

曰く、「彼とはよく同じ船に乗る同僚で、恋人同士。でも最近はこの船のイベントごとばかりにかまけていて、喧嘩が増えていた」

今回は彼を振るつもりでこのイベントに参加していた驚きの女性だ。

彼女は第1部の演奏者だったため客室に戻っていて、事件の際アリアイがない。

《コトダマ バイオリニストの証言》

第2容疑者 バートンダーの吉野十蔵さん53歳。

曰く、「その頃は客が出払っていて誰もカジノ場にいなかったので、カウンターに呼び出し用の電話番号を置いて、甲板に出て風に向かに行っていた」

わりと軽薄な性格で、客とフレンドリーに話しては被害者のトランプディーラーに苦言を呈されていた。いわゆる犬猿の仲だったらしい。

《コトダマ バートンダーの証言》

第3容疑者になってしまったのはセレスさん。

曰く、「あなたたちと別れたからは少し部屋で一休みしてしま

たの」とのことだ。

被害者にイカサマを疑われていたのは本当だが、多分彼女にとってはしょっちゅうある日常的なことだろう。

《コトダマ セレスの証言》

最原クンと共に現場に戻る際、太ったスタッフさんと容疑者たちが話している姿を見かけた。

「災難でしたね、皆様」

「ああ、まったくだ」

不機嫌そうにメガネオールバック…… 吉野バーテンダーが言う。

「こんなことになるなら、会いになんて来るんじゃないわ」

そう言ったのは恋人の木立さんだ。

「まさかアイスピックで殺人なんて…… 恐ろしいことですね」

「そうそう、あんな長いモンいつたいどこから手に入れたんだか」

豚神スタッフと吉野バーテンダーが頷きあうと、セレスさんがその赤い目を細めながら「あら、どうりで細かい傷跡だとおもいました。あんなに傷もできてお可哀想に」と言う。木立さんが「探偵さんから滅多刺しって聞いたわ。凶器ってアイスピックなのね、怖いわ」と相槌を打つ。

その一行の側を通り過ぎながら豚神クンの背後を通ると、後ろ手でさつと渡された電子機器を受け取る。

さすが。

九頭龍クンたちが見当たらないということは、そういうことなんだろう。首尾が上手く行っているようであり、

さて、証拠も揃ったし夜明け前に不幸なクリスマスを終わらせてしまおうか。

…… 《コトダマ ボイスレコーダー》

「コトダマ一覧」

- ・ 開封されたトランプ
- 乱暴にビニールが開封されている。被害者の左手の手元にあった。
- ・ 広げられたトランプ
- 扇状に全てのトランプの数字と柄が分かるように広げられている。
- 1部が抜かされ、捨てられていた。
- ・ 不自然な右手

被害者の突っ伏した上半身に折りたたまれるように隠れていた右手。

・ 下敷きになっていた油性ペン
上記の右手に握り込まれていた。フタが外れており、触れた卓が汚れている。

・ ダイニングメッセージ？
いくつかトランプが抜かされているようだ。

・ トランプ側面の汚れ

黒いシミのような汚れ。全てのトランプの側面にあるようだ。

・ 罪木の証言

被害者は梶野正義。

死亡推定時刻は23時〜0時まで。

凶器は直径5mm程度で20cmくらいの鋭利な刃物で滅多刺しにされたうち、いくつかの傷が心臓まで達していると思われる。

即死ではなく、しばらく意識はあった。

・ バイオリニストの証言

バイオリニストの木立イオ37歳。

435号室。被害者とは恋人だったが、本日はすれ違いにより振るため乗船した。アリバイはなし。

・ バーターンダーの証言

196号室。バーターンダーの吉野十蔵53歳。

カジノには誰もいなかったため、カウンターに呼び出し用の電話番号

号を置いて甲板に上がっていた。被害者とは衝突することが多かった。

・セレスの証言

517号室で休んでいた。アリバイはなし。被害者にイカサマを疑われた。

・ボイスレコーダー

スタッフに扮した豚神が引き出した会話。

以下会話の内容。

豚「災難でしたね、皆様」

吉「ああ、まったくだ」

木「こんなことになるなら、会いになんて来るんじゃないわ」

豚「まさかアイスピックで殺人なんて…… 恐ろしいことですね」

吉「そうそう、あんな長いモンいったいどこから手に入れたんだか」

セ「あら、どうりで細い傷跡だとおもいました。あんなに傷もでき

てお可哀想に」

木「探偵さんから滅多刺しって聞いたわ。凶器ってアイスピックな

のね、怖いわ」

Who Killed Cock Robin?

【育成軸】 クリスマス2017 【解答編】

「……」

皆が寝静まった夜。とある客室に黒服の人間が大勢詰めかけていた。

「……」

「……」

「……」

ヒソヒソと話す一派のうち1人が前に出て、布団にくるまった誰かにナイフを向ける。

超高校級の探偵。その人を亡き者にしようとしてやってきた彼らはまるで周りの不自然さに気がついていない。

「御免！」

その手が布団にかかったとき、彼らの背後で叫び声上がる。

その声に動揺した最前列の男も布団から飛び出した背の低い高年生の持つドスの柄で腹を打ち込まれ、倒れる。

私もベッドの下から鉄パイプで足払いをかけ、その腹を打って気絶させる。

後ろから辺古山さんが10人ほどのしてくれたので随分と楽勝だった。

布団から出てきた九頭龍くんは辺古山さんに気絶した人間を縛り上げるように頼むと、黒服スーツたちの懐を探り始める。

次々と出てくる白い粉たちに辟易としながら、回収作業を行い眠い目を擦る。

まさか本当に最原くんを囚にするわけにはいかないから、こうするしかなかった。九頭龍くんも極道なだけあり、辺古山さんとまではいかないがドスの扱いには慣れてるらしい。

2人は別口で乗船していることもあり、武器も持ち込んでいたのだ。大丈夫か、この船のセキュリティ。

私は資材置き場から普通の鉄パイプを拝借してきたから持っている。さすがに一般人枠ではバレー警察行きだ。

「最原クンのほうは大丈夫だった？」

「う、うん……」

「捜査のために最原クンは客室を追い出されていたため、赤松さんの部屋に行っていたのだ。そちらも護衛で豚神くんがスタツフを装いながら巡回していたが、真つ赤な顔で頷かれるとねえ……」

「超高校級の御曹司、十神白夜から告げる。探偵から話があるため事件関係者は甲板に集まるように。野次は好きにしろ。以上」

船内放送で十神くんが告げ、私たちも移動を始める。

「オレたちはここでこいつらを転がしてるから、テメーらはさっさと事件解決してこい」

「お前たちがこの船にいてくれてとても助かった……頼んだぞ」

九頭龍くんと辺古山さんはこの客室で見張りを行うようだ。

あくまで彼らは裏方。裏の世界のことは触れないようにしなければならぬ。

信頼し背中を預け合っている彼らを置いて甲板に上がると、既に明るくなってきていた。

大切なクリスマスを手無しにしてたまるか。

そんな思いで、集まってきていた容疑者たちを眺める。

心の中でだけ学級裁判に想いを馳せながら、そのつもりで向かい合う。

犯人は、無事な最原クンの姿を見ると苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

野次馬には一般人と、それに近い人物たち、それと上から命令されたであろう使用人などが集まっていた。

「まずは、自己紹介から……なのかな」

帽子を探して彷徨させた手を下ろして、最原くんが言う。

さすがに大勢の目線に晒されるのはまだ慣れていないらしい。彼のトラウマもなかなか根深い。

「僕は最原終……です。超高校級の探偵です」

「自己紹介が必要なのはあとは罪木ちゃんくらいかな？」

「な、なんでですかあ!？」

「素性も知れない子が検死したって言っても信用されないでしょ」
検死の言葉にざわつく野次馬を無視して罪木ちゃんが一步前に出る。

「ちよ、超高校級の保健委員の…… 罪木蜜柑ですう……」

彼女の言葉が言い終わる前に「なんだ！ ただの保健委員じゃないか！」という心無い発言がバーテNDERから上がる。

やはり委員系だとナメられるよね。

「保健委員って言っても、この子は大学病院への研修も行っている、実績ももちろんある規格外だよ。ただ怪我を処置するだけじゃない。超高校級に選ばれた才能がその程度なわけないでしょ？ 調べれば分かることだよ」

ヘイト役は私が引き受け、最原クンの話を促す。

すぐくやりにくそうだが、一般人の前で推理劇をするということはどういうことだ。

こんなのを霧切さんはやっているのかなあ。すごいなあ。

「まずは罪木さんから検死結果をお願いするよ」

「はい！ 死亡推定時刻は23時から0時頃までですう！ 死因は背面の傷で、凶器は直径5mmほど、長さは推定20cmくらいの細くて鋭利な凶器ですう！ あと、被害者の梶野さんは即死ではなかったの、しばらく意識はあつたはずですよ」

罪木ちゃんが言い終わると、少し疑いの目を向けていた吉野バーテNDERが次々と彼女に質問する。

死亡推定時刻の特定方法やら、凶器の特定方法など、なぜ即死でなかったかの判断。とにかく疑ってかかってきた。

罪木ちゃんはそれら全てに丁寧、それはもう丁寧に専門用語連発しながら説明したのだから、最終的には全員納得させていた。

医学的なことを説明するときの罪木ちゃんは妥協しないし、目を瞑って必死に説明したため口をつぐむ暇がなかったのもある。

「これらを前提に僕たちは推理することになりました」

「あら、事件発生から1時間前くらいまでのアリバイを訊いてきたのはその情報を聞く前ではありませんでしたか？」

セレスさんが横槍を入れると、恋人だった木立さんが「確かに！」と声をあげる。

それに最原くんは「罪木さんほどじゃないけど、探偵でもある程度検死できるよ」と答えて話の続きをする。

「僕が皆さんの証言を聞いている間は、こっちの十神君と狛枝さんが現場の捜査をしてくれました」

そう言いながら、彼は一枚の写真を取り出す。

それは、客の中からインスタントカメラを持っている人物を探して撮影した豚神くんから渡された一枚だ。

あの、ダイニングメッセージと思われるトランプを映したもので、これが少しだけ犯人追求へのヒントになった。

「よく見てみる。カジノのディーラーは毎回新品のトランプを開封して勝負を行う。このトランプも真新しいものだが、抜けているのが分かるだろう」

十神くんがその写真を手に話す。

この数字はディーラー側から見て、左からダイヤの5、クラブの1、ハートの7が抜けている。

「517、ですか」

「そ、そうだわ！ きつと部屋の番号よ！ 私は435号室だから違うわ！」

「俺は、196号室だ……」

2人の容疑者の視線がセレスさんに注がれる。

するとセレスさんはいつものポーカーフェイスで手を胸の前で組み、「わたくしが517号室ですわね」となんでもないことのように言った。

その言葉はこちらへの信頼が透けているようで、少し微笑む。

糾弾と追求の言葉を笑顔で受け流しながら、彼女は「お可哀想に」とクスクス笑った。

絶対アレ、〃 頭が〃 っ言葉が上につくよね。さすがセレスさん真つ黒黒すけだ。

「……なにを勘違いしている？」

十神クンのよく通る声で心底馬鹿にしたように言われ、セレスさんを糾弾していた人たちの注目が一気にこちら側へ戻る。

「もしかして、これダイイングメツセージじゃなかったの？」

赤松さんが疑問を口にする、罪木ちゃんも「え、えっ、そうなんですかあ？ 私はてっきり誰かがセレスさんの変装でもしていたのだと思っていましたあ」なんて言っている。

そしてその発言に、それまでなにを言われても涼しい顔をしていたセレスさんがものすごく怖い顔で睨んだものだから「ごめんなさあああい！」と涙まじりの悲鳴があがった。

「これは犯人が作ったダミーのダイイングメツセージなんだよ」

私が言った言葉に最原クンが頷いて白手袋をつけてから、ポケットに入っていた油性ペンを取り出す。

私たちに向けて喋っているからか、普段通りの喋り方がフェードインしてきている。本人は気づいてないし、まあいいか。

「これは被害者の梶野さんが右手に握っていた油性ペンだよ。上半身がうつ伏せになっていたから、その下敷きになっていたんだ。そして、被害者ができたのはきつとランプを開封して文字を書くことだけだったはずだ。フタがされていなかったから、被害者の下にあるテーブルは黒いインクの跡が残っていたし確定だ。もし、被害者が自分でランプを広げて1部を抜かしたのなら、この油性ペンは必要ないんだよ。それに、こんなあからさまなダイイングメツセージを犯人が見逃すはずがない」

でも油性ペンが残されていて、さらにフタも空いていた。

ディーラーさんと少しの間過ごした私でも、思い起こせば彼が右利きだったことがなんとなく思い出せる。

左手でランプを広げることはあるかもしれないが、利き手にペンを持つているとなるとやりたかったことは明白だろう。

犯人が油性ペンを現場に残してしまったのは、きつと被害者が握りしめたまま体で覆い隠してしまったからだ。どかすにも、手を開かせるのにも力はいるし、証拠が残りやすいから断念したのだろう。

「じゃあダイイングメツセージは別にあるのかしら？」

恋人の木立さんが訊く。

吉野バーテンダーは信じられないものを見るように、最原クンを睨みつけていた。

最原クンはそれに気づきながらも「はい」と答え、同じく証拠品として持ってきてきていた現場のトランプを取り出す。

「これを見てください」

綺麗に重ねられたトランプの側面には雑な文字で「ヨシノ」と書かれている。

明らかな証拠だった。

「きつと犯人はダミーのダイニングメッセージを残すことで、容疑を逸らそうとしたんだ」

「そっか、被害者の背後から手を出してトランプを並べて細工をしたから、不自然に下敷きになった右手にも体の下に隠された油性ペンにも気づけなかったんだね」

「気づけたとしても、どうしようもなかったと思うよ」

勘のいい赤松さんが答えをすらすらと口に出すと、件の暫定クロサくんこと吉野十蔵バーテンダーが「逆だ！」と叫ぶ。

「愚民、発言を許可した覚えはないぞ」

「うるせえっ、御曹司がなんだ！ ただのボンボンだろうがア！」

「なっ、なっ、なっ、貴様っ」

十神クンのうろたえ方に笑いそうになりながら、彼の言い分を聞く態勢をとる。

「普通に考えたら逆だろ!? そっちの文字がダミーで、それに気づいたアイツが本当の犯人を示そうとしたに違いねえ! そもそも、どっちが先にあつたかなんて分からないだろうが！」

なるほど、一理ある。

でも残念ながらそれは考慮済みだ。

「ところで、皆さん彼を死に至らしめた凶器はご存知なのかな？」

長らく黙っていた私がそう言うと、赤松さんと最原クンは「え？」

という顔になる。そうだよ、キミらにはなにも言っていないもの。

「罪木ちゃんには分かる？」

「え、えつとお…… 断定はできませんよお…… キリ、とかすぐく細い針のようなものとか……」

最原クンと罪木ちゃんの言葉に驚いたのは容疑者たちだ。

「うそ!? だってアイスピックだって聞いたのに…… なんであなたたちが分からないの!?!」

「そ、そうだよ! 一体どういうことだ!?!」

「やっぱりそうでしたのね……」

セレスさんはあるとき、瞬時に気づいてくれたから助かったよ。

「そう、私たちも凶器は分かっていたいなかったんだよ」

「ね、ねえ狛枝さん。どういうこと? 僕たちに内緒でなにかやってたの?」

「うん、まあね」

そう言って、私は野次馬の奥に向かって手を振る。

そうすると、太ったスタッフが前に歩み出てきてお辞儀した。

「あ、そ、そいつだ! そいつが初めに “アイスピック” だって口走ったんだ! 凶器を知ってたんだからそいつが犯人だ!」

その反応も想定内。

「実はね、キミたちがあの会話をする前に既にトランプのダイイングメッセージは解けてたんだよ。だからちよつと引っ掛けさせてもらったんだ。なんせ、凶器は未だに見つかっていない。今も犯人が持つてるはずなんだ…… ね? 黒うさぎクン」

豚神クンは観念したようにその名前を受け入れた。

詐欺師って言わなかっただけ配慮してるんだから、もう黒うさぎのあだ名くらい広めちやおうよってことだ。

「ああ……」

彼が自身の顔を掴んでベリベリと剥がすと、その下にあっただのはいつも通りの偽十神クンの顔。

「なつ、貴様その顔で出てくるのはやめろとあれほど言っただろう! 別の顔をいったい何枚貼り付けているんだか…… 痩せてるほう

の十神クンはご愁傷様です。

「吉野バーテンダー。あなたは氷を削るとき、随分と長いアイスピックを使っていた。だから私が罪木ちゃんの検死結果を聞いたときに浮かんだのはそのことだったんだよ」

「最原や罪木には悪いことをした。黙っていて悪かったな。だが、探偵役が知っている就先ほどの反応は引き出せなかったはずだ」

最原クンは眉を下げて「結果的にうまく行ったみたいだから気にしないで」とお許しをくれた。

私が言うのもなんだけど、甘々だなあ。もう少し単独行動を厳しく糾弾されても仕方ないと思っていたのだけれど。さすがに出しゃばりすぎだしね…… 情報を持ったまま探偵役に共有せずにいるとか死亡フラグでもあるし。今度からはもうやらない。

「俺も希望ヶ峰学園の生徒だ。超高校級の影武者とでも思っている」

あ、うさぎクンだったらさらっと嘘を…… まあ詐欺師が素性バラすわけにはいかないよね。

「だから、あのととき」アイスピック「といううさぎクンの言葉を違和感なく受け入れた人物こそが犯人だということだよ」

「えっ、わ、私なんて言っただけ!？」

「お、俺じゃない! この女だ! 痴情のもつれで……」

言い合っているうちに手の中に弄んでいた機械をいじり、起動する。

「災難でしたね、皆様」

「ああ、まっただ」

「こんなことになるなら、会いになんて来るんじやなかったわ」

「まさかアイスピックで殺人なんて…… 恐ろしいことですね」

「そうそう、あんな長いモンいっただこから手に入れたんだか」

「あら、どうりで細かい傷跡だとおもいました。あんなに傷もできてお可哀想に」

「探偵さんから滅多刺しって聞いたわ。凶器ってアイスピックなの

ね、怖いわ」

あのときの会話が流れる。

その音声に青ざめたのはただ1人。吉野十蔵バーテンダーその人だった。

「アイスピックに疑問を持たないどころか、長さまで言及しているのなんて、あなただけですな」

最原クンがキツと彼を見つめると、クロとなった彼はズリズリと後退りを始める。

そして、ふっと見たところにいた十神クンに向かって走って行く。どこからか、取り出した長いアイスピックを振りかぶって、突き出す。

けれど、少し驚いた様子だった十神クンがその腕を掴み、綺麗に一本背負いを決めたことで凶器を取り落とした。

「えっ、十神クンそんなことができたの……？」

「ツチ、でないと超高校級の完璧など名乗らん」

ちよつと見直した。

思い切りダミーのダイイングメッセージに引つかかっていたのは心のうちに秘めておこう。

「それでこそ、俺が憧れた十神白夜だな……」

「…… ふんっ」

感慨深く呟いたうさぎクンから顔を逸らす十神クンは、いったいどんな顔をしているのだろう。きつと見てはいけない一面なんだろう。腐川さんにデレる十神クンぐらい見ちゃいけないものだろうから、そつと私も目を逸らす。

男手に取り押さえられた吉野バーテンダーは思い切り最原クンを睨みつけていて、やはり彼のトラウマを抉っている。

けれど、最原クンを庇うように赤松さんが前に立ち「上手く言えないんだけどね」と前置きして彼の手を握る。

「殺人なんてするなら、バレることくらい少しは想定するべきだと思うよ。前に最原君が言ってたけどね、犯人に事情があつたとしても

…… 被害者が極悪非道だったとしても、殺しは殺しなんだよ。なら、捕まるのも、罰せられるのも覚悟していかないといけないんじゃないかな…… だって、復讐して罰から逃げたらその極悪人と同じになるだけなんだもん。今回の人がどうだかなんて、私には分からないけど…… 真実を追求する最原君は格好いいと思うよ」

そうだね。詳しい話は聞いてないけれど、聞く限りは赤松さんに同意する。

極悪人を復讐で殺したって、その罪から逃げたら同じただの犯罪者に成り下がってしまう。そもそも、復讐を完遂したらあとなら別に捕まろうがなんだろうが満足なものだろうけれど、人間というのは欲が出るからね。

最原くんがそんな逆恨みに負い目を覚える必要なんてない。

でも、今の彼には赤松さんがいるから大丈夫そうさ。入学当初みたいな帽子はやはり必要ないだろう。

「事件発生から急いで港に向かっているはずだけど、あとのくらいで着くかな……」

「えつとお、でももう港が見えてきてますよお」

「おお、パトカーがいっぱい……」

遠くに見える港には、ずらつとパトカーが並んでいる。

復活した警備員やら警察関係者、それと九頭龍クンに辺古山さんが犯人一味を見張っている間に船内の内部調査も終了する。

結局一味が持っている物以外にも、かなりの数の麻薬が船内に隠されていったようだ。

尋問によると、犯人の吉野バーテンダーは麻薬の売人で、船内にそれを隠していたところ正義感の強い梶野被害者に勘づかれ手放すように説得されていたらしい。

しかし、それを強請りだと勝手に勘違いしたバーテンダーがこの機会に彼を殺害。ついでに日本の売人組織に麻薬を大量に売りつけようとしていたとか。

九頭龍クンたちは一気に臭い部分を叩き出せたことでご満悦だそうさ。

そして後日、犯人である吉野バーテンダーは警察での尋問後、失踪したそうだが今頃冷たい深海にでも投棄されているのだろうか……いや、九頭龍クンがいくら極道だからってそんなことをするかは分からないけれど。

訊いても教えてくれそうにないので諦める。

「結局クリスマスっぽくならなかったね。ごめんね罪木ちゃん」

まさかクリスマスに殺人事件が起きる不運とは……過ぎてしまったことだが、残念だ。

「大丈夫ですよお」

隣を歩く彼女はほえほえと笑いながら私の謝罪を受け取る。

あーあ、せつかく楽しめると思ってたんだけどなあ。

なんだか騒がしい両隣のクラスを横目に教室に入ると、パンと目の前でクラッカーが弾ける音がした。

「メリークリスマス！」

教室の中には “ 見学中 ” の文字をぶら下げた日向クンを含め、全員が揃っていた。

「……へ？」

「おいおい最後かよ！ あ、ソニアさんこれオレからのプレゼントなんですけど」

「御手洗さんも今日はいらっしやっています！ 脱法ロックです！」

「いや、脱稿だから……」

「ソニアさん!？」

「蜜柑ちゃんも凧ちゃんもこっちこっち！」

「豪華客船に負けない料理を提供するよ。ハートでね！」

皆、小学生か中学生のように机をくつつけて大きなテーブルを作っている。

それに用意されているのはザ・クリスマスパーティーといった料理の数々と、その前に胸を張って立つ花村クン。

「なんで皆知って……!？」

「おねえはまた “ 死神 ” つぶりを発揮してきたんでしょー？」

「いや、狛枝は関係ねーよ。こっちの事情だからな」

「しかし坊ちゃん、2人で行動するより随分と楽になりました」

「…… ああ、仲間っていいな。ペコ」

「ねえねえイルカ見てないんすか!? イルカイルカ!」

「あ、ごめん見てないや」

瀧田さんに謝りつつ周りをぐるっと見ると、思い思いに食事をしていて教室内には律儀にクリスマスツリーまで飾ってある。しかも皆の可愛いデフォルメ人形付きだ。

「あれ、クリスマス過ぎてるよね……?」

「全員が集まるのが今日だと分かっていたからです!」

「え、でも皆それぞれ用事があったりなんだから……」

「そこは先生だもの! 16人分の予定くらい把握してないと家政婦なんてできないわ」

雪染先生が関係していたか……

「なあなあ! 美味しいモン食ってきたんだろ!? どんなんだった? バトルはしたのか?」

「ガツハツハ、犯人との一騎打ちかあ!」

「してませんよお!」

一騎打ちしたのは十神クンだね、と呟くと全員がいつせいに黒うさぎクンに注目する。

「俺ではないぞ」

視線が再び戻ってきたので「なんと、痩せてるほうの十神クンが犯人に一本背負い決めたんだよ!」と言うが、皆「ハイ解散」といった雰囲気になってしまった。

「ンな嘘ついてんじゃねーよ! オメー、また王馬のやつになんか吹き込まれたのか?」

「いやいやいや! 王馬クンの嘘に騙されたことなんてないからね!?!」

「偽りに身を固めるか地獄からの使者よ…… それも良いだろう。今宵の宴の良い供物になるだろうからな!」

クリスマスパーティーで話すいいネタになるってこと?

だから嘘じゃないってのに…… どれだけ侮られてるんだよ痩せてるほうの十神クン。

「とにかく、狛枝さんも罪木さんもこっちに来て…… ほしいな」
七海さんに手招きされて入り口から移動する。

「はい、これ、クリスマスツリーのどこかにつけてきてね」
渡されたのはツリーの飾り2つ。

どうやら全員が1つ以上ツリーに飾りをつけることになっているらしい。私は渡された丸い飾りを真ん中辺りにつけて、罪木ちゃんが渡されたレースをぐるつと巻きつける。

「ところで、なんで予備学科がいるのかな？」

いつもの言葉。

「友達だから、だろ」

いつもの返答。

「クリスマス、七海さんとデートできた？」

「してきたよ。町一周ゲーセン巡りの旅！」

「ちよ、おい、七海！」

楽しそうだなにより。

クリスマス当日は散々だったけれど、今年も楽しいイベントを過ごせるのはキミたちのおかげだよ

……ねえ、それでしよう？

だから、大好きな “ みんな ” に贈る「メリークリスマス」！

「粕枝さあん？」

「ん？」

「いえ…」

「私は ” 皆 ” といれて幸せだよ」

「そうですかあ… えへへへ」

年越しそばは花村クンの指導付きで、全員で1から作った。自分で作った手打ちそばは本当に美味しかった。

あとでもう1回分作れる量はあるらしい。楽しみだ。年越しなのに物資の補給をしていなくておせちが作れなかったのは笑い話なんだけどね。

その代わりタイの尾頭付き舟盛りとか、船上で釣った魚介類の刺身。それに終里さんや式大くんが素潜りして採ってきたウニやら伊勢海老やら貝類やら、なかなか豪華だ。

「ふっふっふ、ふが3つ。ノツてきたああああ！ 唯吹の時代到来っすよおおお！」

さつきから滝田さんのテンションがうなぎ登りだ。

あれお酒入ってるのかな。私もうさぎくんが椀子そばの椀を何十個も積み上げている様を数えながらチビチビとカクテルを嗜んでいる。

アルコールの比重によって色が重なって見えるプース・カフェのカクテルだ。なかなかアルコール度数が高いが、案外私は酒が強いほうみたいで酔ってはいない。

このカクテル。作るのが難しいらしいが、日向くんが作ってくれたので完璧な出来だ。さすが天才の集大成。

ガソリンスタンドにあるM o b i l e 粘度分類のディスプレイみたいと言った左右田くんは許さないけどね！

「それでは歌います。 法被NEWイヤアアアッ！ 〃」

「なんかイントネーションおかしくねーかア!？」

「おにゅーの法被を着たら、袖からこそこそコンニチワ。茶色いアイツ、素早いアイツ…… それは、ゴ」

「ギニヤアアアアッ!？」

ごめん。さすがに同情する。許してあげよう。

滝田さんは相変わらずのネーミングセンスと歌詞だね。

「もう疲れたよ。パチラッシュ……」

「み、み、御手洗さあん！ 3 徹明けのお酒は体に悪いですってばあ！

2 日酔いになっちゃいますよお！」

年越し前に3徹するのもある意味すごいけれども、それでも年越しは皆と起きてるってのもすごいよね。仮眠くらいしてもバチは当たらないと思うけど。

「ちよつとー！ 魚ばっかり嫌なんだけどー！ 舟盛りは綺麗だけど…… わたし和菓子食べたーい！」

「日寄りちゃん、前に買ったやつは全部食べちゃったの？」

「だ、だって花村おにわたしの嫌いなものばかり出してくるし……」

物資の調達は確かに結構前だけど、それ以上かなりの量買ったはずだよ…… 計画的に食べないからそうなるんだよ。

皆それぞれの方法でお金を稼いでいるとはいえ、顔が割れてるから頻繁に買い物にも行けない。

それを選んだのは私たちだから仕方ないけれど。

「あれー？ 小泉さんから言われなかった？ ぼく好き嫌いなくせるような料理を頼まれて作ってたんだけど…… それとも、大人の味はまだ早いのかな？」

「皆さんほとんど同じ年だと思うんですけどお」

「うるせえゲロブタ！ 口挟んでんじゃねーよ！」

「あ、ご、ごめんなさい！ 余計なこと言つてごめんなさい！」
…… ああ、あの洋食と野菜のオンパレードはそういうことだったんだ。

どうりでオムライスの中に入っている野菜が細かくされていたわけだ。お母さんの涙ぐましい努力みたいでなんか面白いね。

花村クンがお母さんね…… 下ネタばつか言うお母さんは真面目に考えたら嫌だな。却下。

「料理は足りるかあ？ なんならワシらがもつと獲ってくるぞツ！」

「…… いや、もうすぐ日付が変わる。冬の、それも夜の海だ。いくらお前たちでもやめておけ」

いや、今冬だよ？ うさぎクンのいう通りさすがにやめておいてほしい。こんな時期に海に入るなんて自殺行為だよ。

私、こんなことで仲間の死体が発見されるの見たくないからね。

それに、夜は万が一危険な生物がいても気づきにくくなるし……
昼間ならすぐ発見して助けに行けるからいいけれど。

私の才能がいつ牙を剥くか分からないから危ないことはしないでほしい。

……日向クンがいるから、万に一つもないとは分かっているんだけどね。

「泳がねーのか？ 体が鈍っちゃまってしょうがねーよー」

「泳ぐなら昼間にしておけ」

「しょうがねえ、なあおっさん腕相撲しようぜー！」

「応、かかってこんかい！」

「あまり暴れるなよ」

隅っこの方で腕相撲を始める2人。

そちらでは日向クンが端末を立てかけて置き、海図を広げながら航海進路を決めている。

ときおり画面の中のアルター七海さんと会話しているので、次どこの港に行くのか相談しているんだろう。

そのうち腕相撲なのに足まで出てきたりするから、彼も早めに避難したほうがいいと思う。日向クンは平気だろうけど、アルター七海さんは避けられないから。

この船の操縦は自動だが、たまに交代で様子を見に行っているのは田中クンがいない。ソニアさんもそれについていっている。

左右田クンも行こうとしていたが、瀧田さんのゲリラライブに巻き込まれているので行けなかったようだ。めちやくちやだる絡みされている。

口から魂が出ているのが幻視できてしまうほどゲツソリしているので、あとで美味しいものでも差し入れてあげよう。

九頭龍クンはうさぎくんの近くで日本酒を飲んでいたが、さすがに可哀想になってきたのか左右田クンを回収しに行った。

なんだかんだ仲がよいので、これから飲み直してもするのだろう。

辺古山さんは先日クリスマスプレゼントで九頭龍クンからもらったうさぎのストラップを、今も竹刀袋に付けて幸せそうにしている。

眼鏡もどうやら新調してもらったようだ。九頭龍クンと2人で選んだとか。青春してるなあ。

さきほどの女子会に混ざっておせちっぽいなにかを準備している姿も様になってるんじゃないかな。材料がないからおでんとか、そういうのだ。

竹刀袋についたストラップは真っ赤な目がきゆるるんとした可愛らしいものだ。彼女の好みを抑えた見事なプレゼントだと思う。

九頭龍クンも辺古山さんから贈られたネクタイを締めているし……今日はそれぞれ別の場所で別の相手と会話しているのに、この溢れ出る正妻感なんだろうね……

未来機関からの監視兼スパイという各目で乗船している織月姉さんとうつろちゃんは2人して酒盛りパーティーだ。いつもとなんら変わらない。

強いて言うのなら、毎回飲む量が増えていっていることくらいかな……姉さんの肝臓強すぎて笑えない。でも、あんなに強くてもたまたに飲み過ぎで倒れるんだよね。

特にバーのおしゃれな雰囲気飲んでるとき……多分ゆめ2つきであったイベント関連だろうけれど。

「やっぱり、いない……」

花村クンの用意した2回目の年越しそばを食べてひと息。

私は皆を見回しながらも、探していた姿がないことに首を傾げた。私が気づいてから1時間くらい観察し続けたが、やはりいない。

戻ってくる気配もない。

メイはいったいどこに行っただろう……？

「ご主人を放っておいて消えるメイドなんてダメダメだよね」

皮肉のように呟いて、私はグラスを置いた。

「さて、私のお姉ちゃんはどこに行っただのかな…… っと」

船の中を探し回り、なんなら個室まで覗いたのにどこにもいなかったのちよつとした勘に従って表に出る。

本当は、最初からここかなと思っていた。けれど、念のため中を探してからと心に言い訳をして逸る気持ちを抑え込んだ。

まだ、午前0時にはならない。

扉を開け、船の上に出ると冷たい風にたなびく三つ編みが視界に入った。

「出てきてくださいな」

無言で、歩み寄る。

「うふふ、見つかつちやいましたね」

イタズラが成功した子供のような顔をして、メイは笑った。

そのセリフは、その表情は、きつとずっと昔の…… 初めてわかり合った日と立場を変えた言葉。

あのときは私が言った言葉を彼女が、そして彼女が言った言葉は私が…… まるでおまじないのように繰り返す。

お互いに少し言葉遊びのようにやりとりをし、私は個室から持ってきたブランケットをお互いの肩にかけて寄り添った。

「初日の出、見るでしょう?」

「うん……約束、したからね」

あの日以降も何度も初日の出は見た。

けれど、約束を果たそうと意識したことはなかった。

長い長いすれ違いの末に離れ離れになった期間でできなかったことを、こうして再びやり直す。文字通り人生のやり直しはもう勘弁だが、仕切り直しくらいは許されるだろう。

絶望としてたくさん酷いことをした。償えないほどの罪を作った。けれどそれら汚いもの全てを仲間たちで背負って、少しずつすいでいくことはできるはずだ。

汚泥は透明な水には戻れない。でも、限りなく透明に近づけることはできる。

私たちのことを許せない人は必ずいるだろう。だが、それでいい。全てを許されてしまえばそれはそれでスッキリしないし、道理が通らない。

全ての憎まれ役を買い、罪のない人同士で争わないように。負の感情のはけ口は必ず必要なのだ。

その決意表明として、綺麗な約束はここで果たしてしまおう。

そうして後に残さない。当たり前前に続く日常が、今後壊れないように。

「寒いねえ」

「でも、あなたがいるので私は寒くありませんよ」

「こつちのセリフだよ、もう……」

それから、どれくらい経ったろう。

「いねーと思っただらこつちか」

「花村が生姜湯を作ったから持ってきた。2人も飲むといい」

九頭龍クンと辺古山さんに始まり時間が経つにつれ、どんどん人が集まってくるようになったのだ。

「中はあつちー……」

「クールダウンは必要じゃなあ」

「ちよつと、皆大丈夫？ 寒くない？ ほらほら男子は毛布運んで！

アタシたちはあつたかい飲み物配るからー！」

「びえーん！ 寒いよおおお！ 罪木、今すぐ発火して温めてよおおお！」

「ふえ!? ご、ご、ごめんなきあい！ 今すぐやりますう！」

「待て待て待てエ!? オメー、早まるな罪木！ 油を被ろうとするんじゃないやねーよ!? 人体発火も火だるまもダメだろツ!? オレがおかしいのかア!?!」

大混乱する左右田クンは置いといて、罪木ちゃんの持っていたサラダ油を取り上げてちようど来ていた花村クンにパス。

「え？ ぼくに油でヌルヌルヌメヌメになれつて？」

なにか言っているがスルーで。

「今に闇の象徴が食い破られ、命の象徴が顔を出すのだろうか……」

フハハハ！ 儀式には良い日だ……！ フツ、儀式には破壊神暗黒四天王が不可欠……」

「あら……？ 初日の出はハムスターさんたちも見るのでですか？」

「生憎だかこいつらはおやすみ中だ。故に儀式も先送りだな」

寒いもんね。ハムスターはさすがに暖かくしてあげてみたい。

わざわざ火傷しないようにタオルでカイロを巻いて首元に入れて

いるらしい。

あ、ちなみにこの四天王たちは2代目だよ。学園生活中に繁殖させて、2代目就任したんだって。ハムスターの寿命は2、3年だからね……

「寒空の下で熱くなるにはやっぱ歌うつきやないでしょー!!」

「オメーの歌はうすら寒くなるから意味ねーだろーが!」

「えー? めっちゃ熱くなるよ? めちゃくちやヒートアップしていくよ? 和一ちゃんも一緒にヘドバンすればいいんすよ! そうすればあら不思議! 頭が沸騰しちゃう」

「アウトー!」

花村クンが嬉しそうな顔で叫んだけど…… うん。ノーコメントで。

「ははっ、賑やかになっちゃったね」

「…… ええ。これもいいものですね」

私は隣にいるメイを見上げ、笑う。

そうだよ。前とは違ってたくさん友達が増えた。

一緒に初日の出を見る人が増えた。明日も、来年も笑い合いたい人たちができた。

「ちよつと、織月…… このっ、酔っ払い! 絡んでくんなよ!」

「うふふふ、” せのび ” して抵抗しても無駄だようつろちゃん」

「助けるよ風ー!」

「ごめん、無理」

もう、寒くないや。

「おいおい、結局皆こっちに出てきてんのかよ」

『勢揃い……だね。一大イベントかな? こういうときにスチル発生するんだよね』

端末を抱えた日向クンを最後に、とうとう全員が揃ってしまった。なんのためのパーティーなんだか…… あとで船内を片付けないとね。

そうこうしているうちに、日付が変わりその場で「あけましておめでとう」と「今年もよろしく」の応酬が始まる。

それも過ぎ去れば、やっと地平線の向こう側から太陽が顔を出す。暗闇に慣れた目に染みる明るさだが、それもまた良いものだ。今年も皆が幸せでいられますように。

そして……

「……？ どうした、狛枝」

私は後ろで初日の出を眺めていた日向クンに振り返って言った。

「誕生日おめでとう、日向クン」

「え……」

鳩が豆鉄砲を食らったようにキョトンとした顔で日向クンは固まる。まさか、忘れてるとでも思っていたの？ それとも、自分で忘れちゃってた？ 今日は大事な大事な、キミの誕生日でしょう。

「ソウルフレンドの誕生日を忘れるヤツがいると思うか!?!」

『みんな、それぞれ用意してたんだよ。私も相談されて楽しかったな』
「な、七海……!?! 相談されてたのか?」

『こういうのはバラしちやダメらしいからね…… ゲームでもバラしたら好感度下がっちゃうよ』

うろたえる日向クン面白いなあ。

これでカムクライズルなのになあ…… そこは気づいていなかったのか…… いや、日向クンの部分が気づかないことを選んだのかな。…… そういうことだろうな。

「あ、ありがとう皆…… 今年もよろしく」

照れ笑いをする日向クンを眺めながら、私はメイと手を繋ぐ。

願わくば、ずっとこんな日々が続きますように。

【育成軸】バレンタイン2018

※ 微量な恋愛要素

「…… うん、これでよし。さて、行くかな」

メイは花村クンのいる学生食堂でケーキの量産。

部屋は元々違うが、いつもとは違って1人での登校だ。

学生食堂には安藤先輩もいるのだが、彼女はケーキに色々混ぜてしまうことが多いので午後の授業に支障をきたす一般生徒も出てきてしまうらしい。

そのために雪染先生ら料理ができる先生方も本日のデザート作りに参加している。

ただでさえ天にも登るような出来のケーキなのに薬まで入れられたらたまらないから。

そう、今日はバレンタインデー当日。

愛の誓いをする特別な日にして、日本では意中の男性に女性がチョコを贈る愛の告白をする日だ。今ではただ単に友達や好きな人への感謝をする日になってきているけれど。

食堂では料理のできる女性陣により義理チョコサービスが行われ、希望ヶ峰学園ではお菓子の持ち込みが全面的に許可される。

普段も別に禁止されているわけではないが、堂々と持ち込めるのとは違うのでないのでは結構違うよね。

私も例外なく、今日は朝早くから準備して出来立てのお菓子を持って行くことにしていた。ついでに市販のチョコも。

大抵は受け取って食べてくれるが、有名人の生徒は手作りお菓子を

なるべく避けている子もいるから。

知った仲の子ならそんなこともないんだけど。

「おはようございますう」

「おはよう罪木ちゃん、はいこれ」

「わあ…… ありがとうございます！ 私も頑張ったんですけど、こんなものしかなくてごめんなさい……」

罪木ちゃんが渡してきたのはスタンダードなハートのチョコレートが包装された透明な箱だ。

ドジっ子属性のある彼女のことだからたくさん失敗したのだろう。

「…… 火傷とかしてない？」

「はい…… ご心配ありがとうございます」

とても嬉しそうに笑った彼女に自分用に取っておいたマシユマロチョコを1つ取って口に詰める。

一瞬驚いたようだが、すぐにとろけた顔になってもふもふと食べた罪木ちゃんの頭を軽く撫でて手を繋ぐ。

1人で登校することになると思っていたが、途中で合流できるとはラッキーだ。今日も幸運は絶好調。このまま夕方までアンラッキーが来なければいいんだけど……

「わっぷー」

「狛枝さあん!」

頭上から降ってきた雪に埋もれる。

先日降って木に積もっていたやつだろう。放置されて固まっているのでそれなりに痛かった。

カバンは無事だが、これは…… 今日が遅刻だな。

「ごめん罪木ちゃん。さすがにこのまま行くのは無理だから、先に行って雪染先生に理由と一緒に遅刻することを報告してほしい」

「分かりましたあー」

そして私は寮にとんぼ返りしてお風呂に入り直してから学園に登校するのだった。

「希望ヶ峰に授業なくて良かった……」

希望ヶ峰学園は特別な授業などはなく、それぞれ才能を伸ばすため

に自由にしていもいいので本来は朝早くから学校に行く必要もない。そもそも学校に行かなくてもいいのだが、うちのクラスは仲も良いし、七海さんの才能を伸ばすためという建前でゲームの持ち込みはいくらでもしていい。

アニメーターの御手洗クンは希望制で行われる授業中にも仕事をしている。なんならアニメの試写会までやるし、世界名作劇場と称して昔のアニメ映画まで持ち込んで解説してみたり、私が知っている原作にはいなかった人物だったがそれなりに馴染んでいる。

そして、愛すべき “ 私 ” のクラスメイトはイベントごとが大好きだ。

朝から集まって友情チョコの交換に勤しんでいることだろう。

乗り遅れは確実だが今日の朝は頑張ったのだ。皆に力作のケーキやクッキーを振舞わなければ！

「おはようー！」

「おはようございますー！」

「おねえはおそよーでしょー?！」

「…… おはよう」

まばらに返ってくる言葉に手を挙げて答え、皆とチョコを交換する。

マシユマロ、チョコ、アメ、クッキー、ケーキ、グミなどたくさんものをもらい、さっそく駄弁りながら和やかに時間が進んで行く。

雪染先生は教室に人数分のアメを用意して配って行ってくれた。

どうやら女性の先生方はクラス全員に行き渡るように全員準備してきたらしい。

カバンからチラツと見えた大人っぽい包装は、きつとこのあと渡す人がいるんだろうな。

確か、ときどき視察に来る何代か前の生徒会長さんと好い仲っぽいのでその人にだろう。

もう1つ入っているのも見えたので、多分同期の逆蔵先輩に渡すんだろう。本科の建物の警備員をやっていたはずなので。

あの人は私もたまに目にする。主に日向クンを引き取りに行く

きとかに。

私たちの許可があると分かっているはずなのに、なぜかよく警備に引つかかっているのでクラスの誰かが必ず迎えに行くのだ。

「オレは食堂行ってくるー!」

「待て、デザートを食べる前にしつかりと——」

お昼のチャイムが鳴るとすぐさま終里さんと十神くんが教室の外へ消えて行く。

もちろん十神くんにもマシユマロチョコをあげた。イタズラで混ぜておいた増えるワカメチョコは逆襲を食らって私が食べさせられたので正直あまりお腹が空いていない。

増えるワカメと言っても限度は弁えているので多少空腹感を紛らわせるものだったんだけど…… 私には少々多かつたみたいだ。

「凧ちゃんは どうする? 食堂」

「さつきは白夜ちゃんにやられちゃってたしね! お腹空いてないんじゃないっすか?」

「いや、行っただけ行くよ。メイのケーキ……」

「おねえはいつでも食べられるじゃん。これだからシスコンってやつはー」

「まあまあ、みんなで行こう? 早くしないとなくなっちゃうと思うよ」

食堂に移動してメイに挨拶。

イタズラの失敗報告をすると苦笑して小さなカップケーキをおまけしてくれた。気遣いごめん。

同じお皿にイタズラ用のマシユマロチョコも置いて席を探す。

食堂内は花村くんが担当の場所というのものもあるが、今日はメイやら安藤先輩やら女性陣のデザートが大盤振る舞いされるためそれなりに混んでいた。

「赤松さんと入間さんも食堂か」

「うん、そうだよ。今日は美味しいものいっぱい食べられるから朝は控えめにしてきたんだよね」

「バカ松はオレ様と違って腹にも肉が行くからな! 無駄な努力ごく

ろーさん」

「もう！ 入間さんが細すぎなんだよ？ このっこのっ！」

「ひっ、ひいいい！ オレ様のビーナスボディをいじくりまわすんじゃないやねえ！ お触り料金取るぞ!？」

「…… 仲良いなあ」

「そうですねえ…… ふえ!? 狛枝さんつままないでくださいあい！」

体重の問題でファンの間でもぽっちゃりと称されている罪木ちゃんにはふかふかしていても良い。

ぽっちゃりと言っても他のクラスメイトの体重と比べてという意味であって、彼女はいたって標準の体型だ。

それにしても、こういうじゃれ合いができるのは女子の特権だなあ…… 役得役得。

「女子が集まってるねー。オレたちも入って平気？」

「みんなが良かったらなんだけど……」

「王馬君にゴン太君。別に拒否はしないけど、いいの？」

今度は王馬クンとゴン太クンが甘いデザートと果物を持って近くの席にやってきた。

赤松さんが言っているのは多分入間さんがいるからだろう。

入間さんって1人のとき以外は大体赤松さんかキーボクン、それから花村クンといるし。やっぱり普段の言動のこともあつて特別仲が良いって人は少なく感じる。

私もここまで強烈な下ネタキャラだと知って最初は戸惑った。

周りから眺めている分には面白い人なんだけどね。今は慣れたから問題ない。

1度十神クンと同じ感覚で皮肉り合いしたときは悪いことをしたと思う。あのときはまだメンタルが弱いと知らなかったんだよ……

「いいよいいよ。オレはお菓子もらいに来ただけだし」

「王馬君が正直なんて…… 4月にはまだ早いよ？」

「赤松ちゃん酷いよ…… オレ、年がら年中嘘ついてるわけじゃないんだよ？ 傷ついちゃうなー」

「さっそく嘘ついてんじゃねーよ！」

「ええ、嘘なの!？」

「よく考えてゴン太君！ 王馬君が1回も嘘吐かなかった日なんてないんだよ!？」

「あーあ、赤松ちゃんはオレのことをよく分かっているね」

隣のクラスも仲いいなあ。

知らない人たちがばっかりだったから不安もあったけど、覚えやすい性格をしてくれていて助かるよ。

「しようがないな…… はい、これ」

「うん？」

私がすぐに開けられるようになっていた小箱を渡すと、王馬クンは首を傾げて目の前の小箱と私を2度見した。

キミに渡してやるんだよ。ちゃんと用意してあったんだから食べてくれなくちゃ困る。

「王馬クン用に作っておいたんだよ。ほら、いつも一緒に怒られる仲でしょ?」

「……」

主に十神クンと東条さんにね。

王馬クンは逃げ足速いからめったに捕まらないけれど、彼の追っ手は東条さんだけでなく百田クンや春川さんもいるから、似たようなイタズラしたときはよく並んで説教されたりする。

戯れのような、悪友のような？ トリックスターじみた彼といると結構楽しいので便乗して遊ぶことがよくあるのだ。

平和な学園でしかそんなこと、できないし。

「粕枝ちゃん、ありがとう。もらうだけじゃキミに悪いから一緒に食べようね?」

「えっ、んぐう!？」

素早く包装を解いた王馬クンはにししと笑いながらトリユフチョコを私の口に押し付け、間抜けな声を出したときに放り込まれてしまった。

そして意地の悪い顔をしながら私の皿からマシユマロチョコを奪うと、口に入れる。

私はその迷いのない動作に驚いてトリユフチョコを思わず噛み砕いてしまい…… その中に入っていたデスソースに悶絶した。

「あっはははは！ んんんん!」

そして、同時に私の皿から取ったマシユマロで王馬クンも悶絶し始めた。私の皿から取って行くことくらいお見通しなんだよなあ。

「お嬢様！ 王馬さん！ 大丈夫ですか？ 今お飲物をお持ちいたしますー!」

そんな地獄絵図にメイが到着し、私たちは麦茶を受け取る。

そして一気に口をつけると…… その場でもう1度私は悶絶することとなった。

「めんつゆ!」

「イタズラの罰ですわ」

笑いながら言うメイに、まだ麦茶に口をつけていなかった王馬クンが顔を青くして周囲を見る。

「ああ、そちらは普通の麦茶ですので王馬さんにご安心ください。事の発端はお嬢様ですから」

恐る恐る麦茶に口をつけた彼はそれを一気に飲み干していた。本当にめんつゆではなかったらしい。

私の姉はなぜこんなにも私に厳しいのか……

「反省してくださいね?」

全力で首を縦に振った。

十神クンに逆襲された件といい、今日は散々である。

「粕枝さん、お水ですう」

「んつく、んつく、んつく…… 罪木ちゃん、ありがとう」

「それでは、私は調理場に戻ります。帰ったら、楽しみにしていますよ」

「はあ…… お見通しだね」

「あなたのメイドですもの」

帰ったら彼女の好きなケーキを作って保存してある。

そのことだろうな。まったく敵わないや。

「お互いに以心伝心って感じで羨ましい気もするけどなあ」

「そう見える？　赤松さん」

「うん」

言いながら髪をくるくるといじる彼女を見れば、誰のことを考えているかだなんて一目瞭然だ。

十分赤松さんも、最原クンと以心伝心だと思っけどね。よく一緒に旅行したり探偵業手伝ったりしてるみたいだし。

隣の芝は青く見えるものだし、そういうものなんだろう。

「残り、どうしようかな……」

「え、狛枝ちゃんこれ全部辛いの？」

「うん」

「ええ……」

そう言っつて彼が視線を動かした先は……

「な、なんだよお……　オレ様は食わねーからな!？」

「そう言っつて無理矢理されるのが好きなんでしょ？」

「そ、そんなことお……　!」

なんてどこぞの薄い本のようなやり取りを始めた2人を尻目に、お昼の楽しい時間は過ぎて行くのだった。

「狛枝さん、一緒に帰ろ？」

「あ、ごめん七海さん。寄るところがあつて」

「……　ああ、私は今朝渡しちやつたからなあ。それじゃあ罪木さん借りてもいい？」

「それは本人に聞いてね。それで、面白いゲームでも教えてあげてよ」

「うん、それじゃあまた明日」

「また明日」

七海さんが罪木ちゃんを帰りに誘うのを横目に教室から出て、本科から出てしまう。それから予備学科の校舎へとやってきてみたはいけれど……

「あ、ああ、ありがとうな」

「別に、お兄ちゃんのついでだから」

「ねえねえ私もいい？　これ」

「ありがとう」

嫌なものを見た。

「はあ……」

わざわざ来てなんだが、ちよつと馬鹿らしくなってしまったのでそのまま帰ってしまおうか。

カバンにしまった最後の1個を見ないふりして廊下を逆戻りする。

他の予備学科生たちが挨拶をしてくるので一応受けて、たまに話を聞かれたら予備のチロリチョコを渡しつつ少しのサービス。

本科生として嫌味のない程度に相手をしているうちに、引き止められる時間が多くなつてしまつていた。

1年生の始めの頃は噂もあつてあまり話しかけられなかったのだが、よくこちらに顔を出すこともあつて今では普通に話しかけられる。

密接に関わらない限り危険度は低いと判断されたんだろうな。いいことなんだか悪いことなんだか…… この場合は悪いことだった。

「粕枝? どうした、予備学科にまで来て」

「うえ、日向くん……」

追いつかれてしまった。

思わず彷徨させた視線は彼の持つ手提げ袋へと向かう。

いつもは持つていないそのの中身は容易に察せることだろう。まったくモテること……

そりゃあ、超高校級の相談窓口と揶揄される彼のことだから女子からの人気は高いだろうけどね。

友達付き合いしづらくなる気がしてなんだかもやもやするんだよ。

「…… 雪染先生にチョコ渡し忘れてて探してたんだよ」

今回ばかりは真つ赤な嘘である。

嘘を吐くのは嫌いだだが正直なことを言うのもなんだか癪だ。日向くん相手では尚更である。

「ああ、せつかくだしこれあげるよ。じゃあ」

「は? あ、粕枝!？」

チロリチョコを投げ渡して逃げる。

なんでこんな青春みたいなことしてるんだろうね、私は。

友愛があることは間違いないと思うが、さすがにそこまでの気持ちはないはずなんだけど…… だって日向クンはキャラクターだし。

…… でも今の私にとっては現実にいる人間、なんだよね。

「いやいやいや」

首をぶんぶん振って変な思考を振り切り、メイのいる食堂に逃げ込む。彼女は食堂の片付けをしながらも、私の様子には特に触れずに手伝いをさせてくれている。

私、生前は20歳手前ぞ？ 青春なんかとつくに過ぎてるっての。まったく馬鹿みたいだ。

「……」

大きな鍋やらフライパンやらを洗いながら思考にふける。

「お嬢様、お客様が来てますわ」

「え？」

キッチンから顔を出してみると、確かにそこには日向クンがいた。

なんてタイミングの悪い…… ラストオーダーは一応まだだけれど、もうすぐだ。なにかを食べに来たという感じではない。

「行ってらっしゃいませ」

「メイが行けばいいんじゃない」

「行ってらっしゃいませ」

「でも」

「行ってらっしゃいませ」

「わ、分かったよ……」

メイの圧力がすごい。

「…… 日向クン、食堂になにしに来たの？ デザートの注文？ キミはそんなものがなくともいっぱいもらってるでしょ」

普通に用件を聞けばいいだけなのに、皮肉がくっついて出てしまうのはなぜなのか。

「いや、元々はお前が…… いや、なんでもない。せっかく来たんだし、なにか甘いものでも頼んでいいか？」

「これがラストオーダーになるからね？ 飲み物はなにがいい？」
「烏龍茶で頼む」

「はい、分かったよ」

キツチンに戻り、どうしようかと少し悩んだけれど……

「え、狛枝さん確か用意してたよね？ それを今あげちゃえばいいんじゃないかな。余ったケーキはまかないとして持って帰っていいからさ」

「げ、花村くんよく分かったね……」

「今朝集まったときに人数分用意してたのは確認済みだよ。ほらほら」

「往生際が悪いですよ、お嬢様」

「うう……」

私は観念して箱の包装を解き、中身を丁寧に皿に移してついでに烏龍茶を用意する。

それから自分の分の

お茶も持って席まで持って行く。

「はい」

「お、草餅じゃないか」

「まあね、今日のメニューの残りだけど」

「…… そうか」

ああこれは嘘だと気づかれているな、なんて思いながら目を合わせずにお茶をすする。

今日だけでも2回も嘘をついてしまった。エイプリルフルよりも多いんじゃない？ そんなことはないか。

「うまいな」

「そう」

中の餡には結構こだわったからね、なんて口では言わない。

製菓会社からの貰い物だけど…… お詫びでいただいた高級な品だから美味しいはずだ。

バレンタイン前に良い餡が手に入るだなんて私の不運もたまには役に立つ。

「お茶だけじゃ寂しいし、お前も食べたらいんじゃないか？」
「え……」

「ほら、食堂のメニューなんだろう？」

絶対わざとだろこの人……

なんなんだよ、もう。

「んむ……」

なんだろう、別に普通に作った草餅のはずなんだけど……

「甘すぎたかな……」

「俺はこれくらいが好きだぞ」

なんだかやたらと甘く感じた。

【育成軸】 ホワイトデー2018

ホワイトデーというものは、実は日本が発祥である。

バレンタインデーというものは外国発祥だが、それのお返しをする日として設定されたのは日本のお菓子メーカーの意見が定着した結果だ。

今では日本に近い国でもホワイトデーが広まっているらしい。

ホワイトデーは男性が女性にキャンディやマシユマロ、ホワイトチョコを渡す日。近年ではアクセサリーなどのプレゼントも行われているけれど、バレンタイン同様友チョコのようなものもあるので、でも気軽だ。

だけれど……

「ふん、感謝するんだな。これを見ろ」

「そ、そ、それはケーキバイキングのお店のチケットではないですか!?!」

「しかも人数分とか白夜ちゃんすごすぎないっすか!? つはー! 白夜ちゃん最高! よっ、御曹司! お金持ちー!」

ソニアさんと瀧田さんが感激しているように、某有名ケーキバイキングのお店のチケットが彼の手の中にある。

かなり競争率が高いはずのこれを持っていて、しかも人数分あるだなんて普通じゃやありえないことだ。

一体どんな手段を使ったやら…… 詐欺師って言っても彼は詐欺師を詐欺る黒詐欺に近いから違法な手段ではないだろうが、すごく気になる。

「お前たち、放課後全員で行くぞー!」

女性陣から大歓声上がる。

「ここにいる人数分しかない…… と思うんだけど、日向くんは誘わないのかな?」

七海さんが首を傾げながら十神クンに尋ねると、彼は「すまない」と言ってから告げる。

「日向は最近バイトしているようだな。今日はちょうどそのバイトの日だそうだ」

ふ、と笑って告げる彼に「そっか」と呟く。

バレンタインに渡したんだからちゃんど3倍返ししてもらわないとなんて思ってたけれど、実はあの草餅がバレンタインのお菓子だなんて一言も告げていないのだ。

それならば返されるものはなにもない。

いや、別に落ち込んでなんかないから。本当だから。

日向クンは料理が得意なわけでもないし、一般家庭で予備学科に入れたのはお金を積んだ結果じゃないらしいし、いくらでも美味しいものなんか食べられるよ。

なんなら手作りはメイのケーキが1番だ。ケーキバイキングのケーキなんて甘すぎて元を取るのにどれだけ苦しい思いをするか……

「どうしたの凧ちゃん？」

「あ、あの大丈夫ですかあ？ その、すっぱいブドウでも食べたような顔をしていますけどお……」

「百面相しちゃってー、なにを考えているのかバレバレなんだよー」

そこですっぱいブドウを例えに出すか罪木ちゃん……

ああ合ってるよ。それで合ってるよ！ 手に届かない美味しそうなブドウに向かって「あんな高いところにあるんだからすっぱいに違いない。だから食べれない場所にあって良かった」なんて負け惜しみしてるのと同じだよ！

そうだよ、美味しいケーキを味覚の好みでたくさん食べれないことに悔しがってるし、日向クンが来ないことに残念がってるよ！ 悪いか！

「十神、時間はいつだ」

「夕方5時からだな」

辺古山さんが確認すると十神クンが答える。

夕方か…… その時間はまだ希望ヶ峰学園の授業があるはずだが…… まあ本科に授業とか関係ないか。本来なら好きなこととしてい

ていいわけだし。

「あの、雪染先生は来ないのかな？」

「察しろよ、御手洗」

「アツ、ハイ…… 察したよ」

ソニアさんの目が輝く。

そうか、雪染先生は宗方さんとデートか。羨ましい限りで。

警備の逆蔵さんは…… きつと荒れてるんだろうな…… 日向クン、また本科こっちに1人で来ようとして捕まらないといいんだけど。

その後は結局日向クンがこちらに来ることもなく、どこことなく浮足気味な雪染先生の授業を受けてから全員で移動した。

団体予約をしていたようで、チケットを見せれば即行で奥の席に案内される。席順は仲の良いもの同士など適当だ。

私の隣には当然のように罪木ちゃんが座っている。

そこそこ気をつけていないと制服にケーキをくつつけるはめになりそうだし、私はおとなしく彼女の世話を焼こうと思う。

「うう、でもあんまり入らないですねえ…… たくさん食べたい気持ちはあるんですけどお……」

ケーキを取りに行けば罪木ちゃんは悩む悩む。他の皆が痩せすぎているせいか、自分のお腹のぽよぽよを気にしているらしい。

キミは標準体型より痩せてるよと言っても、やはり周りが周りだから気になるらしい。

隣のクラスの江ノ島さんとか、いつそ痩せすぎて怖いくらいだ。あれだけ痩せていると逆に不健康に見えるはずなのだが、そんな風に見えるのが怖い。とにかく怖い。

「ご、ごめんなさい…… もう少し悩ませてください……」

そう言って悩む彼女の目線を追い、どれに迷っているのかを見極めて片方をヒョイ、と取る。

「あ……」

イチゴタルトかあ、美味しそうだね。

「え、えと」

罪木ちゃんももう片方のモンブランを取り、占領していたバイキン

グから離れる。

「あ、あの狛枝さん……」

言い淀む彼女に私はなんでもないように振る舞いながら言う。

「よかった、私もモンブランと悩んでたんだよね。罪木ちゃん、よかつたら一口もらってもいいかな？こつちのもあげるからさ」

「……！ はい！ ありがとうございますうー！」

はあ、今日も罪木ちゃんが可愛い。

デレデレしつつ席に戻り、結局女性陣で少しずつ持ってきたものを交換しながら食べる。

もちろん、自分だけで食べたいものがあればそれはもらわない。

感想を訊いて自分でも取りに行くか決めるだけだ。

一口ちようだいは無理にお願いするとただの悪い習慣に早変わりだからね。お互いにどうしようか悩んでいたのを取って提案するのが1番だ。

遠くの席で見えるケーキ早食い選手権は気にしない。

十神クンも終里さんも容赦しないんだから…… 少しはお店側のことも考えてあげて。あれをやめなければ2人は出禁になりそうだ。

十神クンのほうは一応、出禁ギリギリでやめるらしいから心配してないけれど。

終里さんも十神クンと忒大クンがいるから大丈夫だとは思うけどね。

「甘いものはそこまでたくさん食べられないけど、たまにはこういうのもいいね」

「そうですねえ」

小さい1口サイズのケーキもあるし、紅茶の種類も多いし、口直ししながらだから思っていたよりも食べられそうだ。

「チョコレートケーキとかは……」

「取りに行きましようかあ？」

「そうだね、一緒に行こうか」

2人でバイキングの方に向かうが、やはりこちらも団体なうえ他にもお客さんはいるし、ケーキが残り少なくなっている。

お目当のチョコケーキももうないようだ。

「うーん、残念」

「皆さんチョコレート好きですよねえ…… まだまだ食べるでしょうし、店員さんに訊いてみますかあ？」

罪木ちゃんの言葉に頷い店員さんを探す。

すぐそばにいたエプロンをつけている人に「すみません、ちよつと聞きたいことが……」と言いかけて止まる。

「はい、なんでしょ…… 粕枝!？」

気づかなかったが、その人は特徴的なアンテナが立っていた。

「日向クン…… もしかしてここでバイト？」

「あ、ああ……」

十神クンの方を向けば、ケーキを食べながらこちらを見る彼と目が合った。さては知っていたな、これは。

そういえば十神クン、日向クンはバイトがあるとは言ったが、来れない。とは一言も言っていなかったな…… 私が勝手に騙された形になるけれど、なんか悔しい。

嘘を吐かずに騙すのは私の十八番なのにさ。

「皆来てくれたんだな」

「え？」

「え、賄いを全部断って半額チケットを代わりに貰ったから十神に渡したんだけど」

十神クン！ 私なにも聴いてないよ!？」

そんな目線で大食い選手権中の彼を睨むが、返ってくる視線は「聞かれてないからな」とか「言う義務はないぞ」と言わんばかりだ。

ふてぶてしく鼻で笑っているのが確認できる。なんてやつだ……！

「日向、コーヒーマーカーが動かねえんだが」

「坊ちゃん、私が」

「こういうのは店員に頼むべきだろーが」

「そ、そうですね」

「ああ、今行く。それじゃ」

「えっ、あ、うん……」

日向クンは九頭龍クンたちに呼ばれてコーヒーマーカーを直しに行った。多分中の水がなくなってるだけだと思うけど……彼はちやんとバイト店員として働いているようだ。

「よっ、日向！ やっとホールに出てきたか」

左右田クンが日向クンに向かって話しに行く。

あんまり迷惑かけちゃダメだよ、と思っただ後気づいた。

…… ” やつと ” ？

もしかして左右田クン、日向クンがここでバイトしてるの知っていたのか？

「クッ、ここには結界が張ってあるな…… 果物の園に四天王を召喚できんことが非常に残念だ」

「それでは帰り道に青果店に寄りましょう！ 庶民的なお店で馴染みの店主と話しながらお買い物！ 四天王さんたちに美味しいものを買っただけでしょう」

「そ、ソニアさん!？」

フルーツバイキングもあるから確かに彼の四天王は喜びそうだけれど…… さすがにハムスターは連れて来ていなかったんだね。

だが田中クンはこのあとソニアさんとデート決定だ。左右田クンは御愁傷様です。涙拭けよ。

「どうせならばくが食堂で振る舞ったのに!？」

「お前さんは昼の時点で既にホワイトデーメニューを出していただろう!？」

「そうそう、おにいのデザートはお昼に食べたしねー」

式大クンと西園寺さんの言う通り、このクラスのメンバーは大体お昼のデザートに彼特製のドーナツを食べているからね……

ホワイトチョコでコーティングされたドーナツは特に人気で、朝日奈さんなんて大神さんに注意されるまでに10個も注文していたくらいだ。

お菓子専門の安藤先輩には叶わないけど、花村クンも案外人気だ。

「ああ、みんな白いものを垂らしながら口いっぱい頬張って食べてくれたよね！」

ホワイトチョコをね？

もしかしてあの溶けやすいチョコはわざとか。

…… この微妙なセクハラさえなければ人気者になれるのもつたいない。マスコット体型でも性格がイケメンならモテる余地あるはずなんだけど。

彼の弟と妹も超高校級のホストとキャバ嬢なくらいだし、ポテンシャルはきつとあるんだろう。本人の言動が台無しにしてるだけで。

十神クンだって面倒見いいし惚れる子はいそうなものなんだけど…… 今のところは見たことないか。

「御手洗は果物も食べて食べて！ ほら、普段健康に悪いものばかり食べてるって聴いてるんだから！」

「ま、待って小泉さん。そんなに言われても…… うっ」

「亮太ちゃんどんだけ食が細いんすか！ まだ果物食べただけじゃないっすかー！ ほら、あーん。あーんしてあげるっすから！」

「なんで僕ばっかり！」

普段引きこもりしてるからだと思うよ。

だって十神クンが連れてこなくちやもう一人クラスメイトがいるだなんて知らなかったし……

「待ってくださいあい！ 御手洗さんは普段のお食事が少なくて胃が小さくなっていくんです、栄養のあるものを少量ずつ摂るように……」

罪木ちゃんが彼を助けに行つたところで日向クンがやってくる。

「チケツトくれたのってキミなんだ？」

「ま、まあ、そうだな」

「ふうん」

頬杖について話を聞く。

「キミがここでバイトしてるの、結構知ってる人がいたんだね」

「ああ」

知らなかったのは私が訊かなかったからか。

「これがホワイトデーのお返しってことなのかな？」

「…… 3倍返しって言うだろ？ それなら食べ放題のほうがいいか
と思ってるな。それと、十神たちもいることだし」

「そっか」

本当に3倍返しする人なんていたのか、と微妙な心境。

「ところで、あの草餅ってやっぱりバレンタインってことでよかった
んだな」

「え？」

「違うのか？」

…… やっぱバレるものはバレるんだね。

「違うよ」

「そうか…… と、そろそろ仕事に戻らなくちやな」

ちよくちよく話しに来てくれていただけありがたいほうだ。下手
したら咎められてもおかしくないからね。

「日向くん」

「ん、なんだ？」

仕事に戻る直前の彼に言う。

「…… ありがとう」

振り返った日向くんは優しくふわっと笑うと、「どういたしまし
て」と言つて奥に引つ込んでいった。

本当は手作りが良かったなんて我儘は言わないことにする。

私は照れを誤魔化すように、ショートケーキのイチゴを頬張った。

「すっばい……」

手が届いても届かなくても、どちらにせよ “すっばい” のは変
わらないらしい。

【育成軸】狛枝凪風の不運な誕生日

朝起きてゴミ出しに行けばオートロックに締め出されるし、ちよつと出かけてみれば鳥の糞が顔の横を通り過ぎ、桜の横を通れば毛虫が降ってくるのが当たり前。

自動販売機でジュースを買おうと思えばボタンを連打しても出てこない。小銭だけ飲み込まれてしまつて途方に暮れる。

かと思えばなぜかルーレットだけ回つて別に欲しくもない少し高めのコーヒーが排出された。コーヒーはそこまで得意じゃないのだけれど、仕方ない。

春の陽気で暑いくらいだというのに、勝手に出てきた熱々のコーヒーをハンカチで包んで手に取る。

細かい不運が重なり合っていることをなんら疑問に思わず、むしろいつも通りだと開き直つて待ち合わせ場所に急いでいた。

子供の多いこの日、大型デパートの一角では夢野さんのマジカルショーが行われているらしい。それを見るのも楽しみにしていた。

『ごめん、電車が遅延してるみたいだ。中で待っていてくれ』

懐から取り出したスマホに、誰かさんからのメッセージが入る。

「はあ……」

思わずため息を吐いて、中に入る。

まさか今日がこんなにも不運な1日になるなどと思うわけはなく、とても無防備に。

「日向クンのバカ」

彼が悪いわけではないと理解しつつも呟かずにはいられない。

フードコートにいるよとだけ連絡し返して座り込む。

周りにはそれなりに人がいて、ざわざわとしか形容できない雑音が耳から反対側を通り過ぎていく。

注文したクレープはすぐさまペロリと食べてしまった。

「はあ……」

「お主、そんなことをしていると幸せが逃げるぞ」

テーブルに突っ伏していたら、聞き覚えのある声が頭上から聞こえた。

「夢野さん？ マジカルショーは？」

「今は休憩中じゃ」

顔を上げて対応する。

夢野さんはほとんどいつもと変わらない制服と魔女帽子を被っていたけれど、薄く化粧をしていて髪がさらさらと手入れされているのがすぐに分かるくらいちゃんとしていた。

面倒臭がりな彼女でも子供達を喜ばせるためには努力するのか、それとも茶柱さんやアンジーさんにもアレンジされまくったか、多分どちらかだろう。

「狛枝はどうしたんじゃ。こんなところにまでいるとは思わなかったぞ」

「ちよつとね、買い物に誘われて…… まあ、その誘った張本人は遅刻してくるみたいだけど」

「暇しとるのか」

「その通り」

この大型デパートは希望ヶ峰学園からは電車でひとつか、ふたつ離れた位置にある。日向クンは自宅通いだからさらにもう少し時間がかかる。ただ、それでも近いのに電車が遅延するとは運がないとしか言いようがないね。

果たして運がないのは彼なのか、待たされている私のほうなのか。

「次のイベントは何時から？」

「もう少しじゃな…… お主も来るか？」

「うん、まあそのつもりで来たんだしね」

「そ、そうなのか？」

照れて大きな帽子をぎゅっと深く被った夢野さんが視線を彷徨わせる。

私は時計で時間を確認してから、もう一度「夢野さんのマジカルショー先に見てるね」とだけメッセージを送る。

『悪い、着いたら連絡する』

すぐさま返ってきた言葉を最後にスマホをポケットにしまった。

「じゃあ、ステージに向かうかのう」

夢野さんとはステージ前まで送ってもらい、別れる。

その場には総勢10人くらいの子供達が既に集まっていた。そのすぐそばにも見覚えのある人物……春川さんがいる。どうやらこの子供達は彼女の育った施設から連れてきたみたいだ。

「や、春川さん」

「粕枝…… あんたなんでここにいるの？ 日向か罪木は？」

「なんで私が1人でいるとそういう反応になるんだろうね…… 皆こぞって言うんだよ」

「は？ だって今日ってあんたの……」

彼女の言葉がそこで途切れた。

いや、正確には聞こえなくなった。

悲鳴が聞こえる。

デパート全体が揺れる。

そしてそれよりも重要なのは、このフロアのどこかが…… 爆発したということ。

爆音で春川さんの声がかき消されてしまい、その言葉は最後まで聞けなかったがなにを言いたかったのかは想像がつく。

春川さんは子供達を一箇所に集めて私に見張っているように言うと、パニックになって逃げ出した子供達を連れ戻しに行った。

ステージは無事だけれど、夢野さんや他の出演者などが次々と飛び出してきて避難誘導を開始する。

「ガス爆発とか……？ いや、でも……」

私のそばにいなさいと春川さんに言われた子供達と手を繋ぎ、誘導経路に沿って歩く。

けれどそれは長く続かなかった。

「手を上げろー！ その場に止まれー！ さっさと確保だ！」

避難誘導されて素早く外に出た人間はいい。

けれど、覆面を被った男達が夢野さんを捕まえてしまったところで

その流れは途切れる。

その場に残ったのは、ステージ前にいた私達と子供達ばかり。

大人は皆逃げてしまったみたいで舌を打つ。

本当に不運だ。

「な、なんじゃ！ 離さんか！」

「本当に希望ヶ峰学園の生徒がいるとは……」

そんな会話が聞こえてピンとくる。

今日のマジカルショーは事前告知されていた。

つまり彼らは夢野さんがここに来ると思つて爆弾かなにかを仕掛けていたことになる。

狙いは希望ヶ峰学園の生徒。ということとは彼らは予備学科か、才能があると自負しているくせにスカウトされない自称超高校級か、そんなところだろう。

子供達は今更逃したところで守る大人達はもういない。安全に外に出られるかは保証できない。

私が関係ないからと言つて連れて逃げることもできるだろうが、さすがに夢野さんを一人にするわけにはいかない。

春川さんはどうしているだろうか……

子供達を宥めながら誘導に従い、ステージの控え室に入る。

犯人グループはどうやら私が希望ヶ峰学園の生徒だとは気づいていないようだ。

早めに解決しないと、犯人グループの彼らの方が死者が出る自体になりかねない。なんせ、私が関わってしまったているからだ。

前にもアメリカで銀行強盗に遭遇したが、そのときは銀行ごと崩落。私は瓦礫の隙間にすっぽりとはまって助かったが、犯人グループは全員死亡ということがあった。

こんな大型デパートでそんなことになったら助け出されるのに何日かかるか見当もつかないし、私が安全なのは当たり前だが、それが夢野さんや子供達には適用されない。そうなる前になんとか解決しなければならぬ。

私は、待つだけはやめたんだ。

「夢野さん、大丈夫？ なにもされてない？」

「あ、ああ…… ちびるかと思つたわい……」

「うん、元気そうだね」

少しだけ安心した。

けれど、子供達はそうもいかない。泣き出す子、逃げようとする子様々だ。犯人グループはそれを見て大分イライラしているから心配だ。

「いて……」

そのとき、どこからか頭になにかが当たる。

視線を向けると、なにかの紙くずが私の足元に落ちている。開いてみてもなにも書かれていないが、こんなものが自然発生するわけがない。

気づかれないように上へと視線を向けると、恐らく排気口か、通気口か、空調を行き渡らせるための場所か…… そんな隙間から春川さんが見えた。

犯人グループを怒りのこもった目で睨んでおり、私が気づいたことを悟ると口パクでなにやら伝えてくる。

恐らく気を逸らさせろとかそんなことだろう。

「ねえキミ達つて希望ヶ峰になにか恨みでもあるの？ こんなことしてさ」

話しかける。

「誰が口きいていいって言った？」

「残念だけど、自分の口つて縫い合わせられないんだよね。夢野さんはもちろん超高校級のマジシャンだけど……」

「魔法使いじゃ」

「ああ、そうだったね」

自称だけど、この場には子供達もいる。夢は壊さないほうがいいだろう。

「私も一応希望ヶ峰学園の生徒なんだよね。キミ達ラッキーだね」

「はっ……」

彼らは何事かを相談すると、私に本当かどうかを確認してくる。

私は財布に入れっぱなしになっていた学生証を見せ、すぐさましま
う。取られたらたまったもんじゃないしね。

「ねえ、人質は私と夢野さんで十分なんじゃない？ 子供達は関係な
いんだから、外に出してあげてよ」

春川さんは「なに言ってるのこのバカは」みたいな表情をして
いる。

あれ、なにか違ったかな。まあいいか。

「そんなことするとも思ってるのか？」

「うーん……」

断られるのは想定済み。

最初からタダで逃してあげられるわけがないのは分かっていた。

だからこれは大きな取り引きとして捨て置く。次は、小さな取り引
きだ。

「なら、こんなのはどう？ 私とトランプで勝負する。やるのはじじ
抜きで、私が1位になったときだけ1人ずつ子供達を解放する。もち
ろん、私の勝利条件は1位になったときだけ。キミ達が何人参加して
もそれは変わらない」

「乗るメリットがないな」

お相手様もなかなか冷静だ。

「私は超高校級の幸運なんだけど、キミ達なら知ってるでしょ。希
望ヶ峰学園の幸運枠って毎年抽選で選ばれてるだけなんだよね。別
に特別な才能なんてない。一般人に最も近いんだよね…… そんな
私に、負けると思ってるんだ？」

「挑発には乗らないと言っている」

「強情だなあ…… なら、お腹空いたから適当に商品取ってきてよ。
子供達も、お菓子でも食べれば少しは落ち着くと思う」

男が目配せする。

部下の1人が外に出て行った。

上を確認してももう春川さんはいない。今出て行った人を確保し
に行ったんだろう。さすがの彼女も一度に5人以上の人間を相手す
るのは骨だろうし、1人ずつ離していく作戦は成功だ。

2段階に分けて要求を通したのでリーダーらしき男はずっと私を注目している。

「粕枝…… お主の行動はひやひやさせられるわい……」

「ごめんね、こういう事態は慣れちゃって…… ついつい挑発しちゃうや」

「恐ろしいやつじゃのう」

外に出て行った部下は帰って来なかった。

1人が後を追うように出ていく。主要犯人グループと思われる5人のうち、2人が出て行った。そろそろだろう。

「お前、なにかしてるな？」

「さあね。これ以上監視のための人員は減らさないだろうし、この場でなんとかしようとするのは無茶だからやめとくよ」

リーダーが拳銃を私に突きつける。

そのゴツゴツとした感触と、冷たい機械特有の温度に目を細めて

「なに？」と単純に言う。

「余計なことをすれば殺す」

子供達の悲鳴があがる。

夢野さんに目配せすると、彼女はすぐさま子供達に近寄り、目を覆い隠すように子供達を引き寄せる。

「こんなもの、見ないほうがいいんだ。

「やれるものならやってみればいいんじゃないかな？」

「これが怖くないのか？」

「ぜーんぜん、そんなおもちやで殺されるわけがないんだよね」

自分から相手の拳銃を掴む。

額に突きつけられたまま、につこりと微笑んでみせると男は少しだけ怯んだ。ドン引きしたとも言おう。

そこに扉を勢いよく開けて春川さんが飛び込んで来る。

もう外は片付いたのか、早いなんて思いながら拳銃は掴んだままにして置く。

男は拳銃を一丁しか持っていなかったようで、他2人が蹴りで沈められている間私から必死に離そうとしてきていた。

とうとう最後の1人になり、「このっ」と冷静さを欠いた様子でついに引き金を引く。

「キミって拳銃使ったことないでしょ。残念、安全装置が外れてないよ」

太ももについたホルダーから素早く鉄パイプをすくい上げるように振り、拳銃を持った手を打ち上げる。

それだけで骨が折れたか、強い衝撃も加わって拳銃が手放された。あとは春川さんがリーダーを押さえ込みにかかる。

その間に私はするりとその部屋を抜け、ほぼ無人と化したデパート内を歩き回った。

結果、三箇所程爆弾が仕掛けられている場所を発見し、適当に線を切って放置。

隅々まで回った頃には犯人グループが全員確保され、外に連れ出されていった。

やってきていた警察や探偵…… 最原くんなんか爆弾の位置を情報提供して事情聴取諸々受けたらやっとな帰れるようになった。

せっかく日向くんが買物に誘ってくれた日だったというのに、こんなことに巻き込まれた上彼は遅刻してくるとかとんだ不運だ。

だけれど、さすがにもう来ているよね。

野次馬の中にいた日向くんを見つけて近寄る。

どうやら罪木ちゃんやメイも来ていたようだ。罪木ちゃんは泣きそうな顔で日向クンと話している。

春川さんが近くにいたのでこの端末は聞いているだろう。

「日向クン！」

走っていくと、彼らは私に気づいたようにこちらへ振り向く。

けれど、日向クンはいつになく怒っているようだった。

「こ、粕枝さん！ 無茶なんてしちやダメですよー！」

「もつと言ってやって。さすがにあれは心臓に悪い」

罪木ちゃんの言葉に春川さんが頷く。

目の前で拳銃を突きつけられている私を見たせいで嫌な思いをってしまったのか。謝ると、すごく嫌そうな顔をした。

「えつと……ごめんね。私の不運に巻き込んだ!?」

はあ、とため息を吐いたメイが私の額を弾いてデコピンし、視線を日向クンへ送る。彼女はなにも言わないので、私はただただ混乱して2人に視線を行ったり来たりさせていた。

「あいな、狛枝。今回のことも、お前のせいだって思うのか?」

「それは、まあ……不運だよ。今日は不連続きだったし、夢野さん達を巻き込んだりしたかなって」

言葉が進むにつれて声が小さくなっていく。

なんとなく彼らの怒りの理由が分かったからだ。

「狙われてたのは夢野らしいけど、だからって今回の責任は夢野にある……なんて思わないだろ?お前も」

「そりゃあ……」

日向クンは怒っている。いつになく。

メイは全て彼に任せているようでもなにも言わない。

「いらぬ責任まで勝手に負おうとするのは優しさなんかじゃなくてただの傲慢だぞ。お前はいつもそうだよ」

「……」

勝手に行動して、勝手に命を危険に晒して、更には犯人グループの挑発までして……本当だ。早期解決できたから良かったものの、私は余計なことしかしていない。

「……ごめん」

「まあ性格だろうしな……」

話が終息すると、春川さんはそれを見届けて夢野さんと去っていく。

残ったのはメイと、罪木ちゃんと、日向クン。

「予定は狂ったけど、もう昼だしどこか入るか」

「え、ええ? 私達もいいんですかあ?」

「構わないよ。お前も2人にいてもらったほうがいいだろ」

だって、今日はお前の誕生日なんだし。

その言葉に顔を上げる。

「……うん」

ありがとう、皆。

今回はちよつと不運だったけど、それでも毎年やってくるこの幸せな日に、生きていることを実感する。

誰もがこの物騒な世界で生きて、笑って、そばにいる。

道を踏み外しそうなきときは止めてくれる。そんな仲間を得る機会が与えられたことに私は感謝する。

神様なんて信じていないけれど。

辛いことも苦しいこともあった。でも今はこの世界に生まれることができて良かったと心の底から思うことができる。

心の中で思う。

誕生日おめでとう、わたし 狛枝 凪。

これからもずうつと幸せな日々が続きますように。

皆と並んで歩く。

それは大衆的には不連続きな1日。

でも、私にとっては結果的に幸せな1日。

「どこも満席か……」

「そんなあ、皆さんとお昼ご飯食べたいです……」

「あはは、不運だね」

「でしたら私に任せては頂けませんか？ 良いお店を知っているのです」

「なら、メイに任せようかな。2人はどう？」

「いいんじゃないか？」

「明海さんなら安心できますう」

明るい日の下にわいわいと賑やかに歩く影がたくさん。

その中に、私はある。

【本編軸】塔和七夕祭り

始まりは食料調達に本土へ寄ったことだった。

「アキちゃん、周りに人はいる？」

「んー、リーダーには映ってない…… と思うよ」

私は手元にあるスマホに向かって話しかけている。

よそから見たら変な光景だろうが、私たちにとっては日常の光景…… そして今は誰も見ていないので怪しまれる必要もない。

AIの七海さん…… 前は七海ちゃんと呼んでいたけれど、今は「アキ」ちゃんと呼んでいる。彼女は色々な機能を搭載しているから、いろんなところで大活躍だ。

ゲームももちろんできるし、こうやってリアルスニーキングミッションのためにリーダーも見ることができる。ゲームっぽいことは大抵できると思ってもいい、素晴らしい才能を持っているよ。

不二咲クンに生み出されて、七海さんの性格や才能をプログラミンクされた成長型AI…… それが彼女だ。成長の過程によってもはや元の七海さんとも少し違っているけれど、立派な私たちの仲間である。

本来の七海さんは未来機関の13支部長なんだけど、島での事件からひと月ほど経つと、溜まっていた仕事をひと通り片付けてからこちらにやって来ていた。

今、13支部長の彼女がこちらにきているので、例の会議で代理出席してもらっていた朝日奈さんがそちらを動かしているらしい。

その関係で未来機関の動向も七海さんとアキちゃんを通してリークされていたりもする。

超高校級の希望たる日向クンがいるとはいえ、私たち元超高校級の絶望が逃げきれている理由のひとつだ。

宗方生徒会長は万能型で結構怖いし、逆蔵さんは脳筋だけどブレインの宗方さんがいれば脅威だ。

あ、そうそう。もちろん会議のときに事件はあったらしいが、生き残り…… というより78期生のみんなが総動員した結果。怪我な

どはあつたらしいが、死人は出なかつたみたいだ。

どうやら、会議に参加したのは苗木クン、朝日奈さん、霧切さん、十神クンだけで他の人は後から連絡が断たれたことで駆けつけた……とかなんとか。特に十神クンと音信不通になったことで腐川さんが暴走しそうになつたらしい。

あと、苗木クンのために戦場さんもなにも考えずに飛び出したとか。さすが残念なお姉ちゃんである。

私のお姉ちゃんメが計画的に苗木クンたちと連携していたのと比べると、とても新鮮だ。いや、メイも強硬手段取ろうとしていた節があるみたいだし、どこも姉属性は似たようなものか。

とにかく、私たちは食料と、あと作物の種を手に入れるためにスニーキングミツシヨンに挑んでいる。

アキちゃんがいるから楽勝な雰囲気だけれど、早いに越したことはない。

「不二咲クンはこの先だつたよね？」

「うん、会うのが楽しみ。お父さんに進歩報告するんだよね……新しいゲーム入れてくれないかなあ」

「ソシャゲ入れてるでしょ？」

「粕枝さんのデータはすぐ揃つちゃうから、私だけのデータがほしいの」

「ああ、それは……ゴメン」

「ううん、粕枝さんが悪いわけじゃないよ」

才能が憎い……

いや、好きなキャラが速攻で揃うのはいいことなんだけど、達成感なんて皆無だよね…… 実際。

と言つても、アキちゃんだつてすぐクリアしちゃうじゃないか。対戦系も大体勝つちゃうしね…… 日向クンは別だけど。

まあ、完全クリアしても情緒の成長のためにとかで何度も周回しているらしいから、飽きは来ないみたいだ。

特にRPGはやるたびに新たな発見や感情の勉強ができるらしくて楽しんでるみたい。

彼女の場合アイランドの中で相当成長してるから、今更って感じもするけど……

「ここだね。ええと、塔和シティのこの路地で……」

「えーつと、ここだよね冬子ちゃん」

とうこ…… 橙子？

バツと振り返った先には、想像した人物とは違い2人の人間がいた。

「アキちゃん……」

「うんと、お父さんの端末と同じ電波を飛ばしてるみたいだよ」

「もしかして名代だったり……？」

名前に過剰反応してしまったけれど、聞き覚えのある声だった。この2人ならばなんの問題もないはずだ。

「あ、あれ…… 召使いさん!?!」

「あ、あ、あんたなににきたのよ……!」

苗木こまるさんと、腐川冬子さん。

2人とも私が絶望時代に会った人だ。それも、私が迷惑をかけるという意味で…… あのとときは本当に申し訳ない。正直かなりスレてて黒歴史だから気にしないほしいなあ。いや、加害者側が「気にするな」というのは無理があるか。面の皮が厚いにもほどがある。

「あは、久しぶり…… あ、待つて待つて! 敵対するつもりなんてないから! 不二咲クンから聞いてない?」

「え? 不二咲さん…… えつと、千尋さんのほうだよね。もしかしてこの食料の運搬って」

あ、そつか。ここでは不二咲クンのお父さんも復興支援でいろいろやってるんだっけ。だからちよつと迷ったのか。

「うん、私たちへの支援だね」

「こまる、渡さなくていいわよ」

「えつと……」

「うん、ごめんね。本当にごめんね。そんなに恨まれる心当たりは山ほどあるけど、ちゃんと対価は払ってるからさ」

敵意増し増しである。解せ…… るけど、うーん。

「あの、本当に…… なにもしない、んですか？」

「うん、もちろん。こっちは逃亡中だからねえ。娯楽も、ゲームやらパーティーピーポーなごときバーベキューやら水泳やらしかないからね」

「船上生活満喫してんじゃないわよ…… 十分じゃないの……」

「復興に協力したくとも、今回の事件の負の部分全部背負ってるからできないし…… いやあ、満喫しててごめんねえ」

「煽ってんじゃないわよ！ 絶対わざとじゃない！ キイイイ、こまるー！」

「え、なに？」

「やっぱ渡さなくていいわよ！」

「あ、それは困る！ こまるちゃんだけに！」

「……」

ドン引きした顔しないで！ 地味に傷つくから！

そんな押し問答をしている間、私が今は無害だと証明できるアキちゃんは寝ていた。

情報処理と学習のためによく寝るこの子は必要ないと思うとこうしてすぐ居眠りしてしまう。正直今は助けてほしかったんだけど…… 仕方ないか。

…… と、なんとか食料を調達してから港に着けた船へと帰る。

この豪華客船は日々左右田クンの改造で進化を遂げていて、今は潜水もできるほどだ。だからこそ、こうやって堂々とやって来ているわけだが。

船内ホールに帰って食料の入った袋を見る。中に入っているのは大体携帯食料と飲料水だけど、もちろん1人で持てる量なんてたかが知れている。中身の大半は作物の種だ。

船内に畑があるので、そこで育てている。食料の大半はそれで賄っていて、飲料水は海水から左右田クン特製のろ過装置で確保。左右田クン様々だね。

「あれ…… なにこれ」

そして最後に、なにかのポスターが入っていた。

「えつと…… ” 塔和七夕祭り ” って…… 明日だこれ」

「お祭り…… わたあめ……」

「ねえ、アキちゃん。なんで私の頭を見て言うの……？」

「…… 食べてみたい、かも」

「ねえ、ちよつと……？ アキちゃん？」

「冗談、だよ」

私、もしかしていじられてる？

「と、とにかく日向クンへ報告して…… あとは、うん。皆きつと行くんだらうね……」

特に濔田さんとか。

全員乗り込みに行く気しかなかった。

「ああ、別にいいんじゃないか？ その代わり簡単な変装くらいはしていけよ」

簡単に許可が降りてしまった。

日向クンもわりと乗り気だ。楽しみにしている感じ…… 今は意識的に演算をしないよう、 ” 日向クン寄り ” に思考を切り替えているみたいだけど、皆が飛び出していく光景はそれでも容易に想像できるとは。ま、当たり前かな。

「簡単な変装でいいの？」

呆れて私が言うのと、日向クンは苦笑いをして 「がつつりやれつて言ってもできないだらう」と言い放つ。

確かにそうだ。特に以下略。

「まあ、楽しんでこいよ」

「え、日向クンは行かないの？」

「あー、仕事終わったら気まぐれに行くかもしれないけどな」

「仕事って？」

「お前の目撃情報のもみ消し」

「えっ」

ものすごい笑顔で言われて顔が引きつった。

いつ目撃されたんだ？

「お前さあ、冷静だけど馬鹿だよな」

「なんで私が罵倒されないといけないんだよ!？」

「苗木妹や腐川と言いつ争いしてただろ。そのとき目撃されたみたいだな。動画サイトにアップされてる」

なん…… だと!？」

「え、私たちが78期と繋がっているっていうのは……」

「そこはすつば抜かれてないぞ。そのあとくだらないことでも言い争いしてただろ。そつちだ」

「たとえば?」

「お前がきのこ派だと割れて炎上してるな」

おのれたけのこ派…… ! たけのこPPでもするつもりか!

「あのなあ、俺もたけのこ派だつて忘れてないか?」

「…… お子様舌め」

「おい、全国を敵に回すつもりか?」

「お手伝いいたします、お嬢様」

「湧いて出てくるなよ……」

收拾がつかなくなってきたところでしばらく休憩し、彼と別れる。アキちゃんも日向クンの仕事を手伝うみたいだから、端末はそのまま彼の元にある。

あーあ、このままだと日向クンは夜遅くにしか参加できなさそうだね。

私は別の人を誘ってみようか…… うーん、変装ねえ。

「あ、そうだ! …… こういうときなら見せてくれるよね、きつと」

そうと決まったらさつそく誘おう!

「うーさーぎークーン!」

澤田さんのテンションよろしく廊下を疾走しながら、私はとある個室にピンポンダッシュした。

…… つて、だめだ。いたずらしてる場合じゃないよ。お祭りに誘うんだつた。

「…… なんだ」

慌てて戻ると、豚神クンがちょうど出てきたところだつた。

「お祭り行こう!」

「は？」

「明日は七夕だよね？ 塔和シティで復興支援のお祭りがあるんだ！

一緒に行こう！」

「……俺たち指名手配犯だろう」

「変装すればいいんだよ！」

「お前がか？」

豚神クンが私の格好を上から下まで見てため息を吐く。

…… 失礼じゃないか？

「お前のその髪はどうにもならんだろう」

「うーん、適当に結んで帽子でも被れば大丈夫じゃない？ あとサングラスとか」

「雑だな」

うっ、それはそうだけど……

「私はね、うさぎクンに変装解除してほしいんだよね！」

「はあ？」

「ほら、今も十神クンモードだし…… 昔みたいにさ」

「俺にあの姿に戻せと？」

「うん…… だめ、かな？」

やっぱりトラウマもあるだろうし、自分が死の淵に立っていたときのことや、出生のことを思い出すだろうし……

「まあ、いいだろう。その代わりこれっきりだ」

「えー」

「文句を言うな」

「はーい」

仕方ない。その代わりこの目に焼き付けておこう。

「それじゃあ、明日の…… 祭りの開催時刻にでも行くか」

「うん！ よろしくね」

楽しみだ。

久しぶりに怪物クンに会えるのだ。私のトラウマも少しは緩和されてるだろうし、前みたいに一時的狂気にもならないだろう。

最近の夢の中でも追いかけることが減ったし…… 多分大丈夫

夫。

……

翌日の夕方。私は髪をひとつに結んで、帽子を被って、夏らしく可愛いワンピースで揃えてみた。

うそつき…… うつろちゃんの真似だ。

「…… 準備できたな？」

「え、うさぎクン……？」

そこには、律儀に甚平を着た “ 怪物クン ” がいた。

前に見たときよりも横幅も縦幅も大きいけれど、なにも変わっていない。ただ本来の赤い瞳は片方だけで、義眼は青い目になっている。そちらは豚神クンモードと一緒にだ。擬似オッドアイだね。逆に目立つんじゃないかな？これ。私と同じ白髪だし……

「なんだ？」

「いや、ううん…… あのね、うさぎクン。ありがとう」

「……… 大丈夫なんだな？」

「うん、やつとキミの顔を見れるね。よし、行こうか。湿っぽいのはここまでにしておこう！」

それからは簡単にお祭りに潜むことができた。

「え、あれ？ は、花村クン……？」

「え？あ、…… い、いらっしやいませー」

わいわいと雰囲気を楽しみながら屋台をまわっていたら、見覚えのあるロゴのものを見つけた。行列がたくさんできているので並んでみたら、その店頭に立っていたのは花村クン…… が髪を下ろして後ろで結んだ姿だった。確かにこれならバレなさそう。

心なしかいつもより清潔感があるように思う。こっちのほうがシエフっぽいのでは……

「えっと、焼きそば2つ……」

「4つだ」

「え、あ、うんそうだね。4つで」

「…… 今日良心的なんだね」

「お前の店を潰すつもりはないからな」

「あ、やっぱりきみって……」

「早くしろ」

花村クンはうさぎクンの姿について言及しようとしたけど、急かさ
れてすぐに商品を出した。

値段はお祭り補正もあって高めだ。多分復興資金も賄うために高
めに設定してるんだろう。私の財布には常に高額が入っているので
問題ないけどね！ いくらでも支援してやろうじゃないか！

スラれたり落したりしてもまだまだ残額はあるので別に問題な
い。なんせ、お金持ちだからね。

「本当に美味しいものを作るよね。きっと食材も喜んでる」

「ぼくはきみを悦ばせて美味しく調理することもでき」

「それじゃ、頑張ってるねー」

「…… うん、そう言うと思ってたよ」

焼きそばを買って花村クンと別れる。

まだまだ祭りは始まったばかりだ。

「ふわあ、おいひい…… ほっぺたが落ちるう……」

「相変わらず美味しいな」

はっ！ 美味しすぎて思考まで蕩けてた…… だめだ。止まらな
くなってしまいうから花村クンの屋台にはこれ以降行かないほうがい
い。

多分資金集めも兼ねてるんだろうし、私が搾取されてどうするん
だ。

「あ、あんず飴ー」

りんご飴の屋台もあるが、そちらはスルー。なおうさぎクンは買っ
ている模様。

りんご飴の小さなリンゴってなおさら。パサパサしていることが多く
て苦手なんだよね。ただでさえ苦手なのに…… だからあんず飴だ。

なおうさぎクンは両手に飴を持っている模様。さっきまであった
焼きそば3つはもう食べきってしまったのか。早すぎる。

幸せだなあ。

「ひゃっはー！ 狙い撃ちっすー！」

「きゃはははは、おねえすぎーい！ 曲と耳しか脳がないと思ってたよー！」

「ちよつと日寄子ちゃん…… あ、唯吹ちゃんこっち向いて」

「イエーイ！ ピースピース！」

「あ、あのえつとお…… 次はその、その救急セットも……」

「うっし！ 任せるつすよ蜜柑ちゃん！ うらうらうらうらうらうらー！」

仲の良い4人が射的で遊んでいる。

澤田さんがわりと上手なようで、射的屋さんの店主がもはや泣きそ
うだ。もうやめたげてよお！ と言いたくなる悲壮感が漂っている。

小泉さんの一眼レフにっこり顔ダブルピースをしながら澤田さ
んが景品を持って撮ってもらっている。楽しそうでなによりだ。

「あ、粕枝さあん！」

そうこうしているうちに罪木ちゃんが私に気がつき、こちらに寄っ
てきて…… 嫌な予感がしたので私も前に出る。

「ひゃあっ!？」

「つとと、大丈夫？」

彼女が盛大に転ぶ前に、前のめりになった罪木ちゃんを支え、抱き
しめる。

相変わらず転びやすい子だなあ。本性は結構怖いのに、このドジっ
子は本物なんだもんね。ギャップだ。いつものことだけれど。

「ありがとうございますう……」

「ん、罪木ちゃん」

そんな彼女は髪の毛をアップにしている、可愛らしい浴衣を着てい
た。紫陽花柄の夏らしいものだ。

「浴衣姿可愛いね。自分で用意したの？」

「は、はわ、はわわわ…… きゆう」

顔を真っ赤にしちゃってまあ…… 照れてるにしては大袈裟な。

「と、とにかく小泉さん。お願いしてもいい？」

「あー、デート中か。もしかしなくともそっちのって……」

「うん、うさぎクンだよ」

「俺だ」

「うん、その態度は十神だね……」

「えっ！ なにこの薄幸美少年！ 白夜ちゃんなんすか!? このいかにも “ 馴れ合う気はない ” と言いたげな美少年が!? 横幅大きいけどー！」

みんな思うところは一緒なんだなあ。諦観の極みだよ。

「ところでそのゲロブタどうすんのー？ 置いていかなーい？ そうだ！ 短冊にそいつだけ捕まるように書いてやろー！」

それはやめてあげてね。

…… この濃いメンツはやっぱり変装程度じゃ隠しきれなさそうだな。

声と行動でバレバレだ。また動画化されて炎上するんじゃないかなろうか。

ちなみに田中クンとソニアさんはゆったりとデートしているのを見かけた。日本のお祭りが楽しいみたいだ。

花村クンの屋台は例外だけど、お祭り特有の安っぽい食べ物っていいよね。特別な感じがするもん。

あー、田中クンとソニアさんか。仲良くてなにより。あの2人なら本当に付き合うかもね。

左右田クンが草葉の陰でハンカチ噛んでるよ…… いや、まだ死んでないって？ そうだったねえ。

「うーん、屋台も飲み物専門とかあるんだね」

「あれ、お前の姉じゃないか？」

「えっ」

うさぎクンが指差した先にはメイが臨時メイド喫茶を開いているのが目に入った。

いやいやいや、え？ いやいやいや。メイド喫茶で…… キミ、その顔で 「お帰りなさいませご主人様」 とか言うの？ 冗談でも許さないよ？ 私のお姉ちゃんなんだからね？

「なにを無駄に嫉妬心燻らせてるんだ」

「だってさあ……」

「よく見ろ」

再び促されたのでそちらを見る。

そこにはキャピキャピしたメイド服姿の子に混じってメイもいるのだ。

「お帰りくださいませ、お客様」

「うんうん、そんなところがいいよね」

他のメイドとは違い、めちやくちや辛辣な態度のメイだった……

うん、私としては嬉しいんだけど複雑というか。

「んっ、ん……」

ちよつと恥ずかしいけど、やるか。

「お姉ちゃん！　こんなところでどうしたの？」

「お帰りなさいませ！　お嬢様！」

く、食い気味だー！

端的に言えば、抱きしめられた。

今まで辛辣な態度を取っていたメイの豹変に周囲がざわつく。

その事実には優越感を感じつつ、先ほどの溜飲を下げる。

「理不尽な八つ当たりだろう」

そうとも言う。

しばしメイとうさぎクンとおしゃべりしながら休憩して短冊のある場所へ向かうことにした。

「凧のことお願いしますね」

「なぜ俺に言う」

「あなたしかいないじゃないですか」

彼女は仕事があるのでここでお別れだ。

このまま屋台広場を練り歩いていたら、私まで食欲魔人みたいじゃないか。そう彼に言う……

「間違っではないだろう」

「キミや終里さんほどじゃないんだけど……」

ちなみに終里さんは弐大クンに大量の食べ物を買ってもらった。財布は弐大クンが持っているので、花村クンが赤字になるほどは使

わないだろう。せつかく資金調達してるんだし。

短冊を書く場所に来ると、やはり人が賑わっていた。

そこに見知った人物を見つけて近くに行く。

「九頭龍クン、辺古山さん！」

「おお、狛枝か」

「テメーも来たか。そういう柄じゃねーだろ」

「それ、そっくりそのまま九頭龍クンに返してもいいんだよ？」

「違いねーな」

2人のお願いは…… きっと互いに同等にとか、そういうことなんだろう。もしかしたらお付き合いに発展するかもしれないし、応援するよ。今のままでも、下手なカップルよりは絆が強いと思うけどね。

「うさぎクンは？」

「願い事は見せるものではないぞ」

「それもそうか」

よし、なら私はこれで。

「ねえうさぎクン、肩車してくれない？ なるべく高いところにつけないと。目指すは1番！」

「見栄っ張りだな…… こんなときにも負けず嫌いか？」

「うっ、それを言われると弱いな……」

誰も見ていないというのに目を逸らす。あ、いや、大注目になってはいるけれども。なにせうさぎクンに肩車してもらってるし。

「もう、こうなったら1番上につけるよ」

「届くか？」

「届かせるんだよ！」

なんだか彼相手だと子供っぽい見栄みたいなのが出てくる気がする…… 昔を知られているからだろうか？

「よし、届いた！」

「もういいか？」

「うん、ありがとう」

しっかりと頂上に取り付けられた。

1番大きな笹にはさすがに届かないけど、わりと大きい笹の1番に

はなれたようだ。

「あとは、花火があるんだっけ？」

「超高校級の花火師は死んだらしいからな。民間団体の有志だそう
だ」

「ああ、犠牲者は出てたんだね……」

「会議の事件以前にも殺人鬼云々でいろいろあつたらしいからな。そ
のときだろう。本物のキラキラちゃんが出たそうだよ」

「相変わらず情報通だね…… っていうかキラキラちゃん？」

それってソニアさんがファンになつてる殺人鬼だよ。本当にい
たんだ…… というより、日本にいたんだ…… しかも未来機関絡み
とか。

うわー、気になる。なにがあつたのか逐一聞きたい…… 絶対それ
原作絡みだよ。観測しなかった……

「キラキラちゃんとはソニアの言った通り、”キラーキラー”つ
まり、殺人鬼殺しのことだ。俺たちとは関係ない」

「私たちもアウトだと思っただけど……」

人殺しなのは変わらないけど。

こうやって日々幸せに過ごしているのも、本来は許されることじゃ
ない。

でも、罪を忘れるより、覚えていながら前に進む。それが大事だと
思っただ。

だから、私たちはこの絶望的な事件全てのマイナスな責を負って
逃亡生活をしているわけだし。

「うん、ともかく花火だね？ 花火。結局日向くんは来れなかった
のかなあ」

「日向のやつと来たかったのか？」

「え、べ、べべ別にそんなわけないからね？ 日向くんなんてミント
チョコもきのこの山もダメだしマスタードもダメだし私と味覚が正
反対の子供舌なんだよ？ 一緒に来てもキミとみたいに楽しく屋台
を回れなかったよ、きつと。たい焼きのあんこかクリームかでも言い
争いになるぐらいなんだよ！ 粒あんこしあんで口論するくらいな

んだよ！ ないない。ないってば。なんでそんな顔してるの？」

「いや、いきなり早口になったと思っただけな」

「うぐっ、い、いや…… なんでもない」

うさぎくんはものすごく呆れたような顔でため息を吐く。

悪かったね、こんなんです。

「こんなやつに俺は……」

「ん？」

「いや、なんでもないさ。初恋は叶わないと言うからな」

「恋？ なんでそんな飛躍するのさ。私と日向くんは、友達なんだよ？」

「…… そうだな」

なんだか複雑そうな顔をした彼は私から目を逸らして上空を見上げる。

もうすぐ花火の時間だ。

「そういえば、さつき屋台付近で日向と七海を見かけたぞ」

「えっ……」

ま、まあ七海さんだもんね。

日向くんは明らかに彼女のこと好きだし、うん。

「分かりやすいやつめ」

「なんか、今日はやたらとからかってくるね…… 私にかした？」

「いや、昔を思い出しているだけだ」

そういえば昔は兄弟たちで私を虐めようとしてたんだよね。

そんなこともあったなあ。

「…… 思い、出せてるんだよね？」

「ああ、俺は死んだ。だが…… 最近になっていろいろと思い出せるようになった。プログラムのせいかな、そうでないかは分からんがな」

「…… そう、ごめんね」

「なにがだ？ あれは俺の選択だった。置いていかれたなどと思うことはなにがあってもないぞ」

「そっか」

火花が打ち上がる。

オレンジ色の綺麗な火花が夜空に散っていく。

これは希望の火なんだろう。幸いにも、今日は晴れているし、天の川も一応見えている。

環境汚染のせいでかなり薄っすらと…… だけどね。

「粕枝」

「ん？」

隣にいるうさぎクンがこちらを見る。

「…… すまなかつたな」

「んん？」

え、なにが？

えーつと、謝られる心当たりはないんだけど……

「なにそれ、キミが謝罪してくると気持ち悪いんだけど…… はっ、もしかして!？」

「ああ、あのときの……」

うさぎクンが言っているのは…… まさか。

「共用冷蔵庫に入ってたプリン食べたのバレたの!? だからこんな嫌がらせするんだね? ごめんって。前に苗木クンから送られてきたクッキー詰め合わせもネコババしたのも、花村クンの新作ケーキ試食権横取りしたのも謝るからさ!」

「…… ほっ?」

おっとお!?

「最近妙にお菓子類が減っていると思っていたが、お前か。甘いものは苦手じゃなかったか?」

「あはっ、あははは……」

仕事疲れると甘いものが食べたくなくなるよね。

「まあいい、報復は3倍返しだ」

「ホワイトデーじゃないんだから!?! いただきますだだだだ!」
頭をグリグリされて私はもう満身創痍だ。

でも、おかしいな。私は笑っている。

別にドMになったわけじゃない。だって、楽しいから。こんなくだ

らないことでじゃれあえるのが嬉しいのだ。

頭が彼の拳からやつと解放され、笑いながら近くのベンチに腰掛ける。

うさぎクンも同時に隣へ座った。

そう、私の願い事は…… もう叶ってる。

みんな一緒に、幸せに。ハッピーエンドに。

だから、私の短冊に書いてあるのは…… ただの感謝の言葉だ。

今日というこの日に、1年に1度の逢瀬をする織姫様も彦星様も

…… たくさんの願い事を延々と見続けるのはしんどいんじゃないかなあ。

だから、私だけは感謝の言葉を。

1つだけある特異な短冊に目が止まったらいいなあ、なんて。

ロマンチストすぎるかな。

でも、実際願うことなんてもうないんだよね。

唯一あるとすれば、「これからも幸せでありますように」 ってくらいで。

そんなこと、お願いせずとも私たちでしっかり叶えてみせるから短冊に書く必要なんてないのだ。

「うさぎクンも願い事、書いたんだっけ？」

「一応はな。他人の願い事は訊くものではない。言ったら叶わなくなるとも言うからな」

「あは、そう言うってことはキミにも叶えたい願い事がちゃんとあるんだね」

「……」

あるんだ。なら、叶えばいいね。

よし、私は勝手にうさぎクンの願い事が叶うように祈っておこう。

私のお願い事なんて、もうないからね。

「…… 初恋は叶わないからな」

「念押ししちやって、どうしたの？」

「いや、なんでもないな」

そう言った彼は目線を上げる。

7月7日のこの夜に、たくさんの人の願い事が聞き届けられますように。

この幸運が、誰かに分け与えられますように。

「流れ星……」

花火に混じって、流れ星が2つ。

「そういうえば、人が死ぬと星になるって言うよね」

あの2つの星は果たして、誰なのだろう。

そんな夢想をしながら私は舟を漕ぐように彼の肩に寄りかかる。

もう夜時間…… と言つていい時間だ。

「寝ても構わない」

「そっかぁ……」

そのまま目を瞑る。

そういえば帰り道はどうするんだろう？

半分ぼんやりとしながら考えてみたが、それよりも眠気が優つていたようだ。

屋台ではしゃいで、いい感じに食べて、遊びまわって、花火を見て

…… 思っていたよりも疲れていたみたい。

「おやすみい……」

「ああ」

深く、深く意識が沈み込んでいく。

「お前を逃したとき、初めて自覚したことがある…… が、あの俺は死んだのだから、もう関係はないな」

最後に、彼がそう言ったのが聞こえた。

その意味を考える思考なんて、もう…… なにも……

……

……

「おやすみ」

【本編軸】 未来機関をおちよくる話

「どこか拠点になる場所を作ったほうがいいかもしれないな」

始まりは日向クンのその一言だった。

「なにそれチョー格好いいっす！ 悪の組織とか地球防衛軍みたいっす！」

「悪の組織は拠点を複数持つてるのがベターですね！」

「悪の組織でいいんですかソニアさん!? 確かに追われる身ではありませんけど！」

ノリのいいクラスメイトを持つ私も当然賛成側だった。

賛成派多数。加えて、私は私で “ 例の場所 ” を掃除しに戻りたいと思っていたところだったのだ。

ちようどいいのでわいわいと騒ぐ皆の中で手をあげる。

「どうした？ 狛枝」

「思いつく拠点候補があるんだけど、どうかかな？」

私とメイの過去はそろそろ清算する必要がある。いつまでもあの場所を廃墟にしておいたままにいるんけにはいかないのだ。

「私達が昔住んでいた場所…… “ 医療機関最大最悪の事件 ” が起きた病院が廃墟になってるから、そこを綺麗にして使うのはどうかな？」

「廃墟か…… お前はいいのか？ 明海さんも」

「私から言い出してるんだからいいんだよ」

「構いませんわ。むしろ懐かしさで胸が一杯になってしまいそうです」

当然メイも賛成派だ。

困惑している人はいるけれど、反対派も特にいないし、本人がいいならいいんじゃない？ といった雰囲気だ。候補地も特にないし。

…… というわけで私達はかつて生まれ育った場所に戻ってきたわけだ。

「館内地図の他に隠された場所もあるから、メイ」

「はい、お嬢様」

メイの記憶の限りが記された地図を人数分配る。

それから、簡単な注意事項も。

「そこから中刃物も含めていろいろ落ちてるから靴は左右田クン製のやつに変えておいてね。隠された場所は私とメイでなんとかするから、なにかあつたらそつちにまで来てほしい。あとは……」

「えへへへ、えへへへへ……」

「罪木ちゃんは控えめにね……」

かつての大病院ということ、罪木ちゃんが大興奮して我を失っている。包帯とか消毒液とか、わりと貴重な薬品とか持つていってもいいけれど、怪我だけはしないようにねと注意しておく。

…… コンビとして誰かつけたほうがいいのかもわからない。一人で暴走して、どこかで絡まったままになってしまったら困る。

こういうとき小泉さんをつけれればなあ…… そうすると西園寺さんもセツトになっちゃうから、あまりよくない。

悪い子ではないとはいえ、せっかかない気分になってるのに落ち込ませるようなことはさせたくないからね。

いや、私達と一緒に来てもらえばいいのな？ メイ合わせて17人いるから2人1組にはならないし。

はい2人組作って…… うっ、頭が。

「罪木ちゃんは私達と一緒に行くのか、うん」

「はあい、いろいろ教えてくださいねえ」

本当にご機嫌だね。

まあ罪木ちゃんなら私とお仲間だし、もし “アレ” を見ても大丈夫だろう。

あとはうさぎクンの心境だけ……

「気にするな、過去の……」

うん、大丈夫かな？

怪物関係のことや、違法な実験がリークされなかったことから見るに証拠は全て燃やされているだろうし、トラウマが刺激させることも多分少ないだろう。

私達が隠された部屋や通路に行くのも、万が一証拠が残っていた場

合のためだし。

いくらなんでも皆に私そっくりの子供がたくさん浮かんでる場所なんて見せられないからね。ま、あれから十何年間も経ってるし、あったとしてもミイラだろう。見つけたら見つけたで火葬するだけだ。ミイラならよく燃えるかな。

「じゃあ解散!」

「ああ、ある程度終わったらこのホールに集合だ。まずは病室を徹底的に掃除して泊まる場所を確保するぞ」

表の掃除は任せて、私達は奥へ。

「罪木ちゃん、帰り道に薬品を拾っていいから今はちゃんとしてきてね」

「はあい」

「足元にはお気をつけて」

ペアは日向クン&七海さん、十神クン&花村クン、小泉さん&西園寺さん、ソニアさん&瀧田さん、田中クン&左右田クン、九頭龍クン&辺古山さん、終里さん&式大クンだ。左右田クンと田中クンはドンマイ。ソニアさんと田中クンならちゃんと仕事しそうだけど左右田クンのストレスが増えそうだし、あとで揉めたら嫌だからね。ソニアサンドももう少し仲良くすればいいのに……

…… 結論から言えば、問題なく廃墟の掃除や整理整頓は進んだ。

途中からネズミや黒い悪魔、潜んでいたらしい絶望の残党などの駆除作業も平行してやっていたけれど、それにしただって私達の手にかかればすぐだ。

…… 日向クンもいるからね。

それから、表から見たときは廃墟。中に入ると廃墟の姿を模したホテル。そんな様相に様変わりした。ひと月でこれだけできるとは、さすがの超高校級達だ。

船は港じゃなくてももっと隠れやすい場所に潜水させて待機しているから、見つかる可能性も抑えている。

こうして足取りが途絶えたことで未来機関も混乱してくれるだろうか? 案外あそこの追いかけてこも楽しんでる私としては見つ

けられても構わないのだけれど。

一応防犯対策で通路やら部屋やらにおもしろおかしい仕掛けを作ったり、悪ふざけで左右田クンにいろいろ作ってもらったりしてから布陣はバツチリだ。

「おいおいまた海鮮だけか？ 肉を！ オレに肉を分けてくれー！」

「落ち着け終里！ お前さんの気持ちも分かるが今は我慢のときじゃあ」

「おい、俺も我慢しているんだ。隣でぶつくさ言うんじやない」

ちらりと食堂となつている部屋の一角を見る。

そのテーブルには海鮮料理がこれでもかと山盛りになつていた。話している終里さんと、その隣に座っているうさぎクンは積み上がった皿のせいでまるで見えない。

「おいおい、花村の料理だぞ？ オメー、それで満足できないとか逆にすげーよ」

「ぼくも努力はしてるんだけどね…… そろそろ栄養バランス的にもお肉がほしいのは確かだね。終里さんの美味しそうな顔をまた見たいからね」

花村クンはいちいち一言余計だなあ。

「食糧調達はそろそろ出たほうが良いでしょうね。人の目もあります。が、17人分を補うにはあまりにも少ない」

メイも料理するからか、食糧の少なさにちよつと危機感を抱いているみたいだ。船内で育てていた部分もあるが、今は潜水中なので全て収穫してしまった。人工栽培のほうは左右田クンがいろいろやっているから維持できてるはずだけど…… 肉はね。

「私が山にでも行ってこようか？」

「ペコの剣術は動物を狩ってくるためのもんじゃねえよ！」

「しかし……」

「クマ仕留めても誰かさんが食い尽くしちやいそうだもんねー、クスクス」

「あ？ そんなことする奴はどいつだ！ 十神、オメーか!？」

「うわー！ 自分が言われてるって分かってないよー！ もつと魚食

べたほうがいいんじゃないのー?」

遠回しに頭悪いって言われてる…… ? 西園寺さんも相変わらず口悪いな。

私としてはクマを仕留めるのは賛成だけど。白黒のやつじゃなくてもいいからさ、若干溜飲が下がるといいうか…… 本物のクマには悪いけど、あいつのせいでクマは苦手だ。

「物資搬入の問題か…… どうするかな」

「別に日向クンだけで決めなくていいんじゃないの? ねえ、七海さん」

「うん、いくら才能があるからって酷使するのはよくない…… と思うよ。まだ慣れてないでしょ?」

「…… まあ、切り替えは面倒だな」

日向クンはカムクライズルだ。

ただの予備学科であり、どんな才能も網羅した超高校級の希望でもある。そんな2つの情報が彼の中にだけ詰まっている。

カムクライズルでない、日向クンの人格は希望更生プロジェクトによって復活したわけだけど、凡才な ” 日向クン ” と天才な ” カムクライズル ” という両極端な人格が同居できるわけがない。

現在は瞳を見て分かるように半々だけど、意図的に情報処理速度を落として ” 日向クン ” 寄りのスペックにすることもできる。

たとえば多重人格の腐川さんみたいなもので、本来なら存在を知っていても意識の共有はできない。それが彼は共有できてしまうので切り替えが大変なんだと思う。脳の酷使にもほどがある。

そのうち自然にできるようになると思うが、彼があのままでもいいと願うならきつとそのままなんだろうね。カムクラの才能があるのいつまで経っても慣れないのはつまりそういうことだ。

「あ、電話だ。ごめんね」

皆で物資の搬入方法について話し合っているうちに、七海さんが席を立つ。なんだか凜としていて、やはり端末の中にいるアキちゃんとは少しだけ違う。

七海さんは委員長をやったからわりと積極的に人を引っ張る努

力をするが、アキちゃんは必要なときだけちよつとした後押しをする…… といった方法で人を励ます。2人を双子の姉妹として形容するならば、七海さんが姉属性、アキちゃんが妹属性という感じだろうなあ。

「えっ、苗木くん？ うん、うん……」

未来機関の希望様から電話か。

彼女も支部長だから仕事の話かな。いや、今は朝日奈さんが支部長代理になっているはずだから、仕事の指示を仰ぐ電話だとしたら朝日奈さんから電話がかかってくるはずか。なら別の理由だね。

「そろそろグミも無くなりそうだなだけどー」

「え、もう？ 日寄りちゃん、1日1袋までって言ったよね？ それとも誰かにあげたりした？」

「うっ、ち、違うもん！ わたしじゃないもん！ ちゃんとわたしは約束守ってるよ！ どっかの誰かが勝手に取っていつてるんじゃないの!？」

「あ、スマン。そりやオレだわ…… 共有キッチンに置いてあったからもらっちゃった」

「このクズ！ 童貞！ いつもいつもオイル臭いんだよー！」

「うっせうっせ！ そこまで言わなくてもいいじゃねーか！ あとの確に傷つく言葉使うな！ 謝ってんだろ！」

「一言だけとかかかっている謝罪してんじゃないよー！ 事実だし！ おねええー！」

「はいはい、アタシが追加で買ってあげるから泣かないでね」

「びえええええん！ ぐす…… 左右田おにいのバーカ！」

「つぐ、わ、悪かったよ…… 小泉も、あとでオレが買うからいいって」「まったく、キッチンにあったからって勝手に持っていくのはダメだよ。ちゃんと人に聞きなさいよね」

「お、おう……」

後ろで展開される会話はすごく気になるが、電話をしている七海さんがわりと深刻そうな顔をしている。

私は踊っている会議の中、テーブルに頬杖をつきながら聞き耳を立て

てた。席を立っているとはいえ、彼女はわりと近い位置で電話しているからだ。

「えっ、生徒会長が……？」

生徒会長？ どの生徒会長だ？ 村雨早春？ いや、あの人は……
ということとは未来機関にいる元超高校級の生徒会長様か。これはこれは、とうとう七海さんがこちらにすることがバレでもしたかな。
「うん、うん…… 分かった。訊いてみるよ」

電話を切ってから、七海さんが席に戻る。そして、脱線しまくりそれぞれが好き勝手に喋っている皆に向かって柏手を2回打った。

「皆、聞いてほしいんだけど……」

徐々に徐々に会話が収まり、皆が七海さんを見てどうしたの？ という顔をする。小慣れてるね、やっぱり。

「苗木くんからのリークなんだけど、未来機関の人達がここに来るんだって。この病院は柏枝さんと明海さんの生家だよ。だから、絶望の残党が “ 超高校級の絶望 ” の痕跡を求めて溜まり場にしているかもしれないから、調査に入ることになったんだって」

あー…… そうなっちゃったか。

私達にとって超高校級の絶望というのは江ノ島盾子ただ1人のことだけど、残党共にとっては絶望墮ちしていた私達16人もそれに含まれる。

私がおここにいたことはわりと有名だからね…… 拠点にするのは失敗だったかな。

「ごめん、日向くん」

「いや、お前のせいじゃないだろ。あー、どうする？ いったん離れるか？」

「あれ、私が決めていいの？」

「まあ、元とはいえお前の家だしな」

私の意見を尊重してくれる日向クんに感謝の念を送りながら、私は笑みを深める。

「季節は夏…… 廃墟の中は昼間でも暗くて湿っぽい…… あはっ」

まるで口裂け女のような笑みを浮かべてだいぶ悪い顔をしている

だろう。それを見て日向クンは「おい」と言ったが、止められてしまう前に宣言する。

「お化け屋敷作って未来機関を全力でおちよく、追い返そう！」
「つておい！ 今おちよくるつて言いそうになったよな？ 絶対なつたよな!？」

いいツツコミだ。左右田クンはこうでない。

「お化け屋敷……ですか？」

「相手は摩天楼より来たる傑物だぞ。魔犬に手を噛まれるのはわけが違う」

えーっと、田中クンのは……

『未来機関のすごいやつ相手に子供騙しは通用しないんじゃないか…… つてことだと思おうよ』

「ありがとう、アキちゃん」

さすが、翻訳が早い。まあそうなんだけど…… あっちも私達ももう絶望していかないことくらい分かっている。宗方さんたちはあくまで絶望の残党を狩りに来るだけだ。ここに残党がないことを示せば素直に帰らずとも、御用改めしても無駄だという判断くらいはしてくれるだろう。

「お前に振った俺がバカだったよ」

「人選ミスだな。日向、疲れてるのか？」

「おう、あとで酒盛りでもしようや」

「…… ああ」

辺古山さんにさらつと人選ミス扱いされてショックなう。

「そんなに言う？」

「お前は少し普段の行いを見直せ」

「ええ、素敵なことしかしてないよ？ うさぎクンは私のなにを知ってるつていうのさ」

「本気で言っているなら罪木に脳味噌を洗ってもらえ」

「死ぬんだけど。遠回しに死んでも直らないつて言っていない？」

「どうだろうな」

「お手伝いしましょうかあ？」

「介錯してくれるって？ 遠慮しとくよ」

罪木ちゃんの提案は冗談に聞こえないから困る。

「ともかく、いろいろ準備するから皆協力してよね」

盛大にため息を吐かれて解せない気持ちになりながら決定事項を確認する。

「私に任せたのは日向クンだよ？」

「……」

「どうした日向？ 腹減ったのか？」

「違うじやろうなあ」

日向クンを困らせるのがちよつと楽しいだなんて、口が裂けても言えないね。バレバレだろうけれど。

私は埃塗れになりながら掃除を頑張っているというのに、日向クンはいつも七海さんと書類仕事だ。堅苦しいことばかりして精悍な顔立ちをするなんて彼らしくない。

だから精々胃を痛めていればいいんだ。いい気味だよ。

……

「さて、と…… 1日でよくこれだけ準備したよ」

「お前らつてさ、なんでおふぎけにだけ全力なんだよ？」

「楽しいからに決まってるじゃないっすかー！ その点尻っちゃんはよく分かってるよねー」

「ねー、瀧田さんも協力ありがとう」

「クスクス、お化け屋敷にも癒しが必要だから瀧田おねえの歌は有効だよー！ わたしもやることなくて退屈だからせめておねえの歌で癒されたいよねー」

あー、あー、なんとというか、癒しというより嫌死？

瀧田さんの曲が廃墟の一部で流れることになってるので、その周辺だけは近づきたくないとか心に誓う。あれを本気で気に入ってるのは西園寺さんだけだ。

あの曲聴くとブルーラムを飲むよりも効果的に絶望的な気分浸

ることができる。それくらいやばいので未来機関の連中にも効くだろう。

澤田さんのテンションは好きなんだけど……あの人からどうしてこんな暗い曲ができるのか、音楽家って不思議だ。芸術家はどこかトチ狂っているとかいうけど、この場合まさについて感じた。

ちなみに西園寺さんはあまりやることがない。着物だから動きづらিদらうし、未来機関にはやり手が多いので見つかったら終わりだ。

だから精々天井裏で音を鳴らしたりするくらい……ああいや、一応出番はあったな。昔推理漫画で見たやつを再現してもらおうことになったのだ。

田中クンの四天王達に協力してもらっておばけ役を楽しんでもらう予定になっている。

この廃墟は既に左右田クンの手が入り、隠し通路も多い。まさに拠点。私達の秘密基地。正直やり過ぎた。

……と、そろそろ開演だ。

「……こちら狛枝。アキちゃん、監視カメラとマイクは機能してる？」

『こちらアキです。えっと、うん、ちゃんと聞こえてるよ。端末とインカムに送信開始するね。チャンネルを合わせてみて』

言われた通りにトランシーバーをいじる。

端末には監視カメラの映像が、トランシーバーに繋がっているインカムからは現場の音声聞こえてくる。端末でカメラ位置を変えれば音声も自動で切り替わる仕様だ。ちよつとピザ屋でバイトするホラーゲームみたいな印象を受ける。お化け役はこっちだけだ。

「宗方、本当にこんな場所に連中がいるのか？ 別にお前を疑ってるわけじゃないけどよ……」

「情報は正確なはずだ。油断はするなよ」

「ねえ京介、皆で来る必要はなかったんじゃないかしら」
「俺は呼んでないと言っておく」

はいはい、まずは生徒会長様サンドですね。

元生徒会長様はこの前の騒動で手に入れたヒートブレードを装備。あといつもの真っ白なスーツだ。盛大に転んで埃塗れになればいいのに。そして洗濯で汚れが落ちなくて苦労すればいいのに。

逆蔵先輩は自己主張の激しいコートは脱ぎ捨ててTシャツだけだね。廃墟の中とはいえ夏だからあんな暑苦しいコート着てくるわけないか。

腕と手に包帯巻いてるし、普通にボクサーとして殴ってきそう。壁が破られないように補強はしてるけど……大丈夫だよな？ あの馬鹿力壁ぶち抜いたりしないよね？

雪染先生は……未だに絶望中か。そりやそうだ。だって、雪染先生が七海さんをおしおきに突き落としたのは実際にあった事実。今彼女が生きてるとはいえ、先生が江ノ島と戦場さんにいじくりまわされた事実は消えていない。彼女は絶望の夢に囚われたままなのだ。

「接続、日向クン……雪染先生を確認、絶望堕ちしたままだよ」

「そうか、なら手筈通りにしてくれ」

「はいはい」

私達の目的は2つ。未来機関を追い返すこと。そして、矛盾するようだけれど未来機関をできるだけ長く留めて雪染先生の確保、洗脳の解除を行うこと……だ。

「さーて、次は……」

3人の後にやってくるのはこちらも3人。安藤先輩、十六夜先輩、忌村先輩だ。どうやら天願のじじいや他のメンツは来ていないらしい。時間が合わなかったというより、元々生徒会長様サンドだけで来る予定だったのに後の3人がくっついてきてしまったという具合か。面倒な。

「ここにあいっがいるんでしょ？」

「あるあ、狛枝風に所縁のある場所だ。可能性は高い」

「そ、そっか……私達が、た、退学する切っ掛けになったあの子が……」

「げ、いつの間にかバレてる。なんでだ？ 雪染先生に聞いたのかな。」

これは恨まれてるなあ。私はできればま雪染先生確保に動きかけたけど……この分だと囿役をしたほうがいいかも。

「あのあとドチャクソ苦労したんだから……どうしてやろうかな」「見つけてから考えればいい」

「それもそうだね。はい、よいちゃんあーん」

「あーん」

「今日もよろしくね」

「ん、頑張る」

「……」

「なによ、あんたになんかあげないから」

「だ、だから食べたくても食べられないんだってば……わ、分かってるよね？」

「ふーんだ」

あの3人も相変わらず。

薬との食い合わせで死ぬかもしれないっていうのにお菓子を食べないだけで嫌うって、なんだかアレルギーは食べれば治るって信じてる人みたいだね。

こう見ると、安藤先輩も自分の才能に囚われた生徒の1人だ。もつたいない。アレルギーを意識した美味しいお菓子の開発でもすればかなり売れるだろうに。それには絶対に手を出さないんだもんなあ。

「生徒会長様達は奥に、先輩達は監視用の廊下に向かったよ」

「3人共か？」

監視用の廊下でいたずらのため、待機しているうさぎクンから連絡が入る。うーん、3人だと鏡の仕掛けを使うのは厳しいかな。

「ちよつとついてこないでよ！」

「な、なんで……目的は一緒なのに……」

「あいつは流流歌が見つけるの！それで復讐してやるんだから、あんたは邪魔！」

「私だって怒ってるんだよ？なんでそんなこと言うの……」

「元はといえば静子ちゃんがバッグを間違えなきやよかった話じゃん！あんたのせいなんだからあんたも原因の1人だっつーの！」

ああ、うん。多分別行動することになるんだろうな。

「恐らく安藤先輩と十六夜先輩だけそっちに行くよ」

「なら俺と日向でなんとかなるな。了解」

鏡の廊下にある仕掛けはシンプル。長い長い廊下は全てマジックミラーになっており、隠し通路から表側が丸見えだ。そして一番奥、扉の前にある一角だけ鏡に見せかけたガラス板が貼り付けてある。

長いマジックミラーで相手を判断し、ガラス板のところどうさぎクンが詐欺師らしく変装して姿を見せる。

極めつけは…… まあ見てのお楽しみか。

「な、なんでそう頑固なの!?!」

「頑固なのは静子ちゃんだろ!?! 流流歌のお菓子を食べれば全部解決するのに意固地になって!」

「意固地になってるのはど、どっちだと…… ! 薬の副作用があるから死ぬって、何度も言ってるじゃない!」

「薬変えればいい話じゃん!」

「で、できてたらとつくに、とつくにしている! そっちこそ材料変えるとかできることあるでしょ!?! ダメな成分は、分かっているんだから!」

「流流歌の作り方にケチつけるわけ!?! 一番美味しいのを食べてほしただけなのに、なんでそんな我儘言うの!?!」

「我儘なんかじゃ、ないよ!」

ああもう、罪木ちゃんと西園寺さんより酷いんじゃないのこれ。

肝心の十六夜先輩は止めにも入らないし、完全に安藤先輩側で忌村先輩はアウエーだ。

小泉さんが西園寺さんを叱らないで甘やかしたままにしてたらあななるのかもね。

「もういい! ついてくんない!」

「今日ついて来いって言ったのは、ど、どっちだと……!」

「ふんだ、行こう? よいちゃん」

「ああ…… すまない」

「は？ よいちゃんも流流歌が悪いって言うの？」

「いや、そんなことはない。行こう流流歌、もつとおいちいお菓子をくれ」

「そうこなくっちゃ、はいあーん」

「ん」

長い喧嘩だなあ。何年続いているんだか。

カメラを鏡の廊下へ切り替えて観戦モードに入る。

ちよつとだけ確認したけど、宗方さん達は西園寺さんと花村くんがお化け役をする場所に向かっているようだ。面白いものが観れるだろう。

「ターゲット確認。日向には十六夜の方を頼む」

うわ残酷なことするなあ。

うさぎクンから入ったアナウンスを聴きながらそう思う。

ガラス板を液晶画面に変えてアキちゃんがそこに映った人のフリをすることもできるが、今回は現実性をとって日向クンに協力してもらうようだ。

うさぎクンも案外あの喧嘩で思うところがあつたのかもしれない。

あんなに一方的に理不尽な言いがかりを見ると、安藤先輩をいじめたくなってくるよね。分かる分かる。

「なにこーん……」

「鏡張りだな」

長い長い廊下を過ぎ、扉の前で2人が立ち止まる。扉は最後の鏡を見なければ開かない仕掛けになってる…… とうか見たのを確認してから手動で開けることになっているのだ。フリーホラーゲームのように自動的にはなかなかいかない。そもそも条件が達成されたと機械が認識するかどうか分からない。そのプログラミングをするだけでどれだけかかることか…… とても1日だけでは無理だったとだけ言っておこう。現実是非情である。

「は？」

「……」

ガシャン、とガラス板に蜘蛛の巣状のヒビが入る。

十六夜先輩が持っていた短刀の柄で叩き割ったのだ。だけれど、安藤先輩にはさっきの一瞬だけで十分だった。

そう、ガラス板の向こう側で安藤先輩の変装をしていたのはうさぎクンだ。そして、その隣で十六夜先輩の変装を日向クンがしていた。ガラス板の上には某魔法学校の鏡のように “ あなたの未来 ” と書かれたプレートがかかっているのだ。巨漢になった自分を見てしまった安藤先輩のショックと絶望は計り知れない。

青ざめて、目を泳がせて、完全にフリーズしている。そして、ぶつぶつと 「 違う 」 と呟き始める。

そんな彼女を十六夜先輩がお姫様だつこで抱え、ロックが解除された扉をくぐり抜けていく。

趣味が悪いって？ 私達は元超高校級の絶望だ。これくらい軽い。未来機関への嫌がらせには余念がないよ…… 私はね。

メンタルブレイクされて放心状態になった安藤先輩はしばらく使えない物にならないだろう。

十六夜先輩はガラス板の向こう側が気になっていたりみたいだけれど、あんな状態になった彼女を差し置いて調査なんてできないだろうね。なんせ、そういう関係なのだから。

今の安藤先輩は十六夜先輩が調査に行くなんて言ったら見捨てられるのだと思いい込むだろう。そういう面倒臭い人だよ、あの人は。さてさて、次だ。

西園寺さんと花村クンは上手くやれるだろうか。短い距離だから逃げ切れると思いたいけど、あの生徒会長様戦闘系だからな。

隠し通路を静かに移動しながらカメラを切り替える。

天井裏からすごい音が聞こえてくるけれど、一応予定通りなので別にいい。終里さんには自由に上で暴れていいって言うてるからな。

誰もいない上階から足音が聞こえるってホラーで定番だろう。それも濑田さんの音楽も流れてるらしいし。

「おいおい、どうなってやがんだ？」

「…… どうやら揶揄われているようだな」

「お前を相手に？ この奴らはよっぽど死にたいんだな。なあ？」

おっと壁を叩くのはやめてほしいね。この馬鹿力め……

「ねえ、2人共。なにか聞こえない？」

さて、どこからか風鈴の音が響いてくる。手筈通りだ。あとは捕まらないようにうまく逃げてくれよ。

「ああ？ …… なんの音だこれ」

「…… 風鈴、か？」

「これは、由々しき事態ね……」

3人が風鈴の音に気づき、場所に気づく頃には “ それ ” が廊下の曲がり角に滑るように消えていった。

「よく、見えねえな……」

「首なしで着物姿のなにかが2体…… 廊下の奥へ行つたな。行くぞ逆蔵」

「は？ 首なし？」

「ええ、首なしよ」

逆蔵先輩はどうやら見逃したようだ。

廊下の曲がり角に消えていったのは文字通り、首のない着物のお化けだ。手には明かりの灯った提灯と風鈴を持ち、滑るように歩いていった。

その後を3人が追っていく。

さて、私も用意しておかないとね。

3人を壁越しに追いかけてながら薬を染み込ませたハンカチを手に持つ。

チリン、チリンと断続的に続く音を頼りに3人は廊下を走っていく。

けれど、着物を着たなにかの姿すら見えず追いつけない。足音すら立てず、廊下に響くのは風鈴のような涼やかな音だけ。

そして音は廊下の突き当たりの部屋に入るが…… 残念ながらそこにはお化け役はもういない。

私は壁の中から部屋の反対側へ向かいながらスイッチを握りしめ、あちらの様子を見る。

「いねえぞ……？」

「一杯食わされたか。やられたな、早く出るぞ」

「ええ」

そろそろかな？

そう思った瞬間、上階から盛大に壁が吹っ飛ぶ音がした。

ビンゴ。タイミングバツチりだけど嬉しくないね。

「なんだ今の音は」

「安藤達がなんかしたか？」

「え？」

走り出す男性2人に、ついていこうとする先生。

「ネズミ捕り成功」

2人が扉から見えなくなった瞬間、スイッチを押して雪染先生だけが床下に落下する。確保成功だ。

幸い生徒会長様には轟音で気づかれなかった模様。知ってる？

大切な人から決して目を離しちゃいけないんだよ？

それを…… 私達は知っている。

…… 七海さんのときのこと、嫌でも知ってるのだ。

まあ、今回は先生を助けてあげようとしてるんだけどね。

薬を嗅いで意識を失った先生を横たえていると、インカムに大音量でうさぎクンの声が響いた。

「おい！ 今の音はどうした、なにがあつた!？」

「そう慌てなくても大丈夫だよ、うさぎクン。式大クンがトイレ使いたいって言ったから3階の目立たないところをお勧めしてあげただけだから」

「原因はお前か、壁が大破しているぞ？ どうしてくれるんだ」

「えっ、そんなに?」

さすが、学園でしょっちゅう壁を壊してた人は違うなあ。

あれのせいで優秀なマネージャーなのにすつかり「クソじゃあ!」の人扱いだもんな。本科だけじゃなくて予備学科にまでね。不本意なことに、そのせいで親しみやすい人扱いもされていた。

「おい、いくら補強しているとはいえ、上階から崩れ落ちると思わなかったのか? いつもは外を使っているだろう。お前は死にたいの

か？ さてはお前、馬鹿だな？」

「ぐっ……」

ぐうの音も出ないほどにド正論である。

「頭の良い馬鹿というのはこういうことを言うんだぞ、覚えておけよ
狛枝」

「…… うさぎクンの意地悪」

「事実だろうが」

「はい」

本日も反省会の開催が決定された。辛い。自業自得だけれども。

「ちよつと、どうしたの？ 凧ちゃん」

「小泉さん…… ううん、いつもみたいに怒られてただけ」

「あ、ああ、そうなの。ほどほどにね」

「うん」

「先生は寝てる？」

「うん」

雪染先生は悲鳴をあげられたら困るので薬で意識を落としている。

恐らく目覚める頃にはいじくりまわされたあれこれをすっかり治されてはいるはずだ。その辺、日向クンは上手くやってくれる。脳をいじるわけだからそう短い時間では終わらないだろうが。

先生を回収しに来た小泉さんと七海さんに引き渡してトランシーバーを田中クンに繋ぐ。

「ハムスタークンたち上手くやってくれたよ」

「当然だ。これより俺様は破壊神暗黒四天王と肉の宴を開演する。見れば貴様の命はないと思え」

「はいはい、邪魔はしないよ」

先ほどの着物お化け達のネタバラシはこうだ。

西園寺さん、花村クンの身長の低い2人の肩に大量のタオルで力が増して大人の着物を着せる。それだけで首なし着物お化けの完成だ。

そして2人は姿を現して未来機関に気づかれ次第曲がり角のすぐそばにある隠し通路に入り、代わりに通路から出てきた破壊神暗黒四

天王達が行く先々でリレーするようになり部屋へ誘導する。それから壁際にあるねずみ穴から隠し通路へ戻ると。

ハムスター達にはこのために鈴をつけさせてもらった。かなりのストレスになったはずなので、今は田中くんがたくさんご褒美を与えて休憩させているはずだ。この作戦もかなり渋られたので私はしばらく彼のハムスター達にもふもふさせてもらえないだろう。ちよつと悲しい。

西園寺さん達はこのクソ暑いのに協力してもらったので、恐らく雪染先生を運び終えた小泉さん達とお風呂に入ってくるだろうな。

花村クンの監視は九頭龍くんをお願いしておいて、まあゆつくりしてもらおう。

カメラを切り替える。

十六夜先輩が鏡を見るたびにことごとく割って移動している。

そしてたまに鏡の中に無表情でパラパラを踊っているうさぎくんが映り込んでいる。もちろん、安藤先輩の変装をしたままだ。

十六夜先輩の精神もガリガリ削っていつているようであり。

あと、ときおり院内放送を用いて瀧田さんのシャウトが入ったりする。

そして、ほらまた院内放送。

「宗方京介さん、雪染ちささんがお待ちでした」

今度は辺古山さんの声だ。彼女の固い声でこの放送はいつそおぞましさを感ずるね。瀧田さんの曲も流れていることだし。

既に先生がいないことに気づいていた生徒会長様が焦ってヒートブレードを起動したまま走っている。

逆蔵先輩も雪染先生のことには心配なのか、しきりに宗方さんを落着かせようとしている。……イライラして自分自身でも拳を叩きつけたらしてのけれど。

この脳筋共め。

「それに比べて、キミはすごいね」

先輩？ と笑顔で振り返る。

「ほ、本当にいるとは思ってなかったけど…… やつと見つけた」

「忌村先輩、どうやってここまで来たの？」

「や、薬品で、作られたパズルなら…… すぐに解けたよ」

「あれ、罪木ちゃんの自信作だったのになあ……」

隠し通路の中で向かい合う。

そして、私は笑顔のまま彼女に近づいて……

「すみませんでした」

「え、え、へ？」

頭を下げた。

「あのとき、貴女の薬を利用するつもりはなかったんですよ。本当に体調悪くて、薬を使おうと思ってたんですけれど…… 私の運に巻き込んですみませんでした。もう遅いことも、貴女達がどれだけ傷ついたのかも…… 私のせいで貴女達の仲に決定的な亀裂が入ってしまったことも、今の関係を見れば分かります。取り返しのつかないことをしました。許してほしいと言いません。ただ私が謝罪して、満足したかっただけです。謝るかどうかは、決めてなかったんですけど…… 喧嘩をしつつも、それでも、こうして先輩はここまで来た。だから謝ることにしました」

一気に捲し立ててしまうと、忌村先輩は目を白黒させながら私を見つめた。取り出そうとしていた薬瓶は、結局出されることなく懐に仕舞われる。私になにもしなければきつと彼女は薬を口に放り込み、噛み砕いて私を害そうとしただろう。それくらいは読める。

だからこれも卑怯な牽制。痛い思いをしたくないから先手を打つただけに過ぎない。それくらい、彼女も分かっているだろうに。

絶望として動いていた私を知っているのなら、それくらい読めるだろうに。

彼女は手を止めた。

なんてお人好し。

そんなんだからいつまで経っても安藤先輩に利用されるんだ。

「す、すっごく傲慢」

「ええ、存じます」

「でも、私もそう言われちゃうと、な、なにもできなくなっちゃうとい

うか……」

「お人好しですねえ、忌村先輩」

「わ、分かっているんだよ？ でもね、なかなか…… 思うようにはいかないから…… それに、流流歌ちゃんはきつと分かってくれる」

「本当にそう思っているんですか？」

「うん」

そこはどもらないのかよ。

友情っていう甘い甘い関係に、薬関係なしに溺れてそのうち取り返しのつかないことになりそうだね。まったく。

「危害を加えるつもりはないので、お帰りください」

「…… う、うん、そうだね。謝ってもらっちゃったし、そ、それに……」

貴女達は捕まえるわけにはいかないし」

「ヘイト先はまだ必要でしょう？」

「うん、その通りだよ」

目線を逸らされる。

私達が勝手にやっつてることなんだから別に怒りやしないのに。

「それじゃあ、お帰りはあちらです」

隠し通路の一角を指差す。

忌村先輩は素直にそれに従って…… 安藤先輩達のいる通路へ向

かっていった。

「扉はロック…… と」

私のいる道への通路は一方通行だよ、なんてね。

トランシーバーに全員宛にアナウンスが流れる。

雪染先生の洗脳解除はどうやら成功したようだ。

「左右田くん出番だよー」

「おうー！」

「ソニアさん準備よろしくねー」

「はい！ 合点承知のすけですー！」

バッチリ滑るクン3号の出番だ。

あ、いや左右田くんが滑るわけではなく、そういう名前の機械の出番という意味だね。

まずはお化け屋敷にありがちなコンニャクトラップで脳筋を怒らせませす。

「ああっ!? おちよくってんじゃねえぞ!」

「逆蔵、待て!」

そしてすかさずバッチリ滑るクン3号が踏み出した足の先に滑り込みます。

「うおっ!?!」

レモンの強烈な香り漂う石罅がそのまま足をしっかりとキャッチし、廊下の奥まで滑らせます。

「くそっ」

生徒会長様が引つかからないのは想定内だけど、いくら自分が優秀でも側近が脳筋じゃあねえ……

宗方さん追いかける!

逆蔵先輩両足についた石罅型ロボで廊下をスケート!

ソニアさんがカーリングのようによく磨いた廊下を滑りに滑り、グルグル回る螺旋状になった隠し通路へゴー!

そして目を回させながら出口に向かってゴオオオオル! 超エキ

サイティンツ!

これで目を回してないとかすごいなあの人。

生徒会長様は逆蔵先輩を追いかける途中で受け付けの中で眠る先生を発見。回収して出口をくぐる。

「やられっぱなしも癪だが……」

「ん、京介……?」

「大丈夫か」

「なんだか、長くて悪い夢を見てた気がするわ」

「そうか」

「おい宗方! ちょっとこれ外すの手伝ってくれないか!?!」

病院の玄関にはあの人達が中にいる間に設置した横断幕で、おとといきやがれ。って書いてあったりする。うん、馬鹿にしてるね。

宗方さんもよくキレイいな。雪染先生が無事に帰ってきたからか、

それも絶望状態を解除されているのを理解しているからなのか、どちらもかな。

「流流歌、ちよつとだけあんたのためにつくりかた考えてやってもいいよ」

「え!? ど、どうしたの流流歌ちゃん! なにかあったの? 変なこと言われたの?」

「ああもううるさい! 流流歌の気が変わらないうちに早く帰るの! カロリー控えめのお菓子作るんだから!」

「流流歌がいいなら、俺もそれでいい」

「こ、この短時間でなにがあったの……」

あちらも一応解決、かな。

あまり派手に暴れることはできなかつたけれど、これはこれでいいだろう。平和が1番だ。

『こちらアキです。打ち上げするみたいだから引き上げてきてね』
「りよーかい」

食糧問題がまだあるのによくやるよ、まったく。

これだから皆のクラスメイトはやめられないんだ。

「粕枝、打ち上げの前に話があるからな」

「げっ」

「俺からもあるからな、逃げるなよ」

「うえっ」

…… どうやらうさぎクンと日向クンからの説教は逃れようがないみたいだ。これもいつも通りか、本当に平和だなあ。

そんな現実逃避をしながら、私は病院内の後片付けをしに踵を返した。

【育成軸】 中秋の名月2018

罪木ちゃんが看護学校へ研修しに行くことになり、学園の寮よりも近い位置にある私のマンションへしばらくの間住み込むこととなつて最初の1週間が過ぎた。

はじめのうちは罪木ちゃん専用の食器を買ったり、私服を移動したり、あと雪染先生が車で荷物を運んでくれたり……。まるで引越するような勢いの1週間だった。

冗談で「同棲生活だね」なんて言ったら罪木ちゃんは途端に顔を真っ赤にしてしまつてオーバーヒート。反省しつつ宥めて復活するまで結構な時間がかかったりもした。

あんな可愛い罪木ちゃんが見られるだなんて結構役得だね。

罪木ちゃんと私だとそんなに身長が変わらないのもあって生活もしやすいし、毎日オートロックの冷たいマンションに人がいるというのもなんだか暖かくなる。

…… たまにうそつきことうつろちゃんが忍び込みに来ていたりするから、案外あの部屋に帰ると人がいるが。

メイは私の希望により隣の部屋に住んでおり、お世話をしにくるのも朝になつてから。一日中一緒にいるわけではないのだ。

罪木ちゃんにも部屋は他にもいっぱいあることを言ったのだけれど、家賃が払えないとかなんとか色々言つて遠慮しようとするので

「なら私の部屋に泊まれば解決だね！」とごり押しした。

前に2週間ほど研修に行っていたときは遠くて寮に帰るのもやつとという感じで、医者の不養生極まりなかった。最終的に睡眠時間が3時間を切り、授業に出る際も転ぶ頻度が激化するわ、不運に巻き込まれて怪我はするわ、研修先でいじめられて帰ってくるわで散々だったのだ。

もちろん彼女をいじめた相手は探偵依頼して情報を集め、社会的に抹殺した。

最原クンは報復目的での調査に苦言を呈して、霧切さんも殺人事件

専門の探偵だから専門外だったんだよね。

そういえばうちの学園には探偵が2人もいるのに、報復補助のために情報集めするタイプのビジネスライクな探偵はいないよね。

閑話休題。

罪木ちゃんがこうして私の部屋に “ 帰って “ 来るようになって怒涛の1週間が過ぎ去り、そして 「おかえり」 と 「ただいま」 が当たり前になるのにそうかからず日が経ったある日、うろつき姉さんからの提案があった。

「お月見パーティーしよう？ 私もちゃんとお酒持ってくからさ。バイクはいつものところに置くから泊まらせてね？ あ、あとうろちゃんも連れてくから」

ガチャ切りである。

姉さんの提案はいつも唐突だ。そしていつも拒否権はない。

急いで洗濯物や洗い物を片付けて罪木ちゃんにメールをする。罪木ちゃんは最近研修が忙しいようで帰りが遅くなっているから、うろちゃんや姉さんたちが来ることを事前に伝えておかないといけない。

“ 了解ですう。あ、なら私もお菓子買っていきますねえ “

うーん、お菓子か。ならお饅頭でも買ってきてもらおうかなあ。うろつきこと織月姉さんはお月見って言っていたことだし。

リクエストはお饅頭で、と。

おっと、チャイムが鳴った。もう来たのか、早いなあ。

念のためインターフォン越しに顔を確認して玄関の鍵を開ける。

隣にはメイも既に待機していて、大量のお酒を持った姉さんの荷物を半分受け取っている。

別の買い物袋も下げているのでおつまみも作ってくれるんだろう。さすがは私の自慢のメイド。大好き。口には出さないけれど。

「こんばんは。いらっしやい、入って」

「こんばんは」

「ばんわー」

「こんばんは、お嬢様」

私たちでテーブルを退けたり、真ん中にスペースを作っている間にメイには料理のリクエスト。キツチンは使い慣れているだろうからなんにも言わずとも彼女ならやってくれる。

「すごいお酒の量だね…… さては明日も泊まるつもりだね？」

「連休なんだからいいんじゃない、ね？」

この量は彼女とメイだけで今夜中に飲み切れるものではない。これだと私たちが飲まされても確実に余るし、明日も飲むことになるんだろう。2人はバイクで2人乗りして来ているから、つまり明日も飲酒運転しない限りは帰れないわけだ。

「うつろちゃんはいいの？」

「実は無理矢理連れて来られて…… あ、明日は大切な試験があるんだぞ。ふざけるなよろろつき……」

「へ？ 嘘だよ。自分で暇って言ってたじゃない」

「嘘だよ。でも無理矢理連れて来たのは事実だろ」

ちよつとした口論が起こっている間にいい時間になる。

カーテンを全開にして上を見上げればよく晴れてまん丸のお月様が見えていた。

「ほらほら、お月見なんですよ？ 月を見ろ月を」

「あー、それね。風ちゃんの家に泊まるための言い訳だから」

…… そんなことだろうとは思ってたよ。

「花より団子…… いや月より団子か？」

「月よりお酒じゃない？」

「月よりおつまみ、も追加していただきたいですわね」

「お、できたの？」

「ええ」

まずはサーモンチーズフライのご登場だ。これは取り合いになるね。

「たくさんありますから、どんどん食べてくださいね。罪木さんの分はきちんと私が取っておいてありますわ」

「オツケー！ なら遠慮なく行こう」

「一個も食べられないなんて冗談にならねーな」

「殺気立ちすぎじゃない?」

私は自分の分を気にすることがない。

なぜなら……

「とりやあつ」

「これは私のだよー」

カツンと皿に箸が当たり、サーモンチーズフライが一個宙を舞う。こちらに向かってくるそれを私は口でキャッチしながらサムズアップ。

「ふふふ、幸運にもサーモンチーズフライは私のお腹に収まることを選んだみたいだね」

「まじか……」

「あちゃー」

「キミたちが喧嘩するたび、私のお腹は満たされていくのさ……なんてね」

実際こういう場面はよくある。

だから私は自分の分を確保していなくとも幸運が味方をして食いつぶされるようなことがない。

行儀が悪いからあんまり多用することはないけれど。

こんな小さな幸運でもあとで指を扉で挟むような、些細な不運が来るから困ったものだ。

「ちやーんとジュースも買ってきてるからうつろちゃんもどう? アルコールは入ってないよ?」

「嘘を吐くな嘘を、って無理矢理は良くないって!」

「メイはどうする?」

「私はお片付けもありますから、皆さんが就寝してから…… になりますね」

ああ、まあそうなるよね。私も無理矢理酔い潰されない限りは片付け要因かなあ。罪木ちゃんの帰りも待たないといけないし。

「やめろおとおお」

「はい、飲んで飲んでー」

1 番年下の未成年が被害に遭っているが、私はなにも見ていないな

あ。

「風いいいいい！」

見ないふり見ないふり。

ちみちみとおつまみを食べながらそれから数時間後、窓の向こうの月が上まで登り、ああこれ屋上から見たらものすごく綺麗なんだろうなあなんて感想を浮かべ始めた頃…… 玄関の鍵が開く音がした。

合鍵を渡している相手はメイと罪木ちゃんの2人だけなので、メイがこの場にいる今可能性があるのは罪木ちゃんだけだ。

「おかえりなさい」

とつくに酔い潰されてテーブルに沈んでいるうつろちゃんを避け、ぱたぱたとスリッパの音を響かせて玄関へ。結構夜遅くになってしまったようだから、暖かい飲み物も用意しないとな。

最近猛暑も鳴りを潜めて涼しくなっている。ちよつと寒暖差が激しすぎる気もするが、暑苦しいよりはずっといい。

罪木ちゃんを暖か抱き枕にする言い訳も、寒い季節となればなくなるのだからやはり役得だね。

女でも可愛い子は目の保養だし癒しだもの。

「あ、あのお…… ただいま、帰りましたあ」

「うんうんおかえり。外は寒くない？ まだ涼しくくらい？」

「は、はい…… えつと、結構過ごしやすい気候だと思いますよお」

「ココアを用意していますよ、いかがですか？ 罪木さん」

「は、はい、えへへ…… いただきますねえ」

罪木ちゃんは荷物を置いて笑顔を浮かべると両手でカップを受け取った。彼女は暖かくて甘いココアをふーふーしながら飲んで一息つく。

看護学校の研修がどんなものか私には分からないが、神経を使うような仕事なのだろう。彼女の毎日の様子を見てみるとそんな感じがする。それとも、この気疲れした顔は人間関係が原因だろうか。

いじめられてない？ 大丈夫？ うーん、このモンペ思考。本人が相談してくるか、よっほどのことがない限り余計なことはするつもりないけどさ。

「うーん？ 凧ちゃん今何時い？」

「わっ、姉さんちよつと」

背後から酔っ払いに抱きつかれてバランスを崩しそうになる。

少し眠そうだ。彼女の後ろにある空いた酒瓶たちを見ればこうなるのも分かるが、むしろこんな飲まない眠くさえならない織月姉さんもすごいと思う。

「もう深夜12時だよ」

「あー、もう0時かあ。アキラに会いに行かないとお……」

言うと同時に姉さんの頭がガクンともたれかかってくる。

さすがうろつき。有言実行なうえに寝つきが早い。ゲーム通り羊を数えておやすみ3秒だ。

ところで、寝ている間にも夢の中で探索したり人と会うとすると睡眠した実感はあるのだろうか。昼間も眠くなりそう……

私自身は基本的に夢の中で死んで目覚めるときと、そもそも夢を見ないときの2種類があるから睡眠の実感は一応ある。私が睡眠不足になるのは単純に寝てる時間が少ないからだね。

「罪木さん、お腹は空いていませんか？」

「えっと、えっと、少しだけ……」

「なら今のうちに食べちゃいなよ。2人が起きないうちにね」

「温め直して参ります」

炭酸飲料を嗜みつつ罪木ちゃんの食事が終わるのを待つ。

窓の向こうの月はいまだに煌々と照っていて、とても綺麗だ。

こんな日に贈り物をされたりするととてもいい。とてもいいと思うから、実はちよつとしたプレゼントが用意してあったりするんだよね。

部屋着で肌寒いならいつものパーカーを着ればいいし、なんなら罪木ちゃんに貸せばいいし……せつかくのお月見なんだから直接見に行きたいよね。

「罪木ちゃん、屋上で月見しない？」

「いいですねえ」

「それではこれを」

メイが相談する私たちの間に置いたのは美味しそうな月見団子だ。
用意周到なこと……

「メイは行かなくていいの?」

「このかたたちならなれないとは思いますが、部屋を荒らされてしまうと困りますからね。それに、お片付けもありますので」

もしかして気を遣ってくれたのかな?

「いつもありがと、お姉ちゃん」

「毎日おそばにいますから、たまにはお譲りしないといけないでしょう?」

「言うねー。姉の余裕かな?」

「さ、最近はずっとそばにいますよ……」

「うん、そうだね。もつと一緒にいてもいいんだからね罪木ちゃん」

「えへへ……」

照れてる顔が可愛いよねえ。

私の取り合いかな? 姉と友達で? それはそれで…… ハーレム主人公ってこんな感じなのかなあ。罪木ちゃんみたいな子がたくさんいたら過労死しそうかも…… でも、いくら彼女に似ている子がたくさんいても、きつと私なら見つけることができるよね。罪木ちゃんを。

ほら、どつかの名前を取られちゃう国民的映画みたいにさ。

やっぱ彼女が1番だね、うん。

「それじゃあ、よろしくね。メイ」

「承知致しました」

罪木ちゃんと手を繋ぎ、もう片方に月見団子と飲み物の入った袋を持つ。そしてマンションの屋上へ。

本来なら屋上の扉は鍵がかかっているのだが、このだけは合鍵をわざわざ作ってある。景色がいいからちよくちよく遊びに来るのだ。ピッキングを覚えることも考えたけれど、あんまりうまくいかないし、時間がかかるから非効率だと勝手に鍵を作る方法に出た。

王馬クンに教わりに行っても、のらりくらりと躲されてお金を巻き上げられるだけな気がするし、そもそも彼は人にものを教えるってこ

とをしてくれないだろう。そんな想像もできないことだしね。

扉を開ければふわりと外の冷えた空気が入り込んでくる。

それが彼女の髪を少し揺らし、私たちの間を通り抜けていく。

「あ、ほら、すっごく近くに見える」

「…… あ、はい。そうですね……」

少しの間ぼうっとしていた罪木ちゃんはすぐに前を向いて月を視界に収める。

私も手をかざして月を見る。高い高いマンションの屋上だから今にも届きそうなくらい月が近い。王馬くんならどんな嘘を吐くかな？ 月が落ちてきちゃうよ！ とかかな？ ちよつとロマンチックすぎるか。いや、それとも世界の滅亡的な意味で？

どちらにせよ今のシチュエーションには合わないな。

「お団子食べようか」

「美味しそうですう」

「多分タレも自家製だね。さっすが私のメイ」

「ふふ、ちよつと嫉妬しちゃいますねえ。私にもお料理できるでしょうかあ」

「キミの料理ならきつと美味しいと思うよ？ ほら、好きな人からの料理ってそれだけで心がこもってるから」

「ふゆう……」

「ただ、キッチンで転ぶのは危ないから、そこだけ心配かなあ」

“好きな人からの” “なんて言葉はもちろんわざとだ。そわそわする彼女に気づかないフリをして話を続ける。

まったく、思った通りの反応で実に可愛らしい。これだから罪木ちゃんと話すのはやめられないんだ。姉を薬漬けにしたヤンデレさんとはとても思えない初心な反応だ。いや、だからこそこういうのに慣れていないって言えるのだろうか。

「あ、あのあの……」

「うん？ どうしたの？」

「……」

罪木ちゃんは少し目を泳がせて人差し指同士でちよいちよいと恥

ずかしそうに合わせたあと、私服のポケットに手を入れる。

それからまっすぐとこちらを見て、今度は目を泳がせずに告げる。

「す、すす、少し肌寒いですnee」

「…… そうだねえ」

ふむ？ 確かに夜の屋上は少しばかり肌寒い。

でもこれを言うためだけに緊張するなんてことはないはずだ。

とりあえず私は、彼女にもかかるようにいつものパーカーを広げ、しっかりと自分含めて被せる。隣同士に座ってパーカーを被せているのでさつきよりもずつと近い位置に彼女の頭がある。

まあ、王道だね。お姫様はこれをお望みかな？

「あ、え、えつと、えつと、ありがとうございませう…… えつと、その、これ、狛枝さんに似合うと思って、買ってきたんですけどお……」
彼女が先程からポケットに手を入れていたのは寒くてではなかったか。

渡されたのは透明な石…… 恐らく水晶と、翡翠かな？ が2つ並べられてくつついたシンプルなブレスレットと、ネクタイピンだ。

ブレスレットにいたってはかなり高価なものだろう。両方とも本物を使っているようだ。ネクタイピンも恐らく、それ相応の値段はするだろう。

「これ、私に？」

「はい！ その、いつも狛枝さんがしているみたいに…… したくて

…… あ、あの、いらなら捨てて構いませんからあー！」

私はその言葉に思わず笑って、受け取った。

「まさか、そんなことするわけないでしょ。ありがとう」

「ふゆう……」

さてよ？ いつも私がしているように……？ いや、まだ推理するような段階じゃないか……？

「それと…… あの、今日は、月も綺麗ですけどお…… 星がとても綺麗ですねえ……」

「…… あは、そうですねえ。ねえ、すごく静かだね。こんな深夜だからかなあ。それに、とても寒いね？」

「ふえっ!？」

そう言っただけの手を取り、もたれかかる。

ふふふ、なるほどなるほど？罪木ちゃんの思惑が分かってきたぞ。

「肌寒い」は手を繋いでくださいの暗喩だつて聞いたことがある。それに、「星が綺麗」「月が綺麗ですね」と同じように「

あなたは私の想いを知らないでしょう」「なんて意味のある言葉だ。

ブレスレットをプレゼントする意味は「独占欲」

そしてネクタイピンは「あなたは私のもの」「もしくは」「あなたを見守っている」だ。まったくやってくれるね。いつもならそれをするのは私のほうなだけだなあ。

対して私が投げかけた「静かだね」「は」「あなたの声をもつと聞かせてほしい」という意味で、「とても寒い」「は」「あなたを抱きしめたい」だ。ちゃんと応えてあげているのだから、素直に受け取ってね。

やっぱり事前にいろいろ調べたのか、彼女は私の言うこと言うことに顔を真っ赤にして慌てている。

私に言葉遊びを仕掛けるなんていけない子だね。でも直球勝負も彼女らしくない。だからこれが精一杯の気持ちの表し方なんだろう。

このヤンデレさんめ。ぞつとしないや。

「実は私からもキミにプレゼントがあるんだよね」

そう言っただけで用意していた小箱を開ける。

指輪？そんなわけないじゃないか。恋人じゃあるまいし。

「あ、ありがとうございます……えへへ、いつものお返しにと思っただけなんですけどお、意味がなくなっちゃいましたねえ」

「プレゼントし合うだなんて、それこそいつも通りじゃない」

「それもそうでしたあ」

彼女に渡すのは小さな蹄鉄が先に付いたネックレスだ。

蹄鉄の釘を打つ穴には本物のエメラルドがはまっている。金持ちを舐めてはいけない。相当高かったが、このマンションをワンフロア買っている私に買えないものなんてないのだ。なくなってもそのう

ち幸運で補完されてしまうので使えるものは使わないとね。

「キミからもらったこのブレスレットのやつもそうだけど、エメラルド…… 翡翠にはドクターストーンなんて別名があるんだよね。古代では治癒を司る石として認識されてたとかなんか……」

ほら、アニメや漫画でエメラルドが魔法の媒介に使われることが多いだろう？ それにはきつとこういう背景もあるからなんだらう。

「ドクターストーンなんてさ、キミにぴったりだよ。誕生石がぴったりだなんて運がいいよ。私が保証する。ね？ …… それに、エメラルドは福も呼び込むらしいからさ」

私から、罪木ちゃんへの細やかな気持ちだ。

「超高校級の幸運が幸運を呼ぶお守りを人にあげるなんて激レアだよ？ まあ、罪木ちゃんにしかあげようとは思わないけどさ……」

まてよ、ちよつと恥ずかしくなってきた。

一人で舞い上がってないか？ さつきから罪木ちゃんの返答がないぞ？

「ほ、ほら、キミ怪我ばかりだし…… 心配だからさ」

おいおい、なにを言い訳しているんだ。

恥ずかしくて逸らしていた目線を彼女に戻してみれば、その瞳からポロポロと涙を零していた。

「え？ あ、え？」

も、もしかして嫌だった!?

「怪我ばかりなのはあ、粕枝さんもしやないですかあ」

涙を流しながらふにやりと笑う彼女にひとまず安心する。嫌がられていたわけではない。良かった。無駄に心配してしまった。

「それは…… ほら、キミが必ず治してくれるでしょ？」

「…… そういうところですよ」

「え？」

「いいえ、当たり前ですよ。なにがあっても、あなたは必ず私が治します」

「うんうん、頼もしいね」

それからもしばらく言葉遊びを交えつつ話して、そして食べるもの

も、飲むものもなくなった頃。すう、と隣で寝息が聞こえ始めた。

「ん…… 帰らないと、冷えちゃう…… けど」

絡めている手が暖かい。隣にいる人の体温が暖かい。

このままでは風邪をひいてしまうかもしれない。でも、それはそれで2人で風邪ひいて、笑って、馬鹿だねだなんて笑い会えるかも……

あ、だめだ。眠い……

遠くで、扉の開く音が聞こえる。

私は2人分の足音が近づいてくるのを耳にしながろうとうとと微睡み、そして意識が落ちる。

あの規則正しい足音は、メイ…… のはずだ。

だから、大丈夫。

「あらあら、お風邪をひいてしまいます」

「まったく、私の後輩たちは仕方ない子だね。でも、いい寝顔だよ」

「幸せそうでなによりですわ」

「イチヤイチヤしちやってさ、見せつけてくれるよね」

「貴女は夢の中で恋人に会っているでしょう」

「メイドさんも羨ましいのなら贈り物でもしたら？ あ、それとも贈り物されるのを待ってるのか？」

「いいえ、贈り物なんていりませんわ。そんなことに意味を隠さなくとも、最初から私はこの子のモノですから」

「あー、それは良かった」

「その無理矢理訳した洋画の主人公みたいな反応はいつたいなんですか」

「いやー、ノンブレスで詰め寄ってくるのやめて、ねえやめて」

幸せそうな寝顔の2人と、仲よさそうに口喧嘩をする保護者2人、そしてなにも知らず酒によってノックアウトされた不憫な嘘つきた

ちの夜は更けていく。
美しい月夜に、美しい友情を。

【育成軸?】 体育の日

私はエレベーターが嫌いだ。

今生に生まれ直し、医療機関最大最悪の事件が起こり、そして黄桜先生にスカウトされて希望ヶ峰学園に入学した。

そのいずれかの時点で苦手意識が植え付けられたのかは分からない。

確かに小さい頃の記憶は鮮明だ。それに、希望ヶ峰学園にスカウトされたのも……

しかし、いつエレベーターなどの閉所や圧迫感のある場所が苦手になったのかはさっぱり分からない。

元から死に方のせいで圧迫感のあるものは大嫌いだったけれど、学園に入学してしばらくしてからはもっと嫌いになってしまっていた。

だから、エレベーターが嫌いだ。何度も聞き覚えのあるはずのあの駆動音がいつからか嫌悪感の湧く不快な音になって、あの狭苦しい空間に押し潰されてしまいそうで、あの一瞬の浮遊感がまるで地獄に堕ちていくようで。

……ただ、私の部屋はマンションの最上階だ。

エレベーターを使わないわけにはいかず、いつもメイについてきてもらっている。彼女がいないときも、誰かと必ず。

1人であるの空間にいると、まるでこのまま地獄へ連れて行かれるように、どうしようもない恐怖に襲われるのだ。

まるで、そうまるでこの幸せな日常が壊れてしまいそうだと思うて。

幸せな夢が、終わってしまうようで。

そしてふわふわとした頭で夢を見る。

ゴウン、ゴウンと大袈裟な駆動音を響かせるエレベーター。

とても広いエレベーター。クラスメイト全員が乗っても、まだスペースがありそうな、工業用のような大型エレベーター。

そこに私は1人だけ。

——「私の勝ちだ！」

同じ顔をした幻想が言う。青白い顔。なにかを恐れながら、それでも無理矢理唇の端を釣り上げ哄笑する。私。のような誰か。

あれは誰、あれは私。違う、違う。あれは幻想。私の現実は幸せな学園生活を送るこちら。こちらが現実、そう、こちらが現実なのだ。

“私 “は “わたし “なのである。

胡蝶は飛び続ける。優雅に、優雅に、幸せな思い出を追いかけて。

違う。

違う。

違う。

違う。

“私 “は、胡蝶などではない。

ひらひらと飛ぶ白色の蝶々が蜘蛛の巣に引っかかる。そして巨大な蜘蛛に頭から押し潰され——

「…… はあ」

…… 眠るたびに、嫌な夢ばかり見る。

だからこんな朝早くに起きるのは嫌なんだ。

乱れた息を整える。頭蓋骨から足元まで直に貫くような衝撃、一瞬で刈り取られる意識。耳の奥で響く骨が碎ける音と、轟音。

そんなものはまやかし。幻想。現実じゃない。夢だ。

早く支度をしないと…… まずはお弁当作りからだ。

急激に体温が下がったような感覚を引きずりながら、キッチンに立つ。なにを作ろう？メイも作ってくれているけれど、私も少しは用意しなければ。

なにせ、今日は体育祭なのだから。

…… と言っても、運動会みたいに保護者の見る屋外の催しではない。

我らが誇る希望ヶ峰学園の体育祭はスポーツテストにも近く、クラス同士の交流を図るといふ目的がある。

だからチームが明確に白黒決まっているわけではなく、個々のスポーツによりチーム構成は異なるし、団体競技では別クラスの人間と

組んでも良いようになっていた。

クラスメイトと挨拶しながら校庭に並び、全員で開会式。からのラジオ体操。午前は校庭での団体競技が多く、リレーだったり二人三脚だったり、様々だ。私が参加するのは借り物競走だけなので、他の時間は皆の活躍を応援した。

私も出た借り物競走では “ 大切な人 ” というなんとも解釈の広いお題を引いた。

一瞬、そう、ほんの少しだけここにはいない友人の顔が浮かんだが、私は迷いなくメイの元へ向かう。大切といえば大切な友達だけれど、本科の催しに予備学科が参加できるわけがないので、当然観戦しに来てもいない。

あちらとこちらでは時間割が違うので今頃は普通に授業だろう。

もしかしたら授業が午前で終わり……なんてことはあるかもしれないけれど。

少し不満があるとすれば…… この体育祭にモノクマの邪魔が所々入るところかな。

さつきは球技用のゴムボールやらをなんでもかんでも千本ノックしていた。被害にあった桑田くんが可哀想だけれど、実際におしおきされたわけでもないし、そういう経験をしてるわけでもなし。多少怯えていたような気もしたが、それも最初だけだ。

普通に痛がって、普通に怒る。ただそれだけでモノクマは去っていった。

あと私はやることもなくなつたので観戦をいったんやめて、保健室に行くことにした。

もうすぐお昼だからね。罪木ちゃんと一緒に食べるつもりなので、あとでメイにも来るように言つてある。

メイと一緒に来ないのか？

メイと同じようで少し違う才能を持つ東条さんがリレーに出るのだ。メイド仲間だからか彼女と、あと辺古山さんとあの子は仲が良い。別に交友関係を縛るつもりはないし、メイには好きなタイミングでこちらに来てもらうってことでいい。なんなら向こうの仲の良い

クラスメイトとご飯を食べてしまってもいい。お弁当は重箱じゃない。ちゃんと分けて入れてくれたから別々でも問題はない。

「罪木ちゃんいるー?」

「は、はいここにい！怪我人ですか、病人ですか？それとも急患でしようかあ……！」

そ、そんなに緊張しなくても……

「どれでもないよ。もうすぐお昼だから一緒に食べようと思って」

「わあ、ありがとうございます……でも、あまりおしゃべりはできないんです……おやすみしているかたがいるので」

「ん、小声で会話すればいいよね。誰が来てるの？熱中症……はないか。もう涼しいし」

「激しい運動で疲れてしまったみたいです。王馬さんですよ」
「えっ」

それ、仮病なんじゃないの？なんて言葉が真っ先に思い浮かんで慌てて飲み込む。

もしかしたら本当に具合が悪いのかもしれないし……よし、偏見は良くないな。罪木ちゃんの目は確かなのだ。王馬くんは信じなくても罪木ちゃんの言葉は信じるぞ。

どちらにせよもうすぐお昼休みなのだ。今更校庭に向かわせることに成功しても、彼が参加するはずだった競技はとっくに終わっていると思う。

カーテンが引かれた衝立のひとつから目を逸らし、気にしないようにしながら罪木ちゃんの方へ顔を向ける。

「競技の進行はほとんどタイムテーブル通りに進んでるけど、妨害ばっかりで皆の気力が落ち込んでるね。モノクマも迷惑なことをするよ」

「そうですねえ……怪我人が出ていないのが幸いです」

競技結果などの軽い会話をしているうちにチャイムが鳴り、お昼休みを迎える。

そうして始まるのはお弁当談義だ。

「罪木ちゃんのやつはいつも健康的そうだね。やっぱり気を使って

るのかな。お弁当箱も小さいし…… 味つけはどのくらい？」

「皆さんにとつては薄味かもしれないですねえ。その、あまり多くは入らないので……」

本当に？ かなり小さめの弁当箱だけど…… これでちよūdいのか。それでその胸になるのか…… そして適度にふくよかで健康的な体が出来るのか…… ごくり、と喉を鳴らす。

すると罪木ちゃんは震え上がり、慌てたように腕で胸を隠す。

「私みたいな貧相なやつは視界にも入れられないくらいブスなんですよお…… 見ないで、見ないでくださあい！」

「おつとごめん、つい。ていうか罪木ちゃん、全国の貧乳に喧嘩売ってない？」

「売ってないですう…… わ、私が悪いんですよね、ごめんなさい！」

「ああ、いや、いじめるつもりはないからね。ちよつと妬ましくなっただけで。ごめん」

胸なんて重いだけでわりと邪魔なこともあるからね。

…… うん、私も喧嘩売ってるなこれは。うそちゃんに怒られた過去を忘れてはいけない。反省反省。女同士でも見る分にはやつぱりあるのは羨ましいし、目の保養なのだよ。

そうやって雑談していると、唐突に保健室の扉が開かれる。

「あ、最原さん。どうしましたかあ？ お怪我ですか？ 具合が悪くなったんですか？ それとも王馬さんを迎えに来たんですかあ？」

「ううん、どれでもないよ。モノクマを探して…… 目撃者を追ってきたらここに着いたんだよ。…… って、王馬くん来てるの？ どうりで競技に出てこないわけだよ……」

「モノクマが？」

私がいるときには来なかったけれど……

「罪木ちゃん、モノクマって来てたの？」

「いいえ、見てないですう……」

常にここにいたはずの罪木ちゃんが見ていない？

モノクマがここに向かっていたのを目撃されているということは、

「ここか、もしくははこの先のどこかの教室に行っただか……　もしくは、罪木さん、トイレって行った？」

「え？　ええええ？？」

最原クンが大事なことを抜いて言うものだから罪木ちゃんは大混乱だ。そんなんだから王馬クンや人間さんに童貞扱いされるんだよ、キミ。

「罪木ちゃんが見ていないときにモノクマがここに隠れた可能性があるってことだよな？」

「あ、うん……　それだよ。ごめん」

「慌てなくても、私がここに来てから誰も出て行ってないのは確認しているよ。だから、ここを探して本当にいなかったらこの先のどこかにいるってことになるね」

そう言つて、私は目線をチラリと衝立に向ける。

衝立が隠すベッドは “ 2つ ” あるのだ。そのどちらかに王馬クンがいて、もう1つにモノクマがいるのだとしたら？

「罪木ちゃん、ベッドで寝てるのって王馬クンだけのはずだよな？」

「は、はい……　あの、その前は西園寺さんが来ていて……　いろいろあつて少しの間留まっていたんですけどお……」

「今は使つてない。そうだね？」

「はい……」

罪木ちゃんも緊張している。そこにいるのがモノクマかもしれないと分かったからだ。でも、そこまで緊張するものなんだか違和感がある。この学園ではモノクマなんてちよつと趣味の悪いヌイグルミ程度の扱いなのに。

「もー、人が寝てるときになに騒がしくして……　って最原ちゃんだ。それにもうお昼か」

「……　王馬クン、具合が悪かつたんじゃないの？　大丈夫？」

「あー、あれ？　うんうん、良くなった良くなったよ。罪木ちゃんが熱烈な看病をしてくれたからかもね！」

「わ、私、寝てるから放つておいてって言われたんですけどお……」

「うん、嘘だよ！」

王馬クンが起きてきてベッドは残り1つ。

最原クンとアイコンタクトして私がベッドの前にある衝立をどこか
そうと手を伸ばし……

「え」

僅かな衝撃と、音。

目の前に迫る衝立に、なぜかどうしようもないほどの恐怖が「蘇り
”手を伸ばした状態のまま静止した。

—— 怖くなんて、ない。

そんなの嘘だ。自分についた嘘。精一杯の虚勢を表に出して迎え
入れる。最後の最期には顔を恐怖に染めあげられて。それでも笑顔
は崩さずに、そのまま押し潰される。皆には余裕そうに見えるよう
に。狂気染みて見えるよう、苦手なりに精一杯吐き出すたつたひとつ
の、嘘。

視界いっぱい広がる黒、黒、黒、そして黒から赤に。

“フラッシュバック” するようにチラチラ映るそれから目を
逸らすことができない。

目を、逸らせない。

「モノクマ、待てー」

「もう、しょうがないなあー」

最原クンの怒声で我に帰る。

そうして気がつけば、私は羽織ったパーカーの襟元を掴まれ、尻餅
をついた状態になっていた。

目の前でガシャン、と衝立が床と衝突して出した音がする。

冷や汗が止まらない。目が泳ぐ。

心臓が悲鳴をあげるように縮こまって、死んでたまるかと全身に血
液が循環する。息が荒い。酸素ばかり吸って吸って吸って、吐き出す
ことを忘れてしまったかのように喉が引き攣る。

「粕枝さん、落ち着いてください。落ち着いて…… ふゆう、精神的
ショック状態…… でしょうかあ…… と、とにかくゆっくり呼吸し
ましょう。はい、口をこれにつけてくださいねえ。袋を膨らますよう
に息を吐き出して…… はい、そうですね。えへへ、よくできました」

袋という分かりやすい視覚から入ってくる情報で、吸いすぎないように、吐き出しすぎないようにと調整して、ようやく呼吸が正常に戻る。

「ご、ごめん。あは、なんでだろ……　なんでこんなに……」

「粕枝さん、なにかが迫ってくるような……　そんなトラウマになるような経験はありますかあ？」

「ごめん、ごめん……　覚えはないよ」

前世以外には。

でも、あれだつてきどき夢に見るくらいで克服していたのに。

こんなになるほどのトラウマなんて……　そう、それこそ悪夢くらいしか。

けれど、悪夢だつてなんらかの情報ありきで見えるものだしなあ。つまり、原因は他にあるということだ。

「クマー！　ボクを縛るなんて校則違反だぞー！」

「そんな校則はないよ。粕枝さん、大丈夫だった？　ごめんね、僕はこつちに夢中で助けられなくて……」

「ううん、大丈夫。それよりモノクマを捕まえて午後の体育祭を健やかに過ごすほうが大事だよ。お手柄だね最原くん」

「粕枝ちゃんは助けてあげたんだからオレに感謝してよねー」

「うん、ありがとう悪友」

「貸し1つってことにしといたげるから、あとでがっぽり利子をつけて返してもらおうね？」

「……　利子はちよつと勘弁してほしいかな」

落ち着いていてきた。

まったく、本当になんなんだよ。わけが分からない。

「最原くん！」

モノクマを拘束したまま抱きかかえている彼が振り返ると、そこには息を切らす赤松さんがいた。

「よかった、捕まえたんだね！　これで午後は安心かあ……」

「うん、これでみんな気兼ねなく競技に集中できると思うよ」

完全に落ち着いてから時計を確認する。

「お昼休みはあと半分しかないよ。2人とも、大丈夫？ あと、王馬クンも」

「あ、そうですね！ お弁当途中でした」

「ひどっ、オレはおまけかよー。せつかく命がけで助けてあげたのに！ 嘘だけど。まあ、普通にやばいから先に教室行くね。お昼そつちに置いてあるし」

王馬クンはそのまま保健室から出て行く。

「最原くん、ほら一緒に食べよう！」

「あ、ま、待ってよ赤松さん。モノクマは……」

縛って床に転がされ、なぜか頬を赤らめるモノクマを最原クンが困ったように見やる。

「こういうのはウサミ先生に任せるのが1番だよ。ほら、こうやって…… おーい、ウサミ先生ー！」

「呼ばれて来ました！ それはもう素早くでちゅ！ 先生と呼んでくれるのは残念ながら粕枝さんだけでちゅからね……」

「きつとそのうち認めてくれるって。もしかしたら皆照れてるだけかもしれないし」

「そうでちゅね！」

キノコを生やしながら言う先生を適当に慰めてから、最原くんの持つている縄の端を譲ってもらおう。彼らのお弁当はどうやら体育館にあるようなので早く帰ったほうがいい。

モノクマのことはウサミ先生に任せて、私たちもお昼ご飯の続きだ。

「分かりました！ 先生が、責任を持って見張りまちゅ！」

「よろしくね」

モノクマを引きずりながらウサミ先生が保健室を去り、また静かな場所に戻る。

「…… 私ちよっとお手洗い行ってくるよ」

「あ、はい。じゃあ待ってますねえ」

食欲が少し、なくなつた。

中身の3分の2が減つたお弁当箱に蓋をしてその場を離れる。

幸いにも保健室からお手洗いは近くにある。すぐに戻って、残りや
どうするか決める時間もあるだろう。

静かな廊下に誰かが立っている。

私はそれを見て、目を思いきり開いた。

「…… あれ、ひな…… か、いや、えつと……」

カムクライズル。

そう言おうとして、口を閉じる。

私とその名前を知っているはずがないから。でも、彼には私の動い
た唇の動きで分析できてしまったようだった。

「分かっているようですね」

なぜ？ ” この学園 ” にいるのは日向クンのほうなのに。

なぜ彼がここに？

「幸せですか？」

カムクライズルなのに、ほんの少しだけ日向クンに近いような、感
情がこもっているようなちぐはぐな声色。

「あとは目覚めるだけですよ」

なにを言っているのか分からない。

—— そう、なに言ってるのか分かんない！ 頭おかしいんじゃない？ この真つ黒な奴！ 無視して行っちゃえ！

誰かの声が、考えることを放棄するように促してくる。

「もう、分かっているはずですよ。あなたは僕の名前を知っている。迎
えが必要なんでしょう？」

だって、私が彼を知っているのは前世があるからで、それなのに、確
かに彼と話すのは初めてではない気がして。

—— 甘い甘い思い出はもつとたくさんあるだろう？ 少々知ら
ない人もいるみたいだけれど…… 君の想像が全てさ。さあ順に思
い出そう。

—— もつともつとドロドロに溶けちゃいなよ！ それがアンタ
の望みなんだから！ アタシがそれを許してあげるのよ！

「粕枝風。プライバシーは外の世界には漏れませんか、みつともな
くても、なにも問題はありませんよ。ほら」

カムクライズルの手が差し出される。

ああそうだ。こうやって日向クンも手を差し伸べてくれたんだ。

3年目のクリスマスで……まてよ、3年目？なに言ってるんだ。今年が初めて学園で体験する体育祭で。

——うぶぶ、分かんないことは全部投げちゃえばいいんだよ。

——そうだけい！美味いもん食って全部忘れちまえばいいんだよ！

分からない、分からない、分からない、分かんないよ！

「狛枝凪」

「うるさいっ！」

外から中からうるさいんだよ！

——貴女が中なのですがね。

——あ、ネタバレは……厳禁ですよ……

——これは失礼いたしました。失言ですね。わざとですけど。

——それにしても面白い妄想ね。アタシの知らない奴らまでいるわ！どういうことなのかしら？

だから、

「うるさいっ、うるさいっ！」

伸ばされた手を振り払い、その場から駆け出す。

そんなわけない。そんなわけない。

私が、 “私” が哀れな蝶々だなんて嘘だ！

嘘だ嘘だ嘘だ、全部嘘だ！これは悪い夢、いつもみたいな荒唐無稽な夢だ！

嘘なんて嫌いなのに、嫌いなのに、どうして自分に嘘をつき続けなくちやいけないんだよ！

「……仕方ありませんね」

——おっと、この世界はもうやめたほうがいいね。

——追跡される前にシチュエーションを変えて次行ってみようね！

次は、次は、そう、私にこの忌々しい才能もなにもない。

そんな世界がいい。

そんな世界なら、きっと幸せになれるはずだから。

—— まったく、注文の多い先輩ね。お世話が大変。私様自らあいつらの計略を台無しにしてあげるから、先輩は頭空っぽにして楽しむがいいわ！

死の痛みなんか、もう思い出さたくないから。

【育成軸】雨と探偵×2

しとしとと、雨が降る。

すっかり秋模様となり、もうそろそろ冬季に差し掛かる頃だ。

時期が違うが、まるで五月雨のようにぽつぽつと降っては止み、降っては止む雨にいい加減うんざりしてきていたところだ。

橙色の傘を手に、肩にかけるようにしてその合間から天を仰ぐ。

傘からはみ出さぬよう身を少し縮こませ、それでも風が吹いては私の髪を濡らす。

はあ、本当に運が悪い。

今日という日に雨が降ってしまうとは。なるべく晴天の空の下で会いたかったが、雨が降っているほうが彼女に会うのかもしれない。名前的な意味で。

そうして降りしきる雨の中、待ち合わせをしている喫茶店までとぼとぼと歩く。

これからの再会に胸踊らないわけでもないが、やはり雨とは人を憂鬱にさせるものだ。

喫茶店の軒先で雨粒が伝う傘を束ね、雨傘入れに差し込む。

それから南京錠で雨傘入れと自分のお気に入り傘を固定し、泥棒対策をしっかりとしておく。

私の使っている傘はなぜかよく盗まれることがあるので備わった対策だ。これも不運のうちなのだろうけれど、少しの幸運のためだけに濡れ鼠になって帰るなどごめんである。

カランカラン、と喫茶店の入り口を押し開けて入店する。

先に待ち合わせをしているからと話を通し、予約者を確認する。聞けば、既に2人は来ているようだった。

遅くなってしまうたわけではないが、まさか待ち合わせ時間の10分前に来たはずの私が1番最後だとは思わなかったな。これは驚いた。

だけれど、それだけで2人が私と会うのを楽しみにしてくれているというのが分かって口元にだらしない笑みが浮かぶ。

昔の恩を、誘拐された際の礼は言えたが、恩返しをすることができなかった。

希望ヶ峰学園に入ってからほとんど会える機会もなく、時折依頼やら事件やらで学園外で会っているらしい霧切さんの話を聞くのみで、それも偶然会うことがほとんどで私が同行することは叶わずこれまで過ごしてきた。

再会の言葉はなににしよう？

改めまして？ それとも、久しぶり？

それに、あの人のことをなんて呼べばいいのかが分からない。

霧切さんに習ってお姉様とでも呼んでみるか？

初めて霧切さんが彼女の知り合いだと知ったときはすごく驚いたんだ。なんて偶然なんだろうって、嬉しくなっただけで彼女にはあれこれとあの人の思い出を聞き出さずじまつてしまった。

困った顔をしながらも嬉しそうに語る霧切さんなんて初めて見たから、それがとても面白かったというのもあるんだよね。

デュエル・フール黒の挑戦状というコナンさながらな様々な事件、復讐プロデュース組織のこと、その数々の話…… いい思い出も悪い思い出もあるその話。決別した人とのこと。

そして、あの人が危ない目に遭った話や、あの人のことをお姉様なんて面白い呼び方をする霧切さんのこと。

聞けば聞くほど会いたくなった。

そしてお礼を改めて言いたかった。

喫茶店とはいえ高級な場所であり、予約席などもあるこの店を指定したのは私だ。

霧切さんには、あの人に私のことを話さないようお願いしてある。

そして、今回は私から依頼を出すと言ってもらうことになっていった。

あの人は直々に舞い込んだ依頼と、その依頼人に会うということとで緊張していることだろう。あの人はそういう人だ。

もしかしたら、高級店すぎてあわあわしているかもしれないな。

そんな想像をしながらふふ、と笑う。

それから案内された和風な予約席へ続く扉に手をかける。

第一声は、どうしよう。ああでも、格好つける必要なんて全くなくて、ただ私らしくやろう。

「こんにちは、依頼人の狛枝凪と申します」

「えっ」

そこには分かりやすく驚愕したあの人と、悪戯が成功したように目を伏せて口元だけ笑っている霧切さんがいる。

すごいな、初めて会ったのは私が中学2年の頃だから、もう3年は経ってるはずなのに。1つ年上のあの人は、どうやら私のことを覚えていてくれたようだ。

「えっと、君…… いや、あなたって」

「お久しぶりです、結お姉様」

「君もそう呼ぶの!? いや、嬉しいけれど！ さては霧切ちゃんだな!?」

「ふふ、どうかしら」

「やっぱり君だよね！」

私の目の前でじゃれあいだす2人に思わず声をあげて笑い、席に座る。

私の対面に2人がいる構図だ。一応依頼人と探偵2人だからね。

対面の2人は霧切さんと、あともう1人。私が誘拐されたときに助けてくれたお姉さん。五月雨結その人だ。

茶髪のショートで、前髪に白いメツシユ。赤縁メガネに、ボーイッシュな格好が特徴的だな。あのときとほとんど変わらないうや。

「やっぱり仲いいんだね。霧切さん、話さないでくれてありがとう」

「探偵は守秘義務を守るものなもの。あなたもサプライズにしたいようだったし」

「霧切ちゃんは知ってたんだね……」

ジト目になった結お姉様が霧切さんを見つめる。それでも霧切さんは涼しい顔で笑う。ちっとも堪えていない様子だ。さすがのクールさである。

でも彼女が側から見ても懐いているのは明らかなので、本当に仲の良い姉妹みたいだ……。ま、まあメイと私の仲には敵わないけど、なゆて対抗意識がチラツと脳裏を過る。

一応、私も誘拐されて助けられた一件以来慕ってる人なんだけれどさ。

あのときと、その後病院に救急搬送された先でお見舞いに来てくれたとき以来全く会ってなかったから、忘れ去られているかと思っただ。

だって探偵さんなんだからいっぱい人と会うだろうし、助けた1人のことなんて、忘れてると思っただ。

だから初対面みたいな反応をされたらこちらも初対面として対応しようと思っただ。

「あ、放っておいちゃってごめんなさい。えっと、狛枝さん？ ちゃん？」

「どっちでも大丈夫だよ。私もお姉様には普段通りに接するつもりだから。堅苦しいことはなしでお願いしたいな」

「なら狛枝ちゃんです」

霧切さんと同じ対応か、なんか嬉しいな。

「それで、えっと、サプライズしたかっただけってこと……。なのかな？ というか、こんなに高そうなお店大丈夫なの？ こ、後輩2人ってことはわたし奢ったほうが……。ああでもお金が……」

混乱しきりな彼女に「大丈夫だよ」と返す。

「代金は私持ちだから大丈夫。ほら、お姉様も知ってるでしょ？ あるとき私は宝くじを当てたけど、あれが年に何回かあるって思っただ。

「ひえー、狛枝ちゃんお金持ちだね。わたしなんて依頼料があってもギリギリというか……」

「お姉さまは低い依頼料でも緊急性の高いものはきちんと受けるものね。だからこそ私も尊敬しているのよ」

「や、やめてよ……。べた褒めされても出るものなんてケーキくらいしかないって」

「出るのね」

出るんだ。

「今回お姉様に会う理由は勿論お礼をすることも目的なんだけど、ちゃんと依頼もあるんだ」

話の途中で扉が開き、事前に予約制で注文されていた料理が届く。次々にテーブルに並べられていくそれらにお姉様が釘付けになっているのを微笑ましく見守り、一旦話を中断する。

「食べながら話そう」

「いいの？」

「料理が冷めるほうがよほどよくないからね」

「なら、ありがたくいただくわね」

少しずつ料理を食べながら、合間合間に会話を挟む。

そして、肝心の依頼についてを話す際には居住まいを正して彼女の瞳をまっすぐと見つめる。

白のメツシユが入った髪が揺れ、真剣な話だと察したあちらも見つめ返してくる。

「お姉様、 ” 医療機関最大最悪の事件 ” は知っているよね」

「…… うん、知ってる。たくさんの子供が犠牲になったって聞いたことがあるから。本当に最悪な事件だったって」

私が体験したあの事件で表に知られているのは、入院していたたくさんの患者が死んだこと。子供たちがたくさん死んだこと。そして、院長が狂ってそれら被害者たちを殺してまわったこと。

知られていないのは、私に行われていた実験。コピーたちのこと。そして、院長がしていた ” 錯病 ” の調査内容や、私の母に対してしていたこと。人体実験全般だ。

だから、

「私はあの事件の生き残りの1人だ。もちろん、あの病院で行われてきた暗部のことも知ってる被害者なんだよ。だから、さ。もう犯人はこの世にはいないけれど、その事件の内容全てを明るみに出したい…… と言ったら、キミは協力してくれる？」

お姉様は思ったよりも重たい内容の依頼の答えに困っていた。

「……わたしよりも凄い探偵ってたくさんいるんだよ。君はわたしでいいの？」

「結お姉様の専門分野が違うことは分かっているんだ。でもね、私は私の信頼できる人にしかこれをお願いしたくない。明るみに出たらまずいことばかりだし、きつと世間的にも大混乱に陥ると思う。それでもお願いするなら、キミたちしかいないと思ったんだ」

会ったのは2度だけ。彼女との間には、誘拐された私を助けてくれたという事実しかない。

たったそれだけの繋がりでも、彼女は信頼するに足る。

霧切さんは言わずもがな。最原クンはどうやら他のメンバーとソニアさんの国へ事件解決しに行つてたらしいし、重い事件を連続で担当させるのは可哀想だ。それに、彼のことはそれほどよく知らない。彼らのクラスについて私は事前知識がまったくないから、依頼しづらいのだ。

それを言うならお姉様のことだつてそうだが、あのとき助けてくれたお姉様は紛れもなく私にとっての救いだったから…… すこし美化というか、フィルターがかかっているかもしれない。

けれど、彼女がいい。私はそう思っている。

「……………」

「私はお姉さま次第ね。狛枝さんも、そのつもりでしょう？」

「うん」

しっかりと頷いて、食事を再開する。

結お姉様はしばらく沈黙していろいろと考えていたみたいだけれど、顔を上げたときにはもう答えが分かっていた。

「いろいろ言いたいことはあるね。でも、これだけは言わせてもらおうかな。受けるよ、その依頼。君がそれだけお願いしているのに、断れるわけないじゃないか」

「あ、圧力かけてたかな……？ ぐ、ごめんなさい」

「あああ、違うんだよ！ そうじゃなくてさ、なんていうか…… 断つても良かったのは分かっているんだけど…… 君に真剣にお願いされて、わたしが断りたくなかったんだよ」

「お姉さまはお人好しだものね」

「霧切ちゃん！」

「ふふ、なら私も同行することになるわね」

口々に承諾の意を向ける2人に今度は私が俯いた。

やっと、やっと皆の無念が晴らせるかもしれない。

闇に葬られた事件を蒸し返すのは良くないことだって分かっている。知らないほうが、知れないほうが幸せなことだってあるのは分かっている。

それでも、橙子ちゃんや姉さんたちが死んでいったことが、彼女たちの死が身元不明で片付けられることがどうしても嫌だった。ずっと嫌だった。

私とメイだけ助かったことも、暗部のことが全て焼け落ちて失われたのも、嫌だった。許せなかった。

あときは自分のせいで起きたことだからと、全て諦めていたけれど、それが当然のことだと気にしないように、自分自身を傷つけないように蓋をしていた。

才能のせいだから仕方ない。

それで済ませて、死をなんでもないことのように振る舞った。

でも、学園でクラスメイトや、友達が気づかせてくれた。

私は才能を言い訳にして、立ち向かうことから逃げただけなんだと。

まだまだこの我が儘な才能は制御不可能だ。でも、昔よりは犠牲が減った。それはひとえに私も含めて全員が生きようとするから。

生きてほしいと、犠牲にならないように努力するようになったから。

諦めずに立ち向かえるようになったからだ。

だから、私は長年蓋をして封印していた思いを解放することにした。

嫌だったんだ。私のせいで犠牲になっていった皆が忘れ去られていくのが。父親のしたことが公表されないのが。

それを、表に出す。

世間はきつと混乱して大ニュースになるだろう。

でも、やると決めたんだ。

2人が断れば自分だけでやるつもりだったけれど。

「ありがとう、2人とも」

その言葉に、言葉にできなかつた様々な思いを全て乗せ。

私は感極まりつつ、笑った。

【育成軸】ここに、全ての清算を①

ざあざあと、雨が降っている。

まるで私の心のようにだと気取って言えたら、どんなに良かったらうか。

今あるのは、ただただその名前と同じく重い気持ちだけ。

もつと緊張とかすると思っただけだけれど、案外私って薄情なのかもしれないなあ。

過去は過去だ。なにを思うとも、それは変わらない…… 変えられない。

そこにいて生きていた人達が大好きだったって思いながらも、なにもしないまま…… いや、なにもしなかった私の “今” が1番尊いものなのだ。

あのときとは違い、足掻くようになった私の今。

それのために、私は今日…… 協力を依頼した探偵と3人でやって来ている。

現在では巨大な廃墟。昔は私の実家だった場所。そして、精神病棟だった場所——

ここに来る前に少しだけ罪木ちゃんと話した。

本当は終業式があるから、出席だけはしたかったんだけどね……

今日は何年も前に、医療機関最大最悪の事件が起きた日なのだ。

この日に全ての清算をしなくていつにするって言うんだ。

霧切さんや結お姉さまには中途半端な時期で悪いことをしたと思ってるけどね。

「あの、狛枝さあん…… 本当に終業式出なくていいんですかあ？」

「うん、ちよつとやることあるからね。罪木ちゃんは病院の研修、順調？」

「え、ええそうですね…… 先輩方にもお世話になってますし……」

「そっか…… お姉さんは、経過順調？」

「…… ええ、もういつ目が覚めてもおかしくないはずですよ」

「そっか……」

罪木ちゃんも過去の清算を着々と進めている。彼女のしでかした黒い過去は決して消えることはないけれど、その償いをすることはできず。

彼女の姉が無事目を覚ますといいんだけれど。

「あ、それと…… あのお……」

「んん？どうしたの？」

「粕枝さあん…… 行ってらっしゃい、ですう」

なにを今更と笑う。

けれど、なにも聞かずに送り出してくれるキミが心底愛おしくて、こちらにもなにも触れず 「行ってきます」 とだけ返す。

ざあざあ、ぱらぱらと雨が降る。

そこを私は橙色の暖かい傘を差して道を行く。

しとどに降りゆく雨で街中に傘の群れが行きかい、それらとすれ違いながらそつと学生とは真逆の方向へ歩む。くるくると傘を回す学生達に、肩を寄せ合い1本の傘を扱う男女を微笑ましく思いながらも駅へ。そして懐かしの場所へ。

最寄りで待ち合わせをしていた2人と合流する。

2人とも詳しいことは学園に伝えず来てくれているため、どうしても近場で合流するわけにはいかなかったのだ。

へたに目撃されてしまえばなにかあると言っているようなものなのだから。

懐に録音機器や写真機を忍ばせて、わりと長距離の移動を果たして

そこに辿り着く。

「お姉様！ 霧切さん！」

「やあ、粕枝ちゃん！ 霧切ちゃんも揃ってるよ」

「結局10分前には全員着いたわね」

依頼主だから早めに着こうとしていたらこれだよ！

2人とも早すぎる。助かるからいいんだけどね。

そうして、私たちはあのときそのまま放置されている廃病院へと足を踏み入れた。

施錠はしてあるものの、門は乗り越えることもできてしまう。ホームレスの人とかが入り込んで利用している可能性も踏まえて手分けせず、3人で固まって行動することにする。けれど……

「門が、開いてる……」
なぜ。

今の管理は私のはず。わざわざ保存のためにたっかい税金払ってるんだから合ってるはずなのだ。合鍵だつてないはずだし……いや、昔と鍵自体は変えていないから、こつそり鍵が持ち出されていたりすれば開く。

……でも、生き残りなんて私とメイ以外に。

はたと、そこで思考停止した。

いやそんなはず…… ないよね。

「入ろうか」

「ええ、十分気をつけましょう。粕枝さん、緊張しているでしょう」

「あはは、分かる？ うん、正直ね」

中になにが待っているか分からないというのもそうだが、やはりいいことも悪いこともここに置き去りにしてきたのだ。緊張しないわけがない。

特に…… 入ってすぐの玄関ホールは怪物兄が私を逃がすために父を止めようとして返り討ちにあった場所だ。

…… そして、恐らく豚神くんがその怪物兄なのだろう。さすがにもう分かっている。うさぎくんは、あるとき怪物兄として死んだ。そして、記憶を欠落させて必死に他人に成り代わって生きてきた名前のない怪物。

それが超高校級の詐欺師の由縁なのだ。

「散らかってるなあ」

「一度、警察の手が入っているのよね」

「それにしても雑然としてるなあ。本当に捜査したの？ これ」

「現場保存を優先したんじゃないかしら。そのまま私有地になって…… それにしても、おかしいと思うけれど」

そういえば、私が新しい両親に引き取られたあと、この土地は誰が管理してたのだろうか。今でこそ私の土地になってはいるが、引き取られてすぐは私にここを維持するだけの財力がなかった。和子さんたちが持っていた？ いやいやそんなことはない。私を引き取って育てることになった以上、そうなればこんな大きいだけの事故物件と土地はさっさと売ってしまうだろう。

なら、いったい誰が……

脳裏に掠めたのは。

「いやいやいや、ないよね」

もう1人の生き残りが、なんて。

「丈夫な靴を履いて来て良かったなあ。廃墟っていうと色々散乱してるから、靴底が柔らかいとこれ、踏んで刺さるよね」

「ガラス片や医療器具も落ちているものね。人の手が入っていればもう少し違うと思うのだけど…… ベッドもあるでしょうし、荒れているからといって油断できるわけではないわ。少し寝るくらいならここでもできてしまうもの」

「ええー、ねえ霧切ちゃん。やっぱりこういうとこってホームレスいたりするもの？」

「ええ、好物件でしょうね」

そりゃあ、広いしベッドもあるしある程度暑さ寒さをしのげるだろうからね。その辺は想定済みだが、まあここも用が済んで…… 私の幼い頃の全てを清算することができたのなら取り壊すことになるだろう。大きなところだから土地を売れば事故物件であることを差し引いてもそれなりのお値段にはなるだろうな。

けれど、これ以上お金なんていらなんだよなあ。希望ヶ峰学園からも近いとは言えないし、研究施設として寄付することもできないだろう。

だからといって自分でマンションを建てて経営とか面倒でしかないし、経理はちよつと分からないから迂闊に手を出さない。

私の幸運があれば上手くいくかもしれないが、あとから来る不運が怖いんだよ。私みたいなやつは絶対トップに立つちゃダメだと思う。

「確か、火事で焼けたのでしょうか？ それにしては整っているし、やっぱり人が利用してるのかしら」

「壁とか床は煤けてるけどね」

「お姉さま、これは火でついたものというより煙で付着したものよ」

「あー、霧切ちゃんにはいつになっても敵わないなあ」

「そうだね、火元は奥の奥。恐らく隠し部屋ギリギリのところからだ。」

火元不明になってしまおうとやつきになって警察や消防に探されてしまう。だから1番隠したいものに近いところで火事を起こした…… 私はそう考えているのだ。ここには暗部が多すぎる。狂気でおかしくなってしまったのは父だけなので、勤めていた人達が証拠隠滅に動いたのではなからうか。

そんなことを2人の探偵に話すと、暗部について根掘り葉掘り聞かれることもなく「じゃあ火元に最も近かった場所を探しましょうか」と舵取りされた。

正直ありがたい。

燃え残ったカルテでもせめて見つければいいのだけれど…… そうやって3人並んで歩いているときだった。ふと、視界の端に見覚えのある人間を見つけ…… 気がつけば私は走り出していた。

反省はしている。

いつもいつも、私は先走りが過ぎる。でも、そうでもしないと見失ってしまいそうで…… 追わずにはいられなかった。

「待ってー！」

階段を上って、上って、屋上へ。

一直線にここへ来たから、多分そのうち2人も追いかけてくるだろう。置き去りにして悪かったとあとで謝っておかないとな。

「待ってってばー！」

追いかけて、そして追い詰めて、やっとこちらを見たその人は、やはり見覚えがあったのだ。

「追いついたよ、看護師長さん」

そう、その人こそ行方不明扱いとなっていた看護師長。

父といつも一緒にいた人。
そして、きつとこの人が……
火事を起こして証拠隠滅を凶った、
張本人なのだ。

【育成軸】ここに、全ての清算を②

やっと、追いついた。

やっと、辿り着いた。

その一心で彼女に声をかけていたのだ。

霧切さんと結お姉さま。置いてきてしまったことにほんの少しだけ不安に思いつつ、こちらに背を向けたまま屋上から外を眺める看護師長へと歩みを進める。

「なんで、あなたがここにいるんですか？ やっぱりここの管理をしてるのって」

「あの人は…… ちつとも似てないわね。本当に、昔から」

私の言葉を彼女が遮りながら、顔だけでこちらを向く。

遠くを眺める視線は虚ろで、なんだか今にも消えていってしまいうな危うさを感じさせた。

「どういうことですか？」

「一緒に来た人たちは、お友達？」

「え、ええ。友達です…… 探偵の」

こちらの質問にまるで答えようとする様子がない。

だが、彼女が屋上の端のほうに立っていることであまり強く刺激することもできない。そこに幽霊のように佇んでいるながら、今にも飛び降りてしまいそうな雰囲気醸し出している。手を伸ばしても降りと抜け出ていってしまいそうな、そんな危うさだ。

「そう、探偵…… いよいよ決心がついたのね。いいえ、構わない。構わないです。もう10年くらい前のことだから」

「私がやろうとしてること、止めないんですか」

「ええ、結構。結構よ。私も心の整理がついたの。もう、解放されたい。夢の中で貴女に殺されるのは、もう勘弁願いたいし」

夢の中の私はいったいなにをしているんだ……

というか、この人も “ 夢 ” を見ている？ 普通の夢ではなく、恐らく私たちと同じ精神に巣食う Rust。

この人にとってあの出来事はよほど印象に残ることだったのだろう。

そして私の存在が悪夢に出るほど…… 強く根付いている。

「教えてください。あのとき、なにがあったのか」

すぐそばに答えがある。

だから、私はその場で精一杯の声を出した。

答えの近道だからではなく、そうしなければ彼女がこの場から融けて消えていってしまいそうだったから。引き留めようと、声をかける。

「私は…… あの人を、貴女の父親を愛していました」

ほつり、零される言葉に驚きはなかった。

そんな気はしていたからだ。だから、私とメイに対応する態度がほんの少し冷たかったのだろうと理解している。

「でも、それは良くないことでした。あの人には、港さんには既に青子様がいましたから。私はね、港さんの情熱が好きになったの。でも、青子様を病から救いたいたがために希望ヶ峰の名誉を蹴ったあの人の、その真つ直ぐなところに惹かれてしまった」

語られる言葉は私の知らない父親の、狂ってしまう前の思い出。

初めて聞かされるそれに聴き入って、目を細める。

「私があの人と出会ったのは、この場所に配属されたから…… だからはじめから、青子様に敵うなんて思ってたなくて、ただそばで頼れる看護師長として支えられたらそれで良かったと、思っていたのよ」

この人は、父が狂っていく様子をずっと目にしてきたのだ。

愛した人が、手に入らないと理解して思いを告げずにいた人が静かに狂っていくのを。ずっと、見ているしかできなかった。それは、きつとすごく辛いことだと思う。

「いつしか、あの人は青子様を治すために研究をしていたのに、研究をするために青子様を利用するようになっていきました。少しずつ、少しずつ…… 心にこびりついた錆は侵食していった。きつとここにいた人間みんなを蝕んでいた」

閉鎖的な状況下で、同じ精神的な病気を持つ人間が大勢集まってい

れば、狂っていくのも無理はない。

父が、希望ヶ峰に入学した上で研究に着手していたならば、こんなことはなかったのかもしれない。

全て、タイミングも状況も良くなかったのだ。

「苦しかった。この想いを言葉にすることは私自身が許せなくて、なのにあの人は、自分が選んだ人を蔑ろにし始めた。だから、あの人の心を占める青子様にも、貴女たちにも嫉妬していたわ。分かっているも、止められないのよ」

「あの日……ここは火事になりましたね。それは、あなたが？」
「ええ」

いっそ爽やかなくらいに彼女は言う。

屋上から陽を見上げるように、眩しそうにしながら。

「私は、あの人を愛していました。あの人の不利益となることは残しなくなかった。あの人が堕ちるとこまで堕ちていたとは知られなくなかった。精神を病んで患者を殺して回った真実は隠しようがない。だから、貴女たちのことだけは、隠させてもらったの」

私に責められるわけがなかった。

あのとき背を向けてメイと出て行った私に、本当の父親を知らない私に、彼女を責めることはできない。

「でも、もういいの。貴女がこうして、帰って来たということは……」

真実を知りに来たのでしようから。いいわ、貴女の好きにすればいい…… この管理は、今私がしているの。録音、しているでしょう。

それを持ってどこへでも行けばいい。私のことは放っておいて」

ドキリと心臓が跳ねる。

服の下で握りしめていた録音機器は、今の会話の全てを滞りなく記録していた。

キイ、と扉を開いて霧切さんたちが合流するが、互いに無言のまま屋上に佇む。この均衡が崩れ去ってしまえば、幽霊のように彼女が消えてしまいそうで。

「真実を、公表しなさい。凧ちゃん」

「……」

初めてそう呼ばれた気がする。

私も彼女の名前を呼ぼうとして、愕然とした。

看護師長さんの名前を私は知らない。教えてもらったことが、ないのだ。

幼少期のほとんどをここで過ごしているながら、私はメイの本当の名前も、看護師長さんの本当の名前も、知ることがなかった。その事実言葉に言葉を失う。

「……あ」

引き留めようとしても、引き留めたくても名前が呼べず、一步踏み出す。

「私の行きつく場所は分かっています」

やっと体ごと振り向いた彼女は、胸いっぱい彼岸花の花束を抱えていた。

一筋、頬を流れる涙を見て走り出す。

「待って！」

死ぬ気だ。

この人は、この場で死ぬ気なんだ。

夢日記を書く者たちに共通するように、その一生は自殺で閉じられる。

「待ってよ！」

それだけは、それだけはいけないと、彼女の元へ。

「〃 青篠原 夕子 〃 よ、粕枝さん」

「粕枝ちゃん、今なら間に合うよ！」

背後から霧切さんと結お姉さまの声が聞こえた瞬間、私は反射的に叫んでいた。

「行かないで、夕子さん！」

「……」

ほんの少しだけ動きの鈍った彼女に、その隙にと抱きつき、その場に崩れ落ちる。代わりに、ポケットの中から録音機器が飛び出して屋上から落ちて行った。

そうして、ヘリの上で2人揃ってへたりこめば、ギリギリで間に

合ったことに安堵してへらりと笑った。

「許さない。ここで死んだりしたら一生許さないから。まだまだ私の知らない父の思い出も聞きたいし、メイにも謝ってもらうんだから」
「貴女は、ずるいわね」

「それに、録音機器も落ちちゃったから、きつと中身もダメになつて
る。あなたに自主してもらわないと、証拠がなくなっちゃうよ」

安心したように入口の扉からこちらへやってくるお姉さまと霧切
さんに目配せをする。すぐに彼女らは警察に連絡を取り始めた。

見届け人の探偵として彼女たちを選んで良かった。本当に良かった。
霧切さんの持つ看護師名簿や隠し部屋の鍵らしきものを見なが
ら、そう思った。

私だけだったら、きつと間に合っていないなかった。彼女の名前を呼ば
なければ、きつと引き留める時間は残されていなかった。

霧切さんたちが名前を覚えてくれたから、引き留めることができ
た。

「ありがとう、2人とも」

「探偵として、仕事をしただけよ」

「先に調べておいて損はしなかったね。よかったよかった」

屋上に散らばった彼岸花の花束の中で、夕子さんを抱きしめたまま
笑う。

「あはは、腰が抜けちゃった」

「ふふ、情けない子」

酷いなー、なんて軽口を叩きながら、遠くから聞こえてくるサイレ
ンに耳を傾ける。

きつと、この後この病院の真実や、私の出生の秘密が世間に明かさ
れることになるだろう。確実にニュースになるし、なんなら昔より
ずっと同情を寄せられるかもしれない。周りが騒がしくなるだろう
し、父と夕子さんを悪く言う人だって、絶対に出てくるだろう。

そうしたら、私とメイはそれらを否定するんだ。謝ってもらって、
そして、彼女を私たちの家に招いて許す。

世間的に許されないことをしたのだとしても、私たちが許す。

許さないでくれなんて言われても、そんなの嫌だね。許してあげる。だって、私捻くれてるから。許してって言われたら許さないし、許さないでって言われたら速攻で許してあげるんだ。

過去に戻ることはできないけれど、未来は創っていけるから。

—— 彼岸花の花言葉は、「再会」「悲しい思い出」「想うはあなた一人」

霧切と、王馬と。才能育成計画の会話より。一部抜粋。

「でもさー、キミが今日探偵の仕事に行ってたのは事実でしょ？ それをクラスの違うオレが知ってたのは、事件のほうに関わりがあるから…… そう考えられない？」

「私が今日、終業式を欠席したことさえ知っていれば、探偵の仕事だと推測することは容易だわ」

「まあ、それはそうだね。でもさ、だからってオレが嘘をついてる証明にはならないよね」

「あなたが嘘をついていると言える理由なら、他にもあるわよ」
「へえ、どういうこと？ 言ってみてよ」

「今日私が依頼されたのは、数十年も前に起きた事件の解決なの。今更解決したところで、犯人は捕らえられない…… けれど、被害者の感情はそれでは収まらない。その被害者は末期ガンを患っていてね…… 彼に残された時間はとても少ないの。だから、命があるうちにかつての事件の真相を知りたい…… そう私に依頼してきたのよ。どう？ 数十年前に発生して事件にあなたが関わっているなんて、非現実的じゃないかしら？」

「ふーん…… 霧切ちゃんも嘘をついたりするんだね。いかにも本

当っぽい話だったけどさ…… 探偵が被害者の背景を軽々しく喋っ
ちやうなんて…… おかしいよね？」

「でも、それは私が嘘をついている証明になるかしら？ もし、あくま
であなたの主張が真実だと言うなら…… 私が今日関わった事件に
ついて、あなたが知る内容を説明してみせて」

「…… ちえー、さすが霧切ちゃんだね。そう簡単には騙されてくれ
ないかー。霧切ちゃんにならそのうち、オレの悪事も根こそぎ暴かれ
ちやうかもねー。怖い怖い」

真実は、そう遠くない未来に公表される。

そのときまで、と。霧切はそつと嘘をついた。